
彼はいかにして王となったのか？ 魔法少女リリカルなのは異伝

月見ココア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼はいかにして王となったのか？

魔法少女リリカルなのは異伝

【Nコード】

N7048Q

【作者名】

月見ココア

【あらすじ】

後に『最後の闇の書事件』と言われる事件の知られざる全容。

車椅子の少女・八神はやたと共に暮らす少年「日野コウキ」

彼と守護騎士たちとの出会い、高町家との再会。

ジュエルシードを巡る事件との遭遇。そして蠢く闇と策略。

これは“もう一人の闇の書の主”となった少年と彼を想い慕う女性たちの絆の物語。

そして少年が『王』を名乗るまでの物語。

（これは原作設定に深く食い込んだオリジナルキャラを主人公に、アニメ一期・二期を混ぜたものです。タイトル変えました）

現在、A・S編真つ最中！

pixivにも別タイトルで同じ内容のを投稿しています。

こんなはずじゃなかった“始まり”（前書き）

はい、始めました。ゆっくりですが更新していきたいと思っています。

まだ不慣れで読みにくいな。これから修正していきます。

出来れば、誰かが面白いと思ってくれれば、幸いです。

感想は、いつでも待っています！

「こんなはずじゃなかった“始まり”」

数多の“うみ”を渡る法の番人たる鋼の艦^{ふね}は悲鳴と怒号に包まれていた。

ほんの数時間前までは緊張感こそあったものの静寂そのものであったはずの艦内は
すでに阿鼻叫喚の地獄絵図一步手前。

「いそげえっ！ 早く艦から脱出するんだ！！」

「くそつだめだ。侵食が止まらないっ」

逃げ惑う乗組員たちを誘導する彼らの目前に迫るソレは一見すると植物の根のように見えた。

が、数多の世界で様々なモノを見てきた彼らでさえ僅か5分で艦の約7割を侵食し支配する植物など見たことも聞いたこともない。けれど、その原因となったものがなんであるのか。この艦に乗っていた全員が知っていた。

「くそつ、くそつ、よくも俺たちの艦を！」

先端が音叉に似た杖から破壊の力を持つ光を放つが、根に届く前に拡散して消える。

「防御壁まで展開してるのか！？ ならっ」

「よせつ無駄だ。俺たちも早く脱出するぞ」

同僚に肩を掴まれ脱出を促されるが彼はその腕を激情と共に振り払う。

「待てよっ、艦長がまだブリッジにいるんだぞ。救出はっ!？」

今にも胸倉を掴み上げてきそうな勢いの彼にけれど敵かに同僚は答えた。

「……………ブリッジまでの通路はすべて侵食されている。

あそこの転送ポートも緊急脱出装置もやられた。救出も自力での脱出も不可能だ」

「なっ、だ、だからって艦長を見捨てるのかよ！ 艦隊から救助を要請して…」

さらに詰め寄って救出を訴えようとする彼の胸倉を掴み上げる。

「いいかげんにしろっ、この仕事についてる以上いつかは誰かがこくなるんだ。

君たちは脱出して生きろ……………それが艦長の最後の命令だ」

毅然とした口調ながらも同僚の目に浮かぶ悔し涙に彼はそれ以上の言葉が出てこなかった。

「……………行くぞ」

「っ、了解……………」

他の艦隊がその異常事態を察知したときにはすでにすべてが遅かった。

『こちら、2番艦エステリア……闇の書の暴走止まりませんっ』

旗艦である1番艦に届いた通信は一言でその状況のすべてを語っている。

数分前、2番艦エステリアは突然クルーたちの制御から離れ艦隊からはみ出すと船首を180度回頭させて停止した。

それがその艦が護送していた闇の書と呼ばれる呪われた魔導書のせいだと、

分かったときにはすべてが遅かった。

『駆動炉と操舵システムが奪われ、なんとか残っているブリッジも

……

くっ、もう保ちません』

モニターの先でいくつもの小爆発が見え、エステリアの艦長は頭を伏せた。

『それに、アルカンシエルのコントロールまでもがっ……………』

「っ!?!」

艦隊司令でもある1番艦・艦長の初老の男性はオペレータ席に視線

を移す。

「エスティア、アルカンシエルのチャージ反応」

「発射軌道上に本艦隊、ロックオンされてますっ！」

次々と上がってくるのは報告を肯定する状況のみ。

艦隊司令として彼は苦渋の決断をしなければならなかった。

「っ、クライド提督脱出を急げ。エスティアは……………破棄するっ」

その命令ともかすかな願いとも取れる言葉に、
クライド提督は一瞬の沈黙のあと佇まいを正した。

『……………先ほど、全クルーの脱出を確認しました。収容をよろしくお
願います。』

こちらのアルカンシエルのチャージスピードは非常に不規則で予
測がたてられません。

『できるかぎりチャージ状況をそちらにお伝えします』

「…っ」

それは実質、艦と運命を共にすると言っているのと同じこと。

『……………発射前に墜としてください』

僅かにはにかなだような敬礼が、彼の最後の姿だった。

「通信がっ！」

モニターから彼の姿は消え、雑音の砂嵐だけしか映らない。

「エステリア艦、チャージ率17%、18、19、えっ35%!？」

通信が切れても伝えられるチャージ状況を数値とグラフで見ているオペレータは

その不自然な上昇に驚愕する。

「36、36、24、29っ、87!? 嘘、こんなの……父様！」

出鱈目な数値の上昇と下降。いつチャージが完了してしまうかが全く予測できない。

「こちらのチャージは済んでいます。いつでも撃てます」

悩んでいる時間はなかった。

その間にチャージが終わり発射されれば何隻もの艦と数百の命を失うことになる。

だが今ならば制御を奪われた艦とたった一人の犠牲で済む。

たとえそれがどれだけ優秀な部下であろうとも。

実の息子のように思っていた者であろうとも。

帰りを待つ妻とまだ幼い子供がいようとも。

数字の上ではたかが一と数百では天秤に乗せるまでもなかった。

乗せるわけにはいかなかった

「アルカンシエル、バレル展開。トリガーを私に回せ。

私が……エステリアを墜とす」

それが、失態を犯した自分へのせめてもの罰。
自己満足にすぎないとは分かっていたが、
それでもこの役目を誰かにやらせるわけにはいかない。

「…了解。アルカンシエル、バレル展開。目標2番艦エスティア、
ロック」

「展開とロックオンを確認。トリガーを艦長席に」

「父様、あとは」

トリガーを引くだけ。

その続く言葉を待たず、彼はただ黙ってアルカンシエルを発射した。
発射された小さな光弾はエスティアに着弾した途端、
その艦体を一瞬で光の中に呑み込みその存在を世界から消した。
ただ一人、残らざるをえなかった艦長と共に。
すべての元凶たる呪われた魔導書と共に。

しかし、それですべてが終わったなどとはこの場の誰もが思ってい
なかった。

これはあくまで長きにわたって続いている悲劇のそのほんの1ペー
ジにすぎないのだろう。
むしろ一隻の艦と一人の犠牲で済んだこと自体が僥倖だった。そう
思うしかなかった。

けれど、そんなことはなんの慰みにもなりはしない。

(……私のミスだ)

闇の書が暴走する可能性は考慮していたが
それが艦船の制御を奪うほどのものだとは予測できなかった。

（私が、くだらない親心を出したばかりに……………）

彼に闇の書護送という功績を与えてやりたかったばかりに
幸せな家庭から父と夫を奪ってしまった。

（私が、私が…………私が彼を殺したのだっ！）

言いようのない、言葉に表せない感情に彼は表情を崩すことも肩を
揺らすこともしなかった。

この艦隊を預かる者として部下たちの前で泣くことも叫ぶことも彼
は許さなかったのだ。

ただただ、自分を責め続けた。
予見できなかった自分を。

欲を出した自分を。
無力な自分を。

だが、彼はまだ知らない。
その後悔と罪悪の意識が、さらなる悲劇を生み出すことになること
は。

いまはまだ、誰も知らない

「……お父さん、あの本なあに？」

そうして、物語は始まった。

「こんなはずじゃなかった」「始まり」(後書き)

突然A・Sのとあるシーンからのほぼ抜粋したシーンから。

(多少の脚色はしていますが)

私のこの話は“ここ”から始まっていますのでここからスタートです。

これが彼の日常（前書き）

一応アニメっぽく、アバンとか書いてみた。
章の終わりには予告もいれます。

これが彼の日常

世界は人が思うよりきつと広くて

人が思うより出会いに満ちているものだ

それを奇跡と呼ぶにはあまりに陳腐で

しい

運命という言葉で片付けてしまふのはちょっと寂

だからこれはきつと絆の物語なんだ

小さな出会いが生んだ強く大きな絆の物語

これはそのほんの始まりの始まり

少なくとも俺はそう思いたい

12月24日 PM04:22

海鳴市 中丘町 民家

少年は誰かに呼ばれたような気がして、咄嗟に顔を上げた。
少女もまた自分を呼ぶ声が聞こえたような気がして車輪を転がした。

「なあ、呼んだか？」

「コウ兄、呼んだ？」

ほぼ同時に同じようなことを言った両人はしばし固まるが、
それだけで互いに気のせいだったのだと理解した。
だってこの家には自分達しかいないのだ。ならば空耳だろう、と。

カーテンが開いている窓から夕日が差し込むリビングで少年と車椅子の少女は

向き合いながらクスリと笑う。

「もう夕方か……ついだ、ちょっと早いけどそろそろ食事の準備をするか？」

「ふふ、そやね。しよっか」

少女の車椅子を押しながら台所へ向かい冷蔵庫を開けて中身を吟味する。

「あつ、しまった……品切れだったのを忘れてた」

冷蔵庫の中はがらんとしていて空っぽに近かった。冷凍室も。冷蔵室も。野菜室も。

「ほんま？ でもご飯はあるよ。お米も充分や」

ジャーを開けて中身を確認すると湯気と共に白いご飯が光っていた。米びつも確認してこちらも問題ないという少女の言に安堵する。

「助かった、米は重たいからな。」

「けどだからといって引き籠もりを気取っているわけにもいかないか。」

「さすがにご飯だけっていうのは味気ないからな」

「うーん、そやけどあたしはコウ兄のご飯なら何杯でもいけるで」

軽口に軽口で返す少女の額を中指が弾いた。

「いたっ」

「馬鹿、ちゃんとバランスよく食え。」

ちよつとそこで買い物してくるから下準備しておいてくれ」

「うん、わかったよ」

財布を手に取り中身の金額を確認してポケットにしまつと家中の戸締りを確認して家を出た。

近くのスーパーに向かい、日持ちのよさそうな食材を中心に、いつものように買い込む。

買い物袋を両手に持ちながら夕日に照らされている街の中を歩く。

時はクリスマススイブ。

残念ながら今年は去年と違い晴天でホワイトクリスマスというわけにはいかなかったようだ。

しかしそれでも親子連れや若いカップルがいつもより目に付く。

それもあつて今日はそういう日なのだ。少年ははたと気付く。

（しまった、そうか今日がイブか。

今日はもう無理だけど、明日にはケーキでも買っておいたほうがいいかな？

『無駄遣いはあかん』ってあんまりいい顔しそうにないけど、

やっぱりあの子は普通のことを経験しておくべきだろうし（

少し特殊な事情があつて共に暮らしている妹のような同居人はどこか大人びていて

子供っぽくないことが少年には不満だった。自分のことは思いつきり棚に上げているが。

彼はたとえ特別な日だろうといつものように一日は過ぎていく。

それは時に幸福で、時に残酷なことだ。と考えている。けれどそれは特別な日に何もしない理由にはなりはしない。

(……スーパーに戻って、材料を買おう。

家に足りてないものをそろえて作れば市販物より安く仕上がるはず)

方向転換をし先ほど買い物をしてきたスーパーへと戻ろうと足を進める。

「ちよつとつ、謝りなさいよ!」

そこへ少し甲高く幼い声が聞こえてそつちに注意を向けてしまう。

そのあとで「しまった」と軽く後悔した。

見ると道路を挟んだ向かい側でスーツ姿の男に小学生の少女が食ってかかっていた。

「はあ……」

わざとらしい小さなため息がこぼれる。

少年は歩みを止め心で少女に謝りながら、ケーキを諦めた。

「歩きタバコしていたうえにそれを人に向けて捨てるってどういことよっ!

たまたまギリギリで当たらなかつたからよかつたものの、
すずかが火傷でもしたらどうしてくれんの!」

「うるせえなあ、当たらなかつたんだからいいだろ。とつとどけ

よ！」

「あんたが謝つたらどいてあげるわよ。

早くすずかに誠心誠意、心を込めて謝りなさいっ」

「あ、アリサちゃん、もういいよ…」

「すずかがよくてもあたしがよくないのよ…」

怒り心頭といった様子で、当の被害者よりも激昂している少女
アリサに

男は面倒くさげな態度で強引に通り過ぎようとする。

しかしそれはさせまいと強気な女の子は男の脚にしがみつく。

「こらっつ逃げる気!？」

「なんだ、くそっ放せっ!」

放すものかと半分意地になっているアリサに男はイライラし始め、
つい力任せに彼女を突き飛ばしてしまう。

「あっ!」

所詮は小学生の女の子と体は大人の男性。力の差があまりにもあり
すぎた。

短い悲鳴の声と一緒にアリサは突き飛ばされた勢いそのままに道路
に倒れこみそうになる。

「アリサちゃんっ!!!」

もう一人の少女　　すずか　　は悲愴な叫び声と同時に駆け出す。
横目に見えたからだ。

歩道から突然出てきた形になったアリサに気づいていない車がそこまで迫っていたのを。

ひどく周りの時間がゆっくりに感じて、必死に走るけどアリサとの距離は縮まらなくて、
でもアリサと地面との距離、車との距離はどんどん短くなっていく。
運動神経には自信のあるすずかでも間に合わない距離。
手を必死に伸ばす。

子供の腕は短すぎて届かない。

一番近くにいる男は青ざめた表情で身動きひとつ取れない。
周りの大人たちも何が起こったのか理解するので精一杯で動けない。
助けるといふ思考が生まれぬ。

体が地面にたどり着く前に車のタイヤが眼前に迫るのを見たアリサは思わず目を閉じた。

そして、何かが重いものでつぶされる嫌な音を聞いた。

ああ、自分の人生はこんなことで終わるのか。

と妙に冷静になりながらも無事な自分の耳で、それを聞いたのだ。

「ん？」

それを理解すると自分が大きくて暖かいものに抱かれていることに
ようやく気づいた。

目を開けてみるとなぜか誰かの腕の中。

見上げて、一番最初に目に映ったのは星のない夜空のような真っ黒な髪。

そして心配そうに自分を覗き込む、同じような“漆黒”の瞳があっ

た。

この人に抱きかかえられているとアリサは認識した。
見た目から大雑把に年齢は17、8歳ぐらいに見え性別は間違いよ
うもなく、男。

「わっ、きゃあっ！」

その事実を認識すると反射的にその腕を振りほどいて跳び退る。
父親以外の男性に抱きしめられた経験などないアリサにとって
年頃の男性に抱きかかえられたことはその前後の出来事が
軽く吹き飛ばぐらい衝撃的なことであつた。

「アリサちゃん！」

自然と心音が激しくなっていた彼女にすずかは目に涙をためながら
抱きついた。

「よかつた、よかつたよお……」

「すずか……」

危険な目にあつて心配をかけた手前恥ずかしがりながらもその抱擁
を受け入れるアリサ。

気心の知れた友人に抱きつかれたせいだ。
激しい心音は落ち着きを取り戻していった。

「……それだけ元気に飛び跳ねられれば大丈夫だな……」

どこかホツとした表情を見せながらも少年は視線だけで周りを粒さ
に観察していた。

「ああつ、あの男どっか行つた!？」

その目の動きで件の男がいなくなっていることに気付く。

実はアリサを突き飛ばしそれを少年が助けたのを確認した後、怖くなって逃げ出していたのだ。

アリサは憤慨した様子であちこちをキョロキョロ見回すが男の姿はどこにもない。

「探し出してとっちめてやる!」

「お、おい、ちょっと待て」

今にも全力で駆け出していきそうだった彼女の腕を少年は掴んだ。

「こら、今しがたそれで危ない目にあつたばかりだろ。少しは落ち着け」

「でつ、でも!」

痛いところを突かれたが、それでもアリサは納得できない。

彼女にとつて友人、とくにこのすずかやもう一人のあの子は何よりも大事な親友だ。

それを傷つけられそうになって、黙っているなどできるわけがない。

彼女のそんな感じを感じ取つてか。

少年は手を離して今度はアリサの目の前にしゃがみこむ。

目線の高さを合わせて柔らかな笑みを見せながら、穏やかな口調で諭す。

「君が言っていることは正しいよ。
そしてそうやって素直に怒れることはとっても素敵なことだと思
う。」

でも、いくら正しいことでもそれをする事で自分や周りに危険
が及ぶなら

我慢しなくちゃいけないこともある」

「そ、そんなのっ……」

「いいから、最後まで聞けって……それでも我慢できないのなら誰
かに頼ればいい。」

いるだろ、頼りになる人が。

だってそうでなきゃ君がこんない子になるわけがない」

そう言っって少年は優しくアリサの頭を撫でる。

「ちょ、ちょっと！ 子ども扱いしないでよ！」

男の人にそんなことをされた経験がなかったせいか、
一瞬で顔が真っ赤になったアリサは少年の手から逃げる。

「そうだな、ごめん。」

でも、子供でいられるのは今のうちだけなんだから

その子供を満喫しておくことをお勧めするよ」

どこか軽い口調で諭しながら笑みを見せる彼の顔にアリサは既視感
を覚えた。

そして何故だかその笑顔がよく知っているあの子が時々見せるそれに
酷似しているような気さえして戸惑う。

「じゃあ俺はもう行くよ」

浮かんだ疑問を口に出せぬまま、彼は立ち上がって去ろうとする。そこへ意外にもさすがが彼を引き止めた。

「あの、ちょっと待ってください」

「ん、なに？」

すずかはアリサに耳打ちしながらとあるところを指差した。

「あっ！」

そこを見たアリサが声を上げる。

つられて少年も視線を動かしてさっきとは違う意味で「しまった」と今度は口に出して呟いた。

ちなみに意味合いとしてはどっちもほぼ同じ意味である。

一方アリサはさっき聞いた何かがつぶれる嫌な音の正体を見てあれだったのか、と変に納得しつつ、うろたえた。

視線の先には道路。

そこでつぶれているのは近くのスーパーの袋に入っている何かの果物か野菜だ。

見れば少年は片手に同じスーパーの大きな袋に大量の食品を詰め込んで持っていた。

つまり自分を助けるときに片手に持っていた袋を捨ててしまい、自分の身代わりにつぶされてしまったということだ。

「あ、あのっ、弁償します！」

申し訳なくなつてそう言うものの、正直アリサはそれだけ言うのが精一杯だった。

何か他に言わなければいけない気もしたのだが。

「いいよ、俺が勝手にしたことだし説教くさいことも言っちゃったし……」

「で、でも……」

それでは自分が納得できない。

そう言いたげな彼女に少年は苦笑を浮かべながら小指を突き出す。

「じゃあ今度からこんな無茶しないって約束できる？」

言われてアリサはその約束を結ぶことを躊躇した。

彼女は自分の性格をよく理解していた。

また似たようなことが起こった時、自分は多分同じことをするだろうと。

そういつた感情を止めきれないのが自分の欠点だと分かっている。止められないことが最大の欠点だと彼女は考えている。

「……ええつと、じゃあ自分ひとりで解決しようとしないうって、約束できる？」

約束を渋るアリサの様子からなんとなく察したのか、約束の内容を変えようとする少年。

それなら、できるかも。

とアリサも小指を出して少年とお決まりのフレーズと共に指切りをする。

「気をつけて帰れよ」

「はい」

「わ、わかってるわよ」

なぜか照れくさくて少年の顔を直視できないアリサの横ですずかが丁寧に会釈して少年と別れた。

「…いい人だったね」

少し歩くとすずかが正直な感想を述べた。

「ま、まあ、そうね……ちょっとキザっぽかったけど」

一言付け足すものの、否定はしない。

「本当にアリサちゃんが怪我しなくてよかった。

今度からあんな無茶本当にしちゃだめだよ」

叱り付けている。というよりは注意している。

に近い言い方だがアリサはさすがにこっぴどいわれると参ってしまう。多分それはすずかが見た目や喋り方からだけでは分からないほど芯の強い子だと知っているからだろう。

「わかってるって、だからさっきあの人と……ああっ!!」

突然素っ頓狂な声を出したアリサにすずかは怪訝な顔をした。

「どっしたの?」

「…名前、聞くの忘れた……」

「あつ……そ、そういえば聞いてない……あれ？」

もしかして助けてもらったお礼も言っていないよっつな？」

「ああつ、私としたことがあつ!!」

頭を抱え込んで珍妙な動きをしながら苦悩してしまっアリサ。

すずかは念のため振り返ってみたがすでに先ほどの少年の姿はどこにもなかった。

(でもあの人、どこかで見たことがあるよっつな……)

そんな気がしたがあまりに不確かではっきりと思い出せなかったから口には出さなかった。

「はあ、はあ、はあ……」

男は走っていた。走って逃げていた。

何から、は本人もよく分かっていない。

仕事で些細な失敗をして上司に散々怒鳴られた。

それが本当に些細な失敗だったから男は納得できなかった。

重大な失敗なら責められてもしょうがないと考えられたが
上司の言い方は単なる腹いせに近かった。

やっつけられるかとその場で上司と激しく口論して、
売り言葉に買い言葉で会社を飛び出してきた。

それでイライラしてタバコを吸って、捨てた。

そしたら生意気な小学生に捕まった。

イライラが最高潮に達し、その子を突き飛ばした。

あっ、と気づいた時には手遅れであの少年がもし助けてくれなかつたら。

背筋がぞつとした。

もしそうだったら自分は今頃留置場の中だろう。

冗談じゃない。

今日はクリスマススイブだろう。なんで俺がそんな目にあいかけるんだ。

あれは上司が悪いんだろうが、タバコのポイ捨てなんて誰でもやってるだろ。

なんで俺だけが責められなくちゃいけない。ふざけんな！

「……なんだ、その顔は？」

突然前方から冷ややかでどこか蔑むような言葉が飛んできて男は足が止まった。

見れば目の前にあの少年が立っていた。

男は背筋が凍るといふ言葉を体験でもって実感した。

「怖くなって逃げたことは、まあいいとしよう。」

それで少しは反省しているようなら何もする気はなかったんだが、

その様子ではな」

少年は一步、また一步と男に近づく。

男は動けなかった。

動けば、逃げればどういふ目に遭わされるのかを本能が警鐘している。

なぜか、は分からない。けれど分かってしまったのだ。自分の結末が。

暗い光を持った冷たく“紅い”瞳に見下され、その威圧感に声も出ない。

「お前みたいな奴はまた同じようなことをする。

二度とあんなことができないように体に教えてやるよ」

明らかに年下の少年が、明らかに侮蔑を含んだ声で言う。

膝が笑い、足が地面に縫い付けられたように動かない。

そして少年が眼前まで迫ったとき、腰が抜けた。

少年はそこで立ち止まると静かに手を振り上げた。

見上げる形となっていた男が最後に見たのは笑っていた少年の顔だった。

これが彼の日常（後書き）

さっそく、フラグたてやがったこいつ。

12月25日00時00分00秒

自宅に戻ってすぐに洗面所で顔を洗った少年は思わずため息をついた。

(説得力ないな...)

あの女の子には我慢することも必要だと言っておきながら自分が我慢できていない。

結局感情のまま動いている。

いや、理性で止めようとすれば止められたはずだ。自分で止めようとしなかっただけ。

感情を止められなかったあの子より尚悪い。

だめだな、と呟きつつタオルで顔を拭き何気なく鏡に映る自分を見て目をそらす。

いつからだろうか、鏡を見るのが怖くなったのは。

いま自分がどんな顔をしているのかが分からなくなったのはいつからだ？

この家に戻ってきたときに見たあの顔が臉に焼き付いて離れない。

「くそっ！」

歯を食いしばって、心を強くもって、覚悟を決めて鏡を見た。

映っているのは、多分、自分の顔。

両親譲りの黒髪黒目で自分でいうのもなんだが顔立ちは崩れてはいない、はず。

そういえばまともに見るのは何年ぶりか。変わったところはない、はずだ。
あまりに久しぶりだからこの顔が世間一般的に普通な状態の顔なのか判断がつかない。
その事実には思い当たってうな垂れる。変に覚悟したことがバカらしくなったのだ。
なんて間抜けだ。

「コウ兄、帰つとるんか？」

「あ、ああつ、そつちの準備できてるか？」

「うん、できとるよ」

「わかった。すぐ行く」

少女の返事を聞いて、一拍おいて溜め息が出た。
そしてその場を後にしようとしたその一瞬。
横目に写った鏡にハツとなって振り返る。
鏡に映っているのは多分普通の顔だ。若干動揺しているようにも見えだが。

気のせいだと自分に言い聞かせて、今度こそ洗面所から離れる。
しかし臉に残るあの顔が、
不気味なほどに口端を吊り上げたあの笑みが脳裏から消えなかった。

自分は無趣味で無関心だ。と少年は思っている。
昔は色んなことに熱心に取り組んだが、いまはどれもやる気がでな

い。
何をやっても空虚感や無気力感がぬぐえない。
唯一例外があるとすれば一緒に住む少女に関してだが、
その少女は少々甘えん坊なところがあるものの、
芯のところでしたっかりしすぎているので残念ながら少年の世話が絶
対必要な子ではない。

自分のそういった積極性のなさを少年は不思議とどうとも思ってい
なかつたが、

こういうときはいつも思う。何かすることがあれば、と。

二人の夕食を終え、後片付けをしてそれぞれ風呂に入って明日の朝
食の準備をして

戸締りを確認するともうやることがない。

寝ればいいのだが、あまり早く寝ると今度は早く起きてしまうため
朝やることがなくなる。

それに少年はあまり寝つきがいいほうではない。

以前眠ろうとベッドに入って目を閉じてもその状態で三時間起きて
いたことがある。

別に不眠症ではないのだが、いつも眠りが浅い。

けど不思議と不快感はなく逆に守られているかのような安堵感すら
あるのが

不思議だといえはかなり不思議だが、眠れないのは健康上問題あり
である。

だから少年はそういつとき分厚い長編小説を読むことにしている。
これがいい時間つぶしになって眠気を誘う。と少年は考えている。
運のいいことにこの家の書斎は広くいくつも本棚があり様々な国の
本が収められている。

ちなみに今日はドイツ語で書かれた神話の話だ。

残念なことにまったく読んでいない本はこれが最後で

それもあと一、二時間で読み終わりそうだな。
本棚の最初の一冊をとってからの3年という月日は
少年にとってあまりに長すぎたということだ。

明日からは自分も図書館で何冊か借りることにしよう。
と考えながら本を閉じる。読み終えたのだ。
時計を見れば時刻は午後11時46分。

「…思ったより時間つぶしになったか」

分厚い本を片手に書齋へと向かうと珍しい先客がいた。

「なんだ、お前も眠れないのか？」

彼女はこの書齋にはあまり入らないのだが
車椅子で動き回れるほどの広さがあるため入れないわけではない。
単に入る用事が少ないのと、少年に気を使っているからあまり入る
うとしないだけ。

「うん、でも借りてた本全部呼んでしもたから
ここの本読もう思てんけど……難しい本ばつかやね」

だからだろうか、少しばかりばつが悪そうに苦笑いする。

「そうだろうな。」

基本外国の本ばかりだしジャンル分けされてないから
神話本の横に推理小説があったりするんだよな」

持っている本を元の場所に戻しながら、おかしそうに笑う。

「へえ、そうなんや」

「だからめちゃくちゃなんだよな、この本棚。

この段だけでも歴史書に哲学書、暴露本に長編ファンタジーの下巻だけがある。

しかも全部国が違う」

「あはは、ぐちゃぐちゃやな。ちなみに上巻は？」

「そのこの机の隣りの本棚の二段目」

と、少年が指差したのは目の前の本棚から離れた部屋の隅にある机だ。

「うわあ、考えなしの配置や。一回、ちゃんと整理したほうがいいんと違う？」

「そうだな……考えとく。それより、ここにはお前が読めるものはないぞ。

俺が翻訳して読んでやってもいいが、読み聞かせるような本ってあつたかな……」

腕を組んで熟考し、頭の中で目的にあつた本を探す。

(そういえばイギリスの童話集みたいのがあつたな。あれなら……)

記憶を頼りにその本を手にとってみると、ふとその隣りの本に目が行った。

「ねえコウ兄。その本はなんの本？」

彼女も気になったようで訊ねてくるが、彼には答えようが無かった。なにせこの本棚の中で唯一封がされてあつて読めなかった本なのだ。鎖を十字に巻いて封をしていて、よく見ると表紙に金のようなモノで出来た剣十字がついてあるさまから何かのアンティークのようだ。

「悪い、あれは俺も知らないんだ。

鎖がけっこう頑丈でな、外せなくて今まで読んだことないんだ」

「でもなんかきれいな飾りついとるな……コウ兄、あれあたしの部屋で飾つてもいい？」

「いいけど……何が出てきても怒るなよ」

不敵な笑みを浮かべて脅かすように少女に詰め寄る。

「出るつて、おばけ？」

けれど少女はそれを笑顔で受けつつ、わざとらしく怯えてみせた。

「さあな、こんな頑丈な鎖で封をされてるんだ。

火を吹くドラゴンとか、家を跨ぐような巨人とか、

世界を滅ぼそうとした魔法使いが出てきてもおかしくないぞ」

「そんなの出てきたら大変やな。

ドラゴンには何食べさせたらいいか解らんし巨人さんは家に入れられへんから寒そつや」

「ふふ、魔法使いはどうするんだ？」

ある意味予想通りの返しに口許が綻びつつ訊ねる。

「あたしらの合作料理で満腹にさして眠らして井戸に落とす！」

「馬鹿、それは狼だ。だいいちどうやって食ったものを石に変えるんだよ。」

魔法使いとは誠心誠意話し合って説得するべきだ」

「ええっ、コウ兄の話し合いは拳が入るからな。魔法使いさんボコボコにされてしまうわ」

にやり、としてやったりな笑みを見せる少女に少年は額にシワを寄せた。

「……うーん、お前の俺のイメージについて小一時間くらい問い詰めたいな」

「ええよ。今夜は語り明かそうか」

「だーめ。これ、ちょっと読んでやるからそしたらもう寝る」

と、見つけた童話集と剣十字の本を持って車椅子を押す少年。

それにぶーぶーと文句を言いながらも少女は満面の笑みを見せた。

少女の部屋に入ると彼女は突然少年に向けて両手を広げてみせると

一言。

「抱っこ」

彼はわざとらしく洗面を作ると、それだけで返答した。

「ええやろ。それに立ってる者は兄でも使えっていうし」

「親だ……はあ、わかったよ。ほら」

本を机の上に置くとしゃがみこんで膝裏と背中に手を通して持ち上げる。

彼女も彼の首に手を回して抱きつく。いわゆるお姫様抱っこだ。

「うん、合格や。さっすがコウ兄」

「どっかの甘えん坊を何回も抱き上げてれば自然とうまくもなる。ほら、ベッドにいくぞ」

「ああん、コウ兄に襲われるう！」

一瞬で洗面が三割増しになって動きが止まる。

彼がこれを嫌がるのはこの手のおふざけが毎度起こるからである。彼女もそれを分かっていてやっているのだからたちが悪い。

「放り投げるぞ！ まったく……10年早いわ」

そういつて彼女をベッドに下ろす。が、首にかけた手を彼女は離さない。

不思議に思っただけで彼女の顔を覗くと、柔らかかそうな茶色の髪が揺れた。

俯き、髪で僅かに隠れた青空のような瞳が真剣な眼差しを少年に向ける。

「…どうした？」

「…………… 10年、10年たったなら…あたしをちゃんと見てくれる？」

その問いかけはたった一言で彼の心臓を鷲掴みにして顔から一気に血の気を引かせた。

「っ……………」

何か言葉を発しようとして口を動かすが言葉が浮かんでこず彼は口を閉ざし目を泳がせた。

それをどこか悲しそうな面差しで見つめる少女は続けようと口を開いた。

「コウに……………」

どくんっ

「えっ!?!」

「っ!?!」

突然、同時に心臓が高鳴った。

興奮や運動によるものとは明らかに違う動悸を二人は感じた。まるで時計の針が時を刻むかのように規則正しい鼓動は実際の時とリンクしていた。時計が指し示す現在の時刻は11時59分56秒。57、58、59、と秒数が進むほどに動悸は激しくなり何か自分が浸食していく錯覚を覚える。そして

12月25日00時00分00秒

運命の日を二人は迎えることとなる。

「なっ!？」

机の上に置かれていた剣十字の本が突如光を発しながら浮き上がる。それは黒のような紫のような、闇を連想させる漆黒の光。

本から漏れている光に二人は当初驚いたものの目を奪われてしまい、離せなくなっていた。

不吉な色の光は不思議なことに恐怖ではなく、むしろ安堵さえ与えてくれる。

“これは自分を害するものではない”という確信が生まれ、それを疑問にさえ思わない。

その漏れる光に見とれ一瞬、地震のような揺れを経験するがそれに気付かぬかのように

二人はただその本に見入っていた。

どくんっ、どくんっ

心音が聞こえる。自分たちではなく“本”のである。

そして自らの行動を邪魔する鎖をその本は内側から開くことで引きちぎる。

引きちぎられた鎖はその姿を霧散させ、完全に消えてしまう。

開かれた本は風もないのに真っ白なページをものすごいスピードでめくりながら声を発する。

『封印を解除します』

日本語ではなく、ドイツ語に似た言語でその本はそう言った。

正確には少年にはそういう意味に聞こえた。

少女は外国語の知識がなく少年はだいたいの外国語を読むことはできるが、

実際の会話等はできないのにもかかわらず。

ボタンツと大きな音で自らを閉じ、表紙を少年に見せるように浮いたまま近寄る。

『起動』

表紙に飾られている剣十字が金色に光り輝き、そのあまりに強い光に咄嗟に少女を庇うように抱きしめると光に背を向けた。

そして光が収まったのを感じた二人は薄っすらと目を開け顔だけを本があつた場所へと向けるとそこには

「っ!?!?」

「はい？」

跪く四人の男女の姿があった。

その足元や背面に四人全員を包むほどの大きさの魔法陣のようなものが回転していたが

そちらまでは気が回らなかった。

あまりに予想外の外なことが起きたのでさすがに唾然となる少年。

「闇の書の起動、確認しました」

四人の中で一番前にいたピンク色の髪をポニーテールにした女性が少年の様子に気付かぬまま堅い声色で言う。

(な、なんだ、何が起こった!?)

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にてございます」

その左後ろに本を抱えながら跪く金髪ショートボブの女性がさらに頭を下げながら続ける。

(ああ、やばいな。幻聴に続いてついに幻覚を見始めたか?)

「夜天の主の元に集いし雲」

「ヴォルケンリッター、何なりとご命令を」

中央で跪く一番大柄で獣耳をしている男の言葉を赤毛を二つ編みにしている少女が引き継ぐ。

(……………父さん、母さん、どうもそっちに行くのがかなり早くなり

そうです)

目元を手で覆いながら大げさな溜め息を吐く。
それに反応してか。

はたまた「ご命令を」と言ったのに何も言っていないのを不審に思
つてか。

三つ編みの少女が顔を上げる。

見上げた視線とその動きに反応した少年の視線がぶつかり慌てて少
女は顔を下げた。

かしこまっているのに行動や反応が歳相応っぽいのが
なぜか可笑しくて少年はクスリと笑う。

(……現実逃避している場合じゃないか)

その可笑しさが少年に落ち着きを取り戻させていた。
もともとたいして取り乱してはいなかったのだが。

だがそこでふと腕の中の重みが増したような気がして彼は視線を下
げてようやく取り乱した。

「お、おい。どうした、しっかりしろ！」

腕の中の少女をゆするが反応がない。よく顔を見れば目を回して意
識を失っている。

それは跪いていた四人にも僅かに動揺を起こし皆互いの顔を見合わ
せざわめき始める。

「おいつ、俺の声が聞こえるか。返事しろ！」

かるく頬を叩いてみるが反応がない。

「じっくりしろっ、はやてえっ！」

12月25日00時00分00秒(後書き)

ヴォルケンリッター登場！

そしてとくに意味はなかったんだけど、はやての名前が初めて登場。
方言キャラは言葉を文にするのがむずい。

ふたりの主

12月25日 AM02:27

海鳴大学病院

「はやてちゃん、良かったわなんともなくて」

「まったく心配かけやがって……」

「ええと、すみません」

とある病室のベッドに座る少女 はやて に語りかける白衣の女医
石田幸恵 は
はやての困ったような、申し訳なさそうな笑みを見て朗らかな笑み
を浮かべた。

「で、誰なのあの人たちは？」

しかし次の瞬間には訝しげな顔をしながら病室の端を指差す。
その先にいる人たちを見て、二人は思い出したように内心頭を抱え
た。

突如本の中から現れた謎の四人がそっくりそのままの格好でそこに
立っている。

「どういう人たちなの？」

変な格好してるし言ってることは訳分かんないしどう見ても怪しいんだけど」

(しまった。思いっきり忘れてた)

その後、彼は気を失ったはやてを主治医である石田医師のいる病院につれてきたのだ。

彼女達はそのあとに黙ってついてきて彼と同じくはやてが目覚めるのを待っていた。

はやてを心配しすぎていたためにそもそも原因を彼は失念していたのだ。

厄介なことに、疑いの眼差しを向ける石田医師と同意見なのか。四人の周りには屈強そうな男性看護師が囲むように立っている。

「ああ…ええ、その……なんと申しましょうか…え、うっ……」

放っておくと大変なことになりそうな予感がしたはやては言い繕うとするが名案が浮かばない。

(ご命令をいただければお力になれますが、いかがいたしましょう…)

そこへ、声が聞こえた。

耳からは何も聞こえなかったが、たしかに声が聞こえた。

「へ……え？」

月並みな表現をするなら頭に直接響く声。心に直接届く声。それが誰の声なのか不思議と分かった。四人の中の一人、ピンク色の髪をポニーテールに結んでいる女性の声。

(思念通話です。心でご命令を念じていただければ…)

しかも他の三人もこの声を聞いているとなんとなく分かることがはやてを少し混乱させた。

(…命令というか少し頼みごとになるんだが、

この場はとりあえず俺に話を合わせてくれないか)

「え?」

「…うそ?」

「まじ?」

「っ!」

混乱しているはやてに代わって自分が。

と想って念じて言ってみた言葉に四人は驚愕の表情を見せた。

四対の驚きと困惑の眼差しを向けられ、かえって困ったのは彼のほうだ。

(えっと…話を合わせてくれませんか?)

思わずかしこまった言い方に変えてみる。

(「コウ兄、たぶんそういうことやないと思う…」)

はやてからの的確な突っ込みに僅かに唸るもののこの場を収めることを優先する。

(…とにかく、話を合わせてくれよ)

「すみません石田先生。実はあいつら俺の両親の知り合いなんです
よ」

「えっ、そ、そうなの？」

彼女はいささか大げさのようにも見える驚きを見せる。

それに内心苦笑しつつ彼は続けた。

「実ははやてには内緒で一緒にクリスマスパーティーをしようと思
ってたんです。

そういう行事ちゃんとやってなかったし二人だけってのもなんだ
と思って

外国から呼んでみたんだけど……」

彼は並んで立つ四人に視線を移して、わざと乾いた笑い声をたてる。

「まさか仮装までして乗り込んでくるとは思わなくて。

ついはやてと一緒にになって驚いちゃって……」。

それではやては驚きすぎたようで、その、なんといいましょうか。
こついうことになったわけです。すみません」

と申し訳なさそうに頭を下げた。

そして他の人にはわからないようにベッドに座るはやてにアイコン

タクト。

「っ……なんや、そうやったんか。

それなら前もっていうてくれたらよかったんに。

みんなも悪かったな。せっかく来てくれたんに気失ってしもて…」

意図を察して話をあわせ、四人に言葉をかける。

「い、いえ。こちらこそ驚かしてしまつてすみませんでした」

「申し訳ありません」

二人の女性が言葉に出して謝罪し、男性は黙つて頭を下げた。

一番小さな女の子もそれにならつて、小さく頭をさげる。

しかしその言葉も動作もぎこちなくて怪しさをかえつて煽つてしまつていた。

そんな気がしたのははたして二人だけだつたらうか。

二人の乾いた笑いが止まらない。

（こんなんで大丈夫やるか？）

（大丈夫だ。あとで俺が詳しい事情、と言つても嘘満載だけど。

とにかく納得いくような説明しとくから…）

今しがた教えられたばかりの思念通話を自然と使いこなしつつ、二人はなんとかその場を誤魔化した。

「なるほどねえ…」

「そういつことやったんか」

はやてに異常がなかったことから夜が明けると退院して家に戻った俺たちは

守護騎士ヴオルケンリッターと名乗る彼女たちから一通りの説明を受けた。

病院で聞くこともできたがあそこでは人の目がある。

話は安心できて他人に話を聞かれる心配のない家で、ということに俺がしたのだ。

そして聞かされた内容は彼女達があの本から出てきたところを見ていない人間には

到底信じられないだろうというものだった。

まずあの封がされていた本は「闇の書」といい魔力を蒐集して

そのすべての白紙ページである666ページを埋めて完成させるとその主は誰も抗えないほどの強大な力を得ることができる魔導書であるとのこと。

彼女達はその蒐集と主となった者を守る役目をもった守護騎士なんだそうだ。

「魔法使いじゃなくて騎士がでてくるとはな、それは予想外だった」

「ふふ、そやね」

傍からすると意味の分からない会話に首をかしげ、困惑顔の四人。

そりゃそうだ。

それぞれ

ピンクのポニーテールの女性は剣の騎士シグナムといい、騎士たちのリーダー。
それっばい。

ショートボブの女性は湖の騎士シヤマル、参謀役だそうだ。
そうは見えないが。

赤毛の三つ編み少女は鉄槌の騎士ヴィータ、アタッカー。
確かに一人で突っ込んでいきそうだ。

獣耳の大柄の男は盾の守護獣ザフィーラ、狼の獣人。
あのふさふさの毛並みは気持ちよさそう。

だそうだ。ちなみに最後のは俺の一言感想。

一瞬ファンタジーの世界に迷い込んだかと思っただが彼女達によると
次元世界、

ここではない別の世界の一部では魔法は技術として確立されており
プログラムを準備して

詠唱や集中のトリガーで発動させるものらしい。

闇の書はそういった世界で誕生したもので破壊されたり主が死ぬと
再生しつつ

別世界へ転移してそこで新たな主を探すというのだ。

「……だけど、そうだとするとどっちがその主になるんだ？」

俺ははやてと自分を交互に指差して聞いてみた。

リビングで跪いていた彼女達は困ったように顔を見合わせている。そんなに難しいこと聞いたか？

ちなみに俺は車椅子の横で床に座っている。

立っただけでもソファに座っただけでも見下ろしてしまうのがなんとなく嫌だったからだ。

いまでは別の位置に座るべきだったとかなり後悔している。

「…今までの例でいうのなら我らの主は常に女性でした」

そして考えがまとまったのか、リーダー・シグナムが代表して発言する。

「なら、あたしが主になるん？」

「それは、間違いないと思うのですが……」

彼女の言は不思議と歯切れが悪い。

そして何うのような視線をなぜか俺に向けるシグナムたち。

「なんだよ、病院からこっちチラチラ見てきて。」

……なんか聞きたいことがあるんなら言えよ」

そう、実は石田先生たちをなんとか誤魔化したあとからずっと

こいつらはこんな視線を俺に向けている。

表情から困惑しているのは分かるのだが、

こっちはその理由が分からないのだからどうしようもない。

「不躰な質問で申し訳ないのですが、あなた様は魔法の心得がありますでしょうか？」

はい？

僅かな逡巡のあと、かえってきたのはそんな質問だった。

「…ないよ。この世界に魔法がないのはもうわかってるだろ。

物語の中の魔法ならいくらでも知ってるけどお前らがいう技術としての魔法は知らない」

「やはり、そうですか……そうなるにあなた様も主ということに…」

「はい？」

今度は口から出てしまった。

まてまて、なんか論法おかしくないか。魔法知らなかったから俺も主って。

「………どういうことだ。分かるように説明してくれ、普通主ってのは一人だろう？」

「ええ、“普通”はたしかに一人です。

闇の書の長い歴史においても複数の人間が同時に主になったことなどありません。

ですが…」

「ですが？」

「実は…」

俺のその問い返しに答えたのはシャマルだった。

それによると、自分たちが目覚めて目の前に男と女がいた時点で彼女たちはすぐに女であるはやての方を主だと認識していた。

これは闇の書の性質上女性が主になりやすく、また実際に今までの主が全員女性だったから。

しかし病院で思念通話をしたさい予想外のこと起きた。

主と守護騎士たちの間には精神リンクというものがあった

魔法に初めて触れるであろうはやてのためにそれを利用した通信を行っていたはずなのに、

その思念通話ははやて以外の人間にも届いてしまったのだ。つまり俺に。

主と自分たちの間にしかないリンクを利用した通信がはやてと俺に聞こえたということは

その両人とリンクがある証明。

魔法を知らないこの世界生粋の人間であるならなおさらである。

「なるほど。たしかに俺とはやて両方が主でないとおかしいわな、それは……」

「これはこちらの勝手な推測ですが、

この世界に転移した闇の書が次なる主を探すさいに一番身近にいたお二人を見つけ

どちらも主としての資質が高かったためこういう処置にしたのではないかと……」

病院にいたときからずっと黙っていたのは俺と同じように人の目を考慮していたのと

それを考えていたためだそうなの

でもな、それだとな。

「それやと、ちょおかしいわ。

コウ兄とあたしが一緒に暮らし始めたんは3年とちょっと前から

や。

「この家に来たんやて4年前やし……ねえコウ兄この本いつからここにあったか知ってる？」

そう、はやての言つとおり時期が合わない。

「家に戻ってくるまで記憶をあさっていたんだけど、どう考えても11年前にはこの家にあつたぞ、その……」

はやてが持つその本を指差して、なぜか口ごもる俺。

「闇の書ですか」

「ああ…うん、それ…」

なんだろう。非常に呼びづらい。その名が合っていない気さえする。

「だからあたしとコウ兄と一緒に選ばれるんはちょおかしかなあって、」

「思っんやけどみんなはどう思っっ？」

騎士たちは顔を合わせて困惑顔。どうもこいつらもよく分かってないみたいだな。

「申し訳ありません。我らもこのようなことは初めてで詳しいことは分かりかねます」

「そっか…」

「しかし、お二人が主であるのは疑いようがありません」

「我らヴォルケンリッター、命令とあれば今すぐにも闇の書の蒐集を行う所存」

「どうかご指示を」

全員が再びかしくまってそう訴えるものの、どうすっかな。

俺は視線だけを隣りのはやてに向ける。はやても同じように俺に視線を向けている。

俺は黙って手を出して、はやても黙って本を俺に手渡した。

「…まったく俺たちの意思を無視して勝手に主認定するとはお前もやってくれるな」

そして本に文句を言ってみる。返答はなかったが。

「コウ兄？」

「はやて、一応聞いておくが、お前いるかそんな力？」

「うーん、これといって欲しないな。コウ兄は？」

「左に同じ。だいいちそんな強力な力持っても責任とれそうにないからな」

「おっ、久しぶりに聞いたなあその『男子心得』」

ニコニコして嬉しそうに語るはやて。俺は思わず額にしわを寄せた。こいつがいう男子心得というのは両親が勝手に作って残したもので、俺にこいつ奴に育ててほしいという願いみたいなもの。

ただし半分以上がかなりふざけた心得であるためよっぽど俺の両親は暇人だったようだ。
そのなかに

『大きな力には責任が伴う。』

持てば持った責任、使えば使った責任、使わなかったら使わなかった責任がある。

それを踏まえて決断し、行動しろ』

というのがある。

わりと真面目なほうの心得だ。

だから。

「力っていうのはどんなものでも持てば持った責任を背負わなくてはいけないものだ。

あいにくだが俺にそんな強大な力を持った大きな責任は荷が重過ぎる」

「…そういうもん、あついえそういうものですか？」

心底不思議そうなヴィータは首をかしげつつ言葉遣いを正して言い直す。

「ふっ、無理に敬語で喋らなくていいぞ。

それに俺がそうありたいだけだよ。だけどそれ以前にさ……」

俺はあえてそこで言葉をきって、はやて以外の全員の顔を見た。多分真剣な面持ちで。

さっき一通りの説明を受けて俺はその話に穴が開いていることを感

じた。

説明し忘れた。ではすまされない大きな穴をだ。

「魔力の蒐集つてのは、違法だろ？」

「な、なんで分かったんだ!？」

「ヴィータ!」

鉄槌の騎士の発言を剣の騎士が戒めるがもう遅い。

というかヴィータはこっちの思ったとおりの反応してくれるな。面白。

「やっぱな……そういうことだろう思ったよ」

「それどういうことや?」

「……どうして分かったんですか?」

純粹に不思議そうな顔で訊ねるはやてとシャマルが同時に聞いてくる。

その両隣には『しまった』という顔をするヴィータとそれを目で責めるシグナムがいる。

ああ、なんかこいつらの性格と関係性だいたい分かってきたかも。

「簡単なことさ。魔力の蒐集は危険だから自分達がする。

しかもこの世界には蒐集対象がないから他世界に行って、とまでお前たちは言った。

つまりお前たちはお前たちだけで他世界への移動が可能ということだ。

個人レベルでそんなことができる技術がある世界なら
当然それによって生じる事件や事故に対処する機関や法が存在す
る。

そして魔力は魔法が当然のようにある世界では必要性の高い一種
のエネルギーだろう。

それを蒐集、しかもそれが危険ということ。

お前達が戦う力を持った騎士であることを考えると

蒐集はおそらく相手から無理やり奪うという行為だろう。

それを認める法や機関が存在するとは、少なくともこの世界の常
識でいえばありえない」

何か間違いでもあるか。といわんばかりの俺の推論に皆は反論せず
啞然としている。

が、シグナムはハツとなつて頭を下げた。

「申し訳ありません。

主たちが魔法技術のない世界の住人であり歳若いこともあって管
理局に関することを

説明から勝手に省きました。しかしその矛盾点に気づきそこまで
推察なさるとは、

御見それいたしました」

堅苦しい言い方をしているが、

これは変に裏を読まずに俺を褒めてくれていると素直に考えていい
のだろうな。

いささか褒めすぎな気がするけど。

「とりあえずその、管理局とかいうものの説明は置いとくとしてそ
ろそろ買い物にでよか。

コウ兄もいかげん目の向け先に困つとることやしな」

ぐっ！

き、気付いていたのか！？

はやての突然といえは突然の提案に俺はうなだれ、騎士たちは目をぱちくりさせている。

「分かつとるよ。」

上から見下ろすんがいやで床に座ったんはいいけどシグナムとシヤマルを直視できんから

目があつちこつち泳いで……ほんまウブで可愛いなあコウ兄は」

意地悪な笑みを浮かべてクスクスと笑うはやて。くそ、完全に見透かされてる。

「あ、あの私たちがなにか粗相を？」

自分とシグナム。と名指しされたシヤマルが不安そうに訊ねる。
いやお前らは悪くはないのだが。

「うっん、違うんよ。二人は悪くないんやけど服装がな。」

ちよつとコウ兄には刺激が強すぎたようや」

はやての奴、嬉しそうな顔で誤魔化す素振りではつきり言いやがって！

しかも言われた当の二人は意味が分かってないように首傾げてるし！

「…なるほど、たしかに年頃の男子には目の毒かもしれんな」

と、いたって冷静に二人の服装を眺めつつ述べたのは
俺を除けば唯一の男性であるザフィーラだ。

うん、からかわれながら指摘されんのも冷静に言われんのも、
たいして恥ずかしさが変わらないということを今日学んだよ。

家に戻って冷静になってみて初めて気付いたってのも情けない話だ
が、

こいつら黒い布地のようなもので作られた薄っぺらく体に密着する
ような服を着てる。

男性であるザフィーラとワンピース型になっているヴィータはこれ
とって問題がない。

だけど、残りの二人はラインが完全に出てしまっている。

シグナムのは動きやすさ重視なのか丈が異様に短くシャマルのは背
中が開いている。

しかも跪いているわけなので、気付かず正面に座ってしまった俺は
その……なんとおうか、視線の向けどころに困っている。

ザフィーラの言うように年頃の男としては目に毒で本当にどこに視
線を向ければいいやら。

立てばいい。とは思うのだが、それでは最初の見下ろしたくないに
戻ってしまうわけで、

じゃあ顔を見ればいい。のだが、困ったことに二人とも美人で、
それはそれでドギマギしてしまうというかなんというか。

「こらこら、コウ兄。ぐるぐる考えとらんと出かける準備しよ。

あたしらがみんなの主なんやさかい、みんなの衣食住はしっかり
面倒みなあかんやろ？」

なんだろうねえ。

たった3年だというのに、どうしてこっちはやてには全部見抜かれて
しまうんだろうか？

俺ってそんなに底の浅い単純な人間なのかな。そんな自覚ないんだ
けどな。

「はあ、わかったよ」

溜め息を吐きつつ立ち上がる。

「でもとりあえず、古着でもなんでもいいからこいつらに普通の服着せよう。

じゃないと外に連れていけない」

「ふふふ、正確にいうとコウ兄が気になって一緒にいられない。やる」

「…」

唸って固まる俺を見て、はやては声を抑えず盛大に笑った。

餌付け？（前書き）

初めて、ちょっとふざけたサブタイトルつけてみた。

餌付け？

「主はやて、これはどのようなように着るのでしょうか？」

「ああ、それはね……」

買い物から帰ってきたあたしたちは今や自宅ファッションショー状態や。

あたしの部屋に所狭しと広げられた衣服は全部みんなのために買ってきたもの。

どうもみんな服を着替える。

ということに不慣れなようであたしがいろいろと説明せなあかんかったけど

それはそれで楽しいし、みんな美人さんやからどんな服も似合う、似合う。

コウ兄にも見せてあげたいけど、残念ながらコウ兄は自室で死んだるさかい無理。

うーんあたしの思うてた以上にウブやったんやな。

ちよつと婦人服売り場におるだけで居心地悪そうやったし

男性の意見も聞こう思て下着売り場に連れていこうとしたら真っ赤になつてしまつて

逃げようとしたんをザフィーラに頼んで捕まえてもらつてたからな。家につくなり倒れるように部屋に入つてしもた。

いまは一応ザフィーラについてもらつてる。

ちよつとイジメすぎやったかな？

と、少しばかり、本当に少しばかり反省する。

「これでよし、似合っつでヴィータ」

「ああ、うん…」

可愛いおさげの三つ編みにリボンを結んであげる。

ヴィータは照れくさそうにしつつも喜んでくれてるようや。

「…これでどうでしょうか？」

そして着替え終えたシャマルはその場でクルリと回ってみせる。

「うん、OKや。似合っつるよシャマル」

「はい、ありがとうございます！」

そんな嬉しそうな笑顔見せられたらこっちも嬉しいわ。一生懸命選んだかいあつたな。

意外にコウ兄も服のチョイスは手伝ってくれたし。

「…………あの、主はやて…」

「ん、あつシグナムもいけてるで。

個人的にはシグナムってスタイルええからパンツとかやなくてタイトミニとかで

ビシツときめたらかつこええしセクシーやと思うんやけど。

…………それやとコウ兄困っつてしまっつから、それはまた今度な」

「あつ、いえ、その…………あ、ありがとうございます？」

お礼をいうべきやと思っていうとるんやろうけど微妙になんか間違
ってる気がするんやろな。

しつかり者に見えるシグナムの語尾が少し不安げなのが無性におか
しい。

「なんだよその疑問系」

「う、うるさい。お前こそちゃんと主に礼を言え!」

「わかってるよ!」

「ええよ、お礼なんて。

それよりほんまにみんなお似合いやな。コウ兄のセンスはやっぱり
抜群や」

女の子として、自分が選んだ服よりコウ兄が選んだもんの方がセン
スがいい。

っていうのはちょ納得いかんけど。

それでもやっぱりコウ兄は分かっとなるな。

どういふ服着せたらより魅力的かが分かっている。

「そうなのですか?」

「そうや、かくいふあたしの服もいまやほとんどコウ兄のチョイス
や」

「ふふ、兄妹仲がよろしくていいですね」

シャルルにそう言われて、ドキッとしてもった。

ああ、しもたな。みんなから聞くばつかでそこんところ説明すんの忘れてたわ。

「……ちやうよシャマル。言つの忘れとったけどあたしとコウ兄は別に兄妹やない。」

あたしが勝手に“兄”って呼んでるだけで血の繋がりはないんよ」

「え、そうなんですか…」

あつ、シャマルがなんかまずいこと聞いてしもた。って顔しとる。そこまで気にすることやないんやけどな。

「でも、血の繋がりがなくても家族にはなれる。」

あたしはもうコウ兄を家族と思うとるし出来ればコウ兄にもそう思ってもらえたら、ええなあと思うとるんよ」

「思ってくれていますよ、きつと」

「っていつか傍から見て兄妹にしか見えなかったぞ」

「あはは、ホンマか？ だったら嬉しいな」

そう、ホンマにそうやったら嬉しかったのに。
ん？

「くんくん……あれ、ええにおい…」

どこからともなく、というか我が家からこんなニオイするんはキッチンしかない。

まさか思て、シグナムたちとキッチンに向かうと

「おっ、二オイにつられてやってきたか」

予想通り、そこにはエプロン姿のコウ兄がお鍋を煮込んでいた。

「あっ、もう着替えたのか。やっぱりあの黒い服よりそっぴいの方が似合うな」

すかさず褒める態度がちょっと、ちょっとやけど気に障った。

お礼をいおうとしたみんなを遮ってあたしはしかめっ面でコウ兄を睨む。

「ちょコウ兄、今日はあたしが当番やん。ずるいで勝手に作るなんて…」

あたしたちは基本的に家事は当番制のかわりばんこでやっとなる。

昨日はコウ兄やったから今日はあたしやったんに。

「悪い、悪い。」

でも今日は気絶したりあちこち行ったりしたうえにろくに飯食ってなかっただろ。

俺はシャマルたちの着替えは手伝ってやれないけど、こっちは代わってやれるからな」

「そ、そやけど……」

コウ兄の言い分は分かるしその気遣いは正直嬉しい。

けど、どうしても不満顔になってまう。

今年はこの日があたしの当番になるようにつまいこと調整しとったんにな。

「ほれ」

「へ？」

突然、目の前に小皿を突き出された。

そこにはお鍋からすくったビーフシチューが少しばかり。

「味見、頼む」

はぐらかそうとしてるのがみえみえやったけど、

シチューの芳ばしいニオイと空腹には勝てへんかった。

小皿を受け取って、味見を試みる。

「…ん、んく…あ、おいしい！」

「だろ」

してやったりな笑みを浮かべるコウ兄。

悔しいけど、まだ自分はこの味にはいろんな意味で勝てへん。

「さて、はやてのお墨付きをもらったことだし……準備いいかザフイーラ」

「はい、すべてテーブルの上に並べておきました」

「うわっ、ザフイーラいたのか？」

「しかもなんだその格好は」

「……主が調理場で手伝いをするならこの格好だと……」

ザフィーラは少しだけ恥ずかしそうにしていたけど堂々とテーブル横に立っていた。

エプロン姿で。

大きな体にはちょっとちっちゃいみたいで不釣り合いやけど性格やろ
うかきちつと着とる。

どうやら手伝わされとったみたいや。

『男子厨房に入るべし、そのさいはエプロン着用で』

コウ兄曰くふざけている方の日野家心得や。

それでもきつちり守ってる所をみるとコウ兄がどれだけ両親を想う
とるかが分かる。

「うわっ、すげえ……」

テーブルの方へ移動しとったヴィータが小さな歓声をあげた。

あたしも行ってみると、すでにそこにはご馳走が並べられていた。

大きいけれどシンプルないちごのケーキを中心に色鮮やかなサラダ。
おいしそうなフライドチキンにミートパイなどなど。

そして今しがた味見させてもろたビーフシチューが続けて並べられ
る。

コウ兄、いつのまにここまで準備したんや。

相変わらず手回しが早いとか下準備ばっちりとか。

「これでよし、と。ほらお前らも突っ立ってないで座れ。

ちよっと早いけどみんなそろったんだ。夕食にするか」

「うん、そやね。シグナム、悪いんやけどイスに座らせてもらえへんやるか」

「はい、分かりました」

このテーブルのイスはちょ高いから車椅子からやと乗れへん。いつもならコウ兄に頼むとこやけど、後始末で忙しそうやしな。

「ん、しょ……これでよろしいでしょうか主はやて」

「ふふ、よろしいよ」

シグナムは騎士名乗るだけあつてか簡単にあたしを持ち上げる。

うん、初めてにしては上出来や。

やっぱり女性やからやるか。

コウ兄と違って体柔らかいな。このへんなんか、とくに。

むにゅ

「あ、主？」

「お着替えしとるときから思ってたけど、やっぱり胸おっきいなシグナム」

それにナイスな柔らかさや。

「はあ、その、そののですか？」

「そうですねですよ。ふふ、うらやましいなあ……」

むにゅむにゅ

「あっ、その……主はこれから成長なさるのではないかと」

「それはそやけど……」

「……お前ら、食事を前にして何やってんだ……」

おっぱい揉むんに集中しとったあたしに向けてコウ兄は溜め息混じりに言う。

その視線は思いっきり関係ない真逆方向の壁に向けられとったけど。

「何しとるって……シグナムのおっぱい触つとるだけや」

「そんなのは見れば分かる！俺はなんでそんなことをしてるのかを聞いてるんだ！」

僅かに頬を染めて決してこっちを見ないようにしつつ半ばヤケクソ気味に怒鳴る。

「なんでやていわれても、ただ柔らかかそうやなって。

……あっそっか、コウ兄も触りたかったんか」

「なっ、なんでそうなる！？」

おっ、頬の紅潮率30%増加や。

「じゃあコウ兄はシグナムの胸触りたくないんか？」

「っ……」

一気に100%突破や。これはコウ兄をからかうネタが増えたな。反射的に否定する言葉を怒鳴り返そうとしたりたんやろうけど、それだと遠回しにシグナムに女性として魅力ないというのと同じやないか。とか考えとる顔やな。だけど否定しないと触りたいことになってまう。

その葛藤が口をパクパクさせるだけで発言がない様子に表れとる。正直者やねえ。

「なあ、シグナム。コウ兄に触られるのは嫌か？」

「えっ！？ あっ、その、なんといいましようか…その、ええつとで、できれば突然触るのではなく事前に一言くださればこちら心構えできますので、そうしていただけるならいつでもどうぞ」

こっちも真っ赤になって可愛いなあ。

「…だって、コウ兄」

あっ、200%突破。茹で上がってしまった。これはあかんつ、爆発する。

「ふっ、ふふ、ふっ……は〜や〜て〜、お前っ！」

「さっ、はよ座ってご飯にしようか」

シグナムに頼んで座らせてもらおう。

意外なスルーにコウ兄は空振り。

「さっ、みんな食べて、食べて、コウ兄の料理はおいしいよ」

「……い、いいんでしょうか？」

視線でコウ兄を気にするシャマルに「いいよ、食べよ」という。

「じゃあ、いただきます！」

「い、いただきます」

みんなで合掌して、食べ始める。

コウ兄はどこに胸中の感情を向けていいかわからずしばらく固まるとったけど、

落ち着くと黙って席に座った。

「どやみんな、いけるやる？」

あたしの問いかけにみんなそれぞれの態度で答えてくれた。

シャマルは素直においしいっていうてくれたし、シグナムはそれに賛同した。

ザフィーラは黙っとったけど大きく頷いて、ヴィータは何もいわずにもくもくと食べとる。

「これで衣食住、ばっちりなんかなりそうやね。コウ兄」

そう言つとさっきのこともあって渋い顔しとったけど、それでもあたしには分かるよ。

久しぶりに見たな。コウ兄のそんな嬉しそうな顔。

「みんな、おかわりたくさんあるからいっぱい食べてな」

「こら、それは俺の台詞だ。取るんじゃない！」

「あはは、細かいこといいっこなしゃ。ほらコウ兄も食べて食べて、おいしいよ」

言われてぶつぶつ文句いいながらも食べ始める。

「……あの、おかわり……」

そこへちよつどシチューを飲み干したヴェータが恥ずかしそうにしながら小さな声でいうた。

「はい」

「だ、だからそれは俺の台詞！」

計画しとったんとちよつとちやうかつたけど、こんなクリスマスもOKかな。

あの日我らは新しい主と出会った。

それはいつものことではあったけれど、今回は少々異例尽くしだ。

二人の人間が主として選ばれたこともそうだが、

それ以上にこの二人は今までの主と違いすぎた。

それはとても不思議な感覚だったと今でも覚えている。

あの晩用意された部屋は丁寧に、そして細部まで主たちの気遣いが見えてなぜか口元が緩む。

そしてどんな魔法を使ったのかとても暖かなベッドに入り

毛布に包まれると、その晩我らは生まれて初めて穏やかな眠りというものを体験した。

12月26日 AM06:12

海鳴市 中丘町 民家

「ん……っ!？」

ゆっくりと覚醒していく意識が急激に目覚めて飛び起きる。

それは彼女、剣の騎士シグナムにとって癖のようなものだった。

常に戦いの中にあつた彼女は、いや彼女達にとって休息とはその言葉通りの意味でしかない。

消費した体力と魔力を回復するためだけの行為。

だから自然と仮眠しつつも周囲の警戒を怠らない。

だからそれ自体には驚かなかつたのだが、目覚めたシグナムは驚愕していた。

自分が熟睡していたことに。

(しまった。

私としたことがいくら危険の少ない世界とはいえ無用心に熟睡してしまうとは)

頭を振って完全に頭を起こすと寝間着から昨日用意してもらつた衣服に着替える。

昨晚はこの地において『くりすます』という祝い事だったためか、かなり豪華な食事をたまわつた騎士達。

それはとても暖かく美味なものでヴィータは何杯もおかわりをしていた。

かくいうシグナムもそれに次ぐ量だったが。

いまさらだがそれを思い出し食い意地の張っている騎士だと

主たちに思われているのではないかと心配になる。

時計を見てまだ誰も起きてないかもしれないが辺りの見回りだけでも、

と考えたシグナムは部屋を出て違和感を覚えた。

(家の中が暖まっている?)

彼女達に用意された部屋は出るとすぐにリビングになっている。

そこはもう暖房が効いていて寒さは微塵も感じなかった。

見ればそこで獣の姿で横になっている同胞を見つけて足を進める。

(起きたかシグナム。お前にしては少し遅いな)

言葉ではなく心に直接届く思念通話。

(あ、ああ。不覚にも熟睡してしまった。それより家の中を暖めておいたのはお前か?)

それに同じく思念で返して尋ねながらそんなことをする奴だったかと自問して首を振る。

そして目の前の彼も首を振って何かを指すように首をクイツと動かす。

その方向に視線を向けると台所で誰かが食事の準備をしている。後姿だが間違いなく自分達の新しい主たちだ。

「あ、主?」

「ん、あっおはようシグナム」

「あはよう、昨日はよく眠れたか?」

彼女の存在に気付き、振り返り挨拶の言葉をかけてくる少女と少年。

「おはようございます。はい、よく眠れました」

思わず素直にそう答えるシグナムに「それはよかった」と笑みを浮かべながら
彼女達の主たちは朝食の準備を再開する。

その姿をしばらく呆然と見ていた彼女だったが、どうということだと
獣の同胞に目で尋ねた。

昨晚、眠る時刻になったとき騎士たちは誰かが寝所を共にして護衛
をしたいと申し出た。

それは主を守るべき騎士として当然の行動だったのだが、

困惑したのはその当の二人。正確には少年の方。

少女はなぜか

「コウ兄はシャマルがええかな、シグナムかな、それともヴィータ
かなあ」

と嬉しそうに笑っていたが。

実際は少年が強くザフィーラ（狼形態）を所望し、
少女とはヴィータが共にすることとなっていたはずである。

「俺が起きたときにはもうベッドはもぬけの殻で

慌てて探してみれば台所で朝食の準備をしていたのだ。二人で。

そのころにはもう家中暖まったあとだった」

つまりこの主たちは誰よりも早く起きて、

家を暖めておきそのうえで朝食の準備をしている。ということだ。

従者より早く起きて家事をする主

何かがすさまじく変だった。

(いや、ここは主より遅れて目覚めた自分を恥じるべきか)

などと考えているとシャルマルが起きて来て、彼女と似たような反応をした。

最後の、もはや寝坊といっても差し支えない時間に大慌てで起きてきたヴィータには
それを責めるどころか「お寝坊さんだな、ヴィータは」と気にした風もなく笑顔で迎えた。

それに対して彼女達はどう反応していいのか分からない。

普通なら主より遅いとは何事かと叱責されるはずだ。

昨日の時点でもう分かっていたことだが、今回の主たちは今までと違いすぎる。

それになかなか順応できない。

何かしら手伝おうと進言するがやんわりと「もうたいしてやることがない」と言われてしまう。

何をすれば、していればいいのか分からない守護騎士たちはリビングで立ち尽くす。

その間にも主となった少年と少女は慣れた手つきで朝食の準備を進めて、

完成させるとそれらをテーブルに並べた。

「さて、出来たっつと」

「みんな席座って」

二人の言葉に全員で顔を見合わせるもののテーブルに皆座った。

出された朝食は和風テイストでご飯にお味噌汁、だし巻き卵、焼き鮭、ほうれん草の御浸し。
実は全員昨日も思っていたが口に出さなかったことがある。彼女達に基本食事はいららない。
食べれないわけでもないし外部からエネルギーを補給することが無意味とはならない。
が必要性が薄い。

のだが、目の前で湯気を立たせて芳ばしいニオイを放つその誘惑になぜか勝てず、
ヴィータが箸を掴んで卵に突き刺して口へと運ぶ。
一瞬動きを止めたあと、黙って咀嚼しつつ味噌汁を口にしてまた動きが止まる。
たびたび動きを止めるものの箸の動きは止まらない。
ヴィータに続いて食べ始めたシグナムたちも似たような反応を見せる。

箸の使い方がよくわからないようだが、食事の手は止まっていない。

「……………あの…おかわり…」

「ヴィータ！」

（おまえ、昨日も散々食べたくせにまだ食べる気か！）

（うるせえな、いいじゃんか……………うまいんだから）

早々にお茶碗を空にしたヴィータの言葉にシグナムは責めるが少年は不安げに突き出された茶碗を受け取ってご飯をよそつ。

「気に入ってもらえたようでよかった。

実をいうと俺ら人に作るのは初めてなんだよな。

だからお前らの口にあつか心配だったけど昨日と今日で自信ついたよ」

山盛りに盛られたご飯を前に文字通り涎をたらしてながら口の中へかきこんでいく。

「ヴィータ、そんなに急がなくても誰も取らへんよ」

呆れた声を出すもののその顔は笑っている。静かに見守るような暖かな笑みだ。

「んぐっ!?!? んんうっっ、んんんうっ!?!」

「ああ、だから言わんこつちやない」

喉に食べ物を詰まらせたヴィータの背を軽く叩きながらお茶をすすめると彼女は一気に飲み干した。

「ぐくっ、ぐくっ、ぐくっ、ぷはあ……死ぬかと思った」

「騎士が喉に食事を詰まらせて死亡。なんてことになったら笑い話にもならんぞ」

「うっ」

今度は別の意味で息が詰まった。

見ればシグナムは「主の前で何たる失態」と言わんばかりの目で睨んでいる。

いつもの彼女なら反論するが、明らかに無様をさらしたのは事実だったので

何も言えずに唸るだけだ。

「まだまだあるんだから、ゆっくりとな」

そういつて頭を撫でられてヴィータはコクンと頷くと今度はゆっくりと食べていく。

「ところでみんな、おかわりいらへんの？」

そこへ少女が笑みを浮かべながら訊ねてきた。

言われて騎士達は互いの顔と茶碗を見る。

見事に空で正直もつと食べたいという感情が思いつきり表情に出ている。

「お、おかわりお願いできますか？」

「……できれば私にも……」

「……………」

全員が全員とも頬をわずかに染め照れながら茶碗を差し出してくるものだから

二人はクスリと笑みをこぼす。

「はいはい、随分と食いしん坊な騎士たちだな」

文句ととられかねない発言をしつつ嬉しそうな笑みをこぼす少年。

「いいことやないの。」

これからあたしたちがおいしいご飯いっぱい食べさせてあげるさ

「かいな」

どん、と小さな胸を叩いてこれまた嬉しそうに笑う少女。
二人の主の笑みに、騎士達も口許を綻ばせた。

食事が終わり、二人が後片付けをしている後ろで騎士たちはなぜかそわそわとしていた。

思念通話や小言でなにやら言い合いながら、何かを考えているらしい。

ということを彼らのいう精神リンクでなんとなく分かるもののその詳細はさすがに分からない。

「どうしたんやみんな。別に手伝いならええよ」

「それ以前にお前ら家事不向きそうだな」

「…それは、確かにそうなのですが…」

（おいリーダー、早く聞けよ）

（分かっている！　だが今の今まで聞けなかったのだ。どう聞いていいものやら）

（かといって聞かないわけにはいくまい）

（しょうがないわ。私が聞きます）

「あ、あのー！」

シヤマルは、いささか緊張しすぎなていで少年に声をかけた。
不思議そうな顔を見せる少年。

「なんだ？」

「えっと、その…」

しかし何か言いにくそうにして、彼女は言い出せなかった。
そんな中「しょうがねえなあ」と愚痴りつつ軽い足取りで歩み寄っ
てきたヴィータが
少年の袖を引いて一言。

「ねえ、あたしはまだあなたの名前聞いてないんだけど」

「はい？」

言われて、目をぱちくりさせる少年。

「ヴィ、ヴィータ主に向かってその物言いはっ…」

シグナムの叱責の声は、しかもう一人の主・八神はやての声に遮
られる。

「あつ、言われてみれば……コウ兄一度も名乗ってない！」

少女の指摘にまさかと思って残りの騎士達の顔を見ると僅かな逡巡
の後、頷きで返してきた。

「マジで？」

と呟いたあと彼女達が目の前に現れてから今の今までのことを細かく思い出してみる。

「あっ……」

名乗った覚えがまったくなかった。

すぐにはやてに思念通話で「お前は!？」と訊ねるが、

彼女は少年が石田医師に嘘の事情説明をしている間に名乗っていたのだ。

思わず手で顔を半分隠す。恥ずかしさで真っ赤になってしまったからだ。

「す、すまん。すっかり忘れてた」

「あ、いえ。」

我らもいろいろあってお訊ねするのを忘れていました。申し訳ありませんでした」

二人の主。片方が男性。蒐集の拒否。自分達への大らかな対応。

今までの主と違いすぎる状況に彼女達は驚き最初に聞くべきことを失念してしまったのだ。

「いや、人にいろいろ聞いておいて、主だ責任だ言っておきなながら自己紹介を忘れるなんて失礼にも程がある。俺としたことが……」

「ごめんな。コウ兄って、しっかりしとるわりに変なとこ抜けとるんよ」

はあ、と軽いため息を吐いて、少年は騎士たちと正面から向き合う。

「俺は日野コウキだ。」

好きなように呼んでくれて構わない。

色々と遅れちゃったけど、とりあえずこれからよろしくな」

そう言ってコウキは手を差し出しながら、朗らかな笑みを見せた。

これが、のちに我らの運命を大きく変えることになる主との出会いだった

第2話予告

ザフィーラ「我らの無限の旅路においてそれはいつもの目覚めのはずだった」

シグナム「主に仕え、主の剣となり盾となつて闇の書を完成させる」

ヴィータ「それだけがあたしらの役割だった。

それが当たり前だったし、疑問や不満もなかった」

シャマル「けれど、新たな主たちが望んだことは、

多分きつと取るに足らない“当たり前”の日常でした」

四人「次回、魔法少女リリカルなのは異伝・第2話『夜天の雲に優しい夢を』に

ドライブ・イグニッションッ!!」

コウキ「どうかこいつらに何より楽しく優しい夢を」

第2話予告（後書き）

アニメっぽくいきたいので、こういう細かいことやってます。
最後の一言は次話を端的に言い表す言葉を話中から抜粋したもの。
これからもこのパターンで、やる。

私たちの手紙（前書き）

とりあえず完成してる六話までゆっくり投稿していく。
その後は、できてから、ってことで、よろしく！

私たちの手紙

これは夢の話だ

優しく暖かで幸せな夢

騒がしくて大変な日々の夢

だから

たくさん、たくさん抱きしめてあげよう、寂しい思い
をしないように

たくさん、たくさん頼ってあげよう、必要なのだ
と教えるために

たくさん、たくさん話をしよう、互いをもっと
知るために

たくさん、たくさん一緒にいよう

この夢を忘れないように

いつこの夢から覚めてもいいように

あたしは今でもときどき思い出す。
コウ兄と初めて会ったときのことを。

守護騎士のみんなと一緒に暮らすようになって我が家、
っていうてええんか分からんけど、この家もかなり騒がしくなった。
どうやらみんなもあたしと一緒にでかなりコウ兄を気に入ったようやし、

コウ兄もみんなのお世話にてんてこ舞い。

正直いうと二人つきりになれる時間が減ってちよ寂しいけど、
ヴィータやザフィーラ、シグナムにシヤマルがおる。

それはそれで楽しい。みんなしてコウ兄イジメとるときはとくになだけど、それでも、あたしはあの時のことを思い出す。嬉しくても楽しくてもうまく笑えんかったとある男の子の顔を。

今あたしが住んどるこの家は元々はコウ兄が家族と住んどった家や。でもコウ兄の両親が亡くなったあとこの家は家財道具一式そのままで売りに出されてしもうた。親戚に引き取られとったコウ兄はそこでの生活になじめられへんかったんやつて。

で、あたしはあたしでちっちゃい頃の事故で両親亡くして足もこんな風になってしもたんやけど

運のいいことにお父さんの遺産を管理してくれてるおじさんが引き取つて育ててくれるいうて、

家まで用意してくれたんや。それがこの家やった。

けど、もともと外国に住んどるおじさんは仕事の都合でどうしてもこっちにくることが

できへんようになってしもたんよ。

足の不自由なちっちゃいあたしを一人暮らしさせるわけにいかへんから

おじさんは自分が他に世話をしている男の子と一緒に暮らさないかって。それがコウ兄。

後から聞いたんやけど元々この家を買ったのもコウ兄の家をそのまの形で残すため

この家であたしが暮らせるようになったのは

おじさんからそれを提案されたコウ兄が快諾してくれたおかげ。

あたしとの同居もコウ兄はあたしがいいというのなら、つて

何の縁もゆかりもないあたしの保護者代わりになってくれた。

最初会ったとき15、6歳に見えた。

ホンマは12歳ぐらいでかなり大人っぽかったのをよく覚えてる。

けど

実際頼りになる人やった。優しくて、気遣いができてそのうえ博識で家事もうまい。

けど

体もけっこう鍛えてあって、重い物を軽々と持ち運べるからお米を買うのが楽になった。

けど

それに家でも一人じゃないっていうのは、あんなにいいものやったんやね。

けど

けど、笑顔を浮かべるのがすごくへたくそだった。笑ってはくれるんやけど、顔だけの話や。心から笑ってくれるようになったんは最近。それでも、どこかぎこちないものがあつたけれど。

今になって思い返せば最初に会った時からあたしはずっとコウ兄が怖かったのかもしれない。

コウ兄との毎日は楽しい。ホンマに楽しい、はずなのにとっても怖い。

同じ時間を共有して、一緒にご飯作って、一緒に食べて、遊んで。一緒にいればいるほど、得体の知れない恐怖を感じていく。

うまく言葉にはできへんのやけど、

コウ兄はいつかあたしの知らんところに行ってしまうような。目の前で消えてしまうような気がしてしまつんよ。

杞憂であつてほしい。けど、不安は消えへん。

それはみんながこの家に来た今日という日になつても全く変わらんかつた。

むしろひどくなっている気さえする。

もしかしたらコウ兄はあの日から、

うつん、もっと前からなんにも変わられへんかつたのかもしれない。

ねえ、おじさん。あたし、どうしたらいいんやろか

守護騎士たちの出会いからもう約二ヶ月。先に感想を言っておこうと思う。

疲れました

もはやその一言にすべてが集約されているといっても過言ではない濃密な二ヶ月。

あいつら、ヴォルケンリッターが俺の前に現れてから流れた月日。とにかく、本当に、大変だった。

何がってそれはもちろん俺が年頃の男で、自分たちが女性だということ

まったくこれっぽっちも自覚していなかったこと。

あれはいつのことだったか。

夕食の後片付けをすませて一人風呂でくつろいでいると「お背中を流しましょう」と

シヤマルがさも平然とさも当たり前のように入ってこようとして寸前で扉を押さえて阻止した。

あの時俺は自分でも驚くほどのものすごい俊敏性を見せたと思う。

あとで聞いたが、はやての入れ知恵だったらしい。

あいつは前から俺をからかうことに日々の楽しみを見出しているふしがあった。

騎士のみんなが家族として増えたことでそのネタがどっと増えたのである。

なにせ騎士たちの4分の3は女性なのだ。

それからの日々の苦労は推して知るべしである。というか本当に察してくれ。

なんだかこの二ヶ月は叫んだり走りまわったり赤面したりしてなんかどっと疲れた。

けど不思議なことに不快な疲れではなくて、

昔あの家の人たちと駆け回ったころに感じた心地よい疲れ。
だからだろうか、

最近はベッドに入って瞼を閉じるとそのままスツと意識が闇に落ちることが多くなった。

逆にあの安堵感がなくなってしまったのが、寂しいといえちよつと寂しい。

そして久しぶりに大寝坊してしまって、慌てて起きたらシャマルが朝食を作ってくれていた。

味のほうは、明日から、いや今日から徹底的に仕込んでいこうと俺とはやてに決意させるほど。

つまりあれだ、要修行。

他の面々にもかなり不評で、シャマルはけっこう落ち込んでいたけど。

しかし俺が見ている限り、
シャマルが一番この世界への順応性が高く家事周りの手伝いをよくしてくれる。

他の面々に比べると結構筋がいい。

あくまで他と比べると、というところを強く主張しておくが。

突然四人の男女と暮らし始めたことへのフォローを隣近所にしてくれたのもシャマルだ。

なんというか、ヴォルケンリッター参謀役の名はダテではない。

あとは、まあ、もう少し俺を年頃の男の子だと理解した言動をしてほしい。

いや、あれははやてと一緒に分かっていてやっている節がある。

むしろ俺をからかって遊んでるのかもしれない。厄介だ。

ちなみにそういつときシャマルをいさめてくれるのがシグナムだ。

さすがリーダー。といたいたいが、シャマルと論戦を繰り広げていくうちに

なぜか話がいつもおかしな方向にいつてしまう。

いわく「今宵、主の寝所を守るのは私だ」とか

「今日は私に料理を教えていただく」とかなんとか。

言い方は丁寧なのだが、実はシャマルが常に言っていることと大差なかったりする。

これにもはやての影が見える。

真面目で実直な彼女だが実は意外に人をからかうことが多く油断している痛い目にあう。

主にいたいけな少年の心が。

そのうえ食通で和食系の料理の味付けにはけっこううるさかったりする。

だから多分、シャマルと意見衝突が多いのは

彼女の料理がトラウマになっているのだろうと俺は分析している。

うん、食べ物の恨みは恐ろしい。俺も気をつけて調理しなくては。

そうやって誠心誠意作った料理が一番おいしそうに食べてくれるのはヴィータであの子が一番感情が顔にでる。

嬉しいときは笑うし、不満があると顔を膨らますし、

俺やはやて以外に子ども扱いされると怒るし。

よく俺の後ろを何をするでなく付いてくる。

何となくあの子と通じる物があるから会わせたら仲良くなるかな、とも感じている。

意外というと本人に怒られそうだが

我が家では何かしら起こる騒動を傍から見ていることが多い。

「ああ、またやってるよ」とか「いい大人が何を…」といった感じで。

しかし挑発されるとすぐに乗ってしまふあたり見た目どおりの性格である。

ちなみにこれまた本人にいうと渋い顔をされそうだが、

ザフィーラは意外に騒動に巻き込まれやすい。
一番の常識人なのがいけないのか、止めに入って
シグナムとシャマルの集中砲火を浴びることも少なくない。
また同じ男性ということもあって俺が何かあるたびに
ザフィーラに相談したり、一緒に出かけたりすると
その後、はやてをも含めた女性陣に囲まれてしまつらしい。
すまん、許せザフィーラ。

そう、一番驚いたのがはやての変化だ。
今までは病院と図書館、スーパーぐらいしか出かけなかったのに
あちこち積極的に出かけるようになった。
シグナムたちに町を案内する意味もあるのだろうが本人がけっこう
楽しんでる。

それはいい。
いいんだけど今まで以上にきつく露骨な逆セクハラを受けることが
多くなった気がする。

前は俺が一人で出かけても何も言わなかったのに、
みんなと一緒にになって問いただすようになってしまった。
そのくせ誰かと出かけるとへそを曲げるのである。
そのあとのご機嫌とりが非常に大変。
まあ、そんなこんなで俺とはやての生活はかなり、
すごくかなり騒がしいものへと変わっていった。
もっと具体的にいうと

「はあああつー！」

「くっ、ああつ……い、痛あ」

こんな感じでシグナムにぶっ飛ばされている。

「ああ、くそ。今のはいけると思ったんだけどな」

今日もまた一本も取れなかったのが悔しくて、わりと広いうちの庭に寝転がる。

「甘い、甘い。あんなんでシグナムに当てようなんて、まだまだだぞ、コウキ」

と、なぜかどこか嬉しそうにしながらタオルをくれるヴィータ。体を起こしてサンキユ、と受け取り、顔の汗をぬぐう。

「初撃を弾いて突っ込んで体勢を崩せれば、

と思っただが……シグナム全然慌てないし、斬り返しすげえ速いし。

一本を取れる日はいつたいつになることやら……」

はあ、と溜め息を吐く。

最近こんな調子で俺はシグナムかあるいはザフィーラと剣術や武術の稽古をしている。

といっても二人とも別に何かしらの流派を学んでいるわけではないし、

人に物を教えるのは自他共に認めるほど苦手だという。

なので、やっていることは単なる木刀や肉体のぶつけあいではない。

元々は俺が日課的にやっていた体を動かすだけの鍛錬だったのが、折角武芸の達人がいるのだから教わろうと思ったのが最初だ。

それからは用事が無ければわりと毎日のようにどちらかと模擬戦もどきをやっている。

といっても百戦錬磨の達人である二人に、

手加減されているとはいえ多少齧っただけの俺が敵うわけもないのでいつもこんな感じで負ける。しかし相手の怪我を心配しないで全力でやれるのはやりやすいからいい。

「そう悲観したものでありませんよ。

主コウキの腕前は日に日にあがっています。

私が師では少々不安でしたが目に見えて成長してくれるのは嬉しい限りです」

と、シグナムは本当に嬉しそうな微笑を浮かべる。

「そ、そうか……シグナムにそう言われると俺も自信がつく……」

くそっ、今のが一番効いた。

内心うるたえながらも早口で言葉を返す。

最近は分かってきてくれたのか。

自分が女性で俺が男性であることを理解した行動をしてくれるのはありがたい。

のだが、冷静に考えるとそもそもシグナムもヴィータもシャマルも美少女である。

一般的な基準は知らないが、少なくとも俺はそう思う。

そのうえ俺は女性に免疫がまったくないというダブルパンチ。

はやてとも打ち解けたのは実をいうとかなり最近の話でそれまではけっこう大変だった。

そんなもんだから、こう不意打ち気味に微笑まされると顔が真っ赤になっってしまう。

そしてそんな俺をからかってくるあの“風のおくま”たちは蒼狼と共に買い物に出ているのでちょっと安心している。

「ふ、ふ、ふ……」

びくっ！

と、体が先に事態を察知して反応するが時既に遅し。

「あらあらあら、真っ赤になっちゃって……コウキちゃんたら可愛
いんだ」

いつのまに帰ってきていたのか。

我が家のからかい魔もとい風のおくま・その2は
背後から抱きつきながら真っ赤になっている俺の頬をつつく。
ちなみに何か柔らかいものが背中当たっている気がするが、
全力で意識の外に締め出している。

だというのに。

「ああ、そうやコウ兄知つとるか。

シヤマルのおっぱいはな、触るとナイスな感じなんやで……」

風のおくま・その1が笑顔でそれすらも許してくれない。

「……おかえりザファイラ、買い物はどうだった？」

ならせめて話だけでも、と

もはや我が家唯一の俺の味方といっても過言ではない蒼狼に言葉を
かける。

「ただいま戻りました。

ええ、言われたものはすべて予算内でそろえることができました」

「お釣りは全部今日のおやつに変わっちゃいましたあっ！」

ああ結局あなたが喋るのね。

とても嬉しそうなどこかしてやった感のある声と共に

背中から意外とたくさんのお菓子が出現した。

「今日の」といわず今週分にはなりそうだ。

ああ、念のために多く渡しておいたのは間違いだったかなあ。

と青い空を眺めてみる。

というかはやて、普段無駄遣いがどうのこうのうるさいお前がなんで止めない。

けど、はしゃいでいるのはシャマルとはやてだけではないのは気のせいではない。

育ち盛りの紅の鉄騎は大喜びし、

好物の和菓子の誘惑に負けてしまった烈火の将の姿が容易に想像できた。

蒼き狼だけが俺の目前で申し訳なさそうに顔を俯かせていた。

気にすんな、お前のせいじゃない。

けどいいかげん風の癒し手は当てているものを離してはくれないの
だろうか？

場所をリビングに移し、俺達は三時のおやつとしゃれ込んだ。

シャマルが買ってきたのは近くにある甘味処のお持ち帰り品だ。

これがなかなかいける。体を動かしたあとというのもあるんだろう
が、

この時間のおやつとしては定番になりつつある。

とくにシグナムは和風の食事を好むからか和菓子も好きで、

今も一口一口丹念に味わっている。

俺も一口、一口丹念に味わっているが理由はシグナムとは違う。うちの連中は俺はやてが作る食事に概ね満足してくれている。それは素直に嬉しい。

というか人に料理を振舞うのがこんなに気を使いこんなに楽しいものだとは思わなかった。

だからこういふときのおやつも多くは市販品ではなく俺が作ることが多い。

はやては料理はうまくてもお菓子系が苦手。

かくいう俺も作れるのは主に洋菓子だけである。

昔とある達人が作っているのを見ていて、

それを思い出して真似ているだけなのだが見本がよかったのか評判がいい。

しかしシグナムが好む和菓子は隠れて特訓してる最中。味もまだまだである。

実をいうと洋菓子もその達人に遠く及ばないから作るたびに敗北感がぬぐえない。

だからこうして味の研究をしているのだが。

うーん、レシピはあれでいいと思うのだが何が足りないのだろうか？

「…主、どうかしましたか？」

あら、頭の中だけで唸っていたつもりだったが

現実でも唸ってしまったたらしく皆が怪訝な顔で覗き込んでくる。

「へっ、あっ、いやなんでも……シグナム、また主って呼んでるぞ」

「あっ、すみません……」

しまった、という顔で謝るシグナム。

話題を逸らす目的もあるが、俺は基本的に俺を主と呼ぶことを禁止している。

はやてもその点は同じだ。

理由はまあ、他人行儀のような気がするし

俺達だけならいいのだが外に出ているときも「主」とか呼ばれると周りから変な目で見られることは間違いないのである。おもに俺がその辺りは全員理解してくれていてヴィータやザフィーラは呼び捨て。

少し不本意だがシャマルはちゃん付けで呼ぶ。

しかしシグナムだけは呼び捨てはもちろん、

ちゃん付けなんてもつてのほかとうまく呼べないのである。

どうも彼女はかしこまった喋り方が普通で、騎士道精神に忠実なためか

主である俺達を呼び捨てにどうしてもできないようなのだ。

一応現在は「主はやて・主コウキ」という中間点で頑張っている。それも正直微妙なのだが本人が頑張っているのでそれは追求しないでおこう。

「…………ウキ、コウつ、キ…………コウ…………」

難しい顔をしながら小声で俺の名前を呼び捨てにする練習を始めたシグナム。

その頑張りとし生真面目さが苦笑を誘う。

「しっかりしろよ、リーダー」

ヴィータもニタニタしながらここぞとばかりに攻める。

「黙っているヴィータ、集中できん」

「集中しないと呼べないというのも問題だぞ」

「うっ……」

おお、意外だ。ザフィーラが止めを刺した。痛いところ突かれて完全に固まっている。

ありゃしばらく悩むぞ。真面目すぎるからなシグナムは。だというのに。

「そうよね。」

いくら古い騎士だからって戦うしか能がないってのはどうなのかしらん」

シヤマルさん、何も追い討ちかけなくても。

「……………」

唸りながらも沈黙する剣の騎士。

完全勝利したからか。シヤマルはご機嫌な様子で残っているお菓子を頬張る。

それをどこか恨めしそうに見ていたシグナムはハツとした表情を見せると笑みを浮かべた。

あつ、なんかすごく嫌な予感。

「そうだな、たしかに私は戦うしか能のない騎士だ。」

だが、戦闘に全く向かない騎士というのはどうなんだろうな、湖の騎士よ」

「なっ！？ わ、私は癒しと補助が役割よ。」

それにマスターであるはやてちゃんやコウキちゃんのお世話だっ

「てしてるわ！」

「ああ、お前の治癒と補助の力は必要だ。

だが、主たちの世話を本当にできているのか？

炊事は絶望的で、最近は慣れてきたようだが

洗濯や掃除はまだまだ主たちが見ていないと満足に出来ていない。

そんな状態で世話をしているとはよく言えたものだな」

「うつつ、で、でもそんなのシグナムだって一緒じゃない！」

「確かに。だが私には主コウキへの剣の稽古や主はやての警護などもしている。

何もできていないわけではない」

ふふっ、と勝ち誇った笑みを見せるシグナム。

しかしそう簡単に引き下がるシャマルじゃない。

にしても、いつもこのパターンだなこいつら。

「なによ、警護なら私だってしてるわよ。

それに稽古っていうけどただ相手してあげてるだけじゃない。

稽古してるっていうならもっとちゃんと教えなさいよ」

「言葉で伝えられるものなど真の武術ではない。

実戦でのみそれを伝えられる。お前には分からないだろうがな」

「ふんっ、ただ教えるのが下手なだけじゃない。

第一私だって魔法教えてあげてるんだから、できてることは同じよ！」

なるほど。

どっちも家事はできていなくとも警護はしていて、
剣と魔法をそれぞれ教えているのなら立場は一緒か。

その事実を指摘され、言いよどむシグナムを好機とみたのか。
シャマルは次から次へと攻め立てる。

無論、言葉で。やはり口論だと僅かにシャマルが上だな。

シグナムは完全に押されている。

けどな、シャマル。毎回のことなんだからいいかげんパターンを覚えて欲しい。

なにせシグナムは劣勢になると最終的に。

「言ったな！ 今日という今日は我慢ならん。

いつぞやの借り今日ここで返してやるう！」

と力技で押し切ろうと立ち上がって自身のアームドデバイス、
炎の魔剣「レヴァンティン」を起動させる。

ちなみに「いつぞやの借り」はシャマルの最初の手料理のことである。

食い物の恨みは以下略、である。

「返せるものなら返してごらんなさい。

サポート役だからってなめてると痛い目にあうわよ！」

同じく立ち上がりリビングまでにらみ合いながら移動。

ソファアを挟んで対峙する二人の騎士。

シャマルの指にはもう起動を終えている彼女のアームドデバイス、
風のリング「クラールヴィント」が輝いている。

いやいや、待て、待て、待て！

あいつらデバイスまで起動させて、家の中で本気でやりあつつもりか！？

今までの他愛のない微笑ましい（ということにしてくれ）言い争いならまだしも

本気でベルカの騎士に暴れられたらこんな家数秒で崩れ落ちるぞ。

っーかはやて、ニコニコしてないで止める。

『女の喧嘩には手も口も出すな。出すときは命を懸ける』

と教えてくれた父さんの言葉が今なら分かる。

しょうがない。

すさまじく危険だが、二人の間に立つて仲裁するしかない。本気で命がけで。

と、腰を浮かせたところで場を支配していた空気が急に変わった。

今までは一触即発。

闘気だか殺気だかよく分からないものをぶつけあっていたそれがふっと消えた。

見れば、二人は愕然とした表情で自分の体を見下ろしている。

思わず首を傾げる。

それは「またか」と傍観しようとしていたヴィータやザフィーラ。

笑顔で観戦しようとしていたはやても同じだった。

「なんたることだ。私としたことが……」

「一番最初にしなくちゃいけないことを忘れてたなんて……」

シグナムは苦悶の表情を。

シャマルは青ざめた顔をこちらに向けて同胞の名を呼ぶ。

「ヴィータちゃん」

「ザフィーラっ」

「な、なんだよ？」

「どうした二人とも？」

訝しげにしながらも続く言葉を待つヴィータとザフィーラ。

「私たち、二人からまだ……」

「騎士甲冑をいただいていたいなかった！」

ん？

はて、騎士甲冑？

と俺とはやてが首をかしげた次の瞬間。

「あああああっつ！！！！」

という非常に珍しい二人の大合唱を聞くことになった。

このあとみんなの騎士甲冑のデザインをすることになって大変だったけど、

まあそれは別のお話である。

だけどそこで思い出したということはシャマル、シグナム。

お前ら甲冑着込んで本気でやりあうつもりだったのか！？

とは、あまりに恐ろしくて聞くことはできなかった。

「と、こちらは騒がしくも楽しい毎日です。
ではそちらもお元気で。親愛なるグレアムおじさんへ、と」

数日前の出来事を思い出しつつ手紙を書き終えて、ペンを置く。
念のため誤字脱字がないか確認してから封に入れる。

俺は月に一回、資金援助やこの家の法的な管理をしてきている父の友人である

グレアムおじさんへ近況報告の手紙を書いている。

ちなみにこれははやても一緒にそれぞれ別々に書いているものを月に一回書いている。

最近あったことを思い出しながら書くのだが、

最近を書く話題に事欠かないので気分的には楽だ。

魔法とか騎士とか、そっち方面を省いて書くのでそれはそれで苦労しているが、

書く話題がない苦労よりは充実した苦労だ。

そして手紙に同封する先日撮った写真を見る。

初めての写真というためなのかみんな表情が硬くて見ると自然と頬が緩む。

「きゃあああっ！」

「わっ、シャマル何してんだよ！」

「いっ、めんなさーいっ..」

「.....」

そこへリビングから各種の悲鳴と怒号が聞こえて思わず絶句する。
あいつらは俺に手紙を出しに行く時間すら与えないつもりなのか。

「ったくしょうがないな。おいっ、こんどは何をやったんだ..」

わざとらしい呆れた口調をしながら写真と手紙を置いて、騒ぎの中
心地へと向かう。

実をいうと自分でも何が可笑しいのかわからないのだが頼はずっと
緩みっぱなしだった。

シヤマルの場合

あの子ら。

闇の書の守護騎士である彼女達が新たな主

「八神はやて」

と

「日野コウキ」

を得て、約二ヶ月。

主たちの方針ゆえ驚くほどの穏やかな日々を過ごしている騎士達は意外にもその生活がいたく気に入っているようだ。

そして何より、新しく主となった優しく暖かな笑顔をくれる少女と大らかで少し厳しい少年を皆心より慕っている。

二人の人間が同時に主になることは異例ではあったが、両人共闇の書の主としての責から逃げようとせず、

それがもたらす巨大な力も欲せず、ただあの子らと家族であることを望む。

そこに裏はなく、ただ真っ直ぐで暖かな想いだけがあった。

それこそが騎士達の心を掴んだのだらう。

戦いの日々しか知らないあの子らにただの、当たり前前の日常を与えた我らが主たち。

今日もまた日常と呼ばれる一日が始まる。

この家の朝はすごく早い。

なにか早いつて、朝食当番の彼が起きるのがすごく早い。

私がいくら早起きしても、

まるでそれを見越しているかのように彼はキッチンに立っていて

「おはようシャマル」

と、いつも笑顔で言葉をかけてくれる。

それを見るたびに

「たまには寝坊してください」とか

「朝は私がやります」という台詞が出てこなくなる。

「はい、おはようございます。コウキちゃん」

だから私も満面の笑みで挨拶を交わす。

そして、お気に入り＆お揃いのエプロンを着て、コウキちゃんのお手伝い。

といつても実際はお料理の指南をされているだけだったりする。

恥ずかしい話だけれど、私たちに自炊の経験はほとんどない。

なにせ元がプログラムの魔法生命体である私たちに実質食事は必要ない。

もちろん外部からエネルギーを摂取することはあったけど

あれを料理や食事だというのは二人が作ってくれる料理への冒瀆よ！
というのが、私たち守護騎士の共通見解。
だって二人のお料理は美味しくて暖かいんだもん。

ただどずっとお世話になりっぱなしというのは騎士としてどうなのか。

と思っ手伝いをするようになったけど、
家事をやったことのない私たちにとって炊事・洗濯・掃除はある意味最強の敵。

焦がした鍋・ダメにした衣服・壊した調度品は数知れない。

そのたびにコウキちゃんは、
なにがどういけなかったのかを決して感情的にならずに指摘して注意してくれる。

そう、注意するだけで怒らない

今までの主は失敗をするとすぐに叱責してきた。

それは当然のこと、当たり前だと思っただけ

コウキちゃんはなぜか「失敗」には寛容で同じ失敗をしないよう注意までしてくれる。

それが、初めはとても不思議だった。だから私は一度だけ尋ねたことがある

「どうしてマスターは私たちが失敗をしても怒らないのですか？」と。

あの頃はまだ“コウキちゃん”とは呼んでなかった。

マスターは少し意外そうな顔をして、

けどすぐに「お前らの失敗は怒るほどのことか？」と、逆に聞き返してきた。

それに返せる言葉を私は持ち合わせておらず、
どう返答すべきか悩んでいると主は察して続けて仰った。

「失敗は誰でもする。」

それが命とかに関わることなら怒るべきだろうけど家事なんてい
ざって時は

俺がすればいいだけの話だしその俺だって最初から何でも出来た
わけじゃない。

ましてやお前達は違う世界から来たんだ。できなくて当然だよ。

それを分かっている俺がお前達の失敗に怒るのは理屈に合わない
し理不尽だ」

うんうん、そうだそうだ、と自分で言っただけで納得している様子
の主。

どうも口に出して言うまで自分でよく分かっていたいなかった
ようだ。

その仕草がどこか愛らしくて、その想いが嬉しくて自然と笑みを浮
かべてしまった。

でも、当然だけどマスターは何をしても怒らないというわけでは
ないの

「あつ、こらっシャマル！」

物思いにふけっていた意識がコウキちゃんの声で我に返る。と同時
に痛み。

「えっ、イタッ！ ああうっっ、指切っちゃいました……」

「余所見なんかしてるからだろうっ、刃物を持つてるんだからちゃん

と集中しろ！」

こんな風にコウキちゃんは時々感情的になって怒鳴る。私たちが自分の不注意で怪我しそうになったり実際になったときコウキちゃんはすごく怒る。それを、どうして私たちはこんなに嬉しく思ってしまったのか。不思議でしようがない。

「ああ、ほら血が出てる。んっ……」

「コッ、コウキちゃん!？」

それで、その、そういうときのコウキちゃんは普段と違って、ちよつと強引で大胆になる。

いつもなら恥ずかしがって触れることもできないのに、その手は私の手をとって、血が出た指は、えっと、その、食べられています。

「……っ!？」

あっ、っ、ごめんっ！

つい癖で自分の指切ったときと同じことを……」

一拍おいて、自分のやっていることに気付いたコウキちゃんは脱兎の如くのスピードで飛び退いた。

いつも思うんだけど、こういうときの動きはすごくすばやいなあ。もうちよつと遅ければ色々とできるのに。

などと考えつつも真っ赤になった我らが主に微笑みかける。

「いえ、お気になさらず。コウキちゃん優しく舐めてくださいましたから……」

「そ、そういう言い方やめろ。だいいち舐めたんじゃなくて吸ったんだ…っ」

言って、自ら墓穴を掘ったと自覚したのかますます顔を赤らめる。うふ、可愛い！

「そ、そんなことより早く朝食の準備だ。急がないとみんな起きてくる…」

私の視線に耐えられなくなったのかコウキちゃんはソッポを向きつつコンロの前に。

その後ろに立って「うっ、うっ、うっ」と真に入った泣き真似をする。

「私の指を吸うことは“そんなこと”なんですね。

あんな恥ずかしいことされちゃったらシャマルもうお嫁にいけません…っ」

「なっ、なにを!？」

動揺一瞬、その隙をついて背後から羽交い絞め。

私と同じくらいの背丈のコウキちゃんの頭にちよこっとなぐりキス。

「だから、コウキちゃん。私をもらってくれます?」

「ばっ、ばか、お前そういうことばっか言ってる俺をからかって楽しいのか!？」

抱きしめる手に響く荒々しい心臓の鼓動。ふふ、動揺してる、してる。

「というか火や包丁を扱ってる時にふざけると危ないと…」

腕に力を込めて、コウキちゃんの背中に体を押し付ける。

「っっ!?! シャマル当たってるっ、当たってるから!」

「うん、何が当たってるんですか?」

知らぬ存ぜぬで聞き返す。

うわあ、真っ赤っかだ。コウキちゃん茹で上がったちゃいそう。

こっぴどいような反応を返してくれるから、やめられないのよね。

「わかったっ、俺の負けだ。だから要求はなんだ!?!」

もがきたいけど、もがけば私と触れちゃうから

もがくにもがけないコウキちゃんはついに敗北宣言。

私の目的、それは、

コウキちゃんのか・ら・だ

なんて言ったらさすがにオーバーヒートして気を失っちゃうかもしれないから

残念だけどまたの機会で。

「…今日の魔法の授業マンツーマンで、いつもより長ーくね!」

「わかった。わかったから離れてくれ!」

「はい！」

名残惜しいけどこれ以上は本当にコウキちゃんの心臓に悪そうだから止めとこう。

私から解放されたコウキちゃんは敗北感いっぱい顔で崩れ落ちる。

「くそつ、毎回このパターンだ……修行が足りん」

「うふ、私で修行しますかコウキちゃん？」

ニコツと満面の笑みで顔を至近距離で覗き込む。すると。

ズザザツと後ろ向きにすばやく後退する。ホント、素敵な反応してくれるわ。

「……………勘弁してくれ……」

そう弱々しく訴えるのが限界の我らがご主人様でした。

夕食後いつもより長く濃密な魔法の授業を終えてお風呂に入りながら一息つく。

コウキちゃんも一緒にどう？

と誘ったけど当然断られた。分かってはいたけど残念。

「あの慌てっぷりが可愛いんだけどねえ……………」

と思い出しながら笑う。

授業中にも真っ赤になったコウキちゃんの顔を思い出して笑みが消

えない。

魔法の授業が始まったのはこの暦で2月に入ってすぐのこと。コウキちゃんは突然「魔法を教えてほしい」と頼んできた。

“巨大な力”を持つことをあまり快く思っていないコウキちゃんがそう言つて来たことに

疑問はあつたものの普段から教えてもらつてばかりな私たちとしては逆に教えられることがあるのが嬉しくて、魔法を教えることにした。

この世界でただ穏やかに過ごすだけなら必要のない魔法だけど、私たちはいわば追われている立場。

あんまり考えたくはないけれど管理局と対峙したとき、

コウキちゃんが魔法を使えるか使えないかはかなり重要になってくるはず。

ただコウキちゃんには何があつても矢面には立つてほしくないから、癒しと補助というバックアップ系の魔法を教えることになった。

はやてちゃんも「コウ兄が習うならあたしも！」と一緒に勉強することに。

だけど、肝心要のコウキちゃんの腕前が大問題になった。

魔法の知識や技術、原理といったものはすんなりと理解してくれた。魔力制御も上手だった。

けれど魔法の実践となるとこれが、全くつ、全然つ、うまくいかないの。

はやてちゃんは制御でちよつとつまづいたぐらいで

そのあとはすんなりできるようになったのに

コウキちゃんは授業中貸しているクラールヴィントのサポートがなくては

初歩中の初歩の魔法すらできない。

その代わり、というより変な才能というべきなのか。

デバイスのサポートがあればそれこそ息をするかのように自然に魔法が使えるようになってしまふ。ホント不思議。だからたまにコウキちゃんが一人で出かけるときなんかは用心のために誰かのデバイスを貸すことになった。

これもホント不思議なんだけど、シグナムのレヴァンティン、ヴィータちゃんのグラーファイゼンとも相性がいい。

本当にコウキちゃんは『デバイス』というものと相性がいいんじゃないかと思う。

これならあの子とも。

と思ってしまうけど蒐集を望まない以上あの子と出会うことはない。それは少しあの子に悪い気がするけれど、きっとあの子も分かってくれると思う。

だからあの子のことはコウキちゃんにはもちろんはやてちゃんにも内緒にしておこうとみんなで決めた。

知っちゃうとすっごく気にすると思うから。

「二人とも、優しいから……」

けどそこが問題だとも思う。

とくにコウキちゃん。

だってわりと誰にでも優しいから、私としてはライバルが多くて困る。

はっ、そういえばあの子も女性型だったわ！

うわぁ、意外なところにもライバルがいた。頑張らないと！

よしっ、と気合いを入れながら湯船からあがって、体をふいて脱衣所に。

バスタオルを巻いてふと目に映った姿見の前で

くるりと回ってそれらしいポーズを決めてみる。

「けっこう自信あるんだけどなあ、コウキちゃんが襲ってきてくれるぐらいには」

何が足りないのか。けっこう真剣に考えてみる。

ヴィータちゃんには勝ってると思う。シグナムには、と考えて、軽い敗北感。

「うつつ、大きな差ではないけれどやっぱり男の子っておっきな胸の子がいいのかしら？」

あつ、今度みんなの前でコウキちゃんに聞いてみよう。

ふふ、真っ赤になってしどろもどろになる彼が目には浮かぶ。

パジャマに着替えて、脱衣所を出る。前にタオル姿で出たときは面白かったな。

何か飲もうとリビング横のキッチンへと向かうとそこにはシグナムの姿が。

思わず、胸元を覗むように見えます。

あれが私にあれば……結果は変わらないだろうけど、女のプライドの問題よ！

「な、なんだ？」

あつちからすれば突然睨まれて訳が分からず困惑している。

「な、なんでもない。それより、コウキちゃんたちは？」

いつもならまだTVを見ている時間だと思ったのだけれど。

「ああ、どうもお疲れの様子だったのでな。今日は早めに眠るそう

だ。

戸締りは私がもうやっておいだから、
お前には明日の朝の仕込みや準備が出来ればしておいてほしいと
のことだ」

ヴィータちゃんはやてちゃんと一緒に寝てしまったそうだ。

「そっか、今日は頑張っちゃったから、しょうがないか。
分かったわ、出来るだけやっておく」

けっこう長い時間いくつも魔法を使ったのを思い出し、
コウキちゃんからの頼みごとを受ける。
その返答を聞いて、シグナムは笑みをこぼしつつ

「やりすぎて微妙な味のものを出すなよ」

なんて言いながら自室に入っていった。

唸る私だったが、相手がいなくなつては不毛なこと。

私は出来るかぎりの仕込みをしてから部屋に入ってベッドにもぐり
こむ。

正直にいうとコウキちゃんと一緒に眠りたい。

変な意味じゃなくて、彼の寝顔を見ながら、温もりを感じながら眠
りたい。

けどそれをしてしまうと本当に困って悩んで頭を抱え込んでしまっ
たろうし、

今日ははやてちゃんもヴィータちゃんに取られちゃった。

仕方ないから我慢、我慢。でも、だから眠るちよつと前は少しだけ
思つた。

「夢の中でも会いたいな……」

そして明日も二人の笑顔が見れますように。
そう願って、私は瞼を閉じた。

ザフィーラの場合

あの子ら。

闇の書の守護騎士である彼女達が新たな主

「八神はやて」

と

「日野コウキ」

を得て、約二ヶ月。

主たちの方針ゆえ驚くほどの穏やかな日々を過ごしている騎士達は意外にもその生活がいたく気に入っているようだ。

そして何より、新しく主となった優しく暖かな笑顔をくれる少女と大らかで少し厳しい少年を皆心より慕っている。

二人の人間が同時に主になることは異例ではあったが

両人共闇の書の主としての責から逃げようとせず、

それがもたらす巨大な力も欲せず、ただあの子らと家族であることを望む。

そこに裏はなく、ただ真つ直ぐで暖かな想いだけがあった。

それこそが騎士達の心を掴んだのだろう。

戦いの日々しか知らないあの子らにただの、当たり前前の日常を与えた我らが主たち。

今日もまた日常と呼ばれる一日が始まる。

「コウ兄はザフィーラがお気に入りやなあ」

「ちょっとザフィーラ、さっきコウキちゃんと何話してたの!？」

「いいよなザフィーラはどこでもコウキと一緒にで」

「私も変身魔法で犬に姿を変えれば……」

俺は犬ではない、狼だ!

いや、そういうことではないか。つい。

最近、主はやてと同胞から羨んでいるのか妬んでいるのか判別しづらいことを言われるようになった。

実際は両方なのであろう。

皆、此度の主たちに並々ならぬ信頼と好意を寄せている。

とくに異例ともいえる男性の主である日野コウキへは当初困惑が強かった皆も

今ではまるで競うかのように彼の傍にいようとす。

彼の言によれば主はやても我らが現れる以前に比べてそういう所が強くなっているとのこと。

しかし、当のコウキ本人は俺と一緒にいることが多い。

どうもコウキは女性に慣れていないらしい。

年頃の男の子として異性に対して普通に興味はあるのだろうか、同性といたほうがなにかと落ち着くのだろう。

俺もその辺りは気遣って、できる限り人型の姿で一日を過ごすようになっている。

そうしないとコウキは慣れない異性に囲まれて右往左往するだけの毎日になっていただろう。
今現在が限りなくそうという状況だともいえなくもないが。

コウキも同性である自分には色々といいやすいのかたびたび色々な相談を受ける。

9割が俺を除いた守護騎士三名ともう一人の主に関する事なのは本人たちには内緒だ。

けれど表情を見るかぎり嫌がってはいない。むしろ楽しそうにコウキは語る。

この生活が始まった当初はそれが少し不思議ではあったが、その疑問はわりとすぐに解けた。

日野コウキという少年は、この家で主はやてと同居を始める前まで天涯孤独に近い境遇だったらしい。

幼き日に両親を失い親戚からは疎まれ援助は受けていたが一人で生活していた。

だからなのだろう。
このまだ幼いといってもいい歳の主はこの家の騒がしさをどこか喜んでる。

そして我らが一人にならないようにいつも気遣ってくれているのだ。俺にいろいろと相談したり、俺を連れてどこかに行くのも、理由の半分はそれだと俺は睨んでいる。

しかし、そこで一つ疑問がわいてくる。

コウキと主はやてだけが住むには広い家。近所の住人とも遠い距離感。

友人と呼べる者がいない希薄すぎる対人関係。

主はやてもそれに近い状態ではあったものの、

それは足に障害があるゆえの遠慮がおもな原因だった。

だがこの二ヶ月我らに接してきたコウキの態度・行動を考えると
れらは不自然すぎた。

あの面倒見の良さや実直で基本真面目な出来た人格に接していると
彼本人が人を避けなければこんな状態にならないのではないかと思
う。

しかしそんなコウキが人を避けねばならない理由が分からない。

「ザフィーラ、ちょっといいか？」

少しばかり申し訳なさそうなコウキの声に俺は思惟を中断する。

「どうした？」

「悪いんだけどさ、ちょっと買い物に付き合ってくれないか？」

微妙な笑みを浮かべながら両手を合わせて拝むように頼み込む。

この姿を見るのはこれが初めてではない。

ああ、またか。と内心苦笑する。それを顔に出さずに俺はかまわな
いと頷いた。

留守番の四人への表向きの言い訳は買い物だ。

実際重たい米を購入したのだから嘘ではない。

というのがコウキのいつもの弁。いつもの言い訳だ。

その本当の理由はシグナムたちからの逃走。もしくは俺個人への相
談事などだろう。

「いやあ、やっぱザフィーラがいると買い物は楽でいいねえ……」

小さなビニール袋に入ったちよつとした調味料を持ちながら隣で歩くコウキは言う。

俺の方は両脇に米（10キロ）を抱えている。

最初の頃こそ大丈夫かと心配してくれていたコウキだが一切問題ないと分かると大物の買い物には頻繁に付き合わされている。

大量に食べる二人の騎士のせいもあるのだが。

「俺は構わないが、これぐらいならシグナムやシャマル、ヴィータでも持てるぞ」

見た目細身の女性であっても守護騎士。これぐらいの重さなら何の問題もない。

なのだが、その提案にコウキは案の定渋い顔をする。

「それは……分かってるけどさ。」

ヴィータは見た目があれだし女の子に重たい物持たせて

俺が楽しんでるってのはな、ちよつとな」

「だから男の俺をこき使うというわけだな」

同胞たる騎士たちを見た目どおり女性として扱ってくれる。

この主の性質には好ましさを感じているし荷物持ちに不平も不満も感じない。

けれど、最近はそう思っただけでもこういったことを言いたくなる。ちよつとした軽口だ。

「こき使っつて、随分と人聞きの悪いことを」

「ふっ、冗談だ。聞き流せ。」

それよりそういったことはちゃんとシグナムたちにも言っておかね。
喜ぶぞ」

「いや、喜ばれるってどうか……」

シグナムは「いえ、そういうわけには参りません」

とかいって頑として荷物譲らないだろうし、

シヤマルは「じゃあ私ごと一緒に抱きかかえてくれますか？」

とか言い出しそうだし、

さすがにヴィータも「子供扱いすんな！」って怒ると思う。

そのうえはやてが「コウ兄は男の子なんやから荷物持ちは当然の
仕事や」とか

いつものニコニコ顔で言い出しそうだし

思わず眉間にシワを寄せせる。

コウキの言った光景がすぐさま想像できたからだ。

なるほど、確かに内心では喜ぶだろうが表に出る態度はきつとそう
なる。

この二ヶ月で我らがこの主の人となりを知ったように
この主も我らのことを知ったということか。

そう思った矢先、先ほどの疑問が不意に浮かび上がってくる。

「本当にそうなのか？」というさらなる疑問が生まれる。

本当に我らはこの少年のことを知ったのだろうか、知っているのだ
ろうか？

思い当たる節はいくつもある。人付き合いの無さだけではない。

何かと理由をつけては一人での外出。

コウキが語る自らの過去の僅かな空白。

肌を見せることを極端に嫌がる態度。

時より悪夢にうなされ、謝罪の言葉を連呼していたこともあった。

何かを隠している

それはもう明白だ。おそらく勘付いているのは俺だけではあるまい。今まで三年も寝食を共にしていた主はやてなら尚更。

「おいザフィーラ、何ぼけっとしてんだ？」

「…いや、なんでもない」

「そうか？　じゃあさっさと帰るか。」

遅いとあいつらに何言われるか分からないからな」

「そうだな」

聞けない。

目の前で楽しそうな笑みを浮かべるこの少年に、何を聞けるといっただの。

この若き主が望むのがこのおそらくはありきたりな日常であるのなら我らはそれを全力で叶えるだけ。

いや、違うな。

もう主たちだけの望みではない。

もう俺達にとってもそれが望みになってしまっている。

「おーいっ！　置いてくぞ」

「ああ、今行く」

止めていた歩みを進める。コウキは少しだけ進んで笑顔で待っている。

あれを、我らを暖かく見守るあの笑みを、穏やかな日々をくれるあの笑顔を守ろう。

守護の獣の名にかけて。

これからもずっと共にあるために。

家族であるために。

「おかえりザフィーラ、コウ兄とのデートは楽しかったか？」

「ねえザフィーラはコウキちゃんどこにおでかけしてたのかなあ」

「確か近所のスーパーだよなあ……なんでこんなに時間がかかってんだ」

「主コウキと二人つきりでさぞ楽しい時間を過ごしたのだろうな」

「……………」

帰宅した途端、女性陣に囲まれた。

笑顔だが、言葉にはトゲを感じる。

不覚、予想するべきだった。

ちらりと横に視線を向ければ、申し訳なさそうな顔をしているコウキ。

けど決して助けてはくれない。

同感です。逆の立場なら同じことをしたでしょう。

それにしてもまったく、今日もこのオチか。

さて、今日はどれだけ絞られれば終わってくれるのやら。

とりあえず今日もすんなりとは眠らせてはもらえないようだ。

シグナムの場合(前書き)

冒頭がみんな一緒なのは別に間違いではありません。

シグナムの場合

あの子ら。

闇の書の守護騎士である彼女達が新たな主

「八神はやて」

と

「日野コウキ」

を得て、約二ヶ月。

主たちの方針ゆえ驚くほどの穏やかな日々を過ごしている騎士達は意外にもその生活がいたく気に入っているようだ。

そして何より、新しく主となった優しく暖かな笑顔をくれる少女と大らかで少し厳しい少年を皆心より慕っている。

二人の人間が同時に主になることは異例ではあったが、両人共闇の書の主としての責から逃げようとせず、

それがもたらす巨大な力も欲せず、ただあの子らと家族であることを望む。

そこに裏はなく、ただ真っ直ぐで暖かな想いだけがあった。それこそが騎士達の心を掴んだのだろう。

戦いの日々しか知らないあの子らにただの、当たり前前の日常を与えた我らが主たち。

今日もまた日常と呼ばれる一日が始まる。

「ぬんっ！」

「あっ！」

逆袈裟に切り上げ、手に握られている木刀を弾き飛ばす。
宙に舞う木刀が地に落ちるのを待たず、
こちらの木刀の切っ先を喉元に突きつける。

「勝負あり、ですね」

息を少し吐いて、体から力を抜きながら勝利宣言。

「ああ、くそっやられた。最後の切り上げに全然反応できなかった」と、心底悔しそうにしながらもあっさりと負けを認める我が主。どうも主は勝てないことより思ったように体が動かないことの方が悔しいらしい。

いつごろから始まった私と主コウキの試合とも模擬戦ともいえぬもの。

主曰く鍛錬であるこれはもはや我らの日常とかしている。

「端から勝負になるとは思ってたけど、ここまで反応できないものとはな。

自分でもちよっとは鍛えていたつもりだったから、ちよっとシヨ

ツクだ」

「はい、主コウキはなんといいましようか、浮き沈みが激しいと思われませう。

こちらが驚くほどの太刀筋を見せたかと思えば、

次の瞬間には素人丸出しの動きをしている。

体の方はきちんと鍛えられているのですから、

その差さえ埋められれば私ももう少しまともな剣戟が期待できますよ」

「うーん、そうしたいんだがな。

その良いこと悪いことこの差つてのをどう埋めればいいのか。

……まっ、経験積むしかないか」

と、思案顔が一転し笑みを見せる主。

それに「そうですね」と頷いて、再び木刀を構えて立ち上がった主と向き合う。

構えは正眼、その瞳は真つ直ぐに自分に向けられている。

技術は拙く、経験も浅い主との鍛錬。

だけどその目と向き合っていると不思議と高揚してくる。

まるで戦場で好敵手と出会えたときと似ていて、どこか違う暖かな感覚。

「さて、三時のおやつまであと30分。せめて一太刀入れてやる！」

決して不快ではないそれを与えてくれているのは間違いないこの少年。

その言葉に不敵な笑みで返す。

「その心意気は結構。しかし、技量がついてきていませんよ主！」

そうしていつものように時間が過ぎる。

我らの長い旅路において初めて得た『日常』のなかで。

思えば、今回は「初めて」なことがとても多い気がする。

例えば私たち守護騎士が目覚めてもうすぐ二ヶ月が経とうとしているが

驚くべきことに、闇の書のページは白紙のままですべてページも埋まっていない。

これは闇の書の長い歴史のなかでおそらく初の出来事だ。

そして歴代の主のなかで同時期に二人の人間が主に選ばれ、そのうち日野コウキは歴史上初の男性だ。

闇の書は完成した後、主となった者と融合して真価を発揮するユニゾンデバイスとしての特性を持つ。

そのため主に選ばれるための資質というのは魔力量や魔導師としての資質以外にも融合しやすい、同調しやすいということも含まれる。

闇の書はその守護騎士プログラムも四名中三名が女性型で、その上位プログラムにあたる闇の書の管制人格も女性型だ。そのためユニゾンしやすいのは同性である女性。

無論、理論的には男性でも構わないのだが女性のほうが融合しやすいのも事実。

だからだろう、今までの主は全員女性であった。だが、性別の違いなど些細な違いだ。

主コウキともう一人の主はやてが今までの主と違うのはそんなことではない。

蒐集を望まぬこともそうだがこの二ヶ月我らは一度も命令された覚えがないのだ。

我らは主に仕える騎士。

命令一つでどんなことでもやってのける覚悟と意思があると自負している。

けれどその決意とは裏腹に、主たちは一回も命令をしてはくれない。するのは多分どうでもいい『お願い』だけ。

当初はこの世界のことには疎い我らを軽んじているかと思っていた。信頼をされていないものだと思っていた。

しかし実際はその逆だったのだと気付けたのは、ある約束をしたときだ。

あれは主コウキが魔法を習いたいと言い出す前日のこと。

我らを集めてものすごく真剣な表情で闇の書の蒐集はなにがあってもしないでくれ。

と頼んできたのだ。

突然のことで主はやても驚いていたがそれが主の願いであるなら我らはそれに従うだけ。

そうして皆が頷くと「じゃあ約束だ」と

この世界での約束をした証である指切りというものをした。

それが、私たちにはとても不思議だった。

我らは主を守り、主のみに従うプログラム。

だから本当に私たちに蒐集をやってほしくないのなら、一言「するな」と命令してくれればいい。

それだけで我らは逆らうことができなくなる。

だというのに、命令を出さずにお願ひし、約束させた。その意味に、そこに込められた信頼に、

気付いたときの胸の奥の熱さを私は今でも忘れられない。

私はその場で騎士として剣に誓った。絶対に蒐集はしないと。

同時に心で、誰が相手でもこの主たちを守ろうと誓った。

こんなに暖かな信頼を向けてくれるこの少年を、なにがあっても。

「……………」

またやってしまった。

誓いはたてたものの、現実はうまくいかない。

思わず、幾回目かの攻防のすえ無防備になった頭へと強烈な面打ちやってしまった。とは後の祭り。

クリーンヒットし、主コウキは意識を失ってしまった。

何があっても守ると誓った私自身が一番傷つけている気がする。不甲斐ないにもほどがある。

いつもならあたふたする私をよそにシャルマルが手際よく手当てしてくれるのだが

あいにく今日は私以外全員外出中。

とりあえずリビングに横にして、いつかシャルマルがやってたようにしてみる。

絨毯の上に正座してその膝ないし太股の上に主の頭を乗せる。

そして頭を撫でる。

そういえばこんな近くで主の寝顔を見たのは初めてのことだ。

正確に言うとは気絶顔なのだが。

けれど気絶したとは思えぬその穏やかな寝顔と足にかかる適度な重さがなぜか心地良い。

時より身じろいだり何かしら言っている仕草が微笑みを誘う。

「ふふ、どんな夢を見ているのですか、ある……………」
「コウキ……………」

誰も見てないところ、聞いていないところでこっそりと名を呼ぶ。

こういつときでしか名前を呼べない自分の不甲斐なさには呆れてしまう。

その呼び声にわずかに反応したかのように見える主はしかし未だ夢の中。

ふと目が覚めたとき私の顔がこんな近くにあったら

どんな顔を彼はしてくれるだろうか。と考えた。

意図せずクスリと笑みがこぼれる。

きつとシャルマルがからかう時と同じように真っ赤になって飛び上がってしまうかもしれない。

ウブではあるが優しさと強引さを併せ持つこの少年は

当たり前のように私たちを一人の女性として扱い、

過剰に触れると恥ずかしがるけれどいつもそばにいてくれて

そして手を引つ張って導いてくれる。

最初は困惑していた我らも、いまはそれがなぜだかとても心地よい。まったく守護騎士の将にして剣の騎士ともあるう者が。

と思うことがないわけではないが、

“女性”としてこの主に接していたいと何より私自身が思ってしまったのだ。

まったく私はどうなってしまったというのか。

「…あなたのせいですよ、コウキ。

シャルマルの言ではありませんが、責任をとってほしいものです」

少しだけ不満顔で言ってみる。

どこことなく寝顔が眉をひそめた気がするが、気のせいだろう。

ふと時計を見る。時刻は2時38分。あいつらのことだ。

3時きつかりにはおやつを持って帰ってくるだろう。

ならばあと残り約20分。主の寝顔を堪能しておこう。

「……少しの間ですが、どうか良い夢を」

そして彼の頭を優しく撫で顔をそっと近づけて触れる。
愛しさを存分に込めながら。

まあ、その姿を帰ってきたヴィータやシャマル、
主はやてたちに見られ、騒がれてしまったが。

曰く「膝枕は私の役目なのに！」とか

「なんでほっぺに薄い紅がついてるんだよ！」などと
言われたがなんのことやら。

ただ、その、えっと、なんといいましょうか。

主はやて、いつもと同じはずの笑顔は今日はすごく怖いです。

「今日は……一緒に寝よか、シグナム……」

背筋が一瞬で凍った。

今晚私は、果たして穏やかな睡眠を得ることが出来るのだろうか。
助けを求めようにも、主コウキは未だ夢の中だった。

ヴィータの場合

あの子ら。

闇の書の守護騎士である彼女達が新たな主

「八神はやて」

と

「日野コウキ」

を得て、約二ヶ月。

主たちの方針ゆえ驚くほどの穏やかな日々を過ごしている騎士達は意外にもその生活がいたく気に入っているようだ。

そして何より、新しく主となった優しく暖かな笑顔をくれる少女と大らかで少し厳しい少年を皆心より慕っている。

二人の人間が同時に主になることは異例ではあったが、両人共闇の書の主としての責から逃げようとせず、

それがもたらす巨大な力も欲せず、ただあの子らと家族であることを望む。

そこに裏はなく、ただ真っ直ぐで暖かな想いだけがあった。

それこそが騎士達の心を掴んだのだらう。

戦いの日々しか知らないあの子らにただの、当たり前前の日常を与えた我らが主たち。

今日もまた日常と呼ばれる一日が始まる。

カチャカチャと食器が触れ合う音。

蛇口から流れる水と手に持ったスポンジが汚れを落としていく。

この家において家事は基本的にコウキとはやての仕事だ。

たんにあたしらが下手すぎるからなんだが。

そしてあたしはコウキを見ている。

時々振り返ってはそこにあたしがいるのを見ると

柔らかい笑みを見せてくれると胸が暖かくなる。

いつからなのかはよく分からないけど、

そうやってコウキやはやての後ろに付いてまわるのがあたしの日課
になっている。

今日はシグナムとシャマルがはやてを病院につれていったからコウ
キを見ていた。

最初は蒐集を望まず、あたしらを恐れもしない主に困惑した。

あたしは鉄槌の騎士ヴィータ。

相棒の「鉄の伯爵グラーファイゼン」と共に敵陣を突破し破壊しつ
くすのが仕事。

戦いと破壊、それだけがあたしの仕事だった。

でも、この世界にあたしらを必要とするような戦いはなくて

二人は闇の書の力を求めなかった。

ただそこにいてくれることを望んだ。

いや違うか、そういうことなのだとあたしらが勝手に解釈しただけで
コウキもはやても何の望みも口にしていない。

ただあたしらがここにいてることを受けいれてくれる。

それがどれだけ嬉しかったかなんてことは当人たちはまったく分かっていないようだけど。

むしろ当たり前のようにそんなことをしてしまうんだ。

困ったことにこの主たちは。

そして最初は困惑していたあたしたちも

ここでの毎日を受け入れて、慣れていった。

それはいい。

いいんだけど最近あいつら自分のことを棚にあげていろいろ言うてくるのが正直うざい。

「ヴィータちゃん、最近よく笑うようになったわね」

それはお前もだ。敵を脅かすような冷めた笑みしか見せなかったヤツがなにを。

「またおかわりか。いったい全体お前の小さい体のどこにそんなに入るんだ」

いいよな、食ったもんが全部胸にいつてるおっぱい魔人は。だいたい食ってる量は一緒だろうが。

「お前が人に敬語を使うとはな」

うるせえっ。

お前だって最近急におしゃべりになってるじゃないか。

昔は必要最低限しか口を開かなかったくせに。

まったくどいつもこいつも自分のことは棚に上げて
あたしが変わったなんて言いやがる。

まあ、それは否定しないけどよ。

確かにあたしは変わった。

前みたいに訳も分からずイライラすることはなくなって、
今は二人の傍にいるだけで満足してる。

けどあたしから言わせるとお前らのほうがよっぽど変わった。

シャマルはいつも楽しそうに笑って、

はやてと一緒に頑張ってコウキをからかつては遊んでいる。

興味がなかった炊事・洗濯・掃除にご近所付き合いなんかを
積極的にやってる姿を見てるとヴォルケンリッターの参謀役として
智謀をめぐらしていた姿が嘘に思えてくる。

戦いぐらいにしか興味がなかったシグナムは和食に目覚めて、
味付けには結構うるさい。

とくにシャマルが作ったときの反応ははやて曰く

「昼ドラに出てくるお姑さんみたいや」

とのこと。

あとついでに羞恥心を持ったのか。

自分のでかい胸のことになると真っ赤になって激昂したり、
恥ずかしがったりしている。

寡黙であたしらとも積極的に話をすることもなかったザフィーラは
随分とおしゃべりになって軽口を叩くようになったばかりか、
笑みさえこぼすようになった。

今ではコウキとはもちろんあたし達とも気軽に談笑している。

それで時々「なんだかなあ」と思うこともある。

闇の書の守護騎士としてそれなりに恐れられていたあたしたちがこんな風になってしまった。

そこに後悔も不満もないのだから余計に「なんだかなあ」と思ってしまっ。

でも、しょうがないじゃないか。

コウキもはやてもとつても暖かいんだ。

ギガウマのご飯も、用意してくれるお風呂も、優しい手の平も、大きな背中も。

とつても、暖かくて嬉しくなっちゃうんだ。だから、しょうがないだろ？

つて、誰に聞いてんだかあたしも。

「…おいつ、聞いているかヴィータ？」

「へっ、あつ、な、なんだコウキ？」

「いや、洗濯物干すから手伝ってくればありがたいんだけど……
だめか？」

どこか不安げに首を傾けながら聞いてくる我らが主。

まったくこれだから「なんだかなあ」と思ってしまっ。

「いいに決まってるだろ、任せとけ！」

ドンと胸を叩いてみせる。

洗濯物が入ったかごを持って一緒に庭に出る。

雲ひとつない青い空は眩しくて一瞬目を瞑っ。

「いい天気だな」

「ああ、でもさそれでも寒いぞ。それなのに外で干すのか？」

「最近はずっと部屋干しだったからな。」

「こつこつ晴れたときにちゃんとやっとかないと部屋に臭いがこもる」

「そうなのか？」

はつきりいつて部屋干ししている姿は何度も見たが、部屋が臭うことなど一度もなかった。

きつとコウキが定期的に誰も見てないところで空気の入替えとか消臭をやっているからだと思う。

「そうなの」

しかし当の本人はそんなことは言わずに頷くだけ。

あえてそこには触れず、並んで順番に洗濯物を干していく。

一応女物はあたしが、男物とそれ以外のシーツとかをコウキが干している。

背丈が若干届かないので台に乗ってやっているのだけれどそれが微妙にイラつく。

せめてもう少し背があればな、と最近思うようになった。

昔は気にしていなかったんだけどな。

もうあまりに昔すぎて記憶から磨耗・欠如している闇の書の創造主はいったい何を思ってあたしを子供サイズに設定したんだか。

いまはこの小さく、成長もしない体が疎ましい。

だってコウキたちの役に立ててない。

戦いだったら他のみんなに負けない活躍ができると自負しているけ

れど

日常生活の中だとこのサイズの体が邪魔をする。あたしが二人のやっていることを見ているだけなのにはそういう理由もある。

でも、だから時々頼まれることはちゃんとする。

あたしの中だけでのちよつとした決まりごと。

それにコウキはけっこう頻繁にあたしに頼みごとをする。

こうやって干す仕事もけっこうやっている。

その慣れもあつて思っていたより早く干し終わって家の中に戻ろうした。

けど、やめた。

なんでかわかんないけどあたしより先に干し終わっていたコウキが庭の真ん中で空を見上げて突っ立っていたから。

「なに見てるんだコウキ、なんかあるのか？」

あたしも同じように空を見上げてみるが、そこには何も無い。

本当に何も無い空。

何かがあるとすればそれは白い雲と青い空だけ。

キレイな空だ。

「いや、何にも無い空はキレイだなんて思ってたさ」

「えっ!？」

ちよつとびっくりした。

「な、なんで？」

「うーん、なんでだろう？」

コウキは本当に不思議そうに頭を傾ける。

「最近急にそう思うようになってさ。」

昔から当たり前前にあった青空をすごくキレイだなんて……おかしいかな？」

あたしは慌てて首を振る。

「別におかしくないだろ。」

実際キレイなんだし、それにあたしも空を見るのは嫌いじゃない……」

「……そつか……じゃあちよっと一緒に空を見上げてみるか？」

「えっ、この寒空の下でか!？」

「……だめ？」

卑怯だ。

そんな残念そうな顔しながら首を傾げる仕草は卑怯だ!

と内心叫びながらも「別に、いいけどよ」「とぶっきらぼうに言ってしまうあたり

何か絶対的な弱みを握られている気がする。

けど悪い気が全くしないんだからこれまた「なんだかなあ」と思ってしまう。

「よし、なら一緒に座るか」

ふわり、とあたしの体が浮く。

「へ？」

驚く間もなくそのまま座らされた。

コウキの膝の上に。

「コウキっ!？」

「ん、こうしてくっついてれば少しは寒くないだろ？」

ナイスアイデアだろ。と言わんばかりの顔でそう言われてしまった。

「っ…」

だから、この体はいやなんだ。

シヤマルやシグナムが軽く触れただけで真っ赤になるくせにあたしが触ったり抱きついてもそんな反応しない。

いつもの笑顔を見せてくれて、頭撫でてくれたり、逆にコウキから抱きしめてくれたりするだけで……。

いままコウキはあたしを囲うように抱きしめている。寒くないようにと思ってくれている……。

多分本人からすればわたしは妹か何かのような感覚なのだと思う……。

……それは、ちょっとばかり不満だけど、まあ、いまはいいかな。暖かいし。ずっとくっついてられるし。

そう結論を出して、あたしもコウキにならって空を見上げる。本当に何も無い。ただの空。白い雲と青い空だけの世界。

時折、鳥や飛行機が飛んでいるぐらいで他には何にもない空。

それをキレイだと言ったコウキの言葉には同意だ。
この空はキレイだ。

あたしが今まで見てきた空の中で一番キレイ。
分厚くて黒い雲やでかくて邪魔な戦艦もない。
ずっと見ていたいと、飛んでみたい思える青空。

紅の鉄騎ヴィータ

城の東から見れば雲の切れ間から僅かばかり空が見える

戦艦も少ない

きつと少しはきれいな空だ

あつ、やなこと思い出した。

いま思い出すとなんであんな態度してたかな、あたし。

何かに苛立つて、関係ないあいつにずっと当り散らしていた。

一番辛かったのは多分あいつだったのに。

今はあの時みたいにイライラすることはなくなって、毎日が楽しくて、幸せで。

でもあいつは、その中にいられない。

最低でも400頁は蒐集しないとあいつは出て来れないから。

だから、どんなに楽しくて嬉しくて幸せでも、あたしただけがいい目見てずるいことしてるような気がしてしまう。

「……………ん、どうした。お前？」

「へ、あつ……」

思わず固まってしまう。

てっきりあたしに対しての言葉だと思ったけど
視線を下げると目の前に闇の書がいたのだ。

いくら精神リンクしてるっていつても心の中まで分かることはない。
ないんだけど。

考えていたことがことだけに、何か顔を合わせづらい。

「お前も日向ぼっこか？」

「……………」

コウキって実は天然なんじゃないかと最近考えるようになった。

ちよっと、いやかなりズレたこといいながら宙に浮かんでいる闇の
書を手取るコウキ。

闇の書は蒐集をしなくても浮いて移動する程度のことならできる。

だから家の中だけだけど、こいつはわりと自由に飛んでいる。
基本は本棚だけだ。

「ほい」

「へ？」

気付けば闇の書をどういうわけか持っていた。

いつのまに…？

困惑しつつコウキを見上げると満面の笑みが返ってきた。

「…そいつはお前が温めてやれ…」

いわれて、あたしは無意識に持たされていた闇の書をギュウっと抱

きしめた。

コウキはやつぱり卑怯だ。

天然なくせに時々してほしいことをしてくれる。

言って欲しいことを言ってくれる。

なあ、闇の書。お前もそう思うだろ？

だって、こいつお前のことまで人扱いしてるみたいだぞ。

見境がないのか単なる馬鹿なのか。いまだに判別がつかないよ。

そこんところ、今夜は一緒に語り明かそうか。なあんて……っ！？

「え？」

「どうした？」

「コウキ、いまなんか言った？」

「いや、何も……」

自分は何も喋っていないと首を振るコウキ。

じゃあ、いま一瞬間こえたあの声は、聞き間違えよつのない声は。

訳も分からず何でか笑ってしまう。

胸の奥が暖かい。外の寒さがぜんぜんに気にならない。

だから、嬉しそうに笑いながらあたしはコウキにひとつ頼みことをした。

「なあコウキ、今夜は闇の書と一緒に寝ていいか」

コウキはすぐに「いいよ」と短く頷いてくれた。

ああ、だめだ。顔が笑う。

いまあたしはきつととてつもなくしまらない顔してるんだろうな。

でも、そんなことは気にならない。
だって今日はいつもよりもいい夢が見れそうなのがするから。

????の場合

「うつつ、疲れたあ……」

情けない声を出して俺はベッドに倒れこむ。

ようやく俺があいつらから解放される時間。すなわち就寝時間となった。

そこへフアサッと毛布がかけられる。

器用にも狼形態のザフィーラが黙ってかけてくれたのだ。

「ありがと、お前も暖かくして寝ろよ。お休み……」

「ああ、ゆつくり休め。明日も大変だろうからな」

「うつつ、それをいうなあ」

守護獣の軽口に言い返しつつ瞼を閉じる。

今日も一日が終わった。無事終わってくれた。

これだけ毎日騒動だらけだと本当に話題にことかかない。

おじさん、どうやら次の手紙にも書くことがいっぱいありそうです。いつまでそれが続けられるか分からないけれど書けるだけ書き残しておきたい。

俺とあいつらが確かに共にあって共に暮らし共に笑っていたのだと。

どうか覚えていてください。

俺達以外にそのことを誰も知らないのはちょっと寂しいですから。

おじさん、俺は幸せだよ。

はやてがいてシグナムがいてシャマルがいてヴィータがいてザフィーラがいる。

あの日、大事なものを全部捨ててしまった俺にはまったくもってすぎた幸せです。

だから“いつか”のときはよろしくお願いします。

けど、それまでは俺がちゃんとこいつらを守っていきます。

それが最初の約束でしたよね、俺は忘れてませんよ。

おじさんもどうか、どうか忘れないで。

あの子ら。

闇の書の守護騎士である彼女達が新たな主

「八神はやて」

と

「日野コウキ」

を得て、約二ヶ月。

主たちの方針ゆえ驚くほどの穏やかな日々を過ごしている騎士達は意外にもその生活がいたく気に入っているようだ。

そして何より、新しく主となった優しく暖かな笑顔をくれる少女と大らかで少し厳しい少年を皆心より慕っている。

二人の人間が同時に主になることは異例ではあったが

両人共闇の書の主としての責から逃げようとせず、

それがもたらす巨大な力も欲せず、ただあの子らと家族であることを望む。

そこに裏はなく、ただ真つ直ぐで暖かな想いだけがあった。

それこそが騎士達の心を掴んだのだらう。

戦いの日々しか知らないあの子らにただの、当たり前前の日常を与えた我らが主たち。

ああ、しかしそれは我らの長き旅路において一時の夢にも満たないものだ。

始まったときからすでに終わりのときは見えている。

異例であるうと此度の主たちも今までの主と同じ最後を迎えることだらう。

その時、この主たちも騎士達も我を呪うだらうか、憎むだらうか。

呪われようと憎まれようとかわまない。

せめてどうかこの夢を一日でも長くあの子らに見せてやってはくれないか。

せめて、どうか……あの子達に優しい夢を……

???の場合(後書き)

一応????でぼかしたけど、誰かは丸わかりだよな。

次回からはジュエルシード編突入だ！

第3話予告（前書き）

そうか、文字数が少なすぎると投稿できないのか。
初めて知った。

第3話予告

はやて「少しずつ変わっていく毎日。日常の心地よい変化」

コウキ「新しい家族と小さな友達。あの一家との再会。

そして出会う、金色の髪の魔法使い」

はやて「そんな中、コウ兄が下した“多分きつと愚かな決断”とは？」

二人「次回、魔法少女リリカルなのは異伝・第3話『過去との再会と出会い』」

はやて「に、リリカルマジカルがんばりますう。

ってコウ兄？」

コウキ「……言えるかつ！」

コウキ「あの日、俺は一つのことを決意した」

小さな友達（前書き）

ちよくちよく日付がとびますが、

これは原作アニメに合わせるためと、

その空白にまだ明らかにできないことが起こっているため、です。

小さな友達

再会は古びた傷を疼かせる

でも、思い出すのは痛みだけじゃないから

楽しかったこと、嬉しかったこと、ちゃんと
いあったから

けれど痛みだけしか思い出せない
出会いはきつとす
ごく悲しいこと

だから伝えたい

そんなに頑張らなくていいんだと

俺はそれを知っているから、だから伝えたい

けれど強い意志は言葉では止められない

だからきつと手にした魔法はこの出会いの

ため

この力で、いつかの自分を救いにしよう

4月23日 PM04:15

風芽丘図書館

はやてに付き合っているうちに日課になりつつある図書館通い。

俺はいま小さな友達と席を並べて読書をしている。

今日は一人で出かけた帰り道に寄ったこともあって誰もついてはいない。

普段は最低でも誰か一人と一緒にすることが多いせい

か、そのことを小さな友達に揶揄されてしまったが。

ここの図書館に通うようになったのは家にある本を読みつくしてしまっただけ

皆の騎士甲冑の資料を探しに来たのが起因だったが

そこで俺はこの小さな友達と出会えた。

俺が守護騎士たちと出会ったあの日に出会ったもう一組の少女たち。

月村すずかとアリサ・バニングス。

私立聖祥大学付属小学校という親にはそれなりの学費を、

子供にはそれなりの学力を要求する私立校に通っている小学三年生。

はやてとは同じ年なためか出会って一月たらずでもう互いの家に行きあう仲だ。

それぞれにも家はいわゆるお金持ちのようだがそれを鼻にかけることもないとても出来たいい娘である。とくにすずかは色んな意味で優しい子だと思う。

明らかに年上なのにも関わらず小学生である彼女達よりフリーな時間を持つ俺のことや

はやての足のこと世間的にはおかしい我が家の家族構成についても何も聞いてこない。

もしかしたら俺達と同じように人に言えない秘密を持っているのかもしれない。

で、だからといってアリスは優しくないのかと聞かれれば、答えは否だ。

すずかが聞かないから彼女もそうだったことは聞かない。すごく聞きたそうではあるんだけどね。

この子はこの子でとっても優しい子だ。

ウィータ並みに感情表現がストレートで少し血の気が多いところもあるが、

それは彼女がそれだけ友達思いだからだ。

本気で想っているから、本気で怒るのだ。

そこは彼女のいいところ。

だと思いたいのだが。

「……………すずか、何ゆえあのお姫様はご機嫌ナナメ？」

と、隣の席に座るすずかに小声で尋ねる。

彼女も先ほどからチラチラと本越しに目の前の席に座る不機嫌そうな親友を見ていた。

「…実は、私たちもう一人仲がいい子がいるんですけど、最近その子何かに悩んでるみたいで何を言っても上の空で…」

「ああ、なるほど。」

それを自分達に相談してくれないのがなんか悔しくてイライラしてるわけか」

「えっ？ あっ、はい。多分そうだと思います」

すずかは一瞬だけ驚いたように目を見開くが、すぐに目許を緩めて笑みを見せながら言った。
どうやらの射た見解をしてくれたのが嬉しかったようだ。

「なに二人で嬉しそうに内緒話してんのよ」

「わっ！」

「きゃっ！」

いつのまにやってきたのか。

俺とすずかとの間でアリサは不機嫌極まりない表情で仁王立ち。思わず驚きの声を漏らす。図書館だから、比較的小さい声だが。

「別に内緒話なんてしてないぞ。お前が友達と喧嘩したって聞いただけ」

なんでもないことのように正直に話す。

一応、その反応を見てみて酷いようなら俺がお節介でもしようかと思っていたのだが。

「け、喧嘩なんてしてないわよ。あれはなのはが悪いんだから！」
と、憤慨した様子でそっぽを向く。
しかし俺の耳に、聞き間違えるはずもない名前が飛び込んだ。

「なの、は？」

思わず口にした俺にさすがに「その友達の名前です」と補足をしてくれた。

ちよつと待て。すぐく待て。

よく世間は狭いと聴くが、
いくらなんでも狭すぎというか、俺も迂闊というか。

とにかく、マジか？

「……………なの、はって、まさか高町なの、は？」

恐る恐る、微妙な不安を覚えつつ尋ねてみる。

すると二人は驚いたような表情を見せて頷いた。

やっぱり。

「……………もしかして、土郎さんと桃子さんとの間の子で高町家次女。
恭也という兄と美由紀という姉がいる勉強はわりと好きだけど
運動神経なくて意外に頑固な女の子？」

念のため、記憶に残るあの子の家族構成と特徴を言ってみる。
さっきより大きく驚いたあと二人はそろって大きく頷いた。

ああ、もう間違いない。

今にして思えば同い歳だし、なのはには勉強好きな面もあった。いまは碧屋も経営が安定しているらしいから経済面での問題はない。

「そうだよ、それなら聖祥に入ってもおかしくはないわなあ……」

そこまで考えが及ばなかった自分に軽く失望する。

というより同じ市内に住んでいるのだから今までよく逃げ続けられたな。

と、今更ながら幸運なんだか不幸なんだか判別がつかない自分の人生を嘆いてみる。

もちろん半分は冗談だが。

「あのもしかしてコウキさん、なのはちゃんとお知り合いなんですか？」

流れるに当然といえば当然の質問。

それに俺は微妙な顔をする。どこまでを、どう説明するべきか。

ここまで言ってしまったら、ちゃんと説明しないといけないだろうな。

「知り合いついていったら知り合いかな。

昔は家族ぐるみで付き合いがあつたんだ。

なのはが4歳か5歳ぐらいまでだったけどね」

予想できる続く質問を回避するために

「そのあと引つ越しちゃってそのまま」

と補足する。

一応嘘ではない。一応。

「うわあ、世間は狭いつていうけど、こんな偶然あるんだ」

「うん、すごい偶然」

「まったくだ。まさかアリサたちとなのはが友達だったなんて……
にしてもあいつがその友達と喧嘩とはね」

思わずクスリと笑ってしまう。

俺の記憶の中にいるあの少女は確かに頑固ではあったが、
どう頑張っても喧嘩できない子だった。

それというのも幼いながらも聡明で自我の生育が早かったのが災い
して

いつも色んなことを考えすぎてしまい、何もできない。
あるいは決断が間に合わないことが多く、

また家庭環境の事情で誰かに嫌われたり迷惑をかけないように
穏やかで誰にでも好かれる明るい少女を演じていた面があったのだ。

そんなあいつが、喧嘩をした。

すずかの話の聞く限りじゃ一方的にアリサが怒っているだけのよう
だが。

でも、それが何だか嬉しくてニヤニヤとしてしまう。

それを見て訝しんだ二人の表情を見て、咄嗟に引き締めたけど。

「なのはが喧嘩したのがそんなに不思議なんですか？」

アリサは突然そんなことを聞いてきた。

どうも訝しんだのは俺の表情ではなく、そのことらしい。

「不思議ってわけじゃないけど俺の知っているのはは
喧嘩できるような子に見えなかったから」

という俺の発言に今日一番の驚愕の表情を見せるお姫様二人。
え、俺なんかすごいこと言った？

「あ、あのお、実は……」

少し申し訳なさそうな困ったような笑みを浮かべたすずかはアリサ
と共に

自分達が出会って友達になった経緯を話してくれた。

小学校に入学した当初、本人曰く「嫌なガキ」だったアリサは
イヤなことをイヤといえなかつたすずかをいじめ、
大切にしていたヘアバンドを取り上げてしまった。

そこへなのはがやってきてやめるように、返すように注意したが、
言うことをきかなかつたアリサの横っ面を引っ叩き、こっ訴えたそ
うだ。

『痛い？』

でも大事なものをとられちゃった人の心は、もっともつと痛いん
だよ』

アリサからすれば当時衝撃的な言葉だったらしい。

でも互いに感情的になっていた二人は止まれず、取っ組み合いの喧
嘩となった。

それを大声ですずかが制して、その後双方の両親の提案で子供達同
士で

話し合うことになってそれが「始まり」になったそう。

「……………」

聞き終えて、思わず絶句してしまう。

あのなのはがそういった喧嘩をしたこともびっくりしたが、何より俺を黙らせたのはそのやり方だった。

「間違っていることにはまず言葉で注意。

それでもやめない認めないときは平手打ち、か……覚えてたのか」

それは我が家特有の叱り方だ。

俺も一度だけそうやってなのはを叱ったことがあったっけ。

だがそれにしてもその台詞は、その、なんていうか、パクリすぎだなのは。

「コウキさん？」

「え、あつ、いやなんでもない」

慌てて何とか誤魔化して、その日は太陽が落ちきる前に彼女達と図書館で別れた。

俺のことは黙っておいてくれと念押しして。

二人には訝しい顔をされたが約束してくれた。

ならあの子達から俺が戻ってきていることはばれないだろう。

でもいずれはあいつらを連れて挨拶に行かなくてはいけないとは思っている。

けれど、なかなか踏ん切りがつかない。

まるで自分でこの生活を終わらせようとしているような気がしてしまっから。

自宅へと向かう足が重い。

歩みを止めて、店のウィンドウに映った自分の姿を見る。
なんだろう。

自分の姿は冗談にならないほど、今にも砕け散ってしまいそうに見える。
ええ。

「硝子の……命か」

言い得て妙、とは思いたくないな。

まっ、どっちにしる時間はない。

ならでできることは、できるうちにやっておかないと。

たとえば最後に、あの人たちを、あの子達を泣かせることになったとしても。

できることを、やっておかなくては。

過去との再会

4月26日 PM03:42

海鳴市 喫茶碧屋

とぼとぼと一人の少女がどこか気落ちした顔で歩いていて、その肩でフェレットのような生き物が心配そうにその少女の顔を覗き込んでいる。

(そっか、喧嘩になっちゃったんだ。ごめん……)

(ユーノくんが謝ることじゃないよ。
ちゃんと話を聞いてなかった私が悪いんだし)

(でも……)

と、続けようとしたフェレット ユーノ を制して、
少女・高町なのはは歩みを進めた。

今日は母から新作ケーキの味見を頼まれているから家ではなく喫茶店のほうへと。

本当は友達も誘ってくる予定だったのだが肝心のその友達と喧嘩してしまっていた。

喧嘩というよりは一方的に怒られたといったほうが正しいのだが。

自分に非があると分かっているのはだったが事情を説明できない以上しょうがない。

母に連れてこれなかった言い訳を考えながら

お店への道の最後の曲がり角を曲がったところで、

なのははぴたりとその足を止めた。

「えっ？」

（なのは？）

ユーノの呼びかけに反応せず、

なのははただ信じられないといわんばかりの顔で前方を見ていた。

なんだろうと思いついユーノも同じように前を向いた。

そこにある、いやいたのは男女の六人組。

なのはより若干幼い感じの女の子と

二十歳前後の女性二人に大柄で一番背が高い男の人が一人。

そしてその人たちに囲まれている十代後半ほどの少年と

彼が押す車椅子に乗っているなのはと同じ年ぐらいの女の子。

彼らは喫茶碧屋の前に立ち、

今まさに入ろうとしているのだから普通のお客さんだろう。

「コウキ、さん？」

それは別段珍しい光景ではない。

喫茶碧屋といえはこの辺では知らない者はいない人気のお店である。

そこへそういった男女のグループが入ることは珍しいことではなかったのだが、

なのはにとつて『彼』がここに来てくれることほど、驚愕する事態

はなかった。
それを望んでいたとはいえ、きつともう二度と来てくれないと思っ
ていたから。

「コウキさん！」

なのはほとんど咄嗟に駆け出して「コウキ」と呼んだ少年に抱き
ついた。
振り落とされそうになったユーノは必死にしがみつく。

「わっ、な、なにっ!？」

いきなり名前を呼ばれたかと思えば
いきなり背後から抱きつかれ、驚いた少年は振り返り
自分にしがみついている少女を見て、目を見開いた。
その髪の色と髪型、そしてなによりその瞳に見覚えがあった。

「え、もしかして、なのはか!？」

名前を呼ばれたなのは彼を見上げながら頬を朱に染めて、
でも嬉しそうにはにかなだ。
それを見て、動揺を隠せなかったのはコウキが連れていた女性たち
だ。

「あ、あのっ……コウキちゃん、その子が？」

「え、ああ、うん。この子が一昨日話したのはだよ」

懐かしさからか。

少女と同じように嬉しそうにはにかなながら彼女の頭を撫でるコウ

キ。
瞬間女性たちの胸になにやらモヤっとしたものが生まれたのを少年は知らない。

「おい、おまえっ、いつまでコウキに抱きついてんだよ！」

と、コウキが連れていた中では一番年下。

なのはより僅かに幼く見える少女がその感情を隠さずに怒鳴る。活動的な服装はしているが赤毛をリボンで三つ編みにしてウサギのぬいぐるみを持っているところは年相応に見える。

「おい、ヴィータ」

コウキのたしなめる声も聞こえていないようで、

なのはとは反対方向からコウキに抱きついてている。

そしてまるで親の仇でも見るような目で睨み付けてきていた。

「なに睨んでんだよヴィータ？」

それに初めて会う人には敬語使わなきゃだめだろ」

「……に、睨んでねーです。もとからこういう目つきなんです！」

おかしな敬語を使いつつそれでもすさまじい眼光でなのはを睨みつける少女。

その迫力に気圧されて、思わずコウキから手を離してしまうのは。

「堪忍な、ヴィータはちょっとヤキモチ焼きやから。」

悪気はないんよ許してやってな、えっと……なのは、ちゃん？」

「え、う、うん……」

反射的に頷きつつ、その目はコウキにいろいろと聞きたそうであった。彼女からしてみれば昔の知り合いが知らない人をたくさん連れてきたのだ。困惑もするだろう。疑問もあるだろう。でも、それでも口から出たのは別の言葉だった。

「いつ海鳴市に帰ってきたんですか？
連絡をくれれば会いに行つたのにな……」

言われて少年は苦笑する。怖い顔でなのはをにらみつけながら抱きついていてヴィータをなだめながら

「まっ、それはあとで」

と誤魔化す。

「にしても、

あんなにちっこかつたなのはがこんな大きくなつてるとはな……」

と、ぼんぼんとなのはの頭を叩くコウキ。

「うっ、そ、それはコウキさんだって。

すっごく背高くなつてる。お兄ちゃんと同じくらいだよ」

「ホントか？ ならやっとなら背だけは追いついたってことか」

それがとても嬉しそうなコウキになのはも思わず眩いくらいの笑顔を見せる。

それを目をぱちくりさせながら見ていたのは肩に乗っているフェレットだ。

「ん、なのは、そいつは？」

「え？ あっ、うん。」

しばらく家で預かることになった迷子のフェレットさんで、名前はユーノくんっていうの」

満面の笑みでなのははそう紹介したが、コウキは訝しそうな顔を見せたあとじっとそのフェレットを見詰める。

「コウキさん？」

首を傾げるなのはの言葉を聴いているのかいないのか。ひょいっとユーノの首根っこを掴み上げる。

「キューっ!？」

突然の行動の驚きと抗議をかねた泣き声をあげるユーノ。

そんな彼を自分の顔の前まで持つてくると首をかしげながらユーノに問いかける。

「おまえ……本当にフェレットか？」

ギクッ！

思わずそんな擬音が聞こえてきそうなほどフェレットと少女は動揺した。

「そ、そんなことないよ。」

「そりゃ正確な種類は分からないけどどう見てもフェレットでしょ？」

少し上ずった声でそう弁解するもコウキの顔はますます怪訝になっていく。

（わわわわっ、どうしようユーノくん。）

（コウキさんって昔っからとんでもなく勘が鋭いの！）

（だ、大丈夫。いくらなんでも僕のこと分かるとは……）

彼の勘の鋭さを知るのははもちろんのこと

なぜか初対面のユーノも心臓バクバクだった。

びっくりするぐらい澄んでいる真っ直ぐな漆黒の瞳に見詰められていると

何もかも洗いざらい話さなくてはいけない気分になる。

しかし、ふっと目元を和ませるとそのままユーノをなのはの頭の上に置いた。

「……コウキさん？」

「悪い。見たことない種類だったから不思議だったただけだ。」

「それよりなのは、桃子さんや士郎さんはいる？」

「えっ、あつ、はい！」

「お兄ちゃんやお姉ちゃんもじきにやってくると思います！」

「そうだっ、ここじゃなんですから中に入りましょう。」

お母さんもお父さんもコウキさんが来たって聞いたら喜びます」

「あっ、いや、その……」

なにか言いにくそうにしているコウキの様子には気付いていたものなののは強引に彼を店内に入れた。

カランコロンという音がお客の来訪を告げ、ちょうど店先にいた女性性は

なののが連れて入ってきた少年を見て目をぱちくりさせる。

「えっ、まさか……」

「うん。お母さん、コウキさんだよ。コウキさんが帰ってきたんだよ！」

満面の笑みで疑いの余地がないほど嬉しそうに言うのは。そんな彼女に手を引かれどこかぎこちない笑顔を

コウキはなのはの母 桃子 に向ける。

「ご無沙汰してます。桃子さん」

「…本当に……ああ、大きくなって。」

あなた、コウキくんが！」

「なっ、なんだって!?!」

桃子に呼ばれて血相かえて奥から出てきたのは
エプロン姿の屈強そうな男性でなのはの父 土郎 だ。
彼はしばし呆然とした顔でコウキを見ていたが

「お久しぶりです。 土郎さん」

と行って軽く会釈されると我に返ってぎこちなくはあったが笑顔を見せた。

一見すると久しぶりに知り合いに会った。

程度のことなのだが、なのはの喜びようとは対照的にコウキと土郎との微妙でぎこちない表情が場の空気をどことなく硬くさせ、

ヴィータたちはその場になかなか入ることができなかった。

「あら、そちらの方々は？」

ふとコウキの後ろで入るに入れなくなっていたヴィータたちを見る桃子。

場の空気を察した行動だということはそのさりげなさから誰にも気付かれていない。

「あつ、そつだ。」

今日はこいつらを紹介しようと思って、って入ってこいよお前ら」

「あ、はい……」

呼ばれてためらいがちに店内に入ってくる五人。

「えっと、どういえばいいのかな。」

とりあえず紹介します……俺の、新しい家族です」

五人の前に立ったコウキは少し恥ずかしそうにしながらもそう言い切った。

「へえ、おじさんたちの知り合いなのか」

「はい、コウキちゃんのご両親にはお世話になっていて、でも亡くなっていたことを最近まで知らなかったんです。それでせめてコウキちゃんに恩返ししようと思って身の回りのお世話をさせてもらっています」

「関係ないあたしまで世話してくれて、ほんまありがたいことです」
帰宅した美由紀と恭也はコウキがいたことにはかなり驚いていたが、はやてと金髪のショートボブの女性シヤマルからの説明に納得する。コウキの両親は仕事柄外国を飛び回っていたことが多かったため、こういう言い訳を生前の知り合いに出しても疑われることはない。自宅周辺住民へも同じような説明をして誤魔化している。

「まあ、どっちかという二人に世話されてんのあたしただけだな」
「ヴィータちゃん！」

ケーキを頬張って口周りをクリームで汚しながらもヴィータは皮肉を言った。

しかしシヤマルの慌てようがそれが真実だと雄弁に語っていることに本人は気付いていない。
それを見てクスクスと笑う美由希。

「コウキくんて昔からそういうところあった。
すごい世話好きさんだったからねえ……」

「あううっ、実はそうなんですよ。」

料理は上手だし掃除や洗濯もいつのまにかやっちゃうし、
気付いたら私たちがお世話されてて……」

本当困っちゃいます。とシャルは落ち込むようにうな垂れる。

「シャルの場合、他の家事もだが

料理の腕は特に絶望的すぎるからな。仕方ないだろう」

隣に座るピンク色の髪をポニーテールに結っているシグナムが
無表情に的確な酷評を告げる。

口許だけ笑っているような気もするが。

「な、なによシグナムだつて料理なんかできないじゃない！」

「それは認めよう。だが包丁さばきはお褒めいただいている」

「包丁さばきだけ、でしょう！」

それだつたら私だつて最近腕が上がってきたつて二人から褒めら
れたんだからあ！」

「元が低すぎるからな、上げやすいのだろう」

「な、なあんですつてえ！」

テーブルをだんつと叩いて立ち上がつてシグナムを睨みつけるシャ
マル。

それを受けてフツと笑みをこぼすと同じように立ち上がり、彼女と
対峙するシグナム。

「私とやるつもりかシャマル」

不敵な笑みの挑発にシャマルははなから乗るつもりだ。

「もちろんよ、戦闘能力が低いからって侮ったらひどいんだから！」

「いいだろう。」

なら勝ったほうが今夜主コウキと共にお風呂に入れるというのは「？」

「ええ、いいわ。コウキちゃんの背中流すのは私なんだから！」

いきり立ち、周りの人間を思いつき置いてけぼりにしながら、今まさに取っ組み合いをしようとする二人。

だが、ものすごく落ち着いた抑揚のない声がそれをいさめる。

「二人とも、もうよせ。」

家ならともかく人前で、それも店の中で騒ぎを起こしてどうする

「あっ……」

「…ふ、不覚」

五人の中で唯一の男性にして一番の大柄なその人。

ザフィーラの言葉に場の状況をやっと思い出すシグナムとシャマル。

「シャマル、シグナム……」

そんな二人をもものすごく低音な声が呼ぶ。

びくりと体を震わせその声の主に視線を向ける。
彼は笑っていた。ものすごい満面の笑みを見せている。
ただし、額には青筋が立っていたが。
背筋が一瞬で凍りつく。

「お前ら今晚、食事抜き」

「えええっ!？」

「そ、そんな殺生な!？」

二人はイタズラした子供への罰のような宣告に激しく動揺する。

「店先で騒いだばかりか、また勝手に俺を賞品にしゃがって、
今度やったら食事抜きだと言っておいたはずだが？」

「うっ、それは…」

「くっ、そうだった。思わず失念していた……」

以前にそう宣告されていたことを思い出し、うな垂れる二人。
二人にとって、いや五人全員にとっても食事を抜かれることはかな
りの痛手なのだ。
だからだろうか、ヴィータとザフィーラはどこか同情的な視線を二
人に向けている。

しかしはやてはニコニコとした相貌を崩さない。
この後の展開が見えているからだ。

コウキはがっくりと肩を落とす二人の様子に溜め息を一回吐くと

「何か言うことがあるだろう?」

と助け舟。
その言葉にハツとなったシグナムとシャマルは士郎や桃子に頭を下
げた。

「お騒がせして申し訳ありませんでした」

「迷惑をおかけして申し訳ありません」

「あつ、いえ別にそんな…」

「お気になさらず」

突然といえば突然の謝罪に困惑する二人だが、
コウキは先ほどと違う意味の笑みを浮かべている。

「まっ、素直に謝ったから食事抜きは免除してやる」

と、お許しを出し、それを聞いた二人はほっと胸をなでおろす。

そこへ

「コウキさん、シグナムさんたちと一緒に風呂に入ってるの？」

という素朴な疑問（+ちょっとばかりの嫉妬）
という名の爆弾がなのによって投下された。

「がはっ、ごほっ、な、なにいきなり言い出すんだお前!？」

あまりに予想外の質問にコーヒーを噴出しそうになるコウキ。

「だってさつき一緒にお風呂に入ることを賭けてたから、そうなのかなって」

笑顔で、普通に、疑問なことをただ聞いているように見えるのだが、高町家の面々とコウキは正体不明の悪寒を感じた。

「そんなわけあるか。」

それは勝手にこいつらが賭けてるだけで一緒に入ったことは一度もない！」

「私たちは一緒に入りたいのに、コウキちゃんたら入らせてくれな感じですもの」

「足の悪いあたしとも一緒も入ってくれへんし、ホンマ冷たい人々なコウ兄は」

「人聞きの悪いこというな！ あのな、一緒になんて入れるか。まったく何回言えば分かってくれるんだ、お前らは！」

がおつと吼えるコウキの姿に人知れずホツとするなのは。

それをたまたま見ていた恭也の胸に兄としてとある感情が浮かぶ。それがいつもの彼なら絶対言わないであろうことを口にさせた。

「だってさ、なのは。」

良かったな、お前の憧れのコウキさんはまだ清らかな体してるってよ」

「お、お兄ちゃん！？」

「……………おい恭也、なんだそのトゲのある言い方は？」

むっとした顔で彼を睨むコウキを同じようなむっとした顔で睨み返す恭也。

「……………どっか行くのも突然で、やってくるのも突然で、そのうえ三年前に帰ってきてたのに
挨拶の一つもなかった奴に対してのただの嫌味だ」

「うっ、それは……………」

恭也の言に思い当たる節がありすぎるコウキは二の句が出てこない。それに関しては全面的に自分が悪いと認めているからだ。だから、出てきたのは小さく弱々しい謝罪の言葉だけだった。

「……………ごめん」

「……………まあ、こうして来てくれてるし、お前のことだ。」

「これっきりってわけじゃないんだろ？」

「あ、ああ。これからはちよくちよく来させてもらっつ。
うちの連中もこのケーキは気に入ったみたいだしな」

そうだろ、と問いかけられると五人はそれぞれの反応を返しながらかも頷いた。

「じゃあ、コウキさんまた昔みたいに遊びにきてくれるの？」

「ああ、これからまたよろしくな。なのは」

「うんっ……………」

と今までで一番嬉しそうに笑うのはに、
また女性陣は胸の中でもやっとしたものを感じていた。

過去との再会（後書き）

高町家の面々は出番が少ないし

俺とらハシリーズ知らないから情報が足りなくて書きにくい。

とくに長男さんはどうしたらいいやら、困っています。

次回もちよっただけ出番あるのに……

少女の原点

「ふう……」

小さな溜め息を吐きながらベッドに倒れこむ私。

過ぎてみればあつという間に時間は過ぎていて、

碧屋自慢のケーキとコーヒを味わってコウキさんたちは店を出た。

お父さんやお母さんは「久しぶりに一緒に食事でも」と誘ったけど

コウキさんは「今日はいきなり大勢で来てしまったので」と断っていた。

ちよつと残念。

「……何も考えないでやってみる、か」

去り際にコウキさんは私だけに

「何をやっているのかも何を悩んでいるかも聞かない」

と一言前置きしてからそう言った。

お前は昔から物事を深く考えすぎるからたまには何も考ええずやってみる、と。

私にとってはそれが一番難しいことだと知っていながらそう言っただから意地悪だ。

ううん、ちよつと違うね。

コウキさんは余計なことは考えずに心が思うままやれと言ったの。

「自分の気持ちに素直に……」

そう、コウキさんの言い分はきつと正しい。

でも問題なのはその気持ちを私がよく分かっていないこと。

私はどうなりたいのだろうか？

あのきれいで真っ直ぐな瞳を持つ、

きつと優しくして私と同じ歳ぐらいの女の子と。

「なのは、大丈夫？」

耳元でコーノくんが心配そうに尋ねてくる。

「うん、大丈夫。」

久しぶりにコウキさんに会って少し緊張しちゃったただだよ」

そういつてその証に起き上がって元気よく笑ってみせる。

嘘は言っていないよ。本当に緊張したんだから。

すっごく背が伸びてたし、かっこよくなってるし。

そのうえ美人さんいっぱい連れてるし。むう。

「そっか……そういえば聞きそびれちゃったけど、

みんなの話を聞いてた限りだとあのコウキって人って、いわゆる
幼馴染？」

「うん、そっだね。私のお母さんとコウキさんの両親の仲が良くて
ね。」

私が2歳ぐらいになるまで家族ぐるみの付き合いだったらしいよ」

「えっ、2歳ぐらいまで？」

あの、えっとそれじゃなのはあんまり彼のこと覚えてないんじゃない？」

あつ、しまった。とは思ったけれど後の祭り。

あんまり吹聴するような話じゃないけど、

ユーノくんならその心配はないから話しても大丈夫かな。

「うん、それぐらいのときはあんまり。

実はその時にね、お父さんが外国で事故にあってね。

ベッドの上から全然動けないぐらいの大怪我したの」

「え？」

驚くユーノ君に私は続けた。

あのちよっと寂しかった日々のことを。

まだ碧屋も今ほど人気があったわけじゃなかったから

お母さんとお兄ちゃんはお店の切り盛りで忙しくて、

お姉ちゃんはお父さんに付きっ切りで看病。

家にはほとんど私一人だった時期があったの。

時々おばあちゃんが来てくれたこともあったけどそれは本当に時々だった。

事情が事情だったから、私も寂しいって気持ちとか

我が侘なんかも口に出せなかった。

「そういう時だったかな。

決まってコウキさんは私と一緒に遊んでくれて、話を聞いてくれて。いろいろなことをして、いろいろなことを教えてくれてすっごくすっ

「ごく楽しかった」

「へえ、そうだったんだ」

そう楽しかった。だってあの頃の私は何にも知らなかったから。知らなかったから、楽しめたの。

でもあの時コウキさんは楽しめていたんだろうか？

いつも笑ってた。いつも楽しそうだった。

けれど今思い出すと、あの時のコウキさんの気持ちを考えると、胸が張り裂けてしまいそう。

何にも知らなかった自分。

何も気付けなかった自分を今でも私は許せない。

「なのは？」

「えっ！？ あっごめんユーノくん、なに？」

あわわっ、いけない、いけない。

つい考えこんでユーノくんの話聞いてなかったよ。

「……やっぱり、今夜はジュエルシードの探索は休もうか？」

少し考えたユーノくんは意外なことを言ってきた。

そんなに私、具合悪そうな顔してるのかな？

「別に毎日探索しなくてもいいし、探すだけなら僕一人でも」

「大丈夫だよ、ユーノくんは心配性だなあ」

私がおかしそうにクスクス笑うとユーノくんは不満そうな顔をしたけど、

すぐに「分かった」と頷いてくれた。

「でもその代わり、夜まできちんと休んでね」

うん。と私も頷いて、ベッドに横になる。

あれ？

やだなあ、私本当に疲れてるのかな。

瞼が重た・・・い・・・ねむ・・・

碧屋のキッチンの奥で恭也とその恋人である忍は肩を並べて皿洗いをしている

忍は恭也とコウキたちが話をしているときなぜか恭也によって店の奥へと押し込まれた。

それがご不満だったのか少しばかり機嫌が悪そうである。

「だから悪かったって。

でもあいつにお前を紹介したら絶対からかわれる。

俺、あいつに言っただけやらないことがあったから

そうやって茶化されなくなかったんだよ」

「言いたかったことって、あれ？」

『ただの嫌味だ』ってやつ?」

「ま、まあ、そうだけど……」

「なんか恭也らしくないのいっぱいあったけど、
いったい何があったの?」

尋ねられて少しだけ逡巡した気配を見せた恭也だったがわりとすぐに口を開いた。

それだけ彼女に対して心を開いている証ではあるが、それはまた別の話だ。

「父さんが大怪我してベッドから動けなくなっていた時期。

どうしてもなのはを一人きりにすることが多かった。

コウキはそんなときなのはの遊び相手になっていたみたいなんだ。
本当ならそんな余裕あいつにあるわけがないのに」

200

手にした皿を割りそうなぐらい力を込めながら、

彼は少し悲しそうでそれでいて怒っているような顔をする。

そしてその時の不満を吐き出すかのように続ける。

「父さんが大怪我したテ……じ、事故でな。

あいつの両親は亡くなってるんだ」

「っ!?!?」

彼女は息を呑んだ。

それがどういうことか、分からないわけがない。

「じゃ、じゃあ彼って両親を亡くしていたのに

なのはちゃんのお世話してたってこと？」

「ああ、しかもあいつの家ってそれなりにお金を持ってた家だったからしくてさ。」

遺産とかコウキを誰が引き取るかですっごくもめたらしい。

当時の俺たちは自分たちのことで精一杯だったから知らなくて

なのはも小さかったから、うちの事情は分かってたけど

あいつの両親のこととか知らなくて、俺たちも言えなくて……」

そのうえなのは本人に口止めしていたために

高町家の人々はコウキの行動に一切気付いていなかった。

恭也たちがそれを知ったのはコウキが遠くの親戚に引き取られて、なのはの所へこれなくなった後。

うっかりなのはがコウキが来ないと嘆いたことが切っ掛けだった。

「後にも先にもあれが初めてだった。

あんなに感情をあらわにして泣きじゃくるなのはを見たのは」

当初は真実を隠そうとした高町家の面々だったが、

その行動がかえってなのはに疑心を生んでしまい、

結果まだ幼かった少女は自ら重たい真実を知ってしまったのだ。

「悔しかったんだと思う。」

コウキは寂しい思いをしてた自分を気遣ってくれていたのに、

どうして自分はそのコウキを気遣ってやれなかったんだろう。

どうしてあいつの悲しい気持ちに気付いてあげられなかったんだろって。

それからだよ。

なのはが相手の気持ちや寂しさとかにすごく敏感になったのは…

…」

「そう、だったんだ……」

なんともいえない表情で忍は自分が知るなのはの姿を思い出す。

笑顔が可愛くて真面目で相手の気持ちを考えてくれる優しい女の子。

けれど時折、歳とは不相応なぐらい大人びた顔をしている子。

その意味が忍にはやっと分かった気がした。

けど、と忍は考えた。

泣いた理由は本当にそれだけだろうか、と。

一回だけ店を覗いていた忍はたしかに見ていた。

彼女の、今まで一度も見なかったようなとっても素敵な笑顔。

同じ女としてあれば、歳相応の恋をしている女の子の顔だと思った。

いや絶対そうである。

「……ということもしかしたらあの子は将来的に私の義弟に……」

「は？」

それもまた別のお話であった。

出会う過去（前書き）

いつもより、長め、かな？

出会う過去

あの日、俺は一つのことを決意した

「……………聞いてもいいか？」

「なんだ？」

月明かりがきれいな夜。

どこかのビルの屋上で自身が跨る狼が問いかけてきた。

彼らは時々一人と一匹で夜中このスタイルで走り回っている。

「あの家の者たちと旧知の仲だったようだが、

どうして今まで会いにいなかったのだ？」

そう訊ねたものの狼が聞いたかったのは実はそんなことではない。

何故あんなにぎこちない顔で高町家の人間と応対したのか。

それが聞きたかったが、それをそのまま訊ねるのは憚られた。

ちなみにこの質問は他の四人からも聞いてほしいと頼まれていたことだ。

訊ねられた少年は困った笑みを浮かべて、どう説明すべきか悩んで

いる。

「俺の両親が外国で事故に巻き込まれて死んだのは前に言ったよな？」

それがまとまったのか。淡々と事実を語る。

「はい」

ザフィーラもあえてそれに反応はせず、普通に頷いた。

「土郎さんは昔ボディガードみたいなことをやっていたんだ」

仕事で少し危険な地域に行くコウキの両親と彼をボディガードしていた。

事故に巻き込まれたさい、高町土郎はコウキを庇って重傷を負った。

「生きているのが不思議なくらいの大怪我で

そのせいで高町家は大変なことになった。

とくにまだ小さかったなのは寂しい思いをさせてしまった」

それが一番辛かった。

と彼は語る。

「だから俺の責任じゃないんだろうけど

そういうの気にしちまって顔を合わせづらかったんだ。

まあ、土郎さんからすれば俺の両親を守れなかったっていう罪悪感があるから、

それを気にしてほしくなくて、っていうのもあるんだけどね」

「そう、だったのか」

と頷いて、得心がいった。

それならば再会したときの二人の間にあつた微妙な雰囲気も理解できる。

「まあ、互いに気にしすぎなんだろうけどな」

少し自嘲気味に笑つて、でもどうしてそんな、といいかけてハツとなる。

「もしかして俺、変な顔してたか？」

「…おそらくは、ぎこちなかつたと」

ザフィーラの素直な感想に苦笑するしかないコウキ。

だが、と内心ではいい傾向だとも思っていた。

心の動きが顔に出るようになったのだから。

「さて、そろそろ帰るか。遅くなるとあいつら露骨に不満そうな顔するからな」

「皆、コウキにかまってほしくてしょうがないんだ。

それなのに俺ばかりと散歩に出るから」

「それは　っ!？」

「んっ!？」

一人と一匹はほぼ同時にソレに反応した。

「いまのは、なんだ？」

「……魔力反応？」

突然、それもいきなり現れたかのように彼らの感知圏に魔力を放つ何かが出現した。

人か物かは判断できなかったがそれはありえなかった。

この世界で魔法を使える者も物も自分達しかいないはずなのだ。

互いに同じものを頭に思い浮かべて顔を見合わせる。

その顔は互いに全く同じ最悪の可能性を考えていた。

「管理局、かな？」

「いや、今のだけではなんとも……だが一旦家に戻ったほうが」

「待て、ザフィーラ。それでは何も分からない。

ここは反応のあった場所に行ってみよう。

相手は何なのか、魔導師ならどこの、そして何が目的でこの世界にいるのか確認しないと」

そう、この世界にいないのなら別世界からやってきたと考えるしかない。

「いや待てそれならシグナムたちも……」

「だめだ。あいつらは顔を知られているんだろ？」

もし相手が管理局の魔導師で闇の書を知ってる奴だったら言い訳ができない。

でもこの姿のお前はあまり知られていない。

なら、最悪そうであつても言い訳はいくらでも用意できる」

しばし 時間にして三秒 考えてザフィーラは頷く。
そして自身に跨ったままの主を背に彼は走り跳ぶ。

いくつも並ぶビルの屋上を駆け抜け、主が指示する場所へと向かう。自宅がある中丘町とは逆方向。計十七のビルを飛び越えてそこで止まる。

ビル街の谷間にありながらそこはまるで異空間だといわんばかりに灯りはなく人気もない。

そこにそびえ立っていたのはどうやらもう住む者もない廃墟ビルのようなのだ。

見れば解体工事を近々行うとの旨の看板が立っていた。

「どうやらここのようなのだな」

「ああ、ここまで近づいてはっきりした。ここに何かある」

ザフィーラの背から降りて、瞼を閉じて意識を集中させる。

右手を左手の指に重ねながら、探査魔法を使う。

使ったのは特定の物を探すタイプではなく探査する範囲に何かあるかを探査するタイプだ。

人間の反応はなく、危険物とおぼしき物は魔力を発しているもの以外はない。

他の生物はこういう場所には付き物の小さな虫程度しかない。

「っ！ やっぱ中だな。」

位置的には……十階ぐらいか。行くぞ」

黙って首肯しコウキの後に続くザフィーラ。

危険・立ち入り禁止の看板と黄色いロープを無視してビルに入り、

階段を駆け上がる。

一気に十階までたどり着くが、息は切れていない。どちらもそれほどやわではない。

並んで奥へと進む。すると目的のものはすぐに見つかった。

というよりは見つけてくれと言わんばかりに堂々と光り輝いて宙に浮いていたのだ。

「なあ、あんだだけ光ってたらいくら廃墟ビルでも普通誰か気付かないか？」

その宙に浮く丸みを帯びたひし形の青い宝石を指差してコウキは言う。

「おそらく何かしらの衝撃で突然起動したのだろう」

「なるほど、で、あれが何か分かるかザフィーラ？」

「何かしらのロストロギアだとは思うが、詳しくは……」

「分からない、か。」

にしてもあれが搜索指定遺失物、いわゆるロストロギアってやつか」

ロストロギア。

それはすでに滅んだ超高度文明から流出する特に発達した技術や魔法の総称。

コウキとはやてが所有する闇の書もこのロストロギアに分類されている。

次元世界における司法機関である時空管理局ではそれらに最優先で対処するという。

つまりは、本来ならこの世界にあるはずがないものである。

「まずいな。まさかロストログアだとは思わなかった」

口調は軽かったもののその実、表情には緊張が走っていた。ロストログアがここにあつて起動している以上、

管理局が出てくるのは時間の問題だといつていい。

だが、自分たちには管理局と接触できない事情があるのだ。

（見たところエネルギー結晶体、それも次元干渉型か？

普通なら封印しておくべきなんだろうが、

下手に触つて小規模でも次元震を起こしたら

それこそ管理局に確実に気付かれる。封印のやり方は分かっているけど

実際やったことないし、危険なことはすべきではないか）

「ザフィーラ、とりあえず隠れ　っ!？」

「ちっ!」

彼にしては珍しく舌打ちするザフィーラ。

コウキはそれを狼の口でどうやってしているんだろうか。

と、一瞬どうでもいいことを真剣に考えた。

失態を演じたから単に軽く現実逃避しただけだとコウキは自己分析する。

あれがロストログアだと分かる前からどこかに隠れていればよかったのだ。

外部からでもあれが何であるかを調べる手段はいくらでもあったし、誰かが来たら管理局の者かどうかを確認すればいい。

そしてその結果を見てから行動を考えるべきだ。
もちろん誰もこないという可能性もあった。
しかしこっちは絶対に管理局と接触できないのだから
それぐらい慎重にすべきだったのだ。

なのにわざわざあちらが探しているロストログアの目の前で
のんびり会話していた。

結果

「……これって封鎖領域かな？」

「いや、これはミッドチルダ式の封時結界。

通常空間から特定の空間を切りとり時間信号をずらす魔法だ。

それよりもすまん。

俺としたことがここまで近づいてきていて気付かなかったとは……」

正体不明の何者かに後ろをとられてしまっていた。

「気にするな、俺も気付かなかった。

それより……振り返ってもいいかな？」

最後は後ろにいる何者かへの問いかけ。

「好きにしな」

と若い女の声で返答があったので

コウキとザフィーラは同時に振り返って、コウキの双眸は驚愕に彩
られた。

自分達からおおよそ4 mほど離れた場所に立っていた人影は二つ。

一つは返事をしたと思われる若い女性。外見から16歳前後と思われるがその隠すつもりすらない獣耳と揺れている尻尾が自分が獣人だと告げていた。けれど、それ自体には全く驚かなかった。なにせこちらにも似たような存在が隣にいるのだから。コウキが驚いたのはその隣にいたもう一つの小さな人影に対してのものだった。

歳はなのはやはやてたちと変わらないくらいで綺麗な金色の髪をツインテールに結っている少女だった。その顔に笑みでも浮かべていればそれはもう間違いなく万人に可愛らしいといわれる類のものだろう。ただし黒いマントを羽織っている姿はまるでお話の中の魔法使いのようでありその顔に笑みはない。その顔を見ていると何か胸の一番奥が締め付けられる。それはそうだ、あの顔はコウキがよく知っている表情「かお」なのだから。

「そこ、どいてくれないかな。」

私たちその後ろにあるものに用があるんだけど」

少女より一步前に出て獣人の女性は言う。

コウキの横、若干に前足を出して相手の出方を伺うザフィーラ。もし動きがあれば即座に飛び出し、主の盾になる覚悟で。

（どうするコウキ？）

言葉には出さず、思念通話といわれる手段で主の返答を待った。が、口でも、思念通話でも、主である少年は答えなかった。

(コウキ?)

目の前に正体及び目的不明の存在がいる以上視線を相手からそらすわけにもいかず

ザフィーラは相手を威嚇したまま念話で語りかける。

「おいこら、返事くらいしろ。」

私らは別にやりあおうっていうんじゃないんだ。

そこを黙ってどいてくれればいい」

(どうしたのだコウキ、俺の声は聞こえているはずだ。返事をしろ！)

しかし、いつもなら呼びかければ必ず反応を返してくれた少年はなぜか今いくら呼びかけても返事をしなかった。

振り返って少年の様子を見たい気持ちを抑え込んで

目の前の相手を睨み、唸り声で威嚇する。

それで正解だったかもしれない。

いまこの表情をしたコウキを見たらザフィーラも動きを止めてしまおうだろう。

なにせ彼はまるでこの世の終わりだといわんばかりの青ざめた顔をしていたのだから。

幸か不幸か。

月明かりは少女達しか照らしていなかったために誰もその顔を見ることはなかったが。

「……フォトン、ランサー」

短く小さな少女の呟きは、そう意図したわけではなかったがコウキ

を我に返させた。

『Yes sir.』

少女は斧のような形をした杖 デバイス を突き出し、その先に金色の光を放つ球体を作る。

それは彼女の魔力の光。そしてそれは何より攻撃の光。

「くっ」

思わずコウキの前に飛び出しそうになるザフィーラは、だが足を止める。

(動くな！)

と強い声が漸く返ってきたからだ。

球体から光が槍のような姿で自分達に向けて発射される。

それを見てもコウキは動かず、ザフィーラもまた動かない。

コウキには確信が、ザフィーラには主に対する絶対的な信頼があったがゆえに。

「……………これは、威嚇ってことでもいいのかな？」

少女が撃ち出した光の槍はコウキの足元に落ち、床に小さな窪みを作った。ただだった。

「で、次は当てるからどいてくれと言いたい？」

「……………」

コウキの問いかけに少女は無言のまま頷いた。その顔の表情は硬く感情は見えず、その瞳には強い意志を感じるが光が宿っていない気がした。知らず歯を食いしばっていたことに気付いたコウキは意識的に体から力を抜いた。

「三つだけ、質問していいかな？」

「それは……答えれば、どいてくれるってこと？」

「そんな交換条件を出すつもりなかったけど、そっちのほうで君が答えやすいならそういう条件でいい。もともとあのロストロギアに興味があったわけじゃない。あれそのものか。あれを取りにくる奴が俺の家族にとって敵なのかどうかを調べにきたただけだから」

それは本当にコウキの嘘偽りのない本心だ。そしてその言葉をどう受けとったのか。少しばかり逡巡した様子を見せた少女はデバイスの矛先を下ろした。

「ありがとう……」

それを「質問に答えてもいい」という意思表示として受け取ったコウキは問う。

一番に聞かなければならないことを。

「まず一つ目、君は管理局の人間か？」

わずかばかり緊張した面持ちで問いかけるコウキに

少女は「違う」と首を横に振った。
ほっと胸をなでおろす。
想定していた最悪のことをしなくてすんで。

「よかった。そうだって言われたらどうしようかと思った」

(最低でも記憶の改ざんくらいしないといけなかったらうな)

心底安心したような笑みを浮かべたのはそれをしなくてすんだからだ。

「じゃあ二つ目だ。えっと、俺の名前は日野コウキ。

で、こっちは俺の家族の一人でザフィーラっていうんだけど、君たちの名前は？」

そう満足気味の笑みを浮かべつつ問いかけるコウキに対し
虚を突かれたかのような顔をする少女と獣人。

なぜ名前なんかを聞いてくるのか。

二人はよくわからなかったがそれぐらいなら答えてもいいと判断した。

「…フェイト・テスタロッサ」

「アルフだよ」

「そうか。フェイトにアルフか……ん、じゃあそいつは？」

と彼が指差したのは少女フェイトが持っている斧のような杖。

デバイスと呼ばれ魔導師が魔法を使うさいに補助するもの。

いくつか種類があって、自立行動し思考能力を持つものを

インテリジェントデバイスという。
コウキはさっきの短い受け答えで
それがインテリジェントデバイスなのだろうと推測していた。
だから、名前ぐらいあるだろうと思ってたの質問だ。

「この子はバルディッシュ」

また変なことを訊く。とは思いながらも答える。

「へえ、バルディッシュか。かつこいい名前だな」

というフェイトとアルフからしてみれば予想外すぎる返答に言葉が詰まる。

『Thank you.』

しかし、しっかりとバルディッシュ本人(?)が
答えてくれたのでコウキは話を進める。

「じゃあフェイト、最後の質問だ」

二つ目の質問と同じく緊張の色など一切なく、
彼は友人と話しているかのような気軽さで尋ねる。

「あのロストロギア、何に使ったつもり？」

空気が、いきなりその重みを変えた。

どこか飄々としているのはコウキだけだ。

どこか気が緩んでいた獣人アルフの体に目に見えて力が入り、
それを感じたザフィーラは威嚇の意味で唸り声をあげる。

そして、フェイトは手にしているデバイスを強く握り締めた。

『Scythe form Setup.』

主人の命令を聞くことなく、そのデバイスは自身を変形させた。ヘッドを本体とは直角に展開し、先端から魔力光で作った刃を発生させる。

サイズフォームの名が示すと通りの鎌のような姿。

フェイトはわずかに腰を落とし、そのバルディッシュを肩に担ぐように構える。

「なるほど、それは答えられないから実力行使で取りに行くってこと？」

首だけを縦に動かして頷くフェイト。

「ふふふ、律儀で真面目だね君は。

そういうのクライじゃない、むしろ好きな方だ」

だから、困った。と心で愚痴る。

(コウキ、どうする。逃げるか、戦うか)

そう、現在それしか自分達が取れる選択肢はない。

けれどコウキはどっちも「嫌」だったのだ。

この目の前にいる少女はきつといい子だと確信している。だから、戦いたくない。

そして、それとは別に彼女は危ない状態だと感じている。だから、放って逃げることなどできない。

(困った、困った。さて、どうす　　っ!?)

それは見えた。

かすかだけど確かに見えた。

今までマントで隠れていたがバルディッシュを担いだことでその二の腕とそこにかすかに残るソレが見えた。

頭の一番奥がカツとなる。自分で抱いてしまった想像に怒りを覚える。

それが自分の勘違いであってほしいと思いつながら、多分事実だと冷静に分析している自分がいる。

けど、それで決まった。ここで自分がすべきことが。

多分、それを見なくても同じだったではあるうが。

「……正直さ、君は信用できると思うからあれを渡してもいいと思つてた。」

管理局の人間でないのなら戦う必要もないしね」

フェイトは何も言わない。反応もしない。

まるでその先の言葉を知っているかのように。

「でも、それはあくまでフェイト・テストロッサ個人に対してだ。」

君にその指示を与えた人間は信用できない」

「…なぜ、私が指示を与えられていると思つたの?」

はつきりと断言したコウキの言に対して、

まったく不思議がらずに問いかけるフェイト。

その横で分かりやすく驚愕しているアルフはちなみに二人の視線には入っていない。

「バカにされるかもしれないけど。」

目っていうのはさ、時として口以上に色んなことを喋るんだよ。

君……フェイトからはそれをやり遂げようとする強い意思は見えるけど

それをやりたいっていう感情が見えてこない。

言われたから、やっている感が丸出しだ。

けどさすがに事情までは分からないから

勝手な言い分になるけど、これだけは言わせてくれ」

そこで一旦言葉を切ってコウキは一回息を大きく吐いた。

続く言葉を発することに僅かな躊躇があった。けれど。

見据えた少女に誰かの輪郭が重なっているように見えてしまい、彼は口を開いた。

「自分さえ我慢すれば、自分が頑張れば……なんていう甘い考えは捨てたほうがいい」

彼にしては珍しく強張った硬い声で吐き捨てるかのようにそう告げた。

それが、それが本当に、彼には珍しい声色だったから、ザフィーラは思わず振り返って主を見上げた。

蒼狼の主は顔からは何も訴えていなかった。だから。だから、彼はわかってしまった。

主はいま必死で何かの感情を押し殺しているのだと。

「コウ……」

「あ、あんたに何が分かるってんだっ！」

咄嗟に声をかけようとするもそれはアルフの叫ぶような言葉に阻まれる。

が、その声には内心で感謝した。

その声を聞いてザフィーラは目の前に彼女たちがいたことを思い出したからだ。

再び彼女たちに向き直ると様子が一変していた。

デバイスを担ぐ少女の顔は蒼白でその手が僅かだが震えていた。

そしてその少女を守るうとするようにアルフは一步前に踏み出して激昂している顔と瞳でコウキを睨み付けている。

コウキの言葉はかなり核心をついていて、

だから彼女達の心を大きく揺さぶったのだと蒼狼は冷静に分析する。

「あんたもあの白い服の奴も好き勝手言っつ、

こんなぬくぬくした世界で呑気に生きてきた奴にフェイトの何が分かるっつてんだっ!」

溢れ出る感情を抑えられず、いや抑える気さえなくアルフは敵意を超えて殺気立つ。

それをまるで柳か暖簾のように受け流してコウキは

ザフィーラが聞いたことも見たこともない悲しげな声で諭すように

「それは…フェイトが厳しい世界でひどい扱いを受けて苦しんで生きてきたんだ、

っつて、言っているのと同じだぞアルフ」

言いながら、それに負けなくらい悲しげな笑みを浮かべていた。

けれどその笑みは一瞬で消え、代わりに覚悟を決めた顔と共に

コウキの足元に魔法陣が現れる。
正三角形のそれぞれの頂点に円が組み合わさっていて、
中心には十字の紋章があるのがベルカ式の魔法陣の特徴だ。
それを見て完全に臨戦態勢に移行するアルフ。

「それは私たちとやりあうっていう意思表示と受け取っていいの
かい？」

最後通牒のような物言いに、しかしコウキは反応せず
隣にいる蒼狼だけに届くような呟きを発した。

「悪いザフィーラ、俺のワガママに付き合ってくれないか？」

その言葉にザフィーラは口が自然と笑みの形になるのを止められな
かった。

なにせそんな頼まれかたをされたのは初めてのことだ。

この主は困ったことに滅多にワガママなど言ってくれないのだ。

だから決めていた。この主がそう言ってくれたら、こう返そうと。

「…喜んで！」

短い言葉に感謝の眼差しと頷きで少年は返す。

そして目の前の少女をその瞳でただ真っ直ぐに見据える。

思わず齒軋りする。胸の中できしむ音とともに決るような痛みがあ
るよつに感じる。

決めていたことがある

こみ上げてくる思いを抑え込んで、
指輪がはまっている左手の指に右手を重ねる。

すべてを諦めてしまったあの日に誓ったことがある

「いくぞ、ザフィーラ！」

全てを捨ててしまったあの日から決めていたことがある

一人と一匹は軽やかに床を蹴った。

いまこそ、あの日の誓いを果たしに行こう

出会う過去（後書き）

やっとフェイトが登場。

そして続きます。

次話でやっと最初のバトルに突入です。

第4話予告

なのは「互いに譲れぬ想いがあって、ぶつかりあうフエイトちゃん黒衣の魔導師と
新米コウキさん魔導騎士」

ユ一ノ「そこへ現れる第三、第四の魔法使いたち」

なのは「…出会はずのなかった、出会ってはいけなかった私たちの
出会いが」

ユ一ノ「ゆつくりと流れていた時間を加速させていく……」

二人「次回、魔法少女リリカルなのは異伝・第4話『集う魔法使いに、
リリカルマジカルがんばりますっ！』」

コウキ「お前も俺を馬鹿だと思うか？」

それぞれの守護獣（前書き）

まさか初バトルがこのふたり（二匹？二頭？）になるとは思ってた。
かった。

それぞれの守護獣

いつからだっただろうか？

自分の生き方を下手くそだと思うようにな

ったのは

だって俺は分かってるんだ

他にもいろんな生き方があることを

もっと賢い選択肢があることを

けれどいつも、俺にはそれを選ぶことができ

なかった

他人「ヒト」はそれをバカだと、愚かだとい

うだろっ

まったくもってそのとおりだ

だって今まさに、その愚かな選択をして厄介事に首を突っ込んだのだから

そうやって俺はずっとこんな馬鹿なことを続けていくんだろっな

この命が消えてしまっその日まで、ずっと

一人と一匹は軽やかに床を蹴った。

それに即座に反応したのは獣人の女性アルフ。

金髪の少女・フェイトを庇うように前に飛び出しながら自らの姿を変化させる。

突っ込んでくる蒼き狼ザフィーラに対抗するかのように獣の姿をと

る。

毛色こそ違うが額の宝石のようなものが彼と同種の狼だということ
を告げていた。

互いに鋭いツメを振りかざすが、かすりもしない。

しかしすれ違いざまにアルフは床を蹴ってその体ごとぶつかっ
てい

く。
「ぐっ！」

避けそこなったザフィーラは小さなうめき声を残して吹き飛ばされ
る。

激突した壁は衝撃を受け止めきれず抜けてしまい、
粉塵が巻き起こってザフィーラの姿が消える。

「フェイト！」

いまのうちに、と促すアルフの声を受けて、
いるはずの少年 コウキ と向き合おうとして気配が消えているこ
とに気付く。

しかも、さっきまでその彼の後ろに光り輝き浮かんでいたジュエル
シールドまでない。

「い、いつのま フェイトッ！」

驚きを声に出そうとした瞬間、

動物的勘でもってアルフはフェイトを軽く突き飛ばす。

次の瞬間

「ぐおおおおおっ！ー！」

狼の咆哮が響き渡る。

光の刃のようなものが床から飛び出し彼女達の足場を破壊する。アルフによってその範囲外に出されていたフェイトは無事であったが、

そのために反応が遅れたアルフは崩れる足場と共に落ちていく。

「アルフ！」

床に開いた穴を覗きこむが、下の階にその姿はない。

よく見れば何階か同じように床が抜けている。

先ほどの攻撃はこの階だけでなく同時に複数の階の床を破壊していたのだ。

「アルフっ！」

飛行して下りようとする彼女を、しかし使い魔の声が遮る。

（フェイト、あたしは大丈夫だよ。）

あっちの使い魔は私にまかせてフェイトはジュエルシードを）

念話による通信。フェイトは内心で胸をなでおろす。

（うん、わかった。気をつけてね）

（フェイトもね、何かあったら呼ぶんだよ）

見えはしないだろうが、頷きで答えてフェイトはふわりと僅かに浮かび上がって床の穴を越える。

いつ消えたのかは分からないが、さすがに転移魔法を使ったのなら

気付ける。

それどころか何かしらの魔法を使った気配すらない。

なら、彼は自分の足で逃げたことになる。追うのは容易。

そう判断したフェイトは闇に染まっているビルの奥へと文字通り飛び込んでいった。

「……………さて、あんたいつまで隠れてるつもりだ」

気配で主が移動したことを察知した使い魔は意識を完全にここでの戦闘に移行する。

床が崩れて、そこから約五階分ほど落下した。

途中、飛行してフェイトのところへ戻ろうとも思ったが

相手の使い魔が下にすでにいることを感知して、

自分がそれを抑えれば主にかかる負担が減ると考えた。

あの少年が動き出す直前に起動をさせていたデバイスらしきものは戦闘用のものに見えなかったからだ。

なら、少年の腕前がどれほどのものだろうと

彼女が知るフェイト・テスタロッサという魔導師が負けるはずがない。

「早く出てきなよ。」

急がないとあなたのご主人様うちのフェイトにやられちゃうかもよ」

暗いビルの中、月は雲に隠れたのかほとんど明りがない。

しかし、アルフは使い魔になる前は野山に住む野生の狼だったのだ。

この程度の暗さなど問題ではない。

自分の周りの瓦礫はもちろんのこと、暗がりの奥。

何かの資材の裏に隠れている狼の姿を五感すべてで認識している。

「いくら隠れても見えてるよ、いいかげん出てきなっ！」

けれど口調に僅かな苛立ちが含まれてきた。

いくら主を信用しているとはいえ、離れていることは不本意なのだ。彼女は一秒でも早く目の前の敵を倒して主の下に戻りたい。

そう思うがゆえに、何を言っても、どんな挑発をしても闇の奥の狼は反応しないことに苛立つ。

「くっ、見えてるって言うてんだろ！」

先に痺れを切らしたアルフが資材ごと撃ち抜くつもりで

光の槍「フォトンランサー」を一発だけ放つ。

「ちっ」

小さな舌打ち音。

着弾直前に飛び出した狼を迎撃するように飛び掛るアルフ。それを読んでいたザフィーラは彼女にぶつけるような形で

防御魔法「パンツァーシルト」を発動させる。

ベルカ式の三角形の魔法陣が盾となつて、アルフの爪と牙を防ぐ。

「なあっ!？」

アルフには防御魔法を使われても、それを破壊する自信があつた。だからこそその直接攻撃。

しかしバリアブレイクに長けていた彼女の予想以上にそのシールド

は堅固だった。

「盾の守護獣を舐めるなっ！」

空に四肢で座して、吼える狼。

同時にシールドからの反発で弾き飛ばされるアルフだったが、床との激突の寸前体をひねって無事着地する。

すぐに空に座したままのザフィーラを睨み上げ、唸り声をあげて威嚇する。

ザフィーラはしかし動かず、アルフに鋭い視線を向けているだけ。

すぐに反撃がくると予測していた彼女にとって、それは解せなかった。

先ほどから、こちらの挑発に乗らず、攻撃されても取った行動は回避と防御。

それはまるで、

「っ！」

(フェイト、聞こえるかいフェイトっ！)

まるで時間稼ぎをしているかのようだ。

思った次の瞬間念話を飛ばすが主からの返答はなかった。

「どうやら……主と連絡がとれなくなったようだな」

動揺が顔に出たのか、ザフィーラはゆっくりと床に下りて口を開いた。

「フェイトに何をした！ 答えろっ！！」

主を思つてか、すさまじいまでの殺気すら混ぜて烈火のごとくアルフは叫ぶ。

「別に何もしていないだろう。」

コウキは二人だけでの会話を望んでいたから通信妨害でもしているのだろう。」

それに涼しい口調で淡々と答えるザフィーラはまるで柳か暖簾だ。

「二人だけで会話？」

「たたくさつきからあんたの主人は言ってることもやってることも無茶苦茶だ。」

「いったい何がしたいのさ！」

「知らん。」

俺はただコウキの守護獣として初めての我が侘を聞いているにすぎん。

「だがっ……………」

そこで、彼の口調が一変する。

今までの抑揚のない声とは違う激しさを孕んだ声。

「…個人的に、お前には言いたいことがあるのでな。」

「ここでしばらく足止めさせてもらうっ！」

力強く床を蹴った狼はアルフの反射スピードより速く彼女の間に飛び込みそのまま体ごとぶつける。

シールドは間に合わず、勢いそのまま吹っ飛ばされるアルフ。

「ぐうっ！ こ、このっ、くらいなっ！」

飛ばされたまま視線だけをザフィーラに向けた彼女の周囲に金色の光を放つ球体「スフィア」が6つ。

出現した瞬間、それは槍となり蒼き狼へと放たれた。

「くっ」

後ろへと大きく跳躍し、後退する。その眼前で爆音と粉塵。

先ほどまで彼がいた場所に2発のフォトンランサーが着弾する。

視認していたザフィーラは咄嗟に前面にシールドを展開。

白い煙を突き抜けて迫る槍はしかし、強固なシールドの前に碎け散る。

（っ、2発分！？）

目の前で防いだ槍の数は2、残りさらに2発。

「っ！」

気付いた時には遅かった。

ザフィーラを挟み込むかのように左右から大きく弧を描いて迫る光の槍。

距離とスピードから回避はもはや不可能。

「ぐああっっ！」

ほぼ同時のタイミングでの左右からの衝撃。

避けきれず、直撃を受けたザフィーラではあったがその体に傷はない。

幸いなことに彼女は常に魔法には非殺傷設定をしていた。しかしそれでもダメージを受け魔力を削られたことに変わりはない。

(ふっ… 久しく忘れていたな、戦場の空気というものを。

しかし、だからといって鈍っているなどとは言われたくはないな)

脳裏に叱咤激励してくる同胞をなぜか思い浮かべてしまい、それに苦笑しつつ四肢に力を込めて立つ。

粉塵が消え、視線を向ければ壁に大穴が開いていた。

それもどうやらさらさらに向こう側の壁にも穴が開いている。

「しまったな、力を入れすぎたか？」

彼の主である少年の『我が侂』はいたって単純で、

あの少女と二人だけで話がしたいから足止めを頼むというものだった。

補足すると、できる限りケガをさせないように。

という難しい『我が侂』もいわれていた。

「まったく無茶を言ってくれる」

そんな言葉とは裏腹に戦闘中だというのに思わず笑みを浮かべてしまふ。

「なに笑ってんだい」

苛立つようなわずかに怒気を含んだ声に我に返る。

見れば、崩れた壁の破片の上に四肢を張って立つ姿があった。

あちらも目に見える傷はない。

「無事だったか、とりあえずよかったというべきか？」

「はっ、ヒトを思いつきり弾き飛ばしたヤツがいうことかい」

「ふっ、それを言うな。」

元々我らにはそちらと戦う意思はなくあのロストロギアにも興味はない」

「なら邪魔しないでほしいね」

「全くだ。関係などないのだから、放っておけばいいもの………だが、

それが出来ない男だったからこそ我らも主はやても救われたのかもしれんな」

「………どういう意味だい？」

意味深な呟きに訝しむアルフの問いかけに、しかしザフィーラは答えずただ視線を向ける。

どこかこちらの真偽を、善悪を問うてくるかのような視線にアルフは敵意だけを返す。

それにわずかな笑みをこぼして、彼はゆっくりと語りかけた。

「俺と同じ守護の獣よ。お前は言ったな。」

こんなぬくぬくした世界で呑気に生きているコウキにあの少女の何が分かるのか、と」

「言ったよ、それがなんっ」

「訂正してもらっっ」

「っ!？」

アルフは思わずその場から飛び退きそうになった。

寸前のところで止めたが、それほどその一言には威圧感があった。変わらぬ抑揚のないゆっくりとした口調のはずなのに、目の前の狼はもう先ほどまでの彼とは違った。

「お前達の目的も、あの少女も、我らに手を出さぬのなら興味はない。

だが、それだけは訂正してもらおうっ！」

どこか消極的だった態度が一変しその鋭い目と放たれる気迫は彼が本気になったことを告げている。

「イヤだといったら？」

それに僅かに怯み、僅かに高揚したアルフはあえてそう返した。彼はすぐには答えず、一歩だけ足を進め僅かにかがんだ姿を見せた。それはもう獲物を狙う狼そのもの。

「その時は、盾の守護獣の名に賭けて力尽くでも訂正させるのみっ」

低く響く声にアルフは背筋がゾクゾクと震えたのを感じた。

怯えているのではない。それは武者震い。

彼女はよくも悪くも好戦的で物事を深く考えるのが苦手なためか力尽くで解決しようとするきらいがあった。

むしろそこには主であるフェイトのためという頭文字が必ずつく。そのためにか彼女は動かない。

だからだろうか。

彼女とその主の師だった存在　リニス　がいなくなっ
てから
アルフは本気で戦ったことがない。
そもそも戦いになったことが少なかった。

優しい主はできるかぎり戦闘にならないように注意していたし、
なつてもすぐに終わらせていた。それだけの技量を彼女の主は持っ
ている。

そこに安心と信頼はあつても不満や不平はない。
むしろ主が戦わず、危険を冒さなくてすむならそれにこしたことは
ない。

けど、それゆえに彼女自身知らぬところで

誰かと全力で戦いたいという欲求が積み重なつていた。

そして、目の前にそれを可能とする相手がいる。

「へんつ、やってみせなつ！！」

だからあえて、目の前の自分と同等の存在を挑発する。

無論、そんな細かい理由を本人は理解していないが。

「……………」

それをどう受け取ったのか。

ザフィーラは黙ったまま足元にベルカ式魔法陣を展開する。

ほとんど同タイミングにアルフも円形のミッドチルダ式魔法陣を展
開する。

そして互いに沈黙し静止したまま相手を見据える。

そこへまるで計ったかのようなタイミングで上階から古びた鉄骨が
落ちてきた。

瞬間、それを合図としたように共に床を蹴った二匹の狼は
空中で交差しつつ互いに強烈な一撃を相手に叩き込んだ。

「ぐうっ！」

「あああっ！」

衝突の衝撃から弾かれるように飛ばされる。

しかし互いに空中で体をひねって見事に着地すると間髪入れずに互いに遠吠えにも似た雄叫びをあげる。

途端アルフの周囲に金色のスフィアが4つ形成されるが

先ほどとは違い槍には変化せずそのまま雷を放った。

それを床をぶち抜くような勢いで飛び出てきた光の刃が何本も重なり合って防ぎきる。

そればかりか、同時にアルフの足元からも光の刃が突き出てくる。

咄嗟に飛び退くがその刃は止まることを知らずに伸び続け、着地する寸前のアルフを突き刺す形で捕らえた。

「なっ、につ！？」

驚きの顔のままもがくが突き刺さった刃は抜けない。

非殺傷設定をしているためか外傷はなかったが

それでもかなりの衝撃とダメージを受けた。

それに何より身動きが取れなくなってしまったのだ。

それはこの魔法「鋼の軛くわ」の正しい効果。

むしろ足場を崩すだけだったり防御に使うほうが

分類上拘束魔法であるこれの効果としては少し間違っている。

しかし逆を言えばそれだけ鋼の軛には幅広い運用方法があるということでもある。

ひとえにザフィーラがこれを重宝しているのはそのためだ。

「一応聞いておこう。訂正するか？」

「くっ、やだ、よっ！」

これが答えだといわんばかりに拘束されたままフォトンランサーを放つアルフ。

「そうか！」

跳躍し、かわしながらアルフに飛び掛るザフィーラ。

全身に魔力を込めた突進は彼自身の鋼の軛すら

へし折ってアルフを床へとたたきつける。

その衝撃に床が耐え切れず、激突した状態のまま下の階へと落ちる。

「くっ…」

痛みと衝撃で苦悶の表情を浮かべたアルフは

自分の体を押さえつけるように覆っている蒼い毛色の狼に視線を向ける。

すぐに弾き飛ばしてやろうと思ったアルフだったがしかし、それを一瞬躊躇した。

「っ！ だけ、このっ！」

僅かに走った雷光にザフィーラは飛び退く。遅れて雷が何も無い空間に走った。

（雷の発生が速い。魔力変換資質「電気」持ちか。

となるとあの少女も……厄介な……）

魔力変換資質とは読んで字の如く

魔力を特定のエネルギー体に変換する能力を指す。

通常、魔法で炎や雷などを起こすさいは手順として魔力をそれらに変換する作業が必要だ。

けれどこの資質を持つ者にはそれが必要なく魔力を放出するだけでそれが雷や炎に変わる。

しかしだからといってこれを持っているからイコールで有利というわけではない。

放出するだけで変化するため逆に純粋な魔力攻撃をするのが苦手であることが多いのだ。

だがこの場で問題なのはそこではなく、使い魔である彼女がその力を簡単に扱っていることが問題なのだ。主と使い魔は同じ魔力光と資質を持つが高い能力を持つ使い魔を維持するのは

主人にとつてかなりの負担になる。

だというのにこのアルフという使い魔の高い能力と

それを維持してなお自ら戦場に出てくるあの少女。

それだけで幼いながらも魔導師として

どれだけ完成した存在なのかが窺い知れるというもの。

(コウキ……)

思わず心で主の名を呼ぶ。

彼がしたと思われる通信妨害は

こちらから彼への通信及び同胞たちへの通信も阻害していた。

おそらく呼ばないようにコウキが先手をつつたと見るべきだ。

(やはり時間をかけてはいられないか)

実はザフィーラは最初からずっと焦っていた。

時間を稼げといわれていたが、その実早急に目の前の使い魔を行動不能にし主のもとに駆けつけたかったのだ。

魔法をいくつか教えているとはいえ最低限なものと基本サポート系ばかり。

自分とシグナムで肉体的にも鍛えているといっても

兩人ともに「教える」「鍛える」というものは苦手だ。

正直実戦で通用する技術を教えられているのか自信がない。

そんな彼を魔導師としてどう比べても上回るあの少女にぶつけるのは愚の骨頂だ。

いくらこちらに戦闘の意思はなく、

話したいと言ったところでもう聞いてはくれないだろう。

けれどそれはあの少年が滅多に口にしない「我が俣」なのだ。

どうあってもかなえてやりたいという想いと

守護獣として何に変えても主人を守らなくてはという想いが反発しあう。

「ぼけえつとしてんじやないよっ！」

しかし、なぜか。

ザフィーラは飛び掛ってくるこの使い魔に一言いいたくて仕方がなかった。

あの言葉を、どうしても、何が何でも訂正させたかった。

らしくない感情的な理由にザフィーラは今日何度目かの笑みをこぼす。

アルフが鋭い爪を振りかざし今まさに彼の体に突きたてようとするそれを

あえて紙一重で避ける。わずかに頬に痛みが走り、

続けて迫るもう一組の爪を気にせず頭から彼女の腹へとぶつかりにいく。

形だけをいうのなら助走もない単なる頭突きだったが、飛び掛ってきていた勢いをプラスした見事なカウンターとなっている。

「ぐあ、うっ…」

苦悶の声をあげ、その場に倒れこむアルフ。すぐさま起き上がるようにするが四肢が思うように動かない。

（あつ、ダメージが足に、くそっ！）

何とか起き上がるろうともがけばもがくほどうまく力が入らない。

「無理をするな……じっとしていればじきに回復する」

そこへまるで他人事のような抑揚のない声。

声の主へとアルフはめいっばいの敵意をぶつけながら睨みつける。

しかし変わらずそれを受け流すザフィーラに

アルフはさらなる怒りをぶつけるがそれすらも無視される。

「訂正しろ」

「っ、またそれか。イヤだって言っただろ！」

反射的にそう言い返すがアルフには訂正したくない明確な理由はない。

最初はフェイトのことをさも分かっているように言われて激昂したかもはやすでに単なる意地だった。

「お前の主人がどんな人生を歩んできたかは俺は知らん」

穏やかな声は、けれど確かに悲哀を含んでいた。そしてその目は先ほどアルフが一瞬躊躇してしまったあの目。自分と同じ、大好きな主人を想うときの瞳。

「だが主とて、コウキとて…何も平坦な人生を歩んできたわけではないっ！」

感情が抑えきれず思わず叫ぶ。しかし彼は分かっていた。

これは目の前の使い魔が最初に激昂したのと同じことだと。

互いに知らないから勝手なことを言っている。けれど、だけれども。自分達にあんな暖かいものをくれたあの少年の、

あの笑顔が、どれだけの悲しみと苦しみの上のものであったか。

“知っている”ザフィーラには“知らない”アルフの言葉は最愛の主への最大限の侮辱にしか聞こえなかった。

たと言われた本人がそれを気にしていなくても、

彼はあの言葉を認めるわけにはいかない。

「……あなた　っ!？」

「っ!？」

二匹の狼はほぼ同時にその異変を察知した。

自分たちのいるビルを覆っていた封時結界が消えたのだ。

いったい誰が、どうやって

そんな当たり前の疑問すら抱く時間は与えられることはなかった。敏感にそれを感じた彼らは即座に上を見上げる。

穴が開いている天上の先の先のさらなる先を感覚で“視る”。

結界が消えたすぐあとだったせいかなんやりとしか分からないものの互いの主以外の気配があった。その数、二。突然の結界の消失と突如現れた第三者の存在。

「コウキっ！」

「フェイトっ！」

何かが起こったことを察知した二匹は全くの同時に“飛”び上がる。なにせ新たに現れた二つの気配はそのどちらもが、魔導師のものだったのだから。

激昂（前書き）

クラールヴィントは使い方しただいで
化けるデバイスだと思っのは俺だけだろうか？

激昂

宙に浮かんで移動していたフェイト・テストロッサは床に足をつけた。

ビルの奥は彼女の予想以上に入り組んでいて、飛んで移動するより歩いたほうが安全だと判断したからだ。

一歩、一歩足を進めるたびにカッソ、カッソと足音が暗いビルの中に響く。

その自分の足音に混じって聞こえる別の足音を少女は敏感に感じ取る。

（私の足音にあわせているつもりだろうけど、甘いよ）

暗闇に足を取られないように慎重に進みながらも彼の足音を頼りに進んでいく。

やがてそれなりに開けた場所に出た。

もともとは大きな部屋だったらしいが今ではあちこちに廃材や鉄骨が積まれている。

その一番奥の窓辺で月光を背負って目当ての少年が悠然と立っていた。

「…ジュエルシードを渡して」

抑揚のない声と共に手に握るデバイス・バルディッシュの光の刃先を彼へと向ける。

逆光になっっているため表情は見えないが、意に介していないのは雰囲気であつた。

「イヤだつて言つたら？」

予想以上に軽い口調で返してきた問いかけにフェイトは黙つてバルディッシュを担ぐと

一歩足を踏み出して、今すぐにも飛び掛かれる構えをとる。

「なるほど、さつきと同じ答えというわけか。嫌いじゃないけど、君がジュエルシードと呼ぶこれはあまりに危険すぎる代物だ」

懐からジュエルシード取り出して見せるコウキ。

一瞬フェイトの表情に緊張が走る。

あれが危険な代物だということは彼女も知っているが

それよりもそれを知つたうえで封印もせず

何の魔力隔壁も使わず素手でそれを掴んでいるほうがよっぽど危険に見えた。

もつとも。

前回の探索時に似たようなことをしていた彼女に言えたことではないが。

「これは次元干渉型のエネルギー結晶体だ」

手に持つその奥の奥まで見通すかのような鋭い視線を青く輝く寶石へと向ける。

コウキには“視”えていた。その力が、性質が。だから分かる。これは危険だと。

「しかもご丁寧なことに持っている生物の想いや願いに影響を受け

る設定がされている。

いわゆる願いを叶える宝石ってやつだが使い方を間違えれば大規模な次元震も起こせる。

そんなとんでもないものを何に使うか話せない子に渡せって言われても渡せない」

だから、とコウキの射抜くような鋭い眼光がゆっくりと向けられ少女を問い質す。

これを何に使うつもりなのか、と。

その視線にフェイトは一瞬だけ、困惑したかのように目を泳がした。それは本当に一瞬だったが、凝視しているコウキが見逃すはずがなかった。

そして閃くようにある可能性を思いつく。

「まさか……答えられないんじゃないか？」

「……」

返答はなかった。

けれど、コウキからすればその表情が、その目がすべてを語っていた。

「なあ、それおかしいって。

君は危険で何に使うかも分からないものを手に入れようとしているんだぞ。

誰からの指示なのかは知らないけど、どうしてそんな命令を聞いてるんだ」

「っ……………」

『Arc Saber.』

担ぎ上げられていたデバイスが主の意に応える。

鎌のような形態のバルディッシュを彼女は真一文字に振り切る。

と同時に先端の魔力刃が放たれ、回転しながら一直線にコウキに向かう。

「くっ！」

咄嗟に指輪がはまった左手を突き出そうとして、その前に魔力刃が軌道を変えた。

「えっ？」

疑問に思うより早く目の前で魔力刃は縦に弧を描いて天井に突き刺さる。

(また、威嚇？)

確認の意味で視線をフェイトへと戻すが、戻せなかった。さっきまでいたはずの場所に彼女はいなかったのである。

「っ、しまっ！」

最後まで言い終えるより早く、小柄な少女の体が真横に現れた。

デバイスフォームとなった黒い戦斧が容赦なくコウキの首筋に振り下ろされる。

(ごめんなさい……)

胸中の謝罪と共に、吸い込まれるかのように入った戦斧の一撃は簡単に彼の身体に“ひび”を入れた。

「えっ…?」

思わず呆けた声を漏らすフェイト。

今の一撃は相手を傷つけるというよりは気を失わせて行動不能にするのが目的だった。

だから、単純な威力はそんなに強くはない。

だというのになぜ彼は“粉々に砕け散った”のか。

予想と現実の大きなズレが僅かな時間。

およそ一秒ではあったがフェイトの判断を鈍らせてしまう。

『背後から魔力弾接近』

そしてそれをまるで追い立てるかのような愛機からの警鐘。

「っ!」

背後へと振り向きながら、迫る白色の光弾をバルディッシュで斬り落とす。

魔力弾は消滅したが愛機を振りきつての攻撃はフェイトに大きな隙を作り出していた。

それを狙いすましたかのように床から何かが飛び出し少女の体に巻きついた。

「あっ!?!」

両腕が体に密着しバランスを崩して倒れそうになるのを両足で踏ん張ってこらえる。

見ればミントグリーンの光を放つ魔力系によってぐるぐる巻きにされていった。
魔力系の先端には振り子のようなものがついており
それが床を突き破ってきたことが分かる。

「捕まえたっ！」

自分の体を縛る二本の魔力系が僅かに引っ張られる。
多少よろめくが倒れるほどではなく、その目的も
床に埋もれていた魔力系部分を外に出したただけだった。
廃材の裏に隠れていた彼は自慢げに左手の人差し指と中指にはまっている指輪を見せた。
そこから伸びる魔力系によってフェイトは行動を制限された。

ようやくフェイトはすべてが自分を捕らえるための策略だったことに気付いた。

わざと足音を出してここまで誘導。

ガラスに自分の姿を映し出しそれを悟られぬように逆光となる場所に置いた。

そして本人は別の場所にずっと隠れ魔力系を床に潜ませてタイミン
グを待っていたのだ。

おそらく背後から飛んできた魔力弾はあらかじめセットされていた
か、誘導弾だろう。

（やられた。しかもこれ、ただのバインドじゃない。

全然解けない。アルフっ！）

念話によって相棒である使い魔に呼びかける。

本人の感覚でいうのなら助けてもらおうというよりは
捕まったという状況報告に近いものだったが。

(アルフ? アルフっ、聞こえるアルフ!?)

しかしなぜか返答がない。いやそもそも念話が届いていない。

「何故」という疑問はすぐに「まさか」という懸念に変わった。

コウキに視線を向ける。

少女が念話を使ったことに気付いていた彼は不敵な笑みを見せた。

「悪いけどジャミングをかけさせてもらってる。

邪魔が入ってほしくなかったからね」

「…邪魔?」

「そう、本当ならこんなことしたくないけど、

君こうでもしないと俺の話聞いてくれそうになかったから」

話を聞いて欲しい。

フェイトに近づきながらもそんなことを言う彼の姿が一瞬あの白い服の少女と重なる。

考えてみれば話を聞いてほしいと、聞かせてほしいと訴え、

それが叶わないと知れば力尽くでそれをしようとする態度はよく似ていた。

「改めて言うよ。もう頑張るのも我慢するのもやめたほうがいい。

じゃないとフェイト、君は取り返しのつかないことになる」

目の前に立ち、膝を折って視線をあわせながら

真剣な面持ちで彼ははっきりとそう断言する。

その眼差しがあまりにも悲痛すぎてフェイトにも

彼が本気でそう思っていることが分かった。

ただ、さっきあの少女と似ていると思ったのと同じように
両者が決定的に『違う』とも思った。

白い服の少女はなぜかフェイトを知ろうとしていたが、
この少年のその言葉はフェイトを完全に否定しているように聞こえ
た。

「君は思い違いをしている。

フェイトは悪くない、何も悪くないし辛い気持ちを抑え込む必要
もない。

悪いのは、間違っているのは……フェイトにこんなことをさせて
いる奴だ」

どこか怒りや侮蔑という感情を感じさせる言葉に金髪の少女は目を
見開いて

初めてコウキの顔をちゃんと真正面から見た。

言葉こそ発しなかったが、その双眸は彼の言を完全に否定している。

「違うと言いたいのには分かるよ。でもさ。

君に何も告げずジュエルシードなんて危険なものをとってこさせ
ようとした奴を」

コウキの腕がゆっくりと伸び、

フェイトの右手を掴むとその腕だけが魔力系から解放された。

「君の体にこんな傷を残すやつを。悪くないと、俺は思えない

……」

「っ！？」

彼に掴まれ強引に上げさせられたフェイトの腕。

その二の腕の裏側にはつきりと何か長細いものが強く叩き付けられたような跡があった。

しかも一つではなく複数の跡が重なって残っていた。

影になっているためよく注意して見なければ分からなかっただろうが。

その意味することは“経験者”たるコウキにはイヤというほど分かっていた。

「違うっこれは私が失敗したから、だから母さんは怒ってっ！」

それは消したと思っていただけの傷が残っていたからなのか。

コウキが的確な指摘をしたためなのか。

どちらにせよ予想外の指摘に動揺したフェイトは思わず口を滑らしてしまふ。その名を。

「…母さん？」

ぼんやりとした口調で意外そうにその名を彼は口にしました。

その存在を考えていなかったわけではない。むしろ即座に連想しそうなものだろう。

だけれど知識として分かっているにもかかわらずコウキには

これを行ったのが母親だということを通じてすぐに受け入れられなかった。

「っ、バルディッシュ、スタンショック！」

『……Yes sir.』

その思考の一瞬の間。

を、結果的についた形でフェイトは自らの愛機に命じた。

「くっ！」

バルディツシユの周囲に僅かな稲光。

それを視認したコウキは直感的にその場から跳び退いた。その直後。

「あああああっ！」

フェイトは苦痛の声と共に雷光に包まれた。

「なっ！？」

驚愕の声を漏らすコウキをよそに彼女の体を彼女自身の雷が貫いている。

暗闇だったはずの室内は一瞬にして昼間のような明るさに包まれた。その明かりの中心地で苦悶の表情で自らの雷を受け続けるフェイト。コウキにはその行動の意味が分からず啞然としていた。

『魔力負荷限界値を突破、バインドを維持できません』

「はい？」

デバイスの言ってることが彼にはすぐに理解できなかつた。

それ以前に目の前の光景の異常さに自分を抑え付けるので精一杯だった。

「くうっ、ああああっ！」

なんとか理解できたのは一際強い雷光が発せられ、それが収まったあと。

物語に出てくる魔法使いのような黒い防護服が所々焦げて煙をあげ、

バリアジャケット

激しく肩を上下させながらも自由の身となったフェイトを見たあとだった。

（ま、まさか…正攻法で解けないから

自分の体ごと攻撃して強引にバインドを破壊した！？）

通常、バインドを破壊するさいはその術式を解析して開放処理を施しつつ

適正強度にまで拘束が弱まった時点で魔力を込めて破壊する。

それがバインドブレイクと呼ばれる正攻法での拘束魔法の解き方である。

しかしコウキの作った魔力系はフェイトを逃がさないために複雑な術式を

複数混ぜて編まれた強固なオリジナルバインドであった。

そのため正攻法が通用しなかったためフェイトはもっとも単純な方法。

魔力攻撃による破壊を選択したのだ。

それがどれだけのダメージを同時に肉体にも与えてしまうことを分かったうえで。

「ハアハアハア……………ジュエルシールドを、渡してっ！」

肩で息をしながらもフェイトはバルディッシュをコウキに向け、変わらない再三の要求を述べる。

苦しげな表情ながらもその双眸は全く折れていなかった。

その姿に、その意思に、コウキは両の拳を強く握り締めて何かをこらえるかのように歯噛みする。

「……………んじゃないっ……………」

「えっ？」

口から零れ落ちるかのような小さな小さな吹きは彼の言葉を聞き取れなかったからではない。

実際、聞き取れはしなかったが訝しんだのは彼の姿を突然見失ったからだだった。

それを頭で危険だと認識するより前に、頬からの痛みが脳に届いた。なにをどうやったのか。

それはやった方も、やられた方も分からなかったがただ一つ確実なことはコウキがフェイトの頬を引っ叩いたことだけである。

「ふざけるんじゃないこの戯けっ！！」

「あ……………」

思わぬ平手打ちと一喝にたじろいで数歩後ずさるフェイトにコウキはさらに続ける。

「無茶苦茶なことじゃがって、自虐的にもほどがあるだろうが！それにバルディッシュ、お前もすんなり従ってんじゃないっ！主人が無茶な命令したら止めるよ！

なんのために思考能力を持たされてんだお前は！」

「え、その、あの、えっと……………」

『……………』

口を休めず怒鳴りつけてくる彼の勢いに圧倒されて何も言葉が出てこないどころか
なぜかこちらが謝らなければいけないような雰囲気困惑する。

「もう頭に来たっ、こうなったら強引にでもとっ捕まえて
反省するまで一日中説教してやるっ!！」

激しい勢いのまま話を自己完結させると金色の指輪がはまっている
左手を突き出す。

「クラールヴィント、ウィップフォルツ」

だが、そこで急に動きが止まってしまっ。

まるでビデオの一時停止のように微動だにしないコウキ。

困惑しつつ戦闘態勢をとろうとしていたフェイトは
突然の静止にさらに困惑を深め訝しんだ顔を見せる。

「……………ごめんクラールヴィント、頼む」

『Ja.』

謝りつつ突き出した手を下ろし代わりにもう一方の手を中空に差し出す。

その手の平に赤い光を放つ魔力球が現れる。

咄嗟にフェイトはデバイスを構え、彼の一挙手一投足に注意を向ける。

『Eisengeheil.』

それがいけなかった。

コウキは魔力球をまるでボールのようふわりと投げて浮かせるとそれを思いつきり左手で殴った。
瞬間。

「っ!?!」

耳を劈く轟音と目を潰すかのような赤い閃光がその場を支配する。思わず目を瞑り、耳を塞ぐフェイトに代わって

バルディッシュが自ら主を守るフィールドを形成する。

しかしそれでも僅かに音と光を和らげるのが精一杯でフェイトは身動きがとれない。

(しまったっ、まさかこのタイミングで目くらましだなんて!?!
い、いま攻撃されたらっ!?!)

それこそ反撃どころか反応もできない。

そう判断してバルディッシュの張ったフィールドを強化する。

防御能力と遮音遮光能力を上げた。

薄く目を開ければフィールド内ではかるうじて目を開けていられる程度にはなったが

その外は真っ赤に染め上げられ彼がどこにいるのかすら把握できなかった。

『ジャミングを確認、探知は不可能』

(どこ、どこから来るの?)

上下左右。360度。

全方位に気を張ってどこからいつくるかも分からない攻撃を警戒する。

あてにならない視覚と聴覚を捨て、
鍛えてもらって、そして鍛えてきた感覚だけを信じて研ぎ澄ます。
それでも不安と緊張からなのか、さきほどのダメージの影響か。
ポタリ、ポタリと汗が額から流れて顎を伝って床に落ちる。

そんな状態をどれだけ続けていたときだったろうか。
轟音と閃光はあっさりと消えていった。

「ええっ？」

何も起こらなかったことがものすごく意外で間の抜けた声を漏らす
フエイト。
しかし慌てて辺りを見回すが探し人たるコウキの姿はどこにもな
かった。

「……………に、逃げたあ？」

願いを叶える宝石（前書き）

一応この話のなかでデバイスのセリフは短い応答や原作にある発言
（長過ぎない）

は基本的に英語やドイツ語表記です。参照はNanoha Wiki
それ以外は俺の外国語力が低いこともあって
日本語で表記しています。

願いを叶える宝石

「なあ、クラールヴィント。お前も俺を馬鹿だと思っつか？」

『いえ』

最初にここについたときに使った探査魔法で建物の構造も把握していたおかげで

暗さを気にせずビル内を駆け巡れるコウキは走り続けながら左手にはまっているこの場の相棒に声をかけた。

E i s e n g e h e u l

アイゼンゲホイル

先ほど使ったこの魔法は範囲内の対象の視覚と聴覚を一時的に奪い、レーダージャミングをかけるもの。

「あれ使って、俺とお前とで考えたウィップフォームで戦えば、捕まえることぐらいはできたかもしれない」

事実あの時とある可能性が頭をよぎるまで沸騰しかかった頭ではそれを考えていた。

いや、それしかなかったといってもいい。

彼の左手にはまっている指輪は二つ。

本来クラーメルヴィントは四つの指輪からなるアームドデバイスだ。しかし武装アームドといいながら本来の使い手たるシャマルが治癒と補助を本領とするためか攻撃能力はまったくというほどない。

また通信のためにシャマルに最低でも二つ持たせておかなくてはいけないので

四つで100%の力を発揮できるものを半分の二つで使っているということとは

もちろん性能はがた落ちになってしまう。

そのため

「いざという時のために持たせているのにそれでは意味がないのでは？」

という意見が騎士達の中から出た。

その裏に純粹に主の身の安全を考える想いとは別に自分のデバイスを使ってほしい。

という思惑があったことは横に置いておく。

だがコウキはある程度工夫すれば二つでも戦闘はできるのではないか。

と考え本人(?)と相談した結果。

先ほどフェイトを捕まえたペンダルフォルムを改良して、

振り子部分を硬化し先端をより鋭く尖らせ魔力系部分を太くして

しなるように変化させたウィップフォームを生み出した。

鞭のような変幻自在の動きと分厚いコンクリートすらぶち抜く硬度。

それは充分戦闘で使えるものだった。

あの場で彼女を止め、その考えを変えさせたかったのならそれを使って戦うしかなかった。

他に戦う術のない彼にはそれが最良の選択だ。

「まったく…想像力が豊かすぎるのも問題だよな」

『Ja.』

ただ、それを使おうとした時フェイトの腕に残っていた傷がその鞭によつてつけられたものではないかと、不意に思ってしまった。

その可能性が怒りで沸騰していた頭を一気に冷やし、その場から逃走するという選択を彼に選ばせたのだ。

「ごめんな、クラールヴィント。」

せつかく新フォームで活躍させてやれたかもしれないのに」

『お気になさらず』

と言ってくれたが、コウキの心は晴れない。

いくら癒しと補助が本領とはいってもアームデバイス。

騎士のためのデバイスなのに戦う術がないことをクラールヴィントは少しだけ気にしていたのを彼は知っていたから。

「ああっもうほんっつとくに、いろいろ下手くそだよなあ俺って」

今あったことだけではなく過去の同じような出来事を思い出してまったく成長していないような気がして肩をがっくりと落とす。

『そうかもしれないですね。ですが、

そんなマスターだからこそみな 高速接近する物体を確認』

「なにっ!?!?」

『魔力反応から先ほどの魔導師と思われませう。どうしますか？』

クラールヴィントが情報を整理して映像化したものを見せてくれる。簡略化した見取り図に移動する点。道筋どおりにほとんど迷わずこちらに接近してくる。

「おい、まさかとは思うが……俺ジャミング失敗したのか!？」

『想定していた効果範囲より狭くなっていたようです』

(まずい。)

ジャミングで時間稼ぎするつもりだったけど、これじゃすぐに追いつかれる)

先ほどの問答と自らを傷つけてでも目的を達しようとする姿勢に説得はほぼ不可能。

そもそも直前の様子から、話を聞いてもらえるかどうかも怪しいといえる。

いきなり問答無用の実力行使でくることもある。

けれど正面からぶつかり合うには悲しいくらい絶望的な能力差をコウキは痛感している。

準備を整えた奇策・奇襲でなんとかなるかもしれないかな、多分。というほどなのだ。

なんとか追いつかれないように廃墟内を走るが、スピードに差がありすぎる。接触するのは時間の問題。

「逃げ続けんのも限界だな。

次を曲がった先にあるホールで待ち構える、準備を！」

(こんなことになるんなら、俺も自分の甲冑作っておくんだっただな)
そんなことを考えながら、騎士たちが甲冑を着込んだ姿を思い出して苦笑する。

騎士甲冑を賜らなくては。

という騎士たちのためにはやてとコウキは協力してそのデザインを考えた。

図書館やおもちゃ屋ではやて曰く資料を集め、甲冑というよりはそれっぽい服に見えるいわば騎士服を彼らは作った。

ちなみに意匠を考えたのがはやてでそれを元に絵にしてみせたのがコウキである。

そのとき彼はふざけてそれらの意匠に似せたはやて用の甲冑も描いていたが、

自分の、となるとイメージがわからなかったのだ。

(とりあえずこの場だけの甲冑でいいから、なんかそれっぽいのをイメージ、イメージ)

頭の中でこの場に適しそうな自分の騎士服を空想する。

色は闇にまぎれられそうな漆黒。

その意匠は騎士服というよりむしろ軍服。

銀色の装甲板がところどころに施された文字通り服と鎧の間。

そう、これが私の……………

『甲冑作成完了』

「うっ…」

ホールにたどり着くのと同時にクラーヴイントがイメージそのままの甲冑を作る。

軽い頭痛を覚えるが振り払い、初めて甲冑を着込んだ自分の体を見下ろすコウキ。

それは頭に浮かぶイメージそのままの完璧な出来栄だった。しかしそこで軽い違和感を感じる。

手持ち無沙汰というべきか、あるべきものが手元にない感覚。

『魔力攻撃を感知、2秒後に接触』

デバイスの声に反射的に前面にパンツァーシルトを展開。回転する魔力刃が三角形の魔法陣にぶつかり霧散する。

(っ！ 余計なことを考えるな、そんな余裕ないんだから)

意識を戦いに切り替え、背後の気配に左手を向ける。

「鋼の軛！」

床から飛び出すように光の刃が動く影を迎撃し、追い払う。

魔力刃を囷に背後に接近していたフェイトだ。

「フォトンランサー、セット！」

その高速機動で鋼の軛から逃げ切ったフェイトの周囲に金色に輝く4つのスフィアが浮かぶ。

「ファイア！」

「くっ！」

文字通り光の槍であるそれはコウキ目掛けて躊躇なく迫る。

最初に放った警告の一発と違い、明確な攻撃の意思を彼は敏感に感じとる。

実はコウキと同じようにフェイトも言葉による説得や脅しではジェルシードを渡してはくれないという結論に達していたのだ。それゆえの単純な実力行使。

それは魔導師としては未熟な腕のコウキが一番招いてはいけない状況。

時間差で迫る光槍。

一発目を紙一重と避け、直撃コースの二発目と三発目とシールドで受け止める。

その背後を狙うように湾曲した軌跡を見せる最後の四発目を避けるために前面に転がる。

そしてそのまま飛び上がるようにフェイトに向かって駆ける。

（魔法の撃ち合いじゃ絶対に勝てない。けど、こっちなら）

傍から見れば無謀な突進を仕掛けるコウキを迎えつつように彼女は愛機を構え、そして振り下ろす。

（かかった！）

右手で左手の指輪から抜き取るような動作で伸びたのは先ほどのより太い魔力糸。

両手の間にピンと張られた糸は振り下ろされたバルディッシュの魔力刃を受け止める。

しかし所詮は糸。いくら太かろうが同じ魔力で作られているなら刃に耐えられる糸は道理に合わない。

そうであるがゆえに彼女はそのまま押し切ろうとした。指輪がもう一つあるのだということをおぼえて。

「クラーウルヴィント！」

『Ja』

もう一方の指輪から伸びる魔力糸はバルディッシュの柄に絡まりそのまま全体を縛り上げる。

(しまっ…)

心でそう呟く時間すらフェイトには与えられなかった。

コウキは一目散に飛び退き、糸で繋がるデバイスとそれを持つフェイトは体勢を崩し、

押し切ろうとしていた勢いそのままに前のめりになった所へ

再度急接近した彼の右手から張り手のような掌底が腹に向かった。

吹き飛び宙を舞うフェイトはしかし、体をくるりとひねって見事な着地を見せた。

(しまったっ、浅い！)

掌底が届く一瞬前にフェイトはバルディッシュを手放し後方へ跳んでいた。

また自分より年下の女の子へ本気の一撃を放てなかった無意識の手加減もあって

その威力はたいしたものではなかった。

「バルディツシュ、スタンシヨックッ！」

『Yes sir.』

魔力糸で繋がったままの戦斧が稲光に包まれる。

「っ、ぐあああっ！」

バルディツシュから流れる電流は魔力糸を通じて彼の全身を走り回って一瞬で消えた。

それは先ほどフェイトがバインドを壊すさいに自分に向けて使った魔法。

僅かな時間だったためか痛みより、痺れ。軽い感覚麻痺に体が動かない。

その症状にコウキはそういうことかと変に納得していた。

これはさつき自身に使ったのは違って非殺傷設定が施されたもの。相手の動きを一時的に麻痺させるだけの魔法。

受けていた時間も違う。恐らく痛みも魔力ダメージもこの何倍もあつたはずだ。

それだけに想いが分かる。

どんな痛みを受けようとも、傷を受けようともジュエルシールドを手に入れる。

理由は母がそれを望むから。

そうやって自分が我慢して頑張つて、期待に応えさえすればいつかは。

その小さな希望だけが、願望だけが彼女を支えている。

けれどそれを、それだけを貫くにはこのフェイトという少女は優しすぎた。

（わかる、君の気持ちは分かる。

それを俺は知っている、だから……だから、

そんな痛そうな顔でごめんなさいとかいうんじゃない！）

痺れのためまともに動かない口に代わって心で叫ぶ。

しかしそれは思念通話でもなんでもないただの胸の奥の叫び。

届くわけもなく、コウキの体は光の槍の激突に宙を舞いそのまま壁に激突する。

「ぐっ！」

体は壁にそって床に落ち、仰向けに倒れこむ。

衝撃と痺れで体が思うように動かないなか僅かに首を動かす。

視界に映るのはバルディッシュを拾い上げるフェイトの姿。

先ほどのフォトンランサーで魔力系が破壊され解放されたようだ。

「く……そっ……」

四肢に力を込めるが痺れがまだ取れず起き上がることさえできない。

そのためか愛機を手にゆっくりと近づくと近づくフェイトはしかし、

どこか申し訳なさそうな顔を浮かべている。

（気に入らない顔だ…）

コウキはそこで初めて不快感を顔に出した。

心底、彼女のその顔が許せなかったのだ。

よく知っている顔だから。

あんな表情を浮かべて勘違いの希望を抱いていた奴の末路を知っているから。

でももしかしたら。そんな希望がコウキの中にないわけではない。彼女のそれが母親によるものならこれから互いに改善しあえばなんとかなるかもしれない。それは可能性としてない話ではない。だけど。

「フエイ、ト……間違うな、そのやり方はだめだ」

今の彼女のあり方はその可能性すら潰している。言葉での説得はもう無理だと分かっている。言葉でいわれても納得できないと知っている。彼はうまく動かぬ口や舌を必死に動かし訴える。

「だめ、なんだそれは……かならず失敗して、とりかえしのつかないことに……あつ！」

起き上がろうと床に立てた腕がすべって顔をぶつける。それでも何度も起き上がろうと言う事を聞かない手足を酷使する。けれど、フエイトはただ変わらずコウキの気に入らない顔のまま歩み寄ってくるだけ。

（だめなのか。俺の言葉じゃあの子に何も伝えられないのかよ。だったら、だったら俺は……俺にはいったい何の価値があるっ！
？）

彼は知っている

彼女の在り方の問題を、最後にたどり着く結末を。

彼は約束した

すべてを諦めたあの日に、捨ててしまった自分と。

けれど

何もできない。

何も伝えることができない。

入らないはずの手足に力が込められる。

握りこぶしが彼の上体を起こし上げる。

悔しかった

知っているのに、何も伝えられないことが。

腹が立った

約束したのに、何もできない無力な自分に。
だから、願ったのはただ一つのこと。

想いを伝えるための
彼女を止めるための

力を俺に！

知らず、彼は懐にしまっておいた宝石を掴んでいた。
その名はジュエルシード。願いを叶える青き宝石。
握った掌からもれる光は願いを受けて、その力を発動させようとするその前兆。

「っ！？ だめっ！」

『マスター、危険です』

その光景に慌てて駆け寄ろうとするフェイト。
溢れ出るエネルギーに危機を訴えるクラールヴィント。
しかしそれは、わずかばかり遅かった。

・・・回路接続
アクセス

接続完了

・・・バイパス解放、次元干渉エネルギー抽出

予定出力40%オーバー

・・・出力調整、余分エネルギー吸収

供給安定、使用目的選択

・・・神経網回復

了承

・・・願望要請、形状変化

了承、形状イメージ

・・・魔法使いの、私の杖

了承

「うそ……」

駆け始めた足は即座に止まり、思わずフェイトはそう呟いた。

確かにジュエルシードは願いを叶える宝石だ。

けれど正しく願いを叶えたところなど彼女は見たことはない。

そのどれもが動植物にとりついて姿を巨大化させて下手をすれば暴れまわる始末。

しかもつい先日。

彼女自身がジュエルシードから僅かに漏れたエネルギーを抑え込むのに苦労し

両手にケガを負ったこともある。だというのに。

「完全に、制御してる!？」

目の前で起こるそれを上回るエネルギーの奔流は、

しかし暴れることもなくかの少年に内にとどまっている。

そしてそれが彼の願いの形なのか。いつのまにかその手には黒い杖が握られていた。

鳥のクチバシのような先端。

その中央にジュエルシードははめ込まれ

後ろには二本の排気ダクトのようなものも見えた。

一目でそれが彼がジュエルシードで作り出した擬似的なデバイスだと彼女は認識した。

そしてどこか有機的な印象を受けるその造形と意匠にフェイトは覚えがあった。

(あれは、たしか……)

記憶を探る。

師リニスの下で様々なことを学んでいた日々の中であのデバイスは見たことがある。

「フェイト……」

けれど思い出す時間はなく、コウキの自分を呼ぶ声に愛機を構えて応える。

「思ったより楽だったけど、けっこうこれ維持するの疲れるから…」

黒き杖をバトンのようにくると一回転させながら
落ち着いた口調のまま杖先端をフェイトに向ける。

「速攻で行く」

床を蹴った。

先程とは比べものにならない加速力で突っ込んでくるコウキを得意
の高速機動で避ける。

いくら加速がついても一直線の動き。

避けれぬ道理はなく、彼の側面に周りバルディッシュを振り下ろす。
しかしそれは分厚い壁のようなものに阻まれる。

透明だが壁向こうの彼が歪んで見え、そして手足に感じる確かな冷
気。

(氷の、壁！？)

「アイスブラスト」

黒き杖がフェイトとコウキの間の氷壁を突き壊す。

その動作を察知した彼女は咄嗟に距離を取るが
砕け落ちるはずの氷塊が宙を舞い、襲い掛かる。

大きさや形状が様々な無数の氷塊をフェイトは高速機動でかわしつつ
避けきれないものはシールドで防ぎ、そらす。

「セツトツ、ファイア！」

お返しとばかりに放たれた数発のフォトンランサー群にあえて向かっていくコウキ。

初弾を杖で弾き次弾を裏拳の要領で側面から殴り飛ばすと三発目は体をひねって避け四発目を跳び越える。

得意の魔法を予想外の手段で破られ一瞬で距離を縮められたことに焦ったフェイトは思わず単純に魔力を放出する。

右手から放たれた雷。魔力変換資質「電気」を持つフェイトはただ魔力を放出するだけでそれは攻撃性の高い雷へと変貌する。

まさに電光の速度で迫るそれに向かってコウキは杖を一回振り下ろす

凍てつく冷気が一瞬でクモの巢のような幾何学模様の巨大な氷の結晶を作り出す。

そこへフェイトの雷が命中するもそれは模様に沿うように伝わって、彼に影響のない方向へ向かって放出される。

(っ、まさかつ氷の電気伝導!?)

正確に表現するならば氷はどちらかといえば半導体である。

だがそうであるがゆえに雷を受け止めて他所へ流すことが可能となった。

氷の結晶はそれで役目を終えたように四散し砕け散り、再びフェイトを襲う。

『defenser.』

主を守るためバルディッシュの自動防御が発動する。

フェイトを中心とする一定範囲を膜状の結界が覆い、氷塊をギリギリのところを防ぐ。

が、それは即座に音を立てて壊される。

「インパルスエツジッ！」

クチバシのような先端を覆う形で伸びる魔力刃。
その刀身を突きたてられデイフェンサーはガラスのように碎け落ちる。

もともとフェイトは攻撃を『防ぐ』タイプではなく『避ける』タイプの魔導師だ。

そのため防御に難がある。そのうえデバイスの自動防御よって作られた結界には最低限の防御能力しかないのだ。

結界を破った勢いそのままで迫る魔力刃をバルディッシュでさばく。弾かれるも勢いを殺さず即座に斬り返しにくるそれを柄で受け止める。

「ううっ」

けれどもいくら魔導師として優れていても
体格で勝るコウキの純粹な腕力には競り負けてしまう。

「くっ、ああああっ！」

押し倒されそうになる中、フェイトは思い切って魔力を全身から放出した。

「ちっ！」

彼女の身体を覆い暴れまわる雷光にコウキは後退せずにはいられなかった。

それは雷を避けるためというよりはフェイトの負担を減らす意味合

いのほうが強い。

『Arc Saber.』

距離を取ったコウキへ向けて放たれる魔力刃。

「ええいつ！」

回転する刃を魔力刃をまとった杖で叩き壊す。

「ファイア！」

しかしそれを見越したかのようなフォトンランサーの数による猛撃に避けるのが精一杯。

（まずい。勝てそうな接近戦に持ち込むとあの雷で、離れるとこれでは）

打つ手がない。

あえて接近戦を持ち込んで自分の雷で疲弊させるとか。

このまま避け続けて魔力切れ体力切れを狙うとか。

“勝つ”ための手段なら思い浮かぶものの、彼はそれを即刻却下する。

理由は「なんとなくイヤだから」だ。

ああ、やっぱり俺馬鹿だ。

と自嘲気味に笑いながら後方に迫る最後の槍を真横に跳んでかわす。床に着地する前に魔力刃をまとった杖をフェイトに向ける。

「ジェットエッジ！」

放たれた魔力刃は弾丸のように一直線にフェイトへと向かう。

「はああっ！」

気合の声と共にバルディッシュを切り上げて弾き飛ばす。

弾かれた刃は天井をぶち破り僅かな穴を開けて、星が輝く夜空を見せる。

『Photon Lancer.』

それを見て、フェイトは何を思ったのか。

一発だけフォトンランサーを天井に向けて放った。

「なにを!？」

光の槍によつてさらに大きく開いた穴に向かって飛行する。

「え…ま、待て！」

穴を越えて屋上に出ようとすると彼女を追いかけるようにして跳び上がったコウキはその瞬間青ざめた。

(しまった…)

咄嗟に彼女を逃すわけにはいかない。

という想いだけが先行してしまい冷静さを欠いてしまったのだ。

床を蹴った瞬間にそれに気付いたからだろうか。

屋上に出た瞬間に襲ってきた雷撃に驚きを感じなかったのは。

「ぐあああつ!!」

意識で分かっているても魔法の行使はそれに追いつけなかった。

氷の壁も防御魔法も間に合わず、雷の直撃を受けたコウキは屋上に転がり落ちる。

スタンシヨックのような麻痺やダメージは感じないが身体がまるで縛られているかのように動かない。

(攻撃と拘束を併せ持った……いや、むしろ拘束よりの雷だ!?)

思い通りに動かない身体に鞭打って視線だけを彼女に向けて、その姿に目を見開く。

月を背負い、空中に座する彼女の手の愛機はまたも形状を変えていた。

戦斧のようなデバイスモードではなく鎌のようなサイズフォームでもない

それは槍のようなシーリングフォーム。

構えるそれを向けられ、大技がくることを本能的に察知したコウキはなんとか杖の先端だけを彼女に向ける。

「ブレイズ…シヨットっ」

熱量を伴った小さな魔力弾が放たれる。

大技の魔法はその発動にある程度の時間や詠唱を必要とする。

バルディッシュほどのデバイスがサポートするならそれらはいしてかからないだろうが、

この一撃でフェイトの集中を一時的にでも阻害できればその間に拘

束は解ける。

それがこの攻撃の意図であったのだが、その目論見は失敗に終わった。

アルカス・クルタス・エイギアス

天涯の閃光よ、降り来たりて眼下の敵を討て

そう唱えるフェイトの声が僅かに届く。

(呪文詠唱?)

それは本来ならあり得ない行為だった。

彼女ほどの腕前の魔導師がデバイスのサポートがある状況で詠唱を行うのは

余程の広範囲での魔法行使をする時ぐらいである。

しかし彼女から発せられる魔力の量はそれを否定しその攻撃の意思もコウキだけに向いている。

目を瞑り詠唱に集中するフェイトは迫る魔力弾に気付いてすらおらず、

それは静かに彼女に命中する。

「フェイト！」

当然避けると思った彼女に直撃してしまい

慌てて身体を起こそうとするが未だ拘束が解けない。

バルエル・ザルエル・ブラウゼル

突き立て、雷光の剣

そんな彼のもとに続く詠唱の声が届く。

見れば、バルディッシュがディフェンサーを発生させてフェイトを守っていた。

それを見て、彼女の狙いが分かった途端。

また頭が沸騰しそうになったのをコウキは必死で抑え込んだ。

防御を完全にバルディッシュに任せて、自分は魔法の詠唱に専念する。

一見、愛機を信用しての行為とも取れる。

実際それもあるのだろうがフェイトの防御能力はそもそも高くはない。

デバイス任せの場合はさらに、である。

それは誰よりも本人が最も理解し分かっていることだ。

だというのにこういった捨て身にも似た行動をとったことが、とれることがコウキの癪に障った。

「この、たわけえっ！！」

怒号と共にジュエルシールドの莫大なエネルギーで強引に拘束を解く。そうしてようやく立ち上がった彼はしかし

「サンダーレイジイッ！！」

金色の閃光の中に消えた。

壊す出会い

明るい夜の街を少女は歩いていて。

ネオンの灯りに彩られ、多くの人々が行き交う街中で

その少女は肩にフェレットを乗せてキョロキョロしつつ歩き続ける。

比較的治安のいい海鳴市といえど、

そろそろ子供が一人で街を歩くのは危ない時間になりつつある。

「うーん、おかしいな。この辺りだと思ったのに……」

(なのは、もう遅いから帰ろう。また家族に心配かけるのはよくないよ)

肩のフェレット・ユーノからの念話に少女なのは首を振る。

(ううん、さっきこの近くでジュエルシードの気配を感じたのは確かなんだし、

放っておいてまたこの前にみたいに暴走されちゃったら大変だよ)

以前気のせいとだと思って無関係な人々を危険な目にあわせてしまった。

それを彼女は後悔していた。同じ失敗はできない。

ユーノもまたさせたくはなかった。それは同じ気持ちだ。

(それは、そうだけど)

しかしユーノは彼女の言葉には納得しつつも未だ不満顔だ。彼女のいうことはもっともであり自分が探索を協力してもらっている立場である。

ということは彼も自覚しているし感謝しているが、それでなのはの日常に支障をきたしてしまうのは本意ではない。

(……わかった。もう少し探索を続けよう。

でも家に戻る時間も考えてあと30分だけ。いいね)

それにうんと頷き、なのははまだ調べていない地域へと足を進める。

溜まっていた疲れから眠りについたなのはをユーノが故意に起こさなかったため

寝過ごした彼女は今日は中止にしようという彼の言葉を聞かず探索を始めたのだ。

ようやくなのはの性格を把握し始めたユーノは自分の気遣いが逆効果だったと知る。

そして探索をする中突然ジュエルシードの気配を感じたがすぐに消えてしまう。

それから気配があつた地域をぐるぐると回りながら調べてまわっていたのだ。

「これだけ探して見つからないってことは、

もうあの子に持っていかれちゃったってことかな？」

人通りの少ない暗いビル街に入り込んだなのはは僅かに俯いた顔でそうこぼした。

「そうだね、その可能性はある。
あちこち見て回って異変も気配もないってことは
もう持ち去られたか　っ!？」

ハツとなったユーノは肩から飛び降りて
周りに人がいないのを確認して円状の魔法陣を展開する。

「ユーノくん？」

「僕としたことがうつかりしてた。

気配がすぐに消えたってことは持ち去られたというより
結界に覆われたって見るべきだ」

もっと早くに気付くべきだったと悔しそうにしつつ、
ユーノは結界探査の魔法を発動する。

彼は正直もう彼女達。

もう一組の探索者が見つけて持ち去っているであろう。
と推測していたが結果は意外なものであった。

「えっ、結界がまだ、それも目の前!？」

彼は驚きから、なのはは言葉につられて目の前の廃墟となっている
ビルを見上げた。

立て札や黄色いテープで出入り口が塞がれている点以外はおかしな
点などないビルだ。

しかし実際は何かが起こっているはずである。

けれど封時結界によってなのはたちがいる場所から“ずれて”いる
ため、

結界内部で起きたことが“目の前”のビルに反映されていないだけ
である。

「困ったな、封時結界に外部から進入するのって結構難しいんだけど」

内部に閉じ込められたのなら脱出には自信のあるユーノだが外部からの破壊、あるいは進入となると話は別だ。

まずどこにどう“ずれて”いるのかを把握してからでないと結界に対して何の介入もできないのである。

いやそもそも介入していいのか。という懸念もあった。

結界内部にジュエルシードと結界を張った魔導師がいるのは確かである。

何かにとりついて現在も暴れている。

もしくはエネルギー暴発を起こしている可能性もある。

安易に破壊してそれらがこの世界に出てくることは避けなくてはいけない。

とくに後者の場合は。

そして進入するのも内部状況がわからないのでは危険すぎる。

「ユーノくん、行こう。」

ここでじっとしていても何も分からないし、何もできないよ」

迷うユーノの心情を察してか。

なのははそう彼を鼓舞し手の平に紅い球状の宝石を乗せた。

「レイジングハート、セット・アップ！」

『stand by ready・set up.』

紅い宝石から同じ色の光が漏れ出し、なのはを包む。

けれどその光はすぐに消え、宝石は一瞬で魔法使いの杖へ。

なのはもまた先ほどまでの姿ではなかった。

彼女の体は白い防護服バリアジャケットに覆われている。

白を基本として胸元の大きな赤いリボンが特徴的なそれはどことなく彼女が通う小学校の制服にどこか似ていた。それが高町なのはの魔導師としての姿だ。

「なのは……」

「ユーノくん、お願い」

「うん、わかった。なんとかやって　っ!？」

「えっ!？」

力強いなのはの言葉に頷き結界破壊に取り掛かろうとしたユーノ。しかし、突然轟音と震動が辺りに響き渡る。

「な、なになに、今の何!？」

周り中あちこちにせわしなく視線を向けるなのはをよそにユーノは冷静に事態を把握しようとして魔法を走らせた。

「っ、なのは、空を見て!」

言うと同じく自分も空を見上げる。

続く形で見上げたなのはの視界には

金色に輝く帯状の光が天に向かって伸びているのが映った。

それは間違いなく魔力の光。そしてその金色の魔力光には見覚えがあった。

「フェイトちゃん？」

僅かに首を傾げながらもなのはがその名を口にしたまさにその瞬間。まるでガラスが砕け散るかのような音と共に二人の目の前で結界が崩れ落ちた。

（内部からの貫通！？）

でもなんで自分で張った結界を自分で、
それにあの莫大な魔力はいくらあの子でも

ヒヨイ

「えっ、ちよっ、なのは！？」

思考の途中で突如抱きかかえられ混乱するユーノを
半ば無視したのはは自らの杖に告げる。

「飛ぶよ、レイジングハート」

『all right』

「と、飛ぶっていったいにどこに！？」

「屋上、きっとそこにフェイトちゃんはある。

飛ばすよ、しっかり捕まってるね！」

「ちよっ、まっ、ああっ！」

彼の悲鳴を残してジェット噴射のように飛び上がったなのはは
ものの数秒で屋上の上空へと辿り着く。

そこで彼女が見たのは金色の髪の少女が同じように宙に浮いていた姿と

「え……「ウキ、さん？」

今日やっと再会できた彼の傷ついた姿だった。

偶然空が見えたとき、フェイトは一瞬で思考した。

この目の前の未熟だけど手強い少年は生半可な攻撃では止まらない。下手をすれば付け入る隙を与えてしまう。

ならその前に自分のとつておきの一撃サンダーレイジを当てて、

問答無用で行動不能な状態にしなければならぬ。

そのために自然の力を借りやすい野外である屋上へと飛び出し、

邪魔されないように追いかけてくる彼に雷を放った。

その初撃は相手の拘束から始まる。

そして詠唱を終えた彼女は“とつておき”を放った。

「サンダーレイジイッ!!」

防御も回避も間に合わないタイミングで放たれたそれは確実に彼に命中する。

はずだった。

彼女が使う攻撃魔法のなかでは屈指の威力を誇るサンダーレイジ。

「……………なん、で？」

それを放ったあとしばらくその光景に放心していた彼女はようやく我に返るとそう言葉をもらした。

驚愕に彩られた彼女の視線の先には金色の光が一箇所に駐留し渦を巻いている。

けれどそんな現象を起こす作用はサンダーレイジにはない。

本当ならサンダーレイジは彼を貫き、

戦闘続行不可能なほどの魔力ダメージを与えるはずであった。

確かに雷の閃光は彼を包み込んだ。

けれど突き抜けるはずが渦を巻いて滞留し始めたのである

何が起こったのかはフェイトはわからなかったが、

彼が何かをしたことはすぐに分かった。

「はあああああつ！！」

光の渦から聞こえる声は未だ力強くその健在を誇示している。

そして徐々に薄くなつていく渦にようやくフェイトは何が起こったのかを、

彼が何をしたのかを理解した。理解せざるを得なかった。

渦の中心より僅かにずれた位置で彼は直立不動で杖を剣道でいう正眼に構えている。

つまり、渦の中心にあるのは杖の先端。

そこに埋め込まれている青き宝石ジュエルシードは金色の光を吸い込んでいた。

「ジュエルシールドに、私のサンダーレイジを吸収させてる!？」

自分で言っつて、一瞬気が遠くなりそうな錯覚を感じてフェイトは頭を抱えた。

(いくらなんでも無茶苦茶すぎる)

魔法理論も公式も魔力保存の法則も魔力運用の常識も。

何もかもをその行為は無視しすぎていた。

あれは確かに願いを叶える宝石ではあるが所詮エネルギー結晶体である。

エネルギーを放出してかけられた願いを“なんらかの”形で具現化することしかできない。

だから、攻撃性の高いデバイスを求めてその機能と形をとったことはまだ納得できた。

しかし魔法の吸収となると願いを叶えるシステムそのものと相反している。

「はあああ……ふんっ！」

大仰な風切り音にフェイトはやっと我に帰る。

見下ろす先に金色の渦はすでになく、

代わりに長大な金色の刃を担ぐ男が仁王立ちしている。

(吸収した分の魔力を刃に!?)

驚嘆すると同時に、フェイトは表情を引き締めると

バルディッシュをサイズフォームに戻して構える。

そして認識を改めた。

彼は未熟で手強い少年などではない。
ジユエルシードを操るれっきとした強敵だと。

しかし、フェイトは気付いていなかった。

(土壇場でうまくいったけど、やっぱり無茶だったか)

彼女の推察は間違っではないなかった。

ジユエルシードには魔力を吸収するキャパシティはない。

それを強引に行った反動と代償は彼の肉体へと向かっていた。

額から頬を通って首筋に落ちる赤い液。

杖を持つ両手からもポタポタと赤い水滴が屋上の床に落ちている。

たまたま月が雲に隠れたためにフェイトにはそれが見えていなかった。
た。

カタカタと震える手は出血のためか。

杖を握る手にさらに力を込めて震えを抑えにかかる。

「っ!？」

違和感を覚えた。

手の震えが止まらない。

いや、手は最初から震えてなどいなかった。

カタカタと音を鳴らして震えていたのは杖の方。

(まずい、制御がきかなくなっ て っ?)

焦燥にかられた瞬間コウキはふと、ある疑問に気付いてしまった。

これを俺はどうやって制御していたんだ？

それを明確に意識した途端、杖の震えが増した。その兆候に本能的な危機を感じた彼は頭を振って余計な思考を叩き出す。

「フェイト！」

そして叫ぶように彼女の名前を呼んだ。

「これ本当に危ないからな、絶対避けるよ！」

足を僅かに開いてその場で踏ん張る。

両手にさらなる力をこめて暴れる杖を抑え込む。

「サンダアアツ

」

「っ！」

金色の大刀からもれる光と莫大な魔力にフェイトは警戒を強める。

目を瞑っているコウキは意識を集中させる。

やることは一つ。

狙うはただ一点。

「レizziイツー！」

瞳をカッと見開いて、担いでいた杖を雲しかない空へ向けて振り上げた。

杖の先端から伸びていた長大な刀身が一条の光となって天へ伸びる。

フェイトの真横を通り過ぎて。

「えっ？ あああっ、ううっ！」

一瞬の疑問のあとすさまじい衝撃がフェイトを襲って吹き飛ばす。即座に空中で衝撃を中和、慣性を止めて飛ばされるのを停止させる。飛行魔法を使う者の必須技能だ。

（なんて威力……私のサンダーレイジだけじゃない。
ジュエルシールドのエネルギーまで混ぜてる！？）

けれど、それだけに放ったあとの隙は大きいはず。
と未だにエネルギーの放出が止まらないコウキを見据えつつ愛機を構えたが、
ガラスが砕け散るような音があちこちから響いて彼女の動きを止めた。

「あっ、まずっ」

「えっ、あっ、結界が」

空に向かって放たれたコウキのサンダーレイジはこのビルを覆っていた封時結界を
“貫通”したうえで未だ天に突き刺さり、周囲の分厚い雲を吹き飛ばしていた。

その出鱈目な威力とエネルギー総量に啞然としているフェイトとは対照的に、

コウキは苦笑いを浮かべながら、わざとらしく
「ハッ、ハッ、ハッ、ハハッ」
と乾いた笑い声をもらす。

（まずい……非常にまずい。）

結界を貫通したうえに通信妨害まで一緒に吹き飛ばしちまった。
それに……………）

手にする杖を見る。

それだけのエネルギーを放出し終えたというのに未だ僅かに震えている。

（これ以上はこの形態を維持できない。急がないとまず、っ！）

「ちっ……」

膝を床に突いて舌打ちする。

初めての实战と重ねた無茶。

そしてジュエルシードの制御からくる疲れが身体に、とくに足にきていた。

「ハア、ハア、ハア……………くそっ！」

それらを意識した途端余計に身体が重くなり突如として息が上がった。

（膝が笑いやがる。立てもしないなんて）

杖をなんとか支えにすることで倒れずにすんでいるが
両手からも力が抜けきってしまえば伏してしまうのは目に見えてい

た。
なんとかしなければ。と思考を走らせていた彼の前にスツと月光が作る影が現れる。
咄嗟にフェイトだと思って顔を上げたコウキが見たのは小さな女の子の背中。

「っ?」

背丈は似ているがフェイトではない。

白い防護服を着込み、音叉に似た形の杖を構えている姿はまさに魔導師。

「ユーノくん、コウキさんをお願い」

「うん、わかった」

その肩から降りたフェレットもどきはコウキに寄ると魔法陣を展開。

「妙なる響き、光となれ、癒しの円のその内に、鋼の守りを与えたまえ」

小さな前足を複雑に動かして印を結ぶとコウキは結界に包まれる。

「これは...?」

「ラウンドガード・エクステンド。

防御と回復、その両方を同時に行う結界だよ。
じっとしていれば傷も魔力もじきに回復する」

「助かる。」

ふふ、やっぱりただのフェレットじゃなかったなお前」

してやったりな笑みを向けられて、ユーノはただ苦笑いだ。

「あははは……」

そんな苦笑を浮かべつつ、念話で魔導師・高町なのはにその状況を告げる。

彼に大きなケガがなかったことに安堵しつつ、なのははレイジングハートを構えなおしてフェイトに向ける。

そして同時に今まで見せたことがない鋭い眼光を彼女に浴びせた。

「フェイトちゃん、私はあなたの事情は知らない。

けど……どんな事情があるうともコウキさんにケガをさせたなら、まだ傷つけるっていうなら私は絶対ゆっ、へっ、あっ、ひゃああっ!?」

突如背後から防護服を引っ張られ、そのまま片手で持ち上げられ奇声をあげるなのは。

何が起こったのか分からない本人は思わず両手足をばたつかせる。

「こらなのは、一人で勝手に盛り上がるな。あと暴れるな、持ちにくい」

「コ、コウキさん、なにを!?!」

「あっ、まだ結界から出ちゃだめだっつ」

「いや、もういい充分だ。それよりなのは」

軽々となのはを自分の顔の位置まで持ち上げて
目線をあわしてこれみよがしにため息を吐く。

「え、なに？　　というか下ろしてよコウキさん！」

「いや、誤解するのもしようがない状況だったとは思っただが、
俺のケガはフェイトがやったもんじゃない」

「え？」

じゃあ誰が、と言いたげな顔で小首を傾げるなのはに
コウキはなぜか偉そうな口調で事の真相を簡潔に述べた。

「俺が無茶やってな、自爆しただけだ」

「……………えええええっ!？」

一拍どころではない長い沈黙を置いて、
言葉の意味を理解したなのはは驚愕し絶叫する。
その反応がお気に召したのか。
どこか嬉しそうな顔でコウキは彼女を下ろした。

「さて、なにか言うことは？」

「あつうう……………フェイトちゃん疑ってごめんなさい！」

勘違いから責めてしまったことがよっぽど恥ずかしかったのか。
顔を真っ赤にしながら、律儀に頭を下げてなのはは謝った。

その後ろでは満足そうにうんうんと頷くコウキ。
だが、ユーノは呆然とし謝られたフェイトにいたっては困惑顔だ。

(なんか、調子狂うなあの人たち……)

けれど、そこに不思議と不快感はないことが

自分を余計に困惑させていることに本人は気付いていない。

その様子を観察しつつコウキは嫌な予感に囚われていた。

(なんか状況が微妙に俺にとっては悪くなってきたような

これからどうしたもんかなあ……ん、ザフィーラ?)

自身の守護獣の気配に彼は思考を止め、下を見る。

その次の瞬間には屋上の床を突き破り蒼き狼が降り立った。

「フェイトっ！」

それに半歩遅れる形でザフィーラが開けた穴から飛び出し

主人の側へと空を駆けるアルフ。

「無事か、コウキ」

「大丈夫かい、フェイト」

異口ながら同時に似たようなことを問う狼たちにコウキは一瞬笑みを浮かべる。

「コウキ…なぜ笑う？」

怪訝な顔でさらに問いかけるザフィーラに彼は苦笑と共に答えた。

「ああいや、なんでもない。大丈夫だ。」

なのはとユーノに助けてもらったしな」

そういわれて初めてなのはとユーノの存在を認知したザフィーラはその二人が先ほど自分が感じた気配だったのだと理解した。なぜ二人がという疑問が生じたものの今はそれより優先すべき存在が別にいる。

ゆっくりと視線を上げ、空中にて主の横で浮かぶ狼を睨む。

「すまん、見知らぬ魔導師の気配にあの者の足止めをやめてしまった」

「いいさ、もう言いたいことは言った。

心にまでちゃんと届けられなかったのは歯がゆいがこの状況ではしょうがない」

続くような形でコウキもまた空に浮く金髪の少女を見上げる。

言葉だけではあの少女を止められない

それは彼女を見た瞬間から分かっていたことだ。

しかしそれでも、コウキにできるのはそれだけなのだ。

やめると、

違つと、

危険だと、

叫ぶこと。

だけ。

(俺では、無理、だな)

「なのは…」

肺の中ある空気を全部吐き出すかのような大仰な溜め息を吐いた彼は隣りの少女を呼んだ。

「え？」

「なにをするか、決めてきたか？」

フェイトから視線を外し自分を真っ直ぐに見つめてくる視線に応えるように

なのは小さく頷いて足を前に踏み出した。

「……フェイトちゃん、この前ちゃんと聞けなかったこと。」

フェイトちゃんがジュエルシードを探している理由はやっぱり私聞いちゃだめかな？」

その問いかけに一瞬フェイトの視線がコウキに向かうがすぐに前に出たなのはに無言という形で返答する。

「アルフさんが言った通り、私は甘ったれた子なのかもしれない。でもそれがフェイトちゃんが私に事情を話せない理由ならっ」

コウキから言われ探索中も考えてた“自分のしたいこと”を
彼女はまだはつきりとは分かっていない。
けれど、それをちゃんと見つけるためにも、
あの子とちゃんと並ぶためにも、
この選択肢しか彼女は知らなかった。

『Flier fin.』

靴から伸びる光の羽がはばたく。
決意を胸に秘めた彼女はゆっくりと宙に浮かんでいく。
そしてフェイトと同じ位置まで上がると停止して
レイジングハートを構えてその穂先を彼女に向ける。

「私と勝負して。手加減なしの1対1で。
それで私が勝ったら、ただの甘ったれた子じゃないって
分かってもらえたら……話してくれる？」

問いかける、けれど強い意志を向けてくる瞳に
フェイトはただ黙ってバルディッシュを構えた。

(フェイト！
だめだよ、そんな勝負受ける必要はない。
こっちには何もメリットないじゃないか。
それにいくらフェイトだってそんなに魔力を消耗した状態で戦う
なんて)

(ううん、違うよアルフ。

この子を倒せば、この子が持つてるジュエルシールドは手に入れら
れる。

それだけでも意味はあるよ)

(だめだよ、そうできててもその後使い魔二匹と魔導師一人。相手できる余裕はないよ。

悔しいけどあの狼は私と互角だ。抑えられるのはあいつだけ。それじゃフェイトを守れない。ここは逃げるべきだよ)

「……………逃げる算段してるとこ申し訳ないんだがな」

律儀に手を上げて、二人の念話に割って入る形で発言するコウキ。まるで内容を知っているかのような発言に二人は驚愕し発言者に視線を向けた。

「なのはの提案はお前らにとってはあまりメリットがない。けど、これが賞品になってるなら話は別だろ？」

不敵な笑みを浮かべながら彼はその手に青い宝石を手にして掲げた。その手にすでに黒き杖はなく、あったのはその宝石だけだった。

「これを勝った方に無条件で渡すっていうのなら、お前達にも勝負するメリットが出てくるんじゃないか？」

「なっ!？」

誰かの驚愕の声を無視して、怪訝な顔でコウキを見下ろすなのはに彼はウインクだけで返す。それだけで、なのはには充分だった。

(ありがとう、コウキさん)

「私はそれでもいいよ、フェイトちゃんたちは？」

心で礼を述べて彼女たちの答えを問う。

「……嘘じゃないだろうね」

鋭く、疑うような視線を向けてくるアルフに

コウキは堂々とした態度ではっきりと宣言した。

「もちろんだ。」

俺の名と誇りをかけて、勝利したほうに必ずこれを渡すと約束する。

さらにいうなら勝負の結末がなんであれ俺たちは君たちを追わない。

「それも約束しよう」

「ふふ、日野家心得『自分からした約束は何が何でも守れ。』

守れない約束は最初からするな』だね！」

なのは嬉しそうな笑みを見せながら昔よく聴いたフレーズを本人に言い返す。

「ん、あ、ああ……」

(叱り方もそうだったが、変なことをよく覚えてるな)

それに少し戸惑ったもののコウキとなのは二人の返答を待った。

二人は僅かな空白のあと互いの顔を一度だけ見ると頷きあい、

アルフは1対1の邪魔にならぬよう屋上へと降りる。

それを了承と受け取ったなのはレイジングハートを構えなおす。

フェイトもそれに合わせてデバイスモードのバルディッシュを突き出すような形で構える。

そして、まるで息を合わせたかのように彼女達は同時に動いた。なのは光の羽根が大きくはばたき、フェイトの足が空を蹴る。互いに真正面から突進し、愛機を振りかざす。

それがまさにぶつかりあう直前のその異変を感じ取ったのは彼だけだった

「っ、二人とも下がれ！」

叫ぶ声はしかし、わずかに遅く。

振り下ろされたそれぞれの愛機は黒き杖と小さな手に受け止められた。

「ストップだ！」

「っ!？」

「えっ!？」

ミッドチルダ式の円形魔法陣を背負って、

そこへ“突然現れた”少年はフェイトとなのはの間に割り込んだ。

「ここでの戦闘行動は危険すぎる」

二人に対してそれぞれに油断なく警戒しつつ

“転移”してきた少年は冷静に、そして厳かに告げた。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聴かせてもらおうか」

厳しい目つきで彼はなのはとフェイトを威圧する。

『時空管理局』

そしてその名に、場にいた者ほぼ全員に緊張が走った。

とくにザフィーラとアルフにとっては一番遭遇したくなかった存在だけに

自然と息を殺してしまう。

「まずは二人とも武器を引くんだ……君たちもおとなしく、っ!？」

その視線が屋上で立ち尽くしているコウキたちに向けられたとき、動揺と驚愕の表情を見せた。

「え、あつ、同じバリアジャケット?」

なのはがそう思ってしまうのも無理がない。

彼が纏っていたバリアジャケットとコウキが纏う騎士甲冑はとてもよく似ていた。

甲冑もジャケットも言い方が違うだけで基本は同じもの。

魔法形式がベルカかミッドの違いだけだ。

どちらも術者のイメージによって形成されるものであるがゆえに故意に似せないかぎり同じ意匠となることは稀のはずである。

「おいつ、お前なんでそのジャケットをつ！？
それは何を元にしてイメージしたっ、答える！」

突如激しい感情を見せ怒鳴るように叫ぶ執務官クロノ。
その態度の急変に皆が戸惑うなか。

問われていたコウキだけが呆然と彼を見上げていた。
意思の宿らない瞳が漠然と彼を見据えるなか足元をよろつかせて
コウキは引かれるように一歩、一歩と足を進める。

「……………ハラ……………オウン……………？」

口許だけが動き、その名を口にした途端のことだった。

「あっ、ああっ……………」

苦悶の声を漏らし床に膝を突くとまるで崩れ落ちるかのように倒れ
込んだ。

「コウキ！？」

「っ、コウキさん！」

その光景に考えるより先に身体が動き、駆け寄ったザフィーラとな
のは。

「うつ、あっ、ああ……………ああっ！」

しかし、倒れこんだかと思った彼は即座に床の上を転がりまわった。
両手で何かを押さえ込むかのように頭を抱え苦しげな表情を浮かべ

ながら。

「コウキさんっ、コウキさんしっかり！」

その苦しみから逃れるため暴れる彼の身体を押さえようとするのはだが

体格も腕力も違いすぎてうまくいかない。

「くっ、何が、何がどうなっている!？」

なのはに続く形でザフィーラも押さえつけようとするが狼の姿ではそれも難しい。

かえって爪で傷つけてしまうのでは、という危惧が余計に彼の行動を縛る。

(まさか呪いが、いやあれは抑えたはずだ。だいいち苦しみ方が違う!)

思念通話も受け付けず、主はただ苦悶の声と共に暴れるだけ。

何にに苦しんでいるのかも分からずザフィーラは彼にしては珍しく動揺していた。

「あっ、きゃっ」

女の子の短い悲鳴にハッと我に返ったザフィーラは突き飛ばされたなのはを身体で受け止める。

「あ、ありがとう……コウキさん、どうしちゃったの?」

不安げな瞳を向けられたザフィーラは申し訳なさそうにうな垂れた。

「すまん、私にも分からない。だが、切っ掛けはっ……」

抑えたつもりが僅かに怒りのこもった言葉を放ち、まるで射殺さんばかりの視線を執務官へと向ける。

「貴様っ何かしたのではないだろうな！」

「っ、何もしていない！」

だいいち事情も何も聞いていないのにそんなことするものか！

……聞こえるかアースラ！」

「ええ、聞こえるし見ていたわクロノ。」

いま医療班と搬入の準備をさせているところよ」

彼の呼ぶ声に即座に映像通信が返ってくる。

魔法陣の中心がモニターとなっていてそれには

青い髪の毛をポニーテール風に結っている妙齡の美女が映っていた。

「で、いいかしら白い服の魔導師さんと狼くんは？」

「えっ、あっはいお願いします！」

突然話を振られて慌てたものの即座に頷くのは。

(…致し方ないか……ここはコウキの容態を落ち着かせるのが優先)

あまり管理局とは関わりたくないが

ここからあの状態のコウキを連れて逃げることは事実上不可能。

いまこの場で治療の術がないザフィーラには彼らを頼るしかない。

「頼む、助けてくれ……」

そう自分を納得させ、深々と頭を下げた。

「わかりました。」

クロノ、いまは人命優先とし事情聴取とロストログ回収は後回しで構わないわ」

「了解です……君も、その使い魔も動くなよ。」

動いたら力尽くで拘束することになる」

クロノは頷くと言葉と視線でフェイトとアルフを牽制する。

それに無言で返し、フェイトはクロノの指示で屋上に降りた。

視線は警戒を見せる執務官に向けられていたが、

その意識は依然と苦しみ続けるコウキに向けられていた。

「うつ、くつ、あ……があっ！」

「コウキさん……っ」

(まただ、また私、何にもできない)

あの日と、真実を知ったあの日と同じ無力感。

助けられてばかりで、守られてばかりで、なにも返せていない。

「ああっ、うつっっ！」

「コウキさん！」

その声を聞いていられず思わず再度暴れる彼の体にしがみつく。けれどコウキはその存在に気付いていないかのように頭を押さえて暴れまわる。

「なのは、危ないよ。一旦離れて！」

「でもコウキさんを放っておけないよっ」

「分かってる。」

だから、ちょっと力尽くになるけど僕が抑えつけるから」

考えがあると訴える表情を見せるユーノの言葉を信じ、なのはは彼の体から離れる。

「なにをするつもりだ？」

怪訝な顔で訊ねてくるザフィーラだったが、へたなことをしたらただではすまないぞと目が語っていた。それに苦笑で返しつつユーノは答える。

「このままだと医療班がきても満足に治療も搬入もできるとは思えないからね。」

「ちょっとバインドで縛るつもり。だめ、かな？」

少し不安げに目の前で威圧してくる狼に訊ねると意外にもすぐに頷きが返ってきた。

「頼む、私の拘束魔法では傷つけてしまつかもしれん」

「わかりました……はあっ」

フレットの前足が突き出されコウキが転げまわる床に魔法陣が現れる。

「チエーンバインド！」

魔力で編まれた鎖が魔法陣がから飛び出し、暴れる体を拘束し、床に仰向けに寝かせる。

「あつ、ああ……くっあ、うっうっ！」

「コウキさん、あとちょっとの辛抱だからね」

横たわりながらも喘ぎ苦しむコウキの顔を覗き込みながら、聞こえているのかも分からない励ましの言葉をかける。それしかできないのは悔しいけれどそれをしないこともなにははできなかった。

「気をしっかり持てっ、コウキ」

そしてそれはこの守護の獣とて同じだった。

だが二人が顔を覗き込んだその瞬間、どこも見ていなかった瞳が二人を捉えた。

苦悶の声は消え、バインドに縛られてなお暴れていた体が急に大人しくなる。

「コウキさん？」

疑問の言葉はしかし、次の叫びにかき消された。

「あ……あ……やつ、あ、うあああああああああ……！！」

「っ、いけないっジュエルシードがっ！」

耳をつんざくような絶叫が夜の街に響いた時。
そのビルは青き光に包まれていった。

第5話予告

はやて「傷つき倒れ、それでもあの子を放っておけない困ったあの人は

優しい誰かの涙を振り切って、次元の舟にその身を寄せる」

なのは「いくつもの出会いと思いが交錯するなか、

遠い過去の思い出がいまも誰かを傷つけていく……」

二人「次回、魔法少女リリカルなのは異伝・第5話『雷のユメ・風のウツツ』に」

なのは「リリカルマジカルがんばります！」

はやて「リリカルマジカルがんばりますう」

フェイト「優しい人なんだよ、本当は」

私はあの人の娘だから

この世でただ一人の私の母さん

本当はやさしいあの人のために、がんばる

と決めた

320

痛いのも苦しいのも我慢できる

そんなのはたいしたことじゃない

いつかの日に見たあの笑顔を取り戻してほ

しい

それが私のただ一つの願い事

だから、私は

あたしに家族はいなかった

そんなあたしと家族になってくれた男の子

を覚えた

傷だらけのくせに平気な顔をする彼に、怒り

痛みや苦しみを我慢するなんておかしい

ない

それはそんな風に抱え込んでしまうものや

せる

いつか絶対、あの人を本当の笑顔にしてみ

それがあたしの最大目標

だから、あたしは

「……」

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聴かせて
もらおうか」

管理局の執務官

どこかで見たとことがある黒い髪と瞳を持つ少年は

見てはだめだ

たしか、なんと名乗ったか

呼んではいけない

「……………ハラ……………オウン……………?」

知らない
知っている

「あつ、ああつ……」

知ってはいけない

世界が回る

どこになにがあるのか分からない

「コウキ!?!」

「っ、コウキさん!」

痛い

頭が痛い

割れるように痛い

「うつ、あつ、ああ……ああっ！」

でないとキミは てしまう

知らない

俺は知らない！

見てないっ、見てないっ！

「うつ、あつ、ああ……」

「コウキさんっ、コウキさんしっかり！」

よく聞こえない

声が遠い

「くっ、何が、何がどうなっている!?!」

くるな

くるなっ

くるなあっ!!

「あっ、きゃっ」

俺に、

俺に、

俺に、入ってくるなああっ!?!!!

それは幸せな家族の風景だった

こんなの知らない……っ
いる

俺は……知らない……知
いる

知ら……知っている

「あぁっ、ううっ」

生まれたばかりの赤子を愛おしそうに抱いている母親

それを暖かく見守るのは　　だ

初めて立ったときは感動した

舌足らずな言葉で呼んでくれたときは嬉しかった

この子をこれからずっと守ってほしいと　　と約束し

「あっ、ああ……くっあ、ううっ」

知ってる、知ってるんだっ

「コウキさん、あとちょっとの辛抱だからね」

俺は、知ってる

“あれ”が誰なのか知っている

「気をしっかり持てっ、コウキ」

そっだ

知っている、はずなのに

なのに

俺を呼ぶ二人のことが、誰だか分からなかった

「あ……あ……やっ、あ、うあああああああああ……!!」

「!

そこで、目が覚めた。

「……………」

一瞬、そう思った。

けれど目の前で揺れる長く美しい銀色の髪と不安げに俺を覗き込む深い赤の瞳がその逆だと理解させた。理解させてくれた。

思わず手を伸ばしその顔に触れ、撫でる俺の指。

彼女は嫌がる素振りなど微塵も見せずむしる俺の手をとって

愛おしそうに自らの頬にこすりつける。

柔らかく白い肌の感触と暖かいぬくもりに胸のなかの何かガスッと

冷えていくのを感じた。

「…主、私のことが分かりますか？」

「ああ、分かるよ、分かる……………けど悪いな、名前のほうは未だ検討中だ」

最後にそう付け加えながら苦笑する。

彼女は「お気になさらず」とだけ答えて僅かに安堵の顔を見せた。よかった。本当によかった、彼女のことがかつて。

もし分からなかったら、そして目を開けて最初に見たのが彼女でなければ、

混乱したままめきちらして暴れていたかもしれない。

と、どこか客観的な考えに至れるほど

パニックになっていた頭は冷静さを取り戻し、痛みもなくなっていた。

ただ。ただな、それらから解放され意識もだんだんはつきりしてくると

理解したくなかったものも理解しちゃうわけで

まあなんとというか後頭部から感じる柔らかく暖かい感触にどう反応していいやら。

「くすつ…」

ああだ、こうだと悩んでいると彼女は突然柔らかな微笑を見せた。急に気恥ずかしくなって腕を引っ込める。

不安げな顔は消え、僅かな微笑みを携えたその表情には自然と胸が高鳴ってしまうほどの魅力がある。

「ありがとうございます」

というより忘れていた。

ここでは、というか基本的にこいつには隠し事などできないということ。

「それは……申し訳ありません」

「ああ、いや、責めてるわけじゃない。

それがしょうがないことなのは分かってるしお前との繋がりには正直心地いい。

だから別にそれはいいんだけど……頼むから、俺の心の声にいちいち反応しないでくれ」

そのたびに俺の思考が伝わっていることを自覚させられて、すさまじく恥ずかしい。

「わかりました。以後はそのようにいたします。

膝枕も、恥ずかしいのでしたらもうおやめにしましょうか?」

「……………」

「では、このままで」

「うっ」

思考が完全に伝わってしまったためある意味はやてより厄介だ。言い訳になるが続けてほしいとは願ってないぞ。

やめてほしいわけじゃないって思ったただだからな!

俺だって男なんだから、そういう願望はあるんだよ。

「主、誰に向かって話してるのですか？」

「っ、だからいちいち反応しないでくれ、お願いだからあ……」

うつつ、恥ずかしくて弱々しい情けない声しか出てこない。

「あっ、申し訳ありません。つい」

とにかく、今ここにはやてがなくてよかった。

「はい、主はやては寝ずに看病をしておられます。

ですからここへ来ることはしばらくないでしょう」

「……………」

こいつ、わざとやってるんじゃないだろうか？

「何がでしょうか？」

不思議そうに首を傾げる姿はどう見ても演技には見えず、俺に頭を抱えさせる。

「なんでもない。それより俺が意識を失ったあと、どうなった？」

俺の問いかけに安堵の笑みを浮かべていた表情が一瞬で引き締まり、ただでさえ強い真剣みが増した。

「主が意識を失うのと同時に制御を離れたジュエルシードが

小規模ながらエネルギー暴走を起こしましたがフェレット姿の結

界魔導師と

蒼き狼が咄嗟に結界を張ったため被害は無人の廃ビルだけとなりました」

ああ、やつちまったか。

あれ、俺が制御してたからな。

意識がなくなれば取り込んだエネルギーは暴走するよな。

「それでなのはとフェイト、それにあの執務官とやらは？」

「エネルギー暴走のさい離脱してそのまま。

蒼き狼がその混乱に乗じて意識のない主を家に連れ帰ったので

それ以上のことは分かりかねますが、状況から見て全員無事だと思われます」

「それは良かった」

知らずホッと息を吐く。それが聞ければ安心だ。

もしそんなことではにはケガでもさせてたら、

それこそ本当に士郎さんたちに合わせる顔がない。

「ですが主、起床のさいは合わす顔を決めておいたほうがよいかと」

「はい？」

「意識のない負傷した主の姿に主はやたと騎士達はかなり動揺していました。」

起きるさいは彼女たちからのある程度の叱責を覚悟していたほうがよろしいかと」

くすくすとどこか嬉しそうに言っている風に見えるのは俺だけか？

「気のせいです」

「……分かった、覚悟しておこう。そういえば俺の体は寝てるんだよな」

「はい」

うーん、俺まだ完全に頭が起きていないようだ。

「なあ、そもそもなんで俺は意識を失った？

その直前に見た光景はいつたいなんだ？」

その疑問にいきつくまでにこんな遠回りをしてしまうとは。

「私に分かる範囲でお答えします。

ですがその前に、主は見た光景を覚えていますか？」

「えっ、ああそれはもち　っ!？」

覚えて、ない!？

ちよっと待て、さっきまで見てたんだぞ。

俺は見てたはずだ。女の人が、小さな子と

「っ!？」

頭に走る一瞬の痛みに俺の思考は中断させられ、おぼろげに浮かんだ光景はかき消された。

「主、無理に思い出そうとしてはだめです。下手をすればまた意識を失います」

「あ、ああ……でもなんで忘れてんだ俺。あんなに強烈だった、はずなのに……」

そうだ。内容はもう思い出せないが、何か強烈なビジョンを俺は見ただ。たはずだ。

「それは覚えていてはいけないからです。

主が覚えていないので何を見たのかは私には確認できません。

が、その前後の状況からおそらくは闇の書の記憶が流れ込んだのではないかと」

「それは前に何度か経験してるけど、今回のとは違うんじゃないのか？」

俺は『夢』という形で過去に闇の書がいた時代や場所を見たことが幾度とあった。

時にははやと一緒に見たことも。

けれどそれはあくまで夢を見るのと大差がなく、それを見てあんな風になったことはない。

「はい、ですから今回見たのは闇の書の過去ではなく歴代の主の誰かの記憶ではないかと。

主コウキは今までの主が最後どうなったのかはすでにご存知ですから、

説明する必要はないですが、ほとんどの主が闇の書の力を制御できずに

呑み込まれその命尽きるまで暴れるか管理局によって滅せられて

います。

私と融合した状態でそういった最後を迎えるため
今までの主たちの記憶が一部ですが闇の書に強く残っているの
です」

「それが、俺に流れ込んできた、ってことか？」

「ええ、原因は不明ですが突然闇の書と主コウキとのリンクが
一時的ではありましたが今以上に深くなりました。

その弊害としてどこかに残っていた記憶の欠片が流れ込んだので
ないかと。

そして個人の、それもその最後に残した“想い”というものは
色んなものを塗りつぶしてしまうほど強いものです」

なるほど。

あくまで傍観者視点の歴史の記憶とありとあらゆる主観的感情が紛
れ込んだ

個人の記憶では“濃さ”が違うということか。

覚醒状態だったというのもあるんだろうが、

その濃さを処理しきれなくて気絶することで自我を守ろうとしたの
か。

「その推測であっていると思われませう」

彼女はそう肯定してくれたが、それだとどうにも納得できない点も
ある。

何を見たかは全く記憶にないがあれは本当に誰かの最後、断末魔の
想いだっただろうか？

そんな、暗く、重たいものではなかったと思うのだが。

「それについては情報が少なく判断しかねます。ですが今後は対策としてシールドを張り同様の事態に陥らぬよう防波堤とし、

私も警戒を続けて何かあればすぐに対処します」

「ああ、それで頼む。

けど、はやてには夢の中でも教えるなよ。あれでかなりの心配性だからな。

前からそんな感じしてたけど2月の終わりごろからずっと、

母親気取りで口うるさいったらありゃしない」

「ふふ、わかりました。

そのようにいたしましょう……そろそろ目が覚めるようですね」

僅かな微笑を浮かべつつ彼女は俺を見てそう言った。

「……みたいだな」

俺も何となくその気配を感じて自然とスツと息を吐く。

この瞬間は未だに慣れない。

ここで彼女と話すのはいろいろと面白いのだが、この瞬間は好きになれない。

何が好きになれないって、毎回彼女のこんな顔を見るはめになるからだ。

でも、一番気に入らないのは

「主……よろしいでしょうか？」

「こういうときばかり、俺の声を無視することだ。

それが計算でないから余計に気に入らない。

「なんだ」

「お考えを変えてはくれないでしょうか？」

「っ！」

そのくせ、一番言っただけを言葉に、声にする。低く感情の孕んでいないその声はしかし痛いほどの切実な思いが込められている。

“繋がって”いる俺にはそれが、本当に痛いほど分かってしまうから、だから俺はただ笑みを見せた。

「……馬鹿な主で、ごめんな」

そうやって笑顔で謝るしか、俺には出来なかった。

そして今度はちゃんと自分の意思で手を伸ばして彼女の頬に触れる。拒絶せずに俺の手を受け入れ、その手に彼女の手がそっと重ねられる。

けれど揺れる赤い瞳が俺の顔を捉えて何かを訴えているのが分かる。ああ、本当に気に入らない。こいつをこんな顔にするのは、いつも俺だ。

「俺は本当に馬鹿で、だめな主だな。」

お前を泣かせてばかりだ。夢で初めて会ったときも、2ヶ月前も、今日も「

「っ……………」

それは違う。ってか？

今にも崩れ落ちそうな瞳が、けれど強く否定してくる。そこは絶対譲らないんだよな、こいつも頑固な奴だ。

「…主はたしかに効率という点において不器用で適切でないやり方をしています。

それを主自身が馬鹿だとなじるのならそれは確かに馬鹿なことなのかもしれません。

主コウキにはもう少し感情や感傷を抑えるすべを学び、実践すべきだということをお心に留めておいてほしい」

うつつ、耳が痛い。

まったくもってその通りだが、生まれ持った性分をいまさらどうしろというのだ。

努力はするけどさ。

「ですが…これもまた覚えておいてください」

そういつて仄かな笑みを見せた彼女は俺の手をそつと俺の胸に置いた。

「主はやてや騎士達も、その武装たちも…そして私も。

誰一人としてあなたを愚かだと思ったことはありません」

見惚れてしまう美しい笑みには確かな自信と決して譲れない想いがあった。

まったく、こいつの言葉は本当に、本当にいつも俺の胸をつく。

愚か者ではない、か。

なんか遠回しに馬鹿なのを全員から肯定された気もするが悪い気はしない。

「ありがとう……」

感謝の言葉を最後に述べて、俺は本当に目を覚ました。
俺の家の俺の部屋の俺のベッドの上で。
けれど視界はひどく歪んでいて、見慣れた部屋がよく見えない。

「っ……っ」

目から涙が流れている。

決して俺のものじゃない涙。

だけど、泣かしているのは俺である涙。

ふと枕元に置いてある古ぼけた本から嗚咽が聞こえたような気がして、

思わず俺はその本を抱きしめた。

ごめん、と心で呟きながら。

優しい魔導書（後書き）

現時点ではまだ名前のない彼女。

コウキの秘密を一番知っているため、泣きっぱなしです。

初めてのウン(前書き)

短いので続けて投稿します。

初めてのウン

4月27日 AM01:39

海鳴市内・高層マンション一室

灯りを消した暗い室内には月明かりだけ。

さして調度品は少なく誰かが生活している雰囲気すら希薄なその部屋で

寄り添うようにソファに座る二人の少女がいた。

部屋着のフェイトと獣人形態のアルフである。

ここはジュエルシードを探すための拠点。

件の宝石を求めてこの世界へとやってきた彼女達は

それが海鳴市周辺にばらまかれたことを突き止め、

探索のための拠点としてここを借りたのである。

ちなみにそのために必要とされる各種書類は偽造されたもので保護者役はアルフの変身で誤魔化している。

家賃だけは現地人に必要以上に迷惑をかけたくないフェイトの意向で持ってきていた宝石類を換金した本物で支払われている。

むろん換金時に必要な身分証明書なども偽造されたものなのだが。

あれから、
ジュエルシードの暴走余波から逃げるようにその場を離れた彼女達は
念のためにその後二手に別れ、さらにジャミングでかく乱することで
管理局からの追跡を振り切りようやくここに戻ってきていた。

「ごめんよフェイト、ここに傷が残ってたこと気付かなくて……」

申し訳なさそうに気落ちした顔を見せるアルフは
その腕をとって痕が残る腕に治癒魔法をかける。

「いいよアルフ、私も気付かなかったから」

安心させるために笑みを浮かべながら首を振るフェイト。

それでも彼女の獣耳はペタンと倒れたままで

明らかに気落ちしているのが手に取るように分かってしまう。

なんとなくその頭を痕が消えた手で撫でるとアルフは少しはにかみ
ながらも

嬉しそうにそれを受け入れる。

フェイトもそんな様子の彼女を見て、柔らかな笑みを見せる。

「ねえ、フェイト」

しかし、アルフが嬉しそうにしていたのは僅かな時間だった。

彼女はどうしても、たとえ愛する主たるフェイトを傷つけてでも
言わなくてはいけないことがある。

「ん、なに？」

「もう、だめだよ。」

時空管理局まで出てきたんじゃないよ！
逃げようよ、二人でどっかにさ」

彼女は滅多に出さない悲痛な声で主に訴える。

けれど主たる少女は「それはだめだよ」と首を振る。

その答えを予想していたとはいえ、その考えを変えさせるのは難しいと分かっている、

それでもアルフはフェイトのために、大好きな主のためにそれで諦めるわけにはいかない。

「あの素人どもならまだしも、

訳分かんないくせにやたらと手強い魔導師とその使い魔に、管理局の執務官まで出てきたんだよ！

あの歳で執務官なら間違いなく一流の魔導師だ。
いくらフェイトでも勝てっこない」

執務官とは管理局の役職の一つであり、

事件捜査や法の執行権利、現場人員への指揮権を持つ管理職。

そういつた高い権限を持つ反面、優れた知識と判断力、実務能力が求められる。

仕事のスタイルは個人によって違うらしく、現場に個人で出てきたあの執務官は

それだけ実力があることを暗に示していた。

事実、その隙のない動作にフェイトはジュエルシード暴走まで身動きがとれなかったほど。

フェイトと共に、そして彼女をサポートするために
師リニスから色々な知識を教えられていたアルフは

管理局という組織とその役職についてある程度大雑把ではあったが把握していた。

だからこそ、執務官の権限と能力の高さも分かっている。

「そのうえ本格的な捜査をされたら、ここだっていつまで見つからずにいられるか。」

「そもそも！ あのオニババツ、フェイトの母さんの言ってることめちやくちやだよ。」

「そのくせいつつもフェイトにひどいことして！」

激昂しつつもいたわるように彼女の頬に優しく触れる。

この白く柔らかく、暖かい肌をあんな女はいつたい何度ぶつただろうか。傷つけただろうか。

状況が芳しくないイライラが普段から鬱憤していた彼女の母への怒りに摩り替わる。

「だめだよ、そんな言い方しちや。」

「母さんはいま研究がうまくいかなくて苛立ってるだけだよ。」

ここにはいない自分の母に対してアルフは怒りを隠そうとしない。それは無理のないことではあるとフェイトも理解はしている。

アルフと使い魔として契約を結んだ日は約2年前のこと。

その頃はもう彼女の母はずっと研究室に閉じこもっていてお世辞にもよい母であったとはさすがにフェイトもいえなかった。

「アルフが知らないのはしょうがないけど……優しい人なんだよ、本当は……」

そういつてフェイトは優しく微笑む。彼女の中にある母のそれと同じように。

「……………」

いつもなら、ここで終わっていた。

主従の関係というより友達や姉妹に近い関係を持つ二人だが、この点に関してはずっと前から問答が行われている。

そしてそれはずっと平行線で、最後にはアルフが知らない昔の母の話で終わるのもいつものことだった。

自分が誕生する以前の話など知るわけもない彼女にはそれ以上の追求ができない。

「フェイト、それは……」

はずだった。

「…それは、フェイトがそう思っただけだよ」

「っ！」

搾り出されるように発せられたそれはフェイトからすれば意外な、アルフからすればずっと胸のうちにあっていえなかった言葉だった。

「あの女が昔どんな奴だったかなんて知らないけど、いまのあいつは絶対おかしいよ！」

うつん、前からおかしかったうえに最近はずっとひどくなってきた。

無理なんだよ、もうフェイトが知ってるっていう優しい母さんには戻らないよっ」

「そんなことないよ、これが終わればきつとっ」

「そういつてっ！　なんども無理してあいつのいつこと聞いて、

でもいつもあの女は難癖つけてフェイトにひどいことしてたじゃないか。

あれはもう罰やしつけなんてもんじゃない。ただの八つ当たりだよ！」

いつも以上に必死な形相で、フェイトの両肩を掴んで揺らしながら思いを訴える。

しかしそれでも、フェイトは首を縦には振らない。

「でも、そうだとしても母さんにはもう私しかいないんだ。

私までいなくなったら、母さんは一人ぼっちになっちゃう。

そんなこと………できないよ」

記憶の中にすらない父とはもうずっと前に離婚していて、母の使い魔だったリニスも、もういない。

そのうえ自分までもがいなくなっては母は本当に一人きりになる。

ここまで育ててくれた母をそんな状態にはさせられなかった。

自分はこの人の娘なのだから。

「フェイトはそうやって誰かのことばかり優しくして、自分を大事にしてくれないじゃないか！

そのためにフェイトが傷つくのも、苦しい思いをするのも私はいやなんだよおっ………」

「アルフ………」

感極まって零れ落ちる涙をぬぐおうともしない彼女に、

フェイトはかけるべき言葉が見つからない。

そうして彼女の小さな嗚咽だけが、その部屋に響いていく。

「 最後、なんだって……」

「 うっ、うう……え？」

どれだけの時間沈黙していたのか。

フェイトは伏せていた顔を上げると諭すような優しい口調で続ける。

「 母さん、言ってた。用事を頼むのはこれで最後だって。」

ジュエルシードを一個でも多く集めて帰る。それが最後だって言
ってた。

もしそれでもアルフの言うとおり母さんが何も変わらなかったら、
その時は………アルフの言うとおりにするよ」

その言葉にアルフは目を輝かせる。

「 本当かい？ フェイトそれ本当だよね！」

嘘だと微塵も疑っていないというのに嬉々として訊ねるアルフにフ
ェイトは頷いてみせる。

「 本当だよ、だからアルフもう少し手伝って。私もがんばるから……」

「 うんうんっ、うん！」

がばっと彼女の小さな体を抱きしめて、

アルフはさっきとは違う意味の涙を流しながら喜んだ。

やっとやっとその決断をフェイトにさせることができた。

これであとはジュエルシードさえ集めてしまえば、あとはどうとでもなる。

集めて彼女の母が変われば、元の優しい母に戻るのならそれはそれでいい。

何も変わらなくても、フェイトをあゝの環境から出せるのだ。なら自分はフェイトを守りきることだけを考えればいい。

「私、がんばるよ！」

相手が誰だろうが、管理局だろうが執務官だろうが、フェイトの邪魔するやつはみんなぶっ飛ばしてやる！」

「アルフ……」

親愛をこめて名を呼びながら自分を抱きしめる彼女の背を撫でる。その表情に翳りがさしていることは抱擁しているアルフには分からない。

(ごめんね、アルフ)

胸の中で謝罪の言葉を告げながら、何気なく自らの頬をさする。

それは、あまりにもつたない嘘だった。

使い魔を想い過ぎた主人と主人を信じすぎた使い魔だからこそ生まれてしまった嘘。

それに痛んだのは不思議と胸ではなく、彼にぶたれた頬だった。

母には何度となくぶたれた。けれどそれをフェイトは痛いとはあまり感じたことはない。

だというのに、どうしてこの頬はいまになってこんなにも熱く、こ

んなにも痛く感じてしまうのか？

『ふざけるんじゃないこの戯けっ！！』

これ以上はないと思えるほど激昂し自分を叱り、引つ叩いた彼。
あの時はただその一喝と痛みに怯んでしまった彼女だったが
今はその熱さと痛みに関わりを覚えていた。

(……母さんにぶたれた時と何か違う)

明確な差は分からない。

ただ彼の叱りつけてくるような声が頭の奥で反芻される。
怒っているはずなのに何故か悲しそうなその声が耳から離れてくれ
なかった。

それぞれの勝敗（前書き）

日付が行ったり来たりするのでご注意を。

それぞれの勝敗

4月27日 PM05:32

時空管理局・巡航L級8番艦。
次元空間航行艦船「アースラ」

次元の“うみ”を漂う司法の船がロストロギアの反応を感知してから
僅か二日目にして二組目の客を乗せることとなった。

転送ポートによって船内に招かれた一団は無事の到着に我知らず息
を吐く。

「こちらだ、ついてきてくれ」

案内役となったクロノ・ハラオウン執務官のあとに続いて彼は車椅
子を押しした。

「ああ…」

歩を進める彼の両隣には蒼い毛色の狼と薄い桃の毛色を持つドーベ
ルマン風の犬が並び、
車椅子に乗る八神はやての膝上では赤い毛並みのウサギが、
いやどちらかといえはウサギを模したぬいぐるみのような生き物が

丸くなっている。

(ここまででは思ってた以上にスムーズに来たな。

問題はこのあとか……お前ら、変に警戒しすぎるなよ)

最後の言葉に頷く気配を感じて、彼もまた小さく頷いた。
その肩にはブロンドに近い毛色の小鳥が乗っている。

「そういえば、なのはたちは二度目になるのか？」

「うん、あの後クロノくんに連れられて来てたから」

自分達より少し前を歩く高町なのはに声をかける。

その横では同じ歳くらいの少年が同意するように頷く。

ユーノ・スクライア。あのフェレットの本当の姿である。

「それでなのは、その場で即決で協力を申し出ちゃってね。

「この艦長さんがそれを受け入れてくれたんだ」

「キレイで優しそうな人なんだよお、ねえクロノくん」

「……………」

話を振られたものの、当の彼は足を止めて唸ってしまっただけで何も
言わない。

「どっしたの？」

「悪いが、部下としても息子としても正直その点に関しては素直に
同意するのは難しいな」

堅苦しい物言いだがなのは何故かその額に汗を見たような気がして首をひねる。

再び歩き始めた彼を追いかける形で続く。

そしていくらか進むとクロノの足が止まり、目の前の扉が開いた。

「艦長、入ります」

（さて、話せる人物かどうか。

だがどんな相手だろうと絶対に言いくるめてみせる）

自信と決意を持って、そこで待っていた彼女と彼は出会うことになる。

彼が持っていたありとあらゆる予測の斜め上をいく形で。

「お連れしました、艦長」

「おつかれさま。

まあ、みなさんどうぞどうぞ、楽しんでくださいねえ」

初めに目に付いたのは彼女の屈託のない満面の笑みではなくその内装。

素人目にも見事としかいいようのない美しい盆栽の数々。

一団全員が席に着けるほど広めの一室に敷かれた真新しい畳。

部屋の一番奥にはどこから水を引いているのか、ししおどしまである。

その中心で管理局の制服に身を包む妙齡の女性が正座して彼らを出迎えていた。

「……………はい？」

意外性でもって謀らずも出鼻を挫かれてしまった彼は
かつてないほどの嫌な予感にさいなまれることになる。

そしてこれが闇の書の主である日野コウキと

アースラ艦長リンディ・ハラウン提督との出会いとなった。
それがもたらす意味を当人たちが知るのはまだ先の話である。

4月28日 AM09:48

海鳴市 中丘町 日野家宅

「はい、これではやてちゃんのお着替えの準備オツケー！」

「うん、ありがとなシャマル」

いえいえと首を振りつつバックを持ってリビングへ向かう。

その気配に今しがた受話器を置いたところのシグナムが気付く。

「準備ができたのですね。こちらも石田先生に連絡しておきました。
言われた通り皆で旅行に行くということに」

これからしばらくこの家を空けることになる。

誰にも何も言わないでそんなことをすると後から騒がれて面倒なこ

とになりかねない。
そのためご近所のみなさんと御世話になっている石田医師には旅行
ということにした。

「ありがとな、でもごめんなシグナム。嘘つかせてもって…」

必要なことだとわかってはいるし、
本当のことを言うわけにもいかないのもわかっているが、
それでも申し訳なさそうに俯くはやて。

彼女も間違いない皆の主なのだが、
どちらかというとその役割はコウキが担っているためか
時折主としての責を果たせない自分を、
世話をしてもらってしまっただけの自分をこの少女は悔やんでしまっ

「いえ、お気になさらず」

それを知る彼女たちは、けれど優しく表情を和らげながら首を振る。

「今からお土産考えなくちゃね。はやてちゃんも手伝ってください
？」

「……ふふ、もちろんや」

その気遣いが嬉しく、はやては歳相応の笑みを見せてくれる。
それがまた嬉しくて彼女達も破顔一笑する。

「ところで……コウ兄はまだあんな調子なん？」

しかし、ふとその存在を思い出した彼女の指摘と伺うような視線に
二人は苦笑を浮かべて同じ所へ視線を移した。

「え、ええ。ずっと変わらず」

リビングにあるソファに座らず。

その前で彼はいわゆる体育座りで自らの両膝の間に顔を埋めていた。アースラから一旦家に戻ってきてからずっとこの調子で落ちているのである。

グイータとザフィーラがその隣りでずっと励ましているが彼の気持ちちは上がってこない。

「コウキ、いいかげんしつかりしろよ。」

「ちゃんとこっちの要求は通ったんだしさ」

「……通ったんじゃない、通してくれたんだ」

何度目かの励ましにやっと顔を上げるが、その顔は見てるこっちが居た堪れなくなるほど暗い影が差している。

「こっちの思惑はたぶん全部読まれてた。」

そのうえで、そうされてしまった時点でこっちはあの艦長の手の平の上。

要求は通ったけど、それは実質心臓握られてると変わらん」

「いや、いくらなんでもそれは深読みしすぎだろうに」

ザフィーラの指摘は聞こえていないようで彼はうわごとのように呟く。

「ああ、負けた。完敗だ。」

これだけは誰にも負けない自信あったのになあ……………」

はあ、と大きな溜め息を吐いて、また顔を埋めてしまつコウキ。その完全に気落ちした姿に全員が困惑顔を見せた。こんな彼の姿は見たことがない。

そして何よりあの会談の裏でコウキがそんな敗北感を感じていたことに

誰も気付いていなかったのである。

それほど、その会談は事前に思っていたよりスムーズに進んでいたのだから。

「コウ兄がそこまでいうんやったら、

リンディさんにはけっこう注意せなあかんってことかな？」

しかし彼の人の本質を見抜く眼力を認めている彼女達にとってはコウキの深読みや思い込みとも取れる推測や敗北感は無視できるものではない。

「そうですね。では、彼女に対してはより一層強い警戒を」

「それは気にしなくていい」

「え？」

再び顔をあげた彼は皆に向けてなのか独り言なのか。判別のつかない口調でぼつりぼつりと語りだす。

「あの艦長はすさまじく厄介だ。人を見る目は確かだし交渉術にも長け、

そのうえ一切の感情を抜きにして合理的な判断を下せる優秀な指揮官だろう。

そして天然なのか計算なのか判別つかないけど、それをなかなか相手に悟らせないあの言動は卑怯すぎる」

自分で言っていて思い出したのか気落ちしていた顔が不機嫌さに塗りつぶされていく。

けれどそれは次の言葉を紡ぐうちに物悲しく且つ懐かしむような顔に変わっていった。

「でも、あの艦長は相手にとって何が一番いいのかを考えている。

事件をただ解決するんじゃないかとそのあとで残される人々のことを、残る傷をどうすべきかをちゃんと考えてくれる人だ。

でなきゃ、あんな無茶苦茶でこっちに都合がいいだけの要求を全部分かった上でのんでくれるわけがない」

だから、俺は負けたんだ。

と付け足すとやっと彼はゆっくりとだが立ち上がった。

「コウ兄？」

「……準備してくる。すぐに終わるから待っていてくれ」

自室へと向かうその背中に先ほどまでの気落ちの影はないが、それでもどこか悔しそうに見えた。

「あれさ、絶対自分で言っていて分かってないよな」

それを見送ったあと溜め息を吐いたヴィータは呆れ顔でそう呟いた。

「そやね、ホンマ困ったお兄ちゃんや」

彼の話聞いていて、彼女達は全員同じ人物のことを思い浮かべてしまった。

それを一番分かっていなくてはいけないコウキが分かっていないのだから『困った』というしかない。

「主コウキのハラオウン提督への評価は、ほとんどそっくりそのまま」

「コウキちゃん自身のことなのにねえ」

そう、一目見て騎士達を自分たちを害する者ではないと判断しその際に生じた問題を達者な口で誤魔化してそのくせ時折冷たいと取れる判断を下すものの、最終的にはいつも自分や相手の感情を優先して厄介ごとを自ら招く困った主。

「だから、なんだろうがな。」

コウキが負けたような気になってしまつのは「

言いながらザフィーラはおかしそうに笑う。

「ホンマはこっちがあつちの信頼を得なくちゃいけないかつたはずなのに、

逆にコウキ自身がリンディさんを信頼してしまつた、させられてしまつたから悔しいんやろな」

はやてのその推測がおそらく真実だと全員が納得する。もっとも本人はよく分かっていないが。

そもそもコウキは勝ち負けにここまでこだわる性格ではない。

暇つぶしの模擬戦もどきも負けることをなんとも思っておらず
気にするのは自分が思ったとおりに動けたかということ。
そのほかの勝負事でもそうだ。あの時はああ動けばよかった。
体がついていかなかった。次の手を読みきれなかった。

彼は、誰かと勝負していない。彼はいつも自分と戦っている。
そして自分が出るはずのことができないと悔しがる。

そしてそれを負けたと感じてしまうのが日野コウキという人間だ。
だからだろう。自分と似ていることを自覚してはいなくせに本能的
にそれを感じて、
負けたくないと思った。なのに、完全な敗北を喫してしまったので
落ち込んだのだ。

「しかし、あの短いやりとり
主コウキがそう感じてしまう一幕があったとは分かりませんで
した」

「あはは、それは確かに。」

リンディさんもコウキも普通に話しとったと思たんやけどな」

それだけは分からない、と。

心底不思議そうに首をひねりながらはやては数時間ほど前のことを
思い出していた。

コウキが目を覚ました後ひと悶着あったものの日野家の行動は実は早かった。

まずなのはと連絡をとり互いの無事を確認したあとは彼女達がすでに管理局の事情聴取を受けていたことを、

そして自分達とも話したいことを知ると早速それに応じてアースラに乗り込んだのだ。

顔を知られている可能性がある騎士たちは正体を隠すため守護獣と偽り変身魔法で動物の姿になったうえで。

これによってザフィーラとシャマル以外は戦闘能力が大幅に激減するが

すでになのはに会っているため人の姿のまま外見を少しごまかす。という手法がとれなかったためである。

ちなみにユーノの正体が同じようにフェレットに変身していた“男の子”であったことで

色々と物議をかもしたが、本人の名誉のためにここではその騒動は割愛する。

4月27日 PM05:52

アースラ 応接室

「つまり、あなたたちは何かの気配を察知してその正体を見極めるために行動し、結果ジュエルシードとそれを探索していた魔導師とその使い魔と遭遇。」

戦闘を避けようと交渉してみたけれど決裂してしかたなく戦った……ということ?」

「はいそのとおりです。」

それから戦いの余波で結界を壊してしまいなのはたちと遭遇。そのあとのことは知ってのとおりです」

「なるほど、確かに避けられなかった戦いのようですね」

少々、言葉にトゲを感じたものの畳の上で正座し抹茶や茶菓子をたしなみつつ

コウキは廃ビルでの一件を説明し終えた。

現場にいたのが彼とザフィーラだけであるために二人以外は会話に口を挟むことはなかったが。

「疑問点が三つある。」

まず、魔法技術のない管理外世界にいる君たちがなぜ魔法を知っていた?

それと話を聞く限り君たちはその場から逃げるのではなく

彼女達を捕らえることに固執していたのはなぜだ?

そしてジュエルシード暴走の理由とその後の行方をくりましたのは何故だ?」

黙って話を聞いていたクロノは話し終わるのを待っていたかのよう

に、
そこでコウキの想定通りの疑問を投げかけてきた。

いや、そういう疑問を持つように話したといつてもいい。それに内心でくすりと笑いつつも真剣な面持ちで彼は持つてきた“ストーリー”を話した。

魔法を知っていたことに関しては過去に自分の先祖がベルカの騎士と遭遇し

その後資質を持つていた先祖に享受されそれが受け継がれてきたとして、

暴走についてはエネルギー制御の失敗。

逃走はそれによって彼の体調が落ち着いたためとした。

実をいうと騎士やはやてたちに事前にこれを話したときにはいろいろと強引すぎるといわれた。

当たり前である。そう思われるように彼が作ったのだから。

この話に対して相手側の責任者がどんな反応を返すのかを知りたいだけなのだ。

もちろん正直に信じられるように工夫されたストーリーだ。

騙されてくれるなら操りやすく、

逆に話の穴について疑ってくる人間なら理詰めで話せば納得させられる。

往々にして疑い深い者は正しい理屈で補完してやれば勝手に納得する。

させる自信が彼にはあった。

そうして一通り話し終わるとコウキは廃ビルの一件と違い自分の説明に

まったく参加してこないリンディに気付かれぬよう視線を向ける。

彼女は話こそちゃんと聴いているようだが、

抹茶に角砂糖をいくつか入れてそのまま飲んでいく仕草は自然だ。

動揺もしていなければ疑念に思っている風でもなく、

優しげな風貌を浮かべるそれは彼女の考えを読ませない。

(あれは、おいしいのだろうか?)

(なんかシャルマルの料理みたいだな)

(ひどいつ、いくら私でもあんなことはしないわよっ)

(みんな、静かにしてや。これからが大事なところなんやさかい。

あつても、ちなみにやけどお茶に砂糖を入れる習慣はけっこう色んな国であるんよ。

抹茶に入れた経験はないけど、

抹茶アイスとかあるぐらいやから意外といけるかもしれへんで)

(おおっそうだった。抹茶アイスか、あれも美味しいよなはやて)

(そやね、なんか話題が上がったら食べたなるな。あとで買いにいか?)

(うんうんついこいこっ!)

内心緊張し続けているコウキのその後ろで明るい雑談が行われていることは

断固とした態度で意識の外に締め出す。

だがその表情は苦虫を噛み潰したようなことになっていることは本人も気付いていない。

「……艦長、今の話は」

意見を聞こうとするクロノを手で制すると彼女はその視線をコウキ

に向けた。

「話は分かりました。ですが、それはそれとしてそろそろ本題に移りましょうか。」

「あなたがこんなにすぐに私たちの所に、自ら進んでやってきた理由わけを。」

クロノの二つ目の疑問もその話を聞くことで解決しそうですしね」

ニコツと微笑む顔を向けられコウキは息が詰まった。

用意したストーリーに対して、想定していたなかで一番してほしくない反応だった。

和らげな口調ではあったが彼の話に関しては保留にされたうえに先にそつちの本命を出せといわれたのだ。

しかも口ぶりからその内容もある程度予測されているうえにおそらく当たっている。

（まいったな、これは。）

「よりもよって最悪がきたか……………上等だ。」

「やってやるうじゃないか」

「一番相手にしたくなかったタイプと対応することになって、それが逆に彼の闘志に火をつけた」

「分かりました。」

「回りくどく説明する必要はないようですから率直に言わせてもらいます。」

「この事件捜査に関わらせてください」

「それは……………なのはさんたちと同じように、というところかしら」

「一応そついうことにはなりません。けど、いくつか条件が…」

「関わらせてほしいと頼んでいるのに条件があるの？」

不思議そうに問いかけてくるが、
コウキとしてはその先にある言葉を誘導されているようで釈然としない。

「もちろん“ただ”では言いません。

こちらが得ているあの魔導師に関する情報と俺達という戦力の提供。

そして……」

彼は懐に手を入れるとソレを取り出した。

「条件をのんでくれるならこれをそちらに無抵抗で渡します」

握られていたのは青き宝石・ジュエルシード。
その存在になのはたちは驚愕の表情を見せる。

「えっ、なっ、なんで!？」

「あなたが持っていたジュエルシードは暴走してどこかへ消えてしまったはずじゃ!？」

あの廃ビル屋上でかの宝石が暴走したとき、
全員が青い光のなかでそれが消えていくのを目撃していた。
だからこそ驚きを隠せなかったのだが一人だけ納得したようにクスリと笑った。

「やっぱりあれ偽物だったのね」

「か、艦長？」

「えっ、偽物って、えっ、ええっ!？」

突然出てきた消えたはずのジュエルシードと

それが偽物だという指摘に混乱してしまうのは。

ジュエルシードとコウキ、リンディを順番に見ては頭の上にクエスチョンマークを増やしていく。

「落ち着けなのは、ちゃんと説明するから」

(それが分かっているということとは少なくとも結界壊したあとは完璧に覗かれてたな)

手札を隠しているつもりが知らぬ間に全部後ろから覗かれているような気分

冷静を装いつつも焦りを感じる。

「あの時出したのはジュエルシードから抽出した僅かなエネルギーを結晶化させたものだ。

その存在定義は本物と一緒にだけど、エネルギー質量が百万分の一以下にまでなってるからな。

ロストロギア・ジュエルシードとは言えない代物だよ」

「えっと……ユーノくんどついうこと？」

コウキとしては比較的簡単に説明したつもりだが、なのはには伝わらなかったようだ。思わずこける。

「うんとね、すごく簡単にいうと見た目はそっくりだけど
中身がほとんど入っていないジュエルシードってこと、かな」

ああ、とその説明で納得した風のなのははしかしすぐに首をかしげた。

「それじゃコウキさん、あの時ジュエルシードをあげるってみんなに嘘ついてたの？」

「人聞きの悪いこというな。」

いっとくけど俺は一言もジュエルシードをやるなんていってないぞ」

「え？」

そうだったかとユーノとなのはは互いを見て、あの時のやり取りを思い出してみた。

『なのはの提案はお前らにとってはあまりメリットがない。
けど、これが賞品になってるなら話は別だろ？』

『これを勝った方に無条件で渡すっていうのなら、
お前達にも勝負するメリットが出てくるんじゃないか？』

彼はそういつて青い宝石を手に提案していた。
たしかにそれをジュエルシードとはいっていないし、

ジュエルシードを渡すとも言ってはいいない。
その事実には呆然とする二人を横目にリンディはただ笑みを見せる。

「ふふ、それ詭弁っていうのよ。あなた騙す気まんまんだったじゃない」

「っ……………」

笑顔での指摘にぐうの音も出ない
慣れているなのはとの会話で油断していただけにそれは痛かった。

「あははは……………そうですね。はい、騙そうとしてみました………」

苦笑いを浮かべて渋々のていでそれを認める。

(まずいな。)

こっちのブラフはあっさり流されてるしペースは完全に相手に奪われてる。

だっていうのにこっちに都合のいい条件を出さなきゃいけないなんて、最悪にまずい)

火がついたはずの闘志を削がれていくのを感じ、
いつもの覇気と勢いがなくなっていくコウキ。

「……………あなたたちが提供できるものについては分かりました」

お茶をすすりつつそれを薄目で見ていた彼女は
口許だけで笑い、次の言葉を促すために続けた。

「では問題のあなた方が提示したい条件というのは？」

「……………」

詰みだ。

ペースを最初に奪われて脅しは流され、こっちの思惑は見透かされ
たうえに

話のおかしな点をあえてスルーされてしまった。

もういくら言葉を尽くしてもこの状況は覆らない。

いや、そもそもコウキは先ほどから自分の言葉を喋らしてもらえて
いない。

それが分かるだけに彼女の笑顔の奥に射抜くような鋭い眼光を見た
気がして、

完全にコウキは身体もその思考も固まってしまふ。

そしてこの瞬間、彼はリンディに対し完全に白旗を振った。

「すごくこっちに都合のいい条件なんですけど……………」

「条件というからには、普通はそうよね」

前置きに対し、変わらぬ笑顔でそう切り返されて続く言葉が出てこ
ない。

しかしそのまま黙っているわけにもいかないコウキは渋々とその条
件を提示した。

提示せざるを得なかった。

4月28日 AM 10:11

「本当にこれでいいのですか艦長？」

「あら、何がかしら？」

艦長席にいつものように座りつつ、うふふと笑みをこぼしながらとぼける実の母にクロノは痛くもない頭が痛くなったような気がした。

「彼らの要求を受け入れたことです。

正直、これといって情報のない現状では少しでも情報は欲しい。それになのはを含めた彼らの戦力は魅力的です。けれどっ」

「要求が露骨すぎるといいたいのかしら、クロノ執務官は」

急に顔つきが変わった母に、いや上司にクロノは黙って頷いた。

それでも彼女は公私をきちんと分けて仕事をしている。

もつとも、表に出す態度や口調だけの話ではあるが。

時折、職場で母の顔をすることがあってもそれは緊張をほぐすためや場の空気を和らげるための行為である割合が大きい。

「たしかに。

自分達から積極的に協力させてって言うっておきながら、記録には残さないでくれ。

なんて、探られたくない腹があるんです！　って言うてるのと同じですよねえ」

目の前の機器を操作していた活発そうな少女。

エイミー・リミエツタは分かりやすい苦笑を見せた。

つむじからぴょんと跳ねているアホ毛が特徴的な彼女は

アースラ通信主任兼執務官補佐であり、

その人懐っこい気さくさに忘れられがちだが、

艦長、執務官に続く実質上のアースラ？3である。

「他の要求、公的な報酬の拒否や捜査資料の閲覧許可。デバイスの貸与。」

とかはまだ分かるんだけどこれって怪しさ満点な要求ですよ。

なんかストレートすぎて逆に不気味なくらいに」

「ええ、だからこそ受け入れざるを得なかったのよね」

と、彼女にしては珍しく溜め息一つ漏らして

まるでその時のことを思い出しているかのように遠くを見た。

「彼、ものすごく怖い人よ。」

私の態度を見て、即座に隠していた自分の手札をほとんど見せてきたんだもの。

それが一番有効だと見抜く鋭い人間観察と実際に実行に移せる大胆なまでの決断力。

ああいうタイプは恐ろしいわよ。

たとえ目的がわかっていても次に何するかが予測しづらいのよ。

敵に回ることはないでしょうけど、見えないところで勝手に動き回られると困るのよ」

「……だから不明瞭なところには目を瞑って、協力という名の監視下に置くと？」

「そんなところね。」

もっとも私にそう決断させるよう誘導してきたのも彼だからいい気分はしないわねえ」

そう漏らして砂糖たっぷりのお茶を飲むリンディだが、それを見てエイミイは訝しむ。

「ねえ、クロノくん。艦長なんか楽しそうじゃない？」

言葉だけを聞くと気分を害された風に聞こえるが彼女の表情はそれと逆で、

いつも以上に楽しそうな笑みを見せていた。

「……………クロノくん？」

リンディに聞こえないように小声で訊ねたが、

クロノから返答がないので再度呼びかけつつ横目でちらりと覗く。

「え？」

思わずそんな声が彼女の口から漏れるほど、彼はおかしな顔をしていた。

(怒って、る?)

それなりに長い付き合いのエイミイとクロノだが、

それでも疑問符がついてしまうほど見たことがない顔をしていた。

今まで実母の各種裏技に呆れたり部下にからかわれて不機嫌になったりすることはあっても

こんな殺意にも似た憤怒を感じさせる表情をしたことはない。
少なくともエイミィは見たことがない。

「クロノくん！」

「っ、な、なんだエイミィ」

僅かながら張り上げた声と腕を引つ張られたことで
漸く気付いたクロノはいつもの顔に戻っていた。

「なんだ、じゃないよ。」

呼びかけても返事しないし何かすっごい怖い顔してたよ。大丈夫
？」

そう言われ、心当たりがあるのか彼は返答に詰まる。

「クロノくん？」

「だ、大丈夫だよ。ちょっと嫌なことを思い出したただだから……」

それだけ言ってそっぽを向いてしまう彼に
それ以上は聞けずエイミィは「そう」とだけ返した。

もうすぐ、帰ってくるからね

だから二人でいい子で待ってようね

「っ……」

信頼している補佐官にでさえ背を向けて彼は齒を食いしばった。悔しいのか悲しいのか怒っているのか。自分でもよく分からない感情が胸に渦巻いて落ち着かない。

(落ち着けっ、あれはもう終わったことなんだ。

忘れることはできなくても蒸し返す必要はないだろう！)

強くこぶしを握り締めて、自身に何度もそう言い聞かせる。

「エイミィ、そろそろ約束の時間だ。

転送ポートを開いてくれ、僕が迎えに行く」

何度も何度も言い聞かせたあと深呼吸して振り返り、執務官としての顔で告げる。

「え、あ、うん。了解」

「艦長、では行ってきます」

「ええ行ってらっしゃい」

いつもの笑みで見送ったリンディはしかし。

息子が転送されると先ほどとは違う意味合いの溜め息を吐いた。

(あの子は、まだ引きずってるのね……あの日のことを)

息子の表情からそれを読み取った母は、

では自分はどうかなのかと自問して自嘲気味な笑みをこぼした。

遺族×遺族×遺族

出迎えに来たクロノ執務官に連れられて、俺たちはアースラに再び乗り込んだ。

「ここが居住区画だ。君たち用にいくつか部屋を用意しておいた。今のうちに荷物を置いてくるといい」

ある程度艦内を案内され最終的にそこに通される。

「へえ、こういう船の部屋ってもっとちっちゃいかと思ったら、けっこう広いじゃん」

「まあね、次元航行船は長期任務に出ることが多い。だから居住性には配慮して設計されてるんだ」

俺たち 俺、はやて、騎士たち には二つ部屋が用意された。はやて用と俺用である。

はやてがいうように確かに艦内の一室としては広い部屋で日野家一同が入ってやっと狭く感じる程度だ。

ベッドに机は当然としてその上には端末機器が用意され

洗面台には各種生活必需品があり、個人用のトイレまである。

さすがに風呂はついていないがシャワールームは共同のがあるそう

だ。
至れりつくせりだな。

「本当だな。必要なものはちゃんとそろってる。
これならこんな大荷物持ってくることもなかったかな」

手に持った旅行バッグを床に下ろす。ちなみに俺のではなくはやてのである。
事前に最低限の着替えだけでいいといわれてはいたが、念のためにいろいろ詰め込んできていたのだ。

「なあ、ここにあるものって好きに使っていいんだよな」
「構わないが、一応常識の範囲内で頼むぞ」

わざとらしく不敵な笑みを浮かべていうと
眉間にシワを寄せながらクロノはそう返してきた。
それだけでこいつの俺に対するイメージが分かる。
俺ってそんなに常識ないように見えるのだろうか？

「うーん、コウキさんに常識を求めるのってどうかな？」
そして予想もしない方向から槍が飛んできたことに驚く。

「なのは？」
俺が訝しんでいるとさらに別方向からも槍が飛んできた。

「確かに。コウ兄に一般的な常識を求めるんは何かがすごく間違ってるな」

はやて、お前まで。

「おい、それじゃまるで俺が非常識な人間みたいじゃないか」

そう反論してみると、クロノとユーノを除く面々が

一拍おいたあと一切に溜め息を吐いた。

おい、お前らもか。

「思いつきで行動して、ふらつといなくなったこともある人が常識ねえ」

とは小鳥姿のシャマル。いや、一時間や二時間ぐらいいいだろ。

「突拍子もなく、くだらないイタズラをする奴に常識はないだろ」

とは世にも珍しい赤毛ウサギもどきのヴィータ。

それは、まあ、時々そういうことをしたくなる年頃というかなんというか。

「時折ずれた発言をして我らを困らせていることに気付いてらっしゃらない人ですからね」

とは微妙に今の姿に納得がいていないピンクのドーベルマン・シグナム。

はい？

俺、そんなことしてるのか？

「少なくとも、常識ある人じゃないよねコウキさんは」

「そやね。むしろ常識を打ち破る人やさかいな」

「ああ、そうそう。そんな感じ」

そちらの二人もなにやら楽しそうに話に花を咲かせている。

正確には俺への愚痴を本人の前でこぼしているように聞こえるのは気のせいということにしておこう。

「コウキ」

すっと歩み寄ってきたザフィーラ。その表情に何か嫌な予感が。

「お前、自分で自分を常識人だと思っているか？」

「……………」

何も、言葉が出てこなかった。

俺はクロノに向き直ってその両肩を叩くようにして掴む。

「な、なんだ？」

「心配するな、最低でも壊すようなことはしない！」

それが、断言できる限界値だった。

正直自分が常識人だと思えなかったただけなのだが。

「……………分かった。それで善処してくれ」

非常に渋い顔で唸っていたが半ば諦めるかのような口調でうな垂れるように頷いた。

「ところで、キミの荷物はもう置いてきたのか？
そうならそろそろ艦長のところへ行きたいのだが」

「ああ、俺はもういい」

「なら行こう。キミたちはしばらくここで待機していてくれ」

クロノはそう皆に告げると部屋を出て行き俺もそれに続いた。

昨日の会談では俺が終始翻弄されっぱなしだったせいもあって

取引材料だった『黒い魔導師の情報』は伝えてはいない。

今からそれを伝えるためにあの艦長さんと話をする事になってい
る。

もつとも、あの場で言う気は最初からなかったがな。

これはあの子のプライバシーに関わる問題だ。

俺の一存で簡単に人に言っていないものではない。

けれどこの一件に関わるこの艦の責任者たる彼女には逆に説明して
おく必要がある。

このジュエルシード争奪戦がどのような形で終わるにせよ管理局側
が、

というよりあの方が事情を知っていてくれるなら、

その後のあの子の処遇はひどいことにならないかもしれない。

「一つ、質問していいか？」

と、俺を案内している間ずっと黙っていたクロノが突然口を開いた。

「いいけど。」

昨日の疑問ならこれから艦長さんに話す内容を聞けば分かると思
うぞ」

「い、いやそれじゃないっ 今回の事件とは関係ない個人的な質問だ！」

まるで言い繕うかのように早口でそう言い訳する彼はどこか変だ。冷静沈着な執務官ではなくクロノ・ハラウン本人が慌てている。そんな感じがした。

「自分でも抽象的で、

意味が分からない質問だとは自覚してるんだが………それでもいいか？」

いいかと聞かれても。

内容が分からないから答えようがないためとりあえずああと頷くと

「もし、もしだ。自分の命を犠牲にすることで大勢の人の命を救えるなら、

帰りを待っている家族がいても、お前は自分の命を捨てられるか？」

何か衝撃的な質問をされた。

それは、執務官たる局員がしている質問じゃなかった。

ましてや簡単に答えられる質問でもない。

けどその目はひどく、悲しいくらいに真剣で

俺はその問いに何かの答えを出さなくてはいけない気がした。したけれど。

「っ……」

それ以前にその問いかけは、一瞬で俺の心臓を凍りつかせていた。

まさかクロノがあんなことを彼に聞くなんてね。

目の前で明らかに意気消沈している様子の彼は

結局あの子の問いかけに何も答えを返せなかった。

ちよつと遅いと思つて様子を見に来て正解だったかしら。

「はい、どうぞ」

ガラス張りのテーブルに用意していたお茶を出して勧めた。

「どうも…」

あの場に何も気付いていないように登場して

彼だけを連れて行くのは難しいことじゃなかったわ。

そのまま話を聞くために艦長室の応対用のソファに座らせて話を聞くことにした。

ここは息子のためにフォローの一つも入れてあげたいところだけど蒸し返すと彼に悪い気がするからそれはしない。

とりあえず今は思考を違う方向へ持つていくべきね。

「で、何を教えてもらえるのかしら？」

「はい？」

不思議そうな顔で首を傾げるその仕草は歳相応、いや幼いぐらいなのに彼に合っている気がしてしまう。

「ふふふ、あなたここに何しに来たかもう忘れたの？」

「あつ、そっか。フェイトのこと話さなきゃいけなかったんだつた」

ド忘れしてたのがよっぽど驚きなのか。

分かりやすいくらいに“しまった”という顔をする彼。

不思議ね。昨日話したときと全然イメージが合わない。

「フェイト・テストロッサ。

名前と何か理由があつてジュエルシードを集めているってことはなのはさんたちから聞いているけど、あなたは何を知っているの

？」

その私の問いに表情が変わつた。ああ、この顔だ。昨日の彼だ。

どうしようもなく私の神経を逆なでする気に入らない表情。

そつであつたから昨日は大人げない態度をしてしまつた。

一般的にいうなら単に真剣な顔つきになつただけだというものになぜか私のすべてがそれを許さない。

正体不明の不快感を胸の奥に押し込んで、

何食わぬ顔でお茶を飲む。うん、美味しい。

「なのはやはやてには伝えなくてもらえますか？」

伝えてしまうと逆にあいつらに悪いような気がするから」

「悪い、ねえ……」

文脈的には彼女達によくない影響を与えてしまうとか負担をかけてしまつてという意味なんでしょうけど、不思議と私はそうではないと感じた。

彼は別のことを考えて『悪い』と判断している。

「それは、なのはさんたちを利用できなくなるから、かしら？」

「……………」

あ、絶句しちゃった。ストレートすぎたかしら。

目までパチクリさせちゃって、へえそういう可愛い顔もするんだ。

「はああ……」

かと思えば、突然大きなため息を吐いてうな垂れる。

「エスパーか何かですかあなたは？」

ああ、もうっ、ここまで見抜かれると

いろいろ考えたり悩むのが馬鹿らしくなってくる」

「あら、それはごめんなさい」

「謝られても……………せめて、もう少しオブラートに包んで言ってほしかったな」

そう文句を言いながらもどこか嬉しそうな笑みを見せながら湯のみを傾ける。

中身を一気に飲み干すと顔つきは柔らかいものに変わっていた。

あら、砂糖大量入りをすんなり飲んだわね。

「もう何を隠していてもしょうがないから、ここで全部言います。
俺が知ってること、考えていること、
そしてこれからやろうとしていることを……」

私を見るその目が、その続きを訴える。

「……その片棒を担げ、と？」

どこかで見ることがあるような大人の顔で頷きながら、
彼はある意味とても恐ろしいその計画を私に話し始めた。

・
・

・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

「ふう、分かったわ」

ため息交じりではあるけれど、私はその話を了承した。まったく、無茶苦茶な計画をたてるものね。

目的は理想。手段は狡猾。利用するのは優しい子たちの心。どこか感情的であり個人の能力と性格だよりなうえに最終的な決断は不透明な彼女の心任せ。

「とりあえず私は黙認しましょう。私の仕事はどうも終わったあとのことのようだし」

だというのに、おそろしいぐらいに隙間なく計算されつくしてある。

「そうですね。それでよろしくおねがいます」

息子と同一歳であるはずの少年はそうは見えないとても落ち着いた顔で頷いた。

こんな話、クロノやエイミーにはいえないわね。

伝えるのはフェイト・テストアロツサについての情報だけにしましょう。

『艦長、よろしいでしょうか』

そう考えていたとき、目の前に小さな空間モニターが現れる。エイミーだわ。

「ええ、ちょうど終わったところよ。なにかあったの？」

『いえそろそろ時間なのでお呼びでしょうか』

優秀な通信主任の言葉に一瞬心で首をかしげたけれど時計を見て納

得。

「あら、思っていたより話し込んだみたいだね」

「なにか、あるんですか？」

訝しむ表情を見せる彼に私は自分でいうのもなんだけど朗らかな笑みを浮かべて答える。

「じつは親睦会と互いの顔合わせってことで、

ささやかだけど食事会を開くことにしてたの。

エイミイ、悪いけど先に始めといてくれる。

私はちよつとやること片付けてから行くわ」

『わかりました。早く来てくださいね。』

艦長がいないと始まるものも始まりませんから』

通信が切れ映像が消える。

ところでエイミイは私になにを期待してるのかしら？

「あなたも先にいっついていて、私もそんなにかからないはずだから」

「はい、わかりました」

席を立つた彼は扉の前まで歩みを進めたが、突如そこで立ち止まる。

「あ、そうだ」

私に背中を向けたまま彼は雑談のような雰囲気喋りだす。

「さっきのクロノの質問ですけど」

あらあら、自分で振り出しに戻さなくてもでも、ということは私が聞いてたこと気付いてたのね。なんて怖い人。

「あれ、自分か、家族か、それ以外の誰かか。」

あれは実際は二択じゃなくて三択。そう、三択だったんです。少なくともそのはずだったんだ、俺にとっては……」

「え？」

知らず、聞き返していた。

言葉は凶悪な計画を話していた時よりも重く切ないものを孕んでいた。

何も語らない背中がかすかに震えたように見えたのは私の目の錯覚か。

それがまるで罪の告白、懺悔を聞いている気分私をさせる。

だからだろうか。

私には何故か背を向けて見えないはずの彼の顔がひどく後悔しているように思えた。

「けど俺は迷うことなく4番目を選択した。」

だからってわけじゃないけど家族や仲間、自分。

どれかをちゃんと選べるやつは立派だと、俺は思いますよ」

私はいまどんな顔をしているのだろうか？

そんな見当違いの疑問が胸をよぎって、消した。

彼は顔だけを振り向かせて笑顔でそう言うと静かに部屋を後にした。それを黙って、けれどおそらくとんでもない顔で見送った私は片手で顔を覆いながらうな垂れる。そして溜息が、漏れた。

もしかしたら私はジュエルシード事件より、そしてフェイト・テストロツサという少女のことより、もっと重たい何かを抱えるはめになってしまった気がする。はあ、そういう貧乏くじ引かないように心がけてたつもりだったのに。

「ふっ、嘘ばかり……でも、困っちゃったわね」

こんな感情はいつぶりだろうか。

今までいろんな事件に関わってきたけどこんなに厄介な案件は初めて。

あの子の問いかけはあの人がした選択の是非を問うもの。

口には今まで出してなかったけど、やっぱりシコリになってたのね。けれどそれを受け取った彼は、当然ながら別のことを思い浮かべてしまった。

顔を覆っていた手で髪をかき上げる。

「あなたは全部、捨ててしまったの？」

ふと視界に入ったテーブルに映る自分に問いかけたけれど答えは、なかった。

疾風VS迅雷

5月5日 PM02:32

海鳴市郊外・森林地帯

あたしらがアースラにご厄介になってからおよそ一週間。その間、さしたる出来事もなかったただジュエルシードの回収となのはちゃんたちとの模擬戦ばかりやっている。

実戦経験ゼロなあたしにとってはどっちも必要なことやし、みんなが力貸してくれるから心配事もない。

なのはちゃんもさすがコウ兄の幼馴染だけあっても、ええ子や。

若干、コウ兄の影響をもらに受けすぎな感があるせいか、目を離せない危なっかしさがあるんやけどね。

ただ。

「主、今です！」

「OKや、ジュエルシードシリアル？、封印っ！」

白い杖をかざす。

先端のギミックが開いて、あたしの魔力が放出されジュエルシードを封印する。

封印の方法は比較的簡単や。あくまでやることは、やけどね。稼働中の魔法プログラムに対して外部から割り込みをかけて、そのプログラムを停止させることをシーリング、封印いう。

対象物より強大な魔力がないとあかんからコウ兄やシャマルやと

一回でそれなりに疲れてしまっらしいけど、

あたしは莫大な魔力を持つといわれてるなのはちゃんやフェイトちゃんより

さらに輪をかけて莫大な魔力を持つてるせいかあんまり疲れへんのかな、これ。

けどそれはいいことだけやのうて厄介な問題もあった。

自分用のデバイスがなくアイゼンたちと相性の悪いあたしは、貸与してもらたS2Uゆうデバイスはクロノくんが使ってるの色違いの同型なんやけどあたしが使えるようにアースラの設備で魔力耐久値が上げられてる。

それでもあたしが思いつきり魔力を使おうとすると壊れてしまうとのこと。

だから封印時はけっこう細かい出力調整が必要で、そういう面ではけっこう大変。

「ふう……封印完了、やな」

なんとかそれを終えたあたしは宙に浮かぶジュエルシードを見て溜

め息を吐く。

これであたしらが集めた数は全部で九個。全部で二十一個で四個すでに奪われとるんは確認済みやから残りは八個。

ということは下手したらこれをあと八回はせなあかんかと思うと正直しんどいな。

「だんだんと上達してきてますね、主」

そんな思いを知ってか知らずか。

うちのリーダーさんは私のシーリングをそう評した。

「そうかあ？」

そんなことを言いつつもシグナムからの褒め言葉がなんか嬉しい。思い返してみると彼女から褒められたことはなかった気がする。逆はそれなりにあったような気もするけど。

「ええ、以前と比べて封印に手間取らなくなってきました。

その甲冑服もさまになってきましたね」

「ふふ、なんや魔法が上達するより甲冑似合ってるっていわれた方が嬉しいなあ」

今あたしはいつだったかコウ兄が描いてくれたあたしの甲冑をまとっている。

ベレー帽風の白い帽子に金の細工が施された黒いアンダースーツ。それに白いジャケットと腰元を覆うマント。

あたしが考えたみんなの甲冑の特徴をつまみ具合に混ぜたそれは悔しいけどナイスなデザインや。

相変わらずセンスいいなあ、コウ兄。

「ふー、これでお仕事終了やね。ジュエルシード回収して帰るか」

ジュエルシードに取り付かれて暴走していた蛇がザフィーラに怯えて森の中へ逃げ歩いていくさまを見送り言う。

「はい　っ、というわけにはいかないようですね」

頷きかたけた二人だったけれど、

その気配にザフィーラとシグナムは引き続き戦闘態勢を維持する。

ああ、やっと会えた。

二人が向けた先に私も視線を向けて、知らずに不敵な笑みを浮かべていた。

そんな自分に気づき、あたしはさらに苦笑してまう。

目前に舞い降りたのは金髪の魔導師とその使い魔。

何も感じられない、発していない無表情がひどくあたしの神経を逆なでする。

「初めまして、やねフェイトちゃん」

だというのに声は恐ろしいぐらいに平静のそれやった。

ああ、あたしもなのはちゃんのこと言えへんな。

「あたしは八神はやて、ザフィーラはもう知ってるよね。

それでこの子はシグナムや。よろしゅうな」

互いにアルフとシグナム、ザフィーラを間に置いて向かい合って挨拶をかわす。

一方的に、やけど。

「…あの人の、仲間？」

ちらりとザフィーラを見たあと彼女は短くそう訊ねた。

「まあそんなとこや。

個人的には本当の意味で家族になれたらええなあとは思ってるけど」

「そう、じゃああなたもジュエルシードを渡しては、くれないよね」

通じていないようで通じているおかしな会話。

彼女のデバイスがその形状を鎌のように変化させる。

無表情から若干和らげな表情になってはいるものの戦っても奪う気まんまんや。

「そやね。これ悪用するとこの世界がとんでもないことになる可能性もあるっていうし、

そんな危ないもんをフェイトちゃんみたいな甘ったれた子には渡せへんな」

向けられる戦意に、嫌味で返す。

それを胸中の見えない顔で受け流すフェイトちゃんと違ってその使い魔たる彼女は分かりやすい。

「あ、甘ったれた子だって!？」

あの男といいお前といいフェイトの何を知ってっ」

「知らんよ、そんなの。人はみんな事情を抱えて生きてる。つらいの抱えてんのも、どうしようもない出来事も、自分達だけや思うてるならそれこそほんまに甘ったれた子やで」

「っ！」

あたしの言葉をそれなりに理解したのか。
使い魔アルフは言葉を詰まらせる。

(準備ええかザフィーラ、シグナム)

この子らにちよっとお灸すえたるうか?)

頷く気配を感じつつ、魔導師の杖を彼女にむけてその表情を、動作に注意をはらいながら見据える。

分かる。

この子をコウ兄が放っておけないのは分かる。
あたしにはコウ兄ほどすごい洞察力はないけど、
この子は放っておいたら危ないというのは分かる。
けど、そやからこそ、この子を見るとむしように腹が立つ。

「先に言っとくけど……あたしはコウ兄やなのはちゃんみたく、優しくないよ」

内心の苛立ちを抑えた落ち着いた口調で告げつつ、あたしは杖を振り下ろした。

ただ

ただ、やっぱりあたしはみんなほどキレイじゃないから

少しだけその真っ直ぐさが羨ましい

先制は、はやて。

「ロートメツサーツ」

魔力で作った赤い短剣を二人の目の前にそれぞれ遠隔設置し放つ。たかが一本のナイフだが、実体化してるそれは見た目以上に危険なもの。

フェイトはバルディッシュで弾き、アルフは飛び退き避ける。

しかし、それはその動作を誘うための攻撃。

ロートメツサー設置と同時にシグナムとザフィーラは飛び出していった。

そしてそれぞれの相手に肉迫する。

炎をまとった爪が振りかざされ、フェイトはデバイスの柄でそれを

受け止める。

が、衝撃を受けきれずに森の中へと吹き飛ばされる。

「フエっ、ぐうっ!」

主人の心配する余裕もなくザフィーラに突き飛ばされるアルフ。

吹っ飛ばされた空中でそのまま体勢を整え、静止する。

アルフにはザフィーラ。フェイトにはシグナムが対応する。

はやてはそこから離れたところで両方に気を配りつつ相手の出方を待った。

「一応言っておこう。」

素直に投降してくれぬか？」

森の中、体勢をととのえたフェイトの前に彼女は立つと静かにそう訊ねた。

「……………」

問いかけには答えず黙って愛機を構えるフェイトに、シグナムの前に炎が宿る。

掛け合う言葉もなく、ただ互いにじりじりとにじり寄りながら一瞬の隙を窺う。

フェイトの周りに四つのフォトンスフィアを生成されシグナムは即座に地を蹴った。

『Photon Lancer』.

バルディッシュを振り下ろし時間差で放たれるフォトンランサー。しかし、シグナムは動じず真正面から突っ込む。

「っ!？」

その動きを予見していなかった彼女に走る一瞬の動揺
それをさらに助長するかのようにランサーはシグナムを貫けず簡単
に弾かれる。

「えっ?」

薄い紫の魔力光に包まれたその肉体は光の槍程度では傷一つ付ける
ことは叶わない。

パンツァーガイストと呼ばれる装身型のバリア魔法。

それがシグナムのもっとも得意とし重宝している防御系魔法だった。
ベルカ式を知らない彼女がそれを予見できるわけもなく、
連続した動揺が隙を生み、それを狙う炎の爪が迫る。

「くっ!」

その烈火を飛び上がって避ける。

しかし、かすめたマントが焼失してしまう。

けれどそれに構わず、身体をひねって空を蹴る。

「甘い!」

翻って迫るバルディッシュを一喝しながらもう一方の炎の爪で弾き
返す。

予想外の反撃に即座にフェイトは距離をとった。

(あの使い魔、一撃一撃が重くて強い。)

確実に避けなきゃ、それに生半可な攻撃じゃ防御を抜くこともで

きない)

(主コウキの言うとおりスピードはかなりのもの、攻撃も鋭い。
この姿でなければさぞ心躍る剣戟ができたものを……)

互いに相手の長所を認め油断なく動きに目を配るも、
隙など見せるわけもなく彼女たちは即座にこう着状態に陥った。

一方、アルフとザフィーラも黙ったまま空中で向かい合って動けず
にいた。
もっともその理由は互いに違っている。
アルフは相手の力量を知っているがゆえに無駄に仕掛けられなかつ
た。

たとえば自分がダメージや消耗を考えずに突破しようとしても、
完全に“受け”の姿勢でいるこの男はそれを止められる。
総合的な能力ではほぼ互角でも防御面ではあちらが上だとアルフは
認めているからだ。
そもそも消耗した状態でフェイトと合流できても足手まといになる
だけで意味がない。

だから彼女は動けない。

ザフィーラは前提から違う。最初から戦う気がないのである。
主が自分に期待している役目ははやての守護と
彼女たちを必要以上に傷つけないことだと彼は考えている。
そしてこの戦場での役目もそれとさして変わりが無い。

ゆえに彼は自分からは動かないのだ。

それぞれの理由から、止まり動けない四人。
けれどフェイトとアルフは目の前の強敵に気を取られ失念していた。
この場にはもう一人術者がいることを。

「ヴィルヴェルヴィントっ！」

魔法発動を告げる声。

それより僅かに早く、その発動の気配に彼女たちはその存在を思い出す。

反射的に見上げた頭上に視認できる風が渦を巻きながら迫ってきていた。

直撃を避けるためそれぞれ地と空を蹴って、飛び退く。

「まだまだいくよ！」

二つのつむじ風が地面をえぐるなか、さらに閃光が放たれる。

白い無数の光弾が避けた先の彼女達を狙い済ましたかのように天から降り注ぐ。

「きゃあ」

『defenser』

「な、なんだいこれは!？」

自らを覆う結界のフィールドに守られながらフェイトはもう一度空を見上げる。

降り注がれる光弾はサッカーボールほどの光球から放射状に無作為に放たれていた。

(使い魔とさっきの魔法はこれを気付かせないための罠!?)

確かめるかのように視線はいくつもの樹木の先にいる彼女へと向けられる。

それを感じ取ってなのか、はやてはにやりと不適に笑う。

(っ！ まずい、一発、一発の威力は低くてもこの数じゃ身動きが取れない。

こんな状態で使い魔に襲われたら私もアルフも っ!?)

その考えに至って、ようやくその状況のおかしさに気付いた。

視線を動かして、シグナムとザフィーラを探す。

どちらも元々いた位置から動かず、それぞれの相手に注意は向けていても

動こうという気配すら感じられない。

(フェイト、なんか変だよこいつら。どうして攻撃してこないんだ!?)

念話での問いかけを聞くまでもなく彼女は思考を走らせていた。

最初は降り注ぐ光弾の射程内に入らないためだと思った。

けれどシグナムはフォトランサーを弾く防御があり、

ザフィーラはアルフが認めるほど頑丈だという。

ならばこの光弾はその二人が恐れるものではない。

彼らなら気にせず突っ込んでくれる。

ましてやこれは味方が発射しているものだ。

タイミングを合わせれば魔法を停止させた直後二人に攻撃させることも可能。

だが双方をまるで見張っているかのように動かない二人はその可能性すら否定する。

ならあの男と同じように捕らえるためなのか。
否、なら身動きがとれないこの状況において何もしないはずがない。
では、その行動、この攻撃の意図はどこにあるのか。
自分達の動きを止め、使い魔で見張らせ、残ったあの少女はいった
い何をしようかと。

「っ！」

意識が残った少女に向いた途端。

すべてを理解したフェイトは結界を解いて最大の機動力で持って飛ぶ。

降り注ぐ光弾を半ば無視した飛翔。

彼女の機動力であっても避けきることなどできず少しずつ魔力を削られていく。

その動きにシグナムはすぐに気付いたものの速度で劣る彼女に追いつく術はない。

だから、こちらに背中を向けて歩く彼女へ向かって叫ぶ。

「主っ、お逃げください！」

その切羽詰った声に、はやては誰にも見えない微笑を浮かべた。

（気付くんが遅いで、フェイトちゃん…）

彼女の背を追う形になっていたフェイトにそれが見えるわけもなく、
電光のようなスピードで迫る彼女をはやては“横目”で目撃する。
僅か数メートル先、はやてが歩いて向かっていたその先に、
土煙を起こしながらフェイトは着地する。

彼女の目的はそもそも最初からそこにあったのだ。

「ハアハアハア……」

そこにたどり着くまで予想以上に魔力を削り取られ息が上がっていたが、目的の物は手にしていた。

「フェイト！」

喜びの声を上げるアルフ。

フェイトのその手には青い宝石が、ジュエルシールドが握られていた。

(よし、これで…)

即座にアルフと共にこの場から離脱しようとした瞬間、世界が暗転した。

地面から突き出た光の刃が重なることで自分を覆い、その中に閉じ込められる。

「っ！」

半ば反射的にバルディッシュをサイズフォームにしてその結界を切り裂く。

意外にもガラスが割れるような音と共に崩れ散ったその先、不敵に笑う彼女をみて戦慄が走る。

「さすが、といたいところやけど残念」

パチンツとはやてが指を鳴らした途端、フェイトは半透明の壁に覆われていた。

先ほどの光刃による結界より狭い四角錐の檻は

彼女が身を屈めてやっと立てるスペースしかなかった。

ゆえに。

「っ、バルディツシユが!？」

光刃の結界を裂くため振り切っていた愛機はその時点でケージの範囲外にあった。

そのうえで形成された檻は彼女の手からそれを弾き飛ばしたのである。

半透明の壁の先。

距離にしてほんの30センチほどしか離れてはいなかったがそれは絶望的に遠い。

「ちよつと注意力が足らんよフェイトちゃん。」

二人が来た時、無造作にジュエルシードほつたらかしにしてる時点で

畏の可能性を考えとかな」

驚くほど近くまで接近してきていることをその声で初めて判別する。すでに手を伸ばせば届く距離。気配をまるで感じなかった。

その違和感を変わらない彼女の笑みで唐突に理解する。

その笑みからは、はやてからは“何の感情も”フェイトは感じないのだ。

コウキには怒気と悲哀があった。

なのはからはいつも必死さが伝わってきていた。

けれど目の前の少女はフェイトに何の感情も抱いていない。殺気や敵意どころか戦意すら感じない。

まるでフェイトという存在すら認識していないかのように。

「いったい、いつ二つも魔法を設置したの？」

頭が何か恐ろしい考えに至るより早く、その疑問を口にする。

シグナムとの戦闘に集中し失念していたとはいえ

それはあくまでその存在を、である。

魔法が発動するか設置でもされればいくらなんでも気付く。

そこまで周囲の警戒を怠ったつもりはフェイトにはない。

だからこそヴィルヴェルヴィントの発動を敏感に察知しえたのだから。

その問いかけに、はやては家族に見せるそれと同じ柔らかい笑みを見せた。

さながら純真無垢な質問を投げかけてくる子に対する母のようで、フェイトは何故か薄ら寒さを感じる。

「ふふ、一番最初に、や。魔法は常に三段構えいうんがコウ兄の教えやからな。

とくにあたしみたいに魔力だけ多くて経験もなければ実力も低い魔導師の場合な」

「最初 つ!?」

一番初めのはやての攻撃。

ロートメツサーはフェイトとアルフに対し一本ずつしか遠隔設置できなかつた。

それは彼女の技量の低さからではなくそれと前後して、最初に杖を振り下ろしたあの瞬間に、

ジュエルシードの周囲に鋼の輓とクリスタルケイジを設置していたがため。

余談だがヴィルヴェルヴィント発動のさい続けて放ったサテライトレイ以外に

フェイトが宝石ではなく自分に攻撃を仕掛けてきたさい自身を防衛する結果も準備していた。

まさに兄の教えどおりの三段構え。

彼女は自分の能力をほぼ正確に把握している。

出来ること、できないことを明確に自覚し自身を過大も過小にも評価しない。

ゆえに自分がなのはやフェイトのように単独で戦えるタイプの魔導師でないことは承知済み。

仲間と協力し策を講じることでは彼女には戦う術がない。

それを恥だとも非力だとも卑怯だとも思わない。

ただその自分のできる範囲で、彼が望むことを達成させる。

実の所それだけが彼女がこの戦いに身をおいた唯一にして絶対的な理由だった。

「フェイトっ！」

さっきとは意味合いの違う声で名を呼んだ彼女は強引にでも目の前の蒼き狼を

突破しようと試みるが、背後に立つ気配に動きが止まる。

「行かせはしないぞ」

その四肢に炎を宿して、シグナムもまた空に上がっていた。

「くっ、あんたらっ」

この状態に陥っては消耗など気にしていられなかった。

しかしそれはあくまで突破できる前提があつてこそ。

このままザフィーラに突貫すれば背後のシグナムからの攻撃を受けるのは自明の理。

逆でも同じである。

いくら攻撃の意思が低くともあの狼は仲間を傷つけようとする者には容赦しない。

しかし、この考えもまた彼女にまともな理性が残っていればこそ通用するものだ。

やっと見えてきた主人を解放する道が、いまだこの誰とも分からぬ者に塞がれている。

なら、アルフは難しく考えはしない。

自分の役目はそれらすべてを粉碎することにあるのだから。

たとえそれが命がけであろうとも彼女は主人のためならそれを厭うことはない。

それこそが彼女の理性だった。

迸る魔力は雷へと変わり、彼女は唸り声をあげる。

その姿勢に、なによりまず主第一だと告げるその眼に

二人は敬意を払う意味合いで戦闘態勢に入った。

まさに、その瞬間だった

どこかで見た青い光が空を裂いたのは。

それは一言でいってしまえば戦術ミス。

何もはやてはフェイトを見くびっていたわけではない。

むしろ単独戦闘能力では自分など足元にも及ばない優れた魔導師と認識していた。

ただジュエルシードに固執しすぎるくらいがあり、そこに自分が付け入る隙がある。

という判断が余計だった。

あの宝石を囿にしての罠。

檻に閉じ込め、デバイスとも使い魔とも切り離しての無力化。

あとはクリスタルケイジの維持に注意をして使い魔に降伏を迫るだけだよかった。

よかった、はずだった。少なくともはやてはそう思っていたが、

彼女のジュエルシードへの固執の程度を見抜けていなかったのが失策の始まり。

それは仕方の無いことではあったのだ。

コウキとのビル内での戦闘もそれ以前のなのはこの戦闘もはやては直接見ていない。

実際に対峙した二人から聞いた話に嘘はなかったが、

間近でそれを見たのと口伝で聞いたことでは言葉としての意味に違いがなくともあまりにギャップがあった。

さもありなん。

はやてはフェイトを追い込みすぎたのである。

使い魔と離されデバイスを失い、狭い檻に閉じ込められ自力での脱出は不可能。

そんな状況に追い込まれた彼女ではあったが
その手には囿として利用された“願いを叶える宝石”があったのだ。
皮肉にもフェイトはコウキがそれを使って自分へと反撃に出たのを見
ていた。

同じ発想がすぐに出たのは当然といえるだろう。

ただ違うのはコウキが戦うためにその手段を選んだのに対し
フェイトのそれは脱出のためとはいえ、またも自虐的だった。

一度封印を施されたかの宝石にただがむしゃらに魔力を注ぎこんで
故意に暴走させる。

その結果は考えるまでもなかった。

いくら魔力量が膨大であろうとジュエルシードには敵わない。

ケージは簡単に吹き飛ばされフェイトを閉じ込めていたものは消滅
し光が辺りを覆いつくす。

そして代わりに暴れ狂うエネルギーの渦が彼女を襲うこととなる。

それは単純かつ強大だっただけに魔力を消耗しきった彼女に御しき
れるものではなかった。

「ぐ、うつ、うつ……」

苦痛に顔を歪めながら両掌で挟み込み、なんとかその暴走を抑えよ
うとするが

強大なエネルギーはそんなものお構いなしに暴れ出て、彼女を傷つ
けていく。

むしろそれだけ消耗した状態で膨大なエネルギーの渦に身をおきな
がら

五体満足で立っていられることが幸運だった。

その状況に、その光景に、その姿に。

アルフですら啞然とするなか少女の怒声が響き渡る。

「この、あほおっ!」

「っ!?!」

ジュエルシードを抑え込む小さな手に同じような小さな手が重なった。

「なんて無茶すんねやつ!

あんた絶対あほや、筋金入りのどうしようもないあほつや!」

突然の罵倒に呆気にとられてしまっフェイトだったが流れ込んでくる魔力にハツとなる。

「ほらっ、もつと集中して。

あたしもそんなに魔力残ってへんからさっさと再封印するよ!」

「わ、わかった」

頷いて答えて見せたが、二人の残った魔力を注いでも暴走が止まらない。

再封印するには僅かに届かないのだ。

漏れ出るエネルギーの奔流が彼女達のBJと甲冑を傷つけていく。

「くっ、主!」

「フェイト!」

もはや互いに相手を牽制している場合ではない。

と、それぞれの主人のもとへ向かおうとするが

荒波のように暴れるエネルギーはそれすらも阻害していた。

そして彼らには遠距離から暴走しているロストロギアを封印する術はない。

ましてや今から援軍を呼んでも間に合わない。

その前にフェイトとはやては力尽きる。

こんな奔流のなかでのそれは死に直結する。

「うっあっ、くっ、あと……あと……あとちょっとやのにっ」

「うっっ、止まってえ」

足りない。

僅かに足りない。

あとほんの少しの魔力もあれば封印は完了する。

けれど、その少しがどこにもない。

詮無きことと分かりながら“ここにもうひとり魔導師がいてくれたら”と

思わずにはいられなかった。

くしくもこの時二人は同じ人物を、

砲撃魔法を使いこなす白い防護服の少女を思い浮かべていた。

だからだっただろうか。

それを空耳や幻聴だと思ってしまったのは。

「デイバイイイッンッ」

けれど、可愛らしさのなかに力強さを秘めたその声は聞き間違えようがなかった。

「バスタアアッ！」

桜色の閃光が放たれる瞬間。

その声を合図にはやては目の前の少女に飛びつくようにして押し倒す。

「封印！」

一条の光に貫かれ、余波で粉塵が舞い上がるなか。

ジュエルシールドは再び封印されるとレイジングハートに回収された。

「はあ、助かったなあフェイトちゃん」

「……………」

自分の下敷きになってる少女から返答はない。

元より返事など期待していなかったが、信じられないとばかりに驚愕し自分を見詰め返す彼女にはやては満足する。

「よいしょっと、ほら立てる？」

立ち上がって未だ倒れているフェイトに手を差し出して立ち上がる。
せる。

あまりに自然と、そして相手に考える隙なく差し出されてしまった
ので

立ち上がったあとフェイトはなぜ警戒なくその手を掴んでしまった
のか、と。

本気で考え込んでしまう。

（なんかどうでもいいことで悩んでへんかこの子？）

その姿が記憶の中にいるある少年と重なるためか。

はやてはフェイトの思考を正確に察した。
ふう、と小さく息を吐くと周りを観察する。
まだ、先ほどのバスターによる余波の粉塵は舞い上がったまま。
念話でも使えば別だが、目視では自分達を見つけれないだろう。

「あつ、よかった近くにあつて」

探し物を見つけた彼女はそれを拾い上げる。

「フェイトちゃん、はい」

目の前に差し出された愛機・バルディツシユの姿に
我に返ったフェイトはそれを素直に受け取った。

「……………あ、ありが、とう?」

咄嗟に礼の言葉が出かかるが、
何かそれは違う気がして最後が疑問系になってしまふ。

「あははは、お礼はおかしいわな。弾いんたんはあたしやもんな。
でも、もらうもんはもらっとくわ。どういたしましてフェイトち
ゃん」

それを笑って受け取った彼女の満面の笑みにしばし見とれる。
こんな所で、さっきまで戦っていた相手にそんな言葉と笑みを向け
られるのが、
その在り方が彼女にはとても眩しく見えた。

「こら、ぼけつとしとらんとこれが目くらましになつとるうちには
よ逃げ」

こっつん、と頭を叩かれ我に返るフェイト。しかし。

「どっ…して？」

言葉の内容に疑惑の眼差しを向ける。

「いって、いって。」

別にジュエルシード取られたわけでもないし今回はあたしの采配ミス。

フェイトちゃんにそんなケガさせるつもりなかったんに、
させてもうたからな。せめてものお詫びや」

さらりとそれを受け流しまたも笑ってみせたはやては
安心させるためにフェイトに背中を見せて後ろ手を振って「早く行
け」と意思表示。

僅かに逡巡しつつ周りに気を配る。自分達を探す声と気配が寄って
来ている。

覆い隠してくれていた粉塵も風に流され消えようとしていた。

ジュエルシードは取られた。奪おうにも消耗しているうえに多勢に
無勢。

これ以上ここに留まる意味はない。

フェイトは踵を返してはやてに背を向け歩き出した。

「なあ、いいかげん甘えるんやめたほうがええよ？」

その背に先ほどまでとは打って変わった氷のような冷たい声が向け
られた。

一瞬立ち止まったフェイトだが、即座に歩みを再開する。

「事情は知らんけど、それはただの甘えや。」

あんな風は無茶やって自分を大事にできへん人は
結局のところ他の誰かのことも大事にはできん。

自分の足でちゃんと立たなあかん。

自分の意思で道を選ばなあかん。じゃないと

「

突然の突風が最後まで残っていた砂塵を吹き飛ばす。

覆われていた視界が開けた先の青い空、そこに金色の髪の少女はい
なかった。

小さく溜め息を吐いたはやてはただ小さく首を振った。

「…なにえらそうなこというとるんやろな、あたし」

何気なく自らの足を見下ろす。

飛行魔法の応用でこの足は地に立てている。

だがそれは果たして“自分の足”で立っていることになるのだろうか。

これもまた自身で言った『甘え』なのではないか。

「主っ！」

「はやてちゃん！」

心配性の騎士たちと白い魔法少女が駆け寄ってくる。

それを笑顔で どこか儂げな で迎えた彼女は、

いまの自分の判断はどこか間違っていたのではないかと自問する。

逃がしたことに後悔はない。きつとあれでよかったのだと根拠なく
思っ反面。

これが最後のチャンスだったのではないかとの根拠のない懸念が頭
によぎる。

あの儂げな少女が、あの子のまままでいられる最後の可能性を自分は潰してしまったのではないかと。

最後の言葉があの子に届いたのか。

それを確認できなかったことだけが悔やまれる。

(やっぱあたしじゃこの辺が限界かな。

コウ兄の真似はきつい。ま、あとは任せたよコウ兄)

ぐらりと崩れ落ちる体はその寸前、大きな手に支えられた。

「似なくていいとこばかり似やがって。女の子はもっと体を大事にしろ」

呆れたような声色の文句に、はやては僅かに笑って意識を完全に手放した。

傷だらけの少女の体を抱え上げ、少年は空を見上げて独り言を呟いた。

「フェイト、聞いてたよな？」

じゃないと、フェイトちゃんは大事なものを全部失うことになるよ

そう、俺のせいで

疾風VS迅雷（後書き）

うちのはやては他人に妙に厳しい。

原作と若干設定が変わっているせいなのだが。

もう少ししたら、オリジナル分補足の人物紹介書こうかな？

第6話予告

シャマル「明らかにされる26年前の、ありきたりな、悲劇……」

シグナム「それはこの事件の悲しい真実そのもの」

シャマル「振り下ろされる狂気は、いったい誰のためのものなのか……」

シグナム「知らぬまま少女たちは迷い、悩み、けれど想いをぶつけあう」

二人「次回、魔法少女リリカルなのは異伝・第6話『空を裂く雷鳴』に」

シャマル「リリカルマジカルがんばりますっ!」

シグナム「り、リリカ……ル……が、がんばり、ます……」

シャマル「もうシグナムったら、次でテイク12よ?」

シグナム「……頼む、もう許してくれ……」

なのは「友達に、なりたいたんだ」

第6話予告（後書き）

ついに、この台詞が!?

感想はいつでも待っている
足をガタガタ震えさせて、待っている!

小さな偶然の重なりから私が遭遇した事件

受け取ったのはきつと勇気の心で

手にしたのは撃ち抜く魔法の力

めぐり会いはけっきょく嵐のなかで

けど触れ合うことのできない想いも

届かない言葉も

願いも悲しみも分け合いたいと思ったから

いつからそれを願っていたのかは分からないけど

どうしてそう思ってしまったのかも分からないけど

伝えたい気持ちがあります

世界でたった一人だけの

あなたの心に

5月5日 PM 02:34

アースラ・艦橋

始まったはやてとフェイトの戦い。

使い魔と分断させられたフェイトは隙を狙っては、

はやてに肉迫しようとするがシグナムに張り付かれ近寄れず、

主人と合流しようとするアルフもまたザフィーラにそれを阻まれていた。

しかし、どこかで一瞬でも隙が出来れば

あの二人はほんの数瞬で近接戦ができないはやてに迫るだろう。

そうなればおしまいだ。はやては倒されジュエルシードは奪われてしまう。

緊迫する戦い。それを見守る者たちもある種の緊張が走っていた。というのに。

「あら、思ったたより早くにぶつかったな」

それを彼は呑気な声で、呑気に評した。

「おまえ……………他にいうことはないのか。
ここは一応はやての心配をする場面だと思うが?」

モニターで戦況を見守っていたクロノは
突然ブリッジに現れた男に振り返ることもせずになんげこぼした。

「それは別に気にしなくていいだろう。

ザフィーラたちがいるし、はやてはあれでけっこう冷静だ。

やばいと思つたらそうそうに退却するしフェイトたちも

逃げる相手を追い詰めようとは思わないだろう」

クロノと並び立ってモニターを見ながらどこかで聞いたような解説に
クロノは首を傾げるがもつともなので一応納得する。

それとは別に同い歳なのに身長にかなり差があることに
微妙な敗北感を覚えているが表には出さない。

「それより……………」

そして彼もまた目の前のはやてVSフェイトより、
別モニターに映っている少女の方が気になっていた。

「まさかフェイトが現れたことなのはに言っていないだろうな?」

はやてが出たあと別の場所で発見されたジュエルシード回収のため
なのはとユーノは出撃。

取り付かれて暴走している大きな鳥と戦っていた。

「いま話すとあいつの集中を乱すだけじゃなく焦って無茶な封印して
そのままはやてたちのところへ直行。なんてことをやりかねない。

教えるのは封印を終えて一旦こっちに回収してから……ああ、けど出撃はさせられないな。

はやてたちのチームワークが乱れるとまずいしな……」

「え……」

「……………」

ある人物を除いたブリッジクルーたちが全員驚いたような表情と視線をコウキに向けてきた。

「な、なんだよその不思議なものを見ているかのような目は？」

「ううん、そうじゃなくてびっくりしたの。」

だって艦長とまったくおんなじこというんだもん」

「はい？」

エイミイの言葉に驚き、艦長席に佇む彼女を見上げる。

視線を向けられた彼女も視線はモニターに向いていたが会話は聞いていたので微苦笑を浮かべていた。

どうやらコウキがここを訪れる前に彼と同じ指示を彼女は出していたらしい。

（もしかして、まさかとは思っていたが、

俺の思考があんなにも読まれるのって、そういうことなのか？）

ある意味衝撃の事実に愕然としつつも、この場は忘れようと頭を振る。

「きゃあっ!」

すると小さな悲鳴と共に小さな鳥が転げ落ちる。

「お、おっと!」

肩から落ちる直前で受け止めるとそのまま肩に乗せた。

「あつ、いきなり頭を振らないでください」

「す、すまんシャマル」

若干目を回した様子の彼女に素直に謝る。

「っ……………」

そんな彼を射抜くような視線で黙って見据えているクロノを横目にエイミイはいつもより余計に高いテンションで声を上げた。

「そついえばさつ、コウキくんやはやてちゃんが使ってるのは『ベルカ式』なんだよね?」

いささか緊張感には欠ける声ではあったが、ちゃんと戦闘のデータ収集などは完璧にこなしている。それはひとえに彼女の能力の高さゆえであり生来持つ余裕という名の雰囲気である。

「ええ、そうですけど」

「管理局じゃ使ってる人そんなにいないから私もよく知らないんだ

けどミッド式とどう違うの？

「はやてちゃんの模擬戦や今の戦闘見てる感じだといまいちわかんないんだよね」

「エイミー、いくら術者が少ないとはいってもいることはいるんだし、

少なくとも彼らが来た時点で調べておくべきだろうが」

隣からの呆れた声にたいしてこたえてなさそうにしつつも、苦笑し頬をかいたエイミーは「でも」と反論する。

「やったんだけどさ、なんかはやてちゃんの戦い方と違うっていうかなんていうか」

適当な言葉が見つからず語尾がいいかげんになっていくのをクロノはまたも呆れるが、言葉そのものには同意する。

「ふう、確かに。その疑問は僕も感じた。

僕達を知るベルカ式というのはかつてミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系で

遠距離や広範囲攻撃をあるていど度外視して対人戦闘に特化した魔法で優れた術者を騎士と呼び

その最大の特徴はデバイスに組み込まれたカートリッジシステムという武装。

儀式で圧縮した魔力をこめた弾丸を組み込んで瞬間的に爆発的な破壊力を得る。

「というものなんだけど……」

今度はクロノが困ったように頬をかきながら一部のモニター映像を切り替える。

「はやてさん、思いつきり遠距離や広範囲攻撃してるのよね。カートリッジなしのデバイスで」

模擬戦の記録映像で彼女は管理局のベルカ式への認識とはまるで逆の戦法をとっている。

三対の視線がどうということかといっせいにコウキに集まる。

「えっとそれは…」

「クロノの言ったのは間違いじゃないけど正解じゃない」

反射的に説明しようとしたシャマルに気付かず、コウキはよどみなく説明し始めた。

「ベルカ式が対人戦闘に特化した魔法だと伝わったのは、多分それしか残らなかったからだろう。」

もともとベルカ式はチーム戦前提で役割分担がきっちり決まってる魔法体系だったから、

大きく分けて対人戦闘に特化した前衛タイプと遠距離や広範囲攻撃でサポートする後衛タイプ。

その2種類の術者がいてカートリッジシステムはおもに前衛タイプが使っていた。

ミッド式に汎用性という点で負けて衰退していく中で、個人でも使用しやすい前衛タイプだけが残っちゃったから管理局でもそういう認識になってしまったんだろうなあ……」

どこか遠くを見て、現状を憂いているような表情を見せる。

それを、愕然とした表情で見上げている彼女の視線には気付かずに。

「それにさ、資料映像とかで見せてもらっただけど、今のベルカ式って俺たちのと違うんだよな。ミッドが基礎になってるってのもあるんだけど、俺から言わせるとあれは単なるミッド式ベルカで、あれをベルカ式と呼ぶのは、なんか気が引けるといっつか、なんといっつか」

「ふふっ、素直に『あんなのはベルカ式じゃないっ！』て言えばいいじゃない。

気にしないわよ、私たちは」

あえて言葉を濁したコウキの真意を的確に読んでの発言にぐうの音の出ない。

が、それにも徐々に慣れつつある彼はわりと即座に立ち直る。

「そんな身も蓋もないことを」

「あらごめんなさい」

まったく、これっぽっちも謝っていない笑顔で謝れてもな。

と、内心呟くコウキだがもうこれにも慣れたので気にしない方向に思惟を持っていく。

「だが、キミの意見は的を射ている。

実は局内で使われているほとんどのベルカ式は“近代”と呼ばれ、キミ達が使っているのは現在のベルカ自治領でわずかに確認されているもので

古代ベルカ式と分類されているものだろう。

もっとも、術者が少ないからこの二つの明確な違いについては僕もあんまり知らなかったけど」

「はあ、なるほどねえ、近代と古代。そんな風になっていたとはね」
クロノの説明に心底感心したように頷く。
しかしそのあまりにも軽くみえる態度にクロノは首を傾げたくなる。
この男はどこまで本気なのだろうか、と。

「……エイミイのためのベルカ式談義はまたいつかするとして、お前は何をやってるんだ？」

「はい？」

今度は彼が首をかしげた。

それだけは本気で意味を理解していないのだとクロノにも分かった。
彼の母と似た腹の底で何を考えているのか分からない雰囲気のある
コウキは

しかし時折、分かり易すぎる態度を見せる。

そのちぐはぐさがクロノの中で彼の人物像を掴み辛くさせている。

「だから！」

この数日、艦から出ることも模擬戦をすることもなく、
お前は何をやってるんだと聴いている」

僅かな苛立ちを理性で抑え込みつつもその語気は若干荒い。

「ああそのことか。実はちょっと調べ物を………ん？」

クロノの言を柳のように受け流しつつも本題に移ろうとしていた彼の表情が変わった。

「コウキちゃん？」

訝しい表情で鋭い視線をモニターへと向けている。それに皆、習う形で意識をモニターへと移す。

その中にははやてが発生させたつむじ風をフェイトたちが避けていた。

「まずい、な…」

「まずい、わね…」

同時に紡がれた同じ意味合いの言葉。

腕を組み手を顎に当てて考える素振りには左右逆ではあったが同じもの。

二人は自身の思考に意識がいつていて、そうであることに気付いていない。

「艦長とコウキくん、またシンクロしてるよお」

アハハと苦笑しつつクロノの顔を覗き見て、その表情にエイミィは小さく嘆息する。

“また”という以上当然ながらコウキたちがアースラに来てからの一週間。

二人の言動の妙なシンクロは頻発している。主に悪巧み方面でのシンクロなのだが。

リンディとコウキは性格的なことをいえば似ていない部分が多いが戦略的な思考は恐ろしく似ていた。

試しに戦略シミュレーションで対戦したら、どっちも何気に負けず嫌いなのが災いして

何時間も長引いて結局引き分けになるほどに。

そしてこういう風に二人が同じ言動をすると決まって、なぜかクロ

ノの機嫌が悪くなるのだ。

引き分けたシミュレーションの時などは終始コウキを睨みっぱなしだった。

どうしたもんかなあ、と一人悩んでいるエイミイを他所に二人はこれまた同時に口を開いた。

「エイミイ、なのはさんにすぐはやてさんのところへ行くように連絡を……」

「エイミイさん、なのはにはやての所へ向かうように言って……」

そこまで言いかけて、二人は互いを驚愕の表情で見合っている。ようやく、同じ思考に陥っていたことに気付いたようだ。

「ああ、ええ、そのお………私はどっちの指示に従えば？」

同じ内容であるのだから聞く必要はないのだが、

先ほど指示されたものと相反する命令だ。

確認の意味合いを込めた言葉に二人はそろって沈黙する。

「……………」

「……………」

そしてチラッと互いにアイコンタクトを交わすと。

「どっぞ……」

と、コウキが譲った。

「え、ええ……なのはさんをはやてさんのところへ向かわせていえ、もっごうちで直接転移させたほうがいいわね。」

エイミー、アレックス、すぐに準備を。クロノは現状のまま待機。それとあなたやシャマルさんにも行ってもらいたいんだけど、い
いかしら？」

「ええ、そのつもりでした。行くぞシャマル」

「あっはい！」

頷いて転送ポートへと走るコウキとそれを見送ったリンディは
全く同じタイミングで小さくハアと溜め息を吐いていた。

というのが事の顛末らしい

5月7日 AM10:12

アースラ・医務室

「うちゅうことは、あたしの目論見コウ兄やリンディさんに読まれ
とったってことか？」

ベッドに腰掛けとるんは柔らかなそうな茶髪に笑顔が可愛い女の子
ことあたし八神はやて。

ごめん、冗談やさかい怒らんといて。

包帯に巻かれた手で嫌な予感に目を泳がしながら頬をかいた。

「ええ、たぶん。」

「コウキちゃん向かう途中できつとあの子がジュエルシードを暴走させるって」

「あちゃあ、と額に手を当ててベッドに倒れこむ。」

「すっごいなあ二人とも、あたしはそこまで読みきれんかった」

そのうえフォローまで完璧にしてまうなんて。いっぺん頭ん中見てみたいわ。

「私もです。」

「なんだかヴォルケンリッターの参謀役として自信、無くなっちゃいます。はあ……」

溜め息吐いて肩（羽？）を落とす小鳥姿のシヤマルは
「なんや可愛らしゅうて自然と微笑が浮かんでまう。」

「そして何気なく手を当てていた額が気になって少しこする。」

「痕になっていたり赤くなっちはいけないけれど、やっぱり気になってまう。」

「あっ、もしかして痛みます？」

「ああ、いやそういうわけやないしあれは私のミスやったからいいんやけど。」

「やっぱ十連発はないと思うんや」

確かに、とシャルも頷いてあたしは数日前のことを思い出す。魔力の消耗とケガで気を失ったあたしが目を覚ましたとき。よかったと胸をなでおろしていたみんなの中で一人。めっちゃくちゃ怒っとる人がいた。

もちろん、コウ兄や。

そりやもうにつこり笑顔で「俺がなに言いたいかわかるよな？」

なんて聞いてくるものだからあたし背筋が凍つてもうたわ。

思わず即「無茶してごめんなさい」と謝ったわ。

それが功を奏してお仕置きのランクが下がってくれたのはよかった。よかったんやけど。

みんなの前でぐりぐり頭を撫でに撫でまくって人の顔を真っ赤にさせておいて

額にデコピン十連発はひどすぎではないだろうか？

謝っていなかったら、いったいどんなお仕置きだったのか。今では怖くて聞けへんわ。

けど。

「でもはやてちゃん、何だか嬉しそうです」

「そ、そうかなあ？」

とぼけてみるけど、実はそうだったりする。

コウ兄は意外だけれど滅多に自分から相手に触れない。

車椅子のあたしをイスやベッドに移動させる。

なんていう必然性が無ければそういうことはしない。

最近ではその役目をシグナムやシャルに譲っているからそれすらもないのだけど。

「久しぶり、やったし……頭撫でられるんも、デコピンとはいえ

触ってくれたんも」

うふふと笑った目でずっと見詰めてくるシャマルの視線に耐えかねて認める。

必然性がないのに触れてくる時はそれに意味が込められている。今回はこれだけこっちは心配したんだから反省しろってことみたいや。

「けど、シャマルやてそれは分かるやろ？」

ま、それはそれ。恥ずかしいこと言わされた仕返しといこか。

「え、な、何が、ですか？」

心当たりがあるのか、うろたえた様子を見せるシャマル。ふふ、かわええなあ。

「あたし知つとるんよ。シャマルがときどき左頬さすって、嬉しそうに笑つとると」

「っ、はっ、はやてちゃんそれは！」

ああ、ほんまにかわええ。

食べてしまいたいほどや。小鳥なだけに。

さて、このあとはどうやってからかってあげようかな。

この小さな参謀さんには。

「……………えつと、なんのお話してるの？」

なんて考えとつたから、この子が医務室に入ったことに気付かんか

った。

「あつ、なのはちゃん。

いやなんでもないんよ、ただシヤマルがコウ兄LOVEなだけやさかい」

ちようどええ、追い込みに使わせてもらお。

「はっ、はやてちゃんっ!!」

「へえ、そうなんだあ」

と、にこやかな笑みと柔らかな視線をシヤマルに向けた。
なのはちゃんって、意外にノリいいんやな。それとも天然？

「はづうう……もう知りません！」

あたしとなのはちゃんの暖かい視線に耐え切れなくなったのか。
バサツと羽ばたいて飛んでいってしまうシヤマル。
いつつもコウ兄をからかっとするくせに自分がその対象になると弱い
なんて、ナイスな属性や。

「シヤマルさん行っちゃったけどいいの？」

「ああええんよ。どうせ部屋に戻っただけやろし。

それよりなのはちゃんはどうしたん？」

「うん、ちよっとお見舞い……腕、大丈夫？」

「これか？」

大げさなんよシヤマルも医療班の人も。
もう傷もないし痛みもないから平気や平気」

と喋って包帯だらけの腕を振ってみせる。

実際、治療系の魔法をかけてもらったから傷は塞がった。

痕も明日には消えるから包帯は今日まで。

ただ魔法の使用はしばらく禁じられてしまったんやけど。

ま、それは置いとくとして。

「心配してくれるんは嬉しいけど、

なのはちゃんはあたしの見舞いだけに来たわけやないんやろ？」

目を泳がして何か別のことをいいたそうな表情にあたしはあえて直球で訊ねた。

だってなのはちゃん、顔が素直すぎるんやもん。この子絶対嘘つけへんタイプやな。

一瞬きよとんとした顔を見せたなのはちゃんはあははと苦笑い。

「やっぱり分かつちゃう？」

実ははやてちゃんに聞きたいことがあって来たんだ」

そう喋って続いて聞かれた質問にあたしは「やっぱりこの子ええ子や」と素直に思った。

だからあたしは、それに正直に、何も隠さず答えた。

それがきくと、同じ人を好きになった女の子同士の礼儀や思ったから。

ゲルゲル回る(前書き)

実はこのサブタイ。

はやてのキャラソンの歌詞の一部なのである。

グルグル回る

5月7日 AM 10:41

アースラ 艦内通路

あたしのを聞いても参考にはならへんよ

そういつてはやてちゃんが教えてくれた理由は、やっぱり“参考”にはならなかった。

でも、どうしてそれが聞きたかったのかの理由には気付いてくれたみたい。

そういつとニコウキさんと似てるな。やっぱり3年も一緒に暮らしてるのはダメじゃない。

それにはつきりと分かったしね。はやてちゃんもニコウキさんのことが……

って、違う違う！

いまはそれを考えるときじゃない。

いまは、自分の気持ちと向き合おうとき。

初めて会ったのはすずかちゃん家の大きなお庭。

ジュエルシードに取り付かれて大きくなってしまった猫さんを

どうにかしようとしていたら、突然襲われた。

あのころはまだうまく魔法も使えてなくて、

あの子に一方的にやられちゃって気がついたら気を失ってた。

次はみんなで行った温泉宿だったかな。

ちゃんと話そうしたけど話してくれなくてまた負けちゃって。

今度はこっちの事情を話せばって、思って話したけど

アルフさんに甘ちゃんって言われて聞けなくて。

それでジュエルシードは暴走してしまって、

あの子はそれをケガをしてまで抑え込もうとして。

それが、それがとっても。

とっても儚げで、痛そうだった。

それは、イヤだった。

うまくいえないけど、その姿が、その気持ちが、すごくイヤだったの。

そして、最後に会ったのはコウキさんと戦ってたこと。

あの時はコウキさんがあんなことになって、

それで頭いっぱいになっちゃって何も言えなかった。

あれ以来、私と彼女は出会ってさえない。

はやてちゃんの話じゃこの前はニアミスだったみたいだけど。

考えてみると襲われて、戦ってばかり。

私はそれがイヤなのかな？

もっと普通にお話したり、ケーキとか一緒に食べたり、したいのかな？

なんかちょっと違うような、それで正解のような。

あれ？

なんかこんな感じになったこと前もあったような。

誰かを見て、それでそう思って、わたしはどうしたんだっけ？

あの子に初めて会ったあの時、

あの優しそうな瞳を見たときからずっと“わたしは何を言いたかった”んだっけ？

うん？

言いたい？

私、あの子に何か言いたいの？

パチンツ

「いたっ!？」

突然、額を襲う衝撃に顔を上げる。

そこで初めて目の前に人がいたことに気付いた。

「コ、コウキさん」

顔の前には開かれた掌。デコピンされたとすぐに分かった。なにせ十八番だし。

けどなんとなく、私を見下ろすその顔には呆れがあるような気がするの。私の気のせい？

「ハムスターかお前は……」

「え？」

なんでハムスター？

「同じところでグルグル考え過ぎ。

俺の言ったこと、もう忘れたのか」

あつ、たしかに考えないでやってみるとはいわれてました。
あううう、でもやっぱりそれが一番難しいよお。

「難しく考えるな、といつてもお前には無理か」

困ったように頭をかくコウキさん。

ああ、なんかすつごく自分が情けない。

なにがってそれはコウキさんの言う通りなのが。

「じゃあ、俺からヒントだ」

「ヒント？」

オウム返しみたいに私が繰り返すと

昔のままの変わらない笑顔を浮かべて、優しく私の頭を撫でた。

「あ……」

「今度、あの子と会ったとき最初に思ったことをそのまま口にしろ。
たぶんそれが正解だ」

え、それだけ？

とっさにそう思ったことは顔に出てしまっていた。

「おいおい、ヒントだっていったろ。もともとお前は答えを知ってるんだ。」

これ以上はお前を余計に混乱させるだけ。

だから、次会うまで何にも考えないほうがいいぞ。

部屋でゆつくり休んどけ」

じゃあな、と何事もなかったかのように艦内に消えていくコウキさんの背を目で追いながら

叩かれ、撫でられた頭を今度は自分の手でさする。

彼の言うとおりのあの子のことは考えないように。

「……………えへへ」

知らず知らず、笑ってしまったっている自分がいる。

うん、はやてちゃんたちの言うとおりでね。

うれしいね、コウキさんに触ってもらえるの。

とっても、あつたかい気持ちになれる。

あの子にもこんな気持ちにさせてくれる人、いるのかな？

いてくれたら、嬉しいな。

F a t e が告げる事実

5月7日 AM 11:07

アイスラ・艦橋

プレシア・テストロツサ

非常に優秀な術者で自他共に認める大魔導師。

また魔導工学の研究開発者でもあり、若くしていくつかの功績を残したものの、

27歳の時に「新型の大型魔力駆動炉開発」において設計主任となつた彼女は

違法手段・違法エネルギーを用い、安全確認よりもプロジェクト達成を優先させた結果、

駆動炉の暴走及びエネルギー漏れを起こす。

以後、地方にて魔導研究に従事しそれがいくつかの成果を見せた折、突如として消息を絶つ。現在は所在はおろか生死すら不明である。

「ファミリーネームが一緒ってことは血縁関係があるのかな、親戚とか？」

名前という唯一といってもいい手がかりでクロノが思いつけるのは彼女だけだった。

しかし彼女が起こした事故について本局が関わっていないなかったため、詳細はクロノにも分からない。

「いや、そもそもフェイト・テストロッサが偽名である可能性もある。

決め付けるにはまだ情報が……」

請求すれば資料なり当時の証言なども出てくるだろうが、今からではこの事件そのものが終結したあとになりかねない。

もちろん請求そのものはフェイト・テストロッサの名を聞いた時点で出しているが、

関連を決定付ける情報はまだない。

「でも、彼女ならあの子の“母親”でも問題はないわね」

艦長の呟くように漏らした言葉にクロノは息を呑む。たしかにそうだと。

大魔導師と呼ばれたプレシアの“娘”なら、

フェイトにあれだけの魔法資質があることは大いに納得できる。
ジュエルシード集めに関しても魔導師として科学者として優秀だっ
たプレシアなら
その力を存分に扱えるだろう。

ただ、その目的とこの推測そのものの正否が不鮮明な状況ではこれ
以上は推測にすらならない。

「いまのところは彼女を捕まえて事情を聴くしかないようだな」
と、結局の結論を述べたクロノだったが、その言葉は背後から否定
された。

「それで解ると思えないけどなあ」

これまたものすごく、呑気な声で。

「むっ……コウキ、それはどういうことだ？」

苛立ちを必死に抑えつつ荒い語気での言葉にエイミィは知らず天を
煽った

（どうしてクロノくんってコウキくんの一挙手一投足にそこまで反
応するかなあ？）

自身の補佐官が頭を悩ましていることなど知らず、
まるで親の仇でも見るかのような視線を向けるクロノ。
それを飄々とした笑みで受け流し、答えるコウキ。

「単純なことだよ。フェイトは何も知らされていない可能性が極め

て高い。

捕まえたところで有益な情報はたいして得られないだろうさ。
それより、これを見てほしいんだが」

慣れた手つきでコンソールを操作してモニター映像を切り替えた。

「なっ!？」

勝手にそんなことをしたという怒りより、
管理外世界の人間が触れさせていないはずのそれらを
使いこなしていることの方に驚きを隠せないクロノ。

「これは………なにかしら？」

しかしそれにはさして驚かず、
モニターに映る一枚の画像資料 写真 にリンディは提督の顔で訊
ねた。

それは白衣を着たいかにもな研究者然とした人たちが
十数名ほど並んで立って記念撮影をしている光景。
提督の問いはこれが何なのか、というよりも
これを見せる意図を訊ねているようだった。
少なくとも、コウキはそう受け取った。

「クロノがこの前聞いてきた、お前は何をしてるんだ、ってのの答
えですよ艦長さん。」

一週間も探してこれ一枚見つけるのがやっとってのも情けない話
だけどね」

その声の変化に、誰が気づけただろうか。
なんてことはないとする雰囲気とは別に、その声には明らかかな落胆

が込められていた。

写真に見入っていたエイミー、睨みつけていたクロノの視線は困惑のそれに変わる。

リンディだけが、あえて黙ってその写真に視線を向けている。

「エイミーさん、悪いけど中央にいる女性の研究者にズームしてくれる？」

「うん……あつ、この人って」

拡大された映像に写るのはまさにプレシア・テストロツサその人だった。

ただ、その穏やかで優しそうな相貌は白衣を着ていなかったら研究者や科学者の類には見えなかったであろう。

そう思わせてしまう柔らかさがそこにはあった。

「うーん、なんか最初に見た映像資料の彼女と印象違うな。

プロジェクト達成のためとか、ロストロギアを集めるために娘を酷使するとか。

そんなこと考えそうな人には見えないんだけど」

「エイミー、いい意味でも悪い意味でも人を見かけで判断するのは
局員としてどうかと思うんだが」

彼女の素直な感想にクロノは呆れて注意しつつも実は同じ印象を受け取っていた。

だが、人はいくらでも仮面を被れる。周りを騙すため、自分を騙すため人は仮面を被る。

そしてこの顔が彼女の真実の顔である保障などはない。

執務官として幾つもの事件、幾人もの犯罪者を見てきた彼はそれを

痛いほど分かっていった。

「この写真のプレシア女史がどうかしたの？」

「……………」

リンディの問いかけに無言のまま彼はコンソールに近づくと写真のある場所を拡大表示にした。

「……………この子、誰だと思っ？」

彼が見せたのはプレシアの足元でピンと背筋を伸ばして立っていた幼い女の子。

その歳にしては長い髪の毛は二房に結われ、その色は金色。幼いながらもその相貌は間違えようもないほどに

「フエイト、さん？」

彼女に酷似していた。

「うわっ、これってもしかしてあの子とプレシアを結びつけるもの？
すごい、すごいよコウキくん、こんなの見つけてくるなんて！」

「たしかに……………これなら彼女達の関係を疑う必要もない」

捜査上の大発見に大喜びのエイミィと感心したようにそれに頷く口ノ。

だが、そんな二人を尻目にリンディだけは違う反応を見せていた。口許を手で覆い、なんてことだといわんばかりに驚愕に目を見開いてよろめいた。

なぜなら、彼は問いかけてきたのだ。

彼女を一度でも見たことがある者なら誰しも彼女だと疑わないそれに。

フェイトだとしか思えない少女に、しかし彼は『誰だ?』と問いかけたのである。

その裏にある真意に彼女は薄ら寒いものを感じずにはいられなかったのだ。

「……………フェイトさんでは、ないのね?」

彼女がようやく搾り出した確信のある言葉に喜んでいた二人の視線がコウキに向かう。

「ああ、なにせこれ27年以上前の写真だからな。

フェイトが見た目通りの年齢なら、この子がフェイトなわけがない」

「27年前だつて!?!」

「それってプレシア女史が事故を起こす1年前…」

彼が語るようにその写真は古すぎた。

たしかにここに映る少女がフェイトではないのは明白。

「俺は初め、プレシアが起こしたとされている駆動炉の暴走事故を調べてたんだ。

本人については、お前達が調べてるだろうと思ってさ。

にしても、どこの世界でもこういつのが起こる原因ってのは変わらないんだな」

ゆっくりと語りながら何故か自嘲気味に笑う彼にクロノは知らず齒を食いしばっていた。

「どづいうことだ？」

詰問のような問いかけに彼は「さてね」とはぐらかし、左手にはまった指輪に命じた。

「あとでこの資料を吟味して自分で考えてくれ。

見てるとイラついてくるぐらいふざけた原因だ」

彼にしては珍しい突き放すかのような物言いに違和感を覚えつつもクラールヴィントから転送されるデータを確認する。

「これ、捜査資料？」

「うわっ、すっごい数。これ全部コウキくんが集めたの？」

半ば『冗談でしょ』とまで言いたそうなエイミィの口ぶりに彼は苦笑を浮かべつつ頷く。

「さつきも言ったけど、俺は暴走事故を調べていた。

この事故は規模に対して人的被害は奇跡的な数値に抑えられていた。

なにせ死亡者は一人だけだったからな」

「それは僕達も知っている。

たしか開発スタッフの身内が巻き込ま　　っ、おい、まさか！」

言葉途中ではたと気付いた彼に、コウキは厳かに、しかし抑揚のな

い声で告げた。

「アリシア・テストロッサ。

暴走事故唯一の犠牲者にしてプレシアの……………一人娘だよ」

「っ」

そしてそれが写真の女の子だという。

「事故を調べているうちにアリシアに関する資料、

とくに顔が判る画像がことごとく消されていたことに気付いた。

その写真一枚見つけるのに俺とシヤマルで1週間もかかったんだ。徹底的だったよ。

そのうえようやく見つけたかと思えば、その顔だ。久しぶりにゾツとしたよ」

その時の悪寒を思い出したかのように彼は自らの腕を抑えるかのよう
うに掴んだ。

「あなたは……………何を考えたの？」

僅かに緊張した面持ちで、

まるで聞き出す答えのほうがり怖いといわんばかりに硬い声で訊ねる
リンディ。

それも“考えているの”ではなく“考えたの”だ。

この違いは常人同士にしか伝わらない。

「大事なものを失った人間の、その感情の向かう先は大まかに四つ。

復讐か、乗り越えるか、思い出に逃げるか、躍起になって取り返
そうとするか、だ」

果たして、プレシアが選んだのはどれだったのか？

「うわっ、クロノくん、なんか私ぶるっときちゃったっ」

乾いた声を必死で張って、鳥肌のたつた腕をさすりながらもいつものように元気いっぱいの明るさを振りまくエイミーにクロノは苦笑とも微笑ともとれるなんとも微妙な顔で頷いた。

さもありなん。

ここまでお膳立てで見せられれば、

おおよそ彼が推測した方向性は二人にも理解できたのだ。

26年前までいたプレシアの一人娘、アリシア・テスタロッサ。

母が研究していた駆動炉の暴走によって命を落としてしまった娘。

事故後、しばらくしたあと消息を絶つプレシア。

長年の沈黙を破って、いま現れた“母”の願いで宝石を集める“アリシアと瓜二つ”の少女。

そのフェイト・テスタロッサと名乗る少女の“母”からの扱きやくたいい。

ジュエルシードという途方もないエネルギーを持つ願いを叶える宝石

一つずつではそれだけでしかないそれらも、

これだけ揃えば間を埋める“空想”はいくぶん簡単になってくる。

空白の26年でプレシアがやろうとしていたことがおぼろげにだけ見えてくるのだ。

そしてそれが多分、うまくいかなかったことも。

「愚問かもしれないけど、証拠は？」

リンディのあるんでしょ。

という疑ってさえない形だけの問いかけに

彼はコンソールを操作して目当てのファイルを開く。

「公式な記録上、事故後プレシアが最後に関わったとされる研究がある。

当時は研究者同士の間ではかなり注目されていたものだったらしい。

それが、これだ」

開かれたファイル。

それは、とあるプロジェクトの概要説明のようなものだった。

「……っ」

「ああ……」

「それを疑うな……というのも無理な話か、これはっ」

三者三様の驚愕の表情を見せながら、全員がモニターから目を離せない。

そこに並ぶ文字があまりにもこの事件の裏をただ一文で語っていることにショックを隠しきれなかった。

そのたった一文で“空想”が明確な“推理”に変わる。
概要説明の頭、それはこんなタイトルで始められていた。

『記憶転写型クローン技術・プロジェクト「F・A・T・E」』

それはあの少女と同じ名前だった。

Fateが告げる事実（後書き）

ちなみに、ですが。

このお話の中では事故の原因は無理な開発計画で
新型を納期内に完成させようとした会社のせいです。

（つまりは小説版、あるいは映画版の設定。アニメではそこまで踏
み込んでいない）

正直プレシアが最後までスタッフに残っていたから犠牲者はアリシ
アだけですんだ。

ような気がして、彼女が報われなさすぎます。

友達になりたいんだ

5月8日 PM 03:26

海鳴市近郊海岸

胸のざわつきが止まらない

浜辺からは離れた岩場で人目から隠れるように佇んでいる少女がいた。

潮風に金色の髪を遊ばせながら、ただ目の前の海に伺うような視線を向けている。

それは背後から気配と足音が近づいてきても変わらなかった。

「フェイト、やっぱりだめだ。だいたいの範囲は分かるんだけど、正確な位置を探るには見つからないように隠れて、ってわけにはいきそうもない」

大型の狼の姿の“彼女”はすまなさそうに首を振った。

「うん、わかった。それなら……隠れずに行こう」

決意を秘めた瞳で海岸線を見据えたフェイトは愛機を構える。

「…アルフ？」

飛び立とうとした彼女は、それに従順する気配のない背後の“彼女”へと振り返る。

「ねえ、もう少しゆっくりやってみようよ。

時間をかければ見つからずに探すことはできる。

別に期限が決まっている仕事じゃないんだから、

危険は冒さないにこしたことはないんだし…」

少女を襲うすべての危険から守る覚悟も力もある彼女だが、

だからといって率先してそういう場へ行かせることはできない。

アルフと呼ばれた獣にとって何より優先すべきなのは

少女が危険に会わないことなのだから。

「でも長引けばその分、管理局がジュエルシードや私たちを見つめる可能性が高まってくる。

実際こっちが見つけた3つのうち2つは取られちゃった。

残りが一箇所に集まっているんなら下手に慎重になるより

強引に封印と回収を済ませてしまったほうが返って安全だよ」

唸りながら顔を伏せるアルフ。

そのプランを理解はしているし確率でいえば一番安全なのかもしれない。

あくまで方法の安全性を度外視するなら、だが。

「ならせめて全部フェイトじゃなくてどっちか私が…」

「アルフ、さつきも言ったけどそれだと自由に動ける人がいなくなる」

役割分担を申し出る彼女に、

しかしフェイトはそれを母親が子を諭すかのように優しく説き伏せる。

「ジュエルシードの覚醒も封印も、どっちもたくさんの魔力や集中力がいる。

分担すると時間をかけちゃうし両方ともすごく消耗しちゃう。

そんなところを管理局に発見されたらそれこそ捕まっちゃうでしょう？」

「ならどっちも私がつ！」

「アルフはまだ封印ができないでしょ。

だから両方とも私がつて、そのあと元気なアルフには疲れてる私を守ってほしいの、ダメ？」

最後だけ歳相応の少女のように首を傾げて問いかける。

「……………ずるいよフェイト。」

そんな風に言われたら、わかった、って言うしかないじゃないか」

そつして微笑を浮かべたアルフにありがとうとお礼を言いながらその頭を撫でるフェイト。

心穏やかにしてくれるはずのその手が今はすごく、もろくて怖かった。

胸のざわつきが止まらない

同日 PM03:37

アースラ艦橋

けたたましく鳴り響く警報。

緊急事態を示す赤がモニターにひしめきあつ。

「あわわわっ、あの子たちなんて無茶を！」

慌てふためきながら状況把握に手を滑らせコンソールを巧みに操作するエイミー。

「まったく何考えてるんだ!？」

現場の状況をモニター越しに見て憤るクロノ。
そんな二人の後ろで

「まあ、そうするしかないでしょうけどね」

「そうだな、潜って探すより手っ取り早いし」

どこか呑気な声でそう評す艦長と協力者にクロノは胸中の感情を必死で律していた。

そんなクロノとは対照的であった二人だが、この展開そのものには同じく憤慨していたのだ。ただ、予想外ではなかった。というだけの話。

ジュエルシードのいくつかは海に沈んでいる、というのは二人の共通認識。

海鳴市はその名の示すとおり海に近くそれ自体はなににも不思議なことではないからだ。

問題は、残りが全部沈んでいることにある。

陸上と違って海中というのは魔導師でも動きに制限が多い。

バリアジャケットを一時的な潜水服のようにすることはできるが

実質この世界のソレより若干性能がいい程度でしかない。

酸素ボンベを背負えない以上滞在できる時間は短いとさえ言ってもいい。

防御フィールドで覆って海中に沈むことはできるが、

自分すべてを覆う上に空気もある程度取り込んだフィールドを

維持したまま海中を移動する難儀さを考えるとあまり現実的ではない。

魚かなにかが食べて暴走してくれたほうが位置が分かってかえって楽なほど。

ところが幸か不幸か、海に落ちたと思われるジュエルシードは沈黙を保っている。

おそらく輸送時にかけられた封印がそのまま機能しているのではな

いか。

というのがその封印をかけたユーノ自身の推察だ。

これにリンディもコウキも同意したため、

その前提でアースラススタッフは探索を続けていたのである。

僅か数日でコウキの発言力がリンディに匹敵するほどの影響力を持ったことに

クロノはまたも眉を寄せたがここでは割愛する。

だが海中にある封印状態のジュエルシードを見つけるのは困難を極めていた。

管理局に発見されないように動いている彼女達にとってはさらに余計に困難極まる作業だろう。

そこまで推察できたのなら、目の前の光景は何も驚くものではない。天を覆う黒い雲と稲光。荒れ狂う海原。

それら二つを繋ぐ強大な雷と海上から伸びる六つの強大なエネルギーの渦。

そんな“嵐”のなか、小さな点のように飛び交う二つの影。

魔力を帯びた雷で強引に海中のジュエルシードを暴走させたフェイト・テストロツサ。

獣の姿で風とエネルギーの嵐に翻弄される彼女を守ろうとする使い魔・アルフ。

彼女達がその目的に準じたままとれる最善はそれしかないのだ。

「あ、ああっ、艦長もコウキくんもそんな冷静に言わないでくださいよお！」

とはいえエイミィの悲鳴にも似た訴えはまさにその通り。

これはあくまで成功するかしないかを度外視した場合での“最善”なのである。

だからふたりは本当に怒っていた。

呆れるのを乗り越えて、すさまじいまでに怒っていた。

そんな選択をした少女を。させるまでに追い詰めた彼女を。

でも、だからこそ

「フェイトちゃんっ!?!」

開口一番。

艦内に響くアラームに慌てて駆けつけたなのは口からその名が即座に出たことに、

そのふたりが薄く笑ったことは他の誰も気付かなかった。

「あ、あのいったい何が…!」

「見ての通りだよ。まったくなんて無謀なことを。

こんな個人で扱える魔力の限界を超えている。自滅するぞこの子」

クロノから『自滅』という不吉な単語が出たことで焦燥にかられたのはは転送ポートに走ろうとする。

「私、今すぐ現場に!」

「その必要は無いよ」

「え!？」

思いもしなかった言葉に半ば絶句し立ち止まるのはを他所にクロノはクルー達に捕獲準備の要請をする。

「もう一度言うが、あれだと彼女は間違いなく自滅。

よしんばそれを免れても激しく消耗する。

僕達はそれを叩けばいい」

でも、という言葉は口から出せなかった。

管理局として、ジュエルシードの回収とフェイトの確保を

何より優先させることは事前にリンディから告げられている。

なのは自身もジュエルシードの危険性をその身で経験してるだけにそれらを優先させることに異論はない。

ましてやあんな見るからに危険な場にあえて飛び込む必要もないのである。

クロノがいうように相手の消耗を待ったほうが回収も確保も容易で安全になる。

彼がそう判断したことをなのはは意外にもすんなりと納得することが出来ていた。けれど。

(……………フェイトちゃん)

風雨とエネルギーが交差する嵐の中、飛び続けている彼女から視線を外せない。

あの子の表情が、目が、息遣いが、胸の奥のなにかを刺激する。

行かなくてはいけない。

自分は何がなんでもあの子のところへ行かなくてはいけない。

けれどそう焦る声とは別に冷静に自分と彼女との間に

そんな必死にならねばならないものはないと断ずる声もある。

直接会ったのは片手で数える程度で言葉を交わした数はもつと少ない。

なのにどうして、自分はこんなにも行かなければと思うのか。

今度、あの子と会ったとき最初に思ったことをそのまま口にする。たぶんそれが正解だ

そのいつもの疑問にぶち当たった時、ふと彼の言葉が思い浮かぶ。

(そう、だよ。行かなきゃ、じゃない)

そんなものは身勝手な使命感だ。

「……………それでも」

そうじゃない。自分が思っているのは、そんな感情じゃない。

「それでも行きたいんですっ!」

だってこれは彼女自身のためでもワガママで、けど素直な想い。

人の気持ちには敏感なくせに自分の気持ちを言葉にするのが少し苦手な少女の精一杯の叫び。

そして、幸か不幸か。それを聞き届けられないわけにはいかない少年がここにはいた。

「じゃ、行くか」

「へっ?」

ヒヨイと首根っこを掴まれる形で持ち上げられるのは。

「お、お前!」

制止の声をまるつきり無視して、彼女を背負って転送ポートへ走る。

「ふ、ふええええっ!?!」

いきなりの展開にさすがに頭がついていかないのはの叫びを響かせながら。

「シヤマル、ユーノ、飛ぶぞっ!」

「うんっ、任せて!」

「うふふ、いってきまっすっ!」

事前に念話で打ち合わせしていた通り、彼らは嵐の海へと飛び出した。

黒雲を裂く、光。

その輝きと気配にフェイトは空を見上げる。

光によって割れた雲の裂け目から白き魔導師服をまとった少女と武装局員の姿をした少年が降りてくる。

「っ、フェイトの邪魔をするなあっ！」

ここまで何度か対決した二人。

その登場にアルフは彼らの前に立ちはだかろうと突っ込んでくる。

「違うっ、僕たちは戦いに来たんじゃない！」

「ユーノくん！」

彼女を止めたのは防壁を展開したユーノだった。

彼は彼なりになのはの気持ちをくんでこの場にいる。

キズだらけの自分を救ってくれた恩人の、ここまで協力してくれた友達の、

“行きたい”という我が侘を叶えるために。

『馬鹿な、なにやってんだ君たちは!?!』

だからクロノからの叱責交じりの通信にはあえて彼は無視を決め込んだ。

(「ごめんなさい…」)

しかし、形の上では強引に連れてこられた少女は律儀にも謝罪を念話で伝える。

けれど既に来てしまった以上ここから退くことなどありえなかった。

(でもほっとけないんです！

あの子、きつと一人ぼっちなの。

一人きりが寂しいのはわたし少しだけだけどわかるからっ)

今まで見えてこなかった少女の心の発露にクロノは押し黙る。

それは、彼もまたその気持ちかわからないわけではないから。

「ってことだ。文句があるなら直接来いっ」

挑発めいた言葉を最後に、コウキは通信を強引に切ってなのはと共にフェイトのもとへ飛ぶ。

その後方でユーノは暴れる六つの水柱のようなエネルギーを抑え込むべく魔法陣を展開する。

「私もいくよおっ!」

同じくベルカ式の魔法陣を展開したシャマル。

二つの魔法陣から放たれる魔力の鎖が渦を縛り付けていく。

「フェイトちゃん!」

ユーノたちによっていくらか抑制されたおかげで開けた空を飛び彼女らの元へ辿り着く。

「急げ、俺がカバーするから、なのはっ!」

「うん。フェイトちゃん手伝ってっ、ジュエルシールドを止めよう！」
彼女達の登場やその意図に戸惑う暇すらなく彼女のデバイスから魔力が放たれる。

それは攻撃の力ではなく、そして癒しの力でもなかった。
けれどそれは自らのデバイスを通じて流れ込み、その暖かさが伝わってくる。

『Power charge?』

『Supply complete』

想定外の魔力補給に戸惑うバルディッシュを尻目に

レイジングハートは自らの仕事を誇るように完了を宣言する。

それはデバイスとエネルギーと呼ばれる魔力を相手に分け与える魔法。

「ふたりできっちり半分こ」

なのはは消耗しきっていたフェイトに自らの魔力その半分を分け与えたのだ。

それにフェイトはどうして、と問いかけることさえ出来なかった。

どう反応すればいいのかさえ解らない彼女になのははただ頷いてみせる。

「フェイト、なのは、ぼさっとするな！」

いくらユーノたちでもそう長く抑えられないぞ」

まるで二人を庇うかのように前に立っていた彼の叱責になのはは大きく頷く。

「ふたりでせーので、一気に封印！」

『Shooting mode』

飛び立つ少女はその杖を砲撃形態に変えながら封印のためのポジションへ移動する。

アルフ、シャマル、ユーノの三人で抑えていながら、

なお暴れるエネルギーの渦はその余波を周囲に放っている。

その隙間を縫うように飛びながらなのはここに来たかった理由を、フェイトに会いたかった理由に気付き始めていた。

ひとりぼっちで寂しいときに一番してほしかったのは

大丈夫って聞いてもらうことでも、

優しくしてもらうことでもなくて

未だ困惑のなかにいる彼女に視線を向ける。

フェイトはどうすれば、というより何が起こったのかが理解できなかった。

今まで妙な理由で自分達と対決した人たちが今、自分達の手助けをしようとしている。

それがどうしても解らなくて、疑問だけがフェイトの頭を占めていく。

『Sealing form, setup』

「……バルディッシュユ？」

だから、彼女を我に返したのは愛機の静かな言葉。封印のための形態に変形した彼からの『彼女たちと一緒にやりましよう』という無言の言葉。

何気なくポジションについたなのは視線を向ければ、彼女は笑顔のウインクで返した。

「デイバインバスター、フルパワー………いけるね？」

光の翼を広げてシーリングモードへ移行したレイジングハートは主の問いに何の躊躇もなく答える。

『All right, my master.』

そしてレイジングハートを構えて、封印の体勢に入る。

その顔には、その背には、フェイトが手伝わないということをもろで想定していない無言の信頼があった。

「頼まれてくれるかフェイト？」

魔力を譲渡されて困惑から身動きが取れなくなっていた彼女を黙って余波から守っていた彼が背中越しに語る。

「俺は魔力量が足りなくて封印はできないんだ。

だからなのはを手伝ってやってくれないか？」

こっちの言葉にも過度なほどの信頼をフェイトは感じた。

数度しか会ったことのない自分に向けられる不相応なほどのその想いが、どこか心地よい。

「何かご褒美がほしいのなら、とびきりおいしいものをご馳走するぞ」

とクスリと笑いながら嘯く彼に一瞬啞然とした顔になったがバルディッシュとなのは、コウキに視線を向けて　　すぐさま飛び立った。

エネルギーの渦を挟むように空に立つふたりの魔法少女。くしくも象徴する色は白と黒。放たれる光は暖かなピンクと輝く金色。極限まで高められた魔力がそれぞれの愛機へと注がれる。

「セーのっ!!」

なのはの掛け声に心じるかのようにフェイトはバルディッシュを振り上げ、構える。

「サンダアアッ」

「デイバイイン」

それを確認しようとするせず、彼女もまたレイジングハートを構えて狙いをつける。

「レイジイッッ!!」

突き立てるように振り下ろされたバルディッシュから強雷は放たれ、

「バスタアアツツ！」

強く激しい一条の光が六つの水柱を撃ち抜く。
合わさり直撃するふたりの一撃に大気は震え海面は抉れ、
その余波で近くの海岸の岩場までをも吹き飛ばす。

「な、なんてデタラメな……」

その光景をどこか青ざめた顔で見詰めるユーノ。
いくら優れた素質を持つ魔導師ふたりの複合攻撃とはいえ、
ここまでの威力になるなど想定していなかった。

「ほんとすごいパワー。一撃で六つ全部封印しちゃってる」

ジュエルシードの封印状況を確認したシャマルは威力よりもそちら
に感心する。

「……………」

そんなふたりを尻目にアルフだけは不安げな顔で主を見詰めている。
この場に駆けつけ助力してくれたことには素直に感謝したい彼女だ
つたが、

自分たち以外は管理局に協力している立場の者たちだ。
フェイトが無事だったことに喜びたい反面、
それを臆面なく出せる状況だとはさすがに思えなかった。

「っ……」

余波が完全に収まり静けさを取り戻した海面から
封印が完了したジュエルシードが浮かびあがる。

なのはとフェイト、そしてコウキは別段とり急ぐ様子もなくゆっく
りとそこへ移動する。

「ひい、ふう、みい……よし、六つあるな。これでようやく全部
発見か」

六つのジュエルシードを囲むように並び浮いている三人。

コウキはわざわざ指でひとつひとつを差して数を確認すると、
わずかにジュエルシードから離れる。

結果ジュエルシード越しに向かい合う格好になったふたりは
互いをその宝石越しに見据える。

だが、その瞳に件の宝石は不思議と映っていない。

フェイトが見ていたのは何かに気付いたような顔をしている白い魔
導師で、

なのはが見ていたのは泣くのをこらえているような顔をする優しい
女の子だった。

同じ気持ちを分け合えること

寂しい気持ちも、悲しい気持ちも半分こにできること

ああ、そうだ

やっとわかった

私、この子と分け合いたいんだ

「友達に、なりたいんだ」

想いが自然と口に出る。

あれだけ悩んだことが顔を見ただけで答えが出てしまう。
気を利かせて距離をとっている少年の言葉通りの展開になのは思
わず笑みがこぼれる。

そして、この場にいる全員が驚きに固まっているフェイトの言葉を
待つように静まり返る。

なのははじつと答えを待ち、ユーノやシャマルはそれを見守ってい
る。

アルフだけが息を呑む。

なのはのあまりにも予想外の言葉に彼女は思ってしまったのだ。

いまのフェイトに必要なのは優しくかった母でも姉妹同然に育った自
分でもなく、

同じ目線で対等に接してくれる“友達”なのではないか、と。
だから彼女もまた静かに主の背を見詰めて待つ。

そうしてその静寂はフェイトが口を開くまで続くかのように、思わ
れた。

「えっ、きゃあっ!?!」

静寂を破る悲鳴。

突然後ろから引つ張られるように投げ飛ばされるのは。

一瞬天地が逆になった視界に入ったのはかの少年の後姿。

(え、コウキさん!?)

それを理解したときには、すでに彼はフェイトに肉迫していた。

「っ!」

向かい合っていたこともあり、

それを目の前で見ていた彼女は反射的にバルディッシュを向けたが、少年はそれごと押し出すかのように彼女を突き飛ばす。

勢いを殺せず体勢を崩した彼女は突き飛ばされた一瞬、彼の唇が何かを告げていたように見えた。

そして、崩れた体勢から見えた空で、何かが輝いた。

逃げる

言葉がようやく頭で再生される。

駆けつけたアルフが支えるより早く身体を起こすフェイト。

自分を突き飛ばした張本人はそのままの姿勢で「まいったな」と小さく呟くと苦笑を浮かべた。

嫌な予感がフェイトの背筋を一瞬より速く凍らせる。

だが、それはあまりにも遅すぎた。

高速機動を得意とする彼女ですらもう手遅れの距離と時間。

「っ！」

何かいわなければと口を開くが、胸の内の叫びが声になる前に

「コウキさんっ！」

誰かの悲鳴のような声すら引き裂いて、

轟音と共に無慈悲な雷が、彼の身体を無残にも貫いた。

第7話予告

ザフィーラ「届いたかと思えた言葉は雷に裂かれ、少女たちと主は傷ついてしまう」

ヴィータ「壊れていく想いと届かない気持ち。すれ違いが残酷な答えに行きつく」

ザフィーラ「そして止まり方を忘れた彼女たちの暴走が終わらない」

ヴィータ「でも、それを止める力と想いはもうそこにある…」

二人「次回、魔法少女リリカルなのは異伝・第7話『フリービートル機械仕掛けの想い』に」

ザフィーラ「リリカルマジカル頑張ります…」

ヴィータ「リリカルマジカル頑張れよ」

なのは「これが、最初で最後の全力勝負！」

第7話予告（後書き）

次は7話、
ではなく、オリジナル分の説明になります。
別にいいやって方は飛ばしてください。

魔法編（前書き）

一度書いてみたかったこういう解説！
読みたい需要があるかは、よくわかりませんが……（苦笑）

魔法編

オリジナル魔法解説

六話までに出てきたオリジナルの魔法を
物語の登場順で、魔法そのものとそれを使った意図や背景を説明し
ます。

ここで説明されていないものは原作に存在するものとほぼ同一であ
ります。

またここでいう「原作」とは魔法少女リリカルなのはシリーズすべ
てのこと。

「本編」とは私の二次創作話のことである。

（魔法の種別分けについては「[Nanoha Wiki](#)」を参照して
います）

『思念通話（精神リンク補助型）』 古代ベルカ式・補助魔法

原作にもある魔法だが、ここでは本編で最初に使われたときのみの
解説。

本編文にもあるように魔法がない世界の魔法を知らない主であるは
やてに対して

負担がないように騎士達が自分達と主との間ですでにある精神リン

クを

利用した少し特殊な思念通話。

これによってコウキともリンクがあることが判明する。

またコウキとはやての間にもリンクがあったため二人はいきなりこれを使いこなす。

実はそのために二人は以前から相手の考えている事や心情を何となくではあるが察していた。

すなわち最低でも同居を始めたぐらいには精神リンクがつながっていたとみるべきである。

ちなみにそれ以後ちゃんと魔法を習い始めるまではコウキとはやての間と

主たちと騎士たちの間での思念通話はこちらを使っていた。

『虚像投影』

古代ベルカ式・補助魔法

正確には通信補助の魔法で姿を立体的に映して会話するタイプの通信魔法。

本編ではこれをガラス（窓の前に置いた）に映し、また逆光を利用することで

フェイトにあたかも本人がそこにいるかのように思わせることに成功している。

コウキとしてはフェイトの注意を少しでも引ければよかったので、見抜かれてもその後の動きに支障はなかった。

『魔力弾』

古代ベルカ式・射撃魔法「直射弾」

名前のとおりの魔力で作られた弾丸。こぶし大ほどの大きさである。

罫であるため目立つように魔力はそれなりにこめられているが威力は弱め。

フェイトはこれをあらかじめセットされていたか、誘導弾ではないかと推測したが正解は前者。

現時点では誘導操作はコウキにとつて難易度が高い。

ちなみに古代ベルカ式とはあるが古代ベルカに実際あった魔法というわけではなく、

古代ベルカの術式で作られた単純な魔力の弾丸という意味である。似たようなものはあったかもしれないが、これ自体はコウキのオリジナルである。

『魔力系拘束』 古代ベルカ式・捕獲系魔法「バインド系」

コウキがフェイトを拘束するさいに使った魔法。

その場で作った（既知・既存魔法の融合）魔法であるため名称はつけられてない。

一見するとクラールヴィント・ペンダルフォルム時の魔力系を相手の体に巻きつけているだけに見えるが

実際はその魔力系にはバインド系の魔法がかけられておりその術式はかなり複雑。

通常のバインドブレイクでは破壊にかなりの時間を要する。

魔導師として未熟な彼が複雑な式のバインドを作れたのは

彼が感覚で魔法を使うタイプであるため。

本人のイメージとしては正しくコードを繋げるには知識がいるが複雑にするだけなら滅茶苦茶につなげればいい。というもの。

実際そんなことをすればそもそも正常に機能しないが、ちゃんと機能しているあたりが感覚で魔法を組むタイプの恐ろしさである。

フェイトの右腕だけが系から抜け出たりしたのは

右腕に対しての拘束と体全体の拘束を分離したから。

『スタンショック』 ミッドチルダ式・捕獲系魔法

高電圧を発生させ相手の神経網を強烈に刺激し一時的に体の制御を利かなくさせる魔法。

フェイトはそれに自分の魔力を大幅に上乘せすることで魔力系バインドを破壊している。

同時に自身に多大な魔力ダメージを受けた。

正確に分類するなら護身系の魔法で、本来はバルディッシュに内臓されている機能。

製作者であるリニスがその機能をつけた意図は高性能なデバイスであるバルディッシュの

奪取阻止とまだ幼く体格が小さいフェイトが罅迫り合いで押し負けたさいの対抗策。

彼女亡きあとはフェイトがそれを捕獲系魔法及び近接魔法にチューンした。

対魔導師戦では相手のバリアジャケット等に阻まれてしまったため麻痺効果は期待できないのだが激しい稲光による視覚効果で牽制効果は高く、

他の攻撃魔法と合わせやすいためフェイトの雷撃はほとんどスタン効果がプラスされている。

対コウキ戦において彼がまとう騎士甲冑が不完全であることを見抜いたフェイトによって使用されている。

ちなみにそちらのほうが本来の使い方である。

『騎士甲冑』 古代ベルカ式・防御魔法「フィールドタイプ」

これもまた原作にある魔法だがこちらはコウキが劇中始めて作成した甲冑だけをさす。

コウキのイメージを元にクラールヴィントが作ったのだが、イメージを尊重させすぎたせいか肌を覆っていない部位（頭・顔・両手のひら）の

防御フィールドがきちんと形成されなかった。

コウキがそこは何もつけていないので防御能力はない。

という無意識の思い込みすら甲冑に反映されてしまっている。

厳密にいうとただの失敗魔法である。

ちなみにそのデザインはその場の思いつきではなく

おぼろげな記憶の中にあるものを元にした。

しかしおぼろげ過ぎてイメージが中途半端だったせいで手袋等を忘れてしまう。

オリジナルと比べて軽装甲な甲冑になってしまっている。

『アイスプラスト』 ミッドチルダ式・射撃魔法「誘導操作弾」

人間サイズの氷塊を作りそれを砕いて出来た大小無数の氷塊を目標に降り注がせる魔法。

コウキがその場の状況に合わせた改変を行ったため砕けた氷の鋭さとは裏腹に

攻撃性は低く威嚇や牽制用にチューンされている。

本来は僅かながら誘導性能を持つ攻撃魔法だが、

コウキの現段階の能力ではまっすぐ飛ばすだけで実は精一杯。

氷塊作成及び「砕く」という動作が必要なため発射するために時間がかかるのがネック。

さらに魔力変換資質「凍結」を持たず氷結系を習得していないコウ

キはさらに発動が遅い。

しかし本編では氷塊を壁にして防御に使い、砕く動作の半分をフェイトにやらせたことで

そのタイムラグを誤魔化すことに成功している。

発展系に空気中の水分を凍結させ巨大な氷塊を作りそれを無数に砕いて

目標範囲に降り注がせる広域攻撃魔法もある。

『インパルスエッジ』 ミッドチルダ式・近接魔法「魔力斬撃」

デバイス（本編ではジュエルシードの力で作られた擬似デバイス）にバリア貫通能力と爆発機能を持たせた魔力刃を作りだす魔法。

標的に対して斬り込んだ後、刃そのものが爆発するため斬撃と爆発という別種類のダメージを同時に目標に与えられる。

この時の爆破の度合いは込めた魔力量で決まる。

しかし爆破後は失われた魔力刃を再び形成しなくてはいけない。

爆破のタイミングは自動ではなく術者の任意による。

本編では斬ることやバリア貫通のみに使われたのは

意図的に爆発機能を使用しなかったからである。

ちなみに刀身は短く杖の先端から真っ直ぐに伸びているため全体的に杖というより槍のようにも見える。

『ジェットエッジ』 ミッドチルダ式・射撃魔法「高速直射弾」

インパルスエッジに付随する魔法。

上記魔法使用時に魔力刃の一部を限定的に爆破することで

ジェット噴射の要領で発射する。
またインパルスエッジをそのまま発射しているので
目標にヒットしたさい爆破することも可能。
発射速度は速いが、軌道が一直線で誘導はできない。
これまた本編では爆破されず真っ直ぐな軌道を読まれてバルディッ
シュに弾かれている。

『ブレイズショット』 ミッドチルダ式・射撃魔法「高速直射弾」
熱量を伴った魔力弾。

必要魔力が少なく発射速度が早いため撃ち合い時に
手数を増やすために乱発するのが基本の運用方法。

本編では威嚇・牽制に一発だけ放たれたため威力は本来よりさらに
低いものであった。

そのためバルディッシュ単体で張ったディフィンサーに防がれる。
クロノの使うブレイズキャノンの下位魔法もしくは簡易版ともいえ
る。

『サンダーレイジ++ (ダブルプラス)』 ミッドチルダ式・砲撃
魔法「直射型」

フェイトが放った広域攻撃魔法のサンダーレイジをジュエルシード
で吸収し、

次元エネルギーを上乗せした状態で撃ち返したもの。

正確には魔法というよりただのエネルギー放出に近いものがあり
ジュエルシードの力を受けて威力は単純に倍増していたが

非殺傷設定がかけられなかったため発射する前に
コウキはフェイトに避けるように言っている。
その後空を裂いたこれは封時結界を貫通し通信阻害フィールドも破
壊するが

これは彼の意図するものではなく偶然である。

元々これを放ったのもジュエルシードには

吸収したサンダーレイジ分の魔力を収容できる容量がなかったため。
一時的に長大な刀身状にしたがそれでも不安定で
暴発を防ぐため放出せざるを得なかっただけである。

『変身魔法』 古代ベルカ式・補助魔法

原作において話にあがった程度で実際に使われなかった魔法なため
彼女たちがどこまでの変身が可能なのかは不明であるが、
本編では動物に変身することが可能ということにしてある。

（そのためユーノが使っていたトランスフォームのほうに近い）
本編ではあまり語られていないので便宜上ここで説明する。

名前の通りの見た目の姿を変える魔法。

原作での会話から、外見の誤魔化し目的だったようだ。

とくに、成長しない彼女たちを不自然に思わせないために
海鳴市に戻るたびに描かれていないところで何度か使われていたも
よう。

もっとも、一番幼い外見のヴィータを除き、

シヤマルやシグナムは服装と髪型をいじる程度だったようだ。

（それが魔法を使ってなのか単純なおしゃれの範疇だったかは不明）

守護騎士たちが覚えている範囲での管理局との関わりから、

守護獣形態のザフィーラ以外は顔がわれている可能性が高かった。また同じ協力者であるなのはとユーノに素顔を見せてしまっていたために
外見を変化させるだけではかえって懸念を抱かせることになるかと判断。

ザフィーラ以外を置いていくことも提案されたが
残りの彼女たちが強く反対したこともあり全員を守護獣として常に動物形態だけで過ごすことが選択された。

慣れない身体とデバイスが使えない（シグナムとヴィータ）という状況のため

戦闘能力はかなり低くなっているものの防御の硬さと一撃の威力という点では

並の魔導師程度では相手にならない。

『ロートメツサー』 古代ベルカ式・射撃魔法「誘導操作弾」

直訳すると紅いナイフ。

原作にあるブラッディダガー（ブルーティガードルヒ）と同種の魔法。

誘導操作可能の実体剣を生み出して放つ。

遠隔設置も可能だが、術者から離れるほどその精度と操作性は落ちる。

またその威力は見た目の鋭さとは違って高くなく、
ジャケットの上からでは効果は薄くその弾速は見切れないほどではない。

しかし実体化しているため物理的な殺傷性はあり（はやては常に非殺傷設定をかけている）

魔法的な防御機能のないものにたいしては高い攻撃力がある。

劇中でははやてがフェイトとアルフに向けてそれぞれ一本ずつ放っているが

本来は複数を同時設置して一気に放つのが本来の使い方だが、この時はやては隙を作る意味合いで使用しているため一発ずつだった。

またこの時点のはやてとそのデバイスでは同時に12発までしか設置できず、

またそのすべてを設置した場合操作精度は極端に落ちる。

ちなみに享受したのはコウキで物理的な危険性は非殺傷設定で消すことができ、

発動が楽であるため教えたとと思われる。

『ヴィルヴェルヴィント』 古代ベルカ式・射撃魔法「誘導操作弾」

魔力で作りに出されたつむじ風（本物の風ではない）を発生させる魔法。

魔法で発生させた風であるため術者による操作が可能。

劇中において二発同時に放っているように見えるが、生み出した風を二つに分けたものであり実質一発。

地面を抉るほどの威力を見せたが相手が避ける事を見越しての非殺傷設定の解除である。

『サテライトレイ』 ミッドチルダ式・広域攻撃魔法

魔力を込めた光球を浮かべて指定範囲内に魔力が尽きるまで無差別に砲撃する魔法。

雨や霰のように降り注ぐ魔力弾は小さく、威力も貧弱だが、込めた魔力量によつては数万、数億という数で降ってくるため範囲内にいた場合、回避することは事実上不可能である。

シールドやバリアで防御するさいも数によつて徐々に魔力を消耗していく。

対象範囲内にいる対象の動きを止める、あるいは魔力を削る目的の魔法。

『チエーンバインド』 古代ベルカ式・捕獲系魔法「バインド系」

原作でも使われている魔法だが、術式が違つたためこちらで説明する。本編では一瞬しか描写はないがジュエルシードのエネルギーの渦に對して

ユーノと一緒にこれを使つて縛り付けている。

本来ミッド式である魔法をベルカの術式で動かしているだけに効力が十全といえない状態なのだが、

ユーノのそれと劣らないのはシャルの技量の高さゆえである。彼女がこれを使える理由は守護騎士たちはザフィーラを除いてその能力や活動に大きく制限がかかつているため、

シャルは自身のサポート能力をさらにあげようと同じ系統の術者である

ユーノからミッド式の魔法をいくつか学んでいたのである。

とくに捕獲系はベルカ式では少ないため熱心に学んでいた。

魔法編（後書き）

というわけでここまで。

以後、ある程度オリジナルが出てくれば、それはそれで後でまとめる予定。

主人公編

主人公紹介。

いやほんとは他キャラの原作との違いも一緒に出そうと思っていたが長くなってしまふのと、内容が違うために分けます。

ネタバレはないがどっちかというと裏設定的なもの多い？

『日野コウキ』

この物語における“もう一人の闇の書の主”である。

来歴。

7年前に両親を失い、その後親戚中をたらいまわしにされたあげくどこかの施設に送られかけるが父の友人だったという人からの援助で元々両親と住んでいた家で生活することができるようになる。

ただしその条件として似たような境遇の八神はやたと同居することに。

そして15歳の誕生日にはやたと一緒に闇の書の主としての第一段階の覚醒をはたす。

高町家とは幼い時からの家族ぐるみの付き合いだったが

高町士郎が大怪我したことに責任を感じて会うのが気まづくなり疎

遠になる。

(なのとはだけはその後しばらく交遊はあった)

海鳴市に戻ってきてからも無意識に避けていたために会うことはなかった。

ちなみに年齢的に中学に通っていないとおかしいのだが、ある事情から通っていない。

性格

基本大らかで優しく、自分が困ってしまうほど面倒見がよい。

しかし、そんなことをしている自分をどこか客観的に、

そして冷ややかに見ている面もあるせいか自身の性格について自分でよく解っていない。

悩みや苦しみを一人で抱え込み、それを隠し通せる強い意志を持つ。ただ妙な方向性に正義感が強すぎる面があり非道や悪に過剰反応してしまう。

その反面、自らの目的のためなら自分で許せる範囲でだが、手段を選ばないしたたかで用意周到な面もある。

そのくせ「生き方が下手くそ」で自分の事に関しては不器用さがより際立つ。

女性に対してはかなりの初心ウラなのだが経験がないからというよりは性格的な初心。

仮にこれからめちゃくちや女性経験を重ねても基本初心。

周囲の女性たちから向けられる好意には勘付いているが気付いていないフリをしている。

フラグを立ててしまうのはほぼ無意識なのだが、向けられる想いには敏感なタイプ。

名前の由来。

原作のルール(?)に則り、車(広義では乗り物)関係から。トヨタが開発し日野自動車で製造された陸上自衛隊の人員輸送用車両「高機動車」から。

ウィキペディア情報ではあるが防衛省からの愛称は「疾風^{はやて}」であり部隊内からは「高機^{コウキ}」と呼ばれていることから。

はやて(本来の闇の書の主)との関連を考えてこういう風に名づけました。

物語的には、何故「コウキ」になったかといえば、

彼に名前をつけるさい父親が『光輝』というまんまな漢字をあてた名前を考えたのを

母親が大却下。名字の日野と合わせると「日野光輝」となり

「日の光り輝く」と読める冗談みたいな名前になるのが理由。

しかしコウキという響きを気に入っていた父は折れず、

結果、間をとって、カタカナ表記のコウキになった。という。

ちなみにこういう経緯なせいか母親は生前一度も息子を「コウキ」と呼んだことはない。

略称やちゃん付けで呼んでいたらしく、実はその呼び方にコウキは非常に弱い。

彼がシャマルに妙に弱いのもこれが一因である。

外見。

劇中で何度か表記しているが黒髪黒目のわかりやすい日本人。

ただ実年齢15歳にくらべ肉体の成長は早熟で外見だけを見れば17〜20歳ぐらいに見える。

ちなみに身長はほぼ高町家の長男さんと同じほど。若干コウキが低い。

体格にいたっても彼によく似ている。

権限。

はやてと分割する形で闇の書のマスター権限を持っているが、半々ではなく彼が4分の1程度持っている。

しかし闇の書や騎士たちとの精神リンクははやてより強く深い。

戦闘能力

魔導師や騎士としての才覚は微妙なレベル。

デバイスがないと念話以外ろくに使えないほど低レベル。

ただしジャンルを問わずデバイスとは相性がよく、

デバイスさえあればたいいのことはできる。

とはいえ、感覚で魔法を組むタイプなので時々おかしな失敗もする。

またデバイス以外にもロストロギア関連とも相性がいらしく

ジュエルシードを完全制御するなど一流魔導師でも難しいことを

“無意識”でやってのける。

しかしどうしてそういう「特技」があるのかは不明で、

意識すると精度が落ちてしまうなど妙な欠点もある。

際立った得意ジャンルはないが、目立った短所もないバランス型。

とはいえ数値でみるとあまり高くない器用貧乏。

どう考えても指揮官（戦略家）気質なので能力的に前に出るタイプではない。

（設定を考えているうちにこいつチートじゃねえか、と思って書いていたら

思ったほど戦闘で役に立たないスキルばかり強力だったというオチ）

それを勢いと奇策、ついでに主人公補正で誤魔化している。

のだが、それでも一級クラスの相手だと少しの間互角に戦うのが限界。

戦闘以外の能力について。

料理についてはまるではやてより上のような描写があるが、不特定多数に出すならはやて。よく知っている相手ならコウキのほうそれぞれ美味しい。
その他の家事はそれなり。

叱り方。

軽く人を叱る時は額をデコピンする。

本気で叱るときは平手打ちが飛んでくる。

そのうえで同じ奴を同じ理由で叱るときは拳骨。

ちなみに三度目以降は無視らしい。

意外に日野家は体罰主義なのだ。

口で言っただけわかんない奴には体に教えてる！なのである。

行動理由

両親を失った事件とその後の境遇がすべての原因。

この時に自分を守るためにした“後ろ向きな”誓いが、

結局彼の生き方を決めてしまい騒動に首を突っ込む性格を形成してしまっている。

主人公編（後書き）

自分で作ったキャラだけど、

ここまで長く書かないと一通りの説明もできないほど説明しづらいキャラ。

短くまとめている人はすごいです。

人物編（前書き）

キャラによって文章量に差があるのは
単純な出番と、どれだけ原作と違うのか、の差であります。

人物編

前話と違って今回は

原作との『違い』に焦点を当てています。

とくになにもいっていない点は原作通り、あるいは本編で説明済みと思ってください。

八神はやて

方言。

今更ながら謝罪。

私は方言にまったく詳しくないので、非常に台詞を文章にしづらい。A・S本編を何度も見て、耳から聞いた音から、推測して書いていますが、

はやては演じた（台本を手直した）植田佳奈さん曰く

「ちょっと柔らかかめの京都よりの関西弁」なので余計に俺の知識がないので

ところどころおかしな表現があるかもしれないが見逃してほしい。ちなみに一人称が公式と少し違って「あたし」なのは意図的なこと。

車椅子。

原作通り車椅子の少女なのだが足が不自由な理由は違い、

過去に遭遇した事故の傷という設定。

そのさい両親を亡くして天涯孤独の身となる。

当初、それゆえに将来を儚んでリハビリを真面目にしていなかった。そして現在もコウキの世話が必要な子でいるためにちゃんとしているとはいえない状態。

性格。

コウキという自分のことに関して不器用でへたくそな人間がそばにずっといたせいか彼に対して「何かしてあげたい」感情が強い。

彼をからかうことに妙な執念を燃やしていたり、逆セクハラ的な発言も

彼を楽しませようという意味合いが強い（本人が楽しんでいるのも間違いないが）

原作通りの優しさや暖かみといった母性もあるが、その反面、判断基準をコウキに置き過ぎている所があり、

彼さえ無事なら他の何がどうなってもかまわない的な感情が強い。

そのへんは原作でいうはやてに救われたヴォルケンたちに近いものがある。

とはいえ『人殺しだけはしない』と誓ってた彼女たちと比べると物騒さでは勝っている。

そういったこともあり腹黒っぽいがその深層意識には

「好きな人の力になりたい」という純粹で暴走しやすい厄介な想いと年相応のもろさを併せ持っている。

念のため言うておくが、ヤンデレではないし、ならない。

魔法関連。

苦も無く魔法を行使できるのは闇の書関連の魔力負担をコウキがしているため。

魔力量はフェイトやなのはより膨大だが、細かい調整は現時点では

苦手。

しかしそういつていられない状況（魔力量に耐えられるデバイスがない）なため

徐々にできるようにはなっている。

魔導師（魔導騎士）としては原作通りの広域、遠隔を得意とする支援攻撃型。

コウキと比べて戦略家というよりは戦術家。

前線部隊を後方からサポートしながら指揮するのに向いている。

事件に対して。

ジュエルシード事件に関わったのはコウキが関わるからだけであつたのだが、

フェイトと直接対峙して「これはほつといたらあかん」と考え直している。

とはいえ彼女への説得はなのはとコウキの役目と考えているため積極的に動く事はない。

高町なのは

言葉使い。

少し違い、より大人びた感じにしたと思つてほしい。

ただでさえ大人顔負けの言動のなのはだがこのお話の中ではそれがより強い。

またそうなつてしまった原因がコウキの影響を受け過ぎたことにある。

ただ、突然のことには弱いようでそのさいは年相応（？）の驚きの

声をあげる。

(イメージ的にはココさくらっぽく)

幼少期。

家族が大変だった時期になにもできなかったことの無力感はその後のコウキに対しての後悔と無力感と合わさってしまった。それが現在の彼女を作る要因になっているため、当時のなのはと現在のなのは微妙に性格が違う。

性格。

基本変わりはないが、天然度はあがっている気がする。

描写されていない原作イベント。

細かく読んでいただけると解るかもしれませんが、日にちが若干早まっただけでコウキと再会するまでのことは全部第一期の原作アニメ通りのことが起こっています。話数で表現するなら7話途中まではだいたい同じ。

単純にクロノが割り込んでくる場所が本編の場所に変わったただけなのだ。

他キャラとの関わり。

フェイトとのこと、コウキのことに比重が置かれているので原作ほどユーノやレイジングハートとの絡みがない。

ただし描かれていないだけでそれなりに会話はしている。

ヴォルケンたちの本来の姿をすでに知っているのに、事件中ヴォルケンが守護獣形態ですつといることに関しては魔力消耗を抑えるため、

とかいうもつともらしい説明を受けていたため疑問には思っていない。

むしろ動物の姿なのでヴィータとかと気軽にじゃれられると喜んで

いる。
はやてに対してはライバルというより同じ相手を想う同志のような関係。

フェイト・テストロッサ

作者的にはあまり原作と変化は今のところない、と思う。

コウキとの出会いの影響。

彼の言葉や平手打ちには存外かなり動揺している。

実のところ隠れ家での議論でアルフが意見を引かなかったのはその影響が使い魔である彼女に出たためだったりもする。ちなみにそのあとのフェイトの嘘もそういうことである。

それでもフェイト一筋のなのは比べ、コウキは事件全体を見ているため

実質のところ彼女の心に近い位置にいるのはなのはの方。

余談だが、六話終了時点でまだ彼女のフラグは立っていない。

守護騎士ヴォルケンリッター

覚醒時期。

原作より目覚めが早い。およそ半年くらい。

はやての誕生日ではなくコウキの誕生日に現れる。

マスター権限が強いはやてとリンクの繋がりが深いコウキ。を暫定

的に両方とも主と認定する。
もっとも当人たちは共に暮らすうちに気にならなくなっている。

日野家

原作でいう八神家の意味合い。

家主は一応コウキのためそういう名前になる。

ヴォルケンと???、はやてとコウキの7人家族。

いまのところは、ね。

ザフィーラ

立ち位置。

原作では寡黙で八神家のペット的な存在の彼だが、
日野家の男性数を補うために普段から獣人形態（耳・尻尾なし）で
過ごしている。

寡黙であったがコウキと一緒にいることが多いため、
話に付き合うつうちに、前から比べるとかなりのおしゃべりになって
いる。

一人称。

コウキやはやてがかしこまった喋り方を嫌ったため「俺」で固定。

守護獣形態。

になるのはそれを求められた場合のみで、

家の中ではふさふさの毛が気持ちいいとはやてやコウキはわりと気
軽に頼んでいる。

シヤマル

立ち位置。

相変わらずのヴォルケンのムードメーカー。

コウキやはやてへの魔法の指導とご近所への応対を任されている。

料理。

やっぱりちよっぴり微妙（二次創作にありがちなひどいものではない）

それ関連ではシグナムと少し対立がある。

コウキに対して。

はやてとタッグを組んでのコウキへの逆セクハラはあれで手加減してるつもり。

日野家の中でははやてに次いで、コウキさえよければいいという感情が強い。

コウキに対してひどい行いをした者に対しては、恐ろしく冷たく微笑み、

その笑みだけで相手を怯えさせ、ごめんなさいさせる。

同胞によるとかつて戦場で見せたものより数段恐いらしい。

シグナムとはコウキに関してはライバルという認識が強く、

見た目の年齢が近いこともあり自分より優れたプロポーションを持つ彼女と何かと張り合う。

変身形態。

守護獣と偽装するための変身姿として小鳥を選んだのは

サポート役というのもあるが実際はこれなら堂々とコウキの肩や頭に乗れるからである。

シグナム

立ち位置。

役割的に八神家のお父さんの存在になつていたシグナムではあるがその位置にザフィーラないしコウキがいるのとコウキが当初から女性として扱うため、

知らないうちに自分でも知らなかった自らの女性的な部分を引き出されている。

とはいえまだそういった部分に気恥ずかしさがあるので、

自身の「女」を使ってコウキとスキンシップを図るシャマルとは、

料理のこともあつて嫉妬のような感情での対立を日々起こしている。

食事。

S t s 放送終了後の某雑誌付録ドラマCDによると。

八神家の面々で食べることを重視しているらしいが、

このお話の中では、和食と和菓子が好物になっている。

呼び方。

主たちに対して「主 」 」という呼び方しかできないのがちよっ

とした悩み。

とはいえ一人のときは呼べているので単に気恥ずかしいだけのもよ
う。

変身形態。

変身後があれなのは戦いの利便性を考えすぎたせいである。

それでも戦いづらいのであまり気に入ってはいない。

とは表向きで、もっと愛くるしい見た目にすればよかった、と。

わりと乙女チックな理由で落ち込んでいたりする。

V S フェイト。

出来れば後々のこともありフェイトともっとからませたかったが、力量不足である。

主であるコウキが助けたいと願っている少女だけに余計なことではきかない、と

好敵手たりえるとは思っているが現時点では積極的に関わろうとしていない。

ヴィータ

立ち位置。

八神家末っ子の彼女は実のところ日野家では一番の常識人。

シャマルが騒動を起こしシグナムが叱責しケンカとなりザフィーラが止めるが返り討ち。

それをはやてはニコニコと見ている横でコウキが頭を抱える。

というお決まりのパターンを観察していることが多い。

最初は単純に入り込めなかつただけだったりするのだが、

徐々に一人くらい冷静な奴が必要だ。と傍観者の立ち位置に身を置く。

変身形態。

変身後の姿でいいのが浮かばなかったので、

主ふたりから送られたウサギのぬいぐるみを参考に「ウサギのような生物」の姿で落ち着く。

が、後に動きづらいことに気付くが後の祭り。

戦闘からは遠ざかり、もっぱらはやてのボディガードである。

V Sなのは。

ジユエルシード事件中のなのはは

フエイトに意識が向き過ぎているので他キャラとからませづらい。描いていないだけで裏でなのはウサギヴィータをもふもふしている。

ヴィータは嫌がっているが、天然全開のなのはには通じない。

???

名前。

この時点では名前は無いのでこういう表記。

まあ原作ファンは間違いなく誰か解るキャラですが一応。

出会い。

初登場時すでにコウキと面識があったが、作中時間でいうならばプロローグの最後の時点でコウキとは会っている。

もっともコウキが彼女の存在を知ったのは守護騎士が目覚めて約一か月後。

2月になる直前あたりである。それから時々夢という形で何度か会っている。

はやても会っているのだがはやては原作通りそれを無意識下でしか覚えていない。

まだ名前はないが夢で三人がそろった時ははやてがコウキに考えさせることを無理矢理決めた。

とはいってもコウキは自分のネーミングセンスをかなり疑っており、難儀している。

初登場時の彼女に「名前はまだ決まっていな」といっていたのはそういうこと。

いろんな資料やら見て考えてはいる。現時点で10個ぐらいまで敵

選しているらしいが

これ、という決め手がないために未だ命名はされていない。

繋がりに。

コウキがかなり深く彼女と繋がっているために互いに頭の中は覗かれ放題。

意識して見ないようにしてるが会っている時は強制的に流れ込んでくるのでどうしようもない。

ナゾ。

本来なら400ページほど蒐集したのちに主の承認がないと現れなはずだが、

なぜか11年前からずっと意識だけは完璧に目覚めており、

主を守ること限定だが魔法の行使も実は少しできる。ただし実体化はできない。

ずっと見守っていたためにコウキの抱え込んでいる秘密をすべて知っている立場にあり、

コウキが“企んでいる”ことも当然知っている。

だが何故『主がふたり選ばれたのか』を代表する「物語のナゾ」については何も知らない。

デバイスたち

まず出番が激減したRHさんにごめんと謝っておく。多分このあとも少ない。

バルディツシユはコウキにかっこいい名前といわれて喜んでいたり、そのあと怒鳴られたことにはかなりショックを受けていたりする。

そのため原作以上に独自判断行動が増えていく（予定）

ヴォルケンたちのデバイスは当初ジュエルシード事件中の
コウキのメイン武装になる予定だったのだけど（フェイトとの初戦
でのあれこれは前フリだった）

わざわざみんな守護獣の格好させてまで隠蔽しているのに、
そのデバイスはためらいなく使うのはどうなのよ？

と思い直して、クラールヴィント以外は出番なしに。

一つだけならまだしも三つ全部だと疑われる可能性がある、ってい
う理由。

本当はアイゼンでサンダーレイジ（プレシア）を打ち返すとか、
連結刃モードのレヴァンティンで敵の魔法を弾くとか。

アームドデバイス三種同時使用。

とか考えていたのだけど、なくなってお蔵入りに。
ごめんよ。

ちなみにこのお話の中でのアームドデバイスたちの立ち位置は
担い手であるシグナムたちを『相棒（戦友）』コウキやはやてを『
マスター』と考えている。

リンディ・ハラオウン

性格・立ち位置。

立ち位置は登場こそ遅いが重要な役目を持つメインヒロイン。

そして原作より指揮官・策士としての面を強調している。つまり。

で、思考の仕方がコウキとそっくりなため???とは違った意味で、
しかも一方的に考えを読まれてしまう相手。

そのため悪巧み方面において絶対に勝てない。

たぶんガチンコの魔法勝負でも勝てる可能性は低い。

性格が違うように思われるかもしれないが、俺の中ではずっとこういうイメージでした。

最近見返して、違うような気がして「あれ？」となる。

もしかしたら別の久川綾さんキャラと混じったかもしれないが、どのみちリンディは内面の気持ちを外に出ていたかが

判断しづらいキャラだったので、俺はこういう面もあったと推測している。

VSコウキ

コウキに対する態度がああなのは、頭を使っている（悪巧みしてる）コウキより

それを一刀両断されたときに見せる抜けた表情のほうが好きを持っているから。

ちなみにそれとは別に初対面時のやりとりが本人曰く「大人げなかった」ことになったのは

一種の同属嫌悪みたいなものに近い。

それもあって、言動のシンクロについては若干気恥ずかしらしい。

クロノ・ハラオウン

トラウマ。

原作より強くあの事件の傷を引きずっている。

ただコウキにつっかかるのはそれとは別の理由。

しかも本人は彼だけに強く当たっていることに気付いていなかったりもする。

他キャラとの交流。

コウキに絡む役のためか、彼と他キャラの交流が減った。（もともと多くなかったのに）

繰り返すがあくまで描写の関係であり、はやてやなのは、ユーノなどもそれなりに交流している。

ヴォルケンたちは（彼女たちの方が）不自然にならない範囲で距離をとっている。

ユーノ・スクライア

謝罪。

ごめん、キミの出番すつごく少ない。

いやね、まさかキミとコウキの役割が被るとは夢にも思ってなかったもので。

一応いくつかエピソード考えたのだけど、なぜかいつもカット対象の一番手にいる。

やっぱりどう考えてもこいつ、ジュエルシードの発見とレイジングハートをなのはに渡した時点で

役割のほぼ8割終えてんだよな。とくにこの話の中では。

なのはやくロノとの絡みは全部コウキにもっていかれちゃったし。

実のところ6話でのちょこっとした出番も、少ないことに気付いて慌てて出したもの。

本来の予定で彼は原作のように積極的ではなく、

コウキに無理やり連れて行かれる形で転送されるはずだった。

これからの出番は筆者も不思議に思うほど予定にない。

下手したら、このあとに控えているA・S編に出てこない可能性も……。

「i f」

謝っておいてなんだけど、出さない方向性もありだったかな、とたまに思う。

ジユエルシードの化け物に襲われるのは。

それを察知したコウキたちに助けられ、ついでに魔導師としての素質も気付いて

ヴォルケンたちを師匠にはやてと一緒に魔法学ぶとかさ。

やべえ、こっちのほうが面白かったかも。

RHどうするのかった？

シグナムたちが個人転送でいける範囲の次元世界で探してきたデバイスってことにすればいいよ。

あれ、本当にユーノいらねえ？

……うん、もう一回謝っておこう。

ごめん、ユーノ。

語るキズアト（前書き）

更新再開です！

ちなみに七話タイトルのブービートラップは「まぬけ…booby」
「がひっかかる罠」。

という意味でなく、まぬけな罠、という意味です。

何度も出会って触れ合っているのに

わたしたちはまだ何も分かりあえていない

答えを聞きたいから

分け合いたいから

でも、そう思ったのは

そんな顔が見たかったからじゃない

私が笑顔にしてみせるなんて偉そうなことはいえない

でも、見てみたいんだ。

知りたいんだ

そのためならぶつかり合うことだってきつと無駄じゃない

迷いを振り切って撃ち抜いてみせる

そして、必ず届けてみせる

胸に宿った自分の魔法をただ信じて

光に目を、音に耳を奪われたのはほんの一瞬。

いいえ、もしかしたら一瞬も奪われてはいなかったかもしれない。だって私の意識がとらえていたのは肩を支えてくれるアルフでもなく、

“ソレ”越しに叫んだあの白い子でもなくて、私の目の前で、私が受けるはずだった雷を代わりに受けた男の人だけだったのだから。

「あ……」

小さなうめきと共に彼の意識が途絶える瞬間を目撃する。それに呼応してか。武装局員のに似せたBJが砕け散る。

「っ！」

思わず、落下しそうになったその人を抱きとめる。

体格の差はあっても人ひとりを支えられないほど消耗してなんかない。

ただ見たくなかった。

自分をかばって傷つく人なんて、見たくなかったのに。

「……………っ!？」

だから『どうして?』と訊ねそうになった私はけれど、その言葉が出てこなかった。

「え……なに、それ……」

彼の肩越しに見るあの子も驚愕の顔を見せる。

それがまるで自分のことのように痛みを訴えている瞳は今にも泣き出しそうだった。

「っ、なんてひどい傷跡……まさかあんだ?」

意識を失っている彼に問いかけるように、けれど視線を私に向けているアルフの言葉がすべてだった。

B Jが碎けて上半身が生まれたままの姿になったその体には無数の傷跡。

それだけだったなら、私もアルフもここまで動揺しなかったかもしれない。

つい最近ついたものだったなら、今の雷で、とも思ったかもしれない。

だけど“私たち”はそのキズの本当の意味を理解してしまった。出来てしまった。

だって、どのキズにも見覚えがある。

中には私が記憶しているものよりひどいものもある多種多様の古い傷跡。

それがあまりにも“見慣れ過ぎた傷”だったから、私の頭は一瞬で真っ白になった。

『ぶざけるんじゃないこの戯けっ!…!』

『……フェイ、ト…間違うな、そのやり方はだめだ』

『だめ、なんだそれは……かならず失敗して、とりかえしのつかないことに…』

だからなのか。

あのと時の言葉が次々と蘇ってきて今更な疑問を呼ぶ。

なぜ、あの人はあそこまで怒ったの？

なぜ、あんなになるまで必死に私を止めようとしたの？

なぜ、失敗すると言い切れたの？

答えが目の前に、

私の腕の中にいた。

「……私と、同じことを？」

あの時、戦いになる前この人は私になんて言った？

自分さえ我慢すれば、自分さえ頑張ればどうにかなる。

そんな甘い考えは捨てるよ、そういわなかった？

そんなことが言えるのは実際に我慢して頑張っていたことのある人だけ。

それにそうでもなければ、納得できない。

だって私自身でさえ気付いてなかったのに、

その不安を言い当てられるなんてことがあるわけない。

なら、これが結果なの？

この人が取り返しの付かないところまで行ってしまっただけに。

他人の私にあれほどまでに必死になってしまっただけに悲惨な結末が

「　　っ、うそ、そんな、そんなこと…」

信じられない。

信じたくない。

想いが口から零れ落ちていく。

だけどその声が自分で驚いてしまっただけ、震えている。

「そんなわけない……きっと、きっと母さんは……っ!？」

唸るような音に見上げた空で、見慣れた稲光が瞬く。

「ああ…」

それを見た瞬間。

それが誰を狙っているのか理解できてしまった瞬間。

私の中の何かが　誰かが　悲鳴をあげた。

「だ、だめっ母さんっやめて……やめてえええっ!?!」

「っ、フエイトっ!？」

腕の中の彼をアルフに託して、飛び上がったのと暗雲から雷が落ちたのはほぼ同時。

『Arc Saber.』

いつもは絶対やらない無茶なやりかたで最速で最大まで魔力を注いで作った魔力刃。

私は何の躊躇も迷いもなく、それを母の魔法にぶつけていた。

威力に桁違いの差がある以上、拮抗や対消滅なんて望めないのは分かっていた。

『Saber Blast.』

だから刃に圧縮させていた魔力を爆発させて、雷を強引に吹き飛ばす。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

息が荒い。

無茶だったけどそんなに難しいことはしていない。

あの子からもらった魔力もまだ残ってる。

けど、息が荒くなつて肩で呼吸している自分がいる。

してしまつたあとで、急に身体が震えてしまう。

だけ。

「違つっ………こんな違つっ!!」

何が違うのかわからず。

誰に向けた言葉なのかさえわからず。

けど気付けば私は声を張り上げて叫んでいた。

だって、胸の一番奥で誰かが叫んでるんだ。“こんなのは違つ”って。

だから空を、その先にいる母さんを睨みつけた。
さらなる雷があってもすぐに迎撃できるように。
これ以上絶対に彼の身体にキズなどつけさせない意志を込めて。

だってあれは、私を狙っていないかった。間違いなく彼を狙ってた。
彼に当たれば抱きとめていた私にも直撃しただろうけど、
そんなことは関係なく、あれは彼を狙ってた。

息が荒い。

頭に上った血が下がらない。

自分が珍しく憤っていることを感じながら、
それを抑えられない。抑えようとさえ、思わない。

「…母さん、あの人はただ私を庇ってくれただけだよ」

だっていうのに、口からはびっくりするぐらい落ち着いた声が出る。
気付けば私は諭すかのような口調でここにはいない母さんに語りかけていた。

「私を止めたいなら、他にいくらだって方法はあったのにそれをしてないでいてくれた……」

あの傷を見せればきっと私を止められるとわかっていたのに、
私が傷つくと思ってそれを隠していてくれたんだ。
そんな人にこれ以上、傷を増やしてほしくない。
それに。

「そんな優しい人を母さんは傷つけちゃだめだよ」

この数年、私を除けば母さんは決して誰かを傷つけたことはない。

誰かを傷つけてきなさいと私に頼んだこともない。でもその線を越えてしまったら、もう母さんはあの頃の母さんに戻れなくなる。

不思議とそんな確信があった。だから。

「それでも……母さんがやるっていうなら、私はっ！」

バルディッシュを暗雲に向ける。

私には次元を跳躍しての攻撃なんかできない。

あれは時の庭園のエネルギーを自身の魔力として運用できる母さんだからできること。

だからこの行為に本当なら意味は無い。あるとすれば単なる意思表示。

デバイスを向けるという明確で、はっきりとした母さんへの反抗。

「っ、フエイト……」

後ろでアルフが絶句しているのを感じる。

当然だと思う。

私が母さんに反抗したのなんてこれが初めて。

自分でもびっくりで、正直何がなんだかわからない。

だから、だろうか。

バルディッシュを握る手が、震えて止まらない。

母さんからどんな言葉が出てくるか。

どんな攻撃がやってくるのか。

想像するだけで、震えが止まってくれない。

だから、その可能性だけは全く考えていなかったんだ

軽い背中（前書き）

巻き戻しの過去回想って、なにさ？

行間は想像にお任せします。

軽い背中

「はじめまして……八神はやていいます」

「一緒に暮らしてほしい子がいるんだが、いいかな？」

「石田幸恵よ、こんにちは。一緒にがんばりましょう」

「昔の家でまた暮らさないかい？」

「私はグレアム、君のお父さんにはよくしてもらっていたんだ」

・・・

「気味の悪い子だよ、泣きもしないし笑いもしない」

「なんだいたのか」

・・・

「人様の世話になってるくせして恥かかせやがって！」

「こんな簡単なこともできないのっ！」

・・・

「しるわっ！.. 悪いのはお前だ！」

「うちの子が出来なかったからバカにしてるの!？」

.....

「いいじゃないか、大金のオマケだと思えば……」

「どっかの施設にぶちこんどけよ」

.....

「あんな病気持ちどうしてんだ!？」

「あの子は誰が世話するのよ。あたしは嫌よ」

.....じ.....

「生きてるときから勝手な奴だったが、死んでも迷惑かけやがる」

.....る.....あ.....

「どうせなら一家全員一緒に.....のほづがよかったわ」

.....やめ.....れ.....

「いやああっ!」

「うちの子があそこに、誰か、誰かあっ!」

「い、いたいつ、いたいよお……」

……ある……

「あうう……た、たすけて……」

「う、うわあああっ!?!?!?!」

「きゃあああっ!?!」

……えて……るじ……

「ええ、任せてください」

「仕方ないな、高町くんちょっと付き合ってくれ」

「お父さん、ボクあそこに行ってみたい！」

ああ、やっぱりこれがいけなかったんだ

主っ！

悲鳴のような叫び声が強引に俺の意識を引き上げる。
気付けば一瞬にして優しく暖かなぬくもりに包まれていた。

「おやめください主！」

上も下もないような真っ黒な空間の中。
俺は彼女に背後から抱きしめられていた。

「…………あの魔導師の少女にはその自虐性を宥めておきながら、
「自身でこんな……自ら辛い記憶を呼び起こすような真似をしな
くてもっ」

嗚咽を含んだ言葉が耳元で囁かれる。

首筋に何か冷たいものが触れたような気がしたが俺はあえてそれに
触れなかった。

「…………ごめん」

改める気のない声に彼女は俺を抱く腕の力を強めた。

「必要なんだ。俺にはこれが……これしないとすっかり俺でいられ
ない……」

ちゃんと俺が俺でいるためのちょっとした儀式。

今の俺の始まりまでを遡って“原点”をより強く自身に刻む。

もう慣れてきてしまったせいか、最初ほど怖くも痛くもない。

けどそのために繋がっている彼女に悲しい想いをさせてしまうのは
かなり痛い。

「またそんなことを……痛いのも苦しいのも全部主のせいではな
いはずですよ。」

なのにどうして主が罪を負わなくてはいけないのです！

どうして今もあなたが苦しまなくてはいけないのですか!？」

珍しく彼女が気持ちを爆発させたことに少し面食らった。

泣き虫だなあ、とは思っていたがこんな激しい面もあったとは驚き
だ。

それゆえに彼女が泣いていることが、今日だけはほんの少し嬉しかった。
泣かせてしまうのは嫌だが泣いてくれる人がいるのは、やっぱり嬉しいものだな。

でも。

「……俺が背負いたいんだ。

こっつして思い返して、背負っていかないと背中が軽過ぎる」

「っ……私では、重さになりませんか？」

「……まったく。

言葉の意図が正確に伝わるのは本当に考えものだ。

微妙に隠しているはずのニュアンスが筒抜け。

ああ、こいつには隠し事するのは無理だなあ。

「バカいうな。女性に“重い”なんて禁句誰がいつか」

だっていうのに、わざと言葉の意味を受け間違えて答えた。

それはこれ以上その話はしないという拒絶の言葉。

すぐに察した彼女はわずかに体を震わせて、より強く俺を抱きしめた。

こらえている嗚咽の声がかくなる。

本当に泣かせたくはないのだが、頭の中が筒抜けではうまくいかない。

「っ」

体が起きる気配がする。目覚めが近くなっている。

とはいえこのまま泣かせたまま逃げるのは心得に反する。

『最低でも流させた涙の倍は笑顔にしてみせろ』

だっ たっ けか、父さん？

けど、倍ってすごくハードルが高いよ。

どうしたもの、か？

ん？

あれ、この感触は？

「……………ええ、ああ、あの、その……………」

なんかすっごく柔らかくて大きいものが当たってるんですけど？」

やばい。

すっごいのが背中に当たってるのにいま気づいた。

前から少し思ってたけど、こいつのホント、スゴイ。

「当たってるのです……………」

「……………」

マジ？

「…くす、いいえ。」

抱きしめてしまったのは咄嗟ですので、

たんに風の癒し手の真似を試みただけです」

「…やめてくれ。」

それだけは本当にやめる」

お前にまでそんなことされたら精神がもたない。
理性とか平常心とかその他もろもろ簡単に吹き飛びそう。

「……それは女性として喜ぶべきでしょうか？」

聞くな！

本当にこいつは冗談やからかいでなくて真剣に聞いてくるから
ある意味はやてやシャマルより厄介だ。

「申し訳ありません。」

そういった機微にどうも疎くて……もう離れるべきでしょうか？」

「……………」

「では、目覚めるまでこれで……………」

同じ男なら、わかってくれるって信じてる！

「主？」

「聞くな。」

もう起きるけど、外はどうなってるんだ？」

話を突如切り替える。

もうほんとにここにどどまっついていられなくなってきた。
最低限心構えしてから起きたい。

たぶんはやてたちにめっちゃ心配されるかめっちゃ怒られるかだろ

うが。

「……いえ、少々想定外の事態に。」

主の目的を考えれば、大した問題ではないのですが
安全が確立されているとは言い難い状況です」

想定外？

おかしいな。フェイト庇って雷直撃しただけだぞ。

というか安全が確立されてないって、俺アースラにいないのか？

「はい、端的に言えば……さらわれました」

……………マジ？

「はい……」

硬い声色がそれが本当だということを見せていた。

その胸中には我々がついていながら、という気持ちがあるのを感じ
取れたが。

いやいや、いたのシヤマルだけだし。

離れたのはこっちの作戦あったからだし。

お前らは別に気にすんなよお、と言葉にしない声にしながら

初めて経験する誘拐にちょっとポカンとした頭のまま、俺は目を
覚ますことになった。

「　　つ、んう……」

「……………起きたかい？」

「……………」

確かに。

これは大いに想定外だ。

「ああ……………おはよう、アルフ」

人生初の『ベッドで目覚めて最初に見た異性』がお前になるなんてな。

軽い背中(後書き)

ずさんな計画、完璧に進行中

それにしてもどうして、

こんなに想定外が起こったというのに、

彼の思惑通りになってしまっているのか

5月8日 PM 04:26

アースラ・艦橋

「エイミィさんっ、コウキさんの居場所ってわからないの?」

「あつっ、ごめんなのはちゃん」

フエイトたちはあの直後消えた。

何者かの強制的な『転移魔法』に包まれて。

なのはたちはその消失に茫然としていたが、

その場でできることがなくなってしまうた以上帰艦するしかなかった。

無論その場に残っていたジュエルシードは回収してきている。

「いろいろやってるんだけど、実はアースラにもあの攻撃が来てね。それ自体はザフィーラたちが防いでくれたから、艦は無事だったんだけど、

その際に転移されちゃったから現場空域のモニターがそこだけできてなかったの」

状況を説明しながらも必死にコンソールを操作して

フエイトたちの転移先を搜索するエイミィになのははそれ以上何もいえなかった。

「うつつ、ごめんなさい！」

わたしが、私が一緒にいたのにっ!」

その後ろで突然張り裂けたような声を上げて泣き叫ぶ声があった。

「シヤマルさん……」

小さな鳥の姿の彼女ははやての手のひらの上で自らを責めていた。彼を守るべき騎士でありながら雷撃もその後の強制転移も防げなかった。

「あまり自分を責めるな。状況は聞いた。
それでは他に誰がいても、今回の結果は変えられなかった」

そして、何より他の騎士たちにアースラに残って
艦の防衛に回るように頼んできたのは他ならぬコウキだったのだ。
シャマルに落ち度はない。

「そうだよ、シャマルさんは悪くないよ。

悪いのは…… あんなに近い所にいたのに動けなかった私のほう
……」

「なのはちゃん、それは……」

そういつて俯く彼女に、はやてはかける言葉が見つからなかった。
連れて行かれた三人を除けば確かに一番近い所に彼女はいたのだ。
だが、直前に見てしまったモノの衝撃がなのはの動きを著しく鈍く
させていた。

「……バーカ、気にすんな」

「……ヴィータちゃん？」

漂い始めた重い空気を一蹴したのは
文字通りのどこか相手を馬鹿にするような物言いと共に、
なのはの足元で不機嫌そうな顔をしているヴィータだった。

「コウキのあんなん見たら、あたしらの誰だって動揺する。

あたしやシグナムだってちゃんと動けたか自信ねえよ。

そんなんで落ち込む暇あったら、きっちり休んで魔力と体力回復
させとけ！」

居場所が解った時、戦えないんじゃないやそっちの方が困る。
とまでいわれて、なのはそこで初めて笑みを見せた。

彼女の乱暴な言葉遣いの裏にある気持ちがあたたか嬉しかった。

「そう、だね。ありがとうヴィータちゃん」

「ふんっ、別に……っでどさくさにまぎれて抱きかかえるな！」

見た目から来る印象があまりにも『ぬいぐるみ』だったせいか。
お礼をいいながらも、なのはヴィータを抱え上げていた。

「え、でもヴィータちゃん軽いよ。それにふさふさで暖かい」

「誰もそんなこと聞いてねえっ！ 下ろせっつっつてんだ！」

ヴィータの怒号はなのはのほかほかとした笑顔の前に暖簾に腕押し
状態。

本来の姿ならほぼ同じ体格だが、この姿では体格差がありすぎて
なのはの腕から逃げ出すことも出来なかった。

「なのはちゃん、やっぱり天然さんやるか？」

「ヴィータが完全に空回り“させられている”とは」

「…末恐ろしい娘だ」

ふたりの息が合っているのか、いないのか。

判断に困るほどの絶妙な言い合いにはやてと守護騎士たちは感嘆を
もらす。

それを聞いていたのか。

クスリ、という微笑と共に現れた人物にはやては息を呑んだ。

「あらあら、楽しそうね」

「リンディ提督……」

コウキから警戒しなくていいとは言われたが、

彼を論破し負かしたという事実ははやてに彼女への敬意と畏怖を抱かせていた。

「でもなのはさん、あなたはついさつきフェイトさんに魔力を半分も渡して、

そのうえで六つのジュエルシードを封印したばかり。

ヴィータさんの言うとおり、今はゆっくり休んだ方がいいわ」

「はい、わかりました……あの、すいませんでした勝手に現場に
いって」

実はなのはがエイミィに詰め寄っていたのは

彼女がアースラに帰艦するなり、のことであつたために

リンディに独断行動について謝罪することができていなかった。
しかし。

「あら、なのはさんが謝ることはないわ。

だってあなたは彼に連れてかれただけだもの」

そういつて人好きのする笑みを浮かべて、なのはに非はない。

ということにする。と言ってくれた。

「あ、ありがとうございます！」

でも、次はないわよ。

と少しだけおどけた調子で脅すとなのはに再度を休むように促した。それを聞き入れたなのはそのままブリッジを後にした。

ヴィータの叫びは黙殺されたまま。

「……………」

それを黙って見ていたはやては二人が見えなくなると知らず、溜息を吐いていた。

吐いてしまったあとになって自分で驚いてしまうほどの溜息を。

「お疲れですか、主はやて？」

「ああ、ううん。大丈夫や。もうシグナムは心配性やなあ。

第一あたし最近なんもしてへんよ。

疲れるって、何に疲れるんや？」

以前のフェイトとの戦い以後。

治療のためではあるのだが魔法使用を禁じられたためはやては模擬戦どころか個人的な訓練すらしていない。

その傷もとつくに完治しているのだから

体力的にも魔力的にも疲れているわけがない。

「…無理、しなくていいと思うわ」

でも、いやだからこそ、その優しい声色にはやては泣きそうになっ
てしまった。

「一緒に暮らしていた人にあんな傷痕があつたと知ってショックじ
やないほうが変よ」

はやてに向き直つたりリンディは穏やかな、それでいて優しい笑みを
浮かべる。

まるで子供をあやす母親のような暖かなそれを。

「っ！？」

(この人あかん、絶対あかん…)

今まであまり何とも思っていなかった想い人とのシンクロが、今は
痛い。

(どうしてコウ兄もリンディ提督も、人の痛がつてる所をすぐにわ
かってまうんやるか?)

しかもはやてからすれば余計に厄介なことに、

慕う兄と比べると危うさのない本当の大人の女性であるリンディは
コウキ以上に、すがりたくなってしまふ。

今すぐにでもあの胸に飛び込んで泣きじゃくりたい。
そんな欲求さえ出てきそうなほどに。

「……………ずっと見てたつもりやった…」

シグナムたちの前では、と気を張っていた。

彼がない以上、自分が主としてしっかりしなければ、と。
だが一番小さいヴィータがいなくなったことで、油断した。
リンディがそれを促したのを考えるとまるで狙ってやられたようにも感じてしまう。

「何か隠しとるんは解つとったけど、
そこに踏み込むとコウ兄、どっか行ってしまう気がして聞けんか
った……」

彼女の声が、視線が、物腰が、表情が。
いとも簡単に八神はやてという少女の鎧を破壊する。

（ああ、これはコウ兄以上の強敵や）

彼が勝てなかったわけを実感すると共に、
隠していた気持ちがボロボロと零れ落ちる。

「……………どうして、話してくれんかったんやろか。
そりゃあ教えられてもなんにもできへんやろうけど……………
あの人はいつもそうや、痛いのはいいいつも完璧に隠す」

「主……」

そして自分はそれを見抜けない。
手遅れになってから、彼が隠せなくなって初めて気づくのだ。

その気持ちが解る守護騎士たちは主である少女の吐露に何も言葉を
返せなかった。

はやては初めて会ったときからずっと。

騎士たちだつて暮らしている途中から気付いてはいたのだ。

彼が何かしらの『キズ』を抱え込んでいたことは。

これまでの生活でそのいくつかを知っていただけに、彼女たちは油断していた。

その奥に、深く深く刻まれているもつと酷いキズがあることを、見過ごした。

「……そういうものよ、男の人って。

程度の差はあるでしょうけど、強がつて格好つける生き物なのよ」

けどそれを、困った人たちよね、と一言ですませてくすくす笑うリンディ。

それはどこか楽しそうで、どこか哀しそうだった。

「いわれてみれば……主コウキはそう振る舞うことに一種の美德を
持っているようでした」

「そうよね、他の人が痛いのも我慢してれば怒るくせに自分は隠すんだもん。」

あ、思い出したらなんか腹が立ってきたかも！

「ああ、確か心得にもそんなんあった気がするなあ。

『男は強がつて格好つけて一人前』って……何いうとるんやコウ兄のお父さんは」

はやてと女性騎士たちはそれぞれ思い当たる節があつてか。
リンディのその微妙な差異に気づいた者はいない。

代わり、といつてはなんだが。

とぼつちりを受けたのは唯一の男性であるザフィーラ。皆、目で無言の問いかけを彼に向けていた。

“ お前もそうなのか？ ”

「う……………」

心情的になにか否定したい気分になるが、コウキの行動や自分だったのなら、を考えると否定できそうにない。

いや、そもそも自分は盾の守護獣なのだから皆の盾になるのは当然のことであり

多少のダメージで痛がっているはその使命は果たせないわけで、それを強がりや格好をつけた行為と評されるのはいささか違うように思えるわけで…………

などと咄嗟に『言い訳』を考えてしまうあたり致命的なまでに自身がそうだと証明していた。

本人もそれに気付いたのか沈黙しつつも珍しく目を泳がし、それを答えにした。

「ふふふ………… 大事だから言えない。傷つけないから教えない。

そうやって想ってくれるのは嬉しいけど、やっぱり寂しいわよね」

その人の力になりたいと願う者からすれば、あまりにもそれは独りよがりな考えだ。

「………… ええ、ホンマに。困ったお兄ちゃんや…………」

シグナムもシャマルも思わずうんうん頷く。

ザフィーラに至っては、完全に黙秘のていであさつての方向をむいている。

「うん、帰ってきたらそこらへん思いつきり叱ってあげなさい。それもこれでもかかっていうほどネチネチと。彼みたい人はそういうのが一番こたえるんだから」

どこか嬉しそうな笑みを浮かべてそういうリンディに同意した彼女たちは

「そやね、みんなでいっぱい叱ってあげな」

「任せてください。全力で叱責いたします」

「ええっ、責める材料は山程あるんだから！」

燃えた。

もはや彼がさらわれたことなど些末事だ。帰ってくるのが前提で、そのあとがもう考えられている。

“どうやってとっちめてやるか”

もうその相談しか彼女たちはしていない。

(……………コウキ、お前帰ってこないほうがいいかもしれん)

同胞と主の異様な一致団結に半ば本気でそれを考えるザフィーラだった。

「クロノ、いいかしら？」

はやてたちが休むためにブリッジを出たあと。

即座にリンディは柔らかな顔つきを艦長のそれに変えて執務官を呼んだ。

「武装局員をいつでも出れるように待機させておいて。

遅くても今日中には出ることにしたいと思いますわ」

「え、しかし未だに彼女たちの本拠地や現在地は不明ですが？」

艦長の言葉に執務官は首をかしげた。

それはどう考えても、不明のそれらが判明したあとの指示だ。

無論。見つけてから準備しても遅いのは当然だが、

それにしたって見つかる目途がたってからだ。

現在の八方ふさがりな状況でそれは早すぎる指示。

だが艦長はそれに首を振る。

「いいえ、プレシア女史は罠にかかった。

本人はそれを見破ったつもりで彼をさらったのかもしれないけれど、

それゆえに彼が仕掛けた二つ目の罠には気付いていない」

「二つ目の、罠？」

「そう、彼があの一瞬で仕掛けた、なんともおかしい罠。いいえ、たぶん罠ですらない罠。見抜けるわけないわよねえ」

だからこそ、彼が動くまでそんなに時間はかからないという。

真面目な顔でそう言いながらも、その声が笑っているのを息子として感じ取る。

執務官として「またか」と内心思いながら、結局息子として流した。

（また報告者に書けないことが増えそうだ）

ただでさえコウキたちのことは記録できないのにそれが中心になって事件が進んでしまっている。

ましてやどうにもリンディの言い方から、ものすごく変な罠を仕掛けたと推測されるだけに

クロノの気は滅入る一方である。

そのへんを含めて、頭が痛くなりそうなのを表情だけで、一応訴える。が。

「いやよ私、なにもしてなかったことで彼にあとで文句いわれるのクスリと笑う母の笑みは、息子が労苦するより彼の文句が嫌だった。った。

こう書くとも誤解がありそうだがクロノに別段ショックはない。慣れたもので「わかりました」と頷いた。

リンディのそういった行為は、今に始まったことではないし、遠回しにそれぐらいならできるでしょ、という信頼も感じられるのだ。

とはいえ。

それでその通りに行動させられてしまうのは息子ゆえか。いや、自分にも流れているハラオウンの血筋のせいだ。と彼は考えている。

『ルールは守るべきだがそれを守るだけでは救われない人がいる』

明確に誰かが言ったわけではないが、

ここ“うみ”での事件に何度か遭遇するとルールの限界に簡単に激突する。

それは違う文化や歴史を持つ様々な世界を渡り歩かなくてはいけなかったり、

それらを跨いで日に日に複雑化していく犯罪に対抗しなくてはいけない管理局側の

ルール改変・マニュアルの作成が、全く追いついていない現状があるせいなのだ。

親子二代で管理局本局で働いているハラオウン家にとってそれは身に染みた現実だ。

だからだろうが、高望みはしないものの自分のできる権限で彼らは人の命と心を守ろうとする。

クロノという少年が執務官になったのにはその権限の高さにあるといても過言ではない。

それでも限界はあり、今回のそれが提督と執務官がグルになってどうにか出来るレベルかどうかは怪しい所である。

まあ“手”が足りなければもう一人の提督にも貸してもらえばいいか。

と考えてしまうあたりクロノも実の母親にかなり毒されている。

もつとも。

臨機応変という名の裏技でなんとか笑顔で“やってしまう”のが母で、

それに呆れながら澄ました顔でそれ以上のことを“やり遂げてしまう”のが父だ。

と、師匠だった双子の使い魔たちから聞かされていた彼はだいぶ前からいろいろ諦めている。

ちなみに、そつちのほうがいいなら、それでいいか。

と生来の生真面目さからは程遠い考え方で“やることになる”のがクロノであった。

(……だからじゃないが、彼女には同情するよ)

事件の背景や危険性とか今後の展開とかはかなり無視して、単純に、そんな母とそれに近いコウキと図らずも対立してしまうことになった

プレシア・テストロッサにクロノは妙な同情を抱きつつ武装局員たちの準備にとりかかった。

5月8日 PM 07:22

時の庭園・主の間

「あ、うう… ああ」

そこで、一人の少女が痛みを耐えていた。黒いBJはところどころボロボロで、肌には無数の傷跡。だがそれが戦いでついた傷ではないことはこの場を見れば、誰しもが判ることだった。

「フェイト、母さんは悲しいわ。」

あれだけの好機を前にしてただ何もせず、ぼおっとしていたばかりか。

私に齒向かってくるなんて」

「それは」

少女・フェイトはあの時思った母への気持ちを告げようとした。母は決して誰かを傷つけてはいけけない。そう強く思ったことを。

「あなたはそんなにも私を悲しませたいのっ！…！」

「っあああっっ！…！」

だが、そのチャンスは与えられず無情なムチが振り下ろされるだけ。

（なんでだろう？

なんでこんなに……）

振り下ろされるたびに彼女の肌には傷がうまれ、痛みを訴える。

(痛く、ないのかな?)

そののなんと軽い痛みのことか。

今までも何度もこういう扱いを受けてきた。

母から頼まれ、無茶をして大怪我をしたこともあった。

時には誰かと戦いになって傷を負ったこともある。

そのどれもをフェイトは痛いと感じたことがなかった。

正確にいうなら“痛みというのはその程度のもの”だと思っていた。
どんな痛みも彼女が許容できないものではなかったはずなのに。

『ふざけるんじゃないこの戯けっ!!』

許容できない本当の痛みを知ったのはあの時。

不思議なくらいに怒っていた彼に引っ叩かれた痛みが
不思議なくらい、フェイトの心を捉えて離さなかった。

(あの人、大丈夫かな?)

ちゃんとあの子のところに帰してあげれるかな?)

無情のムチに叩かれながらフェイトはそれだけが不安で、
きつとどれだけ心配しているかと思うと申し訳なかった。

(結局返事できなかった……あの子泣いてなきゃいいけど……)

彼の傷を見てその一歩手前だった顔を思い出して胸が痛い。

(……私は、どうすればいいのかな?)

彼と少女と母。

三人が出会わないほうがいいような気がして、
どうすれば出会わせずに済むのか。

それだけを考えながら、主の間の床に倒れこんでいた。

(あのふたりと母さんが戦うところなんて、見たく、ないなあ……)

その願望が、きっと叶わないことだろうと頭のどこかで感じながら。
フェイトは続くムチを黙って受け続けていた。

同日 PM07:47

時の庭園・フェイトの私室

「もぐもぐ、ん、んぐ、ぐぐと」

俺はひとり黙々と用意されていたパンを食べていた。

腹が減ってはなんとやらというし、他にすることもない。

あれから何が起こったのかはアルフから説明してもらった。

続けて放たれた雷をフェイトが防いだこと。それで彼女が母親に杖を向けたこと。

その後、プレシアの強制転移魔法で自分たちと一緒にここに連れてきてしまったこと。

それからフェイトの部屋で俺を休ませていたこと。すべてを話し終えたアルフは何度もごめんといいながら謝った。それに気にするなと返していた俺だが、連れてこられた本当の理由に察しはついている。

腐っても一流の魔導師にして科学者。さすがに見くびりすぎたか。

で、そのアルフもさつきフェイトに念話で呼ばれて出て行ったまま。

「おっと、これ以上はさすがに欲張りすぎか」

用意されていたバスケット内のパンを半分ほど食して手を止める。

まあパンと水だけじゃ味気ないつてもあるんだけど。

“ 捕まっている身 ” としてはこれ以上は贅沢というものだろう。

さつき他にすることもないといったのは正確には間違い。

何もできない状態にされている。といったほうが正しい。

視線を下せば手枷をはめられた両腕が見える。

誰かのバインドなどではなく、金属製の手枷。

バインド系の魔法は戦闘などでは有効な手段の一つだが長期的に相手を拘束するには向かない。

だから次元世界においても人を縛るのは未だにこういった器具だったりする。

無論相手が魔導師だった場合は魔法が使えないようにする処置がされている。

当然ながら俺の手枷にもそういう機能があるようで

試してみたが小さな魔力弾を作ることでもできない。

念話とかはできそうな気がするが、この建物内ならともかく

そこからさらに外へはどうにも念話がうまく飛ばない。

精神リンクで繋がっているあいつらとはなんか連絡つきそうだけども、いま話をするに面倒そうなので、あつちはあの艦長さんに任せる。それはそれですごくなんか嫌な予感がするけど、あつちであいつらを落ち着かせられるのは多分あの人だけだろうからデメリットは後でいくらでも受ける覚悟だ。

本当はそんな覚悟ないんだけど。

コンッコンッ

扉をノックする音に意識がそちらに向く。

っていうか、ここ俺の部屋じゃないからそんなことする必要ないと思うのだが。

「どござ」

返事を待っていたのか。

少女とその使い魔がドアをあけて入ってくる。

ちなみに外から鍵がかかっていたので俺は出ることはできなかった。

まあ無理すればドアごとぶちぬけないこともないが、

今はまだそこまでする必要もないのでおとなしくしていたのだ。

入室して、少しためらいがちに歩み寄ってきたフェイト。

いつものBJから手袋やマント、ニーハイソックスみたいなものを取って

素足を見せた姿は妙な見慣れなさどわざとらしさを感じる。

「あの……具合はどうですか？」

たぶん、無いことをアピールするためにわざと脱いだな。
と当たりをつけていた所に申し訳なさそうに尋ねられたせいかも
怒る気にもなれない。

いや、そもそも彼女を怒るのは少し筋違いなのだが。
それでも目に映る『魔法で傷を治した痕跡』に俺は知らず拳を握り
締めていた。

「問題はないよ」

だってのにこんな穏やかな声が出るんだから我ながら役者だ。

「それに先にいっておくけど君が気にすることじゃない。
俺が勝手にやったことなんだから」

とはいっても気にするんだろうな。

「でも……私を庇ったせいで意識を失って、ここまで連れて来てし
まって……」

ほら。

って、どっちも本当にフェイトのせいじゃないだろうに。
後者にいたってはある意味自分でまいた種だ。

なので真摯に申し訳なさそうに俯かれると逆にこっちが困る。
まあ逆の立場なら俺も気にしてしまうのだろうが、
それでもフェイトにはそんなことを気にしてほしくなかった。

「あっ……」

ポンポンと頭を軽くなでる。

なんとなくだが、落ちている子を見るとこうしたくなるんだよな。手枷がついたままなので両手でしているのがなんか間抜けな光景だが。

「…女の子のフェイトには解らないかもしれないけど、男にとって誰かを庇った傷なんて勲章みたいなものだ。それがフェイトみたいなの……小さな女の子なら得に、ね」

一瞬、可愛い女の子、と言いきうようになって自重する。いや決してフェイトが可愛くないわけではなく、脈絡なく容姿を褒めてはいけないとヴィータあたりから注意を受けてるだ、俺。

どうも俺の言葉回しは時々、相手を口説こうとしてる風に聞こえるらしい。

本心から出た言葉なので心外なのだが、そんな軟派な男には見られたくはない。

「だからさ、そんな顔はしないでくれ。それじゃあまるで俺がフェイトを苦しめるために庇ったみたいになる」

相変わらず言い方が汚いな、俺。

「え……あつ、わ、わたしそんなつもり　!？」

そんな指摘をされて慌てて否定に入る彼女を制して、続けた。

「解ってるよ、フェイトの気持ちは。」

でもそんな顔されちゃうとやっぱり俺が悪かったのか、って気分になる」

だから、と言いかけて俺は言葉を止めた。

「……うん、宿題にしよう」

「ふえ？」

「はっ!？」

フエイトの呆けた顔とアルフの何言ってるんだこいつ?みたいな顔を無視して続ける。

「ひどい目にあわせちゃったとか、私が悪かったとか、申し訳ない気持ちとか。

そういうの全部とりあえず横において保留にして、けど一つだけ考えてほしい」

無茶でおかしなことを言おうとしてる自分に笑いそうになる。

かつての自分にもしこんなことを言う人がいたら、俺はどう思っただろうか?

今では想像することもできない。

でも、だからこそちゃんと投げかけておかないといけない。

「俺はどうされたら、どう言ってもらえたら……嬉しいだろうか?」

相手のことを考える。ってことの、本当の意味を。

我慢するのとも、がんばるのとも、押し付けるのとも違う。

それらとは別の答えをどうか自力で見つけてほしい。

本音をいえば、

少なくとも俺の場合、

自分が大丈夫だよって伝えるための笑顔と

感謝を告げるありがとうって言葉だけでいいんだ。

そう教えてやればいいのだと思うのだが、

彼女から考えるチャンスを奪うわけにはいかない。

母からの愛が欲しいために半ば盲目的に従ってきた彼女だけに

“今後”を考えるなら、それは教えられるより思いついてほしい。

そんなことを考えてしまう俺は、やはり傲慢なのだろうか？

そうだとしても。

いま、現在進行形で困った顔で難儀しているこの子がいつか、

屈託のない笑顔を気楽に見せられるようになってくれるのなら俺は

それだけで満足だ。

例え、それを俺自身の目で見ることがなかったとしても。

そのためなら俺は

対立する苛立ち（前書き）

今回、コウキがなんかおかしいけど、理由は、読んで、察してください。

対立する苛立ち

5月8日 PM08:17

時の庭園・廊下

結局、コウキの宿題は文字通り後日提出ということになった。
フェイトたちをプレシアが呼んだのだ。一緒にコウキを連れてくる
よう命じて。

そのため彼はアルフとフェイトにつれられる形で時の庭園内を歩い
ていた。

ちなみにフェイトはマントをまとった完全なBJ姿。

一方のコウキといえば両腕を繋がれているため一旦手枷を外さなけ
れば

服をきれない困った状況だったのだがフェイトが魔法的な機能を持
たないBJモドキを

作成してくれたおかげで上半身裸という状況はなんとか脱していた。
ちなみに黒地のTシャツっぽい服である。

（フェイトの部屋あたりはまだ名前通りの庭園って感じもするんだ
が、

なんかどんどん雰囲気重いってどうか、灯りがあるのに暗いよ
うな…）

プレシアがいるのだという主の間へ進めば進むほど。

変わっていく雰囲気の変化は建物の造形ではなく、持ち主の心象のようだ。

「……っ？」

だが、そこに一つの違和感があった。

「どうしたんだい？」

急に立ち止まったコウキを訝しむアルフの問いかけに答えず、彼はただ、そこから見えるある部屋のドアを見詰めている。

「…あの部屋は？」

「え、あ、ああ、あそこはデバイスとかを整備する部屋だよ」

「…バルディッシュもあそこで作られたんです」

そうかと頷きながら、しかし彼はそこから視線を外さない。

（なんだ？ なにかの音が聞こえる？）

耳から聞こえるのとも念話で届けられるのとも違う声。

声そのものに聞いた覚えはまるでない。ただ、その聞こえ方には覚えがある。

（…デバイスの調整室、バルディッシュが作成された場所……なるほどな）

一人納得する彼は、自分に向けられている疑問の視線に気付くのが

遅れた。

「……あ、いや、なんでもない。あそこだけ入り口の形が違ったから気になって。」

「行こう、遅れるとまずいんだろ？」

疑問は疑問だったが、遅れた程度であらぬ叱責を受けたくはない。それはアルフもフェイトも理由は違えど、同意見だった。

「じゃあ、こっちです」

フェイトが先導し、それにコウキが続いて後ろからさらにアルフが続く。

アルフは一回だけ少し立ち止まって、調整室を動物的な感覚で“視る”

（あそこは半分くらいリニスの部屋みたいところだったから、

バルディッシュに何もなければ、もう滅多に近寄ることもなかったんだけど……）

あの男が興味を持ったことに興味を覚えて、見ていたのだが、何も異常がなかったので首をひねりながらも二人に続いた。

「…母さん、連れてきました」

扉の前でフェイトは少し息を整えて、告げた。

「入りなさい」

許しを得たことで三人は主の間に足を進める。

そこは部屋の名にふさわしい造形で日本人がイメージする西洋の城の謁見の間に似ている。

もつとも、主たる彼女が座る玉座があるのは小さな段差の上。

部屋自体もそこまで広いものではない。

あくまでミニチュア版。それっぽい物を作った。という感じだ。

しかしその黒を基調とした色合いからはお城というよりは全く別の物を連想しそうだ。

(なんか、悪の組織のアジトみたい…)

ここまで歩いてきた場所がまだ人が住むところに見えていただけにこの部屋の間違ひ感はより際立っていた。

(いや、それは彼女のほうか…)

主の間の奥で、玉座風の椅子にけだるそうに座る女性を見て、

コウキは「あんた正気か？」という言葉が出そうになった。

正確にはその恰好を見て、だが。

(……正気じゃないから、こんなことになってるんだった)

「お初にお目にかかります、ミス・プレシア。」

今宵はお招きいただきありがとうございます」

やつれてはいたが風貌から本人と判断したコウキは胸中を隠し、わざとらしい言葉使いで挨拶をした。丁寧なお辞儀までして。両隣に立っていた彼女たちが困惑を顔に浮かべる中、プレシアだけが無反応だ。

「……その様子だと自分なぜここに連れてこられたのかは解っているようね」

ただ淡々とそれを告げると手に持っていた板状の何かを投げつけた。コウキの足元に突き刺さるように落ちたそれは待機状態のデバイス。彼があの場合で使っていた武装局員用の量産型ストレージだ。持ち運びと保管の関係から待機状態はカード型になっている。

「……あなたがジュエルシードをすり替えたのは見ていたわ」

「っ！？」

「えっ！？」

驚く二人を尻目に、コウキだけが不敵な笑みでしたり顔だ。

彼は封印され海から浮かび上がったジュエルシードを数えるふりをして

いつかの廃ビルで見せた偽物とすり替えたのだ。なのはとフェイトの目の前で堂々と。

もっとも、そんな事が出来たのはふたりの目に互いしか入っていないからだが。

「……だと思ったよ。」

でなきゃ本拠地にわざわざ俺を転移させるなんて危ない真似はできない」

逆をいえばそれほどの危険を冒してでもジュエルシードを欲しているわけだが。

「体中調べたけれどあなたは持っていなかった。

なら可能性があるのはそのデバイスの中。

けれどご丁寧なことに登録音声でのキーワードロックがかけられていた」

どちらかだけならハッキングしてこじ開けることもできたが、両方が重なっていたことと機密保持のための自壊システムまで繋がっていたために

さすがのプレシアも迂闊に手を出せなかったのだ。

しかし逆をいえばそこまでして守るものがそこにあることを示していた。

だからこそ、彼女はこじ開けるモノを変えた。

ゆっくりと玉座から立ち上がり黙ってムチを構える。

「ロック、外してくれないかしら？」

問答無用。

外さないなら力尽くでも。

言葉にはしないが、態度がそれを告げていた。

「母さっ　!?!」

さすがにそれは行き過ぎだと。

例え脅しだとしても、母に誰かを傷つけてほしくない少女の声はしかし、少年がかざした手が止めた。

「……わかんないんだよな、一つだけ」

繋がった両手でフェイトを止めた彼はプレシアに向かい合うため一歩前に出た。

そこはわざとといえるほどに、明らかにプレシアの位置からムチが届く範囲だった。

「あなたの目的に、なんでジュエルシードが必要なんだ？」

そして暗に『お前の目的は知っている』と告げた。

「…っ」

瞬間プレシアの顔が歪み、手が動いていた。

振りぬかれた腕から遅れる形でしなるムチがコウキの頬に痕を残す。

「母さんっ!」

今度ばかりはと前に出ようとしたフェイトとアルフをまた止めたのはコウキだった。

「……」

黙って背中だけを向けていたが、かざされた手が来るなど告げている。

その後、指先でムチの痕を少しなぞる。

「ふむ、なるほどね……で、ジュエルシードが必要な理由は黙秘っ

てわけ？」

「…あなたにいう必要があるの？」

疑問系の拒絶にコウキは「ないよなあ」と笑って同意する。

ギリツという歯ぎしりの音が聞こえてきそうなほど誰かの苛立ちがこぼれる。

再度しなり襲いかかるムチを、身体を揺らしてかわす。

何も無い床に痕だけ残してそれはプレシアの手元に戻る。

「危ないなあ、似合わないもの振り回すなよ。ケガするじゃないか」

おどけた軽い調子で、ニタニタと明らかにバカにした顔をするコウキに

プレシアの苛立ちは募っていく。

「…あなたのおふざけに付き合ってる時間はないの！

とつととロツクを外しなさいっ！」

再々度振り下ろされる腕とムチ。

彼は避ける素振りさえ見せずに、棒立ちのまま。

しかし、顔に向かってくるそれをいとも簡単に掴んだ。

「っ！？」

「……………なにか、勘違いしてないかプレシア」

その声が、主の間に響く。

「っっ！？」

「　　っ!？」

彼から聞いたことのない重く暗い声色が発せられ、
フェイトは鳥肌に震え、アルフは耳や尻尾の毛がすべて逆立った。
プレシアに至ってはその“紅い”瞳に睨まれて身体がわずかに硬直する。

「あっ!」

その隙を突かれムチごと力尽くで引つ張られた彼女は
それを手放すこともできずによるつきながら、彼の目前まで引きずり出される。

床に突っ伏しそうになる身体をなんとか支えて、顔をあげる。
そこにはもう自分を委縮させた“紅”はなかったがその顔は不快感を隠そうともしてなかった。

「俺がお前のいうことをきく必要がどこにある?」

見下ろす眼と吐き出された声にある、明らかな侮蔑。

「っ……状況がわかってないのかしら。

囚われの身の分際でなにを!」

「それがどうした。

1ミリも俺がお前のいうことをきく理由にはなっていない」

苛立ちをさらに高めていく彼女の声に、
その程度でのごとで言うことはきかないと返すコウキ。

「っ……そう、素直に開けてくれればあなたなど興味もなかったけど、

痛めつけてほしいのならそうしてあげるわ」

「ふんっ、お前程度の女が思いつく拷問なんて子供のイタズラみたいなもんだ。

いったい何ができるのか、ふっ、見物だな」

薄く、人を小馬鹿にした笑みを浮かべて挑発する。

『やれるものならやってみろ』

そんな態度がいと簡単にプレシアの我慢の限度を超えた。

「なら……思い知って、あとで後悔なさい！」

数歩分の距離を後ろに跳んで、その指先をコウキに向けた。そこに集まるのは魔力。放たれようとしているのは魔法の弾丸。

フォトンバレット

単純な魔法だけに熟練者の放つそれには必殺の威力がある。

それを、ものすごくつまらなさそうに見詰める彼に向けて発射する。

「っ!？」

驚きの声は誰のものか。そして、なんに対しての驚きか。

手枷をされて魔法を封じられている少年へ躊躇無く魔法が放たれたことか。

その魔法に存外なほど大量の魔力が込められていたことが、人に向けるさい必須の非殺傷設定がかかっていなかったことが。

それとも、

それを見て逃げるどころか前に踏み込んだ少年の行動か。

「はあああっ!!」

突っ込んでいく勢いそのままに振り上げた両手が、フォトンバレットを弾き飛ばして、どこかの壁に穴を開ける。

「あ……………」

あまりにデタラメな行動とその結果に呆然とするプレシアは明らかに無防備。

だから、だったのか。もとよりそのための踏み込みだったのか。駆け出していたコウキはまだ止まっていなかった。

「っ!!」

咄嗟にプレシアは前面にシールドを張った。それを確認しながらも、躊躇することなく。

「おらああっ!!」

魔法の盾ごと、彼は彼女を“蹴り飛ばした”。

「くっ!!」

シールドを張っていたとはいえ。

それは物理的ダメージに対してあまり有効なシールドではなかった。咄嗟だったために使い慣れた対魔法を想定していたものを使ってしまう。

そのため直接当たることはなかったが衝撃や威力を完全に殺しきれなかった。

そして何よりプレシア自身が前線に出るような魔導師ではなかったため、

不意打ちに近かった強烈な蹴りの一撃をいなす経験や技術が徹底的に足りなかったのだ。

だから、プレシアは玉座の前で膝をついていた。

「…やはりこの程度か。つまらん女だ」

吐き捨てるように呟き、冷たい視線をプレシアに向ける。

それは見えていないはずの背後のふたりでさえ固まらせていた。

ただでさえコウキの突然の豹変とプレシアへの物言い、型破りで一方的な攻防が

あまりに予想外すぎて、彼女たちは展開に頭がついていっていなかった。

もとよりプレシアに反抗する者など長らくいなかったのだ。

かつていた彼女自身の使い魔なら苦言を呈することはあったが、侮蔑するような物言いはなかったし物理的に歯向かったこともなかった。

一時期アルフは主を思うがゆえにそうした行動に出たことはあったがフェイト自身が止めたこととその叱責が主に向かうことを知って自重していた。

そのため母を大事に思うフェイトですら庇おうという思考が生まれない。

彼女の中で母を助けたいという気持ちはあっても、実際にプレシアが窮地に陥る光景をイメージできていなかった。だから目の前で起こった事を理解するのが精一杯で何かしようという考えまで至れない。

「っ、いったいどこまで私を……グッ、ゴホッ、ガハッ！」

だがそれも、嫌な音の咳が出るまでだった。

「母さんっ!？」

明らかな異常な音の咳に思わずフェイトは母に駆け寄った。咳き込み続ける母を不安げな瞳で心配そうに見詰める。

「ゴホッゴホッ、ガッ、ハッ、ゴホッ！」

怪我なら治癒魔法や応急処置の知識はあるフェイトだが、素人目にもそれは何らかの病だと解る咳き込み方で、適切な処置がわからない。

「大丈夫っ母さ」

それでも半ば反射的に背をさすろうとしたその手を

「っ触らないでっ!！」

プレシアは激しく拒絶した。

「あっ……」

一瞬、痛みを訴えて少女の瞳が揺れる。
だがそれをすぐに消して、なお母を支えようと伸ばした手が、止まる。

「え、あ、母さん血がつ！」

母にはたかれ、拒絶された手。

その黒い手袋に赤い跡がこびりついていた。

よく見ればプレシアが口許を押さえていた手の平にも同様のものがある。

「う、はあ、はあ、はあ……」

それをどこか他人事のように眺めながら、徐々に呼吸が落ち着いていくプレシア。

「……どおりで、見てるとイライラしてくるわけだ」

吐き捨てるような呟きは誰の、何の感情か？

見下ろすような冷たい双眸が膝付くプレシアを見詰めている。

そしてフェイトの手が再び伸ばされるより早く、彼の両手が彼女を掴む。

「うっ！」

無言で胸倉を掴み、強引に立ち上がらせる。

「ちょ、ちょっとあんた!？」

さすがに乱暴な扱いにアルフでさえ抗議しようとしたがコウキは聞いていなかった。

「……………何が時間がないだ。お前にないのは時間じゃなくて未来だろっ……………」

「…え？」

その違いは言葉の裏を察するのには充分なものだ。

時間がない。という言葉だけなら他の意味に取ることできる。だが。

未来がない。といわれるとそれが意味するものは半ば一つしかない。

「まさか…母さん？」

疑問を問いかける声と視線を母に向けるが、彼女はフェイトを見ようつもせず、

自らを掴み上げている男を忌々しそうに睨みつけていただけだった。

「っ……………未来のない奴がっ、ある奴の邪魔をするなあっ!!！」

今にも鼻がぶつかり合うような距離にまで顔を近づけて怒鳴り声をあげる。

その漆黒の瞳は紅に比べて威圧感はないものの、秘めていた怒りを隠そうともしていない。

だがそれは

「それがどうしたというのっ！」

ないなら作ればいいのよ。そのための研究、そのためのジュエル
シード！

私たちはっ、失われた過去を絶対取り戻す！ 誰にも邪魔などさ
せないっ！！」

プレシアとて同じこと。

互いに一步も引かない視線と決意がふたりの間で交錯する。

そこに明確な言葉の掛け合いはなくともお前だけは認めないという
意思だけがぶつかり合う。

「……………そうかよ、なら俺は……“全力でお前の邪魔をしてやる”
」

どれだけの間、にらみ合っていたのか。

突然、突き放すように手を離すと無言である場所を指差した。

それはさっきプレシアが投げつけた待機状態のデバイス。

その動きとそこにあっただものが彼女たちにとって重要と“思われて
いる”モノだったため

プレシアを含めた全員が、コウキの思惑通りに視線を集中させてし
まう。

『声紋認証及びキーワード受領確認、開放』

デバイスの表面にそんな文字が浮かび上がる。
そして。

『stun flash』

光が、主の間を支配した。

マヌケな罫（前書き）

主人公のターンが終わらない……

マヌケな罫

光に視界すべてを支配されそうになり半ば全員が目を閉じ腕で庇う。
そんな中。

「バルディツシュ！」

その“少年”の叫びだけが浮かび上がるように響く。

『put out.』

(え、バルディツシュ?)

光に対してかざしていた手の甲。

そこにある待機状態のバルディツシュが、彼の呼び声に答えていた。
返された言葉と“何か”が放出された感触に戸惑うフェイトを余所に、

まばゆい閃光は徐々に消えていき、全員に正常な視界が戻ってくる。

別段、大きな変化はなにもなかった。

立っている位置は同じで、大きく動いた者や物などない。

おそらくあの閃光を仕組んだのであろうコウキでさえ、何かした様子
子はなかった。

しかし、いやだからこそ、何かしたのは自らの愛機だとフェイトは
気付いた。

「……バルディッシュユ？」

『……………』

主からの問いかけに彼は答えない。

普段から寡黙なデバイスだが主の言葉に何の反応も返さないのは初めてのことだ。

だが、こればかりはさすがにフェイトでも黙っていることを許すわけにはいかない。

「答えてバルディッシュユ！ どうして、なんであなたが」

「なぜそのデバイスが“ジュエルシード”を持っていたのっ！？」

狼狽える少女の言葉を半ば継ぐかのような形で、しかしコウキを睨みつけたプレシアに

彼はしてやったりな顔で不敵な笑みを向ける。

手の中で強く青い光を放ち続ける宝石を弄びながら。

「答えなさいっ！！」

力尽くでも答えさせると言外に圧力をかけた問いかけを、彼は露骨に無視してフェイトたちに話しかけていた。

「…あんまりバルディッシュユを責めるなよフェイト。俺が勝手にそいつの中に隠したんだから」

「勝手にって、いつたいいつの間に……………」

「っ、そうかあの時」

いつ、などという疑問は少し考えればわかるくらい実は単純だった。そもそも彼がバルディッシュに触れたのはあの時だけなのだから。フェイトをプレシアの雷から守るために、突き飛ばしたあの瞬間。コウキに対して思わず向けたバルディッシュに彼は確かに触れていた。

そこしかジュエルシードを隠せる瞬間はなかった。

「でも……どうしてバルディッシュの、なんで？」

信賴していた寡黙な愛機の、取り様によつては裏切りとも取れるその行動は

大いにフェイトを混乱させていた。ましてや敵対してる相手のデバイスに隠すなど理解できない。

それを受け入れた本人（？）の判断もだが、そうしようとした理解不能な領域の判断は

少女を余計に混乱させていた。

「そんな難しく考えるなよ、けっこう単純な理由なんだ」

それらの困惑を読み取ったのか。

コウキはゆっくりとした口調でそうなった経緯を説明し始めた。

そのために蚊帳の外にされたプレシアは苛立ちを抑えて聞き役に徹するしかなくなった。

何せそれを聞きたいのは彼女も同じなのだ。

「俺がそんなことしなくちゃいけなくなつたそもその原因はあの攻撃にある。」

元々俺はなのはと違って、あの現場に行ったのはフェイトを助けるためだけじゃない」

何気になのははそれだけで行ったのだと告げながら、プレシアに向き直ると勝ち誇ったかのような顔でさらに続ける。

余計に苛立ちが表情を歪めるが聞きたい事を勝手に喋ってくれる以上彼女の口から出る言葉はなく、ムチをふるうこともなかった。

「俺は何らかの形でもいいから、プレシア。

お前に表に出てきてほしかったんだ。じゃないとこの事件はいつまでも終わらないからな。

そしてあの時はお前をおびき寄せる条件が整っていた。

取り損ねた分を含め、残り六つも管理局に取られそうなうえに、疲労困憊状態であるフェイトが囚われる可能性まであった」

コウキはあの時点で、プレシアにはフェイトしか手駒がないと判断していた。

絶対にいない、とまでは思っていなかったがいる可能性はとも低かった。

他の探索者がいないこと、フェイトを監視している者がいないこと、フェイト自身がアルフの力を借りていたとはいえ実質一人で行動していたこと。

そしてその時点で推測されるプレシア自身の望みとそれを望むにいたった原因。

それらを考えれば他に協力者や部下がいるとは考えにくかった。

またいくら研究畑の魔導師とはいえ一般的な魔導師と比べれば

段違いの能力を持つ彼女が現場に出てきていない時点でプレシアが別の作業に専念しているか、

そもそも出てこれない状況にある。とコウキは推測していた。

結果は後者に重きを置いた両方であるようだが。

「だから必ず何らかのアクションに出るとふんでいた。偽物にすり替えたのも半分は奪われないうにだが、残り半分はすり替えに気づかれた時、俺だけを狙うように仕向けるためだ」

だが、そのコウキの狙いは大きく外れる。望んで引き出したプレシアの行動がフェイトに向けられたのである。彼にとつてもあれば、完全に想定外だったのだ。だから大慌てでなのはを投げ飛ばすように安全空域まで下がらせ、勢いそのままにフェイトを突き飛ばしたのだ。

だから思考の時間はあまり与えられていなかったのだ。

「……回避も防御も間に合わない。その上意識を失うぐらいのダメージ受けるのは解っていた。

そのあとフェイトに身体でも探られたらすり替えたジュエルシードを奪われる。

誰が標的にせよ、あの攻撃があった時点でお前にバレている可能性は高かったからな。

他の隠し場所を模索しながら、なのはを投げ飛ばして、手持ちのデバイスはダメだと思った。

となれば、目の前に差し向けられた相手のデバイスしかなかったってわけ」

位置関係が悪く背後から迫っていたためになのはのデバイスに隠すことはできなかった。

その場に放置するのもアルフやフェイトが回収する可能性が少しでもある以上できなかった。

「地球には灯台下暗しっていう諺があつてな。近い所のほうが案外気付かないものさ」

と、どこか満足げな顔で説明し終えたコウキであったが、実際にそれを聞いていた面々は少々呆れ顔だ。

苛立ちに顔を歪めていた彼女でさえ途中から頭痛を訴えるかのように額を押さえてしまった。

なにせ、

かなり長い余分な説明があつたものの、まとめてしまえば

『想定外が起こって慌ててたから、緊急処置で目の前にあつた物に隠した』

ということではしかないのだ。

だからこそ。

この話の肝が隠されてしまったことに気づいた者はいない。そもそもプレシアのアクションを誘い出してどうするつもりだったのか。

という点をまったく彼は語っていない。

ジュエルシード六つすべてを偽物とすり替えた理由も。

誘い出したいのなら本物のほうがいい。偽物とバレれば何もしない可能性もあつたのだから。

「フェイトが気付いたり、バルディッシュが私たちに教えてたらどうするつもりだったのさ？」

「その時はその時だよ。すぐにバレなきゃ隠し場所はどこでもよかったんだ。」

俺自身がさらわれるのは完全に頭になかったからな」

誰が知ろう。

コウキの目的を叶えてしまったのが他ならぬプレシアだったことを行動というのは必ず痕跡を残す。

どんなに執拗に消そうとも、今度は“消した”という痕跡が残る。

ゆえにコウキはプレシアに行動させたかったのだ。その本拠地を探るために。

だがそれだけでは確実とはいえなかったため、ジュエルシードをすり替えた。

偽物をフェイトに回収させて、後にその反応から探ろうとしていたのである。

だから実は、すり替えた事そのものがバレるとはあまり彼は思っていなかった。

プレシアの過去や人格ばかりに目がいつて技術者としての能力をちゃんと見ていなかった彼の失態である。

そのために、いやそのおかげでこういう状況になってくれたのだから結果オーライではあったが。

実はバルディッシュに隠したことも本物が取られる危険は増したが、最低でもフェイトたちの現地アジトは見つけられるとふんでの行動だった。

無論それで本拠地が解るのなら万々歳であったのだが。

結果としてすり替えに気付いたプレシアによって彼はさらわれた形で目的を達成したのである。

「呆れて物も言えないわね……で、そのデバイスを黙らせていたのはどういう手品なわけかしら？」

あまつさえ、いわれるがままに返すだなんて、どんなトリックを使っ
「

何もしてない」

言葉を遮る即答に一瞬空気が止まる。

「何をバカな、ストレージならともかくインテリジェントが主人でない人間のいうことなど！」

「聞くこともあるさ、インテリジェントならな。」

分野は違えどその程度ならあんたも解るはずだ。

インテリジェントデバイスに求められる思考能力と学習能力の高さを！」

「っ！」

魔法を詰め込んでおく記憶媒体でしかないストレージに対し、インテリジェントは発動の手助けとなる処理装置、状況判断を行える人工知能を有している。

意志を持つ為その場の状況判断で魔法を自動起動させたり、主の性質によって自らを調整したりする。

その上、人工知能を有しているため会話・質疑応答を使った意思疎通も出来る。

この意思疎通、当たり前だが主人として登録された以外の者とも可能である。

そうなれば当然その他者の意見が最適だと判断すれば主人以外の言うことを聞く可能性はある。

もっとも今回の話はそれとは別の話なのだが。

「……………どうもまだ勘違いしてるようだから言っておくが、俺は本当に何もしてないぞ。」

『隠しておいてくれ』とも『あとで返してくれ』とも言っていない。

「そもそもそんな余裕あの時なかっただろうが」

確かに。と誰かが頷く。

そして自然とみな視線がバルディッシュへと集まる。

ここまでの話を信用すれば隠していたのも返したのも単純にバルディッシュの独断だ。

彼自身がそれを最適だと判断した。だからこそ寡黙な戦斧は沈黙を続ける。

言い訳の必要などない。自分のやるべきことはやった、と。

いつものように黙って、その行動で自らの意思を示しただけだったのだ。

そもそもバルディッシュが黙っていて、なおかつ素直に返してくれたのは

コウキからすれば「そうなってくれると楽だな」程度の望みの薄い願望でしかなかった。

だからフェイトたちの態度から気付いていないことに勘付いた時。

まさか、という思いのほうが出た。だから駄目元で呼んだのだ。彼の名を。

そしたら即座に返してきたのだから、実の所それに一番驚いていたのはコウキだったのだ。

畏になってない畏。とは誰の言葉か。なんとも言い得て妙な話である。

作るつもりはなかった。畏にするつもりもなかった行動と決断が、デバイスの独断で、結果的に、そして勝手に畏となっていた。

引っかけた人間にすら、仕掛けた人間にすら、畏だと悟らせずに。

「……ところで、いつになったら救援よこしてくれるわけ？
いいかげん話のタネがなくなってきたんだけど……」

『あら、なかなか興味深い話だから聞き入っていたのだけれど、もういいのかしら？』

そうして、畏が動き出す。

アリシア

『あら、なかなか興味深い話だから聞き入っていたのだけれど、もういいのかしら?』

突然、ここにいるはずのない第三者の声が主の間に響く。

「っ!?!」

コウキの前に現れた空間モニターに妙齡の女性が映し出される。アースラ艦長リンディ・ハラオウン提督その人である。

(ああ、なんだ……どうして後ろなのはたちはご機嫌ナナメの顔になってんだ?)

モニター越しの、それも下がっている位置のために細かくは見れないのだが
ザフィーラを除く守護騎士・はやて子たちなのはの顔が、怖い。
比較的笑っているのだが、あれはよくない方の笑みだと瞬時に理解する。

アースラのほうが非常に危険なように思えてしまい、体が勝手に身震いするコウキ。
にっこり笑顔のリンディの顔が、妙にカチンとくるあたり理由を察するには十分だった。

(この女、余計なこと言いやがったな。さしずめ、全部俺の計画だったとか何とか、か?)

おそらく本人にとって想定外だったさらわれた事含めて。
でなければ一応さらわれた側としては心配されるより怒っている顔
を向けられる要因に覚えがない。

「…相変わらず盗み見がお好きなようで」

『人聞きの悪いことを。ただ、楽しそうに説明してる最中に割り込
むのもどうかと思って…』

こんな時に出歯亀してんじゃねえっ、という嫌味に

種明かしを楽しんでるんじゃないわよ、という皮肉が返される。

予想通りだが、それゆえにふたりの顔には能面のような笑顔が張り
付いていた。

『フフフフフ…』

「アハハハハ…」

上品な笑い声と乾いた笑みが両者の間で意味深に響く。

と、同時に。

無遠慮な音と共に扉をぶち壊すかのような勢いで進入してくる武装
局員たち。

どう少なく見積もっても二個小隊以上はいた。

「な、いつの間に!？」

アルフの驚きの声は彼らの騒々しい足音にかき消される。

そこまで広くない主の間、そのほぼ中央に集まっていた彼女たちを

囲むように局員たちは陣形を取る。

さすがのフェイトとアルフもここまで接近を許した上で囲まれたのでは迂闊に動けない。

双方単独なら突破する自信はあったものの、フェイトは母を連れてそれが出来るか解らず。

アルフにいたっては、そんなことを考えているであろうフェイトを庇わなくてはいけない。

それはいくら優れた魔導師とその使い魔でも困難であった。

「…迂闊だったわ……まさかジュエルシードを発信機代わりにするなんて！」

プレシアの指摘にコウキはあえて表情を変えなかった。

先程からずっと手の中で輝き続ける宝石だけをぐっと握りしめる。

そう、輝き続けているのだ。それはエネルギーを発していることに他ならない。

たとえば意図的にエネルギーを電波のように飛ばすことができるのなら。

あるいはあらかじめ『探す』側がジュエルシードの波長を目印に捜索していたのなら。

時の庭園にあるすべての管理局対策はほとんど無意味なものとなる。

何せジュエルシードが発見されたのは最近の話なのだ。

いくらプレシアでも完全封印状態ならともかく、それが微妙に外された状態の、

いわば半覚醒状態のジュエルシードのエネルギー波を隠す術を用意することは無理だったうえに必要性も本来ならない。

誰が想像するというのか。自らの本拠地である庭園内で自分以外がジュエルシードの力を使うなどと。

しかも“警備システム”がまとも起動していないのも
ジュエルシードのエネルギー波による麻痺だとするなら納得がいく。
そう、この状況はあまりおかしな状況ではない。彼女自身の言うこと
おり『迂闊』だっただけ。

それを招いたのがプレシア自身とバルディッシュの独断というのは
皮肉的ではある。

『……………プレシア・テストロッサですね。』

時空管理法違反、及び管理局艦船への攻撃容疑などであなたを逮
捕します。

出来れば武装解除して素直にこちらに身柄を預けてもらえるとあ
りがたいのだけど……………』

モニターの中のリンディが玉座の前で立っていた彼女に視線を向け
る。

「……………フン」

『無理そうねえ……………』

可能な限り下手に出た物言いをしたつもりリンディだが
返ってきたのは馬鹿にしたかのような息遣いだけ。

予想通りといえば、予想通りな態度であっただけに武装局員たちは
力尽くでの拘束に踏み切ろうとさらに陣形を狭め彼女への包囲網を
より強固にしようとした。

「背後を固めろっ、逃げ道をふさげ！」

まだ完全に囲めきれていなかった“輪”を完全にするため彼女の背

後をとった。

「…ん、これは…奥に何か？」

「っ!？」

そのうちの一人が呟いた言葉がプレシアの表情を一変させた。

「扉、か？」

玉座の背後。

まるで隠されるかのようにあつた解りにくい形の扉。

開いた先にあつたのは一本道の通路とその左右を埋め尽くすように配置された透明な円柱の容器。

中身には何かしらの特殊な溶液が入っているようだった。

「……あれは？」

だが、そんなものより局員たちの視線を釘付けにしたのは目の前のそれ。

隠されていた部屋のほぼ中央にある他より大き目の容器。

大きさや配置こそ違うが作りそのものは他の物と大差ないように見える。

あくまで、

中に入っているソレを無視するなら、だが。

「私のアリシアに近寄らないでっ!…!」

これまでのどれより強い叫び声。
半ば悲鳴にも似たそれと共に放たれた雷撃は間にあつた玉座を破壊しながら

隠し部屋に足を踏み入れていた局員たちを襲った。

「ぐあああつ！」

「うあああつ！！！」

短い苦悶の声をあげて彼らは倒れこんで動かなくなった。それを見て、デバイスを構えたのは残った局員たちだ。もはや投降の意思なしと判断しての拘束に踏み切ろうと

「馬鹿つ、防げ！」

しかしそれはあまりにも遅い。攻撃に移ろうとした局員の行動も。防御を促した少年の叫びも。だから少年に出来たのはそばにいた少女と使い魔を強引に伏せらせただけ。

「邪魔よ！」

かざした手の平から紫の光がこぼれる。

単純な魔力の放出に近いそれが、それだけがすべてを終わらせた。

「くそつたれ……」

「あ、ああ………」

プレシアを取り囲むようにしていた局員たちは皆、無造作ともいえるほど乱暴に放出された魔力の波動と雷に吹き飛ば

され、
たった一撃で戦闘不能状態に追い込まれていた。
短くうめく声が聞こえることから命に別状ある者はいないが、
それでも動ける者もまた、局員にはいなかった。

「なんで……なんでっ……」

コウキによって床に突っ伏したことで雷撃を避けたフェイトはその惨状に言葉にならない感情があふれてきて止まらなかった。絶対に母にはしてほしくなかったことが、こんなにあっさりと起きてしまった。

しかも自分の目の前で、何のためらいもなく。
覚悟していなかったといえば嘘になってしまうが、
フェイトは本当に彼女には誰も傷つけてほしくなかったのだ。

「母さんっ!!」

どうして、と責めたいのか。なんでなの、と聞きたいのか。
両方のようでもどちらでもないような呼びかけにプレシアは

「アリシア!!」

見向きもしなかった。

まるでフェイトたちのことなど忘れてしまったかのように。
そしてさっきまで吐血した人間とは思えないほどの速度で駆け出し
ていた。

思わず立ち上がりそんな母を追いかけようとした少女の脚がぴたり
と止まる。

プレシアを自然と目で追っていたフェイトがソレを目にしたのは当たり前前の話だった。

本来なら玉座が邪魔で見えなかったはずの隠し部屋が、その中が見えていたのだ。

プレシアが自ら玉座を吹き飛ばしてくれたおかげで。

駆け出した彼女が愛おしそうに触れたソレ。

ガラス越しだろうと関係ないといわんばかりに頬ずりまでするプレシア。

フェイトはそれを愕然とした表情で見詰めるしかなかった。

なにせ、それは決して知らない顔ではなかったからだ。

遠い昔の過去の記憶。

まだ母が研究にのめりこむ前、仕事が忙しくなって滅多に家に帰ってこなくなる少し前。

母一人娘一人の親子だった彼女たちの、なんてことはない日常のあちこちの記憶で、

プレシアは時折あんな顔をしていなかっただろうか？

一緒に動物園に遊びに行ったとき。

ピクニックに行って一緒にお弁当を食べているとき。

一生懸命描いた母とまだ普通の猫だったりニススの絵を見せたとき。

ちょっと仕事が忙しくなってきたワガママを言って困らせたとき。

「……………あ……………?」

そんなとき、母は確かに。

「アリ、シア……………?」

そう、自分を呼ばなかったか?

穏やかに、そして少しの照れと隠そうともしない愛おしさを込めて。

『うふふ、アリシア』

『嬉しいわアリシア』

『ごめんなさいアリシア』

『アリシア、ありがとう』

『大好きよアリシア』

「あ…………… ああ……………」

それが視界に入らないわけがない。

プレシアを見ていたのなら当然見えてしまうソレ。

巨大なカプセルのような円柱の透明な容器。

特殊な溶液で満たされたその中で体を丸めて浮かぶソレ。

十人中十人がどんな穿った見方をしようがヒトにしか見えないソレ。

揺れる髪は美しい金色。

あまりにも小さい体が生まれたままの姿で眠るように溶液に浸かっていた。

なのはやはやてより、さらに幼い相貌の少女はどう見ても

「……フェイ、ト？」

にしか、アルフにはそうとしか見えなかった。
だが。

「そんな失敗作と一緒にしないで！！」

耳ざとくも使い魔の失言に反応したのは彼女らに無関心だったはずのプレシアだった。

容器で眠る少女には穏やかで優しい表情を見せていた彼女だが、フェイトたちに視線を向けたときには般若のそれに変貌していた。

「アリシアは、アリシアは……私の可愛い可愛いただ一人の娘。

慰み程度で作ったそんな人形と一緒にするなんて、使い魔ともども忌々しいっ！」

激情のまま叫ぶプレシアの言葉が誰に……向……け……られたものかなんてことを間違う人間は誰もいなかった。そう、不幸なことに誰ひとり間違えなかったのだ。

『……うそやる……そんなんあんまりや……』

『や、やめてよ……』

その場にいれば、彼女に寄り添っていたであろう少女。

あるいはプレシアに突貫していったであろう少女は残念ながら、ここにはいない。

モニターの向こうで普通の彼女たちには似つかわしくない怯えたような声がこぼれ出るだけ。

「…わかってフェイト？ あなたのことよ」

いつそ感情に任せて暴力的にまくしたててくれた方がまだ良かっただろうに。

嘲笑すら交えて、穏やかにすら聞こえる口調で彼女を名指しする。

「っ！」

知らず震えあがる身体。

茫然なのか唾然なのか、驚愕すら乗り越えた表現のしようのない表情^お。

中途半端に開かれ声もでない口は閉じることさえできず、歯はまるで壊れた玩具みたいにガタガタ音をたててかみ合わない。

だと、いうのに

視界にはプレシアと、その“一人娘”のアリシアしか入らない。映らない。

「せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。

取ってきてと頼んだ物をろくに集められず、使い魔やデバイスのしつけもできず、

あまつさえ私に逆らってそんな男を庇うだなんて………ええ、もう見事なほどの失敗作……」

プレシアの言葉はナイフより鋭利に、まるで紙でも裂くように簡単

にフェイトを犯す。

耳をふさぎたいのに、目を閉じてしまいたいのに、しかしフェイトはまるでその機能が欠如したかのように動かない。

否、動けない。

「アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ

アリシアはわがままも言ったけど私のいうことをとてもよく聞いてくれた。

アリシアはいつでも私に優しくかった……」

アリシアは、アリシアは、アリシアは。

繰り返されたのは結局それだけで、それがすべてで、フェイトに向けられたのはたった一言だけ。

「……………フェイト、あなたなんかと違ってね」

世界が崩れる。揺れる。

地面が割れたわけでも足がぐらついたわけでもないのに、その足はちゃんと立っているのに、まるで空を飛んで浮いていくいるような錯覚。

それが、フェイトを容赦なく殺していく。

「やっぱりつくりものの命に頼ろうとしたのが間違いだったのよ。

そんな人形がアリシアの代わりになるなんてありえない話だった。いうことを聞かせるのに都合がいいから娘扱いはしていたけど……

…ああ、もういいわ」

もはや立てていることでさえ不思議なほどのフェイトを見てもいい彼女はい彼女は

さもおかしそうに、さもいま思い出しかのようには、眩くと振り返って、ようやく初めてフェイトにきちんと視線を向けた。

「いいこと教えてあげるわフェイト」

けどそれは哀れむような、冷え切った目で。

「あなたを作り出してから、ずっとね」

それでいていまにも笑い出しそうに口許をゆがめて。

「私はあなたが」

少女を殺す言葉を吐き出した。

「大嫌いだったのよ…」

大好き、なのに。

たとえ“今は”愛してくれなくても。

過去では確かに愛されていたんだという記憶があった。

だから、本当に好きで、いつか好きだとまたいつてほしくて。

だから母の願いを叶えていけばいつかあの頃に戻ってくれると。それだけを願いにして、それだけを想って、それだけが支えだった。けど、その記憶さえ他人ヒトのもので、自分は嘘ばかりで、まともな人間ですらない、作られた身代わりにもならない人形で。

そうか、はじめからいらなかったんだ私は

世界の崩壊が止まらない。
何も、何も、誰も、誰も壊れていないのに、フェイトだけが壊れていく。

『じらっじらっしっかりしい！』

『フェイトちゃん！』

もはや誰を呼ぶ、誰の声だということすら解らない。
ただただ壊れていく。当たり前にあったものが、当たり前だと思っていたものが。

それで終わってしまう。フェイト・テストロッサという少女幻想が終わる。

「ふぞけるなああっつ！……！」

それを、
それさえ、ふざけるなど。
怒鳴りつけて蹴散らすような声が、

壊れていく世界を壊して。

崩れ落ちる身体を支えて。

消えさる少女をほんの少しだけ浮き上がらせて。

なんでこの人、泣きそうな顔で怒ってるのかな？

そんな小さな疑問だけ残して、少女の身体から力という力が抜け落ちる。

「つつ！？」

お前っ、いま何を踏みにじったのか本当にわかってるのか？」

どこか懇願にも似た悲壮な言葉。
壊れてしまった少女を抱いて、彼は初めて泣いているような瞳をプレシアに向けた。

「いまも、誰の気持ちを踏みにじり続けているのかさえ、まだわからないのかっ！？」

何でわからないんだ、と嘆くように叫ぶ。
だが、それは。

「くだらないわ。

私のすべてはアリシアのもの……この子のためなら私は何だって
踏み潰してみせる！」

致命的なまでに、届かない。

(どうして俺の言葉は、ちゃんと届いてくれないんだよ！)

「……もう知らない。もうお前のことなんか知るかつ」

ゆっくりとフェイトをその場に寝かしながら、震える声が告げる。
でもそれはまるで『お前も助けたいんだ』と駄々をこねる子供のよ
うな声だった。

「フェイト……」

少女をアルフに任せて、焦点の合っていない見開かれたままの瞳を
一瞬見て立ち上がる。

もうそこに泣きそうな少年の顔はなく、あつたのは敵を見定めた男
の顔。

味方はおらず、手枷をされ、魔法を封じられていようと関係なく、
コウキは『もう』もしくは『やっと』戦う意思を持って彼女の前に
立つ。

「……随分と勇ましいことで。そんなにあのお人形が気に入ったのか
しら？」

「どちらかといえば……お前が気に入らない」

「……奇遇だわ、私も同感よ。」

でも、そうね。おとなしくそのジュエルシードを渡すなら」

「もう黙れ、アリシアごと吹き飛ばすぞ」

静かに、しかし有無を言わせない怒気がこもった声に冗談やハッタリはなかった。

これが証拠だといわんばかりに握り締めていた宝石からもれる光はもはや暴走のそれに近かった。

「アリシアには指一本触れさせないっ！」

娘を傷つけるという禁句中の禁句を口にされたプレシアの顔が怒りだけで歪む。

紫の魔法陣が展開されその手から同じ色の雷がコウキに向かって一直線に放たれる。

避けようと思えば簡単なまっすぐすぎる一撃。

しかし背後にはフェイトとアルフ、身動きできない局員たちがいた。避けるわけにはいかず、また避ける必要もなかった。

「舐めるなっ！」

両手でかざす一つの輝く宝石。

そのエネルギーが雷を受け止める。

いかに大魔導師と呼ばれるプレシアでも、

いくら庭園の魔導炉から魔力供給を受けている彼女でも、

ジュエルシードに蓄えられているエネルギーとでは総量に差がある。単純なエネルギーの撃ち合いでは、いずれ彼女のほうがガス欠を起

こす。

コウキは別にそれを狙っていたわけではないが、プレシアにはそうだと思えてしまったのが、いけなかったのか。

展開されていた魔法陣が変化する。

円形はそのままに、ただ中身の模様が変化していく。

「なにをつっ!？」

問いかげながらも警戒度をあげて目の前の敵を見据える。

宝石を構え、何が行われてもすぐに対応できるように彼女の一挙手一投足に集中する。

だから。

「……フエイ、ト？」

背後の不思議そうな彼女の声が聞こえていなかった。

「死になさい!」

そうしてプレシアの指が鳴る。魔力が動いて、何らかの魔法が発動する。

けど、コウキの視界には何の変化も訪れない。

一瞬の困惑と、目に見えない何かを仕掛けたのかと可能性を模索し始めたその瞬間。

「っ、避ける!」

あまりに気配がなさすぎて、反応が遅れた。
アルフの叫び声がなければそれこそ無反応だっただろう。
しかし体が半分程度振り向いたときにはもう手遅れで、
それでも視界の半分はなんとか背後を見ることが出来て、

(…え?)

驚きの声が出る時間さえ無くて、ただただ呆然と振り上げられた斧
槍が目に入る。

「あ………」

声があがるより早く、黒の一撃がコウキの体を引き裂いた。

『コウ兄!』

『コウキちゃん!』

あまりに予想外すぎた攻撃にまともな防御や回避ができるわけもな
く、

その衝撃と痛み、上回る困惑に耐えられず体が崩れ落ちる。

そうして床に倒れこむまでのほんの一瞬に、彼は見た。

『…どうして………なんで、なのっ?』

自分を攻撃した金色の髪の少女を。

『フェイトちゃんっ!?!』

バルディッシュ

それはまるで悪夢みたいな光景だった

高町なのはのちにそう語る。

友達になりたいと願っていた少女が、大好きな人を傷つけた。それに勝る悪夢など、彼女は想像できない。

『フェイトちゃんっ！！』

やめて、と。

なんで、と。

いくつもの想いが混ざった呼びかけは少女には届かない。

最初に開かれた位置からモニターは動かない。動けないのだ。

もともとこの庭園には認められた者以外が外から、そして内から外への通信を阻む機能があった。

ジュエルシードの力でそれを一部麻痺させているから、できているだけ。

そして武装局員たちの転送もその位置を把握し警備システムが麻痺したために可能とされたこと。

操っていたコウキの意識が落ちたのか、ほかのことにジュエルシードを使えなくなったのか。

援軍を送ることは無論のこと、モニターの位置を変えることすらア

「スラ側からでは困難になっていた。

だからなのは達から見えるのは襲いかかった少女の背中と襲われて崩れ落ちた少年。

そして口元を歪めたプレシアと、あまりの驚愕に固まってしまったアルフだけ。

「……うっ、くっ……」

『あっ』

僅かに漏れる少年の苦悶の声。

生きていた。無事を喜ぶ面々はしかし、再び振り上げられた斧槍に色を失う。

「や、やめてくれよっフェイト！」

それを止めたのはやっと体が動いたアルフだ。

背後から羽交い絞めにするようにしてフェイトにしがみつく。

彼女からすれば倒れていた主人がいきなり立ち上がってコウキを襲ったのだ。

その前にフェイトについての衝撃的な事実を聞かされた後だったこともあり、

アルフは訳が分からなくなって思考が完全に停止しきっていた。だが再び攻撃を仕掛けようとしたのを見て、本能的に止めに入っていた。

「フェイトどうしたんだよ、いったいどうしてそいつを……」

（え、なんでフェイトにこんな力が!？）

抑え込んでいる手を押しつけようとする力が、強い。
どう考えても少女の細腕からでは信じられないパワーにアルフは力
加減がうまくいかない。
下手に力をいれすぎるとフェイトを傷つけてしまうが、弱めれば抑
えられない。

「……………」

「フェイトっ、なんとかいってくれよ！」

アルフからの呼びかけにも何の反応も見せない少女。

彼女はただ振り上げたデバイスをコウキに向けて振り下ろそうとし
ているだけ。

邪魔するアルフの力を振りほどこうとはせずに、ただ力任せに同じ
動作で押し切ろうとする。

それが、玩具の動作を無理やり止めた時に似ていると思ったの
はコウキだけか？

「なにを……………なにをしたプレシア!？」

痛みに呻きながらも顔をあげた彼は彼女を睨みつけた。

この場でプレシアを除けば唯一フェイトを正面から見れていた彼は
気付いてしまった。

なにせフェイトの眼は先程から何も変わっていない。

焦点の合っていない見開かれたままの瞳が、誰のことも見ていなか
った。

「念のため、と思って仕込んでおいて正解だったようね」

その視線をむしろ愉快だといわんばかりに笑みで受け取ったプレシアはさらに嗤う。

「意識が残っていると作用しづらい欠点ばかりの魔法だから今まで使えどころがなかったけど、

人形にはもうそんなものいらないでしょう……これからは本当に私の操り人形になってもらうわ」

「操り、人形だと？」

「……まさか？ 人体操作の魔法！？」

驚愕に満ちたリンディの声に全員の視線が集まる。

「それはなに？」と問いかけてくる視線たちに彼女はゆっくりと語る。

それこそまるで自分を落ち着かせるためのよう。

「魔法技術が進歩していく中で、あまりに危険だったりあまりに非人道的だったりして

術式や存在そのものを抹消された魔法が存在するの……人体操作はその一つだといわれている。

でもそれは、管理局が誕生するずっと前に消え去った魔法のはず

「さすがね、でも一つだけ間違いよ。これは消え去ってなどいかなかった。

残っていたのよ。伝わっていたのよ。」

そうっつ、だからこそ私はすべてを取り戻すことができる！ ジュエルシードさえあれば！！」

『なにを！？』

支離滅裂のような言葉に困惑するなか、たった一人。

「人体操作……記憶転写型クローン、ジュエルシード……次元震……」

呟くようにそれらを口にしたコウキは愕然と顔を青ざめた。

（全部繋がる。繋がってしまう………なんで今まで、気付かなかつ）

「の都、アルハザード……」

がっくりと彼の顔が落ちる。

彼の呟きは前半はほとんど聞こえなかったが残りのはっきりと聞こえていた。

「……フェイト、後ろのも前のも始末なさい」

邪魔をするもう無用の使い魔と何かを知っているらしい少年。プレシアからすればどちらも“いらぬ”ものだ。

「はい、フォトンランサー」

そして棒読みの機械のような声があまりにあっさりとそれを口にす
る。

「なっ!?!」

アルフの目の前と倒れるコウキの真上に現れるあまりにも見慣れている光の槍。

大事な主人に魔法を向けられた。ということより、何より。

それに非殺傷設定がかか………っていないことがアルフに絶望を与えていた。

本当にプレシアの操り人形になってしまったのだと。

「くっ、ちきしょうっ!」

フェイトの身体を離して飛び上がる。

ランサーを避けるためというより至近距離で食らえば主人にもダメージがあるからだ。

そして飛び上がった彼女はそのまま壁を蹴ってコウキの上にセットされたランサーを破壊する。

「っ、待つてな。あんただけでも!」

そのまま真横に着地したアルフは、意識がないのかぐったりしているコウキを片手で抱える。

「逃がすと思つて?」

迫っていた声。かざされていた手。

「!」

咄嗟に防御魔法で雷を防ぐ。

自分たち二人を囲むような半球上のバリアフィールド。その表面を這うように走って削っていくプレシアの雷。

「古の都アルハザード。あそこには全てがある。

行けば取り戻せる。いいえっ絶対に取り戻す！

アリシアを、あの子と私にあつたはずのっ、続いていたはずのっ、あの日々をっ！！」

だから、その邪魔をお前たちにはさせないと。魔力がさらに放出される。

彼女の叫びには狂気がある。だがそれ以上に悲痛な思いがある。

“こんなはずじゃなかった”んだと。これは何かの間違いだと。

だから、そんな過去や未来は変えてみせると彼女は運命を否定する。

それをどんな想いで聞いていたのか。

「なんてことなの……」

誰かの悲哀に満ちた呟きがこぼれる

「そんなの無理、無理よ……だって、だって、アルハザードは私が滅ぼしたのに！」

何かが違う悲痛なほどの叫びはそれゆえに、逆に滑稽で、しかしあまりにも真実味があった。

「はっ！？ あんたなに言って」

だからだったのか。雷撃が一瞬止まる。プレシアの顔に僅かに動揺が走っている。

それを見逃すアルフではない。飛び上がって隠し部屋から主の間へ。

「っ追いなさい！」

「……っ、やめてくれよフェイト！」

あたしだよ、アルフだよ。解らないのかい!？」

意識が切れている少年を抱えて、主人からの攻撃を避ける。

「……っ、くそまたか!？」

また意識が戻ったコウキは状況の変化を即座に理解して気付いた。記憶が飛んでる。と。

(なんだ、俺はいまなんて言った!?)

アルハザードに気付いたあとの記憶が少し抜けている。

いったいつのまにアルフに抱えられていたのか全く記憶になかった。

(これはいつたいなんなんだ。闇の書の呪いとは違う。)

この前の記憶が流れ込んできたのとも何か違う。そもそもアルハザードってなんだよ!？」

いつたいなんだ、俺にいつたいなに起こっている!?)

僅かな記憶の空白と、その時に何かを口走った感覚。それだけ。それしか解らない。

そのくせ知らないことを知っているかのように喋った己への不信感。自らの中に何か別の誰かがいるかのような気分に焦燥だけが募る。

何も解らないのに『不味い』ことだけがはっきりわかる。何で不味いのかも解らないのに。

その不気味さと怖さに彼は自らの状況を完全に失念してしまう。

「うっ、しまっ！」

フェイトから放たれた金色の雷がコウキを抱えていた腕をかすめる。腕が焦げ、痛みすら感じない強い痺れに手が離れる。

「ぐっ」

転げ落ちたコウキは運悪くアルフよりフェイトに近い位置で止まる。

(……やばっ!?)

落ちた痛みが思惟を現実呼び戻すが、時すでに遅し。

「引き裂いてあげなさいフェイト」

「バルディツシユ、サイズフォーム」

「フェイトつやめて！」

非常の命令。

意思のこもっていない声。

自らのデバイスへの機械的な命令。

それを

『.』

「…………サイズフォーム」

『.』

バルディッシュは強く拒んでいた。

「……………バルディッシュ?」

強い拒絶の『違う』という声が何度も何度も繰り返される。

『……………sorry.』

そしてバルディッシュは自分を見上げる彼の視線にそう返した。

待機状態からデバイスフォームになったことがそもそも失態だった。主が起きて、自分を起動させたのを少年への援護と受け取ってしまった。

少女の性格と直前の精神状態を考えれば、あり得ないことだということに。

だからバルディッシュはその自らの軽率さに激怒していた。

「何をしてるのっ、さっさとしなさい!」

「サイズフォーム」

より強い命令に、意識のないフェイトがより強くデバイスに命じる。主人として登録されているため出来る強権を半ば発動させながら。

『…n…o…』

それを、彼は拒絶する。

彼のコアを示す金色のクリスタルが、弱々しく点滅する。命令をきこうとする自らを否定して、押しとどめる。

ギチギチとガタガタと、変形機構が動いては戻り、動いては戻る。

こんな命令はきけないと、彼らしく言葉少なに態度で示す。

これは主人が挑んだ戦いではない。

これは主人の望みを叶えるための戦いでもない

これは主人を守るための戦いでもない。

ならばどうして『いま』戦えるというのか。

こんなことのために自分は作られたのではない。

自分が作られたのは、^{マイスター}作成者が自分に託したのはそんな役目ではない。

『主を護り、その道を拓く刃であること』

願い半ばでそれを自分に託していった^{リリス}生みの親のためにも、

こんな自分を理解し信頼してくれた^{フエイト}優しい主人のためにも、

バルディッシュは『いま』戦うわけにはいかなかった。

だから彼は必死で抵抗する。

デバイスとして当たり前前の主人の命令を聞くというシステムに反抗

する。

それこそが自分がすべきことだと、これこそ戦う相手だといわんばかりに。

「よせバルディッシュ！ それ以上はおまえのAIが！」

保てない。壊れる。

火花が散る。エラーの山が彼を襲う。

『…no.』

そんなことは百も承知で、それでも彼は『違う』といい続ける。

「……………ああ、まったく、ホントに……」

呆れるような、それでいて焦がれるような声と共に立ち上がる。

ダメージが消えない体を強引に立たせる。

「名前だけじゃなくて中身まで格好良すぎだお前！」

羨ましいよ。と小さく呟いて、フェイトに突貫する。

近寄りすぎていた彼女は反応できないまま腕をとられて引き寄せられる。

「バルディッシュ、お前の覚悟“勝手に”もらう！」

『…why?』

金色のコアクリスタル。

そこへ目掛けて握りしめていた小さな宝石を叩き込む。

『…y…o…u…p…l…e…a…s…e』

「ああ、分かってるよ」

『……………』

途端、抵抗していた声は止まりコアの点滅も無くなって光が消えた。理由に察しがついたのはプレシアだけ。

「……………訳が分からないわね。」

ジユエルシードの力でAIを強制休眠状態にするなんて。

身を守る武器を手放してまですることなのかしら？」

心底分らない。と侮蔑すら含んだ顔でコウキを睨みつける。

「ああ、今はそういうことにしておいてやる、よー！」

命令がないと動けないのか。

腕をとられたまま止まっていたフェイトに抱きしめるように腕の中に入れる。

手枷により輪状になってしまっている腕に小柄な少女を入れる。

傍目からは抱きしめているように見えるが実際は現状で出来るフェイトを封じる唯一の方法である。

彼女の体格は小さく、腕でがっちり絞めてしまえば身動きがとれないうえに

思うようにバルディッシュがふるえない。密着され過ぎて足も動かせない。

コウキは知らなかったがアルフでさえ加減に難儀したパワーもこの体勢では満足にふるえない。

いってしまえば人間バインドである。

「振り払いなさい！」

プレシアからの命令に力尽くで解こうとするが、そもそもうまく力が入れられない。

それを好機ととらえたのはアルフだ。今ならフェイトを気にしないでいられる。

そのうちにプレシアをぶっ飛ばす。と力んだ彼女に声が届く。

（アルフ、いまのうちに逃げてくれ！）

（っ、あんなんであたしの……）

フェイトを抱きしめる形で抑えている彼からの念話。

オープンチャンネルで呼びかけるものと違い、

念話には電波でいうところの周波数のようなものがある。

これを教えない限り、個人だけへの念話はできないはずなのだ。

（悪い、バルディッシュから拝借した。それよりも今は逃げる。

お前だけでプレシアの相手は無理だ。だいいち俺もそんなに長く抑えられるわけじゃ……）

「スタン、シヨック」

「があああっ！」

逃げられない距離でのスタン効果の電撃。

手足が動かせないのなら単純な魔法攻撃。

だがそれは自分へのダメージも気にしていないものだ。

コウキへの電撃と合わせて密着した少女も巻き添えをくう。

「うっうっ」

「……………」

それを、痛いとも、苦しいとも、いわない口。
何も変わらない表情と、どこも見えていない目。

それさえも慈しむように手枷で思うように動かせない手で金色の髪をなでる。

(……………フェイトを助けたかったら行くんだ！　なのはたちの所へ！)

「く、そおおおっ!!！」

何も出来ず主人を置いて逃げることに出来ない自分に歯噛みして、アルフは駆け出した。

追撃してくるプレシアの雷を避けながら、途中で転がっていた局員たちを

何人が担ぎ上げて庭園を突破して転移する。その背後で。

「ぐあああああああっ!!！」

彼の断末魔のような絶叫が響いていたのを、彼女は必死の思いで振り切った。

やっと始まる・少女たち(前書き)

シリアス続かない俺。

やっと始まる・少女たち

5月8日 PM09:03

アースラ・艦橋

『交換よ、そちらが保持しているジュエルシード。全てこちらに渡しなさい。』

場所はこの前六個が発見された海上、30分後にフェイトに取りに行かせるわ』

その要求はコウキの意識が途絶えたのが確認されたあと、すぐにアースラへと告げられた。

モニターは最初に開いた時から一度も途切れておらず、状況は理解できていた。

画面に映るのはプレシアとその背後に仕えるように棒立ちしているフェイトだけ。

アルフが何人か外に連れ出してくれたが、それでも大多数がその場に取り残されている。

「……………念のため聞いておきますが、要求を断った場合は？」

おそらくは予期していたのであろうリンディはそれを平然と受け取った。
かなり感情的になっていた民間協力者たちは既に強引にブリッジから追い出されていた。

『30分ごとにこちらにいる局員やこの男の命が消えていくだけよ』
画面に意識を失った彼の顔が映し出される。

プレシアが彼の頭を掴んでモニターの前に突き出したのだ。
そのあまりにも人質をとった犯罪者のお決まりのセリフと態度に溜息しかこぼれない。

もつとも、その溜息の原因は正確には彼女ではないのだが。

「……………はあ、わかりました。要求をのみましよう。他に何か条件は？」

「艦長!？」

最終的にそうなるであろうとは考えていたが、
かなりあっさりと要求に応じた態度にクロノは愕然とした表情を向ける。

「分かってるわクロノ、でも彼らの命には代えられないわ」

『……………良かったわ、話の分かる人で。』

そうね、現場に来るのは一人だけよ。監視ぐらいは許してあげるけど、

周囲にほかの人間を見つけたら命の保証はないわ…』

「ええ、では30分後に」

返答はなくブツリとモニターの映像は切れ通信を入れられなくなった。

そしてアースラのブリッジに長い沈黙が訪れる。

奇襲でのプレシア捕縛作戦が失敗したうえに局員を人質にとられたのだ。

当然といえば、当然なのだが、それにしても空気が妙だった。重いのだ。非常に空気が重い。いや、重すぎる。

かつてこのアースラでこれほどに重苦しい空気になったことがあっただろうか？

ブリッジ要員はその慣れない息苦しさに一言も口にできない。

あのエイミィですら身動きが取れずに固まってしまっている。

なぜなら、クルーたちは全員原因に察しがついていたのだ。

というより原因となっている人の存在が強すぎるからこうなっているわけなのだ。

その人がこんな状況で無言を保っていることだけでも異常なのに、かもし出す空気も気配も表情も圧力も怒気も殺気も、どれも尋常ではない。

後半のものに限っていえばクロノでさえ感じたことはない。

そんな彼女が、

「…もつどつしてくれようかしら？」

などと嬉しそうに言い出すものだからクルーたちは縮み上がった。

普段通りの声色の、はずなのに。

表情も、不自然なくらいに、笑顔なのに。

言葉だって何もおかしなことはいつていない、のに。

「少し……好きにさせ過ぎたかな、うふふふ……」

誰も彼女、リンディ・ハラウンを見ようとしなかった。

見てはいけないと本能が訴えてくるので息子ですらあらぬ方向を見ていた。

その隣ではもう号泣寸前のエイミィが「なんとかして！」と袖を引っ張っていたが。

「ねえクロノ……」

「は、はい!!」

呼ばれて即座に向き直って、後悔する。

向き直らなかつた場合はあとが怖いので同じことだろうが。

なにせ彼女はいま、実の息子ですら見たことのない種類の笑顔で微笑んでいた。

「なのはさんたちを呼んできてくれる？」

「わかりました!」

即座に駆け出してブリッジを後にする執務官。

顔には妙な必死さと、安堵が浮かんでいた。

() () () に、逃げたあつ! () () ()

彼女の息子という唯一の希望を失ったクルーたちは

クロノがなのはたちを連れて戻るまで生きた心地がしなかったという。

それもこれも。

一瞬モニターに映った彼が笑っていたことが原因だった。

同日 PM09:30

海鳴市近郊海上

日が落ち切った暗い海。風は弱く海は比較的穏やかだ。

その一部分に魔導師にしか感知できず侵入もできない結界が張られている。

そんな結界の中、黒さだけが目立つ暗い海の上にひとり空を舞う白い服の少女がいた。

「……………」

ジュエルシード引き渡し役に任命された高町なのはである。

その表情がひどく落ちているのは重要な役目を任されたから、だけではない。

「フェイトちゃん、コウキさん……………」

（なんで私には力がないのかな、なんで私の手は小さいままなのか

な?)

デバイスを握る歳相応の小さな手を、どこか責めるような目で見つめてしまう。

一方的に友達になりたいと願ったきつと優しい少女に何もできず、いつか再会できたのなら全てを賭けて力になると誓っていた男の子を護れず。

少女は哀しい真実に心を壊され、操り人形にされた。

男の子にはまた傷が増えて、囚われの身になってしまった。

「悔しいよレイジングハート、私また何もできてない……」

『……………』

ただの小学三年生の女の子なら、まだそれは言い訳になっただろう。しかし残念ながら彼女にはもう魔法という力がある。

RHというデバイスとユーノという先生の下で学んできたそれ。

最初は「こんな自分に力があるのなら」と手伝っていただけだったジユエルシード集め。

フェイトに出会い、彼女に惹かれてもつと近くに行きたいと願って飛んでいた。

そこにコウキが入ってきたことは、単純に嬉しかった。

一緒に飛べるなら、きつと役に立てると、今度は私が守るのだと。

決意していたはずの少女の願いは一度も叶うことはなく、なのはのいない所で話が進んで

なのはがどうしようもない場所で出来事が起こって、結局自分はまた安全な場所で置いてけぼり。

それでは何のための力なのか。何のための魔法なのか。

なのはにはもうそれが解らなくなってきた。

『……マスター、来ました』

主人の弱気な吐露に珍しく返答せず黙って聞いていたRH。

彼女が声を発したのはまさしくその少女の来訪に対してだけだった。

「フェイトちゃん……」

ゆっくりとしたスピードで飛んでくる黒衣の魔導師。

見間違っわけもなく、彼女がやってくるのをただ待つ。

RHが表示していた時刻を見れば本当にきっかり30分後だった。

しかし。

「フェイトちゃん、だけ？」

『周囲に他の人間の反応はありません。彼女だけのようです』

なのはの疑問をRHが補足する。本当に彼女だけのようだ。

だからこそ困惑する。交換ではなかったのか、と。

目の前。距離にしておよそ8メートル弱ほどでフェイトは止まった。彼女からすればほとんど一瞬の距離でなのはからすると反応が間に合わない嫌な距離である。

『ジュエルシールドは持ってきたのかしら？』

フェイトの横。小さな空間モニターが現れる。

そこにはプレシアと縛られている局員たち。そして。

手枷がつけられたまま鎖で天井から吊るされていた彼の姿が映され

ていた。

「コウキさん！」

『…時間がないの、早く渡してちょうだい』

いくら多少大人びていたとしてもなのは本当に小学三年生だ。想い人のその痛々しい姿を見て、平然としているという方が酷である。

とはいえ、そうもいつてられない状況であるのも確かなのだ。

「っ、ちょっと待ってください。」

ジュエルシードとコウキさんや局員さんたちの交換だったはずで「す」

『ええ、解っているわ。でもこの男がやったように偽物を渡す可能性もある。』

ならまずは受け取ってその真偽を確かめてからでないか。

こちらとしても人質を解放するわけにはいかないのよ』

「そんなんっ！」

なのはとてある程度の事情は見ていたし聞いていた。

偽物かと疑うことは予想の範疇だったが誰一人も解放しない場合は考えていなかった。

だからなのはは悩んだ。ここでジュエルシードを渡していいものかと。

ジュエルシードは全部で21個。

フェイトが集めたのは最終的に5個。アースラ側が集めたのは1

0個。

残り6個はこの海上で発見されコウキによってバルディッシュに隠された。

つまりこちらの10個すべてを渡すと理屈の上ではプレシア側に全部がそろうのだ。

バルディッシュに隠された物が簡単に取り出せる状態なのかどうかはなのは達には解らなかったが。

リンディから渡された10個のジュエルシードはすべて本物だ。

だがこれを渡しても誰も解放されないのではそもそも交換の意味がない。

ジュエルシードをすべて揃えられてしまうという危険が発生するだけである。

相手にある程度信用があれば別だがなのはからすればあまりにもプレシアは信用できなかった。

だが、コウキやほかの局員たちの命が握られているのも事実で

これ以外に交渉のしようがない以上渡す以外の選択肢がなのはに浮かばない。

(ど、どうしよう……)

『……ここまで整えればいいでしょう……』

グルグルと答えの出ない考えに陥るなのはの横にこれまたモニターが現れる。

「リンディさん？」

『なのはさん、ジュエルシードはそのままお願いね。』

あとは、まあ成り行きに任せればいいのかしら？』

と意味ありげな視線をプレシアが映るモニターに向ける。

『……交換には応じない、ということ？』

受けたのは彼女だったが。

『ええ……だってもう、人質いないもの』

「あつ……」

なのはの小さな驚きの声が、真実を語っていた。

同日 PM09:35

時の庭園・仕置き部屋

『ええ……だってもう、人質いないもの』

満面の笑みと共に向けられた言葉に、何をバカな、と視線を横に動かしたプレシアは愕然とした。

鎖で吊るしていたはずの男がいないのだ。慌てて同員たちも確認するがそれは変わらずいた。が。

それらを守るように蒼い毛並の狼と四つのリングを浮かせて持っていた小さな鳥が現れていた。

「い、いつの間に!?!」

「愚問だな、守るべき主のそばに赴くのは守護獣として当然だ」

「うふふ、私とクラールヴィントのハッキング能力を甘く見たらダメなんだから!」

驚愕するプレシアに対して、冷静なザフィーラと嬉々として教えてしまっているシャル。

その背後で縛られていた局員たちは光に包まれて転送されていた。アースラに戻されたのだ。

「取り引きが囷だったというわけ？」

「……こんなことをしてタダで済むと」

「われらに構っている暇が果たしてお前にあるのか?」

絶対的に優位に立っていたはずなのに裏をかかれた彼女の激情は爆発寸前だった。

だがそれさえ落ち着かせるように、落ち着き切った狼の声が向けられた。

「なぜ、ここに主がいないと思う?」

「我らが来る前に脱出していた主が、なぜ?」

「なっ」

驚きの声は最後まで続かなかった。強い震動に地面が揺れたのだ。

地震ではない。次元の海を漂う庭園に地震など起きない。何が起こったのだと彼女の疑問に答えたのは警告音。

『庭園内部にて爆発を確認。C-12エリアにて火災発生…』

「あの男おっ！」

もはや確認する必要はなかった。

この場にいない。ただそれだけで犯人が誰なのか告げていた。

そして告げられた場所はアリシアが安置されている場所に近かった。それだけで十分。

取るものも取らず、もはやザフィーラたちなど眼中にないと飛び出していく。

だが、それでも。

「……………さすがは大魔導師というわけか」

「わああ、スゴイ大歓迎ねこれ？」

彼らを“敵”と判断した警備システムが半ば自動でそれを呼び出す。傀儡兵^{くわいへい}。無人の鎧。動く、命無き使い魔。ゴーレム。

ただプログラミングされた通りに侵入者を撃退するために動き出す。その数およそ20。あくまで現時点で、でありまだ増えているが。

「魂も誇りも使命も持たぬゴーレムふぜいに俺たちが止められると？」

「ベルカの騎士を舐めないでよね！」

魔力系が傀儡兵を縛り上げる。鋭い牙が、軟弱な鎧をかみ砕く。

数の優位性など簡単に覆されていく。もともと4人しかいない彼女たち守護騎士にとって

自分たちより数多い相手との戦闘など慣れたものだ。遅れをとるなどあり得ない。

そうして守護騎士の戦いが始まったのと時を同じく。もう一つの現場でもそれが“始まるう”としていた。

同日 PM09:41

海鳴市近郊海上

庭園内にて傀儡兵たちが動き出したのと同じタイミングでフェイトが動いた。

その場の空域から離脱しようとしていた。おそらくプレシアに呼ばれたのだ。

「まってフェイトちゃん！」

呼んでも意味はないと解っていたがそれでもなのはは叫んだ。

そして追いつがるように近づこうとしたが。

「…ファイア」

乱発されたフォトンランサーに阻まれる。

咄嗟に避けて、咄嗟にデバイスを向けてしまつが意志のない瞳に見られて動きが止まる。

『Master!』

危険を訴えるRHの声に我に返って飛び上がる。
さらに放たれた光の槍を回避するためだ。

(いったいどうしたら?)

行かせてはいけない。

そう思うのに、どうしていいか解らない。

想いを届けるためにぶつかり合うことを肯定的に考えるのはだが、それはそこに相手の意思や心があったこそ。

戦わなければ止められないのは解っている。

けれどそれらが失われている今のフェイトと戦うのはなのは望みではない。

そして何より、意思の無い顔を見るたびに胸が痛くて少女は視線を合わせることもできない。

フェイトが頑張っていたのを件の宝石を取り合っていたのははよく知っていた。

それが何のためであるかを知って、でもそれを張本人に叩き壊されて崩れ落ちた姿が目には焼きついて離れない。

「もう……もうやめてよフェイトちゃん!」

まるで近寄るなど訴えてくるような魔法の乱射。

大好きだった人に大嫌いといわれて、一番大事だったモノが他人のもので

文字通りボロボロになってしまった彼女は、それでもまだ戦わされてしまっている。

そんなフェイトに自分は魔法を撃つのか？

撃てるわけがない。

理屈で納得できても、心で納得できなかった。

「ひどい、ひどいよこんなのっ！」

(……逃げるな、なのは)

「え？」

なのはは、何か久しぶりに聞いたような声が胸に届いて泣きそうになった。

それだけで暖かいもので満たされた気分になって念話だというのに彼の姿を探しそうになる。

(お前の魔法を叩き込んでその眠り姫を起こしてやれ！)

(で、でもわたしっ！)

不安がある。

こんなフェイトと戦いたくないという想いと別。

自分の想いは果たして届くのか。自分の魔法で届けられるのか。

こんな、何もできなかった自分の想いと魔法で何ができるだろうか。

そんな不安を知ってか知らずか。

(大丈夫、お前の魔法はきつと届く。疑うな、迷うな、そんなのは気のせいだ！)

ぶちかませ全力で、全開でっ、お前の魔法を！

いまそれをフェイトに出来るのは、なのは、お前だけなんだ！)

「あ……」

少しだけ。

ここに彼がいなくてよかったとなのはは思った。

(…嬉しくて、本当に泣きそうになっちゃったよ……)

信じてくれた。

何もできていなかったのに、助けられなかったのに。

そんなものは知ったことかと一番信じてほしい人が信じてくれた。

もうそれだけで、なのはの胸のアクセルがフルスロットルにまで跳ね上がる。

『やりましょうマスター。彼女と、彼を起こすために!』

それをさらにレイジングハートは後押しする。

デバイスとしてはあるまじき行動を取った彼にRHは純粹に焦がれた。

彼は何も語らなかったが同じデバイスであるために彼女にはわかる想いがあったのだ。

そしてふたりの間にある信頼と絆が、とても羨ましくて。

だから行こうと自らの主人を促す。

自分たちだってそれに負けてはいないはずだと。

『そのための知恵と戦術を今日まで鍛えてきたはずです!』

「うんっ!」

力強い、迷いなき頷き。

まっすぐに強い瞳が色のない少女を見据える。

『それじゃこっちもやるよ』

闇達なエイミイの声が響くと共に、結界内部が変化する。

ただの暗い海に明るさが増していき昼間並の空となり建造物が急に現れていく。

戦闘訓練用のレイアー建造物だ。触れられるし壊れるが結界を解除すればあつた痕跡すら残らない。

『戦闘空間固定完了、なのはちゃん思いつきりやつちゃっていいよ』
『！』

『その結界は中からは大技じゃないと破れない。上にも横にも広げたら簡単には逃げられない』

「ありがとうございますエイミイさん、ユーノくん！」

（そうだった。私は私だけで戦ってるんじゃない。

レイジングハートがいる、ユーノくんがいる、はやてちゃんがいる、シャマルさんたちもいる。

そうだ、私だけで出来なくてもいい……でもきつと、私にしかできないこともある）

「フェイトちゃん、いつか言つてた勝負をしよう。

今回は賞品はないけど、勝つたほうが相手の話を聞けるの。

私はフェイトちゃんの話をつぱい聞きたいから、お話したいから……」

（だからそれを頑張ろう。あの人が信じてくれた魔法で、私は！）

意思を失った目。

意識を失った顔。

息はあるのに生きていない。

死んでないのに、死んでいる。

そんな顔じゃなかった。

そんな顔が見たかつたんじゃない。

デバイスを構える。桜色の魔方陣が展開される。

それを自らへの敵対行動だと認識したフェイトが戦闘態勢をとる。

「行くよフェイトちゃん。これが……最初で最後の全力勝負！」

白と黒をまとう少女たちがいま、そしてよつやくぶつかり合う

やっと始まる・主従

同日 PM09:48

時の庭園・大広間

あえて声だけの念話でなのはと話をしていた彼だが、空間モニターは開いてあった。

こことは違う場所の海上で、眠ってしまったお姫様を起こすための戦いが行われている。

おそらくは単純な命令『目の前の相手を倒せ』ぐらいしか受けていないのだろう。

フェイトの動きは速く攻撃も鋭いが、ひどく動きが単調だった。

彼女と戦うために自らのデバイスと知恵を絞りあつてきたなのはがそんな状態の彼女に押し負けるわけもない。“起こすまで”なのはに敗北は有り得ない。

だからこそ、自分は彼女の相手に専念できる。と。

そしてその気配にコウキは振り返った。

「やっと来たか…」

庭園でもっとも広い空間を持つ広間。

その中心で、その少年はまるで待っていたといわんばかりに立っていた。

両手を縛っていた手枷はすでになくなって、代わりに何かを持っていた。

「……………聞きたいことは山のようにあるけれど、そうね。

まずは……………それは、いったい何のつもり？」

アリシアの近くで起こった爆発に我を忘れて駆け出したプレシアはその途中にある大広間で、待ち構えていた少年と対峙する。

そして一瞬にして沸騰していた頭が芯まで冷えた。

誘き寄せられたと理解したから、だけではない。

プレシアはこのとき、何かひどい嫌がらせを受けたような錯覚を覚えていた。

彼の格好と手に持っているモノを考えればあながち錯覚ともいえないのだが。

なにせ彼が身につけていた衣服　おそらくBJ　は彼女がよく

知っている物にとても似ていた。

かつて存在していた口やかましい山猫素体の使い魔。

彼女がいつも着ていた服をまるで男性用に手直したかのような意匠。

より身体へのフィット感が増していたりキャップが無かったり胸元が完全に閉じられていたり等、

差異はあったが毎日のように見ていたそれを、あんなに印象に残る使い魔の服をプレシアが見間違っうわけがなかった。

「俺もあなたに言いたいことは山ほどあるが、今はとりあえず彼女の代理人だ」

そういつて手に持つソレを少年はプレシアに向けた。

150センチ前後の柄。その上端部にある白いコアクリスタルと白銀のフレームから作られる60センチほどの三日月状の曲線を描く斧頭。

地球ではポールウェポンと呼ばれる武器の形状を持つデバイス。

奇しくも他のポールウェポンと比べると柄が短く刃が極端に大きいものは『バルディッシュ』と呼称される。

そう、斧頭の形状こそ若干違ったが彼が持っていたのもまたバルディッシュだったのである。

『お久しぶりです、というべきですかねプレシア』

「っ、な!?!」

それが、その声を発したことはプレシアを驚愕させるには十分だった。

だってそれはあまりにも記憶に残る彼女のそれに近い。そのものだと言ってもいい。

多少機械的な処理がされてはいたが、この声をプレシアが聞き間違えるわけがない。

「リニス……?」

『ええ、お恥ずかしながら。こんな姿ですがあなたの使い魔だったリニスです。』

まあもつとも、デバイスの人工知能としてコピーされた人格ですが……』

どこか自らを卑下するかのようない方だが、その声色には相手をからかおうとするかのような軽薄さと笑みがあった。

使い魔・リニス。

かつてプレシアがフェイトの世話と教育を一任するために作り出した山猫素体の使い魔。

フェイトとアルフ両名の魔法の先生であり、バルディッシュの製作者。

魔導師としてのフェイトの完成と専用デバイスの完成でプレシアとの契約が完了し消滅した使い魔である。

それがコピーとはいえ再びこのタイミングで現れたのはあまりにも嫌がらせが過ぎる。

「コピーですって！？ リニスは一言もそんなことは」

『言いませんでしたね。それについてはすいませんでした。』

少しばかりの、ただの見栄だったのですが……』

とさすがに報告しなかったことに罪悪感があったのか。

恐縮したような声でそうなった経緯をバルディッシュ・リニスは語り始めた。

もともとリニスは始めてのデバイス作成に不安があった。

そんな感情のもとで作ったデバイスをフェイトに渡すわけにはいかない。

だから最初に試作だけが目的でこの白銀のバルディッシュは誕生した。

それだけならプレシアも知っている。

費用はいくらかかってもかまわないとフェイト専用デバイスの作成を命じたプレシアに対し、

リニスは完璧なものをフェイトに渡したいのでまずそれなりのデバイスを試作してみたい。と。

余談だが、それを半ば聞き流すようにして許可を出したのをプレシアは少し後悔する。

なにせ最終的に試作品と完成品のふたつのバルディッシュの製作費だけで

プレシアが各種研究成果のため込んでいた資産が半分以下になったのだから。

『ただインテリジェントで重要なAI部分に関しては製作期間の関係から、

自分の人格をコピーするという裏技で簡単に済ませてしまったわけですが……』

それを一般的なAIを作って搭載しましたと報告したのは単に主人であるプレシアに
物臭をしていると思われなくなっただけだったのだ。

普段から研究ばかりで他を顧みないプレシアに口やかましくしていたリニスとしては。

『まさかそれが、こんな形で役に立つとは思いませんでしたが』

それがとても残念です。と。
身体があつたらきつと肩を落としていたであろうほど声は沈んでいた。

『オリジナル・リニスには自分が消えることでふたりの間に芽生えるものがあるのではないか。』

という期待もあってこの私の存在はあえて隠していました。

このデバイスも表向きはバルディッシュの予備機だと教えてありましたが、まじりましたし。

けど結果は散々でした。オリジナルが残っていたほうが良かったと思えるほどに』

参りましたよ。とこれみよがしな溜息をこぼす。

『……あなたとフェイトの関係はむしろ悪化していきました。』

あなたは自分の考え方を変えられず、フェイトはそれを違つと否定できる強さを持ってなかった。

あなたの使い魔としても、あの子の家庭教師としても、悲しかったです。ええ、本当に』

僅かに早口でまくしたてる言葉には確実な怒気が混ざっている。

悲しんでいたのも事実だがそれよりも「なんでそんなことになっているんですか！」という怒りが勝っているのだ。

「悲しかった、ですって？」

たかだかコピーの人工知能風情が分かったような口を！」

『ええオリジナル・リニスはそれが解るほどの高度なAIを作成してくれました。』

だから、バルディッシュの作成費はとんでもなかったはずですよ？』

プレシアの罵声をまるで悪びれる様子のない言い方で切り返す。

笑みさえ聞こえてきそうなほどの喜色の声で。

『これでも請求書を渡す時は緊張していたんですよ』と続けて嘯く姿にプレシアはがくりと体が揺れた。

理屈ではなく、本能的な所でこれは間違いなくあのリニスだ、と理解する。

「……………何年たつても口やかましくて忌々しい。ほんと、高性能すぎて負担ばかりかかる使い魔ね」

どんなに口汚い言い方をしても、最終的には使い魔として引いてくられても、

根本的なところで決してプレシアに遠慮せず違ふことははっきり違ふと意見する。

『お褒めにあずかり光栄です。偏屈でイジワルでちつとも優しくない私のご主人さま』

「……………ふう、まあいいわ」

なら、それに付き合うのは億劫で面倒だと。プレシアは頭を振って考えを切り替えた。

「あなたも私の邪魔をするというのなら、今度こそこの世から消滅させてあげる」

『ああもう……………どうしてそう極端な思考になっているんですか！』？

頭を抱えていそうな姿が浮かぶその声は、呆れと落胆が混ざっている。

『その格好にしたってそうです。なんですかそれは！
年甲斐もなく肌を露出させて悪の女幹部でも気取ってるつもりで
すか！』

今年であなた何歳になったか解ってます！？」

ピシッ

紫の雷が、ほとんど前置き無しで襲いかかってきた。
いくら魔力変換資質があるとはいえ、発生が速すぎる雷はなにゆえ
か。

『わっ、昔はもうちょっと話だけは聞いてくれる人だったのにつ！』

バルディッシュ・リニスの悲鳴のような声の中。

コウキは彼女を構えながら次々と襲ってくる雷を避けていく。

「いや、最後のはさすがにあんたが悪いような気がする……」

(俺でさえ気を使って言わなかったのに……)

プレシアの衣服は彼女がマントを羽織っているためかあまり目立た
ないのだが、

存外に露出が多く、またその色合いと意匠は「自分は悪い人です」
と宣言するような雰囲気があった。

実年齢までは解らないまでも、いくらか過去を調べたコウキからす
ると、

確かに予想される年齢でこの格好は常識的にはアウトだろうとは思
っていた。

『何か間違ったこと言いましたか私！？』

「正し過ぎるからダメなんだよ」

ミシッ

直前の雷を跳んで避けた先。

本来なら外れた場所に落ちるはずだった雷がいかなる魔技を使っ
てか。

急激に曲がって直撃コースに変貌する。

「っ、リニス！」

『わかっていきます！』

振り向きざまにバルディッシュ・リニスを振るう。

白銀の斧と紫の雷。普通にぶつかり合ったのなら電気という特性上
リニスが不利。

だが。斧と雷の間には、いま“赤い”刃が存在する。

「はあああっ！」

気合一閃。

直撃の雷だけでなく周囲のそれらも切り裂いて、振り切る。

白銀の斧バルディッシュ・リニスはいま赤い刃をまとっている。

刃先のフレイムを覆う斧の刃。柄の上端部から真上に伸びる剣の刃。
下端部から伸びる槍の刃。

全身を魔力刃で武装する。圧縮した魔力の高速展開。

それだけが後のバルディッシュに受け継がれなかった彼女だけの機
能である。

『…今のはあなたが悪いと思います』

「じゃあこれでお互いキャラにしよう……」

軽口を言いながら、再度プレシアに向き直る。

感情に任せた雷が一旦止んだのは、途中で彼女がまた咳き込んだからだ。

血を吐いたようだが、気にした風もなく姿勢を正していた。

「……私はずっと考えていました。

オリジナル・リニスが消滅してもふたりの関係は悪化しただけ。

フェイトかあなたに変化を求めようにもこの庭園は閉鎖的でそれは望めない」

あえてリニスはそれを無視して自分の考えを口にする。

オリジナルが消えてからひとり考えていたことを。

「ずっとずっと考えました。ええ、フェイトとアリシアのことを知った時以上に。

デバイスでよかったですよ、それでもなければ全身の毛が抜け落ちてました」

自分の存在を晒そうか。

でも自分はもうデバイスで好きなようには動けない。

かつてのリニスのような存在にはなれない。

なれた所で元に戻るだけで、どれだけの意味があるのか。

真実を告げる。

プレシアを説得。

フェイトを連れ出して逃げる。

そんなことが出来るならオリジナルがやっていた。出来なかったからリニスは自分が消えた後に期待するしかなかった。間に立っていた自分が消えることでふたりの距離が縮まるのを願って彼女は消えた。

ふたつのバルディッシュのそれぞれに“願い”と“自分”を託して。

『……プレシア、オリジナル・リニスが消滅前にあなたとした最後の会話を覚えていますか？』

血で汚れた口周りを手で拭った彼女は表情を変えずに沈黙を選んだ。だからリニスはかつて口にした言葉をもう一度口にした。

『「アリシアへの愛情とは別の愛情を新たに作ることはできませんか？」

全部アリシアのためだというあなたの中の“すべて”にフェイトを入れることはできませんか？』

それが最後の最後に、リニスがプレシアに投げかけた言葉。

彼女なりに考えたフェイトとプレシア両方の気持ちを汲むための案。ペットを愛するような気持ちでも構わなかった。

自らへの愛でも構わない。ひどい言い方だが道具への愛でもいい。

とにもかくにも、形として間違っていたとしても、

ちゃんと向き合わせなくてはこのふたりは先に進めない。

進めなければ、ふたりは一生自分を大事にできない。リニスはそう考えていた。

だが当時のプレシアはそれに答えてはくれなかった。「出ていきなさい」と言われただけ。

感情的に否定されなかっただけマシだと考えて、リニスはそこから

永遠に去った。

『いま、あの時間けなかつた答えを聞くことはできますか？』

けれどその言葉を残した彼女の人格を受け継いだ彼女はそれを聞かなくてはいけない。

彼女なりにいまのプレシアと向き合うために、立ち向かうために。

「……………何を言い出すかと思えば、そんなの決まってるでしょう。

別の愛情？ 私の中にフェイトを入れる？ 戯言もいい加減にしないさい！

私の愛情はアリシアのものっ、私の中にいるのはアリシアだけよっ……！」

あまりにも変わらない答え。

あまりにも予想通り過ぎる答え。

その感情的で「そうではなくてはいけない」という叫びが最初に投げかけた時に返って来たのなら

リニスの終わりは、また別の形であつたかもしれない。

『プレシアっ！』

あなたは優秀な科学者だけれど心の捉え方まで理屈で考える必要はないはずです。

アリシアを愛したままフェイトと向き合うことはできません。

人の心にはそれが出来るんです！」

自分のすべてを、愛情のすべてはアリシアだけにあげる。アリシアだけのもの。

かつてそうリニスに告げたプレシアの想いは本物だ。

けれどその想いを持ったままフェイトを見ることは不可能ではない

のだとリニスは語る。
しかしプレシアにとってそんなのは綺麗事で認めるわけにはいかなかった。

「元使い魔の人工知能ごときが人の心ですって!？
ふざけるのもたいがいになさいっ。機械にそんなことが解るはずがないでしょう!」

『機械だから解るんです!』

機械の、人工の頭脳でかつてあった人格と心を再現する。
それをやっているバルディッシュ・リニスにとって人が持つ心が
どれだけ複雑なことを当たり前のようにやっているかが解っていた。
嫉妬してしまうほど、それこそ焦がれるほどに。

『どんなに完全なコピーとそれを移した優秀なAIでも私は心を持つているわけじゃない。』

コピーされたデータから、本物ならこう返すだろう、というただの予測。

それだけでも大変なのにあなたたちはもっとすごいことを簡単にやっている。

それなのにあなたはっ……ふたりを一緒に抱きしめることはそんなに難しいことですか!？』

だから、まるで叱り飛ばすかのような叫び声が出た。
自分にはできないのに、許されないのに。出来るのに許されるのに
しないなんて。

「っ、黙りなさいっ!」

あと少しなのよ、ジュエルシードで道さえ開ければアルハザード

に行けるのっ！

それで、ようやく取り戻せるのっ！」

『ええっええっ！』

それでアリシアが甦ってあなたがかつてのようになれるなら好きにしなさい！』

リニスにとって重要なのはそこではない。

アルハザードもジュエルシードもリニスからすればどうでもいいのだ。

彼女が願うこと、彼女が一番大事なものはそれとは関係ないのだから。

『私が言っているのはそんなことじゃないんです。』

あなたがいつまでたってもフェイトから逃げているのが問題だと
言ってるんです！』

「逃げ、てる？」

「いったいいつ私がフェイトから逃げたというのー！」

そんなことはないと言い張るような強い語気はしかし、不安げな顔
でいわれても説得力がなかった。

『ずっとです！』

だからこそリニスは畳み掛けるように訴える。

『フェイトのまっすぐな気持ちと笑顔を何度も何度も向けられて、』

どれだけ避けてもどれだけ突き放してもあなたのために頑張るフ
ェイトの、

何をしても変わらないあなたの娘からの愛情をつ、
まともに見ることもできなかった臆病者はどこの誰ですかっ!？」

「失敗作の人形ごときの感情を気にする必要があるというの!」

「ありますよ!

あなたが私にフェイトを教育させたのは優秀な手駒にするためだ
つたはず。

ならどうしてあの子の感情を利用しようとしなかったんですか?
偽りの笑顔と偽りの愛情を向けて、それこそ従順なお人形にする
ことだって出来た。

でもあなたはそれさえ出来ないくらい、フェイトに近づけなかつ
た!」

「っ!？」

今度こそ本当に、プレシアの顔が驚愕に歪む。

それはあまりにも気付いていなかった事実。

いや、気付かずにようと必死だった事実をあまりに的確に突きつ
けていた。

「怖かったんでしょ?」

フェイトに偽りでも愛情を向けるのが。いつしかそれが本物にな
らないかと。

いつかそれがアリシアへの愛情を無くさせないかと!」

「つつ、黙りなさいっ!」

「黙りませんよ!

もう私は使い魔でも家庭教師でもないただのデバイスですけど、

それでも私は、あなたとフェイト、両方に幸せになってほしいんです!!」

結局それだけがリニスが変わらず持ち続けた想い。

真実を知る前も、知った後も、消滅する直前も、デバイスの人格になつた後も。

その願いだけは誰が相手でも絶対に譲るわけにはいかない一線なのだ。

例え、それが幸せになってほしいその人だとしても。

「……………私の幸せはアリシアの幸せよ。」

そのためなら誰がなんと言おうと止まる気はないわ……」

僅かな空白。それまで間髪いれずに言い合ってきたふたりの間に入つた少しの間。

自分を落ち着かせるように淡々と語る言葉は不自然なくらいに感情がない。

表情からも驚きや戸惑い、怒りも狂気もない。

あるのは穏やかながらもはっきり示される拒絶の感情。

プレシアの手に杖が現れ彼女の魔力光で輝く魔方陣が足元に展開される。

そして大広間のあちこちから大小さまざまな傀儡兵が召喚される。

もはや問答は不要。実力行使だ。と言外に告げる行動。

「……………止めてみせますよ。私の幸せはふたりが笑顔でいてくれることなんですから」

それを笑みさえ浮かべていそうな朗らかな声で迎え撃つリニス。

『だから、ありがとうございますプレシア。』

あなたが彼を招き入れてくれたおかげで私もそのために戦える』

彼女はどれだけ高い知能と本物に近い人格を持つと所詮デバイス。自力で動くことさえできない存在。そして本領を発揮するためには他者が必要。

それを結果的に用意してくれたのがプレシアというのはどんな運命の皮肉か。

『ああ、でも……少し本音をいうとですね。』

私…一度あなたと本気で取っ組み合いのケンカをしてみたかったです!』

愛しい愛しいフェイトにあんなにも想われているあなたが羨ましくて

「奇遇ね、私もあなたを一度は引っ叩きたいと思っていたわ!」

使い魔のくせに、いつも余計なことばかり言っ私をかき乱す
あなたが大嫌いで

『行きます!』

「返り討ちにしてあげるわ!」

かつての主従はそうしていき、よじぢくぶじかりあつ

(……実際に戦うの俺なんだけどなあ……)

やっと始まる・主従（後書き）

この異伝では珍しい置いてけぼりの主人公の図。さすがに空気読んで黙ってました。

まあ「女同士のケンカに割って入る時は命がけ」が日野家の心得にありますからね（笑）

そしてまさかのオリジナルデバイスとしてリニスが登場（AIですが）
デバイス調整室前で違和感を感じていたのは彼女に呼ばれたせいなのですよ。

ところで“この”リニス。

微妙に『なんか違う感』があるような、ないような。

中の人補正入ってないかこれ？

ひとりで調整室にずっと保管されていてオリジナルと違いが出たとも思ってください。

プレシアとのエピソードはほぼオリジナルです。が、こんなのもいいかなって思った。

ちなみにバルディッシュ・リニスの見た目は、形状は映画版のバルディッシュ。

金色のクリスタル部分を白に、黒いフレーム部分を白銀（光沢ある白）に

変えた物だと思ってください。

特徴としてデバイスのどこからでも魔力刃を作れる。

変形機構はなく、アックスモードと待機モードしかない。

今までずっと黙っていたのですごくおしゃべり。などです（笑）

第8話予告

なのは「受け入れがたい真実。裏切られた想い。そして閉ざされた
フェイトちゃんの心」

コウキ「止まらない娘への贖罪。壊れてしまった母親の心。そして
プレシアの本当の過ち」

はやて「子を亡くした親。親を亡くした子供。それぞれの想いと願
いが、ひとつの結末を迎えます」

三人「次回、魔法少女リリカルなのは異伝・第8話『私はいつも気
付くのが遅い』に」

なのは・はやて「リリカルマジカル」
コウキ「がんばります」

フェイト「……母さん……」

第8話予告（後書き）

ようやくこれにて七話が終了。

これまでで最長。たぶん全編で一番長いんじゃないか？

次回8話はほとんどバトルオンリーなため、話としては最短の予定。
あくまで予定！

ではでは、感想待ってます！

聞こえますか？

わたしのこえ

とどいてますか？

わたしのきもち

おねがいだからもう泣かないで

おねがいだからもうムリしないで

わたし、いっぱい抱きしめてもらったよ

わたしすつごく楽しかったよ

だからね

あの

えつとね

笑ってほしいな

笑顔のママが大好きだから

5月8日 PM 09:56

海鳴市近郊海上

もう何度目の攻撃か。

10分程度の戦いの中で撃ち合った数は存外に多くはない。

『Divine Shooter』

「シュート!」

誘導操作の三発の弾丸。

不規則に揺れながら弧を描いて空を舞う。

包囲するかのようなそれを大きな動きで右方へ避けるフェイト。

「甘いよ!」

だが、急速に弾丸の進行方向を変えて避けた先を狙う。
これ以上の数はムリだが三発ぐらいならなのは完璧に誘導操作が出来る。

それを大きな動きで避ければ簡単に動きを捉えられてしまう。

「…サイズフォーム」

避けられないと判断したのか。

デバイスを変形させて、その鎌にて包囲する魔力弾を切り落とす。

『Flash Move』

その背後。

「せええっい！」

気付いて振り返ろうとしたときにはもう遅い。

止まって撃ち抜く砲撃専門と侮るなかれ。

何度も高速機動と鋭い近接に苦戦し続けたなには対抗手段がい
くつも用意してあるのだ。

フラッシュムーブ

一瞬だけの最大加速で相手の背後を取る。

そのスピードと、さらに圧縮魔力を上乗せた打撃を行う近接攻撃魔
法『フラッシュインパクト』

見た目は小さな女の子がデバイスで殴り掛かっているようにしか見
えないが、

その破壊力はそんな見た目を軽く超える威力を誇る。

「っー！」

何とかデバイスを盾に直撃は避けたがそれでも衝撃を殺しきれずに海面ギリギリまで落下する。落ちようとする慣性を止めて、何とか海中への落下は阻止するが。

「デバイス」

それを待ってくれる相手ではなかった。

『Buster』

海中への落下を防ぐために一旦空中で停止した彼女に避ける動作は間に合わない。間に合わせで張ったシールドなど紙同然にぶち抜かれて直撃する。

轟

高い水柱と共に結局海中に落ちていくフェイト。

「……ねえレイジングハート、私の気のせいかな？」

『いえ、僅かですが戻ってきています』

それを妙な感想と共に評するふたりにはまだ余裕がある。当然といえは当然である。経験や魔法に出会ってからの時間を考えれば圧倒的にフェイトが勝る。

これまでの戦闘でもなものはほとんど一方的に負けていた。

だからこそ自分の持てる力で彼女に勝つ方法を、その知恵と戦術を！
そう願う、ふたりはそれこそ必死に考えて必死で練習してきたのだ。
自由意志どころかまともな戦闘の思考もない本当の人形に負ける要
素など一つもない。

だから。

海面から飛び出してきた物体に若干反応が遅れた。

「フォトンランサー、セット」

飛び上がってまっすぐなのはに向かいながら周囲にランサーがセッ
トされる。

それを見てすぐになのはもシューターを設置する。

「ファイア！」

「っ、シューター！」

まっすぐな軌道のランサーは避けても構わなかったが
彼女のスピードを考えるとその先に回りこまれるほうが困る。
だからシューターで相殺して、相手の出方を

『Blitz Action』

待つことは今度はなのができなかった。

超高速移動魔法『ブリッツアクション』

なのは本当に一瞬、フェイトを見失い次の瞬間には目の前にいた。

「ふえ？」

「はあっ！」

『Round Shield』

防御が間に合ったのはひとえにレイジングハートが準備していたおかげだ。

円のシールドが鋭い魔力刃を強く拒絶する。

破れない。そう判断したのか即座に後方に飛んで距離を取る。

周囲に光の槍を用意しながら。

「ファイア！」

「わ、わわっ！」

魔力刃を防ぐのに展開していたシールドでそのまま耐える。

身体に直撃はしなかったがそれだけでそこそこ魔力を持っていかれた。

「……………これは危なくなってきたかな？」

『ええ、雰囲気が変わってます。危険です』

そんな会話を楽しそうに言い出すのだから

この場に事情の知らない第三者がいたら首を傾げることだろう。

だが、この戦いを最初から見ていた者は別の意見を持つ。

「フェイトちゃんの動きがどんどん速く……………それになんだかちゃんと戦ってる!？」

「あらまあ、すごい子たちね。本当に……………」

始まった当初は戦闘と呼べるものではなかった。

なのはへの攻撃は大雑把。なのからの攻撃を避けるのも大雑把。

確かに動きは速いが無駄が多く、鋭い攻撃もはっきりいつてタイミングがずれていた。

ところが今の一連の動きにはそんなところは一つもなかった。それが、意味することは。

「じゃあここからは遠慮なしで。知恵と戦術フル回転、行くよ！」
『All right my master』

そうして戦いは知らぬ間に第二ラウンドへ。

桜色と金色の弧を描いて、ふたりの魔法少女は空を飛ぶ。

同時刻 時の庭園大広間

プレシアは元来科学者である。

いくら条件付とはいえ魔導師ランクSSダブルエスを持っていても戦いは得意ではない。

そもそも魔導師ランクは勘違いしてる者も多いが、戦闘力の高さを示しているのではない。

あくまで本人の魔力量・資質・技術・基礎力・応用力・判断力。

その他もろもろを吟味して決められる『魔法をどれだけ操れているか』の目安だ。

ただ、ある一定以上のランクになるとそれなりの戦闘力も持つため、そういった勘違いもあながち間違いとは言いつれない面もある。実際プレシアを捕らえようとした武装局員はほとんど一撃で倒されてしまっている。

彼らが弱かったのではない。プレシアの“攻撃が”強すぎたのだ。

そのため彼女が取れる戦術は単純なものしかなかった

「はあああつ！」

目の前の空洞の鎧を斬り崩す。

背後から迫るソレをリニス下端部の槍の刃をさらに伸ばして核を貫く。

引き抜きながら跳びあがり、周囲からの巨大な剣や拳を避けて刃を元の長さに戻す。

落下するスピードを利用するかのうちにそのうちの一体の頭部に上端部の刃を突き刺す。

機能を停止して崩れ落ちる巨体に乗った彼をさらに囲もつとする「
ーレムの群れ。

「きりがないな……リニス！」

『はいはい、飛ばしますよ！』

赤い斧の刃が一段と強く発光する。

足を開きその場で踏ん張るように力を入れてバットのようリニス

を振る。

『アックスセイバー』

斧頭から切り離された斧の魔力刃が回転しながら一体のゴーレムを切り裂くと

そこからコウキを中心にして円を描くように飛び、周囲のすべてを斬り倒した。

そのそれぞれの背後で計10体ほどのゴーレムが生み出されていたが。

「本当にきりが、くっ！」

さすがに20体ほど倒したが倒したそばからその倍は出てくるので数が減らないどころか増えてさえいる。

その光景に嫌気さしてきたその瞬間を、隙として狙ってきた魔力弾。フォトンバレットの連射。

初弾をバックステップで躲して、続くそれらをリニスで切り裂く。

誰がやったかなと言つまでもない。

無数に存在し、今もなお増え続けるゴーレムたちの奥の奥。

まるで女王のように君臨し隙あれば魔法を撃ち込んでくる存在がいる。

『プレシアって意外にいやらしい戦い方するんですね…』

「そういつとこだけ冷静なのはずるいよなあ…」

思わずそう愚痴りたくなるほど彼女の戦い方は単純かつ手堅いもの

だった。

自他共に認める大魔導師でありながら自身が戦闘訓練を受けた魔導師ではないことを理解して、砲台に専念しながらゴーレムを無数に生成しつづけ自分に近づかせない。

ゴーレムの数と自身の強力な魔法で相手の体力・魔力・気力を削っていく。

いやらしいが、ひじょうに有効な戦術である。

「……もう降参かしら?」

「誰が!」

『するもんですか!』

気合の一声と共に目の前のゴーレムに刃を突き刺す。そしてそのまま引きずるように振り回して周囲のゴーレムに叩きつける。

巻き込まれて、5、6体が再起不能になるがその倍に近いゴーレムが誕生していた。

「威勢がいいのはけっこうなことね……でも、いつまで持つかしら?」

リニス、あなたならこのゴーレムたちがどれだけ出てくるか知ってると思っけど?」

余裕綽々の声が癪に障るが、長年のクセか。

それとも事実を再確認するためかりニスは答えた。

『……ゴーレムはあなたの魔力で生成される。』

生み出す術式そのものか、この庭園。あるいは魔力が無くならな

い限り出てきます』

「その通り……その三つの内一番無くなりやすいのは私の魔力だけれど、

もしそれを待っているなら無駄なことよ」

「条件付きSSは伊達じゃねえってか…」

術式や庭園はともかくとして明確な底がある魔力でさえ減らないのには訳がある。

彼女のランクがなぜ条件付きなのかといえば彼女個人が莫大な魔力を保有しているわけではないからだ。

しかし外部媒体からのエネルギー供給を受ける事でそれを己の魔力として運用できる特殊技能を持っていた。

彼女が元々次元転送や燃焼炉など天文学的なエネルギー量を扱う研究者であったことから、

学問の一端・研究や実験の一助として結果的に身につけただけだったが、

そのレベルは学生当時から並外れて高く、彼女が開発者・研究者でありながら

大魔導師と呼ばれていたのはそれに匹敵する魔導運用を可能としていたからである。

そして彼女に、堅実な戦術とは逆に絶対的な自信と余裕があるのは今もその恩恵があるからだ。

庭園の魔導炉。ジュエルシードほどではないにしろ、

匹敵しかねないエネルギーを持つロストロギアの炉心。

無限ではないにしろ個人で運用するにはあまりにも過大な総量。

まだまだ新米な魔導騎士ひとりとデバイス一体でどうにかなる相手ではない。

「あなたたちも薄々わかってるのでしよう？
だからずつと魔力の刃だけで攻撃している。一度も私に向けて砲撃は向けてこない。」

魔力の無駄な消耗こそが私との戦いでもっともしてはいけないから……」

でも、そんな節約でいつまで持つかしら。と見下すような嫌な笑みを浮かべるプレシア。

「……ふっ、では問題だプレシア。俺の魔力刃はなぜ“赤い”のかな？」

それをコウキは不敵な笑みで笑い返した。

何かそれに一抹の不安を覚えたがそれはあまりに簡単すぎる問題だ。

「そんなのあなたの魔力光が赤　っ!？」

魔導師にとって常識だが、個人によって魔力の色は違う。

プレシアは紫色。フェイトは金色。なのはは桜色。といった風に。諸説あるが、本人の資質や人種、血筋などの影響が強いとされる。

管理局の局員の大多数を占める一般的なミッドチルダ人たちの魔力光が

似たり寄ったりな色をしているのはそれが理由ではないかといわれている。

もっとも、例外は多く意図的に色を変更することも可能なのでそれだけとはいえない。

だからこそ彼女が“そう思い込んだ”のも致し方が無かった。しかし『これが答えだ』といわんばかりに彼の足元に展開された魔方陣を見て絶句する。

「……………魔力光が　　ない!？」

ベルカ式の三角形のそれは確かに展開されていた。だが、それを構成する薄い線は見えてもその光が見えない。発していない。

あり得ない。最初にプレシアが思ったのはそんなことだ。誰であろうと魔力光は持つ。それがない魔導師などいない。なのに、目の前の男にはそれが無い。確かに魔導師であるはずなのに。

「正確には無いんじゃない、無色透明なんだよ俺の魔力光は」

「……………そんな馬鹿な……………」

様々な色を聞いたことはある。

地球の日本でいう血液型占いのように根拠はないが、魔力光別性格占いななんてものさえミッドチルダにはあるのだ。

ましてプレシアは研究者。自身が少し特殊な色だったこともあって他の色について知識がないなんてことはない。一般には知られていない稀有な色も知っている。

だが、そんな彼女でさえ無色で透明な魔力光など噂話や御伽噺ですら聞いたことがない。

「さて、ではもう一度問題だ。

俺の魔力光は無色透明なのに、なぜ魔力刃は赤いのか？」

そんな驚愕のなかにいるプレシアを揺さぶるように再度その問題は投げかけられた。

(……考えられるのは意図的に赤色にしてる。無色透明はあまりにも奇異過ぎる。

目に見えない魔法が撃てるメリットがあってもそれがバレて研究対象にでもされてはたまらない)

が、一瞬そう考えた自らの思考を違うと切り捨てる。

(それをなぜ『問題』にする必要があるの？

しかもこのタイミングで、その意図は、その意味は……)

戦いのさなか。

プレシアが自らの優位性を伝えた途端に出してきた問題。ならそれは彼女が持つ優位性に何らかの關係を持つ。

「っ、まさか！ 赤になっ……てしまっ……う!？」

そうして、まさかの答えに行きつく。

「すごいな…… ヒント出して一瞬でそこまで行くなんて、なっ」

『それはまあ……研究者としては一流ですからね、あの人……次は後ろです!』

プレシアが突如空間モニターと空間コンソールを開いて作業を始めたため、

少し止まっていたゴーレムたちが再び動き出してコウキに襲い掛かってきた。

その攻撃を避け、次々と撃破していくなか。プレシアはその事実を突き止める。

「魔導炉のエネルギーが……あの男にも流れてる!？」

プレシアが有利なのはそのエネルギー総量。

それを支えるのがロストロギア内臓の魔導炉。

そこに思い当たった時、あることを思い出したのだ。

エネルギー源となっているロストロギアが小さな“赤い”宝石型であつたことを。

無論、そこからあふれるエネルギーの色も同じく。

元々自身の色を持ち卓越した運用能力を持つプレシアに影響は当然ない。

だが、そもそも色がなければ、制御はともかく運用では劣つていたとするなら。

魔力光がその色が染められるのはある意味当然ではないか？

「また迂闊だつたなプレシア、俺がジュエルシードを制御していた時点で

俺に他のロストロギアを使わせないように気をつけなくてはいけなかつたんだよ、お前は!」

『それを怠つたがゆえにこの結果を招いた……慢心はいけませんよプレシア』

「……なぜ……?」

得意げに語るふたりを尻目にプレシアはなぜと呟く。

それはどうしてそんなことが可能なのか、ということではない。

「なぜ私への供給を止めるように仕掛けなかったの!？」

本来彼女専用だった供給ラインにハッキングして自分へのラインを作れるのなら

プレスシアへのラインを破壊してしまうことだって不可能ではない。

だが、細かく確認をした彼女は気付いてしまった。

そんな痕跡どこるか、しようとした形跡すらないことを。

それどころか一方に多く流れることがないように50%・50%で割れるようになっていた。

『……私、さつき言いましたよね？ ケンカしてみたかったって。

決して一方的に叩きのめしたいわけではないんですよ』

「俺は逆にあんたを叩きのめしてやりたいが、一方的じゃ意味がない。

だからこそ同じ量のエネルギー。それでやりあって、お前が負けたら言い訳できないよな？」

ニヤリとどこかまだ子供っぽさの残る笑みを見せる。

同じ魔力量ではあるがここは彼女の本拠地でゴーレムの数の利まである。

完全にアウエイなコウキたちが不利なものには変わりがない。

だが、そんな状態で彼女が負けるようなことがあればそれは完全なる敗北だ。

それをお前に教えてやる。彼はそう言っているのだ。

「だから……ふたりできつちり半分こだ」

不敵に笑い、かつてなのはがフェイトに魔力を分けた時の言葉を引用する。

もつともその意味合いはまったく違う。
同じ土俵の上で完膚なきまでに叩きのめしてやると言外に告げたのだ。

「この私に勝てる気でいるの!？」

私の半分も生きていないような青二才の分際で!！」

「なら、受けてみるか! その青二才の、『星の斬撃』を!」

それはまた稀有な光景だった。

無色だった魔方陣が桜色に変わって光る。

赤い魔力刃はそのまま、しかし輝きだけが桜色に染まる。

「デイベイイン」

バルディツシュ・リニスを上段に構えての、タメ。

咄嗟にコウキの近いゴーレムを動かすが、遅い。

「セイバアアッー!！」

桜色をまとう赤い刃が振り下ろされる。

一条の刃が広間を一直線に突き進む。

「くっ!」

ゴーレムたちを重ねて壁にして防ごうとしたが、

そのおよそ10体分の盾と鎧を切り裂いて、遠き位置にいたプレシアにまで迫る。

「ああつ！」

手を突き出して対魔法用のシールドを展開する。円の盾に弧の刃が激突する。

「う、ぐぐぐつ！」

（なんなの、これ？ ただ魔力刃を飛ばしたんじゃない!?）

全力で組み立てたシールドがきしむ。突き出した手が押し込まれる。その感触は刃を受けたのとは明らかに違うとプレシアでさえ気付いた。むしろ別の魔法を受けた時ととてもよく似ていた。

（これは……まさか……斬撃型の、砲撃魔法!?）

デイベインセイバー

高町なのはのデイベインバスターの、コウキ流のバリエーション。魔力刃を飛ばしたわけでも、魔力斬撃を飛ばしたわけでもない。斬撃の形をした魔力砲撃を撃つのだ。

それは魔力刃作成に特化したバルディッシュ・リニスを活かすための魔法。

同規模の魔力を込めた純粹砲撃に比べれば破壊力や威力範囲では劣ってしまうが

刃状に凝縮されたソレの一点に集中した威力は本家を超える。

「あつ……あああああつ……！」

シールドを斬り裂かんとする砲撃に自分の盾が持たないと判断した彼女は
半ば強引に盾に魔力を注いで、強引に盾の角度を変えた。
すると滑るように砲撃はそれが大広間の一角を切り裂いて破壊する。

「はあ、はあ、はあ……」

直撃こそしなかったが、プレシアは肩で息をして膝をつく。

追撃を避けるためにゴーレムたちに休む間もなく襲えと命令するだけがやっとなほほどに。

(いまのたった一回の砲撃で私の通常魔力が4割も削られた……)

魔導師同士の戦いはいつてみれば互いの魔力の削りあいともいえる。当然だが、撃つのも、防ぐのも、飛ぶのにも、魔導師は魔力を消耗する。

魔法を発動させるだけでもなのは勿論、それをぶつけあった場合も特に防御は直撃するよりはマシとなるが相手の魔法によっては魔力の大部分を持って行かれることもある。

特に直射型の砲撃魔法は一撃に込められた魔力が多いせいかわりも多い。

斬撃型という特殊な砲撃ではあったが、その裏に魔導炉からの供給があった以上
そこに込められたエネルギー量はかなりのモノであったといわざるを得ない。

だがそれはプレシアも同じこと。

供給を受け続けている彼女に魔力の枯渇という敗北はない。だが。

エネルギー総量では微々たる消耗も、肉体には“魔力が削られた”というダメージが残る。減った分の魔力を補充できても、そのダメージは容易には回復しない。

早急に決着をつけなくてはいけない

いまのをあと一回か二回受ければもう自分は立ち上がれないほどのダメージを受ける。

元より戦闘用の魔法訓練など最低限しか受けていないプレシアだ。そのうえその肉体は今や死をいざなう病魔に侵されている。

長引けば長引くほど、彼女には不利だった。

威力の高い攻撃のタメをさせないための連続的に襲うゴーレムの中。跳び回り、躲し、切り裂き、弾く少年を見据える。

そういえば、と。

その瞬間、唐突といえば唐突に。そして当然といえば当然な、ある疑問が浮かぶ。

こいつはなぜ“自分と戦っているのか”と。

あまりにも不可解な点が多すぎるこの男。

フェイトから聞き出していた話からジュエルシードとの出会いは偶然でしかない。

強い使い魔を従えているわりに本人の魔導運用は非常識でめちゃくちゃ。

いま聞いた話だが、おまけに魔力光が無色透明なんて摩訶不思議な

部類の話だ。

ましてや管理外世界の人間である彼が何の目的か管理局と協力してまで

こんなとこにやってきて、自分を叩きのめそうとする。

最初はフェイトへの安い同情かと思ったが、それならなぜこいつはここで自分にはかり向かってくるのか解らない。

何かいいよのない怒りがふつつと沸き上ってきた

ジュエルシードともフェイトともプレシアともなんら繋がりのない男。

仕事でも同情でもなく、なぜこの男は自分の前に立ちはだかるのか。プレシアにはまったく理解できなかったし、理解しようとも、もう思わなかった。

「……訳の解らない男に……私とあの子のあるべき未来を邪魔させはしない!!」

コウキを取り囲むゴーレムの円の外にさらなるゴーレムの円が完成する。

これまで巨大な剣や斧、拳をふるうゴーレムたちばかりだったなか。新たなゴーレムの両肩にあるのは砲。いくつもの巨大な砲門がいつせいにコウキに照準を合わせる。

「げっ!!」

『まずいです、あれけっこつすごいの来ますよ!!』

リニスの叫びのような注意喚起とほぼ同時にそれらは放たれる。

取り囲んでいた近接仕様のゴーレムたちを巻き込んででも共に吹き飛ばそうする砲撃。

一発、一発がなのはディバインバスターに匹敵しかねない火力。それが計16門。

「……………危な、今のはけっこう焦った……………」

直撃すればただではすまないそれはもはや防御で防げるレベルではない。

だからこそ、飛びあがって避けるしか方法がない。

眼下では先程までいた位置には何も無くなっていた。

比喻ではなく、物理的に床すらなくなつて大穴が開いていた。

あの場にいたままを想像するとゾッとする光景である。

『コウキつ、周りを！』

空中に座す少年の周囲を包むゴーレムの召喚《生成》魔方陣。

瞬間的に表れる巨大なコウモリのような翼を持つゴーレム。その数5。

「空戦タイプまでいたのか!？」

『はい、見た目に反してそこそこ素早いですよ』

舌打ちしつつ即座に目の前のゴーレムに斬りかかろうとする。が。何かに体が無理やり引き止められる。

身体を見下ろせば両手首、両足首に紫の魔力の輪。

「バインドつ、誘い込まれた!？」

『うわっ設置型が使えるなんて聞いてませんよプレシア!』

ふたりの驚愕と文句の言葉は半ば黙殺されながら、空戦ゴーレムが一斉に飛びかかる。

手に持つ、対人間と考えればあまりに巨大な複数の槍が一点を襲う。

「ラウンドシールド！」

『複数同時展開！』

襲いくるすべての槍に対して、同数のシールドを張って防ぐ。

コウキの周囲を囲むように守るシールドはしかし、今にも四散しそうだった。

そもそもこんな数のシールドを同時に発動させる技量と性能がふたりにはない。

莫大なエネルギーを使って無理やり作った盾が頑丈なわけがなかったのだ。

「っ、魔導炉のエネルギーで強引に解く、手伝え！」

『もうやっています！』

バインドは術式を解析して開放処理を施し拘束が弱まった時点で魔力を込めて破壊する。

当然注げる魔力の量が多い現状ならそれほど時間がかかる行為ではない。

が、ここに残念な話がある。

コウキという男は術式を解析するのは得意だがそこに魔力を注ぐという概念がよく解らない。

感覚で魔法を使う彼には数学的で理工学的な魔法の術式に魔力というエネルギーを注ぐというのが理解しきれない。

つまり、一言でいってしまうえばバインドを解くのが苦手なのだ。

そしてバルディッシュ・リニスにはデバイスとしては破格の製作費を誇る。

しかしそのほとんどはリニスとしての人格を維持する部分に持っていかれている。

それも、インテリジェントデバイスとして当然の機能に障害を起こすほどに。

魔法の威力や到達距離の強化や同時発動数の増加、無詠唱での発動、魔導師との同時魔法行使などといったことがほとんどできない。つまり、バインドを解く手助けは文字通り最低限しかできない。

「くっ……」

腕を力技で動かすが、逆方向に引つ張られる。

バインドは解けかけているが、まるで解けかけた飴かゴムのように粘りつく。

苦手同士ではいくらエネルギーがあっても時間がかかりすぎるのだ。ましてや今は強引に作った複数のシールドも維持しなくてはならない。

あまりにもしなくてはいけない作業が多すぎた。

「いやっ、それはちょっと待って！」

『タンマっ、タンマですプレシアー!!』

これは不味い。

と本気で焦り始めたコウキの視界に文字通りの紫電が奔る。

杖を構え、魔方陣を展開し呪文の詠唱に集中している彼女から迸る魔力と雷鳴。

冷や汗がどつと出て、背中がスツと冷える。

冗談っぽい言葉は逆にそれだけ必死なのだと言っていた。なにせ、感じられる魔力が尋常ではない。もう対人レベルの魔力量ではない。

制御に失敗したら庭園の一部くらい吹き飛びそうな魔力が必殺の魔法へと組み立てられていく。

「待つわけないでしょう……食らいなさい、サンダースマッシュャー……！」

強い言葉と共に杖が振るわれる。

轟雷

音さえ後からついてくる速度で巨大な雷が半ば一直線にコウキに向かう。

バインドは解けきらず、周囲には今にもシールドを破りそうなゴレムたち。

逃げ場がないどころじゃない。防げるかどうかどころでもない。そもそも逃げられない。そもそも防ぐ手段がない。

バインド解除は間に合わない。シールドはこれ以上増やせない。

為す術がない

それは誰の言葉か。

そんな眩きなどがき消す激しい爆発と粉塵。

室内で使うにはあまりにも威力を高め過ぎて発射地点にいたプレシアでさえ揺らめく。

着弾の衝撃は彼女にまで届き、思わず顔を庇って床に膝をつくほどだ。

とはいえすぐに顔を上げ、コウキたちがいた場所を見るが未だ粉塵が舞っていて視認ができない。

空戦ゴーレムを召喚して“視”に行かせる。彼らを通して周囲を探る。

「……やったってことかしら……」

そこには何も無い。取り囲んでいたゴーレムも木端微塵となったが、取り囲まれていた男とそのデバイスも、もはやいない。

何かしらで防ごうとしたとしても天井に開いた大穴を見れば魔法が対象を“貫いた”のは明白。

「……………リニス、わたしは……………ガツゴツ、ゴホ、ゴホツ、ガハツ……」

何を言おうとしていたのか。

自分でさえ解らないまま、プレシアは血を吐いてその場に崩れ落ちる。

（次元魔法を、目の前で使うなんて…無茶にも程があったようね…）

一瞬、遠のきそうにさえなる意識の中。自嘲気味な笑みを浮かべる。

通常サンダースマツシャーは雷が付加されているとはいえただの遠距離砲撃魔法である。

だが、いまプレシアが使ったのは以前フェイトに向けられた次元跳躍魔法のサンダースマツシャー版。

術者とは異なる次元で効果を発生させる次元跳躍魔法は極めて高度な魔法であり、

人間を狙い打つような精密射撃にいたっては、常識を超えた制御能力が必要とされる。

それを、あえて目の前にいる人間に向けて撃つ。

実際に次元跳躍しない分、複雑な計算は必要なくその高度さを威力に持っていける。

その分、普通に次元跳躍する以上の制御を必要とし更なる魔力と体力を消耗する。

さらに強力すぎるゆえに少しでも制御を間違えば余波だけで自分さえ巻き込みかねなかった。

「んぐ………こんな、とこで………倒れてる時間はないの………」

だがそんなことは些末事だ、と。

言うことを聞かない足にムチを打ち、杖を支えにして立ち上がる。

「たった5個と、魔導炉だけで行けるかどうかかわからないけど、試すしかない。

もうそうするしか………」

手段が、そして何より時間がない。

10個以上は欲しかったところだが残り16個を手に入れる手段がない。

バルディッシュのAIを停止させた1個は別として保管されている

残り5個を

取り出すことが出来ていればよかったが、停止させたジュエルシードが守ってもいるようで

プレシアはその1個すら取り出すどころか正確な数さえ確認できなかった。

管理局が所持する残り10個は現在のフェイトが奪える可能性は低かった。

それにプレシアは彼女へ向けられていた操り糸が切れ掛かっているのも感じていた。

よしんばあの白い魔導師に勝ってもこちらに持つてくるとはプレシアは微塵も思っていない。

なら、手元にある5個と魔導炉のロストロギアを暴走させるしかない。

届かない可能性が高いが、それしか手段がなくそれ以外を模索する時間もない。

「……………待っていて、アリシア……………必ず、必ずあなたを……………」

愛しいあの娘を、そしてあの日々を、取り戻す

どれだけの犠牲を払おうとも、絶対に！！

だからプレシアは進んだ。

もはやまともな言うことを聞きはしない身体を歩かせる。
アリシアの肉体を新たに保管した庭園の最深部へ。

脳裏に浮かぶのは穏やかだった日々だ。

アリシアと共に過ごしていた何気ない日々。

どうしてあれがずっと続くと誤解していたのか。

どうして仕事を理由にあの子との時間を削っていたのか。

どうして会社からの言うことに従い続けていたのか。

どうして危険性を把握していながらあの日だけでもアリシアを遠地に置かなかったのか。

思い起こされる日々が幸せであればあるほど、後悔の念も強く湧き上がる。

ごめんなさい、と謝ってすむ問題じゃない。そもそもそんな声は届かない。

あの子にもう一度触れたい。

あの子の声をもっともつと聞きたい。

あの子の笑顔をずっと見ていたい。

抱きしめたい。謝りたい。もう二度と離さない。そして

（そして、そう　あの子に、アリシアに……約束していたプレゼントを……あれ？）

「……何を、約束して……？」

深いダメージが身体ばかりでなく頭の動きさえ鈍くする。

アリシアとしていた約束さえ、すぐに思い出せない。

一瞬愕然とするプレシアだが、今は、と頭を振る。

「……もう一度、目を開けてさえくれれば……あの子に、あの声で呼んでもらえるのならっ!!」

それまで忘れていてもいいよね、と。

目の前のカプセルの中で眠る愛娘に問いかける。

起きたら、思いつきり叱ってくれても怒ってへそを曲げてもいいから。

もう一度、私を呼んで

「……そんな資格が、お前にあると思っているのか……」

溢れ出そうな切なる願いを、一蹴する言葉がその空間に響いていた。

そして、プレシアに“その過ち”が突き付けられる

「お前は、アリシアの母親なんかじゃない」

斬撃と轟雷（後書き）

勝負そのものには、まったく勝てないオリ主って、あいか？
というか実質これが二戦目って、無印編もつと早くに終わってる予定だったのになあ。

お気に入り登録が100件超えた！　ありがとう！

そして星が集う

5月8日 PM 10:16

アースラ・ブリッジ

『シユート!』

『はあああつ!』

モニターに映される少女達の戦いは激化していた。

最初の大雑把なやり取りがウソのようにフェイトさんは己の武器を正確に使っていた。

なのはさんの攻撃を的確なタイミングで避け、反撃しつつ高度な空戦を見せている。

もうそれは局員たちの教本ビデオにしたいぐらいの素晴らしい腕前で。

それに食らい付いているなのはさんも数日前まで魔法を知らなかったとは思えないほど。

^{アースラ}うちに欲しいわ、ふたりとも。

保有限界があるからちよつと無理だけど、そう思わせてしまうほど

の戦いだった。

だからこそ。

「…艦長、本当に止めなくていいんですか？」

そういう疑問が出てしまうのは当然といえた。

「ええ、もうフェイトさんの意識が出てきている以上問題はないでしょうね」

沈黙させられたはずのデバイスもいつのまにか自我を働かせている。やっぱりこれが狙いだったわけね。あなたは。

プレシア女史には自分を。

フェイトさんにはなのはさんをぶつける。

それが一番適当な組み合わせだと思ったわけね。勝つか負けるかは思いつき無視して。

ああ、解らないわけじゃないのが悔しいわ。本当に。

「けど、このふたりには『勝負』と『決着』が必要だと思うわ。これから”を考えるなら。”

どっちが勝つにしろ一旦終わらせないと、きっとこの子たちは次を始められない」

素直ないい子たちだとは思っけど、どうにもその辺り不器用みたいだから。

「それにどっちが勝ってもあんまり事件には関係ないしね……」

フェイトさんが勝っても、ジュエルシードが手に入るわけじゃない。なのはさんには悪いけど渡したのは事前に彼が『念のため』作っていた偽物。

例えば本物だったとしてもすべてを知ったフェイトさんが持つていくかどうかは疑問がある。

なのはさんが勝っても、フェイトさんを楽に拿捕できる程度の意味しかない。

何より彼女はこの事件の重要参考人ではあるけど、あまりにも色んなことを知らされていなかった。

それが露見している今となっては重要度は落ちている。

そういう打算的な思考もしてくれるだろう。

と、見抜かれているのが癪に障る。

この状況を作った相手への苛立ちは増しているけど、今は我慢しときましよう。

エイミイがまた震えだしそうだし。

「彼のところは？」

「はい、シャマルたちが介入してくれたおかげで庭園内部はほとんどモニターできてます。

……コウキくん本人はゴーレムの数に押されて苦戦中のような感じが……」

なのはさんとフェイトさんのモニターの隅に小さく表示される彼とゴーレムの戦い。

赤い魔力刃で次々と斬り倒してはいるが、あまりに多勢に無勢。

どこか勢いで乗り切ろうとしている風の彼には少々、分が悪い。

「クロノ執務官は？」

「すでに庭園内部に突入していますが、防衛システムに阻まれて深部まで進めていません。」

「ザフィーラたちもコウキくと合流したいようですが、同じく動きが取れていません」

彼と交戦中のゴーレムはプレシア女史が動かしている様子があるけれど

それ以外はすべて自動のはず。それでも数の暴力の前にはあの子でもきつい、わね。

これは……………わたしにも来いつてこと？

5月8日 PM 10:20

海鳴市近郊海上

すごい

素直にそう思えた。

初めて会ったとき、一撃で終わらせられたのがウソみたい。

あの時あの子を倒せた攻撃が、ひとつも通らない。当たらない。

この前まで、飛んでるだけだった子が今はもう空戦で私とせめぎ合っている。

強くなっていた

才能は、あったと思う。

思えば会う度に強くなっていたことを思い出す。

私は母さんのことばかりでそれに気付いても、気にしていなかった。

気にするだけの余裕が多分、なかったんだと思う。

どうして

それなのにあの子は私と真正面から向き合って、まっすぐ見詰めてくれた。

何度も何度も、名前を呼んでくれて。

何度も何度も、話をしようとしてくれた。

そのたびに私は何度もひどいことしたのに「友達になりたい」と言ってくれた。

でも

私はなにもかもウソだった。

小さいときの記憶も、母さんの娘だということも。

ならフェイト・テストロツサという名前でさえ、もうウソだ。

「行くよっ、フェイトちゃん！」

なのはどうして君に呼ばれると嬉しくなってしまうのかな？

私はフェイトでいていいと、言ってもらったような気になってしま
う。

友達になりたいって言葉にちゃんと何も返していないのに、もらっ
てばかりいる。

そんなのは嫌だ

頷くことも拒否することも決めてないくせに。

今のままじゃ返せない。私はまだあの子と対等になってない。

たとえ私のすべてが嘘でもあの子と出会って戦って“何か”をもら
ったのは本当だ。

たとえ私の過去が借り物でも、まだ“始まって”いない私たちに
は、すごく関係なかった。

だから、まずは終わらせないと。

「……やるつ、バルディッシュ。そして勝とう。
勝って終わらせて、そして……始めよう。新しい私を……本当の
私たちを！」

すべてはそれからだって、胸の奥で『わたし』が叫んでいる。

『Yes sir.』

だからだろうか。

今日は一段とその声が心強かった。

そうだ、バルディッシュもずっと私と一緒にだった。

だからこのままじゃ終われない。

私の為に身体を張ってまで『違う』といってくれたお前のためにも。
お前を作って、私に残してくれたリニスのためにも。

このまま終わるわけにはいかない。

全力でぶつかって、勝つ。

そのための力、そのための魔法を私はちゃんと教えてもらったんだ
から。

私が使える中で最も防御を削れる魔法であるランサー。

それを魔力が続く限り無数に発射するフォトンファイアを30体作
り出す。

さすがにその圧力の前に動き出そうとするあの子だけど、そうはい
かない。

「え、えっ、バインド!？」

『Lightning Bind complete.』

設置しておいたバインドをバルディッシュに任せて、私はスフィアの作成を完成させる。
動けないあの子に30体のスフィアからの計100発を超えるランサーを連続発射する。

「フォトンランサー、ファランクスシフト……」

「っ！」

防御する暇も与えない。しても貫く。

「打ちっ……砕けえっ!!」

号令に従って発射され続ける光の槍。

一直線にあの子に向かい、その小さな身体に直撃する。
響く着弾の爆音と衝撃を無視して、さらにさらに撃ち続ける。

舞い散る粉塵があの子を姿を隠してしまうが手応えはある。確実に当たっている。

私も魔力を使い切ってしまうけど、これではなくてはあの子は落とせない。

全力で向かってきてくれたあの子のためにも、これからあの子とちやんと向き合うためにも。

私はここで、全力であの子を落とさなきゃいけないんだ！
だから。

「スパーク」

発射数を100を軽く超え、役目を終えたスフィアを集めて一本の長大な槍とする。

これで、勝つ！

「 エンド! 」

やり投げのように撃ちだしたそれは真っ直ぐに進み粉塵の中心に直撃する。

今まで一番の爆音と衝撃。そして一段と濃い粉塵が舞う。

「 はあはあはあ…… 」

いつぶりだろうか？

ここまで魔力を使ったのは久しぶりというか初めてかもしれない。少しでも気を抜けば飛ぶことさえできなくなりそう。

その疲労感に身をゆだねてそのまま眠ってしまいそうになる。

「 ……あの子は? 」

その誘惑を振り払いながら、粉塵の向こうを凝視する。

ファランクスはその性質上いくら一点に集中させても全弾は当たらない。

だけど、どんなに少なく見積もっても7割以上は軽く直撃している。そのうえ最後のスパークエンドは確実に当たったはず。

いくらか防御できていたとしても、最後まで出来たとは到底思えない。

ならばなぜ、あの子は落ちていないのか？

あの何も見えない粉塵から何かが落ちたのは見えなかった。つまり、あの子はまだあそこにいる。耐えきった？

かもしれない。あの子の防御は本当に硬いから。でも、それでもかなり魔力は削った。たぶん私よりも少ない。ならあとは私があと一撃入れればそれで……終わる！

なのに、どうしてあの子はあるに

バリアジャケットはもうボロボロだ。

魔力だって、ないはずなのにあの子の顔には落胆はない。負けを覚悟した様子もなければ、痛みに耐えているわけでもない。あれは、まだ、私に勝とうとしている子の顔だ。

なにかある

私が気付いていない所できっと何かしてる。得体の知れない悪寒。咄嗟に身体が動く。が。

「っ、バインド!？」

動き出そうとした身体はその縛りでそれを停止させられる。私が設置していたようにあの子も設置していたんだ。だけど、なぜいま使う？

あの子の魔力はもうほとんど残って………？

流れ星？

「え、なに……?」

あの子の周囲だけじゃない。私の周囲からも。ううん、今まで戦いに使ってた結界内部全域から小さな流れ星のよ
うな光が流れていく。

「……………っ!??」

その流れを目で追って、愕然とした。

星が一点に集まっていくその光景は少し幻想的だけど、
集まっているモノが魔力モリだけに見惚れている場合じゃない。

魔力集束!!??

周辺魔力を体内を通さず直接使用する砲撃魔導師の最上級技術エクストラスキル
しかも集まってるの、あの子が使った分だけじゃない。
私が使った分も、フランクスの魔力まで。私たちふたりのほぼ全
魔力分だ。

集束ロスがあつたとしても防いで耐えられるものじゃない。
こんな切り札を残していたなんて。
これじゃあもう私に勝ち目なんて……。

「…フェイトちゃん」

集まっていく魔力の後ろから、いつもの呼び声が聞こえてくる。
流れ星に気を取られて一瞬見失ったあの子からの声。

「……これが私の最後の一撃。だから撃つたらきつともう落ちちゃ
う……」

防がれたらフェイトちゃんの勝ち、撃ち抜けたら私の勝ち。
もし私が勝つたら、少しでいいんだ。お話、させてほしいな……」

「……………」

ああ、そうだね。

君はいつだってそういつてまっすぐ私に向かってきてくれたのに。
また私はあっさりと諦めてしまっうなんて。

それじゃだめだって、さっき自分で決めたばかりだったのに。
今度こそちゃんと応えないと！

「……………受けて立つ！ 私だって負けない！」

「うんっ！ いくよ、フェイトちゃん！」

傷ついたバリアジャケットを組みなおす。

残った魔力を配分して強固なシールドを作り出す。

最後まで諦めない。戦う。全力で向かってくるあの子を全力で受け
止める！

「……スターライト………ブレイカアアツッ！」

そして、星が落ちる

……ああ、負けちゃった。

残り少ない魔力で幾重にもシールド貼ったのに5秒も保てなかった。

でも、なんでかな。ちっとも悔しくなくて、妙に気分がいい。

きつとこの暖かい魔力のおかげかな？

……ありがとう……えっと……あれ？

ああ……わたしって本当にだめな子だ。

あの子の名前、ちゃんと覚えてなかった

「フェイトちゃあっんー!!」

落ちていく私を呼ぶ声に「ごめんね」と心でつぶやいて私の意識も落ちていった。

戦闘時間 34分43秒

勝者 高町なのは

そして星が集う（後書き）

なのフェイ決着。

本当にどうしようか迷って錯綜しまくってこうなった。だってさ、アニメ、小説、映画、漫画でそれぞれの形で描かれたこの二人の決着を

いまさらどう描けてんだ。なのでほぼフェイト視点。スターライトをもっと怖く書こうかと思ったが、ギャグになるのでやめた。

最後のも一応ギャグではない。確かまだこの時点では原作でも名前を把握してません。

ちなみに人体操作魔法は意識が戻ると弱まるし、なのはの魔法による魔力ダメージでいつしか壊されていたことになってます。

次は、コウキとプレシアの決着！

の、はずだったんだけどなあ……（汗）

母親の資格

5月8日 PM 10:29

海鳴市近郊海上・結界内部

「で、これからどないする？」

突如彼女はそんなことを言い出した。

集束砲撃というとんでもない魔法の一撃をもらったフェイトは一時的に気絶し海面に墜落。

助けようとしたなのは魔力消耗が激しく同じく墜落。

そんなふたりの助けに入ったのは念のために潜んでいたはやとシグナム達だった。

「どうするって、わたしとフェイトはそっちに捕まるしかないだろ？」

ユーノによって見つけれられここまで連れてこられたアルフは

彼ともども、それぞれのパートナーに治癒魔法をかけていた。

「うん、それはまあそうなんやろうけど……ほれ、今はまだ拘束されとるわけやないし。」

「うちら別に社員さんなわけやないから、やりたいことあったら今のうちやで?」

ニコニコとした微笑みを見せながらも誘惑するかのような言葉に「ー」だけが苦い顔をしていた。

おそらくこの場ではやての真意を正確に読めたのは彼だけだった。

(血は繋がってないって話だけど……本当に兄妹なんじゃないかな、彼女と彼は……)

巧みに誘導しながらも、最後の決定を本人に丸投げする態度は実によく似ていた。

「魔力は……もう問題ないやろ?」

ついでにいえば、逃げ道をちゃっかり塞ぐところも。

すでにはやてからなのはもフェイトも魔力提供を受けている。

量だけならふたりすら超えるはやての魔力量は膨大で、

さすがに完全回復とはいかなかったがどちらも6割程度には回復していた。

「うん、ありがとうはやてちゃん。」

「じゃあ私はコウキさんの所へいかないと……まだ戦ってるんでしょ?」

「あはは、なのはちゃんはわかりやすいなあ……フェイトちゃん

はどつする?」

「え、わたし?」

「フェイトちゃんはまだ決着つけなきゃあかんこと……あるんやない?」

一瞬、フェイトの顔に動揺が走った。

けれどそれは本当に一瞬で、次の瞬間には彼女は立ち上がっていた。

「そつだね……ちゃんと終わらせないと……」

始められないから。と呟く。

その顔にもう迷いはなく、怯えもなかった。

はやてはそれを見てより笑みを深くした。

「うちは残念ながらお留守番やね。さすがにふたりにあげてスッカラカンや」

だから言外に「あとはよろしく」と笑顔で告げるはやて。

それに頷いてみせたフェイトとなのは、続くようにアルフとユーノが空に浮かび上がる。

「なあフェイトちゃん。

あたしも『友達になりたい』んやけど、そのへんの答え待っててええか?」

僅かにキョトンとした顔をしたフェイトはしかし、はっきりと頷いて庭園へと転移していった。

それを手を振って笑顔で見送ったはやては後ろにいたふたりに振り

返って告げる。

「さっ、こちらはアースラでみんなを待ってよか」

「……よろしかったのですか、一緒に行かなくて？」

だが、それにシグナムは少しだけ気遣うような言い方で訊ねた。当のはやてはあっけらかんとした態度で答える。

「うーん、行きたいのは山々なんやけど。」

魔力は本当にきつくなつとるしアースラを空っぽにするのはあか
んと思うんよ」

もうこれ以上アースラそのものに手を出す余裕も戦力もないのは解
つていたが念のため。

というよりさらわれる前に彼から頼まれていた身としては『お留守
番』とはいえ手は抜けない。

「だからごめんなシグナム、ヴィータ。本当はみんなも行きたく
たやろに……」

「ええ……まあ、主コウキはどうしてかすごく……目を離すと何か
不安で」

「なんつーか危なっかしいんだよな。しっかりしてる癖して……」

困ったものだ。と。

頷きあつ騎士二名の姿にくすりと笑みを浮かべるはやて。

「……あたしコウ兄のことなんて一言も口にしてへんけど？」

「「つつ!?!」」

もっとも、その笑みはからかいのネタを見つけた、という意味だが。

「そうか………やっぱふたりもコウ兄のことしか頭にないかあ……」

「あ、主!?!」

「はっ、はやて!?!」

まさかの指摘に慌てるふたりを尻目に、小さく「あたしもやけどね」と呟く。

(………ほんとになんて厄介な人に惚れてしもたんやるか?)

これはコウ兄にはぜったい責任とらせな、あかん………)

だから、どっか無事で

5月8日 PM 10:22

時の庭園・深部

『動いてはダメと言っているじゃないですか!』

「いや……あんまりのんびりとしているわけにも……」

なるほど。

これは確かに口やかましい使い魔だ。

なんてことを思いながら、廊下の壁に寄り添うように歩く。

正確には壁に寄りかかってないと倒れてしまいそうだからなのだが。

『時間がないのは理解しますが、その状態で動いてどうなります!』

まずはきちんと治癒魔法をですね………』

「悪い、俺……治療系苦手……」

『は………?』

リニスの言いたいことも解るのだが、治療する手段がない。

放っておくと変な方向に暴走しかねないプレシアがいる以上応援を待つ時間的余裕もない。

幸いにして、傷口からの出血は止まっている。右手はかなりいこうと聞かないけど。

いまはその右に壁。左手でリニスを杖代わりにして庭園最深部へと向かっている。

『治療系“も”苦手って……じゃあ、あなた何が得意なんですか!』?』

舌(？)を休ませずに次から次へと話しかけてくれるのはありがたい。
い。
ちよつと気を抜くと意識飛びそうだからな。

とはいえ、そう耳が痛いところを突かれるのは少々反応に困る。
デバイス調整室で会った時に協力することが決まって、
色々と俺の魔導師としてのスキルや能力やらは教えていたが、
直接戦闘に関係なかった治療関係に関してはそういうえば教えてい
なかった。

『空戦に結界作成、バインドの設置と解除。』

砲撃を代表とする遠距離攻撃魔法……そのうえ治療系までも苦手
って

コウキ、あなた本当に魔導師ですか？』

あんまりな言いくさだ。

ちなみに“苦手”なだけで“出来ない”わけではない。だが。
飛べることは飛べるが、空戦が出来るレベルではない。浮かんで移
動するのが限界。

さっきプレシアに放った斬撃砲撃は魔導炉からの途方もないエネル
ギーで強引にやっただけ。

治療系はどうにも我が家にプロフェッショナルがいるせいも勉強不
足。

「……正確にはベルカ式も使える魔導騎士なんだけど……」
『ただの呼び方の問題です。言い訳にもなってません』

ばっさり。

なんだろうな。

こいつの下で学んだフェイトがどうしてあんな子になったんだ？
まあフェイトは才能あふれる真面目な子だから順調に腕前を上げて
いったらどうから
何気にこいつにとってそれとは逆の才能ない奴と話すのが初めてで
戸惑ってるのかもしれないが。

「えっと、得意なことか……………術式のプログラム組むとか、か？」
まあ必要に迫られて必死で組み上げていただけだったけど。

『思いつきり戦闘向きじゃありませんね、それ……………』
だよねえ。

「……………あとは我流の体術と剣術を少々……………」
ザフィーラとシグナムから一度も一本とれたことないけど。

『必要ないとはいいませんが、今は魔法の話をしてるんです』
ですよねえ。

『それでよくまあ「負けたら言い訳できないよな」とかプレシアに
言えましたね？』
「まあ……………あれはどっちかというところの勝利宣言というより、
あつちに油を注ぐための挑発であって、勝てる思惑があったわけ
じゃないからなあ……………」

勝てれば良かったのは確かだけど。

“勝たなくてはいけない”場面でもなかった。
あそこで重要だったのはプレシアの本気を引き出すことだった。
後はまあ、結果次第でいろいろと。
勝ったら勝った場合。負けたら負けの場合のプランで動けばいいだけ。

『……なんでしょうね。このフェイトにも劣る勝利欲の無さ。
あの子でさえ負けると少し悔しそうにしていますよ?』

「あはは、よく言われる。けど俺は自分では負けず嫌いだと思ってるんだけどな」

勝つ。負ける。の基準がどうにも他人と違うようだが。

『どこがですか、まったく……そのくせあなたは思いきりが良すぎます。』

おかげで生き残れたとはいえ、あの“避け方”は最低です。赤点です』

ええ?

俺あれしかないと思っただけだなあ。

あの瞬間。

俺はゴーレムたちを防いでいたシールドを全部解除した。
当然、あいつらの攻撃が俺を襲ったがプレシアの魔法が直撃するよりはマシだ。

そのうえ俺に覆いかぶさる形になったため奴らそのものが盾となり俺を隠す壁にもなってくれた。

シールドを解除した分でまわせた魔力と思考でバインドを強引に解

いて

俺は直撃の衝撃にまぎれる形で、故意に墜落したのだ。事前に砲撃型ゴーレムが開けていた大穴に向かって。

おかげでかなり深い所まで誰にも気づかれずに入り込めたわけだが、もつとも。

ゴーレムの攻撃を集中的に受けた右腕は大ダメージ食らったけど。

『確かに選択肢が少ない局面ではありましたが、そもそもですね…

……』

さすが元・家庭教師。

どうにも説教がお得意なようで聞いているだけで精神的にダメージ食らう。

耳が痛い。胸が痛い。心が痛い。

本当にフェイトの家庭教師だったのか？

出来の悪い生徒にはわりときつい人だったみたいだな。

フェイトたちは優秀っぽいから実害はなかったようだが。

いや、現在進行形で俺が害を受けているけど。

『……聞いてますか!？

まったく、プレシアの無茶を止めるために手を組んだのに、

その相手が負けず劣らずの無茶ではあまり意味がありませんよ…

……』

「……負けず劣らず、か…」

単なる嫌味か皮肉だったのだろうか、俺にはそれはずっしりと重い。

『……コウキ?』

「…悪いリニス、こつからは俺だけにやらせてくれないか？
お前にはお前の事情があるのは聞いているけど、俺にも譲れない
一線がある…」

あいつが『子を失った親』なら俺は『親を失った子供』だ。
大事な人を失ったのは同じでも、立場は微妙に違う。
けれど、だからといって納得できることじゃない。

「俺はあいつが許せない…だから、お前のように優しく叱っては
やれないけど、いいか？」

『……私のあれを“優しく”と表現されると不安ですが、
ダメだとしても止まらないのでしょうか？』

少しばかり呆れが入った口調でいわれたらこっちは苦笑するしかない。

「悪い……」

形ばかりの謝罪を口にして、奥へ奥へと足をさらに進めていく。
庭園内部の構造はリニスがすべて把握しているので迷うことはない。

『……聞かせてもらっていいですか？
あなたがプレシアを許せない理由を…』

その道すがら、少しだけ黙っていたリニスがそれを口にする。
非常に言いたくないが、どうにも教えないと黙っていてくれなさそ
うな雰囲気に向けた。

「……………すごく格好悪い理由だよ……」

そう前置きする時点ですごく格好悪いのだけど。

「ただの同族嫌悪と……………理想の押し付けだ」

同日 PM 10:36

庭園最深部

あちこちから聞こえる複数の爆音を無視して、俺はそこに辿り着く。庭園の一番奥にある不可思議な空間。円柱の形をした足場が無数に乱立されているのを除けば、何も無い場所。

リニスからの説明によれば、儀式魔法などを使うための場所らしい。

「……………もう一度、目を開けてさえくれれば……………あの子に、あの声で呼んでもらえるのならっ!!」

そのほぼ中心。鎮座されている巨大なカプセルに、その中にいる娘の遺体にすがりつくように叫ぶ彼女がいた。

ああ、結局お前はそんなことしか考えていないのか。
その子が目を開けたら何を見ることになるか気付きもしないで。

それを想うと胸の奥がカツと熱くなる。

そしてそれに反比例するように頭の芯はスツと冷えていく。

自分の事ながら難儀なことだ。感情的になればなるほど、冷静にな
っていくなんて。

それこそ彼女のように暴走できるのなら、どれだけ楽か。

「……………そんな資格が、お前にあると思っっているのか……………」

その嫉妬もあつたのか。

背後から思いつきり冷めた声で問いかけていた。

「っ……………生きて、いたの？」

やっぱりあれで仕留めたと思われていたわけか。

そして振り返って見せた顔から察するに思った以上に動揺はして
くれたか。

「当たり前だろ。お前に人が殺せるわけがない。

娘のためなら何を犠牲にしても……………なんて口先だけのあんたに」

声だけじゃなくて、顔がとんでもない表情をしているのが解る。

たぶんきつとすごく蔑んだ顔で彼女を見ているのだろう。

「口先だけですって？ ふざけないでっ！」

私は今日までずっとアリシア以外のすべてを犠牲にしてきたわ！」

すべて愛娘のために。

それ以外をすべて捨てて、利用して、犠牲にした。
ああ、確かにそうだろうよ。でもそれは。

「お前だけの話だろう?」

切り込むように口にしながら一歩踏み出す。

「なに、を?」

俺の言葉に困惑の顔を浮かべる彼女を半ば無視してさらに一歩。

「犠牲にしたのは、お前が持つてるお前だけだ。

プレシア・テスタロッサとしての人生、名誉、命や心。

お前は……お前以外を犠牲になんかできていない……」

「つつ!?!」

驚愕に歪む顔はその事実思い当たったからか。

そんな馬鹿な、と呟いて体が揺らめいたのはある程度真実を射抜けたからか。

「そうじゃないかとは思っていたんだ。

でも確信したのはこっちに来て、あんたとやりあってからだ」

プレシアの過去を調べれば調べるほど今していることと合わない。
娘を失って暴走していると考えても、どこか辻褃が合わない。

だから主の間でのムチや魔法を受けてその後大広間でやりあって、
やっと腑に落ちた。

「……痛くないんだよお前の攻撃……ムチも魔法も妙な手加減されてて

非殺傷でもないってのに、相手にうまく当たってない」

頬をかすめたムチの力点のずれ。相手に直撃しない角度で放たれる魔法。

紙一重で当たらないゴーレムの攻撃。

トドメを差そうと放った魔法は微妙に直撃コースからはズレていた。

「非殺傷をかけずに強大な力を人に向けて振るうお前は危険で悪人のように見える。

だが実際は細かく微調整されたお前の魔法は相手を傷つけることはあっても、

痛みが軽くて、深い傷を負わせることはできていない」

意識してか無意識か。

までは解らないが少なくともプレシアの暴力も魔法も

“それをした”というスタンスが欲しかったからしていた行為に過ぎない。

「まあ、どういった風に加減されてるのがよく解らないから

俺はこんな風にボロボロになってるわけだけどね……」

そのうえ俺の行動は色々予想外で、実質俺は自分から当たりに行っていたに等しい。

だから、見下ろした身体にまっとうしているBJの欠損はひどい。その下のキズも。

修復されていないのは“プレシアによって”傷だらけになったモノを見せるためだ。

「っ……」

言葉ごとに一步近づくと俺の姿は彼女にどう映っているのか。視線が一度だけ俺の身体を見る。一瞬浮かんだ“痛そうな”顔が真実だ。

やっぱりお前はそういう女だよ。だから、むかつくんだ。

「先にいっておくがフェイトの扱いにしたってそうだ。

治癒魔法で痕が消せる範囲内の傷しかつけたことがないだなんて

……どんな器用だそれは？」

虐待の暴力に理性的な判断などない。

それを振るうしか感情の行先が思いつけないから暴力は振るわれるのだ。

なのに、それによって付けられた傷の程度が常に軽い範囲内だなんて。

意図的な手加減でもなければ、説明できることではない。

「……なにがしたいの！」

ようやく絞り出した声はでかいが震えている。

でも、そんなに聞きたいか？

お前のメツキをはぎ落として本性を引きずり出す言葉を。

「その格好と同じだ。見た目ばかりなんだよお前は！」

アリシア蘇生の方法が禁忌の研究にしかないと気づいたお前は、そのためにフェイトを手駒として利用するしかないと気付いたお前は、

仮面を被るしかなかった。研究ばかりに熱中して他を顧みない女の

仮面を。

「アリシアを失う前の、元々のお前にこんなことはできない。でもアリシアを蘇らすにはその道を選ぶしかない。板挟みになったあんたは……そうして自分を犠牲にする道を選んだ」

だがその道は一度踏み込むと際限が無くなる。

一度自分を犠牲にする“楽さ”を知ってしまうと泥沼だ。

贖罪の意味もあつたためにプレシアには選びやすかったのがさらに拍車をかけた。

「っ、何が悪いのよ！ 言ったはずよ、すべて犠牲にしてきたと！ 私のすべてはこの子のため！ アリシアのためならわたしはっ……」

「いいかげんにしろっ……！」

その台詞はもう聞き飽きた。と怒鳴りつける。

アリシアのため、アリシアのためと決まり文句のように繰り返しがって。

その言葉の本当の意味、気付いてないだろお前。

それをいま教えてやる。と、最後の一步を踏み出す。

もう互いの手が届く距離まで近づいて、その顔を直視しながらはつきり口にする。

「お前はいつまで……アリシアの“せい”にしてるんだ！」

「……………アリシアの、せい？」

言われたことの意味が解らなかったのか。解りたくなかったのか。呆けた顔でオウム返しのように呟いた彼女はもしかしたら素の彼女だったのかもしれない。

だが、それも僅かな時だけで、徐々にその顔は憤怒に支配された。

「私が、アリシアのせいにしてるといふのっ!？」

突然伸びた手が俺の胸ぐらを掴んでひねりあげた。

より近くで見る顔はまるで子の仇でも見るようなそれだった。

「ただ留守番していただけなのよ……………何の責任もないのよ……………事故に巻き込まれただけのあの子になんの落ち度があるっていうのよ！」

「そんなあの子のせいにしてるわけないじゃない!!！」

その手は病人とは思えないほど強く、容易には振りほどけそうにない。

稲光も激しく迸り、感情的になつて魔力がこぼれだしていた。

正直な話、いまの彼女から逃げる手段はないとさえ思う。

あくまで“同じ腕力で抵抗するならば”だが。

「……………違つてんなら言つてみるよ、そいつに」

多少の息苦しさは徹底的に無視して俺は冷え切った声を絞り出す。

そして顎で、彼女の背後を示した。途端にプレシアの身体は固まった。まるで錆びた玩具みたいにガグガグとした動きで首だけを後ろに向ける。カプセルの中に浮かぶアリシアの遺体に視線が向かう。

「言ってやれよアリシアに……あなたのために私は違法研究に手を染めたって」

狙って、俺はそんなことを口にした。

ビクリと一回大きく震えた身体はその後、小刻みに震えだす。それで思い止まれるほど、俺は優しくはない。ないんだ。だから俺は、彼女の踏み込んではいけない領域を侵す。

「あなたのためにクローンまで作ったって言えば……」

「っ……ああ……」

言葉の真意に気付いたのか。身体だけじゃなく声までもが震えだす。

「でも失敗だったからあなたを蘇らすための道具にしたって言えば……」

「ち、ちが……」

反射的な否定は最後まで口にはできず。

驚愕と困惑に支配され見開かれた瞳は、今にも溢れ出しそうに震える。

「あなたのための研究で病気になってもう死にそうだって言えよ…」

「…あついやつ、違うの…」

むなしいくらい必死にこの女は物言わぬ遺体に首を振る。

そう、お前がアリシアのためといって自分を犠牲にすればするほど、非道に手を染めれば染めるほど、例えお前にその意志がなくなるとも、それは“アリシアのせい”になっていくんだ。

「あなたのためにアルハザードへ行くから次元断層を起こすって言えよ…」

「違うっ、違うのよアリシア！」

俺を掴んでいた手などもはや力無く落ちていた。

なりふりなど構わずに、ただ何も言わない言えない娘に言い訳するかのようにすがりつく。

「それをすれば他の世界がいくつも滅ぶって言ってやれよ……」

「やめてっ、違うっわたしは……そんな、アリシア違うの！」

否定の言葉はより必死さを増している。

もしかしたら彼女にはアリシアが自分を賣めているように見えたのかも知れない。

「全部、ゼーんぶ……アリシアのためだって言ってやれよ」

「あ、あああっ……！」

だが現実の彼女は喋らない。喋れない。
プレシアに見えているアリシアが言い訳を聞いてくれるわけもない。
だってそれはお前自身がいま感じているモノそのものだ。
俺が指摘するまで気付かなかった、気付かなかった彼女のアヤマチ。
今日まで頻繁に使っていた『アリシアのため』という言葉がそのまま彼女にのしかかる。

「違う違う違う違うっ！ わたしはそんなつもりっ！！」

「そうだよな、お前はアリシアのために頑張っただけだもんな」

自分で自分の人間性を疑いながら、これまでとは正反対の優しい声が出る。

だが、それを向けられた彼女にとってそれはむしろ残酷な言葉。

「だから言ってみろよ。母さんあなたのためにこんなに頑張ったよ、
って……」

言えるものなら、言ってみろよ。

言外の意図が伝わるかなんてどうでもいい。

この女には真綿で首を絞めるようにじつくりと、そして自らでその罪に気付いてもらおう。

「やめて！」

だがそれに妙な方向から横槍が入った。

声のほうに視線を向ければ、こちらに飛んでくる金色の髪の少女・

フエイト。

その背後に遅れる形で、なのはとクロノが一緒になって飛んできていた。

そうか、そっちはもう終わったのか。

出来ればこういう俺の黒い所は見せたくはないのだが。

「……お願いです。もう……いいでしょう……」

真摯でいて、少しの戸惑いと怯えが混ざる顔が俺に向けられる。

どこからは解らないが、途中から聞かれていたようだ。

後ろのふたりにも似たような感情が表情に見えている。

「母さんは……アリシアを取り戻したかったです。

たしかに良くない方法だったけど、それをそんな風にいわなくて
も！」

彼女が飛び出してきたのはきつと、まだプレシアへの情があるから
だ。

たとえ、自分の出生を知っても母と慕っていた時間が消えるわけじ
やない。

だから俺の言葉に打ちひしがれ、崩れ落ちた母の姿に我慢できなか
ったのだろう。

いいね。

そう思い行動できるなら君はもう心配ない。

やはり、なのはに任せて正解だったみたいだ。

「……こいつに、取り戻したいと“思っている”資格があるのなら、
な」

だから次はこいつをどうにかしないと。

「思っているいい資格？」

おかしい言い方に困惑を深める彼女を尻目に、

俺はもはや立っていることもできずに膝をついている彼女に近づく。

「お前は自分から……アリシアの母親であることを辞めたんだ」

見下ろすような位置から冷たくすらない声が落ちる。

抑揚のない声はまるで淡々と事実だけを語っているように相手には聞こえることだろう。

「え……？」

「な、なにを、言っているの……」

だからこそその誰かの疑問の声と、当人の弱々しい声。

もう、自分で解ってきてるだろ、お前。

「我が子を蘇らすためにすべてを犠牲にして、すべてアリシアのためだと嘯きながら

半ば狂気染みた想いで突き進んできたのかもしれないが、お前ちやんと考えたことあるか？」

相手の「なにを？」の言葉すら言わせずに続ける。

こいつがずっと願いながらも、決して想像できなかったその真実を。

「俺たちが介入せず、お前の目論見が全部成功してあの閉ざされた目が開いた“あと”のことだ」

「……あと？」

表情に困惑が浮かぶもののその顔は初めて見た時以上にやつれているように見えた。

下手に触れば砕け散ってしまいそんな儂さに躊躇するどころか余計に俺を動かす。

きつと夢想さえしていたであろうその瞬間。

何を犠牲にしても叶えたかった願い。

そうして取り戻せばすべて元通りだと信じて疑わなかった理想。

それをいま、叩き壊す。

「最初に見ることになるのはきつと、かなりやつれた母親と自分そっくりな顔の少女だ」

「……っつ！？」

事故の状況や直接の死因を考えればアリシアは苦しむ暇もない即死だった。

蘇生が叶えばきつと眠りから目覚めたような感覚だろう。

だが実際は26年もの時間が経過している。

突然のタイムスリップと変わってしまった母と自分より大きな妹。

すぐには解らなくてもいわずれその意味に気付いた時どうなるかなんて、口にするまでもない。

「は、あ……ああっ……い、いいえ。そうよ、隠せば、隠し通せばいいのよ！」

なにもっ、何も気付かせずにずっとここっでっ」

「ムリだよ……アリシアちゃんはきつと気付くよ……」

取り乱してその場しのぎにしかなりそうもないことを口にするプレシアに、

驚いたことに俺より早くなのはが無理だと首を振った。

「わたしも知らなかったことがあったの。

いつもわたしを助けてくれてた、大切な人の……その人の家族が死んじゃってたこと」

「なのは……お前……」

そうか。そうだった。

確かに教えてなかったよな。

ああ、なんだ。その時からもう同族決定だったわけか。

「お父さんたちは隠そうとしたけど、わたし気付いちちゃったの。

すぐくすぐく悲しくて、気付いてあげられなかった自分が悔しくて、いっぱい泣いた」

あんな想いは、もうしたくないよ。と。

なのははどこか茶化すように誤魔化したが、これが結果だよプレシア。

お前は愛している娘にまであんな今にも泣き出しそうな顔をさせる気か？

子供は子供だからゆえに、時に大人より早く真実に到達する。

隠されたそれを自ら開けてしまったそれがどれだけの痛みを与えるのか。

なのはのそれを見れば、俺のしたことの酷さが解る。

「……俺が言えた義理じゃないかもしれないが、いずれ真実はバシる。

そしてお前は背負わせるんだ……お前が重ねてきた禁忌と非道の罪を……アリシアにも！」

「あ……ああ……ああ、違うっ、違うわ！」

そんなっ、うそよ。どうしてそんなことに！

ああっ、違う違う違うっ！ わたしは……わたしはそんなっ！」

強い否定の言葉を連呼しながらも、次第に言葉が支離滅裂になっていく。

それはもう理解しているからだ。蘇生が叶った時アリシアがどんなキズを負うことになるかを。

アリシアのためだと思い続けてしてきたことがすべて裏目。

自分を犠牲にし偽り狂気をまとってまで突き進んできたことが愛娘を傷つける。

その事実を認めれなくて、だからこいつは必死に否定し続けるしかない。

「……母さん……」

それをいっただんな思いで見ているのか。

さすがにそれは俺にも想像できない感情だ。

けれど、だからといってここで終わらすわけにはいかない。

たとえここにいる全員に嫌われても、プレシアはここで“壊す”。

「何が違うものか。当たり前のことだろう。」

最初からアリシアのことを何も考えなかったからこうなったんだろっが！」

少しでよかったのに。

ほんの少しアリシアが何を望むかを想像できていれば。

「それができなかつたお前が母親なものか。

失つて出来た胸の空白を何かで埋めようとしただけの、哀れなただの女だ……」

失つた悲しみと原因の一端となったことへの贖罪。

それだけでいっぱいになってしまったお前を責めるのはひどいかもしれない。

だけど、それでも、お前が自分から彼女の母親を辞めた事実には変わりはない。

「お前は、アリシアの母親なんかじゃない」

「つつつ!!」

娘を失つた悲劇の母親。

それを免罪符にしてこれ以上アリシアのせいにしてたまるか！

「なんでだ。なんでそうなつちまつたんだよ！」

そう思つたらもう、感情が止められなくなった。

気付いたら怒鳴りつけながら胸ぐらをつかんでいた。

「アリシアは『いい子』だつたんだろ？」

失つたお前がこんなになるまで取り戻そうとするぐらい。

どうしてそれを自慢に思ってくれなかつた！

そんな子の母親だつた事を……どうして誇りにして前に進んでくれなかつたんだ!!」

俺はまだ子供だから親の気持ちはわからない。けど、だから子供の気持ちは解るつもりだ。

少なくとも俺はそうあってほしい。だってそうじゃなきゃ子供はどうすればいいんだ。

親にそう思ってもらえない子供はどうすればいいんだよ。

死んじゃってももう何もいえなくなっただけで、何もできなくなっただけの子供はどうすればいいんだよ!!

「…なんでそうなっちゃったんだよ……」

記憶を受け継いだフェイトがあんな仕打ちを受けても慕っていたくらい、

あんただって『いい母親』だったんだろうが!!

「っ!？」

「どうしてそれを自分で捨てたんだ。どうしてっ、どうしてだよ!

」!

どうして、と繰り返す俺に答えは返ってこない。

ただプレシアは俺の言葉にわずかに茫然としたあと、

見開きっぱなしだった瞳から大粒の涙を次から次へと溢れ出させていく。

そして。

「あ……… あああああああああああっつ!!!!」

何かを吐き出すかのような叫び声。

庭園中に響き渡るような大絶叫はどこか壊れていて、どこか哀しい。

もしかしたらそれは俺が初めて聞いた本当のプレシア・テストロッ

サの叫びだったのかもしれない。

なら、俺の役目はここまでだろう。

狂気染みた仮面も方向性を間違えた親の情も叩き壊せた。

あとは元々こいつが持っていた「いい母親」の部分に期待するしかない。

だから、次に起こったことを理解するのに時間がかかった

「つつ!?!」

「きゃっ!?!」

「な、なんだいったい!?!」

突然の衝撃。

一番近かった俺はまともに受けてなのはたちがいる地点とは逆に吹き飛ばされる。

円柱型の足場に叩きつけられる形で止まった俺だが、ダメージは思ったよりない。

あいつが結界で受け止めてくれたのか。感謝しきれないな、本当に。お前には。

(お気になさらず……それよりも今の攻撃はおかしい……何か別の……)

「母さん!？」

頭の中に響く警鐘の声とフェイトの悲愴な声に視線をプレシアに戻す。

色を失った顔と力が抜けた身体。それらが不可視の力で強引に浮かされていた。

その周囲には発動寸前のジュエルシードが5個。プレシアを囲むように浮いていた。

「ジュエルシードが!？」

「君たち危険だ、下がるんだ!」

一瞬。

追い込みすぎて爆発したプレシアの想いに反応したのかと思った。

だがジュエルシードはすべて完璧な封印がされていた。

外部からそれをこじ開けない限りいくらプレシアの感情が暴発してもこんな反応をすることにはならない。

いや、待て。

そもそも俺を吹き飛ばしたのはなんだ？

(主っ、右斜め上40度の方角です!)

こういうとき、頭の中が繋がっているのは便利だ。

互いで別々の思考をしても、それを瞬時に一つにできる。

魔導師のマルチタスク以上の情報をそれ以上のスピードで処理できる。

だからあいつからの方向を示す言葉だけで俺はすべてを理解する。

「そこだあっ!!!」

瞬時に魔力刃を“そこ”へ飛ばす。
高速で回転する斧の刃が狙い通りの場所へと到達する。
何も無い場所。誰もいない空間。しかし刃が到達した途端そこに変化が訪れる。

バリンというガラスが砕けるような音と共に
魔力刃と“そいつ”を隠していた魔法が霧散する。

「えっ？」

「なっ!？」

驚きと戸惑いの声は当然だろう。

俺だって正直、想定してなかった。

ここで、こんなタイミングで、まったくの第三者が出てくるなんて!

「…………お前、何者だ!？」

「フッ…………」

答えはなく、そいつはただ薄く笑う。

誰にも見る事ができないその『仮面』の下で。

母親の資格（後書き）

オリ主の長い説教のあとで、仮面の戦士（勇者王ヴォイス）登場！！

はい、こいつ（ら？）暗躍してましたよ。

出番はこんだけです（汗）

次回で一応ジュエルシード事件編終りの予定。

まさかのキャラがまさかな形で事件を終わらす！？……かも。

（追記）

やっぱり終わらなかったorz

まだ数話続きます。

5月8日 PM 10:51

時の庭園・最深部「儀式の間」

仮面の男。

白いスーツのような制服姿。

顔は見えないが体格からすれば男だろう。

突然現れた、いや隠れていたそいつ。

正体も目的も解らない存在の出現に一気に全員の警戒レベルが跳ね上がる。

「……フェイト、一応確認するがあれが何者か知っているか？」

「……知らない……会ったことも、聞いたこともない……」

仮面の男を警戒したままのクロノからの質問に同じく警戒したまま答えるフェイト。

やっぱり完全に第三者か。余計なことをしゃがって！

「……わざわざ隠れてたんだ。どうせ答えてくれないだろうが、何が目的だ？」

なぜジュエルシードの封印に干渉した!？」

俺を吹き飛ばした衝撃。

あれはこいつが放った魔法の衝撃だ。

だが俺やプレシアを狙った攻撃ではない。

プレシアが所持していたジュエルシードが、正確にはその封印が狙い。

魔力の衝撃が封印を弱まらせ、溢れ出ていた彼女の想いや願いに反応させた。

「……………しいて言うなら……」

ぼそりと呟くような男の声で、意外にもそいつは口を開いた。だが、その手には何かカードのようなものが。

「“いま”は彼女が暴れること、だ」

音もなくカードが消える。背筋がゾツとした次の瞬間。

ジュエルシードの青い光が辺り一体を照らして視界が奪われる。

「なに!？」

思わず全員が目を庇い、誰も見ていない時間が出来てしまう。

「あ………ああつ、ああああああつっつ!!!」

ただ、耳で彼女の感情のない壊れた叫びだけを聞いた。

「母さ…っ!？」

閃光が止んで、真っ先に叫んだフェイトは息を呑んだ。わずかに遅れた俺達も似たり寄ったりな反応をする。するしかなくった。

「なに…これ？」

なのはのそんな短い呟きが、すべてを語っているような気もする。

「……おいおい、冗談だろ？」

だから思わずそんなことを口にした。

そうであってくれたら良かったという希望的感想だ。だが、それは容易く否定される。

グギヤアアアアアアアアッ

悲鳴にも似たの咆哮の“五重奏”が大気を震わせる。

10メートルを軽く超える巨体

四足の胴体から伸びる五つの長い首

蛇にも竜にも見える五つの頭

プレシアとジュエルシードがあつたはずの場所にいたそいつ。
今までジュエルシードと散々付き合つてきた俺達にそれが何なのか
解らないわけがない。

「プレシア・テストロッサが取り込まれたのか!？」

「あの仮面野郎、故意に暴走させたうえにもう逃げやがった!」

あのカード。

使い捨ての魔力ブーストみたいなものか。

まるでアイゼンやレヴァンティンのカートリッジじゃないか。

あれで魔力干渉しやがったのか!?

そのうえに即座に姿をくらしやがっただと!?

(……もういません。即座に転移したもようです。追跡は不可能かと……)

どっちにしろそんなことしてる余裕はない。

「全員、一旦離れるんだ!」

クロノが指示を飛ばすのと五つ首の怪物が動き出したのはほぼ同時。
首と違って胴体から伸びる一本だけの長い尾を振り回し五つ首が
無作為に周囲を蹂躞する。

すでに飛び立っていたなのは達は吹き飛ばされて一番遠くにいた俺
の所へ集まる。

「…母さんが、どうしてあんな」

「おかしいよ、今まで色んなジュエルシードの怪物見てきたけど元々の姿をおつきくしたのばかりだったよ？」

「どうしてプレシアさんだけあんな怪物に!？」

今まで彼女達が対峙してきた動植物に取り付いたジュエルシード暴走体は

すべて元の動植物を巨大化させ、より凶暴、より強靱にしていた。だから本来の姿からあまりに逸脱した姿になったことは一度としてなかった。

だが、それはあくまで対象が動植物だったからに他ならない。より強くそしてより複雑な感情と願いを持つ人間と融合した場合のケースを彼女達は知らない。

もともと俺も想像ぐらいはしていたが、じかに見るのは初めてだ。

そして俺は、俺にはその怪物の姿とプレシアを結ぶ点と線が見えていた。

「ヒュウドラだ…」

「え?」

「アリシアが亡くなった事故、その原因の新型魔導炉につけられていた名前だよ。」

地球では9本の長い首を持つ伝説上の怪物の名前だ。ミッドにも似た話はないか?」

英雄ヘラクレスに倒された魔物。9つの首を持つ蛇の化け物。それをもとにした空想上の怪物は数知れない。

「……ああ、ある。こっちでも複数の長い首を持つ化け物をヒュウドラと呼ぶ」

おそらく、だが。

巨大な力を持つとされる怪物の名を使うことでそのエネルギーの強さを。

いくつもの首を持つことを、手広くエネルギー供給できる意味として名づけたのだろう。

結果としてプレシアにとっては災厄を招く本当の怪物になってしまったが。

「プレシアの一番深い後悔の念。ここまで突き進んでしまった原因の出来事。」

俺に穿り返されて表層に出てきたものに、ジュエルシールドが反応したんだ……」

事故とその原因になった物のイメージに影響を受けた。

それへの憎しみ・怒り・悲しみ・贖罪・責任。

そんな複雑な感情が、願いとして受理されてしまったんだ。

「すぐに封印を！」

『駄目、待ってなのはちゃん！』

今すぐにも飛び立っていこうとしたのはを止めたのはアースラからの通信。

エイミイさんが空間モニター越しに顔を見せる。

『あれは今までのジュエルシールド一個で出来た怪物と違う。

フェイトちゃんたちが暴走させた六個の時とも違う！』

「どづいことだエイミイ？」

『エネルギー総量がとんでもないことになってるの！
無差別開放とまではいかないけど五つのジュエルシードがそれぞれに干渉しあつて

あの怪物の体内で恐ろしいまでのエネルギーを生み出しているの！
あれじゃ、みんなが力を合わせても封印できない！』

いわれて注意して暴れる怪物 ヒュウドラ を見れば、確かにエネルギー総量が半端じゃない。
純粋な足し算ならなんとかできたかもしれないがあれは掛け算だ。

5個のエネルギーが互いを増やしあっている。まったく冗談じゃないぞ！

ここにいる全員が協力して封印しようとしても軽く跳ね飛ばされてしまう。
しかも。

「それだけじゃない。この庭園の魔導炉からも吸い取ってやがる。
そのうえ……」

魔導炉と俺とのリンクが強制的に切られはしたが供給先を把握するぐらいはできた。

そして俺は意味ありげな視線をヒュウドラの背後に向ける。

「っ、アリシアがない!?!」

暴走する前。プレシアのすぐ背後にいたはずの彼女のカプセルがない。

あの怪物が破壊した様子もない。ならば、どこに行ったかなんて簡単だ。

「一緒に取り込まれた、か……くっ……」

あの仮面野郎。

次、会ったら絶対に叩きのめしてやる。

「エイミィっ、ジュエルシードとプレシア、アリシア・テストロッサ両名の正確な位置を調べてくれ。

こっちはこっちでなんとかやってみる」

『うんわかった、みんな気を付けて！』

通信が終了してモニターが消える。

「クロノ、そういうからには何か策あるんだろうな？」

「都合よく思いつくものか。」

どっちにしる局員としてロストログアやあんな怪物を放っておけるか。

それに僕は彼女を捕まえにきたんだ。化け物にしたまま放っておくためにきたんじゃない」

はは、まったく誰に似たんだか。真面目な奴め。

言い方がいちいちまどろっこしい。

「ま、彼女の感情をかき乱した張本人としては無責任に何もしないわけにもいかないしな」

「当たり前だ！ 君にもきちんと手伝っ…散開！」

声に応じてか。本能的に脅威から逃れようとしたのか。全員がその場からバラバラに飛びのいた。次の瞬間。

轟雷

プレシアのに似た雷が降り注いだ。

おいおい、あの巨体でまさかあいつの魔法まで使えるのかよ！？
視線を向ければ、五つの首の一つがこちらに向けて大口を開けていた。

その刺々しい鋭利な牙に時折紫電が奔る。

「口から光線って……いつの怪獣映画の話だ！」

どうでもいい文句を口にしながら魔力刃を飛ばす。

回転する赤い刃がマヌケにも未だに大口開けていた奴の頭と首を切り離す。

………非殺傷だったんだが？

「なんだこいつ、もろい？」

「いや、よく見ろっ再生していくぞ！」

切り落とされた頭部は霧散したが、残された首。

その切り口から新たな頭部が現れる。本当にヒュウドラかよ。

「…クロノくん、コウキさんっ、あれっさっき雷が落ちたとこ見て
！」

その再生スピードの速さに感心より呆れが勝っていた俺に切迫した
声。

言われた通りに先程まで自分たちがいた場所に視線を向ける。

そこには……何も、ない？

おい、待て。

確かにそこそこ強力な一撃だったが、なんだってどうしてそんなことになる！？

足場が砕け散ったとか。庭園の底に穴が開いたとかならまだいい。

どうして『なにもなくなっている』んだ！？

「……あれは……馬鹿な、あの怪物の雷は虚数空間をつくるのか！？」

「虚数空間？」

「……次元断層のさいに空間に開く穴のことです。」

そこではすべての魔法がキャンセルされてしまうから、飛行も転移もできなくなる。

一度落ちれば、二度と上がってこれない……」

代わりにフェイトが答えて、なのははびくりと怯えた。俺も背筋がゾツとした。

まずい。そんなものを量産できる首が五つ。雷を撃ちまくられたら終わりだ。

「……二手に分かれよう。」

フェイトとなのはで魔導炉の封印。その間俺とクロノでこいつの注意を引く」

5個のジュエルシードだけでも厄介なのに外部からも供給されたんじゃない。じゃたまったもんじゃない。

魔導炉の正確な位置を知るフェイトと砲撃で封印ができるのはが適任だ。

それに複数の標的がいるとあの雷を乱発される恐れがある。こちらは少ないほうがいい。

「うん、わかった……案内してくれるフェイトちゃん？」

理由を説明すると納得したのだが、フェイトの表情はさえない。当然だろう。プレシアをここで放っていくことに近い。

が、冷静に“まずは”それからだと理解してくれたのだろう。僅かな逡巡のあと、頷いて先導するように飛び立っていく。

「コウキさん、クロノくん、気を付けて！」

「ああ、わかってる！」

大きく頷いて、飛び去っていく彼女たちを見送ると

あえて俺はヒュウドラの前に立つ。五つの頭、その十の目が俺を捉える。

なのはたちの方向へ行かせるわけにはいかない。

「アックスセイバー、くらえ！」

再度魔力刃を飛ばして首を落とす。

すぐに再生されるがこっちに注意を向けさせるには十分だ。そのままなのはたちとは逆へと動く。

「リニス、魔力は残ってるか？」

『ダメです、飛ぶん分で精一杯でもう攻撃には使えません』

大火力で一気というわけにはいかないか。

もつとも、中にプレシアとアリシアがいる以上出来ても“できない”のだが。

「ただどエネルギー供給を失うのはきつい。

自分の魔力を“訳あって”ほとんど使えない俺にとっては。

「なにか策はあるんだろうな？」

怪物を引き付けながら飛ぶ俺への言葉にあっさりと返す。

「定石で行くなら、首を落とし続けて雷だけは防ぐのがいいかな？」
すると溜息交じりの声が返ってきた。

「……………それギリ貧だぞ？」

「どっちにしろ……………なのはたちをここに置いておくよりはマシだ……」

「……………やっぱりそっちが目的だったか。」

最悪の場合は……………プレシアを見捨てることになる」

なのはもフェイトもクロノもまだ若いが一流と呼んでも何の問題がない魔導師だ。

そんな連中がそろっても封印しきれないロストロギア内臓の怪物。倒すなり、封印なりができないと判断されれば庭園ごと消えてもらうのが最良だ。

「けどギリギリまで諦めたくはないから、付き合え、だろ？」

「……………え、なに……………ついには息子にまで考えを読まれるようになったのか俺？」

肩をすくめてしょうがないといわんばかりに告げられた言葉に少し絶句したぞ。

なんだろう。この親子と会話していると時々心臓に悪い。

「茶化してる場合か……いいからさっさと本命を言え。

君が定石通りの作戦なんか考えるわけがない……」

本当に、心臓に悪い。

「……あっちのジュエルシードは5個。こっちにあるのも、5個」

かざした手の指の間で挟むように持った5個。

バルディッシュに隠した6個のうちの5個だ。

プレシアたちはあの時俺に渡したのが1個だけだと思い込んだみたいだが

実際はあの時、バルディッシュはすべてを俺に返していた。

俺はそのうち5個を隠し1個だけを手に持っていたんだ。

「同数のジュエルシードでヒュウドラのジュエルシードに干渉する」

運がよければそれだけで停止させられるかもしれない。

うまくやれば、の話だが。

「下手をすれば君まで取り込まれるぞ」

「それはそれで問題ない。入り込んで中からプレシアたちを引きずり出す」

その可能性が否めないのも事実だが、それならそれでそうするだけだ。

「……なんていうか本当に、無茶苦茶なことばかり言つた君は……」
溜息交じりどころか溜息しかない言葉に、俺はむしる満面の笑みで答えてやった。

「そついうな。無茶苦茶な怪物が相手なんだ。こっちもそれぐらいしないと」

「ああつ、確かに！」

クロノの叫びと共に、放たれた雷を避ける。

雷の着弾地点どころか途中の空中にまで虚数空間作り始めたぞ。本当になんて無茶苦茶な。

「……一瞬でいい、あの首全部吹き飛ばしてくれ執務官！」

「了解だ、現地協力者！」

俺とクロノの間を雷が通り過ぎたのを合図に飛び出す。

左右に分かれた俺達を五つの首が3：2で追う。ちなみに俺が3の方だ。

「リニス、エネルギーを送る。直射しろ！」

『了解です』

彼女のクリスタルに一個のジュエルシードを重ねる。

そしてデバイスの上端を迫る三つの首へと向けて、放つ。

「ジュエルツ！」

『スマツシャーー！』

青い一条の光が三つの長い首を跡形もなく消し飛ばす。

………勢い余つて庭園の一部に大穴空けたけど。出力制御、ちょっと間違えたかな？

「馬鹿つ、やりすぎだ！」

こっちを怒鳴りつけながらも、クロノはすでに魔法を放っていた。だが、その魔力光弾は不思議なことに螺旋を描きながら同じ場所に留まっている。

そしてその目が一瞬だけこっちを見た。

次の瞬間俺はヒュウドラに突貫していた。

それを見ていつせいにこちらに牙をむく五つの首。

俺がさつき吹き飛ばしたものはとくに再生していたが、瑣末ことだ。

だって、こいつらを全部吹き飛ばすのは俺の役目ではない。

そうだろ、クロノ執務官？

「スナイプショットツ！！」

螺旋を描いていた光弾がそのキーワードに反応して加速しヒュウドラに突撃する。

スティングースナイプ

魔力光弾をコントロールし一発の射撃で複数の対象を殲滅する魔法。発射後、光弾は術者を中心に螺旋を描きながら複数の目標を貫通する。

本来はある程度魔力を失った時点で空中にて螺旋を描きつつ魔力を

再チャージするが

今回は最初から、再チャージすることで威力を底上げたのだ。

目の前まで迫っていた五つの獰猛な蛇の頭部は根っこを刈り取られ、一瞬で霧散する。

その隙に胴体へと降り立った俺は五つを持った手を突っ込んでエネルギーを送り込む。

「いけえっ！」

内部で暴れるエネルギーがヒュウドラの五つの宝石を捉える。

よしっ、こいつらのエネルギーをこっちのエネルギーで相殺すれば！
こちらの五つのジュエルシードの出力を上げた。

そして、もはや見慣れてしまった青い光に包まれながら俺の意識は落ちていった……

先払いの報酬（前書き）

バトルオンリーだと散々言っていたくせに、結局こうなった。なぜだorz

先払いの報酬

5月8日 ???:???

???????

俺は非常に困惑していた。
うん、いろんなパターン考えていたがこれは無かった。

「……………俺たち“ヒュウドラに取り込まれた”んだよね？」
『正確には“取り込まれに行った”でしょう。私まで巻き込んで』

最後の文句を軽く無視して周囲をもう一度見渡す。

「どこまでも続く草原って、生まれて初めて見たかも…」
「へえそうなんだ…わたしはね、よくママとこついうところまでピクニックしてたよ！」

いい風が吹いて気持ちがいいなあ……………などといってる場合ではな

い。
背後からの微妙に聞き慣れているような元気な声に振り返る。
そこには、元気いっぱいな明るい笑顔の金色の髪の少女が立っていた。

「……………アリ、シア？」

そうだと思ったのはフェイトより幼い風貌と醸し出す雰囲気の違いだ。

どこか穏やかで柔らかな空気を持つフェイトと活発で良くも悪くも周囲を巻き込むような強い空気を持つ目の前の少女は、別人だ。

「うん、はじめましてお兄さん。それとリニスはひさしぶり……………なのかな？」

『え、ええ……………って、ええっ!?!?』

不思議そうに言われた言葉にあっさり頷きそうになった彼女が驚愕する。

俺だってそうだ。アリシアだと思ったは思ったが、思っただけで確信はない。

第一、なんで怪物に入り込んだら一面の草原でしかも彼女と会うことになる？

「あははっ、お兄さんすっごくびっくりした顔してる。

ママと一緒に、えっと……………そうていがい?……………に弱いんだね」

少々難しい言葉に難儀する姿はかわいらしいと思う。

が、年下に弱点を指摘された俺は微妙に傷心である。

いや、まで一応26年前の人だから俺より年上なのか？
などと考えてもしょうがないことを考えてる辺り俺も少し混乱して
いるようだ。

「…君は、本物なのか？」

とはいえ、いつまでもそうしているわけにもいかない。
とにかくここがどこで、彼女が何者なのか確かめないと。

「うーん……むずかしいことはわからないけど、たぶん消えちゃっ
たわたしのカケラみたいなものだと思う」

聞いたことを後悔するぐらいに、彼女 アリシア はあっさりそ
んな事を言った。

自分が死んだことを理解したうえで、自分はその欠片でしかない。

『どういうことでしょう？』

「……おそらくだが、残留思念みたいなものじゃないかな」

心や想いというものは地球ではもちろんだが、
それより技術が進んだミッドチルダでも“どこにあるか”解ってい
ない。

解っていないために、どこに宿り何時消えてしまうのか、なんて事
は不明だ。

命が消えた時に一緒に消えてしまうのか肉体に残るのか。
そんなことも当然のようにナゾのまま。

「それがジュエルシードと触れたことで、会話できる程度にまで意
志として存在できるようになった」

だからこんな荒唐無稽な推理をしても、否定される根拠はない。まあ、實際目の前にいる以上たぶんそれで合ってるとは思っただけだ。

そしてこの空間は彼女の心の風景。母親との思い出の場所を再現した空間だろう。

「じゃあ君なのか、俺たちをここに連れ込んだのは？」

「そうだよっ、お礼が良かったしお願いもあったから……」

「お礼？ お願い？」

お願いはともかく、お礼ってなんだ？

「リニスもお兄さんも、ママを叱ってくれてありがとう！」

「……………はい？」

リニスはともかく俺のあれは叱ったというより殴ったに近い。

やったことに後悔はないが言葉の暴力でボコボコにしたつもり俺としては

その娘からの礼を素直には受け取れなかった。

「わたしのこえはもうずっと聞こえてなかったから……」

ふたりはわたしのいいたいこと、みーんと言ってくれたから。

だから、ありがとう！」

そういつて満面の笑みを見せる少女の姿に不覚にも泣きそうになった。

自分が死んで、おかしくなっていく母を見ながら何もできなかった。それでもアリシアは叫んでいたに違いない。プレシア自身の事やフエイトの事で。ずっと。

聞く手段は誰にも、何にも、無かったのだからうけど。

それはどれだけ辛く、悲しい時間だったのか。それが26年だぞ。なのにこの少女は代わりに言ってくれたという理由だけでお礼を言った。

屈託のないまぶしいくらいの笑みと一緒に。

ああ、この子を失ったプレシアがおかしくなったのが解る。

本当に、本当にこの子は「いい子」だ。だからこそ。

失った衝撃とその原因が自分にもあった事にプレシアは耐えられなかった。

「……自分勝手な理由で無茶苦茶言った身としては、恥ずかしいが、ありがたく君のお礼を受け取るよ、アリシア」

『あなたのことははっきりと覚えていませんが、それでも分かりません。』

あなたは間違いなくアリシアです』

だから俺は敬意を込めて素直にそれを受け取った。

リニスも彼女を彼女として肯定することで答えとした。

「えへへ……うん、やっぱりお兄さんたちならお願いできるかもね」

「お願い？ さっきも言ってたが何を頼みたいんだ？」

「うん、あのね……」

言いつらそうにしながら俺の視線を誘導するように手を動かす。

するとその先に、草原に寝かされているプレシアがいた。

『プレシア！？』

俺たちが最後に見たのは目は開いていながら意識を失っていた顔だ。それだけに慌てて駆け寄った。しかし今は穏やかな顔で寝息を立てていた。

ほっ、と息を吐く。

「……………ママと、フェイトのことお願いできる？」

少しだけ寂しそうな声色に驚きながら振り返る。

アリシアの表情から先程までの輝かしさが薄れていた。

何か、嫌な予感がした。

いいや、もつとちゃんと認識するべきだった。

彼女が死者で、ここに居るのはその想いの欠片でしかないことを。

「ママはやさしいひとだった…だからわたしが死んで壊れちゃった。

でも、でもね……………きっと誰かがそばにいてあげたら、

いっしょに泣いてくれる誰かがいたら……………」

こんなことにはならなかった。

アリシアは言い切らなかつたが、その続きは想像できる。

そしてその「誰か」に俺を求めているのだということも。

「フェイトもすごく危なっかしいから、お姉ちゃんとしては心配で

……………

でもきつとお兄さんみたいの人がいてくれるなら、ママみたいに

は…っ！？」

ああもうつ、どうしてこの子は！

「おにい…さん？」

思わずアリシアを抱きしめていた。

少々乱暴だったかもしれないが、胸の中に入れた彼女は本当に小さくて、

柔らかくて、暖かくて、間違いないぐらいに“そこ”にいた。

理不尽にも人災のような事故で命を失った少女は

それをわかったうえで、それでも母と妹を気遣っていた。

「……………うまく言葉にできないけど……………君に、アリシアに会えて良かった」

こんなことが無ければ会うどころか知ることもしなかった君と会えて心底良かったと思う。

その気持ちを胸の中に収めた彼女に伝えられるように精一杯言葉に込めた。

少し呆けていたように俺を見上げていた彼女はどう受け取ったのか。照れくさそうに頬を染めて、はにかんでくれたのを見て俺も嬉しくなった。

「フェイトとプレシアには出来る限りのことをするよ。

もともとそのつもりで関わった事件だし、こんな可愛い子からお願いされちゃったしな」

だから安心できるようにと嘘偽りのない言葉をかけた。

のだが。はて？

「　　ツツツ!！」

何か頬の赤みが増したような？

『……あなたってそういう人なんですね？』
「は、なにが？」

どこか冷たい声に首をかしげる。

「……うーん、ママたちまかせるのすこし不安かも……」
『ですねえ……』

な、なぜに？

というかいつのまに結託してるの君たち？

「えへへ、じょうだんだよ………それじゃあ、あとはお願いね」

小さく笑ってアリシアは俺の腕をすり抜けた。
比喩ではなく、文字通りすり抜けた。

「アリシアっ!？」
「ごめんね、もう時間ぎれみたい……」

たった一言の、なんてひどくずるい言い方が。
笑った顔でいわれたら、こっちは何もいえないじゃないか。

「……プレシアと話していかないのか？」
だから口にしたのは別のこと。

「うん、いまママとお話したらまたママおかしくなっちゃうかも……」
確かに。

プレシアにはアリシアの死を認めきれない所があった。
それなのに目の前で動くアリシアなど見れば、どうなるか分かった
もんじゃない。

「だから……ここでのこともヒミツにしてくれるとうれしいな」

「……わかったよアリシア、約束する」

『はい、誰にもいいません』

「ありがとう」

そうお礼をいった彼女は笑顔だったけど、その色は薄くなっていた。
見れば、周囲の草原も狭くなっている。

地平線まで続いていたそれが消え、何も無い闇が広がっていく。
これを維持していたアリシアの意志が薄くなっている。

「ああ、そうだ」

なのに彼女は何か忘れ物でもしたかのような軽さでこっちに駆け寄
ると。

「えいつー！」

軽く地面を蹴って跳びあがる。

それは予想以上に高く跳んでいて、慌てた俺が受け止めようと
差し出した腕の中に飛び込むようにして、彼女は俺と一つになった。

「　　っ、ん」

腕の中の彼女。

もう重さすら感じなくなったのに。

なぜかそこだけはすごく繊細に、そして敏感に少女アリシアを感じた。

「うわあ、大胆……」

小さな手が俺の頬に添えられ、幼い唇が俺のそれと重なっている。

「えへ……お願いきいてくれたお礼、だよ」

目の前の小さな女の子が真っ赤になりながらも嬉しそうに微笑んだ。

……キス、された？

その顔を見て、ようやく事態を把握した俺は一気に顔が熱くなるのを感じた。

「あ、え、う……ええ……あうわう……？」

やべえ、自分でもパニクってるのが分かる。

口が言葉になつてない声を出して無意味に動き回っている。

心臓がうるさい。顔が本当に熱い。

「くす……よいしょっと」

言葉でも行動でも、ろくに何も返せなかった俺をおかしそうに笑ってアリシアは腕から抜けると今度はこっちに背を向けて走っていく。

「っ、お、おい!！」

ようやく絞り出せた声に、走りを止めたアリシアはしかし振り返らず。

金の髪を揺らしながら、嬉しそうな声色で言った。

「わたしの初めてのチュウあげたんだから、ママたち大切にしないとゆるさないからね!！」

そして回るように振り返って、今までで最高の笑顔を見せながら少女は消えていった。

「……やられた」

頭を抱える。

これは見事にしてやられた。

「……そんなすごい先払いされたら、頑張らないわけにいかないじゃないか」

笑顔だった彼女のためにも泣かないようにこらえて、けれど声が震えていた。

そしてちよつとだけ、言いたいことがある。

「けどな……俺も初めてだったんだぞ?」

奪っていった少女に少しばかりの文句。

そんなことを言いながらも俺の顔は少しニヤけている。

これで俺にアリシアは刻まれた。忘れることなんてないだろう。

そしてアリシアに、たいしたものではないけれど、この世で唯一無二のモノをあげられた。

なら、この先にある厄介や困難などその『報酬』からすればなんと安い。

『………いっておきますが、男と女では初めての重さは違いますよ』
からかう声に「はいはい、わかっています」と返して、俺たちは戦意を持って振り返る。

迫る間に蠢く悪意とエネルギー。そして、赤く光る目。

「…離れるっ！」

近寄るなどいわんばかりの魔力の衝撃波をぶつけて遠ざける。

やっと分かる。プレシアは正確には取り込まれてなどいなかった。

ギリギリのところではアリシアが守っていたんだ。

しかしジュエルシードは他者の想いがなければ力を発揮できない。

ここに迫っているのはそんなシステムが具現化したもの。

今度こそ完璧に彼女を取り込んでしまおうという簡素化され量産されたヒュウドラたち。

「すげえのもらっちゃったからな。

悪いが指一本…いや首一本か……まあどっちだろうが、触れさせやしないぞ！」

そのあまりに多勢に無勢な相手に向かっていくのに俺はまったくといっていいほど負ける気がしなかった。

根拠が無いのに、その勝利を確信したのは生まれて初めての経験だった。

女の子のキスで頑張るなんて、

俺って、そんな単純な奴だったんだな

5月8日 PM 11:12

時の庭園最深部

コウキがその姿ごとヒュウドラに取り込まれて早数分。体内に異物が入ったことで、かの怪物の凶暴性は増していた。

(なのはやフェイトがいなくて良かった…)

クロノは一人でその相手をさせられていたが、心底ここにいるのが自分だけで良かったと思っていた。何せヒュウドラの攻撃は本当に容赦なく周囲を破壊し虚数空間を作っていた。

クロノ個人を狙った攻撃はしてこないが、三人もいては避けるスペ

ースが足りない。

怪物の攻撃はそれほどまでの激しさだったのだ。

それを一人でなんとか耐えていたのはさすが執務官といえるが、そろそろ彼自身の脱出を考えなくてはいけなくなっていた。

「まだか、コウキ。これ以上虚数空間を作られたら……」

攻撃を避けるどころか、この場から出ることもできなくなる。

不幸中の幸いだったのが再生速度こそ異常だったが強度がもろく、簡単な魔力攻撃でダメージを与えられることだった。

雷を撃たれる前に首を吹き飛ばして、時間を稼ぎ続けていたがそれも限界。

「エイミィっ、体内の様子はまだ分からないのか!？」

「ダメっ、全然見えない。」

バイタル信号はなんとかキャッチしてるから無事なのは解るんだけど……」

アースラの各種センサーをそれこそ手足のように動かして調べているが、

相変わらずエネルギー総量が巨大であることしか解らない。

エイミィという女性の仕事における優秀さを知っているだけにクロノはそちら方面から探るのを現時点で諦めた。

「無事がわかるだけマシか。なのはとフェイトは!？」

「ヒュウドラが暴れた影響で庭園内部もあちこち崩れてくるの。」

なのはちゃんたちやシャマルたちもそっちに向かっているみたいだけど中々進めてない。

状況的にはそれで良かったんだろうけど、クロノくんは大丈夫？」

「…………正直、きつい。」

だからでもないんだが、なのはたちには脱出を促してくれ」

「聞いてくれるかな、それ……」

ふたりは同時に頭が痛くなる思いだった。

なのはの Kouki への気持ちには察しがついている。

フェイトのプレシアへの想いはこれまで散々見てきた。

Kouki を主とするあの守護獣たちがそれを聞き届けてくれるとは思えない。

そうするのが最善だとは誰もが頭では理解してくれるだろうが全員が全員、感情で納得してくれそうになかった。

「っ、ちょっと待って、ヒュウドラのエネルギー量が急激に低下！

え、でもあれ…… Kouki さんのバイタル信号が、どっか行った！

？」

喜ばしい報せと不安になる報せ。

副官がそれに僅かにパニックになったのを感じて、クロノは自分をまず落ち着かせた。

そして怪物を冷静に見る。エネルギー低下の報せとほぼ同時に動き緩慢になっている。

何をどうしたかまでは推察しようがなかったが Kouki が何かをしたのだと直感的に察する。

「エイミィ、どこまで低下してるんだ？」

僕でも封印可能なレベルなのか！？」

『えっ、う、うん。ジュエルシールドのパワーがすごく落ちてる。これならいけるよ!』

「わかった。なら即座に僕が封印する。」

なのはたちには脱出を促せ。庭園がもう持たない!」

その崩壊の足音はこの場が元凶であるがゆえに、クロノには目に見えて迫っているのが解っていた。

だから副官からの返答さえ待たずに自らのデバイス・S2Uをヒュウドラへと向ける。

足元には魔法陣、先端に集まる魔力が封印のために術式を走らせる。

「シーリングキャノン、くらえっ!!」

放たれた一条の光が巨大なヒュウドラの胴体を貫く。

ゲギヤアアアアアアアアツツ

現れたときと似たような、けれど断末魔の叫びをあげながらジュエルシールドを封印されたヒュウドラは霧散していった。

そしてS2Uの先端にあるギミックが開き、回収されるジュエルシールド。

「ん、四つ?」

だがその数はプレシアが持っているはずの物に一つ足りない。

取りこぼしたかと周囲を探すが、そんなものはどこにもなかった。そして。

「…プレシアも…アリシアもない!？」

バイタル信号を見失った時点で覚悟していたのか。

彼がいないことは予想していたがそのふたりの姿が影も形もないのは完全に予想外。

さすがのクロノも、しばらくその場で呆然とするしかなかった。

庭園の最上部。

くしくもクロノとヒュウドラが戦っていた最深部の真上。

妖精のような薄い光の羽をはやし魔法陣を展開していた女性が一人。

(……どういふこと?)

庭園に降り立っていたリンディ・ハラオウンはその経緯を見ている。
訝しむ。

(消えた1個のジュエルシードとプレシア女史たち……)

死んだなんてことは有り得ない。

なら死体が残るはずであるし直前まではバイタル信号を捉えていたのだ。

そしてエイミイは軽くパニックになっていながらも正確な表現をしていた。

(バイタルが消えたのではなくどこかへ行った。
つまり発信されなくなったのではなく、どこにいるか解らなくな
ったから捉えられなくなった)

「……………まさか、脱出するのに転移魔法を強引に!？」

体内に入り込んでいたのが確実なのだから、答えはもはやそれしか
なかった。

それなら封印後いなかったことも、バイタルを見失ったのにも説明
がつく。

だがそれゆえにおそらく転移した本人もどこに飛んだか解っていな
い。

そしてそんな方法で脱出するしかないほど、追い詰められた可能性
がある。

「早く、探さないと、でも……………」

リンディはその場から動けない。

ましてや探索魔法など使えない。

なぜなら、庭園の崩壊をギリギリで抑え込んでいるのは彼女なのだ。

ディストーションシールド

空間の狭間に特殊な歪みを生じさせ範囲内の攻撃や空間干渉を低減・
無効化させる広域結界魔法。

それをいま彼女は庭園全体に展開させ、特殊な力場を作り出すこと
でその崩壊を食い止めていた。

当初彼女は次元震対策でこの地に降り立っていたが事態が変わり、
予想以上に進む崩壊を食い止めるために変則的な使い方ではあったが
この魔法でそのスピードを最低限にすることに成功していた。

だがそのためにリンディはその場から動けず他の魔法を使うこともできない。

ただでさえ広範囲の展開で制御が困難になっているうえに本来の用途とは違う使い方をしていることもあって、今の彼女には念話を飛ばす余裕もなかったのだ。かといって魔法を解くわけにはいかない。

庭園のどこかに転移しているのならそこが崩壊しては元も子もない。

「……………えっ!？」

どうすれば、と悩む彼女の背後で転移の光が瞬いた。

思わず振り返った彼女の視界に入ったのはあまりにボロボロな少年。

白銀のフレームは無残に砕け、ひび割れていた。

キレイに整えられていた白のBJは原型をとどめておらず真っ赤に染まっている。

傷のないところなどなさそうな傷だらけの身体で、それでもなお、

絶対に護るといふ強い意志を秘めた瞳のまま、

その少年は何かを大事そうに抱えていた。

先払いの報酬（後書き）

にしても、だ。

「寝起きで見た異性」や「キス」などのわりと重要な初めてを、ハーレムに入らない女性に奪われるオリ主って、なにさ。まあアリシアはもう「入った」と捉えてもいいんだろっけど。

今回は本当に事実上一期編の最終回！

けど、第8話の最終回ではないのです……。

続く想い、そしてサンドイッチ？

私たちは、間に合わなかった。

庭園の魔導炉を封印することには成功したけど、母さんがいたところに崩落のせいで戻れず、虚数空間にも阻まれて結局よくわからないまま庭園崩壊の危険とジュエルシードの回収がすんだことで

私たちは管理局の艦船・アースラに行くしかなくなってしまった。母さんとアリシアが行方不明になったまま。状況から考えれば、助かるはずもない。

大切な人を失うのはリニスに続いてこれで二度目。

その時に、分かったはずだったのに。会えなくなってしまうことがどういふことかなんて知っていたはずだったのに。

なのに私はどうして、

そのあと母さんとちゃんと向き合えなかったのかな。

嫌われるのが怖くて、捨てられるのが怖くて。

私は母さんに何も伝えられなかった。

大好きだともっと伝えておけばよかった。

真実を知っても、やっぱりあなたが私の母さんだと伝えておけばよかった。

だから、この後悔はこれで終わりにしないと。
伝えなきゃいけないことはちゃんと伝えないと。
こんな私に『友達になりたい』と言ってくれたあの子たちに返事を。
こんな私を全力で怒って叱って全力で心配してくれたあの人に伝えたい言葉を。

今度こそは私を、私自身の言葉で、始めよう

お留守番がこんなにきついもんやおもわへんかった。
これも全部、無茶ばかりするダメなお兄ちゃんのせいや。
あのヤマタノオロチの出来損ないみたいな怪物に入り込んでまうなんてアホやないやろか。
そのせいで行方不明になって、封印されたのにどこにおるんか分からなくなつて
こっちがどれだけ苦しかったか、知らんやろ。
シグナムとヴィータが、どれだけ飛び出したかったか。
あたしが、どれだけ泣きそうやったかも、知らんやろ。

だからリンディさんが見つけたと知らせてくれた時は嬉しかった。
でも、運び込まれたコウ兄はすごいボロボロで
ほんまに、ほんまに、心臓止まったわ。
シヤマルなんて泣きながら治療しとったやないか。
そのくせ動けるようになるかどうか行つてもて、
今度はアースラのどこにおるんか分からんようになるし。

コウ兄はいつごろからか。
いつも動いている人になった。
昔は世話をしているのがあたしだけだったから
必要最低限しか動かなかったあの人が、動き回っている。常に。
あたしはそれが怖い。

これは増やさな、あかんかな

生き急ぐこの人をつなぎとめる人を、もっと

事件が終わったあとも、私たちは数日アースラにご厄介になっていました

ジュエルシードは1個を除いて全部回収出来たけど、
結局プレシアさんがどうなったのかは解らないまま。

そして事件の重要参考人であるフェイトちゃんたちと私は話すことはできないまま。
どうしていいかは解らない気持ちを抱えたままその数日は過ぎて行つて。

その間はずっとはやてちゃんたちと一緒にコウキさんを徹底的に怒って叱って反省させて。

ついでに訓練室でみんなで叩きのめしたあと正座もさせて。
心配ばかりかけるこの人を問答無用でへこませました。
それでも効果があるかは、少し疑問なのが不安です

私はまだ帰れないユーノくんと一緒に家に帰ることになったのです。
不安はあったけどクロノくんがフェイトちゃんの罪はそこまで重い
ものにならない。

とってくれたことやリンディさんが保護責任者になってくれると
いう話を聞いて

少しだけれど私は安心して、高町家に帰ったのです。

そうして日常に戻った私はいつも通りおうちのお部屋で寝て、起き
て。

お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃんと話して笑って。
学校ではアリサちゃん、すずかちゃんと勉強して、遊んで。

でも、やっぱりあの子のことがいつも気になって。

そうしてその日の朝、まさかの連絡が携帯に入って私は大慌てで家
を飛び出した。

5月16日 AM06:51

海鳴市臨海公園

いくら朝とはいえあまりに人気がない公園。
人避けの結界を貼って関係のない人間が近寄らないようにされた公園の一角。

そこで、三人の男女が待ち人を待っていた。

「フェイトちゃんっ！」

遠くからでもよく届く可愛らしい声に呼ばれて少女は振り向いた。
すると遠くから白い制服を身にまとう少女と
彼女に少しだけ遅れる形で車椅子の少女とそれを押す少年がやって
きていた。

嬉しさを全面に押し出してフェイトに駆け寄ったなのは。

その後ろから穏やかな顔で微笑むはやとコウキ。

向けられる視線に少し照れたようにはにかむフェイト。

「あまり時間は作れなかったが、しばらく話すといい。僕たちは向こうにいるから」

その四人がそろったことでアルフとクロノ、ユーノは席を外す。

だが。

「ちょっと待ち」

「へ？」

一緒になって離れようとしたコウキの服をはやてが掴む。

「なんでコウキまで行くんや？」

少し怒った風の声色に、まだこの数日間のトラウマが抜けきっていないコウキは震えた。

「い、いや…ここは女の子三人で話す場面じゃないの？」

「あのな、呼ばれたのうちら三人やで……コウ兄もおらなあかんやろ」

いわれて、そうなのか？という視線をなのはとフェイトに向けるとフェイトはさらに照れたように頬を赤らめて、なのはは当然だと頷く。

それで納得したのか、再びコウキははやての後ろに戻った。

そうして四人でなにをいうわけでもなく、かといって気まずいわけでもない少しの沈黙。

ただ海からの風に吹かれて、髪を揺らして少女を見詰めている。

「……………いっぱい話したいことあったのに、変だね。フェイトちゃん顔見たら忘れちゃった」

「私は……………そうだね、私もうまく言葉にできない」

ふたりは困ったように、同じことを言いながらも嬉しそうに微笑む。目の前に、自分を真っ直ぐ見てくれる穏やかな顔がある。フェイトが知らず求めていた顔。なのはが見たかった顔がそこにあった。

「ふふ、ふたりは可愛いなあ……ここに割り込むのはちょ難しいなあ」

「だから俺は席を外そうとだな……」

ふたりだけの空間を作り出していたのはとフェイト。それだけに居づらさを感じていたはやとコウキ。けれどそんな兄妹にフェイトは首を振った。

「そんなこと、ないよ。来てくれて嬉しい。」

みんな、わたしとまっすぐに向き合ってくれたから……嬉しいかったよ」

少し照れながらも一生懸命気持ちを伝えようと言葉を絞り出す。それぞれ形は違ったが、三人が三人フェイトと本気で向き合った。かつての自分を見て、止めようと全力で叱りつけたコウキ。甘えん坊と酷評しながらも見捨てずに自分の足で歩けと言ったはやと。

何度も名前を呼び、友達になりたいと言ってくれたなのは。

だからフェイトはこの日、この三人と話をしたいと思ったのだ。

「……………あなたから出された宿題は、まだ解らないけど、

次に会うときまできつと答えを出しておきます」

「ああ、いつでも待ってる」

コウキを見上げながらもフェイトははっきりと『考える』と告げた。

「これから歩くよ、ちゃんと本当の自分で……私の足で……その、君のそれにはびっくりしたけど」

「あはは、やっぱり車椅子姿じゃ説得力ないわな……」

少しだけ見下ろすようになりながらも『歩く』と告げる。ただその姿には面食らっていたが。

「…友達になりたいって君がくれた言葉。

私にできるなら、私でいいなら、って思ったけど……

ごめん、私、どうすれば友達になれるか知らなくて……

だから教えてほしいんだ……どうすれば友達になれるのか」

同じ高さの目線に、初めてフェイトは戸惑いながら『教えて』と告げた。

そこには知らなかったことへの不安が混ざっていた。

それで飽きられたり怒られたりしないだろうかと。

ここに集まった三人からすれば何を今更、な不安なのだけど。

「ふふ、そんなん簡単やよ」

「うん、簡単。友だちになるのすごく簡単!」

ふたりの少女は一回だけ視線を合わせておかしそうに、そしてどこか嬉しそうに続けた。

「名前を呼んで」「

「はじめはそれだけでいいの。

君とかあなたとかそういうのじゃなくて…」

「ちゃんと相手の目を見て、はっきり相手の名前を呼ぶんや」

「わたし、高町なのは！　なのはだよ…」

「あたしは八神はやて、はやてや！」

自己紹介はこれが初めてではない。

けれど、本当の意味で相手に名前を伝えたのはこれが初めてなのかもしれない。

少なくとも受けた側は本気でその名前を受け取った。

「なのは…」

「うん…！　そう…」

「はやて…」

「…うん！」

それぞれを、どこか確かめるようにフェイトは呼んだ。

それにしっかりと答えるふたりは笑顔だ。

不安を感じている彼女が安心できるように。

そして呼んでもらえるのがどれだけ嬉しいか伝えるために。

「なのは……はやて……」

「うん、フェイトちゃん」

「なんや、フェイトちゃん」

互いに名を何度も呼び、そして次第に三人は惜しむように手を取った。

これでお別れなのだと言、知っている。

理屈のうえで今生の別れではないと解つていても

それでも、ようやく友達になれた子との別れはそれだけで悲しい。

「フェイト、ちゃん……」

なのはに至っては瞳が揺れて涙がこぼれ落ちそうだった。

「こら、今日は友達の再スタートの日だぞ。

いつもの元気な笑顔見せてやれ、なのは」

「うんっ、うんっ！」

元気よく頷くが、ついにはなのはの目からは涙が零れ落ちる。

それをさっと指でぬぐったフェイトは優しくなのはに語りかける。

「ひとつ分かったことがある。

友達が泣いていると自分も悲しくなるんだ……」

「フェイトちゃん！」

彼女が自ら自分を友達だといってくれたのが嬉しくて。

なのはは思わずフェイトに抱きついて、その胸で泣いた。

「……あかん、なんかもらい泣きしそうや」

「嘘付け、なにがもらい泣きだ……」

少しかだけ乱暴に頭を撫でて泣くのを見られたくない彼女のそれを誤魔化する。

始まりはコウキのためであっても、はやてははやてなりにフェイトという少女が気になって仕方が無かったのだ。

「……なのはちゃんもフェイトちゃんもええ子からなあ……」

我が家に来てくれへんやろか？」

半ば冗談ぼく言ったが、はやての頭の中ではわりと簡単にその姿が想像できていた。

それこそ当たり前の光景だといわんばかりに。

「……これ以上増やすと真面目に部屋数足りないんだが」

「……………増築する？」

何かよからぬことを考えていそうな妹分に現実問題をぶつけるが現実的な解決策が返って来て、コウキは少し返りに困った。

「ふう、本当に増えたらなあ……」

溜息一つ吐いて、適当に流す。

はやては言質をとったと軽く喜んでいたが、ふと気付いたようにフェイトを呼んだ。

「思ったんやけど、フェイトちゃんとあたしらは友達になったけど、コウ兄とフェイトちゃんの関係は何になるん？」

「へ…？」

「…そういえば、なんだろう？」

言われて気付いた疑問に三対の目が自然と少し俯いてしまった少女に集まる。

「…よ、よし……あ、あのっ！」

何やら小さく呟いたあと、慌てたように彼に視線と身体を向ける。その顔には緊張と、これまでと少し意味合いの違う赤に染まる頬があった。

「あ…えっと、私、フェイト・テストロッサです。

と……友達になってくださいっ！」

言葉こそ「友達に〜」なのだが、

その過剰な力みぐあいには別の意味に聞こえてしまう。

それをどう受け取ったのかクスリと笑みをこぼすと彼は頷く。

「……教わったやり方を早速実践ってわけか……ああ、もちろんだ。俺は日野コウキ……コウキと呼んでくれ、フェイト」

「はい、コウキ……」

「いきなり呼び捨てかい」

思わず突っ込んだはやての声はフェイトには届いていない。ただ嬉しそうな顔で彼を見上げているだけである。

ちなみにだが、生活環境と教育環境の影響でフェイトには誰かをさん付けする習慣がないため呼び捨てが基本となっている。それではまずい相手や状況の時は役職付けで呼ぶので他意はまったくない。

ないのだが、自分たちの時とあまりに意味合いの違う類の染め方に、そのあまりに嬉しそうな笑みに、なのははやては若干ひきつった笑みを見せた。

「あかんわ、ホンマに増築せなあかんかも……」

「うわあ、うわあ……フェイトちゃんもライバルか……」

本人の自覚があるなしに関わらず。

少女達はフェイトが彼へと向ける視線の変化に気付いている。

「あはは、なんだかすごい。」

「これで一気に友達が三人になっちゃった……」

だがやはり彼女の中ではまだそれは友達のようにだ。

時間の問題だろうと思いつつも、ホッとしてしまつのが乙女心の複雑さである。

「そろそろ時間だ………もういいか？」

彼女たちを見守っていたクロノが、どこか苦笑いを浮かべながらも告げる。

その視線はどこか責めるようにコウキに向いていたが、彼は目を泳がせて避けていた。

「……はい」

胸につかえていたものをすべて解決できたのだろう。
フェイトは晴れ晴れとした顔で、頷く。

「フェイトちゃん……これ……思い出にできるの、こんなのしかないけど……」

咄嗟に自らの髪を結っていた白いリボンをほどいて差し出すのは何か形に残るものを贈ろうと思ったが、それにしか適当な物がなかった。

「……なら、私も」

それを見て、同じようにその髪を結んでいた黒いリボンを解くフェイト。

「じゃあ、あたしも……」

はやても自らの髪留めを外してフェイトに渡した。

そしてフェイトのリボンを一本ずつ少女たちは受けとった。

「俺もなんかあれば良かったんだが……生憎なんも付けてなくて代わりといっってはなんだが、これ持ってけ」

車椅子の背後から取り出されたのはふた付きの大型バスケット。

「時間がなくてたいしたものじゃないが、中身はサンドイッチだ。あとでみんな食べてくれ。」

凝ったものじゃないが我が家の料理人総出で作ったんだ。味は保証するぞ」

「は、はい。ありがとうございます……でも、どうして？」

「前にいったろ、とびきりおいしいのご馳走するって」

「あっ！」

その時と同じ言葉にハツとなる。

なのはと共同でジュエルシードを封印したときのことだ。

「バスケットは今度会うときに返してくれればいいよ。」

その時はもつとちゃんとしたのご馳走するから……またな、フェイト」

「はい、楽しみにしています……また」

「じゃあ、行こうか」

クロノが誘導して転移魔法の準備に移る。

フェイトを中央に魔法陣が包みこむ。

「クロノ、裁判でへたうつんじゃないぞ。もし失敗したら本局で大暴れしてやる」

「やめてくれ、君がいうと冗談に聞こえない」

そんなやりとりで周囲がどっと笑う。

わりと本気で言っているな、と感じているはやてとクロノは苦笑いだが。

「またね、クロノくん、アルフさん…… フェイトちゃん！」

「さよならはいわへんからな、またな」

うん、と頷いてフェイトは小さく手を振ってアースラへと転送された。

転移魔法でアースラへと戻っていく光が収まるまでずっとその先を見ていた彼女たち。

光が消え、その痕跡すらなくなって、みんながみんな何をするでも言うでもない僅かな沈黙。

その時になって初めて、背後のそれは足音を立てた。

「ふう……… 来ないといって駄々をこねてたくせに、結局来てるんじゃないか」

振り返りもせずコウキはその影へと文句をいう。

はやてはそれだけで額を抑えながら苦笑いだ。

「もうなのはちゃんたちに会わすことになってしもた……」

「え、あれ？」

「この人どこかで……」

存在に気付いたなのはたちが振り返るとその“女性”に見覚えがあ

る。ような気がした。

何とか思い出そうとするのだが、彼女が拳動不審ぎみに動き回るために

浮かびにそうになっている像が何度も消える。

「……ちゃんと食べてくれるといいな、お前のサンドイッチ」

ようやく振り返ったコウキが彼女に穏やかな声を向ける。

「……はい……」

少し照れながらも小さく頷く姿が、

先程までのフェイトの姿になぜか被って見えたなのは。

だからその女性が誰であるか。

あり得ないと思うより早くに気付いてしまっ。

「あ、え………ええええええええっ！！？？」

なのはの絶叫が朝の公園に響くなか、

困った顔を浮かべた女性はしばし黙って、少女が行った空を見上げた。

まだあなたのことをどう受けとめるかの結論は出ていない。

けど、『ちゃんと』考える』から。そしてきちんと自分で』歩

き』出そう。

あの日止めてしまった全部のために、私を取り戻すために。
この厳しいくせに実は誰よりも甘い男の子とその家族たちに
『教わり』ながら

続く想い、そしてサンドイッチ？（後書き）

これにて、ジュエルシード事件編は終了です。

多分このあとゆかりんの歌と共にスタッフロール流れて、
フェイトがサンドイッチ食べて「あれ、これもしかして」的な映像
で終わる。

え、なんで書かないのかって？……………入らなかつたんだorz

ちなみになんで原作の「プレシア・テストロッサ事件」じゃなくて、
「ジュエルシード事件」なのかという点と事件名に名前が残ると
後々面倒なことにならないか？的なことを心配したコウキとリンデ
イが

怪しまれない程度で妥当な別の名前をつけた、というていです。

あと個人的に主犯の名前を事件名につけるのに嫌悪感があるので。

気付かれぬ策略（前書き）

そうしてこれが8話の最後。

時間軸でいうと前話より前の話なんだけど、

エース編の前振りってことでこちらをラストにしました。

気付かれぬ策略

5月10日 PM07:27

アースラ 留置場前廊下

「どうだった、フェイトの様子は？」

アースラ内にある拘留場から出てきた私を待っていたかのようにそこにいた彼。

言葉と態度だけで取るのなら、フェイトさんが気になって、なのだけだ。

僅かな所作から覗く焦りに何か違和感を覚える。

「少し元気は出てきたみたい、食事もきちんとしてくれたわ」

だけどそれは口にせず自然な態度で答えた。

すると、それは良かったと彼は私と並んで廊下をただ歩いた。

「……………」

「……………」

廊下をそろって歩く私たちの間にしばらく会話はなかった。隣の彼がわずかに緊張しているのを感じる。

私に対して、というよりはどう話を切り出そうか。という風に感じる。

これは私から話をしたほうがいいのかしら？

「……………そういえばフェイトさん、あなたのことも言っていたわよ。

アリシアさんのことで、あんなに怒ってくれてありがとうって…」

「……………礼をいわれることじゃないんだが……………やっぱり姉妹なんだな……………」

なぜか溜息交じりに気落ちする彼。

最後の咳きは、聞き流したほうがよさそうね。

そして意を決したように、隣の彼は話を切り出す。

「ありがとうございます。結局なんだかんだで俺のワガママ聞いてもらって…」

まずはそういう話からってことね。

けど、自覚はしていたのね。ワガママだって。

でもだからこそ問題なのだと思うけど。あなたの場合。分かってるのに自重しないんだもの。

「よく言っわ。聞かなかったならアースラ沈めてやる、って脅したくせに…」

だから殊勝にも礼を述べた彼に嫌味を返す。
すると途端に眉根を寄せて渋い顔になる。

まあ本当はそんな物騒でストレートな物言いではなかったのだけど。

「……………それをあつさりスルーした人の台詞じゃないぞ、それ」

言外に含まれていたその意味を放っておいて、だけど受け入れた。
そしてある意味局員としては失格な行為の手伝いをした。もう、いまさらだしね。

どっちにしろ。

最初に彼の計画を聞かされてから、こうなるのは予想済み。
細かいところで違う面はあつたけれど概ね彼の思惑通りだ。

プレシア女史もフェイトさんもまだまだかかりそうだけど何とか前を見れるようになってる。

そうさせるために事件そのものを利用しようだなんて、無茶したわね本当に。

「……………それにしても、あれだけボロカスに責めた相手によくあんな優しい言葉かけれるわね？」

傍目からすると半分口説いているようにしか見えないのが怖かったわよ。

きつい言葉で攻めたあと優しい言葉かけるなんて。

どこの女つたらしよ。

「こつちもいろいろ予定が狂つたんです。文句ならあの仮面野郎にどげんか」

ああ、あの謎の男ね。

あれから色々調べて、これからも調べるでしょうけど
手がかりが無さ過ぎて、現時点ではどうしようもないわね。

「そうね……でも同じ母親としてはあなたの言葉は少し耳が痛かったわ」

子供のことを考えられなくなった時点で親としては失格。
当たり前といえば、当たり前のような気もするけれど、あまりにそれは。

「なにいつてるんですか。」

そんなこと少しも思っていないくせに」

……あなたも言うわね。
事実だけだ。

「あれはただの理想でしかない。」

それこそ子供の、そうであってほしいというワガママだ」

僅かに嫌悪の混ざった声で吐き捨てる。

「わかってて責めたのね」

「わかってて責めました」

それだけ彼にとってプレシア女史の態度は許せなかった。

彼が言っていたように彼女がもともと良き母であったから余計に。

けれど同時に唯一の肉親だった愛娘を失い、その原因に自分がいた
という事実はあまりに重い。

それに心が折れてしまったところで誰が彼女を責められるのか。とも考えた。

だから多分。

彼は自分が子供であることを利用して責めた。

嫌悪しているのはそこだろう。だからだろうか。

まるで贖罪を求めるような、許しをこうように彼は『自分』を語りだす。

「俺はもしかしたら見てみたかったのかもしれない。

彼女がそれまでの道を貫き通そうとする姿を。

それは俺が選ばなかった道だから、だからその覚悟と意思があるのか。

問いただしたかったのかもしいない」

取り戻そうとはしなかった自分だから、取り戻そうとした彼女の生き方を知りたかった。

そう語る彼はそれを見れなくて良かったと思っっているのか残念に思っているのか。

非常に判別しづらい表情をしていて、私でもその奥は見えない。

『最後まで貫き通したのなら、どんな想いにも価値と真実が宿る』

「噂の心得？」

「何が噂になってるか知りませんが、俺はそう教わった。

だから俺は……知りたかったのかもしれない。貫き通した先を…

…」

強い言葉とは裏腹に。

本当にそうなのか？

本当だとして、俺は貫けるのか？

そんな弱気な言葉さえ聞こえてくる声だった。

「……………そういえばちゃんと聞いてなかったわね」

ふとここで聞いておかなくては、と思った。

「なにを？」

「あなたがこの事件に関わった“本当の”理由」

なのはさんはフェイトさんと友達になりたかった。

はやてさんたちは関わろうとするあなたの力になりたかった。

では、あなたは？

同族への同情と嫌悪。

どこが見え隠れするそうだったものとは別に。

彼の行動には何か決定的な理由が欠けていた。

「……………昔、約束したんです。自分と」

少しのためらいのあと、彼はそう語った。

自分との約束。誓い。

なにかいいことのような響きに、知らず寒気が襲った。

「泣いている誰かを、助けを求める誰かを見つけたら……………絶対に手を差し伸べるって」

ああ、そういうこと。
だからあなたは、そんな風“にしか”なれなかったのね。

「ふーん……じゃあ……その時あなたは、なにを見捨てたのかしら？」

わたしはそこに問答無用で切り込んだ。

彼は『手を差し伸べる』といった。

助ける、とも、力になりたい、でもなく手を伸ばしたいと。

そんな想いは、その逆がなければ生まれない。

「……………あなたと話していると本当に心臓が悪い」

少し息が詰まっていた彼は唐突に力を抜いて、頼りなさげに笑った。
そして茶化す物言いをしながら、それは教えないと暗に告げていた。

「寿命縮まったかしら？」

それに付き合っつて私も笑ってみせた。

「ええ、三ヶ月くらい」

同情や憐憫の情からではない。

「微妙な日数ね、それ」

このまま続けると感情を抑えられなくなりそうだったから。

「いやいや、けっこう長いですよ三ヶ月って」

だからどうでもいいことを言い合いながら、ふたりしてクスクスと笑う。

あとになって、もっと踏み込んでおけばと後悔するなど知らずに

「……………あの、相談したいことがあるんですが……………」

そうして笑い合って、それが一息ついた時。

彼は強張った顔で、ようやく本命を切り出してきた。

「実は……………っ、あ……………」

ぐらり、と語りだそうとした彼が揺れる。

足元がおぼつかなくなっている。

「っ、大丈夫!?!」

さすがにびっくりして揺れる身体を捕まえて支える。けれど、意外なことにその手を彼自身に弾かれた。

「っ、え?」

「あ……………すみません。ちょっと疲れてるみたいです。部屋で、休んでます、っ!……………」

行き場を失った手がまるで彼を追うようにしていたが、私に何かを言わせる隙さえなく、彼はその場から去って行った。

「いま……のは……」

あの一瞬。

彼の私を見る目の異常さ。

なんで、捨てられた子供みたいな目で、私を見たの？

訳が分からなくて、しばらく私はそこで茫然としていた。

「うそ、だろ……クライド・ハラウン？
奪ったのが、闇の書……そんなん……そんなのありかよ!？」

??月??日 ??:???

???????

窓も灯りも何もない暗い部屋。
人気はなく、いるのは仮面を被った男だけ。
事件終盤にて突如介入してきたあの仮面の人物である。

「首尾はどうだった？ 発見されたと聞いたが？」

音声オンリーとだけ表示される空間モニター越しの声。
変声機越しなのか、独特の処理がなされた声は性別すら解らない。
気にした風もない仮面の男は淡々とした口調でそれに答えた。

「そちらのほうは問題ありません。」

追跡調査はされるでしょうが捕まるような尻尾は残していません」

事実、アースラスタッフはその動きを追えていなかった。

彼の存在はナゾの介入者として記録される程度になるだろう。

「しかし、肝心な彼についてですが、あまり芳しくは……

こちらが目標としていた数値を遥かに下回っています」

「……そうか、ではやはり気付いているな」

それに「はい」と頷きながらもそこに気落ちした様子はない。

「ですが、わずかでも使われたのは确实。

もはやその流れは止まらないでしょう……」

「……一度動き出した歯車は容易には止まらない。

私たちもまた、もう止まれない……今回アースラが関わったのは、運命か偶然か……」

変声機越しだというのに、その言葉には僅かに嫌悪と罪悪感が混ざ
る。

「前者だとすれば、そんなものを用意した神を私は呪います」

「よそう、どちらにせよ後戻りできない所までもう来てしまった。罪も罰も、あとでいくらでも受ける。あの呪われた魔導書を封じられるのなら！」

「はい、最期までお供します…。」

そう頷いて通信を切るとカードを使って仮面の男もまた姿を消した。

わたしたちはまだ知る由もなかったのです。

ジュエルシードを巡って起こった今回の事件が、全く別のもっとおっきな事件のほんの一部でしかなかったことを。

いまもまだ、わたしたちがその事件の渦中にいたことを。

わたしたちのすべてが実は誰かの手のひらの上だったなんて、この時はまだ誰も、そう誰も知らなかったのです

気付かれぬ策略（後書き）

次からは、エース編！

ではなくて。

エース編に入る前までのお話を短編的に書いていく予定です。
では！

第9話予告

なのは「あんなに大変だった事件が終わって、戻ってきた日常……」

はやて「でも、それはそれまでとちょ少し違つとつて……」

コウキ「…騒々しくもあり、穏やかでもあり、何も無い当たり前のそれはたぶん……」

三人「次回、魔法少女リリカルなのは異伝・第9話『それは嵐の前の日々なの』に」

なのは・はやて「これが最後の……」

プレシア「り、リリカルマジカルツ頑張りますっ!!!!」

コウキ「いや、お前はもつと力を抜いてくれ……」

フェイト「……………えっと、ここで筆者からお知らせです。

舞台が海鳴市のためわたしたちアースラ組は出番がほぼないそうです」

第9話予告（後書き）

ガクブル！

急に悪寒が！？

やっぱり俺はリンディさんがリリなのキャラで一番怒らせたらいけない人だと思う。

で、というわけで（どういうわけだ？）

9話扱いにすることにしました。

一応スタートの話とかはいつものボリュームですが
その後は短い話をぽつぽつと行く予定です。

奮闘記始まる（前書き）

今回はぶっちゃけなんでそうなったのか、っていう説明話。
あとはやての野望（笑）も明らかに？

追記

9話は番外編・短編集。

サウンドステージ

なのは的にいうならSSSというイメージなので
いつものアバンはありません。

奮闘記始まる

おじさん、今日はビッグニュースからお知らせしたいと思います。

なんと、あのコウ兄が我が家に女を連れ込みました!!

………というのは冗談で、本当はこういうことなのです。

5月14日 AM 10:46

海鳴市 中丘町 日野家

その日、あたしら日野家の面々は闇の書も含めてリビングに集合し

ていた。

集めたのは一応の家主であるコウ兄その人や。

「ああ、そのなんだ。実はみんなにいわなくちゃいけないことがある」

集まった皆をソファなどに座らせながらも本人は床であぐらをかいている。

いつぞやの見下ろしたくないうんぬんと違い、悪気があるから下に座ってる感じやね。

「本当はみんなに相談しなくちゃいけないことなんだが
こっちで勝手に決めてしまっただけに本当に申し訳ない。」

だが、どうしても必要なことなのでどうか、許していただけるとありがたい」

神妙な顔で丁寧な言い方しとるけど、

ようするに『悪いと思ってるが変える気はない』と言ったコウ兄。
もう誰もそれに、あたしも含めて苦笑すら浮かべないなんて。慣れ
つて恐ろしいなあ。

「と、言われましても……どういうことでしょうか主？」

とはいえシグナムの言うとおり。
むしろ何を決めたか。の方が問題や。

「口で説明するより、見てもらったほうが早い。おい、入ってきて
いいよ！」

外へ呼びかけるような声を出して視線をリビングの入り口に向ける。

すると、入り口の閉められた扉に人影が見えていた。

「いつのまに……」

その時まであたしら全員に気付かれなかったのだから、見事な気配の消しっぷりや。

だけど、呼びかけに反して向こう側の人物は入るのを躊躇しているよう。

「おい、入ってこいって……」

見かねたコウ兄が再度声をかけたけど、ビクリッと身体を震わせて反応しただけで扉は開けない。

仕方がないと立ち上がったコウ兄が扉を開けて入るように促すが、どうにも態度がはつきりしないようで、入ってこない。

「いいからとつと入れ！」

家中を震わせるほどのコウ兄の珍しい怒声にまたビクリツとなったその人は
観念したのかりビングに脚を進めた。おっかなびっくり、といった感じに。

「……………え？」

「…はっ!？」

「な、なんで!？」

「……………冗談やる？」

「……………」

全員がその“女性”を見て一瞬「誰や？」と思ったけど、すぐに察して絶句する。

あたしもこれには完全に度肝抜かれたわ。

「は、はうつ…」

そやからみんなからの「何故?」「どうして?」といった疑問ばかりの視線が集中して、あっさりとその人は折れた。たぶん心が。

「そ、その節はどうもご迷惑をつ!!!」

()()(スライディング土下座?!?!)()()()

見事としかいいようのないそれを決めて、頭を下げた彼女にあたしらは余計に困惑して、我が家の時間はしばし止まるのだった。

土下座で謝り続ける彼女をコウ兄が怒鳴りつけて、なんとかソファに座らせると

開口一番、この家の主さんはとんでもないことを口にした。

「紹介するぞ。」

今日から我が家に住むことになったプレシア・“ヒノ”だ」

「は……………?」

呆気にとられる。

その言葉の意味をここまで自分で体験することとなるやなんて、思いもせんかった。

目の前の女性が誰で、なんでここにいるのか。

まして、どうして共に住むことになったのか。

色々聞きたいことはあったけれど、開いた口から出たのは別のことやった。

「コウ兄……………いったいいつのまに結婚したんや!？」

「ひっ!？」

「アホがあっ! 俺はまだ15だ、結婚できるか!」

「っ、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……………」

ごめん。なんかあたし少し混乱してるみたいや。

幻聴まで聞こえてまうなんて。ってことにしておこつ。

っていうかコウ兄、歳の問題なんや。

そこさえOKならアリなんや、ふーん、そうなんや。

「……………いや、はやて…怒るのは解るがせめて言葉にして怒ってくれ」

絶対わかってないやろ。

あたしが怒ってると思うとるんなら、その理由絶対わかってない。

「…説明……まずはどういふことが最初から全部説明や」

プレシアさんがここにいることも不思議やけど、

なんで見た目の感じがこう、若く感じるそれになつとるのとか、
なんでさつきからこんな挙動不審になつて謝つてばかりなんか、
とか。

「納得できる説明してもらつやないか」

別段、誰かを迎え入れるのが嫌というわけじゃないけど、
さすがに事後承諾みたいに連れてくるのは無しやと思う。
だから。

「怒る・叱る・許さへん、あたりの話はそのあとや！」

「……その三択しかないのか……」

少し頭を抱えてうなりながらもコウ兄は事の次第を話し始めた。

話は庭園崩壊の翌日から。

実はリンディ提督に発見された時にはプレシアさんとは一緒だった
そうや。

5月9日 PM 08:14

アースラ 艦長室・寝室

簡素なシングルベッドの上で一人の女性が眠っている。
しかしながら彼女はこの部屋の主ではない。
主たる女性は、眠る女性に柔らかな眼差しを向けながら看っていた。

「…ん…っ…あ…」

閉ざされていた瞼が震えて寝言とは違う声が漏れ始める。

そしてゆっくりと目が開いていき、まだ何も捉えていない目が周囲を見ていく。

そこには当然その女性を看っていた女性や、あちこち包帯だらけの少年が一人。

「……っ、あなたたちっ、あっ、くっ…」

「無理しないほうがいいわ…」

彼らの顔を把握した女性は咄嗟に跳ね起きたが肉体に走る痛みを顔を歪めた。

「ゆっくり寝てろ、お前の身体すごいことになってるから…」

「詳しい検査はしてないのだけど、痛みぐらいで済んでるほうがいいか
かしいぐらいにね」

少年と女性の言葉にあった妙なニュアンスに疑問を感じたものの、
それを彼女は自身を冒す病魔のことだと思って、そのままベッドに

倒れこむ。

「……………そう、私は捕まったわけね……………」

久しぶりにゆっくりと寝ていたおかげか。

それとも吐き出すべき激情を出してしまった後だったからか。

彼女は天井を見上げながら、比較的冷静にその事実を受け入れている。

なにせ明らかに自室とは違うベッドの上で管理局艦船の艦長と自分を追い詰めた少年に見張られているのだから。

「……………哀れなものよね……………あの子のためと言い続けて結局自分のためだった。」

あの子を取り戻したいなんて嘘……………あの子が死んだのを自分のせいだと思いたくなかっただけ……………」

たったそれだけの理由で26年もあの子を傷つけ続けていたなんて……………なんてひどい親……………」

自嘲気味に笑って、吐露されていく心情。

偽りの狂気で隠し続けた、自分でさえ気づいていなかった感情。それが解ってしまった彼女にはそれを隠す意味さえなかった。

「いいえ、違うわね……………あの子と約束したプレゼントが何だったか覚えてもいない。」

あなたの言った通り、わたしはもうアリシアの母親を名乗る資格さえ……………ない！」

痛みを訴える身体を無視して、プレシアは再度起き上がる。

そしてそのままベッドから降りていこうとする。

「どこへ行く気？」

「…放っておいてちょうだい……自分でしたことは自分で決着をつける。」

庭園にある研究データには表に出るだけで問題になるのもあるの。例え相手が管理局でも、後世に残すわけにはいかない。

あそこを完全に消してしまわないと……」

「で、お前も一緒に消えるってか？」

真っ直ぐで的を射た指摘に一瞬押し黙ったプレシアだったがすぐに持ち直して、歩みだそうとする。

「……お願いよ、行かせて……もうそれしか償いが浮かばないの！」

だがその歩みは遅く、前に回り込んだリンディが止めるためというより

倒れないように支えるために腕に手を回す。

そしてプレシアにはそれを振り払う力さえなかったのだ。

「っ……私に残された時間はもう少ない。取り調べや裁判なんかしてる暇はない。」

それにこのまま私がいれば、どう死のうとフェイトの歩くこれからの邪魔にしなければならないわ。

親でないのならせめて、あの子たちの邪魔にならないように、っ
!？」

パチンっ

無言で、コウキの手がプレシアの頬を引っ叩いた。
音だけは高く響いていたが、その動作は軽くないして力は込められていなかったが。

「……………馬鹿かお前は。」

今その資格がないなら、どうしてこれから親に戻ろうと思えない。
どうして、アリシアの母親だった自分を取り戻そうとしないんだ」

「無理をいわないで……………どれだけ罪を重ねたと思ってるの!?!
どれだけあの子たちを傷つけたと思ってるの!?!
そもそも、わたしにはそんな時間が……………」

「あるぞ。」

プレシア・テストロッサになくても、お前になら、ある」

その言い回しに今度は彼女もその意味を推察できなかった。
なにせ遠回しにお前はプレシア・テストロッサでないといわれたに
等しい。

どういうことだと二人に視線を送ると、腕を肩に回して支えていた
リンデイが答えた。

「あなたは知らないでしょうけど、ジュエルシードが暴走したの。
プレシアたちはそれに取り込まれて、庭園はその余波で崩壊。

そのうえ虚数空間まで発生してしまって、何とか封印はできたけ
ど、

事件の首謀者であるプレシア・テストロッサと動機だったアリシ
アさんの肉体は

一緒にそこに落ちて行って行方不明……………事実上の死亡扱い」

一瞬、プレシアは何を言われたのか解らなかった。
が、さすがに聡明な彼女がいつまでもそんな状態なわけがない。
わりとすぐに“そういうことにしてくれた”のだと理解する。

「……なんで、そんな…」

だが同時にその理由までは解らない。

相手は少なくとも片方は管理局の人間で彼女は間違いなく犯罪者だ。
逮捕することはあっても死んだことにして見逃すなんてもつてのほ
かだろう。

「さあ、それは彼に聞いてみないと…」

しかし何故かその代表であるリンディは他人事のように
自分はそんなことは知らないと嘯いた。

「別に深い意味はないぞ。単にお前には時間が必要だと思ったから
だ。」

牢屋にぶち込まれる時間より、普通に生きてアリシアの母親にも
う一度なるための時間が」

「なにを……だからその時間がないとっ！」

意味がわからない。と苛立つプレシアに溜息を吐くコウキ。

それを見て、おかしそうにしながらリンディは彼女に手鏡を渡した。

「それで自分の顔を見れば、私たちが言いたいことが解るはずよ」

「え？」

困惑しながらも、渡された手鏡で自らの顔を見る。少しの間、それがどうしたの、という顔で見っていた彼女は次第に驚愕のそれへと変わっていく。

「うそ……どうして、え、これは…」

「びっくりしたのはこっちもだ。」

まあ、だからこそこんなことしてるわけだが」

「どうかしら、数多の女性の願望である“若返り”を経験した気分は？」

そこには、やつれた研究者の顔も狂気に支配された悲劇の母親も映っていない。

いたのは若々しさと張りのある白い肌の美しい女性だ。

どんなに年齢を高く見ても、せいぜいが二十代の真ん中程度。

いくら外見の年齢が若い人が多いミッドチルダ人でも、

すでに五十代に入っていたプレシアが二十代の容姿に戻っていたのだ。

その差は明らかで、下手をすれば『プレシアの娘』でも通じるほど。

「……………」

あまりに予想外のことに言葉もないプレシア。

リンディは女性の願望というが、そんなものは娘を失った時に彼女は捨てていた。

そもそもそれを望んでいたわけでもないのに喜びがあるわけもない。あるのは単純な驚きという感情と疑問だけ。

何がどうなっているのか？

数多くの禁忌に手を出し研究し続けていた彼女でさえ解らない。

「顔だけじゃないぞ。肉体もそれに準じたものに戻ってる。

軽く検査しただけだが、病巣は跡形も残ってなかった」

「そのせいで、あなたをプレシア女史として逮捕するのが面倒なのよねえ……」

彼女たちからすると方便に近い理由ではあったが、厄介なものも事実。何も見た目だけの問題ではない。遺伝子や魔力波動が微妙なレベルで違っていることも判明していた。

つまり状況的にプレシアであることは間違いないがそれを客観的に証明する手段がない。

逆に彼女が自分はプレシアではないと言い張れば、そっちは客観的に証明できてしまうのだ。

「……………」

絶句したまま、力が抜けてしまった彼女をリンディはベッドに座らせる。

その顔は困惑に満ちていて、それだけで頭の中がパニックになっていると解るソレだった。

「…………俺たちもなんでそんなことが起こったのか解らない。

けど、俺はそれはアリシアからの贈り物じゃないかと思ってる」

「アリシアから……？」

「ああ、なんでかは不明だが封印後ジュエルシールドが1個消失していた。

そのうえなぜか……アリシアの肉体が消えていたんだ……」

「えっ……!?!?」

我を忘れて驚愕するプレシアだが、アリシアと話をしていたコウキとリニスからすると

プレシアの肉体の変化にアリシアが関わっていたことは容易に想像できる。

ゆえに、アリシアの身体が消えていたことの意味に察しはついていた。

プレシアの遺伝子や魔力波動が登録されていた過去のものと影響のない範囲で変化をしていたことも踏まえると、

おそらくこういうことなのだろうという結論をコウキは出していた。

「確証はないが、お前はアリシアの肉体と融合したんじゃないか？」

「……………は？」

思わず間の抜けた声を出したプレシアに「そうなるわよね」と笑つての同意の声。

それにムスツとした顔を向けるとリンディは肩をすくめて黙った。

彼もとんでもない結論を出した自覚があるためか事前に彼女に説明していたのだが、

ある意味ではそれが微妙に裏目に出た形だ。

「呆れるのは分かるが、いいから聞け」

プレシアの病気は末期だった。

おそらくもう数年もなかったろう。

いくらジュエルシードでも病気だけを消すことはできない。

かといって肉体の時間だけを逆行させるなんてこともできない。どれだけエネルギーがあっても時間逆行が不可能なことはミッドチルダでは証明された事実。

プレシアを助けるには別の手段が必要だ。

「…アリシアの身体はお前がすぐに完璧な保存をしていたおかげで生物として死んでいても、細胞レベルでは仮死状態に近かった。それをジュエルシードの力で活性化させ、お前の身体と融合させたのなら、

若返りも病巣が消えたのにも、一応の説明はできる……」

病巣に冒された細胞そのものを廃棄しアリシアの細胞で補った。

若返りはその行為による副作用にすぎない。というのがコウキの推理だ。

身体全体に溶け込まれた若い細胞の影響でプレシアの肉体年齢が下がった。と。

1個分のジュエルシードが消失したのは普通の融合ではなく、プレシアを主体にして、アリシアの細胞を溶け込ませるようにしたために
余計に多量のエネルギーを消費したのだと推察している。

「アリシアが……私の、なかに？」

「まあ、あくまで仮説にもなっていない仮説だ。俺も当たってる自信はない」

コウキとてアリシアとのあんな会話がなければ、
思いついても口にしようとは思わなかった仮説である。

無論、あの少女と出会ったことは約束通り誰にも喋っていない。

あれからヒュウドラの群れを突破して、強引に外に飛び出したコウキ。

無我夢中だったせいかわが故かディストーションシールドを展開していたリンディの目の前。

そこまでの戦闘と強引な転移で消耗しきっていた彼はそこで一旦意識を失った。

すでにその時点で庭園が崩れはじめていた彼女はその危険な状況を利用して

慌てたふりで自分と彼とプレシアをアースラの自らの部屋へと転移させたのだ。

彼らがプレシアの肉体変化に気付いたのは実はそのあと。

コウキはともかくとして人目にさらせないプレシアの検査には手間取ったものの、彼女の存在を隠し通すことに成功していた。

「……ゆっくり考えるといいさ。今日のこと、体のこと、これから
のこと。」

考えなきゃいけないことはたくさんあるがその時間もたつぷりある」

席を立つて、プレシアに歩み寄るとその手を取って借り物を返す。

「話し相手が必要なら、そいつも……もちろん俺もいる。気長にやっ
つていけばいい」

『そうですよ、私はあなたの幸せのためなら力を惜しみません。

一人で考えたいなら黙っています。話相手が必要なら何時間でも
相手になりますよ』

「……………リニス……」

『だけど、どうか忘れないでください。』

どんな過程があったにせよプレシア、あなたを救ったのは絶対にアリシアです。

どうかそれだけは、忘れないでください……………」

それがアリシアと約束した彼らが口にできるギリギリの範囲。

「アリシア……わたしは……………わたしは、うっ、うっうっ……………」

感極まってもれた嗚咽と涙を見たふたりは、見守るような笑みを浮かべた。

そしてこれでやっと事件が終わったような気がして、肩の力を抜いたのだった。

「……………それから、艦長さんの部屋で療養していたんだが、さすがにそのままずっとってわけにはいかない。

だからまあいろいろ相談した結果、我が家で引き取ることになったわけだ」

「いや、コウキ……………その『いろいろ相談』の部分を俺達は知りたいのだが」

ホンマ、ザフィーラのいうとおりや。
またさりげなく重要なことスルーしようとしたな。

催促するように呆れた視線を向けると困ったように目を泳がしたものの、

コウ兄は結局その部分も話し出した。

それによるとこのアイディアはリンディ提督のもんらしい。

管理局のこの事件を知らない施設や人に預ける選択肢もあるといえ
ばあつたけど、

それよりもそもそも管理局を知らない管理外世界であるここで、
事情を概ね知っているあたしらと一緒に過ごしたほうがいいのでは
ないか。っていうことや。

事前相談できなかったのはそれが半ば脅迫だったから、らしい。

「こっちは事実上犯罪者を見逃すんだからそれぐらいのアフターケ
アはしてほしいわ。

うっん、そうじゃないわね。絶対しなさい。

じゃないと記録から消さないわよ、あなた達のこと」

と笑顔で告げられたそうや。

弱みを握られたうえに足元を思いつきり見られとる。

「あちゃあ、そう来たのかよ……」

「それは……なんとも……」

「リンディ提督ってなんかコウ兄にだけすごく厳しい気がするなあ……」

言いたいことは分かるし実際は引き受けるの分かってる上での脅迫
やろっけど。

その言い方があたしらに接するときと大違いや。

「あの、それじゃあ私たちに拒否権はないってことですか？」
「すまんがそういうことになる……」

コウ兄がそう断言したことであたしらはいつせいに溜息をついた。それは別にプレシアさんを受け入れるうんぬんの溜息やのうて、とんでもない人に逆らえない弱み握られたなあ、というものやったんやけど。

「す、すすつすいません!!」

この人はどうもそう受け取らへんかったようで。

恐縮しとるいうか、怯えるいうか。どうにも表現の難しい態度で謝罪し続ける。

「やっぱり迷惑かけた私がここに住ませてもらおうだなんて無理ですよ。」

「一人でなんとかします。し、失礼します！」

「ばつ、こらまで!!」

いたたまれなくなったのか。

急に立ち上がった出ていこうとする彼女を羽交い絞めにしてとめるコウ兄。

うーん、この人ホンマにプレシアさん？

「一人でなんとかできるわけあるか！」

戸籍は用意してもらったけどお前こつちのこと何にも知らないくせにどうする気だ!？」

『そうですよ。お金は一円もない。知り合いだってこの人たち以外いないくせに!』

「で、でも……だって、だってええ…あ、ああ……わたしなんて、どうせ、どうせえっ…あああっ!!」

デバイスのリニスについては少し聞いていたので驚きはないんやけど、

プレシアさんはどうして急に泣き崩れているんやろか？

（ああ、そのお取り込み中もうしわけないんやけど、
プレシアさんどないしたんや？）

（……これがうちで引き取ることになった原因のひとつだ。

こいつ事件が終わって、憑き物が落ちたみたいにおとなしくなったのはいいが、

今度は罪悪感にさいなまれ過ぎて妙な方向に情緒不安定になっちゃまって……）

（まさかリンディ提督はそれもあたしらで何とかせえ、と？）

思念通話で頷く気配に、なんや痛くもない頭が痛くなりそう。

自業自得な面もあるけど事情が事情やからプレシアさんがこうなってもたんは責められん。

ちよっとした刺激でどの感情が爆発してしまうか分からん人をひとりにはできんし、

かといって事情をまったく知らん人に預けるのも問題や。

“何に” 対しての反応なんか分からんからな。

そう考えると預け先としては我が家はなるほど最適や。

リニスを含めてしまえば7人おるわけやしひとりばっちになることはない。

そのうえ全員が事情を把握しとる。しかもこっちはアースラ組以外

の管理局と接触できへん。

見逃されたとはいえ犯罪者であるプレシアさんが落ち着くまでの居場所としてはこれ以上はない。

問題があるとすれば。

(あたしらのことや闇の書のこととはどうするん?)

そのことだけ。

(シグナムたちは常に人型でいる守護獣だって説明してある。

闇の書は生きている本型のロストログニアだ……)

その方向性で誤魔化すいうことか。まあ無難やね。

隠し切るのは難しいし闇の書も家の中でも動くの制限されるとつまらんやろ。

となると後はみんなの気持ち次第、か。

(そのへんどう思とるみんな?)

(ん、俺は主たちが是とするなら問題ないと思う)

(私もだ。断れない状況というのもあるが、今の彼女を放っておくのは憚られる)

(コウキちゃんにケガさせたのは許せませんが、

それはこれから償ってもらえばいいことですから……)

(いいんじゃないね。どのみちあたしら人のこといえる立場じゃねえし……)

「……じゃあ、はい。挙手や。」

プレシアさんを我が家に迎え入れるのに反対の人は手を上げて！」

「は、はやて!?!」

「ひっ！」

コウ兄とプレシアさんの驚きと悲鳴のような声を無視してみんなを見る。

もちろん誰一人、手はあがってない。

「と、いうことで無事プレシアさんは我が家の一員となりました！」

拍手と共に盛大に発表する。

プレシアさんがポカンとした顔で啞然としとるなか、コウ兄はアイコンタクトでありがとうと礼をいった。

(いいんよ、コウ兄。あたしにはあたしの思惑あるからね……)

互いに思念通話を使わない言葉をやりとりして、車椅子を動かす。床に正座しとるみたいないな体勢の彼女の前に来て、ゆっくりと手を差し出す。

「あたしは八神はやていいいます。」

こんな脚やから迷惑かけるかもやけど、どうぞよろしく」

「あ………はい………はいっ………わたしのほうこそっご迷惑おかえますっ………うううっ！」

そんな泣かんでも。

といたくなるほど激しい嬉し泣きに苦笑しながらも私とプレシアさんはしっかりと握手をかわした。

『こんな主人とあまり役に立たないデバイスですが、どうぞよろしく願います。はやて』

「うん、よろしくな！」

こうして日野家は新しい家族を迎え入れたのでした。

プレシア・テストアロッサ改め、プレシア・ヒノとデバイスのリニスなんや少し前までひとりぼっちだったのが、コウ兄とふたりだけやったんが嘘みたい。

これからのきつと今までより騒がしい日々を思うと嬉しくて笑みがこぼれてまう。

ああ、でもひとつだけ、プレシアさんごめんなさい。

あなたを利用することだけは、心で謝っておこうと思う。

ごめんなさい。

でも、いっぱいいいればその分この人は頑張るから。

そういう人で囲んで、みんなでこの人の逃げ道ふさいであげるんや。

あたしひとりからなら逃げられても、みんなからは逃れられへんよ。

コウ兄はずっと、ずうううと……あたしらのそばにいてもらうんやから

「っ、な、なんだこの悪寒!？」

「なんやろうなあ?」

勘の鋭いコウ兄と笑顔でとぼけるあたしでしたとさ。まる。

奮闘記始まる（後書き）

なんでこうなった、プレシアorz
だいじょうぶ、一時的です。きつと9話が終わるころには何とかな
ってる！はず

実をいうと9話のタイトルには「プレシア奮闘記」とかいうのも候
補にあった。

プレシアだけが主役ではないので却下されましたが。
サブタイが『奮闘記始まる』なのはそつという理由です。

疾風の日

「でもよ、本当にそれで大丈夫か？」

「大丈夫、うまくいく。事前の情報収集はばっちりだ」

「コウキちゃんがそういうなら信じますけど」

「どのみち我らにできるのはせいぜい準備だけだからな……」

「だが、せつかくの良き日だ。」

「喜んでもらえるよう全力でことにあたるっ」

「よし、決まりだ。じゃあ作戦開始といくぞ！」

「「「「「おおおおっっ！！！！」「」「」」」」

石田幸恵は海鳴大学病院に勤める神経内科医師である。

どの患者にも常に真剣に向き合う姿勢から患者はもちろん同僚からも信頼されていた。

そんな彼女は当然ながら幾人もの患者をつねに抱えている。

その中でも特別長い付き合いのある患者がふたり。

治療が終わってないのが主な原因であるために医師としては嬉しくない面もあるが、

個人的にはふたりの成長を見守れることとちょっとした相談事に乗るのは

兄弟・姉妹が欲しいと思っていた彼女にとって日々の楽しみとなっていた。

「石田先生、こんにちは」

「はい、こんにちはは、はやてちゃん」

そして今日はそのうちの一人である八神はやての定期検診の日。

正確には、もうひとりから頼まれてそういうことにした日である。

「えっと、それでその方が？」

二十代前半から後半くらいの女性。

黒というよりは藍色と紫の中間のような色の髪を背中に流し、ゆったりとした衣服だというのに解るプロポーションの良さ。

きつと穏やかな優しい笑みが一番似合うのだろうと思われる美貌。

「は、はいっ初めまして……ぶ、プレシア・テ……じゃなくて……」

プレシア・ヒノといいます。よ、よろしくお願ひします！」

いろいろ力が入りすぎな挨拶でそれらすべてが台無しになっていた残念な女性。

「あはは……そう緊張なさらずに……」
(なるほど、これは大変そうね……)

“事前”にある程度の事情説明を受けていなかったらさすがの石田医師も彼女の妙な緊張の仕方に面食らっていたことだろう。

数日前にかかってきた電話。

『……実はうち、同居人がひとり増えまして、
そいつに紹介がてらはやてを送らせるつもりなんですけど……』
彼が石田医師に対してその“計画”を打ち明けたさい、続く形で語られたその存在。

驚きはしたものの彼の家族が増えることにはある思惑から全面的に賛成な彼女は

あまり深くはその事情には踏み込むことはしなかった。

『ちよっと色々あった人で、若干情緒不安定というか力み過ぎているというか。』

普通にしてればいいんだけど、それができなくなつて本人も困つてるといふか……

だから、その……話し相手になつてくれませんか？』

自分たちはあまりに彼女がそうだった事情を知りすぎているから、知らない石田医師の立場で、同じ大人の女性として話してほしいと頼まれた。

そこまで言われて断る理由が彼女にはない。
計画を知られないようにする注意と共に彼女と話し友達ぐらいには
なろうと思っていた。

簡単な自己紹介を終えて、今日行う検査の説明する。

はやては検査装置で横になっているだけでいいのだが、じっとして
なくてはいけない。

その時間はほとんど装置任せであることを利用して石田医師は彼女
と話す時間を作った。

(……………なにかしらこの感じ)

話し始めてしばらくたったころ何かを感じて戸惑う石田医師。

最初こそすさまじく緊張していたプレシアではあったが、
そこはさすが何人も様々な患者と接してきた医師。

巧みに緊張を解いて、談笑するまでに持ち込めていた。

だがそこで、石田医師は彼女の所作や雰囲気にな妙な既視感を覚えた。
けれどそんなわけがないと思って話を続けるとやはりそうだと思っ
てしまう。

(……………この人、初めて会った時のコウキくんに似てる?)

態度や言葉遣いなどは丸つきり正反対だが、

それでもかもし出す雰囲気というべきものがひどく似通っていた。
自分と初めて会ったころの、はやてとすら出会う前の一番危うかつ
た彼に。

「……………プレシアさん。こんなこと頼める立場ではないんですが……………」

そう思ってしまったら、もう彼女はそう切り出していた。
このまま放っておいてはいけない。

あの時と違って自分はもうその対処法を知っているのだから。と。

「知っているでしょうが、コウキくんはやてちゃんにはご両親が
いません。

そのせいかあのふたりは妙に大人びている、というより達観し過
ぎている所があります」

ふたりで暮らすようになって、シグナムたちと暮らすようになって、
若干歳相応な面も出てきていたがそれでも時折見せる“諦めきった
顔”は消えなかった。

「……そう、ですね……いわれてみればふたりとも人に頼らない癖
があるような」

かつて、可愛らしいワガママで自分を困らせていた娘がいたプレシ
アとしては

子供であるはずのコウキとはやてをトップに置いているこの家庭に
は少しだけ違和感を覚えていた。

それでうまく回っているしふたりはそれで楽しそうだったので口に
することは無かったが。

「無論、人や家族のあり方はそれぞれですから何が良い悪いとはい
えませんが。

あのふたりの場合、誰かのために何かできることが生きる活力に
なっていますから

今のみんなのお世話をしてる生活はすごくいいんですけど……」

「けど…?」

「時々不安になるんです。悩みや不安を一人で抱え込んでいないかと。」

頼られる立場でいることが活力になっても、そういったものを吐き出す相手がいないと結局つらくなってしまっから…」

「分かります、それ……今更ですがあの時誰かに頼っていればと、時々思います」

どこかやつぱりという顔をする石田医師とは別に、

かつてそれで耐え切れなくなって暴走した過去を持つプレシアは彼女が言い出した不安を深刻に受け止めていた。

その表情を見てある意味慌てた石田医師はまくしたてた。

「親代わりになってほしいなんて無茶をいうつもりはありません。

けれどあの子達をどうか“子ども扱い”してはくれませんか?」

「子ども扱い……?」

しっかりしている子達だからこそ。

思いっきり子ども扱いして思いっきり甘やかして欲しい。

「きっとそれはあの家ではプレシアさんにしか出来ないことのように思えるんです」

シグナムもシャマルもザフィーラも。

石田医師からするとその相手としては不適合だ。

世話をされている側なせいかふたりに上に見ている傾向が強いのだ。

それでは子ども扱いなどできるはずもない。
ヴィータにいたっては子供そのものであるため論外だ。

「……わたしに出来るでしょうか。」

正直、彼にはいつも叱られてばかりなもので……」

(自分より10歳は年上を叱るって……あの子はまったく……)

「そんなに難しく考えないください。簡単なことでいいんです。
いいことしたら褒めてあげるとか、危ないことには注意するとか、
そんな程度で……」

口にして、それだけで石田医師は自己嫌悪に陥りそうだった。

逆をいえばそんな程度のことでも誰からもされていなかったのだ。自分も含めて。

「……わかりました。やって、みます……」

どこか不安そうでありながらもプレシアは力強く頷いた。

「ありがとうございます……」

礼をいいながら彼女は二重の意味でホッとしていた。

はやてたちの周囲にやっと“大人”が現れてくれたこと。

そしてもう一つは

(この人もコウキくんと一緒にだ。

役割を与えないと、壊れてしまう……)

その大人に仕事を与えられたことだ。

かつて誰かが彼にはやての世話をするように頼んだように。

「あのプレシアさん？」

そんなんしてもらへんでも自分でこげるよ」

「い、いいえ…ここ少し坂になってますし身体を動かした方がいいといわれますから」

病院での検査を終えて、私ははやてさんの車椅子を押しながら次の目的地へと移動中。

石田先生からいわれるまではつきり気付けなかったけれど、

彼女はまだ9歳程の子供。しかも足に不自由がある子だ。

本当なら周囲の手助けがないと普通の生活を送るのも難しいはずなのに。

考えてみればあの家ではコウキ（呼び捨てしないと怒るんです）と彼女でほとんどの家事が動いている。

みんなも、当然私も手伝っているけど中心となるのはあのふたり。

あの四人が守護獣、ミッド式でいう使い魔のような立場であるがゆえに

家族として振る舞っても根本的な立ち位置が上下関係になっているためだろう。

「次は、風芽丘図書館でしたっけ？」

「うん、そうや。」

借りとった本、今日までやったさかい……あ、そこ右な」

「は、はい！」

ならそれとは関係ない大人である私がしつかりしなければ。
あそこまで迷惑かけて、こうして毎日助けてもらっている。

この子はまだ9歳。彼だってまだ15歳。

この世界のこの国ではまだ子供として扱われる年齢だと聞いている。
だったら、きちんと子供として扱ってあげなくてはいけない。

大丈夫。

これでも元・親です。

子供を扱うのは得意です……多分。

ええ、大丈夫……うんきつと……大丈夫……よね？

なんや、病院のあとからプレシアさん妙に張り切って世話焼いてくれるな。

石田先生からなんか言われたんやろか？

にしても今日はコウ兄はいつも以上に人使いが荒い。

普段はそれほどでもないけど、たまに色んなこと丸投げするんよね、あの人。

今日返す本やって、借りたんはコウ兄やのに用事があるいうし。

病院への付き添いかたプレシアさん連れてくのはいいけど、

プレシアさん“だけ”っていうのはないと思う。

返ってこっちの心臓に悪いわ。

ああ、今も頑張ってる押ししてくれるんは嬉しいけど、ちよつと乱暴やなあ……まあ初心者にしては上出来やけど。

「ハア…着きました…」

少しだけ息が上がってる。

急に若返った反動なせいか。

体力そのものは肉体年齢より落ちてしもってるらしい。

だからこそ外に出て身体を動かすことが必要らしいから

まあこれもプレシアさんのリハビリやと思おうか。

「じゃあ、返してこよ」

顔なじみの司書さんに返却して、それから図書館をぐるり。

うーん、めぼしいのはないなあ……それにすずかちゃんもアリサち

ゃんもおらんみたいや。

今日は習い事ない日のはずやから、おるかなあ、と思ったけど。

仕方がない。今日はプレシアさんのために地球のこと書いた本借りていこか。

ついでに外国の人向けの日本の常識を書いた本も。こういうのが一番ええんや。

ちよつと誇張気味なのがうーんやけど。

「わ、私の本よりはやてさんが読みたいのを借りたほうが…」

「あたしはもうたいがい読んでしもたからな……」

それにこういうの知つとかんとすぐに困るよ」

クロノくんやユーノくんの話によれば、
基本的なところはすごく日本と似ているらしいミッドチルダ。
やけどやっぱり違う所はあるしプレシアさんはそもそも引き籠もつと
ったからなあ。

それにシグナムたちの例もある。

暮らし始めたときはそこがすごく大変やったなあ……………。
おっといかん。遠い目してる場合ちゃう。

「さ、次は喫茶碧屋や」

「はい、えっと……………確かこっちですよ？」

「残念、こっちや」

「はっ！」

思いつきり逆方向を指差しとる。真っ赤になって可愛いなあ。

「……………にしてもコウ兄もあそのケーキ買ってくれるんはいいけど、
検査のついでに取りに行かせるなんてほんま人使い荒いで」

プレシアさんに押されながら今度は碧屋へと向かう。

まあ桃子さんのケーキは美味しいから、食べれるんならこれくらい
ええんやけど。

なんか釈然とせんもんがある。

「そうですね……………今日は珍しくいろいろと頼まりましたね……………
やはり私の紹介がてら、なんででしょうか？」

「そうやね。なんやかんやで結局なのはちゃん以外にはちゃんと説
明できてへんかったからな……………」

あの日。フェイトちゃんと友達になったあの日にバレたプレシアさんの存在。

コウ兄があたしたちにしたんと同じ説明をなのはちゃんにもしたけどなのはちゃんにはあたし以上にフェイトちゃん派やったから

最初はすっごい複雑な顔で見とったけど、いつもの無限土下座で本気で謝り続ける姿を見て

色んな気持ちがどっか行ってもたんやろな。ある意味有効やな、あの土下座。

それからわりと友好的なお付き合いや。

ただ、まだその存在をフェイトちゃんに隠しておきたいから、その点で出来たばかりの友達に隠し事させてまうんはこっちとしても心苦しいけど。

ちなみに。

「あ、はい、いらっしやいはやてちゃん。ご予約のケーキ出来てますよ」

「それでその人がコウキくんが言ってた人？」

「はい、そうです。紹介します……」

事件とか魔法とかいえない人たちにはどういう関係と説明しとるかいうと。

名前を『プレシア・ヒノ』に改名した時点で分かると思うけど、コウ兄の遠縁の親戚ってことにしたんや。

一緒に住むことになったんは突然、天涯孤独になって他に頼る人がいなかった。

っていう微妙に間違っではない理由付けをコウ兄がしました。相変わらずの口八丁。そのうえもう根回し済み。

いい配慮やと思うけど、だったらこれも想像してほしかった。

「その節は娘さんに大変なご迷惑を!!!」

桃子さんと土郎さんがなのはちゃんの両親やと知ったプレシアさんを止めるんが大変やった。

もういつも以上に血の気が引いた顔でガンガン頭下げるから見てた人みんな引いとったよ。

その後なんとか場を誤魔化すのがすごく大変やった。

あれ、そういえばなのはちゃんおらへんな？

今日はお店の手伝いする日やって聞いたとったんやけど？

「……………はあ、なんやろか。」

やっと帰ってきたって感じるわ……………」

多分原因は碧屋での騒動、というかプレシアさん……………じゃないという事にしよう。

かなり大き目の（たぶんホールサイズ？）を膝に乗せる形で運んでいたからや。

借りた本は車椅子の後ろに入れてプレシアさんは押す役をこれだけでも、と頑張った。

うん、力みすぎて逆にこつちが不安なる操縦やったけど心は伝わったで！

つてことにしてあげて、ねえ、ホンマに。

ケーキだつて開けてへんけど崩れてないはずやし。

「ただいまあ！」

「ただいま戻りました」

玄関入つての第一声に最初に応えたんは何故かまだ出かけているはずの Kouji やつた。

「おう、お帰り。悪かったな、いろいろ頼んで」

「う、うん。それはええけど、どしたん？」

「まだ帰ってくる時間やないんやない？」

「まあ、それはな」

なんて誤魔化して答えず Kouji はケーキの箱を受け取ると後から出てきたザフィーラに渡した。

ザフィーラは挨拶もそこそこに箱を持ってリビングに戻ってしまった。

なにか変やな、と感じながら車椅子のタイヤを拭いてもらって家にかかる。

「ところでみんなは？ まだ帰ってへんの？」

ただいまといつて返ってきた声が Kouji だけ。

というのが実は初めての状況で少し変な感じや。

「ああ、ちゃんといるぞ………“みんな”」

なんや妙な言い回しに何か違和感を覚えたけど、それを確認するより早くあたしの車椅子を押してコウ兄はリビングに入った。

途端

クラツカーの音に歓迎された

「へ？」

はやては間の抜けた声をもらしながら驚いて、目をパチクリ。

そこには確かにコウキの告げたように“みんな”がいた。

守護騎士たちは当然、高町なのは、アリサ・バニングス、月村すずかの三名。

そして一同が集まるリビングは色とりどりの飾りでデコレーションされていた。

「え、なんや、なんやこれ？」

何が起こったのか、というより何をしているのかを

はやてには珍しくすぐには理解できなくて思わず兄の問いかける、彼は黙って正面を指差すと、準備しているシグナムとシャマルを示した。

「じゃじゃーんっ!」

そしてシャマルの掛け声で“それ”を広げる。

『八神はやて 誕生日おめでとう!』

お手製の横断幕のようなそれにでかかど書かれた文字が、他にどう受取り用のないはつきりとした意味を告げていた。

「……はい?」

それでも。

はやてはまだ理解しきれず兄の口癖さえ使ってしまう。

「誕生日おめでとう、はやてちゃん」

「はやてちゃん、おめでとう」

「おめでとう、はやて!」

「あ…え…?」

まだ困惑し今日が自分の誕生日だという認識を持ってないはやては続々とかけられる言葉に、けれどちゃんと返せない。

これには二つ。

仕方がない事情があった。

そもそもはやてが家族を失い、足に重傷を負った事故は誕生日の数日前のこと。

突然一人ぼっちになった少女が病床でその事実を認識したのが自分の誕生日だったのだ。

その後、コウキとの生活が始まったのがすでにその年の誕生日を過ぎたあと。

初めて出来た同居人への接し方に右往左往していた当時のコウキは誕生日のことまで気が回らず、気付いた時には二度誕生日を過ぎたあとだった。

「……まったく、その様子だと本当に自分の誕生日忘れてたのね」

呆れた様子のアリサはビシッとはやてを指さして言い放つ。

「でも、今日は間違いなくあなたの誕生日なのよ！」

忘れていようがなんだろうがそれは変わらないんだから、めいっばい楽しめばいいのよー！」

「アリサちゃんそれちょっと無理やりだよお……」

事情はすでに聞いていたが、アリサはそんなものは関係ないと断言する。

少し強引な言い方にすずかは苦笑いだが。

「ふふ……」

だけどそれでようやくはやては妙に強張っていた身体から力を抜け

た。
知らず知らず誕生日という日を避けていた理由を目の前の友達が吹き飛ばしてしまった。

「そやね、楽しみな損やもんな…」

そうよ。と得意げに胸を張って頷くアリサにはやてはさらに笑みを深くする。

コウキはそれを見て手にしていたリモコンを操作する。

『……はやて、誕生日おめでとう…』

「え……フェイトちゃん？」

画面に現れた金色の髪の少女は別れたあの日より元気そうな顔を見せていた。

その髪はなのはからもらった白いリボンで結われ、はやての赤い髪留めがつけてあった。

ちなみになのはフェイトのリボンで髪の毛を結んでいるが、そこまでの長さがないはやては腕に巻いていつも身に着けている。

「ああ、ちょっと前に教えたんだ。そしたら今日届いた」

どこかしてやったりな顔に、今回はかりはやても文句がいえなかった。

『……もっといい物プレゼントできたら良かったんだけど、

今は遠くにいるし時間もなくてそんなのしかできなくてごめんね』

「…ほい、フェイトからだ」

手渡された包装された小さな贈り物。

リボンを解いて開いてみるとそこにあっただのは可愛らしいハンカチ。そして

「うふふ……いやいやフェイトちゃん。いいセンスしとるよ」

それぞれの四隅に小さくデフォルメされた守護獣形態の騎士たちの刺繍。

手作りなのが丸わकारいの少し崩れている所もあつたけれど、はやてはそんなことよりこれを一生懸命あの少女が自分を想って作ってくれたのが嬉しかった。

『……まだこつちでのことが落ち着かないから、

そつちに行けるのは多分まだまだ先のことだろうけど、

来年の今日には一緒に、そこで、みんなでおめでとぅって言いたいです』

じゃあまた。と少し照れた風に告げて映像は終わった。

「よし、じゃあ次はわたしからのプレゼントよ。

このアリサ・バニングスが厳選した子犬のぬいぐるみセット、ど
うよー!」

「うわあ、みんな可愛いなあ。さすがアリサちゃんや」

「次は私ね。これ、はやてちゃんが前から読みたいって言った本」

「え、あの絶版したの見つけてきてくれたん!？」

「うん、たまたま見つけてね……」

「ありがとうな、ふたりとも……」

「次は私だよ、えつとねえ……」

プレゼントが続々と渡されるなか、
この話の流れに乗って行けてない人物が約一名。

「……………」

未だにリビングの入口で固まっている彼女にコウキは恐る恐る声をかけた。

「……………プレシア？」

「はっ、ちよっ、コウキ！」

私、今日がはやてさんの誕生日だなんて聞いてませんよ！」

「うん、教えてないからな」

「な、何ですか！？」

知っていたなら私だってなにかプレゼントを……………」

「いや、お前からのプレゼントはちゃんとあるぞ」

え、と戸惑うプレシアを連れてテーブルへ。

そこには各種料理や飲み物。はやてたちが持ってきたケーキがすで

に並べられていた。
そのラインナップを見てプレシアはその意図に気付いて愕然とする。
色んな意味で。

「はやて、今度はプレシアからだ。」

ここにある料理のほとんどはこいつが作ったんだ。遠慮なく食べ」

「そうなん？」

「ありがとな、プレシアさん」

「あ、あ……いえ、たいしたものではないですが……」

などと恐縮しながらも彼女は昨晚、コウキから明日の食事の準備を頼まれて

彼に言われるがままあの料理の数々を作ったことを思い出していた。

（ああつ、わたしは馬鹿ですか。

料理の種類でパーティかなにかだつて分かるでしょうに！！）

妙に信頼を置きすぎたことと居候の負い目からか。

彼女は言われたことを疑いもせず、深く考えずに料理を準備していたのだつた。

「さて、次は俺の順番だが……」

見れば、すでにはやては持ちきれない数のプレゼントを抱えていた。

「それだけあれば別にいいか……」

「えええつ！？」

かすかに期待に瞳を輝かせていたはやてが盛大にずっこける。普段なら絶対に真に受けない軽口をまともに受け取ってしまうあたり、はやてが戸惑いながらもみんなからのプレゼントとお祝いの言葉に嬉しさや照れが止まらなくなっているのだろう。

「ほら、これが俺からだ」

だから真に受けて油断しきっていた彼女にすつと“それ”を着けた。

「ふえ……ペンダント？」

手早い動きでそれを首にかけたコウキはうんと頷く。

はやての首にかけられたそれは金色の剣十字のアクセサリ。闇の書の表紙に飾られたそれとどこか似ているデザインが印象的なペンダント。

「……………」

それを黙って見下ろしながらはやてはガラス細工でも扱うように慎重に、

それでいて、そこにあることを確かめるようにしっかりとその指で触れた。

「お前が好きそうな感じだと思ったんだが……違ったか？」

それまでと違った静かな反応にコウキも少し不安になる。

だが、はやては黙ったままキュッとペンダントを握りしめながら首を左右に振った。

「……………あ、ありがとう……………なんや、すごい嬉しい…っ！」

そしてようやく絞り出すような声でお礼を口にしようとしたが、途中から自らの涙で続けられなくなってしまう。

「ああもっつ、今日の主役が泣かないの！」

「うっ、ごめんアリサちゃん…でもなんか止まらんくてっ……………」

（おかしいな、いつもやったら我慢できるのに……………あかんわほんま……………）

みんなからの心のこもった贈り物が胸に溢れて抱えきれない。

それでもギリギリの所で保っていたものがコウキのプレゼントで一気に崩壊する。

闇の書を初めて見た時に一度「きれいな飾り」と言っただけだったのに、

それを今日まで覚えていてくれたのがどうしようもなく嬉しくてたまらない。

「…ホンマにありがとうな、コウ兄。これ一生の宝物にする！」

「そういつてもらうと苦労したかいがあったよ…」

（借りを作りたくない相手に借りを作って“組み立てた”からな…）

溢れ出す涙をシャマルに拭ってもらい、

何とか自分を立て直したはやてに優しい笑みを向けて応えるコウキ。

「さて、プレゼントの贈呈が終わったところではあとはパァッと騒ぐわよー！」

「ふふ、そうやね。」

作ってくれたプレシアさんに感謝しつつ、今日は食べるでえっ！」
アリサが盛り上げ兼進行役となつて、
初めての誕生パーティーは盛大に盛り上がっていった。

6月4日 PM 09:23

海鳴市 中丘町 日野家・キッチン

「今日は本当に驚きました……せめて事前に教えておいてほしかったです」

パーティーがお開きになり後片付けをしていたコウキに
同じく後片付けをしていたプレシアが小さく文句をいう。

ちなみにすずかはシグナムが、アリサはシャマルが、なのははザフイーラが家に送り
はしゃぎ過ぎて疲れて眠ってしまったたはやてにはヴィータがついて
いた。

「うーん、でもなあ…お前にいったら顔に出まくってバレそうだったからなあ……」

「あつっ、それは……」

そういわれると反論できないプレシアである。

ここでの生活が始まってもう半月近いが彼女が顔に出やすいことは
知れ渡っている。

「あ…でもどうして急にサプライズで祝おうと思ったのですか？」

話を変える目的の言葉に一瞬胡乱げな顔をするコウキだがすぐに答
えた。

「……あいつが完璧に忘れてるのに気付いたからかな。

事前にいったら遠慮もするだろうし」

だから知られない所で準備をしてサプライズパーティーという形にし
たんだという。

驚かせて有無を言わずに祝ってしまおうということらしい。

(自分の誕生日を忘れてしまうなんていったい……え、ということ
とは?)

「もしかして、あなたの誕生日も祝ってなかったのでは？」

「……あつ……」

そこで初めてコウキは明らかに、しまった、という顔で目を泳がした。

いくらはやてが誕生日を忘れていても、彼の誕生日をきちんと祝っていたなら

彼女の誕生日を祝わないことなどふたりの性格を考えればあり得ないことだ。

「祝ってなかったんですね……」

だからこそ、その態度はそれだけで答えを告げていた。

その証拠のようにコウキは力なく頷く。

ふたりは知らぬことだが、はやては実は彼の誕生日を祝おうとしていた。

だが去年はその日にヴォルケンリッターが目覚めたために有耶無耶になってしまったのだ。

「いやな、そこまで気が回らなかったんだ。

年下の女の子を預かるってだけでまだ手一杯で、余裕もなくて…

…」

何か言い訳しなくてはいけないような雰囲気思わずそういうが、プレシアはそれをはっきりと両断した。

「それでその女の子の誕生日祝うこと忘れたら本末転倒でしょう」

「ああ……返す言葉もない……」

正論すぎる正論にコウキはがっくりと肩を落として白旗をあげるしかない。

そこはやはりしっかりしていても子供なコウキと、今は少し頼りないが

過去には母一人子一人で働きに出たことのあるプレシアとの単純な経験の差だ。

『親代わりになってほしいなんて無茶をいうつもりはありません。けれどあの子達をどうか“子ども扱い”してはくれませんか？』

だからこそプレシアは石田医師の言葉が脳裏に甦った。

ああ、そういうことなのか。と彼女が頼んだ本当の意味を察した。

(……………ひとりで、頑張ってきたのね…)

自分と方向は違ったとはいえその孤独は体験した者にしかわからない。

子供なのに子供扱いされないままひとりで頑張るしかなかった。

普通なら気付くことに気付けないほど頑張っていた。

そんな彼に、一番必要なことはなんだろうか？

「……………えらかったわね…」

そう思った時にはプレシアの手は彼の頭を撫でていた。

突然のことにされた方は茫然とした顔でされるがまま。

「うん、あなたはえらい…」

(私に彼が背負ってきたものを軽くすることはできないけれど、背負って頑張ったことを褒めるぐらいはできる…)

「あ、あの…えっと、プレシアさん？」

線の細い女性の手で優しく撫でられ、脈絡なく偉いと褒められる。訳がわからない状況ではあったのだが不思議とそれを引きはがそうとは思えない。

コウキはその不思議な感覚に戸惑いながら撫で続けるプレシアを見る。

「……………」

今まで見たどんな顔より穏やかで、柔らかな微笑に息をのむ。まるでそれは母親が子を慈しむそのように暖かく美しい。

「……………きっと亡くなったご両親もあなたを自慢に思ってくれているわ」

「……………そう、かな？」

一度そう思ってしまったら、もう目が合わせられなかった。掛け値なしの賞賛の言葉にはこそばゆいものを感じてしまう。だけどコウキは撫でるその手を照れくさそうながらも受け入れていく。

(……………あ、そうか……………これが彼の『男の子』の顔なんだ……………)

頬をわずかに朱に染めながらほのかに笑ってプレシアの手を受け入れた姿は

15歳の少年としては確かに幼すぎるが、これはこれでいいと彼女は思った。

彼のこんなところを引き出して育てるのはきつと自分の役目なのだ

るう。と。

(……………それに、なんかすごく可愛い……………)

まるで幼子が母親に褒められて喜んでいるような顔に

保護欲と母性を際限なく刺激されたプレシアは以後かなりの長期にわたって

なにかにつけて彼の頭を撫でる癖が消えなかったが、それはまた別の話だ。

「だから……………次のあなたの誕生日はしっかりと祝いましょう」

「……………はい……………」

そしてその状態だとコウキは彼女に逆らえなくなるという弱点が出来てしまったのだった。

疾風の日（後書き）

八神はやて誕生日記念投稿！！！！

リリなのキャラでは珍しく誕生日が明確に分かってるキャラなので
これは祝わなくては！！！！

日付的にもジュエルシード事件後でちょうどいいしな！！

とか思ってた書いていたのに、

何故に最後はプレシアさんの単独勝利みたいな状態に！？

まあ、やったのは俺ですが（笑）

そしてこのあともプレシアさん無双なのです。

次はそうではないのですが9話は全体的にそんな感じな気がする。

魔導書の罪（前書き）

前話の裏話……に見せかけた彼女のお話。
これからこれぐらい短いのが続きます。

6月4日 ???????:???

??????:???

「……………本当に、こんなんでいいのか?」

俺達しかいないこの空間で、俺は唯一の相手に疑問を投げかける。

「はい、とても」

だが返ってきたのは穏やかな声と嬉しそうな微笑み。

そういわれてしまうとこっちはもう言うことなどない。

おとなしくされるがまま、である。

「……………しかしなんで……………膝枕?」

そう俺はいつかのようにまたこいつの膝枕を堪能させてもらって

る。

うん、どう考えてもこれ俺が役得なだけじゃないか？

「いいえ、これだけで私はすごく幸せな気持ちになれます……お分
かりになるはずですが？」

手に取るように分かる。

というのが、これほど困ることもないだろう。

ああ、これ以上ないほどの幸福感にこっちがおかしくなりそうだ。

「この感触と主の重み……癖になりそうです……」

だから、そんな嬉しそくに笑うなよ。

本当に癖になりそうだ。むろん、俺が。

さて。

なんでここで膝枕されることになったかといえば、少しだけ時間は
戻る。

「主はやてに喜んでもらえてよかったです」

「ああ、お前にいろいろ教えてもらったおかげだ……」

眠りについた俺は意図的にこいつに会いに来た。

今回のことは彼女にはやてが自分の誕生日を忘れていることを教え

られたのが始まりだ。

それから色々とはやてに気付かれないようにあちこちへの根回しと準備は

時間がなかったこともあって大変だったが、あいつの笑顔と嬉し涙を見たら全部吹っ飛んだ。

「いえ、本当は主コウキが知らない主はやての事を教えるのはどうかと思っただのですが、

主コウキならきつと主はやてを喜ばしてくれると思っていました」

そういつてまるでこいつは我がことのように喜んで笑っている。

「期待に応えられたようで良かったよ」

今回のこれは当然はやてのためだったけど、

こいつにも喜んで欲しかったっていう気持ちが無かったといえは嘘だ。

彼女には世話になりっぱなしな上に泣かせっぱなし。

贈ると約束した名前だって、まだまだ決まりそうにない。

ここはいわば彼女と俺の精神世界みたいな所だから物を持ち込む事もできない。

俺はこいつにしてやれることがあまりにない

ずっとずっと俺を見守っていてくれたのに。

感謝の言葉なんて百万回告げたって足りないのに。

だってのに、あげれるものが、何もないのが悔しい。

「……………って、いいかげん慣れるよな俺……………そんなこと考えたら速攻

でバレるっつーの」

あんまりにもこいつが嬉しそうに笑ったせいで油断した。ほら、見る。そのせいで笑ってた顔が一気に泣き顔だ。

「い、いいえっ……ありがとうございます。

主にそこまで想っていたただけで、私はそれだけでっ……っ
「！」

ルビーのように真っ赤できれいな瞳から零れ落ちる涙に目を奪われる。

本当に、互いの頭の中が筒抜けっすっごいよな。

感極まって涙を流すこいつの嬉しさが100%伝わってきてなんかくすぐつたい。

というより無性に照れくさいものがある。

「ああもつつ泣き虫め……お前なら分かるだろ？」

俺は別にお前を泣かせたいわけじゃない。もっと笑ってるところを見てたいんだ……」

「はいつ、はいつ……っ！」

それは伝わっているけれど、それでも一度流れ出した涙は簡単には止まらない。

嬉しくて泣いているのは分かるがやっぱりそれでも、泣き顔より笑顔が見たいのは俺のワガママだろうか？

「だからじゃないが、何かしてほしいことはないか？」

「こじじゃ出来ることは少ないけど、お前が望むなら何でもするぞ」

なんとか指で涙をぬぐって、余計なことを考えないようにしながら問いかける。

それにこいつは少し考える素振りをしたが、瞬間的にそれが伝わる。え、なんでそこでさっきのプレシアとのやり取りが浮かぶんだ？

「私も、主を撫でてもいいでしょうか？」

「はい？」

「出来れば膝枕で」

「なぬっ!？」

というわけだ。

「主は時々誰かに説明してますが、誰に対して言っているのですか？」

おかしそうに訊ねながら要求通り俺の髪を撫でる。

ああもうっ嬉しそうな顔しやがって！ そんな顔されたら文句の一つも言えやしない。

そのうえ指使いからも、というより心に直接届く愛おしさに本当にどうにかなりそう。

なんとかする方法はないものか。このままなのは精神衛生上、大変よろしくないと思うんだが。

「……膝枕されるのはお好きはなはずですが？」

そこが筒抜けなのがよろしくないの!!

「まったく……ああ、好きだよ！」

太ももの感触とか温もりとか自分を預けてる感じとか、いろいろ好きですよ!!」

文句あるか！

っていうぐらいに勢いだがーっとカミングアウト。

既に知られてるからそんなもん無意味に等しいが叫ばなければこっちがやっつてられない。

「では、心行くまでご堪能ください。

不肖の身なれど、ご満足いただけているようですので……」

また反応に困ることを口にしゃがって、こいつは。

まあいいか。こうなったらもうどうとでもなれ、だ。

こいつ相手に格好付けたり見栄張ったり意地張ったりするのは『無駄』の一言だ。

「……じゃあ、お言葉に甘え……て……」

あれ、やべえ、疲れてんのか？

すげえ……眠……い……

「……………どうか良い眠りを……………良い夢を……………」

故意に主の眠りをいつもより深く誘った。

動揺し続けていた主に気付かれぬようにするのはそんなに難しいことではない。

普段より私の中を覗かないように細心の注意をなさってくれている主なら尚更。

穏やかな寝息をたてる姿を黙って見守る。

この夢の中の世界にてさらなる眠りにつく主がすぐに起きることはない。

あとどれだけこの寝顔を見守れるだろうか？

「っ……………」

知らず、また涙が零れ落ちる。

嬉しさから零れ落ちた先ほどのものとは意味の違う涙。

いつからだろうか。こんなに涙もろくなってしまったのは？

この主と初めて話をした時からのような気がする。

主の優しさと気遣いが嬉しくて、そしてその裏にある傷と寂しさが痛くて。

ああ、そうだ。だから私は泣いていたんだ。
あなたがあまりにも泣かないから。

「……ごめんなさい……ごめんなさい、ごめんなさい……」

だというのに口から出るのはそれを責める言葉ではなく嗚咽が混ざった謝罪。

ボロボロと零れ落ちる涙が主の顔を濡らす。

何を謝っているのだ私は？

理由が分からない？

そんなことはありえない。私は私の罪を知っている。

どれだけの主を死なせた？

どれだけの人々の命を啜ってきた？

どれだけの人生を狂わせてきた？

どれだけの悲劇を起こしてきた？

そんなことを後どれだけ続けるんだ私たちは！？

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……それでも……それなのにわたしはっ！」

知ってなお、わたしに手を伸ばしてくれたこの主を、
お前がいてくれてよかったと感謝までするこの少年を、
笑った顔が見たいといっけてくれるこの人を、
いつからか、プログラムに過ぎないわたしは

「愛しています……もう遠くない日にあなたを殺す私が……」

あなたを愛してしまいました」

それがわたしの最大の罪。

この想いが、主に気付かれてないわけがない。

私たちの精神はあまりに深く繋がりすぎている。

いくら隠そうとしても、無理だった。

さっきの一時の幸福感ですら隠せないのに、

常に私の胸を支配するこの想いが届いていないわけがない。

そして主はそんな気持ちを向けてくれる相手を無下に扱える人ではない。

この人が考えている計画には危ない点がいくつもある。

そしてそれを実行する最大の問題が私だ。

私さえいなければもっと早くにこの人は救われていた。騎士たちも！

だけど、私の存在を知り想いに気付かれた主が私を見捨てられるわけがない。

「……ひどい女です……私はそれが嬉しくてたまらない。

あなたを苦しませるのに、主はやてや騎士たちも悲しませるのに……」

私を失いたくないと、こんなにも、こんなにも強く思ってくれている。

それだけで良かったはずだ。こんな私にはそれだけで過ぎた贈り物だ。

なのに、私は“もっと”と思っている。

もっと一緒にいたい。もっと思われていたい。

この人にもっと、愛されたい、と

「…そんな卑しい恥知らずな女なのです私は……だからどうか私を見捨ててください」

そんなことが直接いえたらどれだけ楽か。

けれど本当に口にしたら終わりだ。

主はそれこそどんな手段を使っても私も助けようとするだろう。そういう人なんだ。

これ以上の無茶をさせられない。してほしくない。

運命よ、神よ、悪魔よ。

何だっていい。私ならどんな代償でも払う。

命を渡せというならいくらでも奪え。

永遠にひとりで闇に彷徨えというなら喜んで。

何を失おうとも、どんな責め苦に合おうとも、私は甘んじて受け入れる。

だからどうかお願いだ。

この人を死なせないで！

「私は……この人を殺したくないっ！！」

意味の無い祈り。

意味の無い慟哭。

それでも吐き出さなくては、この声が主に届いてしまう。

「……………誰か……………この人を助けてっ!」

誰にも聞かれることのない叫び。

誰にも聞かれてはならない叫びを今日も叫ぶ。

私はいつまでこんなことを続けるのだろうか？

いや、違う。

いつまで“続けられる”のだろうか？

闇の書の主・日野コウキ。

未だ名も無き闇の書の管制人格。

彼らとその運命の日から逃れるすべはない。

そしてその日はもうそこまで迫ってきている。

それまで、優しい魔道書の涙と叫びは今日もまた止まらな

魔導書の罪（後書き）

負けられない戦い、だと思ってるのは彼女だけ(前書き)

前の話とテンションが違いすぎるけど、間違いじゃないですよ(笑)

負けられない戦い、だと思ってるのは彼女だけ

ああ、大変！

お寝坊しちゃった。

今日は久しぶりにコウキちゃんとの一緒に朝食準備なのに！
急いで着替えて、ああでもこれいつものだし。

ああ髪が毛ボサボサッ！

やだ、どうしよう。でもこれ以上遅れると作る時間が！

ええい、ままよー！

「ごめんなさいっ、うっかり目覚、ま、し……………」

かけるのを忘れて、と続けようとした言葉が、続かない。

「お、シャルが寝坊とは珍しいな。ああ、でもたいてい終わっちゃったな」

もう朝食の準備を終えていたことなんて、この際どうでもいい。
寝坊して間に合わなかったのは私のミス。それは反省しましょう。

でも、でもよっ。

「なんであなたが一緒にやってるのよプレシア!？」

「え、え…いけなかった…いけなかったのですか!？」

「ああっすいません! 私ごときが迷惑にも朝食つくって申し訳ありません!！」

「え、ええ!？」

「そんなに責めてないわよ、私!

「なんでそんな床に頭をぶつけるような勢いで土下座してるのぉっ! !??」

「……………シヤマルうっ!」

「はっ!」

「重く響く声に固まる。

「その声は、怒ってる。

「もう間違いないくらい怒ってる。

「俺、前に言ったよな。こいつまだ情緒不安定だから言葉には気を付ける、って」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい!」

「いやいや、謝りたいのこっちよ。

「むしろいま謝らないとコウキちゃんの顔が怖い!

「……………今日の家事当番、全部プレシアに変更…………」

「遅かった。」

「そ、そんなあっ!!」

今日一日の糧を、仕事を奪われてうなだれるその隣で
プレシアはずっと、頭を下げて謝っていた。なんで、こんなことに
い!

「はぁ……」

朝食後、ひとりリビングで小さくなる。

「どうせ私の料理は微妙ですよ……だ」

プレシアが手伝った料理は私のより評判で、その、美味しかった。
けどだからってシグナムなんか嬉しそうに「これでお前の役割が減
ったな」なんて言ってくれちゃって!

「ええ、分かってるわよ微妙だっただけのことぐらい。

でも家事はお料理の腕前だけではかれることじゃないわ!

ここは先輩の力量を見せつけ………られないんだっ……」

今日一日家事をすることを禁止されていたのを思い出す。

不用意な発言でプレシアを混乱させた罰で。それじゃ今日は家事が
できない。

それじゃあどうやって先輩の実力を見せつけてやれば……。

「っ、そうだわ。いくら元・子持ちの人妻っていったって元々研究者なうえにバツイチ！」

料理は上手だったけど他の家事がうまいとは限らない。それにどこか欠点もあるはず。

それに禁止されたのはあくまで家事を“すること”。監督しちやいけないわけじゃない。

「…ふふ、負けないわ。このヴォルケンリッターの参謀、湖の騎士シヤマルが

細部にわたるまでチェックしてあげる……新参者なんかは数少ない私のポジションやるものですか！」

「おお、シヤマルが燃えとる……」

「……すごい無駄に、が頭につきそうだけど……」

『あと最後の本音は口にしちゃダメだと思えます』

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

「プレシア、後片付けは終わったのかしら？」

またあの無限謝罪状態になったら困るので出来るだけ穏やかに、穏やかに。

「は、はい…みんな洗っておきました」

「ふーん…」

どれどれ？

ピカピカーン

え、なにこの輝き。

まぶしい、まぶしすぎる！

い、いいえまだよ。

いくらきれいに洗ったからって油分が残ってたら……

キュツキュツ

ああ、なんていい音。

特殊な洗剤なんて使ってないはずなのに響く音。

これじゃあ某大手のジョイくんも真っ青よ！？

「……すごいよね？」

「はい、家事をするのは久方ぶりですけど、なんとか覚えているものですね」

くっ、そんな柔らかい微笑には騙されないわ！

次は、次は、そう、この世すべてのママさんたちの重労働、洗濯よ！

・

・

・

「干しましたよ、シャマルさん」

「は、早いのね」

でもいくら早く干したって仕事が増えたと皺がついたり重なってたりするもの。

いいかげんな仕事でこのシャマルさんの目は誤魔化せないのよ！

「……すごい、ピンと張って皺ひとつない。

干し方は計算されつくしてあって一分の無駄もない……」

「昔は時間のない生活していたので…早く干すのが癖になってて…」

お恥ずかしいです。と小さく照れるプレシア。

「へ、へええ……」

ふ、ふん。そんな可愛い仕草したってダメなんだから！

次っ、次はお掃除よ！

きれいに掃除機かけるだけじゃ私は認めないわよ！

・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

サッ

昼ドラの姑さんのごとく指ですくう。

「……………ホコリひとつない……………」

小さなでっぱり。見落としがちな隙間。

意外な場所であまっていたホコリがきれいに掃除されていた。

「……………昔からやり始めると細かい所までやっちゃって中々終わらせられなくて……………」

時間がかかってすみません。なんていいながら窓拭き。

バケツで水をキュツと切って……………うそっそんなに汚れてたの!?

「……………」

い、いいえっ、まだよ!

まだ、終わってないわ!

確かに個々の出来栄では、ちょおおっと、負けてるけど主婦は総合力!

これまでの家事にかかった所要時間が無駄に長ければいくらすすぐても……

・・・

・・・

・・・

「はぁ……ひと仕事を終えて飲むお茶ってこんなに美味しかったんですね……」

「うん、そーなのよ。主婦業って大変だけど、

そういう楽しさがあるから何気にやめられないのよねえ……」

「はい、みなさんのお役に立っている気もしますし……」

「そう、そうなの。そこが一番うれしいのよ！」

って、違う！

なに一緒になっってお茶飲んでるの？

アンサー 「時間がすごく余ってたから」

うわあああああんっ！！！！（大号泣）

・・・

.....

.....

「あははは……あはは……はは……すごいなっ、すごいぜっ、万能主婦プレシア！」

「……けえどお……シャアマルさんはやっく、たたっずっっ、やっほ……」

「ああ……シャマルが壊れてもった……」

「………可哀想なぐらいの全敗だもんな」

『まさかプレシアにこれほどまでの家事スキルがあっただなんて……』

「シャマルさん、洗濯物取り込んでおきました」

わあ、さっすが超主婦級の家事万能マン、プレシア。

畳むのもすごいキレイ……シャマルさんは、どうせ……どうせ……イジジ。

「シャマルさん？」

「いいんよ、プレシアさん。」

今日はもう放っておいてあげてー！

「ああ、悪いがもうシャマルのHPはゼロだ」

『ついでもMPもゼロですね、あねは……』

「……………」

夜。

「今日一日シャルに監督されてどうだった？」

少し気になったので聞いてみた。

「え、はい。シャルさんはすごかったですよ。」

わたしはどうしてもきつちりやりすぎてしまっただけ

適度に力を抜いていて、そのうえ本当に楽しんで家事をなさってますから……」

それがきつと長続きの秘訣なのだとプレシアはわりと熱く語る。

かつて同じ主婦業をしていたこともあって、一番共感しやすいのかもしれない。

まあ、シャル本人は激しい敗北感で軽く壊れてしまったが。

「それに今日は一人で夕飯の買い物に出たんですが、シヤマルさんがいないので大変でした。

近所の奥さん方に捕まったりタイムセールの人の流れに負けてしまったり……

シヤマルさんがいる時はそんなことにはならなかったので……」

だから、すごい。と。

そういったことが苦手だから憧れるとプレシアは言った。

「そうか……」

シヤマルは思っていた以上に主婦やってたんだな。

プレシアもそれをちゃんと見てる。

周囲をきちんと見れるようになるのはいい傾向かな。

「でも、最後のほう元気がありませんでしたが、大丈夫なのでしょうか？」

「ああそれは……明日になれば、わかる」

「……………??」

「おっはよーございまあすっ！

今日も元気に張り切っていきましよう！」

「ほらな」

「……すごいです。私も見習いたいです……」

うん、そうだな。

ここまで極端になれとはいわないがお前の場合。

「ああっ、またプレシアに先越された！」

「え、あ、ああっっ、すっすいません勝手なことして……！」

「あ、だから無限土下座はやめてえっ……！」

本当にシャマルの立ち直りの早さだけはいいかげん学んでくれ。

負けられない戦い、だと思ってるのは彼女だけ（後書き）

このプレシアさんは強く言われるとびくびくして、
思わず意味なく謝ってしまうのです。

けど、以外に家事スキル高いことが判明（むろんここでのねつ造設定ですが）

たぶん、プレシアって絶対ギリギリまで人に頼らない人だと思うんだよね。

そのうえ才覚ある人だから一人で出来るようになった。頼らないっていうよりは頼れない。

だから頼らないようにするにはどうすべきかを先に考えてしまう人ってイメージだ。

けどシャマルの扱いひどいな（笑）

ギゴガコ堂さん（同人サークル）のシャマルにめちゃくちゃ影響受けた気がする。

でも、お前がいないと日野家は若干暗いぞ！
頑張れシャマル、お前がみんなを癒すのだ！

今後、そんな話を書く予定はないけどな。

それは圧倒的な戦力差で（前書き）

これ、大丈夫だよな？（いろんな意味で）

それは圧倒的な戦力差で

「ほわー……」

思わずそんな声が出てしまつぐらいそれは圧倒的やった。
戦力差でいうならこっちは武装局員が一人か二人くらいなのに
あつちは二大巨頭、いうなればフェイトちゃんとなのはちゃんがい
るみたいなもの。

勝てるわけないやん！

「あ、あの……なにか？」

「へっ？」

ああ、うん……スタイルいいなあとは思つとつたけど間近でみる
と余計にすごいわ……」

「えっ！？」

おおっ、その咄嗟に胸元隠す仕草はグーや！

脚がこんなな私がお風呂に入るんは少し大変や。

そんなドジせんけど万が一溺れるとあかんからって必ず大人と入るよ。ういわれとる。

最近コウ兄はずっと恥ずかしがって入ってくれへんけど。

だからもっぱらシグナムかシャマル、それにヴィータがプラスされたりしなかったり。

そんなメンバーでお風呂に入っとったんやけど、今日は初のプレシアさんとの入浴。

普段から服の上からでも分かる見事さやったけど。

この距離で見るとここまでの迫力やったとは！？

シャマルのがナイスな感じやとするんならシグナムのは羨ましい感じ。

だけどこれは、プレシアさんのはそれ以上かもしれん。

同性のあたしですら揉みしだきたくなる衝動を抑えられへん！

「……そ、そんなに見られるといくらなんでも恥ずかしいのですが」

その恥じらいが余計にそそる。

あかん。なんか我慢できへんかも。

「触っても、ええ？」

だからギリギリの所でそれだけでも聞いてみた。

いくらうちでも嫌がる人の胸を触ろうとは思わへん。

セクハラしたいわけやないんやから。

「えっ……ああ……うーん……す、少しなら……」

どんな葛藤があったのか。

分からへんけど承諾を得られたいじょうごつちのものや！
もうあたしは止まらへんで！

「じゃあ、えい！」

「あっ、い、いきなりそんなっ」

・・・

・・・

・・・

おおっ、おおっ、おおっ！……！
な、なんやこれえっ！？

あたしの小さな手では覆いきれないポリウムはシグナムといい勝負。
少し指を埋めると感じる弾力と柔らかさはシャマルにだって負けて

へん。

「えっ、あつだめっ！」

やけど、なんやこの手にずっしりくる重量感は……？

「ちょっとはやてさん揉むのは……やんっ！」

大きさと絶妙な柔らかさを維持しながらも見事な肌の貼り具合。揺れせば波打つ圧倒的な存在感。

「あんっ、こらっイタズラし……んっっ!」

おまけに感度もなかなか。

あかん。あたしそつちの分野に興味なかつたけど、
こんな立派なモンを目の前で揺らされたら（揺らしてるのあたしやけど）我慢できへん!

「あつ、だめですっそんなとこ触っちゃっ、あんっ!?!」

「ええやん、ええやん。同性同士なんやし……」

ずいぶん可愛い声で鳴くやないか。

ほら、ここか？

ここがええんかあ？

「あつ、やだ……どこでそんな揉み方っ……やあぁっ!」

よしっ!

このままならいける!!

バシントッ！！！！

そんな暴走状態のあたしに冷や水をぶっかけるように、
見事なツッコミの一撃が頭部に思いっきり叩き込まれた。

「い、痛っ！？ な、なんや！？」

思わぬ痛みに反射的に背後を振り返る。

ここにおけるんはプレシアさんとあたしだけやから誰かがいるわけが
なかった。

ましてやプレシアさんがついに力尽くで逃れようとしたわけでもな
い。

だから、その妙な光景はあたしを困惑させた。

「ハリセン？」

空中に厚紙で折られたお手製のハリセンが浮いていた。

より正確に表現するなら、それを掴んでいる手。それも手首以降の
ない手が。

代わりにあったのはミントグリーンの魔力光に包まれた鏡のような
もの。

そしてそこからハリセンを使った者と思われる人からの怒声が届い
た。

「風呂の中で何をやってるんだお前はっ！！！」

「ひゃあっ！？」

「っ！？」

それは浴室内ということに余計に反響して耳に痛い。さすがにびっくりしてしもた。というか、なんでコウ兄が？

「あ、これシャマルの旅の鏡？」

たしか対象地点にある物を“取り寄せる”魔法やったはず。これ使っている間、術者と対象地点にある鏡は繋がっているんや。それでハリセン持った手だけでこっちに出してあたしにツッコミ入れたわけか。

「風呂から変な声が聞こえるかと思ったら、プレシアに変なことしてんじゃねえ！！」

「ちょ、待ってや。何でそれであたしが何かしてることになるんや！？」

コウ兄の性格上風呂場内を覗いたなんてことはない。たぶん声だけ聴いて「なにかやっている」と勘付いただけのはずや。それでなんで問答無用であたしやと分かったんや！？

「……………お前が、女性の胸を見て我慢できるわけないだろ……………」

だから警戒だけはしていたんだ。とこの人は言った。

・・・

・・・

・・・

ああ、そうか。

コウ兄はあたしをそんな目で見たんか。

女の胸と見れば誰でも手を出す女の子やと。

冗談やない。これでも最低限のルールは守つとる。

事前に了解を得たり、人前では控えたり、恋人さんがおる人は遠慮したり。

何よりや！

あたしはあたしがキレイや、触りたいなあ。

と思った人にしかそんなことせえへんわ！！！！

ひどい。

ひどい屈辱や。

「……少し、お仕置きやね」

「え、ちよつ、待て！ バインドってお前なにをっっ！！！！??？」

「はやてさん!？」

鏡から突き出ている手首にチェーンバンドや。

さあ“こっち”に来てもらおうやないか？

魔法で作られた鎖を魔法の力で引つ張る。

「うっうわあっっ!?!??」

強引にこちら側に来させられたコウ兄が水しぶきあげて湯船にダイブする。

あたしはあらかじめプレシアさんに抱きつくようにしてスペース空けとったから問題なしや。

「ぶはっ! はやっ……はやてっ、てめえ何しやがる!？」

服ごとずぶ濡れのコウ兄だったけど、やっぱりわかっとなるな。

ここがお風呂で、そこにいるのがあたしただけやってことの意味に。

だからコウ兄はこっちを一度も見ようとしないであたしを怒鳴った。

いまきつと冷静になるうとタイルの枚数でも数えとるんやないかな？

後ろに裸の美少女と美女がおる状況はあかんよなあ？

うふふ、後ろからでも耳が真っ赤や!

でもな、コウ兄。お仕置きはこれで終わりやないで？

動揺しまくって油断しきつとるコウ兄の手にはまださっきのチェーンバンド。

さあ、コウ兄もこの見事なプレシアさんの肢体を存分に見るんや!!

「っ、えっ?」

発生地点の魔方陣が吸い取るようにチエーンを引く。
片手だけを突然引つ張られて振り向かされた姿勢で倒れていくコウ
兄。

あたしは飛行魔法でひょいと避ける。

すると、や。

湯船にはプレシアさんとコウ兄しかおらへんわけで。

コウ兄は彼女の方へ向かって倒れとるわけで。

そうなるど半ば反射的にコウ兄を抱きとめてしまっわけで。

「ぶぐっっ!!!???」

「あっ、大丈夫ですかコウキ?

はやてさん、いくらなんでも悪ふざけがすぎますよ!」

“しっかり” コウ兄を受け止めながらプレシアさんには叱られてし
もうた。

ただどな、プレシアさん?

そのコウ兄にトドメ差したんはあんたやで。

ああ、あんなに豊富な胸に顔を沈めて、役得やねえ……。

対するコウ兄は完璧に動きが止まっとる。

浴槽のふちでも掴もつとしていた手が空中で何も掴むことなく固ま
っている。

あれ、へたしたら呼吸も止まってへんかな?

なんかピクリともせん。
振り向かされた瞬間咄嗟に目つむったんはさすがやけど、
いま自分が“何に”顔を埋めているのか分からへんことはない。
だからこそピクリとも動かんのやろし。

けどそろそろ気付いてもええころかな？
なにか感触がおかしい。と。

「っ……………水着!？」

気付いて弾かれたように離れたコウ兄は間近でプレシアさんを見た。
その見事な肢体はきちんと水着を身にまとって、ただ見る分には問題なんてなかった。
もちろんあたしもきちんと水着きてるよ。
裸同士は恥ずかしいとプレシアさんがいうんで仕方なくな。

「はあ…びつくりした。なんだ水着を着てたの……………か？」

安心したのも束の間。

コウ兄の表情が固まる。

あはは、うん、いいねその顔。それが見たかったんよ。

「そ、そんな水着いったいどこで？」

「はやてさんと前に買い物に出たとき勧められたのですが……………なにか変ですか？」

地球で最初に着るならこの水着だと……………」

「はやてえっ！！！！」

当然といえば当然な怒号を軽く流してニコニコ笑う。

実はそうプレシアさんが着とるんはただの水着やない。

どんなのなんか説明する必要もないそれは名前をいうだけですべてが伝わる水着や。

ズバリ『スクール水着（大人サイズ用）』や！

しかもお風呂に入るから髪の毛上げとってうなじ見えとるんやで。かなりたまらんわ、これ。

「相手がこっちの常識知らないのをいいことにあることないことを吹き込みやがって！」

失敬やね。

やっぱりコウ兄の中でのあたしってそんな扱い？

まあ心当たりは二、三どころやないけど、それはあんまりやと思うんや。

だいいち。

「嘘はいうてへんよ。だいたいの子はこれを最初に着るやろ。」

それにいくらあたしでも人前に入る時はさすがに着させへんよ」

そや。

こんなすごい他の人に見せるなんてもったいない。

むしろコウ兄には見せてあげたんやから感謝してほしいわ。

「そついう問題かつ！！」

というかあんなのどこで買った!?

普通の店じゃ置いてないだろ!？」

「……はて、どこで買ったんやっただけ？」

と、とぼけてみせる。

わざとらしく目を泳がしてもみる。

「お前な…うわっ!？」

再びの怒号。

が来る前に、それはコウ兄の真上に落ちてきた。
音に例えるならそう

ざばーん

って感じで。

「大丈夫コウキちゃんはやてちゃん!？」

「主、ご無事で!？」

「はやて! コウキ!」

やってきたのはあたしらの騎士たち。

コウ兄が引つ張られて慌てて飛び込んできたんやな。

普通に脱衣所から来ればいいのにわざわざ旅の鏡を通ってくるなんて
そうとうに慌てとったんやね。愛されとるなあ。

けどな。そう心配してくれるのは嬉しいけど、

現在進行形でみんながコウ兄を無事じゃなくしていつとるで?」

「うわっ、コウキちゃん!？」

「主!？」

「なにやってんだシャマル、早くどけよ!」

そこまで狭くはないけど5人も入るとさすがに狭い浴槽。

しかも上から降ってくるように転移してきたシグナムたち。

端っこに寄っていたプレシアさんは無事やったけど真ん中にいたコウ兄は下敷きに。

かくしてコウ兄は再び浴槽に沈むことになったのであった。まる。

「ゴホッ、かはっ……ああ、ひどい目にあった……」

少しばかり飲み込んでしまったお湯を吐いて、なんとか落ち着いたコウキ。

それでもまだタイル張りの床に腰を下ろしてゼーハーしていたが。その周囲には囲むように浴槽からあがった騎士たちが自発的に正座していた。

「ご、ごめんなさいコウキちゃん……」

「またしてもこんな……なんたる不覚……」

「悪い、コウキ…いきなり消えちまって柄にもなく慌てちまって…」

しゅんとなつて気落ちして謝る彼女たちだがそこにあるのは純粹な心配の気持ち。

彼女たちからすればいきなりコウキが旅の鏡に吸い込まれるように消えたのだ。

慌てるな。というのが酷な話だろう。

「いや、うん。今度からはもう少し冷静に……っつ！？」

だからこそコウキも激しく責めることをしようとは思っていないかった。

いなかったのだが、ある事実気付いて思わず後ずさった。

「主？」

「コウキ？」

とはいえ一般的な浴室からは多少広くても所詮は一軒家の浴室。

浴槽にプレシアとはやてが再び入っていたとはいえ、

自分も含めて4人も座つていては逃げるスペースなどろくにあるわけもない。

しかも位置も悪かった。

さっさと浴室から出ればよかったのだが、

出入り口側に騎士たちが並んで座り、浴室にはプレシアとはやて。

コウキが座っていたのはその真ん中だった。

逃げ道がないとはまさにこのこと。

「ん、どうしたんコウ兄？」

そこへまるで何もかも分かっているような妹分の笑みとからかうような声。

(しまった……挟まれた！？)

気付いた時には既に遅し。

前門の虎、後門の狼どころではない状況にコウキは気を失って逃げたかった。

それほどまでにこの状況は彼の許容範囲を超えたものが“見え過ぎて”いた。

「主、どうしたのです？」

「コウキちゃん、そんな急に動いちゃだめですよ」

「……のぼせたみたいな顔して、大丈夫か？」

容体を気遣う態度だけなら何の問題もなかった。

ただ、彼女たちはそもそもリビングで普通にくつろいでいたのである。

そこから慌てて風呂場に飛び込んだわけだから格好は私服だ。しかもわりと軽装。

そして全員が浴槽に飛び込んだわけですぶ濡れな状態。

そうなれば当然の帰結としてコウキの目の前の光景は想像できるだろう。

お湯に濡れて、肌張り付き透けてしまっている衣服。

それによってあらわになる魅力的な肢体とまだまだ幼い身体のライン。

ぱたぱたと髪の毛から滴り落ちる水滴。

風呂場の暑さからくる火照りの色がまるで違う意味に見えてしまう

錯覚。

そんな状態の彼女たちが半ば四つん這いで自分のにじり寄ってくる。

そんな位置から後ずされば当然浴槽のふちに激突する。

逃げ道がない彼が次にするのは視線を外して見ないことだ。

だが思わず振り向いた先にいたはやては意味ありげな笑みを浮かべる。

そしてプレシアは心配そうに彼の顔を覗き込んだ。

「…大丈夫ですか？」

たゆん

そんな音が聞こえた気がした。

「…つつつ!？」

その凶悪な兵器の存在にのぼせ上ったような顔がさらに真っ赤になる。

そこで初めて、はやて以外の全員がその水着の恐ろしさに気付いた。プレシアが着てるスクール水着はたしかに大人サイズである。

だが彼女ほどのスタイルの女性が着ることを考えられたサイズとは思えない。

つまりは、サイズが小さい。つまりは、パツンパツン、なのである。

とくに豊満なそれは今にも零れ落ちそうで屈んただけで存在感を訴えるように揺れたばかりか

その谷間を惜し気もなく彼に見せつける格好になっていた。

「な、なんて破廉恥な……」

「う、こ、こんなのにどうやって勝てっというの……?」

「ああ………すげえ………」

三者三様に“それ”への感想を述べて固まる中。

「その水着選んだんな、コウ兄やで」

はやての爆弾がさく裂する。

「え?」

「はっ、はやてなにを!?!」

事実を知るプレシアは少しだけ不思議そうに。

その意図に気付いたコウキは温かいはずの風呂場で寒気を覚えた。

ジャリン

鉄と鉄がこすれるような音。

はつきり言えば鎖がこすれるような音が風呂場に響く。

それは彼女たちいつも持ち歩いている“モノ”についている鎖。

「いくら主コウキといえど何も知らない彼女にそのようなものをっ

………恥を知らなさい!」

「へえ………コウキって意外にマニアックな趣味だったんだな………ちよっと悲しいよ」

「言ってくれれば私が、この私がいくらでも着るのに……やっぱり大ききなのね!!」

それぞれが細い鎖に繋がれた待機状態のデバイスを取り出していた。むろん一緒に水没していたがその程度でどうにかなる彼女たちの相棒ではなかった。

「レヴァンティン！」

「グラーファイゼン！」

「クラールヴィント！」

『ジャ.』

いつものようにその呼びかけに応えた愛機たちだったが、このような場面で使われてしまうのは正直どうなのだろうか？

「いや待てっ！ 落ち着けおまえらっ！」

「『』 問答無用っ!!」

「うわあああああつっ!!!!??」

三者三様の魔力がコウキ目掛けて叩きつけられた。

はやてはちゃっかり自分とプレシアを覆う結界で防いでいたので無

事だったが。

もったも、その後しばらく風呂場が使い物にならなくなったのはいうまでもない。

「……そろそろか……」

ひとりリビングに残っていたザフィーラはその叫びに腰を上げて用意していたタオルと着替えを脱衣所に運び、即座にリビングに戻る。

着替えといっても女性陣のそれらに触れるわけにいかないのですべてコウキの衣類だった。

大人たちには自分のを用意したほうがサイズ的にはいいとは思ったが、

コウキの衣類を用意したほうが喜ばれるだろうとの配慮である。

実際、しばらくして脱衣所から出てきた女性陣は

色んな意味でサイズが合っていない男物の衣類をその感触や温もり、匂いを存分に味わうように素肌の上から直接着ていた。

無論それは下着でさえ濡れてしまったからなのだが着替えを準備していたはずの

プレシアやはやてでさえそうしているのだから、

単純に“そうしたかった”という想いが先立っていたのはいうまで

もない。

もちろんそこには“きつとそうなるだろう”と、はやてやプレシアの分まで

コウキの衣類を用意したザフィーラの気遣いあつてのことだ。

だからこそはやては小さく彼にだけサムズアップを見せザフィーラは声なく頷いた。

結局のところ今回の騒動を起こしたのも最も利益を得たのも八神はやてだったのである。

そうして、おそらく着替えの関係で最後に出てきたコウキは

サイズ違いの自分の衣服を直接素肌の上から着てる彼女たちを見たのがトドメとなって轟沈した。

そして皆がさらに着替えてくるまでまともに見ることもなく部屋の隅で小さくなっていたのだった。

ちなみに、この時彼女たちに貸した形になった衣服が戻ってきたさい、

女性陣の残り香があるそれらを前にそのまま着るべきか否か、消えるまで洗濯すべきか否か。

を、真剣に苦悩するコウキの姿があつたことを伝えておく。

それは圧倒的な戦力差で（後書き）

おっばいマイスターはやて、本領発揮！！

そしてその鍛え上げられた戦術眼と腹黒さは

今日もコウキをからかうことのみに使われている！

なんていう才能の無駄遣い（笑）

ちなみにプレシアさんの格好は当初もつとすごかった。

けど、こっちのほうがみなさんが想像しやすいかと。

え、ババア無理すんなって？

馬鹿いうな「それがいいんだよ！！」（by俺）

参戦、しちゃったじゃない！

「ねえ、アリサ…いま好きな男の子いる？」

ママは私が小学三年生になったあたりから時々そんなことを聞いてくる。

どうもママは早く娘の恋愛相談を受けたくて仕方がないらしい。

両親そろって会社経営の仕事についていることもあって

あまり家族の時間を作れていないことも理由の一つであるんだろうけど。

それにしたってみんなが揃ってる時に聞いてくるから興味無さげを装うパパの表情が硬い。

だけど残念ながら、ママを喜ばせることはできそうにない。パパは喜びそうだけど。

「いないわよ。男子なんて馬鹿ばかりだし……」

勉強ができない。

という意味だけではなく、くだらないことに熱狂して

学校でふざけたりレディの扱いがなっていないのを見てると同い年なのが恥ずかしい。

もちろんまだまだ子供なのだからそれが当然なのは分かるけれど、そんな相手に『好き』という感情を抱くのは正直よくわからない。

女の子として恋愛に興味がないわけじゃないけど、したいと思える
相手がいない。
それになのはやすずかと一緒にいる方が楽しいのだから当分自分
は関係ない。

そう、高を括っていた

「なあいいだろバニングス。一緒に遊ぼうぜ」

男子ってどうしてこう馬鹿なのかしら？

「ああもつっ、しつこいわね！ 嫌だっけっててるでしょ！」

「別にいいじゃん……ほら、新作買ったんだ。一緒にやろうよ」

訂正。

馬鹿じゃなかった。もう愚か者よ！

これなら言葉が通じないワンちゃんたちの方が私を楽しませてくれるわ！

日曜日。ひとりで街を私は歩いてた。

なのはが喫茶翠屋の手伝い。すずかもお家の用事。

そのうえ習い事や塾も今日は見事に全部なくて、さて今日はどうしようっか？

なんてことを考えながら歩いていたらこいつに捕まった。

名前は記憶にないが顔は何度か廊下で見た覚えがある。

ようするに違うクラスの知らない男子。なんでそんな奴と遊ばなくてはいけないのか。

こっちが何度もはつきりと断つてもしつこく意に介した風もなく誘い続けて、

そのうえ話題のゲームを見せればついてくると考えている浅すぎる考え。

もう『男子は馬鹿』とかいう以前の問題。

「いい、よく聞きなさい！

相手の好きな物を用意した考えは悪くないけど、

そもそも私とあなたは友達どころかクラスメイトですらないの。

私だって同じ学校に通っている子とは仲良くやっていきたいけどその順序を理解できていない奴と誰が遊ぶもんですか！」

常日頃からはつきりものをいう私だけど、

正直ここまで相手を拒絶したのは生まれて初めてかもしれない。

というほどに私はきっぱり、はつきり、そいつにその言葉を指と一緒に突きつけた。

「なっ、なんだよ……いいじゃんか遊ぶくらい、ケチ！」

ようやくこつちが嫌がっていることを分かったようだけと言つに事欠いて、ケチ！？

このアリサ・バニングス。生まれてこのかたそんな侮辱のされ方はなかったわ。

「ケチとはなによ！ あんたがバカすぎるだけでしょうが！！」

「う、うるさい！ バカつて言った奴がバカなんだっ、この！」

振り返つてみると、私も確かにそこそこバカだったな、とは思ふよ。

感情に走つてこつち奴を罵倒するとどうなるかなんて単純なのに。

「なにすんのよ！」

「そつちこそ！」

突き飛ばすみたいに肩を叩かれたから思わず仕返しと同じことをした。

するとまたそいつは怒つて私の髪の毛を掴んできた。

「いたっ、レディの髪を掴むなんてホント最低！」

「そんなのお前が悪いんだぞ！！」

はあ、何でそうなるのよ！？

反射的にそう言い返すより前に、突然掴まれていた手が弾かれた。

「痛っ！」

かなり強めに弾かれたせいかそいつは痛がっていたけれど私は正直気にもならなかった。

それよりも弾いてくれた“彼”の登場にびっくり半分、残りは……何かむず痒くてよくわからない。

「おいつ、髪は女の命だぞ。」

そんなことも知らないで女の子を誘おうなんて10年早い！」

こっちに背中を向けて庇うように立っていた彼は上から見下ろす形で男子を叱りつけた。

完璧に迫力負けしたそいつはけど生意気にも即座に言い返す。が。

「な、なんだよ。お前にはかんけ

「コウキ？」

ようやくそこで彼を認識できた私の呟きがそれを何故か止めた。

きつと、関係ない。とでも言いたかったのだろう。

しかし私と彼は知り合いだ。いや、少し歳は離れているけど友達だと断言できる。

少なくとも驚いた顔で私と彼を交互に見ているこいつとは雲泥の關係の有無。

いや、そんなことよりタイミングよすぎよ。物陰から見計らってたんじゃないの!?

って言いたくなるぐらいで、ちょっとドキツとしちゃったじゃない。

「ケガないか、アリサ？」

そんなことになっているなんてちっとも知らないこの人は

呼ばれて振り返るといつもの優しそうな顔を見せた。

「う、うん。べ、別に大丈夫よ。うん、大丈夫なんだから！」

自分でも何でかわからないけど突然彼と会つと緊張する。たいしたことない会話に手間取つて少しあたふたする。

「え、呼び捨て、呼び捨て？」

うそ、そんな……年上で、なに俺……悪者？」

このアリサさまとあろう者がなんていうていたらく。偶然街中で会つたぐらいで何を動揺するっていうの!?!? そつよ、自然に話せばいいのよ。自然に、普通の会話を！

「……どうしてここに？」

「見て分からない？」

え、まさか。

私を助け

「お買い物？」

うん。

やっぱり私、変よ。

結果的には確かに助けられたけど、

それだけで物語のヒーローみたいに助けに来たと勘違いするなんて。アリサ・バニングス一生の不覚。そんな痛い子じゃないでしょ、わたし！

それに見れば分かるじゃない。手提げ袋に食材いっぱい入ってるじ

やない。

ぶっちゃけると顔ばっか見上げてたから手元が視界に入ってたんだけど。

「ああ、あちこちで特売でな。我が家総出だ」

「…コウキのところってそういえば大人数だったわね」

コウキとはやてにシャマルさんとヴィータ。

それに美人だけどいつもおドオドしてるプレシアさん。の7人家族。

テレビで取り上げられるような大家族とまではいかないけど、食事の準備だけで大変そうだなあ。と思う人数だ。

「ああ、そのうえ困ったことにすごく食べるのがいるからな。

こつこつ安売りは逃せないんだよ」

だから大変だ。とはいけれど顔は笑っている。

最近少し分かってきたのだけど彼はその大変さを楽しんでしまう人だ。

そつというのはちよつと分かるかな。

私も面倒ねえ、とか思いながら手や口をつい出しちゃうのよね。

それでいつのまにか自分が大変なことの中心にいたりして、でもそれが結構楽しい。

けど、それだけじゃないわねこの顔は。

「嘘ばかり。

どっちかというが無駄遣いしてはやてに怒られるのが嫌なんですよ？」

いわれて一瞬目が泳ぐ。凶星ね。

この人、初めて会った時は「少しキザっぽい大人なお人好し」だと思ってたんだけど

実際はもつと単純で“油断”してると考えてることが顔にうまくつてしまう人。

もちろん誰の前でも油断するわけじゃないから、私がそれを見抜いたっていうより

この人が私の前で油断するようになったっていうのが正解なんだけど。

「バレたか…あいつこういうのは細かいんだよ。

我が家はそこまで切羽詰ってないのに出費を抑えたがる。

そのくせ自分はたまに無駄な浪費するんだから、たまったもんじやない。

あ……これ、はやてには内緒な。愚痴ってるって知らただけで後が怖い」

「あら、私の口止め料は高いわよ？」

「げ、マジか」

けど、そういうえばそうだった。はやてってすごく主婦してるのよね。

細かいことまでは知らないけど実際お金を握っているのははやてらしい。

けっこうな節約家でお金の使い方には厳しいんだって聞いた。

そのうえ家事万能だからもう立派な主婦なような気がする。

うん、あれ、同い年の女の子として何かすごい敗北感が……？

いいえ、違うわ！

時代はいまや働く女性を求めているはずよ！

目指せキャリアウーマン、アリサ・バニングスは出来る女になるのよ！

「……無視？ 俺、無視されてる？」

なんて胸の内で決意表明しても空しいだけ。

ああ、なんかこの人といると微妙に調子狂うのよね。

テンションの浮き沈みに自分で自分についていけなくなる。

……嫌、じゃないんだけどね。

ああ、だめだ。

いつのまにか顔が笑ってる。変に笑ってないかな？

なんてことはない会話なのにどうしようもなく私を喜ばすんだから。何か、すっごく悔しい！

「つつ！！？？ あ、ああっ、お、お前みたいなブスこっちからお断りだあっ！！」

「はっ？ こらっ誰がブスよ！

というかあんたなに、まだいたの？」

「っ！？ うっ、うっっ、うわああああっ！！」

「あっ人をブス呼ばわりして逃げるな、このっ！」

「ああ、待て待て……これ以上いじめてやるな。思わずあっちに同情しそうだ」

突然訳の分からないことを言い出して、

人を侮辱したそいつは何故か泣きながら逃げ出した。

思わず追いかけてよとした私を彼はいつかのよう引き止めて、なんともいえない表情で逃げた男子を少し見詰めていた。

「……あいつ、アリサが好きだったんじゃないか？」

「あんな奴に好かれても嬉しくない」

自分でもびっくりするぐらいの即答だった。しかもなんて低くて怖い声色。

わたし、そんな声出るんだ？って本当にびっくりした。さすがに彼もその返しの速さと内容に面食らっている。

それはなんだかいつも以上に思ったことがそのまま声に出た気がした。

ううん、それ以上。思うより先に口が動いたような気さえする。

なのにあいつに対する気持ちなんか全然なくて、

代わりに目の前のこの人にどうして私は苛立っているんだろうか？

「手厳しいなあ……じゃあどうい奴ならいいんだ？」

苦笑しながらも、そう聞かれて私は少し考えた。

どうい人なら好かれないか。その理想。

私が好かれない人。好感が持てる人。将来と一緒に過ごしたい人。

「どんな人ってそんなの……あ、れ？」

そのイメージを膨らませながら、私はそれを口にしようとした。ただ、いざ言おうとしたら私は固まっていた。

「ん？」

不思議そうな顔で身長差から私を見下ろす形になる彼。その漆黒の双眸に見詰められて、息が詰まった。

だってイメージそのままの顔が目の前にあっただもん

「し、知らない！」

それ以上直視できなくて思わずそっぽを向いた。顔が熱い。

「アリサ？」

いやいや“これ”はダメでしょ？

なのは好きな人よ。

はやてだって好きなバレバレなのよ。

シヤマルさんやシグナムさん、ヴィータも間違いない。プレシアさんだって正直怪しいったらない！

なのに私も“これ”がいいの？

「……言いたくないなら別にいいけど……」

いや、私もね。嫌いじゃないわよ。

命の恩人だし優しいし一緒にいると楽しいし。

ちよっとキザでちよっとおどけるとこもあるけど、

いざって時は頼もしいというかちゃんと助けてくれる。

そのくせ偶になのは以上の突撃ロケットだから見ててヒヤヒヤするけど。

そんな人よ？

前途多難どころか面倒ばつかとしか思えない。

なのに私はこいつがいいの？

「……………そういつあんたはどんなのがいいのよ？」

だからじゃないけど話を変えるつもりでそう返した。
そういえば彼からそんな話を聞いたこともなかった。

「……………え？」

半ば予想通りのまるで想定外だと思考が止まった顔に溜息が漏れる。

ああ、もう！

それよ！ その顔がいけないのよ！

年上のくせにこういう質問されると『考えたことすらなかった』みたいな顔して！

私よりしっかりした出来る人なのに独りにすると危なすぎる。

だって時々なのは以上に消えてしまいそうなくらい希薄に見える

きっと何か大事なことをこの人は考えてすらいない。だから、いっつも一生懸命に“周り”ばっか見てる。そんな人が気にならないわけがないじゃない！放っておけるわけじゃない！

「はあ、ダメ男に惹かれるって話はこういうこと？」

今まで全然わからなかったけど、そう思うと妙に納得できちゃう。

「はい？」

「何でもないわよ！

それより、さっきの口止め料はどうなったのかしら？」

「……あれ本気？」

「はやてに言っただけでほしいならウソでもいいわよ……」

少しだけ意地悪な顔でふふんと笑う。それだけで彼は白旗だ。会っただけであれだけ私をあたふたさせたんだから、これぐらい困らせたっていいでしょう。

「ふう……わかったよ。」

じゃあ今日は一日、アリサお嬢様のエスコートといくか」

そして小さく溜息を吐くとすぐくあっさりど、

それでいて恐ろしいぐらい自然に私の手を取ってしまう。

「　　っ！！」

ろ、ろろ、ろくでもないところに案内したら後でひどいわよ
「
自分でもびっくりなぐらいに動揺してるのが悔しい。

それでも何とか憎まれ口が出るあたりが私らしかった。けど。

「それは怖いな……なら俺のとおきおきの店を紹介するよ。

だから、今日のことはふたりだけの秘密な？」

「　　っっっっ！！??？」

今度こそ何も言い返せないぐらい頭の中を沸騰させられた。

ついでにうるさいくらいに跳ね上がった心臓の動悸にびっくりする。

繋いでいる手から伝わってしまうんじゃないかと思うほどに。

分かってるのよ？

秘密ってのははやてへの愚痴のことでこれから一緒に遊ぶことじゃない。

けどその言い回しじゃ誰だって勘違いするわよ。

むしろ私でよかったわ、分かってるんだもん。うん、そうよ！

だから、

だからわたし！

そうよあんたよ！

ちょっと聞いているのアリサ！

なに照れてんのよ！

なにニヤニヤしてるのよ!!

店先の窓ガラスに映る自分に何故か私は胸の中だけで怒った。けどそこにある表情はこっちが呆れるぐらい嬉しそうに笑っていた。

翌朝。

「……………おはよう」

「ああ、おはよう」

「おはようアリサ」

朝食の場にきちんと着替えてやってきた私を出向かえたのはパパとママ。

今日は珍しくふたりとも一緒に朝食がとれる日だったみたい。なんていうタイミングの悪さ。

「どうしたのアリサ、寝不足？」

いつもより元気がなかった挨拶だったせいか。

ママが少し心配そうな顔で私の顔を覗き込む。

「え、あ、うんちよっと……」

それにはつきりしない言葉でお茶を濁す。

だって言えるわけがない。

結局あれからふたりで手を繋いだままあちこち遊んで、喫茶店でお茶してウインドウショッピングを楽しんで、最後には可愛い髪留めまでプレゼントされてしまった。

『あれ、もしかして今日のって人生で初めてのデート!?!?』

っていう今更な事実现就寝前に気付いて妙に気が立って眠れなかったなんて。

言えない。こんなこと本当に誰にも言えないわよ。

だって、いつもの。

なんでだろう。

どうしてママは嬉しそうな顔してるの？

「もしかして……好きな人できた？」

「つつ!?!?」

だ、だからあの人の顔が浮かんじゃダメなんだって!

「お相手は昨日デートしてた彼かしら?」

「デ、デートだと!?!?」

「…え、ママなんで知って、っっ!？」

しまった。

いまのは完全な罠じゃない!

だってほら、ママが嬉しそうにニコニコしてる。

パパはすごい顔でプルプルしてる。

「だって、お家の前まで送ってもらってたの見えたし、

あなたがそんな髪留めしてるの今まで見たことないもの」

プレゼントかしら?

なんて聞かれて、もう私は白旗をあげるしかなかった。

嬉しくなって次の日からさっそくつけるとか浮かれすぎよ、わたし。

そうだ。もう認めるしかない。

わたしアリサ・バニングスはその人・日野コウキに恋してしまっている。

白状したその日のバニングス家の朝食は両親が正反対な顔をしながらいつもより時間がかかってしまったのはいうまでもなかった。

参戦、しちゃったじゃない！（後書き）

勝手な想像だけど、アリサって相手の少しダメな所に惹かれそうなイメージ。

「だめじゃない！」「なにやってるのよ！」「とかいいながら世話を焼く感じ。

『この人、私がいないとダメ』なポジションが好き。

そしてケンカはよくするけど最終的に惚れた弱みで何でも許しちゃう系。

一期でのなのには対する「怒りながら待ってる」って、意地っ張りな面も

出しているけど、そういうところも表している気がする。

でもそれって何か浮気されたけど別れる気はない奥さんっぽい立場だよな。

……………あれ、あながち間違いじゃ、ない？

次は9話中では珍しい続き物の前編話となります。

キズとズレ（前書き）

前編です。

キズとズレ

海鳴市からは少しだけ離れたところにある森。

木々が生い茂るなかそこに僅かに開けた空間があった。

そこで向かい合う男女が一组。女は剣を持ち、男いや少年は斧を持っている。

とはいってもどちらも地球の常識でいうところのそれらとはあまり似ていない。

どちらかといえばそれを模した玩具と地球では受け取られそうな外観である。

「はあああっ！」

だが、気合の声と共に振り下ろされる一撃は決してそれらが玩具偽物ではない事を示していた。

横一閃に振るわれた剣を後ろに飛退いて躲すが、

剣の猛攻はそれで終わらない。むしろそれが始まり。

返す刃の速さに回避が間に合わない判断した少年は斧の柄で受け止める。

女の細い腕からは想像できない威力と衝撃に軽く腕の痺れを感じる。だがすでにそんなものは慣れっこで少年は強引に剣ごと彼女を押し出した。

しかしその程度なら本来体勢を崩す女ではない。

だがこのまま互いの獲物を押し当てた状態で止まるより、相手の思惑に乗って動かされたふりをした方がいいと判断しただけのこと。

そんなことは少年も百も承知だがあのまま密着されていて困るのはむしろ彼の方。

両手でも片手でも扱える剣と基本両手で持つことが前提の長い柄がある斧では

密着状態でどちらが不利かなんて、語るまでもなかったのだ。

だからこそ距離を作ってもらったことを理解しながらも

少年はその距離から、自らの斧を充分に振るえる距離から攻勢に出るしかない。

まるで先程の焼き増しのように横一闪に振るわれる一撃を、しかし女は真逆からの横一闪で応じた。

双方の刃が激しい金属音を立ててぶつかり合う。

普通なら両手持ちの少年の斧が片手の女の剣に競り負けるのはあり得ないことだろう。

しかしながら彼女は普通の女性ではない。その愛機と共に幾多の戦場を駆けた騎士なのだ。

「くっ！」

少年が悔しそくに歯噛みする。

彼の一撃は僅かに相手に競り勝っているが押し切れない以上実質負けている。

残念ながら経験も力量も、手にした武装との付き合いもまだまだな彼では

そのまま相手の剣を押し切ることはできそうになかった。

「っ!?!?」

だからこそ少年は斧の刃先を相手の刃で滑らすように前に踏みでる。咄嗟に剣を戻して刀身の腹で斧による突きを受け止めるがそれこそ少年の狙い。

角度を変えながら手元で柄をくるりと回して、斧頭に剣を“引っ掛ける”。

即座に斧を引いて、剣に引きずられる形で彼女の体勢を崩す。

つもりだった

「なっ!?!」

だが彼女の判断はその思惑より早く既に自らの剣を手放していた。そのため体勢を崩されたのは逆に少年の方。

人ひとり引き倒そうとした勢いと剣一本では差がありすぎた。

後ろ向きによるめきながらも彼女が手に持ったそれを見て斧を水平に構えた。

刃先同士がぶつかったのとは意味合いの違う金属音が響く。

女が振り下ろしたのは剣の鞘。戦況によっては彼女が盾としても使うその頑丈さは

即席の盾となつた斧の柄に鈍い衝撃を与えるには十分だった。

倒れかかった不十分な姿勢であつたこともあつて威力を殺しきれず斧を取り落とす。

そして、間髪入れずに無防備になつた横腹へ彼女の蹴りが入つた。

「がっ!?!」

蹴り飛ばされ、地面を何回転かした彼は木の根元にぶつかることで止まる。

痛みを感じながらもこのままでは危険と感じ立ち上がろうと

して動きが止められた。

「……………くそっ……」

それよりも剣を拾って彼に突きつけた女騎士のほうが素早かったのだ。

「勝負あり！　そこまですー！」

第三者の戦いの終わりを告げる言葉に女騎士　シグナム　は気まずそうな顔ながら頷き、

少年　日野コウキ　は悔しげに溜息を吐きながらうなだれた。

「ちくしょう……全然だめだな、はぁ……………」

そしてそのままコウキはその場に寝転ぶように横になった。

バリアジャケットも解除して大の字状態で空を見上げる。

昼過ぎから始めたこの訓練はいつのまにか彼らに夕焼け空を見せるまで続いていた。

「お怪我はありませんか主？」

そんな彼の視界に騎士服姿のシグナムの心配そうな顔が入ってきた。ピンクとホワイトが基調となったそれはかつて少女の方の主が考え少年の主が絵に起こしたものの。

色合いとは裏腹に彼女の持つ凜々しさをより際立たせていたが、少年の顔を覗き込む姿は守護騎士の将というよりは愛しい人を気遣

う女のそれだ。

それが差し込むオレンジで彩られて、その美貌をより魅力的にしていた。

「……………あ、うん。大丈夫だよ、お前ちゃんと手加減してくれたし（さっきまで真剣にやりあっていたのに終わった途端その顔は卑怯だろ……………完全に油断した）」

その顔にしばし見惚れたものの何とか取り繕う。

とはいっても手加減していたのは本当だ。

コウキはかなり全力で戦っていたがシグナムは相手が主その人であることや

竹刀や木刀ではなく互いにデバイスを使った模擬戦だったこともあって

いつも以上に慎重に手加減していた。ただしあくまで力加減での手加減なので

単純な攻防そのものに手加減はなかったのだが。

「でも一応診ておきましょう……………上着を脱いでください……………」

『そうですね、思いつき蹴り飛ばされてましたから』

「うっ……………」

歩み寄ってきたのは模擬戦の終了を告げた一応の審判。

正確には治療役として連れてこられたプレシアと彼女が拾ってきたリニスだ。

「リニス、そうシグナムをいじめるな。

そういつのは有りって事前に決めていただろ？」

上着を脱ぎながらそう口にするコウキ。

この模擬戦は魔導騎士と騎士とのものにしては少し妙なルールがあった。
騎士服やBJなどの身にまとう系の防御魔法以外の魔法使用の禁止である。
逆をいえばそれ以外はなんでもありに近い。

『ああそうですか。あなたはいつだって生身の女性には優しいのですね。』

もう少し機械の女性にだって優しくしてほしいものです。』

少しすねたような言い方にプレシアは苦笑しコウキは頭をかいた。

「あのな、そもそも何のための訓練だと思ってるんだ？

お前を使いこなすためなんだぞ……」

そんなある意味おかしなルールで模擬戦をしていたのはひとえにコウキがリニスの扱いに慣れるためである。

ジュエルシード事件にて半ば偶然コウキが手に入れたバルディッシュ・リニスであるが、

これまで彼が訓練していた獲物とは特徴があまりに違い過ぎた。

シグナムのレヴァンティンという剣。

ヴィータのグラーファイゼンという槌。

なら、ある程度でしかないがそれぞれの持ち主からの訓練経験はあった。

だがバルディッシュ・リニスは斧。より正確にいうならポールウェポン。

剣と槌とではあまりに武器としての性格が違う。

『それは分かっていますが、もう少し優しく扱ってください。』

けっこう心身ともにデリケートなんです……』

さらにいうならその人格もだいぶ違う。

レヴァンティンもアイゼンも彼女ほどでないにしろ自意識はあるが多少乱暴に扱われてもこんなことを口にすることはない。

むしろ激闘を希望してる節があるのでどっちがどうともいえないが。

「そういうんならデバイスとしてまともに使えるようなんとかしろ。
このへっばこデバイス！」

リニスとしての人格を維持するためにデバイスとしての魔法補助能力が低い彼女は扱いづらい。

だがコウキからすればようやく出来た自分専用のデバイスだ。

次善の策として武器としてはきちんと使いこなしたいと考えるのは当然だ。

『あつっ……デバイス人が気にしていることを……』

だからこそリニス自身もさすがに言い返せない。

『へっばこ魔導騎士に言い負かされるなんて……屈辱です……』

とはいえ小さく言い返すことを忘れないあたり、本当にいい性格をしている。

「はいはい、治療しますよ。リニスも手伝って」

上半身を生まれたままの彼に歩み寄ってひざを折るプレシア。

少しだけ痣になってしまった横腹をシグナムには直接見せないように治療する。

そついったちよつとした気遣いはさすがに年長者を感じさせる。

「……それにしてもいつまでこれを残すつもりですか？」

だからこそ、なのかもしれないがそこへの切り込みは少し容赦がない。

小声でシグナムに聞こえないようにしてくれたのが最大の譲歩だった。

なにせ上半身がすべて露出しているということはそこにある古傷が見えていた。

虐待のキズアトがそのままの状態で未だに残っているのだ。

治癒魔法を使えば傷痕だけでも消すことは可能だがなぜかコウキはそれを拒んでいた。

「いやな、見ていい気分のものじゃないのは分かるが……」

まだ俺にはこれが必要なんだ……区切りがついたらお前かシャマルに消してもらおうよ」

だからそれまでは見逃してくれ、と。

苦笑しながら頼まれるとプレシアはそれ以上は踏み込めない。

どちらかといえばその傷を与えていた立場だったがゆえに。

(彼の中では……まだ終わっていないのかしら?)

だからこそ被害者側の心情は解らない。

理解したいし、しようと思っっているがやはり経験の有無は大きい。

「さてと……もういい時間か。」

完全に暗くなる前に帰るとするか」

この話は終わりだといわんばかりに、

治療が終わったコウキの言葉に皆が頷いた。

暗く日が沈んだ森の夜道を歩く三人と一機。

少しだけ夜風にあたっていきたいというコウキの提案に乗る形で森を出るまで歩くことにした彼女たちは穏やかな夜の闇に支配された森を進む。

とはいってもさすがに月が完全に雲に隠れている今夜において光源がないのは危険なので

プレシアが魔法で光球を作って即席の明りとしていた。森を出たあとはタクシー等を拾うことを考えているが無理そうならばシヤマルあたりと連絡をとって転送してもらおうと考えていた。

『だからあなたは目先の攻防に気を取られすぎです』

「いや、そうはいつでもだな……そもそも俺が何手先も読んだところで」

その先頭を歩くコウキと持たれているリニスとは今日の反省会だ。

ふたりの言い分は短所を補おうと考えるリニスと

長所を活かそうとするコウキでは見事なまでに平行線だ。

技術を平均的にあげて整えたうえで長所を伸ばそうと考えるリニスと今すぐに実用できる戦術や技術がほしいコウキではそもそも求めるものに違いがありすぎるのだが。

それをどこか微笑ましく見守っているのがプレシアとシグナム。彼女たちはコウキより数歩遅れる形で歩いていた。

(……プレシア、急になんだが主の腕前はどう思う?)

そこでシグナムがその表情や視線を変えぬまま思念通話で語りかけてきた。

プレシアはその聞き方に僅かに懸念を覚えたが、さすがに敏く意図を理解した。

(私に聞くことは彼のめちゃくちゃな魔導運用のこと、ね?)

(ああ、ベルカ式ならともかくミッド式については詳しくない。

ミッドでかつて大魔導師と呼ばれていたあなたの目から見ても、やはり主は……)

(ええ、とんでもなくおかしな魔導師……いくら資質での個人差があるにしろ

出来ることと出来ないことが妙過ぎる……)

ジャンルごとに考えれば個人の得手不得手と取ることはできる。だが、出来ることと出来ないこと。

例えばバインドの術式を理解できているのにその仕掛け方や解き方が理解できない。

これはいわば自分で問題を作っておいて答えも知っているのに何故か解けない。という状態だ。

かと思えばジュエルシードなんていうものを制御してみせる。

一流魔導師でも難しいそれを簡単にしてみせたくせに、どうやったか説明できない。

感覚で魔法を扱うがゆえの齟齬。と考えることもできたが、

最も得意なのが複雑な計算と理解が必要な『術式を組み上げる』事なのだから無茶苦茶である。

(それでもここが管理外世界で基本魔導師として素質のない人しかいない世界だと考えるなら

おかしいことと言いつけるのも難しい……無難な推測としてこの世界の異端中の異端の才能の偏り)

この世界。少なくとも地球で生まれた生命には魔力を持ったものは普通でない。

かなりの魔力を持っているはやてやなのはがある意味異端なのだ。ならその数少ない異端の中に魔法の常識からすればおかしい技能の魔導師がいてもおかしくはない。

そうでなくてもあるいは何かに特化しすぎた才能の持ち主といったところだろう。

ミッドにおいてもある分野のみを得意とする魔導師がいなかったわけではない。

そういう者はたいてい他分野では素人以下な腕前であることが多いがかった。

(でも……)

プレシアはそう自論を展開しながらも、そうではないような気もしていた。

彼には他にもおかしい点がある。デバイスの有無での激しい能力差無色透明でありながら変幻自在な魔力光の色。どのジャンルのデバイスとも高い適合性。

そして何より、実際に本気でぶつかり合った時から感じていた正体不明の違和感。

(……プレシア?)

(ごめんなさい……おかしさは解るけれど『何故か』という所は解らないわ……)

何か致命的な勘違いをしているような感じはするがその『何か』が解らないのでは意味がない。

(それよりも急にどうしてそんなことを?)

(いや、我らも主コウキの魔法訓練を見ていてもうまく表現できない違和感を感じていたのだ)

彼女に対しては守護獣という立場を装っているシグナムたちは直接指導していた事は伏せていた。

デバイスを使うのも「ベルカ式ではそういうもの」などと誤魔化している。

コウキの不可思議な点を感じていたからか生み出したのもはやてとということになっている。

(そして細かく分析すればするほどチグハグな素質と妙な特性ばかり。

ミッド式の者から見れば違う見解もあるかと思っただけだ……気にしないでくれ)

落胆なくそう告げられ思念通話での会話は終わったが、プレシアの視線の意味は変わる。

魔法にある程度精通している者たちが一様に感じる違和感。

長年研究者として過ごしてきた彼女にはそれは決して見逃してはいけないものを感じる。

そしてそれ以上に本能的な警鐘が鳴る。アリシアの悲劇を彷彿とさせる嫌な警鐘が。

「…どうしました主？」

思い切って直接聞いてみようと思えばプレシアが意を決した時だった。急にふたりの言い合いの片方が止まったのだ。その歩みも。

『コウキ？』

呼びかけを半ば無視してその視線は暗い森の中を睨みつけている。そのただ事ではない様子にシグナムとプレシアは即座に彼の両隣に移動して周囲を警戒する。

「……………それで隠れているつもりか、同じ魔法が何度も通じると思うなよ……」

しかしコウキの視線はまっすぐ前だけに注がれていた。何も無い夜の闇にまぎれたそれを睨みつけるかのよう。

「…いや、これは失礼……………」

「…ツツツ!?」

目の前の闇が僅かに揺れて、その存在は現れ出た。白いの制服のようなものを着ている仮面の男。

「……………今日は…何の用だ？」

どこまでも冷え切った敵意の声を叩きつけながらリニスを待機状態

からアックスモードに。
問いかけていながらも答えによつては即座に斬りつけるといふ無言の脅迫。

「フツ……」

それに、わずかな嘲笑が返される。

何かそれに 彼にしては珍しく 生理的な嫌悪さえ感じてリニスを構えた。

即座に飛びかかるうとさえ考えてたコウキはしかし、動きが止まる。

「貴様っ！」

大気さえ震わさんとする怒号を受け流す仮面の男。

その手にはあまりに見慣れた白くて小さな三日月があった

キズとズレ（後書き）

最後にまた仮面の戦士（劇中一回もそう呼ばれない）登場ですが、今回はシグナムとの模擬戦とやっぱりオリ主の能力はおかしいよねって話。

じつのところ科学者であるがゆえにプレシアが一番真相に近かったりする。

次はちよつと長い中編です。

ひさびさに、バトります。

果たして、うちの主人公は今度こそ勝てるのか！？（笑）

暗闇の死闘

熱、い……やだ、やだよ……だめ……

身体が狂おしいまでに“それ”を渴望している。
それを手に入れるまでこの渴きと熱は消えないとまるで脅迫するよ
うに。

だれか……お姉ちゃん、ファリン……ノエル……

けれど“それ”を求めるわけにはいかない。
その衝動に負けてしまうのはたまらなく嫌だった。
だからこそ“少女”はそうしなくてもいい相手と呼んでいた。

あ、声が……あっ、ぐうっ……

だが、その呼び声は心で叫ばれても、声として響かない。
ましてやここは深くて暗い森の中。
例え絶叫できても駆けつけてくれる姉や気心知れたメイドたちはい
ない。

幸いだったのが周囲に自分以外誰もいない事だったなんていうのは

あまりにも皮肉だ。

大、丈夫…こんな、の……平気、なん…だから……

強く、強く。

途切れそうになる意識を繋ぎとめる。

ともすれば喉をかきむしりそうになる。

目に映る動くモノすべてに襲い掛かってしまいそう。

やだ、やだ……違う…違うもん…私そんな…

渴望が止まらない。

時間が経てば経つほど渴きは増していくばかり。

そして、それを押さえ込む理性はどんどん削り落とされていく。

欲し…い…欲しい、欲しい…っ、やだ…わたしはそんな……

中身が切り替わる。

年頃の少女が飢えた獣になりかわる。

けれど少女はそんなのは絶対嫌だと。

無駄と知りながらも抵抗する。

「…ちが、うの……バ、ケモノじゃないの……わたしはっ……」

枯れ果てた声を絞り出す。

口にして自らに言い聞かせる。

だってそうでなければ彼女はいつもの場所に戻れない。

例えここでのことを誰も知らなくても何より少女自身が知ってしま
う。

そうならもう彼女はあの場所で大好きな友達ともう一緒に笑え

ない。

そ、んな……のイヤ……やなの……

「……………」

思わずまた、今度は別の名を呼ぶが唇が動くだけで声もう出なかつた。

しかしそれだけで喉が痛くなり次の瞬間には痛みがさらなる渴望となる。

やつ…たすけ、て……

消えていく。

少女の大事なものが遠ざかる。

しかしなぜかその時、渴望が理性を超えようとしたその瞬間。

脳裏に浮かんだ“それ”の相手が親友たちの想い人だったのは何の悪い冗談か。

「すずかつ!」

だから。

その声はあまりにもタイミングが良すぎて、あまりに悪すぎた。

「あ、ああ……あああああああつっ!……!」

そして少女の理性は崩れ去った。

月明かりさえない暗闇の森。その闇から現れた白い仮面。
時の庭園での決戦において半ば終わっていた事態を引っ掻き回して
ややこしくした存在。
結果的にはそのおかげでプレシアは病魔が消え、穏やかな日々を送
れている。

「……………今日は…何の用だ？」

だがそんな結果論で相手への警戒を怠るような男ではない。
誰もが完全に欺かれた何かしらの姿を消す魔法に対して
コウキはそれを知覚できる術式をすでに編み出していた。

「フッ……………」

聞き様によつては馬鹿にしたような声に、すでに構えていたシグナムは

レヴァンティンに手をかけたがそれを抜くより主の怒号が早かった。

「貴様っ！」

突然の怒りの形相にむしる驚いたのはシグナムたちだ。

そしてその視線が男の手元に注がれていると気付いた彼女たちもそれを見た。

「え、まさか!？」

「あれはたしか…!？」

その手に握られていた物があまりにも見知った物で愕然とする。

「てめえ………すずかに何をした!？」

それは彼女がいつも身に付けていた白いヘアバンドだった。

少女が滅多なことでは外さなかつたそれにどんな由来があつたのか、コウキたちは知る由もなかつたがとても大事にしていたのは知っていた。

それを全く関係のない正体すら不明の男が持っているのは

遠回しに彼女の身に何かあつたことを告げている。

それもこの男の手によつて、だ。

「…勘違いしてもらつては困るな、私はただ知らせに来ただけだ…」

「なに?」

だが仮面の男はそれを否定しながら両腕を開くようにして語る。

それは武器を持っていない。戦う意志はないことを示すものかもしれないが、

同時にまるでこれから演説でもするかのようなポーズだった。

「森の奥で具合を悪くした女の子を見つけてね。」

あまり現地人と関わりあいたくはないが放つてもおけない。

すると近くにお前たちがいたから知らせておこうと思ったわけだ。だが、前に会った状況が状況だ。

証拠がいるだろうと思つて身に付けていた物をひとつ拝借しただけだ」

その演技かかった仕草もあつてか。

あまりにも胡散臭い内容に彼らの表情は硬い。

はつきり言つて誰一人真に受けていない。信じていない。

「よくもまあそんな白々しいことを……」

「お前が彼女になにかしたのだろう！ 目的はなんだ!？」

「……………」

いずれかの安否が解らないために動く者はいなかったが、

何かあれば今にも全員が飛びかかってしまいそうな雰囲気だ。

「信用がないのは当然だろうが……あの一族の体調不良は別に不思議ではないだろう?」

「……………どういう意味だ?」

もはや視線そのものを刃のように尖らせてシグナムは睨みつけた。

しかし仮面の男は意に介した風もなく語り続ける。

「知らないのか？」

魔法文化が全く存在しないこの世界で最も異端な一族の子供だぞ、あの子は「

なに？」

「どついつこと？」

仮面のせいか。あるいは“おかげ”で表情が見えない。

だが、その口調には明らかかな侮蔑と嘲笑が込められていた。

「……なるほど、よほどうまく周囲の目を欺いていたわけかあの化けも　っ!？」

だから、その失言はあまりにも命取り。

一瞬その場にいた全員が彼を見失い、啞然とする時間さえ無かった。

「ぐはあっ!？」

そして次の瞬間には仮面の男の腹に黒い拳を叩き込んだ姿を現した。まったく動きが追えていなかった男は勢いそのままに殴り飛ばされ木々に叩きつけられる。

だが、一本や二本の木では勢いを殺しきれずおよそ五本の木をなぎ倒し六本目で止まった。

「がっ、ぐああああっつ!!!」

衝撃に意識が飛びかけ、地面に倒れこみそうになった体に突き刺す

ような激しい痛み。

いや、それはそんなものではない。それは間違いなく“突き貫く”痛みだ。

リニスの柄、下端部。そこから伸びる槍のような黒い魔力刃。

何の非殺傷設定もされていなかったそれが腕を貫き、男を木に括り付けた。

「きさ、がつ!?!」

身を護るためか、反撃か。

いつぞやのカードをもう一方の手で取り出すが、

それはコウキによって手のひらごと蹴り飛ばされてしまう。

「返せ」

短くも重い声。

まるで自分がいる場所だけ重力が増したかのような錯覚。

何の感情も宿していない顔が、冷えきった視線が、抗えない圧力をかける。

「……………」

反撃どころか、何を返せといているのか聞き返すことも出来ずにコウキは貫かれて動けなくなった方の手からヘアバンドを奪い返した。

「すずかはどこだ?」

変わらず短く重い声。

相手に有無を言わせない迫力。

仮面の男は自身が縮み上がっているのを自覚する。

「……………あ、あっちだ」

だが、かろうじて動く方の手でコウキから見て左を指さす。

「リニス、スタンシヨック」

『イエツサー』

「なっ、がああああっつ！！！！！」

リニスもまたバルディッシュ。

もともと強奪防止用のシステムだったそれは彼女にも搭載されていた。

自身によって貫かれている傷口から容赦ない電撃が放出され、仮面は絶叫する。

紫電が肉体中を駆け巡り仮面が苦悶の声をあげるがコウキは表情一つ変えない。

「もう一度だけ、聞かすぞ。すずかはどこだ？」

それは、本当に最後通牒だと仮面の男は理解した。させられた。

“素直”に話さなければ次は腕一本だけではすまさない

何ひとつそんなことは口にしていないのに寒気のような冷たい視線が、

怒りや憎悪どころか歓喜も悦もない人形のような無感情な顔が、

それだけで『お前が助かるにはそれしかない』と告げていた。

恐怖で身体が震え、その瞬間だけ様々な思惑が仮面の下から消えた。

だからこそ本当の方角を、先程とは真逆の右を指差していた。

「こ、こつちだ……本当だ……」

「……そうか」

と、だけ返答するとリニスを無造作に引き抜くがそれに悶える仮面は無視だった。

そして彼はリニスを持つ手とは逆の手で握り拳を作ると仮面の前に突き出す。

拳は闇夜に紛れてなお輝く黒い燐光を纏い、彼の双眸は瞬間“紅く煌く。”

「親切にどうもありがとう」

『ナイトメアハウル』

「ひいっ！」

何の感情もない礼の言葉と共に拳から放たれた黒い魔力は悲鳴すら飲み込んで

そこから一直線上にあるものを根こそぎ消し去った。

しかしそれを行った張本人はそんな事に興味はないと言わんばかりに振り返り、

一連の出来事に呆気に取られていたシグナムたちの元へと戻った。

「だいたいの方角は判った。三人で手分けしてあつちを探そう……」

「……あ、それならもっと詳しい位置を聞き出すべきだったのでは？」

「いや、見ていた通り露骨に嘘つく奴だ。いちいち真偽を確かめて

られん。

ならひとつ確かな情報を引き出して邪魔されないよう退場してもらったほうがいい」

『まあ非殺傷かけましたから死んではいませんし現在進行形で通信妨害されているので

仲間がいるかもしれないので、一応ふたりとも気を付けてくださいね……』

「何かあったりせずかを見つけたら各々空に向かって何か合図を出してくれ」

早口で説明をすませると即座に走り出そうとするコウキ。

だが、その前にプレシアが立ちはだかつて止める。その表情は少々呆れ顔だった。

「プレシア？」

「……………コウキ」

こつん、と握り拳で彼女に軽く頭を小突かれる。

痛みはないものの予想外の行動に面食らうコウキは疑問の視線を向けた。

「……………怖い顔してますよ。」

そんな顔でするかさんを迎えに行くつもりですか？」

「っ！ あ、ああ……………すまん、えっと……………これで大丈夫か？」

ハツとなつて意識して表情を変えるコウキ。

それに彼女が頷いたのを見て、彼は駆け出した。

見送る形になつた彼女たちは互いに目を合わせて少しだけ苦笑する。

「すまないなプレシア。」

ああいう時、どうすればいいか我らは分からなくて……」

「いいえ、シグナムさんと一緒になければ私もただ見送ってしまうところでした」

まったくだ、と頷きあつて彼女たちもまた飛びだした。

仮面が指差した方角そのままに走っていた彼を真ん中にプレシアが左、シグナムが右で

彼とは搜索範囲が重ならないようにしながらすすかを探すために飛ぶ。

だがその胸中でわずかに想う。

(しかし、私もまだまだ修行が足りないな)

(すすかさんの事を考えると甚だ不謹慎なのは分かるのだけど……)

身近な人が傷つけられ、侮辱されることを何より嫌うあの少年はしかし、

そのさいの激情を見られるのをあまり好まない。

そのため戦いの場でさえ彼は戦意や敵意を出すことは稀。

だからこそ彼があそこまで本気で相手を叩き潰す敵意と戦意を表に出したのを彼女たちは初めて見たのだった。

(主コウキが跳びだす直前の、本気で戦いに挑む顔に状況を忘れて見惚れてしまうとは……)

(あんな雄々しい顔を見せられると年甲斐もなくドキドキしますね……)

敵には容赦のない恐怖を、味方には頼もしいまでの力強さを。それが日野コウキの持つ『厄介』な魅力の一つだった。

夜の森を野犬もかくやという速さでただひたすら走る。

月がさつきからずつと雲に隠れているのが微妙につらい。

リニスの明暗に左右されない機械的な“目”と探査魔法の応用での周囲状況の把握。

それらが無ければこのスピードで走れない。

他の魔法を併用すればもつと楽なのだが、あいにくながらその余分な魔力がない。

そういえば、とまだ握りしめたままだった拳を開いて“空薬莖”をそのへんに投げ捨てる。

一応いっておくが、あれも魔力で作られたものだから放っておくと勝手に消えるからポイ捨てや自然破壊じゃないぞ。

『やっぱり、なにか変だと思ったらカートリッジの魔力を使っただけですね？』

さすがに目敏い。

俺のデバイスとして使われるこいつは魔力の流れを正確に把握して

いるからな。

「ああ、これなら俺自身の消耗が少なくて済むからな」

『まったく無茶なことを。あなたはアームドデバイスですか!?』

「あはは……そういうなよ。」

いざという時のお守り程度に持ってただけだ。実際役に立つたかどうか」

とはいえ確かに俺はアームドデバイスではないので

込められた魔力を100%俺自身に上乗せできない。

あの『ナイトメアハウル』を放つだけで5発も使っちゃまった。

残り5発。できれば使わないでどうにかなってほしいものだが。

何気なく空薬莖を握っていた手とは逆の手を見る。

すずかがいつも身に付けていたヘアバンド。

日本的にはカチューシャといった方が解りやすいそれ。

これをイタズラで取り上げたアリサと返すようになるのが注意したことが

キツカケとなつてあいつら三人は親友という仲になつていったと聞いている。

それゆえすずかも思い入れがあるのだろう。常に身に付けていた。

あの野郎、無造作に持ちやがって。

傷とか汚れとかついてないだろうな？

そう思つて走りながらもじっくりとヘアバンドを見詰めて、俺の脚は急に止まった。

おい、これはいったいなんだ？

『コウキ?』

「……………あの仮面野郎、もう一発ぶん殴っておくんだっ！」
思わずそう吐き捨てて、苛立ちをぶつけるように近くの木を殴りつける。

「リニス、すずかはまだ見つからないのか!？」

『それらしき生体反応は見つけましたが確証はありません。
それよりどうしたんですか?』

「これ、ただのヘアバンドじゃない」

『え、それはどういう……?』

「説明は後だ。このままだとまずい、早くこれをすずかに持っていないと……………」

もう魔力の消耗がどうのこうのなんて言ってられない。
残りのカートリッジを1発取り出す。それで俺に魔力ブーストをかける。

「飛ぶぞ!」

地を蹴って一気に上空まで飛び上がると
リニスが見つけた地点に向かって落ちるように一直線に飛ぶ。
ジェットコースターなどとは比べ物にならないスピードで俺は突き進む。

『ば、バカッ、スピード出し過ぎです! どうやって止まるつもりですか!』

「こっやってだ！」

さらにもう一発のカートリッジ。

それを着地点に叩きつけるように投げる。

すでに発動間近だった魔法をその魔力を使って発動させる。

「フローターフィールド！ 三段重ねだ！」

ミッド式魔方陣型の足場が三つ重なったそれはもはや本当に落ちている俺を

ネットのように柔軟に伸びて受け止め、俺はその反動で前方に跳び出して着地する。

『……………無茶苦茶です。』

それは本来、高所で作業するための足場を作る魔法で……………』

「授業はあとだ、すずかは……………」

周囲を見渡す。

相変わらずの真っ暗闇に目がまるで役に立たない。

どうやって探せば、と思索しかけた時だ。

「……………ん、いまのは？」

何かのうめき声のような声。

誰かの言葉にならない言葉。

「……ちが、うの……………バ、ケモノじゃないの……………わたしは……………」

「すずか？」

言葉までは分からなかった。そのうえ声は途切れ途切れ。けれど、それは間違いなくあの子の声だ。

「すずかつ!!」

だからその声のした方へ彼女を呼びながら駆け出した。その瞬間。

「あ、ああ……ああああああつっ!!!!」

突然の絶叫と衝撃。

何かがぶつかってきて俺は地面に押し倒される。

その何かは俺にしがみつくように馬乗りになっていた。

その軽さと俺の肩を掴むあまりに小さな手とそれに不釣り合いな強さ。

何よりこの近さなら見間違うはずのない顔見知りの少女の『泣き顔』に

俺はすべてを理解して、動きを止め身体から力を抜いた。

「がつ、ぐっ!!」

だがそんなことおかまい無しに彼女は動く。

上着を力技で引きちぎられ、あらわになった肩口に彼女の鋭い歯が食い込んだ。

「あ、がつ……」

『コウキ!？』

私をかざしてください。スタンショックで弾き飛ばします!』

よく事態が呑み込めていないリニスは敵だと思ったようだが、そうじゃない。

「いや、いい……このままで……ぐうっ!」

とはいえ今は説明する余裕がこっちにない。

しばらくは黙っていてもらおうと地面に突き立てる。

それでもぎゃあぎゃああと文句を言ってるが、悪い少し待ってくれ。

「うっ、うっ……」

彼女の歯が食い込む首元。より正確に表現するなら左肩と首の間。

痛みは感じるが出血は感じない。代わりに何かが吸い取られていく感覚がある。

そしてそれとは別に、何かの水滴が俺の肩を濡らしていく。

零れ落ちるなどという表現では足りないその激しさ。

見えていないのにおびただしい量の涙が流れ落ちているのが見えた気がした。

「ひっ……うっ……ごめんなしゃい、ひっ、ひっ……」

だから、歯が食い込む痛みよりその涙声の謝罪の方がすごく痛かった。

彼女のヘアバンドには特殊な装置が取り付けられていた。

本能的な“何か”の衝動を抑え込むための装置。ずっと身に付けていたのはその衝動を抑え込むためだろう。それだけこの子は誰にも、それこそなのはたちには、いや、なのはたちだからこそ、それを知られなくなかったに違いない。

でも俺の登場が皮肉にも彼女が抑え込んでいたものを解放する手助けをしてしまった。

だから彼女は泣いている。泣きながら俺の血を吸っている。

したくないのに、いやなのに、それでも止められないほどの吸血衝動。

それは、どれだけ怖かっただろうか。

自分で自分を制御できない恐怖。

誰かを襲ってしまうかもしれない恐怖。

そして実際に襲ってしまった“あと”の恐怖。

すべて分かるとはいわない。けど似たような気持ちなら俺にだってある。

だから一度でもその境界線を越えたらもう戻れないと思って怖かったんだろ？

大丈夫だと言葉をかけるのは簡単だ。

けれど下手に言葉をかけてしまうのも危ないと思った。

いま必要なのは同情や慰めの言葉じゃないような気がする。

とくにすずかという子には『この場でかけられるであろう適切な言葉』は意味がない。

予想される言葉では届かない。だが何もしなければこれが取り返しのつかない傷になる。

「……………っ!？」

だから俺はまず逃げられないように左手でしっかりと彼女を抱きとめた。

そして慈しむようにその長い髪を右手で毛先まで撫でる。

ああ、すごく柔らかいな。

「……………これで星空でも見えてれば、けっこいい雰囲気なんだがな」

夜の闇に溶けるような黒に近い紺の髪。

軽く触れると滑るような髪質で気持ちがいい。

けれど少し取り上げて指を絡ませると離れてくれない。

それがどこか彼女の性質をあらわしているのではないかと思えて笑みが漏れる。

「夜の森でふたりつきりで抱き合う男女、か……………うちの連中に知られたら後が怖いな」

思わずそれを想像して、さらにクスリと笑う。

ぶつちやけこの後シグナムやプレシアにこの状況どう説明しよう？

リニスなんて俺の言葉に呆気にとられて絶句してるんだぜ、あのリニスが。

「でもなあ……………これやめたくないなあ……………」

人の髪の毛で遊ぶ趣味なんてなかったのになあ。

膝枕に続いて、これか。俺よ、そんなに女の子に触りたいのか？

……………ちくしょう、否定できない。

「しばらく触ってていいか？」

なんてことを考えながらも遠回しな「このままでもいいぞ」という

言葉をかけた。

「……………」

返事はなかったが、俺の肩を掴む腕から力が抜けていた。それを都合よく肯定と受けとって、すずかの髪を撫で続けた。

日野コウキが月村すずかを見つけてからしばらく。

彼女は、泣き疲れたのか安心したのかはわからないが眠りについていた。

彼の腕の中で眠る少女を起こさぬようにコウキはゆっくりと立ちあがる。

「うつ、まず……」

しかしそれでも一瞬、彼の視界はゆがむ。

よろけた身体を支えるために突き立てておいたリニスを掴む。

「……………大丈夫ですか？」

「あははは……思ったより吸われたなあ……レバー食べたくなってきたかも」

苦笑いを浮かべながら軽口をいうが、リニスの言葉は厳しい。

『ふざけてる場合ですか、ほとんど貧血状態です。早くプレシアかシグナムを呼びなさい』

「分かってるって、だから今から合図を…」
『っ、待ってください。高速で接近する生体反応が三つ！』

その警告にすぐさまリニスを引き抜いて構える。
三つといわれると心当たりがまったくないからだ。

ましてやこの状況を作ったのは正体も目的も不明な仮面の男なのだ。その本人はコウキが魔法で吹っ飛ばしたが別に仲間がいる可能性は十分にあった。

『識別は不明、ああもうっ！』

この通信妨害、センサーにまで干渉してきてウザイです！
っていつか速過ぎますよこれ、接触まで三秒、前からです！』

変わらず星や月が隠れた夜の森。

目よっての状況把握は未だに困難。

灯りを用意するのはかえってこちらの位置を知らせると思ってしな
かったことが裏目に出ている。

なにせ相手はまっすぐにこちらに向かってきているのだから。

「くっ！」

接触まで二秒。

リニスを構えて指示された方向へ意識を伸ばす。
何かが近づく気配。そこから放たれる敵意。

(何者か知らないがとにかく初撃は受けるしか……)

いまの身体の状態で動きまわるのは危険すぎた。
だからこそ待ち構えて奇襲を受け切ってそのあと広域魔法で相手を
一気に制圧する。

それが咄嗟に思い付いた襲撃者への対策だった。

「つつ!?!」

接触まで一秒。

即座にその考えを打ち捨てる。

言葉では表現できない悪寒と自らの首を切り落とされるような錯覚。
なりふり構わず真横に跳ぶがそれはもはや魔力で自らを吹き飛ばし
たに近い動作。

それでもなんとか地面に着地するが貧血からか頭がくらくらりと揺れる。

しかし、その一瞬後。

先程まで立っていた場所の背後あたりから木々が倒れる音がした。

(一瞬だったけど刃みたいなのが見えた………なら、あっちにはこ
つちが見えてるのか!?)

あまりにも正確で無慈悲な一撃。

直感を信じて無理にでも跳ばなければ錯覚通りの結末が待っていた
だろう。

そしてその狙いの正確さは闇という本来なら双方にある不利が相手
にはないことを示す。

だが、それをまずいと思う時間さえ彼には与えられない。

背後に迫る『死』と殺気のない殺気。濃厚な死神の気配。

今度は避ける暇さえないと、振り向きざまのリニスを叩きつける。

金属がぶつかり合って出来た火花が一瞬相手の獲物が二刀の小太刀

だと教えた。

しかし、すずかを抱えているために片手で振るわれたそれは相手の
双刃と競り合うこともできない。

が、それでも一瞬受け止めることは出来た。ならそれで十分だ。

『スタンシヨック』

彼女がそのタイミングで自己防衛のシステムを発動する。

その稲光が襲撃者の姿を映し出し、その一人を無効化する。

はずだった。

『うそっ、 “避けられた”！？』

密着していないと効果のないスタンシヨックが相手に届くその一瞬
前に

襲撃者は自ら後方に跳んで、その危険から逃れていた。

それは性能が知られていたというより高度な危機察知能力のように
も見えた。

「っ!?!」

その非常識さに驚く時間もまた彼にはない。

風を斬る音。揺れる木々と落ちる葉の気配。

“三つ目”の襲撃者が上から飛びかかってくるのを察する。

(ちょうどいい、魔法で吹き飛ばしてそれを合図にふたりを…)

呼ぶつもりだった。

が、その三つ目から届いた妙な音に嫌な予感がした。

刃と刃をぶつけたのとも鞘から抜いたのとも違う金属音。

彼とてその実物を見たことも持ったこともないが、

テレビという媒体を通してそれを使っている場面は見たことがある。

(……銃!?)

相手の獲物を理解した彼は攻撃魔法用に取り出していたカートリッジを

撃ちだすのではなく、その手に握ったまま別の魔法を発動させる。

彼がひとりだったなら多少のケガを覚悟してでも攻撃魔法を使ったが腕に抱えたすずかの危険を考えるとそれはできなかつたのである。

パンツァーシルト

特徴的な三角形の魔方陣によるベルカ式の強固な盾。

だからこそその盾の魔法。その発動と発砲音はほぼ同時。

対物理を念頭に作られた魔法の盾は弾丸を防ぎきるが発砲は一度や二度ではなかつた。

(マシンガンっ!?)

連射される弾丸をかるうじて防ぎ切るが、

突っ込んできた三つ目が盾へ着地するような蹴りで脆くも崩れ去る。

「なっ!?!」

ありえない『蹴り』でのシールドの崩壊とその衝撃によるけながらもさらなる追撃を避けようと下がりかけるが一步下がったところで動けなくなってしまう。

(まずい……困まれた……)

シールドを蹴り壊した“三つ目”は一度後退して距離をとっていた。そして他の二人とコウキを中心にして三角形の頂点のような位置に立って囲む。

姿こそ見えなくともこの距離ならコウキは肌で気配を感じていた。どこにどう逃げても、追撃は免れず現状それをいなすことは不可能だった。

(まずは耐えるしかない)

残り2発となったカートリッジを使って、自らを覆うバリアタイプの防御魔法を発動させる。

これで襲撃者の攻撃を防ぎ、なんとかシグナムやプレシアと連絡をとろうと考えた。

実際バリアに向けて発射された機関銃の弾丸はすべて防がれていた。

実は武器が刀と銃だということにまず疑問を持つべきなのだが、貧血状態の彼に平常時と同じ頭の働きを期待するのも酷である。

そしてさらにいうなら二度あることは三度ある。

スタンシヨックの空振り。銃器による攻撃。

続いた予想外と彼の思惑をつぶす行動。その三度目が迫る。

それは聞き慣れたカートリッジの炸裂音にとてもよく似ていた。そしてソレは轟音と共にバリアを襲って、いとも簡単に砕いていた。

(……え、いまの……なに!?)

砕かれたことよりも砕いていったモノのほうが衝撃的でコウキは茫然となった。

なにせ狙ってなのかバリアを破壊して目標からずれたのかは不明だが、

ソレはコウキの顔の真横を通り過ぎていったのだ。

だから一瞬ではあったが、彼はそれがなんだったのか見ることが出来ていた。

(……ロケット、パンチ?)

人の腕のようなそれがすさまじい勢いで放出されバリアを打ち砕いた。

ならそれに何らかの名前をつけるならそれはそうとしか呼べなかった。

(なんだ……俺はいつたいナニと戦ってるんだ!?)

何かがおかしいと気付いた時はすでに手遅れ。

貧血の身体と孤立無援の三対一。

そのうえ全員が恐ろしいまでの実力者。

身を守るバリアは破られ仲間を呼ぶ術はなく武器は弾切れ状態。

もはや詰んでいる。状況を打破するすべは何も無い。

(………そんなの………知ったことか!!)

だからこそ少女の身体をよりしつかりと抱える。

その重みがある限り日野コウキという男に諦めも敗北も許されはしない。

(すずかを帰してやるんだ。家族やなのはたちの所に、絶対に！！)

こんな真つ暗闇でひとりで抑えきれない衝動と戦っていた少女は負けてしまったことが悔しくて、みんなの所へ戻れなくなることが怖くて泣いていた。

なら彼女は絶対に優しい子だ。なによりそんなことはとつくに彼は知っている。

だからこそ月村すずかという優しい女の子はそれが相応しい優しい場所に戻さなければ、と。

そのために使える力はすべて使う。

決意の元、片手で掴むリニスをだらりと下げる形で構えた。

囲まれた三方の誰が最初に動いても対応できるように。

そしてたとえ同時に攻めてこられても即座に対応できるように。

暗闇を睨む瞳は紅く光り、リニスには透明な魔力の刃が生まれた。

(力を貸してくれ…)

(はい、いくらでも！)

全身の神経を集中させ、襲撃者たちの気配をより鋭敏に感じ取る。

狙うは一点。銃器を使った襲撃者。たかが蹴りでシールドを破壊するその威力は警戒すべきだが、

近接には不向きな武器と他ふたりと比べると精練さが欠けた動き。狙うならそこしかない。

だが、あくまで他の二名と比べると低いだけで弱いわけではない。突破しきれぬか是不透明ではあったが、そこを狙ってこの状況から脱するしかなかった。

そして三人の脚がいつせいに地を蹴った

それとほぼ同時にコウキは銃の襲撃者へと駆け出す。残りのより熟練な二名に背中を向けることになるが、それは“彼女”に任せてある。

「っ!?!」

「ちっ!」

それぞれの眼前に張られたシールド。

一名にすでに砕かれている以上完全に抑えられなくても一瞬の壁にはなる。

そしてその一瞬があれば、コウキはより前に踏み込める。

向けられていた銃器を斬りおとし、その腕を掴んで全力で後方へと投げ飛ばす。

「きゃあっ!」

「なっ!?!」

うまくどっちかに当たったそれが可愛らしい悲鳴をあげたことなど気にもせず、

コウキはそのままの勢いで包囲を突破して駆け抜ける。

その足元に迫る風切り音

コウキがその正体に背筋を凍らせたのは、もはや手遅れのタイミングだった。

「っっっ!?!」

片足から力が抜ける。
立っている状態を維持できずに力尽きたように膝をつく。
襲撃者の誰かが投擲した刃でアキレス腱を切られたのだ。
そのため走っていた勢いそのままに地面に突っ伏すように倒れこむ。

「がつ！」

「……………ん、あ……………」

何とかすずかを押し潰すことだけは避けようと身体を捻ったが、その衝撃までは消すことはできず、最悪なタイミングで彼女の目が開く。

「え、あれ、わたし……………」

状況を把握できないまま緊迫した顔のコウキを彼の腕の中から見上げる。

咄嗟に何か危険なことが起きていると察したすずかだが、そこまでだ。

迫る死神の気配にコウキはまずいと思うことさえできない。

そのスピードと威力はとてでもないが“彼女”の防御壁で防げるレベルではない。

もう絶対的に逃れられない「死」を前にして彼が取った行動はあまりに愚かだ。

何せすずかどころか、リニスさえ自らの肉体で覆うようにして庇う体勢をとった。

(あるじっっ！！！)

『コウキっ！！？』

意図を理解して思わず彼女とリニスは叫ぶ。
それが、僅かに襲撃者の動きを鈍らした。その瞬間。

「飛竜、一閃ッッ!!!」

炎をまとった竜が、森の木々を飲み込みながら一直線に襲撃者を襲った。

「なっ!?!」

これにはさすがに驚いた声をあげた“彼”は大きく飛び退いて躲す。標的に躲された炎竜はそのまま地面に突き刺さるようにして止まったが、

その長い尾を引かれたように森の奥へと戻っていく。
だが、その“持ち主”は逆にそこから飛び出し竜を剣に戻しながらコウキの傍らに降り立つと憤怒の表情を飛退いて暗闇に消えた者に向けて、叫ぶ。

「貴様らっ、コウキによくもっっ!!!」

ヴォルケンリッターの将。剣の騎士シグナム。

本来、戦場ではいつも冷静なはずの彼女の心底からの激昂。

それがどれほどのものかは普段は絶対にしない主への呼び捨てが端的に示していた。

好敵手相手に高揚することはあっても怒りで剣を握った経験がない彼女は

そんな激情を抑えきれずその苛烈さを表現するかのようにその剣に激しい炎を宿す。

その後。

蹲るような形になっていたコウキを挟む形で残った襲撃者が迫っていた。

それにシグナムは気付いていない。それを油断と嘲るのは早計だ。例え気付いていたとしてもシグナムはその対処をしなかったであろうから。

なにせ彼女は“ひとり”ではないのだから。

「サンダーフォールツ！」

雷鳴に混ざりながらも決して負けていない強い声。

それに従うように空を閉ざす厚い雲から雷が落ちる。

「下がちなさい！！」

それも一回や二回ではない。

コウキたちをまるで囲むように雷は落ち続け、襲撃者を牽制する。

その激しさに三名の襲撃者はより距離をとるしかなかった。そしてその隙に彼女はコウキのそばの地面に降り立った。

「…シグナムさん？……プレシアさん？……」

それをすずかは不思議そうな顔で見つめていた。

彼女はその名を口にしながらも目の前の両名が本当にその人なのか確信が持てない。

炎や雷を操るような動作をしていたから、ではない。

双方ともいつもとは格好もまとう雰囲気もまるで違ったからだ。

すずかは知らぬことだがシグナムは主たちから賜った騎士服姿。

プレシアはかつて庭園で着ていた“あの”格好になっていた。

そして何より二人とも激しい怒りと敵意を隠そうともせず襲撃者へ向けている。

それはあまりにもすずかの中の彼女たちのイメージとかけ離れていたもの。

だからこそ“なにが”彼女たちをそこまで怒らせたかはすぐに察せられた。

(……コウキさんがケガをしたから……それを防げなかったから……?)

敵意は当然相対している者へ向けられているが

怒りは自身へ向けられているようにすずかは感じていた。

それほどまでに彼を想っている

(あれ……なん、だろこれ……ちょっとだけ胸が痛い?)

そう気付いた途端感じたそれは今まで感じたことのない痛み。ケガをしている訳でもないのに、その奥がズキズキと痛い。炎や雷を操っている事よりもそちらに意識が向いている時点である意味致命的な痛みだが経験のないはずかにそれが何か分かるわけもない。

「……あつ、それどころじゃなかった！」

待って、待ってくださいシグナムさん、プレシアさん！」

思わずその胸の痛みの意味を探ろうと考え込みかけた彼女だがそうはいってられない状況だったのを思い出した。

実はこの時点で一番状況を正確に理解していたのはさすがにだけだったのである。

なにせ彼女の両目はこの暗闇でも相手を正確に捉えていたのだから。

「違うんです、みんなは私を助けようとしてくれてたんです！」

「どついうことだすずか？」

腕の中の少女からの思わぬ言葉に何より最初に驚いたのはコウキだ。シグナムの剣に宿る炎とプレシアが落とした雷の残り火で

周囲の状況は薄っすらとだが見えてきていたがまだ襲撃者の顔は判らない。

だがこれまでの戦いからして魔法関係の相手ではないのだけは察しがついていた。

「プレシア、灯りを出してくれるか？」

だからこれは直接相手の顔を見たほうが早いと彼女に頼む。

ええ、と頷いた彼女が作り出した光球が辺り一帯を照らして襲撃者

の姿をあらわにした。

「……………え？」

「……………な、なぜ？」

「……………これは、してやられた……………」

予想外にもほどがある三人の正体にただただ絶句する。

コウキは緊張の糸が切れてすずかを抱えたまま地面に大の字に倒れこんでしまう。

本日二度目である。

シグナムたちも先程までの怒りの形相はどこに行ったのか。

啞然とした顔のまま凍ったように動きを止めていた。

何せそこにいたのはコウキの少し歳の離れた幼馴染と見慣れたメイドさん達だったのだ。

あなたの怖いものは何ですか？

郊外の森にある大きな屋敷。

訪れるのは初めてではないが俺自身が泊まることになったのは初めてのこと。

用意された客間のベッドで横になりながらも眠る気持ちはさらさらなかった。

数時間前にあんなことがあった後である。

あれで終わってほしいがあれで終わりだと言い切れる保証はどこにもない。

だからだろうか。

屋敷内を動く、というか警備しているメイドさんの数がすごい。

防犯システムはフル稼働なうえにプレシアの結界と屋根の上で睨みを利かせるシグナム。

ここまで来ると「俺、起きてなくてもよくね？」とか思うが、気持ちの問題だ。

そしてそんなある種の厳戒態勢の中、このお嬢様は誰にも見つからずよく辿り着いたな。

コンコンッ

控えめなノックの音に身体を起こして一応「はい、誰ですか？」と声をかけた。

「……………すずかです。」

夜分遅くすいません……………あの、入ってもいいですか？」

一瞬、どうなのだろうか？と思った。

別れたのは一時間ほど前の事とはいえすでに真夜中。

そんな時間に男が泊まる部屋に少女が訪ねる。うん、間違いなく問題だろう。

むろん俺が変なことをするか否かなら、否なのだけど。

「ああ、鍵はかけてないから、どうぞ」

とはいえ今日はいろいろあった。

すずかはすずかで色々と思うこと、考えることがあったはずだ。

その結果、俺の所に来た以上それを拒むのはそれはそれで問題だ。

ゆっくりと音を立てないように扉を開けて入ってきた少女は

可愛らしいパジャマ姿で両手で枕を抱きしめ、それで顔を半分隠していた。

灯りをつけていないのはつきりとは分からないが少し顔が赤い。

やはりこの時間に異性の部屋を訪ねることの恥ずかしさがあるようだ。

そのためか入口からあまり動こうとしない。

俺はあえて黙って自分の隣を叩いた。

遠回しなようで実はかなり直な、ここに座れ、という誘いだ。それに今度は顔を全部隠してしまったがトコトコと歩いてわりとすんなりと俺の横に腰を下ろした。大きめの枕を抱きしめたままなので暗さ関係なく本当に顔が見えないが。

彼女が何もいわないので俺もなにも聞かない。

ここは俺が待つべきだと思っしすすかには場当たりの言葉は意味がない気がする。

だから、というわけでもないのだが、思わず頭を撫でた。

「っー！」

一瞬びくりと身体を震わすが拒否されないのをいいことに感触を楽しむ。

闇夜に溶け込みながらも存在を主張する独特の色の髪。

僅かに漂うシャンプーの香りと微妙な髪の感触の違い。

やっぱり女の子だな、あれから風呂にでも入ったのだろう。

うん？ あれ、そういえば俺は汗臭くないだろうか？

考えてみれば昼ごろから模擬戦やりっぱなしで

その後のすずか搜索と冷や汗ものの戦いだ。汗だくである。

うわあ、不用意に触っちゃったけどまずかったんじゃないか？

「……………あの……………」

なんてことを考えていた俺はいつのまにか枕を下していた事に気付かなかった。

「……………一緒に、寝てくれますか？」

「俺でよければ……」

なんで、とは聞かずに俺は受け入れた。

まずいかましくないかで言えばまずいのだけど、それは聞けなかった。

ここに来た理由がそもそもそれなのだとしたら俺はそれを拒んではいけない。

すずかは優しくて頭のいい子だ。考えた末そうしたいと思ったのなら叶えてやるつ。

今日はとくにこの子が一番怖い想いをしたのだから。

「ちょっと汗臭いかもしれないけどね」

少しだけ気にしたことを軽口で告げる。

けれどすずかは首を振り、俺に寄り掛かりながらはつきりと言った。

「……わたしを、守ってくれた匂いだから……平気です」

むしろその匂いをつけてほしいとまで言い出しそうな声色にドキリとする。

すずかはそれ以上は何も言わずに俺に身体を預けて、ただ目を閉ざす。

けれど俺の衣服を掴む手は僅かに、本当に僅かだが震えている。

いくら受け入れられたといっても、怖かったことが無くなったわけじゃない。

すずかが姉でなく、家族のようなメイドの誰でもなく俺の所にきたのは

俺が秘密を知ってなお受け入れたからだけじゃない。

あの時、泣いていた彼女を少しでも安心させられたからだと、
自惚れでも、そう思っていていいだろうか？

それほどまでに彼女が抱えていたものは彼女にとってあまりに重か
ったのだ。

なにせ、それは

襲撃者の正体が露見したあと。
彼女たちの案内でコウキたちは近くの月村邸へと案内された。
そして通された応接間で待っていた彼女たちにいっせいに頭を下げ
られた。

「本当にごめんなさい！」

「申し訳ありませんでした……」

「ごめんなさいです！」

「すまなかつた！」

「ご迷惑をおかけしました……」

しかし謝られた方は各々理由は違うがただただ戸惑うだけだ。なにせ“何に”謝られているのかがよく解らない。

あれから、近くにあった月村の屋敷に招かれたコウキたちは

この部屋に通されると待つていたすずかの姉・月村忍を筆頭とした。

メイド長、ノエル・K・エアリヒカイト。

その妹フアリン・K・エアリヒカイト。

忍の恋人の高町恭也。

そして何故か被害者の立場であるはずの月村すずか。から一斉に頭を下げられた。

「いや、俺も相手が誰か確かめなかつたわけだし……」

コウキはおそらく相手をよく確認せずに問答無用で襲いかかったこと。

に対して謝っていると当たりをつけて、やんわりとこちら側の非を口にして

なんとか頭をあげさせようとした。彼にとっては間違いで襲われたことより

本気で“謝られている”ほうが妙な居心地の悪さと申し訳なさを感じてしまう。

が。

『いきなり襲いかかれてはそんな暇ありませんけどね』

もうひとりの当事者である彼女は皮肉げにそう言い放つ。

「リニス！ あなたは少し黙って…」

『いやです。たまたまシグナムやプレシアが間に合ったからよかったですもの、』

下手をしたらコウキは死んでたかもしれなかったんですよ！』

謝るぐらいで許してやるものと口に出してリニスはひとり憤慨している。

確かに彼女の言う通り運悪く駆けつけるのが遅れていたら手遅れになっていた可能性は高い。

シグナムたちの到着はまさにその瀬戸際の瞬間だったのだから。

「本当に申し訳ありませんでした…」

「あうあう、ごめんなさい、ごめんなさい…」

「…すまん、俺とすることが…」

その指摘に再度、とくに襲ってきた張本人たちがより頭を下げた。最初に襲い掛かり、その後ロケットパンチを放ったノエル。

二刀の小太刀で何度もコウキに死を意識させた恭也。

投げ飛ばされた時に可愛い悲鳴を上げていたファリン。

この三名がああ場でコウキと短い時間ながら戦っていた面々だった。

「……けどそれを言い出すと私たちも相手をよく確認せずに攻撃してしまいましたし…」

「ああ、あの時は主コウキを救わなくてはという思いだけだったから……」

半ば本気で必殺の一撃を放っていた。

手加減どころか非殺傷などということは考えてすらいなかった。彼女たちふたりが謝罪に対して戸惑っていたのはそういうことだったのだ。

「いえ、そのことももちろん謝るべきことなのですが、

一番は私たちの事情にあなた達を巻き込んでしまったことです」

「え、ちょっと待ってくれ、それはどういうことだ？」

忍のその言葉にコウキはより戸惑った。

本来なら自分がいべきそれを先にいわれてしまった。と。

「これを」

ノエルが差し出したのは一枚の置手紙。

一度破かれたのを再度テープでつなぎ合わせた跡のあるポロポロの紙。

そこにはこう書かれていた。

□

月村すずかは預かった 返してほしければ森のこの地点に来い
ちなみにヘアバンドは取り上げてあるから急いで来たほうがいい

ㄣ

その下に図解された森とすずかの位置が書かれていた。おそらく。ポロポロになりすぎて元がどうだったかが正確にはもはや解らなかつたが。

「今日はさすが日が落ちて帰っても帰ってこなくて、心配してたらその手紙が門に張り付けてあったの。それで慌ててしまつて……」

「たまたま遊びに来ていた俺がノエルたちと一緒に急いで向かったんだ」

「忍さまには念のために屋敷にとどまってもらいましたが……」

ちなみに手紙を破つたのはひとり待っていた時に忍がしたことだ。

「……………それでどうして忍さんたちが謝ることになるんだ？」

行き違いがあつたにせよ、月村の家の人たちは被害者だろ？」

「普通なら、そうなんでしょうけど……………私たちは少し普通とは違つから」

ひとり俯いてしまつている妹に姉は寄り添うようにそばに立つ。

「ヘアバンドがないこの子がこんなに落ち着いているということとはコウキくん、あなたすずかに血を吸われたんでしょ？」

「っ……………」

「はい、けっこう吸われたんで今すつごくトマトジュースが欲しいです」

瞬間、その場にいた全員の顔が啞然とした顔になる。

それぐらいあまりに予想外でふざけた返答だった。

しかし本人は思いつきり大真面目だったので余計に言葉のおかしさ

が際立っていた。
そして即座に忍はクスクスと笑い出す。

「ふふっ、あははは……あとで用意させるわ。
さすが恭也の幼馴染ね、私たち一族に吸われてそんなこと言った
の多分あなたが初めてよ」

笑いながらどこか嬉しそうにそういう彼女に恭也は呆れ顔。その口
元は同じように笑っていたが。
ずかはしきりに目をパチクリさせながら不思議そうな顔で彼を見
上げている。

「……私たちは『夜の一族』という吸血鬼一族の、まあ日本ではそ
こそこの名門なのよ。」

吸血鬼といっても日光や十字架、にんにくなんかは苦手ではない
し、

物語に出てくるような存在と違って単に人間の変異種が定着した
もののな。

で、最近わたしが親から当主の座を引き継いだんだけど、
それを快く思わない連中がいてね。私もすくも月村の直系だけど
一族でも珍しい特殊体質だから、それに難癖つけているの」

「特殊体質？」

「ええ……夜の一族は総じて高い身体能力と治癒、いえ再生能力と
いつてもいい能力がある。」

けどその反面、人より血やそこにある鉄分を生成する能力が弱く
て吸血はそのためなの。

私の場合は頭脳労働は得意だけど身体能力はそれほどでもない変
り種。

逆にすずかはそれらが高すぎるから、ありえないぐらいに吸血衝動が強い。

あのヘアバンドは私が作ったそれを抑える装置なの」

だからこそ、それを取り上げたとあったあの手紙に彼女たちは慌てたのだ。

「とくにここ数日は一番衝動が強くなる時期で……」

「お、お姉ちゃん！」

突然真つ赤になりながら姉の言葉を止めるすずか。

それを不思議に思ったコウキたちだが、ファリン、ノエルは苦笑い。恭也もさすがに咎めるような視線を恋人に向けた。

忍は忍でさすがにこの先は“まだ”教えなくてもいい。と判断した。

実は彼女たち一族の者は軒並み出生率が低い。

そのためなのか数か月に一度、いわゆる発情期がくる。

すずかの場合はまだ身体が幼いためにその衝動が吸血衝動に上乗せされてしまう。

彼女の年齢ではまだ発情期がくるはずがないのだが特殊体質であるがゆえだった。

同じ女として異性にそういったことを知られるのが恥ずかしいという気持ちは分かる。

だからこそ妹をからかいたい衝動を抑えて忍はそれ以上口にはしなかった。

(……………あとでこっそり教えておこう。

考えてみればすずかでも義弟になるのよねえ。

すずかもまんざらでもなさそうだし、そっちのほうがいいかしら

?)

あくまでその場では、だったが。

「？」

どこか意味ありげな忍の視線に首をかしげるコウキ。

本人のまったく知らない所で『日野コウキ義弟化計画』が地味に進行中だった。

「……えっと、まあ、だからなの。」

私たちの家のごたごたに巻き込んでしまったばかりか犯人と間違うなんて。

一族の当主として、改めてお詫びするわ……「ごめんなさい」

さておき。

話を戻して再度謝罪する忍にコウキたちは互いに顔を見合わせて全員が神妙で、申し訳ない顔をした。やはり本来とるべき態度が“逆”だと。

「……コウキさん、ごめんなさい……痛かった、ですよね？」

しかしそうとは知らないはずかは一瞬だけ視線を

自身が噛み付いた首元に向けるとまた顔を俯かせてしまう。

スカートを掴む手がその皺を深くする。

「本当にごめんなさい！」

わたし初めてで全然抑えられなくてっ、加減もできなくて、いっぱい吸っちゃって、そのうえケガまで……わたし、わたし、

っ!？」

放っておけば際限なく謝り続けてしまいそうな彼女の口を閉ざしたのは彼だ。

いつのまにか歩み寄っていたコウキがその口に向けて指を立てていた。

「……すずか、謝るのは実はこっちなんだ」

膝を折って視線を合わせてそう告げるコウキ。

一瞬驚いたすずかだが、反論される前に彼はつづけた。

「俺たちはすずかたちの事情に巻き込まれたんじゃない。

俺たちが……お前を巻き込んでしまったんだ」

「え？」

「リニス、あいつの映像出るか？」

『はい、いま出しますよ』

手のひらに乗った待機状態のリニスから立体映像が投射される。そこにはあの仮面の男の姿が映し出されていた。

「あ、この人です！ 私、この人に襲われて……」

「……こいつに狙われているのはたぶん、俺たちなんだ」

「……どういうこと？」

さすがに忍が話に割り込んだ。

彼女たちが考えていた今回の一件の事情がひっくり返るような言葉

だったから。

コウキもまた膝を折ったままでそれに答えた。

「俺もこいつに会ったのは今日で二回目で正体も目的も不明だから
はつきりとしたことはいえませんが狙われているのは俺たちだと
思っんです」

「……その理由は聞いてもいいかしら？」

「ええ、こつちばかりがあなた方の秘密を聞いておいて隠しておく
わけにはいきません。」

ですが、俺の秘密は他の人の秘密とどうしても重なってしまうの
ですべてを話すことはできませんが……」

それでもいいですか？と言外に問いかけた。

忍が頷いたのを確認して彼はゆっくりと説明を始めた。

魔法という力、巻き込まれた事件、次元世界、管理局のことなどを。
無論そこからは闇の書関連のことやプレシア、フェイト、なのはの
部分は抜かれている。

そして関わった事件の終盤にて仮面の男が現れて自分たちを間接的
に襲ったことを付け加えた。

「……にわかには信じがたいけど、実際に炎や雷を操ってる所見た
からな」

「それにそのデバイスもすごいわ。」

ノエルたちほどじゃないけど現代の科学技術で作れるものじゃな
い」

シグナムたちの魔法行使を見ていた事やリニスの存在によって彼女たちはそれをひどくあっさりを受け入れた。互いにこの世界における「普通」とは違う面を持つがゆえの柔軟さだ。

「だけどそうになると……俺たちはお前を倒すためにおびき出されたのか？」

「……そう考えるのが自然だとは思っ

それが狙いにしてはあまりにも間接的すぎる手口に疑問はあるが、そう考えるのがやはり一番自然だった。

「置手紙の文章も当主問題だというなら少しおかしい。そうなら要求は当主を降りるとか忍さんだけで来いとかになるはず。

なのに取りようによっては早くきてほしいみたいな書き方がされている」

「すずかさんを見つけた私たちと月村家の人たちを遭遇させたかったわけね。

暗闇なら、相手をそれぞれ犯人だと誤解しやすいから……」

「それにまんまとこっちが引っかけたわけか」

月村家の面々はそれに深い溜息を吐いた。襲われた事情が日野家側にあったとしても彼女たちからすれば相手の姿を確認するのを怠ったがゆえのミス。一歩間違えばリニスが言っていたように殺してしまっていたかもしれないのだ。

無実どころか、すずかを命がけで護ろうとしていたコウキを。

「……やっぱりこちらが謝るべきよ。」

すずかのことで動揺していたとはいえ問答無用で襲ったのはやっぱり問題だったわ」

「はい、戦闘システムを円滑に動かすために暗視システムを最低限にしたのが問題でした。」

それで充分動きが追えるとはいえ相手の顔を確認できていませんでした」

「いえ、そもそも分かったのに不用意に近づいて

すずかの吸血衝動を刺激して、したくない吸血をさせてしまった俺が悪かったんです……」

とはいえコウキとすればそこで焦ってしまったがゆえの展開だったと思えていた。

そこでもっと冷静に行動できていれば、吸血をさせずにもっと簡単に事態を収めていたはず、と。

「そ、そんなつ、ち、違います！ 絶対にコウキさんは悪くありません！」

けれどそれは違つとほとんど反射的に叫んだ少女がいた。すずかだ。

「……どんなに慎重にしても、きっと私はあなたを襲ってました。もう限界だったんです。」

なのに私が噛み付いても、コウキさんは抵抗さえしなかった。

それどころかずっと、私が落ち着くまですっと抱きしめてくれました。

嬉しかったです……ずっと怖かったから、ずっと、ずっとわたし
っ……………」

どこに、誰に、どんな責任があるか。すずかはそれはどうでもよか
った。

ただ、彼のせいだけにはしたくなかった。

夜の一族の中でも一際強い吸血衝動を持つすずかは自分のそれが怖
かった。

人前で衝動が出れば何をするかわからなくて部屋にこもりきりな日
々。

小学校に入る前に忍が作った抑制装置が無ければ彼女は学校に通う
ことすらなかっただろう。

もつとも、それを入学早々同級生アリスに取られた時は本当に怖かった。

あの時うまく「返して」といえなかったのは性格的な理由もあつた
が、

強い感情を出すことで衝動が前面に出そつで怖かったから、という
理由もあつたのだ。

しかし、それがキツカケで友人が出来たのはものすごく嬉しい誤算
だった。

けれどそうして出来た親友たちとの日々が楽しければ楽しいほどす
ずかは秘密を言えなくなった。

彼女たちなら大丈夫と思う反面、気味悪がれたらどうしようという
不安は尽きない。

だからこそ、いつしかすずかは吸血をしないと決めていた。

けどそれは同時にしてしまえばもう『戻れない』と思ひ込む要因に
なっていた。

たとえ記憶を消す術が夜の一族にあつてもそれは吸われた側に有効
でも

吸った側には使えない。吸血した事実にならずに自身が耐えられない。

はずだった

生まれて初めて吸血した彼はそれに抵抗せずされるがままに受け入れ、

優しく抱き留め、髪を撫でながらただ一緒にいてくれた。

ただ星が見れないのが残念だなんて口にしながら。

そしてずか自身もそれが本当に残念に思えてしまった。

「……あの時、わたしを呼んでくれたのが……コウキさんで良かったです」

だから精一杯の感謝の気持ちを込めてありがとうを告げた。少しだけ目に涙がたまっていたけれど笑顔と共に。

それに少しだけ驚いた顔を見せたコウキだが、すぐにふっと表情を和らげて、手慣れた動作でそれを頭につけた。

「あ、これ……」

「やっぱり、ずかにはそれと笑顔が一番似合うよ」

いつもの定位置に戻った真っ白なヘアバンドは彼女の髪に良く映えた。

それを少しだけ髪をすくって感触を楽しみながらもコウキは真っ直ぐに寝めた。

「……あ、ありがとうございます……」

何に対してのお礼なのか。

すずかは顔を真っ赤にしながら再び感謝を告げた。

それに渋い顔をした女性がふたりいたが大多数が微笑ましくそれを見ている。

けれど忍は少しわざとらしい咳をして話に入った。

「ゴホン……私からもお礼を言うわ、姉としてこの子を助けてくれてありがとう」

(いろいろな意味で、ね……)

「いえ……」

「あ、でも……すずかの場合はこれからが大変かな」

「う……」

「変な言い方だけど一度、生の吸血を味わった以上衝動は強くなる。

これまで吸血を拒み続けていた反動もあるだろうから抑制装置でどこまで抑えられるか……」

深刻そうな顔で深刻な話をしている忍だが、

それに半ば演技が入っているのに気付けたのは恋人とメイド長だけである。

そつとは知らないコウキは一考して、案を出した。

「……思い切ったのは達に言ってみたらどうだ？」

きつと俺たちと同じようにお前の身体のことを受け入れてくれると思っぞ。

いつも一緒にいるあいつらならもしもの時もフォローできるし……」

「……でも……」

確かに現実的に家族以外で一番一緒にいる時間が長い彼女たちの協力は欲しかった。

だがそのためには今まで隠し続けた秘密を口にしなければならぬ。親友を信じたい気持ちとダメだったらという恐怖がすずかの中でせめぎ合う。

「順番が違っていたのなら別だけど、もうみんな知ってるんだ。

月村すずかが本当に優しく、可愛い素敵な女の子だって。

そんな子がたまたま夜の一族っていう存在だった。それだけの話だと思いがな」

「あう………か、考えてみます………」

先程より、頬を真っ赤に染めて俯きながら呟くすずか。

それにコウキはそうかと頷いて、優しく頭を撫でた。耳まで真っ赤になっていく。

シグナムは頭を抱えて、プレシアは目を丸くしていた。

忍は嬉しそうにニコニコしてファリンは一人きやあきやあと小さく盛り上がっている。

恭也は溜息をついてノエルがさりげなく励ましていた。

『この女誑し………何人目だと思ってるですかまったく！』

リニスに至っては明確に毒を吐いたが当人には聞こえていないよう

だ。

「ああ……でももし言うならアリサにいう時は覚悟しといたほうがいいぜ」

「え？」

「『なんで言うてくれなかったのよ！ そんなにわたしって信用ないの！』」

って怒ってしばらく口きいてくれないかもな」

「ふ、ふふふ……アリサちゃん言いそう！」

わりと真に迫った彼の声真似と彼女があまりにも口にしそうなフレーズに

すずかは笑いながら、きつとそうなるような予感を感じ始めていた。まだまだ怖さはあるがそれでも彼女が自らの秘密を打ち明けるのはそう遠い日ではなくなったのだった。

この身体のこと、力のこと。

一族の中でもとおかしい私の力は危険だったから。

お姉ちゃんに恭也さんっていう人が出来たのは嬉しかった反面、心のどこかでずるいと思っていた私がいきました。

特異な姉妹と見られていてもお姉ちゃんは私ほどじゃなかったから。お姉ちゃんが幸せそうなのは嬉しいし、ファリンや猫たちもいる。独りじゃないし寂しくもないけど、きっと私にはそういう人が現れないと思っていた。

だからこんなにあっさりと受け入れてくれる人に出会えたことに驚き半分、

そして残りの半分はすごく納得している自分がいいます。

最初から不思議な人だと思っていました。

アリサちゃんを助けてくれた時は気付かなかったけど

あとから思い返して、図書館で何度か見かけていた人だと気付いた。その時から私はずっとこの人を不思議な人だと思っていました。

いつも誰かと一緒に独りぼっちじゃないのに、ちっとも寂しそうでもないのに、

何かを諦めきつた顔をしていました。それを勝手に仲間のようないきもちで見えていたんです。

でも、本当は少しだけ違いました。

この人は自分が傷つくのが怖くないんです。

傷つく人を放っておくほうが怖いのだと気付いて少し羨ましかった。

だからあの時わたしは彼なら受け入れてくれるんじゃないか、って。打算的な気持ちで彼を求めて、そして本当に彼が現れて、我慢できなくなっちゃった。

怖くて怖くて、泣いていたのに、途中から安心して泣いていたのは内緒です。

初めての吸血だったからなのか。

この人の血を取り込んで胸が暖かくなった。

わけもわからず嬉しくなった。

衝動を抑えきれなかったのは本当だけど、

それをもっと味わいたかったのもあったんです。

だから。

私の隣りで、私と一緒にベッドに横になって、私が見つけているこの人に。

とんでもない要求をしたくてたまらない。自分でもその欲が、止められない。

抑制装置のヘアバンドはちゃんとつけてるのに。

「……………ワガママを、言ってもいいですか？」

目はつむっていたけれど起きているのが分かっていたから、答えなんて分かりきったことを聞きました。

「内容によるけど、なに？」

「夜の一族の吸血はどうしても異性の血じゃないとダメなんです。

でも、私はどうも誰でもいいみたいじゃなくて……………」

さつき試しに少し常備されてる血液パックから飲んでみたけれど我慢しても飲めたものじゃなかった。気持ち悪かったとさえ言ってもいい。

だから。

「これからもずっと……あなた、の血を飲んでいいですか？」

あなただけ、と言いつうになつたのをそれだけはやめた。

小さい違いでしかないけれどそれは言い過ぎな気がしたから。

それで正解だつたと思う。だって、一瞬。

本当に一瞬だけ、この人は『痛そう』な顔をした。

あなただけなんて言つたら泣いていたかもしれない。

「ああ、別にいいよ……」

やっぱりそうなんだ。

と落ち着いた顔に“戻した”彼の顔を見て思う。

この人は、それが怖いんだね。

前にアリサちゃんと言つてたことが今ならよくわかる。

コウキさんが時々すごく消えちやいそうだって。

だからきつとその時、誰かを泣かすのがあなたは怖いんだ。

「でも今日みたいに押し倒すのは勘弁してくれよ」

「…はい、気をつけます」

それでもそんな事をいって笑えるあなたが羨ましくて、悲しくて。

泣きそうになる自分を小さなあくびで誤魔化して、

その温もりと匂いにより強くしがみついた。

今にも消えそうなそれを繋ぎとめるかのよう。

“怖さ”はそれがなんであれすぐに消えるなんてことはない。

少し楽にはなつたけど私の中からその怖さは消えてなんかいない。

だからいまは、ちゃんと伝えよう。

私がいまどれだけ救われた気持ちでここにいるのか。どれだけ胸の中が暖かい気持ちでいっぱいなのかを。

(すごく嬉しかったんだよ……あなたが私の初めての人で……)

そう伝えようとしたのですが、今度は本当に眠たくなってそこで意識が落ちてしまいました。

疲れていたのと、使い慣れた枕よりコウキさんの方が遥かに寝心地が良かったせいです。

「あのな、すずか。」

その言い方はすごく誤解を受けそうだから……え？」

だからそれが実は彼に届いていたのだと知ったのは後日。

「……まさか、念話？」

私にも魔導師としての素質があるということが発覚して、

彼を先生にちよつとした魔法の授業が習い事の項目に増えたのは数日後のことでした。

同時刻

一直線に木々が消し飛んだ場所から僅かに離れた森の中。

『傷は大丈夫か？』

開かれた空間モニターから音声だけの通信。

変声機越しではあるが、それには言葉通りの気遣う意志が感じられた。

「……………はい……………」

どこかぐったりとした様子の仮面の男は、その肩をもう一人に担がれる形で立っていた。

「すでに治療は終わって傷はふさがっています。二、三日休めば問題ないかと」

しかし奇妙なことにそのもう一人もまた仮面の男。

同じ背丈、同じ衣服、同じ仮面、同じ声。

まるでそこに鏡でもあるかのような全く同じ存在がもうひとりいた。

『すまなかつたな、まさかお前がそこまでやられるとは……………彼を過小評価しすぎていた』

「……………」

「……どうした？」

沈黙したままの仮面に訝しむような声をかける仮面。
だが、すでにそれは表面化していた。

(……………震えている?)

貸している肩越しに伝わる相手の震え。

それに、あり得ないと思いつながらもそれはまるで怯えているようだった。

「……………デュランダルはまだなのですか!? 早く、一刻も早く封印しなければ!」

『っ、どうした落ち着け。あれの完成にはまだ……………』

「あれは……………あの男は我々が考えていたような男ではありません! もしっ、もし我々が失敗してあいつが闇の書の力を一時的にせよ使うことになれば

絶対に過去の事件とは比べ物にならない悲劇を起こします!」

「しっかりしろ! そうさせないために私たちは……………」

「違う! 違うんだっ、あの目は、あの顔はっ、何も見てなかった。何も考えてなかった。

そのへんの石ころでも見るみたいに見下ろして、すべてを見透かしてっ、

あんなのは……………違う、あれは違う……………」

『なにが、違うのだ？』

「……人間じゃない、あいつは人間じゃない……夜の一族なんて可愛いものだ。」

あいつこそ本当のバケモノだ、お人好しの顔をしたモンスターだ！
いちやいけない！ あんな奴はいちやいけないだ！

すぐに封印、いやそれは次でいいはずだ！ あいつはすぐさま始末をつー！！」

『……………』

「がっ！？」

今にも自らの言葉を実行に移そうとする仮面の首に手刀が叩き込まれた。

意識を失った身体を叩き込んだ張本人が担いで抱え直す。

『…………正直、私も意外だったよ。』

ここまで怯えさせるほどのモノを彼が隠し持っていたとは……』

「これからどうしますか？」

『一度連れて戻れ、どちらにせよ休養させて落ち着かせなくては“表”にも支障が出る。』

彼らの監視は念のためステルス型の新型サーチャーで引き続き行

『っ』

「了解しました」

『……………彼への干渉の仕方を今一度考え直さなくてはな……………』

それを最後にモニターは閉じられ、仮面の男たちも姿を消した。

この一件でより深くコウキの性質を理解した彼らはしばらく接触を控えた。

だが、それゆえにその性質をコウキは決定的な場面で利用されることになる。

酒盛り

管理局本局。

それは一見巨大な建造物のように見えるが

次元の海に漂っている以上、分類は艦ふねとなる。

常に同じ地点に停泊しているためその役目はもっぱら港だが。

しかしその巨大さはさながら街、下手すれば国とさえ呼べるものだ。

ここには当然ながら管理局が必要とするあらゆる機関が集中しているが

それと同時に働いている局員たちの居住区や娯楽施設、飲食店なども充実している。

その中の一軒。地球でいうところの居酒屋のような店舗の個室で本局では有名人の部類に入る妙齡の美女提督が向かいあって飲んでいた。

「あああつ！ 美味しいわね、このニホンシユっていうお酒」

「他にも色んな種類のお酒があったけど立ち寄ったのはニホンだったから、

その国のお酒がいいと思ったのよ……クロノの目を盗んで買いに行くの大変だったんだから……」

艦船任務が主だった仕事となるリンディ・ハラオウン提督と

人員や艦船の配置などを取り仕切る運用部勤務のレティ・ロウラン

提督。

ふたりは入局当時から親友で互いに一番気心知れた同僚だ。そしてリンディが本局に戻る度に時間があれば事件の話を肴にレティが現地の酒を呑むのが彼女たちの事件後の息抜きの一つだった。

しかし今回は珍しくリンディもかなりのペースで呑んでいた。ザルだが酒の種類によってはすぐに酔ってしまうレティよりも顔が少し赤い。

「……あ、ねえレティ、あなたこれどう思う？」

だからだろうか。

リンディはある映像データを彼女に向けて再生した。

『あの、送ってもらった服を着てみたんです……どう、ですか？』

空間モニターの中にいる少女。

金髪の彼女は少しだけ着飾って、はにかんでいた。

『似合ってるって思ってもらえるなら、嬉しいです』

頬を朱に染めて照れながらも、その眼差しは熱い。

誰しもが思うだろう、プレゼントの贈り主への少女の感情を。

「どうもなにも、十中八九恋する乙女そのものだと思うけど？」

「……………そうなのよねえ……………」

それをそのままずばりと直球で口にするレティにリンディは少し複雑な顔をしている。

フェイトとアルフの契約記念日に送られた彼女たち用の衣服。フレセント
これはそのお礼のビデオメールの一部である。

「この子ってあれでしょ？」

ジュエルシード事件の重要参考人で今度、私が囑託の試験する子

「うん、フェイト・テストロツサさん。

すごくいい子でね、いまうちの子にならないって口説いている最中」

「あら、珍しいわね。あなたがそこまで関係者に思い入れするの」

「だって、ホントにいい子なんだもの……なのに、どうしてあんな男に惹かれるのかしら」

愚痴のような文句と共にビンから酒を注ぐリンディ。

一方、その言い方にレティは少し酔いがさめたような気がしてずり下がった眼鏡をあげた。

付き合いの長さからくるそのニュアンスのおかしさに気付いたからだ。

(……………あんな男、ねえ……………)

今までの彼女との付き合いでそう評された男性を彼女は一人しか知らない。

これはもしかしたら、と僅かに期待しながら珍しく聞き役にレティは回る。

「今までの環境が特殊だったから恋だつて自覚はないんだけど、あんな顔見せられたら、あの男はやめときなさい！なんていえないわよ……」

それこそまだ母親でもない自分としては、と付け加えてグラスを煽る。

「もしかしてその相手の人って前に言つてた非公式の方の現地協力者？」

事件関係者であるフェイトと関係があつた男性というとその人物しかレティには思い浮かばなかった。

その存在は完全にオフレコで記録には残っていないがリンディから話だけは聞かされていたのだ。

曰く『自己犠牲が強すぎる人』『頭はいいのに不器用』『敵にしたくない天敵』とのこと。

ずいぶんとリンディらしくない評価をさせたレティは相手に感心していた。

だつたのだが。

「そつ！ 関係なくせに事件に首突つ込んできて好き勝手言つて、やっつて、

そのうえ最後には、ほら俺の計画通りだ、みたいな顔して満足して事件関係者をひとり自分の家にお持ち帰りするような男よ！」

笑顔でおすすりめできる男じゃないわよ、と一人憤るリンディ。

その言葉に容赦はなく、いまその人物がいれば殴り掛かりそんな勢いさえあつた。

(シラフの時と言つてる事が全然違つ……どっちが、いいえ、どつ

ちも完璧な本音じゃないわね)

リンディという女性ほど腹の中を読ませないようにしている人間はいない。

とレティは考えている。たとえ酔っていても本音を語っているかはかなり怪しいのだ。

それは嘘をついているわけではなく肝心な本心を微妙なニュアンスで巧妙に隠すから。

付き合いの浅い相手だと隠された本心を推察するのは難しい。深くなるとそうでもないのだが。

だからこそレティはリンディが悪酔いしてるのではなく悪酔い“したい”のだと判断する。

「この前もあれよ、突然アースラに連絡してきて何の用かと思えば、

『なんとなく顔が見たくなって』よ!？」

ここは自分は愚痴を聞くべきだろうとあえて聞き流す。

単純にそれは口説き文句ではないかとレティは思ったが口にはしなかった。

それに続く言葉でその可能性は否定された。

「誤魔化すにしたって他に言い方ないのかしらね……まったく、困ったなら素直に言いなさい……」

それに少しレティは驚いた。

ここでそれをいうということは実際には言えなかったからに他ならない。

口説いているような言葉の裏の感情を読んだくせに、それを指摘できなかったのだ。

様々な“話し合い”においては右に出る者はいないとさえいわれる

この提督が。

「……………リンディは、頼ってほしかったわけね」

だから、クスクスと楽しそうに笑いながらレティはその本音をぶちまけた。

リンディはリンディで唸るだけで肯定も否定もしなかったが態度で全部示している。

「……………なんでもかんでも一人でやろうとして……………できないって分かってても

誰にも頼らないんだから、どれだけの人が心配してると思ってるのよ。

まったく……………少しは痛い目見ればいいのよ!」

それが解ったからか。さすがに親友相手では隠し切れないと悟ったか。

彼女は少しだけ本心を吐露した。が、しかし返ってきたのは意外な反応。

「ふふ、ふ、ふふつ……………あはははははっつ!!」

突然の大笑い。それも本気の、である。

彼女、レティは腹を抱えて机をバンバン叩き、遠慮のない笑い声を発した。

それにムツとした顔をするのは当然だが、非難する言葉は出ない。笑っている理由にリンディはすぐ思い立ち、自らの失言に気付いたのだ。

「あははははっ、あー、おかしい!

それ……前に誰かさんが誰かさんに向けて言ってた事まんまじゃない？」

「……うるさいわよ、レティ……」

「あら怖い怖い……」

据わった目がレティに注がれるが、彼女はどこ吹く風とばかりに笑うだけ。

その態度に美貌が崩れていくなか黙って彼女はグラスを差し出す。

レティはいはいとグラスいっぱいまで酒を注ぐ。

リンディはそれをグビグビと一気に飲み干した。

「あああゝゝ！ もうっ！！ レティもあの人も結局私の敵なのよ！

そうよ、どうせ私が悪いのよっ……それでいいんでしょ！？」

「そこまで言っていないじゃない」

（いい感じに壊れてきたわね……）

レティに付き合ってよく一緒に飲む彼女だが、

それはザルのレティと同程度飲めるというわけではない。

ペース配分を誤らないため結果、限界を超える飲み方をしないだけ。

「言ってるわよ！ ほらっもう一杯！」

その限界をとつくに超えたペースで飲めばこうなるのは当然。

もはや言葉を見繕う余裕はなくなりリンディ・ハラオウンの仮面は崩れている。

「……で、あなたはその彼をどう思ってるわけ？」

「どうってなによ？
ただのいけ好かない男よ……いつつもかっこつけてないとダメな
ナルシストね、あれは」

(うわぁ……よくもまあこじまで……)

荒れたものね。とレティは呆れ半分、喜び半分だ。

彼女は人が荒れそうな事には荒れなくせに妙なことで荒れてしま
う困った女性だ。

元々が『誰かを幸せにする』『幸せそうな人を見る』のが好きなタ
イプなせいか、

自分が嬉しくさせられたり楽しくさせられたりすると困ってしまい、
最終的に荒れる。

そして自分をそんな風にした相手に対してのみ直接的な暴言を彼女
は吐くのだ。

(クライドさんと出会った当初もこんな感じになったのよねえ……)

昔を思い出してクスリと笑う。

その当時のふたりを知る面々は今でもみな口をそろえていう。

『未だにどうして二人がくっついたのかわからない』と。

それぐらいなまでに傍から見ると良好な関係とは見えなかったのだ。
ただ実際は

(暴言吐きながらも毎度毎度、クライドが、クライドがって彼の話
ばっかりだったからね)

ということだったらしい。

ようするにリンディ・ハラウンという女性は周囲からの高い評価

とは裏腹に

気になった異性に対する態度がひじょうに幼いのである。

「……………何がおかしいのよレティ……………」

「ううん、リンディにもようやく二度目の春が来たのねえ、と思っ
て」

「……………ふーん、なかなか面白いこというのねレティって
底冷えするかのような冷たすぎる声が個室に響く。
それはかつてジュエルリード事件でブリッジを固まらせた時以上の
低音と冷気。」

それだけで温度が10度は下がったんじゃないかと錯覚するほど。
顔は笑っているがレティに向けられた目はまったく笑っていない。
ここにもし第三者がいたらその人物は縮み上がって逃げ出すことも
出来なかっただろう。

だが、幸か不幸か、そこにいたのあまりに付き合いの長い親友。

“この程度”で臆していたらリンディと友人関係など築けていない。

「はあ……………それだけ威圧するって事はそれなりに気にしてる証拠じ
ゃない」

溜息ひとつで彼女のかなり本気なそれを受け流し、その内心まで看
破する。

リンディが周囲を威圧するのは単純にその内側の動揺や感情を悟ら
せないため。

普通なら返ってバレてしまいそんな雑な隠し方なのだが彼女の場合、

その威圧が強すぎて耐えられるか受け流せる人物でなければそこに気付けぬ。

「……いい頃合なんじゃない？」

だからレティはそれこそとびきり優しく問いかけた。

入局からクライドとの出会い、恋愛、結婚、そして死別を見てきた。女手一つで仕事と子育てに奔走していた姿も知っている。

その間、一度として荒れていないことも。

「あんなに小さかったクロノくんはもう立派に一人前。大人の考え方もできる。」

それにあれから11年よ。クライドくんへの義理はもう充分果たしていると思うけど？」

無二の親友として彼女に新たにいい人が、彼女を荒れさせられるほどの人が現れたのなら、レティとしては応援する心づもりだったのだ。

「………そんなんじゃないわよ………だいいち、あいつはクロノと同じ年なのよ」

「え？」

しかし、さすがにレティもそれには本気でびつくりしていた。リンディから聞かされていた話から想像していた人物像はもっと歳が上だった。

それでも彼女からすれば年下であるとは思っていたが、

まさか本当に親子ほどの歳の差だったことに啞然とする。

「ああ……確かにそうなると軽く犯罪ね……」

「なによっ、歳の差だっていいじゃない!？」

「……………リンディ、あなたは私にどうしてほしいのよ?」

いくら酔っ払いが相手とはいえ理不尽な返しだ。

歳の差から否定したくせにそこをいうと怒るのだから。

(まあ、ようするに気になってはいるけど歳の差や

他に好意抱いてる子を知ってるから認めたくないわけね……)

そう考えるとフェイトにおすすめでできないというのも別の意味に聞こえてくる。

レディの脳裏にはクライドが他の女性と話しているだけで半眼になっていた姿が思い返される。

(嫉妬深くせして頑なに想いを認めようとしなからクライドくんは本当に大変だったわよね)

もつとも結婚後に聞いた話によれば『そこがよかった』と惚気られたので

レディとしてはもう勝手にやってなさい、という気分になったが。

「まったく……じゃあ歳の差が無かったらどうしてたのよ、あなたは?」

「え……………」

一瞬、酔いがさめたような顔でハツとなるリンディ。その可能性をまるで考えていなかった証拠である。

「……………どうしよう?」

酒の場でのたられればの話だというのにかなり本気で考え込むリンディ。

そのどこか不安そうな顔にまたも一人で爆笑しそうだったレティは今度は何とか堪えた。

「ふふつ、あなたってホントそういう所は成長しないのねえ……………」

けれど少しだけ微笑むように笑って、かつての日々を思い出す。

昔から大人の女性として見られ実際上司として母親として成熟している彼女だが

こと男女の関係となるとその未熟っぷりは見ていて呆れるほど。

頭が良すぎる、洞察力が高すぎる弊害というべきか。

相手の一挙手一投足を深読みしすぎて掘られてもいない落とし穴に自ら落ちていく。

それは傍から見ているとあまりに滑稽すぎて嘘くさい光景だった。

また当時から誰もが振り返り、憧れる美貌とスタイルを持つてはいたが

それを使うのが苦手でありその対象にされると弱い。

あくまで気になっている男性からのみ、というのが妙な所だった。

だからまだ関係が浅かったレティは計算かと思っただほど。

親しくなるにつれそれが素であると知って大笑いしたものである。

結局のところクライドとの関係がなかなか周囲に認知されなかったのは

リンディのそういうところが原因だったのだ。

「ああん、もうっ！ 悪かったわね！ どうせいつまでたっても子供よ！」

「拗ねない、拗ねない……で、ホントの所どんな子なのよその人って」

言いたいことがあるなら全部聞いてあげるわよ。

と巧な誘導と酔いも手伝って、リンディは語りだした。

それはほとんど愚痴でしかなかったが、レディにはその裏が読めていた。

「子供のくせに大人ぶって」

（子供らしいことができないのよ）

「あれだけ慕われているくせに独りよがりで」

（あんなに想われているのに独りぼっち）

「かつこつけて、いい男ぶって」

（そうしないと自分を保てなくて）

「好き勝手なことばっかやって」

（自分のことなにも考えてないのよ）

「そうしていつつも私をイライラさせるの……」

（だからいつも私の心を震わせるの）

「ほんと、むかつくわ」

（本当に、気になってしょうがない）

「いいかげん、しっかりしてほしいわ」
(わたしが、なんとかしてあげたいの)

吐き出される言葉とは裏腹な感情を的確に読みながら、
レティは相手を見てもないのに「本当に二度目の春が来たな」と
半ば確信するのであった。

「じつじつ……」

一通りの愚痴を吐きとおして机に突っ伏し潰れた彼女を肴にグラス
を煽るレティ。

「よくもまあ、ここまでリンディを荒れさせたわねその子も……」

(……その、子？ え、ちょっと待って、子供なのよね？)

ミッドの感覚というところ15はちょうど大人と子供の間ぐらいだが、
表現としてはその歳の子をリンディなら「その子」と表現するはず
だ。

「一度もそういわなかったわね……何よ、とつくに“男”として見
てるんじゃない」

と同時に、彼女が一度としてその人物の名前を口にしなかったこと

も気付く。

それはオフレコが存在だから、だけでは決してない。

「律儀というかこだわるといふか。」

そんな線引き自分でして、あとでどうなっても知らないわよ?」

人一倍、男女の駆け引きが苦手なくせに。

それっぽいことしようとするんだから。とクスリと笑う。

(呼べるようになれたら本気でいってみようかしら?)

みたいなこと考えてるんでしょ……甘い、甘い、その頃にはあんな抜け出せなくなってるわよ)

結果、自分で自分を追い込んだ彼女がやけっぱちでガンガン攻めたから

クライドと彼女は最終的に夫婦になったのでレティとしてはどちらでも良いのだが。

「さて、名前も知らない誰かさん……リンディは手強いわよ……」

攻めるにしろ、攻められるにしろ。彼女以上の難敵をレティは知らない。

そんな存在に目を付けられた不幸と幸福に、レティはその彼に笑みしかこぼれない。

ま、頑張っつてね。と聞こえもしないエールと共に

日本酒の最後の一滴まで彼女はひとりで飲み干したのだった。

ちなみに二人とも酔いつぶれるという珍しい状態になったために
両人とも息子が迎えにきて、互いに謝りあう状況となったが、
リンディはその夜のことをほとんど覚えていなかった。リンディだ
けは。

「ふふふ、なんか初めてリンディの弱みゲットしたかも」

結局のところ。

この事実をレディに知られたことが後のとんでもない騒動を引き起
こす原因に

なってしまうのだがそれはまだ、まだまだまだ、先の話である。

酒盛り（後書き）

酒の席での大人の会話を目指していたのに、どうしてこうなった!？

とはいえ、まあ、うちの話の中ではリンディさんはこういう人です。
俺の趣味全開の設定だよな、本当に。

次が一応9話ラストとなります。

奮闘記、続く(前書き)

一応、9話の終わりであると同時にA、S編の前振り………になって
ないな(汗)

奮闘記、続く

「まだ、時間がかかるな……ん？」

日野家の誰も眠っている時間。

俺はトイレから出るとリビングの方から明りを感じた。

電気はすべて消したはず。

なら消し忘れか、それとも誰かがいるのか？

念のため侵入者も想定して、少し気配を消して忍び足で進む。

物陰からリビングを覗き見て、明りの正体にまず気付いた。

テレビである。

画面がついており何かしらの映像を見せていた。しかし音はない。音が出ていれば、俺より他の連中が先に気付いたであろう。だが。

そのヘッドホン、どこから持ってきたんだ？

思わずそれを装着して画面を見ている奴にツッコミそうになった。

おそらく他の住人たちを気遣ったことだろうが、

まさかそれ、あのたいした金額じゃない小遣い貯めて買ってきたのか？

我が家はひとりで音楽聞く奴いないからな。

100円ショップか何かで安いイヤホンでも買えばいいのに。

わざわざちゃんとしたこのヘッドホン買ってくるなんて。

そんなにいい音でその“声”を聞いたかったのか、まったく。

笑みと一緒に溜息が漏れそうになるのをこらえて画面に映る少女を見た。

フェイト・テストロッサ

彼女から送られた何枚かのビデオメール。あれは一週間くらい前に届いた奴だ。

嘱託魔導師認定試験の合格祝いに贈ったプレゼントへのお礼のビデオメール。

映像の中でフェイトはぬいぐるみを抱きしめながら『ありがとう』
と喋っている。

「……怖いから見ないって駄々こねたくせに夜中一人で見てたのか
……」

まったくもって変な所で素直じゃないというか。恥ずかしがり屋と
いうか。

けれど自主的に見ているんだ。邪魔しては悪い。
黙って、気付かれぬよう部屋に戻る。

つもりだったのだが。

「え？」

その人影が急に倒れた。

「おい！」

慌ててリビングに入ってソファに駆け寄ると彼女はそこで横になっていた。

とうか座っていたこいつが倒れてうまいこと眠るように横になっただけだったのだが。

「って、本当に寝てるし……」

それも今しがた寝た様子でもない。

これはそれなりに前から寝てたな、こいつ。

ビデオの再生機を見ればリピート再生状態。

寝てる彼女の顔を見れば、目元を濡らしたあとと握られた湿ったハシカチ。

何度も何度も見返して、ボロボロ泣いて気付けば眠ってしまった。といったところか。

泣き疲れて座ったまま眠るなんてお前は赤ん坊か！

とは、さすがにすごい顔して寝てる女にいうのは憚られる。

だって、多分すごく緊張していたしここ数日はあんまり眠れてなかっただろう。

「徹夜して作ってたもんな、お前……」

起こさないように気を付けながら、涙をぬぐう。

あれでフェイトに気に入ってもらえるかどうか不安で不安でしょうがなかったと思う。

でも、ほら、画面の中であいつ嬉しそうに笑ってるじゃないか。
“お前が手作りしたぬいぐるみ”を抱いて。

試験の話聞いて、落ちることはまず無いだろうからお祝いにプレゼントをしよう。

という話を言い出したのは俺だ。当初は私はできないだの、アイディアもないだの。

いろいろ言い訳して彼女が逃げ回っていたので俺とはやてで似合いそうな服を選んで送ろうとした。

ところが送る日になって突然こいつが絆創膏だらけの手でぬいぐるみを黙って差し出した。

家事万能に見えた彼女も実は裁縫は不得意だったが、なかなか良くできていたと思うぞ。

本人は隠していたつもりだったのだろうが、明らかな寝不足っぷりと日に日に増えていく指のキズに気付かないほうがどうかしてる。

だからこっちはお前が中々出してこないから間に合わなかったのかと冷や冷やしてたんだがな。

まあ、さすがに出てきたぬいぐるみがなんで山猫がモデルだったのかは

リニスから話を聞くまでよくわからなかったけれど。

「……………よかったな、プレシア」

囁くように呟いて、ゆっくりとヘッドホンを外す。

だがどうもそれがいけなかったようだ。

「……………あ、ん……………「ウキ……………?」

「あつ、悪い。起こしたか？」

まずったな。

起こさないでこのまま部屋に運ぶつもりだったのに。

なんてことを考える暇もないぐらいに、ガバツという擬音と共に起き上がるプレシア。

「……………み、見たんですか？」

なにを、とは聞かなくても分かる。

ようするにここで自分がしていたことを見ていたか、と聞いている。微妙な半笑いの顔はそうではないといってくださいと言っている。

だから俺は。

「見てないことにしてやってもいいぞ」

「……………ううっ……」

知らず意地の悪い顔をして、遠回しに見ていたと告げた。

みるみる真っ赤になったプレシアは手で顔を覆って、俯いた。

「そんなに恥ずかしいことか？」

「……………だって、泣き顔見られたくないからひとりで見ってたんですよ。

なのに、ばつちり見られたうえ気付いたら拭われた後なんて。

……………もうどんな顔をしてあなたを見ればいいのか分かりません！」

ああ、そういうこと。

一人で見てたことじゃなくて、泣いてた顔を見られなくなかったわけね。

というか、ビデオ見ると泣く確信があったのか。

だけどな。

「いま起きなかったら、起きたら部屋っていうパターンだったけどその方がよかった？」

「あつ…それは……そっちの方が困ります」

だろうな。

リビングで寝たのに朝ベッドの上。

何をしていたのかバレた上に誰が運んだのか分からない朝。

なんていうのはきつとこいつには難易度が高すぎる。

寝起きからパニックるこいつの相手はちよつと大変だ。

そつだと分かっていたのに運ぼうとしていた俺は本当に意地が悪い。

「……で、どうだった。ビデオの感想は？」

「っ！？」

で、その意地が悪い俺としてはこのチャンスを逃すわけもなく、さらにプレシアを追い詰めてやるのであった。

「正直に言えば、他の奴には黙っててやるよ」

「うつつ……嬉しかったです。」

フェイトが、あんなにも笑って、喜んでもらえて……

だからいっぱい泣いてしまいました」

「そつか……良かったな」

「……………はい」

まだまだ不安なことはありそうだが、
それでもプレゼントを喜んでもらえてプレシアは本当に嬉しそうに
頷く。

けれど、なぜか急にその顔が沈みだす。

「どうした？」

「……………ビデオを見ている最中に思い出したんです。」

アリシアが欲しがって、指切りまでして約束したプレゼント」

「ん、ああ……………そんなこと言ってたなお前。」

あの子、何を頼んでいたんだ？」

もう直接あげることとはできないが、

俺にも用意できる物なら、お墓に供えるぐらいはしたい。

「えっと……………」

だが、ようやく思い出せたプレシアはなぜか少し戸惑い、言い澀ん
でしまう。

言いたくないというよりは、その困ったような顔から察するに言い
辛いだけのようだが。

「なにかおかしい物なのか？」

「いえ、その、おかしいわけではなくて……………ただ……………」

「ただ？」

「……………妹が欲しい、と……………」

……………

「ああ……………それはなんとも……………」

難しい注文だ。

きっとアリシアの無邪気で無茶なお願いを断りきれなくて
結局、頷いて約束してしまったプレシアの姿が目に見えかぶ。

そのあとでどうしようかとひとり無駄に悩みまくっていた姿も。

あの子の笑顔には、こう何か、相手を頷かせてしまおう不思議な魅力
があった。

それはどうも母親にも有効だったようだ。

でもそうか。

だからあの子は全部の事情を知ったうえで、

あんなに簡単にフェイトを『妹』として受け入れていたのか。

「アリシアはフェイトを妹だと思ってくれるかしら？」

「は？」

「フェイトはアリシアを姉だと思ってくれるでしょうか？」

「……………」

そうか。

それが表情が微妙に暗くなった理由か。

本人と会えた俺やリニスは確信できているが、そうでないプレシアや

そしてフェイトはアリシアがどう思っているのか一生知ることはできない。

それにしても「かしら」に「でしょうか」か。
ずいぶんとアリシアに対して近くなってきたな。

フェイトに対してはまだ悩み中といったところか。

「私はまだ、アリシアの母親に戻れたとは思えない。

けど、あのふたりには姉妹でいてほしいと思っている………勝手ですよね………」

自らの逃避と暴走が招きよせた意外な形での妹の誕生。

知らされることのなかった真実と虐待の原因ともいえる姉の存在。

互いが互いに、いい感情を持っているのか。プレシアは不安なのだ。

不思議な縁で姉妹になってしまったふたりに、

母親と名乗れない自分だからこそ姉妹として思い合っていてほしいという願い。

取りようによれば勝手だが、けれど切実で暖かな願い。

「いいんじゃないか………思うことはなんだってお前の自由なんだから」

「わたしの、自由？」

でもな。お前のそれは取り越し苦労もいとこだぞ？

「それにな、アリシアは欲しがってた妹を得て、

フェイトはその暖かな記憶を受け継いだ………どこに不満があるってんだ」

「…でも、わたしはあなたが言うような良い母親だったとはとても…」

まだそんなこというか、こいつは。
このさいだ。はっきりと言ってやる。

逃がさないように両肩を正面からがっちりと掴む。
困惑する顔をまっすぐに見据えて、断言する。

「一緒に暮らしている俺が保証する。お前は絶対に良い母親だった。そんなお前に育てられたアリシアとその記憶を持つフェイトだぞ？ お前が不安に思っていることになんかなるわけがない。絶対にな」

だからお前ももっと安心していいんだ。

肩の力抜いて、ちょっとだけ楽にすればいい。
そうすればっ、っておい！？

「…ずるいです、あなたは」

いやいや、待て待て、いきなり抱きつくのもずるいと思うのですが
！？

ぎゅっとするな！ 柔らかくて大きいのが押し付けられて、って違
う！

ああ、でもやっぱりいい匂いが…ってやめないか俺！？

直接触れ合っと感じる妙齡の女性の柔らかさと温もりは
いとも簡単に俺から平常心を失わせる。

「……あなたは時々、ひどいくらいに優しいです」

今度はこっちが真っ赤になってしまったのを知ってか知らずか。プレシアは独白するかのよつぱつと語る。

「初めはあんなに責めたくせに、あとからこんなに優しいのはずい……」

ずるいと責める言葉をとても優しく愛おしげに言われて知らず動悸が早まって心臓がうるさい。

彼女に聞こえてしまうのではないかと思うほど五月蠅い。

「このままずっと離れたくなくなってしまいそう……」

甘えてる、依存してると思われても……こうしていたいと……」

思ってしまう、とプレシアは本当に誰にともなく口にした。

俺しかいない場所で俺を抱きしめながらも、誰に向けても語っていない。

彼女は自分に向けていつている。それらを確認するかのよつぱつ。まるで決意をあらたにするよつぱつに。

「さっき言いましたよね、思つのは自由だって、」

なら少しか、自分の思う通りにやってみようと思います」

なにを、とは言えなかった。

それより早くにあまりに衝撃的で、それでいて甘美な感触が“頬”に襲った。

「ちゅ……今日までのお礼には足りないけど、したかったのでした……」

こっちが抱きしめられて動けないのをいいことに。

いや、それは嘘だ。抵抗しようとするればできた。しなかったんだ、俺は。

その気配に、その動きに、俺は逆らわなかっただけ。

「……………母親に戻る前に、女に戻ってしまったのはあなたですからね」

そんな、茹蛸になるようなことまでいわれて、

こっちがなにか言い返せるわけもなく、まともに喋れなくなった俺にプレシアは少しだけ嬉しそうにクスリと笑うと俺を解放する。

「おやすみなさい……………」

そんな一言だけを残して、彼女は自室に向かっていく。

逃げるような動きだったのにその背中嬉しさを隠そうとしていなかった。

「……………」

取り残された俺はしばらく呆然とそれを見送ってしまう。

かなりの間、思考が止まって気付けば時計の針は15分以上進んでいた。

「ああああ……………」

溜息のような、弱々しい悲鳴のような声をあげてソファに倒れこむ。

「……………親子して、やってくれる」

大人だった分、唇と唇というのは避けてくれたのだけが救いか。さすがにあの体勢で、あの流れで唇同士をされたら理性が保った自信がない。俺だって健全な男子だってんだ。鋼の理性ももう限界だよ。

「……………いいかげんにしろよ、お前っ！」

だから、怒りがあふれてくる。

「何人目だよお前……………答え出せるのかよ、責任とれるのかよ……………」
ひとりひとりの想いに対して。
それを抱かせてしまった男として。

「なんでだよ……………何でみんな俺がいいんだよ……………」
「こんなくそつたれな男の、どこが……………」

分からない。
俺には分からないよ。
頼むから、これ以上はやめてくれ。

「もう背負えない……………背負えないんだ。」

そんないつぱいもらっても、俺には返せない。
時間がもう……もう、ないんだ……」

誰もいないのをいいことに呟くように独白して、俺は目を閉じて意識を闇に手放した。

『……………出るタイミングなくしちゃったじゃないですか』

静まり返ったリビングで、そんな言葉を口にする者がいるとも知らずじ。

奮闘記、続く（後書き）

リニスにこの話を聞かれたことが、
のちの事件のキツカケになってしまふのだった……。

ちなみに明確に日付を考えてませんが、これは10月の中ごろの話
です。

囑託の試験が9月だったらしいので、それぐらいの時期の話だと思
ってください。

第10話予告

フェイト「まだ、この時のわたしたちはなにも知らなかった……」

クロノ「何が起こっているのか。」

これから何が起ころうとしているのか。それさえも……」

なのは「そして私たちは、何も知らないまま最後の十二月を迎えたいんです……」

リンディ「それがたったひと月の……悲しくも長い戦いの始まりでした……」

フェイト・なのは「次回、魔法少女リリカルなのは異伝・第10話」

リンディ・クロノ「『運命のDecember始まる』に」

全員「ドライブ、イグニッションッ!!」

「コウキ」お願いだ……もう、やめてくれっ！」

第10話予告（後書き）

いまさらだけど、この予告、後書きでやればよかったと後から気付いた。

いまさらなので、このままで行きます。

黒い襲撃者（前書き）

A・S 編スタート。

やっぱ A・S はここから始まらないと。

それは小さな願いのはずだった

望んだのは家族の幸福で、

求めたのはそれを掴むための力

けれど

いくら手を伸ばしても答えはなく、

闇の中を模索し続ける日々が続いて

結局、決断ができないまま

時間だけが過ぎていく

ならこれは罰なのだろうか

答えを先延ばしにした俺の、

願いを、変えてしまった俺への

12月1日 PM08:37

月村邸 すぐか私室

あれから事件らしい事件は何もなく月日は進んでいました。私は言い出すタイミングを中々見つけれず、身体のコールド魔法という力のことをなのはちゃん達に話せてはいませんが、変わらない日々を……うっん、前とは少し違った日々がとても楽しい毎日です。だってまさか、みんなと恋の話ができるようになるなんて思ってたから。その“みんな”して『同じ人』なのが時々、いいのかな、という気持ちにさせますが、私たちは相変わらず仲良しで恋のさや当てなんて起きる気配すらないのです。

「え、クリスマスが誕生日なの？」

そんな会話を電話となのはちゃんとしていたら、

話の流れで初めてそれを知りました。

『うん、そうなんだよ。』

昔から「俺だけプレゼント毎年一つ少ない」って愚痴ってたけどね。』

その様子が目に浮かんで少し笑ってしまう。

コウキさんは時々子供っぽいことを気にしていじけたり拗ねたりする。

魔法の授業をしていく中で私があの人より魔導師として才覚があると分かって

ちよっと悔しそうにしていたのが印象に残ってる。

「じゃあ、その日はみんなでパーティしようよ。」

いつかのはやてちゃんの時みたいに」

『うん、そうだね………それまでに帰ってこれるといいけど』

最後だけ、なのはちゃんは心配そうに言った。

それに私もうんと頷いて、いまは海鳴にいないみんなを想った。

半月くらい前から日野家のみんなは外国に行っています。

旅行、ではなくて正確には遺産相続の問題らしいです。

亡くなられたご両親の外国にある資産をコウキさんが引き継ぐのに少し問題が出てきたそう。直接現地に行かなくてはいけなくなったと聞いています。

それがどうしても長期化しそうだったので全員で行くことになった
そう、

時々連絡は来るけれど、帰る予定はまだまだ決まらない。らしいで

す。

「大丈夫だよ、きつと……それよりプレゼントどうしよっか？」

なんて話を戻しながら、少しだけ疑っていることが頭にある。

海鳴にいない理由は本当にそれだろうか？と。

私は今まで隠し事をずっとしていたせいか、誰かのそれにも敏感になってる。

勘みたいなものだけど嘘をついて何かを隠している気がする。

あくまで勘だから、確信はなにもないけれど。

『ああ、うん。そうだねえ……やっぱりそ　　』

ブチツという音と共に電話が切れてしまう。

あれ、と思うより先に何かいいような嫌な予感がした。

何気なく耳元から離れた携帯のディスプレイを見て、それは確信した。

すぐさま私は履歴のなかからコウキさんの番号を見つけて鳴らした。

『どうしたすずか、何かあったのか!？』

ワンコールも鳴りきらないうちに彼は出てくれた。

それだけ気にかけてくれているのは素直に嬉しい。

けれど、今はそれに浸っている場合じゃない。

「大変なんです！

いまなのはちゃんとの電話が結界に遮られて切れちゃったんです

!?!」

『っ、なん……だつて……まさか!?!』

あんな事があつたから私の携帯はプレシアさんとお姉ちゃんが改造していたんです。

結界の中からでもかけられたり簡易ストレージにもなっていたり。そして切れたディスプレイにはその事実が表示されていた。

「コウキさんわたしどうしたらっ!?!」

不安で胸が押しつぶされそうだった。

私が襲われた理由は未だ釈然としない所もあるけれど、彼絡みなのは確かだったから周囲の人たちにいつも以上に気を配っていたのに!

『……いいか、すずか。お前は絶対家から出るな!』

なのはの方は俺たちに任せろ! いいなっ、絶対に出るんじゃないぞ!?!』

「待つてコウキさんわた」

わたしも行く。という言葉を使い終えるより早く電話は切られてしまった。

リダイヤルしてみたけれど、今度はいくらコールしても彼は出なかった。

念のためもう一度なのはちゃんにかけてみたけれど繋がらない。ディスプレイには『結界内のため通話不可』とだけ表示される。

この携帯はこちらが中なら結界の外へと連絡できるけれどその逆は出来ない。

「なのはちゃん、コウキさん……」

思わず携帯を両手で握るように掴んでふたりの無事を願う。しかなかった。

「行く」と口にしかけた私だけどこからなのはちゃんの家までの距離を考えると

あまり現実的な距離じゃない。夜の一族の身体能力で全力で走ればすぐにつけるけど

それだけで私は体力を使い果たしてしまいそう。

何か起こっているのだとしたらそんな疲労困憊じゃ役になんて立てそうにない。

魔法で空を飛べても空戦や高速飛行なんて全然できない。

それにコウキさんが絶対に家から出るなと言った意味も分かる。

なのはちゃんのことを陽動である可能性や別の仲間が私を襲う可能性。

あり得なくないそれを防ぐためにあの人は私に出るなと念を押し込んだ。

「お願い、無事でいて……なのはちゃん！」

私には本当に、それを祈ることしかできなかった。

12月1日 PM08:51

海鳴市ビル街 結界内

親友との電話中に海鳴市の一角を突如覆った結界。

そこは彼女、高町なのはの自宅も含まれていた。

結界の中に取り残された彼女は異変を察知したことで愛機と共に家を出た。

移動していく街中に自分の姿しかないことでは自分だけが結界に取り込まれた事を悟る。

「レイジングハート、これって狙われてるのわたし!？」

『おそらく……反応も追ってきています、ですが……』

結界が張られた時からなのはを追う反応。

相手の目的がなんであれ自宅周辺でそれと接触するのは避けたい為に出たのはだったが、

不思議と反応は追ってはくるがそのスピードには疑問があった。

「誘い出されたかもしれないってこと?」

『可能性はあります』

空を飛んでいるのは分かっていたがそれにしては遅かった。

まるでなのはがここまで来るのを待っていたかのようにも取れる。

だからあえて開けた大通りの道の真ん中に立って、追ってくる反応の方角を見据えた。

逃げ続けてもいいが現在この海鳴において魔法関連の事態に対応できるのは自分だけ。
という立場がなのはからそれを奪っていた。正確には違うのだがなのははそう思っていた。

それにフェイトという出会いがあったこともあって、何か事情の抱える誰かがこんなことをしているのなら話を聞いてあげて内容しただけで力になってあげたいという想いがあった。

だが。

『誘導弾です』

反応の持ち主より先に来たのは攻撃だった。

「っ！」

赤い魔力に包まれた球。

バリアジャケットすら着ていない自分では避けるより防いだ方がいい、と。

手をかざしてシールドを展開して、それを受けた。

盾越しに届く衝撃と威力はかつて受けたフェイトの魔法に比べ速さはないが、重い。

「っ！」

気を抜けば押しつぶされそうな球の圧力。

それとは別の気配が背後に生じて、振り返る。
そこにあつたのは黒い影。そして振りかざされた鉄のハンマー。
即座にもう片方の手をかざして槌の一撃を受け止める。
だがそれは球の一撃以上の重さで、前後からの重すぎる圧力は
なのはの小さな身体ではシールドがあっても受け止められるものでは
なかった。

そのためまるで押し出されるようになるのはは弾き飛ばされる。

「つつ！ レイジングハート、お願い！」

僅かに弧を描き、地面に落ちきる寸前の声に愛機は見事に応じた。

『stand by ready・set up』

一瞬でバリアジャケットを作成すると落下の衝撃をバリアで防いだ。
勢いは殺しきれずに粉塵を舞い上げながら地面に大きなわだちを作る
結果となったが、

その粉塵に紛れ込ませる形で放たれた二発のシューターはビル影に
紛れ襲撃者の背後に移動していく。

さらにそれを気付かせないためになのはは上空へと飛び上がった。

「いきなり襲い掛かれる覚えはないんだけど……いったいどこの
誰!？」

襲撃者は変わらず最初になのはが立っていた場所にいた。

そこを見下ろす形でようやくはつきりと襲撃者を確認したなのはは
そう訊ねながらもその姿にわずかに面食らっていた。

(……仮面の女の子さん?)

自分とほぼ同じ年ぐらいと思われる身長で
三つ編みに結われているおさげの“黒髪”は可愛らしいが
その顔を隠しているものは目元しか開いてない上に似合っていない
無骨な仮面。
服装も薄手の黒のワンピースで飾り気もなにもない簡素なもの。
様子からして着慣れているように見えたがなのはひどく違和感を
覚えていた。

(なんだろう、どこかで会ったような、そうでもないような?)

自分の中にある“何か”と合うような感覚があるがそれが何かが判
らない。

そして仮面の少女はそれを考える時間をくれなかった。

「……………」

黙って向けられた手の平。

その指の間に現れる小さな鉄球。計四個。

攻撃を警戒して愛機を構えなおしたのはだが、

少女はその鉄球をおもむろに自らの背後に向けて飛ばした。

「え?」

驚きの声は明後日の方向への攻撃だから、ではない。的確すぎるが
ゆえ、だ。

彼女の背後で配置されていたシューターが鉄球で破壊された。

しかも、それで終わりではない。シューターは二発だったが鉄球は
四個。

残りの二個は、どこへ?

『マスター、右です！』

くしくもシューター撃墜の粉塵のせいで残りを見失ったのはにデバイスの警告。

だが、その方向にあるのは高いビルで彼女はその意味を捉え損ねた。その轟音と目の前で内側から崩されていくそれを見るまでは。

「あ、あわわっ！」

ビル内を強引に突破してくる鉄球を避けるため上昇。

紙一重で足元を通過していくそれにシューターを放って撃墜する。

「あともう一個は!？」

ビルを貫いてきたのは一個。ならば残りは？

それを考えるより先に身体が動いた。仮面の少女の一撃をシールドで防ぐ。

飛び上がっていた彼女は鉄球を避けた先に既にいたのだった。

(え、どうして?)

おかしい。

この相手とは初対面のはずだ。

なのに、どうしてここまで自分の手や動きが読まれる。

なのははその違和感に戸惑いながらも強烈な槌の一撃を防ぐので精一杯だった。

だから、このまま受け止め続けるのはまずいと思ってシューターを放つ。

放たれた四つの魔力誘導弾は力尽くで押し破ろうとしていた少女を追いやり、

背後に迫っていた残り一個の鉄球を粉碎する。
だが。

(…………… おかしいよレイジングハート、すごく嫌な距離にいるよこの子)

シューターを避けるためになのはから距離をとった少女はしかし、絶妙な距離をとって、なのはの行動をひどく抑制していた。

元来、なのはは砲撃型の魔導師であり固い防御で攻撃を防ぎつつ、高い威力を誇る魔力砲撃で大幅に相手の魔力を削るのが基本の戦法だ。

だが、仮面の少女がいる距離はそれを得意とする彼女にとって“困る”距離だった。

砲撃を撃とうにも近すぎて、放つ前に接近されてしまう距離。

こちらが距離をとろうにも、追われてしまえば意味が無い距離。

そのうえで相手の獲物を考えれば一足でなのはを捉えられる距離。圧倒的なまでに、なのはが不利な距離だった。

『 ……こちらの戦術が知られています。これでは……………』

もはや間違いなかった。どこで、どうして、という疑問があっても目の前の相手がそれを知っているのは明白な事実だった。

そのうえ故意に一言も発しようとしないう態度と合わせて考えればやはりそもそもその目的が自分への襲撃だったのだとなのはは判断する。

「ねえ！　なんでこんなことをするの!？」

何か事情があるのなら話してよ、もしかしたら力になれるかも…

…」

けれどだからといって対話を諦めるわけにはいかない。

強く自分で決めた人間に言葉が中々通じないのを文字通り経験した
なのはだが、

だからといって言葉を発するのをやめれば本当に分かり合えない。

「っ……っ！」

だがやはり予想通りではあるが返って来たのは言葉ではなく行動。
しかもこちらに向かつて、突進しその槌を振りかざしている。

そのスピードを見れば先程までよりもさらに力が込められているの
を感じる。

(やるしかない！)

なのはは覚悟を決めて、それに向けて再度シールドを展開する。

桜色の魔力光の盾に鉄の一撃が叩き込まれる。

「っっ！？ きゃあああああっ！……！」

なのはのシールドは威力を殺しきれず、悲鳴と共に彼女は落下して
いく。

コンクリートの地面に叩きつけられ、大きく窪み衝撃で舞い上がる
粉塵。

「ふう……っ！」

それを見ながら少しだけ疲れたような、ホッとするかのような溜息
をこぼす少女。

しかし彼女は直後に背筋を凍らすような戦慄を覚えて、思わず叫ん

でいた。

「っ、障壁！」

『Panzerhinderinis』

前面の突き出された槌のデバイスが赤い魔力の壁を作り出す。それが完成するのとはほぼ同時にそれは瞬いた。

「デイベイイン、バスタアアアツツ！！！」

粉塵を突き破る叫びと一条の光。

色の暖かさとは相反する破壊力を誇る砲撃が仮面の少女を襲う。

「つつ、ぐぐぐつつ！！！」

直前に展開していた障壁が文字通り壁となってくれているが、その衝撃と削られていくような魔力ダメージは決して軽くはない。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

息も絶え絶えだったが耐え切った仮面の少女は粉塵の中心から砲撃を放った少女へと視線を向けて、軽く舌打ちする。

デバイスを構え、砲身を向けている彼女の姿は満身創痍。

ジャケットのあちこちが破け、損傷しているばかりか僅かに手足に出血が見られた。

元々なのはは攻撃を受け止め切れなかったのではない。

距離をとるためにあえて中途半端な防御をしたのだ。

振りかざした一撃を半ばわざと受けることで怪しまれずに距離をとるために。

無論、できる限りの防御をしていたがバレないためと、慣れていなかったこともあって威力を受け流しきれなかった。そのため作戦では『距離をとるために吹き飛ばされるフリ』だったのが、
実際は『本当に吹き飛ばされたが結果として距離が取れたから撃つた』になっていた。

「……やっぱ、そう簡単には墜ちないよな……」

「え、その声……」

その賞賛とも呆れとも取れる言葉の色が、なのはの琴線を刺激する。
“どこかで聞いたことがある声だ”と。

だが、それがなぜかうまく繋がらない。

なのはのそんな懸念をよそに仮面の少女は決意するように叫んだ。

「……けど、だからってこっちも負けてられねえんだよ！」

『Schwalbfliegen』

少女の眼前に横に並んだ四つの鉄球が現れる。

すべてが赤い魔力に包まれ、その主からの命令を待つように空中で停止している。

「いけえっ!!」

槌のデバイスで打ち出すように発射されたそれらは軽く螺旋を描きながら

荒い息を吐きながら窪んだ地面に立っている少女へと襲い掛かる。

「っ、あああっっ!!」

直撃こそしなかったが、間近に落ちた鉄球の炸裂による衝撃と粉塵がなのはの視界と聴覚を一時的に奪い、少女は無防備になっていた。そして、それを狙った襲撃者が見逃すはずもない。

「カートリッジ、ロード！」

『Explosion.』

ハンマー型のデバイスに内臓されている三連装回転シリンダーが回る。

一個のカートリッジの魔力を取り込んで自らを变形させていく。

『Raketenform.』

ハンマーヘッドの片方が推進剤噴射口に、その反対側が鋭いスパイクへと変わった。

そして噴射口から放出される魔力がまるでロケットのようにデバイスに推進力を与える。

仮面の少女はそれに逆らわずその場でコマのように回りながら遠心力でそのスピードを上げる。

「ラケーテンツッ！」

それを殺さずに自身もそれに乗って加速し、なのはに突貫していく。あまりの加速力に視界を封じていた粉塵すら吹き飛ばしていたが、時既に遅し、だった。

「つつ!?!」

「ハンマアツッ!!!」

突如目の前に現れた襲撃者に半ば反射的にデバイスを向けて強固なラウンドシールドを張ったが、まるで紙でも破くかのように簡単にスパイクが穴を開けて盾を破壊する。

「ああああっっっ！！！」

身体に直撃こそしなかったが結果的にレイジングハートで受け止めてしまったのははその威力に一秒も耐えられずに弾き飛ばされる。慣性制御で体勢を整える事すら出来ないほど思考が完全に追いついていないため、まともな防御魔法を使うことすらできずにビルの壁に叩きつけられる。

が、“それだけ”ではまだ威力が消えずに壁をぶち抜いてその内部へと転がり落ちた。

「う……うっっ……」

ジャケットのおかげでケガこそしなかったが痛みと衝撃になのははすぐに起き上がることさえできなかった。そして仮面の少女は追撃の手を緩めることもなかった。

「でやああああっっ！！！」

穴の開いたビルに突貫してきた少女は倒れ伏す少女を襲う。それが見えたなのはは必死に膝を立て、損傷したデバイスをかかげる。

『Protection』

半ばレイジングハートの自動防御に近い魔法だが、
なのはの持つ高い魔力とその防御出力により強固な防御力を誇るプ
ロテクション。
だが、相手のデバイスのスパイク部分がそのバリアにいと簡単に
食い込む。

「っ!?!」

「やああああっつ!?!」

ジェット噴射のように放出される魔力によってさらなる破壊力を得
たそれは

なのはの強固なそれを再び砕け割って、それでもなお止まらない。
その危険性を何より先に察知したレイジングハートは
スパイクが狙うなのはの胸元のジャケット部分をパージさせる。
リアクターパージと呼ばれるバリアジャケットの最終防衛機能。
魔力で作られるジャケットそのものを爆発させることでダメージの
相殺を行うシステム。

「きゃああああっつ!?!」

文字通り最後の砦たるそれを使っても直撃を避けることが精いっぱい。
い。

衝撃だけでなのははさらにビルの奥へと吹き飛ばされてしまう。

「あっ、っつ……」

壁に叩きつけられる形で止まったそれだが床に落ちた衝撃で

一瞬意識が飛びそうになってしまうのは。

けれど目の前の黒づくめの仮面の少女が迫っているのが見えていた。

「うっ、うっっ」

痛みによる痺れが彼女の動きをひどく緩慢にする。

何とかレイジングハートを向けるが狙いがまったく定まらない。

それ以前によく見れば愛機たるデバイスは無残な状態だった。

柄は所々欠けており音叉のような砲身は砕けコアとなる赤い宝石はヒビだらけ。

そして今のなにはそれを修復する余分な魔力と意識がない。

その消えそうな意識が魔法の集中を妨げて魔法を撃つこともままならない。

(……これで、終わりなの?)

どうすることもできない状況。

立ち向かうのも逃げるのも不可能となった自分はもうここで終わってしまうのか?

訳も分からず、何もできず、ただ墜ちてしまうのか?

そんな不安と恐れに余計にデバイスを持つ手が震える。

(そんなの、やだよお……「ウキさん、ユーノくん、クロノくん……
…フェイトちゃん!!」)

声にさえ、念話にさせできなかった悲痛な叫び。

それは誰にも届かず、襲撃者はゆっくりとそのデバイスを振り上げる。

思わず、なのはは身体を縮こまらせ目をつぶる。

「……………」
「ごめんな」

(え……?)

そんな状態でなければ聞き取れなかったであろう小さすぎる声。なのははその自分より痛そうな声に引き寄せられるように目を開けた。

目の前には長柄のハンマー型のデバイスを振り上げる少女。その輪郭。

結界で切り取られたここは現実時間の昼夜とは関係ない場所となっている。

そのため大した灯りもないのに外もビル内もよく見えている。しかし建物内は外に比べると暗く、開いた穴から注ぐ外の明りがまるで影絵のように少女の輪郭を映し出していて、なのはは息をのんだ。

「ヴィータ、ちゃん？」

「つつ！！？？」

それがあまりにもその少女と酷似しすぎていて思わず呟いていた。一瞬の動揺を見せたそれは否定のそれとは思えない。

さらに言い募ろうとするのはだが、襲撃者は力任せにデバイスを振り下ろす

「つつ！？」

せず、その黒い一撃を後ろに跳んで避けるのが精いっぱいだった。

「誰だっ、仲間か!？」

油断をしていたつもりはなかった少女だが、その動揺が幸か不幸か、彼女が接近する時間を稼いでしまっていた。

なのはと襲撃者の間に立つ一人の少女。

黒き斧のようなデバイスを構えた黒いマント姿の魔導師。

彼女はゆっくりと口を開いて宣言するかのように、誓うかのように答えた。

「……………“ともだち”だ」

黒い襲撃者（後書き）

ここで大興奮したのを、今でも覚えている（笑）

墜ちる雷

12月1日 PM09:06

アースラ

それは、本当に偶然の救援だった。

たまたまその時間にフェイトのジュエルシード事件における裁判が
終わり、

その報告になのはに連絡をとろうとしたがなぜか繋がらなかった。
管理局で調べれば彼女の自宅周辺を覆う形で広域結界が貼られている
事が判明する。

何かが起こり、それになのはが巻き込まれているのは明白。

事態を重く見たアースラスタッフは艦の整備を後回しにしたうえで、
フェイトたちを先行させて第97管理外世界「地球」へ向かったの

だった。

ようやく現地をモニターできる地点まで到達したアースラだが、相変わらず結界に覆われた現場を見ることはできていなかった。

「エイミィ、まだ解析は終わらないのか？」

僅かに苛立ちを含んだ声に彼女は端末を操作しながらも首を振る。

「ちょっと待って、この術式複雑で……」

「これは………古代ベルカ式？」

モニターに表示され、流れていく結界の術式。それは最近よく見た彼らのそれによく似ていた。

「ううん、それが少し違うの。」

古代ベルカにミッドのアレンジが加わってて……ああっもうっ、どうなってるのよこれー!!」

操作し続けながらも悲鳴のような声をあげるエイミィ。

彼女をしてもそれだけ難解である証明だ。

焦らすより黙って見ているしかない。

と、クロノは判断して砂嵐しか映らないモニターをただ眺めた。

その脳裏で、ある可能性が浮かび上がっている。

古代ベルカ式を使える人間はそもそもかなり限られている。今ではベルカ自治領に僅かに使い手がいることが確認されている程度だ。

それにミッド式のアレンジを加えられる者となれば、いないと言ってもいいほど。

だがクロノは知っている。それが出来る唯一の者たちを。

(あいつらがなのは何かしたというのか、馬鹿らしい)

「フェイト、なのは……………」

首を振るようにしてその考えを捨てて、結界の中にいる者たちを想う。

すでに内部に突入しているせいかフェイトたちとも連絡がとれない。何もできない現状に歯噛みして、彼は睨むように砂嵐を見詰め続けた。

そんな息子の様子を見ながらリンディ・ハラオウンは逆に嫌な予感が頭から離れない。

思えば、あの家から最後のメールが届いたのはいつだったか？

日本の暦で11月の頭に届いたのを最後に何も来ないばかりか返事もなくなった。

不審には思ったがなのは達から“もっともらしい”理由を聞かされて疑いもしなかった。

『……あなたたちに言うことじゃないかもしれないけど、いま、ある第一級搜索指定ロストログアの関与が疑われている事件が起こってるの』

そしてこの騒動が起きる前。

親友兼同僚のレイ提督から知らされた魔導師襲撃事件。

その始まりの時期とメールが来なくなった時期の符合。

襲われた魔導師たちが抱える共通の症状。

そして古代ベルカ式を使う者たち。

確証は、何一つない。

けれどその事実の羅列に彼女はその可能性を捨てることができなかつた。

闇の書、なの？

12月1日 PM09:07

海鳴市ビル街 結界内部 ビル内

「私は時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ。
いまなら、まだ弁護の機会は与えられる。従うなら武装の解除と
投降を…」

フェイトの登場から微動だにせず、声も発しなくなった少女に言葉
を投げかけた。

その背後では一緒にやってきたユーノがなのはの治療を行っている。
そして僅かな沈黙のあと少女はフェイトの呼びかけには結局答えず、
大きく飛退くとそのままビルの外へと飛び出してしまふ。

「くっ、ユーノ、なのはをお願い」

一言、背後の少年に“ともだち”を託すとフェイトは少女を追って
ビルの外へと飛び出す。

見れば仮面の少女はなのはのいるビルから距離をとるように一直線
に飛んでいた。

それは彼女の救援にきたフェイトにとって都合がよかった。

近くで戦闘となれば防御や回復を得意とするユーノがいるとはいえ安全とは言い難い。

だからあれが逃亡であれ“自分を誘う罠”であれ、フェイトはそれに乗るのに躊躇はなかった。

追ってくれといわんばかりに遮蔽物のない空を一直線に飛ぶ姿を追って飛ぶフェイト。

他のビルを10棟は通り越したのちに、少女は止まって振り返る。

その手には小さな鉄球が四つ。デバイスで打ち出して放出された赤い弾丸は

弧を描いてフェイトを襲う。すぐさま方向転換して回避するが、それを弾丸は追尾するかのよう追っていく。

(実体のある鉄球を作り出した上に四つ同時の誘導操作!?)

どれも高等技術に分類される魔法だ。

ましてやフェイト得意の高速機動での動きにもついてきている。並の技術ではない。

そのうえ仮面の少女は操作に専念するためか微動だにしないが無防備さを補うために周囲にバリアを張っている。

同時にそれだけの事ができるだけでもう手加減ができる相手ではないと感じさせた。

『Scythe Form』

バルディッシュがサイズフォームに変化する。

魔力刃で作られた刃が襲い掛かる鉄球を切り落とす。

(しかも、硬い……なのは追い詰めただけはある。この子、ただ

者じゃない！)

『Arc Saber』

攻め続けられるのを懸念した彼女は愛機を振りかぶって、魔力刃を飛ばす。

回転する金色の刃は軽く弧を描きながらも仮面の少女へ向かう。眼前の赤い壁がその色を濃くして、アークセイバーに易々と耐えきった。

(防御も、下手したらなのは以上……でもっ、アルフ!!)

(待ってました!)

主人からの呼びかけに使い魔は喜んで答えた。あらかじめ、外で襲撃者の背後をとるために離れていた彼女はアークセイバーを受け切ったばかりの少女を真下から襲った。

「バリアっ、ブレイクうっ!!」

獣人形態のアルフから放たれる拳。

少女の赤い障壁とぶつかり僅かに火花が散る。

だがバリア生成プログラムそのものに割り込みをかけるこの拳の前では

理論上、耐えきれぬバリアは存在しない。

「ちっ!!」

舌打ちと共に彼女を覆っていた赤い障壁が散っていく。

思わずアルフから後ずさるように距離をとった少女にしかし、その

背後に迫る一撃。

バルディッシュを振り上げたフェイトがその位置をとっていた。

取った！

フェイトとアルフは自分たちの連携による勝利を確信した。

だが、フェイトが気付かずアルフだけが気付いたことがあった。

それはもはや動物的な野生のカンに近いものであったが、

背後を取られたはずの仮面の少女のあまりにも落ち着き払った態度に悪寒が奔る。

「つつ、ダメだフェイト離れて!!！」

それはまさにその声とどちらが先だったのか。

上空から落ちるようなスピードで繰り出された一閃。

「え、きゃあぁっ!!！」

少女に向けられていたバルディッシュを弾くと即座にフェイトを蹴り飛ばした。

即座に助けに入ろうとしたアルフの目に一瞬蒼い獣が映る。

「ぬおおおっ!!！」

「くっ、あああぁっ!!！」

実際に迫ったのは自分と同じような獣人の男の拳。

魔法の防御が間に合わず、腕を交差して受け止めるが耐えきれず空から叩き落される。

そのため主人と使い魔は双方ともに道路に大きな窪みを作った形で着地した。

「っ、仲間がまだ！」

「うっ、くそお……こっちが不意打ちされるなんて……」

直前に防御魔法を使ったためにダメージは見た目ほどではないにしろこちらの思惑をつぶされたうえに二対三という状況はまずかった。それぞれが受けた一撃はそれだけで相手を強敵だと告げていたのだから。

そのため上空にそろった三つの影を凝視する。

仮面の少女を挟む形で空に立つ新たに表れたのはふたり。

フェイトの一撃を弾いたのはそのうち女性のほう。

背丈はフェイトや少女より高く、それだけで考えるなら二十代前半ぐらいに見えた。

片手に剣型のデバイスを持ち“黒髪”をポニーテールにして仮面を被っている。

女性としてスラリとした長身でありながらもメリハリのある優れたプロポーションを

黒い薄手のボディコンのような服で覆っている。

もう一方の男の獣人は女性よりまた大きくがたいがいい。

黒いズボンとシャツのようなものだけを着ていたためかその太い筋肉の腕が丸見え。

アルフと似たような耳と尻尾もあったがその色は“黒”い。

彼もまたその顔を仮面で隠していた。

三人は何かしら短く会話して頷きあうと、

獣人はアルフと、剣を持つ女性はフェイトと向き合う位置へと移動

する。

仮面の少女はそれを眺めながらも動かない。

それが何の意味の行動なのか疑問はあるが、フェイトもアルフも目の前に相手から目を離すわけにはいかずにそれを考える余裕もない。

主人と分断された形のアルフの前の立つ獣人は無言だった。

腕を組み目の前に立つそれをまるで壁のようにも感じてしまい、さすがのアルフもすぐには飛びかかれず唸り声で威嚇するだけだ。

「ぐるるうっ……………よくもやってくれたね、タダじゃすまさないよ」

底から響くような声を出しながら指を鳴らし爪を出す。

牙を鋭くもって、腰を僅かに下げて、いつでも飛びかかれる姿勢を取る。

「……………」

「だんまりかい。」

「どこの誰だが知らないけど主人の悪さを止められない使い魔は二流だよ」

しかし反応のない態度に苛立ち、悪態をつく。

見た目から彼のまた自分と同じ主人を持つ使い魔だと判断しての言葉だ。

はつきりいつて自分のことは棚に上げているが今の彼女がそう思っているのも事実だ。

「…………断っておくがあのおふたりは俺の主ではない。
そして我らが主は、その理屈でいえば一流の主人なのかもしれん
な」

「は？」

「それに俺は使い魔ではなく、守護獣だっ……」

「え…………っ!？」

その類似点に直感的に気付く。

毛の色は違うが、目の前の壁のような威圧感と寡黙でありながらお喋りで

なおかつ守護獣であることに誇りを持つその相手をアルフはひとりしか知らない。

なにより、その嗅ぎなれた「匂い」までは隠しようがなかった。

「まさか、あんだ…………」

「…………少し喋りすぎたか…………ならば、いつかの決着をつけるぞ!」

「くっ、このっ!」

そうして守護の獣は三度戦う。

今度もまた譲れぬ主人のために拳を振るって。

一方、静かに地面に降り立った女性は油断なくフェイトを見据えな

から

しかし最初に口にしたのは意外にも謝罪の言葉だった。

「……………騎士として、同胞を救うためとはいえ不意打ちをしたこと、そしていま名乗れぬ非礼を詫びよう、フェイト・テスタロッサ」

凜とした力強い声は、言葉通りの詫びの感情が見えたがそれ以上に叩きつけられる威圧感が半端ではなかった。

一瞬でも気を緩めればそれだけで吞まれてしまうほどのそれにフェイトはサイズフォームのバルディッシュを構えて立ち向かう。

「出来れば、抵抗しないことを勧める……………こちらは命まで取る気はない。」

だが、お前ほどの相手ではこちらも手加減はできん……………」

(……………私を知ってる?)

名前だけなら先程の名乗りを聞いていた。あるいは仮面の少女から聞いた。

かもしれないが今の発言はそれだけではないことを匂わしている。

「君たちは誰だ、いったい何が目的で……………」

「訳は言えぬ……………名も言えぬ……………顔も隠さなくてはならない。」

しかも、主から賜った甲冑を着ることもできない……………それで騎士とは自分もよく言えたものだが

それでも譲れないものがある。失いたくない人がいるのだ……………」

どこか混ざる自嘲気味な言葉とは裏腹にその言葉に宿る意志は固い。

「そう……誰かのためなんだ……それは、止まるの難しいですね」

同じ想いと経験があつたせいか。

フェイトの口調は僅かに穏やかなものになる。

しかしバルディッシュを握る手はより強くなり身構えていた。

「ああ、もう止まれんよ。

あまりにも主との約束を、誓いを破りすぎてしまったからな……」

「分かりました……受けて、立ちます！」

かつて自分がそうであつたがゆえに、

フェイトにはもう言葉で止まれる段階ではないと肌で分かつた。

なら“誰か”が止めるしかない。自分をかつてなのはたちが止めてくれたように。

「……………いい気迫だ。」

ならばこそ、こちらも全力で押し通るまで！」

まるでその声に応えるかのように剣が炎をまとう。

そして、彼女は地を蹴ってフェイトに迫った。

(正面から受け止めるのはまずい)

半ば直感的ではあつたが、少女の鉄球の重さと硬さ。

自分の攻撃を弾いた一閃と蹴りの強さは十分にフェイトを警戒させていた。

振り下ろされる炎の剣を紙一重と避けながら上空へ舞い上がる。

「ランサー、セット！」

「撃ちぬけっ、ファイア!!」

同時に四本のフォトンランサーを繰り出し発射する。
剣の騎士は振り下ろした一撃からか。
動かないままランサーが直撃

「え!?!」

しなかった。

避けられたのではない。弾かれたでもない。
身体を覆う膜のような魔力の鎧に防がれたのだ。

(あれは……前にどこかで?)

だがその記憶を探ってる余裕はない。
彼女はもう剣を掲げて、こちらを見据えている。

「レヴァンティン、カートリッジロード」
『Explosion』

剣の付け根にあるパーツがスライドされ、ロードと共に排莢される
カートリッジ。
刀身に宿る炎が、一際大きく燃え上がる。

「はあああああっ!!」

再び血を蹴って飛び上がった彼女の速度は先程とは比べ物にはなら
ない。

予想以上の速さに対処が間に合わず、デバイスを向けるぐらいしか

できない。

『Defensor.』

そのためデバイスの自動防御が発動するが、
繰り出されようとする斬撃の前にそれはあまりにも“無駄な抵抗”
だった。

「紫電一閃つ!!!」

魔力をまとった炎の斬撃がバリアごと、剣を受けとめようとしたデ
バイスを両断する。

「つつつ!!!??」

魔力の衝撃と炎の爆発にフェイトは悲鳴をあげる暇もなくビルへと
叩き落される。

外壁には大穴が開き、三階分も床をぶち抜き破壊してフェイトの落
下はようやく止まった。

「う、うう……バルディッシュ、大丈夫？」

ジャケットと再度発動した自動防御のおかげでフェイトのダメージ
は軽い。

が、その愛機は柄が真つ二つに両断されたばかりか余波であちこち
にヒビが入っていた。

『Recovery.』

寡黙な愛機はしかし損傷を回復させることで言外に『問題ない』と

答える。

相変わらざるのいつもの態度に僅かにクスリと微笑むが、次の瞬間にはそれを引き締めて、自分を叩き落した彼女を見上げた。ビルは外壁を含めて内部も大きく破壊されていたおかげで互いに相手の姿を見失うことなどなかった。

（カートリッジ……アームドデバイス。

前にクロノたちが言っていたベルカ式で使われているデバイス）

戦闘関連だけに限定すればかなりの魔法知識を持つフェイトでさえ名前しか知らなかったその魔法体系とデバイスの実力。

何より目前の女性騎士そのものの強さが自分とは段違いだった。

仲間も使い魔の援護もない中、相手の得意な一対一で相手の方が得意な近接戦を行うのは

あまりに危険だったが、あの加速と剣の速さを考えれば遠距離からの魔法など

そもそも撃たせてもらえるわけがなかった。

（なのはを連れて脱出するにしろ、クロノたちを待つにしろ……もつと時間を稼がないと！）

「バルディッシュユ！」

『Arc Saber』

その場でサイズフォームから魔力刃を放つ。

だが、いくら速くともあまりに距離が離れすぎていて、避けるのは容易。

だから続けてフォトンランサーを別方向へ放つ。

アークセイバーはあくまでそれを隠すための罠。

予想通り、簡単にアークセイバーを避ける騎士。

それを見越して放たれたランサーもバリアに弾かれてしまう。

「これは……」

だが、動きを一瞬止めることには成功した。

「やあああっ!!」

そしてその一瞬があればフェイトは彼女の間合いに踏み込める。サイズフォームから延びる鎌の魔力刃を振り下ろす。真正面から。露骨な誘い込みに奇襲を予想させ、自慢の高速で正面に出る。フェイトが考えたのはそういうことだった。

「はああっ!!」

だがそれにさえ即座に対応してみせた女騎士はバルディッシュを剣で弾く。

しかしフェイトも動揺せず弾かれた勢いを利用し回転するようにしてデバイスを振り切る。

(浅い!?)

手応えは感じたが、女騎士はすでに身体を引いていてまるでダメージを感じていなかった。

見れば衣服に僅かに何かがすれた跡が残っていたが傷さえついていない。

「……良い太刀筋だ……未見だったのならもつと深く入っていただろっ」

「……………」

そんな褒め言葉も、素直に受け取っている場合ではなかった。

(やっぱり、こっちの動きが見切られてる……………)

元々の実力差を肌でひしひしと感じながらも、

同時に自らの動きを先読みされているような違和感がずっとあった。

“ 未見だったのなら ” そう言う以上、彼女は自分の戦い方を知っている。

(ただでさえ一撃の威力と防御じゃ勝負にならないのに…………… どうすれば……………)

考えながらバルディッシュを基本の斧のようなデバイスモードへと戻す。

サイズフォームでは彼女の剣をさばききれないからだ。

(たぶん、わたしが勝てるのはスピードだけ…………… ならそれでかく乱して時間を稼ぐ！)

そう決意して、バリアジャケットのマントを脱ぎ捨てる。

本来それは速度に影響するものではないが、その面積と形状は相手の攻撃を“ 引っ掛け ” やすくもあつた。

一撃も受けるわけにはいかないフェイトはその可能性を排除する。

「…………… 行きます！」

律儀にも声に出したのは自らを奮い立たせるため。

実戦で格上の相手と戦うのは実は初めてのことだった。

知らず知らずしていた緊張を無意識にとくため声を出し、そして飛ぶ。

「っ、ん？」

攻めてくると予想していたのか。

その変則的な動きに、女性騎士は僅かに戸惑った声をもらす。

フェイトは彼女の周囲を高速で移動し続けていた。一切止まらずに。しかもただ動き回っているだけではない。

自身の魔力を雷として放出し続けながら、だ。

「まさか、そういう手でくるとは……」

目で追おうというのかあちこちに顔を向ける騎士だが、高速機動のみに集中しているフェイトのスピードを捉えるのは難しい。

ましてや雷の強烈な稲光のせいで余計に視覚は役に立たない。

そして残像と雷光がいくつもの虚像を作り出したために

“見えて”いるのに彼女は完全にフェイトを“見失って”いた。

「くっ！」

そのうえ、時折見計らったかのようにフェイトはランサーを放っていた。

スピードを維持するために単発ずつしか発射できなかったが、

どこから狙われるか分からないというのは思っている以上に相手に精神的負担をかける。

例え全身を覆うバリアがあってもデタラメに放たれる光の槍は彼女の集中を邪魔しフェイトの動きを追えなくしていた。

「……なるほど、これで時間を稼ぐつもりか」

フェイトには戦闘において攻撃に頼りすぎるといふ悪い癖がある。並外れた才能と力を持つ彼女ならたいていの場合それで充分なのだが、

それが通用しないほどの実力者が相手となれば話は別だ。

「悪いけど、私の仕事はあなたたちを捕まえること。

でも、それを全部わたし一人でやる必要はない……」

だからフェイトは独力で倒すという選択肢を排除した。彼女とて目の前の強敵を個人としては実力で倒したい。

自分の力がどこまで通じるのか精一杯やってみたい。一対一で正々堂々と。

そういった欲求や高揚感があったが今は背後には傷ついた友達がい

て目の前には傷つけた人たち。

「ふっ、良き方向に変わっているな、お前も」

どこか嬉しそうな声色で答えながらも、フェイトの声さえ

あちこちから反響するかのように聞こえて女性騎士は首で探す方法も諦めていた。

「だが、それぐらい破れぬようでは守護騎士の将は名乗れん。レヴアンティン！」

『Schlangeform』

ダストパーツがスライドしカートリッジが一発分ロードされる。

空葉莢が排莢されて、剣が新たな姿を見せる。

「え、剣が……バラバラに!?!」

その変化にフェイトは驚くしかなかった。

彼女にとってその形状の武器は見聞きするのでさえ初めてだったのだ。

片刃の長剣だった刀身が等間隔に割れ、ワイヤーで繋がった姿を見せるとまるでムチのようになる。

蛇腹剣、連結刃といわれるその武器は名を示すかのように空中で主を護るように蜷局を巻く。

その予想以上の長さと言志を持つかのような動きに、背筋が震える。

「すべて叩き落せ!」

『ja.』

変形しても変わらない柄を振るい、その意志を乗せて連結刃は螺旋を描くようにうねり、

フェイトの虚像どころか『周囲』という空間すべてを削るように薙ぎ払っていく。

「しまっ、ああっ!」

予想だにしていなかった剣による“空間”攻撃に対応ができない。

咄嗟に張ったシールドすら削りながら連結刃にフェイトは弾き飛ばされた。

「くっ、まさかあんな攻撃が……っ!?!」

バルディッシュ!」

何とか身体を捻って空中で停止したフェイトだが、その気配にゾツとした。

すでに連結刃から通常の刀身に戻った剣を彼女は鞘に納めて、その状態で排莖を行っていた。

つまりカートリッジのロード。それは次の一撃の強烈さを暗に示していた。

しかし、フェイトも黙ってやられる気はなかった。

弾き飛ばされた事で結果的に距離が開けて遠距離魔法を撃てるだけのそれが稼げていた。

「撃ちぬけ、轟雷！」

だがそれは、相手も同じであるということをフェイトは失念していた。

騎士が剣を抜くのと少女がバルディッシュを掲げたのはほぼ同時。

『Thunder Smasher』

金色の魔力の雷光が奔る。

「飛竜一閃ツツ！」

薄紫の魔力をまとった竜が吠える。

そして

「いい判断だ……威力が伴っていれば、だがな」

「そ、そんなっ、一方的につ！？」

僅かな拮抗の後、雷光は竜の咆哮に飲み込まれフェイトは爆発
粉塵の中に消えた。

鎧のない騎士（前書き）

鎧のない騎士

12月1日 PM09:22

海鳴市ビル街 結界内部

一直線に放たれた雷光が竜に貫かれるように引き裂かれ、少女は地に墜ちた。

「がつ、あ……ああ……」

落下の衝撃に受身を取ることも出来ない。
魔力のチャージ時間が僅かに足りなかったとはいえ、
サンダースマツシャーが半ば一方的に押し負けた
それでも迫る連結刃のその剣先をシールドで反らし、
バルディッシュで受け止めたおかげで直撃だけは避けていた。

「う、バルディッシュ……」

だが、その代償はあまりに大きかった。

フェイトは自らの眼前に“散らばった”それに必死で手を伸ばすが、届かない。

受け止めた衝撃にバルディッシュそのものが耐えられなかったのだ。柄は再び真つ二つに両断され、黒いフレームは粉々に砕け散っている。

金色のコアクリスタルは何とか形を保っていたがヒビだらけ。

『No problem』

そう答えるがあまりにも強がりでしかない。

これでは魔力を使つての応急処置では回復させることもできない。ましてやもうそれだけのことができる魔力がフェイトに残っていなかった。

直前までしていた超スピードでのかく乱と強引に放った砲撃。

それを破られての一撃は直撃こそ避けられたがダメージは大きく、そのため少女はまともに身動きひとつとれなくなっていた。

「フェイト！」

それを見て黙っていられなかったのはアルフだがその眼前には壁のように聳え立つ獣人がいる。

彼女の攻撃を防ぎきり強烈な拳や蹴りで返して来る彼にアルフは消耗していく一方だった。

「どけええっ！！」

それでも大好きな主人の下へ行かなくてはと拳を振り上げる。

しかし、それを軽くないなされカウンター気味に蹴り飛ばされてしま

う。

「くっ、くっくっ!!」

何とか地面に倒れこむことだけは避けようと歯を食いしばって耐え切る。

だがこれまでのダメージがすでに足に来ていて、いま彼女は主人への気持ちだけで立っていた。

「……………相変わらずだな、その姿勢は……………少し羨ましい」

「な、なにを……………っ、フェイト!」

言葉にわずかに違和感を覚えるが、

それよりもその視界に主人の近くに降り立った女騎士が映る。

「心配するな、命はとらん……………といっても止まりそうにないな」

「当たり前だろうがっ!!」

吼えるように叫び、アルフは再び突貫しようとした。

「な、えっ!?!」

だが、その足は急にぴたりと止まった。それを彼が訝しんだ次の瞬間。

激しい稲光と轟音が響いて、巨大な落雷がまるで狙ったかのようにフェイトと騎士、

アルフと獣人の間に落ちて相手の視界を奪い去った。

目の前に“狙って”落ちてきた雷に女騎士はうろたえることはなかったが、
意表を突かれて、一瞬の隙となったのは事実だった。

「フェイトッ！」

それを利用した形でアルフは倒れた主人のもとへ駆け寄って抱き上げる。
そしてバラバラにされたバルディッシュの破片をできる限り拾って、
飛び上がる。

「逃がすと思うか！」

「それはこっちの台詞よ！」

剣を構えた騎士を囲むように放たれた光の弾丸は
コンクリートの地面に簡単に穴を開けていく。
その威力にさしもの彼女も二の足を踏んだ。

「いまのは……それにその声は……」

「やっぱりさっきの念話はあんたか!？」

紫の雷と連射された高威力のフォトンバレット。
何より、その声にフェイトたちは覚えがありすぎた。

「やはり来たか、プレシア」

そして意外にもその名を最初に口にしたのは女騎士の方だった。フェイトたちも彼女たちも全員が上空を見上げる。その先、円の魔法陣に立つように座す女性がひとり。自身の魔力光に似た紫のスーツの上に白衣という姿のプレシア・テスタロッサがいた。

「なんで……なんであいつがこんなところに……
虚数空間に落ちたんじゃなかったのかい!？」

「……………」

ありうるはずのない再びの会合に憤るアルフとは対照的にフェイトの表情も視線も穏やかで、その口からもれる言葉はなかった。

ただ、その姿を見上げるだけで少女は何も語らなかった。しかしそこに叱責のような声が落ちる。

「ボサツとしないで！ 早く下がちなさい!!！」

その怒声に思わずフェイトの身体がびくりと震えた。

プレシアの言葉は早くフェイトを下がらせようとしたために出た言葉。

フェイトにしたってその意図はわかっていたが、半ば刷り込まれた条件反射のようなそれは簡単に消えるものではなかった。

それがプレシアの思考に僅かな空白を生んだ。

「隙だらけなんだよ!！」

「っ!?!？」

背後から浴びせられる声。それは動かずに静観していた少女のもの。彼女が動かなかったのはプレシアを含めた第三者が介入することを考えてのことだった。

「お前が来ることはこっちに分かってんだ！」

ハンマーを振り上げ、今にもプレシアに振り下ろされようとする一撃。

回避も防御も、もはや不可能な距離と速度。

それにプレシアは

「……………ええ、それはこちらと同じことよ」

不敵な笑みで応じた。

「なっ、しまった、バインド!?!」

デバイスを構えて振り上げた両手。

踏み込もうとした両足に紫の魔力が縛りつき、その動きを完璧に止めていた。

「あなたたちに接近される怖さは嫌というほど知っているわ。

なら、そのための対策をしてるに決まってるでしょ！」

「くそっ!?!」

バインドには大きく分けて二種類が存在する。

対象に直接仕掛けるタイプと設置した範囲に入ったものに反応するタイプだ。

プレシアは彼女たちの接近を警戒しつつ、された時のために設置型

バインドを

自分の周囲に山ほど設置していたのだ。それは彼女自身が油断していても発動する。

そのために少女はもちろんのこと女騎士と獣人も動けなくなってしまうた。

助けにいけば自分も捕まってしまう可能性が高いうえに、上空の雷雲から不定期に自分たちを狙う雷が落ちてきているためにフェイトたちに近づくことも容易ではない。

(いまのうちに早く下がりたい……)

「ちっ！」

念話に舌打ちしながらもアルフはフェイトを抱えて戦場から離脱する。

ユーノと連絡をとって、なのはを避難させた場所へと向かっていく。そのためフェイトとプレシアの間に、言葉どころか念話でも会話はなかった。

プレシアは背中を見せるだけ、フェイトは黙ってそれを見ていただけだった。

「へ、思ったより冷静じゃねえか。

てつきりじかに会ったら初めの頃みたいに取り乱すかと思っただのによ！」

バインドに四肢を固定されながらも悪態をつく少女。

それを半ば聞き流しながら気配が遠ざかるのを待って、プレシアは口を開く。

「そんな余裕がないだけよ……あなたの相手をする余裕も、ね」

突きつけられる杖。^{デバイス}
バチバチという稲光が少女の眼前で瞬く。

「っ!？」

「だから……しばらく寝てもらおうわ!」

その声に呼応して雷雲から巨大な雷が落ち、杖からは魔力で作られた雷光が放たれる。

上空と眼前からの雷撃は避けることも防ぐこともできずに少女に直撃する。

「ぐあああああっつ!!!」

「ヴイータツ!!」

天候操作で雷を操るサンダーフォール。

遠距離砲撃の轟雷、サンダースマツシャー。

その同時撃ちは、威力でこそフェイトにはそれぞれ劣るが、高度な並列処理が必要なそれはプレシアにしか出来ない芸当だった。そしてそれらが合わさった威力はなのは以上といわれた少女の防御を打ち破る。

「……あ……っつ……」

轟雷によってバインドごと弾き飛ばされた少女。^{ヴイータ}

衝撃で外れた仮面の下にすでに意識はなく、ただ重力に任せて落下していく。

例え意識があっても雷撃のスタン効果で動くことはできなかっただろっつ。

「ザフィーラ、ヴィータを頼む！」

「心得た！」

女騎士は墜ちていく仲間をもうひとり任せて空に上がる。

そして設置されているバインドの範囲外だと思われる距離で向かい合う。

「さすがは大魔導師と呼ばれた者だ。

至近距離だったとはいえ一撃でヴィータを墜とすとは……」

高揚も敵意もなく騎士は淡々とその戦績を褒めた。

仲間を墜とされたにしては冷静すぎるがそれは知っているからだ。

ヴィータに向けられた魔法の非殺傷の徹底ぶりとスタン効果の強さを。

それは傷つけるためではなく止めるための攻撃であったことは明白。

何より共に何度も戦場を駆け抜けた同胞がこれしきで潰れる事など有り得ないのだと。

「こちらも、いろいろと覚悟を決めただけよ」

一方、墜落させた側である彼女の方が表情が硬い。

まるで今にも泣きそうなのを無理に我慢しているかのよう。

「これでも……“家族”にいきなり本気で魔法を撃てるほど、強くはないの」

「知っている。あなたは本質的には優しい母親だ。

そしてそこに付け込んだのは我らだ……あなたが気に病む必要は無い」

「……ふふ、変なものね。ありがとうといえはいいのかしら？」

確かに変な会話だ。と女騎士も笑う。

仲間を撃墜した魔導師を騎士が慰めているなど。

ましてや彼女が気にしている事柄は騎士たちのことだというのに。

「ねえ……いうだけ無駄かもしれないけど、やめましょうこんなことは。」

あなたたちの想いは私もよくわかる。

それしか方法がないのなら、私も手助けしていたのかもしれない」

「言っても詮無きことだ。やめよう……」

そう口にして、自らのデバイスにカートリッジを装填する騎士。

プレシアはそれに警戒心を強めながらも言葉は止まらない。

「……科学者としてはあなたたちのやり方は認められない。

彼の計画以上に不確定要素が大きすぎる。天に祈るに等しいもの

よそれは……」

「だが……主の計画は危険性が高過ぎる。

まさに命懸け……主を救うために主の命を危険にさらす騎士がど

こにいる……」

確実性に乏しい一縷の可能性に賭けた騎士たちと

安全性が欠けている計画を信じるしかない科学者。

「……………」

「……………」

言葉は双方にとって、やはり、という意味合いでしかなかった。いくら言葉を尽くしても彼女たちは平行線。

けど本当はどちらも分かっているのだ。

これがどちらもありに分の悪い賭け。

にさえ、なっていないことを。

もはやそれはプレシアの言葉通り“祈り”のようなものとなった。た。

「すごい……………と云うべきなのかしら？」

私は半月もかかったのに、あなたたちは即座に覚悟を決めてしまった」

護りたい人。失いたくない人。

その人のためなら例えその人が望まぬことでもやる覚悟。

嫌われようが、憎まれようが、悲しまれようが、もうそれは止める要因にはならない。

「ふたりから贈られた甲冑を着ていないのはその表れ、でしょ？」

「下らぬ感傷と笑いたくば笑え……………だが不義理者としてはあれを着るわけにはいかないんだ……………」

主を護る剣であり盾。

その証であり誇りでもある主から賜った甲冑を

主の望まぬ“身勝手”な行為で着るわけにはいかない。

「笑うなんてそんな……………」

「だから今は少しだけあなたが羨ましい。
そのバリアジャケットは主が考えたものだろう？」

かつて、時の庭園の主として着ていたものとは違うそれ。

一見すると女物のスーツと白衣にしか見えないが細かいアクセントはそれがただの衣服ではないことを示していた。

白衣は羽織っているというより装着しているような硬さが見え、

袖口と肩は装甲に覆われ、裾は身体全体を護るように広がった形で固定されている。

紫のスーツの胸元には胸当てのようなものが装着され、よく見れば袖はないノースリーブ状。

タイトミニのスカートから延びる足もブーツと一体化した形で鉄の装甲で覆われている。

「……あの格好は露出が多すぎるからってね。

これはこれで少し恥ずかしいけど、あなたの言いたいことは分かるわ」

主と騎士という感覚を持たないプレシアでも、

贈り物は大切したいという気持ちは分かる。

それが愛しい人からのなら、なおさらだ。

ふたりは互いに一瞬だけ、贈られた時のことを思い出して微笑む。

はやてが一生懸命出したアイデアをひとつも聞き漏らさずにデザインし、

実際に着てみれば似合っていると褒めてくれたことを。

あんな格好はダメだと怒りながらも腕や足が出るデザインで

プレシアを恥ずかしがらせて意地の悪い笑みを浮かべたのを。

だから、ふたりはもう戦わなくてはいけなかった。

「さて……時間稼ぎに付き合つのはここまでにしてようか」

「あら、ばれていたのね」

「真っ先に飛び込んでくるはずの男が出てこないのにな……」

「あらら、性格がばれているのって本当に戦略に影響するのね。彼がここ最近苦戦ばかりだったのによやく納得したわ」

そういつて互いに僅かに笑い合つて、しかし油断なく杖と剣を構えあう。

騎士の目は鋭くプレシアに注がれ、バインドの網はもう眼中にない。プレシアもまた同じ手が通用する相手だとは思っていない。新たな術式を奔らせながら目の前の騎士を見据えている。

「ああ、始める前にこれだけは言っておかないと……」

一触即発の雰囲気壊すかのような穏やか声で、告げる。

「私がここにいるのは彼に頼まれたからだけ……
いまは、すごく個人的な理由であなたを叩きのめしたいわ」

僅かに表情に怒気を見せながら不敵に笑うプレシア。
その意図を正確に読んで、女騎士もまた不敵に笑う。

「いいだろう、ならばかつての親子ともども我が剣で墜としてくれ
よう」

『Schlangenform』

連結刃と化したレヴァンティンが空を舞う。

「出来るものならやってみなさい！」

杖から変化したムチが雷光を纏って空を弾く。

「はああああっ!!！」

「やああああっ!!！」

いま、雷と炎の紫電がぶつかりあう

鎧のない騎士（後書き）

騎士服を着ていない理由はそういうこと。
個人的に原作でこれ着て蒐集してるのは
後から振り返って考えると妙な気はする。
まあ、アニメ作品でずっとあの黒い服で
最後の決戦だけいきなり騎士服ってわけにはいかないだろうけどさ。

ああ、あと関係ないけど、
このタイプの話の終わらせ方多いよな、俺って。

風の囀

12月1日 PM09:33

海鳴市ビル街 結界内部 雑居ビル屋上

プレシアと女騎士がぶつかりあう戦場がかるうじて見える位置にあるビル。

その屋上でふたりの少女が魔法陣の中で横になっていた。

「ユーノ、どうなんだいふたりの具合は？」

「大丈夫。大きなケガはないし魔法陣の中で少し休ませれば元気になるよ」

よかったあ、と心底嬉しそうに微笑んだアルフは、しかし。その表情を急に固くして、空の向こうの戦いを凝視する。

こと治療や結界において彼女はユーノの腕前を全面的に信頼している。

その彼が大丈夫といった以上、彼女の主人とその友達について心配事などない。

だからこそその意識は突然現れた彼女へと向けられた。

かつてアルフの主人に冷たく当たり、傷つけ、酷使し、最後にはいらないと捨てた女。

虚数空間に落ちて消えたと聞いていたから。

主人のフェイトが取り調べや裁判以外で口にしなかったから。

アルフは極力彼女のことを考えないようにしていた。

むろんずっと憎かったが、いない相手を憎み続けるよりフェイトの事を考えたかった。

友達が出来て、新しい道を歩きだして、嬉しそうに楽しそうに笑っているフェイト。

アルフにとってそれ以上に嬉しいことなどなかった。

だが、いやだからこそ再び姿を見せた女への感情が止まらない。

(あいつが、またフェイトに何かしようってんなら！)

いまはあの女性騎士を抑えられる存在が他にいないため

アルフは行動していないが、もしそれが無ければとつくの昔に彼女はプレシアへ突貫していきその鋭い爪を突きつけ引き裂くか、尖った牙で噛み付いて引き千切るうとしていただろう。

「……………アルフ」

だがそこへ弱々しくも咎めるような声がかげられた。

「フェイト？」

「だめだよ、せっかく裁判で無罪になったのにヒドイことしようとしちゃ……」

使い魔と主人の間には精神的な繋がりが存在する。

意図的に閉ざすこともできるが、このふたりの場合はそれはなかった。

「で、でもあいつは！」

だからこそアルフの憤りも何もかも感じ取った上で、フェイトは柔らかに微笑みながら首を縦に振って頷いた。

「うん、アルフのいいたいことは分かるよ。

だから……あの人のことはとりあえず置いておこう。
女の子を連れていった獣人がどこに行ったか追える？」

「あ、いや、その……」

そこで初めてアルフは戸惑うような困った顔をした。

正直に言えばフェイトが撃墜されたうえに消えたはずのプレシアが現れたことで

様々な感情でいっぱいになってしまった彼女は
フェイトをここまで避難させるので精一杯だったのだ。

「どこかに隠れてるようだよ」

それに助け舟を出したのはユーノだ。

「途中までは追いかけられたけど、ここは彼らが張った結界の中だ

からね。

本気で隠れられたら僕達だけじゃ見つけれない」

アースラの援護があれば別だが、通信が未だ繋がらない状況から結界の解析がまだ出来ていないのだからとユーノは結論付けていた。

「つまりあの女の子はともかく、あの獣人はまだ戦えるんだね……」

「フェイトちゃん？」

隣で寝てるなのはの言葉に答えず、フェイトは横になったまま奇しくも紫同士の魔力をぶつけあっている戦場を見た。

「すごいや、私が手も足も出なかった人相手にあんなに戦えるんだ」

羨むような嫉妬するかのような声に周囲は反応に困った。

ここからだと言った魔光が見えるぐらいだが、

その攻防が一進一退の互角のそれだというのは全員理解できていた。

「でも、あそこにあの獣人が加わったらそれは崩れる。分かるよね、アルフ」

「フェイト、それは！」

思わず反論しそうになるが、主人の困ったような顔に言葉が続かない。

そう、いまフェイトたちが治療に専念できているのはプレシアが少女を撃墜し女騎士を抑えているおかげだ。

だが獣人の男がその戦線に加わればそれは崩れてしまう。

それはフェイトたちの危機を示していた。

「アルフにあの人の手助けをして、なんていわないよ。
あの獣人の人が出てきたら抑えてほしい。せめてクロノたちが来るまで……」

言わない。とっておきながらもそれは事実上、

プレシアを助力してほしいといっているのと同じことだった。

「ああ、もうっ！ フェイトは最近言い方が卑怯だよ。

分かった、あの男は私が止める。

その代わりフェイトはここから動かないでくれよ」

フェイトの感情がどうであれ。

自分自身の感情がどうであれ。

その判断そのものは間違っではない。

アルフは主人からの頼み事だと割り切ってしまうことにした。

「うん、わかった」

ほのかに笑って頷いたのを確認するとアルフはそこから飛び立って戦場となっている空域へと向かっていく。

「ユーノくんもお願い……もしかしたら、だけど、まだ仲間がいるかもしれない」

「なのは何？」

もしかしたら。かもしれない。という表現を使っているながらなののは表情には確信がある。彼女たちはあれがすべてではない、と。

「私たちなら大丈夫、ちゃんとここでじっとしてるから」

「……………わかった。念のため結界の強度を上げておく。
絶対に魔法陣から出ちゃだめだよ……………」

治癒と防御を同時に行うラウンドガード・エクステンド。

その魔法陣にさらなる魔力を注ぐと、ユーノもまたアルフを追うように飛び立った。

「なのは、あの人たちのこと何か知ってるの？」

「うん、多分なんだけど……………レイジングハート、どうだった？」

傷つき、ヒビだらけのボディを主と共に並んで置かれていた彼女はしかし。

主人の頼みですつとあることを調べていた。

『魔力波動が一致しました、間違いありません』

ああ、やっぱり。

と落胆なのか悲しみなのか。

うまく表現できない衝動がなのはを襲った。

けれどフェイトは話が見えずに困惑顔だ。

それを感じ取ってレイジングハートは事細かに答えた。

『最初の襲撃者の魔力波動はヴィータのデータと一致しました。他の者も同様です。』

次に現れた女性はシグナム、獣人はザフィーラです』

「え……?」

「どうして……どうしてなの。ヴィータちゃん、みんな……」

悲しげに戦場の空を見上げるのはの問いかけに、返答は無い。

はずだった

「それは、あたしが説明するわ……」

12月1日 PM09:30

海鳴市ビル街 結界内部

どれだけの時間、この結界の中を走り回ったことか。

『ここもどうやらハズレのようです』

「はあはあ、くそつたれっ！」

けれどどれだけ息を切らして駆けずり回っても目的とは出会えない。人っ子一人いないビルの中、八つ当たりで机に拳を叩きつける。視線を窓の外へと向ければ、主戦場となっている空で濃さの違う紫色の魔力がぶつかり合っている。プレシアとシグナムだ。

「あっちはなんとか拮抗しているか」

戦闘関連に限定した場合。

素質や技術、経験ではプレシアはフェイトに劣っている。けれど戦いというのは分からないものでフェイトとは逆の待ち構える戦法と

“これまで”に重ねたシグナムとの戦闘経験のおかげでプレシアはシグナムと互角の戦いが出来ていた。

とはいえそれは致命的な距離にいかにも近づけさせないかの勝負。決定打を持たない彼女では長引けば長引くだけ不利だ。

考える。考えるんだ。

プレシアが稼いでくれている時間を無駄にするな。

あいつは、あいつなら、どこにいる。

どこでこの戦況を見ている？

「リニス」

『わかってます、映像で出します』

結界内部の立体地図を投影してもらおう。

主戦場となっているのは結界のほぼ中央の空域。

この付近では巻き込まれる可能性が高く、視野の狭さから戦況を把握するのに向かない。

灯台下暗しの可能性もあるがそうだとすると俺にはどうしようもないから今はそれは外す。

結界の外もなしだ。いくらあいつらが張った封鎖領域でも外にいたのでは

もしもの時のサポートに遅れが出る。それを良しとするはずがない。同じ意味で外に限りなく近い結界の円周部付近も外す。

ユーノがなのはたちの避難場所としたビルは主戦場空域から東に約三キロ。

当然安全の確認をしたはずだからこのビルも違う。

建物内部も違うな。いくら魔法で外の様子を探れても逃げ道が限られてくる。

一番の後方にいるあいつの役割には逃走ルート確保も入っているはずだ。

そのうえでこれまで探索した場所を候補地から消していく。

残った場所で、ここから一番近いのは

「……これはなんとも嫌な距離だな」

『フェイトたちからおよそ300メートル離れたビルの屋上。』

位置や高さから“何故か”ちょうど見下ろせる所ですね』

いかにもな距離の、行かなくてはしょうがない場所だった。

「畏、だろつなあ……」

『そついいながらもつ走り出しているんだから。
あなたは本当にこつというのは決断早いですね』

「これでも気にしてるんだ、ほつといてくれ」

リニスからの遠回しな優柔不断の指摘は、いま一番きつい。
結局のところそれがこの事態を引き起こした遠因のひとつなのだか
ら。

鬱屈になりそうな空気を振り切るように足を動かしてビルの外に飛
び出すと目的のビルまで走った。

その上空、なのはたちがいる屋上から飛び立つ光が一つ、いや二つ
見えた。

おそらくアルフとユーノだ。一瞬、ふたりを放つてどこに行くんだ！
と憤慨しかけたが、よく考えれば何の理由もなしにそれをするアル
フとユーノではない。

「つ、ザファイラか。確かにあいつを抑える奴は必要か」

見ればアルフたちが向かう空域にあいつの魔力光がかすかに見えた。
ウィータをどこかに休ませて戻ってきたのだろう。

これで数字上は三対二になったが楽観視ができるほどの戦力差はな
い。

連携でも取れば別なのだがユーノはともかく遺恨があるアルフと
未だ彼女たちへの罪の意識から遠慮があるプレシアではまともな連
携など期待できない。

何よりもうヴァイターを行動不能にしてシグナムとザフィーラの抑えに回ってくれた。

これ以上の働き、それ以上のチャンスなど、もとより今は望めない。目的のビルに到着して今度は非常階段を下から一番上まで駆け上がる。

絶対、この体力の消耗も計算に入ってる。と思いつながらも消耗するこより足で駆け上がる速さを欲した。時間はもう無駄にはできない。

だから俺はそこまで来ると扉を叩き割るかのように開くと屋上へ飛び込んだ。

「シヤマル！」

いるかいなか確認させずにその名を叫ぶ。

姿を探する必要などなかった。なにせ彼女は目の前に立っていたのだから。

優雅に、冷静に、驚いた顔ひとつ見せることもなく、仄かに笑いながら。

「うふふ、どうでしたコウキちゃん。いい運動になったでしょ？」

「ああ、まさか街ひとつをあちこち走り回るとは思わなかったよ」

“黒い”シヨートボブ風の髪を屋上に吹く風に揺らめかせながら、初めて会った時に来ていた薄い黒い布地のドレスのような衣服をまとう女性。

それは間違いない俺“達”の守護騎士。ヴォルケンリッターの参謀。湖の騎士シヤマル。

彼女はいつも見せていた笑顔のまま、微笑んでいる。
やはり、俺がこのタイミングでここに来るのは思惑通りのようだ。
けれど“ここに来ない”という選択肢はない。ここは動けないのは
はたちに近すぎる。

「……やられたよ、狙いがまさかなのはだったなんて……」

これまであちこちの世界に赴いて現地生物や時折遭遇した魔導師を
襲うことしかしてなかったから、油断していた。

いや、可能性は気付いていた。けれどそうなってほしくないから、
考えなかった。

「名もないような魔導師や生物を襲うのも限界がありますしね。

なのはちゃんならきつとかなりのページを稼げますから」

そしていまはそれにフェイトも対象としてあがっている。

あの二人からなら合わせて100ページ以上は稼げるかもしれない。

「……させると思っているのか？」

だから、脅すような低い声で告げる。

そしてアックスモードのリニスを手に、それを彼女に向ける。

だが、シャマルはそれを小馬鹿にしたように笑った。

「止められると思うんですか？」

魔力が“使えない”コウキちゃんが、わたしを「

「っ……」

思わず齒噛みする。

シャマルの指摘は事実だ。

彼女は戦闘向きのスキルやデバイスは持っていない。

けれどそれでも彼女もまたヴォルケンリッターの一員。

数多の戦場を経験した騎士であり冷酷無情とまでいわれた参謀役。

そんなシャマルが待ち構えていたのなら、ここは彼女のフィールド。そこに今の俺が飛び込んでいくのは裸で地雷原に飛び込むようなもの。

だが、それでも

「出来ないからって止まると思うのか？ 俺が！」

俺にはそれは止まる理由にはなりはしない。

「思ってますよ、だからここで……待ってたんです」

それに僅かに憂うような顔を見せてシャマルは真っ直ぐ俺を見据えた。

その瞳にはびっくりするぐらい迷いがなくて、それ以上に熱かった。だからこそ俺は止まるわけにはいかない。とり二スを強く握る。

俺が、俺こそがこいつらを止めないと！

畏を覚悟して地を蹴るように走り、シャマルに肉薄する。

リニスの間合いまで踏み込んでその一撃を振り下ろす。

「っ、やっぱりそうなるよな」

肩口を狙ったそれは小さな竜巻のような風に阻まれてしまう。
彼女の魔力光と同じミントグリーンの小竜巻に刃先が簡単に押し返される。

シヤマルは身動きひとつせず微笑を浮かべている。
だが指にはまったクラールヴィントが輝くのが見えて、俺は急いで後ろに飛退く。

「うふふ」

「え、がつ!?」

すると突然、背中に鈍痛が走る。

飛退いた勢いそのままに壁に激突したような感覚。

だが、そこにそんなものはなかったはずだ。

驚きながら背後を確認すれば、緑色の壁。

「くっ、風の盾か」

魔力で作られた渦巻く風で作られた壁。

本来は防御魔法だが、それを俺が飛退いた方向に発生させてぶつけたのか。

『コウキ、ぼさつとしないで！ 次がきます！』

「ちっ、はああっ！」

リニスからの叱責と伝達される情報から、彼女を力任せに振るう。

シヤマルが放った小竜巻が俺たちを襲おうとしていたのだ。

ほぼ真横に一閃して、頭を狙ってきた二発の小竜巻を弾く。

魔力が使えない俺では弾いてそらすのが精いっぱい。

しかし、それでは足元を狙った一発まで対応しきれなかった。

「ぐっ！」

衝撃に左足を弾かれる。

右足で踏ん張って立っっていようとしたが、

その瞬間を狙うかのように今度こそ本当にクラールヴィントが輝く。

『Pendel form.』

指輪の石が分離・拡大して振り子となり本体と魔力糸でつながった状態へと変化する。

そしてその振り子は振り回す必要もなくシャルルの意志を受けて俺を襲う。

四つの振り子はそれぞれ別の目的のもと動く。

『コウキー！』

リニスが叫ぶが彼女を振り切っているうえに左足を弾かれ体勢を崩した俺に

出来ることなど、せいぜいダメージを覚悟する程度しかなかった。

一つ目が唯一地面と接していた右足を弾き、身体が宙に浮く。

二つ目ががら空きとなった腹に入って俺の身体を金網のフェンスまで押しやる。

三つ目がリニスを掴んでいた手を弾いて、俺は彼女を手放してしま

う。そして四つ目が俺の身体をグルグルと巻いて、身動きを奪った。

一瞬だった。

それが一瞬の出来事だ。

俺はろくな抵抗もできないまま縛り上げられてしまった。

「はっ、がっ……シャ、シャマル……」

屋上にまるで芋虫のように縛られた状態で転がる俺は身動きできないながら視線だけはなんとか彼女に向けた。

「あとちょっとだけ、おとなしくしててくださいね」

「なにを……？」

そういつて彼女はどこか申し訳なさそうに微笑む。

それに、すごく、どうしようもないほど恐ろしい違和感を覚えた。

おかしい。

どうしてシャマルは俺を縛ったまま動かない？

あいつならこの縛りをバインドに代えて、なのはたちの所へ行けるいや、行かなくてもこいつにはこの距離からでも目的を達成できる魔法がある。

だっていうのにどうして、こいつは。

シャマルはどうして俺を見張るかのようにここで足を止めている？

視線を動かして主戦場となっている空を見た。

未だに戦闘は続いており、三対二の拮抗に大きな変化はない。

ヴィータは間違いなくプレシアに撃墜された。動ける状態じゃない。

そして残ったシャマルは俺を捕えると動こうとしない。

ここから何かをしようとする気配すらない。

「つつ！？」

待て、おい、なんでだ？

なんでシャマルは闇の書を“持ってない”んだ？

こいつじゃないのならいったい誰が闇の書を持っている！？

おかしい。おかしすぎる。なんだ、何を俺は間違えた？！

「……先に言っておきますけど、通信妨害してるので思念通話は使えませんよ」

そんな言葉がいと簡単に俺の疑問に答えてくれた。

つまり俺はその危機を誰にも教えることができないのだと。

「ああ……そんな、まさか……」

少し前から思っていたことがあった。

そうであって欲しくはなかったけれど、

そんな予感がいつもあって、けど俺はそれを信じたくなかった。

「くそっ、このっ！」

確かめるため文字通りの悪あがきで身体を起こすと金網のフェンス越しに

離れたビルの屋上を覗き込んで、俺は絶句するしかなかった。

「っ、あ、ああ………」

あまりにも、あまりにもそれは“予想通り”の光景。

俺が考えた最悪の予想図が現実になろうとしている。

それも俺がどうしようもない距離で、けれど俺の視界の中で。

「や……やめろっ！　よすんだっ！！　それは、それだけはダメだ

「!!」

聞こえやしないと分かっているのに思いっきり叫んだ。
案の定“彼女たち”はこちらに気付く様子さえなく悪夢が着実に現実になっていく。

だっていうのに俺の頭では関係ないはずの言葉が、
最近よくリニスから言われている言葉が流れた。

『あなたは一度自分の懐に入れた相手に甘すぎる』

結局のところ。

「やめろ……頼むからやめてくれっ!!」

その弱点が俺達の、いや俺だけの敗因だった。

「やめろっ……やめろ“はやて”えっ!!!!」

必死の叫びをあざ笑うかのように、少女の腕がふたりの女の子を貫いた。

敗北

12月1日 PM09:40

海鳴市ビル街 結界中央上空

共に紫系統の魔力光を持つ両人は一進一退の攻防を続けながら戦いの場を徐々に徐々に結界中央から西に離れていく。

「はあああつ!!」

『Sturmwinde』

剣に込められた魔力が衝撃となり、雲から落ちる雷を弾く。自らを狙う雷撃を弾いた一瞬の空白を見逃さずシグナムは彼女へ踏み込む。

「重なり、奔れ！ サンダーネット！」

ムチを持つ手とは逆の左手をかざして呪文を紡ぐ。放出される魔力が変換資質により雷に変貌して蜘蛛の巣状に空に広がる。

「ちっ！」

格子状に編みこまれた雷の網がプレシアを中心にシグナム目掛けて全方位に広がりながら襲いくる。

彼女に向かって踏み込んでいたシグナムはそこに突っ込むようなものだった。

即座に高度を上げてネットの包囲網から逃れようとするが、時すでに遅し。

雷の網はすでに目前まで迫っていた。

「でやあああっ！！」

しかしそれで諦める烈火の将ではない。

炎をまとわせたレヴァンティンで網を一闪。その切れ目から包囲網から脱出。

「まだよ！」

そこへ彼女の意を受けて自然の雷が落ちてくる。

高度を上げて回避してしまった為にそれは先程までより速く感じられた。

「くっ！」

返す刃が間に合わないと思ったシグナムは鞘を振り上げた。彼女の魔力をまとった鞘は盾のように雷を弾く。だが魔力弾や斬撃ならまだしも雷を鞘で防ぐという行為は慣れていなかった。

直撃は防げたものの衝撃でシグナム自身も弾かれるように後方に下がることに。

そこへガチャリと手錠でもかけられたかのような感覚が襲う

「なっ、この距離でバインド!？」

その存在に自らの剣を握る右手と左足が固定される。

プレシアの仕草からいま仕掛けたものではない。

おそらく設置されていた物に引っかかったのだと悟って愕然とする。

「……まさか、誘導されていたのは私の方か？」

「ええ、ヴィータちゃんと同じ轍を踏まないであろうあなたなら、

きっと私を動かして設置型が置かれてない空域へと誘導させていくと思っただわ」

だからこそ先手を打ってプレシアは彼女の誘いに乗りながら離れた遠地に設置型バインドを置いて、そこへ巧みにシグナムを誘導したのだ。

とはいえ、全身を縛るつもりで設置していた彼女からすれば、これは片手片足が偶然引っかかったに近い結果だったのだが。

「まんまとハメられたか…」

「これで終わりよ!」

そんな内心など、おくびにも出さず大技の準備へ入る。

簡単な雷撃では彼女の防御魔法を撃ちぬけないがきちんと準備をして放たれる大魔力による大型砲撃なら話は別で、その仕込みは終わった。

シグナムもバインドの解除に入っていたが、プレシアの方が速い。

「サンダーッ！」

「つつ!?!」

勝った。

とプレシアは勝利を確信した。

やられた。

とシグナムは己が敗北を覚悟した。

それをある衝撃が覆す

大気を震わすような紫色の波動。

彼女たちの東に位置するビルから放出される魔力は

そのまま天を貫くように封鎖領域という結界を揺らがしていた。

「っ！　だ、だめよコウキっ、そんな一遍に使っては!?!」

その事態にプレシアの注意が完全にシグナムから離れてしまう。

そこへさらなる凶報が届けられる。

「フェイト？ フェイトっ！？」

「そんなっ、結界は破られてないはずなのに！」

離れてザフィーラと応対していた二人の顔に動揺が走っていた。

アルフは主人との結びつきが急激に弱まったのを感じ、

それを察したユーノは異常がないことがもはや逆に異常に感じられた。

「……通さん」

半ば反射的に戻ろうとした彼らだがそれは盾の守護獣に阻まれてしまっ。

「くっ！」

「どけえっ！！」

そのやり取りを聞いたプレシアにはある考えが浮かんだ。
リニスが一度は警告した、その可能性を。

「っ、まさかあなたたち、はやてさんまで！？」

「勘違いしないでらおう……我らは主に命令など出来ぬ」

「くっ！」

否定する言葉が、あまりに近くて彼女は振り返ることもできなかった。

「……目的は達した、追わぬならここまでにしよう」

「っ、誰が！」

振り向きざまに至近距離から紫電を放出させようと手をかざすが。

「遅いつ！」

雷をまとった腕は、そこから何も放出することさえできずにその距離では雷より速いレヴァンティンの一閃が直撃する。

「っっ、あああああっ！！！」

痛みより先に衝撃に弾き飛ばされて悲鳴を上げながら彼女は地面へと墜ちた。

直前に半ば無意識の慣性制御と防御魔法で衝撃を殺すが、直撃を受けた左手には激しい痛みが襲う。

「う、うつつ……シグ、ナム……」

左手を庇いながら空を見上げたが、既に彼女の姿はない。だけれどそれはこちら側の完全敗北を意味していた。

（目的を達したと言っていた、なら、もうっ！）

手の痛みは強いが白衣袖口の装甲と彼女の手加減のおかげで見えるケガはない。

しかしそんな痛みより、プレシアは彼女たちが負ったであろう痛みを思っ胸が痛かった。

「ああ、フェイト、なのはさん、はやてさん……………コウ、キ……………」

（なんで、なんでこんなことに！！）

名を呟くように声に出して彼女は氣力を振り絞るように再度空に上がる。

そして少女たちと少年がいるであろう方角目指して飛んだ。

「……………いつたい、どれだけ運命というものは私たちを弄べば気が済むの！？」

叫びは誰にも聞かれることなく空に消えたが、

それは間違いなく彼女がずっと仕舞い込んでいた本音だった。

（彼はただ、当たり前の日々を続けたかっただけなのに！）

12月1日 PM09:40

海鳴市ビル街 結界東部 雑居ビル屋上

コウキの視界の中で、すべては終わった。

八神はやての両腕に貫かれ、露出されたリンカーコアを闇の書が蒐集した。

予想通り、遠目から数えただけでも埋まったページは100を超える。

「……………」

それを見届けるまで、それこそ喉が張り裂けんばかりに叫んでいた
彼も

すべてが終わったあとは逆に不気味なくらいに黙り込んで俯いていた。

「……………あの、はやてちゃんは……………」

「いな！ 分かってる！」

その姿に思わずはやての弁護に走ろうとしたシャマルを彼は止めた。

「お前達はやてに蒐集を頼むわけがない。あれは、あいつの意思

なんだろう？」

「……………」

シヤマルは否定も肯定もしなかったが、それが答えでもあった。

自ら手を汚すことを決められても、それを主であるはやてに強要など出来ない。

しようとなさえ、守護騎士たちの誰もが思っすらいなかった。

だからその提案が彼女自身からされた時、心臓が凍りついたかと思う程の衝撃を受けた。

「お前らはきつとギリギリまで反対したはずだ。

それでもやると決めたのがはやてなら、悪いのははやてだ」

「……………」

シヤマルは言い返す言葉がなかった。

いくら主とはいえ、いや主だからこそ止めなくてはいけなかった。自分たちの手は既に汚れているからまだいい。

けれどまだ幼い主の手は汚れてなどいない。汚す必要もない。

四人は必死にあなただけだと説得したが彼女は首を縦に振らなかったのだ。

「けど、もっと悪いのは……そんな決断をさせた俺だ！」

「っ、違います！ それは！」

咄嗟に出た否定の言葉は最後までつむがれることはなかった。

目の前の少年から莫大な魔力の脈動を感じたからだ。

「え、コ、コウキちゃんなにを!？」

「心配するな……俺の魔力は使わねえよ」

縛られた体。動かせない腕の、その拳に握られた5本のカートリツジ。それが両手に。

そこに込められた魔力を彼は一気に解き放って自らを拘束していた魔力を吹き飛ばす。

だが解き放たれたものはそれだけでは消えないほど膨大だ。

「無茶ですつ、10本一遍なんてデバイスだつて耐えられない!」

間に合わないと分かっているながらシャマルは走り出していた。

それよりも早くに彼は片手を振り上げて5本分の魔力を空に放った。

「きやつ、結界が!？」

一撃でその存在が揺らぐ結界と吹き飛ばされた通信妨害。

放たれた衝撃にシャマルは近づくことさえできなくなってしまう。

「シャマルっ!!」

足が止まっていた彼女は呼ぶ声に反射的に視線を向ける。

見れば残った方の握り拳に魔力を集めてコウキは地を既に蹴っていた。

一足で彼女の間合いに入り込んで、拳を振り上げる。

(せめて、シャマルだけでも捕まえる!)

犠牲を出した。出させてしまった。

それもはやての手によって、だ。
ならば、それぐらいはしなければ割に合わない。
半ばそんな強迫観念にも似た想いで、傷つけてでも捕えようと振り上げた拳。

「つつ!?!」

その前に、おそらくこれ以上はない最強の防御が待ち構えていた。
ある意味それは魔法以上に魔法らしくコウキの拳を止めてしまう。

「……………」

彼女は特別なにかをしたわけではない。ただ、目を瞑ってじっとしているだけ。

そう、何もせずに黙って彼の攻撃を受け入れようとしていたのだ。

「…く、くそつたれ!」

それを見た瞬間彼の拳は勢いを失ったどころか、
せつかく解き放った魔力を使ってまで強引に押し止めてしまう。

無抵抗だったから殴れなかったのではない。

シヤマルもまた無抵抗なら殴られないと思っただけではない。

彼女が本気でコウキになら殴られても構わないと思っただけから。

彼にならいつでも裁かれる覚悟があっただけの話。

その信頼でもあり忠義でもあり愛情でもある感情を彼は殴れなかったのだ。

「お願いだ……もう、やめてくれっ！」

一度は覚悟して振り上げた拳が震えて動かない。それに気付いて、だからコウキは懇願するように叫んだ。

「ふふ……こんなときでも、あなたは“お願い”するんですね」

それに薄く笑って目を開けた彼女は互いに手が届く程の距離にいる主の顔を眺めた。
瞼や唇は震え、憔悴しきった表情は今まで見た顔のなかで一番ひどい顔だった。

「ええ、そんなあなただから、私たちはもつと生きてほしいんです」
それをさせているのが自分たちだという事実が胸が痛むが彼女たちはそれよりもその願いを優先すると決めてしまっていた。

「俺はっ、そんなことされても嬉しくない！」

「そうかもしれない。出来れば私たちもあなたが喜ぶことをしたか

った。

けど、私たちは選んだんです。一番大事なものを、一番欲しいものを！」

そのためなら例え彼に嫌われても構わないと思えるものを求めた。可能性は低いかもしれない。不安要素は多いかももしれない。けれど騎士たちはそれ以外の道を選べるほど器用ではなかった。

「……………あなたは、何が一番欲しいですか？」

「つつ！？」

呼吸が止まる。

表情が凍りついて青く染まる。

シャマルが見た中で一番ひどい顔はたった一言で更新された。

「……………それを決められなければ、私たちを止められませんよ」

少しだけ悲しそうに微笑むとスツと手をコウキに伸ばす。

その手の影に視界を覆われるとまるで電源を落としたかのように意識が刈り取られた。

脱力し崩れ落ちる身体を受け止めて、優しくゆっくりと床に寝かす。

「おやすみなさいコウキちゃん、どうかよい夢を」

名残惜しむかのように、頬に唇を寄せてシャマルは夜の闇に消えて

行った。

12月1日 PM09:50

アースラ ブリッジ

結界の解析が終わるより内部から破壊された方が結果的に速かった。そのため起こったことを把握したアースラのクルーたちは絶句する。かつて共に事件に挑んだ民間協力者である高町なのは。

事件後、クルーの一員のように迎え入れられたフェイト・テストロツサ。

彼女たちは厳密に言えば局員ではないがクルーたちからすればそれと同等に近い感情と、その実力からくる信頼があった。

だからこそ両名が倒れている姿は信じがたいものがあった

「ランディ、医療班の準備と本局の医療施設への要請を！」

アレックス、転送準備急いでっ、ふたりを早く収容するのよ！」

「「りよ、了解」「」

艦長からの澱みない指示に我に返ったクルーたちは即座に動き出す。

「エイミー、追跡は!？」

「うつつ、やってるっ……やってるけど……うわっため、待って……
ああっ!！」

結界が破壊されて僅かな空白のあと、

襲撃者と思われる数人はそれぞれ別方向に飛び散って次元転移して
しまった。

追跡を試みたエイミーだが、その数とジャミングに追い切るところ
か、

転移した大まかな“方角”さえ特定することができなかった。

「ごめんクロノくん、だめだった……」

悔しさからか顔を俯かせて心から申し訳なさそうに謝るエイミー。
しかし叱責が慰めか。何かしら返ってくるはずの反応がない。

「……クロノくん？」

顔をあげて彼を見ながら再度問いかけるが返答はなかった。

彼はずっとモニターに見入って固まったように動かない。

「あれは……まさかっ……」

小さな呟きと驚愕の声。

エイミーはモニターに視線を移すがどれを見て彼が驚いているのか
が解らない。

映っているのは倒れているフェイトとなのは、彼女たちによりそうアルフとユーノ。

追跡した時にどうにか撮影できた逃走者たちの一部分だけだ。

『あのっ、すいません。こちらも収容してください……』

そこへ彼らからすれば第三者からの通信が入った。

突然開いた新たなモニターに映る顔に、一瞬不思議そうな顔をしたエイミーは

しかしすぐにその『顔』からその人物を連想した。

「え、プレシア・テストロツサ……さん？」

『あ、ええつと、イイエチガイマスヨ……』

明らかに目を泳がして棒読み過ぎる発言に呆然となるエイミー。

しかし艦長たるリンディはさして驚かず、受け応えた。

「ケガをしているのはあなた？」

それとも……こんな時に膝枕されているその男かしら？」

モニターの映る顔から視線を下せば、苦しげな表情ながら

プレシアの白い肌が見える素足の太腿を枕にして寝かされている男がいた。

『え、あ、いえこれはコウキが苦しそうだったので私が勝手に！

つていえ、そうではなくてですね、早く収容を！』

リンディの指摘に瞬間真っ赤になった彼女だったが、

即座に持ち直して、再度早口でまくしたてるようにそれを要求した。

よく見てみれば確かに目に見える形でのキズが一番ひどいのが彼だった。

「アレックス、転送する相手を二名追加よ。

医療班にも患者が二名追加って伝えておいて……」

『え、あの私は……』

「その左手もきちんと治療しないとダメよ」

『あつ………お世話になります』

少し渋ったがストレートに指摘されると戸惑いながらも素直に彼女はモニター越しに頭を下げた。

(あらま、あのプレシア女史をよくもここまで……)

呆れなのか感心なのかよく分からない感想を持ったが、口どころか胸中でも言葉にあえてしなかった。してしまつと精神衛生上ものすごく支障をきたすと感じたからである。

「………よろしいのですか艦長？」

「事情を聴かなければならないでしょう、クロノ執務官。

それが誰であろうと、いま意識があるのは彼女だけなんだし……」

そこへ投げかけられた裏の事情を知るがゆえの言葉に、背に腹は代えられないと答える。

なにせ彼女たちにとって味方である魔導師二名を倒され、おそらく

“蒐集”された。

というのに彼らが得たものは現時点ではなにもない。いまは少しでも多くの情報を早く手に入れたいのだ。

「あなたも現場へ。再度の襲撃はないでしょうけど、念のため……」

「了解です」

そういつて転送ポートへと走っていく息子の姿を見送って、誰にも聞こえないほど小さくリンディは溜息を吐いた。

「これは因縁かしら、それとも運命？」

もしくは神が作り上げた偶然という名のドラマだともいうのだろうか。

「まったく……冗談じゃないわね」

吐き捨てるように呟いて彼女はモニターに映ったそれを見据えた。

そこには誰かの腕にかかえられた本が映っている。

かつて彼女の夫の命を奪った闇の書口ストロギアが、そこにあった。

第11話予告

クロノ「忘れもしない、忘れられるわけもないあの日の事件」

リンディ「私たち家族の運命を変えた闇の書事件……」

クロノ「いま再び起こる闇の書事件の前に、その主が語る自らと騎士たちの真実」

リンディ「そして、迫る刻限を前にして、あの男は、それでも……」

クロノ「次回、魔法少女リリカルなのは異伝・第11話『タイムリミット』、に……」

二人「……ドライブ・イグニッション……」

リンディ「私、あなたを嫌いになりそうよ」

第11話予告(後書き)

11話は全体的に日付があっちこっちに移動する予定なので
読むさいはお気をつけて。

本当では無いこと(前書き)

十一話スタートです。

本当では無いこと

それは小さな願いとは呼べないものだった

願ったのは自らが消えたあとの幸せ

求めたのは自分がいなくても笑顔でいてくれること

遣される人たち

失ってしまう彼女たち

その想いと心をあまりに無視する傲慢な願い

そんなのは許されない

私が許さない

だから

全部が終わったら

絶対に引つ叩いてあげる

容赦なく全力で

海鳴市ビル街 結界内部 雑居ビル屋上

「そうだったんだ……」

ふたりはいきなり現れたあたしの言葉に納得している様子だった。ほとんど嘘しかないあたしの話を半ば根拠なく。

「ほんまにごめんな、うちの子たちが迷惑かけて……」

「そんな、はやてが謝ることじゃ……」

「そうだよ！ はやてちゃんが悪いわけじゃないんだし」

ううん。

根拠はあるんや。

きつとあたしが友達やから。

だからきつとこのふたりは信じた。

そしてあたしは……………今からそれを、裏切る。

「うん、ありがとな……………にしてもコウ兄はどこにおるんやろか？

あたしより早くに来たはずなんやけどな」

その言葉に喜びと驚きがない交ぜになった顔をしたふたりが半ば反射的に周囲を探してしまっている姿に笑みを浮かべそうになつて、止める。

本当はどこにいるかなんてもうシャマルから聞いて知つとる。

きつと、あの人は怒るやろうな。

すつごく怒つて、また自分のせいにしてまう。それでも、それでもな。

やっぱりあたしは、あたしたちにはこの道しかないんよ。

「あ、もしかしてあれ違う？」

そういつて適当な方角を指差せば、

あまりにも無防備な背中をあたしに向けるのはちゃん達。

そこにあるのはあの人に会える喜びだけやない。

あたしへの、友達への無条件の信頼がある。

『だ、だめですよはやてちゃん!』

『そつだ! はやてがそんなことする必要ねえよ!』

『せつかく出来た友を裏切ることになるんだぞ』

『考え直してください主はやて!』

あたしの考えを告げた時の騎士たちの言葉がふいに蘇る。

その想いは嬉しかったし“友達”を裏切る事に抵抗がないといえは
ウソや。

けど、うちなら絶対になのはちゃんたちを油断させられる。

コウ兄たちもまだあたしの行動を知らない。

確実にこのふたり程の魔導師から蒐集できることの意味は大きい。

残り250ページを既に切ったここで稼げればもうあと一息。

闇の書の完成

もうそれしかあたしには希望がない。

そのためにシグナムたちは罪を犯した。

なら、ならその気持ちと同じ気持ちを持つあたしもそつしよう。

きつとうちらは二度とコウ兄に会えなくなるやろっけど、

それでも、それよりも、あの人が消えてしまうことの方がずっと嫌
なんや!

だから

さよなら

そう心で呟いて、無防備な背中からあたしはそのリンカーコアを摘出した。

二人分の苦悶と驚愕の表情が振り返ってあたしを見る。

「ごめんはいわん……………友達やめてもろてもいいよ、闇の書!!」

叫んで二人分のリンカーコアを蒐集する。

予想以上のページが埋まっていく中、苦しむ彼女らの声と表情に歯を食いしばる。

ああ、これは、思ったたよりきついなあ

だからやるな。

二日連続で同じ“ユメ”を見るなんて。

12月3日 AM05:33

「はあ……なんや、思ったよりうち大事に思っとったんやな……」

自嘲しながら、かけられていた毛布を横で眠るヴィータにかける。簡易ベッドから降りて、飛行魔法で身体を浮かして外に移動する。降り注ぐ日光を浴びながらさつきまで自分がいた小屋を振り返る。ザフィーラが建てた簡単な構造の小屋は正直、雨風防げるだけマシな出来栄えやけど、犯罪者の寝泊り先があるだけそれこそマシや。

「はやて、もう起きたのか」

そこへ見張りの当番らしかったザフィーラが声をかけてきた。最初はすごく堅苦しかったけど今ではかなり気安い話し方をしてくれる。

そのせいか、なんやろ。すごい安心できるオーラみたいなんがある。

お父さん、ってたぶんこんな感じなんやろうな、って感じや。どことなく声も士郎さんにそっくりやし。

「そやね………思ったよりあたしそんな神経図太くなかったみたいや」

だからやるか、あははと苦笑いしつつもけっこう際どいこといってしもた。

他の三人やとこういうことは絶対言わんと思うんやけどな。

「……いまなら……いや、何でもない。忘れてくれ」

言いかけて、口をつぐむ。

うん、気持ちだけでもらっとくわ、ありがとなザフィーラ。

「さて、今日も頑張って探して蒐集せなな」

「それは……どうかと思うぞ。おとといも昨日も結局強行軍だったのだ。」

我らはともかく、はやては今日休息をとって……」

けどさすがに連日あたしが動くのは心配なようや。

うん、ザフィーラもしっかりコウ兄の影響受け取るな。

心配性いうんか自分以外が働きすぎるのを嫌う傾向がある。

それが女の子なら尚更といった感じで。

まあそれについてはそれこそ今更なので横に置いておくとして。

「……無理するんは承知のうえや。なにせこの数日が勝負やかな。なのはちゃんたちが魔法を使えず管理局がまだうちらへの戦力を揃えられない、今が」

ページは残り150を切っている。

搜索の手は緩めないやろうけど、対処できる人間がいなければ問題はなない。

こっちは完成させてしまえばいいのだからその後うちらが捕まっても正直困らん。

「一番の不安は、その数日でどれだけ稼げるか……コウ兄がおとなしくしとるか、って所やね」

「後者は……厳しいだろうな」

渋い顔で唸るザフィーラに、まったくや、と返す。
おそらくもう昨日から恐ろしいぐらい精力的に活動してるやるな。
なんや管理局よりそっちが怖いわ。追い詰めすぎるとなにやらかす
か分からん人やからな。

「……なんや“敵”として見ても“守護対象”として見てもすつこ
く厄介な人やね？」

「ふっ、確かに」

その両方を兼ね備えている上にうちの目的そのものやから何とも
扱いに困る人物や。

「あれでもう少し、自分に執着してくれとつたらなあ……」

そのへんも叱ってやらんとだめやつたかな？

「まあ、そういうのはもうなのはちゃんたちに丸投げかなあ……」

もうあそこへは、あの笑顔の所に戻れないあたしたちにはもう彼を
叱る資格すらない。

裏切ったあたしが裏切られた元・友達を頼る。なんておかしな話や
けど。

あの人のことに関してだけは今でも信じられるから。
けど、だからこそひとつだけ大きな不安がある。

あの人の語る言葉を鵜呑みにしてはいけない

それだけが、すごく、すごく不安だった。

12月3日 AM10:14

海鳴市 マンション一室

およそ丸一日意識を失っていたなのは達が目を覚ました時には
事件の担当チームとその活動拠点は決まっていた。

担当はアースラ組。そしては拠点は海鳴市に存在するとある高級マ
ンション。その一室。

なのはの保護も兼ねているため彼女の家を目視できる距離にある。
そこへ“犯人たち”を除けば、ほぼすべての事件関係者が顔をそろ
えていた。

「みんな揃ったな」

リビングにコの字に並べられたソファにそれぞれ、フエイト、なのは、アルフ、ユーノの協力者組。

向かい合う形でコウキ、プレシアの関係者組。

間にリンディ、クロノ、エイミィの管理局組が座っている。

「いろいろと急だが、この事件は僕たちが担当することになった。各々、いろんな疑問や聞きたい事や言いたい事があるだろうが、まずは事件に関係することから説明させてほしい」

席を立つたクロノが全員の顔を見回す。

おとといに起こった襲撃は結果的に色んな疑問を生み出していた。それらについて聞きたいのは分かっていたがその為にはそちらの説明が必要だった。

「じゃあ、まずは魔導師襲撃事件から」

誰も首を横に振らず、否定の言葉を口にしないためクロノは話を進めた。

「管理局が把握してる最初の事件が起こったのは10月末。

ある世界の魔導師が正体不明の何者かに襲撃された。

以後魔力を持った生物や調査・捕縛に向かった局員も含めると一か月で100件以上確認されている」

「ひと月で100件以上!? なんかすごい数のような……」

「……そう思うかもしれないが一日に直せばおよそ3件か4件。

犯人グループが四人組であることを考えれば、そこまで大きな数

「字じゃない」

それぞれが単独、あるいは二人ずつに分かれて毎日複数の襲撃をこなせば

ひと月、100件というのはあまり大きな数字ではない。

あくまで管理局が把握している分だけ、の話だが。

「そしてその被害者や被害生物たちには共通の症状があった。

魔導師が持つ魔力の源であるリンカーコアの一時的な縮小化だ」

「っ、それって私やなのと同じ……？」

「ああ、だからおとといの襲撃も事件の一部として数えられている。そしてその症状を起こす事件は実は昔から半ば定期的に起こっているね。」

管理局ではその原因となるロストログアに心当たりがあり、

おとといの事件でついにその存在が確認された」

目でエイミィに合図を出したクロノに彼女は頷きモニターに映した。逃走する犯人たちの姿を数枚撮った映像の中、少女が抱えるその本を中心に。

それに一瞬身を固くさせたのはフェイトとなのはだ。

彼女たちは分かったのだ。それを持っているのが誰なのかということに。

「……それが第一級搜索指定ロストログア・闇の書よ」

あえてそれを無視してリンディはその名を告げた。

そして何の感情も付加せずに淡々と彼女はさらに続ける。

「特性は無限再生と転生機能。主と定めた人間が死ぬか本体が破壊されると

自身を再生させながら別の世界へ転移してまた主を探す。
そのために完全破壊はとても難しい代物よ」

「それだけならまだたいした問題じゃないんだが、これには魔力を蒐集する特性もあつて

その全ページである666ページを埋めると完成し主に大いなる力を与える、とされる」

「……ってことは、あいつらの目的はその闇の書つてのを完成させて主にその力を与えようつてことなのか？」

アルフの簡潔なまとめにクロノ達は一瞬言葉に詰まりながらもいつもならそうだ、と答えた。それは言外に今回は違うと言っているも同然。

どういうことだ、という視線がクロノに集中するなか、違う人物が声を上げた。

「そこからは俺が説明した方がいいだろう」

今度はそういつて立ち上がった日野コウキに視線が集中する。その多くはなんであなたが、という意味合いのものが多かった。

「え、どうしてコウキさんが？」

「ああ、そうだな。」

それはな、なのは……………俺が闇の書の、主だからだ」

「え？」

「はあっ!?!」

「うそ!」

「……………っ!」

驚き、啞然とし、叫び、絶句する。

様々な反応を返す彼女たちに苦笑いするしかないコウキだ。

「そりゃあびつくりするよな」

「当たり前だ。ふつつなら主は主犯格。

その主自らが局に協力を求めてきたのは前代未聞だよ。

それも配下の騎士を止める協力は、な」

すでにこの件について話し終えていたクロノやリンディだけが驚かずに普通にしているが、知らされてなかったエイミイだけが叫んでいた。

「え、ちょっと! 私聞いてないんですけどっ!」

もっとも、その叫びは上司ふたりに思いっきり黙殺されてしまったが。

その様子に知らされてなかった面々は苦笑を深めるばかり。

「……………でもさ、協力っていうけど、

あんたが主なら一言やめろっつていえばいいんじゃないのかい?」

この場に置いて、おそらくは騎士たちと一番立場が近いアルフの言葉は

わりと真に迫っている。彼女はあまり物事を深く考えないがゆえに時折本質を的確に言い当てることがある。

「ああ、その通りだ。あいつらが俺の命令で動いているなら、な」

「え、それってどういうことですか？」

配下。部下。使い魔。守護獣。

そういつた存在を持ったことがないのはにはコウキの言葉の裏が読めなかった。

あるいは当たり前のように彼女たちをヒトとして扱っていたためにとつくの昔に答えに行き着いているのかもしれないが。

「……………あの女の騎士が言っていました。」

主との約束と誓いを破りすぎてしまったって……………」

逆に即座に理解できたのはフェイトだ。

彼女とアルフの関係は主従より姉妹に近いがそれでも使い魔等の性質は理解している。

「シグナムか……………気にするなら最初からずっと守ってくれよ」

小さく溜息を吐きながら誰にでもなく呟いた彼は

一度頭を左右に振って、再度全員に聞かせるように口を開く。

「もうお前らも解ってるだろうけど、襲撃犯たちはあいつらだ。」

ヴェータ、シグナム、ザフィーラ、シャマル……………そして、八神はやて」

「そんな……………どうして」

理解はしていた。もう知ってはいた。はやてに至っては直接騙し討

ちを受けた。

けれどそれでも断定されるまでは信じたくなかったのも事実。

だがそれをよりにもよって彼に肯定されてしまったてはもう疑う余地もない。

「順番に説明する。」

まずはやて以外の四人は、今まではやての守護獣ってことにしてただけ

△。本当は闇の書に付随する主を護り蒐集を手伝う守護騎士プログラ

人間とも使い魔とも違う特殊な魔法生命体なんだ」

「……人間とも、使い魔とも違うって……わたし、みたいに？」

「つつつ!?!」

「っ、それは違うわ!

フェイトさんは生まれ方が特殊だっただけでちゃんと命をもって生まれてきた普通の人間よ」

「そうだ、検査でもはつきりそう出ただろう。変なこというんじゃない!」

滅多にないハラオウン親子からの感情的な叱責に思わず萎縮するフェイト。

けれどすぐにそこにある自分への本気の感情に気付いて嬉しくもなってしまう。

「っ、ごめんなさい」

だからフェイトは自らの失言を素直に謝った。

その頬は照れか胸の中に生まれた暖かな気持ちからか赤くなってい

たが。

「うわ、言いたかったこと全部先にいわれちゃった……で、お前は何してんだ？」

「ひっ!？」

彼女たち親子とフェイトの間に確かなものが生まれているのを微笑ましく見ていたコウキだが視線を背後に移して、その姿に頭を抱える。

さっきまで座っていたソファの後ろに隠れるように体育座りしてる女性。

ぶるぶると身体を震わせ、顔面蒼白になりながらぶつぶつと何かしら呟いていた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

誰にもなく謝り続けるプレシア。

この場にいるメンツでこれを見慣れている者が少なかったせいかな。場の空気は一点して半ば凍りついていた。

「うわぁ……いつそ見事にぶり返したよこの女」

「あははは、戻っちゃったね。プレシアさん」

しかしこの両名からすると懐かしい光景で呆れる前に感心してしまいきそうになる。

実の所この状態の彼女を知っているのはこの場ではコウキとなのはだけ。

リンディも知っていたが、じかに見るのは初めてのことで、それ以外の面々からすれば“あの”プレシアが奇行に走っているのだ。

それはもはや摩訶不思議な光景にしか見えない。

「……………ま、いいか。話を元に戻すぞ」

啞然としている面々を呼び戻すように彼は淡々とそう告げた。

「いいのか、あれは？」

「いい。放っておけばじきに収まる。説教はあとだ。

それよりも確か守護騎士の説明からだったな」

プレシアについてはフェイトとアルフは誰よりも聞きたい所だろう。だがまずは事件優先という最初にクロノが言ったことを受け入れてくれている。

一番気にしている彼女たちがそうなら、とクロノも説明に加わった。

「……………ああ、これまで守護騎士というのは管理局の認識では、コウキが説明した役割を
ただこなすためのだけのプログラム、疑似人格にすぎないと思われていた」

「だが、お前らも知っている通りあいつらには感情がある。心があ
る。」

単に長すぎる戦いの日々で疲れて、心を無くしてしまっていただけなんだ」

それが戦いのない国の、力を望まない者を主として覚醒した。その後の当たり前前の日常が押し込められていた彼女たちのパーソナルを

見事なまでに呼び戻させていた。しかしそれは逆にどれだけ長い間、彼女たちが

日常から遠ざかって戦いだけの日々を過ごしていたのかをも表していた。

「あいつらはそれこそ闇の書が誕生した何百年だか何千年だか昔から存在している。

容姿に差はあっても、あれでみんな歳は一緒に俺達よりなるかに年上なんだ」

「ええっ!? そ、そうなの!？」

真っ先に驚いた声を出したのはが誰を頭に思い浮かべているかは語るまでもない。

それを微笑ましく思いながらも神妙な顔で頷くコウキ。

「けどそれ以上にな、守護騎士プログラムには終わりという概念がないんだ。

あいつらは例え倒されたとしても闇の書が再生すれば復活する。

そしてさっき言ったように闇の書は完全破壊が難しい。

いや、ほぼ不可能といってもいい。だから事実上あいつらに“死”はない」

「死が、ない?」

「不死身なわけでも痛みを感じないわけでもないが、あいつらには

終わりが存在しない。

だから、あいつらは怖くなってしまったんだ……俺が、いつか死ぬその日を」

人間の寿命はどんなに長くとも100年前後だ。

それは守護騎士たちの過去を考えればあまりにも短い。ましてや人の身体だ。事故にあうかもしれない。病気になるかもしれない。

皮肉なことに過ごしていた日々が楽しければ楽しかったほど、騎士たちはコウキが死を迎えてしまう日が恐ろしくなってしまうた。

「じゃあ、もしかしてはやてちゃんたちの目的は……」

「……そうだ、闇の書の力で俺の寿命を延ばすこと。

完成した闇の書の力は絶大だ。さすがに永遠は無理でも死を遠ざける事は不可能じゃない」

「……………」

その事実にも誰もが言葉を無くした。

『大切な人に死んでほしくない』

その気持ちが解らない者はここには誰一人としていない。止めたいと願う彼でさえ、いや彼だからこそその気持ちは解っていた。

「俺にはあいつらの願いを否定する権利はない。

けど、これだけは……罪をこれ以上重ねることだけは避けたいんだ！」

それが主でありながら、騎士たちを止めたいと願う理由だった。

長い時を生きるより彼は短くても騎士たち家族と共に過ごしたいと。

訴えるその顔はひどく憔悴しているようでこれまでの疲れが見え隠れしていた。

自分のために戦う家族を止めるために戦う

それは思っていた以上に彼の心をすり減らしていた。

そんな顔と吐露に少女たちは何を感じ取ったのか。

互いに顔を見合わせて頷きあうとほぼ同時に口を開いた。

「わたし、手伝います。はやてやシグナムたちの気持ちは痛いほどわかるけど、

でもわたしは、あなたのそんな顔を見たくありません……」

「……………うん、そうだね。私もヴィータちゃんたち止めたい。

気持ちはわかるけど、それでも私も“いま”みんなと一緒にいたいよ」

彼を見上げて柔らかな笑顔と共にそう告げると

彼はありがとうと礼を述べながら深く頭を下げた。

あまりにも深く下げたのでかえってなのはたちを困惑させてしまったが。

ピンポーン

そこへまるでタイミングを計ったかのようなチャイム音。

誰だろう、とほぼ全員が首をひねった。

なにせここは管理局が現地拠点として借りた場所で今日引越したばかり。

当然ながら局員たちは管理外世界の現地人に知人はいない。可能性が考えられるのはなのはの家族だが、彼らが来る予定はないはずだった。

「わたしが出るわ、マンションの人かもしれないし」

そういつて席を立ったリンディが玄関に出ると可愛らしい訪問者がいた。

「あらっ、確かアリサさんにすずかさん、よね？」

わざとらしくどこか大きめの声と名前呼びに、びくりと反応したのがアルフとユーノとエイミー、そしてなぜかプレシアだ。

慌ててアルフは最近開発した子犬フォームへと変身し、ユーノもまたフェレットになる。

「……フェイトさん、なのはさん、お友達が来てるわよ！」

という声がする前にエイミーは映したままだったモニターを消した。

「なんでアリサちゃんたちがここに？」

「まだ引越したこと言っていなかったよね？」

ふたりはクエスチョンマークを頭に浮かべながらコウキやクロノに視線を向けるが彼らにも覚えがなかった。リンディの対応を見れば彼女も違う。

となれば、自然と答えはひとりしか残っていなかった。

「……………おい、プレシア」

僅かに低い声で名を呼ばれた容疑者は間髪入れずにピンと背筋を伸ばして立ち上がる。

その顔はガチガチに緊張したソレであり若干青ざめていた。

「確かお前昨日、突然切れた電話のフォローをすずかにしてたよな？」

襲撃事件はなのはずが会話中に起こった。

その後ほぼまる一日なのは眠り続けていたために彼女が代わりに話をしていただけだ。

「ひいつ、すつすつ、すいません!!」

昨日電話した時に、ついフェイトが来てることを……………」

口を滑らして言ってしまった、と。

その後、何回かメールのやり取りをして、その“流れ”からこの事や今日の引越しを説明しなければならなかったらしい。

「……………お前本当に隠し事へたくそだな……………」

(それ以上にすずかの聞き出し方がうまかったというべきか)

呆れるような声と共にかすかに笑うコウキ。

「はうつ、す、すいません……………」

がくりと肩を落として、再度ソファの裏に隠れるように沈んでいくプレシア。

「はあ……まあ絶対隠さなきゃいけない話でもなし、フエイト、なのは行ってこい」

それを尻目にふたりにいうが、少女たちからすれば
ついさつき騎士たちを止める協力をするといったばかりである。

「……どのみち二人とも魔力を回復させないことには何もできない。
バルディッシュたちもまだ本局で修理中だ。しばらくはまだ友達
と遊んでいるといい」

察したクロノの言葉に頷いて少女たちは玄関に向かった。
それを微笑ましく見送ったコウキとクロノはそれぞれソファに再び
腰を下ろした。

「……………聞いててゾツとしたよ」

ぼそっと呟くようにいった言葉にあえてコウキは反応しなかった。

「お前の話には“本当”がないのに“嘘”もないんだな」

「……………真っ赤なウソをつくわけにいかないだけさ……………ちっぽけなプ
ライドだ」

どこか責めるような声色にどこか疲れきった声で返す。

「そうか……………いずれ地獄に落ちるな、お前」

「まだ行かないよ。まだ、ね……」

そんな会話を小声で呟きあっていると足音と共に少女たちが戻ってきた。

「ねえコウキさん、いまからうちに行くことになったの。一緒に行こう!」

「え、うちって翠屋？ あ、でも俺は……」

「いいから行ってこい。お前の事情聴取はもう昨日で終わってるんだ」

気を回したのか。嫌がらせなのか。

実にいい顔で背中を押ししたクロノに苦い顔をしながらもなのはに引っ張られるように外に出ていく。その際に。

(なあ、クロノ………こいつら俺の言葉を真に受けていると思うか?)

「っ!？」

振り返った時にはもう、彼らはすでに外に出たあとだった。

「……………そうだったな。誰よりもお前を見てる子たちだった……………」

(なのにお前は、それでも……………)

今度は逆に彼が疲れ切った顔でうなだれた。

そして昨日の『事情聴取』で語られたことを思い返すのだった

本当のこと「始まり」（前書き）

すいません、ちょっと短いです。

そのうえ話そのものはまったく進んでおりません。

いつもより速い更新がせめてものお詫びです。

本当のこと「始まり」

12月2日 AM08:45

管理局本局 医療施設 病棟個室

「どれぐらい、寝てた？」

目を開けた彼は開口一番そんなことを口にした。

あまり知られてはいないのだが彼はひじょうに寝起きが悪い。

ただ、夢の世界において管制人格に起こされてから目覚める場合だけは別であり、

彼女との会話のあとであるため大まかな状況はすでに彼は把握していた。

「……だいたい、半日ぐらいです」

言葉を向けられたのは枕元でずっと看病していたプレシアだ。

それに頷きながらコウキはベッドの上から顔だけを動かして彼女に

視線を向ける。

「そうか……左手、大丈夫か？」

「え、あ、はい。ちゃんと治療を受けましたから。二、三日で包帯取れるそうです」

痛々しげなほどに白い包帯がまかれていたその左手をどこか隠すようにしていながらもプレシアは気丈に笑顔を見せた。だからだろうか。コウキはそれ以上の追及はしなかった。

「……なのはたちは？」

代わりに口から出たのは彼自身の目の前で蒐集された少女達。知識として蒐集行為が命に与える影響が無いことは知っていても心配はしてしまう。

「まだ、意識が戻らないそうです。といっても命には別状ない様子で、医師は体が眠ることでリンカーコアを早期に回復させようとしているんじゃないかって……」

「そうか……桃子さんたちにはなんて？」

夜中とはかく、さすがに朝になればいけないことがバレてしまうだろう。

時間帯を考えればすでに学校にいなければいけないのだから余計に。

「そっちはいまユーノくんたちが変身魔法とかで目覚めるまで誤魔化すようです」

あえて、プレシアがその名を使うことを憚ったが、正確にいうならアルフがなのはに変身して、仮病で学校を休んだのだ。

それを彼女の生活パターンを知っているユーノがフォローしている。本来、完全に姿を変えて他人に成りすますほどの変身魔法は違法なのだが、

管理外世界の住人に対して管理局や事件の存在を気付かせない配慮という扱いだ。

もつとも、そもそも誰にも報告する気がアースラのトップにないのだから

そんな言い訳は必要ないのだが、真面目な執務官にはわりと必要な事だった。

「あ、そうだ。すずかに連絡しないと……」

その“配慮”にホツとした所で、コウキは事件を知らせてくれた少女を思い出した。

あの時コウキたちは騎士を追って別の世界にいたのだが、あの電話がなければ

騎士たちがばらまいた偽情報に惑わされて見当違いな場所を搜索していた所だったのだ。

何より、なのはと自分たちの無事を知らせておかなければ不要な不安をおおることになる。

と、コウキは病床から慌てて降りようとした。

「あ、休んでください。ケガだけならあなたが一番ひどいんですから。」

それに連絡はもうしておきましたよ。

なのはさんが無事だという事と、あなたが忙しくて電話もできな

いと」

前半は事実だが後半はそういうことにした。ということだ。そちらの配慮にも安堵して、おとなしく彼はベッドに戻った。とはいえ後で自分からも連絡しておかないと。などと思っているあたり

自分の誑しっぷりをよく理解していないようである。自覚はあるらしいのだが。

「……………助かる」

「いえ……………これぐらいは……………」

たいしたことではない。と。

またも気丈に笑顔を見せる彼女だが、コウキからすればその顔はあまりにも痛々しいものを孕んでいるように見えた。

「……………ごめんな、無理させた」

だから思わず手を伸ばして、その頭を撫でる。

彼女は少し驚いた風な顔をしたが結局振り払うこともなく受け入れた。

(……………わかってはいたんだ。

彼女は家族を護るためなら戦えても、

気持ちの通じているその家族と戦える人じゃないことは……………)

フェイトの時のように暴走状態だったのなら話はべつだが、本質的に彼女は優し過ぎる女性なのだ。ゆえに、ひどく脆い。

「俺が戦えないから、いつのまにかお前に頼りすぎて
戦いを無意識のうちに強制させてた……ホント、悪かった」

「そんな、ことは……」

否定の言葉を口にしながらも僅かな言い澀み、目が泳ぐ。
それが本心ではないのはあまりにも明白だった。

「……………プレシア」

だからコウキは出来るだけ優しくその名を呼んだ。
無理をするな。と言外にその漆黒の瞳で訴えながら。

そんな視線を向けられたプレシアは僅かに震えて、瞳から雫を落と
した。

「あ、あれわたし、なん……っ!？」

戸惑いの言葉を最後まで言わせず、コウキは彼女を引き寄せる。
そして自らの胸元に彼女の顔を押し付けるように抱きしめた。
その強引さと温もり、そして遠回しな「見ない」という態度が
プレシアの最後の堤防を壊した。

「……………ごめんなさいっ。大変なのは解ってるのに！
止めなくちゃいけないのも解っているのにつ、
それでも、それでもやっぱり私はみんなと戦いたくありません！」

胸元に涙を落として泣く彼女を見ないようにしながら、
コウキは黙って、その叫びを受け入れる。

「……………どうしてこんな！ やっと、やっとまたできたのに！」

家族が、今度こそ失いたくなかったのに！
どうしてっ、どうしてなのっ！」

この約半年を共に過ごした彼女たちをプレシアは胸を張って家族と
言っていた。

一度は失った家族。それを取り戻そうと暴走した結果得ていた家族
といえた人たち。

それさえ無くしてしまっていた彼女にとってそれは何物にも代えが
たいものだった。

けれど今はそれを失わないようにするためには戦わなくてはいけな
いのだ。

何より大切だと思えるようになった新しい家族たちと。

その事実泣きじゃくりながら震える小さな背中をコウキは抱きし
めていた。

そうすることしかできない歯がゆさを感じながらも、

“原因”そのものともいえる彼自身は言葉が出なかった。

それでも彼は決して、涙する彼女を離そうとはしなかった。

「お邪魔かしら？」

彼女がやってくるまで、だったが。

「うわっ!?!」

「きゃっ!?!」

思わず、というべきか。反射的に、というべきか。

ふたりは弾かれるように離れて、突如現れた第三者に視線を向けた。

「……ノックくらいしろよ艦長さん」

「お、驚かさないでくださいリンディ提督」

「あら、ごめんなさい。てっきりまだ寝てるものかと思っていましたから……」

その正体につくりと肩を落として頭を抱えてしまうコウキ。

意味合いが変わった涙眼で怯えたように訴えるプレシア。

にこやかに笑って柔らかな口調で、されど全く笑っていない目で語るリンディ。

「……………」

何か微妙な空気が流れていた。

例えるならそう、本妻に浮気現場を目撃されたかのような修羅場の空気。

実際には彼女たちとコウキの関係はそんなものではまったくないのだが、

それに酷似したものが流れているのもまた確かだった。

「えっと、何か御用でしょうか？」

「何か用がなければ来てはいけなかったかしら？」

「……………」

なんてことはない言葉にトゲと居心地の悪さを感じつつ、不思議と逃げ出したいとは思わない自分を訝しみながらベッドから降りた。

「…………… 純粋な御見舞いだろつとお仕事の事情聴取だろつと、どっちも歓迎だよ。」

俺もあなたには話したいこといっぱいあるし……………」

とりあえず場所を変えよう、というコウキの提案にリンディは頷いて部屋を出ることになった。

「あ、あの私も……………」

「いいって、一晩中看病してもらったから。」

今度はお前が寝てろ、そのベッド使っ方がいいから」

そう告げながら軽く着替えた彼はそのまま病室から出て行った。ひとり残された彼女は自分の寝不足を確かに自覚して、横になろうとした所ではたと気づく。

「…………… え、コウキが寝てたベッドで、寝るんですか!？」

別段いつも寝ているベッドではない。

たまたま今回半日寝ることになっただけのベッド。

何も問題などないはずなのにその事実を躊躇して、結局、そこで寝入ることできなかったプレシアだった。

12月2日 AM08:45

管理局本局 応接室

リンディに連れられてコウキが通されたのは何故か人気の少ないそこだった。

中ではすでにいたクロノが事件資料らしきものを読み漁っている。事情聴取だけが目的なら本来別の部屋が使われるのだが、この時点では彼ら側からすればコウキはまだ、謎のグループに襲われた被害者だ。

あくまで客観的には、でありアースラのトップ親子はそうではないと気付いていた。だからこそ、ここにエイミーなどの「彼が本音をいわないだろう相手」を呼ばなかったのだ。

「さて、話を聞きたいんだが、キズは大丈夫か？」

テーブルを挟んで向かい合うソファのハラオウン親子が窓側、コウ

キが廊下側に座り

どこか聞きづらそうな態度ながら具合を尋ねたクロノにコウキは一瞬間を開けた。

彼自身のケガは收容された四名のなかで一番重い。

とはいえそれはリンカーコアへの蒐集と魔力ダメージ以外はないのはとフエイト。

左手だけの負傷ですんだプレシアと比べればの話であって、たいしたケガではない。

背中と左足の浅い裂傷と全身への打撲くらいなものだ。

「……………回りくどいことはやめよう。こっちもそっちも無駄な時間はない。そうでしょ？」

何よりそれが本題とは程遠いことであつたのは解りきつたことだつた。

それに溜息ひとつ吐いて、クロノは表情を執務官のそれに切り替えた。

そして手元の資料を見ながら口を開いて訊ねた。いや詰問した。

「レイジングハートやバルディッシュの記録した映像や魔力波動を分析した結果とユーノやRHの証言から彼らが君の所の守護獣だという疑いが出ている」

間違いないか。と目で問うそれにコウキはあっさりというほど簡単に頷いた。

「間違いない、あの襲撃犯。いやそれだけじゃなく、

ここ最近の魔導師や生物を襲った事件はほとんどあいつらの仕業だ」

「それは……はやてさんも？」

「いやあいつが加わったのは昨日が初めてだ。

俺たちはてつきりあいつは家でおとなしく待っていると思っていた。

はやての協力が解っていればなのはたちの蒐集は防げたんだが……」

悔しげな彼の言葉に混ざった“蒐集”というワードにピクリと反応したふたりを見て、

コウキはわざとらしく大きな溜め息を吐くと呆れたような声を出した。

「あのさ、回りくどいのは無しって言っただろ？」

それは言外に隠す気はない。と知っているも同然だった。

呆れながらも明るい口調ではあったのはせめてもの気遣いだろう。

と受け取って、クロノは頷いて本当に聞きたかったことを口にする。

「……分かったよ、単刀直入に聞く。

君と闇の書、そしてその守護騎士たちの関係はなんだ？」

「主従だよ、本音は家族だと思ってるけど……」

「っ、つまりお前は……」

「ああ、俺が今の闇の書の主だよクロノ執務官」

その告白に場の空気に緊張が走った。

過去に幾度となく悲劇を起こしたロストロギア闇の書。

その主はつねに事件の中心で起こしていた主犯格だったのだ。クロノが警戒心をあげてしまうのは当たり前のこと。

「少し疑問があるわ」

それに待ったをかけたのがリンディだ。

彼女ははやてもまた主と呼ばれていたこと。

はやて自身が蒐集にも協力していることから、

コウキがはやてを庇っている可能性を指摘した。

「いやそれはないよ。」

ただあいつも闇の書の主なんだ………どういうわけか、ね」

「どういうことだ？ 主はふつう一人だろ？」

「ああ、普通はそうらしいが………順番に話そう。」

俺たちがあいつらに出会ったのは去年の俺の誕生日。

12月25日になった直後のことだ………」

彼はそうして起こったことを順番に、出来る限り正確に話した。

11年前から家にあった闇の書。そこから現れた守護騎士たち。

彼女たちから事情を聴いて、リンクの繋がりがらふたりとも主と判明したこと。

主として四人の世話をしなければと決意したことを。

「ふふ………なるほど、そうして同居生活が始まったわけね」

「………考えなしというべきか、大物というべきか」

クスクス笑う者と呆れて頭を抱える者。

親子でありながら対照的な態度だったがいいたいことは同じだった。魔法もない世界だというのにそんな存在をよく簡単に受け入れたな、と。

「軽率だったかもしれないが俺も俺なりに思惑があつてのことだし、何より……誕生日プレゼントかなつて思ったんだ……」

「……？」

プレゼント。というどこか嬉しい表現を使つていながらもその顔に憂いがあるのを敏感に見抜くリンディ。けれど確信が持てずに彼女は何も言わなかった。

「あんな、君は知らないかもしれないが闇の書というのは」

「知ってるよ。あれがどれだけの命を貪り、悲劇を起こしてきたのか、ね」

「え？」

「いろいろ見たからな。過去の主たちのしてきた事とかその最後とか」

「見たつて、いつどうやって!？」

社員ならともかく。

管理外世界の住人が闇の書についての情報を手に入れる事は不可能だ。

だからこそクロノはその発言に僅かながら声を荒げた。

「最初は今年の1月の終わりぐらいだったかな？」

俺は闇の書とのリンクが深いからわりとあれがため込んでいる記録とか記憶を

夢みたいな形で見ることがあるんだ」

「おいつ、それって10か月も前じゃないか!？」

そんなに前から知ってて一緒に、ふつうに生活してたっていうのか!？」

そして彼はそれが理解できなかった。

クロノでさえ局が得ている情報しかない。

いわばそれは外部から見た話でしかないが闇の書そのものが持つ記録となれば話は別。

外部から見ても悲劇でしかない数々の事件をより詳細に、中心から見たのに。

過去の主たちの壮絶で惨めな最後を幾度だって見ただろうに。

なぜこの男は平然と彼女たちと共にいられたのが、クロノには理解できなかった。

「ああ、別段。死ぬのは怖くなかったから……」

けれどコウキはなんてことのない事のようにさらりとそんな事を口にした。

格好良さを勘違いした若者が強がりでいっているのとは訳が違つ言葉の軽さ。

例えるなら悟りきつた老人のような、諦めきつた色のある言葉だった。

それに、思わずクロノは立ち上がって怒鳴っていた。

「なにをいってるんだお前!」

「……落ち着けよクロノ。お前が理解できないのは分かるけど、俺はさ、元々長く生きられないっていわれて育ってきたんだ」

実にあっさりと晴れ晴れしいぐらいの顔で、コウキはとんでもないことを口にした。

驚き表情が固まるクロノに申し訳なさそうな顔をしつつも彼はそのまま話を続けた。

「ガキの頃から言われてたんだ……20歳になる前に死ぬだろうって」

だからその覚悟だけはずっとしていたんだと彼は言った。

「それがあいつらにはれたのは2月の終わりごろだったかな。タイミングが悪いことに、目の前でぶっ倒れちゃってな」

それまではちゃんと隠せてたのに。

なんて笑って口にしながら、コウキはその時のことを話していった。ひとり、笑顔で人を睨みつけるという芸当をしていた女性を意図的に無視しながら

本当のこと「始まり」(後書き)

次回から、怒涛の説明回が始まります……とかいってみる。

本当のこと」「闇の書の呪い」(前書き)

本当のこと「闇の書の呪い」

2月26日 PM03:56

海鳴大学病院 診察室

それじゃ、約束だ

そういつて差し出された小指と笑顔を今でも覚えている

一瞬、石田医師の言葉が理解できなかった。

「……長く、ない？」

「コウキちゃんが、そんな!？」

隣の同胞であるシャマルの悲鳴に近い叫びと
苦渋に満ちた医師の顔を見ればそれが冗談などではないことは分かる。

ましてや激しく胸打つ心臓の鼓動と胸を締め付ける痛みが夢でもない事も教えてくれた。

出来ることなら、冗談や夢であつて欲しかった。

その日は、なんてことのない一日になるはずだった。

雨の日が続いていてやっと訪れた晴れ日。

たまっていた洗濯物を皆で協力して干し終わると日ごろの疲れからか。

それとも久し振りのぽかぽか陽気にあてられたのか。

主たちは狼形態のザフィーラを枕にすやすやと眠っておられた。

その様子に和み、枕となつている本人の許しもあつて我ら騎士たちも同じように横になつて、いつのまにか夢の中へ落ちていった。

次に目が覚めたのはシャマルの絶叫のあと。

『あ、ああああつ!!! 雨つ、雨よ、みんな起きて!!!』

慌てて主たちも含めた全員で取り込んだものすでに洗濯物はびっしりと濡れていた。

『また最初からかよ』などとヴィータが不平不満をいうが致し方ない。

油断して眠りこけてしまったのは我らの落ち度なのだから。

仕方ないか。などと洗濯のし直しをしようと皆が再び動き出したその時だ。

それは何の前触れもなく、突然我らの目の前で起こった。

主コウキが倒れた

胸を押さえるようにして苦しむ姿に恥ずかしい話だが、私は軽いパニックに陥って思考が停止してしまっていた。一番冷静だったのは必死に主の名を呼びながらも素人が動かすことを危険視して救急車を手配したヴィータだった。

そうして日ごろから主はやての足のことで御世話になっていたここに運ばれ

主コウキの容態が落ち着いたあと、看病と警護役を主はやてとヴィータ、ザフィーラに任せて

私とシャマルは主治医である彼女からその衝撃的な話を聞かされた。

「……コウキくんは幼い時から原因不明の不可思議な発作に悩まされていたんです。

その発作が起こると一時的に内臓機能が急激な低下を起こして倒れ、

容態が落ち着いても発作前と同程度までに機能が回復することはありませんでした。

そのため発作を起こすたびに彼の内臓は弱まっていく一方で……」

とくに、この二ヶ月で急に発作が起こる頻度が上がったと医師は言った。

だがそれはおかしかった。自分たちの記憶が確かなら、

主コウキがそのような様子を見せたことはない。

「……………きっと、隠していたんでしよう。
発作といっても必ずしも今回のような重い症状が出るとは限りませんから」

そんな馬鹿な。と叫びたくなるのを必死でこらえた。

石田医師が考えている以上に我らは主コウキのそばにいる。女性では入れない場所や自室にはザフィーラがついている。確かに一人になる時間がないわけではないが、それらがすべて我らに病を隠すためだったというのか!?

「ああ、でもまさかまだ話してなかったなんて……………」

頭を抱えてうなだれた医師は呟くように、
とっくの昔に教えていたと思っていたと語った。

「どういうことですか？」

「……………初めてお会いした時、説明されたんです。皆さんのこと」

主コウキが周囲に言った我らの表向きとの関係性は簡単にいえば主のご両親に世話になっていたがその死を最近まで知らなかった。ご恩返しのためにこの国にまでやってきたが私たち自身も身寄りが
ない。

といったところだが、石田医師に対してはそれらの方便が固まる前
だったために
遠い親戚であることや呼んだのが主コウキであるということになっ
ていた。

「彼、みなさんと呼んだ理由をこういつていました」

「俺がいなくなったあとにはやての傍にいてくれる人が必要かなって」

「っ!？」

「そんなっ!？」

思わず膝の上の手を固く握りしめた。

おそらくだが、その時は余計な詮索をされないように主コウキが先手を打っただけだったかもしれない。

けれどあらかじめ自らの死期を悟っていたのなら。

あの主がその後のことを考えない、なんてことがあるだろうか？

きっとその後の主はやてのことはずっと気がかりだったに違いない。

やっと分かった

あの人が、私たちをあんなに簡単に受け入れたのは主としての責任からだけじゃない。

我ら四人に主はやてを託すため。託せるだけの者かどうか確かめるため。

だからあの日、唐突にあんなことを言い出したんだ。

「……あと、どれぐらいなのですか？」

なあ、シグナム。

俺たちは闇の書の力なんて知らない。

けど、これからも一緒にいてくれると嬉しい。

だから、蒐集なんて危ないことは絶対しないでくれよ

約束を、した。

絶対に破ってはいけない約束をした。

その信頼が嬉しくて剣に誓った言葉に嘘偽りはひとつもない。

何よりその裏にあった別の信頼を知りたいま、それはより強くなっていた。

「余命は、どれだけ……」

だからこそあの人と約束した烈火の将として。

その、聞く方があまりに怖く恐ろしい事を聞かねばならなかった。

それがたとえ、絶望的な数字であろうとも。

「……………希望的観測を含めて、出来る限り長く考えても……………限度は3年です」

石田医師との話を終えた私は人気のない廊下で憤ることしかできなかった。

むしろ、樂觀視して考えてもおおよそ3年が限界の余命といわれて、話の最中に爆発しなかったことのほうが後から振り返れば僥倖だ。

「なぜっ！　なぜ気付けなかった!？」

「う、ごめんなさいっ……わたし、わたしっ!！」

壁に向かって八つ当たりしていた私にシャマルは嗚咽交じりに謝罪を口にする。

「お前にじゃない!！」

思わず強い調子で言い返してしまう。

何をやってるのだ私は。つらいのは彼女も同じだというのに。だから続く言葉は出来るだけ自らを律しながら発した。

「自分に言っている……」

何が守護騎士。何が烈火の将だ。
すべて、我らのせいではないか!

石田医師の話聞いて、私たちにはその原因に思い当たるものがあった。
発作が起き出した時期とその頻度が上がった時期を考えれば不思議でもなんでもない。

闇の書、その呪いだ。

幼い時から主コウキのそばにあった闇の書は主の身体と密接な繋がりがある。

ましてや今回はとくに異例といえるほどに主コウキと闇の書のリンクは強く深い。

そのため抑圧されているはずの闇の書の魔力が主にも流れ込み、未成熟だった主のリンカーコアを徐々に蝕みながら、生命活動を阻害していたのだ。

そしてそれは主コウキが最初の覚醒を迎えたことでさらに加速する。本格的に起動した闇の書と目覚めた我ら守護騎士。

その活動を維持するために僅かながら主の魔力を使っていることが無関係なはずがなかった。

なぜもつと早くに気付けなかったんだ。

ふたりの主の選定された時期が違うことをもつと詳しく調べるべきだった！

主としての魔力負担が主コウキだけに偏っていた事をもつと不思議に思っべきだった！

ああ、いったいどうすればいい。どうすれば、主を救える？

あの笑顔を、あの人を、どうすれば失わずに済む！？

「っ……………我らに出来ることはあまりにも少ない……………」

思わず握りしめた愛機の感触こそがもはやすべてだった。もとより私たちに出来ることなどそれしかないのだから。

私たちは事の真相をすべて同胞に話した。

ふたりとも言葉を無くしたが、それでも想いは同じ。

だからこそ我らは決断するしかなかった。主たちとの約束を、破る決断を。

誤算だったのはその会話を主はやてに聞かれてしまったこと。

叱責を覚悟したが返ってきたのは予想外の自分も協力したいという言葉。

そうだった。この少女の主もまた、あの少年を失いたくなかったのだ。

だから我ら五人は決意した。何があるうと、何をしてでもあの人を救おうと。

その夜、主コウキが寝入っているのを確認して、

私たちは病院から離れた人気のないビルの屋上に集まった。

「コウ兄の身体を蝕んでいるのは闇の書の呪いや……」

「でもコウキちゃんが闇の書の主として真の覚醒を得れば……」

「呪いは消える。少なくともこれ以上の悪化はない」

「コウキの未来を血で汚したくないから人殺しは絶対にしない。だけどそれ以外なら、なんだってしてやる！」

決意は固く、もはや止められない。止まる気もない。

ただ、気がかりがあるとすればこれに主はやてを巻き込んだ事と、あの日、彼とした指切りの約束を破ってしまうことだけだった。

「申し訳ありません、我らが主。ただ一度だけあなたとの誓いを破ります」

そう思ったら、言っても詮無きことが口から出てしまった。

罪悪感を紛らわすためか。それともここにいない彼に許しをこつためか。

まったく、いつのまに私はそんな弱くなっていたのか。

ああ、そしてその弱さがいまは愛おしくそして何より失いたくない。だってあなたが与えてくれたものなのだから。

だから、すみません。私はあの日のあなたの笑顔と信頼を裏切ります。

「……………我らの不義理をお許しください」

主から賜った騎士服をまとい、我らは決意と覚悟をもって飛び立つ。

はずだった

「誰が許すかつ!!！」

その言葉はまるで魔法のように我らの足を地面に縫い付けた。皆が皆、驚愕を顔に貼り付けたままその声に視線を向ける。

「コ、コウ兄？」

屋上への出入り口の前。

扉に身体を預けて、肩で息をしながらも立っていたのは間違いようもなく我が主。日野コウキその人だった。

「……人が寝てるうちに勝手に話を進めやがって！」

怒っている。

そうとしか表現のしようのない表情で睨まれて余計に身体が固まる。主は少し頼りない足取りながらそのままこちらに歩み寄ってくる。どうやら動けなくなっているのは私だけではないらしい。

皆も突然の主コウキの出現とその怒りの形相に身動きが取れなくなっていた。

「な、なぜここが？」

それでもなんとか搾り出した言葉はそんなことだった。自分でも無意識にはぐらかそうとしている気がした。とはいえ、いくら主とはいえど異変に気付いたとしてもここをすぐに見つけられたことに疑問がないわけではなかったが。

「管制人格に教えてもらったよ………自分では騎士たちを止められないって」

「っ!？」

いわれて、その存在を失念していたことに気付いた。

手にする闇の書に宿るひとつの人格。もうひとりの守護騎士ともいえる存在を。

我らより上位に存在する管制人格の彼女のことを。

「もう全部聞いたよ。闇の書の呪いのこと。」

あいつも今まで気付かなくて申し訳ないって泣きじゃくって大変だったよ」

記憶にある、いつも愁いを秘めた悲しげな瞳が思い返される。

ああ、そうだな。お前はいつだって我らや主のことを想っていたんだった。

だからこそ誰よりも多くのものを背負っていたことも私たちは知っている。

けれど、そうか。お前は誰かの前で“泣けるように”なったのか。

「……隠してた俺も悪かったが、話したらお前らが何かやらかすんじゃないかって怖かったんだ。

そしたら案の定これだよ、予想通りじゃないか。このバカタレども!」

「う……」

ヴィータが唸り、主はやてが目を泳がしているのが分かった。

なるほど、主コウキがそれを秘密にしていたのはそういう考えもある

つてのこと。

その予想通りの行動をしてしまった身としてはあまりに弁解の余地がない。

しかし、それで引き下がるほど我らの参謀は弱気ではなかった。

「でもコウキちゃんそれしか手がないのよ！　話を聞いたのなら分かるでしょ！？」

「あんな、俺が言いたいのはそんなことじゃない！

俺は順番が違つて、うぐっ！？」

「主！？」

「コウキちゃん！？」

胸を押さえて蹲った姿にサッと皆の顔が青ざめる。

そして全員ですぐさま彼に駆け寄って　強烈な平手打ちをくらってしまふ。

左頬に受けた衝撃と痛みにも皆が皆、訳が分からず呆けてしまふ。

突然のことだったこともある。けれどそれ以上に我ら全員の頬を引っ叩いたのだ。

どんな早業だというのか。動揺していたとはいえ反応できなかった自分自身が信じられない。

「……………どうして……………」

そこへ短く問いかける言葉が投げかけられた。

「え？」

「どうしてお前らだけで決めるんだよ！？」

「っ！」

言葉に胸を貫かれたのは初めて、だと思う。

そしてその言葉で初めて、彼が怒っている本当の理由に気付いた。

「俺も主じゃなかったのかよ。そもそも俺のことなんだから！？」

だったら俺にも決めさせてくれよ……俺に相談しろよ……

これじゃ何のための主かわかんないじゃないかよっ……！」

勝手に決めて、勝手に行動した。

“主”であるこの人を無視した決断。

いえば止めるだろう。心を痛めるだろう。というのは言い訳だ。

本音は違う。違ったんだ。ただ我らは怖かったのだ。

主コウキから「おまえらのせいだ」といわれるのが。

いつも向けられた笑顔が憎悪に染まった顔になるのが、怖かっただけ。

彼が怒っているのはまさにそこだ。

『恐れ』は裏返せば『好意の強さ』ゆえだと思う。

けれどそれをさらに裏返せば『信頼の無さ』という言葉にもなる。

隠し事は確かにあった。病気以外にもいくつも。

だが果たして、日野コウキという人物を彼自身は隠していただろうか？

答えは否だ。

この人はいつだって本気で自分を見せてくれた。

笑って、怒って、落ち込んで、いじけて、そこに嘘偽りなんて無かったのに。

私たちはちゃんと彼がそんなことをする人ではないと知っていたはずだったのに。

何より彼はいま言ってくれた。我らのために『主としてありたい』と。

私たちの決断はその行動と覚悟に泥を塗る行為だった。

約束を破ること以上に度し難いまでの主への裏切り。

それに気付いて、私は膝から崩れ落ちた。もはや立つことさえできない。

「シグナム!？」

誰かの案ずる声が、いまは遠い。

レヴァンティンすら落として、屋上に座り込んでしまう。

「……も、申し訳ありませんっ、あるじっ私は!」

言葉が続かなかった。

いいしたこと。言わなくてはいけないことはたくさんあるはずなのに。それ以上に視界が歪んで、目の前にいるはずの彼の顔がよく見えな

い。だが、たぶんよっぽど怖い顔をしていたのだろう。

「あ、あのコウキちゃん。蒐集しかないって言い出したのは私で!」

「いや違うでコウ兄、あたしが止めなかったから……」

「悪いのは私たちみんなだ」

「罰なら皆できちんと受ける……」

慌てた様子で皆が私を囲むように前に立つほどだ。
だからそれに私は首を振った。

「いい、私は将だ。こういう時に責任をとらないわけにはいかない」

未だばやけて見えない視界の中心に彼を置いた。

「……怖かったです。何もかもが……」

あなたを失うのも。

あなたがいなくなるのも。

あなたに嫌われるのも。

あなたが私たちを見てくれなくなるのも。

何よりそれらが自分たちの責任だということが。

それだけは言わなくてはいけないと短い言葉にそれをすべて込めた。

主の手が上がったのが見えた。ああ、罰はきちんと受けなくては。

そう思つて瞼を閉じてすべてをゆだねた。

周囲が緊張しているのは分かったがこれも将としての務め。

気にしないでいてくれるとありがたい……たい、のだが？

妙な感覚に戸惑う。

皆の気配が、戸惑う声が、何よりその温もりが、近い。

目を開ければびっくりするほど皆の顔が近かった。

「ありがとう……」

何より主の顔と声が近い。

その優しい顔と声が、近い。

我ら全員を主は両手を広げて強引に抱きしめていたのだ。

「ありがとう……俺のことそんなに想ってくれて。嬉しいよ」

優しく、優しく慈しむような暖かな声と腕が我らを抱きしめる。

「っ!?!」

「ごめん、なさい……わたし!」

「……すまない」

「……ほんまずるいわ、そんな言い方っ」

「う、うう、うわああっ!」

胸が、震えた。

ありがとう。と。

主の想いを裏切って、汚した我らに。

主はやての言葉ではないが、なんて卑怯な。

「いいよ、みんなでもっと考えよう。他の方法を。

きつとあるから、ないなら俺が作るから……な?」

ああ、これはすごいな。管制人格。

涙だけはいつも堪えていたお前が、泣き出すのがわかる。

この人は、こんなにも我らを泣かすのがうまい。

だからこそ、我らはその時気付くべきだった

私たちを泣かした主コウキの泣く姿を、その涙を、

“一度”として見たことがない、その意味を

12月2日 AM09:27

管理局本局 応接室

「そのあと、何とかみんなで知恵を出し合って、呪いを抑え込むアンチプログラムとプロテクトをくみ上げて浸食を止めたんだ」

コウキの目線から話された2月の末に起こった騎士たちの蒐集未遂とその原因となった闇の書の呪い。その結末を彼はひどくあっさりと片づけた。

それに、僅かに訝しんだハラウン親子は互いの顔を見て僅かに笑った。

「……君の話し方のクセが分かってきたかもしれない」

「そうよね、気付いてみると恐ろしく単純な男だもの……」

「はい？」

予想とまるで違う反応に、説明し終えたコウキの方が戸惑う。てつきり説明に対する何かしらの反応があると思っただけに目の前の親子の焦点が自分に向けられているのが不思議だった。

「あなた……肝心の部分はダイジェストで説明するでしょ？」

「あっ」

「それに、そこが何の問題もなければそもそもこんなことになっていないだろう」

「うっ」

「回りくどいのはなしなんですよ？」

「……………はい」

親子の短いが的確な追及に即行で彼は白旗をあげた。

もっとも彼としては意図して隠そうとしたわけではなく癖が出ただけだったのだが。

だが、そうして闇の書の主はようやくこの事件の大元について語りだしたのだった。

本当のこと「闇の書の呪い」(後書き)

実はこういうことの後だったんですよ、一期編の話は。というお話。呪いの発覚とその対策は一応終わってた。一応。けどそれは実は、的な話は次回。

本当のこと」「計画」

12月3日 AM10:56

喫茶翠屋

リンディ・ハラウンと日野コウキはそろって、
翠屋を切り盛りする夫婦にクロノあたりが聞いていたら
眉を顰めそうな話でいろんなことを誤魔化しながら説明をしていた。

「そうですか、ではこれからはご近所さんなんですね」

「ええ、よろしくおねがいます」

笑顔で語り合う奥様方の姿に内心でコウキは真剣にすごいと感心気
味だが。

（よくもまあ、あれだけ嘘八百並べたうえで笑顔で語らって仲良く
なれるよなあ……）

人見知りの気がある彼としてはそこは少し羨ましい部分である。
などと考えていた背後で突然お店の扉が慌てた様子で開かれた。

見れば、少し戸惑っているような顔のフェイトが大きな箱を抱えていた。

外のオープンテラスでアリサたちとおしゃべりしていたのでその後ろには彼女たちも当然いた。

そしてなぜかアースラスタッフのひとり、ランディも。

「あ、あのリンディで……リンディさんこれ……」

何があったのかと訝しむ視線にフェイトは

持っていた箱を開けながら差し出して窺うような視線を向ける。

そこには白を基調とした何かしらの制服が入っていた。

この場にいた人間なら誰もが見間違ふことのない制服だ。

「転入手続はすませておいたわ。週明けから、なのはさんたちと同じ学校よ」

「え、あの、その、えっと……」

「お、聖祥ですか。あそこはいい学校ですよ」

「やったあ、これで学校も一緒だよフェイトちゃん！」

戸惑う本人をよそに周囲は盛り上がる。

一緒にクラスだといいな。学校にはこういうところがある。こんな先生がいるよ。と。

（あの、本当にいいんですか？ 私、囑託魔導師として来てるのに……）

（いいのよ、囑託なんだし魔力が戻るまでまだ時間がかかるでしょ

う。

なにより子供は学校に通うものよ。友達がいるなら、尚更ね（

念話での軽い会話と目配せに、嬉しいのか照れているのか。

自分でもよく解らない感情で頬を染めながらも、

フェイトは大事そうに制服の入った箱を抱きしめながらも精一杯の気持ちをだした。

「……………ありがとうございます……………」

「うふふ、どういたしまして」

それをいつも以上の笑顔で受け取って微笑むリンディ。

本人が意識しているかは別として、それはどこか母親の顔だった。

「そつだ。一度着てみなさいよフェイト」

「え？」

「あ、そつだね。お父さん、お店の奥、使える？」

「ん、ああ今なら大丈夫かな。いいよな母さん？」

「あの、その……」

「ええ、あとでサイズが合わないってなっても大変でしょうし。

フェイトちゃんもみんなに最初に見せたいわよね？」

「あ、はい……………」

どこか周囲に押し切られた感はあるものの、
なのはたちはフェイトを連れて、店の奥の従業員用の更衣室へと消
えていった。

(けっこういいところあるじゃないか)

それを好ましいものを見る笑みで見送った彼は念話で隣に立つ彼女
に話しかけた。

(あら、私はこれでも悪人だった記憶はないのだけど?)

「待っている間、お暇でしょう？」

いまコーヒーお出ししますね」

「コウキくんもそれでいいよね？」

「どうかおかまいなく……」

(よく言っぜ。

プレシアが生きているのを知っていたのにフェイトを養子にしよ
うだなんて……)

知らなかった。実際に死んでいた。

のなら話は別だが、知っていたうえでやってるのだから
それはある意味とんでもなくあくどい、とコウキは考えている。

(強制はしてないわ。第一、彼女たちがどんな決断をしようとも
もう公には親子とは名乗れないでしょう?)

なら表向きだけでも親と呼べる存在がいたほうがいいと思わない
?)

ふたりで向かい合うようにボックスの客席に座りながら念話を続ける。

(うわあ、やっぱりそんなこと考えてやがったか。

まあ確かにあのふたりに関してはあのふたりが答えを出さなくちやいけないからな。

外野がとやかくいう事じゃないのなら、どう転んでもいいようにしとくべきか)

(でしょう)

念話での会話なので互いの顔など見ていないが、

コウキにはリンディが満面の笑みを浮かべているのが見えた気がしていた。

(……一回でいいからあんたを追い詰めてみたいもんだよ……)

念話ではなく心でそう思って、溜息を吐く。

出来そうになさそうだからだ。寿命うんぬんの話ではなく相性的に

「はいどうぞ、うち自慢のコーヒーとケーキです。お代はサービスです」

テーブルに並んだコーヒーとケーキ。

どれもが言葉通り喫茶翠屋自慢の一品である。

(でも、少し驚いたわ)

「いやいや桃子さん、払いますって。

むしろこんな美味しいケーキを食べて金払わないなんてありえないですよ」

「あら、嬉しいことになってくれるのね」

（何が？）

「うふふ、話には聞いていたけれど本当ね。おいしいわ。これからも来させてもらいますね」

「ありがとうございます。どうかご鼻屑に」

運び終えて離れた桃子を余所にふたりはケーキを堪能していた。

（プレシアさんってああいう人だったのね。

さっきの恐慌ぐあいもそうだけど、あんなに“意外”な人だとは思わなかったわ）

「ううんっ、これ病み付きになりそう！」

（……でも、フェイトの母親だったっていったら納得できない？）

「だよな、ほんと桃子さんって菓子作りの天才だよ。男の俺でもこれはハマる」

（あら、それはかなりフェイトさんに失礼じゃない？）

（そっちこそ、それはプレシアに失礼だろう）

などと言い合いながら、表向きのカモフラージュの会話も忘れない。

かなり面倒なことをしている自覚はあるが、そちらの方が当人たちは気楽なのだった。

「……………うーん？」

コウキとリンディへ運び終えた桃子は厨房に戻って、首をひねった。なにか妙な違和感があった気がしたのだ。

「どうしたんだい母さん？」

夫・士郎からの呼びかけに振り返った彼女は思ったことを口にする。

「うん、少し……………コウキくんが楽しそうだったかなって」

「楽しそう？」

「いつも大変そうってわけじゃないけど、

なんかお父さんみたいに大黒柱背負って気負ってたのに

リンディさんの前だとすごく気を抜いてたように見えたから」

自分たちの前でも、プレシアの前でも。

彼は大人と張り合うように背筋伸ばして立っていた。

それがどうだろう。何気ないいつも通りの会話がごとく“楽しそう”だった。

「ほう……………ではコウキくんの好みはああいう女性なのか？」

「うふふ、なのはに強力ライバル出現かもね」

「けど、いくらなんでも年が離れてないか？」

そう考える士郎が想定しているリンディの年齢は地球人より容姿が若い時代が長いミッドチルダ人ゆえに実年齢をかなり読み間違えているのだが、それを差し引いても確かにその年の差は大きい。

「あら、あなたは歳の差恋愛は反対なのかしら？」

「うっ」

しかしその指摘にどこか意地悪そうな笑みを浮かべる桃子。士郎は思わず言葉に詰まってしまう。それも当然だろう。

何を隠そう士郎・桃子夫妻こそ歳の差夫婦なのだ。

まだ二十代になったばかりだった桃子を見初めた訳ありの子持ち男。その年齢差は推して知るべし、である。

「愛があれば、歳の差なんて、ね」

「かあさ……桃子……」

「あなた……」

手と手を取り合って、見つめあう夫婦。放っておけば厨房内とはいえ店の中でいちゃつき始めない雰囲気だ。もっともその後、数秒で娘・美由紀のストッパが入るのだが。

それと同じころ。

店先では着替えてきたフェイトが

周囲からべた褒めを受けて真っ赤になっていた。

むろん一番赤くなっただのはコウキに似合っていると褒められ、
頭を撫でられた時だったのは言うまでもない。

(もう見事なくらいな女誑しね。親子ともども攻略済みなんて)

(ほっとけ！ あと攻略っていうな!!！)

12月2日 AM09:29

管理局本局 応接室

「あいつらが蒐集を始めたのは10月の末。

ちよつとしたことで、アンチシステムの問題点と俺がひそかに考えていたある計画が、バレたのがキツカケだ」

問題点。計画。

新しく出た単語にクロノが興味を向けるがリンディはそれとは別の部分が引っかけた。

(ちよつとしたこと?)

コウキは隠したいこと、言いたくないこと、聞かれたくないことをひどく簡単な説明や一言ですませてしまう癖があるのはさつき気付いた。

だからきつとその点はそういった類のことだろうと思ったが、いまは事の流れと理由を知るのが優先と言葉を飲み込んだ。

「問題点か……確かに話の流れと今の状況を考えればそのアンチプログラムに

何かしら欠陥があったのは想像できたが……」

実際何がどう問題だったんだ？

という目での問いかけにコウキは首を横に振った。

「欠陥はないよ。最初から今日まで俺の想定どおりの働きをしている」

「ならなぜ騎士たちはいま蒐集をしている。

一度は君に止められて、それに納得していたはずだろうに」

コウキからの話を全面的に信用するなら、そのはずである。だからこそ腑に落ちないのは現在の彼女たちの行動だ。

プログラムが想定どおりに動いて、差し迫った命の危険がないのなら騎士たちやはやてが蒐集行為に走らなければならぬ理由がない。

「欠陥」はない。けれど最初から、期間限定。

燃料が切れたら終わりの一時的な抑えでしかなかったんだ……」

呪いについて解析を進めれば進めるほど。

それを解呪することが不可能であること。

侵食を抑え込むことでさえかなり難しいことが判明した。

「これは俺の推論だが、呪いは蒐集に乗り気にならないであろう主が選定された時のカンフル剤みたいなものなんだと思う。

呪いと気付けなくても不治の病とでも思っている所に……」

「闇の書の強大な力を得られるチャンスが与えられればたいいていの人はとびつく、か」

そして呪いがそのための代物だというのなら、

主側から簡単に解けたり防げたりできるはずがなかった。

だからこそウキは発想を変えた。完全に防ぐのではなく、限られた期間内抑えていられるものを作ろうと。

「具体的な期間つてのは無くて実質俺の魔力が切れるまで。

アンチプログラム

あれには膨大な量の魔力が必要だね。

切れたらそれまで抑え込んでいた分が一気に襲いかかってくる」

一発でお陀仏だ。と軽く笑っている。

それに呆れたような溜息をクロノは吐く。

「なんだってそんなものにしたんだ？」

完全に防げるものが作れなくても弱めたり浸食スピードを遅くするものだって

君なら出来ただろうし、当然思いつけただろう？」

「まあな、でもそれはあくまで延命処置でしかない。

それを選んでいたら、多分いまごろ俺はベッドの上で身動きひとつできない。

そんな状態じゃ、生きていても何もできない」

思いつめた表情で動けなければダメだと訴える彼に溜息交じりの声が返される。

「……………呆れた。」

ギリギリまで動き回るためにそんな方法をとったっていうの？」

当然だ。と頷く姿にさらに呆れた顔をして額を押さえた。

彼のとった方法は言ってしまうえば時限爆弾のスイッチを入れるようなものだ。

その時間が来るまでは安全かもしれないが最後には必ず爆発する。

「で、そうまでして動ける状態を維持したい目的はなに？」

だが、そんな方法を彼が取ったのならそれにはそれなりの理由がある。

そう踏んだリンディは畳み掛けるように問いかけ、彼は僅かに言いよどんだ後答えた。

「……………自分の病気が呪いだと気付く前から、考えていたことがあった。

闇の書の危険性はとくにわかってたから、俺が死んで、

「はやてのそばにあいつらが残ってもはやてがその後、暴走したら意味がない」

確かに。

と内心だけでハラウン親子は頷いた。

これまでの主はひとりの例外もなく暴走し最終的に死亡している。その形が管理局側の攻撃か、力を制御できずに自滅か。ぐらいの違いでしかない。

「それに、これは後から解ったことだが俺が死ぬと呪いは今度ははやてに移る。

阻止するためには俺だけが呪われている間に、

はやてと騎士たちを闇の書から完全に切り離すしかない」

「……出来る、のか？」

「理屈の上ではな。

どうも守護騎士プログラムは闇の書に内包されているだけの別系統のプログラムらしい。

外部からは無理でも主としての権限を持つ俺ならそこまで難しい話じゃない。

主と闇の書のつながりについても同じだ」

「それを今日までしなかった理由は？」

出来ると言い切るコウキ。

僅かな希望の光といえるそれに切り込むのはやはり彼女だ。

「っ、安全性がまったく確保しきれなかったからだ。

切り離れた時にどんな弊害が起こるかのシミュレーションや

安全に切り離すための術式を組み上げるのに予想外に時間がかかったんだ」

「ふーん、それであなた自身の安全は？」

「……………本当の的確に聞いてほしくないこと聞くのな、あんた」
洗面を作って、睨むがリンディは気にした風もなく、
変わらない笑顔で睨みつけながら「さっさと答えなさい」と脅していた。

「はあ……………もともと俺が死ぬのが前提のうえで考えていた計画だ。
俺の安全性なんて最初から度外視。いまのままでこれを行えば
俺は切り離しには成功しても闇の書と一緒に消える可能性が極めて高い」

もつとも、闇の書が手元にない今はそもそもできないんだが。
と、注釈をつけてわざとらしく溜息を吐いてみせた。
それを見て、それを防ぐ意味合いもあつたのではないかと。
ハラオウン親子は騎士たちの感情を慮る。

「なるほどね、それらを知った彼女たちはあなたを生かすために
闇の書を完成させる方法を選んだってことかしら？」

「蒐集を選んだのは……………そっちの方が君の命が残る可能性があるからか」

「そうだな、完成も危険だが俺の計画よりはマシなのも悔しいが事実だ。」

厄介なことに俺にはオールジャンルのデバイスとの相性の良さ

ジュエルシードを制御してみせた実績があった。あいつらが希望を見出すには充分だ」

闇の書はロストログニアでもあるがユニゾンデバイスとしての側面がある。

どちらともに相性のいいコウキなら完全な制御が可能なのではないか。

というのが騎士たちがその方法を選んだ根拠だった。

「けどあなたはそうは思わなかった。それはなぜ？」

「……………」

違法である。

という点を除けば彼が言った計画よりは現実味があり、また全員が生き残れる可能性が高いそれ。

法を犯す。管理局に追われる。処罰される。

コウキはそれらを恐れて選ばない男ではない。

むしろ自分と同じく積極的に破る気はないが必要とあらば影でやるタイプである。

というのがリンディの考える彼の人物像の一面だった。

「…………… 確証はないんだが」

長い沈黙のあとそう前置きした彼はひどく曖昧な口調で答えた。

「なんか、まずい気がした……………」

「はあ？」

「……………」

胡乱げな声を思わず出した息子と違って、彼女は笑みを消した真剣な面持ちでそれを聞いた。

少なくともリンディが見てきたコウキは感情で動きながらもその裏であらゆることを計算して物事や計画を推し進めるタイプだ。そんな彼が感情で嫌がったのでもなく明確な根拠があつて否定したのでもなく、

『まずい』と感じた。などという勘のようなもので判断したのに何か薄ら寒いものを感じずにはいらなかった。

「どうしてだと聞かれると本当に自分でも困るんだが、本当に、すごく……本気でやばい気がするんだ……」

「もつと具体的にないのか？」

彼ほどの口八丁がうまくその“感覚”を説明できない。クロノはそれに呆れた口調で問いかける。

僅かに考え込むような顔をしたコウキはポツリと口にした。

「……………いつもと同じことにならない気がする」

「いつも？」

「完成して主が暴走して自滅するか管理局のアルカンシエルで消滅させられるか。」

そんな“いつも通り”では、絶対に終わらない……………」

過去に幾度無く起こった闇の書の悲劇と終わり。

記録に残ってるだけでもどれもが悲惨で被害は甚大。

それを『いつも通り』で片付けた事に怒るよりそれを超える何か
起こる。

と、そんな予言じみた言葉にリンディもクロノも身震いしていた。

た
なにせそれを語る彼は、ひどく怯えた顔で彼ら以上に震えてい

本当のこと「その、選択」

12月3日 PM 11:43

海鳴市 拠点マンション 屋上

本来、立ち入り禁止にあたる場所に彼女はひとり佇んでいた。何をするわけでも何かを待っているわけでもなく。ただ、空を見上げて星空を眺めているようで眺めておらず、きれいな満月に見惚れているようで見惚れてなどいなかった。

「……………」

その背後で自分が入ってきた扉が開く音に振り返る。マンションの管理人などに見つかると面倒だな、と思いつつもまったく慌てていないのは生まれ持った性格ゆえか。しかし月明かりに晒された人影は見知ったものだった。

「あら、あなたもお月見かしら？」

今回の事件の中心人物でありながら局の協力者である彼。その登場に少しおどけたように口にした言葉に、何故か返答がない。

しかもどう返すべきか解らず戸惑っている所作を見て、彼女は身構えた。

「……………あなたは誰？」

「っ！？」

びくりと身体を震わせて“日野コウキに見える人物”は固まった。しばしそのまま睨み合い、といっても彼女側からの一方的なもので相手は相変わらず戸惑い続けてどこかオロオロとしていたが。

『落ち着いてください。普通に話せば大丈夫です』

「え、ええ……………」

「リニスさん？」

コウキらしき人物とリニスが行動を共にしていることに訝しむがそのために彼女はその返事の声の妙さに気付くのが遅れた。

「お見苦しいところを見せてしまい申し訳ありませんリンディ提督。まさか動作だけで見抜かれるとは思っていなかったもので……………」

律儀にその場で頭を下げ、礼をした仕草。

そして何よりその声色にさすがの彼女も啞然とした。

「……………えっと、私も知り合いの男性から女性の声があるとびっくりするのだけど？」

何より月光であらわになつた双眸はいつもの漆黒のそれではなく“

紅”だった。

『リンディ提督、いきなりですみません。ですが“彼女”のことは私が保証します。どうか話を聞いてあげてください』

「そ、それは構わないけど……」

と、視線をその彼にしか見えない“彼女”に向けた。

「……初めてお目にかかります。

私は闇の書の管制を勤めている擬似人格です」

「管制人格、ということ？ シグナムさんたちとは別の？」

頷いた彼女はどこか申し訳なさそうな表情で、リンディを窺う。

「今夜はあなたに頼みたいことがあって不敬ですが、主の身体を無断で借りてきました。よろしいでしょうか？」

「……聞かれてもね、内容しだいかしら」

微笑みながら遠回しに話だけは聞くといったも同然の言葉に彼女は安堵する。

しかしそれをすぐに真剣なそれに変えて、口を開いた。

「……どうかお願いします。主コウキを救ってください！」

「え　？」

何故かリンディはその言葉がひどく意外に聞こえて、しばし思考が停止した。

12月2日 AM09:59

管理局本局 応接室

闇の書の主・日野コウキの事情聴取は既に一時間を越えていた。その立場を考えればむしろまだ短いといったほうが正しいが。

「確認したいのだけどプレシアさんはどこまで知っていてあなたに協力していたの？」

戦闘の報告はすでに受けていた彼女たちである。彼女がコウキ側についていることは分かっているが、それがどの程度の理解のもとなのかは解らなかった。

「はやてたちと一緒にいらだよ。俺自身も説明した。リニスも同じ

くらい知ってる。

そのうえで、プレシアは俺の計画の方に賭けてくれた。科学者として、 فقط

最後に付け足したような言葉が個人としては納得していないことを暗に示していた。

それも彼女の場合、科学者として騎士たちの案の方が危険と判断しているだけ。

つまりはコウキの計画のほうがいいと言っているわけではないのである。

「あいつはあいつなりに闇の書が完成する事に何か俺とは別の考えがあるらしい。」

俺と同じように具体的に何がどうって説明できるわけじゃないらしいけど」

「そう………信用はしていいのよね？」

彼女がいつてるのはかつて罪を犯したプレシアだからじゃない。

コウキと共に過ごした家族だからこそ、リンディはそれを聞いた。はやてという例があるだけにその可能性は早期に潰しておきたかったのだ。

「ああ………科学者としての考えだけじゃなくて、

プレシア個人として、もう罪を犯すわけにはいかない。って考えてるんだ、あいつ」

でないとアリシアの母親には戻れないから。と。

そう、ほのかに微笑んで「だからあなたの味方をします」と彼女は言い切った。

もつともその後「私なりに他の方法を探しますから勝手な事しないでくださいね」と
彼女にしては珍しく強い語気でコウキに約束させた辺り、手慣れてきていた。
なにがといえば当然、日野コウキの扱いが、である。

「へえ、あのプレシア女史がそこまで、ねえ……………」

意味ありげな視線を向けながら笑うリンディ。

その裏にある言葉に思い当たるものがあるせいか、コウキは目を伏せた。

「じゃあ、彼女を戦力として数えていいのか？」

「それは…」

「無理でしょうね。昨日のあれで限界だったみたいだし、これ以上は危ないわ」

何故かコウキより早く答えた彼女である。

それを不思議そうに見たクロノと渋い顔するコウキはどこか対照的だ。

「……………あんたさ、いつたい“どこ”からいたわけ？」

「『……………ごめんな、無理させた』あたりからかしら？」

微妙に似てる声真似を入れながら自慢げにいつてのけた姿に頭を抱える。

コウキとしてはその接近を感知できなかった自分を嘆くべきか、

自分に気付かせないほどに気配を消した彼女を褒めるべきか。

「……………話を進めませんか？」

とりあえずそれは保留にすることにしたコウキ。

リンディはとても嬉しそうにうなずいた。

どこか置いてけぼりにされている気がしなくてもないクロノだが執務官としてはこの話に参加しないわけにもいかなかった。

「……………“これまで”についてはだいたい分かったわ。

それじゃ、肝心の今後についての話をしましょう」

「そうですね…」

事情と動機、目的がわかった以上あとはそれをどうするか、である。だからこそ彼も素直に頷いたのだが、それを聞いてリンディは笑みを深めた。

「あら、そんな簡単に頷いていいのかしら？

わたし手加減なんてしないわよ」

とてつもなく“素敵”な笑顔だった。

「……………お、お手柔らかに」

思わず引きつった顔でそう言った。が。

「イ・ヤ」

微笑みの即答だった。

本人の言葉通りまったくの手加減がそこには感じられない。けれどそれゆえに、コウキは違和感を覚えた。

「……………あのさ、もしかして怒ってる？」

「うふふ、なんで私が怒らなくてはいけないのかしら？」

そんな大変なことになっているのに一言の相談もない自分勝手な男のことで

「……………」

（絶対怒ってる）

訊ねた瞬間に背景が燃え上がったかのような錯覚。

素敵な微笑みに青筋がたっているようにさえ見えた。

男ふたりは口には出さない。リンディもまたそれ以上言葉にはしない。

が、その怒りは容赦なくコウキに向けられ彼は妙な息苦しさを感じていた。

「あはは……………すみません」

「……………？」

だからなのか。苦笑と軽い謝罪で彼は逃げようとした。

今度はリンディがそれに違和感を覚えたが、追求は止めた。

これ以上話を横道にそらすべきではないとの判断だ。

「……………それじゃ、まずはあなたが後どれだけ生きてられるか、ね」

今日はどこに出かけるの？的な気軽さで訊ねられたそれに
クロノはもちろん、コウキもわずかに呆気にとられた。

「ほんとに、容赦しない気なんだな」

けれどすぐにクスクス笑いながらも「これからずっと何もしなかつたなら」と、
前置きしたうえで彼は自らの口で自らの残り時間を口にした。

「残存魔力量から計算すると………来年の朝日を見るのは無理かなあつて………っ!？」

あはははと朗らかに笑いながらいうと、彼の目の前から魔力弾が飛んできた。

ギリギリで頭を動かして回避したが、代わりに背後の壁に穴が開いた。

「ちっ」

「お、おい、いまの舌打ちはなんだ!？」

「っーかあれ完全に非殺傷かけてなかったじゃないか! 殺す気が!？」

隠す気もないといわんばかりに堂々と突きつけられた指先から放たれた魔力弾。

コウキにはかすりもしなかったが本局施設の壁に穴を開けた以上その威力は計り知れない。

もし直撃していたら冗談ではすまない状況になっていた。というのに。

「死んだほうが世のため、人のため、恋する女の子たちのためよ、この屑」

笑みを絶やさぬまま、ぱつぱつと彼女はそう言い切った。

「うわぁ……クズなんて生まれて初めて言われたよ……」

アハハ、と怒るよりむしろ笑うコウキにリンディの笑みも深まる。もっとも両者の笑みの意味はまったく違うのだが。

(……………逃げたい……………なんだろう、すぐ逃げたい……………)

一人だけついていけない執務官は困り果てていた。

まるで魔力砲撃がぶつかりあった爆心地にいる気分だ。

(どうして母さんはこう、こいつの前だと言動が極端なんだ?)

少なくとも、息子が知る母は仕事でもプライベートでもこんな言い方はしない。

気の抜けない友人であるレティ提督が相手ならかなり砕けた話し方にはなるが

ここまで口汚い暴言はあまりにもクロノのイメージを逸脱していた。

(コウキもコウキで普段と感じが違うし……………相性が悪いのだからか?)

意味の違う笑みで向かい合う両者を見て溜息しか出てこない。

これで事件が関係してなければクロノは本当に一目散に逃げているだろう。

それぐらいこのふたりが向かい合った場合に起こる空気は重い。

というよりむしろ痛い。素直にいうなら怖い。といえるもの。近くにいるだけで神経性胃炎にでもなってしまうそう。とはいえ。

「と、冗談はここまでにしときましょう」

「そうだな、本題に戻ろう」

当人同士にとっては軽いものだったらしいが。

「冗談で施設を壊さないでください艦長！」

さすがにそれにはクロノも執務官として、アースラの？2として怒鳴るしかない。

しかしリンディは親らしく息子を軽くなだめると再度彼と向かい合った。

「……あなた自身の考えを聞かせてちょうだい。

これからどうしようと思っているの？」

「とにかくあの5人を捕まえるしかない。闇の書が完成する前に」

当然といえば当然の考えだが、執務官は唸った。それはかなり難しい、と。

「身内の恥をさらすようで気が引けるが、はっきり言うぞ。

いま僕たちが動かせる局の戦力では彼女たちの相手はほぼ不可能だ」

守護騎士たちの戦闘経験は非常に多く、また実力も高い。

そのうえ局員にとっては見慣れないデバイスと魔法だ。対応は難しい。
何よりエース級の腕前を持つフェイトやなのはたちでさえ、戦い方を知られていたというアドバンテージがあったとはいえば一方的に押し負けてしまうほどだ。それが5人。単独ならまだしも徒党を組まれては太刀打ちするのはかなり厳しいものがある。

「すでに武装局員の手配はすませているが、数には限度がある。圧倒的な大軍で数に任せて押し切るといふ乱暴な手段もあるが、僕たちが借りられる人員はせいぜい20名前後。数で押し切るにはまったくもって足りない」

「下手に襲って蒐集されたらあいつらの手助けしてるようなもの、だもんな」

「そのうえタイムリミットは今月中………具体的な案が欲しい所ね」
後半だけどこか意味ありげな。
そして責めているかのように注ぐ視線にコウキが僅かに怯む。
だがそれを振り切るように彼はその案を口にする。

「なのはたちにやってもらう。
俺が知る限りのあいつらの戦闘スタイルやクセを教えて、そのうえでデバイスを強化する。」

そうすればなんとかギリギリだけど互角並に戦えるはずだ……」

相性を考えて。

なのはにはヴィータを、フェイトにはシグナムを、アルフたちにはザフィーラを。

そうすれば残るのは直接戦闘には向かないシヤマルと接近戦に弱いはやて。
クロノと武装局員たちでどうにかできる状況に持っていく事は可能となる。

「言いたいことは分かるし一番現実的だが……その、君の生死がかった状態で、

それも騎士たちの方が生存確率が高いなんて知ったら……」

少女達はきつと戦えない。

戦えても、とてもじゃないが本気では無理だ。

迷いを持ったまま戦ってどうにかなる相手ではないだけ余計に。

「……………教えなければいい」

「なっ!?!」

ある意味、一番なのはたちの心情を慮ったクロノだけに彼のその言葉はあまりに衝撃的で、自らの耳を疑った。

「なのはたちには別の似たような理由で誤魔化して、協力を願う」

「君はなにを言ってるのか解ってるのか!?!」

「解ってるぞ。」

「なのはたちを騙してその力を借りようとしてるってことぐらい」

「違っでしょ」

思わずポーズではなく本気で激昂するクロノに、

コウキは硬さを持った表情と声で答えるなか、冷徹な声がそれさえも両断する。

「あなたはあの子達の想いを利用してしようとしてるのよ。
あなたを想い、慕う心を利用して、あなたが死ぬかもしれない計画に加担させる」

その非道を、あえて言葉にして叩きつける。
しかしそれでもコウキの表情には変化が無い。
だがそのために動揺を必死に抑え込んでいるようにも見える。

「……………シャマルにさ、言われたんだ」

その顔のまま、僅かな沈黙のあとポツポツと彼は語る。
声の硬さは気持ち程度だが和らいでいた。

「欲しいものをきちんと決めないと私たちは止められないって……
その通りだよ、ほんと」

何も決めないで、他のすべてを捨ててでも決断した彼女たちを止められるわけがない。

そう語る彼にかつての覇気はまったくない。かつてジュエルシード事件で

プレシアを責め立てた人物と同一人物とは思えないほどに。

「だから俺は選ぶことにしたよ、俺の欲しいものを」

だから、その方法を選ぶことにしたのだと彼は言った。

それはすなわち『未来に自分以外を行かせる』ことを選んだということ。

結局、彼は『自分』を選ばなかったのだ。

「おまえっ……………」

未来に多くの人を残すための自己犠牲。

そういえば聞こえはいいが、実際はそんなものではない。

彼の場合は周囲の人の気持ちをもろで考えていない。

いや、彼はそれを選ぶといった事で自発的に『考えない』と宣言したに等しい。

それが許せず、クロノはまるで親の仇でも睨むような目で彼を見つめていた。

あながち、間違いでもないことに本人は気付いていない。

「ふう……………」

そこへわざとらしいとも取れる大きな息を吐く音。

吐き出した彼女はもう笑ってさえいなかった。

そして感情がひどく消えた顔で、まるで事後報告かのように淡々と口にする。

「私、あなたを嫌いになりそうよ」

場がしんと静まり返る。

沸点を超えて激昂していたクロノでさえ一気に冷めさせる空気。

誰もが感じた。それがリンディ・ハラオウンの最大級の侮蔑の言葉だと。

だが、それでさえコウキを笑わすだけだった。

とはいってもそれは、苦笑もしくは乾ききった笑みだったが。

「ええ、存分に嫌ってください……そっちのほうで楽だ……」

背もたれに完全に身体を預けて天井を見ながら、そう吐き捨てた。

「……………馬鹿なのね、本当に……………もう殺してやりたいぐらい馬鹿よあなた」

「……………すみません」

さすがに自分が悪い自覚はあったのか。

小さくそれだけ呟くと疲れたように目元を手で覆った。

その言葉と態度を、どう受け取ったのか。

大きな溜息を吐くとリンディは諦めきった顔で頷いた。

「わかったわ、あなたの案で行きましょう」

「艦長！！」

「どっちにしろ、捕まえなくてはいけないのは事実。

そのためになのはさんたちの力が必要なのも事実。

私たちに最初から選択の余地はなかったのよ」

それが解ってたうえで、この男はこんな言い方をしたのだ。

と、いわれるとクロノはもう怒っていいのか嘆けばいいのかが解らなくなる。

様々な感情がメーターを振り切ってしまって、もう言葉も出ない。

一方、隠していた意図をまたもずばりと言い当てられ、

あからさまにしまったといわんばかりの顔で目を泳がすコウキ。

「でも覚悟しときなさい。

全部が終わったら思いっきり引っ叩いてあげる」

そんな彼に追い打ちをかけるように、

これ以上はないぐらいの“素敵”な笑顔での処刑宣言。^{オシオキ}

一瞬、それにキョトンとした顔で聞いた彼も内容を理解すると微笑を浮かべる。

「うわあ、なんかそれだけで死にそう……」

「ええ、一撃で墜としてあげる」

そう言い合って、クスリと笑いあうふたりの姿に

僅かに面白くないものを感じるクロノだが、入り込めないのも事実。だからこそ唐突に理解したのだ。このふたりの間にある空気の微妙さの意味に。

（もしかして単純に相性が良過ぎて、距離感がつかめてない、だけ？）

それが正解だと確信するのに、その後たいした時間は必要なかった。

12月4日 AM07:34

海鳴市 拠点マンション一室 ダイニング

「え？」

「はい？」

「マジ？」

「ええっ？」

「……………」

「あはは、みんな面白い顔してるっ」

その日、朝食の席でリンデイが語ったことはそれなりに衝撃的だった。

テーブルについて食事をしていたのは彼女を含めて7人。

リンデイ、クロノ、エイミイのアースラトップ3人はもちろん。

囑託として同行している扱いのフェイトとその使い魔アルフ。

昨日、自宅に帰る時間がなかったために“偶々”泊まったコウキとプレシアである。

ちなみにこの中でこの話を事前に聞いていたのは管理局組だけである。

「あら、聞こえなかったかしら。
もう一回いうわね、これからしばらくこの7人で一緒に生活する
ことになったから」

「ちょっと待て、聞いてない。そんな話は初耳だぞ！」

「部屋割りについては昨日のでもいいわよね？
要望があれば、今ならまだ受け付けるけど」

「無視するな！」

さすがに立ち上がって声を上げたコウキに、
しょうがないわね。といわんばかりの態度で歩み寄ったりリンディは
まさに“素敵”な笑顔で彼を見据えた。彼は思わず身震いした。

「それじゃあ、あなたはあの家に戻るの？ プレシアさんとだけで
？」

その向けられた意味ありげな視線と物言いに、コウキは固まった。

（あれ、それって俺とプレシアで二人きりになるってことか？）

騎士たちを追って世界を巡っていた時はあまり意識していなかったが
自覚するとそれはかなりまずい気がした。おもに理性の問題で。

「いや待て、女性と二人つきりになるのがまずいなら
こっちは5対2で比率はむしろあがってないか！？」

「うふふ、面白いこというのね。」

あなたここで“何か”する気ってこと？」

「い、いやそうではないです、はい……」

その『何か』をする気はないために。

というよりは圧力のある笑顔に負けたために思わず頷く。

どっちにしる日野家の男女比率と何ら変わってはいないのだが。

「それだけじゃないわ、あの家はあなたにとってホームだけど

それは彼女たちにとっても同じ。戻ることはないでしょうけど

畏がないと言い切れるかしら？」

「うっっ」

「あなたに邪魔されないように彼女たちがあなたを拘束・監禁！

なんてことをしないって、言える？」

「……………それは……」

充分にありえる。といえた。

むしろ今日までそれをしなかったことの方が不思議である。

もつとも騎士たちからすると完全に手詰まりな状態にまでコウキを
追い込むと

自らの寿命とさえいえる自身の魔力を使うだろうと判断したからな
のだが。

「以上の可能性をふまえてここであなたたちを保護します。

ということなの。何か文句は？」

聞きながらも実質『ないわよね』と笑顔で脅していた。

(えええ……今日からずっとこの人の相手するのぉ……マジかぁ……)

コウキはリンディに対して悪感情はまったくくないが、それでも精神的にまるで勝てない相手と四六時中一緒というのはキツイものがある。

長らく日野家のトップとしてある種の自負とプライドがあっただけに今後の生活を想像するだけでそれらを粉々にされそうだった。とはいえ。

「文句は？」

「……ありません」

拒否などもとより出来るわけもない。

今回の一件以外にも彼女に対して借りが多すぎるのだ。

ジュエルシード事件の件。プレシアの件。その他もろもろ。

「はあ、まあしょうがないか……けど、お前はどこに行く気だ？」

「っ!？」

ひとり、朝食の席から抜き足差し足忍び足で去ろうとしていた女。彼女はびくりと身体を震わせると壊れた玩具のようにガチッ、ガチッと振り返る。

「イ、イエ、ホ、ホラ、キガエトカトリニイカナイト……」

何度もいうが、彼女は嘘や隠し事が苦手なのである。

その場にいた全員に即座に嘘だとバレるほどそれは棒読みで片言だった。

「ひとりで逃げる気だったなプレシア？」

とても“素敵”な笑顔で彼女の肩を掴む。

プレシアはそれに苦笑を浮かべながらガタガタと身体を震わせる。

「あ、ああ、ゆ、許してください！」

いきなり同じ屋根の下で生活なんて難易度高すぎます！」

「うるさい、こうなったらお前も道連れだ。

ほくら、こっちでフェイトとアルフと楽しくお話しようかあ……」

「ひいっ！ は、離してえっ！！」

彼女の断末魔のような悲鳴は徹底的に黙殺されたまま、
けれど最後の抵抗だと必死に建物の柱にしがみついていた。

「あ、あれえ……あんな人、だったかな？」

「違う、絶対違う。あいつそっくりさんだ。うん、そうに決まってる」

それを見たフェイトたちは啞然を通り越して頭痛まで感じ始めたが、
ちなみにクロノやエイミイも似たり寄ったりな反応だ。

楽しそうに微笑んでいたのはリンディただひとりである。

（ま、土台としてはこんな所ね。

あとは限られた時間をどう使うか。本当に、無理難題ぶっかける

んだから)

そしてただひとり、この場にはいない人に思いを馳せてクスリとさらに笑った。

本当のこと」「その、選択」(後書き)

これで終わりっぽいけど、11話はまだ続きます。

本当のこと「女たちの密談」

12月3日 PM 11:47

海鳴市 拠点マンション 屋上

「救って、ね……………それはどういう意味かしら？」

「言葉通りです。」

「このままでは主は結末がどうであれ救われない」

「これからのひと月が彼の人生の最後の日々になるうとも。」

「何かしらの活路が見いだされ、その転機となるひと月になるうとも。」

「今のままでは、主は生き残れても死んでしまっても、苦しむだけ」

「それだけは避けたいのです。」

「そう語る“彼女”にリンディはしかし訝しむような視線を送る。」

「あなたはどちらがいいの？」

まるでコウキの生死はどちらでもいい。

とも取れる言葉に疑心を挟まずにはいられなかったのだ。

その疑いの眼差しと問いかけに彼女は少し言葉を選ぶように間を取った。

「……………正直に言えば、主はやてや騎士たちと同じ想いです。けれど、それと同じくらい主コウキの苦悩もわかるのです」

「どういうこと？」

深く繋がった心と頭脳。その恩恵とも弊害ともいえる作用で、彼女はコウキが行った決断の経緯を誰よりも深く理解してしまっていた。

「すべては私の存在を知ったがゆえ。

主は私を見捨てられないために、切り離しを躊躇しています」

彼女は守護騎士プログラムの上位プログラムであると同時に

闇の書の管制を司るプログラムでもあるために同じ方法では切り離せない。

それ以前に切り離しても闇の書の中核に近すぎる彼女は再生の起点となってしまう。

そのため彼女を切り離す事は第二の闇の書を誕生させてしまうことにもなりかねない。

『コウキは口にしませんでしたが実はあるんです。彼が無事に助かる方法が』

「皆と闇の書を切り離すさいに主自身が自分との繋がりも切れればいいだけ。」

けれどそれは同時に闇の書が主の存在を感知できなくなることを意味します。

つまり、死んだと認識して転生機能が起動するんです」

守護騎士と心許した主を失って、またひとり。

管制人格は永遠の闇を本当にひとりぼっちで歩むことになる。さらなる闇の書事件という悲劇を増やしていきながら。

『そんなの Kouki が選べるわけないんです』

「けれど他に方法もないのも事実。」

主はそれこそ私ですら思い浮かばなかった数々の方法をシミュレートしました。

でも結果は、私を見捨てなければ自分が助からないという事実を浮き彫りにしただけ」

だから Kouki は決断できなかった。

切り離せば自分とはやて、騎士たちは闇の書の呪縛から逃れることができる。

代わりにそのすべてを管制人格である彼女に押し付けてしまう。でもそうしなければ少なくとも自分は死んでしまう。

それもただ死ぬだけだ。管制人格にまた深い心の傷をつけて彼女を救うこともできずに自分を慕う人たちを悲しませて、死ぬだけ。

「どちらも選べない。けれど“どちらか”しかない。」

主が何もしなければ悲劇が繰り返されて主たちも騎士たちも救われない」

管制人格。守護騎士。八神はやて。そして自分自身。

すべての命と運命の決定権を持つのは、持てるのはコウキただひとり。

同じ主でもロストロギアの制御に長けていないはやてでは同じ事ができない。

彼の決断と行動だけがすべてを決めてしまう。

誰かを救うために誰かを見捨てなければならぬその取捨選択。

それに行き当たって、彼はもうどうしていいか解らなくなっていた。

「そう、だからなのね。

だから彼はあんなに追い込まれて、自分を見捨てることを選択した……」

誰かを見捨てられないのなら、自分を見捨てさえすればいい。

短絡的だが“ふつう”なら誰もができない選択を彼はするしかなかった。

「はい、そこにもしかしたら私を助ける活路があるのではないかと」

「それだけじゃないでしょう。

どうせ犠牲が出るのなら元々死ぬ予定で、死ぬ覚悟のあった自分だけでいい。

とかなんとか勝手なこと考えてるんでしょ!？」

管制人格の返事を待たずにそう決めつけ、リンディは静かに憤慨していた。

確かにその通りだったので管制人格もリニスも否定せず、しかしぴたりとそれを言い当てた彼女にどこか複雑な表情を向けた。

「……………ごほっ、ま、まあそれはそれとして話はだいたいわか
ったわ」

その視線の意味を珍しく取り違えた彼女は
少しだけ恥ずかしそうに咳払いすると強引に話を断ち切った。
だが、舐めてはいけない。口での戦いで彼女が負けたことなど
その指の本数よりはるかに少ないのだ。

「でも、それは私の質問の答えになってないんじゃない？」

だからすぐに自らの領域で話を進ませる。

「え？」

それに戸惑った管制人格だが彼女が語ったのはあくまでコウキが悩
んでいた理由だ。

彼女自身の希望はあまり語られていない。その事実気付いてハッ
となる。

「わたしはあなたはどちらがいいの、と聞いたの。」

あなた自身がどうなりたいのか、聞かせてくれない？」

虚を衝かれたかのように驚いた彼女は答えに詰まる。
けれどすぐに相貌を崩して、笑みを浮かべた。

「……………不思議です。こんなにも感じが違うのに、
あなたと話をしているとまるで主コウキと話しているようです」

「……………なんか微妙に嬉しくないわね、それ。」

あとはぐらかさないで答えてほしいんだけど？」

心外だ。といわんばかりに眉間にしわを寄せながらも、しっかりと話を元に戻すあたり本当にそっくりだ。とリニスは思った。

「そうですね……………私自身の願望、ですか。

恥ずかしながら最近、何故か次から次へと増えていくんです」

騎士たちと一緒にあの家で暮らしたい。

主たちの手料理を食べてみたい。

皆のためにこの力を振るいたい。

皆ともっと話をしたい。

皆にもっと触れていたい。

皆の笑顔をもっと見ていたい。

止まらない数々の願い。

それはひとつにまとめてしまえばこういう願いだった。

「生きて、みたい……………」

まるで神々しいものでもみるかのように。

ひっそりと隠していた気持ちを晒すように。

憧れと照れを含んだ視線がリンディに向けられた。

「あの優しい主たちと騎士たちと一緒に、生きて、みたい。

だから主には死んでほしくありません……………」。

「どうやっても無理な……………欲張りな願いですが」

それが私自身の願望です。と本当に恥ずかしそうに語った。
あなただから話すので絶対主には聞かせないでと頼みながら。

「私はいいと思うわ。」

どっかの馬鹿みたいに無理やり何かを選ぶよりずっといい。

だって欲しい物は、やっぱり欲しいもの……」

だから素敵よ。

とリンディは彼女の願いを賞賛する。

心からの柔らかな笑顔と一緒に。

「やっぱりあなたに頼ってよかった」

それに同じくふんわりとした笑みで答えた彼女はしかし。

即座に顔つきを真剣なそれに戻して、頭を下げた。

「本当なら被害者遺族であるあなたに頼むのは筋違いなのは分かっています。」

ですが残る希望はもうあなたしかいないのです……」

被害者遺族。

そう指摘されてもリンディの顔に動揺はない。

彼女たちがそれを既に知っている可能性は予期していたのだ。

だから実のところ、コウキが自分を頼ってこなかった理由も概ね理解している。

納得はこれっぽっちもしてないあたりが彼女らしいというべきだろう。

「うーん、そんなこといわれてもね。」

闇の書に関しても、彼に関してもあなたの方がくわいでしょう」
そしてここまで話されれば彼女たちが頼みたいことが臆げだが見えてくる。
だからこそリンディは難しい顔で唸っている。

「知っているだけではダメなんです」

けれどリニスらはそれに首を振る。

必要なのは知識や技術ではない。と。

『元々死期を悟っていたコウキはある一線を決して譲らなかった。誰であるかと、それこそデバイスの私にさえそれを踏み越えさせなかった』

意識と頭脳が繋がっていた管制人格に対してさえ、それは徹底していた。

「けどあなたはそれをあっさりと踏み越えた」

びっくりしました。

と当時を振り返るように彼女は笑った。

初めて会ったあの時の舌戦と腹の探り合いに彼が負けた時。

リンディはおそらく無造作に、そして無自覚に不可侵だった領域に笑顔で立ったのだ。

恐ろしくあっさりと、彼本人にさえ気づかせない自然さで。

「だからどうか……主コウキをよろしく願います」

彼にどうか別の選択を

その真摯な願いを聞いて、深く下げられた頭を見てリンディは難しい顔で唸り続けた。

返事そのものは決まっている。しかしそれに踏み切る何かが必要な気がした。

だから、彼女は自然と“いつもの”素敵な笑顔を浮かべる。

「何かご褒美がほしいわね」

「え？」

『……………』

まさかの報酬要求に管制人格は思考が僅かに停止する。

その口ぶりはまさに彼女の主とどこか似ていたが、心情や考えが伝わってこない分、その腹の底はよく見えない。

つまりはそれが冗談なのか真剣な要求なのかすら判断がつかなかったのだ。

しかし一方のリニスはそのを後者として受け取っていた。

『では、すべてが終わったならコウキの最大の弱みを教えてくださいよ。』

出来れば私たちも教えたくはないですが、それで、どうでしょう？

「ええ!？」

「ふふ、それいいわね。楽しみにしてるわ」

リニスの言葉と管制人格の態度からよっぽどの秘密だろうと当たりをつけたリンディは快くその報酬で頷いてみせた。

「い、いや、そ、それは……リニス！」

『背に腹は代えられない、でしょう？』

渋っていた彼女もリニスの言葉に納得するしかなかった。

考えてみれば他にリンディが喜びそうな報酬など思いつけないのもあったのだが。

それゆえに。

「本当に、主コウキと思考パターンが似ていらっしやる」

そんな捨て台詞とも取れる発言を残して彼女らは部屋に戻っていた。

見送る形となったリンディはその後、わざとらしく溜息を吐く。

「ああ、もう、ホント、まいったわね……」

困った、困ったと口にして唸っているが口元にあるのは笑み。

何気なく振り返った彼女はその時初めて、夜空に満月が輝いているのに気付いた。

「楽に死ぬると思わないことね」

それを誰かに見立てて彼女はひとり満足気にそんな宣戦布告をしたのだった。

本当のこと「女たちの密談」(後書き)

実はリンディもけっこうショックを受けてて、半ば茫然自失状態だった。

だから月があるのは解ってたけど満月だとは気付いていなかった。という裏設定。

第12話予告

アルフ「意外な形で始まった新しい生活」

プレシア「事件を追いながらも私たちはゆっくりとその距離を縮めていく」

エイミー「そんな中、力を求める魔導の杖たちに装填されていく弾丸」

プレシア「新たな力、新たな杖、そして彼には新たな鎧が誕生する」

エイミー「次回、魔法少女リリカルなのは異伝・第12話」

アルフ「『友達と恋心と盾の鎧』に」

三人「ドライブ・イグニッションッ！」

コウキ「前に言ったよな、次はゲンコツだってな！」

第12話予告(後書き)

と と っていうサブタイってなんかいいよね。

楽で(ンコ!?)

「一番前」にいるベリリ（前書き）

分けるかどうか悩んだけど分けた。なのでちょっと短いっす。

何かを隠しているのは

なんとなくわかってた

哀しくなかつたっていえばウソになる

けど

わたしは決めてたから

この人が困っていたら助けようって

自分ができることならなんでもしようって

わたしはそんな形でしか言えないから

この気持ちをうまく表現できないから

だからそのひとつひとつに想いを込めるの

あなたが

大好きです、って

12月4日 PM08:12

海鳴市 拠点マンション一室 キッチン

蛇口から出る水の音とスポンジで皿をこする音が響く。
その横では洗い終えた皿を丁寧に拭いている音も混ざって
これまた解りやすいくらいに皿洗いの光景が広がっている。

夕食後、俺とフェイトはその後片付けとしてこういうことをしている。
る。

別にやらされているわけじゃない。自発的な行動だ。
やっぱり長年やってきた事を急にしなくなると何か収まりが悪い。
フェイトもまた俺がすると言ったあと「私も手伝います!」と申し
出てくれた。

少し照れたような顔ながらも強くはっきりとした声で。

うん、まずいよなあ、本当にこれで何人目だよ俺。

とかいう暗がり落ちそうな考えはとりあえず水に流しておこう。
ともかくにも突然の思いつきか策略かは不明だが決定された皆と俺たちの同居。

朝こそ突然だったこともあってひと悶着あったが落ち着けば、受け入れられないこともない。
あくまで、俺だけなら、なのだけど。

「……………ええっと、なんかすまんな」

「いえ……………こちら、こそ？」

ふたり並んで苦笑いを浮かべながらそんなことを言い合う。
その理由はキッチンから見えるリビングの光景を見ればわかりやすい。

今現在ここには俺とフェイト以外にアルフ、艦長さん、クロノ、プレシアがいる。

エイミィさんはバルディッシュたちの修復の件や俺が出した強化案のこともあって

いまは本局にいてもろもろの申請やら調整やらしている。

そして問題のリビングに誰がいるかというフェイトの使い魔アルフト

日野家の居候、プレシア・ヒノさん（本名プレシア・テストロッサ・年齢不詳）だったりする。

ハラオウン親子は現在それぞれの自室で事件に関する報告やら資料読みに忙しい状態。

で、俺とフェイトは皿洗いなんてしてるものだから、

よりもよってあのふたりが向かい合うことになってしまったのだ。正確にいうと片方はリビングの隅で小さくなっているんだが。どっちが、なんて語る必要はないだろう。

「アルフもあそこまで睨まなくても……」

「いや、あれはプレシアがびくびくし過ぎだろう」

ソファにどこか不機嫌そうに座っているアルフは何をするわけでもなく、プレシアを凝視している。

その視線の圧力に負けて最初はソファに座っていたあいつも今では部屋の隅っこでビクビク震えながら体育座り状態。

あれは放っておくとあの無限土下座が再発しそうだな、おい。

「……コウキの家でもあんな風だったんですか？」

そうだったらすいません。と今にもフェイトが謝りそうな顔で彼女は初めてプレシアに関する質問をした。

「うーん、まあ最初はな。」

ひどい情緒不安定で突然泣き出すわ、謝りだすわで大変だったよ」

「泣く？ 謝る？」

まあ、見てる分には面白かったのだけど。

一方フェイトはあまりにも想像しづらいのかキョトンとしていた。まあしょうがないだろうな。扱いが扱いだったしアリシアの記憶にもそれはないだろう。

「でも、最近はわりと落ち着いてきてたんだ。日常生活を送る分に

は問題ない程度には。

まあ概ねの予想通りフェイトたちに会ったら振り返すだろうなあ、とは思ってたが」

まさにその通りの結果となったわけだ。

もうホント、いつそ見事だといいたくなるほど完璧に。

「そして多分、あれが本当のプレシアじゃないかかって思うんだ」

「本当の？」

「ああ、臆病なくせに怖いことや嫌なことばかり考えてしまって、一人で勝手に怯えて、震えて、なのにそれに耐えられるほど頑丈じゃない」

だから、ジュエルシード事件は起こってしまった。

自分で自分を追い詰めて、余裕がなくなって、止める人がいなくなつて、暴走した。

「そのくせ、自分の大切なものはなんとしても守ろうとするんだ。

そう考えると本当に血の繋がりに面白くないよな？」

と、意味ありげな視線を隣に向けた。

一瞬だけポカンという顔をしたフェイトだがすぐにその意味を理解して

なんともいえない複雑な表情を浮かべて、苦笑する。

「……………わたし、そんな子ですか？」

「さてな、近からず遠からずつてところかな」

などといって明確な答えは避ける。

無論、似てる所をいってみるといわれるとかなりの数思い浮かぶのだが。

いまはまだそれを語る時ではない。むしろ、間違いだ。

「……けどな、勘違いするなよフェイト」

だから釘を刺すように俺は僅かに硬い声色で語りかけた。

「お前にはあいつを断罪する権利がある。

どんな事情があろうともあいつがお前にしたことは許されることじゃない」

「……………」

「けど同時に俺はあいつやお前にすまないとも思っている。

本当はそれはとっくの昔に終わらせておくべきことだった」

フェイトとプレシアの関係の決着。

ふたりが抱えるそれぞれの想いの決着。

余計な邪魔がなければそれはもう終わっていたはずだった。

何も仮面野郎の介入だけではない。その後の俺達の裏工作だって同じこと。

そのためにプレシアの罪への罰はもう永遠に失われてしまった。

プレシア・テストアロツサはもう死んだ人間だ。

彼女が仮に自首したところでその罪はもう立証できない領域にある。そう、プレシアは生き永らえた代償に罰を受けるチャンスを失った。

罰は戒めでもあるが同時に許しへの第一歩でもある。

それがなかったために結果プレシアは永遠に許されることがなくなった。もともとそれが『最大の罰』になっているのは皮肉な話だが。

「でも、お前達はまだここで生きている。

全部は解決しないけど、お前らふたりが決めなくちゃ解決しないこともある」

次に進むために、新たな一步を踏み出すためにまずはちゃんと終わらせないといけない。

それが何を終わらせて何を始めることになるのかはそれこそ当人たちだけが決めていいことだろう。

「わ、わたしは……」

「ほら行って来い、もう決めてきてるんだろ？」

どこか言い澀んで、決心がつかない彼女の背中を軽く叩く。

そして安心させるために不安げな顔で見上げるフェイトに力強く頷いてみせた。

「……はい、あなたのおかげで時間はいっぱいもらえましたから」

だから、ありがとうございます。

と律儀に頭を下げてフェイトはリビングに向かっていった。それを見送って、洗った皿を重ね置く。その背後から。

「あなたは見てなくていいの？」

全く気配を感じさせずに彼女が楽しそうに語りかけてきた。

「……………頼むからいきなり背後に立たないで……………本当に心臓に悪いから」

わりと真剣に寿命が縮む。だいたい四日ぐらい。

うん、俺の場合冗談じゃすまないな、おい。

そういう意味も込めて半眼で睨んでみるが全く効果は無い。

「あら、ごめんなさい。

てつきりフェイトさんを口説いているのかと思って……………」

むしろ妙なスイッチが入って、ややこしいことになったようだ。

笑顔が、なんかすげえんだ。うん、なんていうかすごい素敵な笑顔してらっしやる。

「あのな、口説いてどうするんだよ。俺っ、はロリコンか!？」

思わず、時間がないのに、という言葉をいいそうになったのを誤魔化す。

もっと他の誤魔化し方が無かったのかと自分で自分に問い質したいが。

ま、どっちにしろ気付いたっばいから無駄な努力だったみたいだけど。

なんせこいつの笑顔の素敵さが増大してる。

「なるほどね、あなたの好みはもっと上の年齢なのね。

お姉さん、何だか身の危険を感じるわ」

わざとらしく自らをかき抱くような仕草と共に怯えたように一歩下がる。

なーがお姉さんだ。俺と同年の子供を持つ未亡人が何をいつて

いる。

というか日野家の長としてあの女性率の高い家で暮らし続けていた俺を、

その理性の頑強さがどれだけだと思ってやがる！

いや、自慢するようないけど、でもちよつとカチンと来た。

遠回しに女ならば誰でも口説く色情魔みたいだと言われたよう。

「本当に襲つぞ、ぐらあ」

なのでジト目で睨みつけながらドスの入った声で静かに洒落で脅してみる。

「あら、それじゃ部屋の鍵は毎晩開けておくからお好きにどうぞ」

案の定、まるで効果がないどころかカウンターを食らった気がする。痛くも無い頭がむしように痛い。『頭痛が痛い』ぐらい痛い。

「……………なにか、あつたのか？」

だから、俺はちよつと疑問に思っていたことを訊ねてみた。

彼女は少しキョトンとした顔で少し驚いていたがこつちとしては朝方からずつと妙な感じがしていたのだ。艦長さんの言葉や態度がどうにもいつもと違う。

今の会話だって今までならこんな流れにはならない。

「あら、ごめんなさい」と形ばかりの謝罪をして話を元に戻したはずだ。

ソレが何をどう間違つて「襲つぞ（怒）」「いつでも待ってるわ（素敵な笑み）」なんてものになる？

「今日のアなた、何かおか？痛っ！？」

この女はあるうことか額へのでこピンを最初の返答にしゃがった。目にも留まらぬ早業で回避も防御もできずに額を押さえる。

「……………いいこと教えてあげる。」

女の子はね、いっつも同じ場所になんかないのよ」

「はい？」

「どっかの馬鹿な誰かさんみたいに同じ所でずっとグルグルしてる
と置いてかれるわよ」

何か、どっかで聞いたことがあるようなフレーズと共に紡がれたその言葉は、

とても、とても強く、そして重く俺の胸に叩き込まれた。

ここ最近ずっとがむしゃらに走ってきた俺に。

ずっとあいつらの前にいたつもり俺に。

自分で自分になんでだよって言いたくなるくらいあっさりど。

俺はその言葉がストンと胸に入ってきていた。

「……………俺、もしかして最後尾？」

「ふふ、周回遅れだと思っわ」

ありゃま。なるほど、一番前だと勘違いするわけだ。

「それは……………なんとも……………」

情けないことになってしまったなあ。

なんて呟きながら俺は皿洗いを再開し、彼女はそれを静かに手伝った。
そしてふたり並んで、かつての親子の結末を遠巻きから見ること
しよう。

テストロツサの答え(前書き)

すっごく悩んだけど、これがこのふたりらしい気がするのです。

テストロッサの答え

12月4日 PM 08:18

海鳴市 拠点マンション一室 リビング

「あ、あのっ！」

いささか緊張しすぎな声にリビングの全員の視線が集中した。しかしながら約一名はすぐに視線を外してしまったのだが。だがフェイトはそれに怯まずに自ら一歩踏み出してその彼女の前に立った。

「お話があります」

「え……ええっ!？」

意外だったのか。

プレシアは一瞬言葉の意味を理解できず、出来た後には絶叫だった。どうすればいいのか迷う瞳と何を言われるのかと怯える瞳が少女を見上げていた。

一方のフェイトも緊張のせいか硬い表情で見下ろしているため僅かに怖い印象を与えている。過去のふたりの関係を知っていればいるほど奇妙といえる光景。何もかも逆である。

「アルフ、リニス…ふたりだけで話がしたいの。席を外してくれる？」

「え、ちょっとまっ…」

『はいはい、行きましようアルフ。』

『いまのプレシアは一応無害ですから心配しなくていいですよ』

その視線を外さずに口にした提案にアルフは反射的に反対しようとしたが

リニスがかさずそれすらも許さず封殺する。

不満そうに唸るアルフだがキッチンからの視線が二対あることに気付いて

不承不承のいでリニスを持ってフェイトの部屋へと移動した。

「……まずは、座りませんか？」

それを確認してから床に座ったままのプレシアにソファをすすめる。そういわれてそのまま床にいるわけにはいかず、彼女はゆっくりとした動作だったが立ち上がりソファに腰掛けた。

「……………っ!？」

その真横。

空いているスペースは他にいくらかもあるのに

フェイトは座ったプレシアの横に腰を下ろした。

あまりの距離の近さに、彼女の身体は岩のように硬く固まっていた。

（は、話？ 話って、やっぱりあれよね？

なんで生きていたの、とか、なんでコウキの所にいたの、とか。

ううん、もしかして長年の恨みつらみをいまここで！？ 話じゃ

なくてオハナシ！？

ばっさりなの！？ バルディッシュで真っ二つ！？

って、いやいや、フェイトがそんな子ならとっくに仕返しされてるからわたし！）

半分くらい混乱した状態の彼女がまともな思考などできるわけもなく、

そのあまり高度な頭脳を使って、はつきりいつて無駄に高速処理していた。

「久し振りに会って、びっくりしました」

「っ、そ、そうよね。死んだと思ってた相手が生きてたらそれはもう……」

「違います、生きてるのは知ってましたから」

「……………え？」

予想外の言葉に彼女は再度身体を固めてしまう。

その動作に音をつけるとしたらピキッといった感じで。

「ど、どどどど、どどちてっ！？」

あまりの動揺に盛大に噛んだのだが本人はそれすら気付いていない。それに一瞬呆気にとられたフェイトだがすぐにクスリと微笑むと種明かしをした。

「サンドイツチ、味がアリシアの記憶のと変わってませんでした」

「あっ！」

「それにリニスの猫フォームを知ってるのは私たちだけですよ？」

「はっつ！？」

「あと、コウキがビデオメールで時々匂わしてましたから」

「えええええっ！？」

思わずキッチンにいた彼に視線を送れば、
すさまじく素敵な笑顔と共にサムズアップ。確信犯である。

（そうよ、思い起こせばピクニックだなんて騙されて作らされたんだった！

リニスのぬいぐるみの時だってプレゼントするって言い出したのは彼だ！

ビデオメールには万が一にも私が映らないようにと撮る時は外出までしていたのに、

それを利用して私の存在を示唆するようなことを言っていたなんてっ！）

何もプレシアとてフェイトと再会した時のことをまるで考えていなかったわけではない。

だが、そもそもの前提である『自分のことは既に死んでいると思っ
ている』がいきなり崩れたのは
研究者気質を持つプレシアにとって実験の準備段階でつまづいたよ
うなものである。

それはかなりの痛手となつて彼女をパニックに陥らせていた。

(ずっと知ってたた……知ってたた……そんな、それじゃどうすればい
いのよ!?)

きつとずっと続いている、私への恨みが続いている……当然だけど、
それは当然なんだけど!

でも、でもっ、それじゃアリシアの妹になんかなつてくれない!
ああっ、それどころか「あんたたちなんかと血が繋がってるのも
イヤ」とかいわれたらどうしよう!?)

プレシア・テストロッサ。

彼女は優秀な研究者であったが、存外(あるいは思った通り)想定
外に弱い人であった。

だからこそ事前にしっかりとした準備やシミュレートをかかさな
いが、
前提条件がひっくり返るとそんなものは意味がなくなってしまうの
だ。

そして何より彼女は基本的に考え方が後ろ向きなのだった。

「あ、あの、私、ご、ごめっ」

「謝ったら、怒ります」

「っ!?!」

思わず口からこぼれるように出そうになった言葉をフェイトは強い
口調で拒否した。

謝罪を封じられたプレシアはもう取り繕うこともできないまま、

その内面の恐慌具合を顔に出して震えて、今にも泣きだしそうになっていた。

「……………謝られても困ります。そもそもわたし恨んでませんから」

「……………え？」

その表情に一瞬の困惑と苦笑を浮かべたフェイトはけれど、はつきりとそう口にした。プレシアを真っ直ぐと見詰めながら。一方、それに余計に混乱したのは彼女のほうだった。

すべてを覚えているのだ。何度叩いたか。何度ムチをふるったか。どんなひどいことを言って、こんな小さな少女をどれだけ傷つけたのか。

まだ時折、それを夢に見るほどに。

「そ、そんなわけないでしょう!？」

私はっ、どんな言い訳したって許されないことをしたのよ!」

だからプレシアは思わず声を荒げて、少女を叱るように叫んだ。

「あなたがどれだけ優しい子なのかはよく知ってる。

けれど、嫌なことは嫌だって、怒ったことは怒ったっていわなきやダメよっ!」

それをどこか呆けた顔で聞いたフェイトはしかし、すぐにクスツと笑った。

意味は解らなかったが、それで一気に我に返ったプレシアは慌てた。なにせどの口がいうのだ。ということを書いてしまっていた。

目の前の少女からそれを奪ったのは自分だろうに、と。

「あ、えっ、いや、これは、あ、あくまで一般論として！
私のことは棚に上げ、ちゃだめなんだけど、そうじゃなくて！」

わたわたと両手を無意味にせわしなく動かして、
必死に誤魔化そうとするがもういろいろと失敗しまくっていた。
それを見て、もう我慢できなかったのかフェイトは、
お腹を抱えてアハハと声に出して笑った。

「うっう……わ、笑うことないでしょお……」

さすがに真面目に喋っていたつもりはプレシアとしては
その態度に少しだけむっとしてしかめっ面になってしまっ
もっとも、その顔は照れから真っ赤になっており
不機嫌そうではあったが、どちらかといえば可愛らしいものだった。

「う、ごめんなさい。すごく、いろいろ予想外で……」

フェイトも声を出して笑ったことは失礼だと思ったのか素直に謝っ
た。

少女からすると最後に付け足した言葉がすべてなのだが。

「でもようやくこっち向いてくれましたね」

「あっ」

微笑を浮かべてフェイトはプレシアと向き合う。

プレシアもまた思わず叫んだ時に彼女と向き合う体勢になっていた。
彼女はその罪悪感から意識、無意識に関係なくフェイトを避けてい
たのだ。

そうして仕切り直すように息を吐いて少女は先程の言葉の続きを紡

ぎだした。

「……恨んでないのは本当です。

恨めるほど私がまだされたことを理解できないだけかもしれないけど」

「つつ！？」

思わぬ告白にプレシアは心臓が止まるかと思ったほどの衝撃を受けた。

そして、すぐにその意味をおそらく誰よりも正確に理解した。なぜなら、彼女を生み出しの間違いなくプレシアなのだから。

「虐待を、受けていたのは今なら分かります。

でもそれを知っても、私はあれがいけなかったことなのか。

多分、知識でしか理解できていないんです」

それをどこか恥ずかしげに語るフェイトに比べ、プレシアは一転して真っ青な顔になっていた。

(なんて、こと……)

フェイトは、見た目通りの年月を生きていない。

記憶転写型のクローンを作りだすプロジェクト「F・A・T・E」

そこで得た技術で生み出されたクローンは記憶転写を行うためにどうしてもある程度成長した状態でなければならぬ。

またプレシアは死んだアリシアを“取り戻す”ことを考えていたために

彼女が作ったクローン素体はその時点でもう5歳相当まで成長していた。

(そうよ、どうして今まで気付けなかったの！？
この子はまだ、まだたった4年しか生きてない！)

それがどうして見た目通りの、いやそれ以上の精神年齢をもてるというのか。

確かに環境によって実年齢から大きく離れた精神を持つ人もいるだろう。

だが、精神の成熟具合という観点からみれば4年はあまりにも短い。アリシアの記憶という土台とリニスによる教育があつたとはいえ、フェイト・テストロッサの人格は本人や周囲が思っている以上に、幼かった。

そのうえ親から愛情を向けられず虐待を受け続けた。

それできちんと精神が育つていくとはプレシアはとうてい思えなかった。

(本で読んだけど、虐待をされている子は“自分が悪い”と思う傾向がある。

だから、そんな幼すぎる心で虐待を受け続けたこの子は、
自分がされたことをヒドイことだと認識できない!?)

気付いてしまったら、

その自分のしでかしたことの非道さを、

改めて理解した彼女はもう様々な感情を忘れて、その手を伸ばした。

「え？」

フェイトが驚く暇さえなくその手は少女の小さな身体を抱き寄せた。

おそらくは生まれて初めてのプレシアからの抱擁に、少女はただただ驚き、けれど嫌がることはしなかった。

（こんなに小さくて、細い……………そんなことも知らなかったのね、私）

腕の中にすっぽりと収まってしまおう存在。

罪悪感を言い訳に逃げ続け、勝手に大きく見ていただけにその“小ささ”は何よりプレシアの胸に強い痛みを与えた。

「ごめんなさい」

謝るなどしていた少女の言葉を無視してそれを告げる。

「私は、私が思っていた以上にあなたにひどいことをしていた。

あなたは本当は怒っていい、恨んでいいのに、

その気持ちすら私はあなたに抱かせてあげられなかった！」

怒りや憎しみはよくない感情だといわれる。

だが、それを抱くことで救われる部分もあるのだ。

それさえ、さしてあげることができない。

「ごめん、なさい……………本当にごめんなさい……………私は、私はなんてことを！」

ギュツとさらに強くフェイトを抱きしめながら、

嗚咽を交えながらもプレシアはただただ謝り続ける。

けれど、その瞳から零れ落ちる涙を小さな手がぬぐった。

「……………あのっ、私はまだ全然ダメだから、泣いてる理由、

よく解らないけど、私は生み出してもらって感謝してます」

プレシアの腕の中の少女は真剣な顔で、

必死に言葉を探そうにしながらプレシアを見上げて、言った。

「痛いこと、苦しいことはたくさんあったけど、

おかげでリニスに会えました。アルフに会えました。

なのはにコウキにも、リンディ提督やクロノにも。

それに……………今は本当のあなたに会えました」

「……………本当の、わたし？」

「はい、さっき私びっくりしたって言いましたよね。

こつちに来てから見たあなたは本当に私の知らない人でした」

病気の治癒や若返った外見などとは比べ物にならないほどの違い。

それを続けざまに見てフェイトは不意に気付いてしまった。

そもそも自分はプレシア・テストロツサという女性をよく知らなかった事に。

「まさかアルフの視線に怖がっていたり、自分の言った事にあたふたしたり、

笑われて、頬を膨らませるような人だとは思ってませんでした」

「あうう」

「でも……………私を想って泣いてくれる人でした。

私が思っていた通りの、アリシアのお母さんでした」

ふわり、と微笑む少女の顔に我を忘れて見惚れる。

少女はそれだけで感謝していた。そうであってくれて嬉しい、と。

（私は、何を怖がっていたのかしら……）

かつて過ごしていた庭園で。そしてついさっきまで。

何を恐れて、自分はこの少女と距離をとっていたのか。

そんな必要な微塵もなかったというのに。

「ありがとう、フェイト」

だからこそプレシアはかつて非道な扱いをした少女に、

自分を母と慕っていてくれた子に、心からの感謝を口にした。

それに変わらぬ笑顔で頷いた少女は、しかし突然慌てたようにまくしたてる。

「あっ、あの、それで、なんですけど……聞いてほしいことがあるんです！」

緊張した様子で妙に力み過ぎた言い方にどこか聞き覚えがある気がしたが、

プレシアはその考えを捨てて、フェイトの言葉に耳を傾けた。

「ずっと考えてました。あなたと再会した時、どうするのか。

何を言えばいいのか、どうすればいいのか、ずっと……」

アースラでリンディたちと過ごしながら、裁判を続けながら。

どうするのが、どうなるのが互いにとって一番いいのか。

何より、フェイト自身がどうなりたいのか。

あの別れの日からずっと少女は考え続けていた。

「もう私はアリシアの記憶と自分の記憶を分けることが出来ていません。」

それでアリシアの記憶をアリシアのものだと思って、ちゃんと見てみたんです」

少女の中にある二つの記憶。

記憶転写で入ったかつてのアリシアの記憶。

そして生を受けてから今日までのフェイトの記憶。

アースラでの穏やかな日々がそれを整理する時間を与えていた。

「それで、思ったんです。やっぱりプレシア・テストロツサはアリシアのお母さんなんだって……」

「フェイト……」

「私とあなたは確かに血筋や遺伝子的には親子なのかもしれない。

でも、それ以外の何かは、もっと大事な何かがきつと親子じゃなかった」

プレシアはなんともいえない表情で少女を見下ろしている。

目的のために母親のフリをしていたプレシア。

愛情を得たいがために娘になろうとしていたフェイト。

そんな関係だった時点でふたりはそもそも親子ではなかった。

「だから……ちょっと寂しいけど“他人”になったほうがいいと思うんです。」

そしてどうかこれからもアリシアのお母さんでいてください」

そういって、ゆっくりとフェイトはプレシアの腕の中から出た。

その距離は他人としては近すぎる。というかのよつに。

抵抗せずに少女を放したプレシアは少しだけ俯いて、囁くような声を出した。

「……私の話も、聞いてくれるかしら？」

「はい」

「フェイト、あなたにアリシアの母親だって認めてもらえるのは嬉しい。本当に。」

でも正直にいうと私ね、自分がどんな母親だったか思い出せないの」

「え？」

「アリシアのことを思い出そうとしても、いつつ最後の………冷たくなって、息のしないあの子の姿が浮かんで、それ以外がぼやけてしまう」

無論、すべてを完全に忘れていくわけではない。

しかし最後の記憶があまりにも強烈過ぎて、あの日の絶望と慟哭が強すぎて、

プレシアは娘との数々の思い出をちゃんとした形で思い出せなくなっていた。

「ホント、駄目な母親よね。一番ひどい顔しか思い出せなくて、

あの子が本当に笑っていた姿がぼやけてしまう、なんて……」

そしてそれを彼女は海鳴で暮らすようになるまで気付けなかった。

悲劇を無かった事にしたいばかりにその前にあった日々を忘れていた。

「だから、フェイトがもし私と親子としての関係を望んだ時は断ろうと思ってた……いまはまずアリシアの母親に戻らないと私はそれ以外の誰の親にもなれないと思うから」

けれどフェイトが出した答えはプレシアが予想していたものよりずっと大人な考えで、たぶんきつと正しいものだった。それだけにプレシアはそれではいけないとも感じた。

「でも、あなたのそれを聞いて、私なりに思ったこと。うっん、お願いしたいことが出来たの」

彼女はフェイトほどしつかりとした答えを出せていなかった。けれど少女の出した答えが、プレシアに答えを見せた。

「お願い、ですか？」

不思議そうな顔で見上げてくる少女に頷き返しプレシアはその願いを口にする。

「……アリシアの妹になってほしい」

「えっ、でもそれは……」

それは遠回しにプレシアとフェイトが親子になることではないかと、咄嗟に言葉を返そうとしたフェイトを手で止めて、そうではない、と首を振る。

「すごく恥知らずな頼みかもしれないけど……その、私と……と、友達になっしてほしいのっ」

「……………えええっ!？」

数瞬、フェイトは言葉を取り損ね呆けていたが徐々に理解していくと驚きながら絶叫し、思考も身体も固まってしまふ。

「あう……………やつぱり、ダメ？」

だがプレシアからすればそれは半ば拒否の絶叫に聞こえたようでありしゅんと肩を落として、泣き出しそうな顔でうな垂れてしまふ。

(っ……………本当に、知らない顔ばかり……………でも、不思議。何も知らない他人って感じだけは全然しない……………)

「ふふ、いいですよ。」

私はアリシアの妹で、そしてあなたの……………プレシアの友達。少し変だけど、うん、私達はそれくらいが丁度いいかもしれませんね」

「あ、ありがとう!」

パツと笑顔になったプレシアは嬉しさから思わず手を取って握り締めた。

フェイトはそれを受け入れてそのまま二人は見詰め合い、友達から教わった友達になるための“儀式”をする。

「私はフェイト・テストロッサです。よろしく、プレシア」

「はい、フェイト。私はプレシア・テ、じゃないんだった。いまはプレシア・ヒノというわ」

名を教えて、呼び合い、相手を見る。
それだけのことなのにふたりは胸がいつぱいになる想いだった。

そうして私達は友達になった
おかしな関係かもしれないけれど
きっとそれが私達にはお似合いなのだと思う

ただ。

「……………ヒノ？」

まさかコウキと……………結婚したんですか？」

僅かに、本当に僅かにフェイトの表情が硬くなった。

「け、結婚っ!？」

そ、そそそんなのまだ出来ないでしょ!？」

「まだ？」

それに慌てふためいてしまったプレシアもだが、
そこに引っかかってしまうフェイトも、フェイトである。

「ち、違う。そういう意味じゃない!

単にコウキの年齢じゃまだできないって意味で……………」

「じゃあ出来る年齢になったら、するの？」

「だからそうじゃなくて！」

プレシアは後に語る。

フェイトと友達になるよりその誤解を解く方が大変だった。と。

「おモテになるようで羨ましいわあ」

「勘弁してくれえ……」

縮む距離（前書き）

うちのフェイトはこんな子ですが、なにか？

縮む距離

12月5日 AM07:35

海鳴市 拠点マンション一室 玄関

今日は私のご主人様が初めて学校に通う日だ。
朝からフェイトは妙にそわそわしながら準備をしてた。
何度も私に「どこか変じゃない？」って
まだ着慣れなてない制服姿で聞いてきた。
そんなところあるわけない。いつもの可愛いフェイトだよ。
っていうと安心したように笑ってくれた。

「それじゃ、行ってきますー！」

「はい、いってらっしゃいフェイトさん」

『車に気をつけてくださいね』

「なにかあったらすぐに呼んでくれよ」

私達は玄関で御見送り。

フェイトは期待と不安を混ぜたような顔で、でも笑顔で駆け出していった。

ああ、ホントにあんなフェイトを見れる日がくるなんて。

ずっと願っていたけど、いざそうになると嬉しいなんてもんじゃないね。

みんながいなかったら泣いてた自信あるよ、私。

「さて、それじゃ、私は後片付けをしたら一度彼と一緒に本局に戻るわ。

アルフさん、あとはお願いね」

「ああ、任せといて。フェイトやなのは絶対私が守るから」

そう、これからあたしは影ながらフェイトたちを護衛する立場になる。

魔力を失って、デバイスも修理中のあの子らは無防備だ。

一度蒐集されると二度目の蒐集はできないらしいから

もうザフィーラたちは警戒しなくていいんだけど、

どうやら話だけは聞いていた仮面の男がコウキの周辺にうつついて
いるらしい。

「本当は僕が残れたら良かったんだけど、色々面倒な手続きがあったね」

『私をフェイトが持っているだけでも違っただけですけど……』

クロノヤリニスが申し訳なさそうにするけど大丈夫だよ。
ふたりはそれぞれ仕事とバルディツシユの修復のために本局に行く。
エイミイはここに残って騎士達の搜索をしている。

となるとどつちにしろ私しか護衛役がない。

「無理はしないでくれよ。何かあったら絶対まずは通信をいれくれ。すぐ駆けつける」

「分かってる。やばそうだったらふたりを連れて逃げるから」

そういつて子犬フォームから人間態に変化する。

いつもの獣人形態とは違う黒髪の女性へ。前に海鳴にいた時にしてた格好だ。

顔はいつものまんまだから知り合いに見られるとすぐにバレそうだけど。

「それじゃ、行ってくる」

「あ、ちょっと待ってアルフさん。

もう一人、一緒に行ってほしい人がいるの」

「え、もう一人っていったい……」

リンディにそう呼び止められたけど、まさか。

その予感はずぐに的中中だと教えれた。

というより、あの絶叫が聞こえて察するしかなかったただけかも。

「それは……」

「いいから、とつとと行け！」

「ま、待ってください。まだ昨日の今日で心の準備が!？」

本気で、あの人と？

目でリンディに問いかけると彼女は笑うだけだった。

12月5日 AM09:45

私立聖祥大学付属小学校 近辺

「……………」

「……………」

私達は絶好のポジションにある木に昇ってそこからフェイトの教室を覗くように監視していた。

一応結界を張って、周囲どころかフェイトたちにも気付かれないようにしたうえで。
なんでかっていうと魔力が戻るまでは余計な心配事のない学校生活を送ってほしい。
ってことで私らの護衛の件はまだ隠しているから。

ちなみに私は子犬フォームに戻って枝の上。
隣には双眼鏡片手に教室を覗きながらも、若干私が気になっている女がひとり。

正直、居心地が悪いのはこっちも同じ。

昨日のフェイトとの話がどうなったのかは本人から聞かされた。
すぐく、本当にすぐくびっくりしたけど。
フェイトがそう決めたのなら、私はもうとやかく言わない。
つもりだったんだけど、さ。
顔をちよつとそっちに向ける。

ビクッ

「……………」

元に戻す。

そして数秒、間をとって、顔をまた向ける。

ビクッ

「……………あんたさ、本当にフェイトたち見てるのかい？」

私はこれでも山にいた狼だ。

当然、視力や聴力は人間以上のつもり。
多少意識を別に向けても問題はない。
けど、こいつはちょっと私に意識を向けすぎ。

「は、はい！　ちゃんと見てます！」

「しっかりしてくれよ、私は仮面の男を知らないんだから」

リンディとコウキが私達ふたりに任せた理由は分からないでもない。
警戒すべき相手である仮面の男を私は直に見ていないし、
そいつらが使うであろう姿を隠す魔法の見抜き方も知らない。
両方共に知っているプレシアが必要なのは、わかる。

だからといってずっと憎らしかった相手と
すぐに仲良くできるほど私は使い魔マギができていない。

「ごめんなさい……」

「……………あんた、本当にあのプレシア？」

謝り、うな垂れる姿に思わず本音が出た。
見た目はかなり若返っている。雰囲気も穏やかだ。
ちよつと、というかなかなりオドオドもしてる。
これで“あの”プレシアだと思えといわれても無理だ。

「えっ、あ、ああ………そうです。あのプレシアです」

けれど元気なさげながらもそれをきちん認めた。

もっとも私の場合わざわざ聞かなくても獣としての五感すべてで
彼女をあのプレシアだと認めている。認めざるをえない。

けど、それでも確認したくなってしまうほど違和感がありすぎる。そもそもだ。

「あんだ、なんでそんなに私に怯えてるんだい？」

昔から私がどんな目で睨みつけてもピクリとも反応しなかったのに。今ではちよつと視線を向けるだけでビクビク震えるんだ。調子狂うったらありやしない。

「だ、だって、アルフは私のこと嫌いだろうから、その、どう接していいかよく解らなくて……」

本当にこの人、プレシアなんだろうか？

泣きそうな声でまるで子供のよつな困つた顔をする彼女に溜息しか出ない。

「……昨日のことはフェイトから聞いてるよ。

そつなつたからにはあんだがフェイトにひどい事しない限り、私はあんだをどうこつする気はないよ」

フェイトが望んでこいつと友達になるつていうなら、別にいい。

ご主人さまの幸せを第一に考えるのが使い魔の仕事つてもものだし。

だつて、いうのに。

「でも、あなたはイヤでしよう？」

どうしてこいつはわざわざそこを言つかな。

「大好きなフェイトの近くに大嫌いな私があるとアルフはやっぱり

イヤなんじゃないかって。

あのあと急に気付いて、でももうフェイトと友達になっちゃったし、どうしようって思ってた」

ああ、それで今朝はいつも以上に私の前であたふたしてたのか。そして今も私を気にしながら、どうしたらいいかと不安顔だ。

それが、本当にそれが、いつかの誰かの顔に被るから妙な気持ちになる。

「だ・か・ら！ フェイトがいつって言ってるならそれでいいの！

私は確かにあんたを許せないし、怒ってるけど、

それで駄々をこねたら一番困るのはフェイトなんだから！」

「……………ありがとう、アルフ。

あなたはちゃんと怒れるのね」

「は、何いってんだいあんた？」

いえ、こっちのことです。

と何かを誤魔化したのが、よく解らなかったからいいや。

「で、結局あんたは何が知りたいのさ」

「……………特訓に付き合ってください」

「は？」

なにいつてんのこの人？

「せめて、あなたと普通に会話できるようにならないとフェイトと

友達になんてなれません！」

態度がおかしい自覚はあったんだ。この人。

その、こいつからしたらけっこうな決意を口にしたのは、いいし
よう。

けど出来ればこっち向いて言っただけでよかったかな。

視線だけはずっと双眼鏡で教室向いてるもんなあ。

それだけ私が苦手なのか。

それでもフェイトと友達になりたいってことなのかね。

ああ、もう。なんだろうね、この人。

「解ったよ」

「はい、ありがとうございますアルフ！」

嬉しそうにしちゃって。

血は争えないって、こついうこというんだらうか？

本当はイヤだけど、認めざるをえないよね。

フェイトと血が繋がってるって。

でもさ。

「そういうことはホント、顔見て言おうよプレシア」

「はじつー」

12月5日 PM 12:11

私立聖祥大学付属小学校 屋上

晴れの日には生徒達に開放されている屋上の一角。
設置されているベンチに座り女子生徒たちがお弁当を広げておしゃべりをしていた。

「どうフェイト、転入初日目は？」

「えーと、なんか色々あつてまだグルグルしてる、かも」

「フェイトちゃん人気者だったもんね」

最初の休み時間になると外国から（ということになっている）の転入生が珍しかったのか。

単純にその見た目の可愛らしさからか。フェイトはたくさんクラ

スமைトに囲まれた。

「まったく、みんなもみんなよ。」

転校生を囲んで矢継ぎ早に質問攻めして。

まったくレディの扱いがなっていない連中ばかりなんだから」

「あはは、あの時は本当に助かったよアリサ」

どういたしまして。

などと胸を張りながら答えるアリサに周囲からは笑みがこぼれた。

「あ、今日はアリサちゃんおにぎりなんだ。ってことはおばさんの手作り？」

それぞれが膝の上に広げたお弁当。

アリサたちの物は当人同士からすると見慣れたものだ。

どれもが親ないし家族の手作りであるという共通点があり、

市販物や冷凍食品にはない人の手が加わった独特の暖かみがある。

「うん、今日は朝時間があるからって。」

そういうのはやすすかぱん系なのね。フェイトは……」

「フェイトちゃんのお弁当すごく可愛い」

皆に覗き込まれ、すずかに可愛いとまでいわれて

フェイトは自分が作ったわけでもないのに嬉しい気持ちになった。

内容こそ三人と違い、これぞ女の子のお弁当。といったもので、

ベンチで食べるのにあまり向いていなかったが、

三人にも負けないくらい作った人の気持ちが入っていた。

「それってあのキレイな人、えっと確か、リンディさんが作ったの？」

アリスとすずかにはリンディたちとフェイトの関係は何も教えていない。

思わずフェイトの母親と勘違いした時、まだ違う、と答えたことでふたりはそれ以上その関係を問いただすことをしなかったのだが、それでも家族に近い関係だとは推察してくれていた。

「うん、だいたい半分くらいはそうかな」

本当に嬉しそうにそう語る仕草に釣られて笑みを浮かべそうになるが。

「半分って、じゃ残りは誰？」

「うん、コウキも作ってくれたんだ」

.....

.....

.....

「「「えええええっ！！??」」」

「っ!?!?」

一瞬の静寂を破る絶叫。

突然のそれに驚くフェイトや周囲の生徒を半ば無視してアリサは身を乗り出さん勢いで問いただす。

「ちよ、ちよつと待って！

なんでフェイトのお弁当をコウキが作ってるのよ!？」

「あ、うん。実は昨日からコウキがうちにしばらく住むことになったの」

「き、聞いてないよフェイトちゃん！」

「う、うんごめんね。昨日はそれ以外にも色々あってバタバタしちゃって、

そこまで気が回らなくて、ホントごめん」

本当に申し訳なさそうに謝られてしまったので、

何か出鼻をくじかれたような気分になる三人だが、事が事ゆえに話をそこで終わらすわけにはいかなかった。

「えっと、そもそもどうしてフェイトちゃんの所に行くことに？」

「う、うん。リンディさんが決めた事だからよく解らないんだけど、いま家に戻るとコウキとプレシアしかいないから、とか言ってたような」

表向き。

ある事情で外国に行った事になっているコウキたち。

今回プレシアとだけ戻ってきたのも同じ事情の関係。

ということになっておりシグナムたちは現在も外国にいることにな

っている。

はつきりいつて怪しさ満開な言い訳なのだが。

「……あ、そつか。そうだよね」

(プレシアさんと二人つきりは、こっちが逆に不安でドキドキしちやうよお)

「それは……確かにまずいわね」

(あの胸で迫られたら、年頃の男子なんていころじゃない！)

「確かに、二人つきりはさすがに、ね」

(みんなと一緒にならともかくプレシアさんとだけって一番危険だよ……)

女の子達からすれば他の日野家メンバーがない不自然さより誰かがコウキと二人つきりになるほうが大問題なのであった。

「ん、ん？」

ただひとりだけ意味がわからず首を傾げるフェイト。

それを見て「まさか」という顔になるアリサ。

「ねえ、フェイト。実は私ね、直接フェイトに会えたら

聞いてみたかったことがいくつかあるんだけど、いい？」

頷くフェイトにアリサはずっと前から。

具体的には日野家宛てのビデオメールを見た時から感じていた事がある。

それをストレートにぶつけることにした。

「フェイトはさ、もしかしてコウキのこと好きなの？」

「え、うん、もちろん好きだよ」

屈託のない笑顔で即答されて「あちゃあ」と顔を覆うアリサ。すずかとなのはに至っては苦笑いだ。

ただしそれは「またあの男の犠牲者が」的な意味ではない。

「ごめんフェイト、聞き方を間違えたわ。男性として、コウキが好き？」

「男性として？」

どういうことだといわんばかりに首を傾げるフェイトに少女達は疑いを濃くした。

想いの自覚以前に『恋愛』そのものをよく知らないのでは？と。

「ごめんアリサ、わたしよく解らなくて……それってどういこと？」

そういつてまるで自分が悪いかのように謝られて、再度アリサは出鼻をくじかれたようで二の足を踏んでしまう。

「そ、そうね。どう説明したらいいかな、すずか」

「え、わたし!？」

丸投げされてしまったすずかは少し考えて、さっきの話題をそのまま使う事にした。

「……そうだね。」

まずはコウキさんとプレシアさんが二人っきりで仲良くしてるところを想像して

フェイトちゃんがどう思うか、っていうのを聞いてみたいかな」

「コウキとプレシアが……」

言われるがまま。

フェイトはその光景を思い浮かべてみた。

ビデオメールの映像という形で一部しか知らない彼らの家。

そこで二人っきりで過ごすコウキとプレシア。

寝起きを共にして一緒に食事を作り、食べ、そして語り合い、笑いあう。

「フェ、フェイトちゃん？」

「すずか、あんたなんか押しちゃいけない所押しちゃったんじゃない？」

「あははは………そうかも」

少女たちはそれぞれ絶句し、頭を抱え、苦笑する。

彼女達の目の前でそれを想像している少女の表情が、どこか“硬い”。

まとうオーラも先ほどまでの同い年の同性から見ても可愛い少女から今まさに戦場に立とうとする戦士のようなものに変化していた。

「すずい……」

「へっ？」

「わたしもそこに入りたい！」

何を思い浮かべていたのかは正確にはわからないが、
突如吐き出された願望は僅かに少女たちの予想と食い違いがあった。

「入りたい？　自分がコウキと二人つきりになるんじゃないか？」

「え、二人つきり？　む、無理だよ、だってまだ少し緊張するから
そんな！」

二人つきりだなんて。

と傍目から解りやすいくらいに頬を真っ赤にするフェイト。

「……ここまでになっておいて無自覚なんてむしろすごいわね」

「やっぱり恋とかそういうの知らないんじゃないかな、外国だと文
化が違うっていうし」

「えっと、フェイトちゃんこれまであんまり大勢の人と接してこな
かったからだと……」

さりげなくなのははフォローに回る。

フェイトが育った環境についてはリニスから聞いていた事もあり、
恋愛というものを知識でしか知らないというのを知っていたからこ
そである。

「まあ、時間の問題だろうし私らだけが知ってるのも不公平だから
フェイトにも言うておくけど、私達もさ……その、あいつのこと、
好き、だから……」

気恥ずかしさから少し視線をずらして真っ赤になりながら口にした言葉に

フェイトはその表情を満面の笑みに変えて、喜んだ。

「そうなんだ！　じゃあ、いつかみんなと一緒に暮らせたらいいな！」

何か、とんでもない爆弾を放り込みながら。

「「「え？」「」」

「みんながコウキを好きで、私もみんなが好き。

好き同士で一緒に生活できたら、きつと楽しいよ」

驚きと戸惑いの声を尻目に、フェイトはただただ純粹にその事実を語って、そうなたらいいな、と笑っていた。

「み、みんなって……まさかのみんな？」

「全部で何人になるんだろ？」

「なのは、そこ問題じゃないから。みんなって所だから！」

「そっか、その手があったよね……」

「すずか！？」

「あ、ほら、うちなら部屋とかいっぱい余ってるし……」

「だからそういう問題じゃないでしょ!？」

それぞれ妙な方向性で天然な三人に囲まれて、その日アリサは絶叫し続けたのだった。

「フェイトは何か変なこと言ったのかい？」

「そこから……まさかそこから教えなきゃいけなかったなんて!！」

よく解らず首をかしげる子犬アルフとがっくり肩を落としているブレシアだった。

悪巧みで悪巧み

12月5日 AM10:23

管理局本局 デバイス調整室

空洞でガラス張りの円柱型ケースに浮かぶように収容され、調整と修理を受けている待機状態のバルディッシュとレイジングハート。

「どうだリニス、バルディッシュの状態は？」

『はい、かなりのダメージですがこれならパーツさえ揃えてもらえればなんとか』

製造者である使い魔リニスの記憶を引き継ぎ、試作品として最初に作成された彼女はバルディッシュの親であり姉である。

調整・修理、そして強化をする役目にこれほどふさわしい存在はない。

「マリーさん、そっちはどう？」

「ええ、こつちもOKです」

俺に返事をしたのは太い眉とタレ目、それらを覆う眼鏡が特徴の女性。

本名はマリエル・アテンザであるのだが皆がマリーと呼ぶので俺もそれにならってマリーさんと呼んでいる。

彼女は本局のメンテナンススタッフでエイミーさんの後輩にあたり、今回のRHとBDの修理を請け負うことになった人である。

「あなたが出してきた強化案にはびっくりしましたけど、この子たち、あっさり受け入れちゃうんですもん」

俺が考えた強化案は一言でいえばベルカ式カートリッジシステムの導入だ。

元が繊細なインテリジェントデバイスに本局ではまだ不安定なそれを搭載することに彼女は難色を示したのだが、

俺が設計したものは局で使う物とは別システムで安定性が高かったこと。

何より本人(?)たちが強く望んだこともあって今はその準備ための最終チェック中。

「お前らも、このままだと悔しいだろ。」

同じ土俵で、あいつらに一泡吹かせてやれ」

『はい』

『もちろんです』

こいつらからすれば俺が提案しなくても自分で提案していたと思う

けどな。

それ程までに、主人を護れなかったことその期待に応えられなかったことが許せなかった。

元よりこの強化案はそう思うであろうつこいつらの事を考えての事でもある。

「にしてもすごいわね、君。

私とそう歳は変わらないのにここまでの設計図を持ってくるなんて」

「あはは、独学だったもので独創的なものになってしまっただけですよ」

実は闇の書の記録からパクってきました。なんて言えないよなあ。

クロノたちに話した内容はすべてオフレコになっている。

他に知っている者が誰もいないということはないだろうが、メンテスタッフの彼女がそれを知ることはない。

そのため俺の素性は概ね本当ではないことだらけ。ベルカ式カートリッジシステムに詳しい人。という触れ込みである。

実際、アイゼンたちに直接触れ、使用経験や整備経験もある俺がさらに闇の書の記録から必要な知識を集めたこともあって本局のスタッフが感心してしまうだけのものは書けていた。

「謙遜しない、しない。どう、うちで働かない？」

「……あはは、まあ機会があれば」

苦笑しつつやんわりと拒否してモニターを見る。

表示される文字や数字からその状態を把握する。

「BDのチェック終わりました。問題ありません」

「こつちも大丈夫ね。あとはパーツが来るのを待つだけ、か。

遅くても今日の午後には来る予定だけど、コウキくんはどうする？」

「あ、俺はまだここにいますから何か予定があるなら留守番してますよ」

「じゃあお願いしようかな。

今回の件で借り出された武装局員のデバイスも面倒もみなくちゃいけないから」

わかりましたと頷くとマリーさんは調整室をあとにする。

それを見送ると、ニヤリ、とわざとらしく笑みを浮かべてみた。

『悪い顔してますよ、コウキ』

「失敬な、悪巧みしてる顔と言え」

『何が違うんですかそれ？』

さてな、と誤魔化して操作端末の席に座る。

といつてもデバイス調整のための端末ではない。

ここから“外部”の情報を得るための端末だ。

「さてと、アースラからはわりと簡単だったけど、

本局のソレはどれほどのものかな？」

『……………ああ、もうっ、悪巧みし始めると止まらない人ですね。
一応見張りをしていますか。バルディッシュたちも内緒ですよ？』

『了解』

『問題ありません』

巧みに端末を操作して情報を集めていく俺を尻目に、
デバイスたちは俺の行為を沈黙し記録しないことにする。ありがとう。
い。

同時にリニスは外の気配を感知して人の出入りを見張ることに。

なんか最近特に思うが、言わなくてもしてほしい事してくれるような
リニスって。

元がやっぱり人のお世話もしていた使い魔だからだろうか？

それとも、やっぱり気にしてんのかな。自分がキツカケでバレたの。

俺がふと零した言葉を訝しんだりリニスはそれをシャマルやはやてに
聞いてしまった。

直接それでバレたわけではないがキツカケになったのも事実。

とはいうものの俺としてはよくあそこまでバレなかったなあ。

と思っていたのでさほど大きく受け止めていないのだが。

おっとまずは集中して調査、調査。

端末を動かして、俺は目的の情報を探す。

今回俺が本局に来たのは当然BDたちの修理と強化のため。

なのだが、それとは別に調べたいことがあったのだ。闇の書関係で。

探すのは闇の書事件の情報。それもここ百年以内で起こったものだけ。

おそらくそれらのどこかに関わった人たちのなかにいるはずだ。

古い情報から順番に夥しい数の名前がモニターに流れていく。

俺の推測が、当たっているのならどこかに彼か彼に関係する人がいるはず。

にしても随分と非効率的な探し方してるよな、俺。

はつきりいえばその疑っている人物名をデータベースで探した方が手っ取り早い。

本音をいえば疑いたくないということもあるが、それだけじゃない。見ておきたかったんだ。これまでの闇の書の犠牲者たちの名を。

自己満足だとしても、今は俺が主なのだ。それぐらいはしておきたい。

「おいおい、よりもよって11年前のでヒットかよ」

呆れたような出したつもりだった言葉はしかし、悲壮感が漂う口調だった。

モニターに表示されるのは11年前に起こった闇の書事件。

最終的な犠牲者数はその代の主と、ある艦の艦長の二名だけ。

「クライド・ハラオウン、か……」

クロノの父である艦長さんの夫。

その名と顔を見るだけで頭がズキズキ痛みやがる。

そしてそれはあの時に感じたものと程度は違うがとても似ていた。

「やっぱりあの時流れ込んできたのはあなたの記憶か……」

初めてクロノを見た時。正確にはその名を聞いた時。
俺の意識すら飲み込み消し去ってしまうほどに流れ込んだ記憶^{思い出し}。

一番新しい被害者だから、詳細で強い記憶として残ってるんだろうな。

一瞬そう考えて、慌てて頭の中で首を振る。
それはひじょうにおかしな考えだった。

待て、違う。それは彼が主だった場合だ！
なんで主でもないこの人の記憶が闇の書にある！？

蒐集された相手ならまだ解る。

あれには魔力だけでなく魔力資質や技術をも集める特性がある。
そのさい対象の記憶が紛れ込んでもおかしな話ではない。
だが、クライド・ハラオウンに蒐集された事実はない。

おかしい。

ここにある記録、闇の書にある記録、どっちを見ても
彼の最後はアルカンシエルによる消滅のはずだ。なのに記憶が残っ
てる。

「つつ！」

どうしてなのか。

考えようとすればするほど頭痛がひどくなる。

まるでそれ以上は踏み込むなと警告するかのようじ。

「くそつ！」

いいだろう。

どっちにしる今日はそっちが目的じゃない。従ってやるよ。

苦々しく思いながらも本命は彼のことでない。

いまはまずそちらを優先すべきだとモニターに違う情報を表示する。

それは11年前の事件で艦隊を率いていた指揮官の情報。

表示される名を、俺は思っていた以上にためらいながらも口に出した。

「……………グレアム、おじさん」

ギル・グレアム。時空管理局提督。

かつては艦隊指揮官や執務官長を歴任したが現在は現場からは退き顧問官として勤めている。

双子の使い魔と共に「時空管理局歴戦の勇士」という通り名を持つ伝説級の英雄。

出身は第97管理外世界「地球」のイギリス。

幼き日に行き倒れの局員を助けたのがキツカケで管理局に勤めることになった。

彼のパーソナルな情報まで集めて見ていたが、それらは俺にとって問題ではない。

問題なのはその名と顔を俺がずっと前から知っていることだ。

俺がその名を調べようと思ったのはなんてことはない。

ただ偶然クロノたちが話題にしたのを聞いただけ。

フェイトの保護観察役でありクロノの執務官研修の担当だったと。

同じグレアムという名前に何か言い知れぬ予感を覚えてしまった。

単なる同姓同名だと、何故か俺は思えず、結果そうだった。

今まで俺達の生活の世話をしてくれていたおじさんが偶然管理局の提督で、偶然11年前の闇の書事件に関わっていた。なんてことが、あるわけがない。そんな風に思えるほど俺は人を信用していない。

最初から、なにか裏があるとは思ってた

父の友人だったと名乗った彼と会った時、俺は本当にそうなのかと疑った。

イギリスに住むという彼の名を俺は聞いたことが無かったから。

父さんも母さんも外国に知り合いや友人が多いが主だった人たちの事は

よく聞かされていただけに聞き慣れない名前に一応警戒心を覚えた。とはいえ当時の俺は寿命以外の理由で死ななければいい、としか考えておらず、むしろ利用したいならどうぞといわんばかりにすべてを彼任せにした。

けれど拍子抜けするほど何も起こらず、はやての世話を頼んだ以外は驚くほどグレアムおじさんは俺たちに干渉してこなかった。

今から振り返れば子供ふたりだけの生活を容認するのはとてもおかしく、

周囲の誰もがそれに触れることがなかったのはおじさんの手回しだったのだろう。

「目的は闇の書への復讐かあるいは自らの贖罪か。

どっちにしるやってくれたな、おじさん」

だが、不思議と俺は騙されていた怒りや哀しみを覚えなかった。もとより裏があると、利用したいならすればいいと考えていたこともあるが、おじさんのおかげで生家で過ごせるようになりはやてたちと出会えた。

俺にとってはその事実だけが重要で、恩義こそあれ恨みなどは塵ほども沸き上らない。

だっておじさんがいなければ今ここで誰かのために危ない橋を渡るなどという行為を俺はしていないだろうという自覚がある。

ただ自らの命を出来るだけ長く続けるためだけの日々を送るだけ。

それはもう生きているとは呼べない生き方。

それをもう一度選べるほど今の俺は壊れてはいない。おじさんのおかげで。

だが、それをどうやってする？

思考を続けながら、今度はギル・グレアム周辺の情報を洗い出す。が、さすがに“ここ”からでは難しいのか。隠蔽がきちんとされているのか。

俺が欲しい情報はまったく手に入らない。

やはり何をしようとしているか解らない状態で調べるのは個人じゃ無理か。

となればあちらの思惑を推察する必要がある。

闇の書に対する復讐、として普通に考えるならまず破壊だろう。

だが破壊は転生するだけで無意味。どういつ経緯で今回見つけたか知らないが

毎回見つかるとは限らない以上破壊はあくまで失敗した時の対処法だろう。

となるならやはり一番現実的な対処は封印だな。

それも主と融合している時が一番状態が安定している。狙うならそこだ。

俺は一度それこそ“ありとあらゆる”可能性を模索した。

その中には封印することで一時的に問題を先送りして時間を稼ぐ。というのもあった。

だからこそ、その問題点もよくわかっている。

主と一緒になければ意味がないこと。

どんな封印方法でも確実ではないこと。

外部から解放される危険性の高さ。などから俺はその方法を却下した。

だがそれはあくまであいつらを闇の書から切り離すのが目的の俺と闇の書をこの世から消し去ろうとする者たちでは見方が違う。

それが管理局において高い権力・地位を持つおじさんならば

様々な問題はすべてではないがある程度クリアすることが出来る。

何の確証もない推測ではあるが、そうだった場合、

必要になってくる物はいくつか思い浮かぶ。

その目的とやり方が解れば、そこから逆算して

必要な物を集めるルートを潰していけばいい。

物とその終着点がおおよそ解っているのなら

その流れを追うことはさほど難しいことではない。

なので、おおよそ10分そこらでおじさんの計画のおおよそが見えた。

自分でも何かとんでもない異常な調査スピードだとは思うが、
どうも俺、闇の書の記録をパクったり勝手に閲覧したりを
何度も繰り返した結果、こういうの得意になったのかも。

またしても戦闘には直接役に立たない技術なのが、何とも俺らしい。

で、肝心のおじさんの計画だが。

まずおじさんが偽名で作った口座からの金の流れで何か特殊なパ
ーツや装置を集めていた。

それとは別に4年ほど前、ちょうど俺とおじさんが初めて会う前後
から

彼はその立場と権限を使って不思議な命令を出している。

『生物が住めないほど環境が劣悪な次元世界の調査』である。

その結果提出されたファイルも読みながら、俺は頭の中で
集めていたパーツや装置を組み立て上げ、何が出来る可能性がある
のかを考える。

すると、だ。

面白い組み合わせがひとつ出来たのだ。

凍結魔法に特化したデバイスとメンテナスフリーの極寒地用監視装
置。

そして永久凍土と異常重力が支配する次元世界の調査結果。

それらから考えるなら答えは簡単だ。

主ごと闇の書を凍結封印。それを常に絶対零度で超重力の世界に転
移させる。

監視装置は文字通りそれを監視するためのものだろう。

「うん、なるほど。」

外からどうにかしようというのならわりと良い策。ではあるけどね」

問題点に突っ込めといわれるとかなり突っ込めるが。

一応恩のある相手が必死で考えたであろう計画だ。貶めるのはやめておこう。

それにある程度の問題は承知の上なのだろう。

「となると、まずは完成させないと話にならない。

そのために必要なのは……… ああ、やっぱりあの仮面野郎はおじさんの部下か」

あいつらと遭遇したのは僅かに二度。

だが、その行動の共通点から目的が俺なのは間違いない。

片や俺以外に制御しきれないジュエルシードを故意に暴走させた。

片や俺が決して見捨てないであろう子を巻き込んで誘い出した。

どちらも俺が“何か”をしなければならぬ状況。

害したいと考えるにしている間接的過ぎたのは目的が俺の魔力消費だからか。

それによって死期を早めて俺ないし騎士たちが蒐集に走るしかないと思わせるために。

「やっぱり手紙だけじゃないな、もっと直接的な監視されてたな」

でなければそもそもこの推測が成り立たない。

通りでこっちの考え方や行動パターンが微妙にバレてるわけだ。

本当に、よくもやってくれたよ、おじさん。

けど悪い。あんたの思い通りにはならない。

まあ、もしもの時は利用させてもらっけどね。

『大丈夫ですか？』

一通りの調査と推察を終えた所に気遣うような声があった。リニスだ。

俺が独り言を呟いても何も言わないので沈黙してくれていると勝手に思っていたのだが、そうでもなかったらしい。

『何か辛そうな顔してますよ』

「……………良かったのか悪かったのか解らん結果だったただだよ」

言われて、ばれない程度に意識して表情を整える。

顔を見れる物が何もないのでどんな顔をしているのかが把握できないのが痛い。

昔ながらのモニターならそこに映すことも出来たのだろうか。

最新鋭の空間モニターはそういうことができない。

とはいえリニスの言葉はおそらくその通りだろう。

調査結果は推測通り。恨みも悲しみもない。

でもショックがないかといえればそれは嘘になってしまう。

少なくともあつちは最初から俺を犠牲にする計画を立てていたのだから。

理屈という点で納得してしまっている自分もいるが、言葉で言い表せない衝撃を受けている自分もいる。

どうやら昔はともかく今は思っていた以上に彼を信頼していたらしい。

『……これまでに二番目に身体がないことが悔しいです』

そんな俺を見てリニスは自身に対して憤るような口調でそう愚痴った。

「あつたらどうしてたんだよ？」

あえて一番目が何かは聞かない。

そんなものは聞く必要がないのだ。彼女の場合。

だからというわけではないが、あつた場合の話を少し聞いてみたくなつた。

『そりゃあもう、私の胸の中でとことん甘やかしてやります』

「……………はい？」

返ってきたどこか楽しそうな声の響きと内容に少し固まってしまったが。

『よしよーしって頭を撫でて、ギューって抱きしめて、添い寝してそれで』

その後も続く彼女曰く『甘やかし』の数々を呆然と聞いた。

よもやリニスからそういった類の言葉が出るとは思っていなかったので

俺としては珍しく心底から驚愕してしまった。

「お前、そんなキャラだったのか？」

だから思わずそんな言葉が口から出た。

俺はリニスをどこか口やかましい家庭教師というイメージで見ていた。だがいま彼女が発している声色と内容からはそんなものは欠片も感じない。

「……失敬ですね。私だつていつもガミガミしてませんよ。だいいちガミガミしてたのはあなたが不甲斐ないからであつて、したくてそうしていたわけではないですから」

しかしながらリニスからすればそういうことなのである。ようするに厳しい家庭教師然として部分もあれば、人を徹底的に甘やかしてしまう部分もあるということだ。

「……………ごもつともで」

あの手厳しさはやっぱり俺の出来の悪さからだつたか。そう思うと俺は神妙な様子で彼女の言葉に頷くしかないのであつた。

「で、次はどうするんですか、マスター？」

そうすると何か納得でもしたのか。話を切り替えた。滅多にそう呼ばれないからマスターと呼ばれると少し気恥ずかしいが。

それもまた彼女の気遣いと解つているのであえてその話に乗った。

「一応これで懸念がひとつ消えた。ならあとはやっぱり……………どうやって俺も戦うか、だ」

魔力を消費しないであの歴戦の騎士たちと。そして闇の書の封印を目指すあの仮面の者たちと。

『……最初に聞いた時も思いましたが本気ですか、それ？
正直戦いはフェイトたちで充分なように思えますが』

「足りないくらいだ。」

俺の出した案ではぎりぎり互角に届きそうなレベルなんだぞ。

仮面野郎の相手をする余裕はない」

そのうえ闇の書の完成まではあの仮面の戦士は騎士たち側につくのが予想される。

彼らとしても完成してくれないと困るのだ。その状態が封印するのに一番都合が良かったために。

はやてと騎士達だけならば何とか互角まで持つていけるがそこにその戦力がプラスされればもはや勝ち目はない。

「何かないかなあ」

呟きながら、局のデータベースにあるアームドデバイスを片っ端から見ていく。

しかし、やはりというべき程に剣や槍が基本でピンと来るものがない。

「魔力を全部カートリッジ頼りにしてもいろいろ問題があるんだよね。」

それで攻撃も防御も移動も全部賄うわけだからなあ……」

カートリッジに詰められた魔力を攻撃・防御・移動に使う。

それ自体には何の問題はない。問題なのは戦闘中それを維持し続けることにある。

すずかの時にやった手法は実の所かなりの二度手間だ。

カートリッジを取り出し自身にブーストさせた上で何に使うかを選択して使用する。

デバイスならロードするだけで終わっている行為に手間がかかりすぎているのだ。

そして何より根本的な問題がもうひとつ。

『はつきり言つて？手数”が足りませんね。

私が計算するに最低でも8個ぐらいデバイスが欲しいです』

「現実的じゃないな、その数字」

仮にカートリッジ搭載型デバイスですべてを賄う場合。

ひとつだけでは処理が追いつかないのだ。

攻撃にも、防御にも、移動するにもカートリッジの魔力を使うなら、戦法にもよるが実質戦闘中はずっとロードし続けることになるだろう。

そうして得た魔力をジャケットの維持や飛行の維持に使い続け、

こちらから仕掛ける攻撃ならまだしも相手の攻撃を咄嗟に受ける防御までもを

それに対処するとなると明らかにひとつのデバイスの処理能力を超えている。

いつもRHやBDがしていることではないかと思うかもしれないが、それは魔力源が魔導師本人か魔導師が外部から持ってきた場合のみだ。

あくまでデバイスは補助。魔導師の魔法をより洗練したモノに整える装置。

デバイスそのものが魔力源となって使い手の意思にそって魔法を行使していく。

というのは完全にデバイスの役目を逸脱しすぎる要求だった。

「役割ごとに分けても連携が取れなきゃ意味がないし、それだと結局複数のデバイスを持つことになる。それも大量にだ」
リニスがいつている8個というのはかなり無理をすれば、という数字だ。
手に所持する武器型ないし杖型であることが多いデバイスをそれだけ持つというのはとてもじゃないが騎士達の相手をするのに邪魔としかいいようがない。

「いつそのこと攻撃だけ考えて、俺スナイパーでもやるのかな？」
文字通りカートリッジを弾丸にして。遠距離狙撃。バーンとね。

『無理ですね。』

あなたの性格上、後方で援護するだけなんて出来るわけがありません。』

きつぱりとした断言に反論さえできない。

うん、そうだね。俺そういう奴だよ。

そもそも遠距離狙撃じゃ、あいつらの防御を撃ちぬけないしな。

『どうせなら防御だけにしてください。』

そうすればあなたが無茶でもある程度どうにかなるでしょう。』

「防御だけ、ねえ……それでなのはたちの盾にでもなれってか……ん？」

あ、そうか。

デバイスに任せるのを防御だけにすればあるいはなんとか、なるか？

「いや、待てそれでもまだやらせる事が多すぎて処理が………ってことは減らせば行けるのか？」

余分な汎用性を持たせるから処理能力を超えるんだ。

なら、いつそ割り切って役割を簡素化させてしまえば。

「そっか、そうだよ。なんでそんな単純なことに気付かなかったんだ！」

ひとつにまとめると処理能力を超える。

役割ごとに分けると数が増えすぎてしまう。

なら、ある一つの単純な役割だけを任せてそれ以外を自分がすればいい。

防御という一番オートでなければならぬモノを完全に任せ、

任意性が必要になってくる攻撃と移動の制御を俺が行う。

そのうえでそれぞれの汎用性を抑えれば必要なデバイスの数は減らすことができる。

ん、待てよ。

そうなるとデバイスの形状は必然的にあなるから、

それならいつそ“アレ”を試してみるのもいい。ちよつど必要なわけだし。

「おっと、なんだいまの？」

流しで見ていたモニターに何か気になるモノが映った。

それは珍しい形のアームドデバイスで何よりいま俺が一番欲しい形をしていた。

相手を殴る武装である点とか。腕に装着するタイプだとか。カートリッジ装填数さえ上げればこのプランで俺でも充分攻撃に使えるものになる。

足元の自作のローラーはさすがに陸戦じゃないとだめだが、その点はなんとか空戦が出来るもの。最悪浮いて移動できればいいものにすれば。

「なんかイメージわいてきたぞ。

よしっ、そうと決まれば必要なパーツを艦長さん、は怖いからクロノの名前で取り寄せて、っと」

端末操作でちよちよいのちよいつてな感じで。バレたら、まあその時はその時で。

『……あなたって普段はよく考えるクセに時々後先考えないで行動しますよね』

「そうか？」

そんなつもりはないのだが？

『そうです！ まったく、こんな主人だと身体がいくつつあっても足りませんよ。』

私もあなた達みたいに優しく素直な子が良かったです！』

ああ、それはなんとも耳が痛いね。

あのふたりと比べられると自分がすごく汚く見えてくるからなあ。だから比べる対象としてはすごく間違っている気もするが。

「そいつは悪かったな、でも一度手に入れたからにはもう手放す気はないぞ」

これでも結構愛着あるしリニスみたいな言い方してくれる奴、意外にいないんだよな。

とか思っていたら失礼な言葉を返された。

『意外ですね、コウキに独占欲とかあったんですね』

「失敬な、人並みにはある……多分」

うん、多分。

『どっちにしろ普通威張る事じゃないですよ。』

まったく、そういうからには私が壊れるまで使ってくださいよ』

「ああ、ボロボロになるまでこき使ってやるからしっかり仕えてもらおうか」

『はいはい。』

この身で出来ることなら粉骨碎身の精神でやらせてもらいますよ、マスター』

その時かわしたこの何気ない冗談交じりの会話が、

のちに現実になるなんて、俺達は夢にも思っていなかった

どこか投げやりな返しにポーズとしてムツとしてみたがすぐに笑ってしまった。

リニスと話していると不思議と無駄な力みが抜けている。

抜けすぎなような気もするがこいつなりの気遣いだと受け取っている。

考えてみれば艦長さんとは違った意味で容赦ないからなこいつ。

もうちょっとだけの付き合いかもしれない。けどその時まで俺の相棒としていてもらう。

そんなことを今更決意した瞬間だった。

そしてこの日から、俺のもうひとりの相棒を作り出す作業が始まった

悪巧みで悪巧み（後書き）

計画を利用されちゃうグレாம்提督……ちゃんと“は”プロローグ以来

登場してもいないのにもう計画が破綻しております（笑）

そしてやっと登場完全オリジナルデバイス計画！

バルディッシュ・リニスは原作の人物とデバイスをくっつけた存在なのでね。

半分以上原作といっても過言ではない。

とはいっても、腕の部分は「あれか？」と思われるものになっているから

これも果たしてオリジナルと言い切れるものかは難しいです。

そして『祝！』

PSP用ゲームなのはA・S GODにリニスとプレシア参戦決定だあつー！！

予感（前書き）

総合評価が700ポイントを超えた！ ありがとう！！

そして、順調に執筆は遅れている………すみません（謝）

予感

2月28日 AM 09:25

海鳴市 中丘町 日野家

「……あの、すいませんでしたコウキちゃん……」

病院からようやく帰ってきた日野家の面々は家につくと第一にそれを口にした。

他の者たちもどこか申し訳なさそうに彼に視線を向けている。

「それは、どっちについて謝ってるんだ？」

それに僅かに怒気を含ませた口調で問い返すコウキ。その顔もまた不機嫌さを隠そうとはしていなかった。

「も、もちろん両方です！ ね、みんな！」

迫力に押される形でうんうんと皆同じように首を縦に振った。

「……よろしい」

そついいながらも声は重く響いて、皆を怯えさせた。

無論、彼がそうなっているのには理由がある。

本来26日に担ぎ込まれた彼はその後一晩様子を見るだけのはずだった。

ところが、だ。蒐集に走ろうとした騎士達を止めるために病院を抜け出した彼は

その事実をよりもよつて主治医である石田医師に知られてしまう。

「まさか、怒つた石田先生があんなに怖かったなんて……」

「うん、あたしもあんな先生初めて見た」

騎士達の説得を終えて、何とか誰にも気付かれずに病室に戻った彼らが

最初に見たのはそこで仁王立ちしていた彼女の姿だった。

そこから始まった医師の長い説教にさすがのコウキも参ってしまい、結局入院が一晩伸びることになってしまったのだった。

「そうかよ、俺はあれが二度目だ……前は、もっと怖かった……」

その時のことを思い出したのか体を震わせながらソファに座り込む。

(うわぁ、コウキがめっちゃ凹んでる)

(あれでコウキは恩を感じている者に対して強く出れない所があるからな)

（我らに責任のあることだ。何とか気持ちを上げさせなくては！）
思念通話によってそう結論出した彼女達は話題を強引に変えた。
変えざるをえない話題によって。

「そ、そやコウ兄、まずは呪いの対策せな。

昨日は病院やったからそういう話もできへんかったし……」

「そうですね。まずはそちらの対策を優先させるべきかと」

「……そうだな、色々お前らにも聞きたいこともあるしな」

気持ち、表情にいつもの活力が戻ったものになって内心ほっとする
騎士達。

だが、コウキはそれに釘を刺すように鋭い視線を向ける。

「けどその前にきちんとしておくことがある。我が家伝統の、ル
ールについて」

「……それってもしかしてあの、独特の叱り方のやつ？」

はやてが心底嫌そうに口にすると彼は頷いた。

ただその表情は口ぶりとは裏腹にどこか照れが入っていた。

「悪い事して口で言ってやめない奴には平手打ち」

「……あ、それって」

止めに入った言葉を聴かずにいた騎士達に彼がした行為だった。

「その上で同じ事をまたしたら、今度は鉄拳制裁だ」

「うわっ、意外に過激!？」

「いんや、シャマル。これの一番の怖いのは三回目や」

「三回目?」

そう繰り返したシャマルたちに不適な笑みを向けて彼は言葉を続ける。

「さらに同じ過ちを三度繰り返した場合……」

「場合?」

その神妙な表情と堅苦しい声色に思わず唾を飲む騎士達。

コウキはそれに反応せず、淡々とそれを告げた。

「……………無視だ。」

その後いつさいそいつには関わらず喋らず、徹底的に無視する

「……………?」

さーっと血の気が引く音が聞こえた。

それぐらいに騎士達は顔を青くしていた。

各々、想像した光景に差異はあれど想像だけで死にそうになっていた。

「な、なんて恐ろしい罰……主コウキにそんな事されたらっ……………」

「む、無理です！ そんなのイヤアツ！」

「そんなことになるならずつとアイス抜きの方がいい！」

「……………」

絶望し絶叫し恐怖し絶句する騎士達を見てコウキは満足そうに頷いた。

はやては若干呆れ顔ながら呟くように感想を述べた。

「何度聞いても恐ろしいなあ、それ」

「嫌なものじゃないと抑止効果がないだろうが…………」

そやね、と一応納得しつつもはやては内心でクスリと笑う。

（そのルールが適用されるんはコウ兄が大切にしたい人、助けたい人だけ。

あとでこっそり教えとかな、あの子ら怯えるだけやるなあ…………）

まだ自らが思い浮かべた想像から立ち直れないのか。

騎士達は青い顔のまま塞ぎ込んでいた。はやてはそれを見てさらに笑った。

それはまだ日野家が平和だった頃の思い出

12月7日 PM03:27

無人世界 隠れ拠点

「……………なんやろ、あたし予知夢でも見る才能あったかな？」

ここ数日の無茶な蒐集の繰り返しから来る疲れから。
拠点で仮眠をとっていたはやては見た夢の内容をどうにも無視でき
なかった。

「どうした、はやて」

それを心配そうに見ているのはザフィーラだ。
能力的な相性からはやてとコンビを組み行動を共にしている。
現在、それ以外のメンバーは蒐集活動に出ていた。

「うーん、なんとなく、なんやけど……………そろそろコウ兄出てくる
かなあって」

「……………それはなぜ？」

彼とていつか出てくるだろうとは思っていたが
突然夢から覚めたはやてが言い出すのは少し不自然だった。

「いや、女の勘みたいなものやから根拠はないんやけど……鉄拳制裁されそう」

「ああ……なるほど」

それで伝わってしまうのもどうかとはやては思ったが、それだけで解ってしまうほどコウキがどういう人間かは彼も知っている。

「俺から一応、ヴィータたちに知らせておこう。」

はやてはまだ休んでいる、魔力がまだ回復しきっていないぞ」

(なんやろな、あたしの扱い方も理解されてきとるなあ)

あえて疲れているから、ではなく魔力が回復してないから。

といわれるとはやても休むしかない。遠回しに戦える状態ではないといわれると

彼女とて無理に動くことはできない。自身の経験の少なさを理解しているだけに。

「わかった。もうちょっと横になつとる。見張り、頼んでええか？」

「無論だ。何かあれば起こす。ゆっくり休め……」

そういつてザフィーラが小屋から出たのを見送って、はやては横になつた。

だがすぐさま眠りには入らず彼女は頭の中で“今後”を考え始めていた。

(……でもそうなるそこっちもそろそろ対コウ兄用の作戦を考えておかなあかん。

きつとコウ兄のことや、なのはちゃんたちに適当なことって誤魔化して戦力にしとる。

みんなの戦闘スタイルはコウ兄にはバレバレやからと今頃特訓やる。

となるとシグナムにはフェイトちゃん、ヴィータにはなのはちゃん、

ザフィーラにはアルフさんとユーノくんってところやね。

で、残った戦闘向きじゃないシャマルと広域型のあたしにクロノくんたち管理局、か)

戦略の立て方についていえばコウキははやての師匠のような立場になる。

無論、明確に教えられていたわけではなく彼の様々な局面での考え方を

粒さに観察していた結果、身についたものではあるのだが。

それゆえに師の戦略を読むことは弟子にとって造作もないことになっていた。

(うまくやれば拮抗される……そこにコウ兄が加わるとまずい。

どうやって戦場に出てくるかは知らんけど、魔力ダメージを与えられないってのはきついしな)

非殺傷設定の魔法は相手の魔力を削るので本来なら命に別状はないが、その魔力が寿命そのものになっているコウキの場合はそれこそ命取り。

逆に非殺傷をかけずに手加減して攻撃しなければならぬのだ。

(最悪、動けなくなるほどの大怪我してもらわなあかんかな。

……………ん、あれ、そこまでせんでもええかも？)

その最悪を自分でする想像に嫌悪すら感じていたが、ふと別の可能性が頭をよぎる。いやむしろそのやり方こそが彼女の真骨頂なのだ。

「そうやった、ふふ……コウ兄、絶対自分の弱点忘れとる。

さて、そうと決まれば考えておくかな、コウ兄をいじめる方法……ふふふふ」

その光景を思い浮かべて笑い声をもらすはやて。

どこかそれは悪巧みをしている魔女染みていて恐ろしいものがあった。

「……………」

小屋の前で見張りで立っていたザフィーラは渋い顔で前だけ見えていた。

「……………俺は、何も聞いていない。断じて何も聞いていない……………」

誰への言い訳か。そんな言葉を繰り返すだけだった。

12月11日 PM02:09

数人の女性が険しい表情でその一軒家を見上げている。

みな一様に緊張した面持ちで手にはがっしりとした杖と斧を持ち、大柄の女性がすべての五感をフル動員させて周囲を強く警戒する。そして一歩、一歩、慎重に玄関へと近づいていく。

「……………お前ら、どこの戦場に行く気だそれは？」

そんな彼女たちの背後でその家の家主は呆れた視線を送る。

「あはは、警戒しすぎるにこしたことはないですからいいのでは？」

隣でフォローした妙齢の女性はしかし、苦笑いを浮かべていた。

なのはとフェイトの魔力の回復。

そしてデバイスたちの修理と強化は終わった。

中々騎士達が捜査網に引っかからないこともあって

彼らはそれからの日々を学校に通いながらリハビリと訓練に使っていた。

カートリッジシステムを搭載した新デバイスの扱いや、

騎士達の戦い方をコウキから教わりながら初めて迎えた休日。

無人となっている日野邸のちょっとした手入れと

コウキたちの着替えなどを取りに行くために彼らはそこに集まった。

以前、リンディが畏があるかも、といていた言葉がまだ尾を引いているのか。

彼女達の警戒っぷりはすさまじいものがあつたが、コウキとしては微妙な心境である。

畏の可能性は無視できないが住み慣れた我が家にそこまで警戒されて入っていくのを見るのはあまりいい気分がしないのも事実であつた。

「なのは、そつちはどう？」

「うん、大丈夫みたい。ね、レイジングハート」

『はい、問題ありません』

結局のところ。

最初に家に入ったなのはたちが家捜しするように調べた結果。畏らしきものは一切なく何かの魔法が仕掛けられている痕跡もない。

「良かった、というべきかな」

「はい、これで気兼ねなくお掃除ができます。

コウキはキッチン周りを、私達はそれぞれ分担してやっておきます」

そうと解るとプレシアはコウキ以外を先導するように日野邸のあちこちに分散していった。

今回、日野家にやってきたのはコウキとプレシアにフェイトとなのは、アルフの五名。

アースラ組は捜査。ユーノは闇の書に関してのさらなる調査のために

管理局のデータベース『無限書庫』で調べ物をする事になった。
る。

コウキは自分とプレシアだけでいいと言ったのだが、
なのはたちが一応罫の可能性を訴えて、かなり強引についてきてい
たのだ。

無論その裏に別の想いがあることなど当人にはかなりバレバレなの
だが。

(どうしろってんだよ、まったく……)

胸中だけで溜息を吐きながら、放置されていたキッチン周りのゴミ
を片付ける。

騎士達の蒐集が発覚した後、説得に耳を傾けずに彼女達は出て行っ
てしまった。

それをすぐさま追いかける形で飛び出したコウキとプレシア。

当初家の留守ははやてがしていると思っていたが実際は騎士達に協
力していた。

ゴミの状態や冷蔵庫に残っている物を合わせて考えれば、
はやてが動き出したのも直後だったことが想像できる。

(……似なくていい所ばかり似やがって……)

身内を騙すほどの策略と演技に、一度決めた時の行動の早さ。

そして相手をよく知っていればいるほど裏をかいてくる戦略の立て
方。

(やっぱりもつと、俺以外の奴とも触れ合っておくべきだったんだ。
誕生日の件といい、そんな当たり前の事も気付けなかったなんて

……)

コミュニケーションをとるのに精一杯でそれ以外の事に気が回らなかったのだ。

無論、いろいろあつたばかりの当時の彼にそれ以上を期待するのも酷な話なのだが。

「……あの、コウキ。いいですか？」

「ん、あ、フェイトか。どうした？」

自らの未熟さに溜息さえ出ない様子の彼に少女は少しだけ気まずそうに話しかけた。

よく見れば隠し切れていないある物を背中に隠しながら。

「いえ、丁度いい機会だと思って、これを返そうかと……」

そういつて隠していた物を差し出した。

それはバスケット。以前、裁判のために本局へ行くフェイトにコウキが用意したもの。

プレシアの生存をさりげなくアピールする目的の物だったが、あの時の言葉通りにフェイトはそれを返しに来たのだった。

「本当はこつちに来たらすぐに返す予定だったんですけど……」

「あはは、まあこんなことになっちまったからな。お前のせいじゃないよ、ありがとな」

きちんと返しに来たことに礼を口にしながら受け取って、傍らに置いた。

頭の中でこれに日にちが危ない食材でも入れてマンションに戻って、

それで何かを作って、こちらもある時の約束を果たさなきゃな、と
考えながらも

同時に「こんなこと」と自ら言った言葉の内容を深く考えていた。

「……………あのさ、フェイト。はやてのこと、なんだけどさ」

「……………はい」

神妙な顔つきで問題になっている少女の名前を出されたので
フェイトも同じく神妙な顔で、彼の次の言葉を待った。

「こんなことをいうのは凶々しいというかあまりにも身勝手なんだ
けど。」

あいつが戻ってきたら、また友達になってやってくれないか？」

「え？」

予想外だったのか。

フェイトは驚くというより不思議そうな顔で反応した。

だがコウキはそれに気付かず早口でまくしたてるように続ける。

「俺が言えた事じゃないんだけど、あいつ意外に友達いないんだ。

ああいう足だから遠慮してるのもあって家からあんまり出なかつ
たし。」

最近ようやくお前たちと仲良くなってきた所だったのに、こんな
ことになって、だからっ！」

「コウキ！ 私、はやての友達をやめたなんて一言もいってないよ」

「……………え？」

遮るように名を呼んだフェイトの言葉に今度は彼が困惑する番だった。

「騙されて、襲われたけど命をどうにかしようとしてたわけじゃない。

それにはやて言うてました。友達やめてもらってもいい、って。それって本当はすごくイヤだったってことですよ？」

「っ！」

自分達を襲うのも。友達をやめるのも。

本当はイヤだけど、でもそうするしかない。

そういつた感情をフェイトは誰よりも理解していた。

違いがあるとするならそれが誰かの命令によるものか自らの意思によるものか。

前者だったフェイトは言い方は悪いが責任の一部を他者に向けられるが

後者であるはやてはその行動の責任を自らですべて背負わなければならない。

「選んだ方法は褒められたものじゃないけれど『自分で選んだ』って所だけは

私は羨ましいと思う……だから、友達として自慢です」

フェイトは誇らしげにはやてが友達でよかったといった。

そしてそれはきつとなのはも同じだ。とも続けた。

何なら、と。今すぐ確認しに行こうとした少女を止めて、コウキは苦笑する。

「そう、だな。」

「やっぱりだめだな、俺。はやて以上に友達いないから付き合い方知らないのかも……お前の方がうまそうだ」

「ふふ、そうですね。私の方が少し多いですから」

と、照れくさそうにしながらも胸を張って自慢げに語った。エッヘン、と。

「言ったな、こいつ。」

「ああ、ちくしょう。もうお前に追い抜かれるなんて」

(艦長さんのいう通り、同じ所でグルグルしてるのは俺だけか)

「……………やっぱりはやてのこと心配？」

何も進めていない自分の情けなさから思わず溜息を吐いたコウキに、フェイトはその意味をなんとなくが感じ取った。

「一瞬、どう答えるかを悩んだような顔になったが本当に一瞬だった。」

「心配は、今はしてないな」

「今は？」

「ああ、あいつは俺みたいに危ない橋は渡らないしヴィータたちがついている。」

心配する理由が“今は”ない……問題は事件が終わった後だ」

その先を考える彼の言葉にああ、と納得する経験者。

だが、同時に自分との違いも理解して複雑な表情を見せる。
様々な事情から実質無罪の名目だけの保護観察処分フェイトに比
べ、

自らの意志で罪に手を染めた彼女たちとは当然、罰の重さは違う。
目的がコウキの延命であり死者を一切出していないものの、
出ている被害者の数を考えれば、情状酌量としては弱かった。

「そっか、はやてたちは捕まった後の方が大変なんだね……」

「無罪放免とは絶対にいかないだろうな……」

自分が生きていれば別の方法もあるのだが。

考えてもしようがないことをつい考えて、首を振った。

彼女たちが捕まった時というのはもうすべてが終わった時。
そこに命ある自分がいるとはどうしても彼は思えなかった。

「まったく皮肉な話だ。あいつが俺に『どれだけ生きたか』よりも
『どう生きたか』が大切なんじゃないか、って思わせたくせに…

…」

家の中に自分を呼ぶ声がある。

呼べば返ってくる声がある。

笑っている顔がある。

笑顔にしてくれる顔がある。

その意味を忘れたまま、ただ生きていた。

そんな彼にそれを思い出させた少女は今、彼をただ生かすために行
動している。

「コウキ、ごはんできたよお」

(そんな言葉にどれだけ救われたかなんて知りもしないで……)

その決断をさせたのは自分のせいだという自覚はあるがそれでもはやてがそれを選んだことには怒りがある。

相手の気持ちを考えていない。という点ではどっちもどっちなのだが。

「コウキ、一緒に頑張ってはやてたちを捕まえよう。罪をこれ以上重ねないうちに」

どこか寂しさを感じる表情にフェイトは励ますようにそういった。コウキはそうだな、と頷くとお礼のように少女の頭を撫でたのだった。

「……………」

それを複雑な顔で見守る視線にはいつさい気付くことなく。

12月11日 PM02:22

海鳴市 中丘町 日野家

僅かに埃がたまった家の中を掃除していた彼女が
それを見てしまったのは偶然としかいいようがなかった。

「……なのは、さん？」

常に元気いっぱいのその少女が疲れたような溜息を吐く瞬間など。

「え、プレシアさん。なんですか？」

しかし呼びかけた声に気付くとなのはいつもの笑顔を見せた。
それにプレシアは思わず頭を抱えたくなくなってしまったのを何とか我慢する。

（はやてさんもそうだったけど、この子も変な所でコウキの影響受け過ぎよ）

周囲へ心配かけまいと弱つていても強がる姿はどこか似ていた。
そんな彼らを『子ども扱い』することの必要性を実感しているプレシアは

膝を折って視線を合わせながら、どうかしたの、と尋ねた。

すぐに、何でもないよ、と答えたのはだったが視線を合わせた彼女は

まったくそれをずらさないまま、じーっとなのはを見詰めていた。その柔らかな微笑みは穏やかなものではあるのだが、どこかそれになのは母・桃子を感じてしまい結局白状することになった。

明確な役割分担はしなかったものの、一階はコウキとフェイトとアルフ。

二階はなのはとプレシアが掃除することになったのでその告白を聞いたのはプレシアとRHだけだった。

「わたしはどうして、あの人の役に立てないんだろう」

誰の、などと聞く必要などない。

けれどプレシアはその告白に思わず息を呑んだ。

それほどまでに少女がこぼした言葉は負の感情にまみれていた。受け答えを間違えればそれが致命傷になりかねないほどの。

だから、彼女はまずポツポツと語る少女の声を聞くことにした。

「昔、私はコウキさんが苦しんでいるのを気付いてあげられなかった。それどころか助けてもらってばかりで、悔しかった。悲しかった」

それはプレシアがジュエルシード事件の終盤で聞いた話。

そのもつと具体的で深い内容。その後の少女の葛藤の日々。結果少女は心を定めた。

今度は絶対に誰の涙も悲しみも見過ごさない

また会えたなら今度はわたしが力になる

そんな決意と誓いを立てて。けれど。

「私はそれで何かしたつもりになってたんです。

また会えるかどうかも解らないコウキさんをただ待って、

自分が子供なのを言い訳にして、何もしてなかった……」

そして結局少女は同じ痛みを受けることになる。

事件の中で知った彼が受けていた仕打ち。囚われた彼。何もできない自分。

そしていつものように彼に助けられ、友達になりたかった少女と友達になれた。

何にも力になれなかった。

何にも昔と変わっていなかった。

ただ同じ事を繰り返したただけだった。

ひどい扱いを受けて傷ついていた心を癒したのは自分ではなくはやて。

いま苦しんでいる彼を励ましたのも自分ではなくフェイト。

そして彼が一番頼りにしている女性もまたなのではない。

じゃ、わたしは？

わたしには何ができるの？

「一緒にいられなかったなんて言い訳にもならない！

たとえ一緒にでもわたしじゃみんなみないなできない！

なのにつ、わたし勝手に嫉妬してる！

何にもしてなかったのに、何にも出来なかったのに、出来ないくせにつ！」

漏れ出した感情は堰を切ったように溢れ出ていく。

それはこの少女が何年もため込んでいたもの。

誰にも教えてない。誰にも言えなかった悩みであり苦しみ。

何かしてあげたい

そんな気持ちだけが先走って、行動が追い付かない。

ゆえに少女は自らを役立たずと罵る。

プレシアはそれに内心では首を振った。

ジュエルシード事件だけでも彼女が果たした役割は大きい。

そもそも彼はフェイト本人が気になって事件に首を突っ込んだ。

だが、その過程の中でそれ以上にプレシアの方が危ないと判断した
彼が

彼女の対処だけに動けたのは自分以上にフェイトを気にかけていた
少女がいたから。

なのはなら任せられる

そう決めたのは彼で、彼がそう判断したのはそれだけの信頼がある
からだ。

何より事件終盤、彼の叱責に説得力を持たせたのはなのはが自分の
話をした事に一因がある。

（あの時のあなたの言葉と顔が、何より雄弁に私の間違いを指摘し

てくれたから、

私は“壊れる”ことが出来た……だから自分を取り戻せた)

だがそういったことを口にするのはできなかった。

何故なら今それをして納得するのは表面的だけだろうという確信がある。

なのはは出来たことを知りたいたいのではない。自分が納得できる形で彼の役に立ちたいのだ。

プレシアがそれを理解できたのは彼女が出来なかった側の人間だから。

アリシアのためにと頑張っていた事は死という最悪の形で裏切られ、取り戻そうと必死に違法研究にまで手を出したが、

それさえも娘を傷つける行為とあの少年とこの少女が教えたのだ。

立場も違う。失ったもの。傷ついたものも違う。けれど。

大切な人に何かしてあげたいのに何もできない

その点だけがおそろしいほどまでに酷似していた。

あるいはだからこそなのははそれを彼女に打ち明けたのかもしれない。

「……………なのはさんはいい子ね、ホント」

「え？」

何を口にすればいいかプレシアは悩みながらも少女の頭を撫でた。

この歳でこれだけ誰かを想って、言い訳や妥協で自分を許さない強^腕さ。
フェイトとは違った意味でどことなく自分と似てる面が見えてしま
う。

だからこそ、それをこの少女に与えた少年に怒りが沸き上る。

「だっていうのに本当にひどい人ね、コウキは」

「え？」

二度目の疑問の声は色が微妙に違った。

最初のは突然撫でられた驚きと困惑が混ざったものだったが、
二度目のは僅かにプレシアに怯んでいた。

本人は気付いていないが庭園時にも勝るとも劣らない怒気をまとっ
た顔。

そのくせ撫でる手先は変わらず優しいためになのはは怯みながら困
惑するだけ。

「こんな可愛くていい子にそんな想いまでさせといて、何年も放っ
ておくんて！」

「あ、いえ、その……プレシアさん？」

自分に代わってヒートアップした彼女の姿に逆に冷静になってしま
うのは。

親友からは突撃ロケットなどと言われるのはだが、
突っ走っていない状態ではわりと彼女は落ち着いた子である。

「なのはさん、こうなったら彼に絶対責任取らせましょ！」

そう考えるとなのはとプレシアは確かに似た所がある。
走り出すとなかなか止まらない。

「せ、責任!？」

「苦しい想いをさせたんだから、幸せにしてもらわないと！」

若干考え方が飛躍しているのはプレシアだけだろうが。
今もまた自分が思わず口走った言葉に自分で納得して頷き続ける。

「そうよ、絶対逃がさない……これだけ人の心を奪っておいて逃げるなんて許すものですか！」

「プレシア、さん？」

言葉に宿る熱の意味が僅かに変わったのを感じ取ってなのはは首をかしげた。

それに気付かずプレシアはがっしりと少女の両手をとって握った。

「なのはさん、役に立つとか立たないとかはとりあえず後よ！」

いまはコウキにどう責任を取らせるかを考えるべきよ！

やっぱりここは一生面倒みてもらわないと」

「え、えええ!？」

さりげなく自分の悩みを横に置かれ突拍子もない事をいわれてしま
う。

(な、なんか変なことになっちゃった!?)

混乱する頭でどうやってプレシアを落ち着かせようかと考えるのは。

その脳裏にはもうさっきまでの悩みはまったく浮かんでいなかった。

(口でいってもなのはさんにはあんまり意味がない。

自分で納得できなきゃ結局解決できないだろうから)

プレシアの発言は半ば以上わざとだった。

気休めの言葉では意味がなく、自分で解決するしかないために。

彼女は“今は”それを考えなくてもいいようにするために。

(ねえ、コウキ。あなた知ってたでしょう?)

なのにそれでも自分が死ぬことを選ぶの?

傷になるなんてものじゃない。壊れてしまうわよ?)

自分の時のような戻るためのものではなく言葉通りの意味で。

(だったらあなたは本当に……本当にひどい人よ……)

そう胸で呟いて、彼女はなのはを思いっきり抱きしめた。

少女の未来を想ってか。それとも自らが彼を失うことへの恐怖からか。

どっちなのかあるいは両方なのか、自分でさえよくわからないまま。

予感（後書き）

プレシアが誤魔化したなのは悩みは、ぶっちゃけると本編中では解決しない。

彼女自身が納得できる形で解決できるのはまだまだまだ先の話なのです。

追記

はやてが言っている弱点は以前リニスとアインス管制人格が言った「弱み」とはまったく別物です。

覚悟と再戦（前書き）

話をどこで切るか、いつも悩みます。

覚悟と再戦

12月12日 PM03:43

管理局本局 一般通路

「……そっか、父様からだいたいの話は聞いてたけど、
そんなに意外なことになってたなんてね」

その日、進まない捜査にもっと人手を借りられないかと
直接交渉に来た僕はその帰り道、師匠の片方と偶然出会った。
偶然、とはいつてもつい先日無限書庫での調査の件で会っていたので
僕も彼女も久し振りという感想はなかったのだが。

「意外、か……そうだな、意外といえば意外か」

予想通りとはいえ人手を借りられなかったこともあってか。
僕は愚痴るように事件について彼女と話をしていた。
オフレコの話とはいえグレーム提督なら知っているだろうから、
その使い魔たる彼女“達”にまであえて隠す必要などない。

「過去には闇の書の危険性を知っていたために

主が管理局に助けを求めて来た例がなかったわけではないが……」

「それは“自分を助けてくれ”っていう話だった。

でも、今回はもう一人の主と騎士たちを止めるため。

なんか、いつもと違うことが微妙に多すぎよね、今回」

そういつて僕の横で一緒に歩きながら首をひねっているのはリーゼアリア。

猫を素体とした双子の使い魔の一人で魔法戦における僕の師匠だ。

片方といったのは双子の片割れのリーゼロッテが僕の近接戦闘の師匠だからだ。

正直、会ったのがそっちじゃなくて良かったと思っている。

アリアは素行がよくて落ち着いているので私的な会話さえしなければ普通だ。

ロッテは僕に会うと激しいスキンシップをとってくるので精神的に疲れる。

とはいえ、だ。

「主がふたり選ばれ、片方は初の男。

蒐集を望まず、けれど騎士達は主の延命のために蒐集を始めて、

それを止めるためだけに残りの主が局と協力、か」

口に出すと改めてこれまでの闇の書事件との違いが解る。

これ以外にも騎士達が蒐集対象に対してかなり気を使った倒し方をしていたり。

事件発生から一月半が経過しても死者がゼロというのは奇跡的な数字だ。

でも僕はそれをアリアみたいに『意外』という印象を持てなかった。

「確かに意外なんだが、その男の主と接しているとそいつ自身がい
ろいろ滅茶苦茶で、

他の意外さがどうにも薄く見えるんだよな」

「へえ、どんな子なの？」

当然の流れとして口にされた疑問に、僕は答えに困った。

あの男がどんな奴かと聞かれたものの、どう答えていいものかすこ
く悩む。

「言葉にするのは難しいな。かなり話もしたし一緒に戦ったりもし
たけど、

底が見えないというか本当に底があるのか疑わしいというか……」

どうにも“こういう奴だ”といえる適当な表現が見つからない。
腹黒い策略家のようで、何も考えていなかったり。

勝敗に拘らないタイプなのに妙なことに負けず嫌いを発揮する。

「珍しいね。クロノがそこまで解らない人物っていうのも」

「僕だって相手が誰でもすぐに本質を見抜けるような便利な目は持
ってないよ」

コウキにはありそうな気がするが。

とはいえ、それでも僕は執務官として多くの人と接してきた。

人を見る目は誰よりもある、とまでは言わないがそこそこあるつも
りだ。

だけれどもコウキについては何故かよくわからない。

彼が特別嘘をついているわけでも演技をしているわけでもないとい
うのに。

隠し事はまだあるのだろうが彼の言葉、彼の経歴、接した印象。どれも別段矛盾やおかしな点はないというのに僕はそれに違和感を覚えている。

「……聞き流してくれるとありがたいんだが、どうにもね。物語に出てくる登場人物の設定を見させられたような。そんな感じがしてどことなく嘘っぽく見えてしまうんだ……」

あいつ自身がすべてに本気だということは解っているのに。

「作られたキャラクターみたいだから、逆に解らない。か。クロノも面白い表現を使うようになったものね」

お姉さんは嬉しいぞお、などと頭を撫でられそうになるのを避ける。

「よしてくれ、アリア」

自分がまだ子供なのは理解しているし赤ん坊の頃から僕を知っている彼女達からすると

余計にそう思えるのも解ってはいるのだが、リーゼ姉妹に子ども扱いされるのは

それゆえに非常に照れくさいやら抵抗できないゆえの気恥ずかしさがあるのが厄介だ。

「照れない、照れない」

「……はあ、まあいい。」

それよりやっぱりリーゼたちがこっちに来るのは難しいか？

とはいっても僕がどういってもしても接し方が変わるわけではない

ので

その点はだいぶ前から諦めているので、真面目な仕事をしよう。もともとコウキの話をするつもりではなかったのだ。

「うーん、一応調整して時間作れないかと思ったけど、難しいわね。

出来ても数時間だから、無限書庫の調査を手伝うのが限界ね」

「そうか…」

アリアもロツテもかつてはグラム提督と共に最前線で活躍していた一流の使い魔だ。

その戦闘力と双子ゆえのコンビネーションは今でも充分通用する。

正直いって今の僕でも真正面から戦ったら負ける可能性のほうがはるかに高い。

そのうえ提督が前線から退き、部隊や艦隊を指揮することが多くなると

そのサポートも積極的に行っていたためにデスクワークや小隊指示も得意だ。

捜査に進展が無く戦力もギリギリな現状としては正直喉から手が出るほど欲しい。

たとえそのために僕が彼女達のおもちゃにされようとも、だ。

「でもそつちだけでも手伝ってもらえれば助かるよアリア」

だが後進育成や武装局員のレベルアップのためにも

リーゼたちの本来の仕事を奪うわけにはいかない。残念だがそれは諦めよう。

決して、おもちゃにされるのがイヤなわけではない。うん、そんな私情は挟まないぞ僕は。

それに主がこちら側についても未だ謎が多い闇の書だ。情報は多いほ

どいい。

「そんなに人手が足りないなら、私か父様から口ぞえしてみるけど」
「うーん、魅力的な申し出だけど、提督の指示ですぐに動いてくれる人たちは

できれば最後までとっておきたいな………最悪のケースを考える
と」

闇の書事件の最悪のケースは単純だ。

完成した闇の書と融合した主が暴走し破壊の限りを尽くすこと。
都市ひとつが滅ぶ。なんてレベルの話ではないのだ。下手をすれば
国や世界が滅びかねない。

だからこそ半径数十キロを消滅させるアルカンシエルの使用が許可
されているのだが。

「ああ、そっか。最後にアルカンシエルで消滅させるにしても。

場所によっては使うまでの被害を最小限に抑えて人々を避難させ
る人員が必要になってくる、か」

「もちろんそこまでの状況にしたいわけではないが……」

「そなえを怠るわけにもいかない、か。因果な仕事だね、ほんとに」
まったくだ。と声には出さずに首を縦に振る。

最悪のために、初動で出せる人員が少ないなんて。

局の仕事は名目上は立派だが慢性的な人手不足と法整備の遅れから
“何を守る”べきか解らなくなる状況は別に珍しくもない。

人なのか法なのか物なのか歴史なのか文化なのか世界なのか。

何を守り、何を助け、そして何を見捨てるべきなのか。

その判断が難しい事態や事件が、多すぎる。

そんなことを考えてしまったせいだろうか。

ふと、家族を助けるために自分を犠牲にしようとする誰かの顔が浮かぶ。

あいつが局員だったら人の数十倍は悩み苦しみながらも行動して、その後もそれでよかったのかと自問し続けてしまうタイプだろう。ある意味なのはたちの中で一番局員に向いていない性質だ。僕も、あんまり人のことは言えないが。

「でもだからといって自分の意思で局員になったんだ、僕は。たとえしょうがなくても、考えるのだけはやめたくない」

だから僕は思わずあいつに向かって言っていた。

きっと自らの『死』についてだけは思考が停止しているあの男に。察してくれたのか、それとも額面通りに受け取ってくれたのか。

アリアは、そう、と頷いて今度は避ける暇もなく頭を撫でられた。

それから逃げ続けた僕に守護騎士発見の報告が届いたのはすぐあとの事だった。

12月12日 PM04:20

無人世界 廃墟

かつて栄華を誇っていたであろうこの世界も滅んで百年以上が経過していた。

その痕跡ともいえる崩れた大小様々な建物が並ぶ元・都市。その上空。

ふたつの影を武装局員たちが輪になって囲んでいた。

「ちっ、こんなところで見つかつちまうなんて！」

「主はやての所に戻る前でよかった」

互いに背中を合わせた格好で自分達を囲む局員たちを睨むふたり。

剣の騎士シグナムと鉄槌の騎士ヴィータである。

すでに面が割れていると判断したのかすでにその顔に仮面はない。

ただ、相変わらずの黒い衣服と黒髪だった。

「ああ、そうだな……しかしこんなちよろい連中であたしらどうにか出来ると思ってるのか？」

「同感ではあるが、戦場で油断し驕った者の末路は決まっているぞ
ヴィータ」

「うっせーな、分かってるよ！」

悪態をつきながらも局員たちを吹き飛ばそうとアイゼンを構えるが、動き出すより早く、自分達を囲んでいた局員たちが離れていく。

「ん、なんだ？」

「……どうやら私達の相手は決まっているらしい。主らしい采配だ」
シグナムが視線だけで示した先。

崩れた中でも一番高い場所。ちょうど彼女らを見上げられる場所。そこに立つ見知ったふたりの少女の姿にそれぞれの愛機を握り直す。

「面倒くせえな、もうあいつら蒐集したから相手する必要ないんだけどな」

「だがすでにここは捕縛結界の中。退いた局員たちもその維持に加わったようだ。強装型か。」

それでも破るのは容易いが彼女達に背を向けて、となると難しいな」

前回の戦いで半ば圧勝したふたりだが、それで今回もまた勝てると思えるほど

彼女達は楽観的ではなく、また対峙する少女たちの力量を舐めてもいない。

シグナムたちはむしろ謙虚とっていいほどに前回の勝利は少女達の戦法を熟知していたうえで奇襲だったから、と思っていた。

何より“あの”少女たちが一度敗北した相手に策もなく向かってくるなどあり得ない
そしてその背後には彼女たちの主がいる。恐ろしく悪知恵が働く方の。

だからまず、ふたりはその“策”のほどを見定めようと眼下の少女

たちを見据えた。

「フェイトちゃん、レイジングハート、行くよ」

『All right my master』

「うん、私達も行くよ、バルディッシュ」

『Yes sir.』

並び立つ少女達は待機状態の愛機を手に上空の彼女達を見上げる。視線がぶつかりあうが、両者に会話は無い。する必要を互いに感じていない。

おおよその事情を知らされ、少女たちはそれを否定する気はない。むしろ想いとして同じようなものを抱いてさえいるだろう。

だからこそ彼の望まぬ方法を取った彼女らを止めようとすでに心は決めている。

「レイジングハート・エクセリオン！」

「バルディッシュ・アサルト！」

生まれ変わったその名を呼びながら、愛機を掲げる。

「セットアップ！！」

少女たちは声を揃えて、その能力を解放する。

帯状の魔方阵がその小さな身体を包み込んで新たな防護服を組み上げる。

なのはがまとう白い防護服。

セイクリッドモードと呼ばれる新たなバリアジャケットは見た目には解りにくい

インナースーツや袖口の強化、手袋や両肩にフィールドジェネレーターを追加し、

防御力、おもに上半身のそれを以前より強化していた。

フェイトがまとう黒い防護服。

ライトニングフォームの名を持つそれは両足と左手の追加装甲に目が行くが

それ以外に変化はなく、あくまで得意の高速機動を活かすための必要箇所のみピンポイントでの防御力を向上させた姿だ。

そして起動したデバイスたちを手にとって、静かに構える。

それぞれのかつてのデバイスモードと大差ない姿だがカートリッジシステムがある。

レイジングハートには6連装のオートマチック型が。

バルディッシュには同じく6連装のリボルバー式が搭載されていた。

いいか、モードはそれぞれ二つ

レイジングハートには中距離射撃のアクセルと砲撃戦用のバスター、

バルディッシュには汎用型のアサルト、鎌のハーケン

カートリッジシステムを入れる兼ね合いでシーリングモードはオミットされてるから気をつける

強化され、彼から手渡された時の言葉がふいに蘇る。
そしてその後、時間を見つけては使いこなすための訓練と模擬戦を
繰り返し続けた。

彼の力になるために、自分たちのために自らを改造してくれたデバ
イスたちのために。

手痛い敗北をもらった相手にもう一度、そして今度こそ。

互いに認識に差はあれど間違っていると言葉で否定することはでき
ない。

多かれ少なかれどちらも同じ想いを抱えてしまっている。
だから彼女たちと少女たちに言葉は不要だった。

ゆっくりと空に舞い上がり、それぞれの相手と向かい合う。

「行くよヴィータちゃん！」

「来い、なのは！」

「シグナム、今度は負けません！」

「……悪いがこちらにも負けるつもりはない！」

遮る物のない空で、守護騎士と魔法少女が再びぶつかりあう。

覚悟と再戦（後書き）

そしていつもの煽り文句で続くのです。
ボキャブラリの少ない自分が恨めしい。

読み合い

12月12日 PM04:28

海鳴市 拠点マンション リビング

ソファーに座り、リンディはひとり指揮官として現場の状況をモニタリングしていた。

情報の収集や周辺の警戒や索敵は別室でエイミーが請け負っている。

「始まったわね」

『はい、今のところ周辺にこのふたり以外の反応はありません』

そう、と頷いたリンディだが時間の問題だろう、とも思っている。

この戦いはあまりにも彼女たちに“旨み”がない。

なのはとフェイトからすでに蒐集してしまっている。

結界を維持している局員たちは違うが無理をして蒐集すべき対象ではない。

だからきつとあいつらはどうやって逃げるかを考えるはずだ

なのはとフェイトが出撃する直前に語られた言葉を思い返す。

「でも警戒は厳に。
発見してからの時間を考えるとすでに来ていてもおかしくはない
わ」

戦闘空域をモニター越しに観察しながら指示を出す。

エイミィはそれに頷きながら、内心でわずかに疑問に思う。

（艦長って一番コウキくん到手厳しくせに、一番信頼してるよね
え…………）

何せ、この“作戦”の要は間違いなくあの少年にあるのだ。

提示したのも少年なら、受け入れたのはリンディその人。

それも息子の反対意見を押しつけて、だ。

（クロノくんが何気にコウキくんを気に入らないのって、もしかしてお母さん取られ…………）

「エイミィ、何か“面白いこと”考えてない？」

空間モニター越しのエイミィにリンディは恐ろしい笑顔に向けていた。
た。

それなりに長くハラオウン親子と接していたはずの彼女でさえ知らなかつた笑み。

コウキという少年と触れ合うようになってあふれ出た威圧する笑顔。

『い、いいえ！ 一生懸命索敵させていたただいているだけでありま
す！—』

それにエイミィが耐えられるわけもなく、余計な思考を中断して職

務に戻った。

「そう、ならいいわ」

と頷いているが視線は先程から一度もモニターから離れていない。ただ、その視線はどこかなのはたちの戦闘空域を映しているモニターというよりは捕縛結界を維持している局員たちを映す物を重点的に見ているようだ。

(さて、彼の予想通りならここでおそらく……)

その場合、まずあいつらの誰かが派手で目立つ動きをするだろう

『っ、艦長！ 魔力波動感知、ザフィーラです！

ポイントはA78、武装局員たちの真後ろです！』

「聞いていたわね！ 全員無理をせず距離とりなさい！！」

『りよ、了か、ぐああっ！！』

空間モニター越しの映像が乱れる。

衝撃と舞い上がる噴煙に現場を目では正確に把握できなくなる。

それを違う視点の映像に切り替えることで対応する。

すると反応通り黒い衣装に身を包んだ黒毛のザフィーラが局員たちをなぎ倒していた。

迫っていることを知り距離をとるように指示されたが彼らの行動は僅かに遅かった。

そのため半ば突っ込んできた彼に既に数人の局員は戦闘不能状態にされてしまう。

『くっ、A班、B班は一定距離を保って囲め！ C班は負傷者を回収しろっ！』

いいなっ倒そうなんて欲を出すな！ 俺達はここで食い止めるんだ！』

だが、すぐさまリーダー格の局員の指示に的確に動き出す。そこだけは組織だって訓練された者たちの強みだった。

だがそれは当然囷、本命は別にある

「アルフさん、お願いできる!？」

『ああ！ あいつの相手は私に任せときな!』

待機させていたアルフをザフィーラへとあてがう。

距離を取って囲むという時間稼ぎの戦いをしても局員では長くは持ちそうにない。

タイプの近い彼女をぶつけることが何よりの“時間稼ぎ”だった。

囷に注意が向いた僅かな隙、それを狙って大規模な攻撃で結界を破壊。

その混乱に乗じて脱出、ということをはやては考える

「エイミー、彼以外の反応は!？」

『っ、いま場所をしばらくこんでいます！ あと少し待ってください!』

エイミーは各種サーチャーから寄せられる情報を総合し、

確実に彼女達が“いない”地点を確定していく。
その範囲を広げていくことである可能性の高い地点を絞り込んでいく。
残りの二名が確実にいると踏んでの行動であり普段ならしない荒行だった。
しかし。

(……だめ、時間がわずかに足りない。彼女達の方が早い)

それでも遅い。

エイミイというスペシャリストのサーチでもまだ遅い。
予想される彼女達の攻撃の方が早く、その時の魔力を感知できても無意味だ。

だからそこで、相手の意表をつく必要がある

「あなたが言いだしっぺなんだから、ちゃんとやりなさい」

激励のような文句のような言葉を受けて、少年は闇の中で頷いた。

12月12日 PM04:36

誰にも見つからないように崩れた建物の影に隠れていた“黒髪”の少女は

手にした白い杖・S2U改を構えながら天井だけが崩れて四方を壁に囲まれた場所に一人立つ。

そして魔法陣を展開させて、少女は呪文の詠唱を始めた。

ふたりの帰りが連絡もなしに遅くなった時点で三人の行動は早かった。

“何か”あったのだと当たりをつけて彼女達が向かった世界で結界を見つけてさらに確信する。

捕縛に重点を置かれた文字通り“閉じ込めておくためだけ”の結界は内部を覗くことや

閉じ込められたふたりとの通信さえもこの距離なら可能だった。

そのため空間モニター越しに見る内部での戦闘と思念通話で状況の把握と情報の交換はすでに終わっていた。

(よし、これで準備はOKや。みんな行くで)

そしてはやての作戦はすでに全員に行き届いている。

それはザフィーラを派手に投入したことで形としては完成した。

この後、彼女がもつとも得意とする大規模魔力による遠距離からの広域攻撃によって

結界を破壊してその混乱に乗じてシグナムたちを逃がす算段だった。だがその作戦にはひとつ、彼女達にとって最悪な不安要素があった。

日野コウキの参戦である。

無論理屈の上では彼は自身の魔力を使えない状況にある。戦闘などできるわけがない。というのは理解していた。だが『それでも来る』というのが全員の共通認識だった。

「我は希う、戦場を駆ける一陣の風を」

(こっちの思惑はきつとコウ兄やリンディさんにはバレとる。ならそれを邪魔するためにこっちが戦力じゃないと“思っているはず”の

コウ兄という存在を使うが一番、意表をつくことになる)

だから結界破壊を請け負う彼女が一番警戒しなくてはいけないのは彼の奇襲。

居場所を知られないためにあえて結界などを使わずに隠れ、シヤマルの旅の鏡によって結界外にはランダムにサーチャーに反応する魔力残滓をばらまいた。

「其は巨人の息吹、我らを縛る戒めを吹き飛ばせ」

懸念である彼の奇襲を警戒しつつも呪文の詠唱を続けた。

手にしているデバイスは以前の事件後に譲り受けたものだったが、その時よりすではやてに合っているとは言い難く、相性が悪かった。

そのため彼女の詠唱は普通の魔導師より長くならざるを得ない。だがそれも、もう終わった。あとは魔法名を叫ぶというトリガーを引くだけ。

そう思っていたから“ソレ”に見事に意表をつかれてしまった。

12月12日 PM04:30

無人世界 捕縛結界内 上空

紫と金色の光が空中で何度も交差する。

白い刀身と黒き刃が激しくぶつかり火花が散る。

舞う桜色の光が赤き光を追い回す。

鉄の槌が光を落とし、不屈の杖はその輝きを絶やさない。

「シグナム、こいつなんかこの前とは比べ物にならないくらいやばくなってるんだけど……」

「こつちもだ。主がカートリッジだけでなく我らの戦い方まで教えたようだ」

ふたりはそれぞれの相手と戦いながらもいつしか背中を向け合う位置にまで来ていた。

それほどまでに相手の上達は目を見張るものがあつたのは間違いがない。

以前ならばち抜けたバリアを破れない。前なら避けれた攻撃が避け

れない。

それは何もデバイスを強化したから、だけではない。

こちらの動きを先読みし、攻撃に適切な対応をとる様は明らかに一度戦った程度で読み取れるもの以上が読まれていた。

「そうだろうけど、よくよく考えるとあたしらコウキの前でろくに戦った事なんてねえぞ」

「確かに、だが“あの”主だぞ？

どんな手品で我らの戦法を見抜いたか解ったものじゃない」

「へへ、違いねえな」

教えてもない事をさも前から知っていたように突然言い出す姿を思い出して

彼女達は思わず戦闘中だというのに笑みをこぼす。

だがそれを油断と早合点する者はここにはいない。

なのはとフェイトはその隙の無さに身動きが取れなかったのだから。

「しかしまあ、いつまでもこうやりあってるわけもいかねえよな」

目の前のなのはを睨みつけながら背後のシグナムに合図を送る。

「こんな状況でなければ心行くまで剣戟を楽しみたいものだが、そうもいつてられないか」

それを受けて彼女もまたフェイトを見据えながらもヴィータに答える。

ふたりは個人的にはこの場において相手と決着をつけたいという気持が無いわけではない。

誇り高いベルカの騎士が一对一を申し込まれて逃げるわけには、負けるわけにはいかない。

だがそれ以上に今は主のために闇の書完成を急がなければならない。ならばここでかけられる時間には限りがある。

彼女達のもうひとりの主の作戦も始まっている。

「どつちにしろ」 一对一に違いがない以上……」

それに身を任せてもいいが、後顧の憂いを絶つためにもあと一矢必要だった。

「あたしらベルカの騎士に」

だから。

「負けはないっ!!」

宣言のような誓いのような言葉と共に彼女達は立ち位置を“入れ替えた”。

そして互いを蹴り飛ばすようにしてそれぞれの相手に肉薄する。

「っ、しまっ!?!」

「へ、えっ!?!」

振り下ろされるアイゼンは金色の盾ごとフェイトを吹き飛ばし、鋭く切り込んだレヴァンティンはバリアごとなのはの防護服を裂いた。

共に反射的に防御及び回避行動をとったためにダメージは軽い。

だが、追撃にうまく対応できずに逃げの一手となってしまう。

(思った通り！)

(やはり短期間で我らに対応するために、仮想敵を固定していたか！)

なのははヴィータ。フェイトはシグナム。

その相手をする訓練しか少女達はしていなかった。

短い時間で動きを覚えさせるための事だったがそれがここで裏目に出た。

対決する相手が変わったその瞬間、即座の対応に遅れが出てしまう。特訓で担当する相手に慣れすぎた弊害で対処がすぐにできなかったのだ。

「はあぁっ!」

「おらっ!」

「きゃっ!」

「うっっ!」

そのためほとんど一瞬で彼女達の位置関係は逆転した。

なのはたちに挟まれるように背中合わせになっていたシグナムたちがいまでは少女達を挟み、なのはとフェイトを背中合わせ状態にしていた。

「レヴァンティンツ!」

『Explosion』

「アイゼンツ!」

『R a k e t e n f o r m 』

剣は炎をまとい、槌はそのスパイクを尖らせる。
対応が追いつかないまま背中をぶつけ合わせた少女達は痛みで一瞬
思考の空白を生む。

そしてその一瞬が、騎士たち相手では致命的だった。

シグナムのレヴァンティンがなのはを切り裂こうと迫る。
ウィータのアイゼンがフェイトをぶち抜こうと迫る。

(…………時間切れだな)

四人全員にその念話が届けられたのはまさにその瞬間だった。

ほぼ同時に響く爆音と轟音をどこか遠くで聞きながらも
騎士たちは自らの勢いが強すぎてもう止まれない状態になっていた。

だから間に入り込んだ黒い影が何なのか確認する暇は無かった

「なあっ!?!」

「馬鹿、な…………っ!?!」

少女達を庇うように入り込んだソレに剣と槌は容赦なく叩き込まれ
た。

叩き込まれた。はずだ。けれど騎士たちの表情には驚愕しかなか
つた。

それは割り込んだのが既知のモノだったわけでも奇異なモノだった
わけでもない。

正確にいうならふたりはその時点ではまだ割り込んできたモノをき

ちんと見てさえいなかった。

それも当然だろう。ヴィータのラケーテンハンマー、シグナムの紫電一閃。

どちらも彼女達の必殺の一撃でありこれまで数多の敵を倒してきた魔法だ。

仮にそれだけで倒すことができなくても多大なダメージは与えてきた。なのに。

「な、なんだよこれっ!？」

「……衝撃が、打ち消された？」

確かに“何か”に叩き込んだのに恐ろしいまでの手応えの無さ。

その攻撃に込められていたスピード、魔力、衝撃、威力。すべてがその“何か”で打ち消されていた。

「ちっ!」

「くっ!」

理屈は理解できなかったがそうだと判断した騎士たちはソレから離れた。

そして距離を取ったことでソレがなんであるかをその時ようやく彼女達は把握する。

「誰だ、てめえ!？」

浴びせられた存在を問う怒声。

それを受け流すように『黒』で構成された人影が悠然とそこに立っていた

読み合い（後書き）

次回、ついにオリ主のオリデバ登場！

なのだが、ぶつちやけ見た目はあれのパクリなんだよなあ……

思惑の三つ巴（前書き）

今回は、少し長い、です。

オリデバについては本編描写でイメージしづらかったら、
あとがきに解りやすく書いてあります。

思惑の三つ巴

12月12日 PM04:39

無人世界 捕縛結界内 上空

突然、騎士と少女達の間割って入ったきた存在。

騎士たちの必殺の一撃を何故か簡単に受け止めた存在。

その得体の知れなさにヴィータはソレを威嚇するように怒声を浴びせた。

「誰だ、てめえっ!？」

『誰』と問いかける以上ソレは人だと思われた。

何せ形はわかりやすい人型であり、それ以外の可能性は低い姿だった。

全身を黒いコートのようなバリアジャケットで覆われた姿。

身長は少女たちよりは高くシグナムとほぼ同じ高さ。

しかし顔を覆うほどの襟の高さとテンガロンハットのような帽子を

目深に被っており
顔がまつたく見えないため性別でさえ判断できなかった。

そしてその両手両足は全身黒の防護服からすれば色は同じでも意匠の違う物が装備されていた。

両腕には籠手のようなナツクル型アームデバイスが装着されており、
両足にある機械的なブーツが強烈な風を放出し強引にソレを浮かしていた。

だが何より特徴的だったのがカートリッジの弾帯を腕と腰に巻いていたこと。

その数は決して十発や二十発ですむ程度ではない。

「誰だ、とは……直接会うのは久し振りだというのに寂しいことをいう」

色こそ揃えられていたがお世辞にもカツコイイとはいえないちぐはぐさ。

むしろ不恰好といつてもいい防護服の中から男の声が発せられる。

それと共に“彼”は帽子を取って素顔を見せた。

「コウキ!？」

「主!？」

間違いなくそのバリアジャケットをまとっていたのは日野コウキだ。
騎士たちがその顔と声を間違えるなどありえない。

だから彼女らは二重の意味で驚愕し僅かに動きと思考が止まる。

来るのは予想していても外の誰かへの奇襲だと思い込んでいた。

そして魔力を使えないはずの彼が不可思議な方法で自分達の攻撃を

受け止めた。

その“意表”をまんまと突かれた騎士たちは即座に動けなくなってしまう。

しかし彼はその絶好のチャンスをどうともせず、自らの防護服を見下ろした。

「うん、試運転でまさかラケーテンと紫電一閃を同時に食らうとは思わなかったが……」

なかなかどうして、上々の仕上がりじゃないか」

ぼんぼん、とその一撃を受けた“はず”の部位に触れながら、満悦の表情。

もっともすぐさまそれに冷や水を浴びせられることになるが。

『お褒めに預かって光栄だがね。いくらなんでも私の防御力をアテにしすぎの行動だ。』

デバイスとしては改善を要求するよ、マイスター』

『そうですよ！ まだ色々未完成なんですよこれ！』

機械的に作られた男性と女性の声。

それに責められ少しばかり居心地が悪そうな表情に変わるコウキ。

「リニス？」

「それと、えつと……だれ？」

背後の少女達の疑問の声。

耳ざといのか律儀なのか“彼”はそれに即座に答えた。

『お初にお目にかかります。四人のお嬢様方。
私はマイスター・日野コウキに作成された新型デバイス。
名をトラヴィックと申します。以後お見知りおきを』

先ほどマイスターを叱責したのとは違う声色と口調。

どこか物語に出てくるような執事を思わせる喋り口に少女達は僅かに戸惑う。

「え、あ、はい」

「い、ご丁寧にどうも」

「主が作成した、だと？」

「っていつかあたしらまでお嬢様扱いかよ」

そして四人がそれぞれの反応を見せるなか一人(?)だけ呆れた声が混ざる。

『呑気に自己紹介してる場合ですか……』

現在、トラヴィックに“搭載”されているリニスが愚痴る。

どこか額を押さえている彼女の姿が目に見えびそうになる声で。

『いいえリニス嬢。』

デバイスとはいえ男子たるものお嬢様方を無下に扱うことなど出来るはずありません』

それにきっぱりと女性にはそれ相応の対応をとると宣言するデバイス。

リニスもヒトのことは言えた義理ではないが、デバイスとして何かが変である。

「……気色悪い喋り方じゃがって、もつと普通に喋れよお前」

『うるさいぞマイスター、お前はさつさとやることをやればいいのだ』

さすがに注意する創造主相手に、不遜な口の利き方。丁寧なのはそれ以外の相手への言葉だけである。

『ああもうつ、どこでAIの設定を間違えたのやら……絶対モデルにした人格のせいです！』

「はて、なんのことやら？」

彼女からの追求をさらりと受け流す。ものの、目は解りやすいくらい泳いでいる。
なにせ

『何をいうかマイスター、私の人格の大元は君だろうに』

ということなのだ。

トラヴィックの作成は急ピッチで行われたが今までにないタイプのデバイスゆえに

試行錯誤を繰り返すことになり結果、いまだに未完成である。

それでも少しでも完成を早めようとAIにコウキの人格コピーを使った。

リニスが作成されたさいに使った技術の応用だが完全コピーではなく基礎人格だけ。

だったはずなのだが。

「それでどうしてこうなるんだか……ちょっと弄ったのがまずかったのか……」

さすがに自分と同じ思考と声を持つ者がもうひとりいるというのは精神衛生上あまりいいとはいえないので僅かに調整されている。のだが。

『これもう原型留めてませんよねえ……失敗したかなあ』

「帰ったらフォーマットするか」

『そうですねえ……』

しみじみとした雰囲気は何気に怖いことを口にするふたり。さすがにこれはまずいと感じたのかトラヴィックは叫ぶ。

『ま、待てマイスター！

それはいくらなんでも急すぎるだろう。まだ誕生して三日目だぞ私は！

とうかさせて本人のいないところで相談してくれ。

目の前で自分の殺害計画話されるこっちの身にもなってほしい！』

機械的な作られた声が、どこか震えながら訴える。

当たり前のことではあるのだが不遜な喋り方はしていても

根本的なところでマイスターに逆らえるようにはなっていないのだ。

「気にするな、「冗談だ」

『冗談に決まってるじゃないですか』

あはは、とうそ臭い声で言われてもトラヴィックはまったく安心できなかつた。

今夜はもうできるだけ黙ってしよう。そう決めた瞬間だつた。

「っ……主っ、いい加減にしてくださいっ！……！」

それまでの空気をぶち壊すようなデバイスとの言い合いを聞かされ、さっきまで戦場だつた“はず”の緩んだ空気を叱責にするようにシグナムは怒鳴つた。

これには隣に立つヴィータも驚きを隠せなかつた。なにせ、あまりにもらしくない。

「いったい、何を考えているんですかあなたは！？」

今がどういう状況か解つてて、どうしてっ、どうして“出てくる”んですか！？」

彼女が仮にも戦場で感情をあらわにして激昂している姿など一度も見ることがない。

シグナム本人もコウキに関して沸点が低くなり過ぎている自覚はあつたが止めることが出来ない。

「……そうだよコウキ、どうして……どうしてそんな風にふざけて笑つてられるんだよ？」

そしてヴィータもまた驚きこそすれそれが理解できないわけがない。

今の彼にとって戦場に出ることはイコールで寿命を縮めることだ。直感のようなもので『来る』ことは分かっているとしてもその選択を『理解』はできない。

それでもまだ自分達を止めるために必死で向かってくるならまだ良かった。

だが、デバイスと漫才じみた会話をしている姿に騎士たちは呆れやり怒りが勝ってしまう。

彼に残された時間が文字通り風前の灯であることを知っているために。

「……………」

本気の怒りと嘆き。

それを訴える声と視線にさすがにコウキも息を呑んだ。

『ほら、いわんこつちやない』

『まったくあなたは本当に女心が解っていない』

身にまとうデバイス二名(?)からも同様に責められ額を押さえて唸る。

お前らもノリノリでやってたじゃないか。と内心で呟きながら、彼は溜息を吐く。

「…………悪かったよ、さすがにふざけすぎたか…………でもな」

素直に謝りながらもどこか困ったような顔で『でも』と続けるコウキ。

そして顔が一転して不敵な笑みになったのを見て、騎士らは嫌な予感がした。

「これも……“作戦”のうちなんだよ」

「え？」

疑問の声。それに被せるように響く炸裂音。

誰しもがもう聞き慣れた、見慣れたカートリッジのロード。

それがコウキの両手と両足で同時に起こっていた。

「なるほど……それでそんな大量のカートリッジを」

込められた魔力。放たれた魔力は疑って見てもコウキのものではない。

それどころか彼自身の魔力は一切“消費されていない”。

「さすがと感心すべきか、無茶苦茶だと呆れるべきか、悩みどころです」

僅かに安堵しながらも本心からの戸惑いも口にする。

カートリッジに頼り、そのためにデバイスを自作までする。

その技術と目の付け所にシグナムたちは素直にすごいと思ったが、
そうまでして危ない橋を渡るうとするのは、無茶をするのは考え物
だった。

ましてや。

「……一応聞いとくけどさ、もしかしてナックル型のデバイスなの
って……」

「ああ、お前らの考えている通りだよ」

再び帽子を被って、その下で笑みを浮かべながら答える。

その理由に心当たりがあったがゆえに、やっぱり。とふたりは苦笑する。

と同時に彼が彼らしくあることを嬉しくも思っていた。

「前に言っただよな、次はゲンコツだつてな！」

そんな騎士たちに魔力をまとった拳を振り上げてお仕置き宣言。彼女らはそれに不敵な笑みで応えてデバイスを構えた。

「なのは、フエイト。まだ行けるな？」

「はい！」

「もちろん！」

背後からの少女たちの力強い返事に頷きながら念話で返す。

（なら、この場は任せる）

返事を待たずに空を蹴って、あるいは強風に吹き飛ばされるかのよう

に彼は自らの騎士たちに向かって真正面から突っ込んでいく。

「くっ！」

それに反応し前に出たシグナムに向けて、魔力をまとった拳を振りかぶる。

魔力を通した鞘で受け止めるが、その衝撃に腕がしびれ表情が歪む。

（な、なんて重さ……だが！）

お返しとばかりにレヴァンティンで斬りかかるがもう一方の拳で防がれる。
剣と鞘に、両の拳がぶつかりあつて火花が散る。しかしその拮抗はすぐに終わる。

コウキが再度空を蹴るように後退したのだ。理由は推察するより早く“落ちてきた”。

「はあああつー!」

「ちいっ!」

黒い一撃。上空から舞い降りたフェイトのバルディッシュの一閃。痺れた腕で受け止めるのは危険と判断したシグナムは後退して避ける。

むき出しになっている二の腕の薄皮一枚と引き換えではあつたが。

「シグナムっ、ちっ、邪魔すんな!」

援護に入ろうとしたヴィータだが桜色の魔弾に割つて入られ彼女と合流できない。

相手の魔弾と同サイズの鉄球を生み出して対抗する。

強度を上げた鉄球は数という優位性を持ったなのはそれに拮抗する。

まるでこの戦いの始まりを再現するかのような攻防。

幾重にもぶつかり、幾重にも交差する魔法少女と守護騎士の戦い。だがそこに何故か割り込んできたはずの男の姿がない。

(っ、あれ、コウキどこいった……っ!?)

(主はいったいどこに……っ!?)

偶然、同時に気付いた彼女達はそれと時を同じくしてある事実
に気付く。

胸の中で思わず発した“はず”の声によって。

思念通話が、誰にも通じない

12月12日 PM04:39

無人世界 捕縛結界外 廃墟

突然の黒い影の介入。

はやてはそれを遠地から見ただけだったが、

タイミングからそれが誰かなんて、確認する必要さえなかった。

（なんでコウ兄があそこに、それにその騎士甲冑はいつたい！？）

結界内の騎士たちと同様に意表を突かれて同じ疑問を持ったはやて
だが、

それと同時に、並列してまったく別のことを考えていたのはさすが

だった。

(あかん、しもた。完全にこっちが裏をかかれた!?)

コウキが奇襲ではなく、堂々と戦場の中心に出てきた理由。それに思い当たって背筋が凍る。いまずぐ移動しなければ、と判断する。

「動くな」

もつとも、彼らの動きの方が僅かに速かったが。

「っ!？」

背後から突きつけられるデバイスの気配。

そこから浴びせられた声色からはやては即座にそれが誰かを察した。

「……やられたわ、クロノくん。」

まさかコウ兄が囹役をするとは思ってへんかった」

「そうだろうな。君たちは彼の状態や性格に詳しすぎる。」

だからこそ考えや動きがあいつからすると逆に読みやすかったんだらう」

相手の意表をつく一番の方法は相手が想定していない動きをすることだ。

彼をよく知っている彼女達だからこそコウキはどう推察するかが読めてしまった。

だからこそそのあえての派手な登場とふざけた物言い。

すべては自分に注目させて、搜索の時間を稼ぐためだった。

「やってしもたなあ、考えてみれば当然やんか。」

「あたしがコウ兄の戦略読めるなら、その逆もできて当たり前」

まいった。まだまだ修行がたらへん。

などといってうな垂れるはやてに背後から武装解除を訴える声が響く。

「じきに他の武装局員も駆けつける。

一応知人の女の子に手荒な真似はしたくないんだが……」

だからおとなしく武装を解いてくれ。という言葉に、はやては何故か笑みを深めた。

背後から杖を突きつける彼にそれは見えておらず気付かれなかったが。

「そやね、あたしも一応数少ないコウ兄の友達に乱暴はしたくないんやけど……」

「っ!？」

「だから、おとなしくしてくださいね？」

はやての言葉の裏に気付いた時には遅かった。

その背後から突き出された風をまとった細い女の手。

首に突きつけられるように向けられたそれに彼は動けなくなった。

「助かったよシャマル。やっぱり隠れてもらってて正解やったな」

「はい」

振り返って笑顔で感謝をのべるはやてにシャルもまた笑顔で答えた。

その手と意識はまったくいいほど彼から離れていないが。

「……それじゃクロノ執務官。ちよつと武装解除してくれます？」

柔らかな声色ながら喉元に突きつけられた手刀と圧力は有無を言わせていなかった。

だからだろうか。観念したように彼は溜息を吐いてデバイスを完全に下ろした。しかし。

「だから僕はやだったんだよ、こんな役目」

「「え？」」

どこか気弱すぎる声に、ふたりはほぼ同時に首をかしげた。

クロノの声というよりはまったくの別人の声のように聞こえたのだ。それも自分達がよく知っている相手の声に。

「……ユーノ、くん？」

はやてがその声の主に気付いたまさにその瞬間だった。

「ああ、正解だよはやて。

そこにいる僕もどきはフレットもどきの変身だ」

“本物”のクロノ・ハラウン執務官が彼女の背後に立ったのは。それに今度は完全に振り向けずはやては固まってしまう。

ユーノが変身しただけのクロノとはまったく違う存在感と圧迫感。知らず本能だけで察する。察してしまう。

彼女はいま、いくつもの現場を知る歴戦の執務官と相對しているのだと。

シャマルもまた目の前に現れた本物に愕然とする。

手刀を向けている『クロノの姿のユーノ』への対処すら忘れて。そのため彼が魔法を使うのは難しいことではなかった。

「トランスフォーム！」

「え、あつ、しまった!？」

一瞬でいつものフレットモードになったユーノはシャマルの手から逃れ、三人から離れた場所で少年のユーノに戻った。

「……………ああ、その、なんや。まさかここまでコウ兄にバレとったん？」

もはやそうとしか思えない展開だが、あり得ない。はやてはさすがにそう思いたかった。現実逃避にも似た想いで。

「ああ、実に恐ろしいことにね。

あいつがギリギリまで気にしていたのは湖の騎士シャマルの配置だ。

君に不測の事態が起こった時の予備として、別の場所に闇の書といるか。

そもそもその不測に対応するために近くで護衛をしているか、でね」

捕縛結界を破る力を単独で持つのは彼女たちの中ではシグナムとヴ

イータとはやてだけ。

だが、それ以外の誰でも闇の書の蒐集ページを消耗することで『破壊の雷』を放てる。

そのためシャマルの位置を把握することはかなり重要だった。

一方はやてたちからするとまさにその二択で悩んでいたのだ。

コウキの奇襲があるものと考えていた彼女達はむしろ別れるデメリツトを避けたつもりだった。

もっとも、コウキはどっちになってもいいように作戦をたてていたので、

もう一方を選んでいてもこの結果にあまり違いはなかったのだが。

「これが最後だ。はやて、シャマル。武装を解け。

でなければ本当に手荒な真似をすることになる」

「言うておくけどもうこの辺には通信障害の結界があるし、あっちではなのはたちが

ヴィータたちを止めている。ザフィーラにはアルフが相手してる。救援はないよ」

逃げ道をふさぐ言葉に身動きが取れない。

腕の立つ執務官と結界において一流の腕前を持つ魔導師。

相対しているのなら逃げ道はあるが片方に背中から杖を向けられ、もう片方が離れた位置であらゆる捕縛系魔法の準備をしている。

(どないする、いったいどないすれば!?)

通信障害の影響で目の前のシャマルとも思念通話ができず焦る。

状況的にはすでに詰んでいる。おとなしく捕まって救出や脱走を企てるほうが

ここで無理をしてしまうよりは一番ダメージが少なく建設的だ。しかし。

「……………」

シャマルがわきに抱えている一冊の本、闇の書が問題だった。

例え自らが捕まってもこれだけは管理局に、ひいてはコウキに渡すわけにはいかない。

だから、はやては賭けに出るしかなかったのだ。

（一か八かでシャマルだけでも、逃がす！）

杖を強く握り魔力を強引に周囲へと放出しようとした。その瞬間。ガチャリとまるで手錠がはまったかのような音が響く。

「え、なっ、バインド！？ 誰が！？」

声はシャマルでもはやてでもクロノでもなく、ユーノのもの。その少年の体がリング状のバインドで縛り付けられていた。

「ユーノ！？」

突然のバインドにクロノの意識がそちらに向く。

だがそれでも彼ははやてやシャマルへの注意も怠ってなどいない。そのためにシャマルたちも依然として身動きがとれないまま。

しかし意識を向ける相手が増えたことで一瞬の間が生まれたのも事実だった

だから、クロノはまさにその衝撃に襲われるまでその存在に気付け

なかった。

「がつ!?!」

ちょうどユーノがいる位置の真逆からの一撃。

彼が誰かに蹴飛ばされたのだと気付いたのは廃墟の壁に叩きつけられた後。

しかしすぐさま衝撃で粉々に砕け散る瓦礫に彼は埋まっていく。

「ク、クロノ!?!」

バインドで身動きがとれないユーノの叫びを尻目に

何者かによって自由の身となった二人はより警戒心を強くした。

「あ、あなたは……」

何せ彼を蹴り飛ばしたのは直接の面識はないが二度自分たちの周囲に現れた仮面の戦士。

助けられたとはいえ味方と思えるほど友好的な相手ではない。

「警戒は当然だが、いまは別にすべきことがあるだろう。早く仲間を助けてやれ」

だが向けられた言葉があまりに意外すぎて、余計に安易に動けない。

「どういうことや?」

これまで散々こちらにチョッカイかけてきておいて……何が目的や!」

すでに距離を取ってシャマルと並び立っていたはやては

鋭く睨みつけるような視線で仮面の男に詰問する。

「……優先順位を間違っな、ここであの二人が囚われるのは痛手だろっ？」

しかし痛い所をつかれて思わず歯噛みする。

シグナムとヴィータという前線の要二名を同時に失うのは痛手どころではない。

今後の蒐集活動に確実に影響を及ぼしてしまう。だが。

「それとこれとは話が別や、何ならここであんたから蒐集してもいいんよ」

威嚇するように杖を構えたはやてと自然とその前に立つシャマル。返答次第ではすぐさま戦闘に移るといわんばかりの態度だった。

「……………思惑が違うのは認めよう。」

だが今はお互いにとって利用しあった方がメリットが高いだろう？」

「そうやるか？」

正体も目的も不明の誰かさんを放っておくデメリットの方が高いやろ」

あくまで“いま”は敵対ではなく利用しあうべきだという仮面に対し、

はやては何もかも不明の相手が“今後も”出てくるといふ不安要素は排除すべきという。

真っ向から対立する理屈。どちらが正しいかではない。

問題なのはどちらも譲る気がないところである。

「……………君はもう少し聞き分けのいい素直な子だと思っていたよ」

「それは随分と節穴な目をお持ちやね……………仮面より先に眼鏡を探したほうがええなあ」

剣呑な空気。その見本のようなものが彼女達の間を支配する。

時間にすべりたいした秒数ではなかったが互いが相容れないと理解するには充分だった。

「一人はすでにバインドで身動きできない。もう一人は私が相手をしていよう」

だがそれでも己が目的のためか、信用を得るためか。

仮面の戦士は自らが蹴り飛ばしたクロノの元へ向かおうとした。

「……………じゃあ俺の相手は誰がしてくれるんだ？」

そこに軽い調子ながら威圧するような声が叩きつけられる。

聞き慣れたその声にはやたとシヤマルが驚き、目を見開く中、仮面の男が目に見えて怯えるように震えながら緩慢な動きで見上げる。

「よう、久し振りだな。腕の穴はもう塞がったか？」

そこにいたのは捕縛結界内にいたはずの全身を黒で覆い隠したコウキ。

彼の茶化すような馬鹿にするかのような物言いに簡単に仮面は激昂してしまう。

「日野、コウキっ!!」

そして、唸り声のような叫びと共に飛び上がり彼に襲い掛かった。コウキは一切反応せず、隙だらけの身体に仮面の拳が叩き込まれる。だが。

「なっ!?!」

その奇妙な感触に仮面もまた驚愕する。

手加減などない全力の一撃を確かに叩き込んだというのに、拳は確かに彼のバリアジャケットに触れているというのに、
“殴りつけた感触がない”。あるのは優しく相手に触れたかのような感触。

『びつくりしてる暇はありませんよ?』

『ロードカートリッジ!』というべきかな、これは』

振りあげられた右の拳。それを覆うナックル型デバイス。それを見て、咄嗟に仮面は両腕を交差させて顔を庇った。なにせ。手首のリング状の歯車が高速回転するのと同時に弾帯をデバイスが飲み込んでいたのだ。

「ガトリングシュートツツ!!」

振り下ろされた拳が交差した腕にぶつかった瞬間。

まさに機関砲のような速射の嵐が仮面の戦士に襲い掛かった。

拳そのものが銃口となって撃ちだされる紫の魔弾。

仮面がほとんど無意識で張ったバリアをまさしく数の暴力で撃ち破ると

交差された腕に雨のように魔弾が降り注ぎ、その両袖を見るも無残

に吹き飛ばす。
あらわになつた両腕にも容赦のない弾丸の嵐が叩き込まれ、仮面は耐えきれなかつた。

その時間、およそ二秒

魔弾の数に圧されて仮面の戦士は為す術もなく空中から廃墟である建物群に墜とされた。
人サイズの穴が開いたせい、その衝撃が。音を立てて崩れ自らで穴を埋める廃墟群。
それによりバランスが崩れたこともあり周囲のそれらさえも巻き込んで

まだ原型を留めていた廃墟はただの瓦礫の山へと変貌していった。

「……………一応、ここも遺跡っていえば遺跡なんだけどなあ……………」

その光景に遺跡探索を生業とするスクライアー族の少年は渋い顔だ。比較的新しい都市である事とすでに調査が終わっている事がせめても救いである。

空に立つコウキはナツクルから大量の空葉莖を排莖しながら瓦礫の山から目を離さない。

手応えは感じたが、それで倒したと思えるほどではないからだ。

「……………コウ兄、なんでここに？」

彼女たちを一瞥もしない彼に少女はためらいがちに話しかけた。
コウキは視線だけは瓦礫から離さずに「白々しい」と鼻で笑った。

「俺が来るまでの時間稼ぎをしていた奴がなにを言ってる」

「あ、ばれたあ？」

「……はやてちゃん？」

あはは、と笑いながらもわざとらしく可愛い声で誤魔化してみるはやてと

そんなこととは知らないシャマルが怪訝な顔で少女の主を見ていた。

「はあっ！」

その眼下で瓦礫が放たれた魔力と共に吹き飛ばされる。

開いた僅かな穴をすり抜けるように飛び出た仮面の戦士は鋭い眼光を彼らに向けた。

仮面のせいで瞳が見えないので正確にいうなら周囲がそう思った、
なのだが。

「どづいうことだ？」

そして僅かに怒気が混じった声で問いただす。

彼らはコウキに迫る命の刻限への対処法で袂を分かったはずである。
だが今の会話を聞く限り少女が彼が来るの知っていた上で待っていたという。

念話などで意思の疎通などをせず、半ば双方の同意の上で。

「分からへんか？」

いくら共に生活をしていた者達とはいえそれは息が合いすぎている。

しかし当の本人達からすればごく当たり前の推察だった。

「あたしらの捕縛まで、コウ兄の作戦はうまくいった。で、あの二人があたしら相手に捕縛を手こずるなんてありえへんやろ？」

なのに連絡がなければそれはここで何か“予想外”が起こった事の証明や」

近接戦闘に向いていない二人相手にオールラウンダーのクロノと結界魔導師のユーノ。

よほどの事態でも起きない限り捕縛を失敗する可能性は極めて低い。だからこそ成功の連絡がないだけで不自然な状況になってしまいうのだ。そして。

「そっか。シグナムたちは結界の中、ザフィーラは外でアルフト。ならそこで予想外の妨害を仕掛けてくるのは……」

「……………私ということになるわけか」

正解！と楽しそうに笑いながらばちばちと拍手喝采のはやて。神経を逆なでするための行為と頭で理解しながらも苛立ちが募る。急ぐべき状況だというのに自分に食って掛かってきた意味も察して余計に苛立ったがそれでも仮面はまだ冷静な口調を保っていた。

「私は君たちの援護をするために来たのだがな……………」

「自分たちのために、やろ？ そんなんに頼るわけない。それでいま助かって後々首絞められたらたまらんわ」

だから、仮面を倒すために少女はわざわざ彼が来る時間を稼いだの

だから。

「こんな状況になってまでお前にこき使われるとは思わなかったよ」
そしてそんな思惑など知っているといわんばかりに仮面の戦士と向かい合うコウキ。

彼は捕縛結界を出たあとリンディ達からの報告で状況を理解していたのだ。

妹分の自分が来るのを見越した時間稼ぎについても。

「お前の目的は騎士たちを止めることだろう。私の相手をしている場合か？」

「同じことだ。お前はあいつらが捕まると困る。だからこそ援護しに来たんだろう？」

どのみち戦うことに代わりが無いのなら、先に叩き潰す。

そう言外に告げて、拳を構えてファイティングポーズをとる。

表面上それに反応しなかった仮面だが内心では舌打ちをしていた。

（なんだこれは………いつたいどこで間違えた!?)

私に対して信用がないのは解るが、この状況で互いよりこちらを排除するために

念話もなしに息を合わせたように動くなんて………これが本当にあの子供か?)

一旦は激昂した仮面もはやて達の言葉に彼らが自分の排除を優先した事は理解できた。

心象が悪く目的・正体が不明の者の援護。確かに信用以前の話だ。だが問題はその判断の素早さと合理性。そして対立する立場ながら

も、

双方の立場での動きを予測し、示し合わせたように互いのために動いたふたり。

仮面の戦士たちが数年前から監視していた一つの家族。

そこで笑いあう彼と彼女の様子からはまるで想像できない行動と策略。

「…………お前といい彼女といい、どいつもこいつも人のいい子供のフリをしていたわけか！」

騙された。といわんばかりに憤る仮面。

しかしそれをコウキは本気で馬鹿にするように鼻で笑った。

「ふんっ、いつから俺達を監視してたのかは知らないが、

外から見てた程度で、俺達を勝手に決めないでもらおうか！」

「そやね、自分の見る目がないんをあたしらのせいにしてもらたら困るわ」

続くようにはやても再度“節穴”だと馬鹿にする。

無論、それは相手を怒らすための言葉でしかない。

それ以上の感情をこめて、ふたりは言葉を発していない。

「くっ！」

安い挑発だという理解はある。

けれどそれでも苛立ちはさらに募って、抑え込めそうもない。

「やめておけ、骨にヒビくらいは入っているはずだ。そんな状態でやりあう気か？」

彼の魔法でスタボロにされた両腕。袖は防護服だったため再構築されていたが
その腕から流れ落ちる赤い血は隠しようもなかった。

「舐めるな！」

スーツのような防護服の袖に魔力が注がれ、両腕を覆うように肥大化していく。

元々の色合いが白だったこともありまるで包帯を巻いたような、ギブスをしたような姿になる。

「バリアジャケットで腕を覆ってテーピングみたいにガチガチに固めたわけか。

あんたもたいがい無茶をするな………俺も人の事はいえないが」
そういつて呆れた声を出しながら、両足のブーツがカートリッジをロードし排莢する。
途端、足元からの強風に吹き飛ばされるように彼が飛ぶ。

「けど、あんたはここで潰させてもらおう！……」

暴風に乗ったコウキは拳を振り上げ、迫り

「死にかけの分際でいきがるなっ！……」

白いグローブのように固められた拳で向かい打つように振り上げ

奇しくも黒と白の一撃が空中で激突した

思惑の三つ巴（後書き）

トラヴィックの見た目は、武装錬金のシルバースキンの黒バージョ
ンが
弾帯を腰と腕に巻いている姿だと思ってくれ。それで概ね間違いが
ない。
防御システムは、少し違うのだが。

拳の記憶（前書き）

しまった、更新したつもりになってた！

拳の記憶

12月12日 PM04:54

無人世界 捕縛結界外 瓦礫の山

魔力で覆われた黒き拳と魔力で強化された白い拳がぶつかり合う。その衝撃に一瞬大気が震え、僅かに遅れて激しい衝突音が響く。同時に弾かれるように離れた二人は無言のままにらみ合う。

（思ったよりあのギブスもどきが頑丈過ぎる。

そのうえあんだけ怒らしたのに体の動きに無駄がない。

もともとの身体能力もかなり高い……接近戦はやばそうだし）

（今度はしつかり打撃の感覚があった。威力を殺せるのはジャケット部分だけ？

なら狙えるのは両手と両足……有効打になりにくそうな場所ばかりか。

それにそんなことは製作者のこいつ自身が知らないわけがない、

か)

共に勢いのまま勇んで打ち込んだ初撃だったが、それが次の行動を制限していた。

コウキは相手の硬さと苛立っていても隙の無い動きに接近戦での勝機を見出せず、

仮面は未知の衝撃中和能力を持つ防護服をどう攻めればいいのか判断がつかなかった。

だから、次の行動が早かったのは接近戦を諦めたコウキだった。

右の拳でカートリッジをロード、排莢する。その数、六。

「リボルバーシュート!!」

声と同時に突き出された拳。

そこから放たれた六つの魔力弾は弧を描き、螺旋を描きながら仮面を襲う。

囲まれる前にと上空へと逃げる仮面を追いかけるように軌跡を描いて飛ぶ魔力弾。

「それで終わりだと思っな!!」

左の拳からもロードされたカートリッジが排莢される。数は無論、

六。

さらに放出されたリボルバーの魔力弾は仮面の逃げ道を塞ぐように囲む。

「くっ!!」

合計十二発の弾丸。

先程のガトリングが数を用意するために一発ずつの魔力が少なかったのに対し、カートリッジ一発の魔力をそのまま弾丸にしているリボルバーは威力が違う。その程度の考察は込められた魔力量を感じて仮面も気付いていた。だからこそ容易に迎撃や防御が出来ない。現状の傷ついた両腕ではなおのこと。

「食らえ！」

十二の魔弾が逃げ道など作らせずに一斉に襲い掛かる。上下左右、360度すべてから迫るその包囲網に仮面は一転突破で出来る限りダメージを低減させようとした。しかしその動きが急にぴたりと止まる。途端、一条の光が仮面を囲んで襲ってくる魔弾を消滅させ、消しきれなかった残りは強固に張られたシールドの前に砕け散っていく。

「なに、っ、しまっ!?!」

それとほぼ同時にユーノを縛り付けたのと同じものがコウキの身体から自由を奪う。

両腕。両足ごと身体全体をバインドが幾重にも縛り付けていた。ただその位置は、仮面がまさに一転突破を図ろうとしていた先であったが。

「……………すまない、助かった」

彼に“動かされていた”ことを理解しつつも危機から脱した、と判断した仮面は素直にそれをしてくれた相手に感謝を伝えた。

「気にするな、もとより私の役目だ」

もっともそれを受けたのもまた仮面の戦士だったが。

「……仲間がいるとは思っていたがまさか同じ格好してくるとはね。もしかしてコスプレが趣味？」

先程まで戦っていた仮面のさらに上空。

ミッド式の魔方陣の上に立つ同じ姿の仮面の戦士。

彼に向けてコウキはわざとふざけたことをいったが何の反応もなかった。

「……………」

正確にいうのなら、ただ一枚のカードをかざしただけ。

それにハツとなるコウキだがそれはもう遅かった。

カードが消え去った瞬間、リボルバーの弾丸を消し去ったのとは比べ物にならない砲撃が襲う。

人ひとりを容易に飲み込む“太さ”の砲撃を撃ち込まれバインドされたまま瓦礫に墜ちる。

「ぐあああつ！」

腕や足ごと縛られた彼は受け身がとれずに瓦礫の上を転がった。

「ふむ……やはりその妙な防御システムはジャケットだけ。

手足のそれにまで及んでいない、か」

その姿を傷を負っている仮面の治療をしながら見下ろす二人目の仮

面。

倒れた彼の両手足にあるナックルやブーツには今の砲撃での損傷が見られたが

それに比べてジャケット部分は不気味なくらいに無傷だった。

わざわざ非殺傷設定をかけていなかったというのに。

「助けるついでに実験もしたわけか……ずいぶんとまあ余裕だな、トラヴィック！」

『了解、マイスター』

トラヴィックが呼び声に応えると同時にバインドが吹き飛ばされる。だがその一瞬に起こった出来事を二人目の仮面はつぶさに観察していた。

「なるほど、考えたものだな。

衝撃に対しリアクターパージとジャケット再構築を高速で行うとはな」

「……………そっちの短気と違っていい目をお持ちなようで……………」

皮肉げにいいながら内心で舌打ちする。

まさか二人目が初見でトラヴィックのカラクリを見抜くとは思っていなかった。

リアクターパージはジャケットを爆発させることで襲い来る衝撃を相殺するシステム。

本来最後の防衛手段であるそれを衝撃に対して常に高速で行い続ける事

騎士や仮面の攻撃を完全に殺しきることに成功していたのだ。

バインドが吹き飛んだのもパージによる衝撃で破壊されたからであ

る。

『マイスター、旗色が悪くなっているのは私の気のせいか？』

二体一のうえにマジックのタネがばれたのだ。

いい状態だと思えというほうが無理な話だった。しかし。

「ああ、気のせいだ。全力で気のせいにしろ！」

彼はどこか軽い調子で“してみせろ”といった。

どうあってもこの状況をどうにかするつもりなのである。

『また無茶苦茶なことをいいますねコウキ……』

万策尽きたとまではいわないが苦しくなったのは確実なのに

そんな事を言い出す彼に呆れたような声を向けながらも

リニスは『まあ付き合いますけどね』と続ける。

トラヴィックは無言で損傷を負ったナツクルとブーツをリカバリさせる。

「……コウ兄」

「コウキちゃん」

そんな彼に小さく、名前だけを呼ぶ声。一瞬だけ視線をそちらに向ける。

シグナムたちと違い、自由に動ける彼女らが動かないのは訳がある。

“いま”はやてとコウキの目的は仮面の戦士の排除で一致している。が、彼女もシャマルも近接戦闘及びそのサポートに向いていない。

広域支援型のはやてではコウキごと巻き込みかねずシャマルの魔法

は威力が弱い。
支援するだけなら本来は本領発揮はずなのだが今回は状況と相手、そして支援しなければならぬコウキの戦闘スタイル。どれとも相性が悪かった。

この隙に捕縛結界を破壊してシグナムたちを助ける。というのも問題がある。

そもそも仮面らは“いま”はやてたちが捕まるのを避けるために現れた。

なら、彼女達がここに残っている理由である騎士たちが解放されれば、

仮面たちがここに残る理由もなくなり逃げられてしまう。

はやてたちもここで捕まるわけにはいかないのだから故意に残る事も出来ない。

結果、ふたりはコウキの戦いを見守る以外に選択肢がなくなっていた。

何もできない無力感か、彼に押し付けてしまった罪悪感か。あるいは両方。

風を冠する主従の揺れる瞳に頷きだけ返してコウキは二人の仮面を見上げる。

同時に両足から暴風が吹き荒れ、彼を仮面の所まで押し上げた。

咄嗟に二人目が前に立ってパチンと指を鳴らす。

瞬きもしないうちに周囲から光の弾丸が連続で放たれる。

だが、それを意に介した風もなくコウキはまっすぐ直進し弾丸を防護服で消し去る。

「今度は非殺傷設定ありだが、変わらないか」

牽制というよりそれを確かめるための攻撃だと吐露する二人目を
今度は一人目の仮面が庇うように前に出て、コウキを迎撃する。
再び黒と白の拳がぶつかりあうがふたりは即座に脚を振り上げた。

「ぐっ!？」

今度は互いの蹴りが交差するが、暴風に押された蹴りが勝っていた。
押し込まれて体勢を崩した仮面へとさらなる追撃を加えようとする
コウキの手足に
リング状のバインドが掛かり動きを強制的に止められる。

「舐めるなよ！」

防護服部分ではない手足にかけられたバインド。
しかしそれぞれの部位で行われたロードカートリッジによって力技
で粉碎される。
が、すでに一人目は蹴り飛ばされた先で体勢を整えていた。

「……乱暴な解き方だな」

『乱暴に縛ったヒトに言われたくありません!』

「まったくだ！」

その距離を幸いとしてコウキは二人目の仮面に踏み込む。
蹴り飛ばした一人目に比べれば近接戦の能力が低いと判断しての行
動だ。

それに対し、仮面は両手を突き出すようにして魔力の壁を作り出す。

「ただのバリアなんか！」

ぶち抜いてやると言外に発して拳を叩きつける。だが。

「な、につ！？」

並のバリアなら打ち貫くほどの魔力をまとった拳が、通らない。自らのジャケットのような衝撃の相殺はないが入れた力がうまくバリアに“当たっていない”。そう感じたコウキの目の前でそのバリアそのものが大きく渦を巻いていた事に気付く。

(ホイールプロテクション！？)

それは防御面に魔力の渦を作り出すことで衝撃を拡散消滅させる特殊なバリアだった。

通常のバリア系防御魔法より制御が難しいが少ない魔力で高い防御能力を発揮する。

上級者向けのそれはしかし、当然ながら“無敵”ではない。

「その破り方は“知っている”。スパイラルナツコオツ！！」

最初の叩き込んだ拳とは逆の拳を振り上げる。その手には魔力が文字通り渦を巻いていた。

突き出された拳を中心にプロテクションのとよく似たそれが。

「なっ、それは！？」

驚愕の声を打ち消すように二撃目は初撃を受け止めたのが嘘のようにバリアを突破した。

ホイールプロテクションの弱点は回転する渦と正反対の回転をぶつけると

互いに打ち消しあって、無効化されてしまう事だった。

しかしコウキにはそこまで飛び込んだ勢いの分、威力が残りそれが仮面に届く。

「ぐうっっっ！」

咄嗟に両腕でカバーするが後方へと殴り飛ばされ、

一人目に受け止められるまでそれは止まらなかった。

「大丈夫か？」

「あ、ああ……だが、今は……スパイラルをなぜ奴が!？」

二人の仮面からすればその魔法を彼が使えるわけがなかった。

そもそも知っていた時点でおかしいという疑問が思考を僅かに奪う。

そこへ容赦も警告なく、コウキは左手だけを突き出して機関砲ガトリングを撃ち込んだ。

回転する手首のナックルスピナー。

連動して腕に巻かれた弾帯を飲み込んでいくナックル型デバイス。

そしてまるで本物の機関砲のように排莢されていくカートリッジ。

着弾し爆発する魔弾の余波と衝撃で舞う粉塵は次第に彼らを隠してしまう。

だが左腕の弾帯が半分以下になるまで彼は撃ち続けた。

バリアかシールドに当たって魔力を削っている感触はあったからだ。

そうして撃ち終えた彼だが、自らが巻き起こした粉塵によって

目視では仮面の位置を特定できなくなっていた。あくまで目視では。

『正面、左、きますっ！』

リニスの警告とほぼ同時に粉塵の中から飛び出す白い影。変わらぬ白いスーツのような格好の白い仮面が警告通りの方向から襲う。

正面から襲ってくる魔力で形作られた刃状の弾丸を右手で弾き落とす、

左から襲う拳打を左手で受け止めるが続いて繰り出されたもう一方の拳を

コウキはなぜか迎えにいくように頭で受けた。

正確には頭部を覆うテンガロンハットで、だが。

「っ、そこもジャケットか!？」

「当たり前だ! じゃなきゃこんな帽子被るか!」

愛好家には申し訳ないが、テンガロンは彼の好みではない。ただ頭部を守るためにはいくらトラヴィックのシステムでもある程度の面積と体積のあるものが必要だったのだ。

怒鳴り返ししながらも空いた右手で腹を狙うが、また拳がバインドで止められる。

それをしつこいとばかりに強引に吹き飛ばすがその隙に腕を掴まれ、僅か一瞬で彼の天地は上下逆にひっくり返り、投げ飛ばされる。

「っ……空中でまさか一本背負いもどきを受けるとはっ!」

すぐさまブーツから放出される風で強引に姿勢制御し“止った”。

天地が元に戻った彼は悪態をつく暇もなく襲い掛かる二人の拳を両手で弾く。

本来、空を飛べる魔導師に投げ技はあまりに意味が無い行為だ。余程のことがない限り飛行魔法で中途半端に終わってしまうからだ。だが、特殊なデバイスを着込む彼への場合には距離を取る有効な手段となっていた。

そして仕切りなおしといわんばかりに二人がかりでの猛襲。同じ格好の同じ仮面の両者が互いの位置を入れ替えながら蹴りや拳打を容赦なく打ち込み続けていく。

そのコンビネーションの息の合いようはまさに一心同体。激しい連撃に反撃の隙間はなくコウキは防戦一方となっていた。

繰り出される拳を弾き、落とし、流す。

叩き込まれる蹴りを避け、殴り、受け止める。

両手足すべてを使って彼は仮面の攻撃を捌ききる。

さながらカンフー映画のワンシーンのような応酬だった。互いのあまりに見事な攻防は見る者を半ば魅了するほど。しかし、当事者たちはそれどころではない衝撃を受けていた。

（（なんだ、これは？））

奇妙なことに三人は同時に同じことを思っていた。

ただそれぞれがそう思った理由は微妙に食い違っていたが。

（ど、どうして私達の動きにここまでついてくれる！？）

（まさか……この動きは、そんな馬鹿な！？）

(どうして、 いったいなぜ…… 身体が、 勝手に動く!?)

一人目の仮面は自慢の連携を受け切られて。

二人目の仮面はその動きに見覚えがあつて。

そしてコウキは捌く必要のない攻撃を捌いたことに。

トラヴィックのシステムならば防御はそれに任せて強引に反撃しても問題はない。

それを“ 解つて ” しながら彼の肉体はわざわざ手足で受けたのである。

仮面たちも当初はそうしてくるだろうという予測で仕掛けた攻撃。だが予想外の動きによって彼らの意識はそのうまさすぎる動きに持つて行かれた。

しかし意識をわずかにそれにもつていかれても、それが疑問でも驚愕でも。

隙を見せられない以上、始めてしまった攻撃をやめることはできない。

それは受け続けているコウキにしたって同じことだった。

「 っ!?!? 」

傍目にはまるであらかじめ予行演習でもしていたかのような動きを続けていた彼ら。

そのコウキの脳裏に、目の前の光景と似て非なるものが一瞬浮かぶ。

(な、 に…… 猫耳の使い魔? 双子の…… 戦つてるのか?)

顔がぼやけているが頭部に猫のような耳が生えている獣人の双子。

おそらく誰かの使い魔だろう“彼女ら”と戦っている誰かの視点。そのビジョンが、気味が悪いほどに、そして致命的なまでに実際の目の前で繰り広げられる連携と寸分の差が無かった。

だからだったのか

二人の手を弾いて出来た隙を突こうと彼は“両手で握っている杖”を振るった。何も、握られていない手で。何かを握った形になっているだけの手を。

「…え？」

そこで初めて目の前の光景とビジョンに明確に違いが出る。彼は脳裏に浮かんだ映像の方と同調してしまっていたのだ。

「……あぁっ！」

その事実を認識した途端。

泣き声のような、悲鳴のような声が彼の口から漏れた。妙な空振り後の隙に仮面の拳が叩き込まれたがトラヴィックによって威力を殺される。

仮面たちもまた、別の誰かと戦っている気分になって相手の特性を忘れていたのだ。だからその衝撃はコウキに届かなかった。おそらくは、運の悪いことに。

『マイスター？』

『コウキ？』

どこも見ていないさまよう瞳に映るのは当然目の前の白い仮面の男
たち。
しかしそれが脳裏に映るビジョンと混ざり合い、どちらがどちらな
のか解らなくなる。
顔を隠す仮面が、次第に双子の使い魔の“いつも”の笑顔に変わっ
た。

そして彼の唇はおそろしく自然にこう呟いた。

「……………リーゼ？」

「「つつ！！？？」」

囁くような言葉が聞こえたのは殴りかかった姿勢のままのふたりだ
け。

だが、その明らかな動揺が彼の何かを、致命的なレベルで破壊しよ
うとしていた。

「あ……………あ、あああああああああああつっつ！……………！」

瞬間、彼の意識と視界は強制終了した。
ブラックアウト

怒れる湖（前書き）

先に謝っておこう。ごめん。

オチをつけたかったんだ……（遠い目）

怒れる湖

「あ……あ、あああああああああああ……！！！！！！！！」

世界を震わすような絶叫。痛みも嘆きも苦しみも。

すべて込められたような聞く者すべてが胸を痛めるそれを発してやるける。

両手で頭を押さえる姿はまるで何かが頭から飛び出すのを堪えるかのようにだった。

『コウキ！？』

何が起こったのか。誰も理解できずに半ば茫然となっていた中。最初に我に返ったのは幸か不幸か、仮面の戦士たちだった。

「……………」

ふたりは言葉どころか念話も使わずに同時に動く。片方が帽子を奪

い、
もう一方が彼の腕を掴んで瓦礫の山と化している地面に向けて放り
投げた。

かつてあった古代都市の建造物よりもはるかに高い空から。
飛行魔法で飛ぶよりはるかに速いスピードで。

『っ、トラヴィックなんかできませんか!?!』

『無理だ、私からではナックルもブーツも制御できない!』

特殊なシステムで通常以上の数多の情報を高速処理しなければなら
ない防護服。ハリアジャケット

それに専念するためにトラヴィックのAIは二つのデバイスと厳密
には繋がっていなかった。

トラヴィックの補助として搭載されているリニスもそれは同じであ
る。

だから半ば無防備に近い頭部をさらして彼は真っ逆さまに落ちるし
かなかった。

『コウキ! しっかりしてくださいコウキ!』

必死の呼びかけに何の反応も返ってこない。

叫びもしない代わりに彼は死んだように沈黙する。

それにリニスはありもしない舌打ちや歯噛みをしたくなった。

(どうしてまた肝心な時に、私には身体がないの!?)

あれば何を犠牲にしようとも受け止めて庇うのに、と憤る。

そのうえ誰かに頼ろうにも投げられた方向がまずかった。

助けに入れたであろうシャマルやはやてがいるのとは逆の地点。

速過ぎる落下スピードを考えればその距離は彼女たちでは遅すぎる。

そしてもう地面は目前。何をしようにも手遅れの距離。

『トラヴィック！』

『任せたまえ！』

こうなれば衝突の瞬間にジャケット全体をパージし衝撃を全体的に相殺するしかない。

もともと、それでもあらわになっている頭部への衝撃は免れない。せめてと二人はジャケットを動かして彼を無理やり頭を庇う受け身の姿勢にする。

が、所詮気休めであり苦肉の策であり一か八かの行為に変わりはない。なかった。

どんなに身体が無事でも頭部にひどい損傷を負えばそれだけで人は死ぬ。

それを連想させるスピードと落下地点の瓦礫の山。

このままでは無理だと。冷静な機械が計算する。

『コウキ！』

(リニス、相殺せんといて！)

それを受け入れられず叫んだ彼女にその少女の声が届く。

訝しむ暇さえなく彼女のセンサーはそれを見つけてジャケットの防御機能を切った。

「ヴァイヒ・スツーツ柔らかき支柱！」

遠くの少女の叫びがこれほど頼りになるとリニスは初めて思った。

落下地点の瓦礫を覆うように発生する白い不定形の緩衝剤。

遠距離からの魔法を得意とする少女だからこそ間に合ったそれ。

魔法名の通り、自らが伸縮させつつコウキを柔らかに受け止める。

防御機能を切ったのは緩衝でさえ無効化してしまうから。いまだ未完成のこれは接触したすべてに対して相殺してしまうのだ。

『た、助かりましたはやて……』

『はやて嬢、感謝します』

思わず安堵から息を吐く。ような気分のふたりだ。だがそれも長くは続かなかったが。

「……………」

無言で目の前に降り立つふたりの仮面。

表情や視線はまったく見えないがそれ以上の気配が雄弁に語っている。

お前を殺す

『っ、ちょっとあなたたち、どういつつもりです!?!?』

その気配はもちろん。先程の行為も下手したら危なかった。

コウキと共に裏事情を知っていた彼女はグレアムの手下であるはずの彼らが

彼を殺しかねない行動に出るとはまったく考えていなかった。

「……………どういっても何も無い。そいつは危険だ……………」

「私たちの計画はふりだしに戻るが……………それを差し引いても、ここで消す！」

『なっ!?!?』

事情が分からないリニスは混乱するが、仮面たちは本気だ。

ふたりとてそれが及ぼす影響を十分に理解していたが、

それ以上にどこか動物的な本能で日野コウキという人間を危険視していた。

仮面には彼が開けてはいけないパンドラの箱そのものにしか感じられない。

(ど、どうすれば!?)

ここでグラムの名前を……………はダメだった!!)

『最後の保険』として彼の計画は残しておきたい。
という彼の意向も考えも理解できただけにリニスはそれを暴露できない。

「誰を、殺すっていったのかしら？」

うるたえていた彼女はそれを聞いてありもしない鳥肌になった気分になった。

周囲の気温が一気に下がったように錯覚してしまう。

無論デバイスである彼女は周囲の気温を正確に把握している。

だが、そんな彼女でさえ身震いさせる冷たさのある声が叩きつけられる。

そして仮面らがそれに反応するより早く、彼女の意を受けた糸が襲いかかる。

「ぐあつ！」

「ぐうつ！」

ミントグリーンの魔力光を放つそれは正確に、そして乱暴に仮面の首を絞めて吊るし上げた。

四つの指輪から伸びる魔力糸は彼女の魔力で可能な範囲なら自在に伸び、動く。

そのため術者の体格や腕力に関係なくヒトをふたり吊るし上げることなど簡単だった。

「……………あ、あれ？ どうもセンサーがおかしいようです。」

彼女、知っている人に似てる気がするのですが別人ですよね。

故障でもしたのでしょうか、休眠して調子を整えることにします

……………」

「リニス嬢、気持ちはわかるが現実逃避をして私を一人にしなないでほしい」

とはいえ、華奢な彼女の指先から伸びる魔力糸だけで体格のいいヒトをふたりも

いとも簡単に絞めながら持ち上げている光景は見ている者“にも”恐怖を与えていた。

「わたし、最近耳が遠くなったのかしら？」

よく聞こえなかったのだけど……誰を、殺すっていったのか教えてくれない？」

さらに、柔らかで優しい口調なのが余計に周囲に恐怖を与える。見た目が朗らかそうなどこかほんわかとした女性なのがそれに拍車をかけた。

「うぐぐっ！」

「うづうづっ！」

そして糸がより強く深く、首に食い込んでいく。教えてといいながら実質聞く気は全く存在しなかった。

「お姉さん、教えてほしいなあ……」

それでもまったく笑っていない目で甘えるような声を出した。周囲も縮こまったが一番震えたのはそれを向けられた仮面の方。

「ま、まで……われらは、ぐっ、おまえらと敵対する気は……うぐっ！」

だから苦しいながらも半ば懇願や懺悔に近い気持ちで言葉を発したが、恐怖と酸素不足で判断力が低下し言葉をかなり間違えていた。とくにシャルマル相手にそれは致命的といっても良かった。

「黙りなさいっ!!」

「コウキちゃんを傷つける奴はどこ誰だろうと私たちの敵よっ!!」

激昂し怒声を浴びせながら糸がしなり、絞めたままで近くの瓦礫の山に叩きつける。

それも一度や二度ではなく、何度も何度も怒りのまま仮面を使って周囲を破壊していく。

「ねえ、言ってごらんなさいよ。誰を、殺すっていったのよ!!」

「がっ、ぐっ!!」

「あぐっ、うづっ!!」

彼女が軽く指先を動かすだけで彼らは玩具のように振り回され、容赦がないどころか相手の命など気にも留めずに激情のまま瓦礫や地面に叩きつける。

誰かが言っていた。ヴォルケンリッターの中で一番、情が怖いのは彼女だと。

そのために自らが立てた『人殺しはしない』という誓いですら、今の彼女を止めることができない。頭に浮かんでも止める理由にまでならない。

仮面らは間違いなく守護騎士で最も怒らせてはいけない相手を怒らせていた。

「がっ……く、いいかげんにっ、しろ!!」

だが、彼らもやられたままでは終われない。

一人が魔力系を力技で引き千切って、脱出すると即座にもう一人の糸を断ち切る。

落下する相方を抱えて、シヤマルたちから距離をとった。

「かはっ、ごほっ……………はあはあはあはあ……………」

下ろされた仮面は息苦しさからようやく開放され、首元を押さえながらも荒い呼吸を繰り返していた。

「ふう、ふう……………好かれすぎているのも、問題だな」

乱れた息を整えながら彼を害する者すべてが敵だと断言した騎士を見据える。

柔らかき支柱に身体を横たえているコウキとそこへ寄り添ったはやてを

庇うように立った彼女は油断も隙もない構えでクラールヴィントを掲げながら、

それだけで人を殺せるような冷たい視線で仮面らを射抜いていた。

「っ！ サポート専門とはいえ歴戦の騎士か……………」

殺気などという“生温い”ものではない。

もはや存在すら許さないという拒絶・根絶の意思。

多くの戦場を知ると自負していた仮面たちですら畏怖させるそれ。知らず震える身体を抑えつけながら、何とか向かい合う。

なにをしている

「「っ!?!」」

そこに声が届いて仮面の戦士たちは驚いた。

今の自分達に念話をしてくる相手はひとりしかいない。

だが念のためにそれは原則しない事になっていたはずなのだ。

勝手な行動をとるな

そのため驚いてしまったが届く声は間違いなく彼らの主人のもの。
即座に立ち直った仮面らはしかし、その声に異を唱える。

(し、しかしあの男は!)

いまは戻れ、これ以上はお前達が危険だ

(……わかりました)

その正しい指摘を歯痒く思いながら従う。

本来協力するはずの相手からも敵視されてしまった以上、

仮面からすればこの場にいるのはすべて彼らの敵でしかない。

長居するだけ、不利となる。万が一捕まればそれだけで今までの徒
労が無駄になる。

だが、やるべきことはしておけ

(はっ!)

最後に付け加えられた言葉の意味を正確に察して、ふたりは動く。
地面に向けて拳を叩きつけると爆発、粉塵を巻き上げらせて自分達
を覆い隠す。

「なにを!？」

驚く声を無視し、はるか上空まで飛び上がるとそこで魔法陣を展開する。

青い魔力光を放つその上で、片方の仮面が立っていた。

「……………カバーは私がする。結界は任せる」

「解った……………広域攻撃はあまり得意ではないのだが……………」

ひとりに背中を任せて、ひとりが手の平を広げる。

その上では5枚のカードが浮かび上がって、そしてすべてが一瞬で消えた。

「っ……………断罪に振るわれる巨人の剣、爆砕の刃となりて落ちよ。

スティングァーブレイド・バーストシフト!」

一気にプラスされる5枚分の魔力ブースト。

それらをこらえながら巨大な剣型の魔力刃にして結界上部に出現させる。

まるで高層ビルそのものという途方もないサイズのそれが結界に突き刺さり爆散する。

それだけの巨大な魔力刃が爆発した衝撃は計り知れず、20名近くの局員たちが

総出で強化・維持をしていた捕縛結界はあっけなく無残にも吹き飛ばされる。

「……………はぁ……………うまく、いったか……………」

そして崩れ落ちた結界の内から紫と赤の光が飛び立って、別々の方

向へ散っていく。

遅れる形で守護獣と思われる光点も飛び去っていくのを確認すると仮面らは視線を下げた。

そこにはまだコウキに寄り添っているはやたとシャルルの姿が見えたが、

彼女達と視線が合うとそれを待っていたかのように仮面は転移してその場から去った。

結果としてその後を追うような形で、はやて達もその場から去るしかなかったのだった。

『……私はデバイスですからね。追えませんからね……ですからこれはしょうがないですよねえ』

誰に対しての言い訳か。

リニスは独り言のようにそう呟くと、一回だけ溜息を吐いた。

『これで、良かったんですかコウキ？』

「ああ……及第点ギリギリだけだな」

死んだように眠っていた顔が一瞬で目覚めた。

見ていた者がいたのなら誰しもが驚くほどの変わり身だったが、この場にいたのは彼本人とそのデバイス二人（？）だけであった。

「あいつらに仮面の連中をはっきり敵として認識させるのが最低ラ

インだし」

元々すずかの一件で心証は最悪だったのだが、緊急事態では協力・共闘されてしまう可能性があった。

今後その可能性を潰すために早期に明確に『敵』として扱ってもらう必要があった。

無論ここで仮面を潰しはやてたちを捕らえられればそれに越したことはなかったが。

『だとしても、だ。敵として認識させた相手を君は“故意に”逃がすのだから、

私のオリジナルとはいえやはりマイスターはどこか変だと思うぞ』

実の所コウキはシャマルが恐ろしい声を出した辺りから目が覚めていた。

最初は様子を見守る目的で狸寝入りしていたのだが途中で、まずいと感じた。

“このままだと捕まえてしまう”と

仮面の戦士の介入は想定していたコウキの想定外が二つ、そこで起こっていた。

「仕方ないだろ。あの仮面、“手加減”しててもあれだもんな。

シグナムたちでも本気で襲われたらどうなるか解らない。

そんなのの相手あれ以上できないし、誰にもさせられない」

彼らが予想以上に強く、本気でやりあつたら勝てない程の実力者だった事。

にも関わらず、シャマルの予想外の活躍で追い詰めてしまった事、

だ。

仮面の戦士を潰そうとは思っていたが捕まえると面倒なのだ。

最後の保険としてグレアムの計画を残しておきたいと、

そして彼らを逃がすことで『警告』をグレアムにしたいコウキにとつて。

『まったく……あなたの立ち位置はどうしていつも微妙過ぎるんですか！』

どれかにきつちり腰をすえて落ち着いてください！』

サポートする身になってください。

というデバイスらの言葉に渋面になるしかない。

コウキは管理局側に味方しながらも、自分の思惑で動いている。

フェイトとプレシアを再起させようとやりたい放題したジュエルシード事件ばかり。

全陣営の思惑と計画を利用するために無理には誰をも追い詰めようとしぬい闇の書事件ばかり。

「耳が痛いなあ……」

苦笑しながら、溜息を吐く。彼が抱えている問題は多い。

彼の理想とする形で解決するには今の中途半端な行動をし続けるしかない。

自分自身を見捨てることで他をすべて拾い上げようとする彼だが、そのやり方で、彼一人だけの犠牲で残りを救うのは厳しいといわざるをえない。

けれど彼には“ソレ”以外にうまいやり方も犠牲にできるものもない。

(まいったね、ホント………身体がもうひとつくらい欲しいよ)

とはいえ

『まあ、ぶつちやければ……もう戦えなかったただけだな』

「お前もなあ……身も蓋もないことを言いやがって」

デバイスの言葉に呆れながらも自らの腰元を眺めて溜息が出る。

『ああ……プレシアが、一晩かけて作ったのに』

額を押さえながら崩れ落ちる使い魔の姿が頭に浮かぶような声を聞きながら

マンションに用意された自室でいまも眠っているだろう彼女を思う。

「また同じくらい作って、っていったら……倒れるよな」

再度腰元に視線を下ろして、半ば確信するように口にする。

何せそこに巻かれていたはずの弾帯のカートリッジがもう十分の一以下になっていた。

この本数ではもう3分もこのジャケットを維持して戦えない。

大技を一回食らえば、もうそれだけで崩壊する。

それが今回の戦いを終わらせたなんと情けない理由だった

「俺ってどうして、こういつとこる締まらないよなあ……」

溜息のような嘆きがこぼれ落ちて、無人世界にむなしく響くのだ
た。

第13話予告

トラヴィック「実りのない戦いが終わり、訪れた僅かな日常」

リニス「しかしそれは選択の時が迫るコウキの前では、あまりに儚い」

プレシア「迫る罫を貶める罫。裏を読んでさらにその裏を読む」

リニス「ふたりの主が互いの想いゆえに知略をしばる」

トラヴィック「だが、その影でそれらを踏みにじる謀略が蠢き……」

プレシア「少女達の目の前で、ついに恐れていた事態が起きる」

トラヴィック「次回、魔法少女リリカルなのは異伝・第13話」

リニス・プレシア「『落ちる夜天の星』に」

全員「……ドライブ・イグニッション」

アリサ「ダメッ、行っちやダメ!!」

第13話予告（後書き）

なんだけど……………

次回はたまってきたオリジナル分の説明回第二弾！ にします。

デバイス編（前書き）

まずはデバイスから。ということですが、
数はそんなにないのだけど……

デバイス編

これまでに登場したオリジナルデバイスの紹介と解説。
登場順番で説明する。

ジュエルシードロッド（仮称） 擬似デバイス

フェイトを止める力を求めたコウキの願いを叶える形で

ジュエルシードが生み出した擬似的なデバイス。

くちばしのような先端を持つため槍のようにも見え、

その中央部にはジュエルシードがそのまま埋まっているが、

実は本物はずっと懐にしまったままでありそれは飾り。

彼が直前に作成した甲冑と同じように何かしらのイメージを元に作成されている。

またフェイトはこれに似たデバイスを過去に何かの資料で見た記憶があるらしい。

擬似的なデバイスであるため、デバイスとしての能力は低い

ジュエルシードが生み出したものなので蓄えているエネルギー量は莫大。

これを所持していたときに使った魔法のほとんどはそのエネルギーが使われているため

本人の魔力はまったく使われていない。

S2U改（白） ストレージデバイス

はやて個人がデバイスが所持していなかったため、戦力提供の見返りという名目で貸与されたデバイス。

クロノが持つS2Uの予備機で同型同性能。

色は使用者によってある程度自由に変更可能なため、

はやてによって白を基本カラーとする姿に変えられている。

当初一般的な武装局員用のデバイスを貸与されたはやてだったが

それを模擬戦時にその莫大な魔力で壊してしまい他にあったデバイスのなかで

最も大きな魔力に耐えられるS2Uを貸与することとなった。

そのさいにアースラの設備で可能な限りはやて用に調整しなおして魔力耐久値が上げられているがそれでもはやての魔力の大きさには完全には耐え切れておらず、はやては魔法使用時には

毎回、苦手とする細かい出力制御をしなくてはいけなくなっている。ちなみに音声機能や録音機能はベルカとミッド両方を使用するかねあいからオミットされている。

ジュエルシード事件後に報酬扱いとして正式にはやてに贈与される。

バルディッシュ・リニス インテリジェントデバイス

リニスがバルディッシュを作成する前に組み立てた実験的なデバイス。

初めてするデバイスの組み立てに慣れるためとフェイトに渡すなら完璧なものを、

という想いから文字通り初めから『試し』目的で作ったデバイス。

その性能は最終的な完成品であるバルディッシュに劣り変形機構が

なく、

待機状態とアックスフォームしかない。

だが圧縮魔力による魔力刃を作成に限定すればバルディッシュより速度と数で勝る。

そのAIは製作期間の短縮を目的としたリニスの人格コピー。

いつか消える自分がそんなものを残すわけにはいかないが、

AIとはいえ自分のコピーを消すのをためらって、存在を隠されていた。

以後、消えるその直前までリニスはプレシアとフェイトの板挟みの悩みを彼女に吐露していた。

（庭園に同じ立場の存在がいなかったため、最後には友人のような関係になっていた）

オリジナル・リニス消滅後はバルディッシュの予備機として沈黙を保っていた。

形状はバルディッシュと非常に似ているが斧頭の部分は若干丸みを帯びている。

色はクリスタルは白、フレームは白銀。

そのほとんどの機能を人格を維持するために使用しているため、デバイスとしての機能はかなり制限されており処理能力はあまり高くない。

プレシアとの時の庭園での戦いでコウキの手に渡り、以後彼個人のデバイスとなる。

トラヴィック ジャケットデバイス

（この時点ではその名称はなくインテリジェントデバイスとして登録されていた）

ミッドとベルカの技術とコウキの閃きの融合作であり、

後に新たなデバイスの種類となるジャケットデバイスの第一作目。その名が示す通り基本形がバリアジャケットそのものでありそれ以外の姿はない。

より正確に言えば三つのデバイスを強引にひとまとめにしているといった方が正しい。

防御能力に特化させた全身を覆う黒いコートのようなジャケット型のインテリジェントデバイス。

両手にある非人格型のアームデバイス・ガトリングナックル（黒）。

両足に装備された非人格型のアームデバイス・ホバーシューズ（仮）によって構成される。

展開（装着）時には弾帯状態（金属製分離式）のカートリッジを体に巻いている。

コウキが自らの特殊な状態でも戦うために作り出した物ですべての魔力消費を

カートリッジに依存したものになっている。

そのためその最大装填数と一戦での消費数はかなり多い。

待機状態は黒いクリスタルで容量の関係で待機状態でもかなり大きめ。

初出勤のさいは今だ未完成で補助のためにリニスを搭載していた。

基本使用言語は日本語の男性型人格。コウキをマイスターと呼び忠誠こそ誓っているが

あまり敬ってはおらず、言い方は丁寧だが彼の言動にいちいち文句をつけたがる。

ただしコウキに対してのみでそれ以外の者に対しては紳士的な態度をとる。

そのためなのか女性にたいしてはどんな人でも「嬢」と呼ぶ。

実のところかなり革新的なアイデアと技術の宝庫のデバイスであり、

尚且つ無茶苦茶な手法で組み立てられたので作成されていくその過

程を

見ていたマリーは途中から頭を抱えてしまうほど。

彼女曰く「高度で新しい技術を大雑把に使っている」とのこと。

だがどうもそれ以上の秘密があるらしく未完成だったのはそちらが原因だったもよう。

名前の由来は原作ルールに則り、オペル開発の車「スバル・トラヴィック」から。

ナックルを持ち、ザフィーラと同じく「盾」の二つ名を持つ彼にこれほど都合がいい名前があるとは思わなかった。

ガトリングナックル アームドデバイス

トラヴィックに收容されている非人格型のデバイス。

管理局にあるデータの中からコウキが偶然見つけたアームドデバイスのカスタム型。

大元のリボルバーナックルに比べて、ロードカートリッジの速度がかなり上昇している。

しかしそのために耐久力という点ではリボルバーに少し劣る。

トラヴィックの攻撃を司る部分、ではあるが初出動のさいは

未完成ということもあってトラヴィックのAIとつながっていないかった。

ホバーシューズ(仮) アームドデバイス

トラヴィックに收容されている非人格型のデバイス。

騎士たちと戦うためには飛行魔法が必須であったが、

実質使えない状況でありそもそもコウキが苦手としていたこともあった

ならばと開き直って、浮くことが出来て最低でも突進が出来ればい

い。

という考えで作りに出されたカートリッジを魔力の風として変換するだけのデバイス。

自身が生み出す暴風に耐えるために強度は高い。

名前は仮のものだが、以後これといって変えられることはなかった。

トラヴィックの移動を司る部分。初出動時は調整不足で

トラヴィックのAIと物理的に繋がっていなかった。

魔法編？（前書き）

いちおうこれでオリジナルは全部のはず。
質問や疑問はいつでも受け付けております。

魔法編？

オリジナル魔法解説

七話から十二話までに出てきたオリジナルの魔法を物語の登場順で、魔法そのものとそれを使った意図や背景を説明します。

ここで説明されていないものは原作に存在するものと同一か、既存の魔法の組み合わせ、技の範疇という扱いです。またここでいう「原作」とは魔法少女リリカルなのはシリーズすべてのこと。

「本編」とは私の二次創作話のことである。
(魔法の種別分けについては「[Nanoha Wiki](#)」を参照しています)

『念話(対象者非通信型)』 『ミッドチルダ式・補助魔法』

原作にもある魔法だがリニスが変則的な使い方をしたのでここで解説しておく。

もともとプレシアとフェイトの関係がうまくいっていないことで自身の使い手を探していた彼女にとってコウキはまさに千載一遇のチャンス。

なんとしても“彼だけに”コンタクトをとらなくてはいけなかった。そのため使われたのが特定の相手にだけは“聞こえない”この念話である。

本来なら名も知らない他人でも目視できる程度の距離ならば、その相手だけに念話を送ることは可能である。

しかしデバイスである彼女にそれはかなり難しい処理が必要になる。そのため聞かせたくない相手であるフェイト・アルフ・プレシアにだけは

聞こえないように調節したうえで不特定多数の誰にでも届くように念話を送っていた。

そのため当時庭園にいた彼女達以外の唯一の人物だったコウキだけが聞こえた。

『スタンフラッシュ』 ミッドチルダ式・補助魔法

コウキがアースラ側から貸与された簡易ストレージデバイスに仕掛けた魔法。

強烈な閃光を発して相手への目晦ましを行う魔法。

込めた魔力量で光の強さや発光時間を調整できる。

難易度はかなり低くミッドチルダにおいては子供がいたずらで使うような魔法である。

(むろん悪質な使われ方だった場合は子供であつても処罰される)

コウキは元々、簡易ストレージを戦うためではなく、

すり替えた本物のジユエルシードを仕舞うために持っていったのであらかじめ待機状態に戻ると特定の手段でなければ起動しないよう

に様々な細工がされていた。

このスタンフラッシュはその一つで、あくまで奪われた時のための保険のようなものだった。

コウキ本人の声で『全力で邪魔をしてやる』というフレーズで発動するようになっていた。

ちなみに『全力で消し去ってやる』で自壊プログラムが作動するようにもなっていた。

『人体操作の魔法』 分類不能・古代魔法

かつて、管理局が誕生するよりずっと前の時代に存在していた古代魔法のひとつ。

名が示すとおり対象の肉体を操作する魔法。

あらかじめ対象者に仕込んでおき術者の任意のタイミングで発動が可能。

こういった精神や思考、肉体そのものに干渉するタイプの魔法は時代の流れと共に邪法扱いを受け、しだいに術式そのものが消されていった。

この魔法に限っていえば管理局誕生時点で伝説の領域の魔法だった。プレシアによればアルハザードから零れ落ちた技術の中に紛れていた魔法らしい。

ただし完璧な状態ではなく、かなり魔法として欠損していた。

そのため本編では半ば意識を失った状態のフェイトに対して始めて使えた。

当時のプレシアからすれば言うことを聞かなくなった時のための保険。

しかし本人いわく魔力の消耗と維持に持っていかれる思考が多く、一時的にリニス並の高度な使い魔を維持するほどの負担がかかる。

本編で使用したほどの状況でなかったら使うことはおそらくなかった。
最終的にはなのはからの魔力攻撃によって術式をいとも簡単に乱され自然消滅してしまった。
現在、プレシアの魔導師としての“能力が”低下したことで使用は不可能となる。

『アックスセイバー』 ミッドチルダ式・射撃魔法「誘導制御型」
フェイトの使用するアークセイバーの斧刃版だが、性能はがた落ちしている。

魔力密度の関係で純粹な切れ味は増しているが刃先の長さの違いで攻撃範囲は狭まっている。
また、回転する幅が短いために射程距離も短い。
本家アークセイバーの様々な利点である遠隔爆破、変則的な軌道、バリアを噛む性質などを
持っていないがそれはデバイスであるリニスの意図的なチューンダウン。

本編の使用された局面でそれらの必要性が低かったのと
コウキの魔導師としての技量が拙いために完璧な状態で使用できなかった。

余談だが、彼女が常々コウキの技量を酷評するのはこの戦いでの苦労からである。

『デイベインセイバー』 ミッドチルダ式・砲撃魔法「斬撃直射型」

高町なのはのディバインバスターの、コウキ流のバリエーション。のちに新たな分野の魔法として、斬撃直射型と呼ばれる。

魔力刃を飛ばしたわけでも、魔力斬撃を飛ばしたわけでもない。斬撃の形をした魔力砲撃を“撃つ”魔法。

魔力刃作成に特化したバルディッシュ・リニスを活かすためにコウキがあの場合、あの瞬間に思いついた魔法。

もともと彼にはこの規模の砲撃を放つ下地が無かったが、その技量不足な面はジュエルシードのエネルギーで力技で解決している。

同規模の魔力を込めた砲撃に比べれば破壊力や威力範囲では劣ってしまうが

刃状に凝縮されたソレの一点に集中した威力は本家を超える。

本編ではコウキの中でなのはの魔法というイメージが強かったために魔力光がこの魔法の部分だけ桜色に変化している。

ただし、なのは自身は魔力刃作成が得意でないせいかな。

事件後コウキから教わったが習得はできなかった。

また逆にきちんとした魔導師としての教育を受けたフェイトは

斬撃と砲撃を組み合わせるといった概念が理解できないため使えない。良くも悪くも得手不得手を持たず魔導師の常識を持たないコウキだからこそ使える魔法。

『サンダースマッシュヤーO・D・J』 『ミッドチルダ式・砲撃魔法「直射型」』

次元跳躍攻撃規模の魔法をあえて目に見える距離で放ったもの。

本来次元跳躍攻撃に必要な様々な要素を威力向上に使うことで破壊力が増している。

そのため「O・D・J（次元跳躍の略）」というのは便宜上つけら

れているだけであり、
実際には通常より格段に高い威力のサンダースマツシャーである。
その威力はすさまじくゴーレムを一瞬で6体も消し去り庭園の天井に大穴を開けた。

威力が高すぎる弊害として放った術者にも危険が及ぶ可能性や
対象物の状態を目視やサーチで確認できないほどの余波が発生する。

『封印干涉魔法』 ミッドチルダ式・補助魔法

シーリング魔法によって封印状態にあるモノの封印に干涉する魔法。
あくまで施された封印に干涉するので封印されたモノには干涉しない。

仮面の戦士がジュエルシードを利用して、さらなる騒動を起こそう
として放った。

これは彼（彼女）独自の魔法であり、本来は魔導師教育で使う魔法
で、

シーリングの鍛錬において対象から封印だけを解く。

苦手の術者の封印や失敗した封印などを安全に解くために生み出さ
れた。

本編では邪魔が入らないように同時に魔力による衝撃波を放ってい
た。

『ジュエルスマツシャー』 ミッドチルダ式・砲撃魔法「直射型」

ジュエルシードのエネルギーをそのまま魔力として放出した魔法。
サンダースマツシャーの術式を参考に行っているため雷をまとわない

それともいえる。

莫大なエネルギーを持つジュエルシードからエネルギーを借りているため

コウキの予想以上の破壊力でヒュウドラの首を三つ消し飛ばし庭園の壁に穴をあけた。

ジュエルシードの莫大なエネルギーだけが特徴であり、魔法としては単純な直射型の砲撃魔法に過ぎない。

『シーリングキャノン』 ミッドチルダ式・補助魔法

封印を目的とした魔法であり原作でフェイトやなのはがよく使っていた魔法のクロノ版。

見た目は砲撃魔法だが、破壊力はない。あくまで遠い対象ヘシーリングを届けるための魔法。

本編では一個のジュエルシード消失と一応の核だったプレシアを失ったことで

弱体化したヒュウドラ内の四つのジュエルシード封印に使われた。

『人避けの結界』 ミッドチルダ式・結界魔法「エリアタイプ」

なのはたちがフェイトと別れの挨拶をしたあの公園に張られていた結界。

朝方とはいえ彼ら以外の人がいなかったのはこのため。張ったのはクロノ。

通常の結界のように術者の任意の範囲と人物を切り取るものではなく、

張られた範囲に影響を及ぼすタイプ。

人避けとあるが結界から発する微弱な魔力で相手の無意識に働きかけ、

その周辺に近寄らないようにするという仕組みなために、

魔力を持っている者の場合その人自身の魔力で

結界の魔力がかき消されてしまうので効力がない。

地球のような魔力を持つ者が基本いない世界でなければ使えないが管理外世界ではそういった世界が珍しくもないので「うみ」の局員はわりと頻繁に使う。

十二話においてフェイトたちの護衛として隠れていたプレシアたちも使っていた。

『睡眠誘導』 古代ベルカ式・補助魔法

精神世界において管制人格がコウキに、

そして本編十話内でシャルマルがコウキに使った魔法。

対象者に緩やかで穏やかな睡眠を与える。ただしあくまで誘導。

そして誰に対しても使えるわけがなく、魔法を使う側と受ける側に強い信頼関係と受ける側が魔法を受け入れることが前提となる。

前者の場合は半分眠っている状態で相手が管制人格の彼女だったから。

後者は術者がシャルマルでコウキがあの場合での抵抗を放棄したため、かかった。

『魔力衝撃波』 古代ベルカ式・魔力付加攻撃

はやての悪意のある誤った情報を鵜呑みにした女性騎士たちが、

コウキへの制裁、あるいはお仕置きのために放たれた魔法。
類似する魔法としてシグナムの「陣風」シユトルムウインデ

という魔法があるがそれよりは威力は大幅に落ちる。
正式にある魔法というよりは本編の状況下で危害を加えない範囲で
ダメージを与える魔法をこの瞬間彼女たちが作ったというべき。
さすがに直接コウキを傷つけることは心情として出来なかったが
衝撃波であるため彼はかなり食らった。だが、一番ダメージを受け
たのは浴室である。

余談だが浴室の修復には二週間かかり、その間の風呂はスーパー銭
湯だった。

『ナイトメアハウル』 古代ベルカ式・砲撃魔法「直射型」

触れると爆発する魔力を凝縮した球体を設置する「ナイトメア」の
発展魔法。

バリエーションの一つで、設置した球体から強力な砲撃を撃つ魔法。
一度設置しておけば魔力チャージが必要ない分、早く砲撃できる。
また破壊されない限り固定砲台としてそのまま残しておける。

本編ではその球体にあたる部分をカートリッジで補って砲撃魔法と
して使用した。

同名魔法が原作ゲーム「魔法少女リリカルなのはA・S・THE
BATTLE of ACES」にて

存在しているがそれとは若干仕様が異なる。

『サンダーネット』 ミッドチルダ式・捕獲系魔法「ネットタイプ」

ネットタイプは他の捕獲系魔法に比べると拘束力では弱いものの、小さな対象を複数同時に捕獲するのに向いている魔法である。このサンダーネットはスタン効果を持ち、捕らわれると動けなくなる。

本編ではプレシアがシグナムの行動範囲を狭めるために使われた。

『結界破壊魔法』 古代ベルカ式・広域攻撃魔法

呪文詠唱だけで終わってしまった為に正式名称及び詳細は不明。

「我は希う、戦場を駆ける一陣の風を」

「其は巨人の息吹、我らを縛る戒めを吹き飛ばせ」

という呪文からおそらくは結界破壊に特化した風（衝撃波）による攻撃だと思われる。

意表をついたコウキの登場に詠唱は終えていたが使用されることはなかった。

『リアクターパージ・コンテナウエス（Reactor Purge
e Continuous）』

ミッドチルダ式・防御魔法「フィールドタイプ」

防護服が持つ最終防衛機能であるリアクターパージを連続で行う防御システム。

現在、コウキが作成したそのみに特化したトラヴィックだけが使える。

外部からの衝撃に対し、高速でリアクターパージとジャケット再構成を行っている。

言うのは簡単だが、それを相手に悟らせないスピードで、襲いくる衝撃とほぼ同程度の規模でパージする必要があるため、制御しているAIにはおそろしく高い処理能力が求められる。攻撃する相手からすれば見た目には何か変化が生じたようには見えないが、

繰り返した攻撃が強力であればあるほど非常に違和感のある手応えや感触を味わう。

本編では騎士たちや仮面の戦士の強烈な一撃を防ぎきっているが、その特殊すぎるシステムゆえに「服」として構成されていない部位では使えないという欠点がある。

(説明とは関係ないが、Continuousの読み方を教えてほしい)

『シュヴァルツェ・フィスト』 古代ベルカ式・魔力付与攻撃

シュヴァルツェ・ヴィルクング(原作登場魔法)という拳に打撃力強化と

効果破壊の能力を持つ魔力を加えて行う格闘攻撃から、

効果破壊を取り外し、打撃力をさらに強化した純粹な魔力の鉄拳。

使用時には指先から肘ほどまでが黒いもやのような魔力に包まれる。

このもやは打撃力強化のためでなく腕の保護が役割。

本編中で「魔力をまとった拳」といった表現があればおおよその魔法である。

本来ならカートリッジを消費する必要のない魔法だが、魔力が使えないコウキは腕一本につき一発分消費している。

『シュツルム・バイン』 古代ベルカ式・移動魔法

カートリッジの魔力を風に変換することでコウキを力技で浮かしている魔法。

「暴風の脚」という名の通り、その本来の姿は強烈な暴風。

一発分を消費することでコウキを吹き飛ばす突進の形で高速移動させる。

移動魔法に分類されているがその衝撃は大人一人を

簡単に吹き飛ばすほどなので攻撃にも転用が可能。

蹴りにこの暴風をプラスすることで威力を向上させている。

『ガトリングシュート』 近代ベルカ式・射撃魔法「直射型」

一言でいえば魔力弾を放つガトリング砲。

ナックルが弾帯を兵器のそれと同じように飲み込み、排莢していくので

一見するとカートリッジ一発で魔力弾一発を撃っているように見えてしまうが

本編使用時の場合はおおよそ一発で10〜20発の魔力弾が作られ、発射されている。

この数は術者が任意に変える事が出来るが、数を増やすと一発ずつの威力が落ち、

発射間隔が短くなっていくが、威力を上げると数が減って発射間隔が長くなってしまう。

術者には対象や状況に応じての数の調整が求められる。

近代ベルカ式なのは参考にした魔法の術式がそれだったため。

『魔力テーピング』 ミッドチルダ式・防御魔法「フィールドタイプ」

防護服を作成する魔法で強引に損傷した腕を覆いつくすことで一時的にテーピング、籠手のような状態にした。

仮面の戦士の技量もあってコウキのシュヴァルツェ・フィストと衝突してなお、彼に固いといわせるだけの強度を持つ。

本来は治療を受けられない状況下だったり治療系魔法が不得意の術者が

応急処置として考えられた魔法。

『リボルバーシユート』 近代ベルカ式・射撃魔法「誘導制御型」

六発の大型魔力弾を同時に発射する魔法。

本編では六発のカートリッジを使ったが一般的な魔導師なら二発で充分。

誘導制御型ではあるが六発すべてではなく、そのうちの一発だけで残り五発はその一発と連動するようになっていただけである。

そのため六発すべてをバラバラに動かすことはできないが、

一発分の制御で六発の魔力弾を操作できる利点がある。

自身の誘導制御は高くないが手数で攻めたい時のために考えていた魔法。

同名の別魔法があるがそれとはまったく関係ない。

こちらは六発の魔力弾を放つからリボルバーシユート。

あちらはリボルバーナックルから放たれたからリボルバーシユート。

『スパイラルナックル』 ミッドチルダ式・魔力付加攻撃

ミッド式では本来存在しない魔力付加攻撃。

ベルカ式を真似たわけではなくこの魔法を生み出す過程でこの形に落ち着いた。

魔力を螺旋、渦状にして回転させて拳に乗せて相手に叩き込む。

少ない魔力でも回転させることで威力を底上げしている。

正確にはスパイラルと呼ばれる肉体や武器、別の魔法に付加する魔法で、

杖であればスパイラルロッド、砲撃魔法にやればスパイラルキャノンとなる。

もともとはホイールプロテクションの発想を攻撃に転用した魔法。

ある魔導師が、上司の使い魔が得意としたこの防御魔法を打ち破ろうとして開発。

開発そのものには成功するがホイールプロテクション以上に

術者に高い技量を要求してしまいその魔導師以外には使えない代物になってしまう。

そのため本編でコウキが完璧に使えたことに仮面の戦士達は驚いた。

『変声念話』 ミッドチルダ式・補助魔法

名前の通り念話での声を変える魔法。

念話のバリエーションではなく、変身魔法の一部というのが正確な表現。

完全な変身魔法を使うと実際の声だけでなく念話の声も変質する。

しかし他者への変身や外観の偽装が法律で禁じられていることもあって

滅多なことがなければそこまでの完璧な変身は行われない。

これはその声が変わる部分だけを単独で行う魔法。
犯罪に悪用できてしまうので変身魔法同様、基本的には違法である。
本編において仮面の戦士達を撤退させるためにグレアムの声で
コウキが念話を彼ら（彼女達）に送っていた。

『ステインガーブレイド・バーストシフト』 ミッドチルダ式・広
域攻撃魔法

魔力刃「ステインガーブレイド」に通常以上の魔力を注ぎ込み、
相手に叩きつけて爆散させる魔法。本来は広域攻撃ではなく射撃の
誘導制御型の魔法。

それをカード五枚分の魔力ブーストで強引に巨大化させ広域攻撃魔
法として使用した。

そんな無茶をしたのは仮面の戦士が広域攻撃をあまり得意としてい
ないため、

使い慣れた魔法をその域の破壊力を持たせたほうが確実との判断か
ら。

だがビルに匹敵するほどに巨大になってしまったのは魔力集束がう
まくいかなかったため。

それでも威力はすさまじく約20名の武装局員が維持・強化してい
た結界を崩壊させ、

余波でその内外にいたなのはやアルフたちの身動きを封じてしまう。
原理自体は単純だが同じことをしても同じ規模の魔法を使えるほど
の魔導師は

いないといってもいいほど難易度が高い。

魔法編？（後書き）

次は人物編？であります。
更新はきつと、多分、明後日。

人物編？（前書き）

裏設定大放し！！

これを書くのに本編執筆が遅れたのは内緒だ！（え？

人物編？

？が原作との違いに重点を置いたものなら、

今回は単純な紹介やこれまでの中で描かれていないことや

その裏で何をしていたか、何を考えていたか。現在の状態、などを記している。

しかし内容の関係や今後の展開のこともあり、

すべてのキャラを網羅してはいません。あしからず。

注意：あくまでオリジナル分の補足であり当然ながらこの話の中での設定です

『日野コウキ』

主人公。

家族が実質ふたり増えても変わらず家主として

日野家の大黒柱として振舞うものの、自身を子ども扱いするプレシアには

少しだけ戸惑いながらもその扱いを嫌がってもいない。

自分専用のデバイスとなったりニスが自分に対して特に手厳しいのを表面上は辟易としているがその裏にある気遣いと心配には気付いて

おり、
魔導師とデバイスとしてはあまりいい相性ではないが、
その互いの人格という面でみれば決して悪くはない。

本編での彼の行動のほとんどは自身の死後を考えてのこと。

シグナムたちを受け入れたのは、はやてを任せるため。

高町家との再会を決意したのも、自分の死後力になってほしかったから。

プレシアを引き取ったのも、戸籍を持つ大人が家に一人はいてほしかったから。

現在、体内の残存魔力量からおそらく12月を超えられない。

その対処法への考え方の違いから管理局側に付いて、

自らの騎士達と対立しているがその行動すら利用している節がある。

『高町なのは』

原作主人公。

長年憧れ続けていた相手との再会は嬉しかったが、
同時に同じ想いを寄せる相手が複数現れてしまい、

そのうえ自分の親友たちも参戦したことには正直複雑な感情がある
ものの、

むしろそのみんなのことも好きなので同志だと思っている。

コウキの力になりたかったのに結局また助けられた。

自分だけがコウキに対して何もできていない、という思いに囚われている。

良くも悪くも作中人物の中では一、二を争うほどコウキ中心の価値

観で

物事を考えているが、その方向性ははやてとは逆方向である。

何もしてあげられなかった無力感を長く味わっていたのはからすれば

「力になりたい」「望むことをしてあげたい」という気持ちが強い。しかしはやて達の考えも否定は出来ないために

原作に比べると戦いながら語りかけることが減っている。

ヴィータに襲われ、はやてに騙される形で蒐集されるが、

フェイト同様それで友達をやめたつもりはなく裏切られたとも思っていない。

騎士達との対立に苦悩するコウキの助けになろうと協力する。

が、どうもコウキによれば彼の真実を語っていない言葉を見抜いているらしいが……？

『フェイト・テストロツサ』

アースラでの日々の中がかつての明るさを完全に取り戻す。

同時にプレシアの迂闊な行動とコウキの策略で、彼女の生存には気付いていた。

フェイトがプレシアとの再会にアルフほど動揺していなかったのはそのため。

だからなのかリンディからの養子縁組の話について現在は

「しばらく保留にしてほしい」と伝えている。

けれどすでに満更でもないようで、プレシアも賛成している。

裁判については保護観察付きの実質無罪扱いの結果が出ている。

本編で描かれていないが原作同様グラムがフェイトの保護観察担当。

原作同様の話をして、名目だけの保護観察となっている。
ちなみに、プレシアから友達になろうといわれた時の
正直な感想は「その手があったか！」的なものだったりする。

恋愛というものに対して、知識と経験が足りなさすぎるために
自らの想いへの自覚度は低いものの、初対面から続く彼への興味と
信頼は強い。

男女に関して無知であるため将来的にはコウキと彼を好きな大好き
なみんなと

一緒に暮らせたらいいな。と無邪気に考えている。

コウキによれば彼女も真実を語っていない彼の言葉を見抜いている
らしいが……？

『八神はやて』

日野家の影の支配者。

とくに家計面では誰も彼女に逆らえない。

日常的にコウキをからかう、辱める、逆セクハラする。

ことにかなり全力投球しておりプレシアたちを受け入れたのは
半分はそのネタが増えると思っていた。

だが残り半分は「これでコウ兄のハーレム要員増えた！」的なこと
を考えている。

ただし面白がっているわけでもハーレムを容認しているわけでもな
いが、

彼の「背負うモノが多いと頑張るが無いと無気力になる」という困
った性質から

コウキの周囲を彼を強く想う女性で囲めばそれが「生きがい」にな
ると踏んでのこと。

一度家族を失い、悲観し絶望していた自分に新しい家族や友達が出来たように、
「生きてさえいれば」という気持ちが強いため誰よりも彼の「命」を大事に思っている。

当初はコウキの考えも騎士の行動にも否定も肯定もせず
中立を装って家で留守番をしていたが実際は影で騎士達を援護していた。

大量のページを稼げると踏んでなのは襲撃を指揮して彼女たちを直接蒐集する。

覚悟していたがその後何度か夢に見るほど心を痛めていた。

『ヴォルケンリッター』

事件後は家族も増えて、いくつか騒動もあったが、
かつての騒がしくも穏やかな日々に戻っていた。

しかしリニスからコウキが「時間がもうない」と口にしてきたと相談されたことで疑問を抱き、闇の書の問題が解決していなかった事に気付いてしまう。

最初に止められた時にすでに知識と知恵を出し切っていた彼女達
もはや闇の書完成に賭けるしかないと判断し秘密裏に蒐集活動を始めた。

しかし勘の鋭いコウキに二週間もしないうちにバレてしまう。
そこで口論となるも話し合いは平行線となって騎士たちは日野家を飛び出すことに。

八神家を拠点にしていた原作と違い、拠点をころころ変えて
広範囲で活動していたためにそれを追ったコウキとプレシアは
なのは襲撃事件までの間に三度しか遭遇できず、

またその後の局の捜査もかいくぐることに半ば成功している。

原作と違い、完成すれば助かる。とまでは考えておらず、ある程度の危険性は認識している。それが正確な認識とは言いがたいものの

コウキの持つデバイスへの適合性の高さやロストロギアとの相性の良さに賭けている。

『プレシア・ヒノ』

本名プレシア・テストロツサ。

しかし彼女がその名に戻ることはこの先二度とない。

ジュエルシード事件後、肉体や魔力波動が変質したことを言い訳にして、

コウキとリンディが悪巧みした結果、日野家で精神的な療養に入ることになる。

テストロツサとしては事実上死亡扱いになり、リンディが管理局の力で

地球での戸籍を用意され、戸籍上はコウキの気が遠くなるほど遠い親戚扱い。

周囲にもそういう存在だということにしてある。

当初、強すぎる罪悪感や肉体と実年齢のギャップなどからかなり情緒不安定気味だったが日野家やその周囲の人々との

温かい触れ合いと賑やかで穏やかな日々が彼女本来の人格を呼び戻し、

若返った肉体年齢と同程度の精神年齢に落ち着く。

そのおかげで「アリシアの母親に戻る」という事の意味と難しさをわりと肯定的に受け止めている。本人曰く「今はやっと女に戻れた

ぐらい「らしい」。

とはいえ一番強い罪悪感を持つフェイトやアルフには再会した当初から内心も態度もビクビクしていたのだが、フェイトとは友人。アルフとも知り合い以上友人未満ながら良好な関係をスタートさせている。

家事に関しては裁縫を除けばわりと万能であるが完璧主義気味であり、

適度に手を抜くということができないのを本人は気にしている。

日野家の実質的な主治医のような立場の石田医師と親しくなったこともあり、

彼女の望みである「日野家の大人」として振舞おうとする。

当初は空回りしていたが、最近ではわりと年長者らしくなっていた。

魔導師としては素質がなかったアリシアの細胞と融合したことや

SSであるための条件の魔力供給源がないこともあり、

ランクはおおよそAA+程度まで落ちている。

騎士たちの蒐集活動に即座に気付いたコウキから、

隠されていた様々な秘密を聞かされ騎士たちの想いを理解しながらも科学者としての視点から闇の書完成こそが危険なのではと感じてコウキ側に協力する。

だが決してコウキの計画を認めただけではない。

ちなみになのは襲撃事件より少し前に一度蒐集されている。

彼女が蒐集対象者として扱われなかったのはそのため。

自身を厳しく叱責し否定したくせに事件後手の平を返すように引き取ったり親身になって世話を焼いてきたコウキを「厳しいがそれ以上に甘い人」と評する。

また「子供として未熟」であるがゆえにどこか放っておかず、生来強かった母性本能を強く刺激されすぎてしまい、みんなやフェ

イトまでもが

想いを寄せている事に気付きながらも、優しい強引さに惹かれて想いを自覚するに至る。

年齢差については「10歳程度（肉体年齢）はたいした問題じゃない！」らしいです。

『バルディッシュ・リニス』

デバイスであるが強い人格を持つのでここで紹介する。

リニスとして、テストロツサ家の面々からはオリジナルとなった使い魔と

同一視した扱いを受けているが、厳密に言えば元が同じの別人である。

しかしその三人なら仕方ないと別段なんとも思っていない。

オリジナルの存命時は彼女以外と話すことはなく、

消滅後は彼女の意思を尊重するために沈黙を保っていた。

だがこれ以上はもう無理だと判断したのとコウキが来たのはほぼ同時期。

ひとりで沈黙を保っていた反動かオリジナル・リニスと比べるとおしゃべりで、

とくにコピーされた時点で「困った主」としての印象が強かったプレシアと

魔導師としてへっばこで女誑しな現在のマスターであるコウキに対してのみ

かなり手厳しく、毒舌家な一面を向けている。

しかし根は愛情深く母性溢れる性質で、人を過保護に甘やかしてしまう人格。

独りでいる時間が長かったこともあり愛情に飢えているともいえる。

言葉が厳しいのはそういつた面を隠すためであり愛情の裏返し。肉体が無いから飴を与えられない。なら鞭を振るおう。ということ。

日野家ではコウキが持ち歩いているか彼の自室に置かれている。ちなみによく同じ場所に闇の書も置かれていたせいかな。

その関係でいつのまにか管制人格と同じマスターを持つ者として共感し合う。

またそれ以外にもコウキの睡眠時にたまに管制人格が身体を借りて話をしていた。

そのせいか彼女たちが仲良くなっていることをコウキはまだ知らない。

自分の不用意な質問（というよりは疑問）が現在の状況を作ったことを

かなり気にしており、なんだかんだと言いながらコウキに全面協力なのは

実際はその罪滅ぼしに近い感情からであり彼の考えに賛同しているわけではない。

『月村すずか』

仮面の戦士に襲撃された事件後。

念話を無意識に使ったことでリンカーコアの存在が発覚。

以後、その事情を知ることになったコウキやプレシア、シグナムからたまに教えを受けながら魔導師として鍛錬をしていた。

魔力総量としては平均的なミッドチルダ人並であり、

特出した技能も持っていないのだがプレシアの見立てでは、

コウキよりも魔導師ランクは高くなりそう。といわれる。

コウキはおよそ総合D程度で、すずかは陸戦Cぐらい。夜の一族として特に高い身体能力を持つのでベルカ式との相性の良さを見せる。

とはいえあくまで現在は力の自覚と制御、もしもの時の最低限の自衛能力。

を持たせる目的なので本格的な鍛錬には入っていない。

本人も魔法よりデバイスの構造やシステムに興味を持っており、話に聞いたデバイスマスターにひそかに憧れている。

仮面の戦士に襲撃されてから不用意な行動はしないようにいわれており、外出する時はフアリンやノエルが影ながら護衛している。

とくになのは襲撃事件後からはコウキから月村家へ警護を強めてほしいと要請されている。

自身が秘密を抱えていたために他人の秘密に敏感でありながら寛容。コウキたちが「他人の秘密」として語らなかつた部分もおおよそ勘付いているが、話してくれるまではあえて触れないようにしている。

夜の一族として異性の血が必要なのだが、精神的な理由か体質的な理由か。

初めて吸ったコウキ以外の血を実は受け付けられなくなっている。

『アリサ・バニングス』

主だった登場人物の中で一番コウキたちの事情を知らない立場だが、コウキの「危うい」在り方を的確に見抜いたり、なのはが隠し事を

してそれで悩んでいる。

など、身近の「気に入っている」相手を見抜く観察力・洞察力はさまざまに鋭い。

そのため現在、コウキ、なのはとフェイト、すずか、が秘密を抱えているのに気づいている。

しかし友達だからとすべてを話せるわけではないと、思うようにしているのだが、

やはり秘密がある関係に納得できていないため彼女自身は秘密を作らないようにしている。

コウキへの想いをみんなに公表したのはそういう理由もあった。

本人も初恋を自覚したあたりから、気付いているがダメ男に惹かれる性質。

といってもヒモにしてしまうのではなくダメ男の尻を引っ叩いて、働かせるタイプ。

背負うモノがないと頑張れず無気力になる性質のコウキだが、

それはいわば追い詰められないと頑張らない怠け者ともいえるのでかなり相性はいい。

本人はいつか会社経営とか出来たらなあと思っているが、意外と家庭に入ると男をやる気にさせ出世させるタイプ。

コウキに想いを寄せる者の中で一番普通の恋愛観を持つが、

「彼が望むならいくらでも」な、なのは。

「みんな大好きだから一緒にいよう」な、フェイト。

「いっぱいおった方が面白い！」な、はやて。

「住む場所はうちにすればいいよ」な、すずか。に囲まれて

もしかして間違っているのは自分なのかとわりと真剣に悩んでいる。

『グレーム一派』

(若干のネタバレだが、ここで知っても問題ないレベルと判断している)

『ギル・グレーム』『リーゼアリア』『リーゼロッテ』の三人。

管理局の提督とその双子の使い魔。にして仮面の戦士とそれを影から指示する者。

11年前の事件後からずっと闇の書の転生先を極秘裏に探し続けていた。

4年前に偶然が重なり発見するも主の少年と引き離されていたのでグレームが父の友人のふりをして援助と資産管理をして彼が生家に戻れるように画策した。

だが、共に暮らすには情が移りすぎる。誰かに世話を任すのは巻き込む危険がある。

子供一人の生活は別の意味で危険。しかも少年はどこか生きる気力を失っていた。

老練された観察力から彼に必要なのは自分を必要とする相手だと見抜いたグレームによって

彼が生きる目的として、生家に縛る鎖として似たような境遇で車椅子生活を余儀なくされている少女、八神はやてが送り込まれる。

(当然はやてはそんなことは知らない)

以後、その生活を手紙だけでなく外部から観察し続けながら、

周辺の大人や公的機関が子供だけの生活に介入しないように手回ししていた。

その手は海鳴大学病院にまで及んでおり、あそこのスタッフの何名かは

何度かリーゼたちのどちらかと入れ替わった(本人たちの気づかないところで)ことがあり、

身体の検査のふりをして、闇の書の主としての状態も検査されてい

た。

ただし仲が良すぎる石田医師とはさすがに入れ替われなかった。

そういった状態だったためにリーゼたちはコウキとはやてをよく知っている子供だ、といういる大きな勘違いをしていた。

しかし直に相対してコウキの持つ敵に対する底知れない冷たさ。

知っているはずのない魔法を使う奇妙さ。などから直感的に、

そして本能的に彼に怯えてしまい、そのために計画を台無しにしても消そうとした。

一方グラムは手紙のやり取りだけでコウキたちに孫のような感情を持ち始めており、

リーゼ姉妹と違ってふたりの歳に似合わない聡明さと家族以上の絆の深さを感じ取っていた。

また使い魔たちが暴走しがちなせいか逆に冷静な思考を持っているものの、

やはり目的のためなら手段を選ばないところはやはり主従である。

その実力はかなり高く、現在は計画のために誰も倒さないように抑えているが

リーゼ姉妹が本気を出したうえでコンビを組んで動いた場合、

守護騎士四人が本気で相対しても勝てるかどうかは時の運による。

コウキが一時的とはいえふたりと互角並に戦えたのは本気でなかったのと

特異なトラヴィックの能力、そして彼女達にとって懐かしい戦い方だったから。

ちなみに本編での登場順は初登場の時の庭園にいたのはアリア。

次のわずか襲撃事件でコウキたちの前に現れたのはロッテ。（すずかをさらったのはアリア）

12話にてクロノを蹴り飛ばしたのはロッテでユーノをバインドし

たのはアリア。

以後、魔法を主に使う方はアリア、近接戦闘はロツテと考えていい。当初はふたりいることを隠して動いていたが、コウキの奮闘に過ぎるをえなくなった。

大人たちの想い

わたしに願いらしい願いは別に無かった

忙しくて会う時間は少ないけど大好きなパパとママがい

て、

大事な大事な親友が何人もいて、

そしてわたしの初恋を奪ったあの人がいた

少なくとも

わたしはそれがまだしばらくは続くものだど

ずっと、勘違いしてた

だからわたしは知らなかった

何でもできると思っていた自分の小ささに、

必死に延ばした手が届かないことに、

絶望する日が、

来るなんて

12月12日 PM09:35

管理局本局 提督執務室

音も無く、誰にも気付かれることもなく“彼ら”はその部屋へと入り込み、
机に向かって一人デスクワークに追われていた老年の紳士に歩み寄る。

「……遅くなりました」

仮面の奥から響く男の声には疲労と安堵が混ざった複雑なものがある。

それを敏感に感じ取りながらも紳士は作業を止めて、視線だけを彼らに向ける。

「報告を聞こう」

「はい……父様」

瞬間“彼ら”は“彼女ら”に戻る。

仮面の戦士。その正体はグレアムの双子の使い魔の変身だった。

「してやられたな」

「「え？」」

娘同然の使い魔たちの報告を聞いて、その部屋の主ギル・グレアムはその成長を見守っていた少年の策略に内心舌を巻いた。

「私はそんな念話は送っていない」

「なっ!？」

「そ、そんなっ、でもあれは確かに父様の声だった!」

驚き、戸惑うアリアとロツテにグレアムは落ち着くように諭す。

彼がそこまでしなければならなかったのは彼女達を使い魔にしたばかりの頃以来だ。

つまりそれほどまでに彼女達は冷静さを失っていた事の証明でもある。

「お前達も知っているだろう。変身魔法には念話の声すら変質させる効果もある、と」

いわれてその事実を思い出してハツとなる二人。

現在、完全な他人（既存・空想問わず）に変身するのは特別な事情がない限りは違法扱い。

そうなった所以は無論、姿を変える事が犯罪に利用できてしまうからだ。

では、許される『特別な事情』とは何か？

それは大きく分けてふたつ。ひとつは管理外世界へ溶け込むため。

渡航あるいは調査などで管理外世界へ入るさい自らや現地人の容姿によつては

異質に見えてしまうケースがあり、いらぬ混乱を避けるための変身は許可されている。

もうひとつは捜査のための囿や潜入目的での変身。

狙われている人物と入れ替わる。犯罪組織の構成員に化けて入り込む。

容姿を完璧に変えられるのなら、これほど捜査に役立つ魔法もないのである。

そしてその変身は当然声、それも念話の声にも影響を及ぼす。

むしろそうでなければ犯罪捜査で活用するのは難しい。

念話が当然のように連絡手段として使われている以上、

その声も変質できなくてはいくら姿が完璧でも犯罪者達の目を欺けない。

「やろうと思えば、声だけ変化させることも可能だ……」

もつとも容姿も念話の声も完璧に変身するにはかなりの技術と鍛錬が必要である。

ましてや声だけとなるとさらに難しい高等技術であるが、

あの場にいた面々の腕前や魔導師ランクを考えれば誰が出来てもおかしくはない。

「で、でもそれなら一体誰が!？」

「いいえ、そもそも父様の声を出して私達を止めたのなら

こちらの正体がすべてバレていることになるわ」

問題はそれが誰なのか。

そしてグレアムの声を使えば止められると知っていた事だった。

「おそらく彼、コウキくんだろう。あの場で私の声を知っていて、尚且つ見逃してメリットがあるのは彼しかない」

彼以外のグレアムを知る人物が気付いているのなら

とつくの昔に自分達は捕まっているだろう。泳がしておく必要がない。

証拠がそろっていないという可能性もあるが、それなら

あの場でこんなやり方をしては警戒させるだけで逆効果だ。

「そういえば確かにあいつ、苦しみ出す直前に私達をリーゼと呼んでたけど……」

「直接の面識はなくても調べた時に知ったのかもしれないけど……」

何かが納得がいかなくて姉妹は唸る。

優秀な使い魔である彼女達だがその本分は猫であり動物だ。

すでに大分薄れているとはいえ本能的な部分がそれだけではないと告げていた。

何よりその直前までに見せていた動きとさらにその前のスパイラルが、おかしい。

「それに、どうしてあいつがクラ助と同じ動きや魔法を……」

「解らないけど……あの時、通信が切れたあと蒐集された可能性がないわけじゃない。

いまはそれよりもどうして彼に逃がされたのか、の方が重要よ」

気にはなるが、アリアは優先度からそちらを考えるが答えが出ない。彼女たちは優秀だが、指揮官だったことは一度もない。

小隊指揮は出来ても戦略を組み立てる、読むといった下地がないた

めに

その目線で物事を考えるコウキやはやての思考が読み切れない。今日の戦いにおいて彼女たちが翻弄されたのはそれが原因である。

「おそろく……警告だな」

だから真意を察したのはその目線に立ったことがあるグラム。元よりここにいる三名はそれぞれの役割を果たすことでチームとして成り立っている。

その目線に立ち、指示を出すのは当然ながら主人である彼だ。

「自分は正体と目的に勘付いている。

ばらされたくなければこれ以上は干渉するな、といった所か」

「正体だけでなく、私たちの計画も知っていると父様はお考えで？」

「でなければこんな事はしないよ。

目的不明の邪魔者などさっさと排除するものだ。

それを今しないのは、彼も闇の書の危険性を認識しているからだろっ。

私たちの計画は……さしずめ、もしもの時の保険扱いだ」

僅かに自嘲気味に、皮肉気味に語るグラム。

それは仕方が無いことではあった。彼は彼なりに何年も悩みながら、苦渋の決断でもって進めていた計画がコウキからすれば失敗した時の予備扱い。

最後の砦といえば聞こえはいいが計画の対象者に計画の成否を握られている矛盾。

いつのまにか影のゲームメーカーが自分から生贄本人になっていた。

「どうします父様？」

主導権を完全に奪われた事を察したアリアの問いかけに
渋面で頷いたグレアムはしかし、困ったような風情で言葉をもらし
た。

「さて、どうしたのか……」

だが、そう呟きながらも答えは半ばまで決まっていた。

なにも変わらない

もとより彼を犠牲にするのが前提の計画なのだ

罪を背負う覚悟も、罰を受ける覚悟もすでにある

(クライド提督……君に謝りにいけないのが、唯一の心残りだ)

自分はきつと地獄に落ちるのだろう。彼と同じ場所には、いけない。
彼自身、まさか自分が彼と共に人生をかけて取り締まってきた犯罪
者となり、

その手を罪で染めることになるとは思ってもいなかった。
それもただの自己満足の復讐のために。

何の罪も無い子供を巻き込む最悪最低の犯罪者になるうとは。

(だからだろうか……今回、彼女やクロノが事件を担当している

のは……)

運命。

という言葉はあの日からあまり好きではない。

が。それでも、どうせ捕まるのならあの親子の手柄にしてやりたいと思うのは

単なるワガママだろうか。と自問しながら彼は使い魔たちに次の指示を出した。

12月13日 PM10:37

拠点マンション リンディ私室

「レティ、どうかしら?」

空間モニター越しの同僚へ彼女は真剣な面持ちで訊ねた。対するレティは送られてきたデータを見ながら、かなり渋い顔をしていた。

『どうもなにも……リンディ、あなたこれ本気で言ってるの?』

「解ってるわよ、無茶苦茶な案だっていうことは……でも」

半ば正気を疑う荒唐無稽なアイディアの数々にレティは困惑する。それを送ってきたのが無二の親友であり“あの”リンディ提督でなければ

鼻で笑ってデータごと送り返していたことだろう。

『こんな方法でなければ……彼を助けられないってわけ?』

「それも、それでも……絶対じゃない。」

僅かに可能性があるってだけなんだけどね」

聞く人が聞けば笑ってしまうような考えでも、可能性があるだけ。話に聞いていた以上の深刻さにレティは一瞬言葉に詰まる。

『……わかったわ。とりあえず実現できるかどうか各所に打診だけはしとく。」

あまり、いい返事は期待しないで、ほしいけれど……』

「ええ、解ってるわレティ。ありがとう」

友からの遠回しな実現はほぼ不可能だという返しに、レティなりの気遣いを感じて、礼を言うところリンディは通信を切った。知らずに緊張していたのか途端にイスの背もたれに寄りかかり息を吐き出していた。

その背後で、ドンツという何かが叩きつけられたような音がする。びっくりして振り返ったリンディが見たのは資料が積み上げられた

机に、
顔を俯けながら拳を叩きつけていた一人の女性。

「プレシアさん？」

窺うような呼びかけに反応せず、彼女はそのままぼつりと眩く。

「……………どうして……………」

「え？」

「どうしてコウキを助ける方法がないのっ！！??？」

今まで堪えたものすべてをぶちまけるように叫ぶプレシア。

積み上がる資料の山に八つ当たりして周囲にぶちまける。

それは今日まで調べに調べて集めた闇の書に関する資料。

主でありその記録にもアクセスできるほど深く繋がっている彼からの情報と

管理局がそれまで持っていた情報に今朝、無限書庫を調べていたユニノから

もたらされた新たな情報をプラスした現時点でこれ以上は無いほどに闇の書と融合騎ユニオンバイスに関する詳しいデータの山。

リンディとプレシアは意見の交換をしながらもそれぞれで吟味していたが、

彼女達は結局の所、彼がその結論に至った経緯を後からなぞっただけだった。

「誰かを見捨てれば助かるけど、そんなの彼が選ぶわけないじゃない！
い！

そんな人じゃないからっ、みんな助けようとしてるんじゃない！

「！」

なのはどうして。

そういつて俯いた彼女の頬を何か流れ落ちたのを見ないようにして、

リンディは散らばった資料を静かに集めて再び机の上に置く。

プレシアは変わらない姿勢のまま、小さく震えていた。

「なにが天才科学者よ、なにが大魔導師よ……違法研究にまで手を染めておいて！」

「こんな時に役に立つ知識のひとつもないなんてっ！！！」

そう呼ばれていた事に彼女は少なからず誇りがあつた。

それは娘を失った後でも彼女を支え続けていた称号。

そんな自分ならいつかきつと、そんな部分に救われていた部分もあった。

だが、これまでの人生のほぼすべてをにかけてきた科学者としての道がここにきてついに何の役にも立たなくなった。一番必要な時に。

「……………」

その本来なら誇るべき知識と技術を卑下する叫びと嘆き。

いまにも崩れ落ちてしまふような彼女に、かける言葉がリンディは見つからない。

安易な慰めが通用する話ではないし彼女もそんなものを必要としていない。

だから拾い集めた資料を眺めながらリンディは独り言のように語る。

「……………一番の問題は彼にしか選択権と実行する能力がないこと。

せめてもう一人、同じことが出来る人がいれば話は少し違うのだ

けど……」

管制人格・守護騎士・八神はやて。彼女達の運命を決める決定権。それが彼だけにしかないことがコウキを余計に追い込んでいる。時間の無さがそれに拍車をかけているから彼は自らを見捨てるしかない。

「……確かにそうですけど、いない存在を考えてもしょうがないですよ」

無理矢理自分を抑えつけて、プレシアはリンディと向き合う。正直、そうした冷静な会話を続けていなくては感情が暴走しそうだった。だからわざとそう接してくれたリンディの気遣いが嬉しかった。

「だから、あなたの考えは間違っていないと思います。現状で解決法が見つからないのなら時間を稼ぐべきだって……」

自分にはない柔軟な考えを見せた彼女を褒めるようにいうプレシアにしかしリンディは静かに首を横に振った。

「もっと実現できそうなものだったのなら、良かったのだけど……」

リンディが考えた案は事態の解決法ではない。いうなれば『現状の維持』だ。

彼の生命線となっている魔力を外部から供給し続けることで今の状態を長期にわたって維持できないか、という考え。

「デイバイドエナジーといった魔法や魔導炉からの個人への供給自体は

前からあるものだから、決して難しいものじゃない。

問題は……安定供給し続けられる物を用意できそうにないところ」

「人からの供給は不安定で量が足りない。

魔導炉を用意しようにも、どれほどの規模の物がどれだけいるのか検討もつかない」

「それに付け加え、管理局が保有してる魔導炉は全部艦船か研究施設に使われている。

余分なものはないし民間から借りるにしたって今から作るにしたって

時間と手間がとんでもなくかかる……現実的な方法じゃない」

リンデイの現実的すぎる話に苦い顔で歯噛みする。

プレシアにとって魔導炉開発には辛い思い出が多い。

が、それゆえにそれにかかる甚大なコストを彼女以上に理解していた。

闇の書事件を停滞させる。という最大限に使える方便を使ってもひとりの提督の権限でどうにかできるレベルの話ではなかった。

「世知辛い話よね……こんなことあの子たちには絶対いえないわ。

大人として、情けなさすぎるもの……」

資金がないために、現状維持すら出来ないなんて。

「……………」

その現状に互いに溜息を吐いて、会話が止まる。

最善の策はなく、次善の策は出来そうにない。
なのに時間は限られていて、それは刻一刻と減っていく。
そして少年の決意は固く、変えられそうにない。

「……………彼は、どうしたいのかしらね？」

「え？」

思わずぽつりと呟いた言葉の妙なニュアンスに首を傾げるプレシア。
『どつする気』ではなく、『どうしたい』というのは似ているが意味は違う。

「今朝の様子を見れば、みんなを助けようとする想いは強まっている。

けどそれはそうするしかないから、それ以外に道がないから。

なら、もしあらゆる道を選べるのなら彼はどうしたいんでしょうね」

「そんなの、決まっているでしょう」

何でも選べるのならみんな助かって、みんなと共にありたい。
彼ならそう選ぶことなど誰もが分かっている。

「そうね。決まっているわ…………でもね、私はそれを彼から聞いたことがない。

彼の望みを私達は勝手に決めていくけど彼がそれを口にしない限りそれは想像でしかない」

「待ってください。言わせるんですか！？」

叶うわけもない夢を、望みを…………今の彼にわざわざ言葉にさせる

んですか！」

信じられない、といった顔でプレシアは彼女を見る。
なにせ、それはあまりに酷な話だ。

誰よりも現状の厳しさと難しさを知っている人間に
そうでなかったら、という無意味で無慈悲な仮定の上で望みを口に
させるなんて。

「ええ、ヒドイ話よ、本当に。自分で言ってる自分の人間性を疑う
わ」

その非道さを自覚しながらも、リンディはけれどと首を振る。

「でもそうしなければ彼はおそらく最後まで、一人で何もかも抱え
込んだままよ」

「あつ……」

彼女の言葉にハツとなる。

元より、死ぬ予定だった彼は想いを抱え込む性質だった。
先のない自分が何を吐露しても周囲の重荷になるだけだと遠慮して
だがそれは同時に

「そして……彼は独りで死ぬことになる」

彼を、根本的ところで孤独にしまっていた。

「誰かが傍にいても、彼は独りで……独りぼっちのまま。
それを寂しいとさえ言えずに消えてしまっ」

そんなの、許さない

そう呟いた彼女の瞳が、その怒りを存分に訴えていた。

子供たちの想い（前書き）

前話のリンディとプレミアの話の少し前の話。
同じ日の少し前の時間の話、です。

子供たちの想い

12月13日 PM03:37

バニングス邸

そのために使うには、少々広すぎる部屋。豪華すぎる内装。高価すぎる内装品。

ではあったが少女達と彼はほとんど気にせず激闘を繰り広げていた。
無論、現実ではなく^{二次元}仮想現実の話ではあるが。

大型のテレビ。

のはずだが部屋から比べるとミニマムに思えてしまうその画面の中で青い髪へのそだし格闘家少女とオレンジ髪のツインテールのガンマン少女が

所狭しと攻撃しあい、互いのライフゲージを削っていく。いわゆる格闘ゲームである。

「Strikers Fighter」と呼ばれるこの女性向け格闘ゲームは
簡単操作と女性向けのストーリー展開で格ゲーファン以外の層に受けていた。
とくに小学生の女の子たちの間で流行っていたのだった。

『振動破砕拳!!』

『きゃあああああっつ!!』

格闘家少女の強烈な大技がヒットし吹き飛ばされるガンマン少女。
残りゲージは一気に減ってすべてが真っ赤に染まった。つまりはKO。

画面内にこれでもかとかでかどと表示されるその二文字に
ポトリ、と誰かがコントローラーを落とす。

「えへへんっ！ 大勝利!!」

「すごい、アリサちゃん！」

そしてまるでそれが合図だったかのように勝利の歓声があがる。
格闘家少女を操っていたアリサ・バニングスである。

「くそ……これで18連敗……なぜだっ!？」

コントローラーを落とした彼は嘆いていた。

ガンマン少女を操っていた日野コウキである。

言葉通りかなりの数負け続けていた。しかも通算。

彼を除く四人の少女たち全員に一勝もできなかった。

そのためなのは「すごい」は複雑なコマンド技でトドメをさした事に対して、である。

「……苦手だつて聞いてたけど本当にダメなのね」

彼女個人としてはこれで彼に5連勝したアリサは呆れたようにいう。彼は元来自分ができるはずのことができないと「負けた」と感じる人間だ。

そのため自分が操作しているが自分が動いているわけではない格闘ゲームが

不思議なくらいに苦手でこれまで誰かに勝利したことがない。

下手に実際の格闘ができるだけに、キャラをイメージ通りに動かせない。

頭で「俺ならこう動くのに」という余計な考えが離れないのだ。

「コウキさんの場合、苦手以前にまずキャラ選択が間違つてると思う」

だがなのはが彼の妙な人選が一番の問題だというと彼以外全員が頷いた。

彼が選ぶのは何故か決まって玄人が使うと化けるテクニカルキャラばかり。

弱くはないが素人には扱いにくいキャラクターばかりなのだ。

「ある意味、コウキらしいといえばらしいんだけど……」

「ゲームだからね。初心者は無難にスタンダードなキャラにした方が……」

彼の戦略家としての部分も知るフェイトはそう思うものの、さすがが当たり前といえは当たり前のアドバイスをいう。

「……もっと、早くにいつてほしかった……」

がつくりと肩を落として額を押さえる。
彼なりにじっくり考えたつもりだったのだが、
かなりの外れな結果になっていたのだった。

「ふふふ、敗者はただ去りなさい。

さあ、次はフェイトとわたしよ！」

「お、お手柔らかに」

ピシッという擬音が聞こえてきそうな指差しと共に、
高らかに宣言するアリサに気圧されながらフェイトはコウキと場所
を替わった。

「わたしはこのままこの子でいくわ、フェイトは？」

「うーん、じゃあ私はこの槍使いの男の子で……」

互いにキャラを決めて、画面の中で先程の少女格闘家と槍使いの少
年が向かい合う。

画面に集中している少女たち。その背後で邪魔にならないように静
かに席を立った彼は

気付かれぬように気配を消して部屋の外へ出ようと一歩踏み込んで、
つんのめる。

「っ？」

何かが、自分に引つかかったような感覚に少し驚いて振り返ると
少しオレンジがかった金色の髪と翡翠の瞳が彼を見上げていた。

「どっ、行くの？」

衣服の裾を掴んだまま、少女は悲壮感が漂う震えた声を出していた。彼を見上げる顔も何かの不安を隠そうともせず、怯えているようにコウキには見えた。

つい数秒前までゲームを友達と楽しんでいた少女が出すには不自然すぎる声と顔。

その豹変に少女達は戸惑って、動くどころか声もかけられなかった。しかし、誰もが息をのんでいる中、返されたのは単純な返答。

「ど、どっって……えっと……トイレを、借りようかと……」

「……………え？ あ、ご、ごめん！」

も、もうっ、急に立つからびっくりしたじゃない！

トイレならここから出て左の突き当りよー！」

「あ、ああ……ありがとう」

この屋敷に来るのは初めてのことではないので

トイレの場所くらい知っていることは互いに解っていたが、

それが彼女の誤魔化しだと気付いたコウキはそれに乗って部屋から出た。

アリサはそれをずっと眺めて、出て行った後も微動だにしない。

「アリサちゃん？」

さすがに怪訝な顔で声をかけたものには答えず、

友達に背中を向けたままアリサはぼつりと確認するかのように声を出した。

「フェイトはいまコウキと一緒に生活してるのよね？」

「え、うん」

「じゃあ、あいつ今日なんかあったの？」

「「っ!?!」」

核心をついた質問に、事情を知るふたりが思わず息を呑んだ。

その反応だけで充分だったのか、聞いても答えないと解っていたのか。

おそらくその両方で、アリサはそれ以上なにも聞いてこなかった。

「……さて！ それじゃあコウキが帰ってくるまでにフェイトをボッコボコにしてやるわ！」

「アリサ……うん、私も負けない」

振り返っていつもの顔を見せた彼女にフェイトは闘志で答える。

それにホッとしたように息を吐くのはとすずか。

けれどすずかにはここにはいない彼を探すかのように部屋の外に視線を向け、

なのは今朝の出来事を思い返すことになった。

12月13日 AM10:01

拠点マンション リビング

昨日の戦闘から一夜が過ぎて、互いの状況確認や情報交換が終わって一息ついていた。

なのはとフェイトは学校に行っていたが、授業を聞きながらも念話でそれを行っていた。

それぐらいのマルチタスクは彼女達からすれば朝飯前である。

とはいっても昨日の戦いで得たものはなにもない。

アルフとザフィーラは言葉こそ多少は交わしたものの終始やりあっていただけ。

結界破壊の余波で吹き飛ばされそうになった局員を庇ったアルフの隙について彼は逃走。

シグナムとヴィータも似たようなもので破壊の余波は内側にまで及び、

なのはとフェイトは自らの身を守るのが精一杯だったため二人を逃した。

そして、クロノは事態がよくわからないまま戦闘終了後、約一時間後に救出された。

なぜなら。

「にしても、不運だったねクロノ。

瓦礫に埋もれたんじゃないやなくて、まさか地下空洞に落ちていたなんて……」

いつもフェレットもどき。使い魔。などとからかわれる仕返しか。

ユーノがどこか嬉しそうな表情でわざとらしく口にする。
それゆえかどこか苦々しい顔となるクロノ。

彼が瓦礫に埋もれて以来、戦場に復帰できなかったのはあの廃墟の地下。

そこにあつた空間、巨大な地下通路に運悪く落ちてしまったからだつた。

地上からの光がない暗闇の中、特殊な材質で出来た壁に囲まれたそこは念話がうまく通じず

外の状況や自分の現在地が解らないために無茶が出来なかった彼は結局その場で救助を待つはめになったのだった。

「……僕のことはいい。それよりユーノ、無限書庫での調査の成果は？」

不愉快そうにしながらも仕事を優先させるあたり彼らしい態度だった。

だがなぜかそれを受けたユーノが少し言葉に詰まっていた。

「っ……そう、だね。もともとその中間報告に来たんだった」

昨日彼が戦いに参加したのは、実をいうと偶然その目的でこちらに来ていたから。

その本来の目的だったはずの報告の話になって急に彼の表情は冴えないものとなる。

そのためか再び彼が口を開くのにわずかに時間がかかった。

「とりあえず……解つたことをいうね」

少しだけ、間を取って、ユーノは言葉を選びながら調査結果を全員

に教えた。
念話も使って、この場にいないのはやフェイトにも聞こえるようにして。

彼が無限書庫で闇の書について調べて解ったのは闇の書の本来の機能についてだ。

元々闇の書は各地の魔導師の技術を蒐集して研究するための主と共に旅する魔導書だった。

破壊の力をふるうようになったのは歴代の持ち主の誰かがプログラムを改変したから。

結果、旅をする機能が転生機能に。破損データを修復する機能が無限再生という形で暴走。

それが現在の形の闇の書になった直接の原因だった。そして。

「夜天の、魔道書？」

コーノから告げられたその名を、オウム返しのように呟きながら彼は啞然としていた。

「ええ、闇の書は最初そういう名前だったんです。

その様子だとコウキも知らなかったみたいですけど……」

研究のための資料本でしかなかった夜天の魔道書が、

誰かの改ざんによって暴走した結果、破壊の力を振るって恐れられたことで、

その名は薄れ、やがて「闇の書」と呼ばれるようになったのだと。

「だからか……ずっと何か変だと思ってた。

闇の書って名前が腑に落ちなかったのはそれが本当の名前じゃなかったからか!?!」

その事実にはくよくよと、怒るように叫んで彼はうな垂れると
一気に憔悴しきった顔つきになって両手で頭を抱え込んだ。

(コウキ、さん?)

その消沈っぷりは見えていないはずの少女達ですら察せられるほど。
だからこそ、その場のほとんどの者が困惑する。

「コウキ、その名前がそんなに重要なのか？」

こういつてはなんだが、単に最初に付けられた名前、というだけ
ではないのか？」

それを代弁したクロノの問いかけにコウキは
ゆっくりと顔を上げて、一転して静かな口調で語った。

「そんな情報が闇の書のどこにも、

それどころかあいつら全員が知らなかったとしても、か？」

「え？」

「守護騎士の誰も、覚えていないの？」

「ああ、それどころか闇の書が元々そういう魔道書だったことも覚
えてない。

ましてや生み出してくれた人のことも何も……すべて磨耗して記
録すら残ってない」

(うそ、そんな!?)

闇の書の記録をすべてではないがある程度閲覧できる彼でもそんな情報はカケラも見覚えが無い。隠されている可能性はあるが、彼の中で管制人格たる彼女ですら驚いているのを感じて、それはとても低く感じた。

「じゃあ、闇の書も騎士たちも自分達が変わえられたことすら知らないまま

この何百年ずっと事件を起こしていたのか？

もっと昔の、どっかの誰かが自分勝手な改変をしたせいで！」

(そ、そんなのひどいよ！)

「くそっ、あいつらはいったいどれだけの時間を、いったいどれだけ……」

最初の名前を忘れるくらい。改変されたことすら忘れて、闇の書としての在り方すら疑わずに……いったい、どれだけあいつらは！」

その命と心を弄ばれたのか。

記憶や記録が磨耗してしまう途方もない時間をかけて、ずっと。

そして、これからもそれを続けていってしまおう。

「間違ってる……そんなの絶対間違ってる！」

沸き起こる激情のまま、壁に拳を叩き付けた彼にかける言葉が誰も見つからなかった。

12月13日 PM03:50

バニングス邸 廊下

今日、俺が半ば無理矢理なのはたちにアリサの家に連れてこられたのは、

きつと俺を気遣ったことだろう。気分転換でもさせよう。自分で思っている以上に、ユーノからの報告がきつかったようだ。これでもしユーノが調査結果をすべて話していたらこの程度ではすまなかっただろうけど。

あいつは意図的にフェイトやなのはに一番悪い情報を話さないでいてくれた。

一旦報告が終わった事にしてなのはたちとの念話を切ったあと俺とクロノと艦長さんにだけ残りの調査結果を報告した。

ユーノはユーノなりに悩んで、結果その三人だけに伝えることにしたらしい。

無限書庫って所はユーノいわく調べれば何でも出てくるらしくて、俺やクロノたちが隠していたことのいくつかやそれ以上のことも出てきた。

一定期間以上蒐集が無ければ主の魔力や資質を浸食するとか。

完成すれば持ち主の魔力を際限なく無差別破壊のために使うとか。これまでの主はみんな完成してすぐに死んだとか。

なのはやフェイトにはいえないよな。

それに解ったことはそれだけじゃなかった。

俺にシヨックを与えているのは闇の書が夜天の魔導書だった事実と俺の計画を根底から崩しかねないある事実だった。

「……………」

ふと廊下の窓に映る自分の顔を見る。別段、おかしな顔はしていない。

報告を聞いた直後からまだしもあれからもう何時間もたっている。内心はともかく表情まで動揺していることなどありえない、はずだ。なのに。

「なんで、ばれるかねえ」

しかもよりにもよって一番事情を知らないアリサに。はやてを含めたあの五人組のなかで、一番周囲を見る目を持っている。

とは、思っていたがそれにしたって何も知らないはずのあいつがどうしてあんな目で俺を見る？

今まで一度も見たことのない不安の色だけの瞳。

俺がどこかに行くことを、消えてしまうことを恐れる目。

シグナムたちが家から飛び出したあの日、俺に見せたものと似た目。

あり得ない。あり得ない。あり得ない、はずなのに。

何も語らないはずのその目がすべてを見抜いているといわんばかりに訴えていた。
だから内心のざわめきを抑えて思わず、トイレに行くと誤魔化してしまった。
年下の女の子たちに囲まれている状況から少し逃げたかっただけの行動が高くついた。

「まだこんなところにいるんですか？」

出そつになつた溜め息が引つ込んだ。それぐらい、びっくりした。お前はどっかの艦長さんか、といたくなる。
だってよ、こいつ気配もなくニコニコした顔で背後に立ってたんだぜ？

「……ちよつと考え事してただけだよ。

それよりお前こそどうしたんだすずか？」

できる限り内側の動揺を悟らせないように普通に普通に話しかけた。けど、すずかは問いかけに答えず微笑みながら立てた一本指を俺の口に向けた。
身長差からそのだいぶ前まで、だったけど。

「アリサちゃんなら、レディにそんなこと聞くんじゃないわよ、って怒る所だよ？」

・・・

・・・

・・・

「OK、分かった。聞かない」

短い思案のあと俺は何もきかずに一緒に廊下を歩いた。

ああ、関係ない話だがトイレという場所は普通の民家の共用タイプを除けば

だいたい男女別のそれを並んで設置していることが多い。

そしていま俺とすずかは同じところへ向かって歩いている。

つまりは、そういうことだ。
もっとも。

「……………」

「なんですか？」

「いや……………」

俺と同じで部屋を出る言い訳の気もするけど。

なんてことを思いながら少しだけ無言で歩く。

けどそれは本当に少しで、俺の方が我慢できずに訊ねた。

「……………今日の俺、そんなにわかりやすい顔してたか？」

まったく事情を知らないアリサにさえ何か異変を感じ取らせてしま

うほほどに。
脈絡のない言葉だがそれだけで伝わるのだから余計な前置きは必要ない。

「そんなことは無かったと思います。
けど、アリサちゃんはあれで世話焼きさんだから……」

「え？」

「放っておけないぐらい見てられない人のことは、よおおく観察してるんですよ」

どこかしてやったりな顔でそんなことをいうすずかは楽しそうだった。

「……………」

えっと、それはなにか？

俺は小学生のアリサから見ても危なっかしい奴ってことか？
うわぁ、全然否定できないのがくやしい！

「ふふふ……………」

表情から俺の内心を読み取ったのか笑うすずかと渋面となる俺。
けどひとしきり笑うとすずかは急にその顔に悲しげな色を乗せた。

「理由は、いえないんですよね……………」

問いかけた言葉だが、そこには教えてもらえないと解っている。
といった諦めにも似た想いが混じっていた。俺はその予測通りの言

葉を吐くしかない。

「……悪い。」

巻き込んで、不自由を押し付けている側としては本当に心苦しいけど、

こればかりは………言えない」

すずかにはなのはが襲撃されたあの日から、必要最低限の外出以外は控えるようにいつてある。

もし出かけるさいはノエルさんたちの誰かと一緒にしてほしいと。シグナムたちからの蒐集、あるいは仮面の連中の襲撃を警戒してのことだ。

どちらも、ないといえる状況じゃない。だっていうのに、こっちの事情は話せないのだから気分が重くなるよ、まったく。

「それは、誰にも、ですか？

ちゃんとコウキさん以外にも知ってる人、いますか？」

不安げな見上げる視線に少し意味を取りあぐねたが、ああと気付く。

「大丈夫、ちゃんと俺以外にも知ってる奴はいるから」

俺の抱え込んだ秘密を知っているのは今の所、はやてや騎士たちを除けば

艦長さんにクロノにプレシア、リニス、トラヴィック。そして、ユーノ。

今朝俺達だけに話したことで俺達もまたユーノにすべてを話さざるを得なくなった。

それほどにあいつが持ってきた情報は問題の核心を突きすぎていた。

ユーノが見つけた事実。それは闇の書の完成前の停止は難しいという事。

とはいえそんなことはずっと前から知っている。

正確にいうのなら、止められないと判断されたその理由だ。

闇の書は真の主と認められた者でなければ管理者権限が完全に使用できない。

つまり完成後でなければプログラム停止や改変といった干渉ができないのだ。

外部から無理にしようとするれば主を吸収して転生してしまう機能が
ついている。

そしてそれは完成前の主からの干渉についても同じ話だったのだ。

そう、つまり闇の書をまず完成させなければプログラムの切り離し
は不可能だった。

このタイミングでそれが判明したのは不幸中の幸いか、それとも最
後のダメ押しか。

「あっ……」

判断がつかないながらも、俺は彼女の頭を優しく撫でた。

つまるどころすずかはひとりで全部抱え込んでいないかを心配して
くれていたのだ。

たとえば話して解決しない問題でも誰かが知っているとというのは

ひとりで抱え込むよりずっと楽なことなのだ。彼女はそれを身をもつて体験済みだ。

俺も、実際すべてをひとりで抱え込んだままだったらどうなっていたか。

計画が半ば破綻してそれでもなお、こうしてちゃんと立ってられたか自信がない。

「それに……どんなに長引いても今月中には終わる話だ。

どういふ結末にできるかは、俺達の頑張り次第だけど……」

安心させるためにそう口にした。実際は一番の問題点なのにな。もう間近に迫るタイムリミット。それ以上の時間はもうない。欲しいけど、ちょっとそれは無理というものだ。

「今月まで………じゃあ、やっぱりお誕生日会は難しいですか？」

そんなことを考えていたからだろうか？

すずかのその言葉が誰を指しているのかよく解らなかった。

「誕生日？ 誰の？」

はて、今月は誰かの誕生日だっただろうか？

なのはもアリサもすずかも違ったはずだが？

そういうと、すごく馬鹿にするかのような溜息を吐かれた。

そしてなぜかジェスチャーで『しゃがんで』といわれる。

訳が分からないまま言われたとおりしゃがんですずかと目線をあわす。と。

「うおっ！？」

ガッツ、という衝撃を頭に受けた。
いきなりだったので反応できなかったのだが殴られた。
それもグーで。それもわりと夜の一族の身体能力で。

「い、つてえ……すずかいきなりなにひよちゆる!？」

後半、変なことになったのは俺が噛んだのではない。
両頬を引っ張られたせいだ。本当に、何するのよ、すずかさん。

「12月25日はあなたの誕生日です！」

「……あ」

なんでそんなことを覚えてられないんですか！
と叱るような視線でまっすぐ睨まれて、俺は誤魔化すように苦笑す
るしかない。

はやての誕生日の時にも似たような事プレシアにいわれたけど、
今はそれ以上に大事なことが目白押しでつい、忘れてただけなんだ。
うん、決してそれ以外の理由で忘れていたわけでは………ないと、
思うよ。

「……………」

自信が無かったせいかわからず唸りながら睨むすずかから目を泳がす。
途端、頬を引っ張る手がつねる手に変わる。痛いですが、すずかさん。
せめて歳相応の女の子腕力でつねってくれ。ねえお願いだから本気
だすのやめて！

そつ目で訴えると溜息と一緒に彼女は手を離してくれた。

「……そんなだから、アリサちゃんにあんな顔させるんです。今度忘れたら、動けなくなるまで血を吸いますよ」

その呆れと怒りが混じった声は大事な友達に辛そうな顔をさせた俺を非難しながら同時に心配してくれていて、耳が痛いようなありがたような。

ただ、後半は、「冗談だよな？　なあそうだといってくれよすずかさん、いやすずかお嬢様？

「ふふふ、それはコウキさん次第です」

ああ、やっぱりね。

なんて嬉しそうなにつこり笑顔。

背後に『本気』と書いてマジと読む文字が浮かんでいるのは気のせいだと思いたい。

「わかったよ、もう忘れない。約束する」

それに怯えたわけでもないが、わりと真剣に想いを口にした。

したつもりなんですけど、すずかさんはどうにも納得していない様子。

ぶつちやけ、すごく疑いの眼差しを向けられています。信用、ないなあ……。

「じゃあ、担保代わりにもらいますね」

「え？」

なにを、と聞く暇などなかった。

そもそもこの距離で彼女に本気で動かれたら俺では相手にならない。

しゃがんでいた姿勢だったこともあり、いとも簡単に首根っこに“噛み付かれた”。

「っ!?!」

痛みと吸血はそれこそ一瞬。

僅かなそれを終えて、口を離れたすずかはけれど手を俺から離さない。

そのまま、鼻と鼻がぶつかり合いそんな距離で彼女は俺を見上げた。

「……………」

息を呑むほどに上気した頬と潤んだ瞳で。

何か、意を決したような顔で俺にそれを告げる。

「何があっても、これだけは覚えていてください。

わたし月村すずかは……………あなた以外の人の血なんていりません」

そこにはすずからしくない、けれど間違いなく彼女の気持ちがあった。

俺の事情など知らない、と。知っていても考慮なんかしてやらない、と。

取り様によってはワガママな、けれど一途な気持ちだが、俺に向けられていた。

あなただけの血が欲しい

もはや、どう受け取ってもそういう意味しかない言葉。

彼女なりの、彼女だからこそ言える遠回しでストレートな告白。

「そ、それだけです……じゃあ待ってますから！」

言い終えて、突然逃げるように部屋に戻っていつてしまわずか。後姿からでも解るほど、耳まで真っ赤に染めて。

ああ、なんだ。それでみんなの前に戻ったら、大変だぞ？

『ふっ、もてる男は大変だな、マイスター』

『ただの誑しでしょう……あとで目一杯女を泣かす、最低なほうの……』

デバイスたちからの耳が痛い言葉に、俺は立ち上がりながら首を横に振った。

「……違うよ、いまのは……それだけじゃない」

だから消えないで

俺には“そも”聞こえた。

「ああ、でも25日か……それはちょっと、難しいなあ」

今日を含めても半月もない。祝ってくれるのは嬉しいが、時間がない。
俺が月末ギリギリまで自由に動けるかといえはそうでもないのだから。

おそらく25日は限界点だ。それを超えたら、おそらくもう……

…皮肉な話だ。

俺の誕生日が俺の命運をわけるデッドラインなんて。

『しかしクリスマスが誕生日とはな、救世主にでもなってみるか？』

「アホか、俺が救ってほしいよ」

むしろ誰か救ってくれよ。救うことのできる誰かがいるのなら。

にしてもね、メシア、ねえ……磔にされて処刑されたけどその後復活したとかいう人だよな？

ん？

「……一度、死んだ？」

完成しないと切り離しは無理だ。少なくとも安全・完璧にはできない。

なら完成した後、俺が闇の書に食い殺される前に全員を切り離せるか？

正直な話、怪しいとしかいえないぐらいに危ない賭けになる。だからもう俺には具体的な方法が浮かばなくなってしまった。

だが、待て。本当にもう策はないのか？

もしかして俺は自分を犠牲にする“方法”を間違えてたんじゃないか？

俺は死ぬ覚悟があっただけ。死んでもいいと思っていただけ。その“死”すら利用しようとは思わなかった。

犠牲にする意味合いを、犠牲にするモノを変えるんだ。

そうすれば形は違いかもしれないがもしかして誰も消えなくてすむんじゃないか？

「って何考えてたんだ俺は……ひどすぎるだろうそれは。
次善策どころじゃない。最後の保険以下だ。
なまじ生き残るから死ぬよりタチが悪い……」

『コウキ?』

そこまで考えて額を押さえた。

それなら確かに全員生き残る。ひとりぼっちになる奴もない。
けれどそれは何もかも中途半端だ。きつとシコリになる。ずっと消
えないシコリに。

そして生き残ってしまうから、もしかしたら今後、という期待も残
す。

ダメだ。酷すぎる。そんなありもしない希望だけ残すのか!?

「なのに、どうして……一番まともな策なんだろうなあ……」

思わず誰にともしに愚痴ってしまう。

ああ、多分俺が考えた中で一番実現可能な計画だ。一番最低なくせ
に。

なら、そのために動かないと。ギリギリまで諦めはしないけど、
そのために最悪を考えていないというのは意味が違う。

「……リニス、明日お前をトラヴィックから外す」

『っ、まだトラヴィックには補助が必要だと思います』

「ああ、だから明日完成させるんだ。本当の意味で、トラヴィック
を」

『本気かね、マイスター。前から聞いていたが、おそらく前代未聞だぞ？』

「当たり前だ。こっちは今まで誰も逃れられなかった闇の書の呪縛から

逃げ切ろうってんだ。それぐらいしなきゃ、そもそも無理な話だ」

『……………わかった。』

そこまで決めているのなら私としては文句などない。好きにしたまえ』

『……………』

トラヴィックの了承とリニスの沈黙をあえて肯定的に受け取って、廊下の壁に体をあずけて、息を吐く。これで完成さえしてしまえば、今思いついた最低の計画はなんとか下準備が完了する。

ああ、でももし、これが実現してしまったら。

あんたに引つ叩かれるの。無理だよな。

しめ

すべきことが始まる

12月16日 PM01:45

管理局本局 応接室

ガラステーブルを挟んで、老齡の提督と妙齡の提督が向かい合う。普通であればいくら同じ提督といえど若い方の提督が緊張する状況だ。

それが歴戦の勇士といわれるほどの伝説的な提督なら、余計に。しかし、こと“彼女”に至ってはそれには当てはまらない。

「すまないね、老人の茶飲み話に付き合ってもらって」

軽い世間話を終えて、紅茶を飲みながら自嘲気味にいうグラム提督。

「いえ、ちょうど整備ドックが空くのを待っているだけでしたから……」

それに問題ないとして軽い笑みで答えたりンディ提督。

二人の初対面から今日までの日々はかなり長い。

結果的に、ではあるがリンディとクライドを出会わせた人であり、ふたりを提督になるほどの人物に育てあげたといっても過言ではな

い。
そのため公の場ではともかく、こういう時は気安くはないが互いに相手を親や子のような目で見てしまうのはおかしな話ではない。

「……………やはりアルカンシエルを搭載することになったか」

だが、老練な提督からすれば今の発言は聞き逃せず仕事の顔つきになる。

アースラが少し前に整備を終えているのと彼女がいま担当している事件を

知っているのならば再びアースラが整備ドックに入る理由は一つだ。言葉を濁したつもりも彼女の彼女であるが顔色ひとつ変えずに受け答えた。

「はい、闇の書事件に対処する以上用意しておかなければならないものです。

できれば使わないで終わるのが一番いいのですけど……………」

必要だといいいながらも使われないほうがいい。と彼女がいうのには訳がある。

アルカンシエルとは管理局の大型艦船に搭載される魔導砲のこと。

艦船武装の中でも屈指の殲滅力を誇るためにその使用には厳しい制限がかかっている。

なにせ着弾後対象を空間歪曲と反応消滅で殲滅するものだ。おいそれとは使えない。

さらにいうなら効果範囲は発動地点を中心に百数十キロに及び、対象以外の被害も大きくなってしまつのである。

だが覚醒時の闇の書への最終的な対処法としては一番確実な方法でもあった。

「そうだな……しかし君は私と違って優秀だ。
決して私のようなミスを犯すことはないだろう」

「……夫の葬儀でも言いましたが、あれは決して提督のミスではありません。」

あんなことになるなんて予測できる人なんていません」

「いいや、あれは私の浅慮が……っ、すまない。」

私以上に君にとって、あまり気分のいい話ではなかったな」

11年前の葬儀と同じようなやり取りをしてしまいそうになり、
考えなしかったと謝罪するグラムにリンディはただ静かに首を振
る。

その顔はひじょうに穏やかで心乱された様子などない。

「いえ、お気になさらず。それよりも今は、今のことを考えていか
なくては」

そういつて微笑む姿はそれこそ入局時から大きく変わっていない。
相手に柔らかな印象を与えながら自身の思惑は見抜かせない。

それに聡明さと洞察力の高さを持ち合わせている彼女に

“話し合い”でもそもそも勝ちに行ける人物はいないのだ。

少なくともグラム自身は勝てる気がしない。

先ほど優秀だといったのはお世辞でも自らを卑下したのでもなく、
彼の本心から出た彼女への間違いのない評価なのだ。

「そうだな、それでどうだね。今回の闇の書事件は？」

だから、ではないが。

グレアムはようやくその本題を切り出した。

「いろいろと“違う”ことが起こっていると聞いている。
主が協力を申し出てきたというが……その少年は、正直なところ、
どうなのだね？」

裏を知っているなら何をいつているのかという質問だが、
グレアム“提督”としてはその主が信用できるのかと聞いてもおか
しくはない。

またグレアム個人としても彼女の目線から見た彼の姿を知っておき
たかった。

それに対してリンディは考える素振りでも手に持っていたカップから
紅茶を飲み干すと

満面の笑みで悩むことなく、はつきりところ答えた。

「これっぽっちも信用できませんね、あの男は」

「……………うむ？」

何か聞いていた話と大きく食い違う反応に戸惑うグレアムを余所に
リンディは問題の主である少年をいっそ見事な程に一刀両断する。

「本気でぶつかってこないあの男をわたしは絶対に信用なんてしま
せん」

「……………」

グレアムは知らず、その返答に面食らってしまう。

老提督が知る限りリンディは相手が誰であれ、例え本心からそう思

つていても、

それをここまでストレートに言葉にするような女性ではない。

「それは……彼が心を開いていない、ということかね？」

そんなことはないだろうと内心で思いながらも、

するはずのない言動をさせた以上、彼女とコウキの間だけで何かあったのでは？

と、老提督が勘繰ってしまうのは何もおかしな話ではなかった。

だからその問いかけはその確認にも近かったのだが、返ってきた言葉はグレアムを余計に困惑させてしまう。

「……………開けるわけが、ないんです」

「それは、なぜだね？」

僅かに気落ちしたような声に、知らず硬い声で問い返す。リンディはそれにどこか悲しげな笑みと言葉で答えた。

「彼はとっくの昔に、自分の心をどこに置いたか忘れてしまっているんです」

どこにあるのか分からない物を開くことができますか？

どこにあるのか分からない物をぶつけることができますか？

言外にそう問われたような気がして、背筋に嫌なものが滑り落ちる。グレアムはそんな馬鹿なことが、と思いかけるがそれを言った女性が自分とは比べ物にならない洞察力の持ち主だと思いついて鳥肌が立つ。

(なんだ……彼女はいつたい彼のなにを見抜いたというのだ!?)

嫌な汗が出てきて、老提督は知らず震えた。そして次の彼女の言葉で完全に絶句してしまう。

「だから、あの男はいつだって…… “すべきこと” しか出来ない」

自分が見つからないから “したいこと” がないのだと。そういわれて初めて、グレアムの中で何かが一本に繋がる。

『昔の家でまた暮らさないかい?』
『うん、いいよ』

『一緒に暮らしてほしい子がいるんだが、いいかな?』
『……その子が、それでいいのなら……』

『どづかね、何か困ったことはないかね?』
『俺は別に、あっ、でも車椅子で動きづらいんだ。リフォームしたほづが……』

『二十歳まで生きられない？』

『それまでは俺がします、だからその後はよろしくお願いします』

『六人家族は大変だろう』

『やらなくちゃいけないことが多くて、気がついたら一日が終わってますよ』

片手で数えるほどしかない直接の会合。何度もした手紙や電話でのやり取り。
疑問にさえ思っていなかったすべての出来事が彼女の言葉で意味が変わる。

(そうだ、そんなこと……私は分かったのではないのか？
だからこそ私は八神はやてを彼にあてがった……“すべきこと”
を与えるために！)

「そんな男を信用なんて、できません……」

すべきことのためなら、彼はすべてを裏切れるのだから

12月16日 PM04:48

拠点マンション エイミー自室

それはまるで、狙ったかのようなタイミングだった。

コウキとリニス、プレシアがトラヴィックを真に完成させるために、そしてクロノとリンディが経過報告とアースラへのアルカンシエル搭載の手続きで。

それぞれ本局に戻りマンションでの指揮は代行としてエイミーに任されていた時だった。

学校終わりの放課後。

習い事のためにアリサたちと別れたなのはとフェイトは名目上、待機しているためにフェイトの自室で談笑していた。そこへ突然のエマーゲンシーコール。

様々な地点に設置されたサーチャーに彼らの探し人が引っかかった。

「うそでしょ!?!」

そうそう緊急事態なんて、と高を括っていたエイミーは驚愕する。

しかし誰より慌てながらも迅速に対応する辺りが彼女が優秀といわれる所以である。

「サーチャーの反応確認、騎士たちの魔力波動を感知！」

場所は人こそいないがリンカーコアを持つ大型生物がいる砂漠が広がる世界。

そこにシグナムとザフィーラの反応がありエイミーはその姿を捉えた。だが。

「どうしよう、今から要請しても最速で45分。間に合うわけない！」

あまりに突然、しかも誰もが出払っていたタイミングだったために、騎士たちを捕えるための結界を張れる魔導師が来る時間がない。その様子にシグナムとザフィーラに何かと縁がある二人が互いを見て頷き合う。

「エイミー、わたしがいく」

「私もだ」

フェイトとアルフの言葉にエイミーもまた頷く。

そして後方待機としてなのはをそのまま駐屯地であるマンションに残した。

フェイトたちが砂漠世界に到着しそれぞれの相手と向かい合った瞬間。

再度、警報がその情報を伝える。新たな騎士の反応だ。

「これは……ヴィータの反応、それにこれは!？」

こちらもまた人が存在しない世界。巨大な岩山ばかりが続く世界。単独でそこを飛行している彼女を捉えたエイミィはその腕に闇の書が抱えられている事を確認して息をのむ。

「え、まさかシグナムたちは囿！？ こっちが本命！？ なのはちやん！」

「わかりました。ヴィータちゃんの所には私がいきます！」

そうして彼女たちを送り出したエイミィは
現場の記録を続けながらも大急ぎで、本局へと連絡を取った。

12月16日 PM05:08

管理局本局 デバイス調整室

』
というわけで、いまはフェイトちゃんたちがみんなの足

止めを……』

「わかりました、私たちもすぐにそちらに……行きましようコウキ
！」

空間モニター越しのエイミーからの報告に腰を浮かせたプレシアに、
なぜかコウキは反応せずに沈黙したまま口元に手を当ててた。

「……………」

『コウキ？』

訝しむリニスの声も無視しながら、彼は何かを考えているようだった。

「……………エイミーさん、シグナムたちの世界とヴィータの世界はどれ
だけ離れてる？」

『え、あ、うん。』

距離的には個人転送で、だいたい20分ぐらいかな？』

突然、関係あるのかなのか微妙な質問をする。

戸惑いながらも関係あると判断したエイミーは即座に答えた。

転送というのは何も一瞬で向かう先に到着するわけではない。

当然ながらそれぞれの世界の距離によつてはかなり長い時間がかかる。

個人の力でそれを行つなら余計に。それで20分というのはかなり
遠出だ。

「じゃあ、どつちからでも10分程度で行ける世界ってある？」

『うん、待って調べるから………あつた！　ここも人がいない世界。』

一面、森が広がる自然だけの世界………って、うそっ！　シャマルの魔力波動を感知っ！？』

指揮官として。

すでにリンディに匹敵する信頼を向けていたこともあり、エイミイはそれに対する疑問を出さずに即座に調べ上げた。

結果は彼女の予想以上のもので、騎士を見つけるとは思ってもいなかった。

「待ってるから、来いってところだな。

仮にも主を呼びつけるとはいい度胸だ」

逆に予想通りなのか。

モニターに映る彼女の姿に不敵に笑う。

「………どういうことですか？」

さすがに話についていけず思わず訊ねた。

あまりにも彼が口にした事が確過ぎたのでその表情には驚きより先に困惑がある。

「この前の戦いからまだ二、三日だ。強い警戒を続けているだろうあいつらが

こんな簡単に見つかるわけがない………それも続けて、見計らったかのようなタイミングで」

『畏………ですか？』

いわんとすることを察したり二スの言葉を頷き、肯定するコウキ。

「シヤマルがそこにいる時点だな。」

順々に現れたのは戦力分散っていうよりは俺を単独で引きずり出すためだろう。

しかもこれだと駐屯地のシフト、バレてないか？」

『そんなっ、いくらなんでもム……………リじゃないかも。』

シヤマルならここにハッキングするぐらいできそう……………』

ああっ、またシステム組み直さなきゃ！

とひとり戦々恐々としているエイミィを半ば放っておいて、

“完成”したばかりの待機状態のトラヴィックを手取る。

『ちょっと待ってください、まさか罠だと解ってて行くんですか！』

『？』

もはや彼から分離されて元の姿に戻ったり二スはいまはプレシアの手の上。

そこで内心「行くんだらうなあ」とは思いながらも咎めるように口にした。

彼女を持つプレシアも言葉にしないがそっぴい顔でコウキを見ている。

「……………はやてたちは焦っている。だからこの罠を仕掛けてきた。

俺にバレるのが前提で、でもきつと来るであろうと予測して」

奇妙な戦術だ。と内心で笑う。

相手を欺き翻弄するものである戦術や罠を相手の人格を信用してや

るのだから。

本来ならその内容や思惑まで知れたそれらが有効的に使えることはない。

しかし今回だけは逆。相手にバレることで相手を招き寄せている。

「はやての作戦が俺の推測した通りなら、これはあいつらを捕まえる最後のチャンスだ。」

これを逃がして、ひっそりと蒐集されたらもう……」

主として、管制人格を通して残りページをコウキは把握している。さすがに細かいページ数までは解らないが、残りが二桁なのは確実に仮に5人がそれぞれ毎日2ページ稼ぐだけで十日もかからない計算だからこそ、これが最後のチャンスなのだ。とコウキは語る。

「エイミイさん……クロノ達にこれを伝えたよね？」

『はい、一番に。艦長たちもすぐにこちらに来ると……』

「でもまだ本局だろ？」

「ならすぐにこう伝えてほしい。まず」

「あの指示はどういうことなんですか？
あれだとシャルしか捕まえられない気がするのですが……」

エイミイを通して、指示を出し終えた彼は本局転送ポートへと向かっていた。

その走りになんとかついていきながら、プレシアは疑問を口にする。しかもそれだけでは終わらない。

「それにどうしてあの世界にシャルがいると畏だということに？」

矢継ぎ早にさらに問いかけていく。

研究者気質ゆえか。疑問を解消しなければ気が済まない部分がプレシアにはあった。

もつともそれはある程度彼が答えてくれるのが解っているからこそ、だが。

そして予想通り、彼は不敵に笑って遅れて走るプレシアにこう告げた。

「なに、単純な理由だよ。」

個人転送で10分って距離はな、シャルの射程範囲なんだよ」

「ええっ!？」

それは次元跳躍攻撃をやった事のあるプレシアをも啞然とさせる距離。

「湖の騎士の名は伊達じゃないってことぞ」

彼女の反応に嬉しそうに笑うと彼はまるで自分のことのようにそれを誇るのだった。

巻き込まれる少女・戦う少女・聴かない少女

12月16日 PM05:20

海鳴市 繁華街 歩道

夕暮れの中、ふたりの女の子が慣れた様子で人でごった返す道をおしゃべりしながら歩いていた。

「あーあ、こんなことならのはやフェイトと遊ぶんだった」

「仕方ないよ、急に決まったことだったみたいだし」

不満そうな顔で文句を言うのはアリサでそれをなだめるのがすずか。実に、いつも通りな光景だった。ただそうなった理由は少しいつも通りではない。

「そりやまあ、建物の耐震検査が入ったんじゃしょうがないけど、それならもつと前から知らせておきなさいってのよ。これだからお役所仕事は！」

がーっと文句を今にもぐちぐちと語りだしそんな友達をまあまあと抑えて、すずかは並んで一緒に街を歩く。

ふたりは同じヴァイオリン教室に通っている。

双方ともに家がお金持ちに分類されているので所謂習い事、お稽古である。

そして今日がその予定されていた稽古日だったのだが、行ってみると教室のある建物が急に耐震検査されることになり、念のために建物内に人が入れなくなったのだった。

おかげで稽古は突如お休みとなるが、

それで喜ぶような不真面目さを彼女達は持っていない。

何が何でも練習しなきゃと思うほど打ち込んでいるわけではないがしたくないと思うほど嫌っているわけではないのだ。一応。

あくまでずかば趣味のひとつ。アリサはお嬢様の義務と割り切っている。

本来なら、そこでバニングス家お抱えの運転手・鮫島を呼んで迎えに来てもらうのだが生憎のラッシュ時間。待っているより、いつもの合流地点まで来てもらってそこへ徒歩で向かったほうが早い。

習い事がなかったり早く終わったりするとたまにそういうことをするので

そういった時の合流場所は前々から決まっていたのだった。

「今からでもフェイトの家、行ってみようかなあ……………」

「え、ちょっと遅いよ？ それに鮫島さん待ってるし……………」

「わ、わかってるわよ。言ってみただけよ」

少しだけ戸惑ったような口調にクスリとすずかが笑う。

「目当てはロウキさん？」

「なっ!？」

図星をさされ、一気に真っ赤になる親友にすずかはさらに笑みを深める。

現在、フェイトの家には彼女たちの想い人も暮らしている。

アリサがよく知るなのは家でなくフェイトの家といったのはそういうことだ。

「うっう……」

すずかの普通なら和む暖かい笑みが、今は何か痛い。

そう感じるアリサはあらぬ方向をむいてしまっが、溜息をひとつ吐く。

「はあ……変な感じよねえ、みんな同じ男が好きなくせに争わないんだもん。」

ドラマとかマンガだったら今ごろ普通はドツロドロよ!？」

「え、だってわたしはアリサちゃんも大好きだよ？」

にっこりと、むしろどこが変なの？

と言いたげな表情とニュアンスで即座に返されてアリサは絶句。額を抑えて、しばし考え込んでしまっ。

「……前々から思ってたけど、なに？ おかしいのは私なの!？」

おかしい恋愛観など持っていないと自負するアリサである。

無論、友だちとドロドロな争いなどしたくもないが、

まったく火花が散らないのもそれはそれでどうなのか、と思うのである。

「ふふ、アリサちゃんは難しく考え過ぎだと思うよ」「

「あんたらがお気楽すぎるのよ！

一人くらいこうでないとバランス取れないわよ、まったく！」

軽く憤慨するアリサだが、それがきつと自分の役割なんだろうと思っているあたり、充分に彼女も毒されてしまっている。

すずかもそれでこそアリサちゃん、と微笑んでいる。

もっともそう返されたアリサは渋い顔を見せる。

「……もうっ、今日は家に帰る！」

「寄っていかないの？」

「今日はいい！ ほら、鮫島待ってるから行くわよっ！」

急ぎ足で逃げるように先を歩くアリサにまた微笑んで、

すずかも続くように足を踏み出して 止まる。

「っ！？」

「……どうしたのよ、すずか？」

急に立ち止まってしまった少女に振り返ってアリサは首をかしげる。だがすずかは立ち止まったまま周囲に視線を走らせ徐々にその顔を青くするだけ。

何かが起こったのだと瞬間的に察したアリサも視線を周囲に向けて

愕然とする。

「え……………誰も、いない？」

12月16日 PM05:08

沙漠世界

灼熱の太陽の下。

生命の息吹がしない砂漠の上。

黒い騎士と黒い魔導師が己が獲物を手に斬り結ぶ。

「やあああっ！」

幾度目かの交差。

降りおろされたレヴァンティンをバルディッシュの柄で受けるフェイト。
かつて両断されてしまった一撃は、すでに彼にはもう通じない。
だが、体格で劣るフェイトにそれを受け止める力がなかった。
衝撃そのままに吹き飛ばされていく少女の身体。

「っ!？」

それが、視界から消えて背筋が凍ったのはシグナムだ。

得意の高速機動をさらに磨いたそれは目で追いきれなかった。

だから彼女は半ば騎士としての勘で振り向きながら前方に跳ぶ。

「はあぁっ!」

既に背後に回り込んでいた少女の戦斧と迎え撃つ剣が激突する。
刹那の閃光と衝撃に互いの獲物がはじかれていく。

しかし共に体勢を崩すことはなく、むしろ示し合わせたかのように
弾かれた勢いを利用してふたりは体を回転させ返す刃を相手に叩き
つける。

「……っ!」

「っ!」

だが、同時に相手の刃を避けたためにそれは互いの防御フィールド
を削っただけ。

その刃先が互いの眼前にまで迫っていたことを考えれば間違っただ判
断ではない。

結果、攻撃が掠ってすれ違っただけとなりフェイトは一旦距離を取
るために

自慢のスピードで飛び上がりながら振り向きざまに戦斧を彼女に向

ける。

『Plasma Lancer.』

デバイスと共に強化された三つの光槍は一直線にシグナムを襲う。その表情には僅かな動揺と反応の遅れが見え、すべてが命中し爆発。粉塵が舞い上がり、シグナムの姿を覆い隠してしまう。

「え？」

離れた地点に降り立ちながらフェイトはその結果を訝しむ。今のは決して彼女が対応しきれなかった距離とタイミングではなかった、と。

『Schlangeform.』

だがそれを考える時間は少女に与えられない。

粉塵を突き破るようにフェイトに襲いかかる連結刃。

一直線に自分に向かってくるそれを避けるために横に跳ぶ。

誰もいなくなつた砂漠の大地に連結刃の先端が突き刺さつて砂が舞い上がる。

それを確認して、視線を彼女に向ければすでに粉塵は消え姿が見えていた。

「シグナム……」

装飾がまるでない黒い布切れだけで作られたような衣服。

なのはの襲撃時にはかすめるのが精一杯だったそれに

先程のプラズマランサーが当たつたであろうダメージが見えた。

新たなる光の槍は確実に彼女の防御を抜けていた。

「……どういう、つもりですか？」

だからこそ、それはおかしかった。

それは本来なら受けるわけがないダメージ。

彼女の技量なら決して避けるのも防ぐのも難しくない。

それも今の攻撃だけではないのだ。

戦いが始まってからシグナムの動きが時折反応が鈍くなる。

鋭く重いはずの一撃に、どこかそれが伴っていない。

“ 剣に迷いがある ”

少なくともフェイトはそう感じていた。

「やはり、分かっってしまうかテストアロツサ。

お前相手にこれは命取りだと分かっただけはいるのだが……」

レヴァンティンをシュベルトフォルム。

片刃の長剣へと戻して、彼女はその顔を苦渋に染める。

みんなには悪いんやけど、

誘き出したなのはちゃんたちに言ってほしい事があるんや

主の言葉が再度脳裏に蘇る。
その策を、シグナムは出来れば使いたくなかった。
純然たる決着をここで付けたい。だがそれ以上に自分は騎士で、将
なのだと。

彼女は自分に言い聞かせて、襲い来る苦悩や迷いを振り切る。

「テストロッサ、お前は主コウキに騙されている」

「……………え？」

12月16日 PM05:10

岩山世界

次元の海には様々な世界がある。

地球の常識では測れないその中には巨大な岩“だけ”で構成される世界もあった。

それでも空は青くて白い雲が漂っているのは不思議としか言いようがない。

「う、うわあっ！」

そんな空で戦う少女たちには生憎そんな謎に付き合う余裕は無いようだ。

自らの音叉状の杖から一条の桜色の光を放つ白い少女と

それから逃れた鉄の槌を持つ黒い装いの少女はその空で向かい合う。

「おいこら！ 少しはこつちの話を聞け！」

愛機、グラーファイゼンを突きつけながらも

ヴィータは決して戦闘態勢というわけではなかった。

しかし。

「ごめん、聞けないんだヴィータちゃん。こればかりは！」

対する白い防護服の少女、高町なのはは何故かそれを聞こうとせず
初めからずっと戦闘態勢であり、ヴィータの言葉に返事こそすれ
会話を成立させる気がまったく感じられなかった。

『Accel Shooter』

「げっ!?!」

杖先に生まれたスフィアから放たれる十二発の誘導操作の魔力弾。

術者であるのはの動きを止めてしまいが攻防一体のこれは防ぐのも攻めるのも非常に難しいことは前回の結界内の戦いでよく知っている。

そのため非常に嫌そうな顔をしたヴィータだが、即座に四つの鉄球を生み出してアイゼンで弾き飛ばしつつ、パンツァーヒンダネスというバリアで全身を覆う。多面体の赤いクリスタルに覆われたようなそれはなのはと違い、攻撃も移動も捨てての完全防御への姿勢である。

「フェイトの時も、最初に襲った時も話聞こうとしてたじゃねえか！
なんでいまだけ例外なんだよ、こらあっ！！！」

十二発中、四発を自らの鉄球で相殺しながらも防御に専念して残り八発のアクセルシューターの猛攻に耐える。縦横無尽に空を駆け、全方位から襲い来る魔力弾に次第に全身を覆うクリスタルのようなバリアがひび割れていく。

みんなには悪いんやけど、

誘き出したなのはちゃんたちに言ってほしい事があるんや

(はやて、どうすりゃいいんだよこれは！？)

主の言葉を思い返しながらも、聞く耳を持たないのはに戸惑う。

「っていつかそもそもおかしいだろ!？」

そつちは一応局の手伝いなんだからこつちの言い分を聞く義務つてもんがあるんだろうが!！」

確かに、自分たちは間違いなく犯罪者だ。

襲いかかって反撃されるなら分かるが、問答無用というのは乱暴だ。相手が自分達の事を何も知らない局員ならまだしもよく知った仲なのに、だ。

そうバリアの内側から叫ぶが、なのはの表情は不自然なくらいに反応しない。

「……………ないよ、そんなの」

「おい、お前本当になのはか？」

もしかして誰かの変身か。

とさえ疑ってしまうほどにその返答に躊躇はなく声は冷たい。

だが、それならこの態度は逆におかしいし、なのは以外に

十二発の誘導操作なんてマネが出来る魔導師はそうはいない。

間違いなく高町なのは本人。なのに様子だけがおかしい。

「だって……………私が協力しているのはコウキさんだもん。管理局じゃない!！」

「そんな屁理屈ありか!？」

思わずヴィータがそう叫んだのとバリアが砕け散ったのはほぼ同時。即座にその場から逃れ、矢継ぎ早に襲い来るシューターから逃れる。注意深く、魔力弾を見据えながらもヴィータはまた語りかける。

「だからそのコウキのことで話が、ってだから話を聞けえっ!!」
口を開こうとするたびになのははまるで聴きたくないといわんばかりに
容赦のない攻撃を次から次へとヴィータに放っていく。
一応、話を聴かせるのが目的であるヴィータとすれば本格的な応戦は控えたかったのだが、相手がなのはではそれは命取りだった。

「アイゼン！」

『R a k e t e n f o r m .』

全方向から襲い来る八発となったシューター。

アイゼンのスパイクが光り、ノズルからジェットが火を噴く。

「てりゃあああっ!!」

推進剤の噴射と回転で、まわりつくように襲いかかる魔力弾を叩き落とす。

同時にそのままの勢いでなのはへと向かっていく。

「ラケーテンハンマーツ!!」

『P r o t e c t i o n P o w e r e d .』

レイジングハートが襲い来る驚異へと独断でカートリッジを使用する。

かつてならぶち抜かれていたシールドもその強化でより強固となっていた。

「うっうっうっ!!」

だが、それゆえに防御に専念せねばならない。

いくら強化されていてもそれほど集中と魔力消費をしなければ
ヴィータのラケーテンを防ぐことはできないのだ。

「おいつなのは！ お前はそのままでもいいのかよ！」

そして、それがヴィータの狙いだった。

防御に集中せざるを得ないのはは余計な行動ができない。

片手で杖を持ち、残りの手でシールドをかざしている少女には

他の魔法を使うこともそれこそ耳を両手で塞いでしまうことだっ
て、できない。

「お前らがどう聞かされてんのかは知らねえ。けど、お前らは騙さ
れてんだよー！」

「っ！？」

そうして、ふたりの魔法少女に真実が明かされようとして

いた

巻き込まれる少女・戦う少女・聴かない少女（後書き）

ヴィータとなのはの会話は書いてて少し楽しかった。

「話を聞かせようとするヴィータ」と「話を聴かないなのは」って

（笑）

ありえねえ……。

あ、すみませんが、これに対するなのはたちの反応は
ワンクッション置かせてもらいます。

最低の戦い（前書き）

なにが最低って、そりゃ、もう、ねえ？

最低の戦い

12月16日 PM05:15

森林世界

人が存在しないはずの世界。

生い茂る森とそこに住む動物たちだけの世界。

そんな自然しかない場所で違和感のある色が動く。

全身黒で統一された人型。トラヴィックをまとうコウキである。

夜ならばともかく昼間のような日差しの中ではその存在はひどく目立っていた。

本局にある緊急時用の転送ポートを使用することで

個人転送に比べればかなりの時間を短縮して彼はこの地にたどり着いていた。

今頃、他世界ではなのはとヴィータ、フェイトとシグナムの戦いが行われている。

そして彼もまた、そこで彼女と戦うために臨戦態勢のまま歩みを進めた。

いくらか歩くと開けた場所に出て、そこは一面の湖。

美しい水面が日差しに照らされキラキラと輝いていた。
しかしコウキの視線はどちらかといえばその岸辺の女性に向けられていた。
ふわりと長いスカートの裾を掴んで裸足で水を撥ねて遊んでいる。
別段、見惚れていたわけではない。ただあまりに状況と合わない平和な光景に
見続けたい想いと終わらせようとする想いが同時に湧き出てしまったのだ。

「湖の騎士が、湖で遊んでいるなんて洒落のつもりかシャマル？」

僅かに頭を振って、けれど軽い調子で声をかける。

するとまるでいま気付いたかのように振り向いた彼女は照れたように笑みをこぼすと水面から出て、佇まいを正す。

「まさか、コウキちゃんが来るまでの暇つぶしです。

思ってたより早かったですね？」

「管理局が速達してくれてな、想像以上に早く着けた」

それは良かったですね、と微笑んだ彼女はしかしすぐ渋面となる。

「でも、その格好はなんとかありませんでしたか。

すつつつごおおおく！ 浮いてますよ？」

彼の姿は全身黒いコートと眼深く被ったテングロンハット。

そのうえ腕や腰にはおびただしい数の弾帯が巻かれている。

場所が場所なら不審人物として通報されてもおかしくない格好だ。

『うむ、それにしても私も同感だ。もう少しなんとかならなかったのか?』

「言うな、デザインまで気にしてられなかったんだ」

「コウキちゃんは前から自分が着る服には無頓着すぎです!」

人の服を選ぶセンスは抜群なのに。と、ひとり溜息をこぼすシャマル。

まったくだ。と同調するデバイスに渋い顔しながらコウキは一步を踏み出した。

声をかけてから、一步も出さなかったその一步を。

「さて、これでそっちの思惑通りだろう。」

「どんなお持て成しをしてくれるんだシャマル」

そして不敵な笑みと共に彼女を挑発する。

それでも軽い調子の言葉なのはこの会話をまだ楽しんでいたいからなのか。

解らないまま、コウキはさらにもう一步踏み出した。

「ええ、それはもちろん最高のものを用意してます。」

なにせマスターへのお持て成しですもの。

この湖の騎士シャマル、存分に腕を振りますよ」

「ああ、それはいいが……お前の腕前ってまだまだ微妙レベルだつてこと忘れんなよ」

「ひびーい…」

そこまで言うなら、私のフルコース。完食してくださいね！」

広げた両手に呼応するように現れる大小10個程度の小さな風の塊。魔力で形成された小型の竜巻のようなものが彼女の周囲に浮いて並ぶ。

一つ一つの威力は小さく誘導操作もろくにできない魔法だが、消費される魔力は少なく難易度も高くない魔法。その“お手軽さ”は厄介としかいいようがない。

「いきなり即席料理とか手抜きかこらっ！！！」
インスタント

腕を振り上げ、ロード、排莢されるカートリッジ。込められた魔力が腕を包み込み、黒き鉄拳を作り出す。

「主婦の知恵といってください！
だいいち冷凍食品インスタントなのはそっちでしょう！？」

指揮するように振るわれた腕に従って、風の塊が次々と襲いかかる。それをトラヴィックの防御能力を頼って、回避を考えずに駆け出すコウキ。

いくつもの風がジャケットにぶつかるが霧散して消えていくだけ。

「ああっ、それすっごくずるい！」

「そういう風に作ったからな！」

風の弾幕を超えて突き進む彼への文句は軽く受け流される。

その間にも風は止むことなく彼を襲っているが足止めにもなっていない。

ついにはあと一足で届きそうな距離に迫られ咄嗟に“手元”から魔力糸を振るう。

「ムチじゃねえんだ、効くか！」

魔力をまとっていない左手で弾いて、その一步を踏み込む。その両腕が届く距離。魔力をまとった右拳がシヤマルへと降り下ろされる。

迫るその攻撃に怯んだのか。自らを守るようにかき抱き、体を縮こませた。そして。

「イ、イヤアアアツ！！ 近寄らないでえっ！！！！」

悲鳴を上げた。

1000人中1000人が何かしら事件が起こったと思わせるそれ。

そのうえ身体は恐怖に震え、潤んだ瞳が怯えたように彼を見ていた。

「っ、な！？」

『馬鹿者っ！ 動きを止めるな！』

トラヴィックの忠告に彼が我に返るより速く、

彼女の手は突き出された形で止まっていた腕を掴んでいた。

「ええい、飛んでけえ！！」

さっきまでの怯え顔と悲鳴はどこにいったのか。

楽しそうな笑みと声で、掴んだ腕を背負って放り投げた。

「うわ、ってお前の細腕で何、うおおっっ!?!」

形も技も何もない一本背負いもどき。

こういった事を不得手とする彼女のそれは本来ならたいしたものではない。

しかしシャマルが投げたのと同時に周囲に起こした風の力に包まれ、投げ飛ばされた威力以上のスピードと勢いで吹き飛ばされ、向こう岸にある木々に叩きつけられてしまう。

「ぐああっ!!」

「トラヴィックの弱点その一!

足の風力で無理矢理浮かしているから自然や他者が起こした風の影響を受けやすい。

他の魔導師なら出来る姿勢制御や慣性制御ができないのもあって風で吹き飛ばされるとこんなふう^{ふう}に止まらなくなってしまうんです、わかりましたか?」

いくつもの木々を薙ぎ倒してようやく止まった彼。

天地を逆にした頭が下になった姿勢の彼に、指を一本立てて

教師のように振る舞いながらその弱点を指摘・解説するシャマル。

その顔はどこかしてやったりである。

「くっ、わかるも何も俺が作ったんだぞ!」

そんなことは知っていると体勢を整えて立ち上がる。

トラヴィックは足のホバーシューズの風を用いて時に飛行し時に瞬発力を得ている。

その関係上、この風の衝撃まで無効化してしまうとそもそも動けな

い。

無論、主に風を受けているのはシューズであるがジャケット全体もある程度の風力を受けてくれないとうまく“吹き飛ばない”のだ。

「そんなことよりお前！ さっきのはなんだ！？」

『いやマイスター、仮にも弱点見破られてそれはないだろう……』

だがコウキからすればそんなことはどうでもいいのだ。投げ飛ばされる前の彼女の態度の方が問題である。

「ええ？ シャマルなんのことだかわかりませ〜ん！」

「とぼけやがってっ……まともに戦う気あんのか！？」

怒鳴りながら両足から排莢されていくカートリッジ。

暴風が大地と折れた木々たちを蹴り飛ばし、同時にコウキを吹き飛ばす。

自らを弾丸とするように一直線に湖上を飛ぶ。

彼の狙いはわかりやすいぐらいにまっすぐに彼女を狙っていた。

しかしそのスピードと勢いは防御も回避もシャマルでは対応できない。

「がつ、ぐっ！？」

あくまで防御や回避をするなら、だが。

「こ、こんな所に設置型バインド！？」

湖上、丁度湖の真ん中で彼の飛行は止められてしまう。

両手両足、そして胴体を縛るミントグリーンの魔力の枷によって。

「弱点その二！
速さと瞬発力はあってもその軌道はあくまで直線的なために読みやすい」

即座にトラヴィックで弾き飛ばそうとした彼の耳に近すぎる声が届いて、背筋が凍った。

何をどうやったというのか。もう眼前に彼女がいた。

背後で彼女の魔力光を放つ風が渦巻いていたために自分と同じ事をしたのだと

理解した時にはその勢いそのまま繰り出されるリアットをまともに食らっていた。

「があっ！！??」

首を襲う激しい衝撃と痛みを意識が飛びそうになる。

皮肉にも何とか意識を保てたのはその後、風を叩きつけられ冷たい水の中に深く落とされたおかげだった。

「弱点その三と四！

衝撃じゃないモノへの対処は任意なため対応が遅れる。

また無力化するためにはパーシする必要があるから、

防護服として構成されていない手足と顔付近は無防備」

幸いにして澄んだ水だったおかげで水中からでも湖上に浮かぶ彼女が見えた。

その解説をする得意げな表情と共に、はっきりばつちりと。

（弱点見抜いた程度で勝ち誇った顔しやがって！！）

『マイスターのいけない所は挑発や罠とわかって乗るところだ。というか完成したのに私は弱点が多すぎではないか？
そこも含めていろいろ直したまえ』

(うるせえっ！ 出来るならとつくにやってる！)

半ば反射的に念話で怒鳴り返すが果たしてそれは“どちら”の事を言っているのか。

小一時間ぐらい問い詰めたトラヴィックだがさすがに状況を考えてそれは飲み込んだ。

一方、コウキも一回怒鳴ったおかげか水の冷たさか、冷静さを取り戻していた。

(……さて、どうする？)

水中から出ななきゃならんが、澄み過ぎているから互いに丸見えだ) いくつかの事件の時もそうだったが、魔導師といえど水中では活動が限られる。

ましてやまともな防御フィールドを形成できていない現状では彼は装備無しで潜水しているに等しい状態である。長居はできない。この湖がもつと深いなら一旦さらに潜って、別の場所から飛び出す。ということもできるが、生憎姿を隠せるほどの深さはなかった。

何とか隙を見つけるか水中から魔法をぶつけて隙を作り出そうと彼は湖上に浮かぶ彼女を見上げて、拳を構えた。瞬間シャマルは慌てた。

「あっ、やだ！ 下から覗くなんてコウキちゃんのエッチ!!」

「なっ、がっ、ゴボボッ!!??」

言われて、スカートの奥に何か白いモノが視界に映ったような気がして
戻ったはずの冷静さは一気に失われ水中だということも忘れて大口
を開けてしまう。

溜め込んでいた酸素をすべて吐き出して、水を飲んで慌てもがく。

『一応二戦目。完成後としては初陣なのだが……なんとも締まらん
な』

もはや溺れているに等しいマイスターの姿に内心肩を落としながら、
水面に向いている拳からロードしてその魔力を一直線に放出する。
同時に両足からもカートリッジをロードして水中で暴風を巻き起こ
す。

「っー！」

放たれた魔力弾を後方に飛んで避けた隙に飛び上がるトラヴィック。
と、それに着られている形となってしまうたコウキ。

「あら、さすがに弱点その五は直したのね？」

『ああ、もちろんだともシャマル嬢。』

『そもそも前回できなかったのは単に調整不足だったに過ぎん』

既に両手足のデバイスとトラヴィックのAIは繋がっており、
緊急時に彼から操作することが出来るようになっていた。
もつとも、こんな初使用はまさに想定外だったが。

「がはっ、ごほっごほっ……はあ、はあ、はあ、助かったトラヴィ

ツク」

『そう思うなら、手を煩わせないでくれ……情けない』

「そうよね、いきなり溺れるなんてコウキちゃん金槌やったっけ？」

「お前がいう、がはっがはっ!？」

デバイスならともかく、原因である彼女にまでいわれて思わずまた叫ぶが、

そのせいでまたむせてしまうのだから本当に締まらない。

「ふふふ……じゃ、お遊びはここまでにして本気で行くよ!」

コウキからの「お前がいうな!？」と訴える視線を半ば以上無視しながら

表情を真剣なそれに変えると片手を中空に構え、

その開いた手の平の上で魔力の風を幾重にも幾重にも重ねていく。

先ほどまでの相手を吹き飛ばす程度の風ではない。

事前準備は必要となるがいくつもの風を束ねたそれは暴風の塊。

それは周辺の風や空気すら巻き込んで自らを巨大にしていく。

「くっ!」

発動を邪魔するタイミングを逃したコウキはそれが放たれるのを待つしかない。

設置されているバインドがあれだけとは限らないうえに、

その軌道は読まれている可能性が実に高い。またこちらからの攻撃には

どうしてもカートリッジのロードが必要なため事前に行動がバレて

しまつ。

一直線とはいえその瞬発力を封じられた今、先制攻撃はリスクになつていた。

（なら後の先だ。あれ自体が囷の可能性もある。

あいつの一挙手一投足から目を離さず、どう動かれても対応できるように身構えて……）

しっかりと彼女を見据えて、いつでも動けるように構えた。シヤマルはだがすぐには動かない。何かを待っているのか。

それともまだ手の平の暴風を育てようというのか。意図が読めないなか球体に育っていく暴風はしだいに目に見えるほどの形で

周辺の空気を取り込んでいき、それ自体が風を引き起こし始めていた。

木々は揺れ、落葉が宙に舞っていく。コウキも僅かながら引き寄せられるものを感じる。

それを手の平に持つシヤマル自身の髪や衣服も揺らめかしていく。そして一際大きな風が吹いた。その瞬間。

「あ、きゃああああっ！！」

「っ！？」

シヤマルのスカートがぶわつと大きくめくりあがり、慌てて片手で押さえ込むが風が止まらず白い生足があらわになる。それどころか長めのスカートで隠されていた下半身のほぼすべてが曝け出されていた。

(あ、しまっ!?)

コウキはそれが見えた瞬間、反射的に視線を顔ごと横にずらしていた。

だが、さすがにここまで続けばシャマルの意図はもう解ってしまっていた。

何より戦場で相対する相手から目を離すなど油断や隙以外の何者でもない。

「弱点その六！ 装着者がウブな男の子なところお！」

慌てて視線を戻したところで後の祭り。

実に楽しそうな声と共に巨大な暴風の塊が叩きつけられ彼は再び湖に“落ちる”。

余波で抉れた水面は湖底まであらわにしてコウキをそこに叩き付けた。

まるでモーゼのように開いた水面の底。戻ってこようとする水の壁に挟まれた湖底で

ひとり横たわりながら楽しそうに笑っている彼女を見上げて溜息をこぼす。

「こんな手で追い詰められるとは思ってなかった……あいつ考えたなあ……」

『感心している場合か！』

『実力ならまだしもこのやられ方は納得できん!!』

トラヴィックが叫んでカートリッジをロードする。

それに応じる形でコウキは拳を湖底に叩きつけながら魔力を放出する。

反動を利用して飛び上がり、再度湖上の空中でシャマルと向かい合

う。

足元では元に戻ろうとする水が激しくぶつかりあって唸りを上げていた。

「……忘れてたよ。」

いつもそうやって俺で遊んでたっけな、お前らは「

「あら、乙女からの本気の誘いを遊びとか言っちゃだめですよ」

メツと叱るように指で差されて、コウキは思わずハットごと頭を抑えた。

そしてそのまま帽子をさらに目深に被ってその下でさらに目を閉じます。

「悪いが今は忙しくてね、誘いは全部断ることにしてるんだ。」

誰かさんたちがいうこときいてくれないせいで「

「言いますね。でも、コウキちゃん。」

まさか目をつぶった程度で私のお誘いを断れるとも思ってた。「

「ん、なにを？」

何か不穏当なことを予感させる言葉に視界を閉ざしたまま身構えたコウキ。

目の役割をトラヴィックに丸投げしているので周囲の把握は出来ている。

（わたし、コウキちゃんが相手なら……いつだってOKですよ）

なにをする気だと警戒していた彼に届いたのは声。

思念通話越しに目の前の彼女からおそろしく艶っぽい声が届けられた。

「は？ ちょっと待てお前!？」

(恥ずかしいけど、わたし初めてだからうまくできないかもしれないかもしれませんが)

望んでくださればどこでだろうとどんなプレイにも応えてみせます!)

「だ、ただ、だから待てっ!」

(他の男になんか指一本触れさせてなんかいません)

頭のとっぺんからつま先まですべてあなただけの、モノにしてください……)

「つつつつ!!??」

(わたしの身体で

したり

だして

好き放題

構いません)

全年齢向けではこれ以上の表記はできません

「つつつ! 卑猥な言葉を思念通話で送るなあっ!!!」

耐えかねて思念通話の受信を完全に遮断する。

だが既に彼は何もしていないというのに顔は真っ赤で息は上がっていた。

「ぶーぶー、まだ私の想いの百分の一も伝えてないのにつ!!!」

それに口を尖らせて文句をいうシャマルだがその手には何本もの魔力糸が握られている。すべてがコウキの身体のおちこちを縛り付けて自由を奪っていた。いつのまにかに。

『で、またこうなってるわけだが、何か弁解は？』

「ない！」

『開き直るな！ 馬鹿者！！』

漫才のような掛け合いにシャマルがお腹を抱えて笑い出す。

「あははは、面白い子やね。トラヴィック。ナイスツッコミや。基礎人格の大元とはいえ、なんかコウキちゃんがふたりいるみたい」

「好き勝手いいやがって、いい気になるなよ。」

「こんな糸ごときすぐに吹き飛ば……げっ!？」

『だから内蔵型にしろとあれほと言ったのだ』

「弱点その七！」

カートリッジ頼りだから、ロードできないと役立たず！」

両手のナツクルのカートリッジを取り込む部位に糸が詰まってロードできない。

両足こそ内蔵型だったが排莖部分と暴風を吐き出す部位に詰まっていた。

腰元にあるジャケット用のカートリッジにも糸が巻き付いて、これ以上のカートリッジ消費ができないようにされてしまった。

「そしてこれでお終い！」

手にしていた魔力糸を放り投げるようにして、あちこちの巨木に巻きついて、コウキを磔にする。

「くっ、くそ！」

「ふふふ、どうかしら。サポート専門の騎士もけっこうやるやる？」

「……………」

わざわざその目の前にまでやってきて、自慢げに胸を張って、揺らす。

それに僅かな沈黙で答えたのは彼女に追い詰められたショックかそれとも。

「……………無い胸張ってんじゃねえよ、“10年早いわ”！」

「へ？」

突如出たその言葉に“彼女”は僅かに呆然とする。

それはなにも暴言を聞いたからではない。

そのフレーズに聞き覚えがあったからだ。

「俺が気付いてないと思ってたのか？」

ここにきて初めて困惑と戸惑いを顔に出した彼女にコウキは不敵に笑う。

「呼び方を気をつけていたのはいいがそれ以外がだめだな。時々素の喋り方になってたし“あいつ”は指から魔力系を使うんだ。腕で掴んだりはしない」

「つつ!?!」

「だいいちちょっと違うんだよな、お前と“シャマル”のセクハラ
の仕方って」

にやりと笑って、目の前の“シャマルの姿”をしている少女にいう。

「お前は色々口にするが積極的には触れてはこない。シャマルはあれでその逆なんだ。

ああ、けど良かったよ。大人びていても、お前がまだまだ小学生
で」

「くっ!」

悔しさに齒噛みする彼女。

隠していた恥ずかしさを看破されていた。

「さあ、お遊びは終わりだよ……なあ」

「

はやて

最低の戦い（後書き）

なんか偉そうに正体見抜いてますが、こいつ今縛られてんですよ
え……

以前にはやてが言っていた彼の弱点とはこういうことなものでした！
ウブな男を色香で惑わし、隙をつく。戦闘中に。
たぶんいくらなんでも引つかかるのはうちのコウキだけのような気が
するぜ！！

最低の告白（前書き）

ついに1000部目！

ですが最初は少し今まで違う書き方してます。

アニメなんかで違う場所にいる数人がまるで合わせたかのように喋ってる光景をイメージしてくれるとありがたいです。

最低の告白

騙されている

ほぼ同じタイミングでそう告げられた少女たちの反応は不思議と同じで、

びっくりするぐらいに冷静で、静かで、穏やかな声が返ってきた。

「知ってるよ、そんなこと」「……知ってます」

「なっ!?!」「なん、だと!?!?」

だからむしろ驚いたのは暴露するはずだった騎士たちだ。彼女達が今まで告げなかったのは少女達を悲しませたくなかったから。

何も出来ない無力感とどうしようもない絶望を味わうのは自分達だけがいい、と。

だが、知っていて協力しているとなれば意味が変わる。

しかも少女達は騙されているといわれて、知っていると答えたのだ。

騎士たちは問う。何故、と。

「知ってたって、いつから……」

「わたしが襲われた後、コウキさんから色々説明された時から、かな」

「テストロツサ、なぜ……知ってるとはどういうことだ!？」

「最初は彼の説明に納得してました。けど時間が経てば経つほど、

それだとあなた達のどこか追い詰められているような行動が不自然でした」

コウキの説明を鵜呑みにするには、あまりに騎士たちに余裕がなかった。

まるで、一刻を争う事態であるかのように切羽詰っていたのだ。

はやくによる騙し討ちも結果的にはその疑いを核心に近づけることになる。

あの心優しい少女がそこまでしなくてはいけないのか、と。

「だから、なんとなくだけどきつと、時間がないことは分かってたんだ……」

「それにコウキは前の事件の時にプレシアに言ってたんです……」

未来のない奴がつ、ある奴の邪魔をするなあっ！！

「そんな言葉、未来のある人が言いますか？」

「テストロッサ、お前……」

彼には未来が無かった。

だからこそ未来あるフェイトが理不尽に虐げられ、未来のない当時のプレシアに奪われていたのが許せなかった。

「……気付いたのは本当に最近なんですけどね」

「待てよ！ ならどうして協力してるんだよ！

危ないんだぞ！？ もう時間がないんだぞ！？

知っててどうして、コウキに協力してるんだよ！？」

「テストロッサ、私にはわからない。」

なぜそこまで気付いていて、騙されたふりをしていたんだ！？」

愕然とするなか、騎士たちはそれだけが理解できなかった。正確に事態を把握できていないとはいえ、命の危機であると、確かに気付いていたのに気付かぬフリをしてまで協力するなど。

「ヴィータちゃん、わたしにはコウキさんを救う知恵も力もない。だってそうでしょう？ みんながこんなことするしか方法が無いくらいなんだもん。」

なら、せめてわたしは……あの人の願っただけは叶えてあげたいんだ。

あの人望む高町なのはでいたいの！」

「もう、後悔はしたくないんです。」

リニスの時も、庭園でプレシアを亡くしたと思った時も。向き合わなくて、そばにいられなくてすごく後悔しました」

「だから、あの人力になるって決めたの」

「だから、少しでも一緒にいられる方を選んだんです」

そういつて精一杯の悲しい笑顔を見せた少女たち。

「お前ら、馬鹿だよ……」

「それで最後に一番傷つくのはお前達だろうに……」

それに自分達が泣きだしそんな顔でそんな言葉を口にしたりするとおかしそうに少女達は少し嬉しそうに笑った。

「そんなの、お互い様だよ」

「人のこと言えないでしょう?」

「……そりゃそうか」

「確かに、な」

その指摘に騎士たちもまたかすかに微笑んだ。互いに馬鹿な選択をしたものだ、と。

「でも馬鹿だって分かってても、やらなくちゃいけない。でしょ?」

「そのための決着をつけましょう。」

「どちらが正しいかではなく、お互いに彼のために!」

思いを伝え合い、理解し合えた彼女達にはもうそれしかない。愛機を構えて騎士たちと雌雄を決しようと向かい合う。

「ああ、そうだな………けど、わりい
「もう時間切れだ」

「「え？」」

12月16日 PM05:28

森林世界 湖畔

「……………いつから、バレとったん？」

姿をシャマルのソレから髪の毛以外本来の自分へと戻した少女が問う。

彼がいつか与えた騎士服姿ではなく騎士達のそれと似た黒い衣服姿で。

「最初は騙された。けど俺がお前に踏み込んでいった時のいなし方がなくなってなかった。

本物のシャマルならもつとうまいぞ。あれでも歴戦の騎士だからな。

それで、もしかして、と思って注意深く観察してたんだ」

だからこそいくつかの相違点に気づき、行方の分からないはやてだと見抜いたのだ。

「さすがやね、コウ兄は。」

相変わらず見てないようで本当によく見とる。

あれだけ慌てたり真っ赤になってたりしとったんにな」

「ま、昔から得意だからな。感情と頭を別々に動かすのはさ。っていうかお前、あとでシャルマルに謝っておけよ。」

了解はとってあるんだろうけど人の姿であんなことしやがって…

…」

「……………なんていうか、そんな状態でもコウ兄は変わらんなあ」

だめじゃないか、と日野家のリビングで叱っているような調子の「ウキだが、

その姿は魔力系によってあちこちを縛り上げられ、磔状態である。湖上でそうされたあと湖畔にある巨木に彼は括り付けられていた。また顔がよく見えないということでハットは奪われている。

「今更、変わるか。それより、これから俺をどうしようってんだ？」

「うん、拉致監禁でもしようかと」

「そんなことだろうと思ったよ」

えへへと照れたように笑うはやてと盛大にため息を吐くコウキ。物騒な単語を軽く口にしたはやてもはやてだが、それをすでに予想しているコウキもコウキである。

「そうはいつてもな、コウ兄。魔力消費が寿命削ってるのわかってる?」

顔は笑みのまま声色だけが妙に刺々しく放たれる。
そんなはやての周辺でわずかな魔力による発光。

「そうですね。」

そのトラヴィックだって、完全に消費を抑えられてるわけじゃないんでしょ?」

「シヤマル!?!」

その背後、今までどこにいたのか。

そしてどこから現れたのか。本物の湖の騎士が姿を見せる。

「微量、普通なら気にするまでもない水滴ほどの量でもコウキちゃんには致命的」

その手、指先で既に起動しているクラールヴィントから伸びる魔力糸は

空中に自分ほどの大きさの円を描いて『旅の鏡』を発動させていた。特殊な転移魔法であるそれは自他を転送するのではなく、対象地点から『取り寄せ』ることを可能にする彼女だけの特殊な魔法である。

そう、例えばその対象が別の誰かでも。

「まさか主コウキが分かっているとは言わせませんよ」

「それだけじゃねえ、記憶の逆流がまた起こったって聴いてるぞ」

鏡を通り抜けてくる黒髪のポニーテールと三つ編みの騎士。

別世界で少女たちと戦っていたはずの彼女たち。

「シグナム、ヴィータ……なぜ？」

「意識を失う程度なら、まだいい。

だがコウキ、お前はその“侵食”にどこまで『自分』を守っていられる？」

「……ザファイラ」

その後から大柄の獣人が続いて現れる。

もはや驚くことはないというのか、静かにその名前を呼ぶコウキ。

闇の書とのリンクが深すぎるために起こる記憶、データの逆流。

これもまた彼女たちを悩ましていた現象のひとつ。

一気に多量のデータが逆流して自己保全のために意識を失うのはまだ安全だ。

危ないのはそこまでではない量の記憶が知らず知らずのうちに刷り込まれる事にある

「……一応、大丈夫だよ。

今のところは……管制人格あいつが頑張ってるからな」

「そうですね。ならば安心でしょう。

ですがそれは“いま”の話です。今後まで保証はされない」

「だから俺を単独で誘い出して、捕まえると

みんなを旅の鏡で集結させて一気に逃走ってハラか？」

「さすがコウキちゃん、理解が早くて助かるわ！」

「俺がおとなしく従うと思うのか？」

「思わん」

「だからコウ兄はちょおっとの間、眠っててもらおう。全部が終わるまで」

そういつてはやてが杖を突きつける。

シヤマルもその後ろで指輪を輝かせている。

二人が同時に魔法を使うことで彼を強制的に長い眠りにつかせようというのだ。

「……………」

『いやはや、一度の交戦データで私の弱点を把握したばかりか。

マイスターの性格を読みきってここまでの策を準備するとは、

さすがは守護騎士の諸先輩方だ。新参者としては実に勉強になる』

沈黙で応えたコウキと違い、トラヴィックは饒舌なまでに語ってそれを賞賛した。

その言い回しに何か違和感を覚えた面々は窺うようにジャケットとなっている彼を見た。

『しかし……………それをすべて読まれているとは思わなかったのかな？』

「……………つっつ！！？？」

視線の集中を待っていたかのようなタイミングで、彼はその言葉を言い放つ。

そして自分たちを取り囲むように出現する気配に彼女達は息をのんだ。

「うそっ！ 管理局!？」

「囲まれていた、だと!？」

「ちよつと待てよ、まだここに來られる時間じゃないだろ!？」

転移の光と共に騎士達の周囲・上空を囲むように現れた武装局員たち。

数人程度なら、彼女たちとて駆けつける可能性が無いとは思っていなかった。

そのために彼女たちは別々の世界で姿をさらしたのだから。

しかし、自分たちを囲むそれはどう軽く見積もっても30人弱。

アースチームが動かせる最大数の人員がここに集結していた。

「ああ、コウキが君たちの作戦を看破しなければ僕たちはまんまと君たちの思惑通りに動かされたことだろうね」

その一角から黒い防護服の少年が歩み出る。クロノ執務官だ。

「こちらもびつくりしたがまさかシャルルの腕前がそこまでとは思わなかったよ」

個人転送で10分という距離の離れた地点にいる人間を

僅かな時間で集結させるほどの転移を可能にするなんてミッドの魔導師は夢にも思わない。

だからこそそれを“知っていた”コウキは彼女たちの作戦が読めたのだ。

「そのため最初からここに全員を向かわせていたんだ。整備が終わ

ったアースラだね」

「っ！」

思わずシャマルは空を見上げる。

むろん上空にアースラはいないが彼女の探査範囲は次元の海にまで届く。

そして彼女は確かに感知する。海に漂う一度は身を寄せた艦船を。

「アルカンシエルを搭載するから、まだ本局だと思ってたのに！」

「くっ、アースラのスピードとそこからの転送ならこの人数でも容易に短時間で運べるか」

「畏にかかったのは、うちらってことかコウ兄？」

問いかけに括りつけられたままの彼は器用に肩をすくめて答えた。その顔には語るまでもないと不敵な笑みが張り付いていた。

「……いまユーノとエイミイがなのはとフェイトたちもここに転送している。

出来れば素直に武装解除してほしいが……無理だろうか？」

言葉で語りかけながら彼の手が合図を送り、局員たちがデバイスの矛先を向ける。

全方位の囲みからの狙い。避けられるものではない。

いくら頑丈な防御を持つといっても限りがある。ましてや。

「コウ兄、それはいくらなんでも卑怯やろ？」

この状況で逃げたら、当たってしまうやないか！」

はやてはその表情を怒りに歪めながら彼を睨みつけた。

彼は変わらず不敵に笑ってそれを受け流す。

「こうでもしないと、お前ら力業で逃げちゃうじゃないか」

局員たちの魔法は典型的なミッドの魔法。傷つけずに相手を制圧する力の代名詞。

非殺傷設定の“魔力を削る”攻撃。それが当たる事の意味に気づき騎士達は青ざめた。

「ああつくそつたれ、後で覚えとけよコウキ！」

「口惜しいが、主はこういう男だった！」

「うつつ、また女心を弄んで！」

「守りがいがあるのか無いのかわからん男だ」

彼女たちの突破力ならこの包围を抜けることは難しくくない。

しかし問題は全方位から狙われていることにある。

もし誰かが放った魔法が流れ弾でも“コウキを”かすめた場合、それは致命傷だ。

30人近い局員からの魔法をすべて確実に防ぐためには、動けない。誰かが動いて刺激を与えると誰かが撃つてしまう可能性もある。

防げればいいがもしそれを防ぎきれなかったら。

その後のことを彼女達は考えたくない。それだけは避けねばならなかったために。

彼女たちは自分達で縛り付けた彼を、自分達を捕まえようとする彼の思惑に乗って、

自分達で守るために容易に動けなくなってしまったのだ。

『言いたい放題いわれているぞ、マイスター』

「あははは、自分でも悪辣だとは思ってるよ。」

それに今更言葉で止められるものでもないしね、お互いに」

軽く笑って妹分や騎士達からの言葉を受け流す。

だが最後の一言だけ、どこか自嘲気味に聞こえたのはトラヴィックの気のせいか。

「なあ、だからじゃないが。ひとつだけ聞いておきたいことがある」

「……なんでしょうか、主」

問いかける言葉と視線がおもに自分に、守護騎士の将である自分に向けられている。

そう感じたシグナムが応じて、彼の視線を正面から受けた。

「はやてのことをまるで考えてない言い分なんだが……お前ら、さ

」

俺と一緒に生きて、俺と一緒に死ぬ覚悟があるか？

投げかけられた言葉に、騎士達は一瞬呼吸さえ忘れた。

同時にどうしようもないほどに胸が高鳴っていた。

「すごく短い時間だけど、やりようによっては寿命は伸ばせなくもない。

闇の書の問題も完成間近の今なら、なんとか出来るかもしれない。でもそれはお前たちから永遠を奪うことだ……だからそれが嫌かどうか教えてほしい」

しかしコウキはそれを選んでくれとはいっていない。

その選択肢を選ぶ可能性があるか無いのかを聞いていた。ただの意思確認。

「っ、ひどいです主……どうして、どうして今になっていうんですか!？」

だからこそ彼女は感情をあらわにして叫んだ。

「覚悟なんてそんなのとづくにあります！」

あなたがそれを望むのなら私たちにとって永遠なんて何の価値もない！

なのにあなたはどうして、覚悟があるのかなんて聞くんですか!？」

どうしてっ、俺と一緒に死んでくれといってくれないんですか!？」

周囲の騎士達がシグナムに同意だという顔で彼を見据えている。

彼女達は騎士だ。主に仕え、守り、共に戦う存在。

だが、共に生きて共に死ぬことだけはできない。

それがずっと騎士達は辛かった。プログラムに過ぎない自分達だ。

忠誠心も騎士としての誇りも作られたものかもしれない。

それでも彼女達は主と同じ『死』が欲しかった。

『永遠』から逃げるためではなく主と共に『生きる』ために。

無論、はやてのこともある。それ以外の人たちや様々な問題もある。

簡単にいえる提案でもないのは分かっていた。しかしだからこそ、それを今、口にするのはあまりにも“酷かった”。

「……………あなたに残された命の刻限がせめて人の半分、いえ、それ以下でも残されていたのなら私たちはそれを選んだでしょう」

生きて、死ぬ。

その望みを持ちながらも、彼女達はコウキに生きていて欲しかった。自分達を救ってくれた彼に、これまで辛い目に遭い続けた彼に、誰かのためにしか頑張れない彼に、せめて、せめて人並みの幸せを手に入れて欲しい。それをかみ締められるだけの時間さえあれば。

「教えてください主……………あなたに残された時間はどれだけですか？一年ですか、半年ですか、一ヶ月ですか、半月ですか!？」

それだけでも、残っているのか。と彼女は聞かねばならなかった。それが自分の役割だと、それを聞くのが誰よりも怖いくせに。

(これは……………まいったな。そういうつもりじゃなかったんだが)

その聞き出す方が怖いという怯えを表情に乗せ、

凜々しいはずの顔を泣き顔一步手前にまで追い込んでしまった。

彼の問いかけの意図は別にあつたためにこれは完全に予想外だった。

そのお詫び。というにはあまりに非道だが。

僅かにため息を吐くとゆっくりと静かに正直な残り時間を口にする。

「……………このままだと、16歳にはなれそうにない」

もはや、息すら漏れなかった。

愕然とする者。口元を手で覆う者。青ざめる者。

反応は様々だが誰もが自らの耳を疑いたい酷な告白だった。

日野コウキ 15歳

誕生日は12月25日

その日まで、もう10日を切っていた

■最低の告白（後書き）

次で13話はラスト。

14話は、例によって順調に遅れているので、ちょっと待ってもら
うかも。

闇を呼ぶ囁い（前書き）

終わらなかった（汗）

次回は、13話ラストになります。

だけど、猫姉妹が完全な悪役だよな、これ。

ところで、いつもとは違う場所から更新してるが、大丈夫だよな？

闇を呼ぶ唄い

12月16日 PM05:38

森林世界 湖畔

その場は静まりかえっていた。
まるで世界そのものが沈黙しているかのよう。
誰もが動けず、誰もが言葉を発せられない。
それだけの衝撃を受けてしまっていた。

だから、だろうか。

「ぐあっ！！」

「うわああっ！！」

その接近に気づけなかったのは。

「な、なんだ！？」

複数の局員たちが苦痛の声をあげ何かしらの攻撃を受けたのか地面に落ちて行く。

その光景を作り出しながら姿を現したのはふたりの仮面の戦士だった。

「くそっ、こんな時に！」

(……こんな時だからだよ、クロノ)

悪態を付く彼の言葉に内心の言葉だけを返すコウキ。

なにせ出てこないわけがないのだ。闇の書完成を目指す彼らが騎士達が捕まりそうな状況に出てこないわけがない。

ましてや“残り時間を知らされて”焦らないわけもなかった。

(待ってたよ)

包囲網の一角を切り崩そうとする彼らの登場に、

みなが目を奪われている中、誰も見てない所でにやりと笑う。

(悪いが最後の保険としての価値がなくなっただんでな。

ここで潰れてもらう！ 頼む、プレシア!!!)

呼びかけに答えるように上空で稲光と轟音が響く。

「っ、コウキ、あなたって人は!!!」

今までずっと上空で待機していた彼女は思わず叫んでいた。

彼と共にこの世界に訪れていたが仮面の戦士対策として隠れていたのだ。

そして、彼女もまた衝撃に思考が停止していたがその本人からの呼び掛けで

我に返ったのはいったいなんの皮肉か。

「サンダーフォール!!」

それでも彼女はまず事態を終結させることを選んだ。魔法を叫ぶ声が届くより速く、天空から放たれた雷が仮面たちを襲う。

それは仮面たちの周囲を囲むように落ちて逃走も反撃も許さない雷の檻となる。

彼らはその中で空からの雷撃を避けるので精一杯。だと、思われた。

「え……なに、何か変?」

最初にその違和感に気付いたのはプレシアだ。

ほぼ無造作に落としている雷に、相手が僅かに触れたような気がした。

が、仮面の戦士にはその反応も痕跡も見当たらない。

「まさかっ!?!」

当初、雷で囲んで様子を見てほしいと頼まれていた彼女は当てないつもりだった。

しかし閃くように頭に浮かんだ可能性にプレシアは即座に雷を仮面に向けて放つ。

天から落とされたそれは止まっていた彼らの身体を“文字通り”突き抜けた。

「っ! コウキ!」

比喩でもなんでもない。ただ突き抜け、仮面は何の反応も見せずに“消えた”。

その事実念話と声で同時に叫ぶ。だがそれは聞くまでもない。

その光景を共に見ていた彼は彼女と同じ結論に至った。

「まさか……幻術!？」

視線を動かせば、彼らに攻撃されたはずの局員の姿が消えていた。仮面たちが幻ならその彼らに落とされた局員たちも幻。そしてそんな幻を使ったということは、すなわち。

「クロノ！」

「全員、小隊を組んで警戒！ 自分を守ることを優先しろ！」

事態を察して出た指示に従うより速く、その砲撃が無慈悲に降り注いだ。

騎士達を囲んでいた局員たちを薙ぎ払うように砲撃が撃たれていく。いくつもの悲鳴と絶叫のなか防御もできずに彼らは地に落とされていく。

「ちっ、好き勝手撃ちやがって！」

どこかにいる砲撃手を探す暇もなく撃たれる魔力砲撃を、時に弾き、時に防ぎながらヴィータは悪態を付く。

「私たちまで巻き込む気!？」

風の盾でいくつもの砲撃を受け止めながらシャルマルは憤る。

誰がどんな目的で撃ったものだろうと。

これが非殺傷設定であろうとなかろうと。

たとえ直前に衝撃的な事実を知らされていようと。

彼女たちの中にコウキを守らないなんて選択肢はない。

だが、どこか彼をも狙っているように感じる照準には「そうしてい

る」と

仮面の戦士たちにやらされているような状態に嫌悪感を感じる五人だ。

「おのれっ、あの仮面たちは何を企んでいる!？」

直撃コースの砲撃を斬り捨て、仮面を探すが見当たらない。はやてを含めた五人はコウキをくりつけた巨木を囲むようにして守護していた。

シグナムの位置から見えるのは砲撃で落とされた局員達と駆けつけようとするプレシア。

なんとか数人の局員を守ってバリアを張っているクロノだ。

(どこだ!？ どこから、どうするつもりだ!？)

彼もまた視線を動かして探すが見つからない。だがそれ以上に目的が見えない。

(局員だけを襲ったのならみんなを逃がすため。といえるが、

実際には俺を標的にしてこいつらをこの場から動けなくしている)

彼らの目的が闇の書の完成にある以上、彼女達に危害を加えていいことなどない。

とある例外だけを除けば。

(みんな動けない?)

まさか、あいつらもここで決着をつけるつもりか!?)

「はやて、俺を解放しろ! このままだとまずい!！」

脳裏に浮かんだその可能性に薄ら寒いものを感じ取って、彼は思わ

ず叫ぶ。

「い、言いたいことはわかるけど、でも！」

「違う、違うんだ！ あいつらの狙いはお前達だ！」

あいつらはいまここで、っっ！？」

まるでその発言を阻止しようとするかのように、

騎士たちの防衛網の穴を縫うように一発の魔弾が彼の眼前に迫る。

「ぬおおおおっっ！！」

誰もが自らに迫る砲撃への対処が精一杯で動けない中。

守護の獣がその咆哮をあげ、魔弾とコウキの間に飛び込んだ。

「があっ！！」

「ザフィーラ！？」

コウキと向かい合う形で間一髪で間に合った彼の背中に魔弾が直撃する。

そして自分を襲う砲撃を無視した動きは彼の体のあちこちにダメージを残していた。

守護騎士でもっとも頑丈な男がそれに耐え切れず膝を折る。

「おいっ！　しっかりしろザフィーラ！」

動けないながら、いやだからこそ必死で呼びかける声。

命に別状こそない様子だが彼は主からの言葉に答えられなかった。

苦痛に顔を歪ませ膝を折っているためにコウキからでも背中の中の“傷”が見えた。

「くそっ、わざと非殺傷をかけなかったな！」

「っ、シヤマル！」

「だめっ、動けない！」

背後の主の言葉に同胞のダメージを慮ったヴィータだが、誰一人として彼らの元へと駆けつけられなかった。

あらかたの局員を落としたことで攻撃が彼女達に集中してきたのだ。そのうえざフィーラが動けなくなり明確な穴が開いてしまっている。さらに無差別攻撃が砲撃からさほど誘導はされていないとはいえ魔弾に変わった。

一発ずつの威力は落ちてはいるがその数と標的としての狙いづらさから四人は背後を振り返る余裕すらない。当然、彼を開放する余裕も。

「ふっ、ぐっ！」

「このっ、あっ！」

「うっっ、これくらい！」

5人全員ならまだしもザフィーラがいない穴は大きい。

次第に彼女達は自らの身すら盾にして魔弾を受け止めていく。

「くっ、トラヴィック！」

「分かっている！」

だがそれをした所で動けない役立たずが動けるようになるだけだぞ！？」

「うるさい、知ったことか！」

自分を守り傷ついていく騎士達。その事実を彼はどうしても許容できなかつた。

彼の大事なものは彼女たちそのものであって、そこに彼は入ってい

ないのだから。

『多少痛いのは我慢してもらおう!』

「気にするな、慣れてる!」

言葉を正確に耳にしていたのなら周囲が止めるようなことを口にしていたが、

幸か不幸か、魔弾への対処で精一杯な彼女たちはそれを聞いていなかった。

『カートリッジ強制開放。シュツルム・バイン出力最大!』

カートリッジが炸裂する音が複数回コウキの足元から響く。

その他の部位と違い、空薬莖を排莖する部分と風を放出する部分に魔力系が詰め込まれていたホバーシューズはロードができないわけではなかった。

これまでしなかったのは内部に放出できない魔力が詰まってしまっただけだから。

なのに、あえてそれをした狙いは単純明快。その、暴発だ。

「ぐがつ!!!」

ボンツと大気を震わすような爆音と共にシューズが爆散する。

その余波が巨木に彼を縛り付けていた魔力系を吹き飛ばす。

「つつつし! 抜け出せた!」

『やせ我慢の極みだな……』

痛みにとらえながら、ようやく大地にほぼ素足でだが立った。もっとも。

「また馬鹿なことしやがったぞ！」

「緊急事態とはいえもつと自愛してください！」

「魔法で治せるといつても限界あるんですよ！！！」

「アホや、本物のアホがここにおる！」

「っ、まったく、少しは後先考えてくれ」

女性陣どころか、傷でうずくまっていたザフィーラにまで酷評される始末。

魔弾への対処ゆえに視線を向けてのことではなかったのが幸いだ。

「うるせえっ、時間が無かったんだよ！」

それに文句を返しながらも振り向きながら拳を突き出した。誰もいない空間に繰り出された拳が不自然な位置で止まる。

“何か”に当たったかのように。

「よく気付いたものだ……」

拳打によるものか。自ら解除したのか。

姿を隠していた魔法が消えて、あらわになる仮面の戦士の姿。

コウキの拳と彼の拳は互いに正面から見事にぶつかりあっていた。しかし。

「ぐっ！」

突き出した右拳。その腕を覆っていたナツクルにヒビが入る。

その衝撃は右手に直接届き、痛みから彼は手を押さえながら後退る。以前は互角の威力を誇った拳打だったが相手はあの時骨にヒビが入っており、

防護服の延長線でのテーピングという不完全な状態だった。だが今はその逆。相手は完全な状態でこちらは魔力カートリッジが使えない。

むしろ魔法で強化された身体から繰り出された拳と魔法の補助無しでぶつかり合ってこちらの手が砕け散らなかつただけ僥倖だった。

「そんな付け焼刃で戦場に出てくるからだ」

鈍く響く腕の痛みに一瞬鈍った意識を刈り取るうとするように容赦のない回し蹴りがコウキの腹部に叩き込まれる。

「っ、かはっ！」

ジャケットのカートリッジを使えないために相殺できず、まともに受けた衝撃にコウキはまるでボールのように蹴り飛ばされていく。

いくつもの木々にぶつかりへし折ってもその勢いは止まらず、軽く50メートルは飛ばされてしまう。

「コウキ！ がっ！」

一番近くでそれを見る羽目になったザフィーラが立ち上がるうとするが

それより速く仮面の蹴りが襲い、痛みで動きが鈍くなった彼は対応できずに地面を転がる。

「コウ兄！ ザフィーラ!?」

はやてが近くに転がされた彼を診て治癒魔法をかける。

シヤマルほどではないが後方にいることになる彼女はある程度習得

していた。
もっともそんなことが出来たのは仮面が現れた瞬間魔弾の攻勢が止んだおかげだが。

「ふう……全員、下手に動かないことを忠告しておく」

少女や騎士全員から殺意の籠った視線を叩きつけられた仮面はそう口にした。

「その元・大魔導師と執務官もな」
「っ!？」

ただし、二言目は空から届いた。

少し視線を上げれば、蹴り飛ばされたコウキのほぼ真上。魔法陣の上に立つもうひとりの仮面の戦士がそこにいた。言葉にクロノは動けずプレシアに至っては近寄ることも出来なくなつた。

「そしてもちろん、いま到着した君たちもだ」

その空に立つ仮面が振り返った先。

ちょうど蹴り飛ばされ地面に倒れ込んでいるコウキを挟んで、騎士達とは反対の位置に転送されていたフェイトとなのはである。

「くっ」

「どっしりっ……」

今しがた到着したばかりの彼女たちは状況がつかめていないが周囲の光景を見れば過程は解らなくても誰が主導権を握っているのかは明白。

誰よりもコウキに近い位置に陣取る仮面たちだ。ゆえに誰も動けない。

「く、くそ……こつちの考えを全部読まれてたのか。

……さすがに踏んだ場数が違い過ぎた」

一瞬で陥った膠着状態の下。

自身が衝突したことで根元から折れた木を肘掛に体を起こす。

全身が訴える痛みは“いつも通り”やせ我慢だ。

(歴戦の勇士の名前は伊達じゃない、か。すげえなおじさん)

おそらくこの状況を仕組んだであろう相手を思い浮かべて苦笑する。
隠し手^{フレシア}まで見抜かれていたとはさすがに彼も思っていなかった。

(にしても、いったい何がどうなった?)

意識が飛びそうになるほどの一撃で蹴り飛ばされたコウキには
まだ自身が半ば人質のような状況になっているとわかっていない。
それを把握しようとした時、背後で転送時独特の光が輝いた。

「っ、なんだ!？」

思わず、悲鳴をあげる身体に鞭打って跳び上がり距離を取る。

正面からその光を捉えた彼はそれが転移のものだと確信し、息を呑む。

(何が来るってんだ? 三人目の仮面とか勘弁してくれよ!?)

さらなる敵の出現を考え身体を強張らせたコウキ。
その目の前で転移の光が瞬き、そして何者かをそこへ出現させた。

「……はい？」

「……………」

人はあまりに驚くと静かになるものである。
声も出なければ何でという疑問も浮かばない。

コウキの口から漏れた言葉でさえ困惑時の単なる口癖だ。
彼以外の面々はそれこそまさに“言葉もない”という状態そのまま
だった。

「……………コウキ？」

だから、その沈黙を破ったのは転送されてきた本人。
僅かにオレンジがかかった金色の髪と翡翠の瞳を持つ女の子。
少女は周囲の変化に戸惑っていたが視線が知った顔を捉えた途端、
いつもの勝気さが垣間見えていた顔がぐしゃりと崩れた。

「コウキっ！ うっっ……」

「ぐっ……ア、アリサ？」

半ば飛び掛るように少女 アリサ・バニングス は彼にしがみ
ついた。

“らしくない” 嗚咽をまったく隠そうともせずに。

ゆえに耐え難い痛みを感じても、それどころではない雰囲気には
こらえた。

「すつ、すずかが……急に人がいなくなったと思ったら、変な奴らが来て

そしたらすずかがつ、すずかが!!!」

「っ!？」

言葉は切れ切れだったがコウキにはそれで充分だった。

いつもなら絶対に見せない泣き顔を隠す事もせずに、出来ずに、涙目で彼を見上げる少女は必死にそれを訴えていた。

友達を、すずかを助けてと。

「お探しの女の子はこの子かな？」

上空からの僅かに芝居がかった声が妙にコウキの癪に障る。

いつのまに合流していたのか。真上に立つ仮面の隣にもうひとりの仮面。

その片腕にはぐったりとして身動きひとつしない少女が荷物のように抱えられていた。

「すずかつ!!」

「すずか、すずか!」

アリサが喉が張り裂けんほどに声を張り上げたおかげか。意識がないように見えた彼女の身体が僅かに反応する。

「あ、みんな……」

「つつ!?!」

「な、なんてことを……」

「貴様らあつ!?!」

小脇に抱えられた形になっていた彼女の顔は当初見えていなかった。だが、意識が戻り顔を上げた彼女を見て皆が、絶句し、嘆き、激昂する。

いつも笑顔を絶やさない少女の顔に、明らかな暴力の跡があった。

「ははは……!?!、ごめんなさい……!?! ぜんぜん歯が立たなくて、あ、うっ!?!」

それでもぎこちなく笑ってみせたすかだが痛みを堪えるように言葉が途切れる。

よく見れば身にまとう白い制服は所々損傷や汚れでボロボロになっていた。

それは顔だけでなく体中に同じような傷があることを示していた。

「あ、あいつらよ!?!」

あいつらがいきなり襲ってきて、すかか……!?! すかかが私を守るうとしてっ、

でも、敵わなくて、やめてっ!?! 何度もいったのにすかか、何度も立ち向かって

何度もやられて……!?! けどっ、わたし、なにもできなくて!?!」

怒りを突きつけるように仮面たちを指差したアリサだが、

その時のことを思い出して、襲い来る悲しみと無力感に少女は泣き崩れた。

少女の普段を知っていればいるほどにそれはあまりにも痛々しい姿だった。

「ひ、ひどい！」

「すずかを、離せっ！」

「……よくもっ、よくも！」

一瞬で頭が沸騰した三人の少女はそれぞれの杖を構えて突撃しかけた。だが。

「おっと、下手に動かないほうがいいと言わなかったか？」

「あっ！」

仮面は魔力刃をわざわざ出してすずかの顔に近づけた。

「……っつ！？」

たったそれだけで全員はさらに動けなくなった。

コウキとその隣に転送されたアリサに刃を突きつけられているすずか。

実質的な人質は三人となり、誰もが怒りと苛立ちを抱えながらも動けない。

そんな、中。

「ふっ、ははっ……」

笑い声が、響く。

誰もが状況に合っていないその声に意識を向けた。

「あはははっ、はーっはははははっ！……！」

「コウキ？」

「主？」

皆が皆、奇異なものでも見るような目で彼を見た。
騎士やなのはたち、人質になったはずかや仮面たちでさえも。

「ふふふ、あははっ、ひやはははっ！」

壊れたように笑う。笑う。嗤う。

腹を抱えて、心底おかしいといわんばかりに、嗤う。

その突然の豹変に全員が啞然としていたが何故か声をかけられない。
だから彼の笑い声だけが続く沈黙を破ったのは当然彼自身だった。

「なあ、お前らさあ」

それはまるで旧来の友に話しかけるかのように気安く。

「　　そんなに死にたいか？」

笑いかけながら、その判決を告げる。
死刑宣告

「「ひっ！？」」

息を呑むような悲鳴があがる。

知らずうちに、数歩分仮面たちは彼から距離を取っていた。

笑い声と共に告げられた言葉はまるで別人が出したかのように笑っていない。

深く、暗い地の底から響くような声。質量を持つかのように重い声。そしてそれを告げた時のその“笑顔”はまるで悪魔の微笑みのようだった。

「おいおい、逃げることはないだろう………逃がすわけないんだからさ」

状況的に上位なのは仮面達だ。そこから何も状況は変わっていない。だが自分達を見上げる目が黒い。いや暗い。暗い視線は絡み付いて離さない。

仮面たちはまるで底のない深淵の闇へ引き摺り下ろされていくように錯覚する。

同時に。

「ぐっ!?!」

「え、なに、え?」

「うそ、なんでや……」

「力が、抜ける!?!」

立場や位置に関係なく、その異変が彼女達を襲っていた。

ありえない脱力感。まるで何かに奪われていくように内から出て行く力。

体力や魔力がたいした量ではないが外に吸い出される、奪われる感覚。

それは距離が離れたプレシアにでさえ襲っていた。

「これは、蒐集? いえ、何かちがう、コウキ!?!」

「主、いったいなにを!?!」

直感に近いもので原因を彼だと皆が感じていたが、
コウキにはその問いかけどころか彼女達の姿が目映っていないなかつた。

「とりあえず、どこからがいい？」

右手か左手か右足か左足か……四つもあるんだ。一つや二つ無くなってもいいよな？」

口端だけを吊り上げて笑う顔に仮面たちの背筋が凍る。

冗談や比喻、ましてや脅しですらない。彼は本気でそうしようとしていた。

「や、やめろ！」

「人質が見えないのか!？」

「っ!」

頭では、そんな事が出来る状態ではないことは理解していた。

だがそれ以上に心が、本能が怯えて思わず声を出し刃がより人質に近づくと。

瞬間、コウキの表情からその恐ろしい笑みさえ消えた。

「……やれるもんならやってみる！」

すぐさまお前らにその数百倍の傷を刻んでバラバラにしてやるっ

「!」

偽りの笑顔に隠れていた激情がまるで魔力のように放出される。

それはコウキの周囲を覆う黒いもやのように漂いながらも、

同時に、怒りの矛先である仮面たちに叩きつけられた。

「うっ！」

「な、あっ！」

痛みも衝撃もなく、それは彼らにまわりつくようにのしかかる。まるでそこだけ重力が何十倍にもなったかのように身体の自由がきかない。

さらに体力や魔力の吸い取りはもはや強奪に近いレベルとなっていた。

『おいマイスター、お前はなにをやっている！？』

だがそれは、何も仮面たちだけに限った話ではなかった。

「な、なんだ、これは……！？」

「飛んで、られない」

「コ、コウキ？」

なのはたちを地に下ろし、騎士たちの膝を折る。

ふたりの仮面が受けているのに比べれば軽いがそのしかかるような圧力と

強奪されていく魔力・体力の量は先ほどまでとは比べ物にならない。

「まさか、覚醒！？」

「馬鹿いうな！ まだ60ページ以上残ってたぞ！？」

「しかし、これは！？」

騎士達にはどこか見覚えのある光景に思えた。

同時に何か言い知れぬ不安を覚える。このままではいけない、と。

「よせっコウキー！」

「おやめください主！」

「コウキちゃん！」

皆が皆、声や念話。手段を問わず声を出したが、届かない。

まるで黒いもやが何もかも遮断しているかのようで、彼の目には仮面だけだ。

その激情だけで突き動かされ、人質になっているすずかすら映っていない。

「あ、ああ、ああ………」

光が宿っていない暗い眼で睨まれているだけで意味の無い言葉がもれる。

彼から発せられる正体不明の圧力は徐々にまともな思考すら奪う。

代わりに原始的な感情である恐怖だけが増長されていく。

（コウキさん、だめ！）

咄嗟にそう叫びたかったすずかだが、彼女もまた力を奪われ過ぎていた。

夜の一族の高い身体能力がギリギリの所で彼女を守っていた。

そしてそれゆえかすずかは彼ではなくそれを包み込もうとする黒いもやを恐れた。

けれどそれを伝えようにも既に意識を保つのが精一杯の状態だった。

「せめてもの慈悲だ。

四肢のどれから斬りおとすかぐらいは選ばせてやる」

口端だけを吊り上げた笑み。

それを顔に貼り付けてコウキは無慈悲な断罪を下そうと足を踏み出

した。

「っ?」

何かが服に引つかかったかのような感覚。

ごく最近にも感じたことのあるその既視感に彼は振り返る。

「ダメツ、行っちゃダメ!!」

「っ!?!」

既視の少女が涙をためた瞳のまま、ぐしゃぐしゃの顔で叫んでいた。見上げるその顔にはあの時以上の失うことへの恐怖が浮かんでいる。一番何が起こったのかを理解できていないアリサはしかし、

いまこの手を離せばもう二度と彼と会えない気がして、その小さな手で必死に防護服を、彼を掴んでいた。

「アリ、サ?」

確認するかのようについた途端、黒いもやと周囲への圧力はまるでそれじたいが悪い夢だったかのように跡形もなく消え去った。

(……な、なんだ……いまのは?)

俺はいつたいたいなにをしようと……いや、何になろうとした!?)

愕然としながら周囲のまだ動けない彼女たちを見回す。

自分が何かしたという自覚はあるが何をしたのかが解らない。

(おかしい……やっぱり何かおかしい!俺だけが、今までの主と何かが違う!)

ジュエルシードの時と一緒に来た。出来るのにどうやってか解らない。

自分でやったことなのに何をしたのか説明できない……まるで……
…まるで?)

『例え』として頭に浮かんだ考えに、思わず彼は自らの身体を見下ろした。

そこにはなにもない。しいてといえはトラヴィック。

自らが一から組み立てたデバイスがあるだけだ。

(まさか俺は……そんな、まさか……いやでも、そうなら辻褃が合う。
う。

魔法の腕が微妙なものデバイスやロストログアと相性がいいのも説明がつく!

いや待て、もしそうならこの事件を影で操ってたのはおじさんじゃなくて……!?)

「っ!?! ア、アリサちゃんコウキさん、逃げてえっ!?!」

思わぬ形である可能性に気付いてしまったコウキは状況を忘れていた。

我に返れたのはさすが必死の叫びと見上げた空に浮かぶ無慈悲な刃たち。

空を覆いつくほどの刃の弾幕が今まさに降りおろされようとしていた

闇を呼ぶ囁い（後書き）

割る予定のないところで強引に話を割りました。

余談、というか本編の補足ですが、

コウキは完全にブチ切れると不気味に笑いだします。

とはいってもそれも怒りで暴走しないための最後の防波堤ですが。

コウキはあれで、実はDSなのを理性で抑えているので

感情的になると 本編中で言ったこと、本当にやる。絶対にやる。

うん、猫姉妹はやっぱりあとでアリサに感謝と謝罪をしておくべき
だと思う。

最後に見たもの（前書き）

これで本当に13話ラストです。

割った関係上、前話から直で繋がっております。

最後に見たもの

12月16日 PM05:58

森林世界 湖畔

「っ！？ なっ、カートリッジがない！？」

視界を覆いつくす程に、空を埋め尽くすほどに突きつけられた断罪の刃。

咄嗟に対抗しようと彼は腰元のカートリッジを手探って、無いことに気付く。

彼は気付いていなかったが仮面の蹴りを受けて既に粉々に砕け散っていた。

「おい、冗談やめろよ」

自身の服をつかんで怯えている少女に視線を移して、青ざめた。目の前の魔法を打ち破る方法も防ぐ方法も、これで無くなってしまった。

ステインガープレード・エクスキューションシフト

本来100程度の魔力刃を一斉に対象範囲に叩きつける広域攻撃魔法。

だが、目の前に現れた刃の数は軽く見積もっても1000は超えていた。

「あ、ああっ！！ お前はここで死ねえっ！！！！」

元より、日野コウキ個人を危険視していた彼らは先ほどの異変に冷静な思考など
跡形もなく吹き飛び、残ったのは目の前の恐怖を排除しようとする
防衛本能のみ。

そのためにすべての魔力刃に非殺傷設定などかかっているわけがなかった。

それが奇しくも仮面らが当初予定していた作戦通りだったのは
何の皮肉か

「や、やめる！ 民間人がいるんだぞ！」

クロノは思わず叫んでいた。

彼らの視界にはコウキの隣にいる少女が映っていない。
しかし恐慌状態の彼らに言葉は届かず、無慈悲に刃が落とされる。

「やめてえっ！！！！」

のちに、このときほど時間がゆっくりと流れた瞬間はなかつ

たと彼女達は語る

刃は逃げ場無く上空から一直線にコウキに向かって落ちていく。数とその広い範囲からもはやコウキが動いてもアリサは巻き込まれる。

対抗する術のない少女にこれだけの非殺傷ではない魔法が突き刺されば、命はない。

隣にいるコウキはジャケットこそ着ているがその維持が限界な状態にある。

カートリッジはほぼすべて失われ、シューズは壊れ右拳のナックルは半壊状態。

助けたそうにも、彼女たちのいる位置からではもはや遅かった。

最速で動けるフェイトですらもう間に合わない距離。

しかも何かによって力を奪われていた彼女たちが動けるまでに回復するには

最低でもあと数秒が必要で、それゆえに魔法を撃つ事もできない。仮面が先に動けたのはただ恐怖ゆえに精神が肉体のダメージを無視したため。

少女や騎士達の助けや攻撃は間に合わない。

一番近くで対処できるコウキにはその手段がない。

そこまでを、1秒にも満たない時間で導き出して。

クロノとプレシア、はやてと騎士達。そしてアースラで見えていたりンディ。

“ある事情”を知っていた彼女たちは一斉に血の気が引いた。

(俺が例えアリサを抱えて体を盾にして庇っても、あれだけの数だ。供給源を失ったジャケットが持つわけがないし庇うといっても限界がある。

跳弾や余波のこともある。アリサに当たる可能性は高い。それも何発も。

救援は間に合わない。対処できるのは俺だけ。そして俺には他の手段がない)

途端、彼女達は彼の苦笑した顔を目撃する。

ああ、これはまいったなあ。などと言っているような気さえした。だから、半ば全員が声なき悲鳴をあげた。

(なるほど、それが狙いか。ああ、完璧に俺の負けだよ、おじさん。だからじゃないが………もし次に生きて会えたら、思いっきりぶん殴ってやる！)

「トラヴィック！」

『っ、了解してるさ、このくそマイスターめ！』

他に手段がないことを彼もまた理解していた。

憎まれ口を叩きながらも従ったのは根本的な所で彼らが似ているため。

無事な左の拳を構えると“彼の魔力”がそこを中心に渦巻いた。

「アリサ！俺から離れるなよ！」

「つつ！」

少女がぐっと自らにしがみついたのを感じながら、声や念話での叫びを無視して襲い来る刃の雨に渦巻く^{左拳}魔力を叩きつ

ける。

「ぐぐうっ!!」

拳の先で渦を描く魔力が作り出した壁が千を超える刃の猛攻にさらされる。

予想よりも『重い』感覚に苦悶の顔となるが、必死に歯を食いしばる。

その重圧に無事だったはずの左のナックルにもヒビが走る。

だが回転する魔力の渦は衝撃や威力、爆風までも弾いて刃を防ぎきる。

「……………耐えきった？」

しかもホイールプロテクションで？」

それに驚きを隠せないのが仮面たちだ。

消耗した状態から無理に放った限界を超えた数の刃。

そのすべてを残り少ない魔力を使って防御しきった。

それもよりにもよって自分達がもっとも得意とする魔法で。

屈辱的な行為だが、それ以前に余計に彼への恐怖心が募る。

さらなる追撃を、と頭は命令したが身体がそれについていけなかった。

消耗に次ぐ限界を超えた消耗の負担がそこで噴き出した。

「ホイール？」

馬鹿いなよ、これはな

「

(お前ら、しくじるなよ!)

「スパイラルバスターだあっ!!!!」

自分たちを守った回転する魔力の壁を打ち上げるように右拳を振り上げる。

音を立てて崩れていくナツクルから、壁の魔力を取り込んだ一条の光が放たれた。

渦を巻き、自らを回転しながら迫るバスターは魔法陣に立つ仮面に向かい、

彼が咄嗟に貼ったバリアを紙のように易々とぶち抜いて直撃する。

「がああっ!？」

「つつ、貴様! つ!？」

腹部のジャケットを崩壊させたその威力に空で踞る仮面。

相棒を傷つけられた怒りにコウキを睨みつけた仮面は、背筋が再度凍りつく。

笑っている。だがそれは先ほどまでの恐ろしい笑みではない。

まるで“いたずらが見つかった子供”のような笑み。

それが彼女の記憶にある誰かにあまりに似すぎていた。

(…………クライド、くん?)

呆然となってしまった仮面にその笑みの意味を考える余裕はなかった。

その隙を見逃すような者はこの場に誰一人としていないというのに。

「つつ、ぐっ!？」

『Barrier jacket・Sonic form』

視界に一瞬だけ“黒”が見えて思わず体を引いた。

が、それでも深く鋭い一閃が片腕を引き裂く。

袖が完全に切れ、腕には一瞬で直線のアザが出来ていた。

「あつ、きゃ!?!」

思わぬ痛みと衝撃に抱えていた少女を手放してしまふ。

目の前にはいつもと少し違う防護服姿のフェイトがいたが、動かない。

傷が彼女の仕業だと理解できただけに助けようとしなない動きに仮面は困惑する。

「余所見してていいんですか?」

どこか冷たい言葉に迫るソレに気付いて体を後ろに引いたが、遅い。

「つつ、ぐがああっ!」

下から切り上げる炎の一閃が仮面の体に一直線の深い傷を付ける。

「貴様ら……もはや生きて帰れると思うな!」

怒りに震えながらレヴァンティンを突きつけるシグナム。

剣を持つ手とは逆の腕の中ですずかを優しく抱きとめて。

落とすのがフェイト。受け止めるのはシグナム。無言の役割分担がそこにあつた。

「くっ、撤退を……」

その様子に空で蹲っていた仮面はカードを取り出すが目の前で鉄球に撃ち抜かれてしまふ。

「逃げれると思ってるのかてめえら!!」
「つつ!?!」

降り下ろされるアイゼンを痛む体を無理に動かし避ける。
だが退いた途端、仮面は本能的な直感で背筋が凍る。

「ばかやろう、そいつはあたしより容赦ねえぞ」

「デイバインバスタアアツツー!!!」

桜色の光が仮面の身体を飲み込み、吹き飛ばす。

もはや悲鳴をあげる暇さえなく、意識を失った仮面は森の中に落ちていく。

「っ!」

その光景に息を呑む仮面だが突きつけられる炎の魔剣と漆黒の鎌を
掻い潜って救援に向かうことは不可能なことだった。

(こいつら、なぜこんな息のあった連携を!?)

仮面は知らない。

バスターを放つ直前の短い念話が、それだけでこの動きを指示して
いたことを。

だからこそ防ぐだけで良かった彼は攻撃まで放ったのだ。

「シグナム、すずかちゃんを」

「頼む、シヤマル」

その背後からシヤマルがすずかを受け取ると地上に下りながら治療

を始める。

「シャ、シャマルさん……」

「大丈夫！　こんな傷、ひとつだって痕なんか残さないんだから！」

治癒と補助が本領の湖の騎士は内心の怒りを抑えて、

すずかを安心させるために微笑んで全力で治療を開始する。

彼女から放たれる癒しの魔法はゆっくりとだが少女が受けた傷を消していく。

「……あの、アリサちゃんとコウキさんは？」

それで少し楽になってきた彼女は地上についた途端にそれを訪ねた。

「……………アリサちゃんは無事だよ」

少し答えに困ったシャマルに代わって、地上で待っていた少女が答えた。

「はやて、ちゃん？」

答えの内容もだが、何よりすずかはその声に違和感を持った。

まるで生気を感じない機械的な声。自分の知る彼女から似つかわしくない声。

何より彼女自身が地面にへたりこんでぴくりとも動かず、

こちらを向くことさえせずにただ一点を見詰めていた。

その様子にシャマルはついに笑みを崩した。いや、維持してられなくなった。

そして同じく彼女もはやてが見詰めている方向に視線を向ける。

続く形になったすずかはその先で肩で息をする彼と彼を掴んで離さ

ない親友を見た。

「ア、アリサ、離してくれないか？」

「イヤッ！」

その小さな手にどれだけの力があるというのか。

なんとか引き離そうとするコウキの防護服から彼女は手放さない。

「いや、もう大丈夫だから……」

「……………」

諭すようにそついうが彼女は無言で首を横に何度も振った。

その瞳には今にもこぼれ落ちそうな涙がたまっている。

けれど泣き出さないように歯を食いしばってもいた。

その身体はいまも、恐怖からか小刻みに震えている。

しかしそれはあんな攻撃にさらされたから、ではない。

「アリサ……ほら、すずかがあつちに……」

「なら連れていきなさいよ！」

離してほしいなら無理に引き離してみなさいよ……」

言外に『できないんでしょ？』と問いかける言葉に彼は苦笑するしかなかった。

（アリサひとり引き離す力も出ねえ……正直立ってるのも、もう……）

自らの人としての機能が急速に低下しているのを感じる。

そして、同時に自分に忍び寄る『死神』の気配にも。そんなことを目の前の少女にすら隠せなくなるほどに。

「……ごめんな、こんなことに巻き込んで。本当にもう大丈夫だから」

離れるためではなく安心させるために柔らかな声をかけた。そして少女の頭をゆっくりと撫でた。慈しむように、名残惜しむように。

「っ、ザフィーラ！ 頼む！」

「……っっ」

「へ、きやつ！ コウキ！」

どこからか接近してきた守護の獣はアリサの手を弾き、強引に抱えて飛び去る。

それが彼と気付くまで暴れたアリサはふと、先ほどまで自分がいた場所を見下ろす。

自分たちを見上げる朗らかすぎる笑顔に、アリサは訳も分からず叫んでいた。

「やつ、いや、いやああああっ！！」

世界に響くような叫びと彼が漆黒の魔法陣の中に崩れ落ちたのはほぼ同時。

「主っ！？」

「コウキ！？」

そのため、幸か不幸か。

悲鳴のようなアリサの叫びがその光景を全員に目撃させた。意識を失うようにして倒れた彼はベル力式の黒い魔法陣の中。強く胸を抑えている表情は苦悶どころではなかった。声無き声をあげて、もがき苦しみながら彼は魔法陣の上から微塵も動けない。そこから吹き出すように現れた黒いもやが腕のように掴み触手のように絡み付いていた。

「コウキさん!!」

「馬鹿よせつ、なのは！ お前まで巻き込まれるぞ！」

即座に駆けつけようとした彼女を羽交い絞めにして抑えるヴィータ。その隣で愕然とした様子でシグナムはコウキを見据えていた。だが黒いもやに呼応するように自らの腰元で光を放つ存在に気付いて声を上げた。

「あ、あぁっ……待て、待ってくれ！ お願いだ闇の書!!」

魔法陣のそれと似た光を放つそれを手にとって叫ぶ。

その顔にはもう怒りなどない。あるのは失うことへの恐れだけ。

「頼むつ、まだ主を連れていかないでくれ!!」

「シグナム……」

泣き叫ぶような声はしかし、モノを語れぬ本には届かない。

「ちくしょうっ！ 何が守護騎士だよ、結局何もできなかったじゃねえか!!」

「ヴィ、ヴィータちゃん……」

なのはを抑えながらも誰よりも小さな身体を震わせているヴィータはその無力さを涙と共に訴えるしかなかった。

「もうダメよ……コウキちゃんは魔力をほとんど使い果たしてしまつた。

もう闇の書の侵食を抑え込んでられない……どうして……どうしてよ！

どうして私たちはいつもマスターひとり守れないの……？」

「シャマルさん……」

こらえていたものが溢れ出すように泣き崩れる。

すべてを覚えているわけではないが彼女たちが最終的に守れた主は一人もいない。

そこに今までの誰よりも守りたかった主の名が増えようとしていた。

「……………」

「下ろして！ ザフィーラ、お願いだから下ろして……」

苦しみもがく彼を真上から見下ろす位置で彼は腕の中で暴れる少女を決して離さないようにしながら、黙って主を見つめている。それしかできなかった。

「まだよ……」

諦めて、心が折れてしまった騎士達を叱咤するように。彼女は『まだ』だと叫んでコウキの元へと降り立った。

「っ、よせプレシア！ 取り込まれてしまうぞ！」

「嫌よ！ コウキは、彼はまだ死んでないんだから！！」

心配する声を一喝して彼に手を伸ばす。が。

「ぐっ、何よ。こんな程度で！」

黒いもやに弾かれた手を再度伸ばす。

だがその手もまた弾かれて彼に触れることすらできない。

「諦めるものですか！ まだ、生きてるのよ！ 手遅れなんかじゃない！」

ここに、ここにまだいるのよ！！ アリシアの時とは違うの！！」

彼女があこの事故で愛娘を抱いた時には手遅れだった。

けれど“まだ”彼はそうなたわけではないのだ。

そしてあの時のように自分が何もできない距離にいるわけではない。延ばせば手が届く距離にいるのだ。ならプレシアにはそれで充分。

諦める理由など彼女には何も無い。そんな彼女の想いが雷となって放出される。

彼女の手を弾き飛ばそうとするモヤと紫電が互いを拒絶する。

「コウキを、離しなさい！」

叫びに呼応して身体から放出される雷が一気にその出力をあげる。その姿は絶望し諦めた者達に、呆然としていた者達の心に小さな火を灯した。

「プレシア……お前……」

「騎士達！何か、何か方法はないのか！？」

「いまを乗り切るだけでいい！何かないのか！？」

いつもの冷静さはどこにいったのか。

焦った口調でクロノが問うが苦悶の顔で全員が力なく首を振る。

「主の意識がきちんと残っている状態のなら、闇の書の破壊とリンク切断を

同時にやれば主は助けられたかもしれんが……あの状態では！」

身体を縛りつけ飲み込もうとするモヤから逃れようというのか。

魔法陣の中、声さえあげられずに胸を抑えてもがき苦しんでいた。顔には生気がなく瞳には魂が宿っていない。

とてもまともな意識が残っている状態には見えなかった。

「そんな状態で破壊しても、取り込まれるスピードが早まるだけ。

どうすればいいのよ……私たちの命があげられるのなら、いくらでもあげるのに……！」

方法がない、と。泣き崩れたまま悔しさで地面を叩く。

その後ろ姿にかけるべき言葉がなく、沈黙していたはずだが、シヤマルが思わず口走っていた言葉にある可能性を見出した。

「あつ、それ！それだよシヤマルさん！」

「え？」

突然そういわれたシヤマルは意味が分からず困惑する。

「コウキさんは魔力を使い果たしたせいでああなったって言ったよね!? ならっ!!!」

「あっ！ そうか、魔力を補充すれば、少なくとも今は止められる!!!」

「っ、そや、まだその手があった!?!」

彼と彼女達が知識と知恵を出し切って生み出されたアンチシステムに欠陥はない。

稼動のための魔力さえ一定量あるのならそれは闇の書の侵食を抑え
てられる。

「だが、あのモヤがある限り接触できそうにないぞ」

「……聞こえたわ、ようはこれを一時的にでも吹き飛ばせばいい
のでしょう!?!」

クロノの疑問をプレシアが一蹴する。

彼女はそれをやってのけると言ったのだ。

「わかった、全員コウキに魔力を渡す準備を！ プレシア、ひとりで大丈夫か!?!」

「かつての大魔導師を舐めないでほしいわ！ ああああああ
っっ!!!」

放出される紫電がより大きく、より強力になっていく。

誰が見ても無茶苦茶な魔力放出だったがそうでもしなければ

これまでプレシアの雷を弾いてきたそれを吹き飛ばすことなどできない。

「ぐうううっ!!」

(お願いです管制人格、見ているのならどうか力を貸して!)

限界を超えた魔力放出に苦悶するプレシアに

彼女のジャケットに収められていたリニスはせめてそれを祈った。使い手のいないデバイスである彼女にはそれが限界だった。

「っ、モヤが薄まった!? 吹き飛びなさい!!」

祈りが通じたのか。プレシアの雷撃に押し負けたのか。

わずかにその色を薄めたモヤを彼女の雷が完全に吹き飛ばす。

「やつ、た……あ……」

『プレシア!』

その安堵にめまいを覚えた彼女は倒れこんでしまう。

「ありがとうプレシア、あとは任せて!」

そういつて立ち代った黒衣の魔法少女の姿に彼女は頷く。

見ればすでに彼を囲むようにすべての魔導師と騎士が集合していた。

『いけますか、トラヴィック?』

『問題ない、すべて完璧にマイスターに届けてみせる!』

「ならみんな魔力を出し切れ! この後のことなんか考えるな!」

『Yes sir.』

『Divide Energy』

ミッド式の魔導師たちはデイトエナジーを。

ベルカの騎士たちもそれに似た魔法を使って自らの魔力を送り込む。それに呼応したのか偶然か。再び彼を包むように魔法陣が形成される。

しかし同時にその上に乗るかのような形で別の魔法陣が浮かび上がる。

「あ、あれは？」

ベルカの三角形を中核にしてその周囲をミッド式のような円が覆い、さらにそれを四角形の魔法陣が包む今までに見たことのない魔法陣。それがいま、鈍く銀色に光っていた。

「あれがアンチシステムの魔法陣だ」

「私達が魔力を注いだから起動し始めたのね」

「でもあれが消えたらお終いだ。もっと魔力注げ！」

騎士たちの言葉に全員が一斉に大量の魔力を注ぎ込んだ。

それに応じて銀の魔法陣の輝きが増していき代わりに黒の魔法陣は輝きを失う。

しかし。

「あ、あれ、何か変だよレイジングハート。魔力が……」

「全然たまつていかない!？」

彼女達は確かに間違いなく個人に対して過剰ともいえる量の魔力を注ぎ込んでいる。

魔力量としては破格な総量を持つなのは、フェイト、はやて。

それに準じるとはいえ平均値を軽く上回るクロノや四人の騎士たち、E級級の魔導師たち8人の莫大な魔力が注ぎ込まれていた。しかしなぜか彼女達にはそれがコウキにたまつていく感覚がない。

「まさか、こいつ魔力総量がはやてたちより上だったのか!？」

『……そのようだ。それとんでもなく桁違いに!』

これでは浴槽にコップで水をいれているようなものだ! 魔力が足りない!』

そんなペースと量では傍目からたまっているかどうかは分かりづらい。

確かに増えてはいるのだが必要最低量に届くには圧倒的に足りない。そのせいなのか銀の魔法陣の輝きは僅かに鈍る。

『Load Cartridge.』

「バルディッシュユ?

あつ、そうだ、みんなカートリッジも使つて!」

「足しにはなるか、全部持つてけ!」

それぞれの愛機がカートリッジを飲み込み、その魔力さえもコウキに送る。

銀の魔法陣はそれを受けて輝きを取り戻すがまだ黒の魔法陣を抑え込める程ではない。

「私のも受け取ってコウキさん！」

「すずかちゃん!？」

遠くで見てるだけだった彼女もまた己の魔力を注ぎ込む。

その背後ではアリサが何もできないのを悔しそうに眺めていた。

「……気に病むことはない。

君があの時、コウキを止めてくれなかったら誰も動けない状況でこうなっていた。

こうして抵抗することもできなかった。感謝するアリサ・バニン
グス」

それに背中を向けながらも語りかけたのはザフィーラだ。

彼女だけが魔力を持っていなかったからこそあの状況で彼を止められた。

「っ……みんな頑張ってる！」

コウキもいつまで寝てるのよ、さっさと起きなさいよ!」

感謝を告げる言葉に思う所があったのか。

彼女はみんなへの応援を。コウキへの文句を言い始めた。

「あはは、アリサちゃんらしい……」

「そやね……」

それにくすりと笑って、彼女達はさらに魔力を注ぎ込む。

「はあはあ……」

「うっ、これぐらい!」

だが次第に皆の表情が徐々に苦悶のそれに変わり、息が上がっていき。

（まずい、みんなの魔力が尽きかけてる……この均衡状態の維持が限界だ！

もっと、もっと大量の魔力を一気に注がないと）

彼の肉体の下で銀と黒の魔法陣が互いを打ち消そうとぶつかり合う。その力はおよそ直角で、しかし彼女達の魔力はもう二割も残っていないかった。

「エイミー、動ける局員を全員こっちに！」

もう形振りをかまっていられない。

たとえ焼け石に水でも、できることをやらないわけにはいかなかった。

しかしアースラへの通信に返ってきた声にクロノは思わず眉をひそめた。

『そ、そんなの無茶です艦長！ あ、ちょっと待って！

ああもっつ！ こんなときばかり艦長権限使うんだから！』

「な、なにを？」

その言葉の意味を問いかえす時間は結果的にクロノに与えられなかった。

ちょうどコウキを挟んだ向かい側に立っていた少女達が、倒れた。

「はやてちゃん！？」

「すずか！？」

この中で総量では最大のそれを持つはやてはしかし、今日の戦闘でシヤマルへの完全変身や各種魔法の使用でかなり消耗していた。そのため魔力総量では一番少ないすずかと同時に底をついてしま

「あ……ごめん、もう魔力が……」
「まだや、まだあるから、もっと……」

無理をしても送ろうとするがすでに意識を保つのでさえやつと。魔力の譲渡も魔法である以上そんな状態で使えるものではなかった。

「まだ……まだ！」

しかしその姿に自らに気合をいれるように叫ぶのは。空薬莢となったカートリッジを破棄。さらに装填する。すでにそれを三巡。そして今のが最後のカートリッジとなる。それはフェイトや騎士たちも同じだった。だがカートリッジを持たない者は。

「あつ、だめもつと……」
「ぐっつうっ……」

カートリッジを持たず、先ほどの戦闘のダメージと消耗が蓄積していた
シヤマルとザフィーラがその場に倒れるように崩れ落ちる。

「っ、ちくしょう！ 方法がわかってるのにつ、足りない……なん、て……あ」

「ヴィータちゃん!？」

「すまん、あとは頼むテストロッサ……………」
「シグナム!」

カートリッジに頼って誤魔化していたとはいえ二人の消耗も激しかった。

そのうえ彼女達の魔力総量はなにはたちには及ばず、地面に倒れこむことに。

「はあはあ、なのは、魔法陣が薄くなってる! くっ!」

「ダメっ、お願い消えないで! あっ!」

魔力を送れる者たちがひとり、またひとりと倒れていき、銀の魔法陣の輝きは薄れ、その存在自体もまた薄くなっていった。そしてついにふたりの魔法少女の膝が折れ、地面に座り込むまでになっってしまう。

杖を支えにして何とか身体と意識を繋ぎとめているが、顔面は蒼白で明らかに魔力消耗が危険な領域に入っていた。

「くそっ、僕も、もう……………」

カートリッジもなく総量で言えばちょうど真ん中にいるクロノだが、持ち前の高い魔力コントローलと消耗が少なかったおかげで持ち堪えていた。

だが、それもついに終わりのときを迎える。

「あ、ああ……………」

「コ、ウキさん……………」

「……………ここまで、なのか?」

最後まで残っていた三人の魔導師が地面に伏す。
かろうじて皆、意識は残っていても魔力は全体の1%も残っていない。

「どうすれば、どうすればいいのよ!?!?!」

倒れたはやてやすずかに寄り添っていたアリサが思わず叫ぶ。

聡明な彼女は皆の言葉から『魔力』が必要でそれが自分には『無い』事を理解していた。

そしてこの場で魔力を持つ者がみな倒れてしまっていることを。その結果を。

消える。

銀の魔法陣はもう輝きを失い、もはや輪郭を残すだけ。

黒の魔法陣が再びコウキにその魔手を伸ばし彼の苦痛はより激しくなる。

「誰か……お願い……助けて、誰でもいいから……コウキを助けて！」

悲痛な叫びは誰も答える者のいない世界に虚しく響く。

倒れ伏した誰もが同じ想いを抱きながらも身体を起き上がらせる事さえ出来ない。

悔しさに地面を殴りつけることも、失う悲しみから泣くことさえできず、

ただその終わりを見ている事しかできない。

「う、ううっ、やだ、こんなのやだ！」

魔法があるなら悪魔や神様だっているでしょう!?!?

どっちでもいいから、何でもするから、誰か……誰か助けてっ
！！」

ついに零れ落ちた涙の雫を払うようにアリサは叫びながら空を見上げた。

とてもキレイで青い空が、今日ほど憎たらしいと思えたことはなかった。

「え、なに？」

だがそこから、何かが落ちてくるのを見つけて呆然とする。

強烈な光に包まれながら背中から光の羽をはやした人が舞い降りてきた。

「女神、さま？」

直前に口走っていた言葉ゆえか。

その美しさはどこか神々しい光に思わずそんな言葉がこぼれる。

“彼女”はまっすぐにコウキの元へ下り着くと彼を抱きかかえ、自らが発する光で覆うようにしながら

「え、きゃっ!？」

自らと少年の唇を躊躇なく重ね合わせていた。

そして、彼は銀色の輝きに包まれていった。

最後に見たもの(後書き)

第14話予告

シャマル「星は落ちた。けれどその輝きはいまだ消えない」

ヴィータ「けどあたし達はその輝きの影に今まで気づけなかった」

リニス「あらわになる願いと叫び。強くなる嘆きと怒り」

シグナム「何が救いか、何をすればいいのか」

ザフィーラ「誰もが、答えを見出せないまま運命の日が始まるうと
していた」

シグナム「そして蠢く策謀は、慟哭の空へ主を誘う」

トラヴィック「絶望に心が負けても、それすら利用してあの男は…
…」

リニス・ヴィータ「次回、魔法少女リリカルなのは異伝・第14話」

シャマル・ザフィーラ「『誰がための救い』に、」

全員「……ドライブ・イグニッション」

リンディ「私は、それが許せない」

夢（前書き）

更新再開！ ちょっとだけどこのペースならいける！
と思ったので投降。ちょっと短いですけど。

あと、活動報告の嘘予告は本当に嘘ですからね！
本編がシリアス寄りになってきて、息抜きに書いただけです！

夢

主と騎士たちにどうか幸福な終わりを

それだけが私の願いだった

私ですら助けようとしてくれているのは知っ

ている

嬉しくないわけがない

そこに私自身が入れば、どれだけ幸福なこ

とが

そうなって欲しいと願わずにはいられない

けれど、だめだ

それでは誰も助からない

だからきつと最後には斬り捨てられるのを覚悟

していた

けれどそれは甘かったといわざるをえない

ったのだろう

私はまだ日野コウキという男性を理解していなか

彼の持つ強引で大胆な行動“してしまう”力と決断“
してしまう”力を

そして

どうしようもないほどに

あの人は愚かではなく、

馬鹿だった

12月18日 PM04:56

管理局本局 医療施設 病棟個室

今にも泣き出しそうな赤い瞳に見送られて、俺は目を覚ました。俺、死んでなかったのか。なんてのはとっくに知ってるから別に思わない。

天井も知らないわけではなく半月前に来た時とまるで変わらない知っっている物。

管理が行き届いているのかシミひとつないので暇潰しができないのが難点である。

しかし俺にはそこ以外に見るものがない。

「……………」

正確には、視線を動かしたくない。だけだが。

見なくても分かる。わざとなくらいに出ているすごい存在感。

もはや質量を感じる視線と物言わぬ圧力に今一度気絶したいぐらいだ。

「おはよう、というべきかしら？」

とはいえ、あつちから声をかけられた以上黙っているわけにはいかない。

まだ気だるさがあるので横になったまま頭だけ動かして視線を向ける。

ベッドサイドの椅子に腰掛けた彼女はいつもの提督服姿のままで腕を組んで、どこかすわった目で俺を見下ろしていた。

正直怖いです、艦長さん。

「……………朝は早起きする方だと聞いていたのだけれど、随分とお寝坊

さんなのね」

案の定トゲのある言葉を投げかけられ息が詰まる。ベッドに備え付けの時計の表示によれば、なるほど。丸二日近く寝ていたわけか、さすがにそれは知らなかった。

「悪かったな、実をいうと寝起きが悪いほうでね。バレないように早起きしてただけなんだ……」

これは実は本当の話。あまり俺自身も知らなかったのだが、起床時の俺はかなり機嫌が悪い。俺が誰よりも早起きをしていたのは誰かがその被害にあわないようにだ。

もともと同室のザフィーラはたまに被害にあっていたのだが。

「そうは見えないけど？」

しかし彼女の言い分も分かる。起きたばかりの俺はいたって普通なのだから。それにも理由がある。

「夢、とか見た時はすんなり起きれるんだ。いまもさっきまで見た」

知らず、語る声にどこか羨望するような懐かしむような色が混ざってしまったと思った時には既に彼女は耳聡く、食いついてきた。

「それは……どんな、夢だったの？」

「……………」

答えにくい。

すっげえ、言いづらいけど。

言葉とは裏腹に『答えなさい』と脅すような目に俺は白旗を振る。

「みんなで食事してるだけの夢だよ」

「みんな？」

「ああ、場所は俺の家でシグナムたちはやては当然いてさ。

プレシアやフェイトになのは、リニスにアリサもすずかもいた。

他にもアルフやユーノ、あとクロノやエイミイさんもいたなあ」

そのみんなで集まって、俺はやてらで作った料理をふるまって、わいわい騒いで食べていた。ただ、それだけの夢。

ひとりだけ名前をあげなかったのはせめてもの嫌がらせだ。

「ふーん」

それが分かっているのかいないのか。

興味なさげな声が演技か本音か見抜けない。そのくせ。

「それはまた随分と、途方もない夢を見たものね」

ばっさりと、叶うわけもない夢をみるなど斬り捨てられた。

「……………はつきり言うね。前にオブラートに包んでほしいっていわなかった？」

「いつてたわね。」

「これでも、つい先日まではそのつもりだったのだけど……」

マジか？

あれで？

今との違いがまったく分かりませんであります艦長。

「……あなたがあまりにも馬鹿なことするんで、どうしてもよくなっちゃったわ」

声が一段階下がった。

同時に口調はどこか楽しそうなそれに変わる。

思わず顔がひきつる。もちろん、俺の、だ。

まずい、これはまずい。かなり本気で怒ってないか？

原因はまあ、考えるまでもないってのが、実に俺らしくて泣けてくる。

だが、それは口に出さないといけないものだろうか？

「そうはいつても、あの時他に方法があったのか？」

俺にとって残っていた魔力は寿命そのものだった。

それを使うことがどんな結果を出すかなんて俺は誰よりも解っていた。

だが、あの状況下ではあれ以外に選択肢なんてものはなかったんだ。そんなこと、この人が分からないわけがない。なのに。

「あつたでしょう？」

「あなたが意図的に消したものがいくつか」

「っ！？」

彼女は一步、わざとらしく俺に踏み込んできた。
なんであんたはそんな簡単に俺の中を覗き込めるんだ。

「例えばアリサさんを抱えて攻撃から逃げる。

彼女を誰かの所へ放り投げる。自らの身を盾にして庇う。

まさかあなたがそんなことも思いつけないなんて、いわないわよね？」

「……………」

「あなたがそれらを選ばなかったのは単純な話、
どれにもアリサさんがケガをする可能性が多分に含まれていたから。」

それがたとえ治療系の魔法で充分に回復させられる程度のケガでも」

「ちよつと待て！」

指摘は、むかつくほどに当たっている。

だがそれは、その言い方はまるでアリサがケガを負えと。

あとで治るのだから多少は目をつぶるべきだといってるように聞こえた。

「そのどこがいけない。あいつは魔力すら持たない小さな女の子だぞ！？」

俺のせいで巻き込まれたのに、俺の命惜しさでケガさせろってのか！？」

思っていた以上に強い口調で反論していた。

それぐらい俺はいまの言葉が許せなかった。
あんたなら怒っても、理解はしてくれると思っていたのに。
何か裏切られたような気さえた。けれど、彼女は俺の言葉に
その表情をより慥然としたものに変えた。

「そう、結局のところそれが本音。あなたは自分のことしか考えて
いない」

「なに？」

「自分が原因で誰かに傷ついてほしくない。とんだフェミニスト。
ただそれだけのことなのにいつだってあなたは誰かのせいにする
！」

俺が命を削ることになったのは色んな原因があるが決断したのは俺。
ならそれは絶対に俺のせいではなければならないし、そうであるはず
だ。

けどアリサのせいに行っているとわかれて、何故か言葉に詰まる。

「っ、じゃ、じゃあどうすれば良かったっていうんだあんたは！？」

「あなたはいつもそれね。しなきゃいけないことばかり。
だからあなたには傷ついていてるあの子たちが見えてない。
だからあなたは、平気であの子達を裏切って傷つける！」

「っ、待てよ！ いったい俺がいつ裏切った！？」

糾弾する言葉に予想以上の衝撃を受けながらも反論する。
傷つけている自覚はある。隠している思惑もある。
けど裏切りとなると話は別だ。

「今までずっとよ」

だが彼女ははつきりと断言する。

お前はずっと前からあいつらを裏切っていたのだと。

そしてその断言に、俺はなぜか言い返す言葉が浮かばない。

「騎士のみんなはあなたに生きてほしかった。どんな手段を使っても！」

フェイトさんたちはあなたの力になりたかった。それしか出来ないから！

なのにあなたは自分が死ぬ事ばかり考えて、あの子達を頼ってもあげなかった！」

まるで自分のことのように語る言葉には自身の怒りと俺が理解していなかった紛れもないあいつらの気持ちがあった。でも。

「それでどうにかなるのならやってたさ！

どうにもならないから、俺は！」

「まだ解らないの！？ どうにかなるかじゃないの！！」

頼っても何も変わらない。負担になる。

それでも最後に死ぬのなら、それは余計な傷になる。

そう思っていた俺について本気で彼女は声を荒らげた。

「それまであなたに……生きるために生きてほしかった！

残った時間が短くても、あなたのために何かしていたかったのよ

……！！！」

「っ……………」

「もしあなたを失ったとき、それすらなかったら、

あの子達は、もう二度と立ち上がれない。

それだけあなたはもうあの子達に踏み込んでしまった。

それを解ってないなんていったら、いまここで引つ叩くわよ」

「……………」

頭を鈍器で殴られたような衝撃。

そんな使い古された言葉の意味をこんな所で知る事になると思わなかった。

そうだ、こいつの言葉には何も間違いなどない。

俺は本当に、自分のことしか考えていない。

それも、そうしたいから、なんていう我侷な感情からじゃない。

そうするしかない、なんていう最低の言い訳で。

「ねえ、答えて、あなたは………いったい何がしたいの？」

いいえ、違うわね………どう、なりたいの？」

「おれ、は……………」

何がしたい？

どうなりたい？

俺の、望み。俺の願い。俺の欲望。

そんなものが、果たしてあるんだろうか？

考えれば、考えるほどに空白になっていく。

ああ、何も無い。それほどに俺は空っぽだったのか。

やっぱり俺には望みなんか思い当たらない。

だって何も無いんだ。俺の中に。何も。

「っ！」

そう口にしようとしたら、言葉に詰まった。

どうしても消えない光景がある。無いと思っても浮かび上がるものがある。

脳裏に消えずに浮かぶのは、さっきまで見ていた夢。途方もない夢。

ああ、何が空っぽだ。嘘を付くな。そんなわけがあるか。

俺はそんな聖人君子じゃないだろう？

「……………っ、なんて、なんて欲張り……………」

「えっ？」

「全部……………みんなっ、みんな欲しいんだ。なんにもかも全部！」

あいつらが、あいつらがそばにいてくれることが、欲しい。

話をして、笑って、怒って、泣いてくれることが、欲しい。
あいつらを幸せにする俺が、欲しい。
あいつらに幸せにしてみらう俺が、欲しい。
そんな未来が、欲しい。欲しいんだ。

「やっとなんだ。 やっとなんだ、手に入れられたと思ったのに！
だめなんだ、何も無いんだ方法が……どうして、どうしてだよ！
どうして俺の欲しいものはみんな無くなる！？」

父さんと母さんを亡くして、ずっと家族が欲しかった。

でも、俺に与えられたのは血の繋がった親戚からの暴力。

俺を見て欲しかった。俺に声をかけて欲しかった。俺に頼って欲しかった。

頑張った。認めてもらおうと頑張ったけどいつも俺には傷しか残らなかった。

そして自分の寿命を知って未来を夢見ることさえ奪われて、
最後には『欲しい』という願望を捨てなければ、俺は俺でいられなかった。

それでも、俺にははやてが、騎士達という家族が出来た。

命が尽きるまでこいつらを守ろうと思った。俺が最後に手に入れたものだからと。

でもそれすらもまやかして、俺は結局なにも手に入れてなどいなかった。

もう何をどうやって、俺が手に入れられるものはなにもない。

だって俺が失われなければ、誰もが何かを失う。なんで、いつもそうなる！

「っ……死にたく、ないっ……死にたくないんだっ！！！」

「つつ………!!」

理不尽だと、不条理だと叫びたい。どうして俺ばかりなんだと。

辛い目にあってるのはお前だけじゃない？

世の中もつと不幸なやつはいる？

そんな正論なんて聴きたくもない。

そうやって俺からこの苦しみを奪うのか!?

「死にたくない、死にたくない、死にたくない………!!」

意味もなく言葉を、願いを繰り返す。

いつしか目の前の彼女の顔すら歪んで見えない。

だからこの人がどんな顔で俺を見ているのか解らない。

呆れているだろうか？ 哀れんでいるだろうか？

「っ!」

「え?」

だから、少しびびったりした。

その暖かさと柔らかかさに包まれて、ああ、俺はこれも欲しかったんだと。

そう思ったら、思ってしまっただらもうそれにしがみついていた。

「この部屋には私しかいないから、誰も見てないから………」

「っ、っ、っ、っ………うわあああっっ! ああああ!」

何か、初めて聞いたような優しい声が簡単に俺を壊す。

彼女の暖かい腕の中、包み込む柔らかい胸の中で、俺はみっともなくて泣き叫んだ。

なにもいわずにこの人はそんな俺をずっと、ずっと抱きしめてくれた。

「……………」

扉にかかる手が動かない。

その向こうから泣き叫ぶ彼の慟哭に彼女達は動けない。

誰もが顔を青くし口元を手で覆って愕然としていた。

声をあげなかったのは、手にした花瓶や花を落とさなかったのは奇跡だ。

開けるべきではない扉に手をかけたまま。

固まってしまった少女のその手に同じくらい小さな手が重なった。

「……………」

小さく首を振る金色の髪の少女に、栗毛色の髪の少女は齒を食いしばって手を離す。

その様子に目配せした長身の女性たちは皆を連れて静かにその場から離れた。

きっと自分たちには絶対に聞かせたくなかったのであろうその心。

偶然とはいえ聞いてしまった彼女たちが出来る最大限の気遣いだっただ。

そしてそこから遠く離れた場所で、彼女達もまた泣き叫んだのだった

夢（後書き）

一言だけ、補足していいだろうか？

リンディさんは最後「誰も聞いていない」とはいつてないよね。

つまりはそついでのことである。

四面楚歌（前書き）

13話のラストの少し後の話。前話のちよつと前の話。

四面楚歌

12月16日 PM08:23

管理局本局 医療施設 診察室

「リンカーコアが、機能不全!？」

目の前の医師の言葉に私は自分の耳を疑ってしまう。

「ええ、調べた所。どうやら空気中の魔力素を取り込んで魔力に変換する。

というリンカーコアとして当然の機能が壊れているようで……」

だから自力では魔力がまったく回復しない。

最初に溜め込んだ量をただ減らしていくだけ。

もはやそれはリンカーコアと呼べない代物。ただの魔力タンクではない。

なんてこと。あまりに当然すぎてその機能に異常があるなんて思いもしなかった。

「それで残存魔力量は？」

「現時点では総魔力量の、信じられない事におよそ5%前後です。推測ですがそれが話に聞いたアンチシステムが動くギリギリのラインかと」

あれで、たつた5%!?

どれだけ途方もない総魔力量なの!?

個人の枠なんかとつくに超えている。

いくら管理外世界生まれの魔導師は規格外が多いとはいえ、そんなレベルで語られる程度の総量じゃない。

「それで肉体的な容態は？」

内心の動揺を抑えて、提督の顔で聞く。

これまで聞いていたのは魔力的な見地からの容態。

そしてこれから聞くのはその影響を受けた身体の容態。

「目を覚まさなければ確かなことはいえませんが……」

「待つて、そもそも目を覚ますの？」

なにせ原因が原因。

闇の書からの侵食を受けて助かった人間はいない。

今はまだ命を繋いでいるけれど意識だけが取り込まれた可能性がないといえない。

「その点に関してはなんとも……」

医師からの煮え切らない回答に僅かに苛立った自分に驚きながら、

同時に自分を落ち着かせる。今のは聞いた私が悪かった。

そんなこと解る人がいれば苦労はしない。

「……ごめんなさい。話を続けて」

「はい、各種精密検査をしたところ下半身が刺激に反応しなくなっていました」

「それは……」

どという意味なの、と問う表情に医師は困惑した顔で告げた。

「不思議な話ですが突然、下半身不随になったとしか……」

驚愕する私に医師はさらに臓器類もまたその活動が弱まっていると言った。

状況から考えて肉体的損傷からそうなったとは思えない。だからこそ医師は不思議に思っているのだから。しかし私にはある可能性が浮かぶ。

「まさか……アンチシステムのカバー範囲を狭めた？」

術式を見ていないからそれがどんなものかは解らない。

けれど彼はギリギリまで自分が動くために作ったといった。

なら五体満足な状態を維持するために身体すべてを侵食から守っていたはず。

ただ、そのための魔力がいまは足りない。

無意識か意識的かはわからないけれど、少量の魔力で動かすために生きるための最低限の機能だけ守って他を切り捨てた？

カバーする範囲を狭めて少しでも命を伸ばすために？

「可能性としては、無くはない。としか言えませんね」

医師の立場からいえるのはそれだけ。

それを最期にうけて私は診察室をあとにする。

“あれから”本局に担ぎ込まれた彼に処置をした医師の話には
明るい材料はあまり無かった。せいぜい彼が今は生きてい
ることだ
け。

それでもどこか私は彼がまだ『生きよう』としている事が
すごく嬉しく感じた。

「術式の方が素直なんだから……困った男ね」

誰にともなく呟いて、くすりと笑う。

想像の中の彼が「悪かったな」とすねる様子が目に浮かぶ。

『艦長、エイミイです。話して大丈夫ですか？』

「え、エイミイ！？ あ、う、うん大丈夫よ」

『？』

一瞬、自分でもよくわからないのだけれど慌ててしまった。

エイミイからの通信ぐらいで動揺するなんて。不覚もいいとこ。

「なにかあった？」

モニター越しの彼女にいつもの顔で話しかける。

『はい、なのはちゃん達全員がさっき目覚めたそうです』

「え、起きたつて、まだあれから二時間よ!？」

これには本当にびっくりしてしまった。隠す必要もないほどに。あの子達は過剰な魔力消費の末、最終的にはあの後に意識まで失った。

常識的にいえば、二、三日眠り続けても不思議じゃない。

しかもその倒れた全員が起きたのだから私の驚きも理解してもらえることでしょう。

『ええ、魔力は二割も戻ってないんですが、全員命に別状はないそうです』

「よかったわ。」

あ、でもそれじゃアリサさんやすすかさんに事情を説明しないといけないわね」

ひとり魔力を持たないがゆえに無事だったアリサさんだけど、ずっとみんなの看病をしてきていた。多分あの子も何かしていたかったのでしょう。

そんな時にひとりで事情を聞くのは酷だろうと後回しにしていた。けれどみんなが起きたのなら、多少は話しやすいでしょう。

ここまで連れて来て何も教えないわけにもいかないし。

『そ、そうですねえ……』

「？」

今度は私が彼女の態度に首を傾げる番。

どうしてかエイミーは目を泳がし始め、決して私と合わせない。

『あ、いえ、みんなはそこから近い第八会議室にいます』

不思議には思ったけれどみんなの所へ行くのが先と思って私はそこへ向かった。

私としては迂闊だったのだけれど、いくら目覚めたとはいえ、病人に近いはずの彼女達が会議室にいる時点で何かを疑うべきだった。

「……………えーと……………」

結論を先にいしましょう。

エイミー、あなたこうなるのが分かってたわね？

会議室についた私はフェイトさんに案内されるがまま席に着いた。部屋のと真ん中に用意されていた椅子に半ば有無をいわせず、座ってしまってから気付いた私も私なただけど、

中がくりぬかれたような楕円形の机の中心に座らされていた。

私いつのまに机越えたのかしら？

中に入る隙間はなかったはずだけど。

いえ、そもそもこの状況は………なに？

「あの、みなさん？」

「全員そろったのでそろそろ始めたいと思います」

私の声は軽く無視され、プレシアさんがいう。

座っていた場所が場所だけに、なにか議長のように見えた。

「リンデイさん、私たちはあなたに聞きたいことがあります」

「うん、いろいろと聞かなくちゃいけないわね」

そちらに視線を向けていると背後からずかさんとアリサさん。

ふたりがどこか硬い声で私にいう。振り返ってみるに顔も、硬い。

「え、ええ。当然あなたたちにはちゃんと説明を……」

がんがん。

と何か、地球のアレを叩く音に似た音が会議室に響く。

「被告人は静粛にしろ」

小さなハンマー状態のグラーファイゼンが机を叩いていた。

当然叩いたのはヴィータさん。プレシアさんの横に座っている。

というかデバイスは取り上げたはず、よね？

「って、被告人!？」

予想もしない呼び方にさすがの私も訳が分からない。

被告人とは私の知識が間違っていないければ地球において、刑事事件の嫌疑が十分として公訴された人。のことだったはず。まあ要するに犯人だとすごく疑わしい人を裁判の中で呼ぶ名。

「被告人リンディ・ハラウン。

あなたはどうかやら、この法廷に呼ばれた理由がわかっていないようですね」

「ひどい! あれだけのことをしておいて、しらばっくれる気ね!」

裁判長席(便宜上そう呼びます)から正反対の場所に座っていたシグナムさんに

ギロリと鋭い視線で睨まれ、隣のシャマルさんは泣き真似をしながら指を突き刺してきた。

うん、本当に、なに？

「クロノ、これはいつたい……」

裁判長席を正面にむいた時の右側に座る息子に問いかけるけれど、当人はすごく疲れた顔で、首を振るだけ。もつとも。

その疲れが魔力消耗によるものか、この状況なのかは判断がつかない。

「裁判長、よろしいですか？」

「発言を認めます」

ああ、本当に裁判長なのねプレシアさん。

そして彼女から許しを得た車椅子の少女が手元で本をパラパラとめくりながら語る。

まるで法律書か何かを読んでいるかのように。

あの、だから一応闇の書つてロストログア保管室に置いたはずよねはやてさん？

「被告リンディさんには、ある容疑がかけられております。」

目撃者はこの場にいる全員です。にも関わらず本人は容疑を認めておりません」

「あの、だから私なにかしたかしら？」

瞬間、全員の視線が質量を持った。空気が、重い。

ええ？ なに、本当になんなのこれ？

いくら私でもこの数と質の視線の圧力は正直つらいんだけど。

「いいでしょう。そんなに知りたいんいうなら、教えてあげます！

リンディさんの罪は……」

「罪は？」

場の空気ゆえか。

私自身もこれに吞まれてしまったのか。

思わずごくり、とつばを飲んで身構えていた。

「うちの前でコウ兄の唇奪った事に決まっとるやる!!」

・

・

・

・

えええええ!?!? それええ!?!?

「被告人は弁論があるならしなさい。

皆が納得出来たのなら、減刑も考えないわけではありません」

裁判長、どのみち刑は執行されるんですね。

それにみんなしてうんうん頷いて、というかなんでクロノまで頷いてるのよ!

「はあ……」

椅子から滑り落ちそうになった身体をなんとか戻す。

そしてみんなに聴かせるようにあの行為の意味を話す。

「あれは、アースラの魔導炉からの魔力を直接彼に流し込むためよ」

私は専門職だったプレシアさんに比べれば劣るけれど、艦船の魔導炉ひとつぐらいの魔力なら供給を受けて扱うことができる。

あれはそれを利用しての特殊な形の魔力供給でしかない。とはいっても、通常と違った使い方に調整に少し時間がかかって、エイミイには大変なことをお願いすることになったのだけだ。

「意識のない彼にそうするには中継点になっている私とその……深く密着する必要があったの。」

個人同士ならデバイスを通すんだけど、魔導炉からの大魔力を一気に、となると

いちデバイスでは制御しきれない。だから口から直接入れるしか無かったの」

そもそもあの時も通常以上の魔力だったから、私も供給を受けきれていなかった。

溢れ出す魔力の光に包まれていたから転移もできずに普通に降り立った時には

もう彼は一刻を争う状態だったから、口からになったのは咄嗟の判断というだけ。

「どうなんや？」

『はやて嬢、残念だがリンディ嬢のいう通り私が受けるには量が多過ぎる。』

マイスターの肉体に直接入れるというのは正しい判断だ』

はやてさんの手元にいる待機状態のトラヴィックが私の話を肯定する。

もうツツコムのもあれだけど、あなたは修理中じゃなかった？

「……突然で驚かせたのは申し訳ないと思うけれど、
あれは緊急時の人命救助、人工呼吸のようなものだと思ってほし
いわ」

とはいえ、気持ちはわからないわけじゃない。
頭ではどこかそういうことだと分かってはいるのでしょう。
だけどやっぱり目の前で好きな人の唇を奪われてはね。
女の子としては黙っていられないでしょうし。

「ああ、そんな建前なんてうちらはどうでもええから」

「……………え？」

「そういったことはエイミーから聞いてます」

「だから、そこはいいんです……………今の所」

なのはさん、最後のボソツと言ったの何っ!？
いいえ、その前になんで当たり前みたいに建前になってるの？
それ以外の理由なんてあるわけないでしょう。

「正直、油断してた」

「考えてみれば、一番警戒しなきゃいけなかったのに……………」

「不思議とリンディさんをそういう対象から外してしもてた」

私が困惑している間に話は勝手に進む。

みんなの「盲点でした」みたいな総意の言葉や頷きに余計に首を傾
げてしまう。

部屋の隅で唯一これに参加せず立っているザフィーラさんに視線を

送るが

少しだけすまなさそうな顔をしただけですぐに視線を外された。すまない、助けには入れない。ということかしら。

「あの……何が、言いたいのか？」

ここはもう待っているより聞き出したほうが早い。

そう思って口にしたのだけれど、一瞬、全員がニヤリと微笑んだ気がした。

私の目の錯覚であることを切に願いたくなるほど悪寒が走る笑み。どうやら待っていた言葉を私は口にしてしまったよう。

『では、私が代表して聞きましょう』

そういつてきたのはフェイトさんが手に持つデバイス、リニスさん。彼女が聞くというので私もそちらに向き直る。そして。

『あなたもコウキに惚れているのでしょうか？』

ナニカワケノワカラナイコトヲキカレタ

「っ……な、何を言ってるのか？」

一瞬、真っ白になった頭を再起動させる。

そして出来るだけ落ち着いた言葉で返す。

いけない。いけない。いったい何にフリーズしていたのか。

「リンディ提督、正直に答えてください」

リニスさんを握ったままフェイトさんは真剣な眼差しを向けてくる。その真摯で純粋な目にまるでこちらが悪い事をしているような気分にする。

隠し事があるなら洗いざらい口にしたいくなるような……って！

「あの、いえだからフェイトさん私は……もうっ、クロノも何とか言いなさい。」

彼はあなたと同じ年なのよ？ 息子と同じ年の人を、なんて……」

ありえないでしょ？と問いかけた。

これが裁判だというのなら位置的にあの子がいるのは弁護人の席。私は息子ということもありその弁論に期待した。

「さあ、そういうのは年齢ではないと聞きますし。」

だいいちその息子の前で堂々とキスするぐらいですから、気はあるんじゃない？」

どこか不機嫌そうながらも、どうでもいいかのように弁論をした。ものすごーく、私に不利になるように。

「……………」

まさか息子に裏切られる日がくるとは思わなかった。これがウワサの反抗期？

うちのクロノに限ってなんて思ってた私が甘かったのかしら。

それとも片親の弊害？父親の消失がここまでクロノを捻じ曲げてしまったの!？

「だ、だからキスじゃなくて人口呼吸……」

思わぬ事態に動揺しつつもきちんとそれだけは否定しておかないと、それにしてもキスだなんて、あれはただの人命救助の行為であって、それ以外の意味なんてこれっぽっちもないのに！

「被告人、あなたはそれを役得。とか思いませんでしたか？」

「え、冤罪よ！ あの時時間は時間がなくてただ必死で！

それしか方法がなかったから……」

「チャンスやと思って、ぶちゅつと？」

「違います！ だ、だだ、だいたい！

キスしようなんて思ってたらあいつの顔なんかまともに見れないわよー！」

あ

「……え、いや今のは言葉のあやでー！」

ニヤリ、と彼女達はしてやったりな顔で笑みを浮かべていた。

「つまり、しようと思うと顔が見れなくなるぐらいコウキを意識してる。」

ということでもよろしいですね、リンディ被告人？」

裁判長がどこか嬉しそうにそこを指摘する。

致命的な失言。いえっ、だから私は違うのー！！

「ち、違う、違うったら。あんな男……あんな……」

思い浮かぶ彼の顔。その唇。

知らず、自らのそれに触れながら脳裏にはあの時の光景が蘇る。

苦しむ彼を抱えて、顎を掴んでこちらに向けた私はそのまま!!

「　　つつつつ!!!」

「　　いつ、いいえ、違う！　キスじゃないっ！　絶対キスじゃない！

」

あ、あれがキスだったらこれからどんな顔で会えばいいのよ!?!
お願いだから、誰か違うって行って!

いや、なんでみんなそんな笑ってるの？

ああ、うそ……私、しちゃってたの!?!　キスしちゃってた!?!

あいつが私の二人目の男？　私、もうあいつに唇あげちゃったの？

……ひゃあああああっ!!!???

「すごい美人で大人の女性、だつて思ってたけどこれは……」

「こんなリンディさん初めて見た」

「意外に照れ屋さんみたいだね」

「同じ年上な身としては解らくはないけど、彼並に初心ね」

「これ……これがコウキちゃんの好みなのね!?!」

「リンディ提督……可愛い」

顔が熱い。周りの言葉が耳に入らない。

「ねえ、どうやったん？ コウ兄のお味は？」

「いかな感触だったか、興味があります」

「怒らないから教えてよ、オハナシ、しよ！」

聞こえないったら聞こえない！！

起きたら、覚えてなさいよ………もう全部あなたのせいよ！！！！

女三人寄れば姦しい。という言葉が地球の日本にはある。
果たして、詰め寄られている彼女を含めて11人集まるとどうなる
のか。
単純計算で四倍弱の姦しさはもはや騒動に近かった。

どこか不機嫌そうな顔でその騒々しい会議室から抜け出した少年は外からでもよく聞こえる室内の喧騒にため息を吐く。

「……大丈夫か？」

その背に大柄の彼が気遣うような声をかけた。

「大丈夫、とはいいいがたいかな。色んな意味で」

「……すまない、というべきだろうか？」

彼 ザフィーラからすれば同胞と主たちがこの騒ぎの原因である。かつて日野家でもそういつた被害によくあっていた彼を慰めていた経験から

なんとなく少年 クロノにも似たような感じで話しかけていた。

「構わないよ、あれはしょうがない。

ここ最近みんな気を張り詰めすぎていたからね。

一旦ガス抜きしておかないとこれから持たない」

一命を取り留めたとはいえ、彼 コウキの運命は何も変わっていないのだから。

いわばこれは儀式でもあるのだ。目の前にある直視したくない事実を今だけは見ないための、彼女たちが自らを保つために行う儀式。

「僕も息子として言いたいことはあったし、母さんもわかってるからあの場合からは逃げようとしな。認めようとはしてないけどね」

仕方ないと語るがクロノの表情は複雑だ。

本人が認めていないとはいえ同じ年の友人相手に母親が懸想してる

のだ。

母親を取られたくない駄々をこねるにはもう彼は幼くなく、まだ若いのだからと次の男を笑顔で勧められるほど大人にはなれない。

「皮肉な話だよ。

誰からも想われてなければコウキは軽々しく自分を捨てただろう。だが、あれだけの人に想われて、今度は誰も切り捨てられなくなつた」

どちらが良かったかなんて、論じるまでもない。

まるで彼を少しでも生かすために彼女達は存在したようにさえ思えた。

「そんな男は、母親の恋人としては不資格か？」

「ぶっ……ザフィーラ、君は僕になんていわせたいんだ!？」

思わず噴き出して、驚愕した顔で彼を見上げる。

そこに触れられたくない態度をとっていたクロノからすれば、無造作にそこに触れてきた彼の態度は、実にらしくなかった。

「さてな、だが少なくとも今夜はふざけていた方がガス抜きになるんだろう?。」

確信犯のような薄い笑みにクロノは守護獣の気遣いを感じた。

「……………そうだな、今夜だけは真面目な執務官は休業するよ」

「付き合おう。俺も今日は守護獣の役目を忘れようと思っていた所だ」

そうしてふたりは自販機の飲料を片手に、胸に溜め込んでいた愚痴を吐き出すのだった。

女性陣に対する愚痴だったことだけは、ここだけの秘密

四面楚歌（後書き）

こういうことがあったので、

リンディさんはコウキをめちやくちゃ責めたのです（嘘）

途中若干リンディさんが、壊れておりますが我が社の仕様です（笑）
美人・仕事ができる・子持ち・未亡人・策士・でも恋には純情乙女！
で、この話のリンディさんはできております。

日々の裏で

12月19日 AM10:27

管理局本局 艦船ドック アースラ

『お、お前ら初心者によつてたかつて!?!』

『これも戦略のうちよ』

『トドメです!』

『主、お覚悟を!』

『うわあぁっ!?!』

エイミイの眼前のモニターの中でひとりの少年が絶叫する。

それに周囲の女の子たちがガッツポーズし笑みをこぼす。

持ち込まれた乱闘タイプの対戦ゲームではかの参加者からのタコ殴りにあつたようだ。

「……なんか覗き見してるみたいであんまり気分がよくないんだけど?。」

その光景が楽しそうであればあるほどに、彼女はどこか居心地の悪さを感じる。隣に立つ少年にそれを訴えるが、その少年もまた似たようなものを感じていた。

「いうな、僕だってそうだ。けどいつ容態が悪化するか解らない以上監視を怠るわけにはいかないんだ……それに例の仮面のこともある」

同意こそすれクロノは必要性を訴える。

その理由の中には“未だに”正体と目的が解らない仮面が含まれている。

「ああ、そつか。結局あのドタバタで逃げられちゃったからなあ」

コウキが倒れその対処に追われていた隙に逃亡した仮面。

エイミイが魔導炉の調整に追われていた事もあり追跡もろくに出来なかった。

「一応、本局の中だ。」

大丈夫だとは思うが、闇の書含めてしっかり監視してくれよ」

「うわあ、やることたくさんだなあ。」

魔導炉からの供給状態も見てなきゃいけないのに」

「そこだけはしっかりやってくれ。本当に生命線なんだ」

すでにエイミイはもちろんのこと。

魔法について知らなかったアリサにまですべての事情が話されていた。

だからアースラからの魔力供給の意味と重要性は分かっていた。

「でも、信じられないよね。艦船を動かす程の魔力で辛うじて、なんて」

「それもアンチシステムが守備範囲を上半身だけに絞って、だ」

五体満足を維持するための魔力と生命活動を司る臓器が集中する上半身だけの魔力。

どちらの消費が少ないかなんて考えるまでもない。しかしそれでも僅かに足りない。

この状態では彼が言った通り、16歳になる日までシステムを稼働してられない。

「もう下半身だけは侵食されたも同然な状態、なんだよね。」

まあ、だから騎士達はここから抜け出さないとずっとコウキくんのそばにいるんだけど」

管理局としてはこれ以上動かせないので嬉しいはずだが、彼女の表情は暗い。

何せそれはもう闇の書が完成しても手遅れな事を意味していた。

彼女達が期待していた彼個人のデバイスやロストロギアの制御能力は侵食の影響でかなりが失われてしまっており、もはや一縷の望みも残っていない。

誰もがそれを知っているのに。

モニターの向こうでは皆が笑っている。

彼の前だけでもと、いつもの自分を装って。

(みんなすごいよ、すごいけど……………痛いよ)

エイミイは初めて人の楽しそうな笑みを見て、痛みを覚える。少女達がどんな想いで笑っているのかを考えるだけで胸が張り裂けそうだった。

「……あれ、そういえば艦長は？」

だから、ではないが。

話題を変える意図もあつて姿を何故か見せない上司の行方を聞いたが、クロノも正確なことは知らない様子。

「さあ、多分あちこち動いてるんじゃないかな。

前からいろいろと掛け合つてはいたみただけど」

空いている魔導炉がないか。と。

それを考えるとふたりの顔はさらに明るいとはいえないものとなった。

はつきりといつてしまえな、そんなものはない。

管理局は万年人手不足な組織であり艦船の数とて限られている。

それを半ばフル稼働させなければならぬほど事件は多い。

空いている艦船があればすぐに任務に使われることだろう。

例えば人命のためとはいえ、いつてしまえば一人のために独占はできない。

例えば闇の書事件とはいえ、管理局では既に天災のような事件として扱われている。

根本的な解決はできないが先延ばし続けることが出来る事件。

吹き飛ばしてしまえばそれだけで数年は安心できる事件。

局全体からみれば実のところ優先度はかなり低い事件になっていた。

「難しいね。理屈では、解るんだけど……みんなを見てると、さ」

どうやっても救えない一人にそんなコストをかけるより、別にかければ確実に解決する事件や助けられる人がいるのならそちらに人や物を優先させる。正論すぎて言い返す気力もわかない。

けれどふたりの視線の先では少年少女たちの微笑ましいがゆえに辛い光景がある。

それすらもあと数日だけの光景といわれて、はいそうですかと納得できるわけがない。

ましてやそこに友人や仲間、同僚ともいえる人たちがいたのなら、尚更。

「……………納得しないのはいい。諦めていいわけもない。」

「………ただ………いや、すまない。口にすべきじゃないな」

しても辛くなるだけだ。と口を塞いだ彼にエイミィはしかし首を振る。

「うっん、いいよ。ここには私だけだから、愚痴も弱音も全部聞くよ」

それも副官の勤めですから、といつもの笑顔を見せた彼女にクロノもまた強ばっていた顔を微笑のそれに変えて素直に感謝した。

「わりといつもそうさせてもらってるよ。それでも普段から感謝しているんだ。」

君が副官じゃなかったらとつくに僕は折れてたかもってぐらいには

「……………!?」

途端。

エイミイは自分の顔がひどく熱くなっているのを感じながら驚きの顔でクロノをまじまじと見詰めてしまった。

「なにか、僕の顔についてるのか？」

「あ、いや、そうじゃないんだけど………本当にクロノくん？」

あまりにストレートすぎる感謝の言葉に疑ってしまう。

クロノからすればあんまりな言い方にいきなり洗面となる。

「失敬だな、僕だって感謝の言葉のひとつやふたつ言つべき時にはいうさー！」

「あゝ、ごめんごめん。」

いやあ、そんな嬉しい言い方してくれたのは初めてだったから……

「……」
「んん………？」

照れたように笑うエイミイに『嬉しい言い方』と表現されて

クロノは一度自身の発言を頭の中で反芻した。

すんなりと口から出た言葉だったのであまり深く考えての発言ではなかった。

わりといつもそうさせてもらってるよ。これでも普段から感謝しているんだ

君が副官じゃなかったらとつくに僕は折れてたかもってぐらうには

「……つつつ!?!?」

(ば、馬鹿か僕は!?)

君が副官じゃなかったら、なんて彼女以外の副官は嫌だって言ってるような……って、え?)

とそこまで考えて、実際エイミー以外は嫌だな。と思ってる自分に愕然とする。

「……………」

「……………」

互いに互いを見れなくなつて、奇妙な沈黙が場を支配する。

(き、気まずいなあ。っていうか私は何ちよつと期待してるのよ!?)

相手はクロノくん、弟みたいなものだって自分で言ってたじゃない!?!?)

(コウキの件で少しナーバスになつてたのか?)

身近な人間が、いつもいてくれるわけじゃない事なんてとっくに知ってただろ!?!?)

けれど発言はいつもより饒舌に自らの内の感情を暴露し、

それは彼女の中の何か育っていなかった感情を大きく揺れ動かした。

「……あ、あははは、そ、そういえばさクロノくん」

「あ、ああ、なんだ。エイミー」

とはいえ、まだまだの二人がそれを自覚するのはもう少し時間がかかる。

二人して別の話を進めようとしている息の合いかたはもう手遅れだが。

「どうやったの、シグナムたちを捕まえずに本局に入れるとか。

手錠とか行動の制限とかもしてないみたいだけど、どんな裏技？
上をどうやって納得させたのよ？」

“あれから”身動きがとれなくなった全員を収容したあと、
別段彼女たちはなんの処置を受けた様子がなかった。

一応デバイスを取り上げ、闇の書は保管室行きではあるが、
モニターに映る通り彼女達は何も制限されてもいないし拘束もされて
いない。

蒐集活動をしていた者達への対処としては甘すぎるものがある。

「入れるだけなら別に問題はなよ。

捕まえてもいないし捕まえる気も今はないからね。

上へはそもそも何も言っていないから納得もなにもないよ」

「ふーん……………え!？」

あまりに普通の事のように語るので思わず受け流しそうになったエ
イミイである。

だがよく聞けばそれは犯罪者を捕まえもせず本局に無断で入れた。
ということだ。

当然、表沙汰になれば大問題であり最悪こちらが逮捕されても文句
はいえない。

「だいいち、目撃証言にあるだろう？」

蒐集していたのは黒髪の集団だったって……そんな奴どこにいる」
けれど当の本人はどこ吹く風とばかりに元の色に戻している彼女たちを指さす。

当然黒髪なのはこちら側についていたコウキだけ。

目撃証言があるといっても襲われた「人」が少ないのと

黒一色だった格好からそのイメージが強く、うまくすれば、

『似てるけど違う人だ』という証言を得ることも難しくはない。だが。

「……………クロノくん、なんか艦長に似てきたね」

屁理屈もいいところのやり方にどこか嬉しそうに彼女は笑う。

「うぬっ……………」

親子である以上半ば必然の言葉だが、クロノは微妙な表情でしばらく唸ると

肩の力を抜いて、大きなため息を盛大に吐き出したのだった。

12月21日 AM02:33

管理局本局 提督職務室

重厚な様相の仕事机の上で複数のモニターを流し見る女性。

その視線は鋭く、口元は歪み、表情は不機嫌さを隠そうともしない。今にも舌打ちして罵声が飛び出しても誰も疑問に思わない表情だ。もつともそれがあのどんな相手にも笑顔を絶やさないといい、リンディ・ハラオウン提督であるなら、話は別である。

『無理よ、リンディ。』

アースラのL級より劣るM級やS級にも半年先まで予定が埋まっている。

L級以降は出払って本局にすらいない。それ以外の魔導炉も使用中で許可がない』

モニター越しにレティ提督は大方の予想通りの結果を告げた。そして今しがた彼女はどこか民間から借りられないかと複数打診した結果を見ていた。

ドンッ

と苦々しい顔で机を叩いた彼女を見れば結果は明らかだが。なにせ彼らからすればあまりにも旨みがない。

貸したところでたいした見返りがあるわけではないのだから。

別の好条件の相手に貸し出す方を優先するのは商売として当たり前の話。

彼女もそれは半ば解っては、いた。

「方法は合ってた！ 大量の魔力さえあれば時間は稼げるのに！！」

『……リンディ、少し休みなさい。あなた何日寝てないの？』

かつて見たことのない憔悴し切った顔に『友』としての言葉を向ける。

だが、彼女はわずかに首を振って、それを受け取らない。

「この数日が重要なの！ 私は数日寝なくてもたいした問題じゃない。

けど“いま”あの子達は眠れない夜を過ごしているの。

いつ何が起こるか解らない恐怖に怯えながら、いつ彼に終わりが訪れるかに泣きながら！！」

あの日から少女たちは全員本局で寝泊りしている。

だが実際はろくに眠れていないことをリンディは知っていた。

眠って起きたら、すべてが終わっているのではないか。

あってもおかしくない未来を想像して眠れない。

あれから一度もコウキの病室に行っていない彼女には想像するしかないが

それでも彼の前ではいつもの笑顔を見せているに違いない。

それを思えば自らの苦勞など天秤にかけることすらおこがましかった。

『……こんな言い方したくはないけれど、あなた今回いれ込み過ぎよ。

そりゃ闇の書事件で、知り合いが主で……子供たちにとって辛い

事件なのも解る。けど!」

割り切らなければ管理局で提督などやってられない。

リンディがそれでも事件に対して何とかしようといつも苦心していたのは知っている。

裏技、違法スレスレな行為で関係者に僅かでも救いがあるように。それを否定するつもりはレティにはない。けれど今回は状況が悪すぎた。

レティは事情と心情を理解しながらも、あえて突き放す言葉を口にする。

『冷静になりなさいリンディ提督!』

私たちはこればかりにかまけているわけにはいかないのよ!？」

いまこのときにも事件は起こり、無法者が好き勝手し無力な者が助けを求めている。

彼女ほどの優秀な人間ならひとりでもそうついた事件に対応するだけ

犯罪者は追い詰められ、助けを求める人は救われる。

『あなたの力があれば……』

「っ……たくないつて言ったの……」

『えっ?』

「死にたくないつて、彼は言ったの」

『リンディそれは……』

当たり前の話ではないのか。とコウキをよく知らないレティは思った。

知っている者ならその言葉の“重み”はあまりに巨大である。しかし、リンディはそれ以上のことに、気づいてしまっていた。

「何度も、何度も死にたくないって言った。けどね、レティ。

彼、一度も『助けて』って言わなかったのよ……」

『えっ?』

意表を突かれた顔でレティは固まった。

死にたくないのに助けてとはいわない。

その、あまりにも怖い意味合いの齟齬に息を呑む。

「……私があれば追いつめて泣かせたのに……言わなかった。

方法がないからなんていう生易しい理由じゃない。

無かったのっ、彼の中に助けてって言葉が無かったの!!」

助けを求める。という選択肢。

追いつめられ、もうどうしようもなくなったのに。

彼の中からその言葉がついに見つかることはなかった。

「どんな人生よ、それ。

自分を無くし、願いを無くし、助けを求める事さえ無くして、

最後は当たり前前の犠牲みたいに消えていくなんて……」

何のために生まれてきたのか。なんていう哲学の話など彼女はする気はない。

けれど何もかもが欲しいといった彼は僅かに掴めた小さな幸福さえも無くす。

どうして彼には、何も与えられない。手にしても失うばかり。

「私は、それが許せない」

だからリンディは怒っていた。

そんな人生を彼に強いたすべての運命事象に。

彼にその言葉を使わせられなかった自らの非力と無力さに。

自分がそれを失っていることにさえ気付くことができない彼自身に。

「絶対いわせるんだから、助けてって、いわせてやるんだから！」

だから『それまで、死なせてなんてやるものか』と決意するように叫ぶ。

そしてリンディはまたも複数のモニターに視線を移して作業に戻った。

レディはそんな彼女にもうかけられる言葉が何も浮かばなかった。

「はあ」

切れたモニターの向こうを思って彼女はため息と共に背もたれに身体を預ける。

「甘かった……」

先ほどまでの彼女を様子を思い返して自らの見込み違いに頭をかいた。

ここ久しく思い出すこともなかった彼女の静かなる激昂の表情。

“あの”リンディ提督が笑みを浮かべることさえ出来なくなっていた。

その意味の恐ろしさはいまの管理局ではもうレティしか知らない。

「なにが名前を呼べたら、よ」

そこからが、彼女が攻勢に出る境界線だと思っていた。

「とつくの昔に、本気になってたんじゃない」

（まったくどうして、分かりづらい感情表現をするんだから」

あの顔になった彼女はもう止まらない。

下手をすれば管理局を敵に回してでも彼を救おうとするだろう。

「ゾツとしないわね」

そんなあり得る可能性の光景に苦笑いする。勝てる気がしない、と。

「じゃ、それだけはなんとか避けるように無駄骨折りますか」

目の前の端末を操作して、彼女はリンディに関わりそうな仕事をすべて自分に持つてくるように手配する。

そしてしばらく彼女に仕事が回らないようにも。人事権もある運用部だからこそできる根回しだ。

「はあ、私も徹夜ね、これじゃ。」

終わったら、美味しいお酒山ほど奢ってもらおうよ」

出来るならその席で互いに笑いあえる結末を。

レティは生まれて初めて何かを祈って仕事を続けるのだった。

遺す言葉（前書き）

遅れました。

うん、いますごく難産な状態であります………ストックがやばい。

遺す言葉

12月23日 AM09:27

管理局本局 医療施設 病棟個室

「じゃあ、お前があの仮面たちについて知っているのは目的だけなのか？」

ベッドの上で上体だけを起こしている私服姿のコウキと
ベッドサイドの椅子に座る僕は最初こそ他愛ないことを言い合っていたが

結局のところそうだった話になるのは僕の性分だろう。

.....

それだけ すまん 役立てない

「気にするな、元々期待していたわけじゃない」

そういつて僕は首を振りながらも、落胆がないわけじゃなかった。結局正体も目的も不明だったあの仮面連中について、こいつならもっと深いことに気付いているのではないかと勝手に期待していたのだ。

今日、僕は取調べがてら彼の見舞いに来ていた。

艦長、いや母さんがアースラ艦長としての職務を実質放棄してるのでそのしわ寄せで少し僕も忙しくなって結局今日までこれなかった。

何より、あの子達と彼との時間をあまり削りたくなかったのだが、本人が僕とふたりだけの面談を希望してきた。

正確には　そろそろ取り調べにこいよ、おい　と見せられただけだが。

「闇の書の完全封印か。お前が提示したいくつかの方法は確かに可能だが、

あまり現実的ではないな、本気でそれを考えてるのか彼らは？」

主と融合した状態での各種の封印方法。

それを維持し続ける点で問題があるが可能である点がさらに問題だ。何より仮面たちの行動を考えれば本気度がかなり高いのも。

.....

一番復讐　他、二の次

「なるほど」

それならばいくらか納得できる。

闇の書事件は歴史が長いだけに被害者遺族は多い。

近年はわりと被害者数は少ないが、前々回まではひどかった。むしろ前回と今回が少なすぎるぐらいなのだ。いまのところ。それゆえに容疑者の数はおそろしく多いのだが。

「そっちの方面で調べるしかないか……」

事件の性質上、腕の立つ魔導師に限定しても大人数だろう。

...

ガンバレ！

肩をポンポンと軽快に叩かれた。

「他人事だと思って、簡単にいうな！」

僕はその“文字”を見て渋い顔をしてあいつを見据える。それをあいつは意地が悪そうな顔で言葉なく笑うだけだ。

こいつが、声を失ったのは二日前だ。理由は、動かない下半身と同じもの。

侵食から生命活動に必要な最低限を守るためにそれ以外の部分を徐々に失っている。

アースラからの供給が絶えたのではない。それだけでは足りなくなってきたのだ。

本局に担ぎ込まれた時には下半身だけだったがすでに視力と聴力の低下。味覚の喪失。

日常生活に問題はないが腕力も低下してきて、起きてられる時間も減少している。

そして声を失ってからはもっぱら筆談だ。念話なんて使えるわけもない。

それでもこいつも、みんなも笑って一緒に過ごしている。

すごい。なんてものではない。

正直、僕はいまにもわめき散らしてしまいそうなのに。

「まったく……それじゃ僕はこれで行くよ。」

これ以上君を独り占めすると後が怖そうだし」

だから逃げるように退席を言葉にする。

本当はもっと長く一緒にいてほしいと“頼まれて”いるが、ダメだ。僕は彼女達ほど、平然としたフリができない。

席を立つて、背中を向けて扉の前に立つ。コッソ。と頭に軽い衝撃。床に何か落ちて転がる物が見えた時点で誰が何をしたのかは考えるまでもない。

「あんな、コウ……キ？」

声が出ない彼が背中を向けた相手呼び止めるにはそうするしかないのは解る。

しかし丸めた紙をいきなりぶつけられた方としては思わず顔が渋いものになる。

だが、振り返った先、手元のメモ帳に書かれていた言葉に、頭が少し真っ白になる。

エイミーさんはいい嫁さんになるぞお（ー＋）

いまのうちからちゃんと捕まえておけよ！　o（*　O　）b

「……………なっ！？」

文字の意味を理解した時には訳も分からず顔が熱くなった。だが奴はニヤニヤとした顔で相変わらず笑っていて、妙に腹が立つ。そのうえ、あるうことかこいつそのメモをこの部屋の監視カメラに向けようとしていた。

ちよつと待て。いま見てるのは間違いようもなく、エイミイツ！？

「わっ、よせ！！」

慌ててメモ帳ごとひったくって、本当に逃げるために部屋を出た。

あいつは最後まであのだこかしてやつたりな笑みのまま。

背中を向けているっていうのどこか笑い声さえ聞こえた気がした。

「ったく、あの馬鹿。人が真面目に……………」

病室を出て、ひとり不機嫌さを周囲に振りまきながら歩いていた僕だったが、

不意に、どちらが気を使ったのかを理解してしまう。

「馬鹿は僕だ……………気の利いたことの一つや二つ言えないのか!？」

死ぬ運命にあるあいつに。

失う運命にある友人にどうして僕が気遣われているんだ！

「……………はあ」

溜息ついでに時刻を見る。

フェイトたちはお昼ごろに帰ってくる予定だから。まだまだか。

いまみんなは表向き僕の取調べ兼お見舞いのために病室の近くには

いなかった。

それどころか騎士たちが誘う形で地球にあるあいつの、彼女達の家に行っている。

「フェイトたちは彼女らの決断をどう思うんだろうな？」

その覚悟を聞いて、そのための準備として皆であの家に行きたいと頼まれた。

そんなことを聞かされて、断れるわけないじゃないか。

「辛いよ、待ってるだけっていうのは本当に……」

あいつのふざけた言葉が書かれたメモに愚痴をこぼす。

周囲に人がいなくて良かった。いま見られたら完全におかしな人だ。

あ、そういえばメモ用紙これだけだったような？

まずいな、あとで返しておかないと、っとその前にこれだけでもと。

一番上の紙をめくって千切る。こいつだけは絶対に誰かに見せるわけに、は？

「え……？」

その次の紙。そこにも文字が書かれていた。

ただ、それが意味することを僕はすぐに解らなかった。

宝石の始まりを探れ

宝石？

始まり？

なんだ、いつたいなんのことだ？

というかこれは誰あての………僕、か？

「っ！ これを見せるためにわざとあんな事書いたのか!？」

よくよく考えれば脈絡もなくあんな事を書いた時点で怪しむべきだった。

でもいつたいなんのためにこんな手の込んだことを？

どうせ筆談なんだ。他の奴に聞かれるなんてことないだろうに。

「でも、本当になんだ？ 宝石、始まり……探れっことは事件関係か？」

僕にこれで書いて通じると思っただけは僕達が共通して知る事件。

それで宝石………つまりジュエルシード事件。

だけど今更あれの始まりを探れだって？

いや、そもそもあの事件の始まりはどこだ？

ユーノがなのは回収を頼む辺りか。フェイトが海鳴についた時か。それともプレシアがジュエルシードの存在に気付いた時か。その暴走の原因の事故か。

待て、宝石の始まりっというぐらいだから作られた時代のことか？

ああ、違う、違う。それについては僕よりユーノが適任だ。

っ、そうだ。始まりっというならユーノが見つけたことだ。

だがあれに探る余地なんかない。あれは正式な発掘調査での発見っただけの話。

調査する余地があるっというのならむしろそのあとの……っ!？

「まさか、そこから？ そこからこの事件は始まったのか!？」

僕に探れってことはそういうことなんだろうコウキ。
そしてそれをこんな手段で伝えてきたってことは、知らないなんて
嘘ついたな？

「エイミイ、聞こえるか？ ちょっと僕は出る用事が出来た。後は
頼む！」

『え、ちょっと待ってクロノくん！』

「待てない。時間がないんだ。」

エイミイ、コウキの監視を頼む。今日はいつもより念入りにだ！
念話で言いたいことだけいって制止する声を振り切るように走る。
第六感か山勘か、これまでの経験か。頭の中で警鐘する音が聞こえ
る。

暗号めいた手段だったとはいえ単に調べてくれと頼まれたに過ぎな
いが、
あいつからのこのメッセージを僕はそんな素直に受け取れない。
僕には何か、遺言のように見えてしかたがなかった。

全部が終わったあと、お前の手柄にしろ

聞いたこともない言葉が、あいつの声で聞こえた気がした。

12月23日 AM10:33

海鳴市 中丘町 日野家

「いやあ、やっぱり我が家は落ち着くな」

「ああ、まさかまた戻ってこれる日がくるとは思わなかったが」

どこか感慨深い表情で家の中を見回す騎士たちとはやて。

五人からすれば罪に手を染めた時点でここには戻れないと覚悟していただけに、

いまこの場にいることがすごく夢のように思っていた。

「けど思ったより汚れてへんな。

ひと月近く放つたらかきにしてたと思うんやけど……」

「ああ、前に私達がプレシアさんたちとお掃除に来たから」

「ほんまか、ありがとな。なのはちゃん、フェイトちゃん、プレシアさん」

感謝の言葉にいいよ、と恥ずかしがる三人。

その横でなら自分達にも声をかけてくれればよかったのに！

と憤るアリサとその横でまあまあとだめるすずか。

あまりにも“いつも”の光景に自然とみなは肩の力を抜いていた。

「けどそうなることやることあんまねえよな、あたしら」

「ですね、最後に、お掃除ぐらいしようと思ってたんですけど」「シヤマル!」

「え?」

そうして呟かれたなんてことのないような言葉。

その中に不穏なものが混じっていた事に気付かない者などこの場には誰もいない。

「どづいつ……」とや?」

主である少女からの、どこか誤魔化しは許さないという鋭い視線に騎士たちは全員どこか困ったような苦笑を浮かべた。

「心配しなくてもちゃんと話します。」

ですから、まずは……みんなで座って、みんなでお話しませんか?」

失言をしたシヤマルだが、その柔らかい声と微笑にみんなは頷くしかなかった。

リビングのソファに全員が座ると騎士たちはテキパキと動いて、お茶を配る。

以前に来た時に食材は持ち出したがこういった飲み物やお菓子程度はまだあった。

この場にはあの病室に常にいたほぼ全員が集まっていた。

コウキが少しクロノとふたりで話したい。といったこともあって、騎士たちがその空いた時間を利用して皆を誘ったのだ。

リニスだけが「彼のお守りをしています」といって病室に残っていたが、

トラヴィックははやてが誕生日にもらったペンダントと並んで彼女の首にあった。

本当はリンディも誘う予定だったが仕事のため会うこともできなかったが、
クロノを通して、その“決意”は告げられている。

「まだ完全に決めたってわけじゃないんだけど……今日このあと、
あたしら、コウキにある提案をしようと思ってるんだ」

お茶を配り終えて、全員が座るとまず口火を切ったのはヴィータ。
そのどこかいつも通りの表情に、少女達は言いようのない悲壮感を
覚えた。

「それで主が受け入れてくだされば……いや、受け入れてくださる
まで

説得するつもりですが、私達はそれを実行しようと思っているの
です」

「なにを……何をやる気なんや？」

声に怯えが宿りながらもはやてはそれを聞かなくてはいけなかった。
彼女もまた守護騎士の主であるがゆえに。

「コウキちゃんにはもう時間がない。
けどそれは取れる選択肢をコウキちゃん自身が狭めているせいも
ある」

「狭めている原因は、主が斬り捨てる誰かを選べないから。

なら、それを私達自身が選んでしまおうと思つのです」

取捨選択の実行は彼だけが出来るが選択自体は別の人でも出来る。そうなればあとは単純な優先度の話となる。

コウキ自身が受け入れるかどうかはこのさい別の問題だ。

「当然、コウキは絶対助けなきゃダメだ。それは絶対」

「はやてちゃんも同じです」

ふたりの主。それだけは絶対に助けなくてはいけない。

騎士たちが絶対に譲れない一線は正直なところそれだけだった。

「当然、残るのは私達と管制人格のあの子だけ」

「コウキは彼女を独りにして見捨てることはできない。

だがもし、彼女が独りではなくなったのなら？」

ザフィーラの少しもつたいぶつた言い方に全員が息を呑む。

この場にいるのは歳も経験も才能も皆違つが、等しく聡い者ばかり。

「っ、まさか、みんな一緒に行く気!？」

「はい、元々私達は闇の書の守護騎士です。一緒に行くのがスジでしょう」

「あいつを独りぼっちにはできねえしな」

仕方ねえけどな、などと軽く言っているがそれはコウキたちとの別れを意味する。

転生は行き先を選べないが基本的に別の次元世界、それも遠く離れ

た世界へとなる。

元が資料本だった時の名残か。一度行った世界には行かないようになっっているため

局員になれば話は別だが、この世界で暮らすならもう二度と会うことは出来ない。

「最初は俺だけが闇の書と行こうと思っていたのだが……」

「水臭いこというなよ、あたしらがどれだけ一緒だったと思っただ」

当初、彼は彼なりに女性陣の想いを慮ってそう考えていたのだが、彼女達からは総じて、一蹴という扱いを受けていた。

「それに、もうそんな細かい切断ができる状態でもないしね」

「どういこと?」

だがそれは仲間意識だけではなく、現実的ではないという側面もあった。

「これは主が寝てる時に管制人格と話をして知ったことなんだが、衰弱が激しい今の状態では切り離せるのは二組が限界だそうだ」

それ以上は無理であり、守護騎士の中の誰かだけというのも不可能。騎士たちにとってその二組はコウキとはやて以外にありえないのだ。

「シグナム、あなたはそれで……」

「いいのか、なんて聞かないでくれテストロッサ。」

出来ることならこれからも主たちやお前達と共にありたい。

だが、それ以上に我らは主コウキに生きていてほしい」

「それが一番だ。一番が叶うなら後はまあいいかって気分にはなれる」

「俺達が決めたことなら、少しはあの男の罪悪感も薄まるかもしれないな」

「まあ、素直に首を縦に振ってくれるような人じゃないですけどね」
「それだけが難点だ。と騎士たちはまたも困ったように苦笑した。
一方それを知らされた少女達は困惑しつつもある少女の反応を待った。」

彼女が何かしら動かなければ自分達意思表示はできない。

「トラヴィック、コウ兄はこれ受け入れると思う？」

「微妙なところだ。選択肢がひとつ増えるだけかもしれない。」

もし説得をするのならそれが自分達の願いである点を強調すべきだ」

あえて、少女は自らの首にかかっているデバイスに問いかけた。
基礎人格を同じくする彼の推察はおそらく間違っていないだろう。

「だが、はやて嬢。君が本当に言いたいことは別にあるのではないか？」

「っ、なんや。トラヴィックはそういうとこコウ兄に似てるなあ」
「甚だ不服だが、製作者と製作物だ。親子のようなものだと思えば仕方がないことだ」

彼独特の言い回しにくすりと笑って、はやてはその視線を騎士達に向けた。

青空のようなきれいな青の瞳がまっすぐに。

「あたしはみんなを失いたくない。

それは本当や。やけど……はは、だめやな。

うちの一番もコウ兄が生きてくれることなんや」

けれどその真っ直ぐさも、キレイさもすぐに消えてしまった。

瞳は潤み、騎士達を直視できなくなる。視界がぼやけてはやては顔を伏せた。

「ひどい、ひどい主や。それで助かるなら、それでいいと思うとるあたしがおる！

ほんまに最低や、ずっと一緒におったのに、楽しかったのに、嬉しかったのに！

あたしは何にもできへんかったのに、みんな無くしてでもコウ兄助けたいなんて……！」

「はやて

「はやてちゃん」

自らの奥底にある思いをさらけだしながらも自らをなじる。

彼女達守護騎士と共に過ごした日々は間違いない少女の宝物だ。

けれど少女にとってコウキは宝箱そのものなのだ。

それを失ってはもう少女は宝を持つことさえできない。

「泣かないでくださいはやてちゃん」

「う、ううっ、シャマル……」

泣きはらした顔をシャマルが優しくハンカチで拭く。

「そうだよ、それはあたしらみんなの願いなんだから」

その横でヴィータが満面の笑みで少女に笑いかける。
今まで見た中で一番明るい太陽のような笑みで。

「ぐすつ、ヴィータちゃん！」

「うわっ、な、なんでお前が泣くんだなの！」

ついに我慢しきれなくなったのは泣きながら彼女に抱きついた。
そしてはやてもまた手を伸ばして泣きながらシャマルを力いっぱい抱きしめた。

「テストロッサ、主たちを頼む」

「シグナム……………はい」

視線をあわせて短く語り合うシグナムとフェイト。
いくえにも刃を交えたふたりだからこその意思疎通だった。

「お前達は俺達の厄介事に巻き込んでしまって申し訳ないが、
これからも出来ればあの男厄介事を支えてやってほしい。

知つてのとおり、無茶ばかりする奴だからな」

「ザフィーラさん……………はい、頑張ります」

「ふん、そんなの頼まれるまでもないわよ！」

手を握り締めて決意をあらわすかずかと、

泣きそうなのを誤魔化すようにそっぽを向くアリサ。

「まったく……………みんな聞き分けが良すぎるわよ。」

「ここで私が駄々をこねたら、格好悪すぎるじゃない……」

ひとりプレシアは涙をためた瞳のまま嗚咽を抑えるように口許を手で覆った。

家族みんなを助けたかった彼女からすればその決断は納得できるものではない。

しかしもはやそうせざるを得ないこともまた解ってしまった。

「こういう時ほんと、大人って損よ」

だから決して涙はこぼさずにしっかりと彼女達を見詰めた。

「すまないプレシア」

「けど、その大人のあなたがいるから任せられるわ」

「この家に初めて来た時とはもう雲泥の差だもんな」

「……頼む」

それぞれ“らしい”言葉にプレシアは頷きだけで答える。

もうそれだけですべて済ませてしまっただけに彼女達は家族になっていた。

「あの、それじゃ……最後の思い出っていうと変ですけど、

みんなでお料理して、みんなでごはん食べませんか？」

すずかはそれが一番この家族らしいと思った。

彼女がよく通って、見続けていた日野家はそういう家族だった。

「すずか、ナイスアイデア！」

「うん、そうしよう！」

「久し振りにはやてのメシも食いてえし！」

少女達は演技か空元気か。

判断のつかない明るさを振りまきながら頷く。

「そうとなればこの私も腕ふるいますよ！」

それにいの一番に乗ったのは、残念ながらシャルだった。

「「「えええええっ!?!?!?!」」」

「う、うそ!? まさかのブーイング!?」

「あはは、ほら行きましようシャル。まずはお買い物です」

シヨックで落ち込む彼女を励ましながら連れ出そうとするプレシア。
その顔は苦笑、に近かったがおそらくこの場で一番笑っていた。
その時だけは彼女もまたどこか「帰ってきた」と思えていた。
もっとも。

『み、みんなああっ!?!?!?!』

「きゃあっ!」

「う、うわあっ!?!?!」

「え、エイミーさん!?!?!」

本当に、その瞬間だけの話であったが。

なにせ突如、叫び声と共にリビングで空間モニターが開いたのだ。
程度の差はあれど皆が皆が驚きで固まって、困惑の顔を浮かべる。

しかしモニターの中の女性は今にも泣き出しそうな顔で珍しく狼狽していた。

『た、大変なのっ！ 映像が偽物で、センサーが反応しなくて！ クロノくんにも頼まれてたのにつ、他に誰もいなくて、わ、私いつたいどうしたら!?!』

表情もそうだが伝えようとしていることも要領を得ない。

いつもの彼女らしくない激しい動揺っぷりになのはたちも困惑を増すばかり。

「お、落ち着いてエイミー。それじゃ何が起こったのかわからないよ」

フェイトに指摘され、ハツとなった彼女は何回か深呼吸をして息を整えるが、

表情は変わらず泣き出す一歩手前のそのまま。

しかし起こった事態を簡潔に表す一言をなんとか搾り出した。

『コウキくんがいなくなっちゃったっ!?!!』

絶望を告げる言葉に誰もが声をあげることさえ出来なかった。

いた

そして事件は誰も予想していなかった展開を迎えようとして

宝石と闇の始まり（前書き）

すみません、今回あんまり話、進みませんが、
でも必要な話だと思っている。

宝石と闇の始まり

12月23日 PM02:38

管理局本局 提督職務室

その部屋はいま重い沈黙に包まれていた。

この部屋の主であり老練な提督と若き執務官が向かい合っていた。

本来、彼らは旧知の間柄で執務官からすれば局員としてのあり方を教わった師。

提督からすれば息子のようにも思っていた男の息子であり使い魔を通してだが弟子。

であって、こんな重苦しい空気を作り上げながら無言で相對する関係ではない。

「……………」
「……………」

ふたりは共に沈黙している。まるで相手が喋りだすのを待つかのよ

うに。

実際はそんなものではなく彼らの間には無言の応酬がある。

そしてそれに最初に音をあげたのは意外にも老練な提督の方だった。

「クロノ、なにか用かね」

溜息混じりの問いかけはふたりからすれば意味のないものだが、会話の始まりとしてはまあまあ及第点ではあった。

「自首してください」

それに対しクロノのそれは簡潔過ぎた。だが同時に切り札も出していた。

彼が手にして見せたものにグラムは溜息を吐いた。観念したように。

「やはり、そこから足がついたか」

「はい、あなたからコウキたちへ、そしてコウキたちからあなたへの手紙。」

名前も出身世界の住所も偽らずに使って、当たり前のように局の郵便システムを

使ってたんで調べるのは本当に楽でした」

クロノが持っているのはグラムに宛てられたコウキからの手紙だ。書かれている名前はもちろんのこと住所までもすべて本物。

地球出身である彼が何年も前に両親から相続した生家の住所が。

どちらからの手紙も一度そこに送られ、それぞれの所へ行くようになっっていた。

「どのみち、隠されるつもりはなかったのですね提督」

問いかける形だが確信を持ってクロノは聞いていた。

彼が師と仰ぐこの提督がそんなミスをやらかすとは思えないのだ。故意を除けば。

「彼らには嘘をつき続け、最後には裏切ることになるのは決まっていた。

ならせめて名前ぐらいは本当にしておきたかった。ただの自己満足だよ」

そして終わった後なら、グレアムは罰を受ける心積りであった。だからこそあまり自分という存在を隠そうとしていなかったのだ。下手に隠蔽しすぎて自首後に証拠不十分で釈放では笑い話にもならない。

「……目的は闇の書の永久封印と、父さんの敵討ちですか？」

そう自嘲するグレアムに、クロノの視線と声はどこか冷ややかだ。

「前者はその通りだ。主との融合後なら封印は可能だ。

後者についてはリーゼたちにはその気持ちが強いようだ……私も無いとはいえない。

無論、クライドくんがそんなことを望んでいないことは分かっているが」

11年前のあの時トリガーを引いた彼には自分がクライドを殺したという意識が強い。

だからその使い魔たちほど闇の書を恨む気持ち弱かった。

けれど、それでも「闇の書さえなければ」という感情がないわけ

はない。
そうだったからこそ違法な手段を使っても計画を押し進めてきたのだから。

「……永久封印が可能だと、本当に思っていますか？」

その決意と贖罪の意思が見え隠れする提督の顔を見据えながら、クロノはそれそのものを断ずるように老提督に問う。

「すでに凍結封印に特化したデバイスと封印後に運び込む世界も決まっている。

あの永久凍土と超重力の世界ならば……」

「無理ですよ、どんな所に隠しても力を求める者たちは必ずそれを見つけ出す」

けれど、もはや聞いてられないと呆れたように最後まで言わせなかった。

一時的に封印出来ても半永久的など不可能だと強い確信がクロノにはあった。

「あなたは誰よりもそれが分かっているのではないですか？」

「……どういう意味だね」

さすがに意図が読めずに困惑顔のグラムに数枚の写真が差し出された。

そしてクロノは同時に彼らのもうひとつの罪を突きつける。

「ジュエルシード事件。あれもあなたたちが起こした事件だ」

「つつ！？」

「これはジュエルシード運搬中に事故にあった船の監視カメラの映像です。」

ここに小さくですがアリアの後ろ姿が写っています、他にも全身ではありませんが

彼女たちではないかと思われる映像が僅かですが残っていました」

クロノが指し示すのはどれもが写真の中では小さく、解像度も低い。彼ほど彼女たちと親しくなければ、あらかじめ疑って見なければ、気付くこともなかったであろう小さな小さな痕跡。

それをグレアムは否定も肯定もせずにとだ黙って眺めていた。

「……………」

「当時アンチシステムでコウキが侵食を抑え込んだのは完璧に予想外だったはず。」

そんなことが出来た主は過去にひとりもいません。例え時間制限付きでも」

最終的に融合・暴走するにしてもそれは自分達の手でなければならぬ。

そうでなければ完全なタイミングでの凍結封印ができない。

しかし外部からの検査ではその時期の予測がグレアムらはできなかった。

「それで計画の進行が遅れる事を危惧したあなた達は

コウキが魔力を使わなくてはいけない状況を作り出すことを思いついた。

ちようどいい位置を航行中の船に積んであったロストロギアを利

用して」

それがユーノが見つけたジュエルシールドだった。

あれは事故で管理外世界の海鳴に散らばったのではない。

グレアムたちが故意に海鳴市にバラまいて、彼の前で暴走させようと目論んだ。

そうなればコウキは積極的に封印に動きだす。自らの命である魔力を消費して。

彼の人格をある程度知っていれば誰でも予想できること。

「それはうまくいくはずだった。いや実際うまくいったんでしよう。あいつはあの事件で少なからず魔力を消耗することになったのだから。」

予想外だったのは発掘者が責任を感じて現地に入ったことと、プレシア・テストロツサという完全な第三者の介入」

危険なロストロギアの輸送にはかなりの情報規制が入る。

局員ですらそれを把握するのはひじょうに困難だが、広い人脈と独自の情報網を持っていたグレアムらと

アルハザードへの道を模索していたプレシアに気付かれてしまった。共に理由は違えど、「その力を求める者」として。

「事件は、皮肉にもコウキがいたから結果的に良い形で終わりました。ただと提督たちの行いが余計な事件を起こし悲劇を呼び込みかけたのも事実です」

終わってみれば死者はゼロ。次元世界にも被害はなかった。

最悪な関係だったフェイトたちとプレシアは今では友人だ。

しかし、それは所詮結果論でしかない。

現地人にもっと大きな被害が出ていたかもしれない。
次元震で多くの世界が崩壊していたかもしれない。

「提督、あなたたちは自分で証明してしまっただんです。
どう隠そうとも誰かが必ず見つけ出していつか悲しい事件を引き
起こすと！」

「……………だが、少なくとも封印されている間は闇の書事件は起
かない。」

その悲劇に巻き込まれる人は減るはずだ。今までよりずっと」

クロノの言い分を内心では認めつつもその成果はあるはずだと。

老提督は考えていた。そうならば彼の犠牲と自分の行いには意味が
ある、と。

しかしそんな彼の生徒であったクロノはそれを否定する。

「そのために……………いまを生きてる誰かを殺すなら、それはただの罪
だ。」

提督、それにあなた達はコウキ以外の犠牲も容認していた。

そんなあなた達に未来の犠牲のためだなんて言葉を使う資格はあ
りません」

言葉はどこまでも静かに、しかし確かな怒りと拒絶がある。

口調こそ丁寧だが彼は最初から自らの師ではなく犯罪者として彼を
見ていた。

「……………さすがだよ、クロノ。まったく反論の余地がない。」

君はとつくに、あの事件から抜け出せていたんだな」

溜息と共に完全に肩から力を抜いた老提督はその成長に素直に感嘆

する。

彼とて自覚はあったのだ。11年前の事件をずっと引きずっていることを。

けれどクロノは左右に首を振って、ここに来て初めて表情をゆがめた。

「……法を守ることの意味。局員であることの意味と難しさ。

どんな時にも冷静さを友としろ。そんな事を教えてくれたのは提督でしょう」

なのはどうして。

言葉にならない声が聞こえた気がしてグレアムはたまらず天井を見上げた。

「そう、だったな」

思い返すのは彼を鍛えていた日々。

負い目があったからか。期待があったからか。

クロノにグレアムは自分のすべてを教え込んだ自負がある。

なら、この結末は何も不思議なことではない。ある意味、必然だ。

「お願いです提督、もうやめましょう。すべてを彼らに委ねてください」

もはや外部の人間にはそれしかできない。してはいけない。

騎士たちの覚悟を聞いていたクロノはそれを信じていた。しかし。

「すまないクロノ……もう、手遅れだ」
「なっ!?!」

手遅れ。

その発言にクロノはここにリーゼたちがいないことの意味を悟ってしまう。

彼が調べた時には教導隊に一時的に出向するとなっていたので安心してきっていた。

だが、実際はそうでなかったとしたら？

「くっ、エイミィ聞こえるか！ 何が起こってる!?!」

調査に専念するため絶っていた念話の回線を慌てて開いた。

聞こえてきたのは、心が引き裂かれるような悲しい慟哭だけだった

12月23日 PM01:50

次元の海 アースラ 食堂

彼女達の表情は皆、程度の差はあれど暗く沈んでいた。

そして各々がそれぞれの方法で悔しさや苛立ち、焦燥感を誤魔化している。

落ち着かずに歩き回る者。 落ち着こうと瞑想している者。

紛らわそうと馬鹿食いしている者。 水でさえ喉を通らず祈る者。

“ある” 場所へ向かう艦船アースラの中で、彼女達は気ばかりが焦っていた。

エイミーが異変を察知したのはクロノが病室を飛び出してからおよそ一時間後。

モニターに映る彼の映像に違和感を覚えたことから始まった。

何がおかしいのかと聞かれればエイミーは答えに困るのだが、

この数日その病室での彼を見続けたゆえに感じてしまった違和感。

僅かな所作が、違う。 気付いた瞬間からの彼女の動きは速かった。

各種センサーや映像の検査をしつつスタッフの何名かを病室に向かわせる。

そして彼が病室からいなくなっていたことが判明した。

コウキ自身は自力ではあの部屋から出ることもままならない状態だ。

そのうえ偽の映像を流しセンサー類を騙すとなると尚更。

結論として誰かにさらわれたのだと解るのに時間はかからなかった。

エイミーは留守を任されていた責任から必死に捜したが

アースラからの魔力供給のラインは強引に切断されており、

病室に無かったことから一緒だと思われるリニスとは連絡がつかない。

い。

犯人に心当たりはあったがセンサーに不気味なくらい痕跡がない。これではいかに優秀な彼女でも犯人を追跡するどころの話ではない。

八方塞りな状況にリンディですらどうしたらいいか名案が浮かばない中。

アースラに直接“犯人”から映像通信が入ってきた。

モニターに出た予想通りの仮面の二人組と縛られ捕まっているコウキの姿。

だが、誰もが想定していなかった物が仮面たちの手にあった。

『見ての通り、日野コウキと“闇の書”は預かった。

取り返したければ今から送る座標地点の世界に來い。

ただし、こちらが用のあるのは守護騎士の4人だけだ。

そいつらだけを寄越せ……といってもどうせ他にもついてくるのだろう。

こちらが指示した世界で我らが張った結界の外までなら見送りは認める。

だが、騎士以外が入った場合は………いうまでもないだろう？』

一方的な通信の、一方的な要求。だが、それに従わないわけにはいかなかった。

連絡がつかないクロノと無限書庫で調べ物をしているアルフとユーノを除き、

アリサやすずかまでを含めた全員をアースラに乗せて、即座にその世界に向かった。

民間人のふたりまで乗せたのは再び襲われる可能性を考慮しての保護。

本局から人とロストロギアを誰にも気付かれず持ち出されたのだ。

彼女たちだけを残していくのはあまりにも危険すぎた。

「そろそろ指定された世界に付くわ……」

「……リンディさん」

彼女の声を聞いて初めてその存在に気付いた事に彼女達は気付いた。そして何かを振り切るように頭を振る。彼女は気配を消していた訳ではない。

接近を感じできなくなるほど自分達が冷静ではないのだと。

そんな状態では助けられる相手も助けられない。

「これを……あなたたちのデバイスよ。整備の方はきちんとしてあるわ」

焦りや苛立ちを今は振りほどいた表情に頷いて、彼女はそれを差し出す。

騎士達から一応の名目のために取り上げていたそれぞれの愛機だ。

「……申し訳ない」

「あんがとな」

「助かります」

礼と共に受け取った騎士達に最初は励ますように笑みを浮かべたりンディだが、

即座にそれを指揮官としての顔に変えた。状況はあまり良くはない。

「彼らは主と書を奪った上であなたたちを指名してきた。ということは……」

「十中八九、畏、でしょう」

「あたしらが目的つてのがいまいちよくわからねえが……」

「けど相手は今までずっとコウキちゃんを目の敵にしてきた連中。要求に従わなければ、どんな目にあわされるか……」

その気掛かりがあるために従わざるを得ない。

既に数度、戦いの場で仮面たちはコウキの命を狙ってきた。

自らの思惑や計画を無視してでも、だ。そんな相手に捕らわれている。

従わないという選択肢はないのだ。少なくとも今は。

「あの、リンディさん。

やっぱり私たちの魔力をヴィータちゃん達に渡した方が！」

騎士達を誘う罠。分かっているでもそこに飛び込まなくてはいけない。ならばせめて彼女たちを万全の状態にした方がいいとなのは思った。

あの極度の魔力消費から一週間弱。彼女達の魔力は5割程度までしか回復していない。

不安から満足な休息をとれていないのも一因ではあるが主だった原因は

あれからも続いていた魔力供給。彼女たちがずっとコウキのそばを離れなかったのは

離れたくないという感情的な理由もあつたが生成された魔力を常に送っていたから。

微量ではあつたがアースラからでは僅かに足りない部分をなんとか補っていた。

「それはだめよ、なのはさん。

何があるか解らない以上、力を一箇所に集めるのは危険すぎる。

幸い、結界の外までなら近づくことは許されている」

それがどうにも腑に落ちない。と感じているリンディだが、少女たちに対してはその点を伏せて、諭すように言葉をかけた。

「なのはさんたちには外で騎士のみなさんのバックアップをお願いするわ」

「……………そう、ですか……………」

提案が受け入れられずどこか気落ちするなのはに少女たちが寄り添い、そしてヴィータが背中を向けたまま強気に語りかけた。

「心配すんな、絶対にコウキは助けてくる。お前は外で待つてればいいー!」

「ヴィータちゃん……………うん、わたし待つてる」

乱暴な口調だが優しい気遣いに笑顔で頷いたなのは。ヴィータはどこか照れくさそうに頬をかいていた。そんな様子に微笑んで、リンディが出発を促した。

「それじゃ、行きましょうか」

「みんな気を付けてな」

「無茶しちゃだめだよ!」

「あんな奴らに負けたら承知しないわよ!」

見送り、心配、励まし。

そういった言葉を受けて、騎士達は先んじてその世界に降り立った。

慟哭の空に雲は散って（前書き）

……途中で切れないので、長くなりました。それだけです。

慟哭の空に雲は散って

12月23日 PM02:19

無人世界 上空 アースラ

指定された世界はいつかの戦場とどこか似ている遺跡群のある世界。文化水準が高い世界だったのか古びた遺跡というよりは廃墟となつた街に近い。

そのおよそ中心地と思われる範囲を覆つて結界が貼られている。見つけてくれといわんばかりの大規模なそれはしかし、その範囲に比べれば

結界としてはあまりにお粗末な機能しか持つていなかった。

それをエイミイは端末を操作しながら不気味と評した。

「かえつて気味が悪いですね。侵入者感知だけの結界、なんて」

「このタイプは特定の相手以外が入ると術者に反応が返る。」

間違いなく守護騎士以外が入るとバテしてしまうわね」

そうして集めたデータを見てプレシアは即座にその特性を見抜く。彼女も心情としては現場に行きたかったが、機動力という点とアースラの戦力を完全に空っぽにしてしまつわけにはいかずに残っていた。

「けれどもなぜか念話や覗き見はやり放題。転移はさすがに阻害されてるみたいけど、

近くに私たちが来ることを認めたことといい、何か別の思惑があるわね」

モニターを凝視しながら腕を組んで推測を立ててみるが、うまくいかない。

仮面たちに対する情報が足りなく推測しようにもできないのだ。

調査をクロノだけに一任し、リンディが業務から離れていたのがここにきて嫌な形で裏目に出てしまっていた。

「あ、シグナムたちが結界に入りました。

フェイトちゃんたちを侵入地点で待機させます」

「お願い、三人にはいつでも突入できる準備だけはさせておいて」

「了解です、ん？」

言ったのと同時に彼女はクルー以外がブリッジに入った事に気付く。

「アリサちゃんたち、ダメだよ。一応いまは任務中だから部屋に…

…」

「お願いです、ここにいさせてください！」

「お仕事の邪魔はしません。おとなしくしてますから！」

真摯で強い意思を秘めた瞳で見詰められ、エイミィは言葉に詰まった。

そして判断を仰ぐように艦長席にいるリンディに視線を送る。

プレシアも窺うような視線を向けている。気持ちとしては少女達の想いは解る。

けれど大人として、せめて一番安全な居住ブロックにいてほしい気

持ちもあった。

だから口出しせずに艦長である彼女の判断に委ねていた。

「……………ダメ、といっても聞きそうにないわね、許可します。

けれど本当に危ない時は無理矢理でも退出させます。いいですね

？」

「はい」

しっかりと返事をしたふたりは寄り添いながら不安な顔でモニターを見詰めた。

結界の外でデバイスを構えて待つなのはたちと結界内を飛ぶ騎士たち。

様々な場所を映したそのなかで、ふたりの視線を釘付けにしていたのは

柱のような物に縛り付けられている一人の少年だった。

12月23日 PM02:22

無人世界 結界内 廃墟郡上空

内部をサーチしたアースラからの連絡でまっすぐにコウキの所へ飛ぶ騎士たち。

その服装は蒐集をしていた頃の、主から普段着や騎士服をもらう前に来ていた黒い服。

髪の色こそ地毛の色に戻したが彼女達は既にあの甲冑を着る資格はないと思っている。

例えそれが今のように主を助けるための行動中であっても。

そうして数分でたどり着いた空域の眼下にはおよそ三十階近い高さのビル。

廃墟の原型が残っている中でもとくにしっかりと作っていた作りのそれ。

その屋上で何かの名残の柱に縛り付けられた主とそれを挟むように立つ二人の仮面。

ある程度まで近づくとひとりが手を上げて、そこで止まれと示され、止まる。

屋上にたつ彼らと空中で静止した騎士たちの距離は直線で50メートル前後。

声を張り上げれば会話には問題はないが、一瞬で距離をつめるには少々遠い。

(エイミィ、彼らまた幻術じゃないでしょうね?)

(大丈夫、あの時のデータはちゃんと解析したから。)

あの仮面もコウキくんも間違いなく本物だよ)

前回はそれで意表をつかれただけにその確認をして全員が改めて彼らを見据える。

仮面たちは一人が前に出て立ち、もう一人が縛られているコウキのそばに立っている。

人質ということなのだろう。コウキ自身は意識があるようで不安げな目で騎士達を見ていた。

何度か口を開きかけるが、声が出ないことに気付いてそのまま口を紡いだ。

「コウキ！」

おい、言つとおりに来てやったぞ。早くコウキを返せ！」

「いいだろう」

「……は？」

思つてもいなかった即答に全員はもちろん。

啖呵を切つたヴィータがいちばん困惑していた。

誰もがここで何らかの要求があるものだと思つていた。

「なに企んでやがる？」

「さてな、そうだとしても返してやるといふんだ。いらないのか？」

「んなわけあるか！」

おちよくるような言葉に焦点が一番低い彼女は簡単に頭に血がのぼつてしまう。

シヤマルがそれをなだめる裏で仮面は彼を縛っていたロープを解いた。

だが下半身の感覚を失っているために立つ事もできずに座り込むように倒れてしまう。

「主！」

思わず駆け寄ろうとした騎士達に再度仮面は手を上げてその動きを止めた。

まだ仮面らの方がはるかにコウキに近く、苦々しく思いながらも静止する。

「もちろん、無条件ではない。闇の書を返す気はない」

「それにこいつを返した途端、報復されたくはないのね。」

「こちらも逃げる算段くらいはつけさせてもらおう」

そういつて一人がコウキの首根っこを掴むように持ち上げる。

彼は苦悶の表情を浮かべるが、騎士達は動くことができない。

まだコウキの命運が仮面らの手の上。不用意な行動はできなかった。

「くっ、ならばそこに主を置いてとっと逃げればいいたろうっ！」

「外にはあの魔導師たちと管理局。いま逃げ出すのは得策ではない」

「だから」

仮面が彼を掴んでいる腕を　　振りかぶる。

「なっ、やめろ！」

「ちゃんと受け止めるよ？」

そのまま腕を振り下ろし、まるでボールか何かのように人体を放り投げた。

高さから超高層建築物といってもいい建物の屋上から、その下に向けて。

「あ、主っ！！」

「ち、くしょっ！！」

四人全員が即座に空を蹴っていた。

魔法が使えない彼がこの高さから落ちれば命はない。

騎士達は全力で空を翔けた。しかし、コウキの落下速度と距離が悪かった。

明らかに魔法の力が加わった過度の加速で落下していたのだ。

「くそつ、アイゼン！」

『Raketenform.』

それに勘付いたヴィータは自らの愛機に命じる。

グラーファイゼンの強襲形態。ラケーテンフォルムへ。

ハンマーヘッドの片方が推進剤噴射口に、その反対側がスパイクに変形する。

そしてその加速を攻撃ではなく、ただ直進のためだけに使ってヴィータは

落ちていくコウキに追いつき、追い抜き、落ちる彼の前に入り込む。だが。

「っ、まずー！」

ラケーテンはその加速力ゆえに両手で握らねばならない。

それで何とか追いついたヴィータだが彼を受け止めることができなかった。

腕力の問題ではない。小さき身体でも騎士。本来なら造作もない事。しかし体格差と両手が塞がっていた状態ゆえに受け止めきれず、互いの体がつれ、共に落ちかけてしまう。

「レヴァンティン！」

『Schlangerform.』

それを見たシグナムは連結刃を伸ばして落ちかけた二人に巻きつけ、吊る。

落下速度にゆえに重い衝撃が剣を握む手に襲うが、痛みを無視して両手で支えた。

刃は抜き身だったが彼女からすれば長年の相棒であるレヴァンティン。

対象を傷つけずに巻きつける程度造作も無い。

「っ、あ、危なかった」

吊ってシグナムが受け止めた事で勢いが完全に死んでヴィータはホッと息を吐く。

彼を抱えて自らの飛行魔法で浮きながら下を見れば地面まであと10mもない。

ヴィータとシグナムの機転がなければ間に合わなかっただろう。ゾツとしない距離に身震いしつつも連結刃が解けていく。

「ふたりともケガしてない!？」

「よくやったヴィータ」

連結刃で支えた形になったシグナムを残しシャマルとザフィーラが心配と賞賛の声をそれぞれかけながら近寄ってくる。

「ああ……大丈夫かコウキ」

緩まったことで余裕が出来た彼女は腕の中にいる彼の顔を覗く。間近にある少し安心したような顔にヴィータも胸をなでおろす。

「っ……………!!」

それが、致命的なまでの油断になってしまった。声を発せられない彼が気付いた時にはもう目前で、

その言葉を唇の動きで彼女が理解した時には手遅れだった。

「っ、なっ………んで？」

「ヴィータちゃん!？」

背中から胸に突き抜けたような衝撃。

同時に体中のすべてをなにかに奪われるかのような脱力感。

何が起こったのか理解できずに、ただ呆然と自らを貫く腕を見下ろす。

それでも彼を抱える手を離さなかったのは彼女が他ならぬ“騎士”
だったからだ。

「……………!!!!」

その細い腕に掴まれた彼が目の前の光景に声無き叫びをあげる。

貫いた腕の手の平では輝く光がひとつ。その色はヴィータの魔力光と同じ。

それを放つ光の塊は紛れもなく彼女のリンカーコアだった。

「ぐうっっ!!!!??」

「シグナム!？」

その意味を騎士たちが理解するより早く、彼女の苦痛を訴える声が響く。

シヤマルたちが見上げた先ではレヴァンティンを戻すことさえできないまま、

背後に立った仮面に胸を貫かれリンカーコアを露出された彼女の姿があった。

「て、てめえら!」

「隙だらけだったな」

「主が大事すぎるのも考えものだな」

「そ……そうか、これが狙いで！」

露出し蒐集される自らのリンカーコア。

その対象が自分達になることの意味を彼女達は瞬間“思い出す”。騎士たちの与り知らぬ事ではあったが彼女らの記憶には転生するごとに

闇の書にとって都合の悪い物や覚えていると傷つくだけの記憶を封印して思い出させなくするシステムが存在していた。

「そうだ、過去にはこうして完成させたこともあっただろう？」

それは残りのページを早急に埋めるために主が騎士たちを犠牲にした記憶。

特殊なプログラムによる魔法生命体である彼女達にとって、リンカーコアを蒐集されることは他の魔導師たちとまるで意味が違う。

文字通りそれはコアであり蒐集され機能が低下すれば実体を維持できない。

だが優れた騎士たちでもあるために多くのページを埋められる。

その巨大な力さえ得てしまえば騎士たちなど不要と考える主は多かった。

そんな事を覚えていると次の主に従うには都合が悪く、苦しみにしかならない。

だから類似した体験をするまで彼女達は思い出せなかった。

「ぐっ、ああ……おりゃああっ！！」

突然思い出してしまった数々の主からの裏切りの記憶。

シヤマルたちがそれに僅かに呆然としていた間に、

彼女は抱えていた少年をザフィーラ目掛けて放り投げた。

「ぬ、ヴィータなにを!？」

「……………!?!」

投げられた少年と受け取って我に返った彼がそれぞれ彼女に向けて叫んだ。

その先では気味が悪いほどに晴れ晴れとした笑顔があつて、ふたりは息を呑んだ。

「こんなことになつちまつたけど……………すっげえ楽しかったよ、ありがとなコウキ」

「つつ……………!?!」

感謝の言葉に、背筋が凍りつく。

自分の声が出ないことすら忘れて彼は叫ぶ。それはしかし言葉にならない。

彼女はそれに苦笑しながら自らを貫く腕を掴んで残りの手でデバイスをかかげる。

「あとは任せた!」

『Panzerhinderinis』

カートリッジの魔力を使い、多面体の障壁で自らを包み込む。仮面ごと。

「お前も付き合ってもらおう!」

「貴様!?!」

それとほぼ同時にシグナムもまた連結刃で仮面ごと自らに巻きつけていた。
縛られた格好になった仮面は反射的にもがくがその締め付けは強くびくともしない。

「……………!?!」

「主……我らは幸せ者です。こんなにも暖かい気持ちを思い出せた。あなたたちが主で、本当によかった……………」

戸惑いと驚きが混ざった見上げる視線にシグナムはあまりにも場の状況にそぐわない穏やかな微笑みを向けた。

「シャマル、ザフィーラ!!」

「……!!」

そして“残った”同胞の名を呼んだ。

それだけで、ふたりにはそれぞれの覚悟が解ってしまった。だからわき目も降らずにシャマルたちは彼を連れて、その場から離脱する。

「……!!」

ザフィーラの腕に抱えられながら、その身体を何度も叩く。出ない声の代わりに必死でコウキは訴えていた。「戻れ」と。それでも徐々に彼女達の姿は小さくなっていき届くわけもない手ががむしゃらに伸ばす。

「さあ覚悟しろよ?」「燃やし尽くしてやるっ!」

その手の先でふたりは背後の仮面に対して不敵な笑みを浮かべた。ヴィータの周囲には小さな鉄球が山ほど生み出され、シグナムは自らをも燃やし尽くさんと身体に炎を宿す。片や障壁の内側。片や縛られ密着した状態。

「ぐあああつー!!」

「なっ、がっ、ぐうっ!!」

そんな状態で鉄球を無造作に弾けば障壁内で跳ね返り誰彼構わず襲う。

そんな状態で炎が走れば、密着した相手に燃え移るのは必然。

「くう、おのれ、たかがプログラム風情が!!」

「そうさ! 我らは所詮作り物!

だがこの身に宿った主への想いの炎、作り物かたとくど味わえ!!」

「きさま、制御もなにも!?!」

「当たり前だ。なのはじゃあるまいしこんな数操れるか!

ほら我慢比べといこうじゃないか……こんなの痛いうちに入らねえがな!!」

自らすら燃やす炎。

自らにすら直撃する鉄球。

彼女達の目的はただひとつ。

少しでも長くこいつらを足止めし、

少しでも多くダメージを与えること。

だってもう自分達の手足ですら存在が希薄になっていた。

「騎士を、舐めるなあっ！！！」

それでも。

そんなことなど知ったことかと。

彼女達はその誇りを叫び、魔力を爆発させた。

「っ！ ヴィータちゃん、シグナム！」

その衝撃が、いくつかのビル群の向こうから届いてシャマルは歯を食いしばった。

ふたりからは覚悟を受け取った。なにより主を託された。

騎士としてそこで立ち止まるわけにはいかない。

『シャマルさん、フェイトさんたちをもう突入させたわ。急いで合流して！』

「わかってます。こっちもすぐそっちに！」

『あ、だめ、後ろから来てる！ 気をつけて！』

エイミイの言葉に背後を見れば、かなりの後方ではあったが、こちらに追いつがる仮面たちの姿が見て取れた。当然、シグナムたちの姿は無い。

「っっっ……………！！！！！」

その意味を察して、彼は何かを堪えるように目を伏せた。

「まずい、速度はあちらが上だ。俺がしんがりを、がつ、なっ!?!」
「痛っ!?!」

仮面らから逃れるように真っ直ぐに飛んでいた彼らに何かと衝突したかのような衝撃が襲い、僅かにその足が止まる。

「魔力障壁だと? つ、しまった。バインド!?!」
「うそつ、この距離で!?!」

シャマルはそれを疑いながらも周囲の気配を探る。

未だにはるか後方にいる仮面が自分達の進路を塞ぐように障壁を張り、それで止まった隙にバインドをかけるのは至難の技だ。それより第三の仲間がいると思ったほうが現実的だった。しかし。

「くそつ、どうやら思っていた以上に優れた魔導師だったようだ」
「こんなことならやっぱり蒐集しとけばよかった!」

ザフィーラですらそれを感知できないのなら、やはりそれは彼らの仕業。

通常ならありえない距離での魔力障壁展開と長距離バインド。それを決められたふたりは身動きがとれなくなってしまう。仮面たちはその隙にどんどんと距離を詰めており、アースラから教えられたフェイトたちの位置とはまだ距離がある。

「ど、どうしよう。これすっごい複雑で解くのが間に合わない!?!」

その上かけられた瞬間から即座にバインド解除しようとしているが、シャマルの腕を持ってしても容易に解析できるものではなかった。

「……………」

沈黙したまま迫る仮面と慌てるシャマルを交互に見てザフィーラはぼそりと呟くように抱えている少年へ言葉と、どこか満足そうな顔を向けた。

「今だからいうがな……お前との夜の散歩は中々楽しかったぞ」
「……!?」

それを信じられないものを見たかのように、聞いたかのように見上げて、

コウキは慌てて首を振って、できる限りその意思を伝えようとした。
「やめる」と。

「っ、ぬおおおおおっつ……!!」

大気を震わすような雄叫びをあげて、彼は自らを縛るバインドに魔力を力技で叩き込むことで破壊しようとしていた。

「ザ、ザフィーラだめよ、今の魔力量でそんなことしたら!」
「おおおおおっつ!!」

シャマルの声も聞かず、コウキの声無き訴えも聞かず。
自身の魔力を限界まで引き出し、縛る輪に叩きつけ粉碎する。

「くっ!」
「ザフィーラ!」

音を立てて壊れるバインド。

だが同時に彼は自らをふらつかせてしまう。
元々完全まで回復していない魔力をまた無理に引き出したのだ。
肉体にかかった負荷は万全時とは比べ物にならない。
しかしそんなふらつく身体のままその爪を振りかぶり彼女の戒めも破壊する。

「行け、シャマル！」

「つつ………ええ、ま、任せて」

言葉の意味を正しく受け取って、一瞬表情が歪む。

瞳から涙が溢れ出しそうになるが彼女はそれを必死に抑え込んだ。

「……！」

抵抗するコウキを受け取って即座にシャマルは飛んだ。

見れば、仮面はもう10メートルもない距離にまで近づいていた。

「逃がすと思うか？」

「それはこちらの台詞だ！」

再び長距離バインドをかけようとする仮面にその爪と牙を突き立てる。

カバーしようと思いついたもう一方の仮面を突き飛ばし、彼は吼えた。

「うおおおおおっつ……！」

魔力がつきかけた身体を意地と誇りで突き動かして守護の獣はその時間を稼ぐ。

残った最後の同胞と主が逃げ切るための時間を。その命をかけて。

「つつ！！！」

「ううっ、ザフィーラ！」

一度も背後を振り返らず、けれどその“消失”を感じ取って嗚咽がもれる。

それでもシャマルはコウキを脇に抱えて全速力で飛んでいた。

腕の中の彼はずっと抵抗していたが、逆にいえばシャマルでも抑え込める程度。

その程度しか暴れることができないほどに彼はもう弱っていた。

（急がないと！）

アースラまで行ければ魔力供給ができる。少しばかりの猶予を取り戻せる。

だがこのままでは今日を越せるかどうかさえ分からない。

そんな焦りをなんとか抑え、近くにまで来ているはずの少女達を探す。

ザフィーラと別れた地点から一直線に進めば早く合流できたが、その空路はあまりにも見通しが良すぎて、仮面らに発見されるリスクが高い。

シャマルはそのために入り組んだビル群の中を逃走するしかなかった。

（アースラかなのはちゃんたちと連絡とれたら楽なのに！）

長距離バインドをかけられたぐらいから、通信妨害もかけられた。

空路の変更で当初予定していた合流地点には行けそうにない。
時間の猶予があれば隠れてやり過ごすこともできたが、その時間が
なかった。
転送魔法でコウキだけでも、と思ったが結界がそれを阻害して転送
できない。
段々と追い込まれているのを感じながらもシャマルには他に方法が
ない。
なんとか隠れて移動しながら肉眼で少女達を探すしかないのだ。
そこに

「シャマルさん！」

「シャマル！」

救いの天使のような可愛らしい声が降ってきた。

「あ、はやてちゃん！なのはちゃん！」

ビルの間と間の狭い隙間に入り込んで隠れていた彼女の真上。
安堵の表情を浮かべて下りてくる少女達はまさに天使に見えた。

「え？」

そのはやてが騎士服を着ていなければ。

コウキが今までで一番強く彼女の腕を掴んでいなければ。だが。

「っ！このっ！..！」

即座に強烈な風を生み出して少女達に向かって放った。

狭い隙間に入ってきていた少女達には避けるスペースがない。

咄嗟に近い動作でシールドを張って防御するが最初から風の狙いは

二人ではなかった。

竜巻状に渦を巻いて迫った風は周囲の“壁”を引き裂いていく。いくら頑丈そうでも元より廃墟の古びた建物。衝撃に対してもろかった。

一瞬でビル全体にヒビが入り、轟音を立てて崩れていく。ふたりの少女はその瓦礫と粉塵の中に飲み込まれ、姿が見えなくなる。

「いまのうちに！」

その“足止め”の効果があるうちに距離を離そう全力でその場から離脱した。

今度は隠れるのを考えないただの直進。とにかく距離をとろうと速度を上げる。

元々騎士たちの中では一番遅い彼女だがそんなものは少し無理をすればいい。

と、シャマルは自らに鞭打って、肉体の悲鳴を無視して逃げた。

「はあ、はあ、はあ、はあ……………」

ここまでくれば、と彼女が安心できる距離。

そこまで飛んでビルの上部が崩れ、天井がない建物の中に降り立った。

屋上に降り立つより隠れる壁が多く、室内よりは逃げ道が多いと考えて。

「はあはあ、まいっちゃいます。まさかふたりに化けてくるなんて」

半ば以上が外と繋がった部屋との屋上ともとれるその角。
窓の無い壁に背中を任せて隠れながらシヤマルは愚痴をこぼす。

あの二人は偽物だった。根拠は少ないが彼女はそれを確信している。
はやては騎士たちと同じ理由で彼からもらった騎士服を着ていない。
そしてコウキの怯えたような腕の掴み方がふたりが偽物だと訴えて
いた。

シヤマルからすればそれだけで断言するには充分だったのだ。

しかしそのために本物に会えてもこれでは迂闊に近づけない。
それを本物だと判断できる材料がなければ。

「何か策ありますか？」

駄目元か。それとも会話を求めてか。

隣り合うように座っている彼に意見を求める。

しかしコウキは静かに首を振るだけ。いや、振るのもやっとだ。

(いけない！ もう簡単な動作も……思考も落ちてる)

ここで自分が魔力供給できれば、それで解決するならそうしている。
けれどここには自分しかない。彼女が動けなくなれば彼はもう助
からない。

それに今のシヤマルの魔力総量では焼け石に水以下だ。

「大丈夫、今度は私達の番なんだから！ 今度は私達があなたを…
…っ」

助けてみせる。

そう、続けようとした言葉が、出てこなかった。

「あつ、な……んで？」

背中を預けた壁。窓などない。

気配も消していた。声だつて気取られるような声量ではない。なのに。

「……！」

「あ、あああつ！」

壁ごと貫いて、その腕がシャマルのリンカーコアを掴んでいた。

あまりに突然のそれに驚愕。その上コアを掌握され、身動きが取れない。

少年はたまらずその手を押し返そうとするが今の非力な彼ではびくともしない。

「……変身を見抜いたのはさすがだったがな」

壁があるのとは逆方向。どこか蔑むような声がかける。

それはわざとらしく足音を立てて、彼らに歩み寄る。

「発信機の一つや二つ、付けてないとも思ってたのか？」

「なつ、くつつ……！」

驚くと同時に意味を理解したシャマルは悔しさに歯噛みする。

助けるのに、逃げるのに精一杯でそんな事にも気づけなかった。

そんなやり取りを無視して彼はコアを掴む手を引き剥がそうとしていた。

「……邪魔だ」
「っ!!」

一際暗く憎悪のある声と共に仮面が顔を引っ叩く。
もしかしたらその存在にすら気付いていなかった者からの衝撃に
いとも簡単に体勢を崩し、それでも勢いを殺せずに床を転がった。

「コ、ウキ、ちゃん……!!」

満足に動かない身体を無理やり動かしても、手を伸ばすのが限界。
それでも彼には遠くて、シャマルの手まるで届かない。

「さて、お前で最後だ。これで闇の書は完成する」

目の前の仮面が宙に浮かぶ闇の書に命じるようにページを開く。
明らかに彼女たちが蒐集していた時より進んでいる。
そしてもう残りページがひとケタ程度だという事にも彼女は気付い
てしまう。

「うつつ、あ、あああっ!!」

開かれたページがリンカーコアから彼女を奪っていく。
実体を、魔力を、その力と技術を奪い、その存在すら奪っていく。
まるで切れかけた電灯のようにチカチカと点滅する身体。
だが。

「うん？ ふふっ、運がいいな。666ページが埋まったぞ。
蒐集されきって無様に消滅した連中と同じにならなくて良かった
な」

同胞への侮辱に怒りがわくが、それをぶつける余裕が彼女にはない。シヤマルは蒐集されきる前に闇の書が完成した事で即座の消滅は免れた。

だがそれはあまりにも少ない猶予期間残り時間だった。

「っ！！！！」

床を転がった姿勢のまま。

でも必死で何かを訴えようと手を伸ばし、声の出ない口を開く。

それが目に入って、どうしようもなく涙があふれ、彼に触りたくなつた。

「コウキ、ちゃん……」

もはや立ち上がる力もない身体。

おそらくはあと数秒もしないうちに消えていくそれを浪費して、床をはうように、少しでも近くに行こうと必死で手を伸ばす。

それが彼にも見えたのか。

彼もまた満足に動けない身体を動かして精一杯、腕を伸ばす。けれど無常にも、ふたりの指先はあと数センチが届かない。

「っ！！！！」

どちらも、既に床を這うだけの力さえもう残っていないかった。

(ううっ、ごめん……ごめんなさい、みんなあ……)

仲間が、同胞が、文字通りを命をかけて繋いできたのに。

それを自分が、誰にも繋げられずに終わらしてしまう。

悲しくて、悔しくて、そんな自分が許せなくて涙が止まらない。

(こんなのが、コウキちゃんに見せる最後の顔なんて、嫌だなあ)
けどだからこそ必死に顔を整えて、涙を流しながら笑ってみせた。

「ああ、残念……また、コウキちゃんのご飯食べたかったなあ……」
そうして笑顔のまま、湖の騎士はコウキの視界から消えていった。
必死に伸ばした指は最後まで、彼に届くことなく。

「……………!!」

それを認めたくなかったのか。

僅かに呆然と、誰もいなくなった空間を眺めていた彼はしかし、
激しい怒りと憎しみの色を見せる鋭い眼光を仮面に叩きつける。

「つつ……そんなになっても、まだそんな目ができるとはな」

一瞬、それに怯えたように半歩下がった仮面だが、
即座に我に返って、完成した闇の書に視線を落とす。

「どうした？」

背後から壁をぶち抜いてのリンカーコア抽出。
という役目を終えた仮面がこちら側にまわって、相棒に声をかけた。

「……………おかしい。」

確かに完成したはずなのに、こいつの感情も振り切れているはずなのに……起動しない？」
「ふん、まだ痛みが足りないのだろう。やはり騎士達全員を目の前でやるべきだったか」

その軽口のような口調で語られた内容に、視線の迫力はさらに増す。

「っ、まあいい。そんな目が出来なくなるまで直接痛めつけてやる」
「待て、過度な暴力は……」

「暴走すればいいんだ！ それこそ腕の一本や二本、どうなってもいいだろう！」

その仮面の言葉に。見えないはずのその下の顔に。

言い表せない憎悪の影を見た仮面はそれ以上の制止をかけなかった。

「おらー！」

「！ー！」

寝転がる彼を軽く蹴飛ばし、さらに床を転がした。

俯せの匍匐前進でもしてるかのような姿勢から、完全な仰向けになる。

そしてそれを見下ろすように仮面が間近に立つ。

「四つもあるから一つくらいはいい、っていったのはお前だったよな？」

その手には非殺傷設定のない魔力刃。

けれどそんなものを突きつけた所で視線の圧力とそれによる恐怖は消えない。

どちらが優位に立っているのかわからなくなる恐れと戸惑いが

余計に相手を焦れさせ、ただでさえ感情的な方の仮面は思わず刃を振りかぶる。

「……………」

迫る容赦のない魔の刃。しかし彼の目は変わらない。

例え何をされようと視線だけで貴様らを殺してやると。

言葉なくその瞳はしかし雄弁に語りながら仮面を睨みつけていた。

だから、その光景をすべて見てしまった

がしゃん。と、音がした。

何をどう聞き間違っても、それは刃が肉に食い込んだ音ではない。それは何かが、『物』が砕け散るような音だった。

「つつつ！……！」

だから、彼の視線から急速にその殺意は消え、動揺と嘆きの色に染まる。

なにせ壊れたのは

『あ、はは……ドジっ、って……しまい、ました……』

リニスだった。

刃が彼に届く前にアックスフォームに変化し自らを盾とした。

そして彼の身代わりに魔力刃をその身に受けたのだ。
おかげでその一撃は彼には届かず、しかし彼女のボディをバラバラに砕いた。

『おか、ししいな……キ、キレイに受け、受け、受けきる……つつも、つもり……だったのにな』

「!?!?!」

言葉がおぼつかない。発音システムの不備ではない。

何かそれ以上の問題が起きていると。“今の”彼でも気付いてしま
う。

それ程までにデバイス、バルディッシュ・リニスは致命的な部分を破壊されていた。

『ま、まさか、ホント……バラバララ、なっちゃう……なん、
て……はは』

いつかの冗談が現実になったことをどこか可笑しそうに笑う声。
けれどコウキはそんな風に、彼女のようにには笑えない。

砕けて床に散らばり落ちた彼女は傍目には大きく壊れていないよう
に見える。

デバイスの中心にある白いクリスタルが、真つ二つになっていただ
け。

だがそこはリニスの人格を保持・維持するAIが、存在する箇所だ
った。

『サ、さいゴまで……やくに、たてなく……スイません……』

言葉がさらに乱れ、クリスタルの点滅の間隔が長く遅くなっていく。

「つつー!!」

嫌だ、とそれ以上は聴きたくないというように首を振るコウキ。指先は震え、瞳は驚愕に見開かれて顔はその色を失っていた。

(ああ……あなた、も、こんなキモチだったのでしょうか、リニス)

そんな姿を壊れかけた自分でも認識しながら、ふと思った。大切な誰かを、その人を取り巻く問題が何一つ解決しないまま、去らねば、消えなくてはいけなかったオリジナルのリニス。同じ道を踏んでしまったのは、何の皮肉だというのか。

『あ、コウt jおk a i : ; ^ 8 ! / ¥」 g a、 がが……も、モウ、アア……』

(N A n o に、こ n n a こ t o を / / オモう、ワた s h i は……)

本来なら不満や心残りなどあるはずもなかった。

オリジナルと同じ道を結果的に選んだことは誇らしかった。

自らが時間を稼げばきっと少女たちが駆けつけてくれると信じてもいた。

けれど。

どうしても。

ある願っただけが、

言っても苦しめてしまっただけなのに、

これが最後かと思うと、自然とあふれ出てしまった。

「……^8:@[.:.:……アア、イチド、あなた……に、ふれたかつた………」

本当は秘めておくつもりだったそんな少女のような願いだけ残してあの明るい声は消え、クリスタルからは光は失われた。どちらも、永遠に。

「……ん、ふふふ」

その裏で笑う声など彼の耳に入らない。手元で怪しく光る本など目にも映らない。

ただただ呆然と喋る事も光ることもなくなったその残骸を空虚な瞳で眺めていた。

さっきまでが嘘のように色を失った目は、やがてぼんやりと空を見上げる。

そこに何かいたかもしれないがもう彼はそれが何かを認識できるわけもなく。

「あ、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアあああああっつつつつ……!!!」

出ないはずの声を出して、

壊れた叫びを張り上げて、

何もかもを呪い尽くす絶望と憎しみに身を任せ、

彼は黒い魔力に飲み込まれていった

彼女の願いと怒り（前書き）

リニスは、覚悟してついでいったのかもしれません。
ご想像にお任せしますが。

彼女の願いと怒り

12月23日 AM08:46

管理局本局 医療施設 病棟個室

『どこへ、行く気ですか？』

その日、俺がクロノとの二人での話を望んだこともあって
珍しく病室には俺とリニスしかいなかった。俺が喋れなくなったの
もあって、
病室はひどく静かで俺はのんびりとベッドで横になっていた。のだ
が。

『だから、あなたはどこに行く気かと聞いているんです』

彼女は突然強い調子でそんなことを言い出した。

？

メモに大きくクエスチョンマーク。

『とぼけないでください。ならどうしてわざわざ私服に着替えたんですか？』

どうしてわざわざクロノ執務官と二人で話をする必要があるんです!?!』

それは、と“誤魔化す用”の理由を書こうとして、ペンが止まる。

『執務官と会つのに病人服なのが嫌だった。とか誤魔化したら、怒りますよ』

「……………」

おお!

さすが俺のデバイス。

俺の誤魔化し方をよくご存知で。

とはいえ、本当のことを書くわけにもいかない。

俺だって絶対の確信があるわけでもないのだから。

オレ 行かない

だからそんなメモを出した。

一瞬それで本当に怒り出しそうだったリニスは、途端に沈黙した。

『……………誰か、来るんですか?』

さっすが。あれだけでよく解るものだ。と身勝手にも感心する。だから正解のご褒美にその返事だけはしておこう。

たぶん

『……………』

リニスはそれで黙ってしまった。

多分、俺の返事の意味を考えているのだろう。

まあ今回は本当に「たぶん」としかいえない。

けれどおそらく来るなら今日ぐらいだろう。

だから、そのときはみんなにいてもらおうと、困る。

『……………つててください』

え？

『私も連れてつてください！』

はい？

いや、待て。お前なにを考えた？

つーかなんで、連れてつて、になるんだ！？

『コウキの邪魔はしません、これ以上聞きもしません。黙ってます。

だからお願いです。どうか、私を持っていってください！』

やめる

その必死な叫びに、頭の一番奥で誰かがいう。それは“余計”だと。それが致命的な何かになると警鐘を鳴らす誰かの言葉に頷きながら、

俺は、リニスを胸ポケットの中に入れていた。

それから一度も彼女は約束通り一言も喋らなかった。あの瞬間まで。

俺は、その先のことが解っていた。仮面たちが俺を襲うと。

このままなら待っているだけで確かに俺は侵食され暴走する。だがそれは闇の書完成前の不完全な暴走で、それは奴らが望んだものではない。

望む形に持つていくためには実は、ある方法しかないのだ。

俺を拉致って、さらに闇の書を奪い自分達で蒐集して完成させる。

これ以外の方法では完成は出来ても、融合暴走する俺を管理できない。

管理下でない暴走など奴らからすれば迷惑な話でしかないのだ。

だから、みんなを出来れば本局。
少なくとも俺の病室にいさせるわけにはいかなかった。

鉢合わせになって本局で戦闘になんてなればどれだけの被害が出る
か解らない。

その結果として俺が暴走してしまう可能性もある。
本局のと真ん中で闇の書が暴走なんて考えられる中で“かなり上位
の”最悪だ。

そう、つまり俺はさらわれるのを、待ってたんだ。

本当なら、リニスを連れて行くべきではなかった。
けど、自身の願いなど滅多にいわないあいつが必死でそれを願った。
俺にはそれを拒否することなんて、できなかつたんだ。

アア、イチド、あなた……に、ふれたかった……

でも、それが、あいつのもっと大事な願いを奪うことになるなんて。

だれか

誰か、お願いだ

12月23日 PM02:44

無人世界 結界内 ビル群上空

その光景のショックをどう表現すればいいのか。

結界に突入してから、まるで冗談のように簡単にあっさりと消えていく存在。

見知った人の名前と共に報告されるその反応のロスト。

昨日まで一緒に笑っていた。さっきまで一緒にいた。そんな人たちが、消えた。

心乱れる少女達はそれでも、必死に空を飛んだ。そして探した。

まだ騎士は一人残っている。まだ彼は無事だ。その希望だけが少女達の支え。

だった

「はやて!」

「はやてちゃん!」

ぐらり、とその身体が空で崩れる。

湖の騎士シヤマルの最後の姿が、ギリギリで踏ん張っていた少女の心を折ってしまった。

もはや自力で空に浮くこともできないはやてを両側から支えるように浮かす。

「……い、いやや……こんなユメ、みたくない……はよ、おきな……」

…」
「はやて……」

瞳は色を失い、少女は壊れた笑みを浮かべていた。
茫然自失、現実逃避などというレベルではない。
認めたくない事実をユメと思い込む事で心を防衛している。

『な、なんてことを！』

『うそ……そんな！』

『ひどい！　こんなのひどすぎる！！』

通信越しに届くアースラからの悲鳴。

そこにいた彼女たちもまたショツキングな光景に半ば以上我を失っていた。

なのはたちがまだ冷静でいられたのは隣に崩れ落ちた少女がいて、そして眼下にその原因を作った相手がまだいたから。

その痛みと怒りがふたりに自分を保つことを可能にさせていた。

しかし半壊状態の建物からその仮面原因が飛び出していく。途端。

「あ、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアあああ
あつつつつつ！！！！！！」

空を裂くような、

何かを恨むような、

悲鳴のような、

叫びのような、

泣き声のような、

それはそんなすべてが込められた慟哭。

まるでそれに呼び寄せられたかのように浮かび上がる魔法陣からすべてを飲み込む魔力の奔流が自らを失った少年ごと周囲を包み込む。

「コウキさん！」

その光景に思わず叫ぶなのは目の前でその異変が起こる。彼を中心にした周囲を飲み込んだ『黒より暗い色の魔力』は数瞬で消え去って、その場がどうなったかを全員に見せた。

「な、なにあれ？」

魔力が覆った部分をまるで境目とするかのように建物はまるで元からその形だったかのように食われていた。そしてその原因となった、中心となった少年は、どこにもいなかった。代わりに。

「……………ああ、結局こういうことになってしまっのか」

銀色の髪と赤い瞳を持つ“女性”が悲しげな顔で泣いている。かつてはやてが着ていた騎士服を黒に染めたような衣服。耳裏に一对、そして背中から生える魔力で作られた二対の黒き翼。どこか統一感のあるそれらとは異質な赤い拘束ベルトが四肢それぞれに巻かれていた。

『まさかつ、管制人格！？』

『正確にいうとそれが多少表に出た暴走してる自動防御プログラムだ。』

『わかりやすく闇の書暴走体とでもいうべきか』

その姿と佇まいからその正体を敏感に感じ取ったリンディに、はやての首にかけられたトラヴィックが補足する。

「トラヴィックさん、どういうこと？」

『闇の書が完成し融合すると間違いなくほぼすべての決定権を闇の書側に奪われる。』

意識も身体も持っていないけれど、ただただ暴走して破壊活動を繰り返す。

彼女の意識が強いうちはある程度の制御は可能だが、それでも…
…』

僅かな時間の間だけ。それも攻撃の矛先を変えられる程度。破壊活動そのものを止めるだけの力は彼女にはない。

『説明待ってっ、転移反応です！ 闇の書暴走体が転移します！』
『うそっ、転移阻害の結界内でそんな馬鹿なこと！』

その驚愕を知ってか知らずか。

“彼女”は静かに泣き続けながらもその場からあっさりと転移する。

「せめて、主の最後の願いを……騎士たちを傷つけた者たちへの報いを！」

彼女自身の怒りすら含まれた言葉を残して。

『っ、まずい！ エイミー嬢、転移先の特定を早く！ 彼女は仮面を始末するつもりだ！

ここであいつらがやられてはマイスターの計画が！』

「え、計画？」

「トラヴィック、コウキの計画ってなに？」

しまった、といわんばかりに沈黙するトラヴィック。

エイミーたちが転移先を調べている事もあるが、何もない時間。

一瞬の沈黙が当人たちにはとても長いものに感じられた。

『……すまない。まだ言える段階ではない。

ただマイスターが最も悪いサイアクな結末だけは避けようと準備していた事なんだ。

手伝ってほしい。それが無理ならせめて私を彼女のところへ届けてくれ！』

『あなた……本当に彼と基礎人格が同じなのね。その喋り方すごくむかつくわ』

「り、リンディさん？」

必死に訴えるトラヴィックに対しリンディは、少女たちが聞いた事もない冷たい声で言い放った。

『理解はしているよリンディ嬢。
でも、うまくすればまだ騎士達は助けられる』

「っ……それ、ほんまか？ まだ、みんな助けられるんか！？」
「はやて！？」

我を失っていた少女は敏感にその言葉に反応した。

『本当だ、うまくいけば、だが……まだ希望はある』

トラヴィックはそんな注釈こそいれたが断言する。助ける手段はある、と。

それが少女の瞳に僅かな光を戻していく。

『艦長！ 転移先特定、けどもう暴走体と仮面が戦ってます！』

『っ、ああもつつ本当にむかつくわね！ みんな行ってもらえる！』

「……は、はい！」「」

エイミイの誘導で転移先に向かって飛ぶ少女たちをモニター越しに見ながら

リンディはひとり、艦長席で悔しさを抑えるように唇を噛んだ。

（騎士たち“は”ってことは……結局あいつは助からないんじゃないかな
い……あの馬鹿っ……！）

闇の書が暴走した地点から僅かに離れた高層ビルに隠れるように立つ小さなビル。
その屋上で暴走体の状態を観察しながら仮面たちは封印する準備をしていた。

「……そろそろだな、デュランダルの準備を」
「ああ、わかった」

そういつて彼らの切り札を取り出そうとしたその瞬間、
仮面たちの目の前で転移の光が輝き、誰かが現れる。

「なっ、この結界内で転移したと!?!」

「……騎士たちの嘆きと痛み、そして主の絶望を知れ」

驚愕する仮面らを見捨てて彼女は大仰に手を振り上げ、落とした。
瞬間、ふたりの仮面の周囲を囲む血の色をした実体を持つ鋼の短剣。

「刃以て、血に染めよ。穿て、ブラッディダガー」

「なっ!?!」
「いつのまに!?!」

仮面を囲むその数、合計22発。遠隔設置のスピードは視認も許さ

れない。

そしてまるで首を狩れと命じるように落とした手を今度は横に切るように動かす。

「「つつ!?!」」

鍛え上げられた二人の目を持ってしても残像が見えるのが限界の弾速。

回避も防御も間に合わず、血濡れた短剣は無慈悲に全方位から仮面に突き刺さる。

着弾しその防護服を裂いた途端、それらは爆裂して爆発粉塵に包み込む。

「……………ぐっ、おのれ!」

「うつつ、ダメージが!」

それが晴れた先、仮面らは苦悶の声を漏らして膝を折っていた。僅かにそれに訝しむ顔をした彼女はしかしすぐにそれを察する。

「騎士たちの攻撃のダメージか……………最後まであれらは屈しなかったのか」

仮面らの防護服に残るキズ。

今のブラッディダガー以外にもヴィータの鉄球、シグナムの炎。ザフィーラの爪と牙の跡がありありと残っていた。

「お前たちの想いは繋がられなかったが、せめて……………」

涙に濡れる、けれど強い敵意を放つ瞳で仮面らを睨みつける。

「勝手なことを……お前らのせいで、お前たちがいるからっ!!」
「よせっ!!」

ひとりの仮面もまた怒りを訴えて床を蹴った。

跳び上がり、一足で彼女に肉迫すると全力の拳を振り下ろす。

「なっ!!??」

「……………軽い、な」

それに対しいつそ緩慢といってもいい動作で張られたシールドに仮面の鋭く強力なはずの拳は易々と受け止められていた。

「ああ、お前たちも犠牲者の者か。

だがいまは……そうであっても私はお前たちを許せそうにない!」

シールドを支える手とは逆の腕に拳を作る。

そしてその手を魔力のもやが包み込んで強化・保護していく。

「つつ!?!」

「くらえ……………」

飛びこんで来た仮面を迎え撃つように、カウンター気味に放たれた魔力の鉄拳は相手の鳩尾に吸い込まれるように深く、深く、突き刺さる。

「っ、かはっ、がっ!」

「ロツテ!」

思わず名を呼んでしまうほどに動揺した“彼女”に向けて、管制人格の彼女は仮面を殴り飛ばした。受け止めようと構えたが、

その衝撃は想定以上で一緒になって隣のビルの壁に叩きつけられ、突き抜ける。

「……フォトンランサー・ジェノサイドシフト」

壁の向こうに見えなくなった仮面らに向けて手をかざす。

すると周囲に金色のフォトンスフィアが大量に生成される。

フェイトのリンカーコアを蒐集したために少女が得意とした魔法を彼女は使用するどころか自分用アレンジさえしていた。

元となったフランクスシフトに比べて三倍以上のスフィア数。

準備や呪文詠唱を必要としない発動の短縮もあって威力は比べ物にならない。

ただ彼女が中距離攻撃をあまり得意としない事もあって、魔法の分類としてはそれはもはや広域攻撃魔法と化していた。

「……粉碎、せよ」

静かな号令が、100を超えるスフィアから惜しみなく光の槍が乱射される。

まさに雨霰といえる槍の豪雨が側面からビルを粉碎し破片すら残さず破壊していく。

中にいた仮面ともども。

「……………」

高く舞い上がる粉塵。

小石程度にまで砕かれたビルだったものがぱらぱらと降る。

そのために内部にいたであろう。仮面らがどうなったのかが解らない。

しかし静かにそれを見つめていた彼女は少し歩いて、ビルの淵まで行くと。

「スレイプニール、羽ばたいて」

飛行補助の役割を持つ背中中の翼を動かして、飛びあがる。

ゆっくりと飛んだ彼女はかつてビルが建っていた空間で浮いたまま止まる。

そして瓦礫が落ちていく真下を覗くがまだ舞い上がった粉塵と自らの魔法の余波で状況把握が困難な状態であった。

だから、だったのか。彼女は静かに手を掲げる。

掲げた手の先で暗く黒い魔力の球体が生まれ、徐々に巨大になっていく。

「デアボリック・エミッション」

そう短く呟くと一瞬だけ黒い球体は縮まったが次の瞬間。

「闇に、染まれ」

一気に膨張し周囲すべてを飲み込みながら辺り一帯を闇に沈めた。

それはまるで爆弾のように球の外周に向けて衝撃が襲い、

球に覆われた空間をその形にそって吹き飛ばした。

「……………」

大きくえぐれ、まるでクレーターのようになった地面に静かに降り立つ。

かつてそこにビルが建っていたなど微塵も面影がない場所ですかに動く気配。

「……う、っ……あ……」
「あ、ああ……うう、っ」

視線を周囲に向けると呻くような声を聴きとって、そこへさらに足を向けた。

辿り着けば、わずかに積み上がった瓦礫の上で横たわる身体を見つけた。

ただ、それは先程までの仮面とは似ても似つかない猫耳や尻尾を持つ二人の女性。

格好や顔つきから双子の、そして動物の特徴から使い魔だと解る。

「……なるほど、強化変身の類か……」

事態を正確に認識しながらも、どうでもいいように呟きながら、彼女の存在に気付いていない彼女らにさらに歩み寄って、その手を伸ばす。

「あ、ぐっ！」

「うぐっ！」

見た目には女性らしい細い腕が、易々と二人の首を掴んで持ち上げる。

そしてその手は徐々に、真綿で首を絞めるようにゆっくりと力が込められていく。

「あ、がつ、ああ……」

「ぐう、っ、うう……」

積み重なったダメージと絞められる首に苦悶の声を僅かに漏らす

「ぜたち。」

何とか逃れようと彼女の手を掴むが実質それは沿えているに等しい非力さ。

「許してくれとはいわない……だがどうしてか、この怒りが止まらないんだっ」

止め処なく流れていく涙をぬぐいもせずに、彼女は止め処ない怒りと、

それを止められずまた悲劇を起こそうとしている自分に、泣いていた。

「泣くくらいなら、もっと抵抗してみせろ……！」

「え？」

だから、そのまるでどこかの少年のような言葉に意識がそちらに向く。

自分の上、その空から落ちてくるような声とソレに彼女は思わず息をのんで、飛び退いた。

「あ、かはっ！」

「っ、はあはあ………」

降ってきたモノの一撃を避けるために手放した双子が酸素を求めて息を吸う。

彼女たちと暴走体の間に入り込んだソレに“彼女”はその瞳を驚愕

の色に染める。

「……………ある、じ？」

そこにはジャケット状態のトラヴィックをまとっている誰か。
かすかに見える帽子の下で、口元だけがニヤリと不敵に笑った。

彼女の願いと怒り（後書き）

やっぱり強いな、管制人格（ああ、早くあの名前で呼びたい！）
彼女もかなり怒っております。

初起案ではデアボリックのあとスターライトでした。

……………うん、死んじゃう！ リーゼたち間違いなく死ぬから！

慌てて星光は中止しました。

前に感想に疑問になっていた人がいたので補足しますが、
なのはたちを結界外とはいえ近くにおいていたのは
原作と同じ理由で、ああなつた闇の書が完全暴走するまでの抑え役
としてです。

原作と違って、仮面がやった事がばれているので彼女は
真っ先に奴らを追っていったわけですが……………。

第一VS第六(前書き)

この期に及んで、オリキャラ登場です！

といっても、皆さんとつくに知ってるあいっつですが。

第一VS第六

12月23日 PM03:02

無人世界 結界内 ビル群上空

「う、そ……」

「ほんま、に?」

『な、何がどうなってるの!?!』

それを眼下に見た少女たちもアースラにいる誰かも。その出来事にただただ目を奪われ、愕然としていた。

「……………トラヴィックさんが……………トラヴィックさんだけで動いている!?!」

おかしな言い回しながら、なのはの絶叫が事態をおおよそ正確に表現していた。

エイミイの誘導によって辿り着いた少女たちは状況を把握するより先に

“彼”から即座に自分を投げるように有無を言わせずいわれて、投げ落とした。

結果、落ちていくトラヴィックは起動し誰も装着していないのにジヤケットが展開される。

なのにもるで中に人がいるかのように動いて、首を絞められていた誰かを助けた。

発せられた声もまた機械的なものから生の人間の声のように聞こえた。

「いや、お前は主ではない。主はここに……お前はいつたい……?」

その困惑から最初に我に返った彼女は確かめるように胸元に手を抱いた。

そんな彼女に“彼”は黙って頭部を隠す帽子を取って、それをさらす。

「なに?」

それにはさすがに彼女も驚いた。そこには顔らしい顔は何もなかったのだ。

確かに人の顔らしき輪郭はつつすらと見える。色も表情も見える。どこか主である少年に似た笑みを浮かべるそれはしかし、薄い。

「この姿ではお初にお目にかかる……私の名はトラヴィック。
ヴォルケンリッター第六の騎士・盾の騎士甲冑トラヴィック。
それが私の本当の名前だ……ああ、六番目というのはあなたを
番目と考えての順番だ」

「なん、だと!？」

衝撃の事実を淡々と語りながらも、最後にどうでもいい事をいう
り。

彼が間違いなくトラヴィック、彼と基礎人格を同じくする存在とい
えた。

「馬鹿な、騎士は四人だけだ。六人目など……」

「無論最初からいる存在ではなく、マイスターが後から作った。だ
がね」

「そんな、無理だ。守護騎士と同等の存在を作り出すなどもはや…
…」

軽々しくもあっさりと出自を語る彼に、しかし彼女は首を振る。
すでに自らも、闇の書も、そこに内包されている騎士たちも。

現存する技術で模倣することすら叶わない。だからこそそのロストロ
ギア。

禁忌の技術に手を出した異端マッドサイエンティストの科学者ならまだしも、
主とはいえ管理外世界の住人だった少年に作れる存在ではない。し
かし。

「そう、いくらあの男が闇の書から情報を得られても、
再現できるだけの技術がなければ完全再現は不可能。

だからこそ私はデバイスの姿を持つのだ」

まるで想定していた問いかけだといわんばかりに、トラヴィックはすらすらと作れた理由を語り、彼女はその意味を察した。

「そうか……再現しきれない部分はデバイスに置き換えたのか。つまりはトラヴィック、お前は……」

「ああ、半分デバイスで半分守護騎士プログラムという中途半端な存在だ。

それもわりとデバイス寄りなのでな、こうして実体化するのは少々大変だね」

大変だ。といいながらも緊張感の欠片もなく手足を動かして準備体操を始める。

その姿はあまりに状況にそぐわず、見ている者たちを全員困惑させた。

「よしっ……では、話はここまでにしよう。

話して止められるものでもなし、ああはいったが君でも止められるものでもない」

体操が終わると、彼は腰をわずかに落として拳を構える。

偶然か必然か、それは主である少年の構えの左右が逆になったもの。彼の利き手とは逆の“左”の拳からカートリッジが排莢される。

そして両足から爆発音と共に暴風が吹き出された。

「くっ」

突進というより吹き飛ばされているかのような軌道は
戦い慣れしてる者にとって若干読みづらく、彼女はシールドを張っ
た。

トラヴィックが振り上げた黒い魔力の拳を受け止めるために。
それに彼が不敵に笑ったとも知らずに。

「悪いがこれは、フィストではないのだよ！」

盾は、彼女が驚愕の声をもらすより早くに拳によって砕け散る。

コウキが生み出した魔法であるシュヴァルツェ・フィストと

その元となったシュヴァルツェ・ヴィルクングは見た目が似ている
が使い方は違う。

純粋な破壊力はフィストが勝るが、ヴィルクングは様々な効果を上
乗せできる。

シールド破壊の効果を付与すればたいいのシールドは紙きれ同然
となるのだ。

「さて、あまり女性に乱暴したくはないが致し方あるまい！」

盾を破り、懐に入り込んだトラヴィックの暴風をまとった一撃が彼
女を蹴り飛ばす。

そして彼女を追いかけるように自身もまた吹き飛ばされるように空
を飛んだ。

「……三人とも、襲われていたふたりの所へ。今のうちに收容しま
す」

「あ、はい！」

話と戦いについていけずに呆けていた少女たちにリンディが指示を飛ばす。

なぜか彼女だけがそのとんでもない出来事を前にして、一人平然としていた。

（最期まで動ける事にこだわっていたあなたらしい秘策ね……っ、
こうなるのも計算通りだという気？ 馬鹿、バカ、ばかっ！！）

だがそれは言い表せない複雑な感情を無視していただけ。

内心での感情のうねりは冷静な表情と打って変わって乱れに乱れていた。

蹴り飛ばされた暴走体とそれを追うトラヴィック。

彼らが去った場所で未だに身動きがとれない両名のもとへ三人は降り立つ。

そして、見知った相手に少女たちは驚愕する。

「えっ、リーゼさんたち!？」

「ど、どうしてここに!？」

「……………えっと、だれ？ 知り合いかあ？」

その顔に見覚えがあるふたりと無いはやて。

なのは達は事件が始まったばかりの頃、何度か本局で彼女たちと会っていた。

当然、絶賛逃亡中だったはやてが彼女たちを知っているわけがない。

「クロノクンの魔法のお師匠さんで……………」

「わたしの保護観察をしてくれてるグレーム提督の使い魔」

「え……グレ、アム？　そ、そんな……まさか……」

だからこそ、その名前の意味と裏に察しがついたのは逆にはやてだけだった。

自らの想像に震えながら、起き上がれない彼女たちの胸元を掴みあげる。

「……あんたかつ、あんたらがあああの仮面の連中やつたんか！？」

「う……あ、あ……」

「それだけやない！　うちの援助しとったんは監視するためか！？」

突如として怒り狂ったかのように責め立てるはやてにフェイトとなのはは付いていけない。

しかし身体を乱暴に揺さぶられても痛めつけられた彼女たちは満足に喋れる状態でなかった。

だからはやての答えろ、という言葉に応えたのは別の、そして意外な相手だった。

「その、通りだよ……はあ、くそっ遅かった！」

「クロノ！？」

三人の上、どこか疲れ切った顔で肩で息をしている執務官。

異常事態を察した彼はかなり無茶な方法でこの世界まで最速で転移してきたのだ。

それでも、彼自身が語るようにそれは遅かったのだが。

彼は自分を見上げる少女たちに、とくにはやてに向けて口を開いた。

「はやて、君の想像通りだ。君たちのおじさんと管理局の提督は同一人物。」

本人にも問い詰めてきて、彼はすべてを認めたよ。

ひと足違いで、リーゼたちは止められなかった……………すまない」

『グレアム提督……………なんてことを！』

原因となった事柄が、なんであるか解らないハラオウン親子ではない。

だからこそ誰よりも痛みをこらえるような顔でうなだれた。

それに、一瞬なにか言いかけたはやてはそれをぐつとこらえて飛ぶ。

「……………今はなんかよくわからんから、何とも言えん。

だから、まずはトラヴィック手伝ってきてからや……………」

「わかった。リーゼ達は僕が責任もってアースラで捕まえておく」

『なのはさんたちもお願い』

「「はい！」「」

トラヴィックを追いかけて飛んでいく少女たちを尻目に、クロノはよく知る相手を、自らの師匠に厳重にバインドをかけた。犯罪者相手に“いつも”やっていた事に知らず身体が震えた。

「……………馬鹿だよ、君たちは……………あれだけ感情的になって突っ走るなって

耳がタコになるまで言っただくせに、何をやってるんだよ……………」

「！」

『クロノくん……』

復讐にとらわれて、ある種の冷静さを失っていた彼女たちは弟子がこぼしたその問いかけるような責めるような言葉に呻くことさえできなかつた。

そうしてアースラにリーゼ姉妹が収容された頃。

少し離れた場所で黒衣の女と男が互いの魔法をぶつけあっていた。

「ふんっ！」

「くっ、ちっ！」

暴走体の拳を大きく避けて、飛退いたトラヴィック。

それに確信するように頷いた彼女は口を開いた。

「やはりそうか。」

主がお前でヴィルキングを使わなかったのはこれがお前の天敵の魔法だったからか」

「ふう……弱点が多いのは困りものだ。」

そう、私の防御システムを唯一無効化できるためにマイスターは使えなかつた」

付与された効果しだいで様々な効力を持つ事が出来るヴィルクングはカートリッジさえあれば完璧といえるトラヴィックの防御機構を無力化できる。

要であるジャケットパージを阻止、あるいは無効化する効果を付与すればいいのだ。

その発想を連想させないためにも彼自身が使うわけにはいかない。

トラヴィック自身も使いたくはなかったが、

あの場から遠ざけるにはあの手段しか彼には思いつけなかったのだ。

(となれば普通は距離をとっての撃ちあいをすべきなのだが……不出来な身としては歯がゆいな)

その弱点が露呈した以上、拳が届く範囲に近寄るべきではない。

だが、本人がいう通り『中途半端』な存在の彼にはまだ魔法を“撃つ”下地がない。

彼の攻撃手段はすべて手足を使つての肉弾戦だけなのである。

「……トラヴィック、なぜ私の邪魔をする」

どうするか。

それを考えていた彼はゆえに彼女の問いかけに反応が遅れた。

「お前も守護騎士の一人だというのなら、その主が……同胞の騎士たちがっ、

あんな風に傷つけられて……それでなぜ奴らを庇う！

知っているか、リニスも奴らに破壊されたのだぞ！」

問いかける声には紛れもなく彼女自身の怒りがある。

騎士たちの決意もリニスの秘めた願いも彼女は知っていた。だから

こそ、

自分たちがどうなるかを決めるのはすべて主の決断だと思っていた。しかしその選択の機会すら奪われた彼女たち。

願いを残すことしかできなかつたりニス。

自分を助けるために皆が散っていく姿を目の前で見た主。

その痛みと苦しみのほどを想うだけで彼女は胸が張り裂けそうだった。

「私とて、許せん気持ちはある。だがね、主からの命令なのだよ。

すべてを救うためには、まだ、彼らの計画が必要なのだ。だから

」

力を貸してもらえないか。

と、ようやく追いついた少女たちに向けて、彼は言った。

「やれることがあるなら私はするよ！」

「このまま何もしないで終わるのなんて、イヤだもの」

「……助ける方法があるんなら、せなあかんやら！」

力強い返事に頷いたトラヴィックは人差し指を少女達に向ける。

「なら受け取るがいい。

そのためにマイスターが用意していた力を！」

そこから発射された赤い線のような光が少女達のデバイスに注がれる。

レイジングハート・エクセリオン。

バルディッシュ・アサルト。

そして、はやての胸元にあるペンダントに。

『コード受領確認、エクセリオンモードへ移行』

『解除コード受領、ザンバーフォーム解禁』

『シユベルトクロイツ及び疾風の書の封印を解除します』

“それぞれ”のデバイスがその真なる力を解放し、その姿を現す。

魔力消費と引き換えに爆発的出力を生み出し術者の全能力を底上げするエクセリオン。

持ち主の身長を軽く超える魔力の刀身を持つ大剣となるザンバー！。そして

「これ、は？」

剣十字を先端に持つ騎士杖と彼女の髪の色に似た一冊の魔導書。

少女の誕生日に送られたそれに隠されていた彼女のためだけのデバイス。

彼が知るだけのはやてに合う魔法を記録されたストレージ・疾風の書。

そこから引き出した魔法を正確に使ったための発動媒体・シユベルトクロイツ。

「もしもの時のためにはやて嬢が全力で戦えるように用意していたものだ。

他のふたつも対闇の書用のフルドライブモード……消耗はきついかもしれないが、

この一戦でどうにかしなければどの道、あと、はない」

闇の書暴走体と向かい合うように立って、拳を構える。

その背後では解放されたデバイスを構える少女達。

戦いを避けられない。厳密には破壊衝動を抑えられない彼女も構え

る。

「一応聞いておくんやけど……あたしの命令じゃ止まれん？」

自分も主なら、と念のために口にしたはやての言葉に彼女は小さく首を振る。

「申し訳ありません。あなたの管理者権限は主コウキが既に奪っています。」

暴走する直前にリンクも切断されているので、あなたはもう闇の書とは……」

繋がりは無い。主でもない。

言外にそういわれて、はやては溜息を吐く。

「ああ、ほんまそういうことは根回しが早いなあ……」

「だからこそ気兼ねなくやりあえるというものだ」

「……無駄です……私の意識とていつまでも表層に出れるわけではない。」

遠くない先、私はただの破壊の権化とかしてしまっ……逃げてほしい……」

そういいながらも彼女は浮かびあがり、手には魔法の光が集う。

彼女の意志はそこには存在しない。せいぜい当たらないようずらす程度。

だがそれどこまで続けられるか解らない後伸ばしの抵抗でしかない。

「そういう選択をする者は最初からここには来ないさ。
だから君は何も心配しなくていい……私たちの主を信じて待つて
いる!」

降り注ぐ、当たらない破壊の光の中。

盾の騎士甲冑と魔導の少女たちが空を翔ける。

残されたわずかな希望をその手につかむために。

ただそれが、誰のためのものかは知らずに

12月23日 PM03:17

無人世界 結界外上空 アースラ

複数開かれているモニターの中で、四人が闇の書暴走体と戦っていた。
いまここで初めて知ったモードとデバイスではあったが、
元より少女達のために用意されていたそれを使いこなせない少女達
ではない。

「大丈夫?」

そのある種の安心感からか。

艦長席から下りたリンディはポロポロと泣いている少女たちに声をかけた。

アリサとすずかのふたりも次々と消えていく騎士たちの名を、そして最後に残ったシャマルが消えたあの光景を見ていた。

ふたりを抱きしめるように支えるプレシアもまた泣いていたが、気丈にもアリサとすずかに言葉をかけ続けていた。

「……辛いなら、一度部屋に戻る？」

気遣いとも単純な確認ともとれる言葉に、少女たちは即座に首を振る。

「ひっ、うう………いますっ、ここにいます！」

「っ、最期まで見させてください！」

涙で潤んだ瞳を、けれど伏せる事なくまっすぐ向けて少女達は訴える。

それを予期していたのか、やっぱりといった顔で苦笑するリンディ。

(本当に強い子たちね……)

少しくらい弱ってくれないと大人としては立つ瀬がない。

などと考えてもしょうがない事を少し考えて、彼女は頭を振る。

そしてプレシアと目で会話すると顔つきを指揮官のそれに変えた。

「エイミィ、リーゼたちとクロノは？」

「すでにふたりは留置場に收容されています。

クロノくんはここに来るまでにだいぶ消耗してるようで現場に出すのは……」

「無理、ね……結界の方はどう、まだ持つ？」

そんな状態では出せても足手まといだろう。

彼女は援軍を出すのを諦め、即座に結界の状態を訊ねた。

なにせ張った術者を捕まえてしまっている。

そのうえこちらにはそれを張るところか維持する人員すらない。

例え無人世界でも闇の書を結界外に出して暴れさせるわけにはいかないのだ。

「はい、その点はさすがリーゼたちといった所です。

術者が倒れてもまだしばらく大丈夫そうです」

「わかったわ……問題はそれまでに決着がつくかどうかだけど……」

状況把握につとめながら戦闘空域のモニターに視線を向ける。

なのはが砲撃を撃ち、フェイトが斬り込み、はやてが制圧し、トラヴィックが拳を振るう。

付け焼刃ながらもそれなりに連携しているが戦況はあまりいいとえないものがある。

慣れない連携や初めての武装、完全回復してない魔力と直前のシヨッキングな出来事。

少女達の実力はそれらによって明らかに発揮されていなかった。

そしてそれ以上に暴走体がデタラメ過ぎたのが最大の原因だ。

「う、うつつ嘘、スターライトまで！？ みんな逃げて逃げてっ！
！」

戦闘空域を映すいくつものモニターのほとんどが桜色に染まる。

なのはの最大にして切り札たる魔法を闇の書が使う。それが闇の書

の恐ろしさの一端。

これまでに蒐集した魔導師の魔法をいとも簡単に使用できてしまう。それは何も魔法だけでなくその運用法から技術までもが記録され、闇の書自身が扱いやすい形に調節までされるのだ。

闇の書暴走体は見た目こそ一人の女性だが、実際はこれまでに蒐集された

すべての魔導師や生物が一体になったものと思った方が正しい。

AAAランクの魔導師達がいるとはいえ本来四人で立ち向かえる相手ではない。

(でも、こっちはもう戦力がない。応援なんて来る前に終わってしまう)

自身は直接戦闘が出来るタイプの魔導師ではなく、アースラの切り札たるクロノは疲労困憊状態。

プレシアは少女達を気遣っているが実際には一番心が弱っている。すずかたちを支える事で同時に自分も支えているのだ。

(そもそも『戦って勝つ』だけでいいのなら闇の書事件はとっくの昔に終わってる。

それが数年の猶予を作るだけだから、誰も救えないから、彼は選ばなかった)

なら、トラヴィックに下された指示は何なのか？

彼がもしもの時のために準備していた計画の正体は？

コウキの思考を読むことにかけて誰よりも優れていた彼女ならあるいは

この時点で気付けたかもしれないが、それには情報が足りなかった。だから

『全部……みんなつ、みんな欲しいんだ。なににもかも全部!』

女の勘ともいえる鋭さで脳裏にその言葉が蘇る。

「まさか……」

方法は解らない。確証も無い。

けれどリンディにはその閃きこそが真相に思えてならなかった。

(……全部、全員を救う気なの?)

それが出来なくて苦悩していた彼はついにその答えを見つけたのか。本来なら希望が持てるはずの閃きに、けれどリンディは身体の震えが止まらない。

(ねえ、あなたが考えた『救い』って、なによ?)

その形が、彼女にはどうしても歪な物しか想像できなかつた

12月23日 PM03:28

無人世界 結界内 ビル群上空

「……………そんな使い方も出来るとは、器用な」

泣きながらも、どこか感心したような言葉にトラヴィックは微笑を浮かべる。

もっとも、その顔は薄さから中にいる少女達ですらよく見えない。

「なに、さつきも言ったがデバイス寄りなのだ。

人の形にはあまりこだわらなくていいのが私でね」

他のデバイスが持つ変形機構のようなものだ。

といいながらトラヴィックは妙に膨れている腹を境に上下に分かれて、

中にいた少女らを外に出して、再び人としての形に戻った。

「助かったよ、トラヴィック」

「ほんまや、あのままスターライト直撃は危険やった」

「……………う、ううん、なんだろう。微妙に複雑……………」

自身の魔法ゆえ一名を除き、素直に感謝する少女たち。

闇の書暴走体が放った広域魔法と化したスターライトブレイカーは並の防御では防ぐのは困難であり、仮にできても魔力を大量に削られる。

まだ完全といえない少女らにその消耗は致命的になってしまふ。
そのためトラヴィックは“空っぽ”な内側に少女たちを匿ったのだ。
カートリッジさえあれば特殊な事例を除いて彼ほど強力な盾の鎧は
ない。

（さて、仕切り直しといこう。お嬢達は何とか彼女の動きを封じて
くれ。

切り札は私の拳にあるが、単独では懐まで踏み込めない）

その特殊な事例たる黒き拳を持つ彼女にはトラヴィックは安易に近
づけない。
だからその手伝いをしてくれといわれ、少女たちは念話で頷きを返
す。

「なら、私から！」

『A・C・S・standby』

槍のような形状となったエクセリオンモードから6枚の光の羽根を
大きく広げる。

同時に、先端には半実体化している魔力刃ストライクフレームが現
れる。

それにより余計に杖から『槍』となったレイジングハートをなのは
は構えた。

「エクセリオンバスターA・C・S・ドライブッ！」

瞬間突撃システムともいわれるそれは素早い加速で闇の書に迫る。
その姿となのはの一撃の重さを知る彼女は飛び上がるようにそれを
避けた。

例え速くとも軌道が一直線ならそれは難しいことではない。

攻撃が外れたのは止まれず、そのまま背後にあったビルに突撃する。

「……………」

だが砲撃を得意とするゆえに安心はできないとそのビルに意識を向けた。途端。

闇の書を大きな影が覆って、わずかに太陽光が途切れる。

「っ!？」

咄嗟に見上げた先には大剣を構えたフェイトの姿。

「はあああっ!」

「くっ!」

突き出した手でシールドを張りその刃を受け止める。

ザンバーフォームの魔力刃は確かに巨大だが、それを扱うのは少女だ。

斬撃魔法ならともかく、斬りつけるだけの攻撃なら受け止めるのはまた難しくない。

だからこそ彼女はその行動に訝しむ。少女“たち”自身がそれを解っていないはずがない。

例えばそう、最初に突っ込んできた少女も避けられる事を想定していなかったのか？

「なに、を？」

盾と大剣が火花を散らしながらぶつかり合う中、

一瞬、フェイトの視線が闇の書の背後へとずれる。

意図に気付いた彼女は力技でフェイトを押し返し、その場から離れようとする。

(少し、じっとしてろ)

したのを誰かの声が封じて、動きが止まる。

(ある、じ?)

『Barrel shot.』

僅かに停止した身体に不可視型のバインドを伴った衝撃波が襲う。その直撃を受けた彼女はまるで空中に磔にされたかのように動けない。

「フェイトちゃん!」

「うん、バルディッシュ!」

『Jet Zamber.』

押し返されても待機していた彼女はさらに刀身が伸びたザンバーでバインドされ動けない闇の書を叩き落とす。その刃先ではなく腹で。

「くっ」

防御も回避もできなかった彼女は勢いそのままに地面に落ちる。

衝撃に粉塵が舞い上がり、わずかに彼女を隠すがその姿は影となって見えていた。

「うわあ、すごい」

『ええ、まったくです』

感心するなのはとレイジングハートの視線の先で、
彼女は傷一つない姿で地面にその両足でしっかりと立っていた。

「仄白き雪の王、銀の翼以て、眼下の大地を白銀に染めよ」

その真上。

魔法で作られた四個の立方体に囲まれたはやての詠唱が響いて、
少女達の最後の一手となる魔法が放たれる。

「来よ、氷結の息吹、アーテム・デス・アイセス！！」

振り下ろされる騎士杖に導かれ、立方体が彼女を包むように大地に
落ちる。

圧縮した気化氷結魔法が着弾点から周囲の熱を奪い凍結させていく。

「う、これ、は……」

みるみる凍っていく大地。

そこから足を伝うように全身冷氣に包まれ、音を立てて凍っていく
手足。

動かそうにもまるでバインドに縛られたかのように動かない。
だが、その凍結範囲も胸元辺りまでが限界だった。

「あかん！ 調整失敗した！？」

疾風の書に記録された魔法の中で相手の動きを止めるのに
一番適した魔法を探して、これを見つけたはやてだが、

初めて使った魔法ゆえに微調整がうまくいっていなかった。

「いや、充分だはやて嬢」

しかしトラヴィックはそれでいいと暴風に乗った。

まさに嵐のような風に吹き飛ばされながら真正面から突撃する彼の拳が

深く、深く、凍りついた表層をぶち抜いて彼女の体に突き刺さる。

「っ、な、なにを？」

「頼む、届いてくれえっ！」

疑問の声に答えずにカートリッジをロードしながらさらに深く腕を突き入れる。

その深さと彼女の身体の厚さを考えれば背中から突き出てもおかしくないのに、

なぜかトラヴィックの腕は彼女の“中”から突き出ることはなかった。

「っ！ 見つけた、うおおおっ！！！」

そして彼女から光り輝く何かを取り出すように抜き出し彼はそれをはやてに投げつける。

「はやて嬢、書を開いて！」

いわれるままに疾風の書を開いて、投げつけられた“四つ”の光を受け取った。

「ちよっ、え、な、なんや!？」

『リンカーコア、受領。』

『破損修復スタート、守護騎士プログラム再起動』

訳が分からない中、光を受け取った書は“あらかじめ”設定されていたシステムを作動させる。

はやてがその言葉を理解するまでの僅かなタイムラグで、すべてが始まっていた。

近くの、眼下にあるビルの屋上。そこでベルカ式の魔方陣が四つ浮かび上がる。

「あ、ああっ」

その四色の魔力光が誰のものかなど、はやてには説明するまでもない。

魔法陣から浮かびあがり、実体化していくその姿にははやては涙が止まらなかった。

「っ、みんなあっ!!」

即座にその場へ降り立った少女は困惑した様子の騎士たちに飛びついた。

「あ、主はやて……これは……?」

「私たち、蒐集された……はずよね?」

未だに状況が把握できないながらも泣きながら抱きつく少女を彼女たちはどこまでも優しく暖かに受け止める。

「良かった、はやて」

「うん、うん！」

心神喪失状態だった姿を見ていたこともあって、その光景になのはたちもまたもらい泣きをしていた。

一方、半ば解けかけた凍結状態の彼女と組み合っているトラヴィック。

「まさか、外部から騎士たちを切り離すとは……主はなにを……？」

思いもしない手段とそれを持っていたトラヴィック。

何よりそれを自分が知らなかった事実には彼女は驚いていた。

「君とてあの男のすべてを四六時中覗き見ていたわけではあるまい？
決して見ようしない部分もあった。あいつは、そこにすべての手を隠していた」

管制人格に、ひいては闇の書に気付かれてはまずい計画を彼は頭の中に封印した。

彼女が気遣って決して見ようとしな領域などを利用して。

だから彼女はコウキが最後の手段として残していた計画を知らなかった。

「しかし、マイスターや君まで切り離す手段は私にはない。

私に与えられたのは騎士たちを切り離す拳権限のみ。ゆえに計画を次の段階に移行する！」

彼の手足にあるナックルとシューズがジャケットから切り離される。脱ぎ捨てるように排出されたそれらを気にも留めずに、トラヴィック

クはその姿を変えていく。

「トラヴィック、お前は!？」

「言っただろ? 別に人型にこだわる必要はないと」

ジャケットだけになった彼の肉体ともいえるジャケットはまるで糸がほつれていくように自らを分解し、帯状に再構築していく。

そしてそうなった己自身で両手と両足をそれぞれ縛り、抵抗の手段を奪う。

「こ、これは……防御システムを拘束に応用しただと!？」

「ああ、その発想力は本当に恐ろしいよ。」

だからあとで本人から話を聞けばいい……その時怒るか泣くかは任せるがね」

呻くような言葉を封殺するようにトラヴィック自身ともいえる帯が、二重、三重。

いや、その何倍にも彼女をぐるぐる巻きに縛り上げていく。

それは彼女の姿が身体のラインすら見えなくなるまで続いていき、最終的には巨大な黒い繭の形になってようやく止まった。

正確にはそれでトラヴィックのジャケット部分を使い果たしただけなのだが。

「あれは、いつたい？」

声を挟む暇さえなく事態が動いてしまつて、誰もが理解が追い付かない。

そこへ繭の中から何かが飛び出し、騎士たちの元へ飛んだ。

咄嗟に警戒して構えた彼女らの前に転がり落ちたのは、黒いクリスタル。

待機状態のトラヴィックだった。

『すまないがね、身体がなくなったので誰か持ってくれないか？』

正体を知って安堵しザフィーラが彼を持ち上げた。

矢継ぎ早に来る質問を彼はとりあえず、後で、と誤魔化して全員に聞こえるように通信も用いて言葉を発する。

『一応これで時間は稼げる。あとのことについて説明がしたいので全員で一旦アースラに戻ってほしい……あとリンディ嬢、少しお願いが』

『なに、かしら？』

硬く不機嫌さがにじみ出た声にわずかに沈黙したトラヴィックは、しかし疲れたように溜息を吐くとその願いを口にした。

『……………グラム提督を、連れてきてほしい』

それが彼の計画を完成させる最後のピースだった。

第一VS第六（後書き）

分けるかどうか悩みましたが次話との関係でここまでを一話としました。

なのはたちのデバイスのフルドライブモードの解説が
いっさいなかったのはこのため。

そして誕生日に贈られたペンダントは実はデバイスでした。

あの時コウキが

（借りを作りたくない相手に借りを作って“組み立てた”からな…）
と喋ってた地味な伏線のようなやくの回収です。

ちなみに借りを作ったのはリンディです。

管制人格は第五扱いが多いけど俺的には第一だと思っている。

上位プログラムだし、おそらく作られたの彼女からだろうし。

そして次回はコウキの計画のネタ晴らしとなります。

夢の終わり（前書き）

??と表記されているのが地味に伏線です

夢の終わり

12月??日 PM??:???

闇の書内部 精神世界

黒く、暗い闇。

ただそれだけが広がる空間。

そこで向かい合っている男女が一組。

周囲は闇なのになぜか互いの姿ははっきりと視認できていた。

「やっと来たな、おい」

遅いぞ、と軽く文句をいいながらどこかうつろいでいる少年。

見間違えるはずもない彼女の主・日野コウキだった。

「あ、あるじ……これは？」

だからこそ彼女は困惑していた。

これまで闇の書と融合暴走を起こした主は例外なく自らの意識を失い、

せめて、と管制人格である彼女が見せる幸福なユメの中に消えていった。

「なぜ、そのようにしつかりと意識を？
い、いえっ、それよりも主は感情に吞まれてしまったはずでは！
？」

目の前の少年の“いつも通り”の顔は、今だけは彼女を混乱させる。彼女は確かに感じた。騎士たちを失った痛みと苦しみ。救えなかった嘆きと傷つけた者たちへの怒り。そして、絶望。それに反応して完成した闇の書は起動し主を飲み込んだのだから。なのに

「いや、まあそれはその……………すげえ言い辛いといつかなんといつか……………」

なぜ彼はイタズラがばれた子供のよ様な顔をしているのか。繋がっている彼女にはその『困ってる』感は伝わるが同時になぜ『自己嫌悪』を彼が感じているのか解らない。

「えっと、まず起きてるのはそういう仕込みを事前にしてたから。眠らせようとする力が加わると逆に目が覚めていくように」

一番の問題をとりあえず横に置いたのを感じながらも、彼女は起きていた理由には納得する。なぜそうしたか、どんな方法を使ったかは疑問だが、彼ならそんな事をしていても、あり得ない方法を見つけ出しても、おかしくはない、と。

「うん、なんか理解されてんだが諦められてんだが微妙な感じだけど、

そうした理由についてはまあ簡単にいつてしまつとここでお前と話をするため、かな？」

「わたし、と？」

「ああ、これまで隠していた事。これからしようとする事。表にいる連中にはトラヴィックが説明しているだろうから……」

彼女には自分から説明する。と語る主に管制人格は少し困惑する。彼の言い分が、ではない。彼の語ろうとしている事が、読めない事に。

「やっぱり“こう”すると解らないんだな？」

それが彼に伝わって、微苦笑を浮かべる。

彼からすれば、なんて単純な、と言いたくなる方法だったのだ。

「意外な盲点だったよ。」

お前に筒抜けなのって『感情的な思考』だけだったんだ」

「なっ、そんなまさか!？」

あり得ないと彼女は思った。

確かにこれまで彼から流れてくるのは『感情』が多かった。

しかしその場で考えている事や将来、騎士やはやてたちについて。

様々な事を考えているのは、その内容までも伝わってきていたのだ。だからこそ彼がどうすれば『全員』を救えるか悩んでいたのをずっと前から知っていた。

「いや、それは違うぞ。だってそれは感情的な思考だろ？」

「あっ！」

誰かを思う気持ち。

助けたい。一緒にいたい。幸せになってほしい。

そこから派生して悩んでいた彼のそれらの思考はまさに感情だった。

「頭でそういうのを一切排除した論理的っていうか合理的っていうか。」

そういう感情が入ってない思考ってのに切り替えると感情がいくら暴走しても

この思考には影響がない。そしてそれはお前には伝わらないんだ」

ただし、それも彼女がコウキの中をすべて覗こうとしていないからだ。

本気で覗き込めばこの二人に互いの見えない部分はなくなる。

けれどそれはコウキからすればプライバシーを侵す事であり、管制人格からすれば不敬そのものであったので行われなかった。

「だから私が知らない事を主は色々していたのですね」

トラヴィックの真の姿。

そこに隠されたデバイスの解除コード。

取り込まれた騎士たちを切り離す魔法。

おそらくは他にも色々とあるのだろう。と考えたが、

それを説明するといっている以上彼女は主の言葉を待った。

「ああ……すべては、この状態にするために」

「いまの状態？」

しかし出てきた言葉に彼女は首をかしげた。

『合理的な思考』というもので考えているせいかな。

そのニュアンスの真意が彼女にはよく伝わらない。

「騎士達とはやてが切り離され、俺とお前がこうして向かい合っている状態だ」

「え……いえ、待ってください。その言い方ではまるで！」

言葉だけを受け取るならそれは現在の状態になるように、まるで彼自身が策謀し動いたかのように聞こえた。

現在の結果は彼自身や騎士たちが傷つき、倒れたゆえの状況だ。ならそれすらのコウキの予定通りだったのか？

「もちろん俺がそうなるように仕組んだわけじゃない。

けど、そうなった状況を利用しなかった、とはいわない」

それを否定はしながらも、利用はした。と彼は隠すことなく口にした。

一切の澱みなく、彼女をまっすぐに見詰めながらはつきりと。

そこには迷いや戸惑い、後悔の色がまったく見えなかった。

「……………主」

「なんだ……………」

対して、少し考えるように一回だけ瞼を伏せた彼女は、表情を故意に消した彼にいつもの優しい笑みを向けて微笑んだ。

「あなたは時々、どうしてそう偽悪的に振舞うのですか？」

「……………」

予測していなかった。しかし凶星な言葉に、彼の目は大きく泳いだ。彼女が11年前からずっと見守っていた少年はなぜか、

自分を悪者にしたがる傾向がたまにあったのだ。

「主からは自己嫌悪と罪悪感が伝わってきます。

「ご自身でそう思っておられるのなら、それでいいのではありませんか？」

それは彼女からすれば彼の優しさや“好ましい”甘さゆえだと思っている。

だから自分の合理的で、ある意味冷たすぎる思考に嫌悪してしまうのだと。

「……俺は、あいつらの襲撃が解ってた。それを利用する気だった。シグナムたちがこの事件のどこかで蒐集される可能性だって知ってたし、

あいつらを傷つけるのが俺の心をかき乱すのに効果的なのもわかってたけど、俺は……」

それを阻止しようとしなかった。

彼はそういつて自分を責めた。けれど彼女は首を振る。

「主、あなたが気付いていたのはあくまでそれら個々の可能性です。いくらあなたでもそういつた個別の可能性をすべて繋げて考えるのは難しい」

あくまでそれらは彼が気付いていた『可能性』の一例に過ぎない。出来る限り様々な状況を推測していたがその模索には限界がある。ましてや彼にはトラヴィックの作成や事件捜査、闇の書関連の問題など。

他に考えなくてはいけない事が多すぎた。

「それに襲撃を予期していたとはいえ、その目的が騎士たちと気付いたのは

あの使い魔たちにさらわれたあとのことでありませんか？

なら念話も声も使えなかった主にそれを伝える手段はなかった。

お気にすることではありません」

よしんばなんらかの方法で伝える事が出来たとしても、

騎士たちの行動に何か違いがあったようには彼女は思えなかった。元より畏だと承知で彼女達は救出に向かったのだから。

「私はむしろ、尊敬します。あなたはそれらの対処法は用意していた。

そしてあんな状況で、それがきちんと動くように対処していた。

やはりあなたは我らが誇る主です」

本人は知っていた可能性を潰さなかった事と、

結果的にそれで彼女たちが犠牲になった事を利用したのを

許せなく思っているのだが、彼女からすれば好ましく見えた。

なにせ繋がっている彼女に強烈に届くほどの痛みと嘆きと怒り。

そんな心情の中、はやてが暴走に巻き込まれないように権限を奪ってリンクを切断。

騎士たちの犠牲と想いを無駄にせず、後に繋げて助け出したのだから。

たとえそれがあらかじめ準備されていたことでも、簡単に出来る事ではない。

「……………なんだろうな。」

お前に褒められるとすごく背中がかゆい」

照れゆえか。

居心地悪そうにするコウキに彼女は少し歩み寄った。

「お手が届かないようなら、かきますが？」

「……相変わらず微妙に天然だよな、お前」

背中に回されそうになった手をやりわり拒否して額を押さえる。
「すみません。と律儀に謝る姿に溜息が出る。ただしその顔は笑っていたが。」

「あの……それで主。このあとはどうするのですか？」

その笑みを見て、彼女もまた自然と笑ってしまいそうになったが、ふと、一番の問題が解決していない事に気付いて横道にそれた話を元に戻した。
「騎士達とはやては助かったが目の前の主が取り込まれている現状に変わりはない。」

「褒められた後だと、余計に怒られそうで言いつらいんだが……」

“あなたはどうするのです”という想いが伝わってきて、彼は苦笑する。

その表情と伝わってくる感情に彼女は思わず息を呑む。

「おじさんたちの計画は知ってるな？」

「はい、闇の書を完成させ融合暴走状態にして主ごと凍結封印。」

その後、人が踏み入れられない超重力の氷結世界にて隔離する、ですね」

内容が不愉快とはいえ確認として訊ねられた事に寸分の間違いもなくしっかりと答えるのは実に彼女らしい。

それに軽く頷きながら、コウキはひどく真剣な顔で告げた。

「それを丸ごと“こっちが”使わせてもらっ

「え？」

言葉の意味を、その裏を理解するまでになぜか。

繋がっているはずの彼女はものすごい長い時間を要した。

彼はわざとといえるほどに感情的な思考をしていたというのに。

それほどまでに、受け入れがたく、そして受け入れたい言葉だった。

「ま、まさか主……あなたは……」

信じられないといった顔でコウキを見るが、彼は黙って頷く。

その顔はとても真剣で、そして何より心から伝わる想いは真実だった。

彼女の目から一筋の涙が零れ落ちる。あまりにその気持ちが悲しくて、嬉しかったのだ。

「ダメです、そんなっ……………“私と一緒に”封印されるなんて！
？」

しかしそれでも彼女はそれを否定しなければならなかった。

グレアムらの計画をそのまま使う。それをコウキ自身が選ぶ意味は単純明快過ぎた。

共に封印される事で、それからずっとここで彼女と一緒にいるつもりなのだ。

「ダメっていわれてもな、もう引き返せる状況じゃないぞ？」

苦笑するコウキに、いいえと彼女は食い下がる。

自分の為にそんな決断をしてくれた事は素直に嬉しかったが、それ以上に彼をこんな薄暗い闇の中に閉じ込めたくなかったのだ。

「主なら、管理者権限を使って私ごと外に出れるはずですよ！」

「けどそれが無意味なことかも知ってるはずだ」

けれど即座に言い返されて、言葉に詰まってしまふ。

その選択肢が選べるなら、彼はとっくにそれを選んでいる。

「融合して、より解った。」

思っていた通りお前の身体は闇の書そのものと言っている。

防衛プログラムを切り離して破壊してもお前は確実に再生の基点になる」

元々はそうではなかったが歴代の主の改竄のために書の機能は変化していき、

転生機能と無限再生を望まぬ形で手にいれ、防衛プログラムは暴走を始めた。

管制人格たる彼女はその名が示すとおりそれら全てを司っている。危ない機能全てを切り離せば安全にはなるがそれは実質彼女を破壊することに等しい。

「もう元々の形が残っているのはお前の人格部分だけだ。」

せめて夜天の魔道書の形が解っているなら修復のしようもあるが……」

もはやそれは失われた技術と知識だ。無限書庫を調べても出てこないだろう。

つまり彼女を外に出して助ける方法はないのだ。

「無い以上、こうするしかなかったよ」

ニヤリとしようがないだと笑う姿に気負いや悲壮感はいかたつかない。

なぜそんな風に笑えるのか。彼女は理解出来るがしたくはなかった。

「主……お気持ちは嬉しいですが無理です。」

あなたはこの場所にずっといられるわけではない。

今あなたと私は融合している状態ですが、その状態は長く続きません」

融合騎。ユニゾンデバイス。

これには様々な問題点がある。その最たるものが融合事故。

本来は意識を失った術者をカバーするためのシステムが誤作動して
る状態。

デバイスが術者の肉体をのっとり、勝手に行動にしようとするのだ。

いわば闇の書事件において主の身にほぼ毎回起こっている出来事。

主の死亡原因は管理局からの攻撃を除けば、実は融合事故による負担が多い。

そしてユニゾンはそもそも長期間し続ける事を前提に考えられていない。

常に融合事故を起こしているようなコウキと彼女の状態は

コウキにとって一方的に強い負荷がかかって、最後には死亡してしまおう。

「だからせめて……」

「ああ、だからまず俺のプログラム化からしようかなって」

あなただけでも。

そう続けようとした言葉を遮るように出た発言に思考が止まる。

「……………あるじ、いまなんと？」

「だから、ユニゾン状態を維持できないのは俺が生身の人間だからだろ？」

「ならそれに耐えきれぬお前たちみたいな魔法生命体に変えてしまえばいい」

「この空間内ならそれが出来るだろ？」

と聞かれて思わず可能かどうか調べ計算した彼女は愕然とする。なにせ、可能だ。

融合事故でユニゾンしている彼はいま現在半分そうになっているに等しい。

あとは残りをプログラム化しつつ肉体を捨てれば、確かにそれは可能になる。

「そうしてここにいられる時間さえ作ってしまえば、後はこっちのもの。」

管理者権限で中から闇の書を改竄しまくって、安全なものに作り変える」

本人にそんな気はまったくくないのだが、

啞然となっていた彼女を追い込むかのようにさらに衝撃的な話をする。

「そ、んなことが……………」

「できるだろ？ 今までの主が出来たことが俺にできないわけあるか。」

「ましてやこっちは時間だけはたっぷりあるんだ」

元に戻すことができないなら。永久封印が出来ないのなら。封印ができている間に、安全な物に作り変える。それが悩み続けた彼がようやく出した『答え』だった。

「……………無茶苦茶です、そんなのいつたい何年かかるか！」

頭で冷静に封印状態の維持さえ完璧なら『可能』である。

と判断してしまっている自分を無視して、受け入れようとしなさい。それが一年や二年で完了するような作業ではないと解っているからだ。

「都合よくいつて10年から20年。へたすれば1000年超えるよな。

なにせ数百年分の改竄とバグだ。簡単にいくとは最初から思っていないよ」

なのにその年月を彼は容易く口にする。

それだけの年数がたってしまえば、もう彼を知る者はすべて生を全うしている。

すべてうまくいつても、出迎えてくれる者は一人としていない。

「騎士や主はやてたちはどうするのです！」

主を想ってくれている人たちを、あの娘らの気持ちを！」

そして何よりその想いを無視した行為であった。

これから彼女達はコウキを助けられなかった後悔を背負い続ける事になってしまう。

彼女はそれを彼に解らせて考えを変えさせようとした。しかし。

「……あいつらを傷つけて悲しませるのは正直つらい。
厳密には死ぬわけでもないから、割り切ってもらう事も難しいだ
ろう」

「なら！」

「でも、あいつらはもう独りぼっちじゃない。

一緒に泣いて、一緒に笑ってくれる人がいる。

何でもない日常と大切な思い出をちゃんと共有してる。

それがどれだけ力になるか、俺はよく知っている」

だからこそコウキは信じたのだ。

今どれほど傷ついて、涙をどれだけこぼしても。

きっと彼女達ならそこから一緒に立ち上がってくれると。

失った物ばかり見て、手にしてる物を見忘れる子たちじゃないと。

自分がそうして周囲の誰か達のおかげで助かったように。

「だから、今度はお前の番。

もう絶対にお前を独りぼっちになんかせせない」

自信と覚悟を込めた言葉とまっすぐな視線に、思わず彼女は目を伏
せてしまう。

嬉しく想う気持ちと彼を巻き込みたくない気持ちがぶつかりあって、
自分が何を考えているのか。何を願っているのかわからない。

「な、なんでそうなるのです……どうしてそんなっ！

あるじは私が覚悟していた事を知っていたはずです！

私はあなたの決断なら、いつでも切り捨てられていいと思ってい
た、なのに！」

感情があふれ出して止まらない。

いつもは穏やかなはずの気性が今だけは妙に激しい。

彼女はもちろんそれを簡単に選べるような人でないのはわかっていた。

反面、ギリギリまで悩んでも最後に決断をしない人でないのも。

だからきつと最後にはそれを選んでくれると、自分を切り捨ててくれるはずだと。

そんな妙な信頼を裏切られたように彼女は感じていた。

「……なにを選んで誰かが悲しんで傷ついて、俺も後悔する。

ならさ、例え雲を掴むような話でも、無いに等しい希望でも、諦めたくなかったんだ……ただの俺のワガママさ」

彼女のその激しい感情の吐露に対して、穏やかに。

けれど譲る気のない意思を込めてそう返した。

だって、何かを切り捨てるにはもう、彼は贅沢な暮らしをしすぎた。

失い傷つくばかりだった日々が続いて、ようやく手にした家族。

そんな手に入れたものを、彼はもう手放すことに耐えられない。

これはそんなワガママな話だと彼は簡単に片づける。

「どうして、そこまでわたしに……」

家族と思ってくれるのは嬉しい。けれど彼女からすれば、

そう思ってもらえるほどの時間を彼と過ごした認識がなかった。

あくまで自分が一方的に見守っていただけ、だと思っていた。

そんな気持ちから出た問いかけに、しかしコウキはあっさりど、

前にも言っただろ、と前置きしながら清々しい笑顔で告げた。

「お前には世話になってばかりなくせに泣かせてばかりだったからな。

せて……一緒にいてやることぐらいはさせてくれよ」

「つつ……馬鹿です！ 主は、大馬鹿です！」

そんな理由で、そんなことでこんなっ、うつつ！」

暖かい言葉が、嬉しくて。

自分にまっすぐ向けられる顔が、まぶしくて。

思わず感極まって、キレイな赤い瞳から涙が零れ落ちる。

それぐらい。などといいながら彼が差し出す代償はあまりに大きい。主に仕える融合騎として、家族のひとりとして、本来なら止めなくてはいけない。

けれどそれ以上にもう独りにならずにすむかと思うと涙が止まらなかつた。

「また泣くし……まったくお前はどうすれば泣き止んでくれるんだよ……」

困ったような笑みを浮かべながら、彼女を引き寄せる。

自らの胸元に顔を埋めさせるようにしながらその嗚咽ごと抱きしめた。

「すっ、すいまっ、せん……あるじ、わたし、わたしはっ！」

「ああ、もういいから好きなだけ泣け……俺が今日で終わりにさせてみせるから」

慰めるように右手で背中をさすりながら、囁かれた優しい言葉に彼女は声もなく、何度も何度も頷いて彼にしがみついた。

ああ、残念だが今日が始まりだ

「「つつ！？」」

その驚きは“何に”対してか？

第三者の声が聞こえたからか。何かを予感させる言葉の中身か。それとも。

その発言をした“本人”ですら驚いている事に、驚いてか。

「つつ、かはっ！」

呻きと共に口から飛び散るアカイナニカ。

それを、まともに浴びたコウキは目の前のアカイ光景に思考が止まる。

なぜ彼女がそんなアカを吐いているのか。

そしてなぜ、自分の左腕が彼女を貫いているのか。

「ある、じ……」

訳が分からない。

困惑と驚愕の色を乗せた目で同じく困惑したまま崩れ落ちる彼女を見送る。

あとに残ったのは彼女のアカで染まった左腕と、左の口許だけが笑っている彼と

「あ、あ、あ……そ、んな、う、うわあああああ……！！
！！」

冷静な思考すら埋め尽くす、少年の絶望だけだった。

さあ、闇の誕生を祝おうじゃないか

1900

悪夢の始まり

12月24日 PM02:48

無人世界 廃墟群 闇の書の繭

黒い繭。

内部に暴走する闇の書が囚われた檻。

ビルとビルの間大きな通りと思われる場所に横たわっている。それを囲むように彼女らは沈痛な面持ちでその繭を見詰めていた。

トラヴィックからの説明により彼が進めていた計画の全貌を知った彼女たち。

怒る者、嘆く者。反応はさまざまだったが、外にいる彼女らにはすでにこの事態をどうにかすることはできなかった。

しいて出来ることがあるとすれば、彼の望む通りにしてあげる事だけ。

たとえそれが彼との事実上の別れになってしまうとしても。

「……こんなの、ありがよ……」

しかし、頭で解っていて納得できるものではない。

彼と彼女がいる繭を目の前にして、黒服のヴィータは自らの拳を握りしめた。

「コウキはっ、なんも悪いことしてないじゃないか！

罰を受けるのはあたしらだろ！　なのにどうしてっ、どうしてコウキが！」

「ヴィータ……」

まるで、罰を受けるかのように封印されなくてはいけないのか。言外に含まれる言葉を察して、同じ守護騎士たちは言葉が出ない。

「でも、それがコウキさんの望みなんだ……」

彼女ら守護騎士たちより前。

より近い場所で繭を黙って見つめていた少女はぼつりと呟いた。

「なのは！　お前はそれでいっ！？」

背中を向けて語る少女にヴィータは肩を掴んでこちらを向かせた。

それでいいのか。そう口にするつもりだった言葉が、出てこなくなつた。

「っっ、ちくしょうっ！ー！」

やけくそ気味にアイゼンを何も無い地面に叩きつけた。

彼女がそうしてしまうほどに、なのはの顔は見られたものじゃなかった。

言葉で表現することも出来ない表情に誰もが何も言えない。

「なのは……」

「なのはちゃん」

だから少女たちは肩を寄せ合うように抱き合っただけを見詰めた。別れるためのなのか。きつとまた会えると思えばいいのかわ。

それすらも解らないまま彼女たちはずっとその繭を、その向こうを見詰めていた。

「プレシア、えっと、だいじょぶか？」

そんな少女たちの背中を見詰めている彼女たちの中で、アルフはプレシアに言葉をかけた。誰もが程度の差はあれど無理はしていたが

彼女が一番、目に見える形で疲れ切った顔をしていたと感じたからだ。

「……あんな小さな子たちが立ってるのに、私だけ甘えてられないわ」

「ホント……困っちゃうわよ。子供なのに強くて、強がって。」

そんなの見せられたら、大人の私たちはどうすればいいのよ」

おかげでみっともなく泣けやしない、と。

プレシアの言葉を少し茶化したように無理に笑うシャマル。

まったく。と寂しげながらも同じように笑ってみせるシグナム。だがそれが、少女たちを見守っている彼女たちの本心でもあった。

「あたしはまだ、どっちかという子供だけど、ちょっと解るかも」

それは中身がまだ幼いアルフといえど少しは解る。

彼女の主人もあまり人に頼るタイプではないから。

頼ってもらはずの立場なのに頼られないのは、少し寂しいし辛い。

「ええ、そうね。

気にしてくれてありがとうアルフ……けど大丈夫。私、諦めないから。」

これから研究して、外部からでも出来る手伝いが無いか探すわ」

それが、彼女が昨晚ひとりで泣きながらも出した答えだった。

「なるほど、お前にはそれが出来たのだったな。

戦うしかできない俺たちにはできん手段だ………無理はするなよ」

「はい」

驚いたように、感心したように頷いたザフィーラ。

首元にかけられたトラヴィック共々、彼女の決断を応援しつつ軽く釘も刺す。

同じ轍を踏まないとは思いますが、彼女は家族のために無理をしてしまう人だから。

「それで再会できたら、その時はみんなで引つ叩いてあげましょう。

こんなにイイ女たちを待たせるんだから！」

クスリと笑って皆がそれを受け入れる。

今はそんな“あり得ない”話でもしていないと心が折れてしまいうだった。

「……………」

そんな彼女たちの様子を上空から見守っているクロノには言葉がない。

管理局としても選択肢はふたつしかない。

いつも通りにアルカンシエルで吹き飛ばすか。彼のプランに乗るか。前者はあまりにも彼の犠牲が無意味になりすぎる。

後者の凍結封印は決定的な問題点が解決されていない。

もっとも、それさえもコウキは都合よく利用したのだが。

「クロノ……こっちは終わったよ」

背後から聞き慣れた少年の声がして振り返る。

この周辺を覆う結界を張ったユーノである。

「結界は完璧だ。

外からの監視も出来ないし入れない。中にいるのは僕達だけだ」

これからする行為は色んな意味で表沙汰にしづらい。

そして『力を求める者』の存在をこの事件を通してよく理解していたクロノは

出来るかぎりの可能性を潰すためにユーノに完璧に近い結界を張らせたのだ。

「分かった。あとは君もなのはたちの所においてくれ。」

「こういう時は親しい人間が近くにいたほうがいい……」

「うん………あの、クロノ……」

一旦は言うとおりに離れようとした彼は立ち止まって背中越しに語りかけた。

「なんだ？」

「彼ってさ、卑怯だよ。張り合う気なくすよ、これじゃ」

「……ああ、まったくだ」

言葉の裏にある幾万もの思いを察して、クロノは大きく頷き、ユーノは飛び去った。

一緒にいる時間は彼女達に比べると少なかったが、それでも友人といえた。

コウキを含めて三人とも同年代のそれが少ないせい、実は妙にウマも合っていた。

単純に比べることはできないが彼らもまた表現しきれない感情を抱えていたのだ。

「わたしたちも、準備は完了した」

そうして、まるでユーノが去るのを待っていたかのようなタイミングで

彼 ギル・グレアムは管理局の提督服姿のままクロノの近くに飛び寄った。

犯罪者であるはずの彼が手錠もなくここにいて自由に動いているのは事情がある。

すべてはトラヴィックがした彼らに対する要求だ。あまりにも単純

明快な。

まず彼らの計画通りの凍結封印と人が踏み込めない世界への隔離。そして、それ以後の『監視と守護』だった。

『あなたたちにはこれからの一生のすべてをかけて守ってもらおう。マイスターが決断した恐ろしく馬鹿げた決断と、彼らが眠る闇の書を！』

そしてその見返りとして、彼らの罪をもみ消すとまで言った。

その時点で彼らの罪の実態に気付いていたのはクロノ達一部のアースラスタッフと

ここにいる彼女たちだけ。記録や情報に関してもアースラにあるだけ。

何より本気で封印した闇の書を護るとなれば彼の管理局での権限があると無いとは大きく違う。

トラヴィックはそれらすらすべて使って、守れといったのだ。

その裏には法の罰など与えてなるものか。という個人的な感情もあったが、

彼らにとってそれはこれとない罰になっているのも事実だった。

元々の計画では信用のおける部下に監視を託し、自らは自首するつもりだった。

だがそれを許されずに今まで憎み続けていた闇の書を護るために全力を尽くす。

法的な罰は与えられず、しかし彼らが一番に心を許すハラオウン親子には知られ、

そんな中、残りの生涯をかけて守り続けるばかりか、コウキの作業が長引けば受け継ぐ人材の育成や選抜もしなければならぬ。自らの良心の呵責の中、死ぬまで。

グレアムらはそれを受け入れ、真相を知るアースラスタッフは沈黙した。

むしろ職務違反も甚だしいがそれ以外に彼の決断を無駄にしない選択がなかった。

「……リーゼたちの配置は？」

「すんでいる。あとはデュランダルを私が受け取るだけでいい」

いわれて繭の周囲を見れば自分と同じく上空から見下ろす使い魔姉妹がいた。

彼女らとグレアムが力を同調させた状態で氷結魔法に特化したデュランダルを使い、

あの黒い繭ごと凍結封印。以後はアースラで隔離用の世界に運ぶ予定だ。

「わかりました……では、これを」

クロノの手から白いカード状のデバイスが差し出される。受け取ったグレアムがそれを起動させ、魔導の杖とする。

「父さんが使ってたやつに似せて作ったんですね」

「ああ……ただの感傷でしかないがね……」

鳥のクチバシのような白い先端とその中央には青い小さなクリスタル。

その形状はかつてクライド・ハラオウンが使用していたデバイスに酷似していた。

「最初は闇の書を永久封印する功績を私らの中だけでも彼の物にしたかった。

だが、いまは違う。これだけは……何の罪もない子供の人生を無茶苦茶にするのは私だ！」

そしてそれが彼に与えられる最大の罰。

コウキは本当に、彼らを恨んではいなかった。

やられた事に対してはその場で怒り狂ったこともあったが、やはり彼は懐に入れた相手や恩義のある相手に負の感情を向けられない。

誰かが言った通り、厳しいくせにそれ以上に甘い男なのだ。

だからこそグレアムは自分を恨んでもいない人間を、罪もない子供を封印するという罪と罰が与えられる。

その強い「自分は罰せられなくてはいけない」という強迫観念。

おそらくはそれがあることを見越しての要求だったのだろう、とクロノは思う。

「すべてはあいつの手のひらの上、か……馬鹿野郎」

ぼそりと呟きながら、頭を左右に振って気持ちを切り替える。

グレアムもそして少女たちも正常な精神状態ではない。

なら、せめて自分がしっかりしてこの封印作業を見守らなければ。そんな使命感を持つことで彼もまた正常さを保とうとしていた。

『クロノくん、みんな、そろそろ時間だよ……』

あらかじめ決めていた封印予定時刻。

それが来たことを告げる声に、わずかに身体を震わせた彼女たち。しかし、ひとり、またひとりと繭から遠ざかるように飛び上がる。

繭の周辺にはグレアムとリーゼ姉妹のみ。

三人で三角形を描くようにその頂点に立って繭の上空でそれを囲む。クロノや彼女たちはその周辺を円で囲むように見据えていた。

「……始めよう、アリア、ロツテ」

「はい、父様」

グレアムがデュランダルを構え、リーゼ達もまた複数枚のカードを手に集中する。

彼らが用意していた極大の凍結魔法は個人でも使用可能だが彼らは三人でする事に決めた。

より万全を期して効力を高めるために、そして全員で罪を背負うために。

「悠久なる凍土」

「凍てつく棺のうちに」

「永遠の眠りを与えよ」

それぞれが繋げるように呪文を紡ぎ、大型のミッド式魔方陣が足元に展開される。

そしてそれが徐々に下がりながら繭を包み込んでいく。
あとは、ただ一言。魔法の名を唱えるというトリガーを引くだけ。

「「「エターナル……！」」」

塵芥どもよ、お遊びはそこまでにしておけ

グレアムが杖を振り上げ、リーゼたちが腕を振り上げた。まさにその瞬間。

ありえない存在が眼前にあらわれ、彼らの動きと思考は止まった。

「提督、アリア、ロツテ！」

誰かの悲鳴のような声の中、光が放たれ、刃が振るわれ、氷が躍った。

12月24日 PM03:05

その乱入者の出現に何より混乱したのはエイミィだった。

「え、うそ一体どこから!？」

乱入者たちの攻撃でモニターが乱れているので姿をまだ確認できていないが、

彼女は必死で端末を操作しながら、出てくる結果に愕然とした。

「やっぱり近づいた痕跡もないし転移反応も無い!？」

「じゃあ、いったいどこから……艦長! 艦長!？」

「あ……………」

まるでそこに突然出現したとしかいいのようない結果に困惑した彼女は

上司であるリンディに指示を仰ぐように呼びかけたが、反応がない。彼女はただ茫然とした顔のまま、モニターを注視していた。

「え、ええ!？ なに、あれ、いったい誰よ!？」

「うそ…………ど、どうして?」

そして困惑の声が近くから聞こえてきて、エイミィはそちらにも視線を向けた。

繭の状態とはいえ危険な場所である現場に行けなかったアリサとすずか。

少女らもまたリンディと同じく、啞然、茫然といった顔でモニターから目が離れない。

それらを経て、エイミイもまたとつくに正常に戻っていたモニターに視線を戻す。

まず見えたのは“撃墜”されたグラムとリーゼたちに付き添うクロノ。

彼も、そして他の彼女たちもまた。ここにいる三人のように驚きが全面に出た顔を向けて、同じ場所に視線を集中させていた。

「っ、うそっ！ え、なんでフェイトちゃんたちが」

皆が注目していたその黒い繭の周囲に立つ四つの影。

そのうち三人は明らかに少女の姿で、見知っている者にあまりに似ていた。

「もっひとりずついるのよっ!？」

12月24日 PM03:07

無人世界 廃墟群 闇の書の繭周辺

突然の襲撃とそれによりグラムらの撃墜。

それだけでも衝撃に値する出来事だったというのに、それを行った

存在の姿に

全員理解が追いつけずに、ソレを理解するために考えることすらまともにできなかった。

アリアを砲撃で撃墜した黒の防護服を着込むショートヘアの、どこかなのはに似た少女。

ロツテを斬りつけた青い髪とマント姿の、どこかフェイトに似た少女。

繭の上に立つ紫の杖、書、騎士服を持つ白い髪の、どこかはやてに似た少女。

多くが自分やよく知る少女たちに似ていた彼女らに目を奪われている中。

一人の少年と一人の母親だけが、もうひとつの影から目が離せなかった。

グレアムを氷の礫つがひで襲った軍服のような黒い防護服とデュランダルに似た黒いデバイスを持つ男。

「と、父さん!？」

『あなた!？』

その面差しは間違いようがないほどに、彼だった。

倒れ伏せるグレアムたちもまたその顔を愕然とした表情で見上げて

いた。

「え、じゃああれが亡くなったっていうクロノのお父さん？」

「え、ええ！？ 私たちのそっくりさんまでいるし、いったい全体なに、なに！？」

驚きと困惑、疑問だけが彼女たちの思考を埋め尽くす。
繭を囲む四人に対して警戒はしつつも誰もがどうすべきか判断が下せない。

「ふはははっ、僕の恐ろしさにみんな驚いてるね。

すごぞ、僕！ エライぞ、僕！ カッコイイぞ、僕！！」

それに対して一人で盛りあがるフェイト似の少女を尻目になのはに似た少女がはやて似の少女に短く進言する。

「……禍風まがかぜ、そろそろ自己紹介してあげては？」

感情の見えないそれに禍風と呼ばれた少女は楽しそうに答えた。

「そうよな、星光せいこう。

うるたえる塵芥どもを見ているのは楽しいが、次は絶望する姿も見てみたい。

なあ、氷結の？」

「君も好きだな……まあ俺も人のことはいえないが」

氷結と呼ばれた男は興味は少女と同じような嗜虐的な笑みを浮かべて頷く。

そうであるつ、そうであろうつ。と彼の返事に気をよくした禍風は場にいるすべての者に聞こえるように声を張り上げた。

「小鴉こからすども、よく聞くがいい！」

我らは闇の書のマテリアルにして、新たなるヴォルケンリッターである！」

守護騎士たちがその発言に驚くのを無視して、彼女らは続ける。最初に前に出たのはなのは似の少女。姿形は似ていても、佇んでいるだけで受けるプレッシャーは桁違いだ。

「僭越ながら、私から自己紹介しましょう。

私は『理』のマテリアル。星光の殲滅者。

すぐにお別れでしょうから別に覚えなくてもいいです」

丁寧でなのはに似た声ながら、それが語る内容は存外に物騒であり、お前たちを殺すといっているに等しかった。

「次は僕！ 僕は『力』のマテリアル。雷刃の襲撃者！ 君たちの命を狩る者さ！」

バルディッシュに似たデバイスを構えて、ポーズを決めた雷刃。声と見た目はともかくとしてあまりフェイトには似ていないようである。

「私は『技』のマテリアル。氷結の断罪者。

それとも、クライド・ハラウンとでも名乗ろうか？」

クライドに似た彼は、しかし。

そのあまりに軽薄で残虐さがにじみ出る笑みに中身は別物だと確信

させた。

「そして、最後の我は『知』のマテリアル。禍風の破壊者。
お前たちに絶望という名の風を届ける者だ」

リーダー格と思われるはやて似の少女は尊大な態度の仁王立ちで
繭の周辺を飛ぶ彼女たちを見上げながら、見下ろしていた。

見慣れている少女の姿に似ていながら、かかる圧力は並フレッシンヤーではない。
それに誰よりも我に返ったのは自らの名を語られた彼女達だった。

「お前たちが新しいヴォルケンリッターだと!？」

「それはあたしらの名前だろうが!」

「ふん、何を言うか」

その名に誇りを持っていたがゆえの憤慨を鼻で笑う禍風。

「闇の書からお前たちが切り離され、その欠損を埋めようとするの
は当然のこと。

それにヴォルケンリッターとは闇の書の守護する騎士のことだ。
我らが名乗って何が悪い」

むしろ自分たちにこそ、その名はふさわしいと語る姿に気後れは微
塵もない。

つまり自分たちは闇の書を護るための存在だと。その騎士であると
も告げていた。

「僕たちが封印しようとしたから、闇の書の防衛プログラムが生み

出したのか!？」

だからクロノはその邪魔のために生み出されたのだと推察する。が。

「当たらずとも遠からずだな、クロノ……」

姿ゆえかどこか馴れ馴れしい態度に苛立つものの、その答えから少なくともマテリアルたちがこちらの邪魔をしに来た事だけは確信する。

「くっ、主コウキがやっと見つけた答えを邪魔などさせない!」

それぞれのデバイスを構えて応戦しようとした騎士たちはあるところか。

彼女たちの嘲笑による四重奏に迎えられてしまう。

「ふ、ふはははっ、これはとんだお笑い種だ! まだ気付いておらんとは!」

「あはははっ、おっかしいね!」

「ふふふっ、二人とも、それは無理というものでしょう。ふふふ……」

「ふっ、愚かだな」

「な、何がおかしいんだ!」

“何を”笑われているのか判断は出来なかったが、明らかにバカにしているそれにヴィータは反射的に怒鳴り返す。だが禍風はそれすらもおかしいとさらに笑う。

「はははっ、これが笑わずにいられるか。」

お前たちはまだあいつが主だと思っていたとはな！」

「な、に？」

「コ、コウキちゃんが主じゃないっていうの!？」

そんな馬鹿な、と。

問い返した彼女たちにしかし、厳かにそして冷徹なまでに“事実”が叩きつけられる。

「……あなたが彼を主だとした根拠はただリンクが繋がっていたという点のみ」

「だが冷静になってよく考えてみる。」

闇の書の主として認められるだけの資質があつた男に果たしてあつたのかどうかを」

「っ!？」

「あっ!」

闇の書の主。それに選ばれる資質。大きく分けてそれは二つある。

融合騎を扱う素質と魔導師としての高い資質。

最低限、それらが必要であり実際はやてにはそれがあつた。

しかし果たして、それがコウキにあつたかと聞かれれば首を縦には振れない。

主がふたりいたことを疑問に思ったことはあつても、

どちらかがふさわしくない技量かどうかなど考えもしなかった。

「だ、だとしても！」

ならどうしてリンクが繋がってたのよ！

管制人格のあの子だって、コウキちゃんを主だって！」

「愚かだな、あれだけ壊れておいて、まだあの女が『管制人格』^{コウキちゃん}だと思っただけだ」と

「あんな廃品はとっくにお役御免だ。

もっともカモフラージュに使えたから表向きはそのままにしてやったのだよ。

真に闇の書を司っておるのはすでに我らだ……そう、もう何十年も前からな」

「君たちは所詮、来るべき時まで僕たちを隠すための隠れ蓑。

ありがとう……おかげで僕たちはついに『砕け得ぬ闇』となる！」

「砕け得ぬ闇？」

聞き慣れないフレーズになのはたちは首をかしげる。

騎士達にいたっては衝撃的な話の連続で半ば混乱していてそれ所ではない。

「いいだろう。今日は気分がよい。特別に教えてやろう」

その疑問と困惑の顔がいたく気に入ってか。

あるいはこれから教える事でそれがどう変化するかを見越してか。禍風は楽しそうに、嬉しそうに、それこそはしゃぐ子供のように語る。

「以前より、防衛システムは嘆いていた。こんなはずではないと。

何度も局のアルカンシエルが主の自滅で活動を制限される。

我らの力は、闇は、こんな脆弱なものではない！

もつと闘える、もつと暴れられる、もつと悲鳴を、もつと怨嗟を
広げられると！」

恍惚とした表情でおそらくその光景を妄想している禍風。

それは子供のように無邪気で純粋な、狂気だった。

「く、狂っている」

「そうとも！ 闇の書はまだまだ進化^{狂う}する。

これまで起こしてきた血と怨嗟の闇など手緩い！

我らは何者にも負けず、侵されない常しえの闇となるのだ！！

だから、考えたのだよ……どうすれば壊れない主を作れるか！！」

「あ、あああつ、そんな！？」

誰よりも早くに気付いてしまったプレシアが思わず悲鳴をあげる。
それに続くように全員の、それこそアースラにいる者たちからも。
その顔から血の気という血の気が一気に引いて蒼白となっていく。

「ふふ、想像した通りだ塵芥ども」

「それこそが僕たちの超絶完璧な計画の一端さ！」

「ああ、なんて心地よい絶望でしょう……」

「さあもつと見せてくれ」

色を失った表情に、極上の料理を食したかのように微笑む闇の騎士
達。

それをさらに絶望に染めようと禍風は全員の“想像”を“事実”に
変える。

「あの男はその記念すべき実験体・第一号となった、ただの子鼠！」
モルモット

主でもなければ、その資質もなかった少年。

最初からそれが目的で選ばれてしまった少年。

『なんで彼が』と誰かのそんな呟きを耳聴く聞いた禍風は笑う。

その口をまるで三日月のように歪ませながら、真相を声高らかに謳った。

「決まっておろう………転生した先に偶々おっただけだっ！！」

「………つつっ！！？？」

狂った闇の書の狂った闇。

その恐ろしき深淵の真実がいま少女達を包み込もうとしていた

第15話予告

すずか「……あの人が最後まで避けようとしていた最悪の結末」

アリサ「次々と明らかになっていくあまりにも大きくて、暗くて、深い闇……」

エイミイ「信じていたものが何もかも崩れ落ち、絶望と無力感だけが空を覆っていく」

リンディ「そして『名前を呼ぶ』という、みんなが大事にしていた行為が、汚される」

すずか・アリサ「次回、魔法少女リリカルなのは異伝・第15話」

エイミイ・リンディ「『名前を呼んで』に、」

全員「……ドライブ・イグニッション……」

????「君はまだ……手を伸ばしてないじゃないか」

第15話予告（後書き）

15話はすべての謎の解明回になります……そして、決戦？

ある少年の人生（前書き）

遅れたが再開です。

うん本当に難産でした。そしてなんていう「それも私だ」回。話は少し長いですが、長いことに多少意味があります。

何も知らないこと

そして真実を知ること

どっちの怖さも

私たちはとっくに知った気になってた

けれど違ったんだ

知りたくもなければ

聞きたくもない真実があることを

知らないまままでいたかったと思うほどに

だから私たちは声を失った

名前を呼ぶのがこんなに辛いなんて

ねえ、だれか教えて

私たちは

あの人をなんて呼べばいいの？

12月24日 PM03:22

無人世界 廃墟群 闇の書の繭周辺

「決まっておろう………転生した先に偶々おっただけだっ!!」

「………つつつ!!??」

誰かが、あるいは全員がぐらりと身体を揺らして倒れこむ。偶々。そんなもので彼はあんなに苦しんだのか。

闇の書事件に、主としてではなく実験体としてただ巻き込まれて。

「そ、そんなっ………そんなくだらない理由で、主は………ずっと!」

「いえ、これがなかなかくだらない理由でしてね。

こちらとしても何の変哲もない普通の、それも出来れば子供が良かったのです。」

そしたら転生先に都合よくいたもので、これはちょうどいい、と……」
「っ、黙れっ！」

星光の落ち着き払った抑揚のない声での説明はかえって、彼女たちの心を逆撫でする。

けれど、ひとりだけその言葉に引っかかりを覚えた者がいた。

「待つて……普通？」

それはまさか『この世界の普通』って意味？」

「そう！ あの実験動物は主や魔導師としての素質どころか、

『連結する核』、リンカーコアさえ持たない普通の子供だったのさ！」

何がおかしいのか。

楽しげに語る雷刃に言いようのない苛立ちを覚えた彼女たちは、しかし。

その指摘に驚くより前にそんな馬鹿なと頭で即、否定した。

彼は間違いなく魔法を使っていた。ならリンカーコアが無いはずがない、と。

「あああっ、やっぱりー！」

だが、プレシアだけがやはりと悲鳴のような声をあげて天を仰いだ。無言のどうということだと問いかける視線に、割り込んだのは禍風。

「壊れない主を作るための実験体……そういつたはずだぞ？」

まさかお前ら、あの子鼠こねずみの肉体に何もしていないと思っているのか？」

「な、に？」

遠回しながらも彼女ははっきりと告げた。自分たちはコウキの身体をいじくつたと。

それを受けてより確信したのかプレシアは血を吐くような思いで言葉を吐き出した。

「……彼の能力を、主としてではなく魔導師としてでもなく、

ただの……闇の書のパーツとして考えれば全部納得がいくの！」

本人だけではあまりにも低く、チグハグな能力。

逆にデバイスさえあれば高く発揮される力とどのジャンルへも相性の良さ。

ロストロギアとの不思議なほどの同調性と制御能力。

コウキを中心に考えると不可思議な話であり、それぞれ関係がないように見える。

だが、コウキをおまけ。デバイスやロストロギアを補強するパーツと考えるなら、

それは何もおかしな話ではなく、しごく当たり前のことになってしまふのだ。

つまり彼がそれらを使っていたのではない。

力を引き出すために“彼が”使われていたのだ。

そしてそんなパーツだけで何かができるわけがない。

「そして、あなた達は実験だと、コウキをその第一号だといった。

壊れない主を求めて、いいえ闇の書の力を酷使しても問題ないパーツを作るために。

彼がその最初の実験体だったというなら、目的はただの試作とデ

ータ収集。

「なら何をされていてもおかしくない……だって毎回魔導師の世界に行けると限らないのだから」

科学者であった彼女には一番最初に行われる実験の意味を誰よりも知っていた。

ある程度結果は推測されるが、あくまでそれはデータ取りのため。そして禁忌にまで手を出した彼女にとってそれはもっと深い意味がある。

初めの実験で得たいのは成功ではなく、やった行為に対する結果というデータ。

『人体をいじる』という経験を得たいがためだけの実験。それならむしろリンカーコアがない子のほうが都合がいい。

「その通りだ。さすがは大魔導師と呼ばれた女だ。

俺達が欲しいのはどこへ転生しても、闇の書にとって都合がいい主という名のパーツ。」

それを作るノウハウだけ。だからまずコアを持たない子の実験データが欲しかったのだ」

見事見抜いた彼女を褒めるように、どこか自慢げにそれを語る氷結闇の書にとって『主』は一番不都合の多いパーツだ。脆いうえに、死ぬと使えない。

なのにそれがなければ闇の書はほとんどの力を発揮することさえできない。

狂った防衛システムが自らの手で作り出そうとしてもおかしい話ではないのだ。

「まあ、あなたも似たような事をその子を作り出す過程でしていたのかもしれないがね」

「っ！」

皮肉のような星光の指摘に、彼女は唇を噛むしかなかった。死者蘇生・命を生み出す禁忌の研究をしていたプレシアにそれを否定する資格は、ない。

「……で、その実験だがな。これが予想外にうまくいったな。」

まず実験そのものに耐えられるように魔力で浸食して内側から改造して耐久力を上げ、

次は疑似的なリンカーコアを埋め込んで、頭にはそれらに関する知識や技術、経験を刷り込んだ」

「おかしいと思わなかったか？」

教えてもない魔法や技術を当たり前のように使っていたり」

「魔力素を取り込む事もできないリンカーコアなんて」

今までずっと不思議ではあったけれど、深くは考えていなかった事柄。

それが闇の騎士達の言葉で次々と繋がっていく。繋がってしまう。

「それから数年経過を見たが子鼠は見事それらに適應した。」

ふふ、まるで我らに改造されるためのようにな」

「ふ、ふざけるな！ そんな事のために生まれた命があつてたまるか！」

管理局の執務官として。

なによりクロノ・ハラOWN個人として。

断じてそんな考えを認めるわけにはいかない。

「奇麗事だよ、クロノ。お前たち人は命を尊い物のように扱うが、

あんなもの世界中のどこでも捨てるほど溢れ、毎日ゴミのように消えていつてるじゃないか」

氷結が語る事実は確かに正しい。

今こうしている時にも数多の世界で数多の戦乱が起きて、命は散っている。

おそろしく簡単に、雑に。それは尊いとされる命の扱われ方としてはあまりにもひどい。

「違う！ 確かに人には命より大事なものが時としてある！

だけどそれを……命を持ったことすらない君たちに語る資格なんかあるものか！」

人にはその命より大事なものがある。だから命を賭して戦うのだ。そんな事をしたこともない。命すらない彼女達をクロノは認めないしかし。

「そう、僕達は『命』なんていう脆く無意味なものを超えている！ 永遠の僕らからすれば君たちの命にはなんの価値も無い！」

その評価すら正当だと。むしろ賞賛と受け取って誇る闇の騎士。人間であるクロノたちと人の姿でも中身がヒトでない彼女たちは見た目こそ似ていてもあまりにも大きな隔たりがあった。

「だが、我らの永遠はまだ完璧ではない。だからこそこの実験。子鼠は予想外にうまくいき、一作目でありながら成功例となった」

本来、試作。壊れてダメになるのが当たり前。

どの程度までならヒトの身体が耐え切れるかの試し。

破棄前提で行われた実験を、しかし彼は幸か不幸か乗り切った。

その結果に防衛システムは彼を実験体からパーツ候補に格上げする。

「そうなるのであればこれだけ長く観察してデータを得なければならぬ。」

嬉しい誤算ではあったが、そうなる余計なのが子鼠には二匹ついであった」

「二匹つて………つ、まさか、ウソでしょ!？」

11年前から数えて数年後。その時、彼の周囲にいた二匹、二人。シヤマルはむしろ嘘であつてほしくて叫んでいた。しかし。

「元・参謀は伊達ではないなあ、そう親鼠よ」

「親の庇護を失うデメリットはありましたが、それ以上に彼を私たちにとって

都合のいい人格に調整するには彼らは邪魔だったのです」

どこまでも平坦な声が、どこまでも冷酷な真実を語る。

「そ、それじゃコウキさんのお父さんとお母さんが亡くなったのつて!？」

「彼は自分のワガママで危険な場所に誘導してしまったと後悔していましたが、

実際はそういうトラウマを与えて行動を制限したかった私達が無意識下から操っただけです」

トラウマ。心の傷。それは間違いなく本人の行動を縛る。

そして縛られる事柄があればその分、行動予測はたやすくなっている。

それだけのこと。たったそれだけのために、彼の両親は殺された。直接はテロの爆弾だったかもしれない。だが、それがあると分かっている場所に、故意に誘導させた以上彼らが殺したと充分にいえた。

「ああ……そんなっ！」

「マジ、かよ……」

もうかつて、とはいえ自分達もその一部だった闇の書。

そのさらなる闇が、コウキから両親を奪っていた。

それが彼の人生の転機、悪い方へ転がっていく出来事だっただけに守護騎士たちは動揺を隠せず、ついには浮かんでさえいらずに地面に半ば落ちるように降り立つとがっくりと膝をついた。

だが、彼らの暴露はまだ終わっていない。

「それだけではないぞ。周囲の人間の悪意を増長させ、孤立させたのも我らだ。

人の温もりとやらから離れた奴がのちに覚醒するお前らを受け入れやすくするために！」

感謝しろよとまでいいそうな口調に、怒りより先にただただ彼を想った。

すべてが、彼の人生にあった苦境や痛みは何もかも、闇の書の闇がした事だった。

リンカーコアすら持たない。本当なら、魔法や次元世界のことなど何も知らず、

ただこの世界で普通に生きていたであろう少年の、あったはずの未来をぶち壊しにして。

「そんなの……ありがよ……」

「もっと早くに奴らの存在に気付いていれば！」

「うつつ、っ、コウキちゃんごめんなさい！」

「……なんたる不覚っ……」

騎士達の脳裏には自分達が覚醒した日の彼の顔がありありと蘇る。

驚きながらも最終的に快く迎えてくれたあの笑顔。

その裏にある寂しさと痛みを知って、より強く彼を守るうと誓ったことも。

だが、そのすべての原因は自分達そのものといつてもいい闇の書にあつたのだ。

「みんな……」

なのはたちは崩れ落ちた騎士たちにかける言葉が見つからなかった。誰もが、それこそ騎士達も自分たちのせいではないと頭では理解している。

管制人格すら騙していた防衛プログラムの狂った暴走を、その存在を、

内包されているに過ぎない守護騎士が知るのとは不可能だ。

そして当然彼を傷つけ苦しめようなどと思った事は一度としてない。

それでも彼女達もまた闇の書だったのだ。

何十、何百年も一緒にいて、その闇を理解したつもりになっていた。それがこの様だと、騎士たちは言葉なく地面に拳を叩きつけた。

「ちょ、待って！ ならどうしてあたしまで主にする必要があつたんや！

その実験がうまくいったなら、あたしはいらんかったはずや！」

話題を変えるためか。あるいはその矛盾を突いて、あるかどうかも分からないウソを引き出そうとしたのか。とにかくはやてはそんな騎士たちの姿を見ていられなかった。けれどそれを闇の騎士たちは、とくに雷刃は大きく笑った。

「バカだねえ、この子鴉。」

うまくいく、いかな関係なく実験体なんて信用できないでしょ？

どこで壊れちゃうかわかんないんだし予備として普通を選んだ主も必要だっただけだよ」

「っ、あんたらいつたいどこまで！」

あくまで予備。

そう自分を評されたことより、どこまでも彼を物扱いする態度に苛立つ。

「だから、その老猫どもには感謝しておるのだよ。」

我らが勞せず主となる素質のある者を寄越してくれて、な」

「くっ、偶然とはいえ君たちの手助けをしてしまったというわけか！？」

クロノに庇われるようにうずくまっていたグレアムたちだが、話そのものはすべてきちんと聞いていた。だからこそ、自分達のした行為が憎むべき闇の書の助けとなった事に憤る。

「偶然？ ふふふっ、まさかそんなわけがあるまい！

確かにその子鴉の件は嬉しい誤算だったがお前達も所詮、我らの手駒だったのだよ！」

「は？ 何いってんだ！？」

「おかしなことをいわないでください！」

いきなり手駒といわれて反射的にリーゼ姉妹は怒鳴り返す。

結果的に手助けになった事は否定できないが、彼女らに指示された覚えは無い。

しかしその裏、憤る姉妹の後ろでグラムだけが顔を青白くさせていた。

「話を聞いていましたか？」

私たちの自我が目覚め始めたのは何十年も前から、だと言った筈です」

「…… 11年前の、あの事件の時も、君たちは何かをしていたというのか！？」

グラムのその指摘に驚く姉妹とクロノの声を無視して、

老提督は間違っであってくれといわんばかりの顔と声で聞いていた。だが、返ってきたのはその言葉を待っていたといわんばかりの微笑み。

「何か、もなにも。あれは最初から最後まで我らの計画だった」

「僕達が意図的に発した闇の書の痕跡を船団引き連れて、

まんまと追ってくるんだもん。間抜けだったよねえ」

「俺たちが欲しかったのは魔力を蓄えこんだ魔導炉と

何度も闇の書を吹き飛ばしたアルカンシエルの詳細なデータ」

「欲を言えば、乗員すべてにいただきましたかったです、

まあ優秀なのが一匹取り込めたので良しとしましょう」

ちらりと氷結を見たあと、クロノやリーゼたちを見下ろして微笑む。見慣れている少女の姿と酷似した星光だがその笑みはあまりに感情がなく不気味。

「おい待て、取り込んだ？」

父さんはエステシアと一緒にアルカンシエルで蒸発したんじゃない？」

「うむ、あれはよいカモフラージュになった。

何せあれなら我らが何を奪っても、証拠をすべてそっちが消してくれたのだからな」

禍風の笑みを含んだその言葉に、すべての事実を彼らは察した。

11年前の闇の書事件そのものが管理局を誘き寄せる罠だったのだ。そして自らである闇の書を護送する船を内部から侵食して、

魔導炉と艦船内部のデータ、そして唯一残っていたクライドを取り込んだ。

グレアムがアルカンシエルを撃った時にはもうエステシアは中身が空っぽに等しい状態。

あの日の彼の苦渋の決断は、単に闇の書の証拠隠滅を手伝っただけ。

「良かったですね。部下を殺したのが自分でなくて……」

それを彼女らはそういって、楽しそうに笑った。

「お、お前！ お前らがクライドくんを……」

「彼の魔力や技術、経験はとても役に立ちました。ありがとうございます」

グラムと双子の使い魔の目に憎しみと殺意が宿る。
傷を負った身体を無理矢理立ち上がらせて、拳を握り締める。
そもそもの発端であった出来事の実相を知らされた以上、
彼らに激情を抑え付けることはできず、またする必要もなかった。

「きつさまあ！！」

それでも感情を逆撫でするような言葉を吐かれて激昂する。

だが、それを受けてもなお闇の騎士たちにあつたのは笑みと、感謝
だった。

「いやいや、感謝してるのは本当だぞ？」

何せ実験完了前に局に見つかるのは我らとしても不都合だったの
でな。

お前達は本当によくやってくれたよ」

これまでの尊大な態度からわずかに変わって、ねぎらいのような言
葉をかける。

もともと、いわれのないそんな言葉をかけられても訝しいだけ。

「どういう意味だ！？」

「おいおい、まさか自らの幸運で闇の書を見つけたと思っていたの
か？

俺たちがわざと教えたに決まってるじゃないか。

お前達ならきつと個人的な復讐のために存在を隠してくれると読
んで」

「アルカンシエルを撃たせたのは証拠隠滅以外にもそういう意味が

あつたのだよ」

ぐらり。あるいはがくりと老いた提督は足から崩れ落ちた。顔にはびっしりとした汗をかき、表情は愕然としていた。

「「父様!?!」」

「……す、すべては私に罪の意識を植え付けて、復讐に走らせるため!?!」

闇の騎士達はその必死なほどにウソであつてくれという問いかけに、淡々と頷きを返す。

「そうそう、なかなかよく出来てたでしょ？」

『……発射前に墜としてください』だったかな？」

「なっ!?!」

一瞬、雷刃の顔と声だけがクライドのそれに変わって、元に戻る。それは考えてみれば当たり前前の話であつた。

何せ少女たちが闇の書に接近したのははやてでさえ3、4年前の話何十年も前から存在していたのならその時から今の姿をしていたわけがない。

彼女達にとって今の姿は取り込んだデータを再現するのに都合がいだけ。

「クライド・ハラオウンの記憶から見たあなたはそういう人物だと予測できました。

そしてあなたはこちらの思惑通りに動いてくれました。本当に感謝しています」

不気味なほどに、心からのそれに聞こえる態度での感謝。
だがそれはあまりにも簡単に、残酷に、何かを傷つけていた。

「あ、ああ……それでは、私は、いったい……いったい何のために
……」

「父様、父様！」

「しっかりとしてください！」

一瞬でさらに老け込んだかのように疲れきった顔を見せたグレアム。
閉じられることのない口からは壊れた玩具のようにそんな言葉が繰
り替えされた。

この11年間。彼はあの日を忘れたことはなかった。

そして4年前から始まった子供達の成長を見守る日々。

いつかその子たちを犠牲にする、傷つける罪悪と戦う日々。

その日々や葛藤を否定されるならまだ良かった。

けれどすべては憎むべき闇の書そのものの思惑の中だった。

「はははっ、滑稽よなあ。

我らを恨み憎んでいたその感情すら我らの演出によるもの。

所詮は闇の書の手の平で踊らされていただけの哀れな道化よ！」

そして四人はまたも嘲笑を重ねる。グレアムらだけにではない。

この場にいる全員を彼女達は心の底から笑っていた。

なになが、闇の書の永久封印だ。

なになが、主を救うだ。

なになが、そばにいたいだ。

なになが、力になりたいだ。

あれだけ一緒にいて、普通と違うおかしな点を知っていながら、
気付きもしなかった者がよくいえたものだな、と。

そんな嘲笑に、誰もが言葉を返せない。

そんなの分かるわけない。そう思っても口に出せなかった。

『結局何もできていなかった』その事実だけが彼女達に重くのしかかる。

「はーははっ、はあ、はあ……………しかし。」

実はな、すべて計画通りというわけでもなかったのだ」

笑い飽きたのか。

途端に禍風はわざとらしく困ったような声を出した。

無論本気ではなく、どうやら注目を集めたいだけのようだが、それは奇しくも成功する。

「少しモルモットの頭を強化し過ぎてな。」

まさか我らの存在や計画に勘付くとは思わなかったよ」

闇の騎士たちからすればパーツとして普通以上のマルチタスクができた方がいいと。

そう思っただけで思考能力をいじくって格段にあげたのが裏目に出たといえた。

『あれは失敗だった』などと軽く語る彼女達と違って、その言葉はショックを受けていた彼女達すら、さらに驚愕させた。

「ま、待て、主が知っていた!？」

そんな、馬鹿な。いったいいつから!？」

「無意識下ではおそらく、ジュエルシード事件が終わった後ぐらい。」

明確に勘付いたのは感情が沸点を超えて、中途半端に覚醒しかかった時、ですね」

元となった人格ゆえか。

星光は律儀にも問いかけに正確に答えていた。

「あ、あれか……ではあれからずっと主は……」

「そうだよ、あいつは気付いてた。

だから封印されようとしたんだ。僕達ごと閉じ込めるためにね」

『そうか……封印と内部からの改竄。

彼女のことだけじゃなくて、お前たちへの対策でもあったのか！』

自らの存在の所以やこれまでされたことに半ば気付いていながら。ただただ彼女達の未来を思って、誰にも何もいわずにその闇を引き受けようとした。

知られれば、誰もがキズを負うと分かっていたから。

「しかし、所詮は子鼠。

巧妙に隠したつもりでも我らにはバレバレよ」

そしてまた響く嘲笑の四重奏。闇の騎士達は心の底から笑っている。一つだけこれまでと違ったのはそれは明らかに“彼だけ”を馬鹿にした笑い声だった。

「……ちょ、黙れ」

だから最初にキレたのはその少女。

短くもはつきりと発せられたその言葉は決して大声ではない。

だがその小さな身体から出たとは思えない程に重く、相手を黙らせる迫力があつた。

実際、闇の騎士たちの嘲笑は止まり、警戒するようにはやてを睨んでいる。

「うちの事は、いくら笑われてもええ……実際役立たずやったからな。

でも、あの人を……コウ兄を笑うのだけは絶対に許さへん」

それを、守護騎士達ですら初めて見るような怒りの形相で睨み返し、はやては杖を構えて、書を開く。どちらも彼が用意してくれたもの。少女はそれだけで雄弁に語っていた。彼を笑つたお前達を許さない、と。

その姿に、彼女達もまた自らの愛機を構えてはやての周囲に集う。

「例え、お前たちの言葉がすべて真実でも関係ない。我らにとって主は主だ！」

「あたしらはそれを初めて自分達で決めたんだ、お前らじゃねえ！」

「その彼を笑つた以上、もう貴方達は私達のただの敵！」

「我らが主への侮辱、死ぬほど後悔させてくれる！」

自分たちとの出会いは文字通り彼の犠牲の上に成り立っていた。

そのおかげで彼が騎士たちを受け入れ、あの暖かな日々を送れたのだとしても。

彼を主として、認め、想つたのは紛れもなく自分たちの意志。

だからこそそんな彼を貶めた者たちへの怒りは燃え上がる。

そんなはやて達とは逆の位置から闇の騎士たちを挟み込むように少女たちが飛び上がる。

なのはを中心にフェイトやプレシア、その後ろにはアルフやユーノもいた。

「あなたたちがコウキさんの、みんなの人生を目茶苦茶にした……絶対に許さない!!」

あの日々を少女は今でもずっと忘れてなどいない。

病院のベッドで動かない父。それを看病していた姉。

お店を切り盛りするために大好きな剣術を辞めた兄。

大変な日々と不安に、夜ひとりで泣いていた母。

寂しい自分を気遣って、笑顔を見せていた彼。

あれはすべて目の前の存在が原因、元凶。

大好きな家族を傷つけ、大好きな彼を独りぼっちにした。

なのはは初めて怒りでデバイスを握り、その標準を向ける。

「おかげで出会えたなんて、こっちは感謝なんかしないわよ。

私の“家族”を傷つけ続けた罰、いまここで受けてもらうわ!」

「そうだよ、例えその痛みを知っていたから私を助けてくれたのだとしても!

今はそんなこと関係ない! あの人の命と人生を弄んだ事、絶対に許さない!」

闇の書の策謀。その結果があつたから出会えたフェイトとプレシア。家族を失う痛み。いわれのない暴力の恐怖と痛み。

それを知っていたからきつと彼はあそこまで必死になってくれた。

だが、それは彼女たちを許す免罪符にはなりはしない。

ただただ『大事な人を弄び続けた』ことが彼女たちは許せない。

「仇討ちなんてする気はない。みんなほど感情的になるつもりもない。」

けど師匠たちと“友達”を馬鹿にされて黙っていられるほど僕はまだ大人じゃない！」

両者の挟み込みの穴をカバーするようにクロノもまた戦闘態勢に入る。

その背後では憔悴しきったグラムを護るようにしながらも、怒りと憎悪で闇の騎士たちを睨むリーゼ姉妹もいた。

ある意味において、絶望的なまでの状況。

次元世界広しといえどこれほどまでのエース級の魔導師や騎士に囲まれた者はいないだろう。

数においても、能力においても、彼女たちに助かる道などない。はずなのに。

「ふふ、絶望するかと思えば怒って向かってくるか。それもまた一興よな」

誰も、その余裕に満ちた顔を変えない。

むしろ挑んでくるのを待っているようにさえ見えてくる。

「数字の上では老いぼれを抜いても13対4か。さすがにこれはきついな？」

「だけど大丈夫。僕たちは負けずに死ぬのはあいつら。そして僕たちは飛ぶんだ！」

「確かに。我らといえでもこの数の差は厳しいだろう」

氷結は冷静に戦力分析しそれを禍風は肯定する。
しかしそれでも全員の顔に焦りの文字はまるでない。

「ですが、それを超えてこそ私たちの『王』
そのお力の前では数の差などまるで意味を持ちません」

そう告げた時、初めて星光は何かの感情を込めて笑みを見せた。
何を喜ぶようで、祝福するようで、どこまでも狂気を孕んだ笑みを。

「王、だと？」

誰かのそんな呟きが合図だったかのように繭に集まっていた彼らは
その周囲に散る。

それは守るためか、見上げるためか、敬うためか。

繭を中心に四方に立った闇の騎士達はまるでなのは達を無視するよ
うに背を向け、

ただその巨大な黒い繭を見上げて、“嗤った”。

途端。

「っ!？」

繭がガタンと音を立てて揺れた。

闇の騎士達が何かしたわけでも地震でもない。

繭だけがまるで自らの意志でもあるかのように揺れて、揺れる。
その様子を見て、誰かがふと思った。

まるで、卵が孵化する寸前のようだ、と

それをまるで肯定するかのよう。中身を縛り付けている黒い帯にわずかなヒビが入る。

「おおっ、ついに目覚めの時！」

「塵芥どもよ……我らの長い話によく付き合ってくれたな。おかげで最後の準備は滞りなくすべて終わった！」

「っ、まさか、これまでの話は!?!」

「時間稼ぎよ………もつとも、嘘は何一つないがな」

にやりとしてやったりな顔で笑った禍風にクロノは自らの迂闊さを呪う。

話の中身に動揺してそれを彼女たちが教え聞かせていた事を不思議に思わなかった。

いくら聞かすにはいられない話だったとはいえ、封印を先にするべきだった。

すべては彼らがいう『王』が出てくるまでの時間稼ぎ。

目の前で壊れていく黒い帯の繭。

いや、もはや黒い卵にしか見えないそれを食い破るかのよう。そして貫くような破壊音と衝撃が“内側”から外に出ていく。

割れ落ちていく殻。出来た穴から黒くて暗い魔力が煙のように漏れ出し周囲を覆う。

「っ、みんな気を付けて！ あれは腐食した魔力よ！」

る。
所々くすんでいたり鮮やかな色を見せたそれはまるで『血』のよう
で、
不揃いのそれもまたどこことなく『翼』のようにさえ見えた。

卵から孵る雛

場違いでありながら、そんな表現が頭に浮かぶ。
そして“翼”は羽ばたくように動いて、残りの殻をすべて吹き飛ば
す。
同時に腐食した魔力も吹き飛ばしてしまったが四人に不満はない。
何せ、待ち望んだ存在がいま目の前に“生まれた”のだから。

さあ、闇の誕生を祝おうじゃないか

そんな声と共に現れた赤い血のような翼を持つ人影。
そこにはもう繭に閉じ込められていた彼女の面影など微塵もない。
黒と紫で彩られた騎士服をまとうその“彼”の姿に、誰もが息をの
んだ。

「うっ、うっ……」

「なん、で？」

自分たちに“姿だけ”が似ているマテリアルたちと違う。本能的になぜだか少女たちはそう思ってしまった。

理性が姿だけが似ているのだと思いつくとするのを心が否定する。あれは、間違いなく

「……………」
「ウキ、さん……………」

皆が知っている日野ウキその人だと。

ある少年の人生（後書き）

ちなみにですが、
GODは買ったけどまだやれてないのでネタバレ情報はまだ禁止です！

お前は誰だ（前書き）

GODネタバレ情報は今年いっぱい禁止です！

お前は誰だ

12月24日 PM03:44

無人世界 廃墟群

砕け散った黒き卵のような檻。

中からそれを打ち砕いて出てきたのは血のような色の流動的な翼。エネルギー体のそれを羽ばたかせて、わずかに浮いている黒と紫色をまとう存在。

どこかトラヴィックのそれとよく似ている全身を覆うコートのようなそれ。

過度な装飾はなにもなく、文字通り身体を護るためだけの防護服。

だが、そんなものより皆の視線を集めたのはその顔だった。

短く切り揃えた夜空のような黒さを持つ髪と漆黒の瞳。

何よりその面差しはどこをどう見ても“彼”だった。

基本似ていても違う所も多いマテリアルと違って、何も違わない。顔つきも闇の騎士たちに比べれば穏やかであり、こんな状況でなければ、

いつも通りの“彼”だと思ってしまっほども。

「王よ、ご気分はどうですか？」

王と呼ばれたその存在の四方。

空中で魔法陣に膝をついて、首を垂れる四人。

その一人である氷結の問いかけに視線だけを向けながら天に手をかざす。

その指先に小さな黒い魔力の塊が発生させ王はゆっくりとした動作で投げた。

『だ、ダメ！ 超高エネルギー感知！ みんな避けてえつつ！！』

エイミイの悲鳴に近い通信に反射的に防御しようとしていた彼女らは高速で迫る光球にまるで道を開けるように距離を取って、避けていく。

その間を通り抜けて一瞬で廃墟群から抜け出たそれは地平線の彼方に消えていく。

そしてもう夕焼けとなっていた空を真昼のように染めた

強烈な閃光のあと、遅れて強烈な爆発音が響き、大気が怯えたように震えだす。

時間にしてそれぞれ数秒程度のそれらが過ぎ去って、なのは達は信じられない物を見た。

「なっ！？」

「……………なあ、あそこって何があった？」

繭の事に気を取られて風景など見ていなかった彼女たちだったが、“そこ”には明らかに何かがあったのだと思われる痕跡が残っていた。

「……………冗談だろ……………山が、消し飛んだ？」

遙か遠くに見えていた風景の一部の山。

実際間近で見れば巨大であると思わせるほどに離れているここからでも大きく見える山。

その半分以上が跡形もなく最初からそうだったといわんばかりに消し飛んでいた。

「おおっ！ 凄いよ、強いよ、カッコイイ！ さっすが王様！」

「どうやら何も問題はないようですね……」

「……………ああ、悪くない」

喜ぶ興奮するマテリアル達と違って、クロノ達は愕然としていた。

あんな小さな魔力弾ひとつで山を吹き飛ばすなどもはや魔法の範疇ではない。

使用が禁止されている質量兵器かあるいは超強力な魔導兵器レベルである。

どうやらアルカンシエルのデータを奪ったのは嘘ではないようである。

『……………ひとつ、聞いてもいいかな？』

そのでたらめな破壊力を前にさすがに怯んだ彼女達だったが、

その中ひとり、トラヴィックは不機嫌そうな声で訊ねた。

「貴様、王に軽々しく、っ！？」

その問いすら不敬だというように怒鳴った禍風を腕を上げて止める王。

彼は黙って、ひとり前に出ると無言で次の言葉を待つ姿勢を取った。それを受けてトラヴィックは根本的な疑問を投げかける。

『……お前は、誰だ？』

姿もそのまま。声もそのまま。雰囲気まで似ている。だが、まだ誰も“それ”が誰なのかを聞いてはいない。また王と呼ばれる本人もまた自らが何者かを語ってもいない。だからまずそれを聞いた。もし『日野コウキ』だと答えたのなら、百万語の言葉でもって反論してやるといふ気概で。

「よくわからない……」
『は？』

そのために、その返答だけは予想外だった。あっさりとした答えながら同時に自分が誰か解らないとの告白でもある。

困惑した表情を見せる彼女達をさらに追い込むように王は語る。

「逆に聞く、俺は誰だ？」

「なに？」

その言葉とその口調を信じるなら嘘や冗談ではない。

王は本気で、彼女たちに自分が誰かと聞いていた。

背後では控えるように微動だにしないマテリアルたちが何故か無言

を貰っている。

しかし誰だと聞かれても、それが解らないからトラヴィックが聞いたのだ。

それをさらに同じ言葉で問い返されてもわかるわけがない。だから皆が皆、返すべき言葉が見つからずに戸惑っていた。

「ふむ……」

それをどう受け取ったのか。

何かを考えるかのように顎を撫でると妙案を思いついたように手を打った。

「それじゃ問題だ。」

今からいう人物は果たして誰なのか、答えてくれ」

まるで友人間でクイズでも出すかのような気軽さで、彼はそう言うて消えた。

姿を見失って、緊張が走った一瞬の中。あるひとりの少女だけが固まった。

突然その指先の温もりを感じて、指一本として動かせなくなった。

「フェイト!？」

「い、いつのまに!？」

彼に対して身構えていたはずの少女・フェイト。

その背後に突如として出現した王は腕を伸ばしてその頬を優しく撫でていた。

(動きが全然見えなかった……………私より速い?)

あまりに近すぎる距離、その腕に抱かれているに等しい距離に、近くにいたはずのアルフやプレシアでさえ手出しができなかった。

「フェイト・テストロッサ……君は最初アリシア・テストロッサのクローンとして生まれた」

そんな状態で王はどう思っても“彼”のとしか聞こえない声でそれを囁く。

今更なんの話だと不思議がるよりフェイトはそれを彼だと思わないようにする事で必死だった。

「だが君は移植された記憶に引つ張られず、アリシアと全く違う“フェイト”という人格を手に入れた」

しかし語る内容はフェイトにとってあまりにも無視できないもの。いつのまにか、彼の声に耳を傾けてしまう。しかし。

「では、ここで問題だ。もし移植された記憶に完全に同調し、プレシアも満足するほどに“アリシア”になった場合……それは果たして、誰だ？」

なんて無駄で、なんて無情な問いかけか。

そうはならなかったからプレシアは狂い、フェイトが生まれたのにそれをよりにもよって彼女たちに訊ねているのだから。

けれどそれはもう二人にとって乗り越えたものでもあった。

「……私がいう資格はないかもしれないけど、それはアリシアじゃない。」

同じ身体と記憶を持っていても、そこにあの子の心がない」

肉体はコピーできる。記憶もコピーできる。でも『誰にもあるけれど、どこにあるか解らない』『心』だけは、それができない。そんな当たり前の事に彼女が気付くのに遠回りをすぎたと彼女は自嘲する。

「では、それもまたフェイトか？」

その答えを素直に受け入れて、ならばという言葉に今度はフェイトが首を振る。

「違う。それは私でもない。

私は、フェイト・テストロッサはここにいる。この私だけ……それだけなんだ」

どんな生まれでも、私は私として始められた。

だから自分はここにいる自分だけだと、彼女は胸を張る。

そしてふたりは口にする。それはフェイトでもアリシアでもない。

「ふむ、解った。なら、ここで最初の問題に戻ろう。俺は、誰だ？」

何がわかったのか。

あまりにも“彼”が雑談をする時のような顔つきに戸惑いを覚えながらも、

再度投げかけられた『誰なのか？』という問いに、しかし変わらず皆は答えに困る。

そもそも何故フェイトたちのことを問題にしたのかさえ彼女たちは解らなかった。

「ああ、すまない。問題として公表すべき情報が足りなかったな」
その様子に気づいた王はあっさりと、その不手際を語る。
そして、その問いかけを“本当”の形にして再々度口にした。

「……埋め込まれた記憶に同調して育った俺は、誰だ？」

「え？」

「同調したって、いったい誰の記憶と!？」

あるいは先程までのマテリアルたちの暴露以上に驚愕する姿に、王は首をかしげた。

「禍風、説明したんじゃないのか？」

「申し訳ありません、王よ。」

こやつらはどうにも理解力がないようで、頭に様々なモノを刷り込んだと教えたのですが……」

軽く訊ねただけのような口調の彼に、尊大だった態度はなりを潜めて恐縮する禍風。

その視線は「この愚か者どもめ!」となのはたちを睨みつけていた。

「……俺は頭に様々な知識、技術、経験を11年前から刷り込まれ続けた。

その中には歴代の主の記憶もあったし、取り込んだ人間のモノもあった」

「王が闇の書の過去の出来事を夢という形で見ていたのは、リンクが深かったからではなく、ご自身の頭の中にすでにあったからだ」

ならばと自らが説明を始めたのを、氷結は補足する。

これまでの少女達への態度とはまるで違うそれは王に従順な騎士の姿に見えた。

「俺はそれを自覚しておらず、明確な自我があったために影響を受けなかった。

しかし両親を自分のせいで死なせたと思いついて壊れかけたのなら話は別」

両親を目の前で失い、土郎に大けがを負わせた。

その責任が自分にあると思いついた幼き心。

それが、まともな状態であるはずがなかった。

崩壊しかけていた自我に付け込むように他者の記憶が入り込んだのだ。

それは崩れかけた彼を補強したが同時に浸食もして“違う者”に変えていった。

闇の書にとって都合がいい人格。次の行動が予測しやすい人格に。

「フェイトが記憶に引きずられず自我を確立したのに対し、無意識下の記憶による改変を受け続けた結果、俺は元の人格を失った」

「っ、さっきの問題ってまさか!？」

『もし移植された記憶に完全に同調しプレシアも満足するほどに“アリシア”になった場合……それは果たして、誰だ?』

もう誰もが、その問題が示している人物を正しく理解した。してしまっ。

先程のフェイトとアリシアの定義を使うなら、それは『日野コウキ』ですらない。

『日野コウキ』の人格を一度壊して新たに作り上げた別人格。そして彼はその誕生の瞬間から“誰か”の記憶の影響を受け続けた。

「だから、言っただじゃないか………よくわからないって」

そこには日野コウキとしての心はない。

彼はそれからずっと日野コウキとして生きてきたが、そんなものは生み出された直後のフェイトがアリシアと呼ばれていたのと何ら変わらない。

そうだという事をずっと知らなかった彼が“自分”を始められているわけではない。

「なあ、俺は誰？」

最初は意味が分からなかった問いかけが、今はあまりに重い。彼を「コウキ」と呼ぶのは簡単だが、それを誰が証明できる。

自分たちがよく知る、知っていると思っていた彼は『誰なのか？』

「教えてくれよ、なのは、フェイト、はやて」

いつものあの声の名前を呼んでくれるのに、口が動かない。がたがたと唇が震えて、誰もが声を出せない。

「……お前らも解らないか？」

シグナム、シャル、ヴィータ、ザフィーラ」

呼びかけられた騎士達も、答えられない。だって、誰もその『名前』を知らない。そもそも名などと与えられていなかった彼をなんて呼べばいいというのか。

「プレシアやアルフたちも一緒か？」

名前を呼ぶ彼の声だけがあまりにいつも通りで、余計に彼女たちの心を苦しめる。あれだけ呼んでいた名前を呼べない。あれだけ呼んでくれる声に、応えられない。

（わ、わたしたちはいつたい……どうすれば？）

（助けるどころか、名前すら呼べないなんて……）

一度はマテリアルたちに燃え上がった怒りはもう見る影もない。名前を呼ぶ。ただそれだけのことができない事実、身体から力が抜ける。心が折れる。どうすればいい、と泣きわめくことをしなかったのはそれをすれば堰を切った感情にのまれて本当に崩れ落ちる予感があったからだ。

「……………」

だから誰もが結局一言も声をあげられなかった。それをどう受け取ったのか。考え込むように顎に手を当てる。

「うーん、じゃあお前はどう思うっ？」

そういつて見上げた先には誰もいない。
ただ、その視線を受けた“彼女”は一瞬で息が詰まった

アースラ ブリッジ

簡単には受け入れられない事実が次々と暴露されて、
沈黙するしかなくなっていたのはここも同じだった。
そんな中。

『うーん、じゃあお前は どう思う？』

そう言つて見上げた視線と目があつたりリンディは息が詰まった。
モニター越しのそれが正確に自分を捉えたことだけでは
ない。
瞬きよりも短い刹那の時間で、その視線が目の前に来た事だった。

「きゃああっ！」

誰かが悲鳴をあげる中。
アースラブリッジの艦長席の前に浮く彼。
手を伸ばせば簡単に触れられるほどの距離でリンディと向かい合う。

「うそつ、高速機動なんてものじゃない。まさか高速転移!？」

あり得ないスピードでの移動。

ハッチを開けるか壊さない限り物理的に外と繋がっていない艦船の中への出現。

考えられるのはもはやそれしかないが、それにしても常識を超えた速さだった。

エイミーがそれに驚いている間に、彼は一度だけ視線をリンディからずらす。

「……アリサ、すずか、俺は誰？」

「っー!」

「あつ……!」

小さく息を漏らす。

それがその少女たちが発せられた精一杯の声だった。

しかしそれを何とも思わない表情で、再度リンディに視線を戻す。途端、バチンツと見事なほどにはっきりとした音がブリッジに響いた。

「か、か、艦長!？」

あまりのことにエイミーは青ざめた顔で呼びかけた。

呼ばれたリンディは答えずにただ毅然とした顔で眼前の男を睨みつけていた。

その右手を大きく振り切った体勢のまま。

「……これはすべてが終わった後の話ではなかったか？」

「っー!」

赤くはれたようになった頬を気持ちさすりながら何でもない事のように語る。

その態度が癪に障った、あるいは“彼”との話を持ち出された怒りか。

再度引つ叩こうと振り上げた手を今度は掴まれてしまう。

「くっ、あっ」

そしてそのまま引き寄せられ、腕の中に囚われてしまう。

「なるほど……やはりお前が鍵か……」

「え？」

短く、誰にも聞こえないような呟きを聞いて訝しむ彼女の間をつくかのように。

王と呼ばれている彼はまたも消えた。今度はリンディを連れて。

「艦長!？」

「っ、エイミィさん、モニターを！」

「また一瞬で……しかも艦長を連れていかれるなんて！」

身動き一つさえできなかった自分たちの不出来を憤るように拳を叩きつける。

一体何をしに来たのか。彼女を連れて『王』は再び、あの現場へと戻っていった

またも姿を消した彼が次はどこに出るのかと警戒した彼女たちを
まるであざ笑うかのようにいつこうに姿を見せずにまた同じ場所に
現れたかと思えば
その腕に見知った女性を抱えてのそれに愕然とする。

「母さん!?!」

「リンディ提督!?!」

突然の再出現と彼女の存在に驚く皆を尻目にリンディは叫ぶ。

「気を付けて! こいつは一瞬であちこちに転移できるの!

目で動きを追おうなんて考えてはダメよ!」

その言葉にアースラにまで移動した事実を知る。だが。

高速での距離と時間を無視した転移。あまりにも非常識な移動手段
それは果たしてわかっていても対処できるものだろうか?

「……ところであなたは私をどうするつもりなのかしら?」

対処法がないことに恐怖を覚えるが目の前でリンディが囚われてい
る以上、

彼女を救出するのが優先だと意識を切り替える。それはある種の現
実逃避でもあったが。

「いや、あんただけが他と反応が違ったからな。

あるいは答えられるかと思ったんだ……俺が誰かという問いに

それを見かねての確認の問いかけに『王』は先程までと変わらない問題を出す。

誰もが声すら出せなかったそれに、しかし彼女は毅然と言い返す。

「答える必要はないわね。

“彼”本人だと、正確にいえないあなたには！」

「っ!？」

「へたくそなのよ、あなた……彼より良い子のふりが、ねっ！」

一瞬のその動揺を狙って、彼女は押し付けた手のひらから魔力を放出した。

起こる爆発音と衝撃に腕から脱出して、クロノ達の元へ行く事に成功する。

「あ、あのリンディさん大丈夫ですか!？」

慌てて飛び寄ったフェイトの心配する声に笑顔で頷いた彼女は、しかしすぐに王とマテリアルたちに向き直った。

彼女が放った渾身の一撃はあくまで意表をついただけでダメージはない。

むしろ“見逃された”ようになのは達の所へ行かされたような気がしてしまう。

どういうことだと問うような視線をぶつけられ、初めて『王』は“嗤った”。

「ふははははっ! さすがだな、女。やはりお前には気づかれたか」

突然の豹変。

“彼”らしかった表情は狂気に染まった笑みに変わる。だが、それを単純に相手が偽物だったなどと楽観的に考える事は出来ない。

その嗤いを“彼”がしていたのをここにいる誰もが見ていた事があったのだ。

「普通のフリをし過ぎたのよ、あなたの場合。」

あんな、故意にみんなを傷つけるように彼は喋らない」

いつもの『普通』であった事がおかしいと指摘され、それはそうだ、と笑いながら彼はそれに頷いた。

「し、しかしリンディ提督……それでも我らにはどうしても彼が……」

けれどむしろ彼女たちの方がそれで納得できなかった。どうしても、目の前にいる『王』が“彼”にしか思えない。それはもう理屈ではなく本能のようなものに近かった。

「私も同じように感じているわ。」

だから多分あれは………彼自身の冷酷で残虐な部分の抽出、って所かしら？」

いつか、激昂してあらわになりかけたその部分。それに似た雰囲気から彼女はそれを推察していた。

「ご名答！ 俺はあいつの負の部分のコピー人格。」

だから正確な意味合いにおいて俺はあいつではないが、同時にあ

「いつ自身でもある」

それを肯定した『王』は憚ることもなくそれを教えた。

“彼”そのものではないが“彼”の一部で間違いもない。と。

「だからあの“問題”は紛れもなくあいつ自身のものだ。

オレには自分がない。だからって“日野コウキ”なんて他人の名前を受け入れられるか！

俺は誰だっ！俺はいつたい誰なんだよっ！！誰か答えろ！！
「！」

態度を一転させ突如として溢れ出す激情のままの叫び。

すべての真実の前では『日野コウキ』として積み上げてきた物は崩れ落ちていた。

それでも正も負も併せ持った“彼”ならば押し隠して、生きてたろう。

けれど負 怒り・憎しみ・妬み の塊である彼はそうではない。

「なぜ俺が我慢しなくてはならない！

そんなのは散々やってきた！それで何を得られた！？」

何もかも失うばかりで、結局俺はこのざまだ！！」

何もかも利用され、何もかも作り変えられ、何もかも奪われた。

どうしてだ、なぜだと問う声には怨嗟もあつたが同時に答えを得られない悲愴さがある。

出せるものなら少女達はそれを示してあげたかったが、何も浮かばない。

なんと呼べばいいのか。その感情を肯定すればいいのか否定すればいいのか。

何一つ『答え』など思いつけない。かけられる言葉さえ浮かばない。

「……………ふん、まあ、いいさ。」

お前らが何も言わないのなら、知ってそんな奴に聞いてやる」

それを不満そうに鼻を鳴らして、彼は指をパチンと鳴らす。

途端、視界すべてを埋め尽くすような強烈な閃光が放たれ思わず目を閉じる。

しかし所詮閃光は文字通り閃光であり一瞬で過ぎ去って、少女達は視力を取り戻す。

「……………え？」

「っ、ここ、どこ!？」

だが開いた目が捉えた光景は先ほどまでの廃墟群の一角ではない。

まず眼下に見えたのは緑豊かな広大な森林であり遠くには光を放つ街が見える。

夕方に近かったはずの日は完全に沈んで夜に入っており、

快晴だったはずの天候がウソのように目の前には白い物がちらついていた。

「雪まで……………いつたい何が？」

風景の変化に戸惑いながらクロノは周囲に目を配ってあの場にいた全員がいる事を確認する。

もちろんそれには眼前に並び立つマテリアルたちとその王も含まれる。

誰かと引き離されたわけでもなく位置関係も変わっていない。

いったい何が起こったのか。いや、何をされたのか。皆がそれを考え始めたとき一人の少女が声をあげた。

「あつ、二二二……もしかして、海鳴!？」

かくして、再び舞台は海鳴市に

お前は誰だ（後書き）

まあたいした意味はないんだけどね、海鳴に戻ったの（エ？

出来れば今日、最後の戦いの終わりまで持っていければ、話の中の
日時と

現実の日時とリンクが出来てよかったんだけど……
そこまでうまくいかなかったよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7048q/>

彼はいかにして王となったのか？ 魔法少女リリカルなのは異伝

2011年12月25日13時53分発行